

ソードアート・オンライン
紫紺の剣士

仮面大佐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主メインヒロインはミトです。

レイン、フィリアとは恋愛フラグを立てます。

あらすじ

SAOを始めた、小野冬馬。だが、その時はまだ、デスゲームになるとは思っていなかった。

しかし、小野冬馬は、カルムとして、仲間達と共にこのデスゲームを生き抜くと決意する。

目次

第0話	βテストにて	1
キャラ紹介		4
フェアリー・ダンスから登場したキャラ紹介		8
アインクラッド		11
第1話	全ての始まり	11
第2話	俺達は動き出す。	20
第3話	黒き剣士との邂逅	28
第4話	攻略会議にて。	36
第5話	ボスに備えて。	46
第6話	第一層ボス戦攻略	56
第7話	剣士と歌い手の邂逅。	67
第8話	紫紺の剣士と黒の剣士(前編)	79
第9話	紫紺の剣士と黒の剣士(後編)	91
第10話	フュージョンジャック	102
第11話	圈内事件	112
第12話	調査	123
第13話	それぞれの調査	136
第14話	再度の圈内事件	147
第15話	幻の復讐者	157

第16話	エボリューションキング	186	フェアリー・ダンス	
171			第1話	それぞれの再会と疑惑
第17話	黒と白、紫紺と紫の剣舞		295	
			第2話	己の無力
186			第3話	決意のダイブ
第18話	青眼の悪魔	200	第4話	それぞれの邂逅
			第5話	動き出す剣士達
第19話	聖騎士VS黒の剣士&紫紺の剣士	214	第6話	それぞれの思い
			第7話	峠を越えろ
第20話	紅の殺意	223	第8話	大切な者の為に
			第9話	紫紺の剣士VS猛炎の将
第21話	それぞれの休息	237		
第22話	2人の少女	247		
第23話	ユイとカナの心	258		
第24話	奈落の淵	275	360	
第25話	世界の終焉	285	第10話	迷い込む氷の世界
				375

第11話	交錯する思い	385
第12話	決死の突撃	396
第13話	仲間との突撃	405
第14話	神を騙る者	414
第15話	泥棒の王VS2人の鍍金の	426
勇者		
第16話	事件の終結	439
日常		
an episode ofカルム&		
ミト		454
水泳大会		459
お料理教室		468
空かずの宝箱		478

ファントム・バレット		
第1話	菊岡からの依頼	488
第2話	2人の戦い	496
第3話	それぞれの想い	505
第4話	銃の世界	514
第5話	予選開始までの出来事	
523		
第6話	それぞれの予選と遭遇	
532		
第7話	それぞれの覚悟と想い	
541		
第8話	それぞれの葛藤	552
第9話	本戦の幕開け	561

	第4話	大型ギルドとの衝突	805
	第5話	絶剣の失踪	815
	第6話	旅路の果て	826
	第7話	絶剣の学校入学	839
	第8話	キミト明日へ	850
	日常 part 2		
	くしやみ騒動		860
	猫耳騒動		873
	ピンヒールの花嫁とフラワーガーデン		889
	紫紺の剣士VS炎の剣士		903
	アリシゼーション		
	第1話	幼少期の思い出	922
	第2話	悔恨の別れ	935
	第3話	GGOでの戦闘	960
	第4話	STLとライースと襲撃	
970	第5話	アンダーワールド	992
	第6話	悪魔の樹	1003
	第7話	2本の神器	1027
	第8話	果ての山脈	1044
	第9話	ゴブリンとの激突	1062
	第10話	旅立ち	1079
1100	第11話	オーシャン・タートル	

第12話	アリシゼーション計画	1123
第13話	剣術大会に向けて	1141
第14話	剣の学び舎	1155
第15話	最後の指導と嫌味貴族	1166
第16話	漆黒の剣	1182
第17話	キリトVSウオロ	1199
第18話	世の理を書き換える想い	1214
第19話	剣士としての決意	1230
第20話	貴族の責務	1250
第21話	傍付きからの告白	1262
第22話	禁忌目録	1277
第23話	まさかの再会	1294
第24話	イチエモン	1306
第25話	決意の脱獄	1317
第26話	霜鱗の整合騎士	1332
第27話	図書館の賢者と光の剣士	1347
第28話	明かされる、聖剣の秘密	1364
第29話	決意の出立	1383
第30話	紅蓮の騎士	1396
第31話	幼き暗殺者にして整合騎士	1417

第32話	烈日の騎士と煙叡の騎士	
1433		
第33話	昇降係	1447
第34話	金木犀の騎士と深淵の騎士	1463
第35話	休戦協定	1479
第36話	伝説の英雄と時国の騎士	1496
第37話	右目の封印	1517
第38話	記憶の迷路	1531
第39話	2人の騎士の決意	1544
第40話	シンセサイズ	1559
第41話	青薔薇の騎士と雷鳴の騎士	
第42話	決意の逆襲	1577
第43話	炎の巨人	1607
第44話	剣の巨人	1618
第45話	刃王剣の覚醒	1633
第46話	支配者の終焉	1649
第47話	戦いの終結と新たな始まり	1664
第48話	騎士長と補佐の決意	1664
1676		
第49話	それぞれの現状	1689
第50話	真相の解明と決意のダイブ	1701

1822	第59話	開戦と、騎士の奮闘	1812
	第58話	開戦前夜	1800
	第57話	傍付きとの再会	1800
1782	第56話	青薔薇の騎士の覚悟	1769
	第55話	2人の騎士の想い	1756
	第54話	カルムの決意	1756
1747	第53話	集いし剣士たち（後編）	1717
1731	第52話	集いし剣士たち（前編）	1717
	第51話	運命の再会	1717

1964	第70話	大地の神とその従者	1942
1954	第69話	太陽神とその従者の救援	1932
	第68話	襲来	1932
	第67話	非情の選択	1913
	第66話	現実での動き	1900
	第65話	事情の説明	1889
	第64話	接敵	1876
	第63話	血と命	1865
	第62話	カミングアウト	1849
	第61話	焼夷の花	1836
	第60話	比翼の騎士	1836

第71話 仲間達の救援

1974

第72話 希望の光明と激闘の果て

1990

第73話 悪意の襲撃

2014

第74話 2人の女神と従者の戦いと

敗北

2033

第75話 それぞれの決着と悪魔の笑

い

2053

第0話 βテストにて

西暦2022年、世界初のVRMMORPGの「ソードアート・オンライン」のβテストが始まった。

冬馬「さて、キャラ設定だよな。」

俺は小野冬馬。14歳の至って普通の中学2年生だ。

普通の人と比べて、少しアニメやゲームが大好きなオタクではあるけれどもな。

親から日頃から頑張っているご褒美に、SAOのβテストの申し込み用紙を貰って、ダメ元で応募した結果、見事に当選して、今まさにキャラメイク中だ。

冬馬「名前、名前……。あ！カルムにしよう！」

俺は、Calemと書いてカルムにした。

理由は、好きなゲームの主人公の名前だからだ。

少し顔をカスタマイズして、遂にSAOの世界へ。

冬馬「確か、リンク・スタート！」

その言葉と共に浮遊城アインクラッドへと向かう。

目を開けるとそこには、ファンタジーの世界にありそうな街がある。

カルム「スッゲー！ここが、始まりの街か！」

俺は早速、クエストをこなして、アニールブレードを手に入れて、レベリングをこなして、第一層のボス戦に参加した。

ボスであるイルファング・ザ・コボルドロードを他の人達と倒して、感傷に浸っていると、1人の男が話しかけてきた。

??? 「凄いな君！」

カルム「えつと、どうしました？」

??? 「いきなり話しかけてごめん。でも、あなたの剣捌きは中々に良いんじゃない？」

カルム「ありがとうございます！」

??? 「いきなりで悪いけど、フレンド登録しないか？」

カルム「え!?!良いんですか!?!」

??? 「ああ。動きは良いけど、何か初心者っぽくてほっとけなくて。いいかい？」

カルム「ありがとうございます！」

そうして、フレンド登録した。

名前はミトと言うらしい。

カルム「あの、ミトさん。」

ミト「呼び捨てで良いぞ。」

カルム「じゃあ、ミト。この先のレクチャーしてほしくて。」
ミト「ああ。良いぞ。」

そうして、俺はミトとパーティーを組み、一緒にインクラッドを攻略していった。俺はM M O R P Gは初めてなので、とてもありがたく、ミトと一緒に攻略しているととても楽しく感じた。

だが、βテスト終了直前、ボス部屋が目の前なのにモンスターに苦戦してしまい、一人の男に先を越された。

カルム「アアアアアア！先を越されたか。」

ミト「仕方ないな。なら、続きは正式サービス開始時に！」

カルム「正式サービス開始時にも一緒に攻略しましょう！」

ミト「ああ！」

俺達は約束して、βテストを終えた。

目を開けると、そこには馴染み深いいつもの俺の部屋があった。

冬馬「ミトか。いい人だったな。正式サービスの時にも会えると良いんだけどなあ。」

俺は正式サービスが待ち遠しくなった。

キャラ紹介

小野冬馬／カルム

CV 齊藤壮馬

概要

SAOのβテストを親からのご褒美として受け取って、βテストをやり、ミトと出会った。その後のテストゲーム開始後もミトと行動を共にする。その後、ミトが血盟騎士団に入った後は、ソロとなって、ミトとはちよくちよくクエストに出ている。責任感が強く、アスナを危険に晒した時は、悔しさのあまり、ダンジョンに閉じ籠った。ミトの事は大切な仲間という認識だったが、エボリユーシヨンコーカサスの一件で、好意に気づき、ミトに告白し、結婚した。ヒースクリフとの決戦で、敗れかけるも、キリト、アスナ、ミトの3人と、チエイス、ハヤト、ノーチラスのサポートで倒す。キリトとの関係は悪友という感じ。イメージキャラは、ダンボール戦機ウオーズの主人公アバター

5. 性格は、剣崎一真に火野映司、神山飛羽真に近い。

詩島侑斗／ハヤト

CV 石川界人

概要

狩野英介とは幼馴染。片手直剣を使う。普段はお調子者だが、やる時はきっちりやる。モチーフは、仮面ライダードライブの詩島剛。

狩野英介／チェイス

CV 福山潤

概要

後藤侑斗とは幼馴染。槍を使うが、後にカリスアローに変更している。堅物で、無愛想ながらも、面倒見は良い。どんな事にも正々堂々と向かう性格。見た目及び性格はチェイスに近い。

鈴木壮吾／ヒロミ

CV 寺崎裕香

概要

SAOでは中堅プレイヤー。シリカが困っている所を助けた。中性的な見た目にコンプレックスを抱いている。当初は始まりの街に籠もっていたが、ハヤトとチェイスの特訓の結果、ある程度は単独で戦える。ピナの蘇生の一件で、男気を見せた事でシリカにも惚れられているが、両片思いの関係であったが、カルム達の結婚式で勇気を出して告白した。メインは槍。

歌星浩介／ラット

CV 小林祐介

概要

SAOでの中堅プレイヤー。リズベットがモンスターに襲われていた所を助けた。その後、共にクエストに出掛けて、一夜を過ごした事で、お互いに惹かれているが、友達以上恋人未満の関係だったが、カルムと会った際には恋人関係。ちよくちよく喧嘩しているが、仲は決して悪くない。メインはギャレンラウザーというボウガン。

神宮寺亮太／ジエイク

CV 山下大輝

概要

アルゴとは同業者。SAOのβテスターで、情報を正しく伝えようと考えている。同じ職業をしていく中で、アルゴに惹かれて行き、アルゴに告白して、付き合っている。情報屋を始めた理由は、情報を扱って、信頼を得たいのと、死亡者をこれ以上増やしたくない事。メインは短剣。

カナ

CV 高橋李依

概要

カルムとミトの娘。正体はユイと同様、M H C P の3号機。ユイと同様に、カーデナルシステムに削除されかけたが、キリトとカルムの介入によつて、アイテムとしてカルムのナーヴギアのメモリーに入つて、A L O で存在が再生された。

桐山翔太郎／レイモンド

C V 細谷佳正

概要

アインクラッドで、探偵事務所を開いている青年。ハードボイルド探偵に憧れており、ハードボイルド小説を愛読したいと思つているものの、S A O ではない事に落胆している。フィリップとは幼馴染。人間関係のトラブルをよく解決している。色んな人からハーフボイルドと呼ばれており、当の本人は否定している。

菅田来人／フィリップ

C V 内山昂輝

概要

レイモンドと共に、探偵事務所を開いている青年。レイモンドとはたまに喧嘩するが、仲は良い。レイモンドとは幼馴染。冷静沈着で、熱くなりやすいレイモンドを諷める。かなりのイケメンで、ファンクラブが存在するも、当の本人は興味なし。興味のあつる事しか調べず、突拍子もない事を口走る。

フェアリー・ダンスから登場したキャラ紹介

フェアリー・ダンス編より登場したキャラ

パラド

CV 甲斐翔真

概要

安田巧博士によって作られたAIウィルス。

ウィルスと言っても害がある訳ではなく、あっても頭痛がするくらい。

安田巧博士が須郷に備えて開発した。

性格は無邪気で、カルムと戦うのが楽しいと感じている。

パラド自身は、安田博士に作られたのを知っている。

武器はハンドアックス状の武器、ガシヤコンパラブレイガンを使う。

須郷との戦いの際に、安田博士に頼まれて、対ゲームデウスプログラムをインストール

された状態でゲームデウスに触れて、ゲームデウスを道連れに消滅した。

しかし、カルムにパラドの欠片が入り込んだ事により、カルムのアバター内で再生さ

れて、新生アインクラッドが実装されると同時に復活を遂げた。

その後は、カルムの旧ALOのアカウントを貰ってALOをプレイしている。

その際に、安田博士が協力の報酬として、カルムのアバターをパラドの見た目に近い物にしてもらった。

モチーフは、エグゼイドのパラド。

安田巧

CV 中村悠一

概要

レクトのフルダイブ研究部門に所属している研究員。

茅場晶彦、須郷伸之を輩出した重村ラボの後輩でもある。

茅場晶彦の事は尊敬しているが、須郷伸之に関しては、あまり信頼していない。

それでも須郷伸之と同じ部署にした理由は、須郷が何かを企んでいると察知して、調べる為。

ALOのボスモンスターゲームデウスや、パラドを作ったのは彼。

しかし、ゲームデウスのデータが須郷伸之に奪われてしまい、それに対抗する為、パラドを作ったり、対ゲームデウスプログラムを作ったりしたりした。

ちなみに、本編では明かされていないが、メダジャリバー、ガシャコンブレイカー、ゼロガッシャー、ガシャコンスパロー、デンガッシャー、プリズムピッカー、影松・真、バー

スバスターを作ったのも彼で、理由は純粹にALLOを更に盛り上げる為。

須郷を倒した後は、フリーの開発者になり、カルムと接触し、パラドを託した。最近、とあるゲーム会社にスカウトされて、武器開発だけを担当する事に。

モチーフは、仮面ライダービルドの葛城巧。

オリキャラ、原作キャラの種族分布

スプリガン：キリト、ノーチラス、レイモンド、ジエイク、フィリア

シルフ：リーファ、ハヤト、レコン、サクヤ、フィリップ、ヒロミ

インプ：カルム、ミト、チエイス、パラド

サラマンダー：クライン

ケットシー：シリカ、アルゴ

ウンディーネ：アスナ、サチ

レプラコーン：リズベット、ラット、レイン

ノーム：エギル

プーカ：ユナ

アインクラッド

第1話 全ての始まり

俺の朝は早い。

俺の家は剣道をやっている、俺も剣道をやっている。

早朝に道場へと向かい、掃除してから稽古を始める。

冬馬「さて、これをやったら、SAOやるか！」

この時間に行う事と言えば、素振りをやって、模擬試合をやるくらいだ。

休日故に、午前中で稽古を切り上げて、昼食を取る。

昼食を食べ終わると、父さんと母さんに声をかけられた。

父さんの方が、小野倫太郎、母さんの方が、小野洋子。

父さんは、剣道の道場の師範で、母さんは、官僚にコネを持つ新聞記者だ。

倫太郎「冬馬。SAOをやっているとは思えど、程々にな。」

洋子「まあ、冬馬は分かっているとと思うけど。」

冬馬「分かっているよ、父さん、母さん。」

この2人にはどうも頭が上がらない。

父さんは、剣道の師範で、母さんは、色々な意味でヤバイ。

実際に、父さんは高校生や大学生の時に、何度も大会で優勝した腕前で、今も腕は衰えていない。

母さんはライバル企業が母さんの事を潰しにかかったが、逆に悪事を露呈させられ、潰されたという噂があり、本人に聞くと、少し悪い笑みで、「さあ？どうなんだろうね？」と語った。

両親共にゲーム好きで、とあるゲーム大会で出会って、そこで一目惚れしたそうだと、でも、俺は2人に感謝している。

父さんから剣の腕と礼儀正しさを学び、母さんから情報戦におけるノウハウを叩き込んでもらった。

そうして、俺は自分の部屋へと向かい、ナーヴギアを被った。

そして、浮遊城へと向かう魔法の言葉を言う。

冬馬「リンク・スタート！」

その言葉と共に、俺はSAOの世界へと向かう。

少しの浮遊感と共に、目を開けると、そこには、始まりの街が広がっていた。

カルム「久しぶりに来たなあ！SAO！」

そう、この日、2022年11月6日は、ソードアート・オンラインの正式サービス

開始日だ。

俺は、この日を待ち侘びていた。

さて、ミトと会えれば良いんだけどな。

そんな事を思っていると、1人の女の子がNPC相手に話しているのを見つけた。

??? 「だから、兎澤深澄って言う女の子は居ませんか!？」

NPC 「申し訳ありません。その様なプレイヤーは居ません。」

なるほど、あの子は初心者だな。

しばらくすると、見覚えのある大男が、その女の子に向かっていった。

て言うか、ミトじゃん。

声をかけるべく、2人に近づく。

カルム 「よお、ミトじゃん。」

ミト 「ん? ああ、カルムか。」

??? 「誰?」

その後、俺達は広場から少し離れたベンチに向かった。

ちなみに、女の子の名前は、アスナというらしい。

カルム 「ああ、2人はリアルで知り合いなんだな。」

ミト 「久しぶりだな。」

アスナ「でも、知り合いに会えて良かったよ。」

しばらく話して、ミトとアスナに付き合う事にした。

シヨツピングに付き合わされたり、それぞれの装備を整えたりした。

それにしても、結構楽しいな。

気づけば、夕方になっていた。

カルム「さて、俺は続けるけど、2人はどうするんだ？」

ミト「私はもう暫く続けるつもりだ。」

アスナ「私は、もうすぐ夕飯だから。」

また遊ぶ事を約束して、アスナがログアウトしようとするが、手が止まる。

アスナ「ねえ、ログアウトってどうやるの？」

ミト「メニューからログアウト出来る筈だけど。」

カルム「ああ。」

アスナ「でも、無いわよ。」

カルム「え？」

胸騒ぎがして見てみると、ログアウトボタンが消えていた。

カルム「どういう事だ!？」

ミト「変だな。運営から何も連絡がない。」

その時、鐘が鳴り、俺達は広場へと転移していた。

周囲には、沢山のプレイヤーが。

アスナ「何が起こるの？」

カルム「分からん。」

その時、空からでかいアバターが現れた。

???「プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ。」

カルム「何だあれ？」

ミト「……………」

茅場「私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロール出来る唯一の人間だ。」

アバターもとい茅場晶彦はそう宣言した。

茅場晶彦。その人物は、天才プログラマーで、このゲームを開発した責任者だ。

カルム「何で茅場晶彦が……………!？」

ミト「分かんないわよ！」

アスナ「何か言い始めたよ……………」

茅場「プレイヤー諸君は、既にメインメニューからログアウトボタンが消失した事に気付いていると思う。しかしゲームの不具合などではない。繰り返し、これは不具合ではなく、『ソードアート・オンライン』本来の仕様である。」

カルム「仕様……!?!」

おい、どういう事だ?

茅場「諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームから自発的にログアウトする事は出来ない。」

ミト「何ですって……!?!」

アスナ「え……。」

茅場「また、外部の人間の手による、ナーヴギアの停止あるいは解除もあり得ない。もしそれが試みられた場合、ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる。」

なんだと……!?!

俺はそれを聞いて、呆然としていた。

茅場「具体的には、10分間の外部電源切断、2時間のネットワーク回線切断、ナーヴギア本体のロック解除または分解または破壊の試み、以上の条件を満たすと、ナーヴギアの脳破壊シークエンスが実行される。既に警告を無視した家族友人等がナーヴギアの強制除装を試みた結果、213名がアインクラッド及び現実世界からも永久退場している。」

つまり、既に死者が出ているという事だ。

茅場「既に報道された結果、諸君らが死ぬ事はない。安心して、ゲーム攻略に励んで欲しい。」

カルム「おい、呑気に遊べるかよ！」

茅場「しかし、十分に留意してもらいたい。諸君らのヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅して、ナーヴギアによって、脳は破壊される。ログアウトするには、百層まで辿り着き、ボスを倒してゲームをクリアすればいい。」

なんだと……!?!

βテストの時点でも、第十層までなのだ。

一体どれくらい時間がかかるんだ。

ミトとアスナも戸惑っていた。

茅場「それでは、最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに私からのプレゼントがある。」

ストレージを見ると、手鏡があつて、実体化して覗き込むと、突然、視界が青白く包まれた。

暫くすると、元の視界になったが、ミトを見ると、姿が変わっていた。

男の姿から、女の子へと変化していた。

カルム「え？ミトか？」

ミト「そういう君こそ、カルムなの？」

カルム「え？」

手鏡を見るとそこには、俺の現実での顔が。

アスナは大して変化していなかった。

アスナ「どういう事なの!？」

カルム「そうか！ナーヴギアが顔をスキャンした事で、再現できたんだ！」

ミト「でも、何で？」

カルム「どうせすぐ教えてくれる。」

茅場「諸君は今、なぜ、と思っっているだろう。何故私がこの様な事をしたのかと。私の目的は今、この瞬間に達成された。以上で、ソードアート・オンライン正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の、健闘を祈る。」

そうして、消えて、元の風景に戻った。

その時、プレイヤー達が叫び出す。

そして、俺は覚悟を決めた。

この世界で生き残ってみせると。

この、デスゲームと化してしまった、ソードアート・オンラインで、仲間たちと共に。

第2話 俺達は動き出す。

俺が心の中でこの世界で生き抜いてみせると決意したその時、周囲の一部の人が動き出した。

恐らく、βテストだろう。

それを見たミトも動き出す。

ミト「アスナ、カルム。行くよ！」

アスナ「え!? 行くなってどこに?」

カルム「このゲームをクリアする為にも、一刻も早く強くならねえと!」

アスナ「ええっ!」

ミト「行くよ!」

ミトにアスナの手を引っ張らせて、俺達も始まりの街の外へ。

走っていると、ダイアウルフという狼のモンスターが3体ポップした。

俺とミトはそれぞれのソードスキルで2体を倒したが、一体がミトと俺の間を突破して、アスナの元へ。

ミト「アスナ!!」

カルム「剣を抜け！」

アスナ「えっ……！！イヤアア！！」

ダイアウルフは、アスナに噛みつき、みるみる内にアスナのHPがレッドゾーンに到達してしまった。

何とか、俺のソードスキルで倒す事は出来たが、アスナは座り込んでしまった。

カルム「アスナさん、大丈夫か？」

ミト「さあ、行こう。」

立たせようとする、アスナが掴みかかった。

アスナ「何これ!?もう出られないって事?今年受験なのに!」

ミト「アスナ、落ち着いて……。」

カルム「アスナさん……。」

アスナ「2人はこのゲームが得意だから先に進めるけど、私は下手なのよ!だから、もうほっといてよ!」

その時、そのセリフを聞いて、俺は過去を振り返った。

俺は、剣道もゲームも得意で、勉強はそこそこ出来る感じだった。

だが、剣道もゲームも得意だったが故に、孤立した。

最初こそ、剣道とゲームでも友達がいたが、次第にいなくなっていた。

理由を聞いたたら、俺が剣道もゲームも上手いから、自分だけ楽しんでいるいるだろ、ほつといってくれと言われた。

当初こそ気にしていなかったが、今まさにまた起こった状況だ。

アスナも、相当に追い詰められている。

だからこそ、放つとおけなかった。

その時、ミトがアスナを抱きしめた。

ミト「大丈夫。アスナは私が絶対に守る。」

カルム「その思いは俺も一緒だ。だから……、そんな風に言わないでくれ。」

アスナ「……うん。」

アスナも落ち着いていたのか、立ち上がった。

アスナ「ごめんね。2人とも。」

ミト「気にしないで。」

カルム「当然の反応だとは思うから。」

ミト「私たちが色々教えるから。」

アスナ「うん。」

カルム「じゃあ、フレンド登録して、パーティーメンバーになろう。」

ミト「うん。」

アスナ「どういう事？」

カルム「簡単に言えば、この世界での友達の話だ。」

ミト「そういう事。」

アスナ「変なの。そんな事しなくても、友達なのに。」

カルム「それって、俺も入ってます？」

そうして、俺達はパーティーを組む事になった。

翌日、俺達3人は、街から少し離れた草原で、アスナにソードスキルを教える事になった。

目の前には、イエローワズプが3体居た。

ちようどいいので、実験台になって貰う事に。

アスナ「やああああ！」

アスナがりニアを発動して、イエローワズプに攻撃を仕掛けるも、躲されてダメージを喰らった。

ミト「踏み込みが足りないわ。」

カルム「ソードスキルに任せるじゃなくて、踏み込みも大事なんだ。こんな風にな！」

俺とミトは投擲スキルでイエローワズプを倒した。

その際に、腕全体を使って投擲して、ブーストをかけた。

アスナもそれを見て、自らの体でリニアーストをかけた。

ミト「上手い、上手い！」

カルム「大分呑み込みが早いな。ちなみに、これをシステム外スキルって言うんだぜ。なるべく早く出来る様になった方が良い。」

アスナ「ところで、何でこんな離れた所でやるの？街に近い方が何かと便利じゃない？」

ミト「街の周辺はモンスターの湧きが悪くなってる。」

アスナ「え？」

カルム「状況を呑み込めた人達から街の近くでモンスターを狩りまくって、今や始まりの街周辺はモンスターがあんまり湧かないんだ。これがMMOあるあるなんだよなあ。」

ミト「MMOはリソースの取り合いだからね。今こそ、ここでソードスキルの練習をしつつ、モンスターを狩れるけどいずれここにも人が来る。」

アスナ「そうなの？」

カルム「そうだ。」

その時、フレンジーボアが複数湧いた。

ミト「さて、もう少し行こう！」

アスナ「うん！」

カルム「ああ！」

俺達はフレンジーボアを追いかけていった。

そうして、俺達は結構レベルも上がっていった。

現在の装備は、俺が片手剣、ミトが鎌、アスナが細剣だ。

ちなみに、宿には同じ所に泊まっているが、アスナとミトが同じ部屋で、俺はその隣だ。

2人を見ていると、百合百合しい。

何か、場違い感があるが、気にしないでおこう。

翌日、俺達はダンジョンに向かった。

だが、宝箱がどれもこれも開かれていた。

アスナ「どれもこれも開かれてるね。」

ミト「そうだね。」

カルム「先に来た奴が開けていったんだろ。」

暫く歩き続けた。

アスナとミトがリアルな話をしだしたのを見て、俺は関わりたくない様にした。

俺はこの世界で会った、謂わば部外者なのだ。

「ずけずけと聞くべきではない。」

しばらくすると、アスナが宝箱を発見して、開けようとしたので、俺とミトは止めた。ミト「待った。多分、トラップだと思う。」

アスナ「え？ そうなの？」

カルム「ここに来るまでトラップがあっただろ。開けたら毒矢が飛んできたり爆発したり、或いはミミックだったりするかもよ。」

アスナ「ちよつと！ そんな顔で脅さないで！」

少し調子に乗って、悪い顔で脅したら、怒られて、ミトからもジト目で見られた。

カルム「すいません。まあ、そんな事で、この宝箱は無視だ。」

アスナ「分かったわ。」

しばらく進むと、奥から剣戟と悲鳴が聞こえた。

俺達は顔を見合わせると、奥へと進む。

奥について、陰から見ると、モンスターの大群に3人のプレイヤーが襲われていた。

アスナ「何で………?!」

ミト「あれを見て。」

アスナ「えっ………？」

カルム「トラップに引っ掛かったな。」

「どうやら、トラップに引っ掛かったプレイヤー達の一団だった。

アスナ「助けないと……!」

ミト「もう、無理。」

アスナ「え?」

カルム「助けられるか分かんないからな。」

次第に、プレイヤー達はHPを全損して、ゲームオーバー、即ち、現実でも死んでしまった。

俺達は、ダンジョンから脱出した。

俺は、少しの後ろめたさと罪悪感を胸に抱いた。

第3話 黒き剣士との邂逅

あのダンジョンでのあの光景を見て、俺は悩んでいた。

もし、あの2人を守りきれなかったらどうすればいいのか。

隣にいてであろうミトとアスナを想いながら考えていた。

もし、守りきれなかったら、俺が俺で無くなってしまうかもしれない。

それがとても怖い。

カルム「……………そんな運命に、絶対に屈しない。俺が俺である為に。」

そんな事を呟いて、覚悟を決める。

無論、守る為に俺が犠牲になったら本末転倒だ。

だからこそ、自分や仲間を守る力が必要だ。

翌日、少し髪型が変わったミトとアスナと合流した。

カルム「あれ？ミト、髪型変えた？」

ミト「そ、そうなの。」

アスナ「どう？私の自信作なのよ！」

カルム「結構似合ってるじゃん。」

ミト「あ、ありがとう……。」

あれ、俺、何か変な事言ったかな？

ミトが照れてる。

そして、アスナさんが俺を見てニヤニヤしてくる。

何なんだろう、一体？

その後、少し山間に行った。

カルム「さて、今日は何をやるんだ？」

ミト「今日は、リトル・ネペントを倒そうと思ってる。」

アスナ「ネペント？ネペンテスなら、ウツボカズラの事だけど。」

時折、アスナさんの知識が凄いと思う。

俺なんて、当初はウツボカズラの事なんて分からなかったからな。

カルム「そうだな。あと、注意して欲しい事がある。」

アスナ「何？」

ミト「実つきの個体は倒さないで。」

アスナ「どうして？」

カルム「実つき自体は強くないけど、攻撃すると、煙を放出して、ネペントの一団を

呼び寄せるんだ。」

アスナ「なるほど。……ところで、あれがそうなの？」

ミト「うん？」

アスナの指差した先には、丁度、リトル・ネペントの一団が。

ミト「そう。じゃあ2人とも、行こう！」

アスナ「分かったわ！」

カルム「あいよ！」

俺達は、ネペントの一団に向かい、倒していく。

ネペント自体は、ソードスキルを使わないので、楽な部類だ。

俺達が、苦勞する事なく、倒していると、ミトが離れると言った。

ミトの先の視線を見ると、レアモンスターである、スプリー・シユルーマンが居た。なるほど、レアドロップがレイピアだから、アスナにあげようという事だろうな。

だが、あまり深追いするなよと、念じて、アスナと合流する。

アスナ「大分楽よね。」

カルム「油断しないでくださいよ！」

ミト「アスナ、カルム！ごめん！すぐ合流するから。」

ミトも戻ってきたし、ミトと合流して、アスナとも合流しようとする、アスナの倒そうとしている通常個体の後ろに、実つき個体が。

ミトも気づいたようで、アスナを止めようとする。

ミト「アスナ！待って!!」

アスナ「え!?!」

カルム「不味い！暴発した!!」

アスナのリニアアーツが暴発して、実つき個体まで届いてしまい、毒々しい煙が辺りに充満した。

結果、大量のリトル・ネペントが出現してしまった。

ミト「アスナ!!」

アスナ「ミト!!」

カルム「とにかく、助けるぞ!」

俺とミトはリトル・ネペントを倒しながらアスナの元へ向かおうとするが、数が多く、辿り着けない上に、攻撃を躲したら、トラップを踏んでしまい、2人揃って落下してしまった。

ミト「ア、アスナ……!」

カルム「急いで合流するぞ!」

だが、棺桶を踏んだら、崩れてしまい、また落下する。

ミト「このままじゃ……!」

カルム「あっちから行くぞ！」

丁度、上に向かう坂があり、そっちから向かうも、そっちにもリトル・ネペントが大量に湧いた。

カルム「邪魔すんな！」

ミト「……………」

俺達は倒しながらアスナの元へ向かおうとするも、数が多い。

一応、アスナは死んではおらず、こちらミトがポジションが尽きてしまったが、俺の予備を渡してどうにかなっている。

だが、無慈悲にも、大量にポップしてしまった。

ミト「そんな……………」

カルム「嘘だろ……………」

俺もどうしようかと呆然としていて、ミトが何かをしようとしている。

まさかと思つて、声を掛ける。

カルム「何してんだ？」

ミト「このままじゃ、私達も助からない。だから……………」

カルム「だからって、アスナさんを見捨てるのか？」

ミト「それは……………」

カルム「そんな事をしたら、きつと後悔する。なら、少しでも足掻けよ！簡単に友達を見捨てるなよ!!君にとつて、大切な友達なんだから!!」

ミト「!!ごめん、私が間違つてた。なら、サポートお願い!」

カルム「言われるまでもないぜ!ミト!!」

俺達は少しでも多くリトル・ネペントを倒して行き、全滅させる事に成功した。

アスナのHPバーを見ると、減少が止まっている。

アスナ side

私は、少しでも多くリトル・ネペントを倒していた。

ミトとカルム君が助けてくれるのを信じて。

暫くすると、あんなに居たネペントの集団が、残り一体になっていた。

アスナ「これで最後……!」

だが、ネペントの下から、巨大なモンスターが出現して、ネペントが食われてしまった。

ジャイアント・アンスロソーという名前のモンスターが出現してしまった。

私が恐怖で動けなくなつてしまった所に、攻撃が来て、レイピアを弾かれてしまつて、食べられそうになつた。

アスナ（ミト、カルム君!まだなの!?)

そんな事を思っていた。

まだ時間が掛かっているのかな。

アスナ（ごめん。ミト。カルム君。）

だが、ジャイアント・アンスローが突然攻撃されて、私の目の前に、1人の黒い男が現れた。

??? 「大丈夫か？」

アスナ「え？」

その男の人は、ソードスキルや、自分の動きを駆使して、あっという間に、ジャイアント・アンスローが倒された。

??? 「仲間はいるか？」

アスナ「あ！仲間が落ちちやって！」

ミト「アスナ!!」

カルム「アスナさん!!」

その時、ミトとカルムがやってきた。

カルム side

良かった、アスナさんは無事だ。

だが、あの男性は見た事がある気がする。

ミト「アスナ!!」

アスナ「ミト!」

カルム「無事で良かったです。」

ミト「ごめん!私を守るって言うておいて……!」

アスナ「大丈夫よ。この人が助けてくれたから。」

カルム「誰だか知らないけど、ありがとうございます。」

???「いや、じゃあ、俺はこれで……。」

その女っぽい見た目をした男の人は、去っていった。

やっぱり、どこかで見た事がある。

それも、βテスト時代に。

カルム「なあ、ミト。」

ミト「何?」

カルム「あいつ、どこかで見た気がするんだけど。」

ミト「奇遇ね。私もそんな気がする。まあ、アスナを連れて、街に戻りましょうか。」

カルム「そうだな。アスナさん、行くぞ!」

アスナ「うん。」

俺達は、街へと戻った。

第4話 攻略会議にて。

謎の男に助けられた翌日から、俺はダンジョンに籠っていた。

俺は悔しかった。

このままでは、ミトとアスナを守れない。

俺は自分の力の無さが悔しかった。

カルム「クツ……。もつと、もつとだ……。……！」

強くならないと、大切な人も守れない。

度々、ミトとアスナからのメッセージが来るが、無視している。

このままでは、とても顔向けできない。

コボルドが湧いてくる限り、倒していく。

それを続けて、4日は経っただろうか。

レベルはどんどん上がって行き、ソニックリープでコボルドを倒した時に、声をかけ

られた。

???「今のはオーバーキルすぎるよ。」

カルム「え？」

そこにいたのは、あのアスナを助けた男だった。

だが、向こうはアスナを助けた際に声を掛けた男だとは気づいていないようだな。何せ、フードを深く被っているのだから、気づかないと思う。

カルム「どういう意味だ？」

???「あのコボルドは、既に瀕死だった。通常攻撃でも倒せるだろ。帰りの為にも、体力は温存するべきだ。」

カルム「帰り？俺はここで4日は籠ってる。」

???「ハア!?ポジションや武器とかが持たないだろ。」

カルム「ダメージを受けなければ問題ないし、武器も同じ物を何本も用意している。」
???「……………。だとしても、君には仲間がいる筈だ。あの時助けた女の子の仲間だろ。」

「どうやら、気づいたみたいだな。」

カルム「今は、とても顔向けできない。あの時助けられなかった俺は…………。」

何か、気が遠く……………。

そして、俺は意識が暗転した。

しばらくすると、俺は外の森に居た。

戸惑っていると、後ろから声をかけられる。

ミト「まったく、何してんの？」

アスナ「本当だよ。」

カルム「ミト……………。アスナさん……………。」

そこにはミトとアスナが居た。

顔はともではないが、見れない。

何せ、般若でも見ているかのような形相なのだ。

怖いです。お2人さん。

俺は近くにいた男に話しかけた。

カルム「何で助けたんだ？」

???「君が死んだら、マップデータまで失われるからな。勿体無いから助けただけだ。

ついでに、君のメニューからその2人を呼んだ。」

そういう事か。

その時、寒気がした。

そう、背後のミトとアスナさんから。

ミト「さて、何でこんな事をしたのか、聞こうか？」

アスナ「言い訳もきつちりね。」

怖い、ものすごく怖い。

俺は観念して、2人にどうしてこの様な事をしたのかを明かす。

それを聞いたミトとアスナさんは、呆れた様な表情を浮かべる。

ミト「ハアアアア……。気持ちには分かるけどさ。」

アスナ「だからって、やりすぎだと思っただけ。」

カルム「ごめんなさい。許して下さい。」

俺はすぐさま土下座の体勢に入った。

だが、すぐに顔を上げる様言われた。

ミト「この件の補償は、後できっちり請求するとして、行くよ。」

カルム「どこに………?」

アスナ「ツールバーナって言う街までよ。その人が案内してくれると思うから。」

???「俺はガイドか。」

そうして、俺は攻略会議が行われると言うツールバーナの街へと向かった。

ちなみにミトとアスナは、俺を探しつつ特訓も行ったそうで、大分レベルが上がって
いた。

しばらくして、ツールバーナの街に到着した。

丁度、デスゲーム開始から1ヶ月経っていた。

カルム「ここで何をするんだ?」

ミト「攻略会議よ。」

アスナ「それにしても、初めてのボスマンスター戦で死ぬかもしれないのに、よく来たよね。」

「???」全員が全員、自己犠牲の精神で来てる訳じゃない。もちろん、そういう連中がいなとは言わないけど、大多数は遅れるのが怖いからだな。」

カルム「遅れるって?」

「???」「最前線にだよ。」

ミト「全滅するのは怖いけど、自分の知らない所でボスが倒される。それも怖いんだよ。」

なるほど、その男とミトのセリフで納得できる。

アスナ「それって、偏差値70以上キープしたいとか、学年10位以下には落ちたくないとかと同じなの?」

「???」「まあ、そんな感じ。」

ミト「偏差値で例えるのはアスナらしいといえはそうなんだけど……。」

カルム「なるほどな。」

そんな事を話していると、ステージに青髪の男性が現れた。

「???」「はい!それじゃあ、そろそろ始めさせて貰います!」

装備は、片手直剣でブロンズの装備、盾を持っている。

ディアベル「皆！今日は俺の呼びかけに応じてくれてありがとう！俺の名前はディアベル！職業は、気持ち的にナイトやってます！」

そんな軽いジョークを混ぜた会話をして、周囲を和ませた。

周りから笑い声とヤジが飛んでいる。

凄いな、あの人。

俺にはとても真似できない。

そして、ディアベルは顔を引き締めて、本題に入る。

ディアベル「今日、俺達のパーティーが迷宮区の最上階で、ボスの部屋を発見した。」

その発言に、周囲は押し黙る。

ディアベル「俺達はボスを倒し、第二層に到達して、このデスゲームをいつかきつとクリア出来るって事を始まりの街にいる皆に伝えなきゃいけない！それが今、この場所にいる俺達の責務なんだ!!そうだろ、皆!!」

ディアベルさんがそう問いかけると、皆が頷いた。

ディアベル「よし、早速だけど攻略会議を始めていきたいと……………」

???'「ちよお待ってんか、ナイトはん！」

会議が始まろうとした瞬間、サボテンの様な頭をした1人の男性が出てきた。

ていうか、あんなヘアスタイルもあるのな。

キバオウ「ワイはキバオウつてもんや。最初に言わせて貰いたい事がある。こんなかに、これまで死んでいった2000人に詫び入れなあかん奴らがいる筈や!」

ディアベル「キバオウさん、君の言う奴らとは、βテストの事かい?」

キバオウ「当たり前や!β上がりの奴らは、ビギナーを見捨てて消えおつた!美味しい狩場やクエストを独占しておる!そいつらに土下座させて、溜め込んだコル等を出させて貰わんと、パーティーメンバーとして命は預けられんし、預かれん!」

そんな事を言い出した。

でも、全てのβテストがそうだとは言えない。

現に俺とミトの2人でビギナーのアスナを守っているのだ。

だが、男の人も反応していたので、恐らくβテストだ。

そんな時、我慢できずに立ち上がった。

カルム「ちよつと待てよ!」

ミト「カルム!」

キバオウ「ジブン、誰や?」

カルム「俺はカルムだ。それって、βテストだから弱くなつてもらおうつてところか?それは無いんじゃないか。」

キバオウ「何やと!」

そんな険悪な空気になりかけていると、もう一人立ち上がった。

エギル「発言いいか？俺はエギルだ。キバオウさん、あなたの言うβテスターが全員、ビギナーを見捨てた訳じゃないぞ。」

エギルという人は身長は180で、スキンヘッドの男性だった。

外国人かな？

エギル「あんたもこのガイドブックを貰っただろ？」

キバオウ「貰たで。それが何や？」

エギル「これを作ったのは、元βテスター達だ。」

その発言に周囲は騒めきだす。

俺もアルゴとジェイクという情報屋から貰ったが、両者ともβテスターだ。

エギル「いいか。情報は誰にでも手に入れられたんだ。なのに、沢山のプレイヤーが死んだ。その失敗を踏まえて俺達はどうボスに挑むのか、それが議論されると、俺は思ってたんだがな。」

キバオウ「フン！」

キバオウが戻って、残りの人達も戻り、ミト達に責められた。

ミト「ちよつとカルム！何やってんのよ！」

カルム「悪い。でも、ああいう風に言われるのは我慢ならなかった。」

アスナ「それは分かるけど……。」

???「君は凄いな。俺にはとても出来ない。」

そうして会議は進んでいき、パーティーを組む所まで行った。

カルム「そうだ。その男の人も入ってほしい。」

???「俺も!？」

カルム「ああ。頼む。」

???「……今回だけの暫定だからな。」

???「少し、良いか。」

その時、二人組の男が話しかけてきた。

ミト「あの、どちら様ですか？」

アスナ「どうしました？」

チエイズ「俺はチエイズだ。お前達のパーティーに入っていないか？」

???「まあ、と言っても、今回だけの暫定だけだな。」

ミト「どうするの、カルム？」

カルム「お願いします！」

チエイズ「そうか。俺はチエイズだ。よろしく頼む。」

ハヤト「俺はハヤト。こいつ、無愛想だけど、良い奴だぜ！」

そうして、パーティーを組んだ。

男の人の名前はキリトだと分かった。

こうして波乱の攻略会議が終わった。

ちなみに、チエイストとハヤトもβテストターと分かり、頼もしく感じた。

第5話 ボスに備えて。

その後、ボス攻略前夜パーティーをやると言われたが、その前に、俺達は連携の訓練を行うことにした。

暫定とは言え、3人も入ったので、上手く連携を取れるかの確認だ。

俺達は草原へと出て、2人一組で戦闘する。

俺とミト、キリトとアスナさん、チェイスとハヤトと言った感じで。

カルム「ミト、スイツチ！」

ミト「分かった！」

俺が相手の武器を片手剣で跳ね上げて隙を作り、ミトと入れ替わって、ミトが隙だらけの敵を鎌で倒す。

キリトとアスナさんも上手く連携が取れていて、チェイスとハヤトもお互いを信頼しているかの様に、連携をする。

その後、連携するコンビを入れ替えて行う。

キリト「さて、連携はこんなもんでいいだろ。後は本番でも上手くやるだけだな。」

チェイス「うむ。そうだな。」

ハヤト「皆、お疲れ！」

3人がそう言つて、訓練を終えた。

カルム「さて、この後どうする？」

ミト「そうだ！この前助けて貰つたお札に奢るわよ、キリト。」

キリト「ええっ!？」

アスナ「そうね。借りを作りつぱなしというのもあれだし。パーティーを組めた縁と
いう事だね。」

キリト「まあ、良いけど……。」

チエイス「俺達も一緒に居ていいか？」

ハヤト「そうだなあ。お腹空いたぜ。」

そうやって、一緒にご飯を食べる事に。

街に帰る途中に、アスナが呟いた。

アスナ「やつぱり、お風呂に入りたいわね。」

ミト「ちよつと、それは言わない約束でしょ。」

アスナ「そうは言つてもさあ。」

ミト「まあ、分からなくはないけど……。」

キリト「え？お風呂に入りたい？」

チエイス「なるほどな。」

ハヤト「でも、SAOでお風呂に入れるか？」

カルム「そもそも、この世界では汚れないぞ。」

アスナ「そうは言っても、気分の問題なんです！」

ミト「そうね。」

まあ、そこは女性なんだし。

でも、ハヤトの言う通り、SAOでお風呂に入れるのか？

その時、キリトが呟いた。

キリト「お風呂なら、入れるぞ。」

「え!？」

チエイス「そうなのか？」

ハヤト「マジで!？」

カルム「そうなんだ。」

アスナ「ちよつと、どういう意味よ!？」

ミト「ちゃんと説明して!!」

キリト「ああ……。俺が借りてるのは、NPC農家の家なんだけど、そこではミルク飲み放題で、風呂にも入れるんだ。」

キリトが女性陣の興奮した声に少し引きながら解説した。
アスナさんとミトがプルプルと震えだした。

「……………して。」

キリト「え？」

「お風呂貸して!!」

キリト「あ、はい。」

カルム「圧がすげえ。」

チエイス「そこまでか。」

ハヤト「風呂への執着が凄いな。」

そうして、食事をした後、俺達は、キリトが泊まっているというNPC農家の家へと向かった。

アスナさんとミトは、すぐさまお風呂を確認しに行った。

「うわああああ……………!」

チエイス「凄いな……………」

ハヤト「本当にお風呂だよ……………!」

カルム「へえええ……………」

キリト「それじゃあ、ごゆつくり……………」

女性陣にお風呂に入らせて、男性陣は待機する。

ミト side

私達は、男性陣を追い出して、お風呂に入る。

本当に、いつぶりだろうか。

アスナ「鍵は……かからないわね。」

ミト「まあ、皆なら、覗かないでしょ。」

そうして、装備を全て外して、お風呂に入る。

アスナ「ハアアア……。」

ミト「本当に久しぶりよね。」

アスナ「そうね。……それはそうとミト。」

ミト「うん?」

アスナ「カルム君の事、どう思ってるの?」

ミト「!?」

いきなり何を言い出すの、アスナは!?

ミト「何の事よ?」

アスナ「惚けないで。分かるんだからね。君が最近、カルム君の事を気になってる事は。」

ミト「……………うん。」

認めるしかないか。

ミト「アスナ。あの時、私はあなたを見捨てそうになった。」

アスナ「うん。」

ミト「でも、彼は違った。何が何でもあなたを助けようとした。そんな彼の姿勢に興味を持って……………」

アスナ「なるほどねえ……………」

ミト「何よ、その含みのある視線は。」

アスナ「いや、ミトも女の子っぽい事を考えるんだなあつて。」

ミト「!？」

アスナ「まあ、最終的には助けしてくれたから、良いけど。それじゃあ、早速確認してみたら？」

ミト「いや、多分気づいていないと思うから。」

アスナ「まあ、いきなり聞くのも時期尚早か。なら、少しでもアプローチをしてみたら？」

ミト「……………うん。」

アスナ「じゃあ、早速聞いてみたら？私を是が非でも助けた理由を。」

ミト「分かった……。」

そうして、お風呂から上がった。

カルム side

俺達は、最後の最後までボス戦の確認を行っていた。

カルム「つまり、ボスのHPが減ると、武器を変えらるって事だな。」

キリト「ああ。」

ハヤト「まあな。」

チエイス「だが、βの時と変更された可能性もある。それは警戒しなければならないな。」

話していると、ドアがノックされた。

ドアを開けると、そこには、2人組がいた。

この2人は知っている。

カルム「やあ、アルゴ。ジエイク。」

アルゴ「よっ、カル坊！」

ジエイク「邪魔するぜ。」

アルゴにジエイク。

この2人はβテスターで、その知識を他のプレイヤーにも情報として売っている。

βテストの時にも世話になった。

キリト「やあ、アルゴ。ジエイク。」

アルゴ「よっ、キー坊！」

ジエイク「キリト。早速だが、取引の情報だ。」

2人から話されたのは、キリトが持つアニールブレードを3万9800コルで買おうというものだ。

違和感を抱いたキリトが誰が交渉しているのかを聞くと、キバオウというあのサボテン頭だそう。

そうして、キリトは取引を蹴って、不成立になった。

しばらくすると、ミトが出てきた。

キリト達は、話し合いを続けていた。

ミト「お風呂よかったわ。」

カルム「良かったな。」

ミト「ねえ、話があるんだけど。」

カルム「ああ、良いぞ。」

ミト「じゃあ、外に出ない？」

そうして、外に出た。

外にあったベンチに座った。

ミトが切り出してきた。

ミト「聞きたいのは、あの時、何で是が非でもアスナを助けようとしたのだったのかって所。」

カルム「ああ。それか。」

ミト「何で？死ぬ可能性もあつたのに。」

カルム「何でかか。俺はさ。怖いんだよ。」

ミト「何が？」

カルム「大切な仲間が死ぬのが。」

ミト「……………」

カルム「勿論、自分が死ぬのも怖い。でも、守るつて約束したのに、破るのは後で絶対に後悔する。だからこそ、助けたいって思ったんだ。」

ミト「そうなんだ……………」

カルム「だからこそ、明日のボス戦では誰も死なせたくない。」

ミト「君は凄いな。」

カルム「当然の事をしたまでだよ。」

ミトは少し俯いている。

ミト「じゃあさ。私が死になつたら、あなたは助けるの？」

カルム「愚問だろ。助けるに決まってる。」

ミト「そっか………。」

カルム「だから、明日は頼む。」

ミト「分かった。」

ミトは少しスッキリした表情をしていた。

ミト「じゃあさ、明日はお願いね。それと、いつか、伝えたい事があるんだ。その為にも、死なない様にする。」

カルム「ああ。それは気になるから、俺も死なない様にしないとな。」
そうして、俺達は眠りに入った。

第6話 第一層ボス戦攻略

翌日、俺達は、第一層迷宮区へと向かっていた。

俺たちの役割は、ルインコボルド・センチネルというボスの取り巻きと戦う事だ。

迷宮区内でも戦闘が起こり、危ない場面もあったが、誰一人死なずにボス部屋の前へ辿り着いた。

ハヤト「しっかし、なんで俺達は取り巻きを倒す事なのやら。」

カルム「さあ？」

チエイス「俺達をボスとは戦わせないつもりなのか？」

キリト「さてね。」

ミト「あくあ。ボスと戦いたい。」

アスナ「ちよつとミト。」

そんな会話をしながらも着いてこれた。

そして、ディアベルが扉に手を掛けて、こちらを向いた。

ディアベル「皆！俺から言いたい事は一つ。………勝とうぜ！」

そうやって、俺達はボス部屋へと雪崩れ込んだ。

ボス部屋に入った直後は、何も起こらないが、突然、ドアが閉まり、何も無かった部屋が、様変わりしていき、一番奥に玉座があつて、そこには、イルフアング・ザ・コボルドロード、つまりボスがいた。

そして、取り巻きが3体ポップした。

イルフアング・ザ・コボルドロードが雄叫びを上げて、流星に怯んだ。

キバオウ「情報通りやな。」

ディアアベル「それじゃあ、皆！突撃!!」

ディアアベルの号令と共に、俺達は突撃していく。

俺達は、センチネルを相手にしていて、俺とミト、キリトとアスナさん、チェイスとハヤトのコンビで対処していく。

カルム「ミト、スイツチ！」

ミト「分かった！」

訓練通りに、敵の武器を俺が跳ね上げて、隙だらけになった所をミトが仕留めていく。キリトとアスナさん、チェイスとハヤトも各自で上手くやっていて、現状では、誰もHPが半分にはなっていない。

ボスの方も、ディアアベルの指揮が上手くいって、着実に減っていった。レイドパーティーの方も、ヤバい損害はない。

全てが順調だが、油断はしない様にしないと。

その時、HPバーが残り一本になって、イルファング・ザ・コボルドロードが動き出した。

雄叫びを上げて、骨斧と盾を投げ捨てた。

キバオウ「情報通りやな！武器を変えるで！」

そして、湾刀を取り出す。

ディアベル「次で決めるぞ！C隊、前へ！」

だが、俺は、奴の武器を見て、違和感を感じた。

湾刀にしては、滑らかすぎる。

その時、予感的中した。

カルム「あれってまさか!？」

ミト「湾刀じゃない！」

ハヤト「野太刀だ!!」

チエイズ「という事は、範囲攻撃が来る!!」

キリト「止めろ！下がれ!!」

予感通りに、イルファング・ザ・コボルドロードが、刀スキルの範囲技、旋車を発動して、C隊は攻撃を食らった。

C隊は大部分が半分までHPが減り、スタンの状態異常になった。

ディアベルはギリギリで防御が間に合った為、スタンにはならなかったが、攻撃を喰らったら、終わる。

その時、俺は動いた。

ミト「カルム!!」

チエイス「待て!!」

ディアベルに攻撃が当たる直前に、ディアベルを抱き抱えて、剣の腹の部分で、ボスの攻撃を逸らす。

連撃が来そうだったので、自分のAGIを最大限に使って、脱出する。

カルム「危ねえ……………!!」

ディアベル「君はどうして……………?」

カルム「何、今アンタに死なれたら困るんでね。それに、アンタの目的はラストアタックボーナスだろ?」

ディアベル「!!」

やっぱりか。

これなら辻褄が合う。

ディアベルはキバオウを介して、キリトの剣を手に入れて、LABを手に入れるつも

りだったのだ。

現在、スタンのプレイヤーを守る為に、ミト、キリト、アスナさん、チエイス、ハヤトの5人でなんとかしている。

俺も、少し掠ったぐらいで、HPには余裕がある。

そろそろ行くか。

ディアベル「カルム。その、すまない。」

カルム「その手の話は後でたっぷり聞くので、回復してくれ。」

俺は、ミト達の元へ。

カルム「すまない！待たせたな！」

ミト「カルム！私、あなたが死んだら……どうしようかと……！」

カルム「説教は後で聞く！今はボスに集中だ!!」

ミト「わ、分かったわ!!」

俺達のやる事は、片方が隙を作り、もう片方が攻撃する、それ自体は変わらない。対象が、取り巻きからボスに変わったただけだ。

カルム「ミト、スイッチ!!」

ミト「ええ！」

ボスのソードスキルをソードスキルで迎撃し、跳ね上げたら、ミトに攻撃させる。

先程の範囲攻撃は、囲まなければいけないので、ヒット&アウェイの戦法でHPを削っていく。

その時、イルフアング・ザ・コボルドロードが跳躍して、一気に襲いかかってきたが、ミト、アスナさん、チェイス、ハヤトのソードスキルが命中して、怯んだ。

「「スイツチ!!」」

カルム「決めるぞ！キリト!!」

キリト「ああ!!」

俺とキリトは、ソニックリープを放ち、それが当たったイルフアング・ザ・コボルドロードは、ガラスの割れる音の様な音を放ち、爆散した。

センチネルも、ボスが倒れると同時に消滅した。

「「オオオオオ!!」」

この時、第一層のボス、イルフアング・ザ・コボルドロードが倒された。

カルム「フウウ……。」

ミト「お疲れ。」

カルム「ああ。お疲れさん。」

キリト「良くやったな。」

アスナ「これで終わりよね？」

ハヤト「そうだろ！」

チエイス「何とか、死人は0か。」

そうやって話していると、会議で見た、エギルとディアベルがやって来た。

エギル「お前らの勇氣に賞賛するよ！C o n g r a t u l a t i o n s！」

ディアベル「助けてくれてありがとう。カルム。」

カルム「当然の事をしたまだよ。」

ミト「それで死にかけたら、話にならないでしょ!!」

カルム「すいません。」

ミトに怒られてしまった。

だが、ミトは呆れているも、笑っていた。

そんな和やかな雰囲気は打ち破られた。

キバオウ「何でや!!」

カルム「うん？」

キバオウが叫びを上げた。

キバオウのパーティーメンバーもキリトに対して憎悪の視線を向けていた。

キバオウ「何でディアベルはんを見殺しにしようとしたんや!!」

キリト「見殺し？」

キリトが聞き返すと。

キバオウ「ジブンは、ボスの使うスキルを知ってた！何でそれを伝えなかつたんや！」
その発言に、周囲が騒めき出す。

すると。

???「そうだ！そのそいつは、情報を自分だけで独占して、俺達を騙そうとしたんだ
!!周囲にいる奴や、アルゴとジエイクって情報屋もグルだったんだ!!そいつは、最低の
ゴミ屑野郎だ!!」

そんな事を宣った結果、一気にヘイトが俺達に集まっていった。

余計な事を……………!

アスナ「ちよつと……………!」

ミト「……………!!」

チエイス「お前ら……………!」

ハヤト「落ち着……………!」

どうしようかと呆然としてっていると、笑い声が聞こえてきた。

キリト「あつはつはつはつ!!」

キバオウ「何がおかしいんや!!」

キリト、何をするつもりだ。

キリト「元βテストターだつて？俺をあんな素人連中と一緒にしないでくれ。元βテストターよりも今のアンタらの方がマシさ。俺は元βテストターの中でも上層階にも上がった！刀スキルを分かったのも、上層階では使う奴が多かったからな！ちなみにそいつらは、俺の指示に従っただけさ。」

お前、まさか、自分1人にヘイトを集中させる気か。

確かに、このままでは元βテストターの吊し上げが起こる。

でも、その為にお前は1人になるんだぞ。

冒険者「ふざけんな!!」

冒険者「お前のせいで、ディアベルさんは死にかけてんだぞー!」

冒険者「β上ガリのチーター、ビーターだ!!」

キリト「ビーター。いいねそれ。そうだ。俺はビーターだ。これからはあんな奴らと一緒にするな。」

キリトはそう言って、コートを身に纏った。

キリト「第二層の転移門は俺がアクティベートしておくから、死ぬ覚悟のあるやつは来てもいいぞ。」

キリトはそう言って、上へと上がっていく。

しばらくして、俺、ミト、アスナさん、チェイス、ハヤト、エギル、ディアベル、キ

バオウ以外は居なくなった。

ミト「カルム、どうするの？」

カルム「俺は、あいつを追う。」

ミト「奇遇ね。私もよ。」

アスナ「行こう。」

チエイス「なら、伝言頼めるか？」

エギル「俺もだ。」

ディアベル「俺も頼む。」

キバオウ「ワイもいいか？」

4人の伝言を受け取って、二層に辿りついた。

キリトは俺達が現れた事に困惑していた。

キリト「着いてくるなって言ったのに。」

カルム「二層の街に行きたかったからな。」

ミト「伝言で、チエイスからは、『一人で無茶するな。』エギルさんからは、『また、ボス攻略をしよう。』」

アスナ「ディアベルさんからは、『こんな重みを背負わせてすまない。』キバオウさんからは、『今回はディアベルはんを助けてくれて感謝してる。だけどワイはワイなりに

強くなる。』ってさ。」

キリト「そうか。」

カルム「じゃあ、行こうか。」

そうして、俺達は二層の主街区へ。

第7話 剣士と歌い手の邂逅。

2023年の3月に、アインクラッド解放隊が壊滅した。

理由は、情報に踊らされた結果という事だ。

キバオウは、生存していたが、失意の元、第一層へと下がった。

その為、現在は、血盟騎士団と聖竜連合がトップのギルドだ。

まあ、その事は、現在ソロの俺には関係ない。

なんと、血盟騎士団の団長のヒースクリフにミトとアスナさんが勧誘されたのだ。

その為、キリトと俺はソロとして活動する事に。

ミトとは、定期的に連絡を取っている。

現在、俺はとあるダンジョンに潜っていた。

カルム「ハアアアア。やつと、アイテムを回収しきった。」

クエストを受けていて、指定のアイテムが、本当にドロップ率が低い。

何時間籠ったのか。

目的も果たしたし、帰ろうとしたら、剣戟が聞こえた。

それと同時に、人の掠れ声。

それを聞いた途端、俺はすぐさま声の元へ。

カルム「あれか。」

そこにいたのは、2人組で、1人は剣士で、もう1人は何とというか、歌手なのかと思える様な人だった。

どうやら、トラップが発動したそうで、モンスターに取り囲まれていた。

カルム「お2人さん、大丈夫か!？」

???「君は一体……!？」

カルム「話は後だ! 助太刀するぜ！」

???「ありがとう！」

俺の助太刀もあって、モンスターの一団は全滅した。

俺は2人組に声をかける。

カルム「大丈夫か？」

???「ああ。ありがとう。」

???「ありがとうございます。」

カルム「ところで、名前は？」

ノーチラス「ああ。僕はノーチラスだ。」

ユナ「私はユナ。」

カルム「そうか。助かってよかった。」

ユナ「あの、何かお礼を……。」

ノーチラス「そうだな。」

カルム「良いって。なら、フレンド登録してくれ。いつでも手伝ってやるからな。」

ノーチラス「分かった。」

こうして、俺はノーチラスとユナを連れて、迷宮区を脱出した。

主街区に着くと、ノーチラスに声をかけられた。

ノーチラス「あの、話があるんですが。」

カルム「ああ、良いですよ。」

ユナ「?。」

カフェに着いて、俺達は話をしだした。

カルム「それで、話とは？」

ノーチラス「ああ。僕の特訓に付き合っただけじゃない！」

ユナ「ノーくん。」

ノーチラス「このままじゃ、ユナを守れない。だから、頼む。」

カルム「良いぜ。」

ノーチラス「ありがとう！」

そうして、俺はノーチラスの特訓に付き合う事になった。

する事は、ノーチラス自身で決めていて、俺はそれのサポートだ。

特訓に付き合つて、しばらくして、俺はノーチラスの欠点を見つけた。

時折、動きが止まるのだ。

それも、ボスモンスタークラスになると。

その時は、俺がサポートに入る。

気になった俺は、ノーチラスに話を聞く事に。

カルム「なあ、ノーチラス。」

ノーチラス「何だ？」

カルム「何か悩みでもあるのか？」

ノーチラス「!？」

カルム「いや、言いたくないなら、言わなくて良い。」

ノーチラス「……………後で、話します。」

しばらくして、宿屋でノーチラスが話す事に。

ユナは、買い出しに出掛けている。

ノーチラス「実は、怖いんだよ。」

カルム「……………。」

ノーチラス「もしユナが死んでしまったら、僕は……！なのに、肝心な時に体は動かない。」

カルム「……………」

ノーチラス「どうしたらいいのか分からない。」

カルム「そうか……………」

ノーチラス「本当に、情けなく感じるだろう。君が羨ましく感じるよ。全く恐怖を感じないからさ。」

カルム「いや、俺だって怖いさ。」

ノーチラス「え？」

そう、俺も実は怖い。

もし死んだら、この世界で出来た友人を残して、居なくなる。

それを考えるだけでも、怖い。

カルム「このデスゲームで、死んだら本当に死ぬからさ。怖いよ。俺も。」

ノーチラス「だったら、君は何で動けるんだ？」

カルム「俺は、自分の弱さも受け入れてるからさ。」

ノーチラス「自分の、弱さ。」

カルム「そう、弱いからこそ、人は強くなるようにする。君が強くなりたいのはさ、ユ

ナを守りたいからだろう？」

ノーチラス「ああ……………」

カルム「なら、自分の弱さも受け入れてみるのも良いんじゃないか？」

ノーチラス「僕に、そんな事が……………」

カルム「出来るさ。いづれね。」

ノーチラス「話を聞いてくれて、ありがとう。気が楽になった気がする。」

カルム「そっか。」

翌日、俺達は、とあるダンジョンの前に居た。

カルム「着いてくるのは良いけど、良いのか？」

ノーチラス「ああ。僕がどこまで行けるのかを確かめたい。」

ユナ「私も、2人をサポートするよ！」

カルム「そっか。じゃあ、行こう！」

何故、このダンジョンに来たのかという点、このダンジョンには、強力な片手剣が入るそうで、俺はそれが目当てだ。

アルゴとジェイクからその情報を買って、ここに来た。

中に進むと、色んなモンスターがポップしてくるので、俺達はユナを守りつつ、迎撃していく。

ノーチラスも、大分動けるようになっていた。

ノーチラス「お疲れ。」

カルム「お疲れさん。大分動きが良くなったな。」

ノーチラス「強くなりたいからね。」

ユナ「ちよつと、私の事を忘れないでよね。」

カルム「悪い。」

暫く進むと、ボス部屋が出てきて、開けると、一体のモンスターが居た。

名前を見ると、ビートルアンデッド。

なるほどな。カブトムシのモンスターか。

ノーチラス「あいつがボスか。」

ユナ「2人とも、行こう！」

カルム「ああ。」

戦闘自体は、順調に進んでいた。

だが、HPバーが残り一本になった途端、増援を呼んだ。

アルビローチと書いてある。

俺は危なげなく対処しているが、ノーチラスの動きが止まった。

ノーチラス side

まだだ。

突然、僕の体が動かなくなった。

このままじゃ、ユナが………!!

カルム『なら、自分の弱さを受け入れてみるのも良いんじゃないか?』

と、カルムのあの言葉が、蘇る。

そうだ、カルムも言っていたじゃないか。

人は弱いからこそ強くなる。

そして、僕は、ユナを守る!

恐怖に負けて動けなくなる自分を受け入れて、僕は更に強くなる!

ユナを守り、カルムに追いつく!

その時、動けなくなったのが嘘であるかの様に、動きだし、ユナの元へ。

ノーチラス「ユナ!!」

ユナ「ノーくん!!」

ユナに襲い掛かろうとしたアルビローチを撃破した。

カルム side

ノーチラスの奴、一皮剥けたじゃないか。

ノーチラスの成長に貢献出来て良かった。

ノーチラス「カルム、すまない！ボスは任せた！」
カルム「ああ！俺に任せろ!!」

俺はビートルアンデッドに接近して、盾を吹き飛ばして、ホリゾンタル・スクエアを
発動して、残りのHPを削り切る。

ビートルアンデッドは爆散して、アルビローチも爆散する。

カルム「お疲れさん。一皮剥けたな。」

ノーチラス「ああ。君のおかげだ。」

ユナ「ノーくん。今の君、とってもかっこよかったよ！」

ノーチラス「！ああ……！」

良かったな、ノーチラス。

さて、報酬を確認すると、ブレイラウザーという片手剣と、コート・オブ・ミスリル
というコート、シオルダーガードナーという肩当て、オリハルコンブレストと言う胸当
て、アームズシエルという籠手、レッグスシエルと言うサポーターが手に入った。

その時、拍手が起こった。

???「おめでとう。やるじゃないか、2人の剣士。」

そこにいたのは、ミトともう1人、赤い鎧を着ている男性だった。

だが、俺はその男性を知っている。

カルム「確か、血盟騎士団の団長の、ヒースクリフですか？」

ヒースクリフ「いかにも。私がヒースクリフだ。」

やっぱりか。

でも、何でミトも居るんだ？

俺の顔で分かったのか、ミトが解説しでした。

ミト「アルゴとジェイクから、アルピローチが出るのを言い忘れたから、助けてやってくれて言われてね。」

ヒースクリフ「ミト君。私を呼んだ時に、君は結構慌てていたじゃないか。」

ミト「そ、それは言わないで下さい！でも、カルムを心配したのは、事実ではあるんですけど。」

カルム「そうか。心配してくれて、ありがとうな。」

ミト「う、うん。」

あれ？何かミトの顔が赤い。

俺、何か変な事言ったかな？

そんな事を考えていると、ヒースクリフがノーチラスに話しかけていた。

ヒースクリフ「君の勇氣、見させてもらったよ。」

ノーチラス「ありがとうございます！話があるんですけど……。」

ヒースクリフ「ふむ。何かね？」

ノーチラス「僕を、血盟騎士団に入れて欲しいです!!」

ミト「へえ。」

ユナ「ノーくん。」

ヒースクリフ「うむ。君の様な者は、いつでも歓迎だ。」

何と、ノーチラスも血盟騎士団に入る事に。

ヒースクリフ「ところで、カルム君。」

カルム「はい？」

ヒースクリフ「君も血盟騎士団に入らないか？」

ミト「え!？」

カルム「お気持ちはありがたいのですが、まだ、入るには時期尚早かと思えますので。保留という所でお願います。」

ヒースクリフ「なら、その時期が来たら、声をかけてくれたまえ。」
カルム「分かりました。」

俺は、まだ血盟騎士団には入らずに、もうしばらくソロでいる事に。
少し、ミトは残念そうな表情を浮かべていた。

ノーチラス「ありがとう。君のおかげで前へ進めそうだ。」

カルム「頑張れよ。」

ノーチラス「ああ！」

ユナ「男同士の友情ですね。」

ミト「そうですね。」

こうして、俺はソロに戻った。

ちようどその頃から、紫紺の剣士と呼ばれる様になった。

第8話 紫紺の剣士と黒の剣士（前編）

シリカ side

私は泣いていた。

大切なピナが死んでしまった事に。

ヒロミ「シリカ。ごめん。」

どうしてこうなっているのか。

理由は、少し遡る。

私は、とあるパーティーでクエストに出かけていた。

戦闘自体は順調に進んでいた。

シリカ「ヒロミ君、大丈夫？」

ヒロミ「うん。シリカこそ大丈夫？」

この人はヒロミ君。

私がナンパされたところを助けてくれた。

でも、当初は男の人には警戒心を抱いていた為、女の子と思った人が実は男の人だと
言う事に驚いた。

ヒロミ君も、女の子によく間違われるそうで、誤解した事を謝った。

その後も、友達として、一緒にクエストを行い、今日も別のパーティーとクエストに出かけていて、分配の時に、ロザリアさんと口論になった。

ロザリア「アンタはそのトカゲで回復出来るんだから、回復結晶は配らなくて良いですよ。」

ヒロミ「ちよつと待って下さい！ピナが回復してくれるからって、それはあまりにもあんまりじゃ！」

ロザリア「あら、アンタはその子の味方？大丈夫よ。女に見えるアンタにはちゃんと配るからさ。」

それを聞いてカチンときた。

ヒロミ君は確かに、気弱なところはあるけど、良い人なんだから！

シリカ「分かりました！アイテムなんていらなです！あなたとは組みません！ヒロミ君、もう行こう!!」

そう言つてヒロミ君の手を引いて森の中を歩いていく。

リーダーの人も、森を抜けるまでは居た方が良いと言っていたが、私はもうあの人の顔を見たくない。

ヒロミ「シリカ、本当に良かったの？」

シリカ「ヒロミ君を悪く言うあの人の顔を見たくない！」

だけど、私は甘い事を考えていたせいでこの後に、とんでもない事になるとは思わなかった。

あれから森に迷ってしまい、回復アイテムも底をつきかけていた。

そんな時に、ドラクエイプと遭遇してしまって、戦闘になった。

ヒロミ君は、私を守る為に、前衛で戦っていたけど、前衛のサポートが主な役割のヒロミ君は、次第に疲弊していった。

ヒロミ君の回復アイテムが尽きてしまったようで、回復アイテムを渡そうとしたけれど。

シリカ（回復アイテムが！）

私も回復アイテムが尽きてしまった。

その隙に、攻撃を受けてしまい、HPがレッドゾーンに行ってしまう、短剣も吹き飛ばされた。

ヒロミ「シリカ!!」

シリカ「危ない!!」

ヒロミ「えっ……。ウワッ！」

私を助けようとヒロミ君は来たけど、私に夢中になっていたせいか、攻撃に気付かず、

槍を折られて、吹っ飛ばされた。

シリカ「ヒロミ君!!」

ヒロミ「ウツ……。」

気を失つてゐるみたい。

ヒロミ君に気を取られた結果、私自身にも攻撃が迫っている事に気づきのが遅れた。

攻撃が届く前に、ピナが間に入った。

シリカ「ピナ!!」

その結果、ピナのHPは尽きてしまい、ポリゴン片となり、消滅。

翼一枚だけが残った。

シリカ「ピナ、ピナアア!!」

私を取り乱している内に、ヒロミ君に攻撃が迫る。

シリカ「やめてええええっ!!」

だが、攻撃が当たる前に、ドラックエイプが消滅した。

そこにいたのは、右手に片手剣を持って、黒いロングコートを纏った少年と、ヒロミ君を抱き抱えている紫紺色のロングコートに白色の胸当て、籠手、膝当てをつけた少年が居た。

ヒロミ君は無事だったけど、ピナは。

シリカ「ピナア！」

ヒロミ君も近づいてきて。

ヒロミ「シリカ。ごめん。」

と、謝った。

カルム side

唐突に、キリトに呼ばれたと思ったら、調査を手伝って欲しいって言われた。

俺達は、調査をしつつ、お互いの近況報告をした。

キリトは、月夜の黒猫団というギルドに入っていたが、ある事を理由に、抜けたらしい。

月夜の黒猫団がトラップに引っかかったが、チエイズとハヤトの救援もあつて助かった。

しかし、月夜の黒猫団を騙していた事にキリトは耐えきれずに抜けたらしい。

だが、月夜の黒猫団とは和解して、今は友達として接しているらしい。

カルム「そうか……。」

キリト「それにしても、カルムも装備を一新したんだな。」

カルム「まあな。」

ある調査をしている時、迷いの森に行ったが、その時に、2人のプレイヤーが襲われ

ているのに気付いて、助けに入った。

だが、女の子は、一枚の羽を持って、泣いていた。

カルム「君って、ビーストテイマー？」

シリカ「はい。でも、私の考えが甘くて……。ピナがあ。」

ヒロミ「シリカ……。」

キリト「えっと、その羽根をタップしてみて。」

シリカ「え？」

タップすると、ピナの心と書いてあった。

キリト「それなら、蘇生が出来る。第47層の南にある『思い出の丘』っていう場所に行けば、そこに咲く花を使える。それを使えば、蘇生できるんだよ。」

シリカ「本当ですか!?!でも、47層って。」

キリト「俺が手に入れる訳にもいかないしな。そういやカルム。昨日手に入れたアイテムは残っているのか？」

カルム「おうよ。まだあるぜ。」

俺は、2人に、ランスラウザーを始めとするアイテムを渡した。

俺は槍を使った事がないから、宝の持ち腐れだったしな。

カルム「2人に渡した物があれば、5、6レベルなら底上げ出来るし、俺達もついて

る。」

シリカ「あの、どうして私達にそこまでするんですか？」

警戒心強いな。

まあ、甘い話には裏があるって言うしな。

キリトが少しそっぽを向いて。

キリト「女の子2人を放っておけなくて……。」

ヒロミ「あの……僕、男なんですけど……。」

キリト「なんだ男か。……ってええ!?お、男なの!？」

キリト、気づいていなかったのか。

まあ、俺も最初は女の子と思ってたしな。

キリト「カルムは、知ってたのか!？」

カルム「さっき助けた時に、ハラスメントコードは出なかった。だからだ。」

それを聞いたキリトは、ヒロミに土下座しました。

キリト「ごめんなさい。俺の方が女に見えるな。許してください。」

ヒロミ「僕は大きくて気にしてないので、頭を上げて下さい!!」

苦笑いを浮かべてこれを見ていた。

落ち着いたところで、自己紹介をする。

カルム「俺はカルムだ。」

キリト「俺はキリト。」

シリカ「私は、シリカと言います。」

ヒロミ「僕はヒロミって言います。」

俺達は、2人を連れて、35層主街区のミーシエにやってきた。

シリカとヒロミが美味いチーズケーキを知っているそうで、そこに行こうとすると、1人の女性が近づいてくる。

???「あら、シリカとヒロミじゃない。」

カルム「あの女性は？」

ヒロミ「ロザリアって言う人で、こんな事になった遠因なんです。」
なるほどな。

ロザリアがシリカに嫌味ったらしく言ってるのを見て、文句を言おうとしたら、キリトが耳打ちしてきた。

キリト「誰なんだ？あのおばさん。」

それが聞こえたのか、ロザリアがこちらを見る。

流石に不味いと思い、耳打ちする。

カルム「おい、おばさん言うな。」

キリト「だって、いかにも厚化粧してそうなおばさんって感じだけ。カルムもそう思うだろ？」

確かに俺もそう思うけど！

ヤバイ。ロザリアのこちらを見る視線に怒りが混ざっている。

これは巻き込まれそうだな。

ロザリア「その黒いのと青紫の！」

キリト「えっ!?俺!？」

カルム「何で俺まで！」

ロザリア「誰が厚化粧してそうなおばさんよ！」

カルム「いや、俺はアンタの事をおばさんなんて言っていないぞ。」

ロザリア「今言ったじゃない！」

カルム「あ。」

キリト「聞こえてたんだな、おばさん。この2人には俺達がついてる。問題ないよ。」

ロザリアは、捨て台詞を吐いて、去っていった。

だが、俺はロザリアを警戒していた。

丁度店に着き、座った。

シリカ「何で、私にあんな意地悪を言うのかな……?」

カルム「2人は、MMOはSAOが初めてか？」

ヒロミ「あ、はい。」

キリト「そうか。どんなオンラインゲームでも、性格が変わる人も多いんだ。」

カルム「あと、俺達のカーソルはグリーンだけどデュエル以外で攻撃すると、オレンジになる。だけど、SAOでは、ゲームで死んだら、現実でも死ぬ。だけど、そんな状況でも、楽しんで殺す奴もいる。」

そんな事を言うと、シリカとヒロミは、黙ってしまった。

キリトが空気を変えるかのように、チーズケーキの話題を出して、和やかになった。その後、明日行く第47層について話し合う為にキリトの部屋へ。

ヒロミ「キリトさん。そのアイテムは？」

キリト「これはミラージュ・スフィアっていうアイテムだよ。」

キリトがミラージュスフィアについて解説した所で、ボタンを押すと、大きな円形のホログラムが出現した。

シリカ「わああ。綺麗。」

ミラージュスフィアは、マップよりも詳しくインクラッドの構造を映す物だ。

キリト「今映っているのは第47層のマップだ。ここが主街区で、思い出の丘に向かうにはこの道で行くんだけど……。」

ドアの向こうに気配がしたので、俺とキリトは顔を見合わせて、シリカとヒロミの方には俺が、ドアの向こうの奴にはキリトが向かった。

キリト「誰だ！」

だが、誰かが階段を駆け降りる音が聞こえただけだった。

シリカ「どうしたんですか？」

キリト「話を聞かれた。」

ヒロミ「でも、ドア越しに会話が聞こえるんですか？」

カルム「聞き耳スキルが高いと出来る。キリト。どうする？」

キリト「多分、転移結晶で逃げた。追いかけても無駄だろうな。」

ヒロミ side

その後、ある程度話して、各自の部屋で寝る事になった。

シリカを送り届けて貰った後、僕の部屋に向かっている。

カルム「どうした？」

ヒロミ「カルムさん。僕は悔しいです。あの時僕がしっかりしていたら、ピナが死ぬことも、シリカを悲しませる事もなかった。なのに、僕は何も出来てない。」

カルム「そんな事は無い。君だって、シリカを気遣っていたら。それに、あの槍は結構良い性能なんだぜ。」

ヒロミ「カルムさん。」

カルムさんは凄いな。

身長も高くて、顔もカッコいいと思う。

カルム「まあ、敬語は無しだ。何か落ち着かないしな。」

ヒロミ「分かりました……。カルム、これから宜しくお願いします。」

カルム「おう。」

僕も2人から、高ステータスの武器と防具を受け取っていた。

貰った武器をオブジェクト化すると、ランスラウザーと書いてあった。

これを使いこなせるか分からない。

でも、シリカは絶対に守る。

僕はそう言い聞かせて、眠りについた。

第9話 紫紺の剣士と黒の剣士（後編）

ヒロミ side

第47層 フロアリア

第35層から、転移門を通ってきて、たどり着いたのは、辺り一面が花で覆われた
フィールドだった。

シリカ「凄い……！夢の国みたい……!!」

カルム「辺り一面が花で覆われているから、通称フラワーガーデンなんて呼ばれてい
る。」

キリト「時間があれば、北の端にある『巨大花の森』にも行けるんだけどな。」

ヒロミ「そうなんですか。それは、もう少しレベルが上がってからです。」

周りを見ると、カップルが多かった。

「どうやらここは、カップルのデートスポットみたいだ。」

「いつか、僕もシリカと一緒に来れるかなと考えてしまう。」

でも、シリカは僕の事を異性として見てるのか分からない。

カルム「どうした、ヒロミ?」

ヒロミ「あ、考え事をしてただけです。」

キリト「そうか。なら、シリカにも声をかけてくれ。」

ヒロミ「分かりました。」

僕は、シリカの元へ。

ヒロミ「シリカ。」

シリカ「な、何っ!？」

シリカは、顔を赤くしながら慌てて反応した。

ヒロミ「カルムとキリトさんがそろそろ出発しようって。あれ、顔が赤いけど、大丈夫？」

夫？」

シリカ「な、何でもないよ!!」（あのカップルみたいに、ヒロミ君と2人きりでここに来たいなんて思った事、バレてないよね？）

まさか、シリカも……。

いや、考えすぎか。

キリト「さて、出発するんだが。2人にはこれを渡しておく。」

そう言つてキリトさんが渡したのは、転移結晶だった。

キリト「2人のレベルと俺達が渡した装備なら、問題は無い。だけど、フィールドでは何が起こるか分からない。だからこそ、俺達が逃げろと言つたらそれで逃げてくれ。」

カルム「何、俺達はヤワじや無いからな。」

2人は真剣な表情でそう言ったので、ベルトポーチに入れる。

その後、戦闘になったが、キリトさんとカルムの2人が前衛を受けてくれて、僕とシリカのレベル上げを手伝ってくれた。

だけど、あの2人って、一体何者なんだろう？

もしかして、攻略組？

だけど、攻略組がこんな中層フロアにいる筈が無いか。

しばらくして。

カルム「到着だ。」

キリト「ここが、思い出の丘だ。」

シリカ「ここにピナを復活させる花が……!」

カルム「ああ。あの丘の天辺に咲くらしい。」

天辺に行くと、花が咲いていた。

ヒロミ「これが……!」

カルム「ああ。プネウマの花だ。」

キリト「ピナの心に花の中に溜まつてる雫を振りかけると復活する。でも、主街区でいいだろう。ピナもその方が良いに決まつてる。」

シリカ「はい！」

その後、僕達は帰ることに。

モンスタ―にもそこまで遭遇しなかった。

だけど、橋に掛かった所でカルムとキリトさんが立ち止まった。

キリト「そこで待ち伏せてる奴、出てこいよ！」

キリトさんがそう言うのと出てきたのは、ロザリアだった。

シリカ「ロ、ロザリアさん!？」

ロザリア「その様子だと、プネウマの花をGET出来たみたいね。なら、早速寄越しなさい。」

この人は何を言い出すんだ？

カルムとキリトさんが僕達の前に立ち、口を開いた。

キリト「そうは行かないな、おばさん。いや、オレンジギルド『タイタンズハンド』のリーダーさん？」

ロザリア「へえ……。」

シリカ「オレンジギルド!?!でも、ロザリアさんはグリーンじゃ……!?!」

カルム「オレンジギルドは、全員がオレンジカーソルって訳じゃ無い。グリーンは、圈内村には入れないもいて、そいつが情報収集を担当する。オレンジカーソルの奴は、圈内村には入れない

からな。」

ヒロミ「じゃあ、この2週間に、一緒のパーティーに居たのは……………!!」

ロザリア「そうよ。本当なら、今日殺る予定だったけど、本命のシリカが居なくなっちゃったけどレアアイテムを取りに行くじゃない。でも、そんな事が分かっててその2人に付き合うなんてアンタ達バカなの？女の子2人にカツコつけたいからなの？」

カルム「ヒロミを男だつて分かつて言うか。なら、お前は性悪おぼさんだな。」
カルムの雰囲気が変わった。

いつもの優しい雰囲気が消えて、怒りの雰囲気が出ていた。

キリト「俺達はアンタを探してたんだ。アンタ、10日前に『シルバーフラグス』つていうギルドを襲ったな。」

ロザリア「ああ、あの貧乏な連中ね。」

カルム「リーダーの男はな。最前線の転移門広場で泣きながら仇討ちをしてくれる人を探してた。でも、彼はアンタらを牢獄に入れてくれと言っていた。アンタに奴の気持ち分かるか？」

ロザリアは、面倒臭そうに答えた。

ロザリア「分かるわけないでしょ。マジになつてバカみたい。」

カルム「そうか。なら、お前は最低のクズ野郎だな。同情の余地が無い。」

カルムの怒気も更に高まっていた。

ロザリア「自分達がどんな状況なのか分からないで止めちやったの？」

その時、ロザリアの周辺から、オレンジプレイヤーが大量に出て来た。

つまり、コイツらが、タイタンズハンドのメンバーという事だ。

完全に挟み撃ちにされた。

ヒロミ「キリトさん、カルム！形勢が不利です！一旦撤退しましょう！！」

キリト「大丈夫。俺かカルムのどちらかが逃げろって言うまでは、転移結晶を用意しながら見ててくれ。カルム、後ろの奴は任せた。」

カルム「あいよ、キリト連中を殺すなよ。あとヒロミ、シリカをちゃんと守ってやれ。」

キリト「分かってる。」

僕にもそんな風に言って、2人は前と後ろの敵に向かっていった。

「キリトさん!!カルム(さん)!!」

僕達が名前を呼ぶと、タイタンズハンドの1人が反応した。

冒険者「キリト、カルム？黒ずくめの服に盾無しの片手剣、紫紺のコートに胸当てに籠手、膝当てをつけた片刃の剣士、まさか『黒の剣士』と『紫紺の剣士』!?ロザリアさん、あの黒ずくめはソロで前線に挑んでるビーターの攻略組だ！それに紫紺の剣士の方は、今、勢いづいてるソロの攻略組だって言われている!!」

え？2人が攻略組？

それなら、あの2人の強さに納得がいく。

ロザリア「攻略組がこんなところにいる訳ないじゃない！ホラ、とつとと始末して身包み剥いちやいな!!」

ロザリアの声と共に、オレンジプレイヤー達が2人に襲い掛かる。

カルムは回避したり、剣で防御しているが、キリトさんは、ただ攻撃を受けている。

シリカ「やめて！2人が死んじゃう！」

ヒロミ「シリカ！今、助け……………!!」

シリカが苦しんでるのを見て、『ランスラウザー』を取り出すが、信じられない物が映った。

ヒロミ「HPが減ってない……………!!」

シリカ「どういう事……………!!」

キリトさんのHPが減っても、すぐに回復した。

カルムさんも、あつさり躲していて、オレンジプレイヤーの方が息が荒くなっていた。

ロザリア「何してんだ!?!さっさと殺しな!!」

冒険者「それが、コイツ幾ら攻撃しても、HPが減らないんです!!」

冒険者「紫紺の剣士には、避けられたり、防御されたりで、一撃も当たってません……………

！」

オレンジプレイヤーも疲労が溜まったのか、動きを止めた。

カルム「ジャガーアンデッドよりは遅いな。」

キリト「10秒あたり400つてところか。それがアンタらが俺に与えるダメージ量だ。俺のレベルは78、HPは14500。『バトルヒーリング』スキルによる自動回復が、10秒で600ポイントある。何回攻撃しても無駄だ。」

冒険者「そんなのありかよ!？」

キリト「ありなんだよ。たかが数字が増えるだけで、そこまで無茶な差がつく。それがレベル制MMOの理不尽さだ!」

そして、キリトさんは、転移結晶よりも色が濃い結晶を取り出した。

キリト「これは俺の依頼人が全財産を叩いて買った回廊結晶だ。監獄エリアを出口に指定してる。これで全員監獄に飛んでもらう!」

ロザリア「やるじゃない。でも、ここにいるのが全員だと思わないでね。」

そう言うと、1人のプレイヤーが、シリカに襲い掛かった。

シリカ「きゃあつ!」

ヒロミ「シリカ!」

僕はすぐさまシリカの前に出て、ランスラウザーで攻撃を受け止める。

冒険者「コイツ!!」

ヒロミ「ウオオオ!!」

僕は、スパイラルゲートを発動させて、カウンターを叩き込む。

すると、武器は破壊されて、その折れた刃は、ロザリアの足元に。

ロザリア「ヒイツ!!」

ヒロミ「これ以上、シリカを悲しませるのなら、僕は許さない!!」

その気迫に、オレンジブレイヤーは戦意喪失する。

カルム「武器破壊か！ナイスガッツを見せたな！ヒロミ!!」

カルムがその声をかけて、キリトさんがロザリアに近づいて、首元に剣を突きつける。

ロザリア「グリーンの私を攻撃したら、アンタまでオレンジに……!」

キリト「言っておくが俺はソロだ。1日2日くらいオレンジになるのなら、問題無い。」

キリトさんが回廊結晶を使って、カルムと一緒にタイタンズハンドのメンバーを次々と送り込む。

ロザリアを送り込む直前に、カルムが話しかけた。

カルム「監獄に送る前に一つ言っておく。ヒロミは芯があつて強い奴だ。次に俺の友達を馬鹿にしてみる。そんな時はお前をぶっ潰す……!」

ロザリアは、その言葉に恐怖した。

これにて、タイタンズバンドは監獄に送り込まれた。

シリカ「ピナ！」

僕達は宿に戻って、ピナを復活させた。

シリカが笑顔になっているのを見て、僕も嬉しくなってくる。

シリカ「キリトさん、カルムさん、ありがとうございます！」

キリト「別に良いよ。」

カルム「最後は少し危険な目に遭わせちゃったからな。」

ヒロミ「あの、キリトさんとカルムは、もう前線に戻るんですか？」

キリト「ああ。5日も離れちゃったからな。」

カルム「早く戻らないとな。」

ヒロミ「攻略組って凄いですね。僕とは違って、あんなに強いですし。」

今回、ピナを復活出来たのは、カルムとキリトさんがいたからだ。

でも、僕は何も出来てない。

だけど、3人が声を掛けた。

キリト「そんなことはない。ヒロミは、シリカを守ったじゃないか。」

カルム「あの時のヒロミは男らしくてカッコよかつたぜ。」

シリカ「ヒロミ君が助けてくれたから、花を奪われずにすんで、ピナを生き返らせた事が出来たんだよ。ありがとうね、ヒロミ君！」

3人が言ってくれた事が嬉しくて、泣いてしまった。

3人が慰めてくれるけど、それでも涙が止まらない。

この日、想いを寄せているシリカを守る事が出来て、少しは強くなれたかな？

第10話 フュージョンジャック

2024年3月15日、俺はとあるダンジョンに来ていた。

アルゴとジェイクから買った情報で、ここに出現するモンスターが、俺のブレイラウザー等の強化に使えるとの事だ。

既に、ビートルアンデッド以降に遭遇したアンデッドと名がつくモンスターは撃破している。

どう言う訳か、そのモンスターが使っていたスキルを俺も使える様になり、それを主軸で戦っている。

ダンジョンに来たまでは良いのだが……。

カルム「それで？何で着いてきたんだ？ミト。」

ミト「良いじゃない。たまには一緒に挑みましょうよ。」

血盟騎士団の第二副団長のミトが来ていた。

カルム「いや、来るのは良いんだけどさ。ソロじゃきついかもしれないし。でも、ギルドは大丈夫なのか？」

ミト「大丈夫よ。今日はお休みの日だし。」

カルム「そうか……。」

まあ、ミトは弱い訳では無いから、良いんだけどさ。

カルム「それにしても、一緒にコンビを組むのはいつ以来だろうな。」

ミト「私が血盟騎士団に入ってから、コンビを組んで無いもんね。」

確かに。

まあでも、久しぶりに組むのもありか。

カルム「よろしく頼むぜ。副団長様？」

ミト「普通にミトで良いのに……。」

この呼び方は多少の弄りを込めた物だ。

ミトは少し拗ねてしまう。

そうして、俺達はダンジョンへと入っていく。

中には、ダークローチというモンスターがいて俺達は連携で倒していく。

少し進んでいくと、安全地帯があった為、そこで休憩する事に。

カルム「そう言えば、アスナはどうした？」

ミト「ああ。キリトとの決闘騒動ね。」

カルム「まあ、俺もアスナがあんな作戦立てるとは思わなかったからな。」

そう、3月6日の攻略会議にて、アスナはとんでもない事を宣った。

それは、ボスにNPCを攻撃させて、その隙に倒すと言う物だ。

血盟騎士団全体で立てたのかと思ったが、ミトも驚いた表情をしていた事から、ミトは知らなかった模様だ。

カルム「第一副団長。本気で言ってるのか？」

アスナ「本気です。」

キリト「待ってくれ！NPCはどうなる！この村にはNPCが大勢居るんだぞ！」

アスナ「……………それが何か？たくさん居るのなら、その分だけ引き付けてくれます。」

ミト「アスナ……………」

マジかよ。

人としてその作戦はどうなんだ。

キリト「なんだと!?襲われたNPCはどうなるんだ!？」

アスナ「そんなの、どうせリポップするんですから、問題ないです。」

カルム「問題だらけだろ。NPCだって……………」

アスナ「生きてる、と言いたいのですか。」

カルム「ああ。」

アスナ「……………」

アスナの視線に、敵意と殺意が混じっている。

アスナ、変わりすぎだろ。

その後、会議は平行線を辿り、結果として、キリトとアスナがデュエルする事に。結果として、キリトが勝利した。

カルム「正直、アスナのあの作戦は合理的だ。でも、人として、NPCに囲をさせるなんてあつてはならない。」

ミト「まあね。」

カルム「何があつたら、あんな風になるんだ？」

ミト「アスナも、一刻も早くクリアしようとして焦つてるんだと思う。」

カルム「そうだよな。……少し疲れたから、一休みするな。」

ミト「うん。」

ミト side

カルムは一休みすると言つて、寝た。

寝つ転がつてからすぐに寝たから、大分疲労が溜まつてると思う。

カルムも無茶しすぎだよ。

そりや、第一層の時と比べたらマシだけど、疲労が少しも取れてない。

ミト「カルム……。君も無茶しすぎだよ。」

ここ最近、カルムの事を考える時間が増えてきた。

以前、アスナからカルムの事を気になってるって言われたけど、ますます気になってくる。

それにしても、カルムの寝顔は意外と可愛い。

少年の様なあどけなさがある。

年下なのかな？

ミト「ハアアアア。しようがない。今回は一肌脱ぐか。」

そう言つて、私は彼を膝に乗つけて、所謂膝枕にした。

それにしても、私つて、カルムの事を好きなのかな。

いずれ分かると良いんだけど……。

カルム side

俺が寝てからしばらくすると、意識が少しずつはつきりしてくる。

だが、やけに首の位置が高くなってる。

何でだろう？

ミト「カルム、よく寝れた？」

ミトの声が上からしてくる。

目を開けて、焦点が合うとそこには、ミトが。

つまり、膝枕されてるといふ事だ。

カルム「え。え!？」

ミト「ふふっ。可愛いわね。」

俺はすぐに跳ね起きた。

ミトは少し微笑んでいた。

カルム「あ、あの……。」

ミト「どうしたの？お礼を言っただけで欲しいなあ。」

カルム「あ、ありがとう……。よく寝れた。」

ミト「どういたしまして。」

何だろうか。

ここ最近、ミトの事が気になってくる。

よく行動を共にしてたからか？

そんな心のモヤモヤを抱きつつ、俺とミトは最深部へ。

最深部に着くとそこには、イーグルアンデッドとカプリコーンアンデッドというアンデッドがいた。

カルム「ミト、準備は良いか？」

ミト「誰に聞いてんの？行くわよ！」

カルム「ああ！」

こうして、俺とミト、イーグルアンデッドとカプリコーンアンデッドとの戦いが始まった。

俺はイーグルアンデッドを、ミトはカプリコーンアンデッドを相手にしている。

イーグルアンデッドはイーグルの名の通り、飛び回るので、ディアーサンダーを放ち、撃ち落とす。

イーグルアンデッドはスタン状態になったのですぐさま追撃する。

ミトの方も、カプリコーンアンデッドとも互角に戦っている。

ミト「結構行けるんじゃない!？」

カルム「油断するなよ、ミト！」

ミト「分かってる！」

しばらくして、俺とミトは、イーグルアンデッドとカプリコーンアンデッドを撃破出来た。

少し、2体のアンデッドの連携に押されたが、こちらも連携で行き、何とか倒せた。

カルム「ふう。ミト、お疲れさん。」

ミト「カルムもね。そういえば、何か宝箱があるけど。」

カルム「え？」

ミトの指摘通り、2体のアンデッドを倒したところに宝箱があった。

宝箱を開けると、何かの装備と2枚のカード、ペンダントが入っていた。

内容を見ると、装備の方がラウズアブソバーで、カードがフュージョンイーグルと、アブソブカプリコーン、ペンダントがクイーンズエレメントと書いてある。

ラウズアブソバーとフュージョンイーグル、アブソブカプリコーンを取ると、新スキル取得画面が表示された。

スキル名は『フュージョンジャック』。

ペンダントの方を見ると、全ステータスが上昇する代物だった。

だが、このペンダントは女性プレイヤー限定だそうで、ミトに渡した。

カルム「ミト、これやる。」

ミト「え!?! 良いの……?」

カルム「ああ。それに、手伝ってくれたお礼。」

ミト「あ、ありがとう!!」

カルム「おう。」

ミトにペンダントをあげると凄く喜んだ顔になった。

そのミトを見ると、俺も嬉しくなる。

カルム「じゃあ、外に出るか。」

ミト「うん。あとさ、新しいスキルも見せて欲しいなあ。」

カルム「そうだな。俺も新しいスキルがどういいうのか気になるしな。」
外に出て、少し歩き、フィールドボスがいたので、これで試してみる。

概要を見て、俺はラウズアブソーバーにアブソーブカプリコーンを入れる。

『absorb queen!』

そして、フュージョンイーグルをラウズアブソーバーの横にあるリーダーにラウズする。

『fusion Jack!』

すると、イーグルの紋章が俺に重なって、胸のオリハルコンプレストが金色になり、中心部分にはイーグルの紋章が入る。

しかも、何やら翼が生えた。

ブレイラウザーも、少し剣先が伸びた。

ミト「え!?!」

カルム「翼だ。」

フィールドボスが攻撃を仕掛けてきたが、俺はすぐさま翼で飛び、躲す。

スゲエ!縦横無尽に飛べるのか!

俺はサンダーとスラッシュのカードをブレイラウザーにラウズして、ボスに向かって、ライトニングスラッシュを発動する。

すると、一撃で大半のHPを削って、その後の攻撃で倒せた。

ミト「凄いじゃない……！初なんじゃないの!? アイנקラッドで飛べるなんて!!」
カラム「確かに凄いな、これ。」

その後、ミトにお礼として奢り、ミトは帰って行った。

その後の迷宮区のボス戦で使って、紫紺の剣士は空を飛べると言われた。

第11話 圏内事件

2024年4月11日 第59層《ダナク》

現時点での最前線だ。

今頃、多くの攻略組が迷宮区に挑んでいる筈だが、俺とキリトはサボっていた。

丁度、何をしようかと悩んでいたら、キリトから「今日の気象パラメータは最高だからさ、一緒にのんびりしようぜ。」と誘われて、現在はキリトが寝ていて、俺はラウズアブソーバーを弄ったり、SAO内で販売されている小説を読んでいた。

ミト「何してるのよ、紫紺の剣士様？」

そんな揶揄う様な声が頭上からしてきて、見てみると、ミトが居た。

カルム「ミトか。いやあ、この誰が書いたのか知らないけど面白い小説を読んできた。」

ミト「ああ、それね。ところで、キリトは何をしてるのよ。」

カルム「キリトなら、そこで日向ぼっこしつつ、寝てるぞ。キリト曰く、今日は最高の気象パラメータだから迷宮区に潜るのは勿体ないだ。」

ミト「なるほどね。」

ミトは微笑みながら、俺の隣に座った。

ミト「ところで、カルムは寝ないの？」

カルム「寝たいのはやまやまなんだが、睡眠PKの可能性があるからな。」

『アンチクリミナルコード有効圏内』、通称圏内では、プレイヤーは他のプレイヤーにはダメージを与えられない。

一応、ソードスキルは使えるが、市街地の戦闘訓練で使うだけだ。

ノックバックは発生するが。

だが、デュエル中はダメージが入る。

睡眠しているプレイヤーの腕を動かして、デュエル状態にして殺す。

それが睡眠PKだ。

俺はその危険性を考えて寝ていない。

ミト「カルム、眠そうよ。」

カルム「……………分かるんですね。」

ミト「カルムの事だからね。」

何か、俺の思考回路が読まれてるようで少し怖いな。

あと、そんな恥ずかしいセリフをよくもまあ言えたもんだ。

何か照れる。

ミト「私が見てあげる。だから、寝ていいよ。」

カルム「良いのか？」

ミト「ええ。何なら、膝枕をまたしてあげても良いわよ。」

カルム「こんな公衆の面前で出来るか。」

ミト「あら残念。」

そんな揶揄う様な表情で言わないでくれ。

こつちが恥ずかしくなってくる。

カルム「まあ、お言葉に甘えて寝るわ。」

ミト「おやすみ。」

カルム「ああ。」

ミト side

そう言つてカルムは寝始めた。

前回よりは寝るのが遅いので、少しは疲労は取れてると思う。

それにしても、相変わらず寝顔が可愛いわね。

ミト「……………寝てるし、良いよね。」

私は少し魔が差して、カルムの頬をつつく。

結構柔らかいわね。

次第に面白くなつてきて、つづく回数を増やしていくと、カルムが少し動いた。

ミト（ヤバッ！起こしちゃった？）

だが、カルムは起きる事なく私の体に寄りかかった。

ミト「ちよっカルム!?!」

声をかけたけど、寝息を立てながら寝ていた。

ミト（寝てるのね。やっぱり疲れが取れきつてないよね。まあ、膝枕したくらいだし、今更か。）

疲れているのが分かってるので、そのままの状態にした。

道行く攻略組を眺めながら10分程すると。

アスナ「ミト、何してるのよ。」

あからさまに不機嫌なアスナがやってきた。

ミト「やつほ、アスナ。見ての通りにサボってるの。」

アスナ「ちよつと、貴女、ギルドの副団長なんですよ！自覚あるの!?!」

ミト「アスナもでしょ。それに、詰まりっぱなしじゃ、支障が出るでしょ。それよりも、今、カルムが寝てるから起こさないで。」

アスナ「カルム君？」

アスナが近寄ってカルムを見ると、呆れた様に溜息をつく。

アスナ「ミトだけじゃなくてカルム君まで？貴方達、攻略組としての自覚はあるの？」

ミト「そう言わないの。それに、そこにもう1人寝てる人居るから。」

アスナ「え?……あのままで!」

アスナは更に不機嫌になったのか、キリトに近づいていく。

キリトもアスナが近づいた事に気がついたのか起きた。

キリト「何だ、アンタか。こんな所で何してんだよ。」

アスナ「アナタこそ!こんな所で昼寝してるんだったら、攻略したらどうなのよ!」

キリト「今日のアインクラッドの気象パラメータは、最高の季節に最高の気象設定だ。」

そんな日に迷宮区に潜るなんて勿体無い。」

アスナ「アナタね!こんなことをしている内に現実での私達の時間が失われるのよ

!」

キリト「でも、今はここが現実だ。今俺達が生きてるのは、アインクラッドだ。」

アスナの気持ちも分かる。

けど、キリトの言う通り、今私達が生きてるのはこの世界だ。

そんなに張り詰めてると、いずれ切れちゃう。

その時、アスナの横を風が吹いて、頬を撫でる。

キリト「ほら、良い風に、良い日差し。……最高だな。」

アスナ「天気なんて毎日一緒でしょ。」

キリト「アンタも寝てみれば分かるよ。」

キリトに言われたアスナが寝ると、ものの数分で寝た。

ミト「お守りが3人か。」

少し溜息をついて、笑った。

それから数時間後、正午ごろになると、キリトが起きて、隣にアスナが寝ているのに驚いて、距離を取った。

私はキリトに声を掛ける。

ミト「どうなの？起きたら美少女が隣に居て。」

キリト「ミト……。何してんだ？」

ミト「そうね。カルムの枕って感じ？」

カルムに寄り掛けられたまま、私は笑う。

そんな私を横目に、アスナを見る。

キリト「……疲れてんだろ？」

ミト「まあね。自分だけじゃなく、他のギルドメンバーのレベル上げを手伝ってる。

それが深夜までだよ。それで疲れない筈がない。私も付き合ってお陰で寝不足よ。そういう訳で寝る。護衛は残りの2人と私を纏めてよろしく。」

私はキリトに押しつけて寝た。

キリト side

俺はミトから護衛を引き継いだので、長期戦になる事を覚悟して、飲み物を出す。そして、夕日が差し始めた頃。

アスナが起きそうだった。

アスナ「うにゅ……。」

そんな謎言語を言いながら、覚醒し切っていない頭で周囲を見渡した。

アスナは、夕日、カルムとミトが互いに寄り添って寝ている姿、そして俺を見た。

俺を見た途端、色んな感情が横切った。

アスナ「な……アン……どう……！」

キリト「おはよう。よく寝れたか？」

それを聞いた途端、レイピアに手を掛けたのを見て、俺は石垣に身を隠した。

だが、攻撃される気配は無く、ぎりぎり歯を食いしばっていた。

アスナ「……ゴハン一回。」

キリト「え？」

アスナ「ゴハン、何でも幾らでも一回奢る。それでチャラ。どう？」

アスナは、圏内PK行為からガードする為だけでなく、日頃の精神的疲労を回復させる為に、寝られるだけ寝かせてやろうとした事に気づいた様だ。

キリト「なら、57層の主街区に、NPCレストランにしてはイケる店があるから、そこ行こうぜ。」

アスナ「……………良いわ。」

キリト「よし、決まり！ほら、カルム、いい加減に起きろ。」

カルム「ん？あれ？夕方まで寝てたのか。ミトに寄りかかっていたのか。悪い事したな。」

キリト「そりやもう、仲良さそうに。」

カルム「揶揄うな。ミト、起きろ。」

ミト「んんん。まだ寝たい……………」

起きないな。

なら、しょうがない。

キリト「今ならアスナが奢ってくれるってさ。」

ミト「アスナの奢り!？」

アスナ「奢るのは彼だけ!」

そうして、俺達はNPCレストランへ。

カルムside

しっかし、よく寝れたな。

俺はそう思いながら、キリト達と共に第57層へと向かう。だが、結構目立つだろうな。

何せ、現在、血盟騎士団の第一副団長にして、『閃光』の異名を持つアスナ。

そして、第二副団長にして、『紫鎌』の異名を持つミト。

その2人はファンクラブまである程の人気だ。

噂によると、とあるギルドが録音結晶を使ったCDデビューを申し込んだが、レイピアと鎌を突き付けられて退散したらしい。

その結果、中層プレイヤーも2人を見る。

そして、その2人の横を歩いている、『黒の剣士』キリトと、『紫紺の剣士』の俺を見て、目を剥く。

キリトとアスナは結構気にしていたが、俺とミトは気にせずに世間話をしていた。

しばらくして、肝心のレストランに到着する。

席に着くと、アスナが声を出す。

アスナ「……………ありがとう。護衛してくれて。」

キリト「あ、いや、まあ、どういたしまして。」

キリト、囁んでるぞ。

そんなキリトに、アスナが吹き出す。

アスナ「あんなにたっぷり寝たの久々かも。最近はず3時間しか眠れないし。」
キリト「そうなのか？」

アスナ「うん。他の団員のレベル上げとか考えているとね。」
気になったので、ミトにも聞いてみる。

カルム「そうなのか？」

ミト「うん。はつきり言つて、ウチで一番働いてるのはアスナなのよ。」

カルム「なるほどな。それはそうと、ノーチラスは元気か？」

ミト「ええ。前よりも更にやる気になってて、私の部隊の部下。」

カルム「そっか。」

あいつも、乗り越えられたんだな。

そんな会話をしていると、サラダがやってくる。

ドレッシング等が欲しいと言っていると、女の悲鳴が。

???「きゃああああ!!」

「!!!」

俺達はずぐさま外に出て、広場に向かうとそこには、ショートスピアが刺さっている
1人の男性が。

しかも、どういう訳か、貫通継続ダメージが入っていた。

キリト「何してる！早く抜け!!」

だが、恐怖からか、抜けなかった。

カルム「ミト、アスナ！教会に行ってくれ！もしPKなら、プレイヤーがいる筈だ！」

ミト「分かったわ！」

アスナ「こつちよ、ミト！」

2人は教会の中へ。

カルム「キリト、俺が縄を斬る！お前は受け止めてくれ！」

キリト「分かった！」

俺は、つい最近習得した壁走りを使って、教会の壁を登る。

ブレイラウザーを出して、斬ろうとするが。

???'「……………っ!!」

一歩遅かった様で、何かを口にしていたが、鐘の音で聞こえなかった。

そして、爆散した。

俺は、ブレイラウザーを出したまま着地した。

だが、違和感を感じていた。

カルム（何だ……………!?この違和感は……………!?）

こうして、後に圈内事件と呼ばれる事件が起こった。

第12話 調査

フルプレート上の男が消滅した時に、少し違和感を感じていた。

カルム（プレイヤーの死亡エフェクトみたいだけど、何かが違うかもしれないな……）。

だが、それをひとまず置いて、考える。

死亡したのなら、これはデュエルPKの可能性がある。

それを見つければ犯人がすぐに分かる。

だが、ウィナー表示は、30秒すると消えてしまう。

キリト「皆！デュエルのウィナー表示を探してくれ！」

キリトも同じ事に思い至ったのか、周囲に向かって叫ぶ。

だが、発見の声は上がらない。

アスナ「建物の中には誰もいないわ！ミトも他の部屋を探してる！」

キリト「アスナ！ウィナー表示はあるか!？」

その声にあすなも周囲を探すが。

アスナ「ダメ！ウィナー表示もシステムウィンドウもない！」

カルム「……………どういう事だ？」

そうして、30秒が過ぎて、キリトは周りのプレイヤーに動かないように指示をして、俺はその見張りにつく。

ミトが近づいてきた。

カルム「どうだった？」

ミト「教会内に居たのは、NPCのシスターと神父だけだった。」

カルム「という事は、事情聴取も無理か…………。」

ミト「何がどうなってるのよ。」

カルム「分からん。だけど、放ってはおけない案件だな。」

そう答えると、教会からキリトとアスナが出てきた。

アスナ「しばらくは、迷宮区の攻略は一旦止めるわ。」

キリト「もし、圏内でのPKが可能なら、放ってはおけない。」

ミト「私達も協力するわ。」

カルム「ラフコフの作業なら、尚更放ってはおけないな。」

キリト「分かった。すまない、さっきの出来事を最初から見てた人がいるなら、話を

聞かせて欲しい！」

キリトがそう呼び掛けると、1人の女性プレイヤーが怯えながら出てきた。

そんな女性に、アスナが優しく声を掛ける。

アスナ「ごめんなさい。怖い思いをしたばかりなのに。あなたの名前は？」

ヨルコ「あ……あの、私は『ヨルコ』って言います。」

カルム「そうか。なら、最初の悲鳴も君が？」

ヨルコ「は、はい。……私、さつき、殺された彼とは友人で、彼の名前は『カインズ』。

昔、一緒にギルドに所属してたんですけど、一緒にご飯を食べる話だったのに、こんな事に……！」

キリト「その時に、誰かを見なかったか？」

ヨルコ「……一瞬でしたけど、後ろに誰かが……居たような……。」

ミト「その人影に、覚えは？」

その問いに、ヨルコさんは首を横に振った。

キリト「その、嫌な事を聞かなくても、心当たりはあるのかな？……彼が、誰かに狙われる理由を。」

その問いにも、首を横に振った。

その後、ヨルコを宿屋まで送り届けて、攻略組をメインにした、20人弱が集まって貰った。

今回の事件の一連の出来事、未知のPKの可能性を伝えた。

情報屋を通じて、頼む事に。

俺も、ジエイクにメツセージを送った。

「ジエイクからも、了承のメツセージが届いた。

ひとまず、その場は解散になった。

カルム「さて、これからどうするか。」

ミト「まずは、手持ちの情報を漁りましょう。」

キリト「今、俺達が見つけた情報は、このロープとスパアだけど……。」

アスナ「多分全員、鑑定スキルなんて上げてないよね。」

その発言に、俺達は弱った。

アスナ「一応、友達に鍛冶師がいるんだけど、多分忙しそうだから無理。」

キリト「なら、エギルにでも頼むか。」

カルム「いや、エギルも今の時間は忙しいだろ。なら、アイツに頼むか。」

キリト「アイツ？アイツは苦手なんだよな。」

ミト「文句を言わない！」

俺はメツセージを送る。

すぐに返信が来た。

カルム「問題無いだど。」

キリト「じゃあ、俺とアスナは、黒鉄宮に行つてカインズの死亡日と原因、時間を確認してくるぜ。」

ミト「なら、私とカルムで、彼のところに行つてくる。」
アスナ「分かつたわ。」

そうして、第48層の主街区、リンダースへと向かつた。

カルム「圏内でのPKか。」

ミト「気になるの？」

カルム「ああ。それに、違和感があつた。」

ミト「違和感？」

カルム「なんて言うか、よく分からん。」

ミト「そう。」

カルム「兎に角、急ぐぞ。」

ミト「ええ。」

そうして、とある一軒家の前に着いた。

ミト「ここね。」

カルム「ああ。」

俺はドアをノックする。

すると、1人の男性が出て来た。

カルム「やあ、ラット。」

ラット「キリトと一緒に思ったが、『紫鎌』の副団長と一緒に。どうした？」

ミト「この人がそうなの？」

カルム「ああ。」

彼はラット。

リンダースに於ける、最高の2人の鍛冶師の内の1人だ。

もう1人は、アスナの親友でもあるリズベットという鍛冶師だ。

噂によると、付き合っているのではと言われている。

そして、俺と同じ様な武装である、ギャレンラウザーというボウガン使いだ。

ラット「何だ？『紫鎌』の副団長と何をしているんだ？デートか？」

カルム「デートでこんな所に来るか。それに、お前はリズベットという鍛冶師と付き

合っているのかよ？」

ラット「……ノーコメントで頼む。」

マジか。

アスナに何て言ったら良いんだ？

ミト「用件を言いなさいよ。」

カルム「おつとそうだった。この二つを鑑定してほしい。」
俺は、スピアとロープを取り出した。

ラット「これは？」

カルム「とある事件の証拠品だ。」

ラット「……………詳しく話を聞かせろ。」

俺は、ラットに詳細を話した。

ラット「圏内で殺人か。本当にデュエルじゃないんだよな。」

カルム「ああ。ウイナー表示も無かったしな。」

ラット「なるほどな。まあいい。兎に角見せて貰おう。」

ロープから鑑定し始めた。

ラット「これは、ただの汎用品だな。そこら辺にあるNPCショップで買える。」

ミト「そうなのね。」

カルム「まあ、ロープの方には期待していないからな。それよりも本題はこっちだ。」

スピアを鑑定し始める。

ラットも少し、嫌そうな表情をしたが。

ラット「……………これは、プレイヤーメイドだな。」

カルム「本当か！」

ミト「それで、製作者は!？」

ラット「落ち着け。製作者は『グリムロック』。綴りは、『G r i m l o c k』だ。」
カルム「知り合いか？」

ラット「いや、俺も聞いた事が無い。恐らく、そこまで有名じゃないな。まあ、自分や仲間の為に上げるやつもいるから、その類だろ。」

ラットがそう言つてスピアを俺に返す。

ミト「名前が分かつただけでも、一歩前進ね。あとはグリムロックを探せば……。」

ラット「だが、コイツが何の為に貫通継続を付与したのかは分からん。モンスター相手には何の効果も無いしな。」

確かにそうだ。

モンスターは恐怖しないので、何の意味も持たない。

という事は、十中八九PKの為だ。

カルム「殺しに関する恐れが薄いのか、グリムロック自身がレッドギルドに所属しているのか……。どちらにせよ、危ないのは確かだ。」

ミト「そうね。ところで、その武器の固有名は何なの？」

ラット「名前は『ギルティソーン』……罪のイバラって意味だな。」

カルム「罪のイバラか……。」

何か、見せしめみたいな名前だ。

一体、何のために……。

ミト「カルム？」

カルム「ん？あ、すまん。考え事してた。」

ミト「なら良いけど……。」

カルム「すまん。助かった、ラット。これはほんのお礼だ。」

ラット「ああ。早く事件を解決しろ。」

俺はラットにコルを渡した。

俺とミトは外に出ようとするが。

ラット「副団長さん、ちよつと話良いか？」

ミト「私？分かった。」

カルム「なら、外で待ってるわ。」

俺は一足先に外へと出た。

ミト side

何か、呼び止められた。

ミト「どうしたの？」

ラット「いや、アイツを頼む。」

ミト「カルムを？」

ラット「アイツはいざとなったら、他者を守る為に自分の命を犠牲にしかねない。」

ミト「……………!!」

確かに、第一層のボス戦でも、自分を顧みずにディアベルを助けた。

しばらくは見てないけど、それをする可能性がある訳ね。

ラット「アイツを見張りたいが、俺も仕事があるからな。見張れない。だから、これはアイツの親友としての俺からの依頼だ。アイツの側に居てくれ。」

ミト「……………大丈夫よ。カルムは1人には絶対にさせないから。それに、カルムに言いたい事があるのよね。」

ラット「ありがとう。いやあ、アイツも良い彼女を持ったもんだ。アンタなら信頼できさる。」

ミト「そう……………え？」

ラット「いや、アンタ、アイツの彼女じゃないのか？」

ミト「いやいやいや、カルムとはまだそんな関係じゃ無いから！」

この人はいきなり何を言い出すのよ!!

ラット「いや、アンタ、アイツと結構仲良さそうだし……………そうか。まだか。いずれはそうなるってか。」

ミト「!!とにかく！協力ありがとうね！」

ああ！変にそんな事言われるから、ますます気になっちゃうじゃない！

ラツト「……………まあ、頑張れよ。未来のアイツの彼女さん？」

そんな事を言った事に気づけなかった。

カルム side

何か、顔を赤く染めたミトが出て来た。

カルム「どうした？何か顔が赤いぞ。」

ミト「これは気にしないで。」

カルム「お、おう……………。それと、キリトから連絡が来た。」

ミト「どうだつて？」

カルム「カインズは本当に死亡が確認された。全ての要素が一致していた。」

ミト「じゃあ……………！」

カルム「ああ。これはれっきとした殺人だ。放つてはおけない！」

ミト「うん……………！」

そうして、明日に調査する事にして、俺達は転移門広場に向かうと、多数のプレイヤーに取り囲まれた。

よく見ると、全員『聖竜連合』のギルドメンバーだった。

カルム「聖竜連合の皆さんが、何の御用で？」

???「それは俺が話す。」

リーダー格の男が出て来た。

彼の名前はシュミット。

ボス戦の攻略会議で、何度か見た。

カルム「物騒だけど、何だ？」

シュミット「今日の夕方に起こった事件で、本当にデュエルじゃ無かったのか？」

カルム「ああ。」

シュミット「殺されたプレイヤーはカインズだと聞いたが、本当か？」

ミト「ええ。友人の証言やキリトにアスナも黒鉄宮で確認してる。」

シュミットの表情が強張った。

なるほど、シュミットとカインズは知り合いつて訳だ。

カルム「知り合いなのか？」

シュミット「……言う必要は無い。」

カルム「おいおい、そっちの質問は答えさせて、こっちの質問には答えないつてフェ

アじゃないだろ。」

シュミット「アンタらには関係ない！そもそも、警察じゃないだろ！」

なるほど、これはシュミット個人の事情という事だな。

シュミット「アンタが持つてるPKに使われた凶器を渡して貰おう。」

ミト「ハア!? 第一、システム上でもカルムの所有物なんだから、タダで寄越せなんて烏澁がましいにも程があるでしょう!」

カルム「良いよ。どうせ、調べ終えた物だし。」

俺はギルティソーンを取り出して、地面に突き刺した。

カルム「ついでに教えてやるよ。その名前はギルティソーン、罪のイバラだ。製作者は、グリムロックだ。」

その言葉に明確に動揺した。

シュミットは、槍を受け取り、乱暴にストレージに入れる。

シュミット「あまりコソコソと嗅ぎ回らない事だな。行くぞ!」

そう言って、撤退していった。

ミト「カルム。あの様子じゃあ……。」

カルム「ああ。十中八九何かあるな。シュミットとカインズ、そしてグリムロックのこの3人の間には。」

第13話 それぞれの調査

翌日、俺とミトは朝9時に転移門前のカフェに向かうと既にキリトとアスナが来ていた。

血盟騎士団としてではないのか、ミトとアスナは私服で来ていた。

俺とキリトは、2人に見惚れていた。

一方の俺達は、そこまで地味ではないが、2人の奴を見ると、見劣りする。

キリト「なあカルム？俺達今から、あの美少女達と一緒に行動するのか？」

カルム「そうだな。こんな事なら、もうちよい私服に気を使うべきだったな。」

そんな事をキリトと話しながら合流し、昨日の出来事を話す。

アスナ「聖竜連合が？」

カルム「ああ。あの槍を搔つ払った。搔つ払ったのはシュミット。死亡したカインズに、グリムロックの名前に凄く動揺してた。」

ミト「そうね。槍を受け取る時も酷く怯えてた。まるで何かを知ってるみたいに。」

キリト「そうか……。」

アスナ「そのシュミットが犯人って線は？」

キリト「それはないだろう。シユミットが犯人なら、足がつく様な真似はしない。あの槍は犯人からのメツセージじゃないか？」

カルム「それに、武器の名前はギルティソーン。罪のイバラつて所からも、犯人がシユミットにメツセージを残した意味合いだろうな。」

アスナ「じゃあ、シユミットは、過去に何かあつてそれに狙われてるって事？」

ミト「そうでしょうね。現場に残った槍が意味してるメツセージは、『次はお前だ。』つて所が妥当じゃない？」

俺達は一通りの情報整理を終えて、ヨルコさんの元へ。

ヨルコさんは、目に見えて疲労していた。

アスナ「ごめんなさい、お友達が亡くなったばかりなのに……。」

ヨルコ「いえ、大丈夫ですから……。」

本当に大丈夫なのか？

アスナとミトの私服姿を見て、ヨルコさんは目を輝かせた。

ヨルコ「うわあ……！その私服つて、アシュレイさんのオーダーメイドなんですか!？」

カルム「アシュレイ?」

キリト「誰だ?それ。」

ヨルコ「知らないんですか!？」

うん、知らない。

だって、俺は私服にはそこまでこだわらないタイプだもん。

だからと言って、ダメな人間を見るような視線はやめてくれ。

ヨルコ「アシュレイさんは、アインクラッドで最初に裁縫スキルをコンプリートした人で、カリスマお針子として有名なんです！しかも、最高級素材を持ち込まないと作ってくれないって事で有名で、中々作って貰えないんですよ!!」

「へえ〜〜〜!!」

それは確かに凄いな。

ヨルコさんも、年相応なはしやぎ方をして良かった。

気になった俺はミトに聞いてみた。

カルム「そうなのか？」

ミト「ええ。最高級素材を集めるのは結構苦労するわよ。」

カルム「ふうん……………」

なら、俺も集めて頼もうかな。

そうして、俺達は昨夜に行ったレストランに移動して、調査結果を報告した。

キリト「まず報告だけど、カインズは確かに死んでたよ。死亡日等が全て合致した。」

ヨルコ「……………そうですか。すみません、わざわざ確認して貰って……………」

カルム「早速で悪いんだが、ヨルコさん。シュミットとグリムロック。この2人を知ってるか？」

ヨルコ「……………知ってます。2人とも、私が昔所属してたギルドの仲間です。」
やはりか。

という事は、そのギルドで何かあったな。

カルム「ヨルコさん、俺達は今回の事件が復讐、もしくは制裁の意味合いと睨んでる。申し訳ないけど、何か事情は知らないか？」

ヨルコ「……………一つあります。昨日はお話し出来ませんでした。でも、無関係だと思ってる……………わかりました。話します。」

そうして、ヨルコさんが語り出した。

ヨルコとカインズ、シュミット、グリムロックが所属していたギルド、『黄金林檎』。ゲーム攻略が目的ではなく、生きる事を目的としたギルドで、互いに協力してたそう
だ。

リーダーの名前は『グリセルダ』。

とても強くて、賢く、美人の女性だそうだ。

半年前、レアな指輪を手に入れたらしいが、それがギルド崩壊のきっかけだそうだ。

最初は、ギルド内でその指輪をどうするか揉めたそうだ。

ギルドの為に使うか、売却してコルにするかの2つで。

その後、多数決の結果、売却になって、リーダーのグリセルダが最前線の競売屋に委託しようと思かけた。

しかし、いつまでも帰ってこず、黒鉄宮に確認して、死亡した事が判明。

ヨルコ「死亡時刻はグリセルダさんが指輪を持って最前線の層に上がった夜中の1時でした。死亡原因は、『貫通継続ダメージ』です。」

ミト「そんなレアアイテムを持って圏外に出るのはあり得ない。という事は……。」

カルム「恐らく、睡眠PKの被害にあったんだらうな。」

アスナ「半年前なら、手口が広まる前で、街の公共スペースで野宿する人もいたわ。」

キリト「偶然……じゃ無いだらうな。」

ヨルコ「誰がやったのか分からなくて、疑心暗鬼に陥った結果、ギルドは崩壊しました。」

キリト「ヨルコさん、辛い事を何度も聞いてすまない。指輪の売却に反対したのは誰なんだ？」

ヨルコ「カインズにシュミット、そして私です。反対した理由は2人とは違います。が。」

ヨルコさん曰く、カインズとシュミットは前衛として使いたいと言って、ヨルコさん

はカインズの意志を尊重したそうさ。

その後、グリムロックの事も聞いて、お開きになった。

俺達はヨルコさんを宿屋へと送り、話し合いをする事になった。

カルム「さて、本当なら、朝の時に言うべきだったんだろうけど……。」

ミト「？」

カルム「その、服、凄く似合ってますよ。」

ミト「あ、ありがとうね。」

それを聞いたミトは機嫌が良くなったのか、鼻歌を歌い出した。

なお、キリトもアスナの服を褒めたが、怒られたそうさ。

アスナ「それで、どうするの？」

騎士服に着替えたアスナがそう切り出した。

ちなみに、ミトも騎士服に着替えていた。

カルム「俺達に出来るのは、3つ。1つ目はグリムロックが何故、その槍を作ったのか、そして誰が依頼したのか。2つ目は残りの黄金林檎のメンツに接触してヨルコさんの発言の裏を取る。3つ目はカインズ殺害の手口検証。」

キリト「1つ目は無理だな。俺たち4人じゃ、探すのは効率が悪いし、もしグリムロックが犯人ならとつづくに隠れてるだろ。」

ミト「2つ目もね。ヨルコさんやシュミットの反応から、あまり触れられたく無いし、仮に矛盾する事があっても、確認できない。」

キリト「なら、3つ目か。……知識のある奴の情報欲が欲しいな。」

キリトの呟きに、アスナが反論する。

アスナ「そうは言っても、ヨルコさんには迷惑は掛けたくない。でも、信頼できて、尚且つSAOのシステムに詳しい人なんて……。」

キリト「あ。いるじゃん。アイツ呼ぼうぜ。」

アスナ「アイツって?」

キリト「ヒースクリフだよ。」

アスナ「ええっ!?!」

そうして、キリトとアスナがヒースクリフに確認を取り、俺とミトとはとある探偵事務所に。

ミト「ここは?」

カルム「ああ。半熟だけど、いい探偵だ。」

???「誰が半熟だ、この野郎!」

???「君は半熟に反応しすぎだ。」

俺が半熟と言うと、2人の男性が出て来た。

ミト「あの、あなた方は……?」

レイモンド「おう、俺はレイモンド。」

フィリップ「僕はフィリップだ。よろしく。」

レイモンドとフィリップ。

この2人は、俺の知り合いの探偵で、『アインクラッド探偵事務所』を開いている。

アルゴとジェイクと同じ立場かと言うと違く、アルゴとジェイクがクエスト関連なのに対して、2人は人間関係のトラブルを解決するらしい。

腕は良く、中層プレイヤーからは大分信頼されている。

ちなみにフィリップ曰く、レイモンドという名前は、好きなハードボイルド小説を書いた小説家から取られたらしい。

レイモンド「それで? 紫鎌の副団長と一緒に来るとはな。」

カルム「ああ。例の依頼は上手く行ってるか?」

フィリップ「ああ。立ち話もなんだし、中に入りたまえ。」

ミト「お邪魔します……。」

中は結構整頓されている。

レイモンド「じゃあ、これが依頼された報告書だな。」

カルム「サンキュー。ほい、報酬。」

ミト「それで？何を依頼したのよ？」

カルム「グリムロックの良くいる位置だ。」

ミト「え!？」

レイモンド「人を探すのが、探偵だからな。」

ファイリップ「君はもう少しハードボイルドになれないのかい？」

レイモンド「おい、ファイリップ！俺はハードボイルドだろうが！」

いつもの喧嘩をし始めたのを放っておいて、俺はグリムロックの良く現れる位置を確認する。

第20層の主街区の小さな酒場か。

カルム「いつもありがとうな。レイモンド、ファイリップ。」

レイモンド「おう。」

ファイリップ「ああ。」

カルム「じゃあ、行くか。」

ミト「ええ。」

ファイリップ「すまない、副団長さん。少し話があるんだけど。」

ミト「私に？」

カルム「じゃあ、外で待ってるな。」

何かデジャブを感じるが、俺は外で待つ事に。

ミト side

私もカルムと外に出ようとする、フィリップさんに呼び止められた。

ミト「何ですか？」

フィリップ「君ってさ、カルムの恋人かい？」

ミト「!!？」

レイモンド「おいフィリップ！いきなり初対面の相手に何言ってるんだ!!」

フィリップ「実に気になってね。結構カルムと仲良さそうだし。」

ミト「い、いや。私は、まだ恋人じゃないんだけど……!!」

何かこの展開にデジャブを感じる！

フィリップ「そうなのか。」

レイモンド「いや、分かんねえぞ。まだ、だし。そうか。まだなのか。」

ミト「あの！用事も済んだのなら、もういいですか!？」

フィリップ「ああ。呼び止めてすまない。」

レイモンド「じゃあな、バイオレットガール？」

ミト「そうね、ハーフボイルドさん？」

レイモンド「ハーフじゃねえよ！ハードボイルドだアアア!!」

そんな叫び声を聞きながら、探偵事務所から退出した。

第14話 再度の圈内事件

レイモンドとフィリップから、グリムロックがよく行く店を聞いた俺とミトは、ヒースクリフから意見を聞いたキリトとアスナと合流した。

カルム「さて、これからどうするか。」

キリト「て言うかカルム。ヒースクリフから伝言を預かってるぞ。」

カルム「伝言？まあ予想はつくけど、一応聞いておくか。……………それで？」

キリト「ヒースクリフ曰く、『カルム君。まだ血盟騎士団には来ないのかね？』だそう
だ。」

カルム「やっぱりか……………」

アスナ「ていうかカルム君。いつの間に団長からスカウト受けたの？」

ミト「うん。カルムがビートルアンデッドって奴を倒して、ブレイラウザーとかを手
に入れた時にね。」

キリト「どうするんだ？」

カルム「まだ、決心がつかん。」

アスナ「決心？」

ミト「どういう意味なの？」

カルム「それは追々話す。」

そんな事よりも圏内事件だ。

キリト「それで、どうするんだ？」

アスナ「なら、黄金林檎のレア指輪事件について知っている人に聞きましょう。」

カルム「ああ。」

ミト「シユミットに聞くのね。」

そうして、俺達は第56層にある聖竜連合のギルド本部へと向かう。

シユミットは恐らく、本部に籠城していると思われ、門番に対しての交渉は、アスナとミトに任して、俺達は待機している。

キリト「なあカルム？」

カルム「うん？」

キリト「お前は何で、血盟騎士団への誘いを保留の形にしてるんだ？」

カルム「……まだその時じやないと思ってるからさ。」

キリト「そうなのか……。」

しばらくすると、シユミットが現れて、俺とキリトも合流して、話をする事に。

シユミット「誰から聞いた？」

カルム「ん？」

シユミツト「指輪の件を誰から聞いたんだ？」

キリト「元黄金林檎のメンバーからだ。」

キリトの返答に、シユミツトは顔を青ざめる。

シユミツト「……………名前は？」

カルム「……………ヨルコさんだ。」

俺は一瞬迷ったが、ミトやアスナも頷いたので明かす。

シユミツト「ヨルコ？……………そうか。そうだったんだな。」

シユミツトは、安堵するかのように顔色が戻り、息を吐く。

キリト「その様子だと、ヨルコさんも指輪の売却に反対してたのは知ってたんだな。」

シユミツト「ああ。」

カルム「だからこそ、同じ売却反対派のカインズが殺されたと知って、自分も殺されるのではと思ったんだな。」

俺がそう言うと、シユミツトは再び顔を青ざめる。

ミト「一応言っておくけど、私達は黄金林檎のリーダー、グリセルダさんを殺した犯人を探してる訳じゃない。昨日の事件を起こした犯人、そのトリックを知りたいだけなの。」

アスナ「シユミット、グリムロックはどこにいるの？ 仮にグリムロックが犯人じゃなかったとしても、あの槍を作った人だから、どうしても彼から話を聞きたい。」

シユミット「し、知らない！」

シユミットが大声で叫んだ。

まあ、グリムロックのよくいる場所は、こつちでも調査済みなんだが。

カルム「アスナ、大丈夫だ。グリムロックがよく行く店は調べてある。」

キリト「レイモンドとフィリップか。」

アスナ「そうなの？」

シユミット「……………頼みがある。」

ミト「何？」

シユミット「ヨルコと話をさせてくれ。」

シユミットはそう頼み込んだ。

俺達は、少し話し合いをする事にした。

カルム「シユミットとヨルコさんを話させて大丈夫なのか？」

キリト「俺達が目を離さなければ大丈夫じゃないのか？」

ミト「なら、何でシユミットは今頃、ヨルコさんに出会わせるなんて言うんだろ？」

アスナ「さあ……………実は片思いしてた、とかじゃ……………無いわよね、うん。」

キリト「えっ、マジで。」

キリトがシュミットを見ようとするのを制止する。

カルム「違うに決まってるだろ。」

ミト「とにかく、アスナ。ヨルコさんにメッセージをお願いします。」

アスナ「分かった。」

アスナがメッセージを送ると、返ってきてOKだそうだ。

シュミットにOKと言うと、シュミットは安堵した様な表情を出す。

そうして、俺達は第57層主街区マーテンへと転移して、ヨルコさんが泊まっている部屋へ。

カルム「まず、安全の為に確認だ。2人とも武器は装備しない事、そしてウインドウを開かない事を守って欲しい。」

ヨルコ「……………はい。」

シュミット「解っている。」

元黄金林檎のメンバーの2人は、しばし無言のまま視線を見交わしていた。

さて、どう動くのか。

そう思っていると、ヨルコさんが口を開いた。

ヨルコ「……………久しぶり、シュミット。」

シユミット「……ああ。もう2度と会わないだろうも思ってたけどな。座っていいか。」

ヨルコが頷いて、シユミットが座る。

俺とミトは、シユミットとヨルコさんの西側の方に立ち、キリトとアスナは、東側に立った。

俺は2人を見ながら、周囲に警戒を張り巡らせていた。

何やら、ギスギスした会話だが、俺は部外者なのだ。

やたらに首を突っ込む訳には行かない。

それにしても、シユミットはともかく、ヨルコさんも結構着込んでるな。

シユミット「グリムロックの武器でカインズが殺された。その4人からそう聞いたが、本当なのか?」

ヨルコ「本当よ。」

何やら、不穏な空気だな。

シユミット「何で、何で今更カインズが殺されるんだ!?もしかして、グリムロックが売却に反対した俺たち3人を殺そうとしてるのか!?……じゃあ、俺やお前もターゲットにされてるのか!?!」

ヨルコ「彼に槍を作らせたのは他のメンバーかもしれない。もしかしたら、グリセル

「ダさん自身の復讐かもしれない。……だって、圏内で殺人なんて、幽霊じゃなきゃ不可能でしょ。」

幽霊ね……。

プログラムで動くゲーム内でそんな事が起こるのかと思ったが、実際に起こっているので、鼻で笑えない。

俺達は顔を見合わせた。

ヨルコ「私ね、昨夜、寝ないで考えたの。結局のところ、リーダーを殺したのは、ギルメンの誰かであると同時に、メンバー全員でもあるのよ。あの指輪をドロップした時、投票なんかしないで、リーダーの指示に任せれば良かったんだわ。ううん、いつそ、リーダーに装備させれば良かったのよ。剣士として一番実力があつたのはリーダーだし、指輪の能力を一番活かせたのも彼女だわ。なのに、私達は皆、自分の欲を捨てられずに、誰も言い出さなかった。」

ヨルコさんはそう言いながら、窓の方に、その姿に俺は気圧されながら、違和感を感じていた。

ヨルコ「ただ一人、グリムロックさんだけはリーダーに任せると言ったわ。あの人が自分の欲を捨てて、ギルド全体の事を考えた。だからあの人には、多分私欲を捨てられなかった私達全員に復讐して、リーダーの敵を討つ権利があるんだわ……。」

しばらく沈黙が続いたが、シユミットがそれを破った。

シユミット「……………冗談じゃない。冗談じゃないぞ。今更……………半年も経ってから、何を今更……………」

カルム「シユミット……………」

シユミット「お前はそれでいいのかよ、ヨルコ！今まで頑張つて生き抜いてきたのに、こんな、訳も解らない方法で殺されていいのか!？」

俺達全員の視線がヨルコさんに集中する。

ヨルコさんも言葉を紡ごうとしたが、その瞬間に、とん、という乾いた音がした。まさかと思ひ、ヨルコさんの背中を見ると、一本のダガーが。

そして、ヨルコさんが窓の奥へと傾いた。

アスナ「あつ……………」

ミト「まずい……………」

その2人の喘ぎを漏らしたと同時に俺とキリトは飛び出して、ヨルコさんの体を引き戻そうとするが、届かずにヨルコさんは音も無く宿屋の外へと落下していく。

キリト「ヨルコさん!!」

カルム「嘘だろ!?!」

そうして、ヨルコさんはポリゴンとなり、そこにはダガーのみが残っていた。

有り得ない!!

そんな思いが俺にあった。

宿屋はシステムの保護されている。

それなのにも関わらず、ヨルコさんは殺されてしまった。

宿の向かいの屋根を見ると、そこには、1人の人間がいた。

キリトも見えたようで。

キリト「野郎っ……………!!」

カルム「逃すかっ……………!!」

キリト「アスナ、後は頼む!!」

カルム「ミトも頼む!!」

アスナ「キリトくん、ダメよ!」

ミト「カルムも戻って!!」

そんな悲痛な叫び声を聞きながら、俺とキリトは犯人を追跡する。

犯人は、こちらを攻撃する訳でもなく、そのまま疾走していく。

すると犯人は、転移結晶を取り出していった。

カルム「転移する気か!?!」

キリト「くそっ!」

俺達はピックを投げるも、犯人の方が早く転移結晶を使えたようで、システム障壁に阻まれる。

ならば、行き先だけでもと聞こうとするが、5時の鐘の音で分からない。

そうして、逃げられた。

俺達は、ダガーを回収して、宿屋へと戻っていった。

アスナとミトは武器を取り出していた。

アスナ「ばかつ、無茶しないでよ！」

ミト「本当にそうだよ!!」

カルム「すまん。逃す訳には行かなかった。」

ミト「それで、どうなの？」

キリト「レポートで逃げられた。誰なのかも分からなかった。」

その後、シユミットが怯えてしまい、黄金林檎のメンバー全員の名前を書いてもらって、聖竜連合本部へと送り届けた。

そうして、俺達はグリムロックがよく訪れるレストランへと向かっていった。

第15話 幻の復讐者

シユミットside

何故、こうなったんだ。

現在、ヨルコとカインズが赤目のザザにエストツクを突きつけられ、俺の方には、ジョニーブラックにラフコフ頭首のPOHが居た。

どうしてこうなったのかと、先程までの行動を思い出す。

聖竜連合の本部に、キリト、アスナ、カルム、ミトの4人に送ってもらった後も、鎧を解除する気になれなかった。

しばらくして、俺はグリセルダの墓標の前に向かった。

赦しを乞う為に。

グリセルダの墓標に着いて、懺悔していると、死んだ筈のヨルコとカインズが現れた。それに説明していると、いきなり麻痺状態になった。

??? 「ワーン、ダウーン。」

そんな無邪気な声が降ってきて、視線を上げるとそこには、1人のオレンジブレイヤーがいて、ヨルコとカインズの方にも、もう1人いた。

この2人は、ジョニー・ブラックに、赤目のザザだ。という事は、あいつも……………!

嘘だろう、やめてくれ、冗談じゃない。

そんな思いとは裏腹に、もう1人現れた。

シユミット「……………P o H……………。」

そう、レッドギルド、ラフィン・コフィンの頭首、P o Hだった。

コイツに煽動されて、一部のプレイヤーがPKに走ってしまった。

P o H「Wow……………。確かに、こいつはでっかい獲物だ。D D Aのリーダー様じゃないか。」

そうして、現在に至る。

だが、何故ラフコフのトップ3が、こんな所に居るんだ。

そんな事を考えていると、馬の近づく音がしてきて、P o Hが残りの2人に警戒させる。

馬が後ろ足で嘶くと、プレイヤーが1人転げ落ちた。

更に、もう1人が飛んできた。

?????? 「いてっ!」

?????? 「何やってんだ。」

現れた闖入者は、黒の剣士・キリトに、紫紺の剣士・カルムだった。

カルムは、フュージョンジャックの状態になっていた。

キリトが馬のレンタルを解除して、走り去っていく中、2人が声を上げた。

キリト「よう、P o H。久しぶりだな。」

カルム「相変わらず、そんな悪趣味な格好をしてんだな。」

P o H「……貴様らに言われたくねえな。」

答えたP o Hの声は、隠しきれない殺気を孕んでいた。

ジョニー「ンの野郎共……！余裕かましてんじやねーぞ！状況解つてんのか！」

荒ぶる部下を抑えて、P o Hは右手の肉切り包丁の背で肩をとんとんと叩いた。

P o H「こいつの言う通りだぜ、キリトにカルムよ。格好良く登場したのは良いけど

な、いくらのお前らでも、俺達3人を2人で相手できると思ってるのか？」

そう、P o Hの言う通りだ。

状況は悪い。

なぜ、せめて閃光と紫鎌を連れてこなかった？

キリト「ま、無理だな。」

カルム「でも、色々と準備してるからさ、援軍が駆けつけるまでは耐えられるよ。そつ

ちこそ、攻略組30人を3人で相手出来るとでも？」

カルムに直前とまったく同じセリフを返されたP O Hが舌打ちして、2人を退がらせる。

P O Hが包丁をキリトとカルムに向けると。

P O H「……黒の剣士に紫紺の剣士。お前らだけはいつか必ず地面に這わせてやる。絶対にな。行くぞ。」

そう言つて、ラフコフは撤退していった。

カルムside

まさか、ラフコフのトップ3が来るとはな。

胸騒ぎがして来てみてよかつた。

キリトにシユミツト達を任せて、俺はウィンドウを出して、十数人を引き連れてこつちに急行中のノーチラスに「ラフコフは逃げた、街で待機していてくれ。」とメッセージを送つた。

ちなみに、P O Hとは、一度会っている。

さて、どうしたものか。

これから話すのは、ヨルコさんとカインズに衝撃を与える。

ちようどキリトが話し始めた。

遡る事30分前。

俺達が圈内事件の真相に気付いて、後は3人に任せようとした。

キリト「なあ……………」

アスナ「何？」

キリト「アスナ。お前、結婚した事あるの？」

キリトがそんな失礼な質問をすると、アスナに殴られかけた。

カルム「何やってんだ、キリト。」

ミト「……………」

あれ？何かミトの顔が赤い。

何も言っていないぞ。

アスナのストレージ共有化の言葉を聞いて、違和感を感じた。

そう言えば、結婚したら、ストレージが共有化されるんだったな。

だが、片方が死んだら、どうなるのか。

一応、ミトに聞いてみる。

カルム「なあミト？」

ミト「ええっ!? な、何!？」

カルム「何で慌ててんの？それよりも、片方が死んだら、アイテムはどうなる？」

ミト「えっ?……………まさか!!」

アスナ「どうしたの？」

キリト「何だ？」

ミト「片方が死んだら、もしかしたら、もう片方にアイテムが全部行くんじゃない？」

カルム「そういう事か……！」

アスナ「指輪は……奪われて、いなかった……？」

キリト「いや、その理屈で行けば、グリムロックこそが、指輪事件の黒幕だ……！」
現在。

キリトが事情を説明している中、ミトからメッセージが来て、キリトに伝える。

カルム「キリト。」

キリト「ああ……。動機までは分からないけど、本人が来てるから、聞いてみよう。」
丘の西側の斜面から、ミトとアスナに連れられてきたのは、まさしくグリムロックだ。
カーソルは全員グリーンだ。

グリムロックは、シュミット、ヨルコさん、カインズ、そして墓標を見て、口を開いた。

グリムロック「やあ……。久しぶりだね、皆。」

ヨルコ「グリムロック……。さん。あなたは……。あなたは、本当に……。」

大分動揺してるな。

まあ、無理もないか。

かつて仲間だった奴が自分達を消し去ろうとしたのだから。

背後のアスナとミトが武器を仕舞って、俺達の隣に来たところで喋り出した。

グリムロック「……………誤解だ。私はただ、事の顛末を見届ける責任があると思ってこの場所に向かっていただけだ。その2人に従ったのも、誤解を正しかっただけだ。」

否定したか。

確かに、P o Hに情報を流した証拠は無いな。

アスナ「嘘だわ!」

ミト「アンタ、プツシユの中で隠蔽してたじゃない。私達に看破されなければ動く気もなかったでしょ!」

グリムロック「仕方ないでしょう、私はしがない鍛冶屋だよ。この通り丸腰なのに、ラフコフの前に出る訳には行かないでしょう。」

まあ、その通りだな。

ミトとアスナを抑えて話し始める。

カルム「初めまして、グリムロックさん。俺はカルムで、こっちはキリト……………まあ、ただの部外者なんだけどね。」

キリト「確かに、アンタがラフコフと繋がる材料は無いな。」

カルム「でも、指輪事件は関係あるだろ、いや、主導している。指輪は、グリセルダさんが殺された時にアンタの手元に残った。」

キリト「それをアンタは換金して、半額をシユミットに渡した。これは犯人にしか取り得ない行動だ。故に、アンタが圈内事件に関わったのは、関係者の口封じだ。違うかい？」

俺とキリトの推理を聞いて、グリムロックが反論する。

グリムロック「なるほど、面白い推理だね、2人の探偵君。……しかし、残念ながら、ひとつだけ穴がある。」

キリト「何？」

カルム「アンタの言いたい事は分かるぞ。もし、グリセルダさんがその指輪を装備してたら、どうなんだって言いたいんだろ？」

グリムロック「察しがいいね。」

ミト「……！」

アスナ「あつ……！」

一応、想定に入れておいたが、本当にそうなのか？

グリムロック「……グリセルダはスピードタイプの剣士だった。売却する前に体感し

てみたかったとしても、おかしく無いだろう？彼女が殺された時に、アイテムは残った。しかし、あの指輪は無かった。そういう事だ、2人の探偵君。では、私は失礼する。」
まずい、逃げられる！

どうすれば……！

その時、ヨルコさんが口を開いた。

ヨルコ「待って下さい……いえ、待ちなさい、グリムロック。」

グリムロック「まだ何かあるのかな？無根拠かつ感情的な糾弾は遠慮して欲しい。」

ヨルコ「あなたは言ったわね。リーダーが問題の指輪を装備していたと。でもね、それはあり得ないのよ。」

グリムロック「ほう。」

ヨルコ「あの指輪をどうするか、ギルド全員で話し合った時に、私、カインズ、それにシユミットは、ギルドの戦力にした方が良いと売却に反対したわ。カインズは、リーダーに装備させようとして、リーダーを立てた。」

その発言に、カインズがばつの悪そうな顔をする。

しかし、ヨルコさんは意に介せず、語り続ける。

ヨルコ「それに対して、リーダーがなんて答えたか、私は今でも一語一句思い出せるわ。あの人は笑いながらこう言ったのよ。『SAOでは、指輪アイテムは片手に一つず

つしか装備出来ない。右手のギルドリーダーの印章、そして、左手の結婚指輪は外せないから、私には使えない。』いい？あの人がどちらかを外して、レア指輪のボーナスを確かめるなんて、する筈が無いのよ！」

確かに、指輪アイテムは片方の手に一つずつしか入れられない。

しかし、弱い。

グリムロック「何を言うかと思えば、『するはずがない』？それを言うならば、まずこう言ってもらえないかな？私がグリセルダを殺すはずが無いと。君の言ってる事は、根拠なき糾弾だ。」

ヨルコ「いいえ、根拠はあるわ。彼女が殺された時に残されたアイテムをプレイヤーがギルドホームに持ち帰って来て、剣を消滅するに任せた。でもね、私は、遺品をもう一つだけ、ここに埋めたの。」

そう言っ取り出したのは小さい箱だった。

アスナ「あつ……あれって！」

ミト「永久保存トリンケット……！」

永久保存トリンケットとは、マスタークラスの細工師だけが作れる物で、それに入れば耐久値は減らない。

ヨルコはそこから2つの指輪を出した。

ヨルコ「これは、リーダーがいつも装備してた黄金林檎の印章。私も同じ物を持つてから比べれば分かるわ。そして、これはあなたとの結婚指輪よ！この2つがここにあるという事は、リーダーは、圏外に引き出されて殺されたその瞬間、両手に装備してた揺るぎない証拠よ！違う!?違うと言うのなら、反論してみなさいよ!!」

語尾は、涙混じりの絶叫だった。

俺達はヨルコさんとグリムロックを見守っていた。

グリムロックがその場に膝をついた。

ヨルコ「……………なんで……………なんでなの、グリムロック。なんでリーダーを……………奥さんを殺してまで指輪をお金にする必要があったの。」

グリムロック「……………金?金だって?」

グリムロックがメニューを操作して、取り出したのは、コル金貨が大量に入った袋だった。

グリムロック「これは、あの指輪を処分した金の半分だ。一切使っていない。」
ヨルコ「え?」

グリムロック「金のためでは無い。私は、どうしても彼女を殺さなければならなかった。彼女がまだ、私の妻でいる間に。グリセルダにグリムロック。頭の音が同じなのは偶然ではない。なぜなら、彼女は、現実世界でも私の妻だったからだ。」

その発言に、全員に驚愕が走る。

グリムロック曰く、従順な妻だったが、SAOが始まって、とても生き生きした雰囲気になり、離婚を切り出されたら、耐えきれない。だからこそ自分の奥さんを永遠に思い出に封じたいとのことだ。

カルム「ふざけるなよ……！言う事が聞かなくなったからって、大切な奥さんを殺すだど？」

キリト「いつか攻略組の一員にもなれただろう人を、あんたは……そんな理由で……。」

グリムロック「そんな理由？違うな、充分すぎる理由だ。君たちにもいつか解る。愛情を手に入れて、それが失われようとした時にね。」

アスナ「いいえ、間違ってるのはあなたよ、グリムロックさん。」

キリトが左腕で右腕を押さえて、俺がブレイラウザーを持つ手に力を込めたのを見て、グリムロックが嘔くと、アスナが反論した。

ミトも。

ミト「あなたがグリセルダさんに抱いていたのは愛情じゃない。ただの所有欲よ。」
アスナ「あなたはもう、結婚指輪を捨ててしまったのでしよう。」

その発言に、グリムロックは動かなくなった。

シユミットが静寂を破った。

シユミット「……キリト、カルム。この男の処遇は、俺達に任せてくれ。しつかり罪を必ず償わせる。」

カルム「分かった。任せた。」

シユミットがグリムロックを連れて主街区に向かい、ヨルコとカインズも向かった。

今回の一件は、グリムロックの暴走だったが、俺も起こるのか？

果たして、これからの人生で、そんな事が起きないと言い切れるのか？

そんな風に考えていると、ミトが声をかけてきた。

ミト「……………ねえ、カルム？」

カルム「うん？」

ミト「もしさ、仮に誰かと結婚した後で、相手の隠れた一面を知った時、君はどうするの？」

カルム「そうだな……。嬉しいって思う。」

ミト「え？」

カルム「だってさ、それを見せてくるって事は、それだけこつちを信頼してるって事だろ。それはとても嬉しい。」

ミト「そっか……。」

俺はそう答えて、キリト、アスナ、ミトと共にグリセルダの幻影を見て、グリセルダの攻略者としての意思を引き継いで、俺達は主街区へと向かって行った。

第16話 エボリユーシヨンキング

あの圏内事件の後、俺はとあるダンジョンに来ていた。

アルゴとジエイクからの情報で、ここに現れるモンスターがまた、ブレイラウザー等の強化に繋がると言われた。

流石に1人じゃ厳しいので、ミト、チエイス、ハヤトの3人も呼んだ。

ミト「カルムが自ら呼ぶなんて珍しいわね。」

チエイス「久しぶりだな。」

ハヤト「じゃあ、早速行こうぜ！」

カルム「ああ。」

チエイスは第1層のボス戦以来だが、武器を変えたらしく、槍からカリスアローという弓の武器に変更した。

ハヤトも片手剣なのは変わらないが、タイタンソードに変更していた。

タイタンソードは、バスタードソードに分類される剣で、ハヤトも俺と同様に剣道をやってきたそうで、丁度いい塩梅らしい。

片手で持てば片手剣のソードスキルが、両手で持てば一部の両手剣のソードスキルが

使えるらしい。

そうして、俺達はダンジョンの中へ。

中で登場するモンスターは、アルピローチにダークローチ等と、結構登場した。

俺達是对して苦戦せずに進めている。

驚いたのは、チエイスが俺と同じ様なカードを持っている事で、それで能力を付与しているらしい。

恐らく、俺のブレイラウザーと同系統の武器なんだろうと思う。

しばらくして、安全地帯があつたので、そこで休憩する事に。

カルム「結構疲れたな。」

ミト「あのダンジョンよりは辛いわね。」

チエイス「そうか。」

ハヤト「でも、結構進めたんじゃない？」

カルム「そうですね。でも、疲れたから少し寝させて貰います。」

ミト「なら、膝枕してあげるわよ。」

カルム「気持ちだけで十分です。」

俺は休憩する為に寝た。

M i t o s i d e

カルムは寝出した。

何かデジヤブを感じるけど、寝顔を見るのも飽きないので、眺めていると。

チエイス「何故カルムの顔を眺めている？」

ミト「え!？」

ハヤト「お2人さん、いい画だねえ。」

ミト「……………!」

何度も言われた影響か、そこまで気にしなくなっただけど、顔が赤くなってしまう。

ここ最近、カルムの事を考える時間が更に増えてきた。

チエイス「俺達の事を気にするな。」

ミト「気にするなって……………!」

ハヤト「でも、人の事を好きになるのは本当にいい事だぜ。」

ミト「……………」

ハヤトにそう言われて、思った事は。

ミト（私って、カルムの事を好きなのかな?）

第1層からの長い付き合いで、カルムの勇氣、ちよつと抜けてる所等、それらもカルムの魅力かと思うと、気になってくる。

チエイスとハヤトが私を見て、何やらコソコソ話し始めた。

チエイイス（ハヤト。これは恐らく……。）

ハヤト（ああ。カルムはまだ気づいていなそうだな。）

何を話してるのかはよく聞こえなかった。

あと、気になった事もあるので、チエイイスに聞いてみる。

ミト「チエイイス。」

チエイイス「何だ？」

ミト「そのカリスアローもさ、カルムのブレイラウザーと同系統なの？」

チエイイス「恐らくな。」

ミト「という事はさ？既にカードは集まっているの？」

チエイイス「ああ。既に俺の所には全てのカードが集まっている。」

そう言つて取り出した。

本当に、何かトランプみたいな感じがする。

ミト「カルムも、キング以外のカードは手に入れてるみたいだしさ。」

ハヤト「という事は、次に出てくるのは、キングのモンスターという事か。」

チエイイス「恐らく相当に強いだろうな。気を引き締めていくぞ。」

しばらくして、カルムが目を覚ましたので、行く事に。

でも、カルムを見てると、顔が赤くなる。

カルム side

疲れが取れたので、最深部へと向かう事に。

だが、ミトの顔が赤い。

ミト本人に聞いても、何でもないと返されて、チエイズとハヤトに聞いても、自分で察しろと返された。

でも、俺は圏内事件の時から妙にミトを意識し出したような感じがする。

俺は、ミトの事が好きなのか？

そんなモヤモヤがここ最近もドンドンと大きくなってきた。

そんなモヤモヤを抱きつつ、最深部に到着すると、一体のモンスターがいた。

名前を見ると、コーカサスビートルアンデッドと書いてあった。

カルム「あいつか。」

チエイズ「油断するな。」

その時、檻が降りてきて、俺以外のメンツと俺が遮られた。

ミト「カルム！」

チエイズ「分断か！」

ハヤト「おい、モンスターがポップしてるぞ！」

カルム「みんな！」

ミト「私達なら大丈夫！カルムは早くあのモンスターを倒して！」

カルム「分かった！」

俺はコーカサスビートルアンデッドと対峙していた。

俺はすぐさまコーカサスビートルアンデッドに斬りかかったが、盾で防がれてしまった。

それでも俺はめげずに攻撃していくと、徐々にではあるが、HPが減っていく。

HPが3本目にまで到達すると、コーカサスビートルアンデッドが俺のラウズカードを奪った。

ミト「ラウズカードが！」

ハヤト「おい、ヤバいんじゃないのか!？」

チエイス「……………!」

カルム「……………!」

コーカサスビートルアンデッドが俺を嘲笑うかの様に見えたが、俺は諦めていない。

俺は、絶対にこのゲームをクリアして、皆を現実世界に戻してみせると誓った。

だからこそ、ラウズカードを奪われたくらいで諦めては、絶対にクリア出来ない。

俺はブレイラウザーで斬りかかりつつも、殴りを入れて、怯ませる。

カルム「俺は絶対に諦めない！このデスゲームから皆を救う！そうグリセルダさんに

誓ったんだ！例え、カードが奪われても、俺は絶対に勝つ！」

俺は、コーカサスビートルアンデッドの剣を奪って、その剣で盾を打ち破る。

その際に、俺から奪ったラウズカードを落とした。

怯んだ隙に、俺はブレイラウザーで全力でコーカサスビートルアンデッドを斬り裂いた。

そうして、HPが全損し、コーカサスビートルアンデッドは倒された。

それと同時に檻やモンスターが消えて、ミト達が駆け寄ってきた。

ラウズカードはミトが回収していた様で、それを渡してきた。

ミト「お疲れ様！カルム!!」

チエイス「よくやったな。」

ハヤト「いやあ！本当にいい画だね!!」

カルム「ああ。」

そうして、報酬を見てみると、エボリユーションコーカサスと書いてあるラウズカードを手に入れた。

そして、エボリユーションキングというスキルを手に入れた。

その時、謎のモンスターが唐突に現れた。

名前を見ると、トライアルDと書いてあった。

カルム「何だあのモンスター!?!」

ミト「ヤバそうね!」

ハヤト「でも、アルゴとジェイクはこんな奴が出るなんて言って無かったよな!?!」

チエイス「恐らく、アイツを倒したら現れる奴なんだろう!」

まずい!

このままじゃ皆が……!

俺はエボリユーションコーカサスを見て、とある事を思いついた。

やるしかない!

ラウズアブソーバーに、アブソーブカプリコーンを入れる。

『absorb queen!』

そして、エボリユーションコーカサスをラウズアブソーバーにラウズする。

『evolution king!』

すると、俺の体に激痛が走った。

ミト「カルム!」

ハヤト「何やってんだアイツ!」

チエイス「カルム!」

だが、俺は諦めない!

ここにいる皆を救えるなら！

その時、俺がこれまで獲得したラウズカードが現れて、それが金色になって俺の体に着く。

オリハルコンブレストが、キングブレストに変化して、シオルダーガードナーが大きくなって金色になった。

そして、体のあちこちにラウズカードの絵柄が映り、左手にキングラウザーという両手剣が出現した。

そして、パンチだけで相手を吹っ飛ばした。

ミト「カルム……………！」

ハヤト「何だあれ……………!?!」

チエイス「カルムが金色に……………！」

カルム「凄い……………！力が溢れてくる！」

トライアルDが怯んでいる隙に、俺はキングラウザーに5枚のカードを入れる。

『スピード10！ジャック！クイーン！キング！エース！』

『ロイヤルストレートフラッシュ！』

俺は新たなスキルのロイヤルストレートフラッシュでトライアルDを倒した。

だが、何かに飲み込まれる様な感じがして、意識が無くなった。

チエイス side

アイツが金色になったと思ったら、大剣にカードを入れて、金色の斬撃波でモンス
ターを倒した。

だが、様子がおかしい。

ミト「凄いよカルム！」

ハヤト「ああ。」

チエイス「待て！何か様子が変わだ。」

すると、カルムがこちらに向かって攻撃してきた。

ミト「どうしたのカルム!？」

ハヤト「あれ!? どうした!？」

チエイス「まさか、力に飲み込まれたのか!？」

カルムをオレンジにする訳にもいかないのです、躲している。

だが、このままでは……!

仕方ない、こちらもやるか。

俺はエボリユーションパラドキサを出して、カリスラウザーにラウズする。

『evolution!』

その音声と共に、ラウズカードが俺に合わさって、新たな姿になった。

以前に、この姿になって、それ以降、特訓をして使いこなせる様になった。

俺はワイルドスラッシュャーでカルムの剣を押しえ込んだ。

ミト「あれは……!?!」

ハヤト「あれがアイツの本気だ。」

そう、本気でやらなければ、やられる!

デュエルを申請して、カルムが受諾して、デュエルとなった。

ルールは、半減決着モードだ。

デュエルが始まり、俺とアイツでお互いの武器をぶつけ合う。

お互いに隙をつけて攻撃し、HPがもう少しで半分になる時に、俺達は動いた。

『スピード2、スピード3、スピード4、スピード5、スピード6!』

アイツが剣にカードを入れている隙に、俺はワイルドカードを生み出して、それをラウズする。

『ストレートフラッシュ!』

『ワイルド!』

お互いに攻撃して、HPが半分になった為、引き分けとなり、お互いの強化状態が解けた。

カルム side

何やら、叫び声が聞こえてくる。

そうして目を開けると、そこには涙を流していたミトがいた。

ミト「カルム！良かった、目が覚めて!!」

ハヤト「チエイス、カルムが目を覚ましたぜ。」

チエイス「助かる。」

カルム「ここは？」

そうだ！

俺は、力に飲み込まれて、チエイス達に攻撃してしまった……！

それを思い出して、罪悪感に飲まれた。

カルム「ごめん。」

チエイス「気にするな。それに、お前なら何とか使いこなせるだろ。」

ハヤト「まあ、気にすんな。」

ミト「……………」

カルム「ミト……………」

ハヤト「まあ、俺達は用事を思い出したから、撤収するな。」

チエイス「ああ。」

そう言つて、帰って行った。

ミトは、未だに泣いたままだ。

カルム「ごめん。」

ミト「うん。大丈夫。」

カルム「まさか、あんなに強い力とはな。」

ミト「カルム。心配かけないで！」

カルム「本当にすまん。」

ミト「とにかく、無事で良かった。」

そうして、俺達も主街区に戻った。

ミト「カルム、約束して。」

カルム「何を？」

ミト「これ以上心配かけない事！」

カルム「ああ。でも、使いこなしてみせる。」

ミト「まあ、これぐらいなら良いか。あとさ、教えてくれない？あなたが頑なにギルドに入ろうとしない事を。」

カルム「分かった。俺がギルドに入ろうとしない理由は、弱い自分のまま入りたくないからだ。」

ミト「弱い自分？」

カルム「ああ。」

そうして俺は話した。

このアインクラッドで数多くの死を見てきた俺は、それを見て、決意した。

絶対に大切なものを守る力ができるまで、そういった物には入らない事を。

カルム「これが、俺がギルドに入らない理由なんだけど。」

ミト「……………」

カルム「ミト？」

ミト「なあんだ。そんな理由か。」

カルム「ええ？」

ミト「カルムは既に強いじゃない。」

カルム「いや、キングの力に飲み込まれた。まだまだだよ。」

ミト「でも、あなたは色んな人を守ってきた。それだけでも十分だよ。」

カルム「ミト……………」

ミト「でも、一人で抱え込んだじゃダメ。私も一緒に背負うよ。だからさ、泣いてもいいんだよ？」

その言葉がきつかけになったのか、俺はいつの間にか泣いていた。

ミトが抱き締めていた。

しばらくして、俺は泣き止んだ。

カルム「すまない。」

ミト「いいのよ。」

カルム「それとき、ミト。君に言いたい事が出来たんだ。」

ミト「何？」

カルム「でも、まだ決心がつかないからさ。もう少し待っててくれないか？」

ミト「うん。」

俺は、ミトの事が好きだ。

一緒に行動する度に、そんな想いが生まれていた。

でも、もう少し強くなってから、言う。

その為にも、この世界で生き抜かないと。

俺は改めて決意した。

第17話 黒と白、紫紺と紫の剣舞

エボリユーションキングを解禁してから、色々な出来事があった。

8月、あのレッドギルドのラフィン・コフィンが攻略組によって壊滅した。

攻略組、ラフコフ双方に多大な死者が出たが、何とかなった。

その後、エボリユーションキングを使いこなす為に、修行をして、今では力に飲み込まれずに使える。

その時に、フィリアという女の子を助けて、友達になった。

そして、俺の誕生日から3日過ぎた10月18日、俺はキリトと共にクエストに出かけていた。

キリト「悪いな。手伝って貰って。」

カルム「気にするな。俺も気晴らしがしたかったしな。」

俺とキリトは、お互いに秘密を明かしている。

キリトがユニークスキルである二刀流を使える事。

俺がエボリユーションキングを使える事。

だからこそ、お互いの秘密の力を使いこなす為にお互いに訓練している。

そうして、クエストを終えた。

キリト「お疲れさん。」

カルム「ああ。……ん？ 索敵スキルに何か反応があるな。」

索敵スキルを見ると、ラグー・ラビットが2体もいた。

ラグー・ラビットは、S 級食材だ。

俺もお初にお目にかかる。

俺達は投剣スキルを発動する。

そして、ラグー・ラビットを仕留めて、俺達が寝ぐらにしている第50層の主街区、アルゲードへと向かう。

そう、アイツの店に向かう為に。

キリト「うっす。相変わらず阿漕な商売してるよな。」

エギル「よお、キリトにカルムか。安く仕入れて安く提供するのがウチのモットーなんだね。」

カルム「後半は怪しいですけどね。まあいいや。俺達も頼む。」

第1層で出会った斧使いのエギル。

現在は、商売をしているそうさ。

相変わらずガタイが凄いな。

俺達のトレードウインドウを見て、エギルが驚いた表情になる。

エギル「おいおい、S級のレアアイテムじゃねえか。オレも現物を見るのは初めてだぜ……。キリト、カルム。金には困ってないだろ？自分達で食おうとは思わねえのか？」

キリト「思ったさ。何せ、もう手に入るか分からないからな。」

エギル「なら……!」

カルム「でも、俺も料理スキル取ってるけど、流石に扱えないな。」

俺は、両親が不在の時もたまにあつたので、自分で料理はする。

リアルでの癖という奴だ。

そんな事を話していると、後ろから声をかけられた。

アスナ「キリト君。」

ミト「カルム。」

「シエフ捕獲。」

アスナ「な……何よ。」

ミト「どうしたの？」

そう、血盟騎士団の第一副団長のアスナと、第二副団長のミトだ。

俺は、エボリユーションキングの初取得の時からミトの事が好きになっていたが、ミ

トはどうなんだろうな？

何か、護衛の1人が顔を引き攣らせていた。

そんな事を思っていると、2人が声をかけた。

アスナ「生きてるならいいのよ。」

ミト「そんな事より、シエフって何のこと？」

キリト「あ、そうだった。アスナって、料理スキルの熟練度どの辺？」

カルム「ミトもどうなんだ？」

アスナ「先週に完全習得したわ。」

ミト「私も同じく。」

キリト「なぬっ！」

カルム「凄いな。」

料理スキルって、地味に上げるのがめんどくさいシロモノなんだよな。

キリト「……………その腕を見込んで頼みがある。」

カルム「これなんだけど……………」

アスナ「うわっ!!こ……………これ、ラグー・ラビット!？」

ミト「まさかのS級食材!？」

キリト「取引だ。こいつを料理してくれたら一口食わせてやる。」

アスナ「は・ん・ぶ・ん!!」

カルム「料理してほしいです。食べさせてあげるので。」

ミト「良いわよ。」

こうして、料理してもらおう事に。

キリト「悪いな、取引は中止だ。」

エギル「なあ、オレたちダチだよな？ な？ オレにも味見くらい……。」

カルム「すいません。感想文を800字以内で書いてくるので。」

エギル「そ、そりゃあないだろ!!」

ごめんなさい、エギルさん。

アスナ「でも、料理はいいけど、どこでするつもりなのよ？」

ミト「確かに。」

キリト「うっ……。」

カルム「ああ……。」

確かに、俺の奴は必要最低限の物しか無く、アルゲードの部屋なので汚い。

そんな所に行かせるわけにも……。

アスナ「どうせ君達の部屋にはろくな道具も無いんでしょ？」

カルム「ぐうの音も出ない。」

ミト「今回は、感謝を込めてカルムには私の部屋を提供するわ。」
キリト「俺は？」

アスナ「あなたは私よ。」

え？

それってつまり、ミトの部屋に行くという事かよ。

マジで。

そんな事を考えている俺をよそに。

アスナ「今日は直接帰るから。」

ミト「護衛お疲れ様。」

???「ア……アスナ様！ミト様！こんなスラムに足をお運びになるだけに留まらず、素性の知れぬ奴らをご自宅に伴うなどと、とんでもない事です！」

なるほどな。

コイツは、アスナとミトの事を崇拜しているんだろなあ。

アスナ「この人達は、素性はともかく腕だけは確かだわ。」

ミト「多分あなたより十はレベルが上よ。クラデイル。」

クラデイル「な、何を馬鹿な！私がこんな奴らに劣るなどと………！」

クラデイルという男が俺たちを見ると、何かを合点したかのように歪んだ。

クラデイル「そうか………ピーターに紫紺の剣士か！」

キリト「ああ、そうだ。」

カルム「それが何だ？」

クラデイル「アスナ様！ミト様！コイツらは自分だけを優先する奴なんですよ！こんな奴らと関わるとろくな事が起きないんだ！」

酷い言いようだな。

だが、流石に騒ぎ過ぎたのか、周囲に人だかりが。

アスナ「とにかく！今日はここで帰りなさい！」

ミト「副団長権限でね！」

そう言つて、アスナはキリトを、ミトは俺を引つ張つてその場を後にした。

クラデイルの視線は、殺気が混じっていたような気がする。

そうして、第61層の主街区、セルムブルグに辿り着いた。

開放感が凄いな。

キリト「うーん、広いし人は少ないし、開放感があるなあ。」

カルム「確かに。」

アスナ「なら君達も引つ越せば？」

ミト「そうね。」

「金が圧倒的に足りません。」

その後、俺とミト、キリトとアスナの2組に別れた。

その際に、アスナがミトに何やら話していたが気にする事ではないな。そうして、ミトの自宅に着いたが、かなり綺麗だ。

カルム「なあ。これ、いくらかかってるんだ？」

ミト「大体四千Kぐらいかな？着替えてくるからそこで待ってて。」
俺はソファに座った。

セルムブルグの部屋は、こんなもんなのだろうか？

そうして、ミトが私服姿で出てきて、俺は見惚れていた。

それを見て、ミトが呆れ顔で言ってきた。

ミト「いつまでその装備をしてるの？」

カルム「え？あ！」

俺はブレイラウザーやラウズアブソーバー、その他諸々の装備を閉まって、コート・オ
ブ・ミスリルを着た姿になった。

ミト「それで？何を作ればいいのかしら？」

カルム「シエフのおすすめで。」

ミト「なら、煮込み料理ね。ラグーって、煮込むって意味だしね。」

そうして、ラグー・ラビットの料理を俺たちで食べ尽くした。

ミト「フウ〜。ありがとうね。」

カルム「どういたしまして。」

ミト「ところで、明日、一緒にパーティーを組みなさい。あと、私の今週のラツキー
カラー青紫だしね。」

カルム「ええ!?!ギルドは大丈夫なのか?」

ミト「ウチはレベル上げノルマとか無い。」

カルム「あの護衛は!?!」

ミト「置いてくる。」

流石にギルドを放っておいて、俺とコンビを組むのはまずいと思い、声をかけるも、問題なしだそうだ。

そうして、俺とミトは、迷宮区に向かう事に。

翌日、俺は第74層の主街区、ゲート広場でミトを待っていた。

だが、キリトも来ていた。

カルム「よお、キリト。」

キリト「カルムか。お前もミトに誘われた感じなのか?」

カルム「という事は、そっちはアスナに誘われた感じなのか?」

どうやら、お互いに誘われていたようだ。

お互いに他愛もない世間話をしていると、ゲートが光って、人が2人も飛び出した。

「きゃあああ！ど、退いてー!!」

「危ない！」

キリト「グハアアア!!」

カルム「ひでぶ!!」

俺は、上に乗っかっているプレイヤーを退かそうと、手を動かすと、何やら好ましい感覚が。

キリト「何だ？これ……。」

カルム「さあ………?」

「や、ヤアアア!!」

「イヤアア!!」

その時、大音量の悲鳴が耳元に聞こえて、俺は吹っ飛ばされた。何回か転がって、柱にぶつかって止まった。

キリトも吹っ飛ばされた様で、ゲートの方を見ると、そこにはミトとアスナが。だが、お互いに胸を交差して、赤く染まった顔でこちらを睨む。

まさか………。

キリト「や、やあ。おはようアスナ。」

カルム「お、おはようございます。ミト。」

挨拶しただけなのに、2人に睨まれる。

まあ、こつちが悪いからな。

だが、ゲートがまた光り、ミトとアスナは俺達の背後に回り込んだ。

ゲートからやつてきたのは、昨日のクラデイルとかいっただ奴だ。

クラデイル「ア……アスナ様、ミト様、勝手な事をされては困ります……！さあ、ギルド本部まで戻りましょう。」

アスナ「嫌よ！今日は活動日じゃないし！」

ミト「それより！何で朝から私達の家を見張ってるのよ！」
え。

それって、まごう事なきストーカー行為じゃないか。

クラデイル「私の任務はアスナ様とミト様の護衛です！それには当然、ご自宅の監視も……。」

「含まれないわよバカ!!」

クラデイル「聞き分けのない事を言わないで下さい……。さあ、本部に戻りますよ。」

クラディールが2人の手を掴んだ時に、俺とキリトもクラディールの手を掴んだ。

キリト「悪いな、お前さんのトコの副団長達は、今日は俺達の貸切りなんだ。」

カルム「別に今日ボス戦をやるって訳じゃない。2人の安全は俺達が責任を持つ。」

クラディール「ふ……ふざけるな!! 貴様らの様な雑魚プレイヤーにアスナ様とミト様の護衛が務まるかあ!! 私には栄光ある血盟騎士団の……!!」

キリト「アンタよりはマトモに務まるよ。」

クラディール「ガキ……そ、そこまででかい口を叩くからには、それを証明する覚悟があるんだろうな……。」

そうして、キリトとクラディールがデュエルを始めたが、結果は、キリトがクラディールの剣を武器破壊で壊した為、キリトの勝利になった。

そうして、俺達は迷宮区へと。

キリトとアスナ、俺とミトのコンビで、モンスターを倒していく。

キリト「それにしても、カルムとミト、大分連携できてるけど、何かあったのか?」

カルム「な、何も無い! なあ!」

ミト「そ、そうよ! 何も無いわよ!」

アスナ「ふううん。」

ミト「アスナ、そのニヤニヤする顔をやめなさいよ!」

カルム「そっちこそ、連携が大分いいけど、何かあったのかよ!」

キリト「な、な、何言ってるんだよ!」

アスナ「そ、そうよ!何も無いわよ!」

ミト「へえええ。」

アスナ「私が言えた台詞じゃないけど、そのニヤニヤする顔をやめなさいよ!」

そんな話をしている内に、いつの間にか、ボス部屋までたどり着いていた。

カルム「ボス部屋まで着いちやっとな。」

アスナ「これって、やっぱり……。」

キリト「多分そうだろうな。」

ミト「どうする?覗くだけ覗く?」

カルム「一応、転移アイテムは持とう。」

そうして、覗く事に。

ボス部屋に居たのは、青い、山羊の様な姿をしたモンスターだった。

名前は、《The Gleameyes》、輝く目という意味か。

その時、グリーンムアイズがこちらに向かって駆け出してきた。

その恐怖に俺たちは。

「うわああああ!!」

「きやああああ!!」
俺達は、遁走した。

第18話 青眼の悪魔

グリーンムアイズがいたボス部屋から遁走した俺たち。

何回かモンスターにターゲットされた様な気がするが、それを気にせずに安全地帯に。

俺達は息を整えて、作戦会議をする事に。

カルム「あれは苦勞しそうだな。」

キリト「武器は大剣一つだけだけど、特殊攻撃がありそうだな。」

ミト「前衛にタンク職の人は最低限、10人ぐらいは必要ね。」

アスナ「盾ね……………」

何か、アスナがこちらを見てくる。

アスナ「ねえ、キリト君にカルム君。何で盾を持たないの？」

キリト「えっ？な、何でって？」

カルム「ん？」

アスナ「だって、片手剣のメリットって、盾を持てる事じゃない。私の場合はスピードが落ちるからだけど……………。何で2人は盾を持たないの？」

ミト「ちよつとアスナ、スキルの詮索はマナー違反よ。」
アスナ「気になるんだけど……。まあ、それもそうね。」

事情を知っているミトがカバーしてくれて助かった。

フュージョンジャックを明かした際に、かなりの質問や嫉妬が来たので、エボリユーシオンキングだと、更に来ることが容易に想像出来る。

だからこそ、一部の人には明かしてはいるが、口止めはしっかりしている。

アスナも一応は納得したのか、詮索をやめた。

アスナ「わ、もう3時だ。遅くなっちゃったけど、お昼にしましょうか。」

ミト「そうね。」

そうして、2人の手作りであろうサンドイッチを食べる事に。

アスナはキリトに、ミトは俺に渡した。

それを食べると、現実世界でのテリヤキバーガーみたいな味がした。

カルム「これは、テリヤキか！」

キリト「2人とも、この味、どうやって……。」

ミト「私とアスナの研鑽の結果よ。」

アスナ「本当に苦労したよね。」

俺達が懐かしい味を堪能しつつ昼食を終わらせると、索敵スキルに何か引掛かっ

た。

カルム「誰か来るぞ！」

そうして警戒しつつ、いつでも抜刀出来る様に剣に手を添えていると、そこに来たのは、小規模ギルドの一団だった。

???「おおう、キリトにカルムじゃねえか！しばらくぶりだな！」

キリト「久しぶり、クライン。」

カルム「どうも、クライン。」

彼はクライン。

キリトとは旧知の仲で、俺も攻略会議の際に何度か話しかけている。

ギルド『風林火山』のリーダーだ。

人当たりが良く、俺も結構信頼している。

クライン「おめえらも元気そうで良かったぜ。それはそうと、後ろのお二人さんは……?？」

キリト「ああ。ボス戦で顔合わせしてると思うけど、一応紹介しておくよ。こいつはギルド〈風林火山〉のクライン。」

カルム「で、こつちが〈血盟騎士団〉のアスナとミト。」

2人を紹介したのだが、クラインが緊張で固まっていた。

キリト「おい、どうした？ラグってんのか？」

クライン「は、はじめまして！俺はクライン、24歳独身、彼女募集中!？」

クラインの言葉が変な風になったのは、俺とキリトがクラインの腹を殴ったからだ。

風林火山「リーダー!？」

俺とキリトが気づいた時には、風林火山の面子に取り囲まれていた。

これって、怒られる奴かなと思っていたら。

風林火山「ア、アスナさんにミトさんじゃないですか！」

そうして、我先に自己紹介をし始めて、俺とキリトが抑えに入った。

キリト「ま、まあ。こんな奴だけど、いい奴ではあるから。」

カルム「そ、そうだな。……イテツ！」

キリト「何するんだ!？」

クライン「へへっ。お返しだぜ。」

そうやって、取っ組み合いが始まると、ミトとアスナが笑い出した。

その後、クラインがキレて、俺たちに詰め寄ろうとした瞬間、また索敵スキルに反応があった。

カルム「また索敵スキルに反応！今度は多数の人だ！」

その言葉に警戒心を出した面子が、周囲を見るとそこには、二列編隊で行進してきた

集団だ。

確か、アインクラッド解放軍だった筈だ。

??? 「休め！」

リーダーと思しき男が号令すると、残りの面子が地面に座った。

相当に疲弊してるな。

コーバッツ 「私はアインクラッド解放軍所属、コーバッツ中佐だ。」

キリト 「キリト。ソロだ。」

カルム 「カルム。同じくソロだ。」

コーバッツ 「君らはもうこの先も攻略しているのか？」

キリト 「ああ。」

コーバッツ 「うむ。ではそのマップデータを提供して貰いたい。」

「「「「!?」」」」

当然だ、と言わんがばかりの男の台詞に俺は驚いていた。

だが、それ以上にクラインが驚いていた。

クライン 「な……て……提供しろだ!? 手前エ、マッピングする苦勞が分かって言っ

てんのか!？」

盗賊の親友のフィリアから聞いた話だが、トレジャーボックス狙いの人からしたら、

高値で取引されているらしい。

コーバツツ「我々は君ら一般プレイヤーの解放の為に戦っている！故に、諸君が協力するのは当然の義務である！」

傲岸不遜を人の形にした様な奴だな。

アスナ「ちよつと、あなたねえ……！」

クライン「て、てめえなあ……！」

ミト「それは、無いんじゃないの……!?!」

爆発寸前のアスナ、クライン、ミトを俺とキリトは抑えた。

キリト「どうせ街に戻ったら公開しようと思っていたデータだ、構わないさ。」

クライン「おいおい、そりゃあ人が好すぎるぜキリト。」

カルム「マップデータで商売する気はない。」

そうして、俺とキリトは、マップデータをコーバツツに渡した。

まさかと思い、声をかける。

カルム「ボスにちよつかい出すなよ。」

コーバツツ「……それは私が判断する。」

キリト「生半可な人数でどうこうなる相手じゃなかった！仲間も疲弊してるじゃない

か！」

コーバツツ「私の部下はこの程度で音を上げる様な軟弱者ではない！貴様等さっさと立て！」

そう言つて、先へと進んでいった。

流石に不安なので、俺達も見に行く事に。

リザードマンと戦闘になつて、片付けた。

クライン「ひよつとしてもうアイテムで帰つちまつたんじゃねえ？」

クラインのその言葉を聞きつつ、俺達は更に先に進む。

すると、悲鳴が聞こえた。

カルム「!!皆！」

キリト「ああ！」

アスナ「バカッ………!!」

ミト「何考えてるのよ！」

クライン達が置いていかれたが、気にせずにボス部屋に到着すると、そこは地獄絵図だった。

グリーンムアイズはHPが三割も減つておらず、軍の方も確認するが、2人足りない。

キリト「何をしている！早く転移アイテムを使え！」

軍「ダメだ………！結晶が使えない!!」

カルム「結晶無効化空間……!!」

これもフィリアから聞いた話だが、迷宮区の中には稀に、結晶アイテムを使えないト
ラップ部屋があるらしい。

だが、これまでのボス部屋でそうであつた事は今まで一度も無かつた。

そんな事を考えていると、コーバッツが叫び声を上げた。

コーバッツ「我々解放軍に撤退の二文字は有り得ない!戦え!!戦うんだ!!」

カルム「おいおい!」

結晶無効化空間で2人居ない。

それ即ち、死んだという事だ。

ようやくクライン達が合流してきた。

クライン「おい、どうなつてんだ!」

カルム「このボス部屋では、結晶アイテムが使えない!既に2人死んだ!」

クライン「何とか出来ないのかよ……。」

どうすれば良いのか、思案していると。

コーバッツ「全員……突撃……!」

キリト「やめろ……っ!!」

カルム「おい!!今すぐ退がれ!!」

そんな無謀な突撃をするが、グリーンアイズは気にせず、ブレスと大剣の攻撃を軍の面子にした。

1人がこちらに飛んできた。

コーバッツだ。

既にHPバーが消滅していた。

コーバッツ「……………有り得ない。」

そう言つて、呆気なく消えた。

既にリーダーを失った軍は烏合の衆と化していた。

ミト「だめ……………だめ……………」

アスナ「だめよ……………」

そんな声がして、咄嗟に腕を掴もうとしたが。

「だめ……………!!!」

キリト「アスナ!!」

カルム「ミト!!」

クライン「どうとでもなりやがれ!!」

アスナとミトの捨て身の一撃は、不意を突く形で悪魔の背に命中したが、HPはろくに減つておらず、ターゲットが2人に向いた。

俺とキリトで、何とか剣を逸らして、2人を守ったが、衝撃が凄い。

キリト「下がれ!!」

キリトの叫び声で、俺も追撃に備えるが、どれも致死とさえ思える圧倒的な威力だった。

クライン達、風林火山で、軍の面子を部屋の外に引き出そうとしていたが、俺達が戦っている影響で、中々に進まない。

もう、使うしかない……!!

キリトとアイコンタクトをして、ミト、アスナ、クラインに叫んだ。

キリト「アスナ！クライン！ミト！10秒だけ持ち堪えてくれ!!」

その声に、すかさず反応して、応戦する。

その隙に、キリトはメニューウインドウを呼び出して、俺はラウズアブソーバーから、2枚のカードを取り出す。

『absorb queen』

『evolution king』

俺はすかさずエボリューションキングを発動して、ラウズカードが金色になって俺につく。

左手には、キングラウザーが出現した。

キリトも二刀流を使う様だ。

アスナとミトが作った隙をつく。

「スイツチ!!」

アスナとクラインが、二刀流のキリトと金色になった俺を見て驚いていた。ミトも俺には驚いていなかったが、キリトの二刀流には驚いていた。

カルム「キリト、スイツチ!」

キリト「スターバースト・ストリーム!!」

俺がグリーンアイズの大剣をキングラウザーで跳ね上げて、キリトが必殺の16連撃技のスターバースト・ストリームを放つ。

その隙に、俺はキングラウザーにカードを入れる。

『スピード10!ジャック!クイーン!キング!エース!』

『ロイヤルストレートフラッシュユ!』

キリト「スイツチ!」

カルム「ああ!これで、とどめだア!!」

キリトのスターバースト・ストリームで出来た隙について、ロイヤルストレートフラッシュを放つ。

5枚のカードを潜り抜けて、グリーンアイズを斬り捨てる。

グリーンアイズはポリゴンになった。

その時、キリトが倒れた。

少しして、キリトが目を覚ました。

アスナが目覚めたキリトを見て、ホツとしたのか、泣いていた。

キリト「いててて……………」

アスナ「バカッ……………！無茶して……………！」

キリト「悪い、心配かけた。」

カルム「大丈夫か？」

キリト「どれくらい気を失ってた？」

ミト「ほんの数秒よ。カルムも大丈夫？」

カルム「大丈夫だ。少し疲れたが。」

クラインが遠慮がちに声を掛けてきた。

クライン「生き残った軍の連中の回復は済ませたが、コーバツツとあと2人死んだ

……………」

カルム「ボス攻略で、犠牲者が出たのは、第67層以来だな。」

クライン「コーバツツの馬鹿野郎が……………。死んじまっちゃ何にもなんねえだろうが

……………！！」

クラインがそんな台詞を言っつて、気分を切り替えるように聞いてきた。

クライン「そりやあそうと、オメエらのあれは一体何なんだよ!？」

キリト「……………言わなきやダメか？」

カルム「……………言わなきやダメ？」

クライン「つたりめえだ！見た事ねえぞあんなの！」

どうするか迷っていると、ミトが頷いた。

言うしかないか……………。

キリト「……………エクストラスキルだよ。二刀流。」

カルム「……………エクストラスキル、エボリューションキング。」

クライン「しゅ、出現条件は。」

キリト「分かってたらもう言っつてる。」

カルム「右に同じく。」

まあ、俺の場合は、俺しか手に入らない代物だろうけど。

クライン「情報屋のスキル一覧にも無い。と言う事は、お前らだけのユニークスキルだ。つたく、水臭えなあ2人とも。」

その後、軍を帰して、クライン達は転移門のアクティベートするために、上に行った。だだっ広いボス部屋に、俺とミト、キリトとアスナだけが残った。

どうしたものかと思っていると、ミトが抱きついてきた。

カルム「ミト？」

ミト「心配かけないでよ……バカ。」

カルム「悪い。けど、こうするしかなかった。」

ミト「私、しばらくギルドを休む。」

カルム「……そうか。」

キリトとアスナの方も似たような状態になっていて、俺達も帰る事にした。

第19話 聖騎士VS黒の剣士&紫紺の剣士

あのグリーンムアイズとの死闘の翌日、俺達は第50層のエギルの店に逃げ込んでいた。

理由はというと。

エギル「『軍の大部隊を全滅させた青眼の悪魔。それを撃破した二刀流使いの50連撃に、金色の紫紺の剣士の一刀両断。』コイツは随分でかくてたなあ！アハハハ!!」

キリト「尾ひれがつくにも程がある。」

カルム「どうやって嗅ぎつけたのか知らないけれど、朝から俺達の寢床に剣士や情報屋が殺到して大変だった。」

リズベット「それはアンタ達の自業自得じゃないの？」

ラット「俺達だけの秘密だと言っておきながら、バラしたからな。」

そう、俺もキリトも、ラットとリズベットには秘密を明かしていた。

ラットに詰め寄られて、明かさざるを得なかった。

ちなみに、2人が来ている理由は、エギルの店に仕入れの品を取りに来たからだ。

エギル「まあ、有名になっちゃったもんはしょうがないだろ。いつその事、講演会を

やったらどうだ？会場とチケットの手筈は俺が。」

キリト「やるか！」

カルム「誰が！」

俺達は飲んでいたコップを投げると、投剣スキルが発動して、エギル達は躲した。

コップは、壁に当たって砕け散った。

エギル「おわっ！殺す気か！」

リズベット「何やってんのよ！」

ラット「腹いせか！」

流石に謝って、俺達はラットが買ってきた肉まんを食べた。

それにしても、かなり面倒くさい。

ほとぼりが冷めるまで、大人しくしておくか。

そう思っていたら、階段から誰かが駆け上がってくる音がした。

現れたのは、アスナとミトだった。

だが、2人の顔は青褪めていた。

アスナ「ど……どうしよう2人とも……！」

ミト「面倒くさい事になったわ。」

ラットとリズベットは、手を繋ぎながら帰っていき、エギルは一階に行った。

俺とキリトは、2人から事情を聞く事に。

アスナ「昨日……あれからグランザムのギルド本部に行って、あつた事を全て団長に報告したの。」

ミト「それで、ギルドの活動をお休みしたいって言って、その日は家に戻って……。今朝のギルド例会で承認されると思ったけど……。」

アスナ「団長が……私たちの一時脱退を認めるには、条件があるって言って……。」

ミト「それが、キリトとカルムと立ち会いたいって言ってきて……。」

キリト「な……!!？」

カルム「え。」

どういう事だ？

ヒースクリフが何故そんな条件を？

それを口にするよ、

アスナ「私にも分かんない……。」

ミト「そんな事しても意味がないって一生懸命に説得したけど……団長がどうしてもって譲らなくて……。」

キリト「でも……珍しいな。あの男が、そんな条件を出してくるなんて。」

アスナ「そうなのよ。団長は、普段ギルドの活動どころか、フロア攻略の作戦とかも

私達に一任して全然命令とかなしないのに、今回に限ってなんだよね。」

「そう、ミトの愚痴でも聞いていたが、ヒースクリフは仕事を殆ど丸投げしているそう
だ。」

今回に限って異論を挟み込むとは。

そんなこんなで、俺とキリトは、ヒースクリフに直談判する為に、血盟騎士団のギルド本部まで行く事に。

本部に入ってから暫くして、鋼鉄の扉の目で前で止まった。

カルム「ここか……?」

ミト「うん……。」

中に入ると、真ん中にヒースクリフが居て、周囲に4人居た。

おそらく、幹部陣だろうな。

アスナとミトが声を上げる。

「お別れの挨拶に来ました。」

ヒースクリフ「そう結論を急がなくてもいいだろう。彼らと話させてくれないか? 君とはボス攻略戦以外の場で会うのは初めてだったかな、キリト君。そして、久しぶりだね、カルム君。」

キリト「いえ……前に、67層の対策会議で、少し話しました。」

カルム「お久しぶりです。ヒースクリフさん。」

そう、ブレイラウザーをゲットした時に、ヒースクリフからスカウトを受けていた。だが、俺は保留の形にして貰った。

ヒースクリフ「あれは辛い戦いだっただな。我々も危うく死者を出す所だった。トップギルドなどと言われても戦力は常にギリギリだよ。……なのに君達は、我がギルドの貴重な主力プレイヤーを引き抜こうとしている訳だ。」

キリト「護衛の人選にも気を使った方がいいですよ。」

カルム「確かに。」

その発言に、1人が立ち上がろうとして、ヒースクリフに止められた。

ヒースクリフ「クラディールの件で迷惑をかけたのは謝罪しよう。だが、我々としても2人のサブリーダーを引き抜かれて、はいそうですかという訳にもいかない。キリト君、カルム君。欲しければ剣で、『二刀流』と『エボリューションキング』で奪い給え。私と戦い、勝てば2人を連れていくがいい。だが、負けたら君達が血盟騎士団に入るのだ。それに、カルム君はいい加減に入ってくれないか?」

最後は、俺への懇願だろうが、要するに戦えという事だ。

アスナとミトが我慢出来なくなったのか、口を開いた。

アスナ「団長、私達は別にギルドを辞めたいと言ってる訳じゃありません。」

ミト「ただ、少しだけ離れて、色々考えてみたいんです。」
その2人を制して、俺達は口を開く。

キリト「いいでしょう、剣で語れと言うなら望むところです。」

カルム「デュエルで決着をつけましょうか。」

そうして、アルゲードのエギルの店に戻った。

ミト「バカ！説得しようとしたのに、何であんなことを言うの!!」

カルム「悪い、悪かった！ヒースクリフの売り言葉を買っちゃって。」

キリトとアスナも同じ様な感じだ。

ミト「どうするの？負けたら私がお休みするどころか、カルムがKOBに入らないといけなくなるんだよ。」

カルム「まあ、物は考え様だ。」

ミト「何で？」

カルム「俺はミトと一緒に居られればそれで十分だしな。」

その発言に、ミトは顔を赤くして、俺に顔を埋めた。

翌日、コロシアムに行くと、大量の観客が集まっていた。

俺とキリトは絶句した。

カルム「……………おい。」

キリト「……ど、どういうことだこれは……！」

アスナ「さ、さあ……？」

カルム「あそこに居るのって、KOBの人間だろ！何でこんな事に！」

ミト「多分、経理のダイゼンさんの仕業ね。あの人すっかりしてるから。」

俺達はダイゼンに通されて、控え室に。

ちなみに、俺とキリトの知り合いは全員来るらしい。

アルゴとジエイクがばら撒いたそうだ。

アイツら、覚えてろよ……！

アルゴとジエイクの顔を思い浮かべながらそう毒づいた。

順番は、キリトが先に行き、その次に俺だ。

俺はモニターから、見ていると、キリトが負けた。

マジでか……というか、違和感が……。

俺もコロシアムに出ると、真ん中にヒースクリフが居た。

どうやら、回復は済ませたそうだ。

ヒースクリフ「君もすまなかつたなカルム君。こんな事になっているとは知らなかつたよ。」

カルム「ギャラで頂きますよ。」

ヒースクリフ「……いや、君もキリト君と同様に試合後からは我がギルドの団員だ。任務扱いにさせて頂こう。」

カルム「……随分な自信ですね。」

『absorb queen』

『evolution king』

初っ端から本気で行く。

ヒースクリフからのデュエルを受諾した。

俺は右手にキングラウザーを、左手にブレイラウザーを持つ。

俺はヒースクリフに集中して、デュエルが始まった途端に、駆け出す。

これはイレギュラーな装備なので、ソードスキルは使えない。

だからこそ、自らの腕で対応する。

盾に弾かれても、ブレイラウザーで隙をついて攻撃する。

ヒースクリフ「中々の反応速度だな。」

カルム「アンタこそ硬すぎだろ……！」

そう毒づいて、更に攻撃を早める。

次第に押されていって、ヒースクリフの反応が一瞬遅れた。

その時に、キングラウザーで吹っ飛ばし、その隙にキングラウザーにカードを入れる。

『スピード2！スピード3！スピード4！スピード5！スピード6！』
『ストレートフラッシュ！』

ストレートフラッシュを発動して、ヒースクリフに襲いかかる。

勝てる！そう思ったが、何やら時間が奪われたような気がする。

キングラウザーで奴の盾をどかしたのにも関わらず、戻ってきて、防がれた。

動揺したその隙に、一撃を叩き込まれて、俺も負けた。

ミト「カルム！」

カルム「ああ……。大丈夫だ。」

だが、あれは一体……？

そんな疑問が浮かんだ。

第20話 紅の殺意

先日、ヒースクリフとのデュエルに負けた俺とキリトは、約束通りに、血盟騎士団に所属する事になった。

だが……。

カルム「地味な奴って頼まなかったか？」

ミト「これでも地味な部類よ。うん。似合ってるよ。」

俺は支給された血盟騎士団の格好を着る事に。

と言っても、血盟騎士団のマントを羽織るぐらいなのだが。

装備を変えると、フュージョンジャケットとエボリューションキングが使えなくなってしまうからだ。

とは言っても、結構派手な感じだ。

キリトもアスナから受け取っている。

ミト「まあ、これからは同じギルドのメンバーとしてよろしくね。」

カルム「ああ。よろしく。」

ミト「ギルドに入るのを拒まないって事は、カルムは受け入れたって事？」

カルム「まあ、もう俺も弱くないしな。それにソロ攻略も限界が来てたし。」

そんなこんなで、2日後、グランザムへとミトとキリトとアスナと共に向かった。

その時に、久しぶりにノーチラスと再会した。

本来は他の人と組むが、2人の副団長の強権を発動して、俺はミト、キリトはアスナと組む事になっている。

だが、ギルド本部に到着して、ゴドフリーという人物から言われたのは意外な事だった。

キリト「訓練？」

カルム「俺達が？」

ゴドフリー「そうだ。私を含む団員四人のパーティーを組み、ここ五十五層の迷宮区を突破して五十六層主街区まで到達してもらおう。」

アスナ「ちょっとゴドフリー！キリト君はわたしが……！」

ミト「どういう事ですか？ゴドフリー。」

アスナとミトの反論に対して、苦笑しながら言い返す。

ゴドフリー「副団長と言っても規律を蔑ろにして戴いては困りますな。」

アスナ「あ、あんたなんか問題にならないくらいキリト君は強いわよ……。」

ミト「カルムもね。」

キリト「見たいと言うなら見せるさ。」

カルム「それで、いつ集合なんですか？」

ゴドフリー「うむ。30分後に街の西門に来てくれたまえ。」

そう言つて、退出した。

ミト「何よあれ！……ごめんカルム。」

カルム「気にするな。すぐに終わらせる。」

キリトと共に西門に行くと、そこには最も会いたくなかつた奴、クラディールが居た。

キリト「……どういう事だ？」

カルム「………何でコイツが。」

ゴドフリー「ウム。君らの間の事情は承知している。だがこれからは同じギルドの仲間、ここらで過去の争いは水に流してはどうかと思つてな！」

クラディール「先日は……ご迷惑をおかけしまして……。二度と無礼な真似はしませんので……許して頂きたい……。」

キリト「あ………ああ……。」

カルム「わ、分かつた……。」

何でこうなつた。

まあ、ギスギスしたままでいても気まずい。

でも、どうも怪しい。

警戒は怠らない様にするのが良いだろうな。

ゴドフリー「今日の訓練は限りなく実戦に近い形式で行う。危機対処能力も見たいので、諸君らの結晶アイテムは全て預かせてもらおう。」

どういう事だ？

結晶アイテム、特に転移結晶は、このデスゲームにおいて最後の生命線だ。だが、クラディールも大人しく預けているので俺達も預ける事に。

ゴドフリー「よし。では出発！」

「「お~~~~」」

俺、キリト、クラディールの気が抜けた声が合わさる。

そうして、ゴドフリーの指示に従いつつ、モンスターを撃破していく。

やがて、眼前に迷宮区が見えてきた。

ゴドフリー「よし、ここで一時休憩！」

そうして、昼食となった。

革の包みを渡してきたので、開けると水の瓶、NPCショップで売っている固焼きパンだった。

本当ならミトの料理を食べれた筈だったのに、と内心で思いながら水を飲む。

だが、クラデイルがこちらをジッと見つめている事に気がつき、嫌な予感がして、水の瓶を投げ捨てたが、動けなくなつた。

やはり、麻痺毒が入つてたか。

ゴドフリーもキリトも、動けなくなつていた。

解毒結晶を使おうとしたが、ゴドフリーに預けたままなのを思い出した。

クラデイル「クツ……クツクツクツ……クハッ！ヒヤッ！ヒヤハハハハ！」

クラデイルが狂つたかのように笑い出した。

ゴドフリーも茫然としていた。

ゴドフリー「ど……どういふことだ……この水を用意したのは……クラデイル……

お前……」

キリト「速く解毒結晶を使え!!」

カルム「何してんだよ!!」

俺達の声にゴドフリーが解毒結晶を出そうとするが、クラデイルに蹴飛ばされて、

結晶が全て奪われてしまった。

まずいな、万事休すか。

クラデイル「ゴドフリーさんよお、馬鹿だ馬鹿だと思つていたがアンタ筋金入りの

脳筋だな！」

そうやってクラデイルはゴドフリーに剣を突き刺した。

それと同時にクラデイルのカーソルがオレンジになった。

ゴドフリー「ま、待てクラデイル！お前……何を……何を言ってるんだ……？く

……訓練じゃないのか……？」

クラデイル「うるせえ。いいからもう死ねや。」

そこから更に突き刺していく。

クラデイル「いいか？俺達のパーティーはアー。」

ゴドフリー「グハッ！」

クラデイル「荒野で犯罪者プレイヤーの一団に襲われエー。勇戦虚しく3人が死

亡オー。俺一人になったものの見事犯罪者を撃退して生還しましたアー！」

そうしている内に、ゴドフリーは死んだ。

あの感じから、初めてじゃないな。

俺はそう確信した。

クラデイルがこちらに向かってきた。

クラデイル「おめえらみたいなのが2人のためによお、関係ねえ奴を殺しちまった

よ。」

キリト「その割には随分と嬉しそうだったじゃないか。」

カルム「何故、血盟騎士団にいる。お前は犯罪者ギルドがお似合いだろ。」
クラディール「決まってるだろ。あの2人の女だよ。」

その言葉に俺はキレかける。

キリトも同様だ。

クラディール「おお、怖え。それに、犯罪者ギルドが似合うって?」

カルム「事実だろう。」

クラディール「褒めてるんだぜえ。いい眼してるじゃねえか。」

そう言つて腕から出したのは、ラフコフのエンブレムだった。

だが、ラフコフは壊滅したはず。

クラディール「入ったのはつい最近だぜ。まあ、精神的にだけだな。」

クラディールはそう言つて、大剣をキリトに振りかざした。

だが、俺も麻痺してるので、動けない。

クラディール「おっと、大人しくしてろ、紫紺の剣士さんよお。お前はコイツの後で殺してやるからなあ。」

まずい。

このままでは、キリトを殺されてしまう。

それを黙つて見るしかないのか……!!

徐々にキリトのHPが減っていき、レッドゾーンに達してしまった。

だが、俺の麻痺はいつまでも解除されない。

その時、2つの疾風が吹いた。

クラディール「な……………ど……………!?!」

クラディールが壁に叩きつけられた。

そこに居たのは、アスナとミトだった。

アスナがキリトの回復を済ませて、ミトは俺に近寄る。

ミト「大丈夫!?!カルム!!」

カルム「見ての通り、麻痺してるが、無事だよ。」

そして、アスナとミトがクラディールに近寄っていく。

クラディール「あ、アスナ様、ミト様……………ど、どうしてここに……………。い、いや、これ

は、訓練、そう、訓練でちよつと事故が……………」

クラディールの言い訳を無視して、アスナとミトが攻撃する。

クラディールは2人にも憎悪の視線を向ける。

クラディール「このアマども……………!調子に乗りやがって……………!」

だが、クラディールが何かを言おうとした瞬間に、2人が攻撃を開始する。

一方的に蹂躪していき、クラディールのHPはレッドゾーンに達した。

クラディールが両手を上げて喚いた。

クラディール「わ、分かった！分かったよ!!俺が悪かった!!も、もうギルドも辞める！アンタらの前にも二度と現れない!だから……!」

クラディールのその声に2人は反応を示さずにお互いの武器を突きつける。

クラディール「死に、死にたくねえー!!」

その声に、2人は葛藤している。

まずい、クラディールは何かを狙ってる。

その悪寒が現実になり、クラディールが大剣を振り上げて、2人の武器を弾く。

アスナ「あつ……!?!」

ミト「しまった……!」

クラディール「アアア甘えー!ーんだよ副団長様方アア!!」

キリト「うおおおおああ!!」

カルム「させるか!!」

漸く麻痺が解除されて、俺とキリトは駆け出した。

ブレイラウザーから、2枚のカードを取り出して、アスナとミトを突き飛ばした。

まず、メタルのカードをラウズして、防御力を一時的に上げる。

俺とキリトの腕で、クラディールの剣を止める事に成功した。

次に、キリトはエンブレイサーを発動して、俺はビートをラウズして、パンチ力を上げる。

俺達のカウンターは、クラデイルに命中して残りのHPを削りきった。

クラデイルは脱力して、俺達に囁いた。

クラデイル「この……人殺し野郎が。」

カルム「……お前が言うな。」

そして、クラデイルは死亡した。

俺は、ラフコフ討伐戦では、2人殺してしまったが、また、1人殺してしまった。

そうして、虚ろな表情でアスナとミトがやってくる。

アスナ「……ごめんね……私たちの……私たちのせいだね……。」

ミト「……ごめん……。」

キリト「アスナ……。」

カルム「ミト……。」

アスナ「ごめんね……。わたし……。もう……。キリト君には……。会わな……。」

ミト「ごめん……。もう、カルムとは……。」

その先を言わせない為に、俺はミトの、キリトはアスナの唇を、自分の唇で塞ぐ。

2人は、抵抗するが、俺たちは気にせず、続行する。

そうして、ミトの首筋に顔を埋めた。

カルム「俺の命は君のだ。だから、俺はミトの為に使う。最後まで一緒に居る。」

ミト「……私も。私も君を絶対に守る。これから永遠に守り続ける。だから……。」

カルム「ミト……今夜は、一緒に居たい。」

ミト「……うん。」

そうして、俺たちの悲劇は終わった。

2人は俺達を待っている間、マップでモニターしていて、ゴドフリーの反応が消失した時点で街を出て向かったようだ。

2人曰く「愛のなせる技だよ。」らしい。

俺はミトと、キリトはアスナと一緒に居る事になった。

セルムブルグのミトの家に向かい、食事をしていた。

その最中に思ったのは、クラデールの行動の事だった。

アイツは、このデスゲームの重圧に負けて、悪意が顕になった。

その結果がアレだ。

食事の際に、ミトはやけに饒舌だった。

好きな武器のブランドに、観光地等を矢継ぎ早に語った。

俺は呆気に取られながら聞いていたが、突如黙った。

カルム「お、おい。どうした？」

ミト「……………よし!!」

何やら気合いが入ったミトが窓際に向かうと、部屋の電気を消す。

しばらく立っていたが、メニユーを操作しだして、ミトが着ていた服が消えた。その時、俺は思考が停止した。

少しずつだったが、最終的に下着姿になっていた。

ミト「こつち……………見ないで……………」

そんな事言われても。

俺は下着姿のミトに見惚れていると。

ミト「君も脱いでよ。……………恥ずかしいから。」

待つて。

待つて下さい。

カルム「ストップ!ストップ!」

ミト「?」

カルム「あの、SAOで、そ、その、そんな事が出来るのか?」

ミト「え?知らないの……………?」

カルム「はい。」

ミトの顔が更に赤くなり。

ミト「そ、その……………。オプションメニューの一番深いところにね…………。《倫理コード解除設定》ってやつがあるのよ。」

マジでか。

戦闘にばかり気を向けていたツケが回ってきたのか？

でも、本人が来てと言っているし、いつて良いのか？

ちゃんと確認は取らないと。

カルム「そ、その。ほ、本当にいいのか…………？」

ミト「良いって言ってるでしょ……………本当に恥ずかしいからさ。」

そうして、俺たちは、ゲームの中とは言え、一線を越えた。

しばらくして、俺たちは話していた。

ミト「……………ごめんね、カルム。本当なら、クラデイルとの決着を私が見つけないと

いけなかったのに。」

カルム「いや、クラデイルを駆り立てたのは、ある意味では俺だ。気にするな。」

ミト「これからは、私が君を守る。」

カルム「俺も君を守る。」

ミト「……………ねえ。ちよつとだけ、前線から離れたらダメ？」

カルム「そうだな……。俺も、疲れた。22層に良いログキャビンがあるんだ。……
2人でそこに引越そう。それで……。」

ミト「それで……?」

カルム「……け、結婚して下さい。」

ミト「……うん。」

俺は、ミトの最上級の笑顔を生涯忘れられないだろう。
こうして、俺たちは結ばれた。

第21話 それぞれの休息

ミトとシステム的に結婚した俺は、翌日、血盟騎士団の本部に向かい、一時退団の申請をした。

それは、キリトとアスナも同様だった。

一時退団の申請は双方共に受理された。

だが、ヒースクリフが「君たちはすぐに前線に戻るだろう。」と、意味深な事を言った。そして、血盟騎士団の本部を出てから聞いたのだがキリトとアスナも結ばれたようだ。

アスナ「まさか、ミトもカルム君と結婚したなんてね。」

ミト「それを言ったらアスナの方もだよ。」

キリト「お互い、それぞれの想いを伝えれたと言う事だよな。」

カルム「そうだな。」

アルゴ「へえ。それは面白い事を聞いたナア。」

ジェイク「おめでどうっす！」

「「「「?!」」」」

そこに居たのは、アルゴとジェイクの情報屋コンビだった。

まずい、このままじゃ、アルゴとジェイクが共同で出している新聞に出されて、俺とキリトが呪い殺される。

カルム「……………まさか、新聞に載せるつもりなんですか？」

アルゴ「まさか。流石にそこまではしないヨ。」

ジェイク「ただ、君たちの知り合いには流したけどね。」

「「「!?」」」

アルゴ「心配すんな。全員には口止め料をちゃんと払ってるヨ。」

ジェイク「5日後、第1層の主街区に来て下さいつす。」

そう言われてから、ログハウスを購入して、5日が経過した。

そうして、俺たちはアルゴとジェイクに連れられて、第1層主街区のタフトへと向かった。

キリト曰く、月夜の黒猫団のギルドホームがあるとところらしい。

月夜の黒猫団のギルドホームに着いて、中に入るとそこには、クライン、エギル、リズベット、ラット、シリカ、ヒロミ、ハヤト、チェイス、ノーチラス、ユナ、レイモンド、フィリップ等、俺達の知り合いが集結していた。

さらに、月夜の黒猫団の面子に、ディアベルも来ていた。

リズベット「あー！やっとな来た！」

ラット「とにかく、これに着替えてこい。」

そうして、ミトとアスナはリズベットに、俺とキリトはラットに別室に案内された。そこで渡されたのは、白いタキシードだった。

要するに、結婚衣装だった。

俺とキリトはそれを装備して、戻ると、ウェディングドレス姿のミトとアスナがいた。俺達を見て、歓声が上がった。

シリカ「アスナさん！ミトさん！とっても似合ってますよ！」

ユナ「とっても似合ってるよ！」

シリカやユナの女性陣からウェディングドレス姿を賞賛されるミトとアスナ。

しかし……。

クライン「キリトとカルムが白い衣装……。」

ノーチラス「に、似合ってるぞ……！」

普段、俺達が高い服を着ないだけで、笑いを堪えやがって。

俺の所にミトが、キリトの所にアスナが近づいてきた。

とても似合う事を伝えねば。

カルム「ミト。とても似合ってる。」

ミト「そ、そうかな……。カルムにそう言ってもらえて嬉しい……。」

カルム「ミト……。」

ミト「カルム……。」

フィリア「はいそこ、2人の世界に入らない！」

ミト「そ、そんなんじゃない……！」

カルム「そうだぞ！」

フィリア「2人して自覚なしか。」

フィリアにそう突っ込まれる。

キリトとアスナの方も、2人の世界に入って、リズベットに突っ込まれていた。

そうして、ディアベルの乾杯の音頭と共にパーティーが始まった。

俺とミト、キリトとアスナが一言言つて、ケーキ入刀もやった。

その後、色んな人から質問攻めにあつた。

このパーティーの際に、色々な出来事が起こつた。

ヒロミとノーチラスが勇気を出して、シリカとユナに告白して、付き合う事になった。

そして、クラインがヤケを起こしたのか、暴走した。

一応、チェイスとハヤトが落ち着かせた。

そうして、色んな出来事が起こりつつ、パーティーは幕を閉じた。

俺とミトは、22層のログハウスへと戻った。

ミト「皆、祝ってくれて良かったわね。」

カルム「ああ。」

ミト「……………本当に、皆いい人ね。ところで、フィリアとはどういう関係なの？」

カルム「ああ。フィリアとは友達だよ。」

ミト「ふうん。」

カルム「まあ、寝ようぜ。」

ミト「そうね。」

そうして、俺たちは寝た。

翌日、10月30日。

俺達は、ピクニックに出かけていた。

ミト「今日は本当に良い天気ね。」

カルム「ああ。こんな日には、美味しい弁当が更に美味く感じる。」

ミト「食い意地張ってるわね。」

俺達は、22層の広い丘を見つけて、そこで弁当を食べる事に。

カルム「それにしても、本当に美味しいな！」

ミト「フフツ。ありがとう。……………ん？」

カルム「どうした？」

ミト「ねえ。あそこに誰か転んでる。」

カルム「え？」

ミトの指差した方を見ると、確かに誰かが転んでいる。

カルム「一応、見ておこう。」

ミト「そうね。」

そこに向かうと、1人の女の子が転んでいた。

年齢的には、シリカよりも幼い。

ミト「大丈夫なの？」

カルム「ああ。でも妙だな。カーソルが出てこないな。」

ミト「確かに。」

カルム「とにかく、考えるのは後だ。家まで連れて帰るぞ。」

ミト「そうね。」

そうして、俺達は弁当を回収して、ログハウスへと戻った。

だが、一向に目が覚めない。

カルム「年齢的には、10歳も行っていないな。」

ミト「でも、ナーヴギアって、年齢制限があつた筈よ。」

カルム「そうなんだよな。ちょっと、村の方に行って手がかりがないか確かめてくる。」

ミト「分かった。」

そうして、村にまで行って、手がかりがないか確かめたが、無かった。

調べてる最中に、キリトから連絡があつて、キリト達の方も、似た様な子を保護したらしい。

何があつてんのか。

俺達は、流石に寝る事にした。

翌朝。

ミト「カルム！カルムってば!!」

カルム「……おはよう。どうした？」

ミト「こつちに来て！」

ミトに起こされて、何事かと思つて隣のベッドを覗くと、保護した子が歌っていた。

カルム「うそーん。」

ミト「嘘じゃないね。」

すると、その子が目を覚ました。

ミト「良かった、目が覚めた。自分がどうなつたのか分かる？」

その問いに、首を振った。

ミト「あなたの名前は？」

カナ「か……な。カナ。」

ミト「カナって言うのね。私はミト。この人はカルムよ。」

カナ「み……と。か……む。」

外見的には8歳だが、精神年齢が物心ついたばかりの幼児みたいな感じがする。

ミト「カナちゃん、どうして22層に居たの？どこかにお父さんとお母さんがいるの？」

カナ「分かんない。……何にも分かんない。」

そのやり取りを見ていると、キリトから連絡が入り、キリト達の方も目覚めたが、こちらと似たような状況らしい。

カナに温めたミルクを渡すと、少しずつではあるが、飲み始めた。

それを見ながら、ミトと意見交換をする。

ミト「カルム。どう思う？」

カルム「記憶は無くて……あの様子だと、精神に相当なダメージを負ってるな。」

ミト「そう……だよね。」

カルム「幾らなんでも、残酷すぎるだろ。」

ミト「キリト達の方は？」

カルム「こつちと似たり寄つたりだな。」

俺は、声をかける事に。

カルム「やあ、カナちゃん。……カナって、呼んでいいか？」

その問いに、頷いた。

カルム「そうか。なら、カナも俺の事を、カルムって呼んでくれ。」

カナ「か……む。」

カルム「カルム、だ。か、る、む。」

だが、難しい顔で黙り込んでしまった。

カルム「まあ、何でも、言いやすい呼び方でも構わないよ。」

再び、黙り込んでいると、しばらくして、ゆつくりと顔を上げた。

カナ「……パパ。みとは……ママ。」

まさか、本当の両親と勘違いしてるのか。

あるいは、この世界にいない両親を求めているのか。

そう考えていると、ミトが頷いた。

ミト「そうだよ……ママだよ。カナちゃん。」

カナ「ママ！」

ミトがカナを抱きしめながら、泣いていた。

第22話 2人の少女

カナがまた寝始めた時に、俺とミトは、相談していた。

ミト「……………カルム。」

カルム「分かっている。カナの母親で居たいのは。でも、それをやると、攻略が遅れて、あの子が解放されるのも遅れる。」

ミト「……………うん。」

カルム「まあ俺も、カナの父親で居たいのは事実だけどな。」

ミト「とりあえず、第一層に行つて、小さい子を預けているところに行つて、尋ね人リストにも入れてもらいましょう。」

カルム「……………そうだな。キリト達はどうするのか聞いている。」

ミトの顔に影が差している。

やはり、カナと離れたくない気持ちがあるのだろうか。

俺も、カナとは離れたくない。

だが、本当の両親がいる筈だ。

キリト達の方にも聞いてみた結果、同様の感じになったそうで、俺とミトは、カナを

連れて第一層に行く事に。

だが、カナの服装は、ノースリーブのワンピースだけなので、流石に服を着替えさせる事に。

カルム「カナ。ウインドウ、開けるか？」

カナは何の事か分からないように首を傾げる。

カルム「じゃあ、右手の指を振ってみて。こんな風に。」

俺の動きを見たカナは、おぼつかない手つきで動きを真似たが、ウインドウが開かない。

むきになって右手を振っていたカナが、左手をふると、ウインドウが出現した。

カナ「出たよ！」

ミト「カナ、ちよつと見せてね。」

ミトがカナのウインドウを可視モードにして見ると、驚いた様な気配がした。

ミト「な……何これ!？」

カルム「どうした？」

俺も覗いてみると、カナのウインドウの最上部には、《K a n a | M H C P 0 0 3》という奇怪なネーム表示があるだけで、HPバーもEXPバーも、レベルも存在しない。

ミト「システムのバグ……?」

カルム「バグというよりは、元々こういうデザインって感じがするな。ますます訳が分からなくなってきた。」

ミト「まあ、これ以上考えてもしようがない、わよね……。」

ミトがカナにセーターにスカート、タイツ、赤い靴を装備させるのを見て、俺も装備を確認する事にした。

第一層は現在、軍のテリトリーだ。

何か起こった場合に備えて、一応武器を入れておく。

カナ「パパ、抱っこして。」

カルム「ああ。……ミト、一応だが、すぐ武装できる様にしてくれ。」

ミト「分かってる。」

俺達は、キリトとアスナと合流して、第一層、始まりの街へ。

始まりの街を見ると、あの日を思い出す。

ミトと出会い、あのデスゲームが始まった、あの日の事を。

キリト「お前達の方がカナで、俺達の方がユイって感じた。」

カルム「それにしても、謎が多いよな。この2人って。」

俺とキリトがそう話している中、ミトとアスナは同じ様な表情をしていた。

やはり、2人は、同じ様な思考回路に至ったようだな。

キリト「ミトの方もか。」

カルム「そつちもな。」

そうこうしている内に、教会で若いプレイヤーが暮らしているのを聞いて、教会の方へと向かう事に。

ミト「ちよつと待って。」

アスナ「キリト君も。」

カルム「ん？」

キリト「どうした？」

ミト「もし、この子達の保護者が見つかったら、2人を……置いてくるんだよね。」

アスナ「そうなんだよね……。」

「……………」

思い詰めているミトとアスナに、俺はミトを、キリトはアスナを抱き締める。

カルム「別れたくないのは俺も同じだ。」

キリト「……………」でも、会えなくなる訳じゃない。2人が記憶を取り戻したら、きつと

また訪ねてくれるさ。」

ミト「……………」そうだね。」

アスナ「……………」そうね。」

しばらくして、件の教会に着いた。

しかし、一見上は誰もいない。

アスナ「あのー、どなたかいらつしやいませんかー？」

ミト「留守かしら？」

カルム「いや、隠れてるだけだな。」

キリト「右の部屋に3人、左に4人、2階にも何人かいるな。」

そう、索敵スキルを熟練度980ぐらいいままであげると、壁の向こうにいる人数も分かる。

ミト「何で隠れてるのかしら？」

アスナ「あの、すみません、人を探してるんですが！」

アスナが少し大きな声で呼びかけると、右手のドアがわずかに開き、1人の女性がか細い声を上げた。

???「………軍の人じゃ、ないんですか？」

ミト「違いますよ。上の層から来たんです。」

現在、俺達は私服姿だ。

これなら、軍とは無関係だと分かるだろう。

やがて、1人の女性プレイヤーが出てきた。

??? 「本当に……軍の徴税部隊じゃないんですね……?」

カルム 「はい。俺達は人を探していて、ついさつき上から来たばかりです。軍の連中とは無関係ですよ。」

そう言った途端。

??? 「上から!?! って事は本物の剣士かよ!?!」

そんな叫び声と共に、子供達がばらばらと走り出してきた。

皆、興味津々の体で俺たちを眺めている。

??? 「こら、アンタ達、部屋に隠れてなさいって言ったじゃない!」

女性が言ううも、誰も言う事を聞く子はいない。

だがすぐに、真っ先に寄ってきた少年が失望の叫び声を上げる。

??? 「何だよ、剣の一本も持ってないじゃん。ねえアンタら、上から来たんだろ? 武器くらい持ってないのかよ?」

キリト 「いや、ない事は無いけど……。」

カルム 「俺も、あるにはあるが……。」

そう言ううと、子供達が見せて、見せてと、口々に言い募る。

??? 「こらっ、初対面の方に失礼な事言っちゃダメでしょう。……すみません、普段お客様なんてまるでないものですから……。」

ミト「いえ、構わないです。」

アスナ「ね、キリト君、カルム君、幾つかアイテム欄に入れっぱなしだったと思うから、見せてあげたら？」

カルム「そうだな。キリト。」

キリト「あ、ああ。」

俺達は、モンスタードロップの武器を机の上に置くと、子供達が歓声を上げて周囲に群がった。

???「すみません、本当に……。……。あの、こちらへどうぞ。今お茶の準備をしますの
で……。」

俺達は、礼拝堂の右の小部屋に案内されて、振る舞われたお茶を一口飲む。

???「それで……。人を探してらっしゃるといふ事でしたけど……?」

アスナ「あ、はい。ええと……。私はアスナ、この人はキリトと言います。」

ミト「私はミト、こっちはカルム。」

サーシャ「あ、すみません、名前も言わずに。私はサーシャです。」

アスナ「で、この子が、ユイです。」

ミト「この子は、カナです。」

それを聞いたサーシャ曰く、当初はフィールドでレベリングをしていたが、子供達を

放っておけずに、現在に至るそうだ。

サーシャ「皆さんの様に、上層で戦ってらっしゃる方もいるのに、私はドロツプアウトしちゃったのが、申し訳なくて。」

カルム「そんな事無いですよ。子供達を守りたいという気持ちは立派ですし……。」

サーシャ「ありがとうございます。でも、義務感でやってる訳じゃないんですよ。子供達と暮らすのはとつても楽しいです。」

この人はすごい。

子供達を守りたいという気持ちがある。

俺にはできない事だ。

サーシャ「だから、二年間ずっと、毎日エリアアがついて回りましたが、そんな小さな子供達が残されていたなら、絶対気付いた筈です。残念ですけど……：：：：：：：。始まりの街で暮らしてた子じゃあ、ないと思います。」

アスナ「そうですか……。」

ミト「あの、毎日の生活費とか、どうしているんですか？」

サーシャ「それは、他のプレイヤー達も手伝ってくれているので、大丈夫です。……：：：：：：：。贅沢は出来ませんが……。だから、最近目をつけられちゃって……。」

カルム「……誰にですか？」

目を一瞬厳しくしたサーシャが口を開こうとすると。

子供「先生！サーシャ先生！大変だ!!」

サーシャ「こら、お客様に失礼じゃないの!」

子供「それどこじゃないよ!ギン兄イ達が、軍の奴らに捕まっちゃったよ!!」

サーシャ「場所は!?!」

子供「東五区の道具屋裏の空き地。軍が10人くらいで通路をブロックしてる。コッタだけが逃げられたんだ。」

サーシャ「分かった、すぐ行くわ。……すみませんが……私は子供達を助けに行かなければなりません。お話はまた後ほど……。」

子供達も助けに行こうとするが、押し留めて、俺達も加勢する事に。

サーシャに着いていくと、軍の面子を取り囲んでいた。

軍の面子の言い分を聞くと、税金を滞納しているから、装備を全部置いていけとの事だ。

軍の面子に、殺意が湧いた。

アスナ「行こう、キリト君、ミト、カルム君。」

キリト「ああ。」

カルム「言われるまでもない!」

ミト「ええ！」

俺達は敏捷力と筋力補正を全開にして、跳躍して、空き地へと。

子供達はインナーだけの姿だ。

カルム「もう大丈夫だ。装備を戻して。」

目を丸くしていた子供達が慌てて防具を拾い上げて、ウインドウを操作する。

軍A「おい………オイオイオイ!!」

軍B「なんだお前らは!!軍の任務を妨害すんのか!!」

リーダー「まあ、待て。……アンタら見ない顔だけど、解放軍に楯突く意味が分かってんだろうな?何なら本部でじっくり話聞いてもいいんだけど?」

剣を出すと、わざとらしくペタペタ刀身を掌に打ち付ける。

あれは、損傷した事も、修理した事もない武器特有の薄っぺらい輝きだ。

リーダー「それとも圏外行くか、圏外?おお!」

アスナ「……キリト君、ユイちゃんをお願い。」

ミト「カルムもカナをお願い。」

俺はミトの鎌を渡す。

そこからは、本当に凄かった。

アスナのレイピアとミトの鎌が軍の面子に炸裂し、軍の面子は逃げた。

子供「すげえ……すつげえよ姉ちゃん達!!初めて見たよあんなの!!」
キリト「このお姉ちゃん達は無茶苦茶強い。」

カルム「そう言つたろ。」

子供達が歓声を上げると、後ろから声が出てきた。

ユイ「みんなの……みんなの、こころが。」

カナ「みんなのこころ……が……。」

キリト「ユイ!どうしたんだ、ユイ!!」

カルム「カナもどうした!?!」

アスナ「ユイちゃん……何か、思い出したの!?!」

ミト「カナもなの!?!」

2人が何かを思い出そうとすると、ノイズじみた音が響いた。

謎の怪現象は、数秒続き、2人から力が抜けた。

キリト「何だよ……今の……。」

カルム「分からない……。」

俺達の虚な眩きが、低く流れた。

第23話 ユイとカナの心

ユイとカナが苦しんだものの、すぐに元気になった。何だったのかよく分からず、俺達は教会へと戻った。

その時、子供達の朝食合戦を見て、啞然としていた。

キリト「これは……………すごいな……………」

アスナ「そうだね……………」

カルム「でも、すごく楽しそうだな。」

ミト「そうね……………」

サーシャ「毎日こうなんですよ。いくら静かになっても聞かなくて。」

アスナ「子供、好きなんですな。」

ユイとカナの発作の影響もあって、昨日は教会に泊まった。

キリトがサーシャに、軍の内情を聞いている最中に、俺の索敵スキルに反応があった。

カルム「ん？」

ミト「どうしたの？」

カルム「誰か来る。」

サーシャ「またお客様かしら？」

一応、サーシャだけでなく、俺とキリトも行くところに居たのは、軍の所属であろう長身の女性プレイヤーだった。

子供達は警戒心を見せたが、サーシャの一声で安心したのか、すぐに騒ぎ始めた。

ミト「この人は？」

カルム「この人はユリエール。どうやら俺達に話があるようだ。」

ユリエール「初めまして。ユリエールです。ギルドALFに所属してます。」

アスナ「ALF？」

ユリエール「アインクラッド解放軍の略称です。正式名はどうも苦手で……。」

アスナ「はじめまして。私はギルド血盟騎士団のと言つても、今は一時退団中なんです。アスナと言います。この子はユイ。」

ミト「私も、一時退団中とはいえ、血盟騎士団のミト。この子はカナ。」

ユリエール「KOB……。なるほど、道理で連中が軽くあしらわれるわけだ。」

カルム「……昨日の件の抗議か？」

ユリエール「いやいや、とんでもない。今日はあなた方4人をお願いがあつてきたのです。」

ユリエール曰く、当初はギルドMTDという感じでやっていて、リーダーはシンカー

という。

しかし、あのキバオウが台頭してきてから変わってしまい、軍が出来てしまったそう
だ。

その結果、シンカーは名ばかりのリーダーとなってしまうたそうだ。

しかし、資源の蓄積だけにうつつを抜かした結果、末端のプレイヤーから不満が出て
きて、無茶な博打として、コーバッツを送り込んだそうだ。

結果として、キバオウは糾弾されて、もう少しで追放できそうだったが、3日前、シ
ンカーをダンジョンの奥に丸腰の状態で置き去りにしたそうだ。

助けには行きたいものの、レベル的にきついそうだ。

しかし、俺たちが現れたという話を聞いて、居ても立つても居られずに来たそうだ。

ユリエール「キリトさん、アスナさん、カルムさん、ミトさん。お会いしたばかりで
厚顔きわまると思います。どうか、私と一緒にシンカーを救出に行つて下さい
ませんか？」

カルム「……………分かった。」

ミト「カルム!？」

カルム「どうにも嘘を言ってる様には見えん。」

カナ「パパの言う通りだと思う。」

ユイ「そうだよ。ママ。」
アスナ「ユイちゃん……。」

キリト「そうだな。疑って後悔するよりは信じて後悔しようぜ。」
こうして、シンカー救出を計画する事に。

俺達はしつかりと武装して、シンカーを助けに行くことに。

カナもユイと一緒にサーシャに預ける予定だったが、2人とも頑固に一緒に行くこと聞かなかったので、連れていくことに。

シンカーがいるダンジョンは、黒鉄宮の下にあるようで、ベータテスター組は驚いた。カナもユイも怖くないと言うので、行く事に。

キリト「ぬおおおおりやあああ!!」

カラム「ウエイ！」

俺とキリトは、休暇中に溜まったエネルギーを晴らすことにした。

キリトの二刀流と、俺のキンググラウザーとブレイラウザーで、カエル型のモンスターやザリガニ型のモンスターを倒していく。

その光景を見てそれぞれの奥さんは、呆れ気味だった。

愛娘達が応援してくれるのもあって、やる気が非常に出てくる。

ユリエール「な……何だか、すみません、任せっぱなしで……。」

アスナ「いえ、あれはもう病気ですから……。」

ミト「やらせておけばいいのよ。」

キリト「何だよ、酷いなあ。」

カルム「全くだ。」

アスナ「じゃあ、代わる？」

ミト「私も代わろっか？」

「もうちよつと。」

ユリエール曰く、シンカーは数日動いていないようで、急ぐ事に。

ユリエールに謝罪された。

キリト「い、いや、好きでやってるんだし。」

カルム「それに、アイテムも出るしな。」

ミト「へえ。」

アスナ「何が出たの？」

カルム「キリト。」

キリト「おう。」

俺達は、スカベンジトードの肉を取り出すと、女性陣は顔を引き曇らせる。

アスナ「な……ナニソレ？」

キリト「スカベンジトードの肉。」

ミト「さっきのカエル!？」

カルム「ゲテモノほど旨いっていうし。後で料理してくれ。」

「絶、対、嫌!!」

そう言つて投げてしまった。

カルム「ああああ!!」

キリト「何すんだよ!!」

「フン!!」

キリト「なら……。」

カルム「これでどうだ!？」

俺達は、大量に出したが、全部投げ捨てられてしまった。

その際に掴みかかってきて、俺達は応戦していると、ユリエールさんが笑い、それにユイとカナも反応した。

人の感情に敏感だな。

その後、俺達は進み続けて、遂に安全エリアのすぐ近くに着いた。

アスナ「安全地帯よ!」

ミト「やっと到着ね。」

キリト「奥にプレイヤーが1人いる。」

カルム「グリーンという事だから、恐らくシンカーだな。」

ユリエール「シンカー!!」

ユリエールが感極まったのか、駆け出した。

シンカーもユリエールに気付いたのか、大声を出す。

しかし、なにやら様子が変だ。

シンカー「ユリエール！来ちゃダメだ！」

カルム「!!」

索敵スキルに引っ掛かった。

それも、かなりヤバそうな奴が。

The Fatal Scythe。直訳は運命の鎌。

あれは、ボスだ。

キリトも気づいたようで、駆け出し、俺も遅れて駆け出して、何とかユリエールを抱

きしめて、剣でブレーキをかけられて、奴の鎌を食らわずにすんだ。

アスナ「この子と一緒に安全地帯に避難して下さい！」

ミト「この子も頼みます!!」

アスナとミトが、ユイとカナを預けてこちらに向かってきた。

キリト「アスナ、今すぐ安全エリアの3人を連れて、結晶で避難してくれ。」
カルム「ミトもだ。」

アスナ「え……………?」

ミト「どういう事?」

キリト「コイツ、ヤバい。俺の識別スキルでもデータが見えない。」

カルム「多分、強さ的に90層クラスだ……………!」

「……………!?!」

そう、俺も識別スキルを使っているが、データが見えない。

何で90層クラスの敵が第一層の下にあるダンジョンに出現すんだよ……………!」

心の中でそう毒づいていると。

アスナ「ユリエールさん、ユイを頼みます!3人で脱出して下さい!」

ミト「カナの事もお願い!」

ユリエールが戸惑っていると、死神が恐ろしい勢いで突進してきて、俺とキリトは、ミトとアスナを守る様に仁王立ちし、それぞれの武器で防御の体勢をとる。

しかし、死神は意に介せず、大鎌を振るった。

俺達は盛大に吹き飛ばされて、全員一撃で半分も持ってい 못했다。

次の攻撃は耐えきれない、そう思っていると、2つの足音が。

そう、カナとユイの2人が、恐れも微塵もない表情で、巨大な死神を見据えていた。キリト「ばかつ!!はやく、逃げろ!!」

カルム「早く逃げてくれ!!」

「大丈夫だよ、パパ、ママ。」

2人はそう言うのとふわりと浮かび上がった。

だが、死神は意を介さずに、その鎌を再び振り上げる。

アスナ「だめっ……!!逃げて!!逃げてユイちゃん!!」

ミト「カナも逃げて!!」

だが、その鎌は、2人には届かなかった。

2人の掌の前にシステムタグが浮かび上がった。

「Immortal Object」、つまり、不死属性。

だが、不死属性は、プレイヤーが持つ筈がない物だ。

死神が戸惑っていると、2人の前に彼女達より大きな剣が現れた。

2人の冬服は一瞬にして燃え落ちて、元から着ていた白ワンピースになった。

そして、カナとユイが振った剣が死神に当たり、死神は消えた。

俺達は、それぞれの武器を支えにして、立ち上がった。

アスナ「ユイ……ちゃん……。」

ミト「カナ……………」

2人は掠れた声で呼びかけると、2人の少女は、音もなく振り向いた。微笑が浮かんでいたが、2人の瞳には涙が。

ユイ「パパ……………ママ……………。全部、思い出したよ。」

カナ「私たちが何なのか……………」

俺達は安全エリアに向かい、石机に2人を座らせた。

だが、何を思い出したのか。

アスナ「ユイちゃん……………カナちゃん……………。思い出したの……………？今までの、事……………」

ミト「何を思い出したの……………？」

ユイ「はい……………。全部、説明します。」

カナ「カルムさん、ミトさん、キリトさん、アスナさん。」

2人が語り出したのは、SAOの根幹に関する事だった。

2人曰く、SAOは、『カーディナル』という1つのシステムによって制御されている
そうだ。

カーディナルは元々、人のメンテナンスが要らない存在として設計され、2つのコア
プログラムが相互にエラー訂正を行い、無数の数の下位プログラム群によって世界を調
整する。

モンスターにNPCのAI、アイテムや通貨の出現バランス、何もかもがカーディナルの指揮下のプログラムによって調整されるそうだ。

しかし、人間の精神的な問題は人間にしか解決出来ないもので、数十人規模のスタッフが用意される筈だった。

しかし、カーディナルの開発者は、それをもシステムに委ねようとして、あるプログラムを試作した。

ユイ「《メンタルヘルス・カウンセリングプログラム》、MHC P試作一号、コードネーム《Yui》。それが私です。」

カナ「私は、その試作三号なの。」

アスナ「プログラム……？」

ミト「AIだって言うの……？」

2人は掠れた声で問いかける。

2人の少女は、悲しそうな笑顔で頷いた。

ユイ「プレイヤーに違和感を与えない様に、私達には感情模倣機能が与えられています。」

カナ「だから……。偽物なの、全部……。この涙も。ごめんなさい、ミトさん、アスナさん……。」

カルム「……………だが、記憶喪失は？ AIにそんな事が起こるのか？」
俺がそう問いかけると、再び話し始めた。

2人曰く、カーディナルが予定にない命令を2人に下した。

それは、プレイヤーに対する一切の干渉禁止。

恐らく、その命令を下したのは、SAO唯一のゲームマスター、茅場晶彦の操作による物だと推測できた。

状況は最悪と言っているいいもので、殆どのプレイヤーから、恐怖、絶望、怒りといった負の感情に支配されていて、それを見続けた結果、エラーが蓄積していき、崩壊していったそうだ。

だが、ある日、モニターしていると、他のプレイヤーとは大きく異なるメンタルパラメータを持つ2組のプレイヤーに気づいたそうだ。

つまり、俺たちだ。

俺達に会いたいが為に、俺達が住んでいるプレイヤーホームから一番近いコンソール、つまり第22層のコンソールだ。

ユイ「はい。キリトさん、アスナさん……………」

カナ「カルムさん、ミトさん……………」

ユイ「私達は、あなた方に会いたかった。」

カナ「でも、おかしいですよ、そんな事、思える筈が無いのに……。私たち、ただの、プログラムなのに……。」

アスナ「ユイちゃん……。カナちゃん……。あなた達は、本当のAIなのね。」

ミト「本物の知性を持っているのね……。」

ユイ「私たちには……。分かりません……。」

カナ「私たちが、どうなってしまったのか……。」

キリト「ユイとカナはもう、システムに縛られるだけのプログラムじゃない。」

カルム「だから、自分の望みを言葉に出来る筈だ。2人の望みは何だ？」

ユイ「わたし……。わたしは……。」

カナ「私達は、ずっと一緒に居たい……！」

その言葉に俺達は2人を抱きしめた。

アスナ「ずっと、一緒だよ、ユイちゃん。」

ミト「カナもね。」

キリト「ああ……。ユイは俺達の子供だ。」

カルム「カナは俺達の子だ。ずっと、一緒に居ようぜ。」

ユイ「もう……。遅いんです。」

カルム「どういう事だ……？」

カナ「私たちが記憶を取り戻したのは、あの石に接触した影響なの。」
2人曰く、システムコンソールで、そこからシステムにアクセスして、あの死神を消した。

しかし、カーディナルに目をつけられた結果、2人のシステムは走査されて、2人は消去されてしまう。

アスナ「そんな……！」

ミト「嘘でしょ……。」

キリト「何とかならないのかよ！」

カルム「そうだ！ここから離れれば……！」

「パパ、ママ、ありがとう。ここでお別れなんです。」

アスナ「嫌！みんなの嫌よ！」

ミト「これからみんなで楽しく……仲良く暮らそうって……！」

ユイ「暗闇の中……いつ果てるとも知れない長い苦しみの中で、皆さんの存在だけが私たちを繋ぎ止めてくれた……。」

キリト「ユイ、行くな!!」

カルム「カナ！行くんじゃない!!」

カナ「パパとママ、キリトさんとアスナさんのそばにいと、みんなが笑顔になった。

私達はそれがとっても嬉しかった。お願い、これからも……私たちのかわりに……皆を助けて……喜びを分けて下さい……。」

その時、2人の身体が透け始めて、徐々に消えていく。

アスナ「やだ！やだよ!!」

ミト「カナが居ないと、私、笑えない!」

その時、2人が、笑ってと言った。

そして、消えた。

「うわああああ!!」

二人の叫び声が響いた。

その時、俺達は動いた。

キリト「カーディナル!!」

カルム「思い通りに行ってたまるか!!」

俺達は、ホロキーボードに飛びついて、手分けして作業を始める。

アスナ「キリト君、カルム君……!!」

ミト「何を……!!」

キリト「今なら、今ならまだ、GMアカウントでシステムに割り込める筈だ!」

カルム「急いでやるぞ!」

俺達は、幾つかのコマンドを打ち込んで、作業を終えようとした途端、コンソールがフラッシュして、俺達は弾き飛ばされた。

アスナ「キ、キリト君!!」

ミト「カルム!!」

2人が近寄って来た時、キリトはアスナに、俺はミトに、クリスタルを渡す。

アスナ「こ、これは……?」

ミト「一体……?」

キリト「2人が起動した管理者権限が切れる前に2人のプログラム本体をどうにかシステムから切り離して、オブジェクト化した。」

カルム「つまり、2人の心だ。」

俺達は、意識を失った。

その後、シンカー、ユリエールと共にバーベキューをした。

シンカー曰く、キバオウを除隊して、軍自体も解散。

改めてもつと平和的な互助組織を作るそうだ。

俺達は、サーシャ達に別れを告げて、第22層に戻り、キリト達とも別れた。

ミト「ねえ、カルム。」

カルム「ん?」

ミト「もしゲームがクリアされて、この世界が無くなったら、カナはどうなるの？」
カルム「容量的にはギリギリだが、クライアントプログラムの環境データの一部として俺のナーヴギアに転送される様になってる。まあ、カナとして展開するのは大変かもしれないが、何とかしてみせるさ。」

ミト「そっか。向こうでも会えるのね。私達の、初めての子供に。」

カルム「ああ。」

クリスタルを見ると、カナの応援する声が微かに聞こえた様な気がする。

第24話 奈落の淵

カナとの一時的な別れからしばらくして、俺とミトは、キリトとアスナに、釣りイベントに誘われて、大物を釣り上げた。

しかし、その時に、血盟騎士団の両副団長がここにいる事がバレた。

そして、その日の夜に、75層のボス攻略戦への参加を要請するヒースクリフからのメッセージが届いた。

翌朝、俺達は準備をしていた。

ミト「まさか、新婚生活が2週間で終わるなんてね。」

カルム「もうちよい一緒に居たかった。」

経緯が経緯故に、今回の要請は断る事が出来たはずだ。

しかし、ヒースクリフの「既に被害が出ている。」という一文が重くのしかかった。

俺は、ここ最近着けていなかった防具に、ブレイラウザーにラウズアブソーバーを腕に装備した。

今回の75層のボスは、クォーターポイントである。

つまり、グリーンムアイズの時よりも更に厳しい戦闘になる事が容易に想像がつく。

ミト「まあ、話を聞くだけ聞いてもいいんじゃない？」

カルム「そうだな。」

俺達は、先に来ていたキリトとアスナと合流して、グランザムへと。

その際に、ニシダさんが見送ってくれた。

血盟騎士団の本部に着いた俺達が聞かされたのは、衝撃的な知らせだった。

カルム「偵察隊が、全滅……!?!」

ヒースクリフ「昨日の事だ。75層の迷宮区のマッピング自体は、時間は掛かりつつも何とか犠牲者を出さずに終了した。だがボス戦はかなりの苦戦が予想された……。」

そう、25層のボスには、軍の精鋭がほぼ全滅。

50層のボスには、猛攻に怯んだ結果、勝手に緊急脱出をする者が続出して戦線が一度崩壊して、全滅の憂き目に遭いそうだった。

ヒースクリフ「……そこで、我々は五ギルド合同のパーティー20人を偵察隊として送り込んだ。偵察は慎重に行われ、10人が後衛としてボス部屋前で待機した。しかし、最初の10人が部屋の中央に到達して、ボスが出現した瞬間、入り口の扉が閉まってしまった。扉は5分以上開かずに、鍵開けスキルや直接の打撃攻撃も無駄だったらしい。ようやく開いたと思ったら、部屋の中には、何も無かったそうさ。10人の姿も、ボスも。その後、黒鉄宮まで確認しに行かせたのだが……。」

そう言つて、首を左右に振つた。

アスナとミトが絞り出す様に呟いた。

アスナ「十……人も……。」

ミト「何でそんな事に……。」

キリト「まさかと思うが……。」

カルム「結晶無効化空間……？」

ヒースクリフ「そうとしか考えられないだろうな。74層も同様だった事から、恐らく、今後全てのボス部屋が結晶無効化空間と思つていいだろう。」

カルム「嘘だろ……。」

つまり、緊急脱出不可。

死ぬ確率が飛躍的に上昇した。

本格的なデスゲームになってきた。

ヒースクリフ「だが、攻略を諦める訳には行かない。結晶による脱出が不可な上に、今回は出現と同時に退路が断たれてしまう。新婚の2組を召喚するのは不本意だが、了承してくれ。」

キリト「分かりました。だが、俺にとつてはアスナの安全が最優先です。もし危険な状態になったら、アスナを守ります。」

カルム「それは、自分も同じです。いざという時は、ミトを守ります。」

ヒースクリフ「何かを守ろうとする人間は強いものだ。君たちの勇戦を期待するよ。攻略開始は3時間後。予定人数は君達を入れて34人。75層コリア市ゲートに午後1時集合だ。では解散。」

ヒースクリフと幹部陣は、退出した。

その後、俺とミト、キリトとアスナの2組に別れた。

ミト「3時間も空くね。どうする?」

カルム「そうだな。」

ミト「……何を考えているの?」

カルム「バレた?」

ミト「そんな顔の時の君は、何かを考えている証だからね。」

カルム「……正直、君を行かせたくない。もしも何かあったら……。」

ミト「私だけ安全な所で待つてろつて?それで帰つて来なかつたら、私、自殺するよ。」

カルム「……すまん。これからボス攻略の時にそんな事を考えちゃダメだよな。」

ミト「でも、皆怖いんだと思うよ。でも、キリトにカルムに、団長。その3人が居るから皆が来てくれた。だからさ、期待に応えよう。」

カルム「……そうだな!悪い。弱気になっちゃまった。終わったら、一緒に帰ろう

ぜ。」

ミト「うん……。」

俺達は、お互いを抱きしめていた。

その後、キリトとアスナと合流して、75層の主街区へ。

そこには、既に大量のプレイヤーが。

俺たちを見た途端、一斉に黙り、敬礼をしてくる奴もいた。

クライン「よう！」

右肩を叩かれたので、振り返ると、クラインにエギル、チェイス、ハヤト、ノーチラス、ユナ、ラットが居た。

カルム「ノーチラス、久しぶりだな！」

ノーチラス「僕も、参加させて貰うよ。」

ユナ「私は、ノー君が守ってくれるから。」

チェイス「俺達も参戦だ。」

ハヤト「頑張ろうぜ！」

ラット「リズが待ってるんだ。死ぬ訳にはいかないな！」

俺達が話していると、午後1時ジャストに、ヒースクリフ達が現れた。

ヒースクリフ「欠員は無いようだな。よく集まってくれた。状況は既に知っている」と

思う。厳しい戦いになるだろうが、諸君の力なら切り抜けられると信じている。……解放の日の為に！」

本当に、ヒースクリフはカリスマがある。

一体、現実世界では何をやっていたのか？

そして、ヒースクリフは俺とキリトの元に近づいてくる。

ヒースクリフ「キリト君、カルム君。今日は頼りにしているよ。」

ヒースクリフは回廊結晶を取り出して、俺達は、ゲートを通って、迷宮区へ。

ミトとは手を繋いでいる。

そうして、ボス部屋の前に着く。

ヒースクリフ「皆、準備はいいかな。今回、ボスの攻撃パターンに関して情報が無い。基本的にはKOBが前衛で攻撃を食い止めるので、その間に攻撃して欲しい。では、行こうか。」

カルム「死ぬなよ。」

ハヤト「お前もな。」

チエイス「死ぬ訳にはいかない。」

ラット「さっさと終わらせて、リズの元に帰りたいぜ。」

ノーチラス「行こう、ユナ。」

ユナ「うん。」

ボス部屋が開き始めて、プレイヤーは一斉に抜刀し、俺もエボリューションキングを発動して、右手にキングラウザーを、左手にブレイラウザーを持つ。

ヒースクリフ「戦闘、開始！」

俺達は、ボス部屋へと突入して、扉が閉じる。

だが、ボスは出現しない。

冒険者「おい……。。」

アスナ「上よ!!」

ミト「上空！」

そこに居たのは、骸骨の百足だった。

名前が表示されて、The Skullreaper、直訳して、骸骨の刈り手。

そいつは、不意に落下してきた。

ヒースクリフ「固まるな！距離を取れ!!」

ヒースクリフの叫び声で我に返り、全員が動き出す。

しかし、骨百足の落下予測地点の真下に居たプレイヤー3人の動きが、僅かに遅れた。

キリト「こっちだ!!」

カルム「早く!!」

だが、間に合わなかったのか、落下の衝撃でたたらを踏み、背後から攻撃されて、吹っ飛ばされて、全員、死んだ。

ミト「っ!!」

ユナ「え？」

カルム「一撃で、だと!？」

ノーチラス「そんなバカな!？」

アスナ「無茶苦茶だわ……。」

ハヤト「マジかよ!？」

チエイス「嘘だろ……!？」

俺達が唾然としていると、骨百足は、別の一団に襲いかかる。

しかし、ヒースクリフが迎撃する。

もう片方の鎌は、キリトとアスナが迎撃していく。

キリト「皆!側面から頼む!!」

カルム「ああ!!」

ノーチラス「行くぞ!」

ユナ「皆、お願い!!」

ミト「……っ!!」

そうして、俺達と骨百足との戦闘は、約2時間にも及んだ。

その際に、俺はミトと連携をしていた。

しかし、俺はミトが生き残ったのは嬉しかったが、周囲の人は、たくさん死んだ。

ノーチラス「何人……やられた？」

ノーチラスの問いに、俺は確認して、答えた。

カルム「……14人も死んだ。」

ハヤト「嘘だろ……!?!」

チエイス「漸く、4分の3だな。」

まだ、25層もあるのだ。

このペースでは、ラスボスと戦えるのはたった1人になりかねない。

恐らく、ヒースクリフだ。

ヒースクリフは、普通に立っていた。

だが、その視線に違和感を感じた。

そう、あの時の決闘の時のような。

キリトも同じ様に感じたようで、俺が気づいた時には、俺と同時に駆け出して、レイ

ジスパイクを繰り出していた。

その時、攻撃を受けたヒースクリフの胸に、システムメッセージが。

「Immortal Object」、それは、先日のユイやカナも見せた属性だ。

アスナ「キリト君、カルム君、何を……!?!」

ミト「システムの不死……? どういうことですか、団長……?」

キリト「……この世界に来てからずっと疑問に思ってたんだ。アイツは今、どこから俺たちを観察し、世界を調整してるんだろう、ってな。でも俺は単純な真理を忘れていたよ。どんな子供でも知ってることさ。」

カルム「《他人のやってるRPGを傍から眺めるほどつまらないことはない。》……そうなんだろう、茅場晶彦。」

俺達は、そうカミングアウトした。

第25話 世界の終焉

俺達が、ヒースクリフの正体を看破して、周囲には驚愕の表情が広がっていく。当のヒースクリフは、あくまで平然としていた。

アスナ「団長……本当……なんですか？」

ミト「嘘、でしょ……。」

ヒースクリフ「……何故気付いたのか参考までに教えてもらえるかな……？」

キリト「……最初におかしいと思ったのは例のデュエルの時だ。最後の一瞬だけ、あんた余りにも速過ぎたよ。」

カルム「俺もキリトと同じだ。」

ヒースクリフ「やはりそうか。あれは私にとつても痛恨事だった。君達の動きに圧倒されてついシステムのオーバードライヴを使ってしまった。予定では攻略が95層に達するまでは明かさないうもりだったのだがな。……確かに私は茅場晶彦だ。付け加えれば、最上層で君達を待つはずだったこのゲームの最終ボスでもある。」

ヒースクリフ「……いや、茅場晶彦は確かにそう宣言した。」

ミトがよろめいたので、視線を逸らさずに支えた。

キリト「……………趣味が良いとは言えないぜ。」

カルム「最強のプレイヤーが一転、最悪のラスボスにかよ。」

ヒースクリフ「なかなかいいシナリオだろう？盛り上がったとは思うが、まさかたかが4分の3地点で看破されてしまうとはな。…………キリト君、君はこの世界で最大の不確定因子だとは思っていたが、ここまでとはな。それに、カルム君にも驚いたな。」

茅場晶彦は、薄い笑みを浮かべながら肩をすくめた。

ヒースクリフ「…………最終的に私の前に立つのは君たちだと予想していた。二刀流スキルは全てのプレイヤーの中で最大の反応速度を持つ者に与えられ、エポリューションキンは、対応するアンデッドモンスターを倒し、それら全てと融合し、精神的に強い者に与えられるスキルだが、ここまでとはな。まあ…………この想定外の展開もネットワークRPGの醍醐味と言うべきなのかな…………。」

その時、1人の血盟騎士団のプレイヤーが立ち上がる。

冒険者「貴様…………貴様が…………。俺たちの忠誠…………希望を…………よくも…………よくも…………よくも…………！」

だが、茅場晶彦が操作したと同時に俺とキリトを除く全員が麻痺状態になった。

キリト「……………どうするつもりだ。」

カルム「まさか、この場で全員殺して隠蔽する気なのか…………？」

ヒースクリフ「まさか。そんな理不尽な真似はしないさ。こうなつては仕方ない。予定を早めて最上層の《紅玉宮》にて、君達を待つとしよう。だが、その前に……。キリト君、カルム君。君たちには報酬をやらないとな。チャンスをあげよう。今この場で私とそれぞれ一対一で戦うチャンスを。無論不死属性は解除する。私に勝てばゲームはクリアされ、全プレイヤーがこの世界からログアウト出来る。……………どうかな？」

その言葉を聞いた途端、俺は覚悟を決めた。

カルム「良いぜ。俺が相手だ。」

キリト「カルム!？」

ミト「ダメよ!あなたを排除する気よ!一旦体制を整えて……………!」

カルム「ここで逃げる訳には行かない。」

ミト「死ぬつもりじゃない……………よね。」

カルム「勿論だ。」

ミト「分かった。信じてる。」

キリト「カルム……………」

アスナ「カルム君……………」

エギル「カルム!やめろ……………っ!」

クライン「カルムーっ!」

俺はエギルとクラインを見て。

カルム「エギル、これまでサポートありがとうございました。知ってたぞ。儲けの殆どを中層プレイヤーの育成に注ぎ込んだことを。クライン。少しか話せませんでした。良い人だと思いますよ。」

エギル「バカ野郎……っ!!」

クライン「て、テメエ!カルム!そんな事言うなよ!」

次にチエイス、ハヤト、ラット、ノーチラスにユナを見る。

カルム「チエイス、堅物も程々にな。ハヤトはチエイスを支えてやれ。ラット、俺のダチでありがとうな。ノーチラス、ユナをちゃんと守つてやれ。ユナも、ノーチラスにあんまり迷惑かけんな。」

チエイス「カルム……。」

ハヤト「ふざけんなよ……!」

ラット「お前……!」

ノーチラス「やめろ……!」

ユナ「行かないで……!」

そうして、俺とヒースクリフは向かい合った。

カルム「行くぞ。茅場。」

ヒースクリフ「来たまえ、カルム君。」
そうして、俺と茅場の決戦が始まった。

茅場晶彦と剣をぶつけている中、俺は何故か冷静だった。

コイツは、そこまでしたかったのか。

そう思っていた。

俺のキングラウザーとブレイラウザーがヒースクリフの盾にぶつかり、ヒースクリフは反撃する。

俺はすぐさま決着をつけるべく、ストレートフラッシュを発動する。

だが、見切っているといわんがばかりに防いだ。

カルム「な!？」

ヒースクリフ「残念だよ、カルム君。」

一瞬の隙を着いて、俺は吹っ飛ばされる。

何とか0になってはいないものの、このままでは危ない。

ヒースクリフが迫る中、3つの人影が、ヒースクリフの攻撃を防御する。

それは、キリトにアスナ、ミトだった。

ヒースクリフ「な!？」

キリト「甘いぜ、ヒースクリフ。」

アスナ「カルム君、大丈夫!？」

カルム「ああ。」

ミト「じゃあ、反撃よ！」

俺は立ち上がり、3人と合流して、ヒースクリフと対峙する。

ヒースクリフ「まさか、麻痺を自力で解除するとはな。何がどうなっているのか。」

カルム「……………なるほどな。茅場、もしかしたらな、3人の思いが、システムを越え
たんじゃないのか？」

チエイス「カルム！」

ラット「カルム！」

ノーチラス「カルム！」

その時、チエイス、ラット、ノーチラスからカードが飛んでくる。

それも、それぞれの6のカードだ。

俺も、6とキングのカードを取り出して、大技を放つ。

『スペード、ハート、ダイヤ、クラブ6、スペードキング!』

『フォーカード!』

俺のフォーカードとキリト、アスナ、ミトの攻撃が茅場に当たり、HPが0になった。
ヒースクリフ「見事だ。諸君。」

ヒースクリフの体はポリゴンとなって、消滅して、ゲームクリアのシステムボイスが流れ始めた。

目を開けると、そこは、夕方の空だった。

周囲を見ると、すぐ近くにミトが、少し離れた所にキリトとアスナが居た。

ミト「お疲れ。カルム。」

カルム「ああ。」

ミト「あ……。」

ミトのしている先には、俺たちのログハウスがあつた22層だ。

茅場「なかなか絶景だな。」

声が出た方に向くと、そこには茅場晶彦が居た。

キリト達も気付いたようで、茅場を見ていた。

俺達は、キリト達の元に向かい、茅場に気になる事を聞いた。

カルム「あれは、どうなっている？」

茅場「比喩的表現だ。現在、アーガス本社地下5階に設置されたSAOメインフレームの全記憶装置でデータの完全消去を行っている。あと十分程でこの世界の何もかもが消滅する。」

アスナ「あそこにいた人達は……どうなったの？」

茅場「心配には及ばない。先程、生き残った全プレイヤー、6147人のログアウトが完了した。」

ミト「……………死んだ人は、どうなったの？そして、何で私達はログアウトしてないの？」

茅場「命は、そんな簡単に軽々しく扱うべきではない。彼らの意識は戻ってこない。死者が消え去るのはどこの世界でも一緒さ。君たちとは最後に話をしたくてね。」

キリト「何で、こんなことをしたんだ？」

茅場が苦笑した。

茅場「何故……………か。私も長い間忘れていたよ。何故だろうな。私はあの城を、この世界を創り出す事を欲していた。そして、私はそれを見る事が出来た。私はね、まだ信じているのだよ。どこかの世界には、本当に、浮遊城アインクラッドが存在する事を。」

キリト「ああ……………。そうだと良いな。」

カルム「きつと、あると思うぜ。」

茅場「言い忘れていたな。ゲームクリアおめでとう、キリト君、アスナ君、カルム君、そしてミト君。……………さて、私はそろそろ行くよ。」

そう言つて、茅場晶彦は消えた。

既にアインクラッドは、先端のみが残っていた。

だが、それも消えた。

今、ここに残っているのは、俺とミト、キリトとアスナだ。

キリト「……………そろそろ、現実世界に戻るんだな。」

アスナ「そうだね。」

カルム「ああ。」

ミト「ねえ、最後に皆で名前を教え合おう。リアルでも会うために。」

キリト「……………じゃあ、俺は桐ヶ谷和人。多分先月で16歳。」

カルム「俺は小野冬馬。先月で16歳だ。」

アスナ「年下だったんだ。私は、結城明日奈。17歳。」

ミト「私は兎沢深澄。17歳。」

カルム「意外にも、アスナとミトは年上だったのか。」

キリト「じゃあ、リアルで。」

アスナ「うん。」

ミト「またね。」

そうして、俺たちの意識は飛んだ。

目が覚めると、そこは、どこかの天井だった。

遂に、戻ってきたのだ。

懐かしい、リアルに。

そうして、俺はベッドから立ち上がったが、すぐに膝が折れそうになった。

随分、弱ったものだ。

苦笑しながら、診察衣を着て、ドアに向かっていく。

大切な人であるミト……いや、深澄に、大切な友人のキリト……和人、アスナ……明
日奈に会いに行くために。

俺は、足を動かす。

フエアリイ・ダンス

第1話 それぞれの再会と疑惑

デスゲーム、《ソードアート・オンライン》から解放されて、2時間、ふらついていた所を看護師に見つかり、病室へと戻された。

無論、少しは抵抗した。

とは言っても、その抵抗は虚しく終わり、俺はベッドで起き上がった状態で、色々と検査を受けていた。

しばらくすると、1人のスーツ姿の男性が入ってきた。

冬馬「あの、どちら様ですか？」

菊岡「これは失礼した。僕は、総務省総合通信基盤局高度通信網振興課第二別室の通信ネットワーク内仮想空間管理課、通称《仮想課》に所属してる、菊岡誠二郎です。」

冬馬「つまり、役人ですか。そんなあなたが、何故僕の所に？」

菊岡「随分と、警戒心が強いね。」

冬馬「当たり前です。」

菊岡「まあ良いか。流石は、あの小野洋子の息子さんだ。」

冬馬「……母さんの事を知ってるんですか？」

菊岡「色々と噂が流れててね。」

本当に、何でそんな人が俺のところか。

冬馬「……それで、用件は何ですか？」

菊岡「おっと、そうだった。……まあ簡単に言えば、SAOで何があつたのかわりたくてね。」

冬馬「何で俺に。」

菊岡「まあ、良いじゃないか。」

冬馬「……分かりました。しかし、条件があります。」

菊岡「何だい？」

冬馬「桐ヶ谷和人に、結城明日奈、そして、兎沢深澄の居場所を教えて貰いたい。」

菊岡「なるほどね。分かった。少し待っててくれないか？」

そう言つて、菊岡誠二郎は、数分間、あちこちに電話をかけまくつた。

しばらくして、当惑した表情でこちらを見る。

菊岡「桐ヶ谷和人君は、まさにこの病院で、結城明日奈さんと兎沢深澄さんは、所沢の病院に收容されている。しかし、結城明日奈さんだけが未だに覚醒してないそうだ。」

冬馬「……? なら、この病院に居る桐ヶ谷和人に会わせてほしい。」

菊岡「なら、車椅子でも良いかい?」

冬馬「ああ。」

そうして、俺は車椅子に乗りながら、移動していた。

その際に考えていたのは、アスナの事だ。

何故、アスナだけが目覚めてないんだ?

そう考えていると、1人の青年と顔を合わせた。

俺と同じく、車椅子に乗っているが、その顔は忘れる事が無い。

あの、浮遊城における親友を。

冬馬「やあ、キリト。」

和人「よお、カルム。」

こうして、黒の剣士キリトと再会を果たす事ができた。

菊岡さんが空気を読んでくれて、「少し退出するよ。」と言って居なくなつた。

冬馬「まさか、同じ病院だったとはな。」

和人「ああ。それで、アスナとミトは?」

冬馬「キリト、いや和人。心して聞いてくれ。アスナとミトは、所沢の病院に居る。」

和人「……そうか。」

冬馬「だけど、アスナだけが目覚めてない。」

和人「何だと!？」

冬馬「事実だ。」

和人「……。」

和人は、呆然として居た。

顔を上げて、聞いてきた。

和人「……茅場の仕業か？」

冬馬「いや、アイツの性格から、それは無いと思う。」

和人「だよな。」

すると、菊岡さんが入ってきた。

菊岡「すまないね、2人とも。もう2人お客さんだよ。」

和人「誰だ？」

冬馬「分かりました。……誰だろ？」

中に入ってきたのは、もう2人の親友だった。

冬馬「ハヤト、チェイス……!」

和人「お前らもこの病院だったのか。」

侑斗「ああ、俺はリアルでは詩島侑斗だ。」

英介「俺は、狩野英介だ。」

ハヤト改め詩島侑斗、チェイス改め狩野英介と再会した。

しばらく情報交換をして、菊岡さんに、SAOでの出来事を話して、お開きになった。その後、リハビリを行い、12月には何とか退院する事が出来た。

そして、12月15日、俺はとあるカフェで待ち合わせをしていた。

すると、背後から声をかけられた。

???「久しぶりね。」

冬馬「そうだな。ミト。」

そう、ミトこと、兎沢深澄と待ち合わせをしていた。

俺が座っている席の向かいに座った。

深澄「本当に、こんなに早く会えるなんて思わなかった。」

冬馬「俺もだ。……本当なら、キリトとアスナも居れば良かったんだがな。」

深澄「アスナが目覚めてないって、本当なのね。」

冬馬「ああ。」

深澄「何で……?」

冬馬「分からん。何故、アスナだけじゃなく、他の300人ものプレイヤーが目覚めないんだろうな。」

俺達は、再会を喜びつつ、何故一部のプレイヤーが目覚めてない事を話した。そうして、俺達は一旦帰る事に。

家に帰ると、父さんと母さんが何かを話していた。

冬馬「ただいま。」

倫太郎「お帰り。」

洋子「お帰り。……それで？あなたの彼女とは会えたの？」

冬馬「……ああ。」

倫太郎「いきなり何を聞いてるんだ。」

洋子「だって、あの剣道やゲームに夢中で、仲のいい女の子が居ない冬馬に彼女が出てるんでしょ。」

冬馬「言い方酷くない？」

倫太郎「……本題忘れてないか？」

洋子「そうだった。……帰還者学校って言うのがあるんだけど。」

冬馬「帰還者学校？」

母さん曰く、SAOに囚われて学業を出来ていない子供への救済措置だそうだ。

俺はそれに承諾して、夕飯を食べて寝た。

第2話 己の無力

侑斗 side

1月19日、俺は桐ヶ谷家に来ていた。

理由は、桐ヶ谷直葉と会う為だ。

桐ヶ谷直葉とは、SAOをやる前から剣道仲間としてだ。

正直言つて、キリトが直葉の兄貴だと知つてとても驚いた。

だが、俺はそれでも気にする事なく接する。

直葉「あの、侑斗くん？本当に大丈夫なの？」

侑斗「大丈夫だって。俺、結構早くリハビリが終わったからな！」

和人「お前のその余裕はどこからくるんだ？」

侑斗「お前は少しは食えよ、キリト。」

和人「うるさいな！」

直葉「お兄ちゃんとは、どんな仲なの？」

侑斗「簡単に言えば、親友だ！」

和人「その割には結構、お前とは接点がないんだけどな。」

侑斗「それを言うなって！どうしたスグ？来てても良いぜ！」

直葉「まあ、良いけど……。」

そうしてしばらく試合をした。

流石にブランクがあったが、それでも何本かは取る事が出来た。

途中で、和人がアスナのいる病院に向かって行った。

侑斗「いやあ、燃えたぜ！」

直葉「まさか、何本か取られるなんて。」

侑斗「まあ、前の世界じゃ結構剣、振ってたからな！」

直葉「本当に強いや。君は。」

侑斗「それが俺だ。」

直葉「自分で言う？」

「……………ハハハッ！」

俺と直葉は、仲が良い。

直葉が上級生に虐められている所を何度か助けた。

それ以降、結構遊ぶようになった。

だが、最近、どうにも直葉の事が気になっている。

S A Oに囚われて、もう会えないと思っただからか？

直葉「そう言えばさ、侑斗君って、知ってる？アミュスフィアを。」

侑斗「アミュスフィア？何だそれ？」

直葉「ナーヴギアの代わりに出た奴。」

侑斗「って事は。スグ、お前やってるのか？」

直葉「うん。ALOって言うんだけどね。」

直葉曰く、妖精をアバターにして操作するやつで、SAO事件の時に発売されたらしい。

直葉「……あのさ、一緒にALOやらない？」

侑斗「面白そうだな！……ん？姉ちゃんからメールだ。」

そのメールに書かれていたのは、ちょうどアミュスフィアを買ったから、ALOを一緒にやろうとの事だ。

……盗み聞きしてるんじゃないだろうな。

侑斗「丁度、姉ちゃんがアミュスフィアを買ってくれたから、やろうぜ！」

直葉「本当!?!じゃあ、やろうよ！」

そうして、俺は直葉とALOをやる約束をして家に帰った。

冬馬side

俺は、深澄と和人と待ち合わせをしていて、所沢の病院へと向かった。

俺としては、和人と深澄が心配だからだ。

和人は、アスナと恋人関係で、深澄とは親友だからな。

最近、思い詰めている様な気がして、とても不安だ。

冬馬「和人、深澄。2人とも無茶するなよ。」

和人「悪い。」

深澄「でも、明日奈が心配で。」

冬馬「気持ちには分かるけど。」

アスナがいる病室に入り、和人と深澄が明日奈の手を握っているのを見て、本当に不安になってくる。

正午になって、帰ろうとすると。

??? 「おお、来ていたのか桐ヶ谷君、小野君に兔澤君。」

そこに居たのは、アスナの父親の結城彰三だった。

レクトのCEOだそうだ。

和人「こんにちは。」

深澄「お邪魔してます、明日奈のお父さん。」

冬馬「どうも。」

彰三「いやいや、いつでも来てもらって構わんよ。この子も喜ぶ。」

彰三氏も、大分不安だろうに。

すると、今日は同行者がいる事に気づく。

彰三「彼とは初めてだな。うちの研究所で主任をしている須郷君だ。」

須郷「よろしく、須郷伸之です。……そうか、君たちがあの英雄キリトにカルム、ミトか。」

和人「……桐ヶ谷和人です。よろしく。」

深澄「……兔沢深澄です。」

冬馬「……小野冬馬です。」

何だろうか、こいつ妙に怪しい。

と言うか、彰三氏、喋ったのか。

俺達の視線に首を縮める。

彰三「いや、すまん。SAOサーバー内部での事は口外禁止だったな。あまりにもドラマティックな話なのでつい喋ってしまった。彼は私の腹心の息子だね。昔から家族同然の付き合いなんだ。」

須郷「ああ、社長、その事なんですけど……。来月にでも、正式にお話を決めさせて頂きたいと思います。」

何の事やらと沈黙していると、彰三氏が退出して、俺、深澄、和人、須郷の4人が残つ

た。

須郷「……桐ヶ谷君、君はあのゲームの中で、明日奈と暮らしてたんだって？」

和人「……ええ。」

須郷「それなら、僕と君はやや複雑な関係という事になるかな。」

冬馬「どういう意味だ？」

俺がそう問うと、須郷はニヤニヤしてきた。

俺は、コイツが彰三氏の前では猫を被っていると悟った。

須郷「さっきの話はねえ……僕と明日奈が結婚するという話だよ。」

深澄「えっ……!？」

和人「そんな事……出来るわけが……。」

須郷「確かに、この状態では意思確認が取れない故に法的な入籍は出来ないがね。書類上、僕が結城家の養子に入る事になる。……実の所、この娘は、昔から僕の事を嫌っていてね。親達はそれを知らないが、いざ結婚となれば本人から拒絶されるだろう。だからね、この状況はとも都合がいいんだ。」

俺は、コイツがとんでもない奴だと察した。

だから、それに気づいていたアスナは奴を拒絶した。

須郷の腕を和人が引き離した。

冬馬「アンタ、アスナの昏睡状態を利用する気なのか。」

須郷「利用？嫌だなあ、正当な権利さ。ねえ桐ヶ谷君に小野君に兎沢君。SAOを開発したアーガスがその後どうなったか知ってる？」

深澄「……解散したって話だけ。」

須郷「そう。アーガスは解散して、SAOサーバーの維持は僕の部署で行っている。

……つまり明日奈の命は今やこの僕が維持していると言っている。なら、僅かばかりの対価を要求したっていいじゃないか？」

そういう事か。

アスナの命を、己の目的の為に利用する気なのだ。

俺達が立ち尽くしていると、須郷は冷ややかな声を出した。

須郷「……桐ヶ谷君、君がゲームの中でこの娘と何を約束したのかわからないけどね、今後ここには一切来ないで欲しいな。それは君たちも同じだよ、小野君、兎沢君。」

それに、強く拳を握り締めたが、何も出来ない。

須郷が哄笑を堪える様に言った。

須郷「式は来月この病室で行う。君達も呼んでやるよ。それじゃあな、せいぜい最後の別れを惜しみたまえ、3人の英雄君。」

須郷は俺達の肩をポンと叩いて、退出した。

その後、シヨックを受けた和人を連れて、俺と深澄は、駅に着いた。

深澄「……………キリトの事、お願いね。」

冬馬「ああ……………」

和人「……………」

その後、一旦桐ヶ谷家に送って行った。

途中で、泣いていた。

俺は、とても悔しかった。

親友が泣いてるのに慰められない自分、親友の大事な人を己の目的の為に利用する須郷を見ているだけの自分、そして、あの浮遊城で英雄と呼ばれていても、現実では無力な事を。

冬馬「すまない……………キリト……………」

第3話 決意のダイブ

侑斗 side

直葉から、ALOをやるうとの誘われたあの後に帰宅、姉ちゃんに話を聞く事に。

父さんと母さんは、交通事故で亡くなってしまい、現在は姉ちゃんと一緒に暮らしている。

侑斗「姉ちゃん、アミュスファイア買ったって本当か？」

玲奈「本当よ。」

詩島玲奈。

俺の姉ちゃんだ。

現在は、総務省の仮想課という部署で働いていて、昏睡状態のSAOプレイヤーをどうにかしようとして模索中らしい。

侑斗「て言うか、良いのかよ？俺がまたVRをやる事に関して。」

玲奈「良いのよ。それに、直葉ちゃんに誘われたんでしょ？」

侑斗「そうなんだけど、ねえ。もしかして盗み聞きしてないよな？」

玲奈「……な、何の事かしら？」

本当に、嘘が下手だ。

分かりやすい。

侑斗「まあ、アミユスフィアに関しては受け取っておくよ。」

玲奈「そう。……直葉ちゃんよろしくね。」

侑斗「へいへい。姉ちゃんも、そろそろ良い男探した方が良いんじゃない？」

玲奈「しようがないでしょ！まだSAOプレイヤー300人が目覚めてないのよ！そんな時に婚活なんて出来ないわよ！」

侑斗「本当に真面目なんだから。」

そんな感じで、姉ちゃんからアミユスフィアとALOのソフトを受け取り、始める事に。

妖精を選ぶ所が、SAOとは違うな。

ちなみに、俺は敏捷性が高いシルフを選ぶ事になっている。

偶然か否か、直葉もシルフらしい。

侑斗「さて、リンク・スタート！」

俺は新たな世界へと旅立った。

冬馬side

和人を送り届けて、家へと戻り、一晩中自分の無力さに嘆いていた。

冬馬「何が紫紺の剣士だ……。クソっ。」

洋子「冬馬？どうしたの？」

冬馬「……。何でもない。」

倫太郎「何でもないなら、そんな風にならないだろう。……話してくれ。」

冬馬「……。分かった。」

そうして、俺は、両親に、自分の不甲斐なさを話した。

倫太郎「そうか。和人君が。」

洋子「それは本当にシヨックだったでしょうね。」

冬馬「俺は、アイツを慰められなかった。アイツが悲しんでいるのに……！」

倫太郎「レクトの須郷伸之か。」

洋子「……。あの人、どうにも怪しいしね。」

冬馬「知ってるのか？」

倫太郎「今、レクトがどうにもキナ臭くてね。母さんのコネを生かして、調査してる。」

洋子「……。でも、今の所収穫は無しね。」

冬馬「そうか……。」

洋子「……。冬馬。何があっても、和人君とあなたの彼女を支えてあげて。」

冬馬「……。何で深澄が出てくるんだ？」

洋子「私の調査は、凄いのよ。」

色々と励まされて、翌朝になった。

本当に、うちの両親には頭が上がらない。

剣道の練習もお休みだったので、どうしようかと思っていたら、エギルからメールが来た。

冬馬「エギル？」

そう、エギルとは和人と深澄と共に東京で再会した。

一応、その時にメアドは交換していた。

タイトルは、「Look at this」となっている。

これを見ろとの事だ。

何事かと思えば本文の部分を見ると、写真が添付されていた。

その写真を見て、驚愕した。

何と、アスナだったからだ。

冬馬「嘘だろ……。」

それを見て驚いていると、電話が鳴った。

誰かと思うと、和人だった。

冬馬「どうした？」

和人「悪いな。急にかけて。……今からダイシー・カフェに来れないか？もちろんミトも連れて来てくれ。」

冬馬「分かった。ミトには俺からかけておく。」

和人「頼む。」

和人との電話が切れて、俺はすぐさまミトに電話をかけた。

冬馬「もしもし。」

深澄「カルム！この写真って……！」

冬馬「ああ。その事を話すから、エギルの店のダイシー・カフェに来てくれとの事だ。」

深澄「分かったわ。すぐに行く。」

そうして、俺はすぐさまダイシー・カフェへと向かう。

しばらくして、深澄と合流し、店内に入る。

エギル「よお、キリトよりは遅かったな。」

冬馬「どうも、エギル。」

深澄「挨拶は良いわ。それより、あの写真に関してよ。」

和人「そういうことだ。」

エギルはすぐには答えずに、カウンターの下に手をやって、パッケージを取り出す。

プラットフォームは、アミユスファイア。

和人「聞いた事のないハードだな。」

エギル「《アマミスファイア》。オレ達が向こう側にいる間に発売されたんだ。ナーヴギアの後継機だよ、そいつは。」

「……………」

エギル曰く、フルダイブ型ゲームの需要はあるらしく、ナーヴギアの後継機として出されたそうだ。

和人「アルフ……ヘイム・オンライン?……どういう意味だ?」

エギル「アルヴヘイム、と発音するらしい。妖精の国、っていう意味だとさ。」

冬馬「妖精ね。……って事は、ほのぼの系のゲームか?」

エギル「それがそうじゃない。ある意味ハードなんだよ。」

深澄「どういう意味で?」

エギル「どスキル制、プレイヤースキル重視。PK推奨。所謂レベルの概念は無いぞうだ。」

冬馬「それは分かった。でも、PK推奨とは何でだ?」

エギル「プレイヤーはキャラメイクで色んな妖精の種族を選ぶわけだが、違う種族間ならキル有りなんだと。」

和人「そりゃ確かにハードだ。」

深澄「でも、そんなマニア向けの仕様じゃ人気出ないでしょ。」
確かに、それじゃあ、人気も出ない。

だが、エギルは否定した。

エギル「そう思っただけだな、今大人気なんだと。理由は空を飛べるからだ。」

冬馬「それは凄いな。……それで、本題に戻ろう。」

エギル「お前ら、どう思う？」

そう聞かれて、改めて凝視する。

和人「似ている……。」

深澄「見間違う筈がない。」

冬馬「アスナだ……。」

エギル「やつぱりそう思うか。」

和人「それで、これはどこなんだ？」

エギル「その中だよ。アルヴ Heim・オンラインの。」

エギル曰く、多段ロケット式で世界樹という樹に向かって行った時に撮影されたそう
だ。

本当にキナ臭くなってきたな、レクト。

和人「エギル、このソフト、貰って行っていいか？」

エギル「構わんが……。どうせ、ミトとカルムも行くだろうと思って、もう二つあるぜ。」

冬馬「ありがとう。」

深澄「さて、ゲーム機買わないと。」

エギル「それなんだがな、ナーヴギアでも行けるぜ。何せ、アミユスファイアは、単なるアレのセキユリティ強化版でしかないしな。」

そうして、俺達はアルヴヘイム・オンラインの世界へと向かう事に。

エギルには、一応、クライン、ハヤト、チェイス、ラット、ヒロミ、シリカ、リズベツト、ノーチラス、ユナ、月夜の黒猫団のメンツ、ディアベル、レイモンド、フィリップに声をかけておいてくれと頼んでおいた。

ミトと共にしようとしたら、エギルに声をかけられた。

エギル「なあ、本当に大丈夫なのか？」

冬馬「何が？」

エギル「いや、こんな事を聞くのは野暮だな。絶対にアスナを救えよ。」

冬馬「ああ。約束だ。この悲しみの物語の結末は、俺達が決める。」

深澄「だから、これが終わったらオフ会やりましょう。」

そうして、自宅に戻る事に。

ミトとは話し合い、種族は共にインプにする事にした。同じ種族にして、早くキリトと合流する為にだ。

帰宅すると、両親は出掛けていたが、メモが置いてあった。

内容は、『どうせ、言ってもナーヴギアを使う気でしょう。なら、絶対に解決して、帰ってきてね。』だそうだ。

冬馬「本当に、頭が上がらないな。」

苦笑しながら、俺は自室へと向かい、少し古ぼけた感じのナーヴギアを手取る。

頼むぜ、アスナを救って、キリトとミトを笑顔にする為に力を貸してくれ。

そう心の中で念じて、被り、あのお決まりの言葉を言う。

冬馬「リンク・スタート！」

そう言っつて、俺の仮想の足が、異世界に着地した。

と言っつても、アカウント情報登録ステージだが。

パスワードを打ち込み、SAOと同じくカルムと設定する。

キャラクターの容姿はランダム生成されるそうだが、俺は気にしない。

インプをセレクトして、ALOの世界へと。

第4話 それぞれの邂逅

ハヤト side

俺はシルフを選択して、目を開けると、そこには妖精の都が広がっていた。

ハヤト「すげえ！SAOとは違うな！」

???「お待たせ！」

ハヤト「ん？」

俺が周囲を見渡していると、金髪でポニーテールの1人の女の子が近づいてきた。

ハヤト「あの、誰ですかね？」

リーファ「あ、私、リーファ。」

ハヤト「リーファ？ああ！スグか！」

リーファ「そうそう！あ、でも、ここではリーファだから。」

ハヤト「悪いな。」

リーファ「でも、侑斗君は、リアルに殆ど似てるね！」

ハヤト「え？」

気になった俺は、そこら辺の窓で見ると本当にリアルに近かった。

違いは、目が濃い緑で、髪が黄緑色で、耳が妖精みたいになっている事だけだ。ステータスも見てみると、初期値然とした物だった。

しかし、スキル一覧を見て、驚いた。

どれもこれも、SAOで習得したスキルだ。

熟練度も全く同じ。

これは、どういうわけか分かるまでは黙っておくべきだな。

そう思い、リーファに声をかける。

ハヤト「悪い、心配かけたな。」

リーファ「大丈夫だよ。さて、早速で悪いんだけど、武器屋行こー！」

ハヤト「おう！」

そこで、色々と武器を物色して、SAOのタイタンソードよりは軽いが、両刃の片手

直剣をセレクトした。

防具も、色々と着けた。

そうして、リーファと共に出かけた。

カルムside

初期設定も終えて、目を開けると、そこには街が広がっていた。

インプの首都に着いていた。

カルム「へええ。結構凄いな。」

そうやって周囲を見渡していると、1人の女性が声をかけた。

???「すみません、もしかして、カルム？」

カルム「ん？」

そこに居たのは、ポニーテールにした女性で俺はその人を見間違う筈がない。

カルム「ミトか？」

ミト「良かった！カルムだった！」

何とかミトと合流して、俺達は少し離れた裏路地に向かった。

ミト「どう思う？」

カルム「もしかして、見た目か？」

ミト「それもあるんだけど、ステータスを見てみて。」

カルム「え？」

ステータスを見ると、初期値そのものだったのだが、スキルを見て、驚愕した。

それは、SAOで習得した熟練度そのものだったのだ。

流石に、《フュージョンジャック》や《エボリューションキング》といったスキルは無

くなっていたが、それらはSAOとは共通ではないという事だ。

カルム「何で、SAOでのスキルが。」

ミト「少し、アイテム一覧も見てみて。」
カルム「おう。……………うわ。」

アイテム欄も見てみると、殆どのアイテムが文字化けしていた。つまり、これではブレイラウザーが使えるかどうか分からない。

しかし、あの2つのスキルが使えない以上、ブレイラウザーやラウズアブソーバーが使えない事は確かだ。

カルム「あつ……………」

ミト「どうしたの？」

カルム「待てよ……………まさか。」

俺はアイテム欄をスクロールしていくと、とあるアイテムを見つけた。

《M H C P 0 0 3 》。

それをミトにも見せると、ミトの顔に驚愕の表情が浮かんだ。

実体化させて、クリスタルを2回叩くと、光が迸った。

カルム「あつ……………!?!」

ミト「クリスタルが……………!?!」

俺達がそれを見守っていると、光から1人の少女が出てきた。

白いワンピースを着ていて、黒い髪だった。

俺達は、その子を知っている。

少女が目を少しずつ開いていく。

やがて、俺たちをまっすぐ見つめた。

カルム「俺だ……。カルムだ。」

ミト「私は、ミトよ。分かる……。？」

俺達はそう呼びかけたが、今更気づく。

俺たちの見た目は、S A Oとは違う事に。

だが、それは杞憂だった。

カナ「また、会えたね、パパ、ママ。」

俺たちにカナが抱きついた。

カナ、俺達がアインクラッドで出会った俺たちの愛娘だ。

暫く抱き合っていて、路地にあつた箱に腰掛けた。

カルム「さて、どうなってんのやら。」

カナ「……………？」

ミト「いや、ここはS A Oの中じゃないの。」

俺達は、カナが消滅してからを掻い摘んで説明した。

カナ「ちよっと待ってね。」

カナが眼を瞑ったが、すぐに開けた。

カナ「ここは、《ソードアート・オンライン》サーバーのコピーだよ。」

カルム「コピー……?」

ミト「どういう事なの?」

カナ「はい。基幹プログラム群やグラフィック形式は完全に同一で、私がこの姿を再現出来るのもそれが理由。でも、カーディナル・システムのバージョンが古いわ。」

ミト「なるほどね。」

カルム「なら、何で俺たちの個人データがここにあるんだ?」

カナ「ちよつと、2人のデータを覗かせてもらうよ。」

カナは再び眼を閉じた。

カナ「やつぱり……。これは、SAOでパパとママが使用してたキャラクター・データその物だよ。セーブデータのフォーマットがほぼ同じだから、2つのゲームに共通するスキルの熟練度が引き継がれたんだと思う。所持アイテムは、破損してるから、全て破棄した方が良いと思うよ。」

カルム「そ、そっか。」

ミト「勿体ないけど、しょうがないよね。」

ありがたいな、ブレイラウザー、安らかに眠れよ。

そう念じながら、破棄した。

残ったのは、正規の初期装備だけだった。

まあ、アスナを助ける為には、こんなステータスでも文句は無い。

カルム「そう言えば、カナはこの世界ではどういう扱いなんだ？」

ミト「そういえば、そうね。」

カナ「えーと、このアルヴヘイム・オンラインにも、プレイヤーサポート用の擬似人格プログラムがあつて、《ナビゲーション・ピクシー》って言うんだけど、私はそこに分類されているね。」

カナは一瞬難しい顔をした。

その直後、カナが消滅した。

カルム「カナ!？」

ミト「どうしたの!？」

膝を見てみると、身長は10センチで、半透明の翅が2枚背中から生えている。

カナ「これが、ピクシーとしての姿よ。」

カルム「へえ……。」

ミト「可愛いわね。」

カナ「2人とも、くすぐったいよ。」

俺達が指先でほつぺたを突いていると、カナは俺の肩に止まった。それで、本題を切り出す事に。

カルム「カナ。実は、協力して欲しい。」

ミト「実は、この世界に、アスナがいるの。」

カナ「えっ……アスナさんが!?!? どういう事なんですか?」

須郷の事は伏せつつ、掻い摘んで話した。

カナ「そうなの……。ごめん、パパ、ママ。私に権限があれば……!」

カルム「いや、場所の検討は付いている。」

ミト「それで、ここからどうやって世界樹に行けば良いのか教えて欲しいの。」

カナ「それなら、北西方面に飛べばいいと思うよ。」

カルム「そうか。なら、俺たちの装備を整えないとな。」

ミト「そうね。」

俺達は、この街で出来る限りの準備をする事にした。

俺は、良いバスタードソードを見つけたのでそれと片刃の片手直剣をサブとして買う。

ミトは、鎌を購入した。

そして、紫紺色のコートを見つけたので、それも装備する。

カルム「それじゃあ、案内頼むな。」

ミト「お願いね。」

カナ「私に任して！」

そうして、俺達は旅立った。

一応、その前にカナから、展望台に行つてロケーターストーンを使った方が良いと言われたので、戻り位置をセーブした。

だが、気になる事がある。

それは、俺がまだ装備を選んでいるミトと合流する前に、何か、変な煙を吸い込んでしまったようで、妙に気怠い。

だが、そこまで気にならないので、気にせずにいる。

第5話 動き出す剣士達

ハヤトside

何故、こうなった。

俺は、リーファと共にフィールドに出ていたが、サラマンダーの連中に襲われた。

だが、1人のスプリガンが助けに入ってきた。

??? 「うう、いてて……。着陸がミソだなこれは……。」

だが、そのスプリガンには、妙に既視感がある。

そして、そのスプリガンに、サラマンダーの部隊は壊滅された。

1人は、デスペナが惜しいという事で去っていった。

リーファ「……で、そのあたしはどうすれば良いのかしら。」

ハヤト「まあまあ……。ところで、お前、名前は何なんだ？」

キリト「キリトだ。」

ハヤト「キリト……。まさか……。」

キリト「そういうお前は？」

ハヤト「ハヤトだ。」

キリト「ええっ!? ハヤト!？」

リーファ「えっと、知り合い?」

ハヤト「知り合いも何も、多分、スグのお兄さんだよ。」

リーファ「ええっ!?」

キリト「もしかして、スグ!？」

どうやら、キリトも何かがあつて、この世界に来たそうだな。

俺達3人は、事情を話す事に。

キリト「それじゃあ、ハヤトはスグに誘われてA.L.Oを始めたのか。」

ハヤト「まあ、そんなところ。」

リーファ「お兄ちゃんも、始めてたの!？」

キリト「ま、まあな。」

???「皆さん、私を忘れないで下さい!」

そんな声が出たと思つたら、キリトの胸ポケットから、少女が現れた。

キリト「あ、こら、ユイ、出てくるなつて。」

ユイ「パパにくつついて良いのは、ママと私だけです!」

「ぱ、パパア!？」

俺とリーファの叫び声が重なつた。

後でキリトから聞いた話だが、ユイはSAOで生まれたAIらしい。

ハヤト「それで？キリトは何でALOを始めたんだよ？」

キリト「それは、あの樹に行きたいからな。」

リーファ「世界樹？どうして？」

キリト「実は……。」

そこでキリトから聞いたのは、なんと、あの世界樹に鳥籠があつて、その中にアスナがいるそうだ。

ハヤト「おいおい、何でSAOからALOにアスナが居るんだよ!？」

キリト「分からない。」

リーファ「アスナって、お兄ちゃんが度々言つてたあの人？」

キリト「ああ。」

ハヤト「そういう事か。どうする？姉ちゃんが仮想課の人間だから、協力を要請するか？」

キリト「いや、物的証拠が無い。多分、動いてはくれないだろうな。」

ハヤト「まあ、それもそうか。……分かった！俺が着いていつてやる！」

リーファ「ええっ!？」

キリト「良いのか？」

そんな事を聞いてくるが、俺の心は決まっている。

ハヤト「愚問だろ。親友を助けてやるよ！」

キリト「ありがとう……。」

リーファ「なら、私も行く！」

キリト「スグ……。」

リーファ「お兄ちゃんには、早く笑顔になって欲しいからね！」

キリト「ありがとう……スグ……。」

リーファ「そうと決まったら、お兄ちゃん、命の保証はないけど、スイルベーンに行こう。」

キリト「分かった。」

俺達は、キリトを連れて、スイルベーンへと戻って行く。

その後、キリトが塔にぶつかったり、レコンというプレイヤーと会ったりして、その日はログアウトする事に。

カルム side

俺達は、装備を整えて、すぐさまインプの首都を出発しようとしたのだが。

カナ「世界樹には、この先を行こう！」

カルム「だが、キリトとは合流したい。」

ミト「そうね。カナ、どうにか合流出来そうなどころは無い？」

カナ「実は、幾つか中立都市があるにはあるんだけど、キリトさんがどこを通るのか……。」

カルム「弱ったな。」

ミト「どうにか、連絡を取らないと。」

カルム「ひとまず、このアバターにも慣れさせたい。何か、強い武器が手に入るクエストとかダンジョンとか無いのかなあ。」

ミト「確かに、いつまでもこの店で売ってた奴じや厳しいかも。」

カナ「なら、丁度近くに、何かのダンジョンがあるからそこに行こう！」

そうして、俺達とはあるダンジョンへと向かって行った。

モンスターを倒しつつ先へと進むと、そこには、カマキリヤミーという奴が居た。

カルム「あいつがボスか。」

ミト「なら、さっさと片付けましょう。」

そうして、俺とミトVSカマキリヤミーとの戦いが始まった。

俺達は、SAOでの連携を活かして、攻撃していく。

しかし、カマキリヤミーの攻撃で、俺のバスタードソードが折れた。

カルム「折れたアアア!!」

ミト「そんな事言ってる場合!？」

仕方なく、サブの片手直剣に切り替えて、何とか倒す事が出来た。だが、突如、少し視界が歪んだ。

異変に気がついたミトが支えてくれた。

ミト「大丈夫？」

カルム「ああ、大丈夫だ。」

カナ「大丈夫だよね？」

カルム「大丈夫だ。」

すぐに何にもなくなつたので、気にせずにする事に。

宝箱を開けると、メダジャリバーという大剣と、ペンダントが入っていた。

ミトにペンダントをあげて、俺はメダジャリバーをメインにする。

本当に、俺の体に何が起こってるんだ？

一旦、インプの主街区に戻り、その日はログアウトする事にした。

第6話 それぞれの思い

直葉 side

まさか、アスナさんがALOに閉じ込められているなんて思わなかった。

だけど、そんな事があるのだろうか？

お兄ちゃんも言っていたが、確かに物的証拠が無い。

警察にも言えない。

気になって、お兄ちゃんの部屋へと向かう。

直葉 「お兄ちゃん？」

和人 「どうしたスグ？」

直葉 「……お兄ちゃんは、アスナさんを助ける為に世界樹に向かいたいよね。」

和人 「ああ。」

直葉 「それは分かった。……後、話があるんだけど……。」

和人 「うん？」

直葉 「何で、相談してくれなかったの！お兄ちゃんと私が血が繋がってないから!？」

和人 「知ってたのか……。」

お兄ちゃんは、驚愕の表情を浮かべた。

直葉「うん。お兄ちゃんがSAOに囚われてからお母さんから聞いて……。でも、私は血が繋がってなくても、お兄ちゃんはお兄ちゃんだよ！だから、妹の私も頼つてよ！」

和人「スグ……。そうだな。頼む。力を貸して欲しいんだ。」

直葉「お安い御用だよ！」

和人「あと、合流する奴があと2人いる。」

直葉「2人？」

和人「その2人とも合流したい。どこかで合流出来そうな地点は無いか？」

直葉「そうね……。世界樹に向かう途中で中立都市があるの。……。その2人の種族は？」

和人「2人曰く、両方ともインプだと。」

インプか。

なら、どうにかなるかも。

直葉「ルグルー回廊内に中立の鉾山都市があるから、そこで合流させよう。」

和人「分かった。2人には俺から連絡する。」

直葉「お願い。」

こうして、その2人と合流する手筈が整っていく。

ハヤト side

まさか、SAOのプレイヤー300人が閉じ込められているとはな。

あの後、エギルから連絡が有って、それを聞いて驚いた。

一応、姉ちゃんにも確認を取ったが、その中にアスナがいると言う。

チエイスにも聞いてみたが、エギルから連絡が来たらしい。

翌日、ALOにログインして、キリトとリーファと合流した。

ハヤト「待たせたな。」

キリト「おう。」

リーファ「それじゃあ、行こっか！」

俺達は、昨日、キリトがぶつかった塔の上に向かって行った。

だが、デカイ男に阻まれた。

リーファ曰く、シグルドと言うらしい。

何か、怪しい商売をしてそうな名前だなと心の中で思った。

リーファ「こんにちは、シグルド。」

シグルド「パーティーから抜ける気なのか、リーファ。」

リーファ「まあ、貯金も大分出来たし、暫くのんびりしようと思って。」

シグルド「勝手だな。残りのメンバーが迷惑するとは思わないのか？」

何ともまあ、傲慢な奴だな。

俺にとつては、とつても嫌いな奴だ。

何か、直葉を虐めてた先輩みたいだな。

まあ、俺がコテンパンにしてやったが。

文句を言つてやろうと、キリトと共に前に出た。

キリト「仲間はアイテムじゃないぜ。」

シグルド「何だと……？」

ハヤト「お前さ、リーファの事をアイテムみたいに言ってるけどな、装備欄にはロツク出来ないんだぜ。」

シグルド「キツ……貴様らツ……！何故スプリガンが居るのだ！」

ハヤト「別に良いだろ。コイツは俺の親友の1人だ。という訳で、リーファは俺とキリトが借りていくぜ。」

シグルド「なん……だと……リーファ、そしてそのお前……領地を捨てる気なのか……。」

ハヤト「別に良いだろ。俺はこのゲームを始めたばかりだね。リーファには指導をお願いしたんだよ。」

そう言つたその後、シグルドは退散していった。

その際に捨て台詞を吐いていったが、その際に嫌味で返した。

リーファ「ごめん、2人とも、変な事に巻き込んだじゃって。」

ハヤト「気にすんな。俺、アイツの事を嫌いになったわ。」

リーファ「なんで、ああやって、縛ったり縛られたりしたがるのかな……。」

ユイ「フクザツですね、人間は。ヒトを求める心を、あんな風にややこしく表現する心理は理解できません。」

そう言つて、キリトのジャケットの大きな襟からユイが出てきた。

その後、キリトにキスするという大胆な真似をしたが、AIだからな。

リーファが顔を赤くしていたが、気のせいだろうな。

出発しようとしたら、1人のプレイヤーが出てきた。

昨日会ったレコンだ。

だが、キリトに対する反応が昨日とは違う。

実は、レコンにはキリトがリーファの兄貴だと言う事を話しており、その結果、レコンはキリトにはそこまで頭が上がらなくなった。

レコンをあしらった後、出発した。

カルムside

昨日、キリトから連絡があり、ルグルー回廊内の中立都市で合流する事になった。

カルム「という訳で、キリト達と一刻も早く合流する為に、出発するぞ。」

ミト「そうね。カナ、案内お願いね。」

カナ「分かった。」

カナ曰く、高山地帯を抜けるには、洞窟を通らなければならないらしい。

だが、インプは暗中飛行と暗視に長けているのだ。

万が一の際には、強行軍として、突破する為に。

キリト達と合流するルグラー回廊は、シルフ沿いにあるので、世界樹に行くよりも先に合流しなければ。

ミト「カルム。」

カルム「ん？」

ミト「本当に大丈夫なの？」

カルム「昨日の件か？」

ミト「うん。」

カナ「一応、調べてみたけど、特に異常は無かったよ。」

カルム「まあ、大丈夫だろ。」

そうは言ったものの、昨日より少し気怠い。

だが、キリト達と合流しなければならぬ。

出発した時に、少しノイズが走った。

アスナ side

オベイロンこと須郷が私の体を触ってくる。

だが、耐えねば。

嫌悪感が凄まじいが、ここで反抗したら、行動が制限されてしまう。

それだけは避けたい。

オベイロン「やれやれ、頑なな女だね、君も。どうせ偽物の体じゃないか。何も傷つきはしないよ。」

アスナ「……あなたには分からないわ。体が生身か、仮想かなんて事は関係ない。少なくとも私にとっては。」

オベイロン「心が汚れると言いたいのかね。今の内に楽しみ方を学びなよ。」

アスナ「興味無いわ。……それに、いつまでもここにいるつもりもない。」

オベイロン「まさか、キリト君に、カルム君、ミト君が助けに来るとでも?」

それを聞いて思わず体を震わせた。

オベイロン「それにしても、現実で会ったけどねえ。あんなガキ共のあの顔は傑作だったね! 思わず大笑いしそうになったよ!! あのガキ共は来ないさ。どうせ、ナーヴギアを被る度胸なんて無いよ!」

アスナ「……………」

全く、頭は良いかもしれないが、実に愚かな男だわ。

キリト君にカルム君、ミトが助けに向かっているはず。

あの3人がそれを聞いて大人しくする筈がない。

その後、オベイロンが、『何故、インプのプレイヤーに、あのAIウイルスが?』と呟きながら出て行った。

その際にパスワードを覚えたので、機会が出来たら脱出してみせる。

AIウイルスとは何か分からないが、気にする話じゃない。

オベイロンside

まさか、あのAIウイルスがインプのプレイヤーに感染するとはね。

だが、良い実験台になるだろう。

オベイロン「ククツ……。誰が感染したのか分からないけど、せいぜい良いデータを
出して欲しい物だよ。」

僕は、画面に映っている、バグスターウイルスを見ながらそう呟いた。

第7話 峠を越えろ

ハヤト side

俺達は今、スイルベーンを出発して、中立域の森の奥へと進んでいる。

戦闘自体も、俺とキリトで無双して、リーファが援護している。

リーファ「お疲れー。」

キリト「援護サンキュー。」

ハヤト「助かったぜ。」

リーファ「しっかしまあ……何て言うか、無茶苦茶な戦い方をするよね。お兄ちゃん

とハヤト君は。」

キリト「その分、早く片付いて良いじゃないか。」

ハヤト「まあ、こっちはあまり魔法は使わないしな。プレイヤー相手になると辛いかも。」

そんな話をしつつ進んでいき、山岳地帯に到着した。

リーファ曰く、あの山が限界高度よりも高い影響で、山を越えるには、洞窟を使わないといけないらしい。

洞窟の方もかなり長くて、その途中の中立都市で、カルムとミトと合流する手筈になっっている。

その後、ローテアウトする事になった。

リーファ曰く、交代でログアウト休憩をする事らしい。

中立地域は即落ち出来ないそうので、1人がログアウトしたら、残りのメンツで守るそ
うだ。

そうして、リーファと俺からログアウトする事になった。

それにしても、リーファに誘われたと思ったら、アスナを救出する事になるとは。

姉ちゃんは、泊まり込みで仕事をすらしくて、夕食を作つて、食べた。

苦笑しながら、食べていると、リーファこと直葉の事を思い出す。

俺の為に誘つたとはいえ、巻き込んでしまったが、リーファは気にしないでと言った。

アイツは本当に優しいよ。

やつぱり、アイツの事が好きなのか？

まあ、すぐには分からないので、心の中に留めて、俺はALOへと戻る。

直葉 side

私は、お兄ちゃんの為に、ベーグルサンドを作つて、自分の分を食べて、超高速で服を脱いで、やや熱めのお湯を浴びる。

ハヤト君こと侑斗君と一緒に居ると、何かドキドキする。

直葉「もしかして、侑斗君の事が好きなのかも……。」

そう呟いたが、恥ずかしくなって止めた。

侑斗君が私の事を好きなのかも分からないのに、そんな事を考えてもどうしようもない。

赤くなった顔にお湯をかけて、ジャージに着替えて、ALOへと戻る。

ハヤト side

ハヤト「待たせたな。」

リーファ「モンスター出なかった？」

キリト「お帰り。静かなモンだったよ。」

何やらストロー状の何かを啜っていた。

何だあれ？

リーファ「……それ、ナニ？」

キリト「雑貨屋で買い込んだんだけど……スィルベーン特産だったさ。」

ハヤト「そんなのあるのかよ。」

その新しい奴を放ってきて、啜えてみると口に辛味が襲ってきて、即座に捨てた。

リーファも同様だ。

そう言えば、キリトの奴、辛党だったな。

俺はそこまで辛いのが強い訳では無い。

キリト「ハハハッ。じゃあ、次は俺だな。護衛よろしく。」

キリトは俺達の反応に笑いながらログアウトして行った。

リーファ「お兄ちゃんったら……！」

ハヤト「あんなモン食わせやがって。」

リーファ「ねえ、お兄ちゃんって、SAOでもあんな感じだったの？」

ハヤト「ああ。……覚えてろよ……。」

SAOでも、変なものを食わせて、俺の反応を見て楽しんでいた。

それを思い出すと、本当にムカついてくる。

すると、ユイが出てきた。

リーファがキリトの事を好きなのかと聞いたたら、本人は真面目な顔で見つめてきた。

ユイ「リーファさん、ハヤトさん。……好きって、どういう事なんでしょう？」

リーファ「ど、どうって……。」

ハヤト「そうだな……。一言で好きと言ってもさ、家族として好きなのか、友達や仲間として好きなのか、異性として好きなのかで違うと思うしな。ユイは、キリトと一緒にいる時は楽しいんだろ？なら、それでも好きで良いんじゃないのか？」

俺は、無意識にそう答えていた。

ユイがリーファに振ると、『いつでも一緒に居たい、一緒に居るとドキドキワクワクする、そんな感じかな……。』と答えた。

俺は、リーファ……スグにそう思われてんのかなと思った。

その後、キリトも戻ってきて、俺達は先に進む事にした。

キリト「っ!?」

ハヤト「何だっ!?」

誰かに見られていた様な気がするが、後ろを振り返っても、誰も居ない。

リーファ「どうしたの?」

ハヤト「いや、誰かに見られたような。」

キリト「ハヤトもか。ユイ、近くにプレイヤーは居ないか?」

ユイ「プレイヤーは居ません。」

リーファから、サーチャーの事を聞いたが、警戒しつつも、先へと進んでいく。

その後、キリトが何とか言えた暗視付与魔法で、先が見える様になった。

リーファ「お兄ちゃんも、ハヤト君もさ、何か使える魔法は覚えた方が良いよ。」

キリト「ええ……。俺もうピュアファイターでいい気がする……。」

ハヤト「まあ、そう言うなよ。……さつきはよくもあんなの食わせたな、このヤロ!」

キリト「痛っ！何すんだよ！」

ハヤト「さっきの仕返しだ。」

キリト「こんなにやろ！」

リーファ「2人とも、喧嘩しない！」

しばらくして、リーファにメッセージが来た後、プレイヤーの反応がして、リーファに教えてもらった隠蔽魔法を使う。

キリト「あれは……何だ？」

ハヤト「本当だ。」

リーファ「どうしたの？」

ハヤト「いや、赤くて小さい蝙蝠が……。」

リーファ「!?……クソッ。」

リーファが道に飛び出して、魔法で蝙蝠を潰す。

リーファ曰く、トレーサーらしく、火属性の使い魔という事で、サラマンダーの部隊である事が確定した。

何とか、カルムとミトが待っているであろう中立都市に向かってダッシュするが、岩の魔法で塞がれた。

メンバーを見てみると、完全にキリト対策のパーティーだ。

リーファにサポートをお願いして、俺も突撃していくが、まるで効果が無い。

リーファ「お兄……キリト君、ハヤト君！またスイルベーンから何時間か飛べば済むよ！だから……！」

キリト「嫌だ。」

ハヤト「断る。」

キリト「俺達が生きてる間は、パーティーメンバーを殺させはしない。」

ハヤト「俺も同意だ。」

リーファ「2人とも……。」

「ハアアアア!!!」

すると、裂帛の声がして、上空から2人のプレイヤーが奇襲をかけて、俺たちの前に立っていた。

それは、合流を約束していた、あの2人だ。

カルム「やれやれ、2対12のワンサイドゲームとか、白ける事すんなよ。」

ミト「まあ、こつからは、私たちも増援っていう事ね！」

そう、ヒースクリフこと、茅場晶彦を倒した英雄達が、ここに集結した。

カルム side

ついさつき着いたばっかだけど、何とか、キリト達が倒される前に到着できたな。

ハヤト「カルム！ミト！」

カルム「悪い、待たせた！」

ミト「さあ、こつから逆転よ！」

リーファ「あの2人のインプって……。」

リーダー「ハア!? インプだと!? 情報によれば、シルフ2人にスプリガンの3人だけじゃなかったのか!?!」

カルム「さて、親友をここまでやったんだ。」

ミト「覚悟は、出来てるのかしら？」

キリト「カルム、ミト！悪い、援護して欲しいんだ！」

カルム「あいよ！」

ミト「行くわよ！」

インプは、暗闇の中でも、多少の飛行は可能なのだ。

飛行しての強襲で、前衛を崩すが、すぐに回復される。

本当に厄介だな。

フラストレーションが溜まりつつあるので、それをメダジャリバーに乗つけてぶつける。

気がつくくと、キリトの方から魔法の詠唱が。

すると、キリトの姿が、あの74層ボスのグリームアイスへと変化した。
カルム「うそーん……。」

ミト「何か、トラウマが……。」

俺達、要らないかも。

その後、まさに、グリームアイスVSインクラッド解放軍の戦闘の再現が起こった。
前衛が紙屑かの様に、吹き飛ばされていき、メイジ部隊も何人かは俺達が軽量級妖精
共通スキルの壁走りを使い、壊滅させて、リーダーも湖に飛び込んで自滅した。

まさに残りの1人を倒そうとすると。

カルム「キリト、ストツプ！」

ミト「ソイツは生かして！」

ユイ「凄かったですねえ〜。」

カナ「本当に、そうね。」

その男は、放心状態になっていた。

リーファ「さあ、誰の命令とかあれこれ吐いてもらおうわよ！」

サラマンダー「こ、殺すなら殺しやがれ！」

さて、どうしたものかと思っていると、キリトが近寄ってくる。

キリト「いやあ、暴れた暴れた。よ、ナイスファイト。いやあ、いい作戦だったよ。俺

「一人だったら速攻やられてたわ。」

リーファ「ちよ、ちよっとキリト君……。」

キリト「まあまあ、さて、物は相談なんだがキミ、これ、今の戦闘で俺がゲットしたアイテムとユルドなんだけどな。俺たちの質問に答えてくれたら、これ全部、キミにあげちやおうかなーなんて思ってるんだけどなあー。」

サラマンダー「えっ!?……マジ?」

キリト「マジマジ。」

「にやつと笑みを交わす両者を見て。」

リーファ「男って……。」

ユイ「何か、身も蓋もないですよね……。」

ハヤト「何やってんだ……。」

ミト「まったくよ。プライド無いのかしら。」

カルム「アスナが見たら、どう思うのかね。」

カナ「やれやれです。」

第8話 大切な者の為に

カルム side

俺達は、先ほどの戦闘で捕らえたサラマンダーに、情報を流して貰った。

サラマンダー「今日の夕方かなあ、ジータクスさん、あ、さっきのメイジ隊リーダー
なんだけどさ、あの人から呼び出されて、たった3人を12人で狩る作戦だつて言うか
らさ、イジメかよオイって思ったんだけどさ、昨日カゲムネさんをやった相手だからな
るほどなつて……。」

カルム「カゲムネ？」

サラマンダー「ランス隊のリーダーだよ。シルフ狩りの名人なんだけどさ、アンタが
やったんだろ？」

シルフ狩りの名前に、少し顔を顰めながらキリトを見る。

ミト「それで？何であなた達はキリト達を狙った訳？」

サラマンダー「ジータクスさんよりも上の命令でさ、何か、凄え人数の軍隊が北に向
かって行つたぜ。」

リーファ「世界樹に挑戦するの？」

サラマンダー「まさか。流石に前の全滅で懲りたらしくてな。今、ユルドを貯めてる最中なんだけどき、半分も貯まってないのよ。……ま、俺の知ってるのはこんなトコだ。……さっきの話、ホントだろうな？」

キリト「取引で嘘はつかないさ。」

そう言つて、キリトは、入手したアイテムをサラマンダーに渡して、サラマンダーはホクホク顔で去つて行つた。

ハヤト「ところで、カルムとミトは随分と早く来れたんだな。」

カルム「まあな。」

ミト「それはそうと、カルム？本当に大丈夫なの？」

カルム「大丈夫だよ……多分。」

リーファ「どうしたの？」

カナ「それが……。」

と、カナが事情を話した。

まあ、いつまでも隠せないからな。

カナ「ユイ、手伝つて。」

ユイ「分かりました。」

キリト「謎の頭痛ね。」

ハヤト「それに、カルムの体にノイズが走るって、どうなってんだよ。」
リーファ「大丈夫なんですか？」

カルム「大丈夫だって……。多分。」

ミト「ハアアアア……。」

すると、調べ終えたのか、2人が俺に声をかける。

カナ「パパ。何かが感染してる。」

カルム「感染って……。このアバターにか？」

ユイ「まだ、断言は出来ませんが、カルムさんのアバターに何かが感染している形跡を確認出来ました。」

カルム「そうか……。ウツ!？」

すると、謎の頭痛がして、ノイズが走り、俺の体から煙が出てきて、人の形を形成する。

???「よお。」

キリト「……。誰だ？」

ミト「……。あなたは一体……?」

パラド「俺はパラド。カルムに感染している、AIウイルスってところかな。」

ハヤト「マジかよ……!？」

リーファ「えっ!？」

「……………」

カルム「……で、お前は一体何なんだ？」

俺はパラドにそう問うた。

パラド「まあ、このALLOの運営の一部によって生み出された存在って所か。」

カルム「……須郷か？」

パラド「ソイツじゃない。別の奴だ。」

カルム「……それで？俺に感染した理由は？」

パラド「簡単に言えば、俺の事を生み出した奴曰く、強いプレイヤーについていくつ

てところだな。」

カルム「……………」

それは一体、誰なんだ？

ミトが近寄る。

ミト「……あなたは、カルムに危害を加えるつもりなの？」

パラド「まさか。カルムを倒しても死に戻りするだけで、何の意味もない。」

ミト「……………嘘じゃないわよね。」

パラド「あいにく俺は正直なんでね。」

ミト「……なら信じる。」

パラド「それに、カルムは面白い。遊び相手になつて欲しいくらいだ。」

こうして、新たな仲間と言ふべきなのか分らないが、パラドが仲間になった。

一応、最初から武器は持つており、ガシヤコンパラブレイガンという武器だ。

形状は、ハンドアックス。

パラド曰く、人前には姿は現さないが、俺たちの前には現すそうだ。

その後、レコンからのメッセージを思い出したリーファは、一旦ログアウトした。

その間、俺達はベンチに座っている。

ミト「……まさか、A Iウイルスがカルムのアバターに感染してるなんて。」

カナ「一応、悪性プログラムの類は確認出来なかつたよ。」

ユイ「しかし、プレイヤーに感染するA Iウイルスなんて……。」

キリト「一体誰が作つたんだ？」

カルム「まあ、大丈夫だろ。」

ハヤト「それにしても、リーファの奴、遅いけど大丈夫か？」

そんな事を話していると、リーファが勢いよく起き上がった。

ハヤト「どうした？」

リーファ「ハヤト君、キリト君、皆。あたし、急いで行かないといけなくなつちやつ

た。」

ハヤト「……移動しながら説明してくれ。」

俺達は、移動しながら事情を聞くと、シルフとケットシーの領主会談を、シグルドの内通によって、サラムンダーが襲撃するとの事。

リーファ曰く、シルフとケットシーの連合を阻止したい考えがあるそうだ。

シグルドという奴が誰か知らないが、とんでもない奴だな。

リーファ「これは、シルフ族の問題だから、スプリガンやインプの皆が付き合う理由は無い。だから、皆とはお別れ。」

ハヤト「俺は行くぜ。」

キリト「所詮ゲームだから何でもありだ。殺したければ殺すし、奪いたければ奪う。」
カルム「そんな奴とは、SAOで嫌というほど会ったよ。……でも、仮想世界だからこそ、どんなに愚かしく見えても、守らなきゃいけない物がある。」

ミト「欲望に身を任せれば、その代償は必ずリアルの人格に還ってくる。プレイヤーとキャラクターは一体なのよ。」

ハヤト「だからさ、そんな水臭い事を言うなって。」

リーファ「お兄ちゃん……。皆……。でも、私は皆を巻き込みたく無い。」

ハヤト「俺達はそんな事を気にしないさ。だからさ、マッハで解決しようぜ！」

リーファ「ハヤト君……。ありがとう。」

ハヤト、結構良いこと言うじゃないか。

ちなみに、俺とミトは、リーファがキリトの妹だという事は聞いている。

だが、時間が迫っている。

キリト「よし、ハヤト。リーファの事を頼む。カルム、ミトを掴んでやれ。」

カルム「あいよ。」

ミト「……ほどほどにね。」

そうして、ハヤトはリーファを、俺はミトの手を掴んで、猛烈な勢いでダッシュする。後ろから女性陣の悲鳴が聞こえる。

リーファとミトは、殆ど水平に浮き上がっている。

途中、オークの群れにエンカウントを何度もしたが、無視して突撃する。

しばらくして、出口が見えた。

キリト「出口だ！」

ハヤト「リーファ、飛ぶ準備！」

カルム「ミトもな！」

リーファ「ええっ!?!」

ミト「嘘!?!」

洞窟を出たと同時に、全員が翅を展開して、飛行できた。

リーファ「寿命が縮んだわよ！」

ミト「本当によ！」

ハヤト「ええっ!？」

カルム「文句ならキリトに言ってくれ！」

キリト「まあまあ、時短になったから良いじゃないか。」

「「「「「アンタが原因だろ!!」」」」

俺、ハヤト、ミト、リーファの叫び声がハモった。

キリトの事を恨めしく見ていると、世界樹が見えた。

キリト「それで、どこで会談をするんだ？」

リーファ「会談自体は、蝶の谷という所で行われるけど……。」

ハヤト「残りの時間は？」

リーファ「20分。」

カルム「時間ねえな。」

ミト「急ぎましょう。」

ユイとカナの2人に、索敵をお願いして、加速した。

???
side

どうやら、パラドは無事に覚醒したみたいだな。

それも、カルムに接触出来た。

??? 「頼むぜ。須郷の奴をどうにか出来るのは、お前達だけなんだ。」

さて、パラドを接触出来た訳だし、俺は、対須郷のチートアイテムを作成するところか。

須郷の違法実験を、世間に暴露してやる。

その為にも、あのアスナを始めとする300人のSAOプレイヤー達をどうにか救出しないといけないな。

まあ、須郷にバレたら終わりなんだが。

だが、バグスターウイルスというプログラムの一部のデータが須郷の元に渡ってしまっただ。

しかも、渡ったのは、ゲームデウスという奴なのだ。

??? 「さて、アレを創るか。」

俺は、チートアイテムと並行して、ゲームデウスのワクチンプログラムの作成もするか。

第9話 紫紺の剣士VS猛炎の将

カルム side

アルヴヘイムの中立域、蝶の谷にて、俺達は飛行していた。すると、カナとユイが声を上げる。

ユイ「プレイヤー反応です！前方に大集団……60人、恐らく、サラマンダーの強襲部隊と思われます！」

カナ「さらに向こう側に14人……。シルフ及びケットシーの会議出席者と予想されます。接触まで、あと50秒！」

ミト「間に合わなかったの……？」

リーファ「間に合わなかったね。キリト君、ハヤト君、カルムさん、ミトさん。あなた達は世界樹に行つて。」

ハヤトの悔しそうな顔を見て、どうにかしたいと思う。しかし、どうしたものか……。

悩んでいると、キリトが声をかけて来た。

キリト「カルム、話があるんだけど……。」

カルム「うん？」

すると、とんでもない事を言った。

カルム「おいおい、本気か？」

キリト「これしか手が無いんだ！リーファとハヤトとミトは、シルフとケットシーの方を頼んだぞ！」

ハア……。

覚悟決めるか。

キリトがミサイルの如く、地面に着地して、俺もその隣に立つ。

キリト「双方、剣を引け!!」

リーファが、領主組の説得に苦労していた。

まあ、腹括るか。

キリト「指揮官に話がある！」

そう言うと、1人のサラマンダーが出てきた。

何か、巨剣を持っているが。

恐らく、司令官だ。

???「……スプリガンとインプがこんな所で何をしている。どちらにせよ殺すには変わらないが、その度胸に免じて話だけは聞いてやろう。」

キリト「俺の名はキリト。俺の隣に居るのは、カルムだ。俺達はスプリガンIIインプ同盟の大使だ。この場を襲うという事は、四種族と全面戦争を望むと解釈して良いんだな？」

うわあ。

言いやがったぞ、アイツ。

キリトが教えた作戦は、スプリガンとインプが同盟を結んでいるというハツタリをかます物だった。

嘘だつてすぐにバレるだろ。

後で覚えてろ。

??? 「スプリガンとインプが同盟……？護衛の1人も居ないじゃないか。」

カルム「まあ、最近、サラマンダーとインプは不仲ですしね。バレない為に隠密にやるのは当然の事かと。」

??? 「確かにな。だが、たった2人、それも1人は大した装備だが、貴様らの言葉を信じる訳には行かないな。」

まあ、そりやそうだ。

そんな嘘を信じるのは、余程のお人好しだけだろうな。

??? 「………お前らのどちらか1人がオレの攻撃を30秒耐え凌いだら、貴様らをお大使

と認めてやろう。」

キリト「気前がいいね。」

カルム「俺が行つていいか？」

キリト「いいぜ。」

まあ、あんな強い奴とは一度相手をしたい。

ミトの方を見ると、呆れ顔だった。

???「なるほどな。インプの方か。」

カルム「そう言えば、アンタの名前を聞いても良いか？」

ユージーン「俺の名はユージーン。貴様はカルムだったな。相手をしてもらおう。」

俺とユージーンは、お互いの剣を相手に向けて、しばらくは滞空していたが、お互いに動き出す。

ユージーンの動きをすぐに見切り、剣で受け流そうとするが、剣がすり抜けた。

カルム「……何っ!？」

剣がすり抜けた後、実体化して、襲い掛かってくる。

すぐに後退して、何とかダメージを減らす事が出来た。

カルム「何だよアレ!？」

ユージーン「ほう。アレを躲すか。褒美に教えてやろう。これは魔剣グラム。コイツ

には《エセリアルシフト》という能力が付与していて、剣や盾で受け止めようとすると、すり抜ける代物だ。」

カルム「うそーん……。」

アレはマジでヤバい。

ユージーンの剣を受け止めようとすると、やはりすり抜けて、また躲したので、ダメー
ジはそんなに無い。

カルム「おい、もうそろそろ30秒だけど……。」

ユージーン「悪いな、気が変わった。お前の首を斬り落とすまでに変更だ。」

カルム「絶対泣かせてやる……！」

だが、決め手に欠けるのが事実だ。

そういうえば、メダジャリバーには何か、能力が付与してあるような。

一応、そんな事を考えながら戦闘していて、ヒットアンドアウェイの戦法でジリジリと削っていく。

ミトside e

カルムが、あのユージーンというプレイヤーに押されている。

シルフ領主のサクヤとケットシー領主のアリシャ・ルーによると、あの剣には、《エセリアルシフト》という能力があり、それを打ち消すには、《聖剣エクスカリバー》とい

うのを使わないといけならしい。

何よ、あのチート剣。

カルムも、一応は躲せているが、疲労が見えて、遂にはユージーンユージーンの攻撃をその身に食らってしまう。

カルム「クツ……！」

カルムが岩壁に激突し、土煙が上がる。

土煙が晴れると、カルムの姿が無い。

ケットシー「アレ、アイツ居ないぞ。」

ケットシー「もしかして、逃げたのか……？」

ミト「そんな筈無い！」

私は、ケットシーのプレイヤーに向かってそう叫ぶ。

ミト「彼は、いつだって諦めない！どんな理不尽な環境でも、打開策を見つける！だから、私は彼を信じる！」

ハヤト「ミト……。」

キリト「そうだな。……おっと、見えたぞ。」

ミト「カルム……！」

上空の太陽を背に、カルムが居た。

カルム side

確かに、あの剣には驚かされた。

だが、それが余計に闘志に火がついた。

本気を出すか！

カルム「物語の結末は、俺が決める!!」

ユージーン「なら、一思いに止めを刺してやろう!」

ユージーンがロケットの如く接近してくる。

だが、俺は右手にメダジャリバー、左手に新たに手に入れていたガシャコンブレイカーを持つている。

ユージーン「な!? 異種の二刀流だど!」

カルム「悪いな!これが俺の本気だ!!」

俺は、《エボリユーシヨンキング》を使っていた時の感覚で、ユージーンの攻撃を捌き、メダジャリバーとガシャコンブレイカーの固有スキルを放つ。

カルム「ハアアア!!」

ユージーン「ぬうウウウウツ!」

俺は、ガシャコンブレイカー固有スキル、マイテイクリティカルファイニッシュを発動して、ピンク色の斬撃をユージーンに放ち、止めに、メダジャリバー固有スキル、オー

ズバツシユを発動する。

カルム「これで、とどめだアア！」

ユージーン「ぬうウウウウツ！」

ユージーンに斬撃が起こると同時に、世界だけが切れた様な感じがして、そのまま元に戻ったがユージーンは斬られたままで、そのままメインライトに変わった。

サクヤ「見事、見事！」

ルー「すごい！ナイスファイトだよ！」

領主2人の賞賛に、シルフとケツトシーのプレイヤーも拍手を送る。

サラマンダーの方にも伝染していった。

ミト「凄い！」

リーファ「カルムさんが、あのユージーン將軍を倒した……！」

ハヤト「すげえぞ!!」

キリト「よくやった！」

カルム「誰か、彼の蘇生を頼む！」

ユージーンの蘇生をシルフ領主が行った。

ユージーン「見事だ。俺が見た中で、一番強かったぞ。」

カルム「言っとくと、俺よりも、あのスプリガンの方が強いぞ。」

ユージーン「ほう。一度は彼と相手してみたいな。」

キリトへの嫌がらせとして、俺よりも強い事しておいた。

カルム「それで、話は信じて貰えるか？」

ユージーン「……………」

すると、サラマンダー陣営の中から、1人の男が出てきた。

???「ジンさん、ちよつといいか。」

ユージーン「カゲムネか、何だ？」

カゲムネというと、あのサラマンダーのメイジが言っていた、キリトに倒された奴だ。

カゲムネ「昨日、俺のパーティーが全滅させられたのはもう知っていると思う。」

ユージーン「それがどうした？」

カゲムネ「その相手が、まさに下にいるスプリガンなんだけど、確かに、そのインプの2人を連れていたよ。」

どういう事だ？

俺とミトは、その時には合流していなかった筈だ。

カゲムネ「それに、エスの情報でメイジ隊が追ってたのもコイツらだ、確か。どうやら撃退されたみたいだけど。」

エス、恐らく、シグルドの事を指しているのだろう。

ユージーン「そうか。……そういう事にしておこう。確かに現状でスプリガン、インプと事を構えるつもりは俺にも領主にもない。この場は引こう。……だが、カルム。貴様とはいずれもう一度戦うぞ。そのスプリガンもな。」

カルム「望むところだ。」

そう言つて、ユージーン將軍率いるサラマンダー陣営は、撤退していった。

キリト「……サラマンダーにも話の分かる奴がいるじゃ無いか。」

カルム「……キリト、お前、ユージーン將軍がお前と戦いたがつてたぞ。」

キリト「……目をつけられたか。」

カルム「諦めろ。」

俺達は、シルフの領主に説明する事に。

サクヤ「……なるほどな。」

ルー「サクヤちゃんは、人気者で辛いヨね。」

カルム「本当に、転生日当てとは、陰険すぎないか、このゲーム。」

キリト「デザイナーは嫌な性格だぜ。」

ミト「まったくよ。」

サクヤ「そうだな。……ルー。シグルドに月光鏡を頼む。」

ルー「いいけど、あまり長くは持たないヨ。」

ケットシー領主が、詠唱すると、鏡が現れた。

そこには、そのシグルドとやらが居た。

机に両足を投げ出している。

行儀が悪いな。

サクヤ「シグルド。」

シグルド「サ……サクヤ……!?!」

サクヤ「ああ、そうだ。」

シグルド「か、会談は……?」

サクヤ「条約の調印はこれからだが、無事に終わりそうさ。そうさう、予期せぬ来客があったぞ。」

シグルド「き、客……?」

サクヤ「ユージーン将軍が君によろしくと言っていた。」

シグルド「な……!?!」

シグルドは動揺していたが、リーファとキリト、ハヤトを視線に捉える。

その後、シグルドはサクヤに追放された。

まあ、裏切り者の末路としては、ありがちな奴だな。

サクヤ「リーファ。私達を助けてくれたありがとう。」

リーファ「良いって。お礼ならキリト君達にお願いします。」
サクヤ「そう言えばそうだな。」

ルー「ねえ、キミ達、スプリガンとインプの大使……ってほんとなの？」

これは発案者はキリトだから、キリトに任せるとしよう。

キリトにアイコンタクトすると、キリトは両手を腰に当てて、堂々と言う。

キリト「勿論大嘘だ。ブラフ、ハツタリ、ネゴシエーション。」

サクヤ「な……。あのような状況で、そんな大法螺を吹くとはな。」

キリト「手札がシヨボい時はとりあえず掛け金をレイズする主義なんだ。」

カルム「それに付き合ったこっちの身にもなれやこの野郎!!」

俺はそう言って、キリトにコブラツイストをかける。

キリト「ウワツッ!ギブ!ギブ!ギブ!」

カルム「……つたく。」

ルー「それにしても、キミ、結構強いね。インプの秘密兵器なの?」

カルム「まさか。しがないプレイヤーです。」

ルー「ニヤハハハ!!」

すると、右腕を抱いてきた。

ルー「フリーならキミ、ケットシー領で傭兵やらない? 3食おやつに昼寝付きだよ。」

カルム「へっ？」

サクヤ「おいおいルー、抜け駆けはよろしくないぞ。」

そう言つて、左腕を抱いてきた。

サクヤ「カルムと言つたね。どうかな、個人的興味もあるので、礼を兼ねてこの後、スイルベーンで酒でも……。」

ルー「あー！サクヤちゃん、色仕掛けはんたーい！」

サクヤ「人の事言えた義理か！密着しすぎだお前は！」

すいません、アンタら2人とも、人の事言えませんよ。

すると、キリトとハヤトの2人がニヤニヤしながらこちらを見てくる。

覚えてろよ……。

すると、背後から殺気を感じる。

ミト「……………」

カルム（ミト……………！領主に腕を拘束されて後ろを振り向けないけど、とんでもない形相でこちらを睨んでいるのが分かる……………！）

そう、ミトの殺意に冷や汗が流れる。

このままでは、殺される……………！

カルム「あ、あの……………。俺達は、世界樹に行かないといけないので……………」

サクヤ「そうか、それは残念だ。」
ルー「それなら仕方ないネ。」

離れてくれて助かったが、ミトの殺意の視線に終始怯える。

その後、キリトが全部、俺とハヤトは半分のユルドを渡して、シルフとケットシー組は去っていく。

だが、俺は正座していた。

ミトに座れと言われたので。

キリト、ハヤト、パラドの3人は、ニヤニヤしながらこちらを見てくる。

リーファは唯一、どうしたら良いのかとオロオロしていた。

ミト「さて……。何か弁明は？」

カルム「すいませんでした……。」

リーファ「あ、あの、ミトさん！あれは故意では無いので、そこら辺にしたらどうですか？」

ミト「……………分かった。」

カナ「パパ、浮気はダメよ！」

カルム「してないよ！」

ハアアアア、最悪だ。

その後、ニヤニヤする3人に、プロレス技をかけてやった。

ミトを暫く宥めて、後でイチヤイチャする事を約束した。

それを聞いた人たちは。

キリト「バカツプルだな。」

ハヤト「まあ、良いんじゃないやねえの？」

リーファ「……………」

何か、リーファの顔が赤かった。

第10話 迷い込む氷の世界

どうしてこうなった。

俺は、雪山を見ながらそう思った。

リーファ曰く、ここは、氷と闇の世界、ヨツンヘイムらしい。

リーファ「ぶえーつくしよい！」

ミト「クシュツ！」

女性陣のくしやみを聞きながら、俺は焚き火を焚いていた。

焚き火を見ながら、こうなった経緯を思い出していた。

あの調印式の後、俺達は央都アルンへと、休憩を挟みつつ向かっていたが、今日は切り上げて最寄りの宿屋でログアウトする筈だった。

しかし、その村が丸ごとモンスターの擬態であり、巨大なミミズ型モンスターに襲われてしまい、食われた。

しかし、ミミズ型モンスターの胃に合わなかった様で、吐き出されたものの、その先がヨツンヘイムだった。

ハヤト「しっかし、あんな体験はもう一生ゴメンだぜ。」

カルム「それに関しては同意。」

パラド「……………もう、あんなトラップにはかかりたく無い。」

パラドはトラウマになったみたいだな。

一方、キリトはこんな状況下で呑気に寝ていた。

俺達は、紅茶を出しながらどうしようかと思案中だ。

カルム「悪いけど、このヨツンヘイムに関する情報は、俺達SAO組は、知らないんだけど。」

ハヤト「そもそも、ここは一体何なんだ？それと、どうやったら脱出出来る？」

リーファ「一応、ダンジョンがあるにはあるんだけど、守護する邪神が強いだよ。」

キリト「その邪神ってのは、どんくらい強いんだ？」

リーファ「噂じゃあ、あのユージーン將軍ですら、10秒も持たなかったのよ。」

ミト「嘘……………」

恐らく、スカルリーパークラスの邪神が彷徨いているという事だ。

一応、インプの俺とミトは、この暗闇の中でも飛べるが、30秒持つかどうかという所だ。

リーファ曰く、今の俺達のパーティーでは、瞬殺されるのがオチだそうだ。

ユイとカナに周囲の索敵をお願いしたが、プレイヤーは確認出来ない。

カルム「いつまでも、ここにいる訳にはいかないな。」

ハヤト「なら、一刻も早く、世界樹に行くためにも、ダメもとで行くか？」

キリト「そうだな……。」

ミト「そうね。」

リーファ「じゃあ、行こう……。」

すると、雷鳴でも、地鳴りでも無い異質な大音響が響いた。

恐らく、邪神だ。

だが、様子が変だ。

リーファ「不味い、4匹なんて……！」

カナ「でも、接近中の邪神级モンスターは、互いを攻撃してる！」

ミト「モンスター同士で戦闘？どうなっているのよ？」

ハヤト「とにかく、ここから出て、確認しようぜ。」

カルム「そうだな。どうせ、ここじゃ持たないだろうし。」

俺達は、意を決して外に出ると、象と水母が合わさったような見た目の邪神2体と、巨人の邪神が2体居た。

さて、どうしたものかと思っていると。

リーファ「ねえ、お兄ちゃん、ハヤト君、カルムさん、ミトさん。助けよ。」

ハヤト「えっ？ 助けるって、どっちを？」

リーファ「勿論、虐められてる方をよ。」

キリト「どうしたもんか……。」

カルム「なあ、あの攻撃を受けてる方、なんかクラゲみたいだな。」

ミト「本当だ。水棲生物なのかしら？」

キリト「それだ……！ ユイ、近くに川とか湖とか無いか!？」

ユイ「北に200m離れたところに、氷結した湖があります！」

カナ「そこに行けばいいと思う！」

パラド「じゃあ、行きますか！」

すると、キリトがピックを取り出した。

投擲スキルを使うのか？

カルム「待って待って待て！」

俺の静止も間に合わず、キリトがピックを投げて、それが巨人に命中して、こつちにタゲが向いた。

俺達は、すぐさま走り出す。

ハヤト「うわああアア!!」

リーファ「ひいひいどおひいひいひい！」

カルム「走るぞ！」

ミト「キヤアアア！」

パラド「嘘だろオオオオオ!?」

俺達は、すぐさま駆け出したキリトを追っていたが、唐突に止まった。

俺たちもキリトと合流した。

すると、俺達を追いかけていた巨人が沈んでいく。

リーファ「そ、そのまま沈んでええ……。」

ハヤト「あ。無理だ。」

そう、巨人は、こちらに近づいてくる。

だが、後ろから象水母が2体共に近づいてきた。

象水母は、両方とも、足を巨人に絡ませて、そのまま電撃を食らわして、巨人を倒し

た。

その後、象水母は、こちらに近づいてきたが攻撃の素振りは見られない。

だが、長い鼻を伸ばしてきた。

カルム「げっ……。」

カナ「大丈夫よ、パパ。この子、怒ってない。」

そう言うのと否や、俺、ミト、パラドが巻き取られて、上に乗つけられた。

片方の方には、キリト、リーファ、ハヤトの3人が乗った。その2体は、移動を開始する。

ミト「どうするの？」

カルム「どうするって言われても……。」

パラド「ならよ、名前つけようぜ！」

カルム「……良いけど、そこまで良い名前は思いつかんぞ。」

ミト「ならさ、ジョンはどう？」

カルム「……それって、随分と残酷な名前な気がするが、まあ良いか。」

パラド「なら、コイツの名前はジョンだ！」

どうやら、向こうの方は、トンキーに決まったらしい。

何でこうなるのやら。

しばらくして、世界樹が垂れ下がっているところまで来ると、トンキーとジョンは、足と鼻を丸めて動きを止めた。

背中から降りてどうしたものかと思っていると。

カナ「パパ！東から多数のプレイヤーが近づいてくる！」

パラド「何？」

すると、ウンディーネと思われる一団が現れた。

ウンディーネ「アンタら、その2体の邪神、狩るのか狩らないのか？ 狩るなら早く攻撃してくれ。狩らないのならどいてくれ。」

リーファ「……マナー違反を承知でお願い。この邪神は私達に譲つて。」
ウンディーネ「まさか、こんな所でそんなセリフを聞くとはな。」

まあ、普通なら、あり得ないよな。

だけど、この邪神には、助けられたんだ。

キリト「頼む。……カーソルは黄色だけど、この2体の邪神は、俺達の友達なんだ。」
カルム「この2体は死にそうな目に遭いながらここまで来たんだ。」

ハヤト「最後まで、したいようにさせてやってほしい。」

ミト「お願い。」

そう言うと、笑われた。

仕方なく、下がった。

しばらくすると、トンキーとジョンの2体に容赦なく攻撃が降り注ぐ。
カナを見ると、泣いていた。

パラド「心が滾る……！」

パラドも、怒りに満ちていた。

なら、やるべきことは一つだ。

キリト「リーファ、ハヤト。」

カラム「ミト、パラド。」

リーファ「分かってる。」

ハヤト「助けようぜ。」

ミト「ええ。」

パラド「行くぜ！」

俺達は、メイジ部隊に強襲をかける。

それぞれの武器を叩きつけ、メイジを倒す。

メイジ「しよ……正気かよ!？」

リーファ「さあ、どうかしら……ね!!」

パラド「遊ぼうぜ!!」

だが、ウンディーネ達の切り替えは早く、俺達は次第に追い詰められる。

ここまでか……。

そう思っていると、鳴き声が聞こえた。

見ると、トンキーとジョンから純白の光が降り注ぎ、支援魔法や攻撃魔法が消えていく。

リーファ「フィールド・デイスベル！」

カルム「何だそれ!？」

リーファ「一部の高レベルボスモンスターがもつ特殊能力なの!」

ミト「嘘……。」

すると、トンキーとジョンから翼が生えて、垂直に舞い上がった。

更に、トンキーとジョンの羽が、青く輝きだした。

カルム「伏せろ!」

俺達が伏せた直後、トンキーとジョンから雷撃がウンディーネ部隊に降り注ぐ。

その後、弓使いやメイジの中から一撃で四散した者もいて、撤退していった。

トンキーとジョンは、勝利の声を響かせて、こちらに来了。

カルム「どうすんだ?これ?」

ミト「そう言われても……。」

パラド「生きてて良かったぜ!」

その後、またそれぞれの背中に乗せてもらって、世界樹の根の所へ。

途中、ダンジョンの最下部を見たリーファの反応が凄かった。

リーファ曰く、聖剣エクスカリバーが刺さっていたそうだ。

ゲーマー心を刺激されたが、アスナの救出を優先すべく、諦めた。

それは、ミトとパラドも同様だったようで、未練が顔に出ている。

その後、階段がある所に送ってもらった。

そうして、階段を駆け上がると、苔むしたテラスに出て、そこに広がっていたのは、世界樹だった。

カルム「すげえ……！」

ミト「……あれが世界樹……。」

リーファ「間違いないよ。……ここがアルンだよ！」

ハヤト「漸く着いたかあ！」

パレード「ああ！俺はカルムの体に引っ込んでいるわ。」

キリト「漸くだな。」

その後、午前4時から午後3時まで、メンテナンスが入るそうので、宿に泊まってログアウトする事に。

第11話 交錯する思い

冬馬 side

あの後、キリトが安宿に泊まって、俺達は普通の宿に泊まってログアウトした。遂にアスナの近くに来れた。

冬馬「まあ、どうするかは考えていないんだけどな。」

そう、世界樹のどこにアスナが居るのかを確認しなければならぬ。

その為にも、どうにかして世界樹に入らなければ……。

下に行くと、母さんと2人の男性が話していた。

冬馬「母さん、その人誰？」

洋子「おはよう。……この人は、レクトの人なんだけど……。」

冬馬「!?」

俺が警戒心を顕にしていると。

???「流石に、初対面の人にそんな対応は地味にシヨックなんだけど……。」

冬馬「あまり、レクトの事を信頼出来なくてですね。」

???「まあ、それもそうか。」

洋子「じゃあ、私、仕事に行ってくるね。」

冬馬「うん。」

母さんは、仕事に出かけた。

父さんは、道場仲間と一緒に練習試合を行う為外出している。

しばらく沈黙が続いた。

冬馬「それで？アンタら誰？」

巧「あ、僕は安田巧。レクトのフルダイブ関連の研究部門にいてね。で、こっちが

……」

徹大「私は重村徹大。娘が世話になったね。」

冬馬「娘？」

徹大「ああ。SAOではユナというプレイヤーだな。」

冬馬「ユナのお父さん？」

徹大「ああ。」

そんな人達が何の用だろうか？

それを聞くと。

巧「実は、知っているかもだけど、アスナさんを始めとする300人のSAOプレイ

ヤーは、須郷伸之によって監禁されている。」

冬馬「……………そうですね。」

徹大「須郷君は、私のラボの学生の1人でね。師としては、放つてはおけない。」

冬馬「だったら、本人に言えばいいじゃないですか。」

巧「言つたけど、惚けられてね。」

徹大「だからこそ、君に会いたかった。娘の例も兼ねてな。」

なるほどな。

正直、礼を言われるとは思わなかった。

そういえば、重村ラボって言えば、茅場晶彦も在籍してたはず。

巧「それと、パラドは元気かな？」

冬馬「……………!?何でパラドを？」

巧「実は、パラドを君のアバターに感染させたのは、僕なんだ。」

冬馬「!?……………どういう意図ですか？」

巧「実は、須郷伸之に備えてね。」

安田巧という人物から明かされたのは、須郷伸之が、彼が開発したゲームデウスという

モンスターデータを奪っていった。

対抗する為に、パラドを作ったそうだ。

と言つても、パラド自身が俺に興味を抱いていた事がきつかけらしい。

冬馬「何の為に、こんな事を？」

巧「何とかして、捕まっている人たちを解放する為だ。」

徹大「一応、彼から聞いた話だが、パラドにゲームデウスに対抗するプログラムを送る事になっている。」

冬馬「……つまり、どうにかして欲しいと？」

巧「頼む。」

冬馬「……分かりました。」

そうして、俺は了承して、2人は帰った。

まあ、アスナを助けるのは俺の今の目標だから関係ない。

その後、和人、直葉、深澄、侑斗の4人と合流して、アスナの元へ。

侑斗 side

翌日、朝ご飯を食べて、のんびりしていると直葉からメールが来た。

直葉もアスナの元に行くらしい。

俺も行くこうと思っていたので、行く事に。

病院のゲート前で待っていると、和人、直葉に、冬馬に深澄が到着した。

侑斗「これで全員かな？」

和人「ああ。」

直葉「お待たせ。」

冬馬「行こう。」

深澄「そうね。」

俺達は、パスを受け取り、アスナの病室へと向かう。

直葉「結城……明日奈さん。アスナさんって、キャラネームを本名にしてたんだね。」

和人「ああ。俺が知る中でキャラネームと本名を一緒にしたのはアスナだけだよ。」

深澄「本当にね。あの頃は新人だったからね。仕方ないのかもね。」

侑斗「それが、あの閃光と呼ばれるようになるとはな。」

冬馬「そうだな。入るか。」

そうして、病室に入る。

和人「スグは初めてだったな。彼女がアスナ。血盟騎士団第一副団長にして、《閃光》の異名を持つ。」

冬馬「彼女の剣の正確さとスピードでは、俺達は勝てないよ。」

直葉「初めまして、アスナさん。」

侑斗「久しぶり……いや、こっちで会うのは初めてだから初めましてだな。」

そうして、和人が明日奈の手を両手で包み込む。

流石に邪魔しちや悪いと思い、病室から退室して、エレベーターの前のベンチに座る。

直葉「侑斗君、隣、良い？」

侑斗「良いぞ。」

しばらくすると、直葉も出てきたので、隣に座らせる。

侑斗「あの3人は？」

直葉「思い詰めた表情だった。……流石に邪魔しちやいけないと思つて。」

侑斗「そうだな……。」

直葉「侑斗君つてさ、好きな人居るの？」

侑斗「……随分と急だな。」

直葉「ちよつと、気になつちやつて。」

侑斗「……居るな。」

直葉「そうなの……？」

侑斗「ああ。」

そんな話をしていると、残りの3人も退室してきて、皆と別れて家に帰った。

自室に入ると。

侑斗「俺は、スグの事が好き……。」

そう呟いた。

だけど、すぐにはらしくないと思い、気持ちを切り替えてALOへとログインする。

直葉 side

侑斗君にあんな事を聞いたけど、その際に私を見ながら言っていた。

その際に、赤くなっていた。

直葉「もしかして……私の事なのかな……？」

そんな事を呟いたけど、急に恥ずかしくなってきた。

ここ最近、侑斗君を見ると顔が赤くなる。

それに、ドキドキもする。

お兄ちゃん、カルムさん、ミトさん、そしてハヤト君との冒険はとても楽しい。

いずれ、聞いてみよう。

そう思い、ALOへとダイブする。

カルム side

家に帰った後、すぐさまナーヴギアを装着して、ALOへと入る。

目を開けると、1人の男性が跨っていた。

カルム「……パラド？何してんの？」

パラド「いやあ、退屈になってさ。お前の髪とかを弄ってた。」

カルム「まあ、いいけど。」

しばらくすると、残りのメンツもログインしたようだ。

パラドは俺の体に引っ込んだ。

カルム「さて、どうする？」

ミト「まずは、世界樹の根元にまで行きましようか。」

キリト「そうだな。」

ハヤト「じゃあ、行こうぜ！」

リーファ「うん！」

さすが、世界樹の根元の街というだけあり、全ての種族が垣間見える。

しばらくは、街を眺めていたが、世界樹の根元にまで行く。

キリト「あれが……世界樹……。」

カルム「随分とデカいな。」

ミト「リーファ。確か、あの樹の上にも街があるのよね。」

リーファ「うん。そこに妖精王オベイロンと、光の妖精アルフが住んでいて、王に最初に謁見できた種族はアルフに転生できる……って言われてるの。」

ハヤト「なるほどねえ。」

キリト「あの樹には、外側から登れないのか？」

リーファ「樹の周囲は侵入禁止エリアになってて、木登りは無理。」

ミト「何人も肩車して、限界を突破した連中が居るって聞いたけど……。」

リーファ「ああ、アレね。あの後、GMも焦ったみたいで、修正されたの。」
その様な話をしながら門を潜ろうとしたその時。

ユイ「ママ……ママが居ます。」

キリト「な……!!？」

ミト「本当!!？」

カナ「うん。アスナさんのプレイヤーIDは、真っ直ぐこの上空にある！」

カルム「行くぞ！」

俺、キリト、ミトは、即座に翅を広げて、世界樹の上空へ。

リーファ「お兄ちゃん!!？」

ハヤト「カルム!!?ミトさん!!？」

ハヤトとリーファの声が聞こえてきたが、無視していく。

しばらく上昇したが、障壁に阻まれる。

それでも諦めずにいると。

リーファ「無理だよ!3人とも!」

ハヤト「こつから先は無理だ!」

キリト「行かないと……!!」

ミト「早く……!!」

カルム「クソっ……………！」

すると、ユイとカナが飛び出して、警告モード音声で呼びかけるようだ。

アスナ side

須郷が設定したパスワードを覚えて、脱出出来たものの、須郷の部下に見つかってしまい、また檻に戻されてしまった。

突っ伏していると、声が聞こえてきた。

??? 「……………ママ……………!!」

アスナ「ユ……………ユイちゃんなの……………!?!」

頭の中に直接響いてきて、咄嗟に下の方を見ると、ユイちゃんの声が聞こえてくる。

アスナ「私は……………私はここだよ……………!!ここにいるよ……………!!ユイちゃん……………!!」

あの世界で出会った娘が居るといふ事は。

アスナ「……………キリト君……………!!……………カルム君……………!!ミト……………!!」

あの3人もここまで来そうという事だ。

しかし、どうやって伝えればいいのか……………!

オブジェクトが固定されている以上、落として答える事は出来ない。

だが、あのカードキーがあるのを思い出す。

そう、確かに須郷の部下に捕まってしまったが、その際にカードキーを回収していた。

カードキーを躊躇いも無く落とす。

キリト君……カラム君……ミト……気づいて……!!

そう祈りながら。

カラム side

もう少しでアスナの元に行けると思ったのにシステムに阻まれてしまった。

キリトが剣を抜こうとすると。

カラム「何だあれ？」

キリト「え？」

すると、何かのカードだった。

ユイとカナ曰く、システム管理用のアクセスコードらしい。

つまり、アスナは俺たちの存在に気づいてこれを落としてくれたのだ。

なら、諦める訳にはいかない。

俺達はそう決意した。

第12話 決死の突撃

カルム side

アスナが落としたであろうカードキーを回収した俺達。

次の行動は、世界樹の中に入る事だ。

キリト「スグ、教えてくれ。世界樹の中に通じてるっていうゲートはどこにある？」

リーファ「樹の根元にドームがあるけど……。で、でも、あそこはガーディアンに守られていて、サラマンダーの軍勢ですら突破出来なかつたんだよ。」

ミト「それが何だって言うの。むしろ上等じゃない。」

カルム「アスナを絶対に助ける。」

ハヤト「なら、俺達も……！」

カルム「悪い。ハヤトとリーファはここで待っていてくれ。これは、俺たちの戦いなんだ。」

そう言つて、ハヤトとリーファの2人を置いていき、そのドームの元へ。

そこには、2体の妖精の像が置いてあつた。

キリト「……2人とも、悪いな。」

ミト「気にしないで。」

カルム「これに関するお礼は後でたっぷりと出してもらおうぜ。」

そうして、グラウンドクエストに受けるかどうかのメッセージが出て、俺達はドームの中へ。

ハヤト side

アイツら、アスナが居ると分かって、焦りだしたな。

つたく、仕方ねえな。

ハヤト「さて、俺はアイツらの言葉を破って行くつもりだけど、リーファはどうする？」

リーファ「私は……私も行く！お兄ちゃん達だけじゃ不安だもん！」

ハヤト「なら、決まりだな。じゃあ、あのセリフ言つとくか。」

リーファ「あのセリフ？」

ハヤト「追跡！撲滅！いずれもマツハ！このハヤトが、アイツらを追っていくぜ！」

リーファ「……カッコつけ？」

ハヤト「ソレを言われると傷つくんだがな。とにかく！行くぜ！」

リーファ「うん！」

俺達も、根元のドームにまで行く。

カルム side

SAOのボス部屋と同様に、俺達が入ると同時に扉が閉まっていく。

SAOのボス戦と同じ様な緊張感がある。

キリト「行くぞ、ユイ。しっかり頭を引っ込めてろよ。」

カルム「カナも、頭を引っ込めてくれ。」

ユイ「パパ、カルムさん、ミトさん。……頑張ってください。」

カナ「3人とも、無茶しないで。」

ミト「……行くわよ。」

中はドーム状になっていて、天辺に巨大な石造りの扉がある。

俺達が翅を広げて飛び立つと、すぐにリーファが言っていたガーディアンが現れた。

キリト「そこをどけええええっ!!」

ミト「邪魔するなら斬り刻む!」

カルム「行くぜ!!」

現れた6体のガーディアンを、それぞれの武器で倒す。

手応えが無いなど思っ上を向くと、数十いや、数百のガーディアンが現れた。

カルム「嘘だろ……!!?」

ミト「あんなに沢山……!!?」

キリト「それがどうしたっ！上等だ!!」

少し怯んだ俺達を他所に、キリトは更に加速していく。

俺達も共に行く。

だが、ガーディアンは更に現れて、俺達は分断されてしまった。

強さ自体は、SAOのフロアボスには到底及ばないが、数が多い。

メダジャリバーとガシヤコンブレイカーを振るい、ガーディアンを倒していく。

心の中で、「このクソ運営が……!」と毒つきながら戦闘している。

攻撃は出来る限り捌きながら上昇していく。

すると、キリトに攻撃が集中して、キリトが黒いリメインライトへと変わる。

カルム「キリト……!」

ミト「……!」

ミトも気づいたようで、ガーディアンを倒しながらキリトのリメインライトへと向かう。

だが、俺たちのHPも減っていく。

すると、出口の方から緑の風がガーディアンを倒しながら近づいてくる。

リーファ「皆!」

ハヤト「どうやら、全滅する前に到着できたみたいだな!」

そう、リーファとハヤトだった。

ミト「2人も……!」

カルム「リーファ! キリトの回収頼む! ミト、ハヤト! 俺たちで引きつけるぞ!!」

そうして、俺、ミト、ハヤトの3人でガーディアンを引きつけて、リーファに回収させて、一旦脱出した。

やはり、脱出すると、ガーディアンは追ってこない。

その後、蘇生アイテムを使って、キリトは無事に蘇生された。

リーファ「お兄ちゃん!」

キリト「……スグ。すまない、心配かけた。」

ミト「……アレは、どうやって攻略する?」

カルム「多分、アレ、攻略出来ないな。まあ、諦める訳にはいかないけど。」

ハヤト「……なあ、無茶するなよ。アスナが居る事が分かって焦るのは分かるけど。」

キリト「皆、すまない。ここからは俺1人で行くよ。」

カルム「何でだ……?」

キリト「これ以上、迷惑をかけられない。」

リーファ「何でなの!?! 私の事を頼ってって言ったでしょ!」

キリト「スグ……。」

カルム「そうだぜ。ここまで来て、ここで仲間外れは悲しいな。」
ミト「だから、皆でアスナを助けよう。」

ハヤト「そうだぜ。」

キリト「皆……。分かった。」

まったく、キリトも抱え込むなよ。

そうして、俺達は作戦会議をする事に。

すると、レコンというプレイヤーが現れた。

レコン「リーファちゃん！」

リーファ「レコン!？」

カルム「アイツは？」

ハヤト「レコンっていつて、リーファのリアルでも知り合い。」

リーファ「アンタ、サラマンダーに捕まってたんじやないの!？」

レコン「いやあ、サラマンダーを毒殺してきたんだよ。」

リーファ「うわ、えげつな。」

確かに、えげつない。

だが、よくここが分かったな。

レコン「それはそうと、リーファちゃん！」

リーファ「な、何よ？」

レコン「その、ハヤトっていうシルフとはどういう関係なの!？」

ハヤト「俺？」

リーファ「ちよつとレコン!いきなり何を聞いてくるのよ!」

リーファのパンチでレコンが倒れた。

なんか、『K. O. !』という音声が流れてきたような気がする。

すると、更にプレイヤーがやって来た。

???「おい、案内すると言っておきながら、何をしている。」

レコン「あ。すいません……。」

ハヤト「つて!チェイス!!」

そう、そこに居たのは、チェイス、エギル、クライン、ノーチラス、ユナ、レイモンド、フィリップが居た。

クライン「漸く来れたぜ。」

ノーチラス「それで、副団長はどこに？」

エギル「何とか呼べたぜ。」

カルム「何でここに？」

ユナ「お父さんから、カルム達の助けに行つてやれつて言われたの!」

レイモンド「俺達は、エギルに頼まれてな。」

フィリップ「攻略が出来ないグランドクエストか。ゾクゾクするねえ。」

そうだ、重村教授の娘さんだったな、ユナって。

ちなみに、遅れた理由は、武器を整えていたそうで、チエイスはガシャコンスパロー、ノーチラスはデンガツシャー、レイモンドはプリズムビッカー、フィリップはサイクロンソードを手に入れたそうだ。

すると、リーファがハヤトを連れてどこかに行った。

ハヤト side

リーファに連れられて、俺はアルンの裏路地に行った。

ハヤト「どうした？」

リーファ「ハヤト君……いや、侑斗君は怖くないの？」

ハヤト「何が？」

リーファ「あのガーディアンによ。」

ハヤト「怖くないと言えば嘘になるな。……でも、大切な友達が困っているのなら、助けてやりたいんだ。」

リーファ「そうなんだ……。あのさ、ハヤト君に渡したい物があるの。」

ハヤト「何だ？」

そう言って、トレード画面を出して、俺に送って来たものがある。

そこには、ゼロガツシヤーという武器があった。

ハヤト「これは……？」

リーファ「きつと、ハヤト君の助けになると思って、回収してたの。」

ハヤト「いつの間に……。」

リーファ「だからさ、これ、君に使って欲しいの。」

ハヤト「……。分かった！ありがたく使わせてもらうぜ！」

俺は、武器をゼロガツシヤーに切り替えた。

結構、しつくりくるな。

どうやら、組み立て式の武器で、組み合わせ次第で、剣にもボウガンにもなるらしい。

ハヤト「サンキュー！使いやすいぜ！」

リーファ「よかったあ。」

そうして、俺達はキリト達の元へ。

第13話 仲間との突撃

カルムside

何か話していたリーファとハヤトが戻ってきて、作戦を立てる。

レコン「ね、ねえ。これって何の集まりなわけ？」

リーファ「これから、この面子で攻略するの。世界樹を。」

レコン「ええっ!？」

クライン「あ、あの！俺はクラインって言います！彼女募集中……!？」

クラインがそんな事を宣うと、ハヤトに腹を思いつきり殴られた。

クライン「何すんだよ！ハヤト!!」

ハヤト「五月蠅い！変な事言うな！」

チエイス「お前の女好きはどうかならないのか？」

クライン「黙れエエエツ！そもそも俺とハヤトとチエイスは非リア充だろ!？」

ハヤト「そんなのに入った気は無い！」

チエイス「1人でやっている。」

そんな人たちを見て。

ノーチラス「相変わらずの雰囲気だな。」

ユナ「まあ、良いじゃない。」

エギル「お前ら、少し落ち着けよ。」

俺達は作戦会議を始める。

ユイ「あのガーディアン自体はそこまで強くはありませんが、出現数が多すぎます。」
カナ「多分、攻略させる気がないと思う。」

キリト「皆、もう少しだけ俺の我儘に付き合っただけだ。」

カルム「最初からそのつもりだ。」

ミト「アスナを助けよう。」

ユナ「私の吟唱スキルも使えるからサポートは任せて！」

ノーチラス「僕は、ユナを守る！」

レイモンド「ダチを泣かせる奴は、この俺が許さない。」

フィリップ「僕も協力するよ。」

リーファ「そういう事だから、レコンもよろしくね！」

レコン「ハア……。分かったよ！やるよ！」

そうして、俺達は世界樹攻略作戦を開始する。

フォーメーションは、俺、キリト、ミト、クライン、エギル、ノーチラス、レイモン

ドが前衛を担い、リーファ、レコン、ユナ、フィリップが後衛だ。

フィリップもサイクロンソードを持っているが、あくまで護身用らしい。

クライン「オラア!!」

エギル「フン！」

クラインの刀とエギルの斧が唸りを上げてガーディアンを斬り裂く。

ノーチラス「ハアッ！」

レイモンド「さあ、お前らの罪を数えろ！」

チエイス「フッ！」

ハヤト「そこを退けえ！」

4人は、それぞれの武器の固有スキル、ノーチラスはエクストリームスラッシュ、レイモンドはビッカーチャージブレイク、チエイスはギリギリクリティカルフィニッシュ、ハヤトはスプレンドェッドエンドを発動する。

俺もマイティクリティカルフィニッシュとオーズバッシュを発動して、斬り裂く。キリトとミトもガーディアンを斬り裂く。

俺達のHPが減ると同時に、リーファ、レコン、フィリップの回復魔法で回復し、ユナの吟唱スキルでバフがかかる。

だが、それがきつかけになったのか、ガーディアンが後衛をタゲにとる。

それにはハヤトが対応するようだ。

ハヤト side

不味い！後衛に向かった！

俺はガーディアンを片付けると、後衛に向かい、倒す。

ユナ「何でこつちまで対象に!?!」

フィリップ「恐らく、あのガーディアンは前衛後衛関係なくターゲットを取るとい
事だろうね。」

ハヤト「なら、俺が対処する！皆は回復と支援を頼む！」

レコン「ハヤト。」

レコンが呼び止める。

何だろうか？

レコン「よく分かんないけど、これって君達にとって大事な事なんだよね？」

ハヤト「ああ。これは俺達にとって重要な戦いだ。絶対に負けられない。」

レコン「そうなんだ……。君の事は認めた訳じゃない。でも、力ぐらいいは貸すよ。」
そう言つて、レコンは補助コントローラーを握り、空中戦を開始する。

凄まじい集中力で、被弾を最小限に抑えて、攻撃する。

だが、攻撃が集中する。

すると、レコンが何かの魔法を唱えて、爆発した。

リーファ「自爆魔法……!」

ハヤト「何だよソレ!」

リーファ「通常の数倍のデスペナルティがあるの。」

ハヤト「なっ……!?!」

俺達が絶句していると。

チエイス「奴が作ったチャンスが無駄にするな!」

レイモンド「さあて、こっからが本番だぜ。」

そう、レコンが作ったチャンスが無駄にするわけにはいかない。

ガーディアンの壁に空いた穴に向かって飛翔するが、すぐに塞がっていく。

カルム side

レコンの自爆魔法を見て、覚悟を決めた。

関係ない奴があんなに気合いを入れたんだ。

ここでやらなければ……!」

だが、無情にも穴は塞がっていく。

カルム「不味い……!」

すると、複数の攻撃が命中する。

何事かと攻撃が来た方を見ると、シルフとケットシーの精鋭部隊が居た。
つまり……。

サクヤ「間に合ったみたいだな！」

アリシャ「装備が整うのに時間が掛かっちゃってサー。」

リーファ「サクヤ！アリシャさん！」

???「私たちも居ますよ！」

すると、更にプレイヤーが現れた。

それも、顔見知りのプレイヤー達だ。

カルム「シリカ、ヒロミ、リズ、ラット！」

リズベツト「やっと着いたわ！」

ラット「援護する！」

ヒロミ「行きますよ！」

シリカ「うん！ヒロミ君！」

そう、シリカ、ヒロミ、リズベツト、ラットの4人が来たのだ。

後から聞いた話だが、ヒロミは影松・真、ラットはバースバスターという武器を使う。
バースバスターの見た目は完全に銃だが、この世界ではボウガンの類らしい。

カルム「よし！パラド!!」

パラド「OK！」

俺の体からパラドが飛び出した。

皆には後で事情を話すか。

「超協力プレイで、クリアしてやるぜ！」

キリト「ミト、カルム、パラド！行くぞ！」

ミト「分かってるわ！」

俺達は一塊になり、お互いの背中に託す。

それぞれが持てる力で、ガーディアンを倒していく。

サクヤ「あの4人にガーディアンを近づけさせるな！」

アリシャ「ドラグーン隊！ブレス攻撃で敵を殲滅するんだヨ！」

領主達のサポートもあり、一気に近づけた。

これがラストチャンスだ。

だが、目の前にはガーディアンが。

カルム「！それぞれの持てる力を振り絞って、目の前の敵を倒せ！」

パラド「あいよ！」

キリト「ああ。」

ミト「ええ！」

俺たち4人の最大出力の攻撃が命中し、貫通して、ゲートに武器が突き刺さった。

ハヤト side

アイツら、本当に突破しやがった。

サクヤ「総員、後退！」

リーファ「お疲れ！」

ハヤト「ああ。後は、頼んだぜ。」

俺は、アスナの運命をアイツらに託して、撤退した。

カルム side

俺達は、突破する事が出来た。

だが、ゲートはいつまでも開かない。

キリト「どうしてゲートが開かないんだ！」

カルム「カナ！ユイちゃん！調べてくれ！」

カナ「これは！この扉はクエストフラグでロックされてるんじゃないやなくて、システム管

理権限による物よ！」

ユイ「つまり、この扉はプレイヤーには絶対に開きません！」

「「「「なっ……!?!?」」」」

つまり、あのグランドクエストは最初から何の意味もないという事だ。

そんな事を考えていると、ガーディアンが迫ってくる。

パラド「そういえば、アスナって奴が落とされたカードキーを使えば開くんじゃないか
!？」

カルム「ナイス、パラド！」

キリト「その手があったか！ユイ、カナ！頼むぜ！」

ミト「お願い！」

ユイ「コードを転写します！」

すると、ゲートが開く。

カナ「転送されます！皆さん、気をつけて下さい！」

俺達は、ゲートの中へ。

第14話 神を騙る者

転送された俺達は、周囲を見渡すと、そこは静寂に包まれていた。

ピクシー態ではなく、本来の少女の姿になったユイとカナが声をかける。

ユイ「大丈夫ですか、パパ？」

キリト「ああ。ここは……？」

カルム「何もないな。」

ミト「とにかく、アスナの元に行きましょう。」

カナ「アスナさんの位置はかなり近いです。」

パラド「気をつけるぞ。」

エレベーターを見つけて、そこに入り、更に進んでいく。

途中で、奇襲を警戒していたのだが、誰も出てこない。

ユイとカナがドアを開けると、そこにはまさに世界樹の頂だ。

だが……。

キリト「無いじゃないか……。空中都市なんて……。」

ミト「つまり、アレは中身は大きい嘘だったという事ね。」

カルム「……許されないぞ。」

これは、全てのALOプレイヤーを騙していたに等しい。

あのサラマンダー達も、世界樹の攻略の為にあんな事をしたのだから。

俺の脳裏に、サクヤ、アリシャ・ルー、ユージーン、カゲムネ、レコン、そしてリー
フアがよぎった。

キリト「とにかく、行こう。」

カルム「そうだな。後で訴えてやる。」

俺達は、先に進むキリトとユイを追いかけていく。

ここでも奇襲は無かった。

しばらく進むと、そこには鳥籠が。

その中には、アスナが。

流星にパラドは俺の中に引っ込んだ。

キリト「アスナ。」

ミト「アスナ。」

カルム「アスナ。」

ユイ「ママ！」

カナ「アスナさん！」

ユイとカナが閉じられていた扉を開き、鳥籠の中へと駆け込む。

アスナ「ユイちゃん！」

アスナとユイの2人は抱き締め合っていた。

本当に、よかった。

そして、キリトも抱きしめた。

ミト「良かったわね。」

カルム「ああ。本当によかった。」

キリト「アスナ、帰ろう。現実世界に。」

ミト「それで、どうすればアスナを現実世界に帰せるの？」

ユイ「ママは今、複雑なコードによって拘束されています。」

カナ「それを解除するには、システムコンソールが必要。」

という訳で、システムコンソールがある最下層に向かおうとしたが、誰かに見られている気配がする。

カルム「皆！警戒!!」

メダジャリバーとガシヤコンブレイカーを構え直すと、鳥籠が水没した。

しかも、体が重い。

ミトとカナ、キリトとアスナとユイも似た様な状態になっていて、世界は暗闇に包ま

れた。

すると、ユイとカナが体を仰け反らせる。

ユイ「皆さん、気をつけて！」

カナ「何か、良くないものが……！」

すると、2人は消えてしまった。

何とかミトの手を取ろうとするが、いきなり重力が強くなった。

何事かと混乱していると。

??? 「やあ、どうかな、この魔法は？ 次のアップデートで導入するつもりだったが、

ちよつと効果が強すぎるかな？」

その声を忘れる訳がない。

俺たちを英雄と揶揄したあの声だ。

カルム「須郷伸之……！」

キリト「須郷……!!」

オベイロン「おいおい、この世界でその名前はやめてくれ。妖精王、オベイロン陛下

と……そう呼べッ!!」

すると、俺とキリトは蹴られた。

そこに居たのは、姿こそ違うが、あの須郷伸之だと分かる。

アスナ「須郷！あなたのした事は、全部この眼で見たわ!! あんな事をして、許される筈がない！絶対!!」

オベイロン「誰が？この世界に神は、僕だけだよ！」
本当に耳障りだ。

オベイロン「それにしても、桐ヶ谷君に、小野君、兔澤君……いや、キリト君にカルム君にミト君だったな。まさか、本当にここまで来るとはねえ。」

カルム「生憎、俺は執念深くてね。」

オベイロン「フン。そもそもどうやってここまで来たんだい？」
キリト「飛んできたのさ、この翅で。」

オベイロン「まあいい。君達はこれから私の実験台さ!! ああ、考えるだけでゾクゾクするよねえ!! 君達の感情を書き換えるのはさ！」

本当にヤベエ奴だ。

オベイロン「君達は性懲りも無くナーヴギアで接続しているのだろう？なら、立場は他の実験台と全く同じだ。」

アスナ「そんな事、許さないわよ！須郷!!」

ミト「……カルム。ログアウトして。」

カルム「分かった。」

メニユーウインドウを出そうとするも、出てこない。

オベイロン「残念だけどねえ！この世界からは誰も逃げられないんだよ!!」

そう言うと、4本の鎖が現れて、それをアスナとミトの2人につけて、ぶら下げる。

重力の影響を受けているのか、2人の顔が歪む。

カルム「お前、何する気だ……!」

オベイロン「やれやれ、観客は這いつくばっているよ!」

立とうとするも、蹴られて叩きつけられる。

キリトも同様だ。

オベイロン「まあ、カルム君にはコイツの相手をしてもらおう!いでよ、ゲームデウス

!!」

そう言うと、一体の怪人が現れる。

カルム「何だコイツ!?!」

オベイロン「あの安田巧からデータを奪って実体化させたものさ!さあ、ゲームデウス

!アイツを苦しめろ!!」

マジかよ。

すると、ゲームデウスが俺に近づいてきて、無理矢理立たせて、叩きつけられる。

ゲームデウス「ハアッ!」

カルム「ぐっ!!」

ミト「カルム!!」

オベイロン「アハハハ!!傑作だ!アイツには感謝しないとなあ!!!」

まったく、安田さんは、とんでもない物を作ってくれたもんだ。

だが、状況は最悪だ。

メダジャリバーとガシャコンブレイカーを奪われてしまい、斬りつけられる。

キリトの方も、背中に剣を刺されていた。

パラドside

まずい、巧博士はまだか!?

カルムの体内に潜んではいるが、このままではカルムが危ない!

何も出来ない俺が歯噛みしていると。

巧「やつと繋がった!」

パラド「おせえぞ!!」

巧「すまない!やつと対ゲムデウスのプログラムが出来た!」

パラド「そうか!」

巧「おそらく、須郷が居るな。」

パラド「ああ。なら、早くそのプログラムをくれ!!」

巧「……………」

パラド「どうしたんだよ。」

何故かいきなり黙った。

巧「いいかパラド。よく聞いて欲しい。この対ゲームデウスプログラムは、武器にインストールして使うけれど、武器はどうなっている？」

パラド「それが、ゲームデウスに奪われてて使えない！」

巧「なら、方法は一つしかない。それは、パラド自身にインストールして、ゲームデウスを道連れにする事だ。」

パラド「なっ!？」

巧「本当ならやりたくないけど、武器を奪われている以上、それしかない……………」

パラド「……………」

つまり、俺が死ぬって事だ。

……………」

悪い、カルム。

パラド「分かった、俺がやる。」

巧「何?!?何故だ……………」

パラド「それをやらないと、カルムが助からないんだろ?なら、やるぜ。」

巧「パラド……。本当に良いのか？」

パラド「ああ！アイツの為に、力を貸してくれ博士!!」

巧「……………。カルム君、ありがとう。分かった。すぐにインストールする!!」

パラド「ああ！」

カルム side

俺がゲムデウスに痛めつけられていると。

パラド「悪いな！お前もろとも道連れだ！」

パラドの声が聞こえて、パラドが現れて、ゲムデウスに張り付く。

カルム「パラド！」

オベイロン「何だ、そのプログラムは!？」

パラド「巧博士からの伝言だ。須郷、お前はミスをしたな!!」

オベイロン「何!？」

パラド「ハアアアア!!」

ゲムデウス「ぬうオオオ!!」

パラドに張り付かれたゲムデウスは、あっさり消滅した。

オベイロン「バカな……………!？」

パラド「フツ。一矢報いたぜ。」

そう言うパラドの体も透けている。

カルム「パラド……!?!」

パラド「悪いな。ここでお別れだ。」

カルム「何で……!?!」

パラド「ゲームデウスに消滅プログラムを流し込んだ際に、俺も消えるんだ。」

カルム「そんな……!?!」

パラド「カルム……。短い間だったけど、お前と過ごせて、楽しかったぜ。キリト達の運命を変えろよ……!?!」

そう言うと、パラドは消滅した。

パラドの手を取ろうとしたが、消えて、パラドの粒子が手に残っただけだった。

オベイロン「フン! その程度で勝った気になるなよ。まったく、あんなへボプログラムに運命を託すとは、アイツも愚かだな。」

カルム「何だと……?」

須郷のへボプログラムという言葉に、俺の怒りのスイッチが入る。

それに、ゲームデウスに痛めつけられていて気づかなかったが、アスナとミトの服が破られていて、素肌が顕になっていた。

カルム「お前の様なクズが、パラドの事を、笑うんじゃねえ!!!」

??? 「よく言った。」

すると、1人の男性が現れた。

オベイロン 「き、貴様はアアア!!」

キリト 「茅場……。」

カルム 「晶彦……。」

茅場 「そうだ。システムログイン。IDヒースクリフ。」

すると、俺たちを苦しめていた重力が突如として消えた。

そうして、俺達は立ち上がる。

オベイロン 「何!?!」

茅場 「この世界は返して貰うよ。システムコマンド、スーパーバイザ権限をオベイロンからキリトに変更。IDオベイロンをレベル1に。」

オベイロン 「茅場!!」

茅場 「後は任せたまよ。あと、カルム君。キリト君にこれを渡してくれ。」

そう言つて渡してきたのは、一本の剣だった。

カルム 「これは?」

茅場 「私の後輩の1人が作ってくれた物だ。」

カルム 「分かった。」

俺は、ライドブツカーという剣をキリトに渡した。

キリト「さあ、オベイロン。」

カルム「こつからは、俺達のステージだ。」

オベイロン「貴様らアアア!!」

こうして、キリトと俺VSオベイロンの最終決戦が始まる。

第15話 泥棒の王VS2人の鍍金の勇者

カルムside

茅場のサポートもあり、俺達は問題なく動ける様になった。

オベイロン「ば……バカな……。何で茅場がいるんだよ……!!」

カルム「さあ？」

キリト「盗んだ玉座の上で、独り踊っていた気分はどうだ？」

オベイロン「ガキども……!!この僕に向かつてそんな口を……!!システムコマンド!!

オブジェクトID《エクスキャリバー》をジェネレート!!」

だが、何も起こらない。

それもそうだが、既に権限はキリトに移行しているのだから。

オベイロン「システムコマンド!!言う事を聞けこのポンコツが!!」

そんな事を喚き散らす須郷を無視して、アスナとミトの方を見る。

2人の服は須郷に無理引きちぎられた。

しかし、2人の瞳は未だに輝きを失っていない。

キリト「すぐに終わらせる。」

カルム「だから、待っててくれ。」

2人は小さくだが、確かに頷いた。

虐げられたミトを見て、須郷に殺意が湧いた。

キリト「システムコマンド！オブジェクトID《エクスカリバー》をジェネレート！」

その声と共に、ヨツンヘイムで見た、あの聖剣が現れた。

キリトは少し苦笑して、須郷に向かって放り投げる。

それを須郷は危うい手つきで受け止める。

キリトが自身の剣とライドブツカーを構え、俺はメダジャリバーとガシャコンブレイカーを構える。

カルム「決着をつけよう。泥棒の王と2人の鍍金の勇者の……！！」

キリト「システムコマンド、ペイン・アブソーバをレベル0に。」

オベイロン「何!?!……茅場!!何でアンタは死んでも僕の邪魔をする!!アンタはいつもそうだ!いつだって何もかも悟ったような顔しやがって……僕の欲しい物を端から攫って行って……!!」

カルム「須郷。お前の気持ちは分からんでもないよ。何せ、俺たちもアイツに負けて家来になったからな。」

キリト「でも、俺達はアイツになりたいたいなんて思った事は無いぜ。」

そう声をかけると同時に須郷は襲いかかってきたが、俺達はアツサリ迎撃する。

キリト「そう言えば、このライドブツカーって奴、こんな力もあるんだよな。」

キリトがそう言ってライドブツカーを振るうと、須郷の前方の空間が歪んで、オーロラカーテンが出来上がった。

オベイロン「目眩しか!だが、そんなの意味がないわ!!」

だが、オベイロンがオーロラカーテンに向かつて攻撃すると、オベイロンの後ろにオーロラカーテンが出現して、攻撃がオベイロン自身に当たる。

オベイロン「な、何!」

カルム「本当にチート能力だな。」

キリト「……………まっただ。」

オベイロン「どういう事だ!」

キリト「このライドブツカーは、カルムが言ってた安田博士曰く、お前の為に作った能力だそうだ。」

オベイロン「アイツ…………!!」

キリトの攻撃がオベイロンに当たる。

オベイロン「いつ……………たあ!」

キリト「痛いだと?」

カルム「アスナとミトを虐げ、パラドを蔑んだ奴が言うセリフか!」

俺達は、躊躇なく、オベイロンの右手を斬り裂く。

オベイロン「アアアアアア!!手が……僕の手があああ!!」

そして、腹を斬り裂き、オベイロンの上半身を持ち上げる。

酷い顔だ。

見ててウンザリしてきたので、俺は上空に須郷を放り投げて、キリトと共に剣を奴に突き刺す。

お互いに奴の右目に命中して、そのままアイツは消え去った。

アスナの事はキリトに任せて、俺はミトを捕らえていた鎖を切る。

力なく崩れるミトを抱き止める。

ミト「……ありがとう。」

カルム「いや、俺だけじゃ無理だった。キリトにパラド、アイツが居たからな。」

ミト「……そうね。でも、君には本当に感謝してるのよ。」

カルム「そっか。」

しばらく俺とミトは抱き合っていて、アスナがログアウトし、周囲には静寂が。

キリト「……そこに居るんだろう? ヒースクリフ。」

茅場「久しいな、キリト君、カルム君にミト君。」

カルム「アンタ生きてたのか？」

茅場「そうであるとも言えるし、そうで無いとも言える。私は、茅場晶彦という意識のエコー、残像だ。」

ミト「分かり難いことを言うわね。」

カルム「礼は言うけど、助けに来てくれるとはなあ。」

すると、茅場に苦笑が浮かんだ。

茅場「いや、私の後輩の巧君がシステムに分散保存されたこのプログラムを覚醒させて、助けてやれとうるさくてね。それに、私に礼は無用だ。君達と私は無償の善意が通じる仲ではなからう。」

キリト「どうしろと？」

すると、キリトの手に、何かの卵みたいな結晶が降りてきた。

キリト「これは？」

茅場「世界の種子だ。芽吹けばどういう物か分かる。どうするかは君達に一存しよう。では、私はもう行くよ。いつかまた会おう。」

そう言つて、また消えていった。

気づくと、鳥籠のあつた場所に戻っていた。

カルム「そうだ……！カナ！無事か!？」

カナ「パパ、ママ!!」

ミト「カナ!!」

どうやら、無事で良かった。

カナとユイ曰く、アドレスをロックされそうになって、ナーヴギアのローカルメモリに退避したそうだ。

そして、俺達はログアウトする事に。

その時に、俺とミトもキリトと共にアスナが居る病院へと向かう。

現実へと戻ってきた。

冬馬「ちよつと、出かけてくる!!」

洋子「……どうやら、片付いたみたいね。」

倫太郎「ああ。……外は雪が降ってるから、気をつけるよ。」

自転車に乗り、一旦ミトと合流して、2人乗りになってしまおうが、乗せて、所沢の病院へと向かう。

既にキリトが先行している筈なので、パーキングエリアから敷地内に。

深澄「いよいよね。」

冬馬「ああ。」

キリトが乗ってきたであろう自転車があつたので、病院へと向かうが、誰かが争っている。

片方はキリトだった。

冬馬「和人！大丈夫か!？」

和人「ああ。何とか……。」

深澄「あれ……!」

深澄が指差す方に、誰かが居た。

須郷「遅いよ、キリト君にカルム君。僕が風邪引いちやたらどうするんだよ?」

冬馬「須郷……!」

そこに居たのは、須郷伸之だった。

奴の目は限界まで見開かれて居たが、右目は収縮したままだった。

須郷「酷い事するよねえ、2人とも。まだ痛覚が消えないよ。」

冬馬「……須郷、お前はもう終わりだ。」

和人「大人しく法の裁きを受けろ。」

深澄「自首しなさい。」

須郷「終わり? まあ、レクトはもう使えないけど、僕はアメリカに行くよ。その前に、とりあえず、君たちは殺すよ。」

そう言つて襲い掛かる。

どうやら、最優先はキリトラしく、キリトの方に向かつていく。

冬馬「深澄。下がってくれ。」

深澄「分かった。」

キリトにナイフを突き刺そうとした瞬間、蹴りを入れて、阻止する。

しかし、雪が積もっている結果、滑つてしまい、床に頭をぶつける。

おでこに手を当てると、血が出ていた。

冬馬「クツ！」

須郷「何すんだよ。なら、お前も殺す。」

ターゲットを俺に変えたのか、ナイフを突き刺そうとしてくる。

すぐさま転がつて回避する。

ただ回避するだけでなく、ナイフを遠くに飛ばす。

須郷「何!？」

冬馬「ハアッ！」

そして、カウンターに腹に殴りを入れる。

すると、あっさり気絶した。

冬馬「大丈夫か？」

和人「ああ……。」

深澄「とにかく、縛っておきましょう。」

奴のネクタイで腕を縛って動けなくする。

深澄「冬馬……！頭が……！」

冬馬「大丈夫だ。」

和人「行こう。」

病院の中へと入るが、深澄以外は怪我をしていて、酷い有様だ。

受付の所まで行くと、看護師が気付いたのか、驚いた声を上げる。

看護師「どうしたんですか!？」

和人「駐車場で、ナイフを持った男に襲われました。」

冬馬「白いバンの向こうで気絶しています。」

看護師「警備員、至急一階ナースステーションまで来て下さい。」

警備員がやって来て、看護師が説明すると、顔を顰めて、通信機に何事か呼びかけて、

エントランスへと向かった。

残った看護師は、俺達の傷を見ていた。

看護師「君達、12階の結城さんのご家族よね？傷はそこだけ？」

冬馬「はい。」

看護師「そう。すぐにドクターを呼んでくるから、そこで待ってて。」

キリトを行かせるために、カウンターに身を乗り出して、ゲスト用のパスカードを掴み取って、キリトに渡す。

冬馬「ここは俺達に任せろ。」

深澄「何とか言い訳は考えておくから、アスナの元に行つて。」

和人「ありがとう……。」

そう言つて、和人はアスナの病室へ。

和人 side

ようやく、会える。

その一心で、アスナの病室へ。

そして、心の中で、2人に感謝している。

あの2人だけじゃ無い、俺とアスナを会わせる為に、皆が協力してくれた。

ドアを開けると。

『ほら……待ってるよ。』

『きゃっきゃと行け。』

そんな声でした様な気がして、俺は足を前にと動かず。

和人「ああ……。」

そこには、ナーヴギアを抱えながら外の風景を見ていた少女がいた。

和人「アスナ……。」

明日奈「キリト君。」

アスナの左手がナーヴギアから離れて、差し伸べられた。

俺はそつと、その手を取った。

アスナが俺の傷ついた頬に触れて、問いかける様に首を傾げる。

和人「ああ……最後の、本当に最後の闘いが、さつき、終わったんだ。」

明日奈「……ごめんね。まだ音がちゃんと聞こえないの。でも、分かるよ。君の言葉。終わったんだね……。漸く……。漸く君に、会えた。」

アスナの頬に涙が伝う。

明日奈「はじめまして、結城、明日奈です。ただいま、キリト君。」

和人「桐ヶ谷和人です。……おかえり、アスナ。」

どちらともなく顔が近づいて、唇が触れ合った。

外を見ると、背中に2本の剣を背負った少年と、銀の細剣を吊った、少女が居て、ゆっくりと遠ざかっていった。

冬馬 side

あの戦いの後、しばらくして、俺は1人の男性の元へと向かって行った。

冬馬「どうも、安田博士。」

巧「冬馬君か。どうぞ、腰掛けてくれ。」

安田巧博士の元へ。

理由は、サポートへの感謝だ。

冬馬「あなたのおかげで、アスナや残りのプレイヤー達を助けられました。」

巧「気にするな。当然の事をしたまでだ。」

冬馬「……それで、パラドは……。」

巧「ああ……。すまない。本来なら、武器に対ゲムデウスプログラムを入れる筈だったのに、あんな形にしてしまっ……。」

冬馬「いえ、武器を奪われてしまったこちらにも責任はありますから。」

巧「本当にすまない。」

冬馬「それで、ALLOのアカウントを持って来てくれって言われましたけど。」

巧「そうだな。貸してくれ。」

博士にアカウントデータを渡して、博士は解析を始めた。

しばらくして、驚愕の表情を浮かべた博士がこちらに戻って来た。

冬馬「どうしました?」

巧「聞いてくれ。パラドを復元出来るかもしれないんだ!」

冬馬「どういう事ですか!？」

巧「どうやら、パラドが消滅する直前に、君の中にパラドの粒子が入った結果、君の
アバターデータ内で、再生しつつあるんだ。」

冬馬「本当ですか!？」

巧「ああ。ただ、再生にはもう暫く時間がかかるみたいだ。」

冬馬「分かりました。なら、待ちます。」

巧「分かった。」

冬馬「それと、頼みがあるんですが……。」

俺は、博士に頼みを伝えて、帰宅した。

第16話 事件の終結

冬馬side

2025年 5月16日

あのALOの事件からもうすぐ4ヶ月だ。

俺達は、この春から、帰還者学校へと通う事になった。

ちょうど午前の授業が終わり、俺は道具をリュックに纏めていると、1人の男子生徒に声をかけられた。

男子生徒「冬馬、席を取つといてくれ。」

男子生徒「無理無理、冬馬はあの人と謁見の日だろう。」

男子生徒「そうだった。畜生！羨ましいよ！」

冬馬「悪いな。じゃっ！」

またいつもの恨み言を言われる前に退散する事にする。

そして、屋上へと向かい、そこには兎澤深澄が居た。

冬馬「お待たせ。」

深澄「カルム。そこまで待ってないよ。」

冬馬「そっか。後、こっちではカルムじゃなくて冬馬だから。」

深澄「ごめん。いつもの癖で。」

冬馬「まあ、無理ないしな。あんな生活をしていたらな。」

そうして、俺達は昼食を取る事に。

今回は、俺が作ってきた。

深澄「美味しそう！」

冬馬「俺の自信作だ！」

俺が作ったのは、鳥肉の唐揚げ、卵焼き、切り干し大根の和物、おにぎりだ。

一応、これぐらいは作れる。

食べ終えて、落ち着くと。

深澄「……それで、パラドはどうなの？」

冬馬「ああ。今日辺りに復旧が完了する。」

そう、あれから4ヶ月で、パラドは復旧する見通しになった。

博士曰く、こんなに早く復旧するとは思わなかったらしい。

深澄「じゃあ、また会えるのね。」

冬馬「ああ。」

深澄「それで、本当にあげるの？」

冬馬「うん。ALOではアイツの体になるしね。」

深澄「そつか。……ねえ、少し寄りかかっても良い？」

冬馬「ああ。」

俺達は寄り添いながら手を繋いだ。

侑斗 side

午前の授業が終わり、俺はヒロミこと鈴木壮吾と合流して、カフェテリアへ。

壮吾「皆、席を確保しているみたいだから、早く行こう。」

侑斗「そうだな。さっさと行かないと里香の奴がうるさいからな。」

カフェテリアに着くと、そこに大量の面子が揃っていた。

珪子「あ、壮吾君、侑斗さん。」

俺達に気づいて声をかけたのは、シリカこと綾野珪子だ。

どうやら、壮吾とは上手くやってるみたいだな。

6人用のテーブル席2つに座っているのは、チェイスこと狩野英介に、ラットこと歌星浩介、ノーチラスこと後沢鋭二、ユナこと重村悠那、レイモンドこと桐山翔太郎、フィリップこと菅田来人が座っていた。

侑斗「悪い、俺たちが一番最後か。」

浩介「いや、俺たちも今来たところだ。」

侑斗「それはそうと、何やってんだ、アイツら？」

俺が指差したのは、ニヤニヤしながら外を見ていたリズベツトこと篠崎里香、別の方
向を見ていたフィリアこと竹宮琴音、レインこと枳殻虹架だ。

虹架とはこの帰還者学校で初めて会ったが、虹架本人曰く、SAOで冬馬に助けられ
て、アイツに惚れたらしい。

深澄も大変そうだなと思った。

しかも、琴音と虹架は共に冬馬を諦めていないそうだ。

里香「アイツらは相変わらず、イチャコラしてるわねえ。撮りますか。」

浩介「やめろ。後でアイツらに何で止めなかったって責められるのは俺なんだぞ。」

里香「そんな時は、アンタも道連れよ。」

浩介「マジでやめてくれ。」

鋭二「それにしても、2人は諦めていないんだな。」

悠那「ある意味凄いわね。」

琴音「お宝は絶対に諦めないのはトレジャーハンターのモットーだからね。」

虹架「私も、諦めたくない。」

本当に大変そうだな。

俺はカツ丼、壮吾はざるうどんを頼んで、取りに行き、戻ると今日の予定を話す。

侑斗「そう言えばさ、今日のオフ会は誰が来るんだ？」

鋭二「ああ。店主のエギルを含めて、この場にいる全員とキリトにアスナさん、カルムにミトさん、アルゴ、ジェイク、クライン率いる風林火山の面子、黒猫団の面子、後はカルム達知り合ったヨルコさんにカインズ、シンカーにユリエールさん、ディアベル、サーシャさんで、キリトの妹も来るそうだ。」

侑斗「なら、スグは俺が迎えに行くわ。」

鋭二「頼む。」

悠那「私も曲を披露させてもらおうよ！」

そう、悠那はS A Oで生まれた歌姫として、A L Oで話題の存在だ。

そうして、俺達は昼食を食べる。

その後、学校が終わって、和人と明日奈、冬馬、深澄、俺は途中でスグと合流して、エギルの店のダイシー・カフェへと向かう。

その際に、和人と明日奈、冬馬と深澄は手を繋ぎながら歩いていた。

直葉「お兄ちゃんとアスナさんにカルムにミトさん、手なんか繋いでラブラブだね。」

侑斗「まあ、あれがアイツらの平常運転だ。でも、俺達が居る事を忘れないで欲しいんだけどな。」

一応、聞こえないようにヒソヒソと話している。

だけど、本人達は気にしておらず、周辺の空気がピンク色になっていた。だがまあ、羨ましくはある。

しばらくして、ダイシー・カフェに着いて、本日貸切の看板を見ながら中に入る。既に全員揃っていた。

和人「おい、俺達は遅刻してないぞ。」

冬馬「何で？」

里香「主役は最後に来るもんだからね。」

浩介「お前らにはちよつと遅い時間で伝えたんだよ。その為に侑斗に付き添わせただぞ。」

里香「さっさと全員入った！」

すると、和人に明日奈、冬馬、深澄をステージ台に乗せた。

浩介「本日の主役達が来たという事で、アインクラッド攻略記念パーティーを開くぞ！」

里香「それでは、ご唱和下さい！……せーのっ！」

『キリト、アスナ、カルム、ミト！SAOクリアおめでとう!!』

里香「カンパニー！」

当の4人はポカンとしていた。

そりや、聞いてなかったからな。

冬馬 side

唐突にスピーチをやらされたり、簡単な自己紹介をした後、エギルのピザが出てきて、パーティーは完全なカオス状態に陥った。

アルゴとジェイクと久しぶりに再会して、2人は付き合っていて、共に仕事をしているそうさ。

少し疲れて、和人と共にカウンターの前席に座る。

和人「マスター、バーボン、ロックで。」

冬馬「何言ってるんだ、和人。エギル、烏龍茶を頂戴。」

そう言うのと、俺の方には烏龍茶が来て、和人の方にはグラスに入った何かが来た。

和人に聞くと、烏龍茶らしい。

してやったりという表情を浮かべるエギルに和人は唇を曲げて、俺は苦笑した。

すると、クラインこと壺井遼太郎がやってきた。

遼太郎「エギル。俺には本物くれ。」

冬馬「良いのか？この後、会社に戻るんだろ？」

遼太郎「残業なんか、飲まなきゃやってられねえっての。それにしても、良いねえ

……。」

遼太郎さんは、女性陣を見て、鼻の下を伸ばしながらそう言った。まったく、良い人ではあるのは確かだけど、女好きが玉に瑕だな。

だから、モテないんだよ。

そこに侑斗とシンカーもやって来た。

シンカー「キリトさん、カルムさん。」

冬馬「シンカーさん。」

和人「ユリエールさんと入籍したそうで。遅くなりましたけど、おめでとうございませう。」

侑斗「そうなんですな。」

シンカー「いや、お恥ずかしい。漸く仕事も軌道に乗って来たところで。」

遼太郎「そういやあ、見てるぜ、新生MMOトウデイ。」

冬馬「あれは凄かったからな。」

和人「そういうやエギル。あの後、アレはどうなったんだ？」

エギル「すげえもんさ。今、ミラーサーバがおよそ五十……ダウンロード総数は十万、実際に稼働している大規模サーバが三百つてところだな。」

茅場から託された世界の種子。

俺達は茅場の助手であつた神代凜子博士と会談して、俺たち3人で話し合い、エギル

に託す事にした。

世界の種子、それはザ・シードというプログラム・パッケージだった。

これを使えば、誰でも仮想世界を作る事が出来て、これにより、死に絶える筈だった ALO は別の企業へと渡り、新たに再生された。

冬馬「ところで、二次会の変更は無いか？」

エギル「ああ、今夜11時、イグドラシル・シティ集合だ。」

和人「それで、アレは、動くのか？」

エギル「おうよ。新しいサーバ群を丸々一つ使ったらしいが、なんせ《伝説の城》だ。ユーザーもがつつんがつつん増えて、資金もがっぽりがっぽりだ。」

冬馬「そう行くと良いけどね。」

その後、酔っ払ったであろう里香に巻き込まれそうになって逃げた。

ちなみに、エギル曰く、1%以下だから大丈夫だそうだ。

捕まるよ。

リーフア side

アルヴ Heim・ケットシー領

漆黒の夜空を貫いて、私は飛んでいた。

以前の ALO なら、飛行ゲージを気にしつつ、効率よく飛ぶかを考えていたが、今は

違う。

結局、世界樹の上に空中都市はなくて、光の妖精アルフも存在しない。

しかし、世界は一度崩壊し、新しく生まれ変わって、全ての妖精に等しく無限に飛べるようになった。

先週開かれた《アルヴ Heim 黄痘レース》にて、私が一位で、カルムさんが二位、お兄ちゃんが三位となった。

アスナさんにミトさん、色んな人がリベンジを誓った。

ああいうイベントで飛ぶのもいいけれど、頭の中を空っぽにして、ただただ限界の先を目指して飛ぶのが一番楽しい。

月に向かってロケットの様に舞い上がる。

限界高度に達して、自由落下する。

今日の放課後、お兄ちゃん達に連れて行ってもらったオフ会。

そこで、私は感じた。

彼らを繋ぐ、絆を。

でも、私にはその記憶は無い。

寂しさのせいかな、翅が動かせない。

すると、誰かが私を受け止めた。

リーファ「……!?!」

ハヤト「どこに行くんだよ？キリトが心配してたんだぜ。」

リーファ「ありがとう。」

ハヤト君を見ると、現実の見た目に近くて、髪と目の色が違うくらいだ。

ハヤト side

リーファが高い所まで飛んでいくのを見つけて、受け止めた。

リーファ「ハヤト君。ハヤト君もSAOのアバターにしたの？」

ハヤト「ああ。なんだかんだ、このアバターには愛着があるからな。」

リーファ「そっかあ。じゃあ、あのハヤト君のアバターと旅をしたのは、私にキリト

君、カルムにミトさんだけなんだ。」

ハヤト「まあ、そんなとこだ。でも、武器はリーファから貰ったゼロガツシャーを使

うぜ。」

リーファが宙を移動すると、手を差し伸べてくる。

リーファ「ね、ハヤト君。踊ろう。」

ハヤト「え？そんな事出来んのか？」

リーファ「最近開発した高等テクなの。ホバリングしたままゆっくり横に移動するん

だよ。」

ハヤト「へえ。結構むずいな。」

リーファ「大丈夫。すぐに出来るよ。」

その言葉通りに、俺はリーファと踊った。

リーファが瓶を取り出して、栓を抜くと、音楽が流れ出す。

しばらく踊り続けて、楽しかった。

だが、リーファは泣き出していた。

ハヤト「リーファ？」

リーファ「……あたし、これで帰るね。」

ハヤト「何でだ……？」

リーファ「だって……。遠すぎるよ、ハヤト君やお兄ちゃん、皆がいる所……。あたしじゃそこまで行けないよ……。」

ハヤト「スグ……。そんな事は無いぜ。行こうと思えばどこにだって行けるんだぜ
!!」

そう言って、リーファの手を引き、世界樹の方角へと向かう。

急ブレーキをかけて、リーファを受け止める。

リーファ「どうしたの？」

ハヤト「月の方を見てみるよ。」

リーファ「え？」

すると、鐘の音が鳴り響き、大きい建造物が現れた。

そして、その建造物が発光する。

リーファ「まさか、アレって……！」

ハヤト「そうだ。《浮遊城アインクラッド》だぜ。」

リーファ「何でここに……。」

ハヤト「決着をつける為さ。今度こそ、百層まで完全クリアしてやる。だからさ、リーファは手を伸ばしてくれ。俺が掴んでやる。」

リーファ「何でそこまで……。」

俺は、覚悟を決めて、思いを伝える。

ハヤト「それはさ、リーファの事が好きなんだよ。剣道を一緒にやってた頃から。」

リーファ「え……!？」

ハヤト「だからさ、一緒に来て欲しい。」

リーファ「……うん。あたしも、ハヤト君の事が好き。だから、一緒に行こう。」

俺たちの思いが伝わり合い、実を結んだ。

そして、お互いにキスをする。

10秒間それは続き、唇を離す。

ハヤト「俺、ファーストキスだったんだけど……。」

リーファ「あ、あたしも……。」

流石に恥ずかしがっていると。

クライン「おい！何やってんだハヤト！」

クラインの声がして、ビクツとした。

下から、腰に刀を刺したサラマンダーのクライン、バトルアックスを背負ったノームのエギル、ガシャコンスパローを持ったインプのチェイス、影松・真を背負ったシルフのヒロミ、ピナを連れているケットシーのシリカ、バスバスターを持ったレプラコーンのラット、赤と白をベースにしたレプラコーンのリズベットがいる。

さらに、月夜の黒猫団の面子、ケットシーを選択したアルゴ、スプリガンを選択したジェイク、手を繋ぎながら昇ってくるノーチラスとユナ、お互いに並走しているフィリアとレイン、シンカーにユリエール、サーシャ、ディアベル、そして、ALOプレイヤーも合流する。

全員がアインクラッドへと向かって行く。

どうやら、キスをした所は見られて無いな。

そして、キリトにアスナ、SAOのアバターにしたカルムにミト、そして復旧したというパラドも居た。

ハヤト「あれ？パラドのアカウントはどうしたんだ？」

カルム「ああ。俺の旧ALLOのアカウントをパラドにあげた。」

パラド「だから、俺は自律行動可能だぜ。」

その為、旧ALLOのカルムの見た目をベースにしつつ、まだアカウントを持ってなかった頃のパラドの雰囲気追加されていた。

アスナ「皆、行こう。」

ミト「ええ。」

ユイ「行きましょう！」

カナ「皆で行こう!!」

ハヤト「じゃあ、行こうぜ！」

リーファ「うん！」

キリト「行くぜ！」

カルム「置いてかれるなよ！」

そうして、俺達もアイコンクラッドへと向かって行く。

日常

an episode of カルム&ミト

ある日のALO

俺達は、2人でクエストを受けていた。

カナもパラドも出かけていて、暇になったからだ。

カルム「それにしても、ミトと出会ってから随分と経ったよな。」

ミト「そうね。」

俺達はモンスターを倒しながらそう話していた。

ちようど、アルゴとジエイクが渡してきた情報で、大鎌が手に入るクエストがあると聞いたので、ミトも誘った次第だ。

カルム「それにしても、どんな性能の鎌が手に入るんだろうな？」

ミト「そうね。……私の為よね？」

カルム「当たり前前だろ？」

ミト「カルムらしいわ。」

ちようどその鎌が出るダンジョンに到着したので、中に入る。

中には、亡霊型モンスターが多かった。

だが、大して気にせず倒しながら先へと進んで行く。

ミト「アスナが居たら、確実に絶叫してそうな光景よね。」

カルム「そうだなあ。」

そう、アストラル系のモンスターが多いのでアスナは高確率で絶叫して、錯乱してしまっそうだ。

まあ、今回は俺たちだけで受けるので、関係ないんだが。

何か、キルトが世界樹の天辺に行くと聞いたのだが、まあ、気にしないでおく。

ミト「アスナ達もキルトと一緒にいったらしいけど、大丈夫かな？」

カルム「まあ、アイツらなら大丈夫だろ。それより、ボス部屋みたいなのが現れたぜ。」

ミト「そうね。」

ボス部屋に入つて行くと、そこにはあのアインクラッドで勝てなかったボス、*fatal* *thighs*みたいなモンスターが居た。

要するに、死神みたいな奴だ。

ミト「何か*fatal* *thighs*みたいなモンスターよね。」

カルム「まあ、リベンジマツチみたいなもんだな！行くぜ！」

死神がその大きな鎌を振るってくる。

あの fatal　　thingsよりはマシだと思う。
実際に、アイツよりは遅い。

カルム「アイツよりはマシだな！」

ミト「そうね！一気に決めるわよ！」

その掛け声と共に、ソードスキルを叩き込んで、とどめを刺した。

ポリゴンとなって、消滅して、その場に宝箱が現れた。

カルム「宝箱だな。」

ミト「そうね。」

蓋を開けると、その中には鎌が入っていて、名称は、『デスサイズ』と書いてある。

形は、まんま、死神が使っていた鎌そのものであった。

しかも、装備も入っていて、黒のフード付きマントと、紫の胸当てだ。

カルム「ほれ。」

ミト「あ、ありがとう……！」

カルム「でも、何か死神っぽくなっちゃうよなあ。」

ミト「良いわよ。これで。」

カルム「そっか。」

ミトがその装備を装備すると、本当に死神っぽく見える。

それでも、ミトが良いのなら、気にしないでおこう。

そうして、俺達はプレイヤーホームへと戻った。

カルム「……………なあ、22層が解放されたらさ、またあのログハウスを買おうぜ。」

ミト「……………そうね。その時はさ、私に君、カナ、そして、パラドも加えてパーティーをやりましょうか。」

カルム「ああ。」

ミト「……………今日は誰も来ないよね？」

カルム「そうじゃないか？」

ミト「なら……………」

そう言つてミトは俺に口を付けてきた。

俺は断る理由も無く、それを受け入れる。

口を離すと、顔を真っ赤に染めたミトが居た。

カルム「ミト……………」

ミト「カルム……………。そういえばさ。」

カルム「どうした？」

ミト「実はさ、このALLOにもあつたの。」

カルム「何がだよ？」

ミト「倫理コード解除設定が……。」

カルム「……………え？」

ミト「だからさ……………。来て。」

その言葉に、俺の理性のタガが外れてしまつて、ミトをベッドまで運び、コードを外して、服を脱ぐ。

カルム「ミト……………良いか？」

ミト「うん……………来て。」

そうして、今日の残りは、ミトを貪り尽くして、終わった。

水泳大会

ある日、俺達とはある湖の前に来ていた。

理由は、フィリアから誘われた事だ。

カルム「とある湖？」

フィリア「そう。すつごく綺麗な湖を見つけたんだよ。」

ミト「へえ。」

カルム「流石トレジャーハンターだな。」

フィリア「えへへ。という事で、皆でそこに行かない？」

キリト「良いな。それ。」

アスナ「じゃあ、皆には私が声をかけるわね。」

そうして、俺、ミト、キリト、アスナ、ハヤト、リーファ、ヒロミ、シリカ、ラット、リズベツト、ノーチラス、ユナ、フィリア、レイン、ユイ、カナ、パラドが行く事になった。

後の面子は用事があるそうだ。

ユナも今日はオフだそうで、一緒に来れた次第だ。

現在、ユナはA.L.Oやザ・シード全体で、歌姫として名を馳せている。

ノーチラスはある意味でマネージャーみたいな立場ゆえ、あまり遊べない。

アスナ「うわあ！凄く綺麗！」

ミト「本当ね。」

シリカ「飲みたくなっちゃいますね。」

ヒロミ「もうピナが飲んでるけど。」

そう、ピナが真つ先に湖に近づいて、水を美味しそうに飲んでた。

シリカ「ピナも美味しいって。」

リズベツト「それにしても、クラインにエギルにチエイイス、レイモンド、フィリップは残念ねえ。私たちの水着姿を見れないなんて。」

ハヤト「何か、クラインは仕事を休んでまでも来ようとしていたなあ。」

リーファ「そこまで必死になられるのもちよつと……………」

ちなみに、チエイイスにレイモンド、フィリップはどうしても外せない用事があって、エギルは店があるからだそうだ。

ユナ「それじゃあ、入りましょ。」

リズベツト「そうね。でもその前に。ほら、何でアンタ隠れてんのよ！さつきまでは普通に一緒に居たのに！」

レイン「ちよ、ちよつと、引つ張らないで〜！」

そう言つて、リズベツトによってレインが引つ張り出された。

アスナ「レインちゃん、どうして隠れたの？」

レイン「水着に着替えたら、恥ずかしくなっちゃつて……。スタイルの差が歴然で……。」

リーファ「あつ……。。」

リズベツト「大丈夫だつて。シリカなんて既に諦めの境地に入つて……。。」

シリカ「ないです！ 諦めてる訳じゃありませんよ！」

男性陣が蚊帳の外になっていた。

カルム「なあ、俺達はどうすればいい？」

キリト「さ、さあ……。？」

ヒロミ「ま、まあ、話に介入すると、地獄を見そうですし……。。」

ラツト「そうだな。」

ハヤト「打たれたくないしな。」

ノーチラス「ああ……。。」

すると、水泳大会を始めようと言い出した。

言い出しつぺは、リズベツトだ。

ちなみに、男性陣は、見張りを担当する。
すると、索敵スキルに誰か引つかかった。

カルム「そこにいる奴、出てこい！」

アスナ「えっ!？」

ミト「本当に除き魔が……。」

???「誰が除き魔よ！」

そう言つて出て来たのは、1人の少女だった。

レイン「セブン！」

カルム「知り合いか？」

レイン「ていうか、妹……。」

キリト「妹!？」

レインに聞いてみると、彼女はセブンで、このALOの運営陣の1人らしく、当初はお互いが姉妹だとは知らなかったらしい。

セブン本人に聞いてみたところ、丁度休憩になったから、休んでいたらしい。

セブン「あなた達がいるなら、もう帰るわ。何事も先着順だし。」

アスナ「セブンちゃん。ちよつと待って！折角来たんだし、一緒に泳がない？」

セブン「え？」

リズベット「そうよ。今から丁度水泳大会を開催する所なの。アンタも加わりなさい。」

ユナ「優勝商品を思いついた！優勝した人は、シャルモンで、男性陣の奢りね！」

「「「「「えっ!?!」「「「「「」」」」」」

シャルモンって！

美味いけど、めっちゃ高いカフェじゃん！

男性陣が青褪めている中。

ミト「名案ね。そうすれば皆も気合が入るんじゃないかしら？」

カルム「えっ……。ちよつと待って……。」

パラド「えっ……。嘘だろ……。」

アスナ「私が一位になる…………！」

キリト「ちよつと、アスナさん……？」

シリカ「シャルモンのスイーツ…………！」

ヒロミ「シ、シリカ…………？」

何と、女性陣全員がやる気になってしまった。

スイーツに弱いのは事実のようだ。

リーファも、泳ぎの特訓をしていた影響で、まさかの参戦。

俺達は話し合う。

キリト「なあ。財布大丈夫か？」

カルム「あそこで買われると、財布がマジで終わる。」

ヒロミ「これって、僕達、終わるんじゃないですかね？」

ラット「マジかよ……………」

ノーチラス「でも、止められるか？」

パラド「無理だな。」

ハヤト「無理だ。」

「…………ハア……………」

もう、女性陣は止められない。

どうしたものかと頭を抱える。

ルールとしては、スキルや魔法の使用は禁止で、真ん中にある岩でターンして、最初に戻って来た人が優勝だ。

どうやら、レースが始まってしまったみたいで、どうすればいいのかと思っていると。

フィリア「あれ？何だろうこれ？何か吸盤みたいなのがついてるんだけど……………」

ミト「吸盤？……………あつ！フィリア！それに触っちゃダメ！」

フィリア「え？」

カルム「何か揺れてるぞ？」

キリト「地震？いや、VRゲームの中で地震なんて……………」

パラド「湖の底に何かいるぞ！」

すると、巨大なタコが現れた。

既に女性陣は絡め取られていた。

カルム「でけええよ！」

キリト「巨大なタコ型モンスター!？」

フィリア「きゃあああ!タコの足が絡み付いてつ……………!!」

シリカ「やだっ!離してーっ!!」

ミト「タコの足が絡み付いて、装備が出来ないわ……………!」

キリト「皆!アスナ達を助けるぞ！」

パラド「俺に任せろ！」

カナ「パラド……………!正面から攻撃をしちゃダメです……………!」

パラド「へっ？」

すると、タコがタコ墨を吐いて、パラドの顔面に命中した。

パラド「うわっ!目が見えねえ!!」

カルム「パラド!!」

「パラド「大丈夫だ。でも、墨を吐かれたせいで前が見えない!!」
つまり、残りの面子でどうにかしなければならぬ。」

ユイ「皆さん!あのモンスターは、後頭部です!」

キリト「分かった!」

カルム「後頭部に攻撃を叩き込めえ!!」

俺達の攻撃が当たった事で、タコはポリゴンとなって、消滅した。

ユイ「流石、パパと皆さんです!」

カルム「ふう。疲れた。」

ミト「カルム……。ありがとう……。。」

レイン「し、死ぬかと思った。」

セブン「この私に巻きついてくるなんて……。絶対に叩き潰さないと……。!」

リズベツト「もう男性陣が倒したわよ。」

パラド「最悪だ。墨塗れじゃねえか。」

フィリア「あーあ。もう少しで、シャルモンのスイーツにありつけたのに。」

ユナ「本当よね。」

こうして、水泳大会は波乱の展開で幕を閉じる事になった。

皆には悪いが、俺達は心の中でホッとしていた。

優勝………決まらなくて良かったと。
あそこで買われると、財布がすっからかんになる。

お料理教室

俺とキリトが、ミトとアスナに用事があつて向かっていると。

アスナ「そうそう、その調子！」

ミト「じゃあ、もう一回やってみよう？」

リーファ「はい、お願いします！」

アスナ「何度も繰り返し返す事で上達していくからね！」

ミト「それが料理スキルだから、根気よくやるのが大事なの。」

リーファ「なるほど。」

キリト「この声はアスナにミトにスグか？」

カルム「何やってんだろぅな？」

中に入ると、そこには、アスナとミトが料理をリーファに教えている風景だった。

アスナ「惜しい！もうちよつとだよ！」

リーファ「うう………難しい………」

ミト「でも、上達してるじゃない。」

キリト「やっぱり、アスナとミトとスグか。」

リーファ「お兄ちゃん!? カルムさん!」

アスナ「キリト君、カルム君!」

カルム「何してんだ?」

ミト「実は、リーファが料理を教えて欲しいって言ってきたから、教えてたの。」
なるほど。

ミトとアスナも、料理スキルの熟練度はS A Oと同様にM A Xだからな。

だが、一つ気になった事がある。

カルム「だけど、何で料理スキルを習おうと思ったんだ?」

リーファ「じ、実は……………ハヤト君に私の手料理を食べて欲しいなあって。」

キリト「ああ……………。そういう事か。」
なるほどなあ。

アスナ「まあ、教えるって言っても、大した事はしてないよ。料理スキルを上げるには、凄く根気がいるからね。」

ミト「結局は自分で頑張るしかないんだけど、応援する人が居ればモチベーションも上がるってね。」

キリト「そうだったのか……………。アスナ、ミト。ありがとうな。」

アスナ「うん、リーファちゃんはどんどん上手くなるから見てて楽しいよ!」

リーファ「えへへ。アスナさんとミトさんのおかげです。でも、まだまだ頑張らないと。」

ミト「その意気よ。」

ハヤトもいい恋人を持つたじゃないか。

ちなみに、ハヤトには連絡しないでおく。

サプライズという事で。

リーファ「そうだ！2人も作ってみれば？」

キリト「ええっ!?料理スキル全然上げてないから出来ないと思うぞ。」

カルム「まあ、必要最低限の料理スキルは覚えてるけど。」

リーファ「お兄ちゃん達は、VRMMOの中で、料理した事ないの？」

キリト「あるにはあるけど……。」

カルム「俺も……。」

アスナ「へえ。何作ったの？」

キリト「……干し肉なら……。」

カルム「簡単な料理なら……。」

キリト、それは料理じゃない。

ただの加工だ。

アスナにミトにリーファも少し呆れたような顔をする。

キリト「お、おいつ！今心の中でバカにしただろ！例え干し肉でも、レア食材で作れば美味しいんだからな！耐久度も高いし、ダンジョンに籠る俺の空腹を何度救った事か………！」

リーファ「その、干し肉に対する思い入れは がある事は分かったよ………」

ミト「まあ、一回試してみれば？」

そうして、料理講座が始まったのだが、この後、俺は凄く後悔する事に………。

アスナ「それでは、シチューを作ります。」

リーファ「はい！」

カルム「はい。」

キリト「はい。」

ミト「作り方は簡単で、まずは包丁で野菜を一口サイズに切ります。」

その指示に従って、野菜を切っていく。

まあ、この位なら大丈夫だ。

アスナ「次に肉を切ります。」

キリト「うん、切れた。」

リーファ「よし、こんなもんでしょ。」

カルム「これで良いかな？」

ミト「そして、今切った物を、お鍋に入れて、火にかけます。」

アスナ「後は水と調味料、赤ワイン、トマトを入れて、蓋をして煮込むだけよ。」

これで終わりだ。

まあ、ゲームの世界なんだから、現実と違って、簡単なのもそうか。

アスナ曰く、もうちょい手間があつた方が良いらしい。

すると。

ハヤト「お、良い匂いがするな。」

リーファ「ハヤト君!？」

そう言いながらハヤトがやって来た。

暇になったのか？

アスナ「ハヤト君! 丁度リーファちゃんがシチューを作ったからさ、食べてかない？」

リーファ「アスナさん!？」

ミト「そうね。折角だし食べていけば？」

ハヤト「そうだな! 丁度腹も減つたしな!」

まさかの、早くもリーファの手料理をハヤトに振るう時が来たという。

アスナ「あ、もう出来たみたいね。」

ミト「じゃあ、蓋を開けるね。」

ハヤト「おおっ！美味そうだな！」

リーファ「良かった！成功したみたい！」

美味しそうだ。

まずは、ハヤトに食わせるか。

ハヤトがリーファのシチューを一口食べる。

リーファ「どう？」

ハヤト「うん！美味しい！」

リーファ「良かったあ！」

ハヤトも美味しそうに食べる。

次は俺だな。

カルム「どうだ？」

ミト「うん。普通に美味しいわよ。」

カルム「良かったぜ。」

何とか上手くいって良かったぜ。

それで、キリトの物を開けると……………。

リーファ「……………。」

ハヤト「……………」

カルム「……………」

ミト「……………」

アスナ「……………」

キリト「……………」

俺達は全員唾然となった。

キリトのシチューは、シチューと言って良いのか分からない形相だった。

リーファ「これは……何？」

ハヤト「とてもこの世の物とは思えない色をしてんだけどな……………」

アスナ「……………料理の手順はシチューだったよね。」

カルム「何があったらこうなるんだ？」

ミト「……………あり得ない。」

キリト「ああ、スグと同じ様に作った筈だ。なのに、どうしてこうなった……………」

その後、キリトが味見をする事に。

まあ、作った張本人だしな。

キリト「それじゃあ、いただきます……………」

一口食べたキリトが黙る。

不安になり聞いてみる。

アスナ「……………キリト君。」

リーファ「……………お兄ちゃん、大丈夫？」

ミト「……………大丈夫なの？」

キリト「……………悪くない。」

ハヤト「え？」

カルム「本当か？」

キリト「と言うか、美味いぞ、これ！」

嘘だろ……………。

俺が呆然としていると。

キリト「皆も食べてみなよ！」

アスナ「えっ。」

ミト「これを？」

リーファ「嘘でしょ。」

キリト「シチューとは違うけど、見た目に反してイケるぞ。」

そう言うので、食べてみると。

何やら、物凄い辛味が……………！

キリト「どうだ？」

アスナ「……………ん？んん!?」

リーファ「んんー!!」

ミト「んん!?」

ハヤト「……………!!」

カルム「……………!!!!」

キリト「どうした!?!」

これは、言わざるを得ないな。

カルム「か、辛エエエエツツ!!」

リーファ「み、水！水!!」

アスナ「何これ!?!喉がヒリヒリする!!」

ミト「早く水ちょうだい!!!」

ハヤト「ヤバい！ヤバい！ヤバい!!」

キリト「ほ、ほら！皆、飲め！」

キリトが渡して来た水を飲み干す。

あれはヤバい。

リーファ「ハア…………死ぬかと思った。」

アスナ「何でこんなに辛い……?」

ミト「アレってシチューよね……?」

ハヤト「グツ、まだ口が痛い……」

カルム「何だよアレ……」

キリト「そんなに辛いか?確かに、シチューというよりはカレーっぽいと思ったけど。」

まさか、コイツ、辛党か?

リーファ「お兄ちゃんの味覚再生エンジン、壊れてるんじゃないの!」

アスナ「辛い物好きにも程があるよ!!」

キリト「そこまで辛いかなあ?」

ミト「ウツ!水をもう一杯……!」

ハヤト「俺にもくれ。」

カルム「俺にもだ。」

その後、俺達は、キリトに料理をさせてはいけないと思ったのだった。

空かずの宝箱

丁度、クエストを終えて、エギルにアイテムを見てもらおうと向かっている、俺とキリト。

すると、エギルに買い取って貰ったのか、1人の男性が出て行った。

エギル「毎度！」

キリト「相変わらず、あくどい商売をやってるな、エギル。」

カルム「こんにちは、エギル。」

エギル「おう、キリトにカルムか。」

キリト「今すれ違ったプレイヤー、肩を落として帰ってったぞ。」

カルム「酷い店主だね。」

エギル「馬鹿言え。さっきの兄ちゃんは、ちゃんと納得して売り渡したんだよ。」

まあ、あんな敵つい顔に睨まれたら、怖くなるわよな。

そんな事を考えていると、エギルが反応した。

エギル「おい、カルム。今、失礼な事を考えなかつたか？」

カルム「さあて、何の事やら？」

エギル「コイツ……！まあ、良いや。で、今日は何の用だ？」

キリト「ああ、買い取りを頼む。」

カルム「この武器なんだが、どのくらい値段が付くんだ？」

そう言つて、俺たちは先ほどのクエストで手に入れた武器をエギルに見せる。

エギル「へえ……。結構良い武器じゃねえか。本当に売っちゃうのか？」

カルム「俺らには需要がないからな。」

キリト「せいぜい金持ちに売りつけてくれ。」

エギル「ははっ、任せとけ。俺がたんまり稼がせて貰うよ。」

すると、新たな来客だ。

どうやら、クラインの様だな。

クライン「おう、エギル！何だ、キリトとカルムも居るじゃねーか。」

エギル「クラインか。何か売りに来たのか？」

クライン「ああ、こないだクエストをこなしている最中に、面白いモンを見つけたん

だよ。」

キリト「へえ。レアアイテムでもドロップしたのか？」

クライン「レア、と言えばレアなんだろうけどな……。まあ、とにかく見てくれ。」

カルム「歯切れが悪くないか？」

そう言うのとクラインは、メニューから宝箱を実体化した。

それは何の変哲もない宝箱だった。

キリト「宝箱？」

カルム「何でここにあるんだ？」

エギル「普通、宝箱って、持ち運べない筈なんだがな……。」

クライン「そうなんだがよ。コイツだけは何故か宝箱ごとストレージに入っちゃったんだ。」

そんな事もあるんだな。

俺がそう考えていると、キリトが質問する。

キリト「それで、宝箱の中身は？」

クライン「それがよお、どうにもこうにも開かないんだよ。」

エギル「何だそりゃ。中身が分からないんじゃ、買い取りも出来ないぞ。」

クライン「やっぱりそうだよなあ。これじゃあ本当の意味で宝の持ち腐れじゃねえか！」

カルム「上手いな。」

クライン「誰もギャグは言ってねえっての。」

一応、トレジャーハントが得意なスプリガンであるキリトに聞いてみたものの、無理

だそうだ。

鍵穴を見て、もしかしたらと思ひ。

カルム「なあ、その宝箱をゲットしたエリアで鍵も手に入るんじゃないか？」

クライン「それがなあ、周辺を隈なく探したけどよ、見つからなかったんだよ。」

カルム「そうじゃなくて、モンスターがドロップするとかさ。」

キリト「そうかもな。」

クライン「おおーっ！それだ！ならさ、手伝ってくれねえか？」

キリト「良いけど、半分貰うぞ。」

カルム「まあ、俺はそこまで鬼じゃないから、開けられればそれでいい。」

そういう事で、俺、キリト、クラインは、その宝箱が手に入ったと言うエリアに向かう。

そこにはモンスターが居て、俺たちは倒していく。

しばらく進むと、そこには青い2体のドラゴンが居た。

クライン「おいキリト、カルム！あれを見てみるよ！」

キリト「他のモンスターとは雰囲気が違うな。」

カルム「多分、アイツらがその宝箱の鍵を持ってそうだな。」

クライン「それじゃあ、行くか！」

俺達は2体のドラゴンと戦う。

そこまで苦戦する事もなく倒せた。

クライン「よっしゃー！撃破したぜ！」

キリト「おいクライン見ろよ！」

カルム「あれはもしかして……………！」

そこにあつたのは、鍵だった。

クライン「鍵じゃねえか！やっぱりモンスターが持つてたんだな！助かったぜ！」

キリト「ああ、これで開けられるな。」

カルム「よかったな。」

クライン「しっかし、たまには野郎3人つても楽しいな！」

カルム「そうだな。たまには悪くない。」

クライン「オメエらは女の子とばっかりパーティー組みやがるからな…………。オレにも

1人くらい分けてくれよ…………。」

いつもの僻みが始まった。

クライン自体の性格は良いんだけど、女好きがある影響だからな。

憎悪の攻撃が来る前に、街に戻る。

クラインの憎悪は面倒臭い。

エギル「おお、キリトにクラインにカルムじゃねえか。お目当ての物は手に入ったのか？」

クライン「おうよ！」

カルム「さっさと開けたらどうだ？」

クラインが宝箱と鍵を実体化させて、宝箱を開けると、中には雑誌が入っていた。

クライン「これは……………」

キリト「何だこれ……………本？」

カルム「本だな……………」

エギル「写真集だな。」

クライン「おいおいおい！ここ、よく見てみるよ！妖精達の秘蔵フォトだつてよ

！」

エギル「袋とじのタイトルみたいだな。」

あ、察した。

多分、俺にとつていらぬものだ。

クラインが嬉々として本を読んでいく。

クライン「つたく、このゲーム、レーティング幾つだつての！お子様には刺激が強す

ぎるんじゃないか？入手困難とはいえ、こんなアイテム作つていいのかよ！」

放っておこう。

俺が先ほどのクエストで、手に入れた素材を確認していると。

クライン「うおおおおおおおおおっ!!?」

カルム「うるさい！黙れ！」

キリト「カルムがキレた………」

しばらくクラインが読み漁っていた。

クライン「つかよ、キリトにカルムは読まないのか？」

キリト「読めないんだよ。見ようとすると、フォーカスが合わない。」

カルム「俺は興味ない。」

エギル「何だ、未成年ファイルタでもあんのか？」

どうやら、キリトが受け取ったようだ。

だが、嫌な予感がする。

すると。

アスナ「キリト君っ！ここに居たんだー！」

ユイ「パパ発見です！」

ミト「カルムも居るわね。」

カナ「パパ、やっと見つけた！」

パラド「どこに行ってたんだよ？」

カルム「やあ、皆。」

キリト「アスナっ!？」

クライン「えっ!？」

何と、アスナ達が現れた。

俺はやましい事はないので、普通に挨拶をする。

だが、キリトはその本を隠す。

しかし、アスナはそれを容易く奪い取る。

アスナ「何これ？何かの写真集？」

クライン「ああ、それはエツチなお姉ちゃんの写真が詰まった本だけ。」

アスナ「ええっ!？」

エギル「終わったな。」

カルム「終わりだな。」

ミト「終わったわね。」

すると、アスナからヤバい雰囲気……。

キリト、終わり。

ユイちゃんやカナには見せないようにする。

後、パラドにも。

アスナ「へえ……。そういう事かあ……。」

キリト「ア、アスナさん？」

アスナ「確かに、これは隠さないかね……。」

ユイ「ママ、それは何ですか？」

アスナ「ユイちゃんは見ちゃダメよー？」

アスナ、笑顔なのに怖い。

すると、キリトに詰め寄り。

アスナ「それで、キリト君？これはどういう事なのかな？」

キリト「ち、違うんだアスナ！きつと誤解してるよ！」

クライン「まあ、キリト君も男の子って事だあーな。」

キリト「クライン！余計な事言うなよ！」

カルム「諦めて説教されろ。」

俺は容赦なく切り捨てる。

まあ、悪いのはキリトだし。

アスナ「ふふつ、ここで話すのも何だし、私の部屋に行こうかー。いいよね、キリト

君？」

キリト「は、はい……」。

キリトが恨めしい視線を向けるが、俺は関係ない。

何せ、見てないしな。

俺、ミトは苦笑しながら見送った。

フアントム・バレット

第1話 菊岡からの依頼

2025年12月7日

俺とキリトは、あの胡散臭い菊岡誠二郎に呼び出された。

冬馬「ここか？」

和人「そうだな。」

冬馬「つたく。あの人も何でこんな店に俺たちを呼び出すんだか。」

和人「後で文句を言ってやろうぜ。」

冬馬「そうだな。そのついでに嫌がらせでもしてやるか。」

俺とキリトが居るのは、銀座にある上品なクラシック音楽が流れ、高級感がある喫茶店だ。

周囲にはセレブなマダム達が居て、高校生の俺たちにとって、場違いだった。

ウエイターに待ち合わせだと言って、見渡すと、突然、この空気をぶち壊す大声が聞こえた。

菊岡「おーい！キリト君、カルム君！こっちこっち！」

そんな大声を出すものだから、周囲のマダムの視線が俺たちと菊岡に集まる。

気まずい思いをしながら、奥の窓際のテーブルへと向かい、菊岡の反対側に俺たちは座り、ウエイターがお冷とお絞りとメニユーを渡してきた。

冬馬「あの、すいません。何でここに俺たちを呼び出したんですか？」

菊岡「この店は僕のお気に入りだね。あ、それと今回は僕が持つから、お金の事は気にせず、頼んでくれ。」

和人「言われなくてもそのつもりだ。」

冬馬「分かりました。」

メニユーに目を通すと、シュークリームの値段が、1200円だという。

スーパーなら10分の1で買えるぞ。

まさかと思い、他の奴も見ると、殆どが四桁だった。

流石のキリトも値段に驚いたような反応をしつつも、平静を保つ。

そして、ウエイターに注文する。

和人「ええと……パルフェ・オ・シヨコラ……と、フランボワズのミルフィーユ……に、ヘーゼルナッツ・カフェ」

何と、これで合計3900円だ。

恐ろしいな。

ウエイターが俺の方を見てくる。

冬馬「ええと、フランボワズのミルフィーユとエスプレッソでお願いします……。」
もう、値段の事を考えると、恐ろしいな。

ウエイター「かしこまりました。」

そう言つて、この場から去つていく。

さて、用件を聞くか。

冬馬「菊岡さん。SAOとALOの事件に関してはもう話しましたよね。」

どうせ、SAOかALOの事件絡みの呼び出しかと思つていたのだが。

菊岡「いや、今回は違う用件で呼んだんだ。まあ、これを見てくれ。」

菊岡はそう言つて、タブレットを取り出してきて、俺とキリトに見せる。

液晶画面には、見た事の無い男性の写真とプロフィールが記載されていた。

和人「これは？」

菊岡「彼は茂村保、26歳。先月、彼が住んでいたアパートの大家が発見してね。この時、既に死後5日半の状態だった。部屋は散らかつていたものの、荒らされた訳では無く、遺体はベッドに横たわつていた。そして、頭には……。」

冬馬「アミユスフィアか。」

俺がそう言うと、菊岡さんは頷いた。

菊岡「その通り。変死ということで司法解剖が行われ、死因は急性心不全となっている。彼は心臓が弱かったということはなく、原因は不明のままなんだ。死亡してから時間が経ちすぎていたし、犯罪性が薄かったこともあってあまり精密な解剖は行われなかった。ただ、彼はほぼ二日に渡って何も食べてないで、ログインしっぱなしだったらしい。」

まあ、コアなゲーマーほど、食事をしないでダイブしっぱなしというのはよくある話だ。

横にいるその人もそうだしな。

アスナから定期的に相談されるのだ。

アスナ曰く、『キリト君ったら、ゲームに夢中になりすぎて、ご飯をろくに食べない事があるの。』らしい。

キリトは救急搬送されるまでには至ってないが、中には死亡した人も居る。

だが、これはどう見ても違う。

菊岡「茂村氏のアミューズファイアには、『ガンゲイル・オンライン』通称『GGO』というゲームだけがインストールされていた。」

冬馬「GGOって、確か、銃火器がメインのゲームだよな？」

キリト「ああ。日本で唯一、プロがいるMMOゲームだ。」

そんな事を話していると、俺たちが注文した物がやって来る。

菊岡は話を再開した。

菊岡「彼はGGOで、10月に行われた最強者決定イベントで優勝したそうさ。キャラクター名は《ゼクシード》。」

冬馬「じゃあ、その時彼はGGOに居たんですか？」

菊岡「いや、その時彼は《MMOストーリー》に出演していてね。ここからは未確認情報なんだけど、同時刻に、GGOの中で妙なプレイヤーが居たらしい。」

「妙？」

俺とキリトが声を合わせると、菊岡が少し声のボリュームを下げたと言う。

菊岡「GGOの酒場で、テレビに映っているゼクシード氏に向かって銃撃して、その直後にゼクシード氏は緊急ログアウトした。」

冬馬「待ってくれ。菊岡さんはゼクシードがそのプレイヤーに殺されたと言うのか？」

和人「幾らなんでも無いだろ。」

俺たちはそれを信じられずに、それぞれ否定して、頼んだ物を食べる。

菊岡「実は、これと似たような事が2件も起こっていてね。GGO内でそのプレイヤーに銃撃された《うす塩たらこ》と《ガイ》というプレイヤーも住んでいるアパ

にて遺体で見つかったんだ。」

冬馬「……………」

偶然にはおかしい。

何者かの仕業か？

和人「それで、そのプレイヤーの名前は分かるのか？」

菊岡「本名かどうかは不明だが、『シジュウ』または『デス・ガン』を名乗ったそうだが、恐らく、死の銃と書いて死銃という意味だろうね。」

死銃ね。

恐らく、ソイツが犯人だろう。

だが、どうやって現実の体を殺している？

そもそも、アミユスフィアにはそんな事出来るわけが無いのに。

キリトが菊岡さんに脳に異常は無かったのかと聞いたが、異常なしだそうだ。

菊岡「それでここからが本当の本題なんだ。君たちにはガンゲイル・オンラインに口

グインして、この『死銃』なる男と接触してくれないかな？」

そんな無邪気な笑みを浮かべながらそう語って来る。

そんな菊岡さんに、キリトは冷ややかな視線をぶつけて。

和人「はつきり言ったらどうだ？撃たれて来いって事だろう？」

菊岡「いやあ、まあ。」

和人「やだよ！何かあったらどうするんだよ！アンタが撃たれる。心臓トマレ。」

その言葉に、突然、俺の中で『トマーレ！』という謎の音声が聞こえてきた気がする。

聞いてられるかと思ひ、キリトと共に退出しようとする、菊岡に足を掴まれた。

菊岡「ちよつと待つて！この《死銃》氏はターゲットにかなり厳密なこだわりがあるように、君たちにしかできないんだ！」

冬馬「こだわり？」

菊岡の大声で目立ってしまったので、流石に席に戻る。

菊岡「厳密なこだわりっていうのが、強いプレイヤーじゃないとダメだつてことなんだ。ゼクシードたちはGGOで名の通ったトッププレイヤーだったから多分……。それにあの茅場先生が最強と認めた君たちなら……。」

和人「無茶言うな。」

冬馬「そもそも、俺たちはずっと剣で戦ってきたんですよ。」

そう、俺たちがプレイしたのは、剣がメインのゲームだ。

それがいきなり銃撃戦の世界に行けと言われても、すぐに蜂の巣にされる。

冬馬「そんな事しなくても、ログを確認すれば済むじゃないですか。」

菊岡「そのことなんだけど、GGOを運営している《ザスカー》という企業はアメリ

カサーバーを置いてるんだ。現実の会社の所在地はおろか、電話番号もメールアドレスも未公開だから無理なんだよ。」

なるほど。

つまり、そう簡単には行かないか。

菊岡「とまあ、そんな理由で、死銃と接触しなければならぬ。無論、万が一の事は備える。2人にはこちらが用意する部屋でダイブしてもらって、アミュスファイアに異常があつたら、すぐに切断する。報酬もこれくらい出すんだけどね。どうかな？」

そう言つて提示してきたのは、30万円だった。

本当に断りづらくなる。

冬馬「分かりました。」

和人「冬馬が言うなら俺も……。」

菊岡「ありがとう。……今から聞いてもらうのは死銃の声だ。何かのヒントになつて欲しいんだけど。」

菊岡がイヤホンを渡してきて、タブレットを操作すると、男の声が。

死銃『これが本当の強さだ！愚か者どもよ、この名を恐怖とともに刻め！俺と、この銃の名は死銃……デス・ガンだ！』

お前は、一体何の目的でこんな事を？

第2話 2人の戦い

チエイス side

低く垂れ込める雲を、傾き始めた太陽が薄い黄色に染めている。

俺は、パーティーメンバーと共に、ターゲットを待ち構えていた。

その中のギンロウという男が喋り出す。

ギンロウ「おいダインよお。本当に来るのか？ガセネタじゃねえだろうな？」

ダイン「奴らはこの3週間、殆ど同じルートで狩りに出てるんだ。文句言うな。」

ギンロウ「でもよお、何かの対策をしてもおかしくないんじゃないのか？」

ダイン「フィールドMobは単調だからな。そいつらも単調さ。全く、プライドの無

い連中だな。」

それを聞いて、イラツと来たが、パーティーメンバーでの諍いはあまり無しにしたい。

逆に、そんなパーティーばかり襲うダインにプライドはあるのか？

ダイン「それに、こつちにはシノンがいるんだぜ。作戦に死角はねえよ。なあ、シノ

ン？」

シノンと呼ばれた少女が頷く。

すると、ギンロウがシノンの方に向かつていく。

ギンロウ「まあ、そりやそうか。シノンの遠距離狙撃がありやあ、優位は変わらねえや。……：そーういや、シノつちさあ、今日、この後時間ある？俺も狙撃スキル上げたいんで相談に乗ってほしいなーなんて。どっかでお茶でもどう？」

シノン「……：ごめんさい、ギンロウさん。今日は、リアルでちよつと用事があるから。」

シノンは、リアルで知り合つた女性で、本来なら、筋骨隆々な女兵士のアバターが良かったらしいが、もう一人の知り合いが変更を阻止した結果、後戻り出来ないくらいに強くなつたらしい。

まあ、これも弊害と言える物だろう。

ギンロウ「そつかあ……。シノつちはリアルじゃ学生だっけ？レポートか何か？」

シノン「……：ええ、まあ……：……。」

流石に見てられなくて、ギンロウを止めにかかる。

チエイズ「おい。シノンが困っているだろう。それに、リアルの話を持ち込むな。」

ギンロウ「何だよチエイズ。お前って、本当に頭カチカチなんだから。」

チエイズ「言つてろ。」

ギンロウが何かぶつくさ言いながら戻っていく。

すると、シノンが近寄ってくる。

シノン「ありがとう、チェイス。」

チェイス「奴が鬱陶しかったただけだ。気にする必要はない。」

シノン「それでも、嬉しい。」

何か、シノンの顔が赤い気がするが、気のせいだろうな。

この世界は、ガンゲイル・オンラインと呼ばれていて、略称はGGO。

文字通り、銃の世界だ。

俺は、別のアカウントを作成したが、見た目が現実やALOの物とかなり近い。

すると、標的が来たらしく、ダインが確認している。

ダイン「……………確かにアイツらだ。7人…………先週よりも1人増えてるな。光学系ブラスタアの前衛が4人。大口径レーザーライフルが4人。それに…………おっと、《ミニミニ》持ちが1人。狙うからこいつだな。…………あと1人は、マントで武装が見えねえな。」

マントで武装が見えない。

本当に不確定要素だな。

コイツから倒すべきだと思うな。

死銃ではと何か言っているダイン達に、進言する。

チェイス「ダイン。狙撃するなら、あのマント男からの方が良いだろう。」

ダイイン「何でだよ？大した武装もないだろ。」

シノン「チェイスに同感。不確定要素は一つでも減らした方が良いわ。」

ダイイン「それなら、あのミニミも不確定要素だろ。あれに手間取っている間にブラスターに接近されたら終わりだぜ。」

シノン「……………分かった。第一目標はミニミにする。可能だったら次弾でマントの男を狙う。」

そういう結論に落ち着いた。

ダイインの言うことも尤もだ。

光学系対策として、防護フィールドがあるのだが、近づかれると、意味が無い。

それに、シノンの狙撃も、初弾は問題ないものの、発射点を認識されると、《弾道予測線》が現れて、容易に回避される。

索敵「おい、喋ってる時間はそろそろないぞ。距離二千五百だ。」

ダイイン「よし。俺たちは作戦通り、正面のビルの陰まで進んで敵を待つ。……………シノン、動き始めたら俺たちには奴らが見えなくなる。状況に変化があったら知らせろ。狙撃タイムミングは指示する。」

シノン「了解。」

ダイイン「……………よし、行くぞ。」

その一声と共に、俺たちは駆け出していく。すると、シノンが声をかけてきた。

シノン「頑張つてね、チェイス。」

チェイス「お前の狙撃も期待しているぞ。」

そう声を掛けて俺たちは配置につく。

シノンが使っているライフルは、《PGM・ウルティマラティオ・ヘカートII》と言う。

リアルでは、対物ライフルのジャンルに入るらしい。

手に入れたのは3ヶ月前で、シノンと共に遺跡ダンジョンに潜っていたが、トラップに引っかかってしまい、ゴツズペットというボスモンスターと戦い、ドロップした物だ。

俺は配置につき、ブレイクガンナーを構える。

ヘッドセットから連絡が入る。

ダイン『配置についた。』

シノン『了解。敵はコース、速度ともに変化無し。そちらとの距離四百。こちらからは千五百。』

ダイン『まだ遠いな。行けるか?』

シノン『問題無い。』

ダイン『……………よし、狙撃開始。』

シノン『了解。』

そんなやりとりの後、ミニミを持っていた男が狙撃されて、消滅した。

アイツの狙撃スキルに関しては、俺もとても驚いている。

だが、あのマント男はシノンの第二射を躲した。

アイツ、手練れだな。

シノン『第一目標成功。第二目標失敗。』

ダイン『了解。アタック開始。……………ゴーゴーゴー!!』

ダインの合図と共に、俺も駆け出す。

防護フィールドのお陰で、ダメージを受ける事なく前進する。

シノン side

私は、ミニミ使いを狙撃して、マント男には躲された。

後は、チェイスやダイン達に任せよう。

それにしても、チェイスは本当に強い。

私も……………彼みたいに強くなれたら……………!

すると、マント男がマントを取り払う。

シノン「あっ……………!!」

あの男は、ミニガンを持っていたのだ。それなら、ゆつくりなものも納得がいく。

パーティーは、あの男に合わせて動いていたのだ。

すると、ミニガンが火を吹き、ギンロウがあつという間に消滅した。

チェイスは咄嗟に隠れたみたい。

私は、唇を噛んで立ち上がっていた。

決して、ダイン達の為じゃない。

チェイスがこの戦況をどう判断するのかを見極める為だ。

何回か、ミニガンに撃たれそうになったが、それを躲す。

そして、チェイス達の元へ。

ダイン「……………奴ら、用心棒を呼んでやがった。」

シノン「用心棒?」

チェイス「……………あのミニガンから察するに、《ベヒモス》だろうな。」

チェイスがどうするかを思索している表情になり、口を開く。

チェイス「このままでは全滅だ。ベヒモスの残弾は怪しくなってきたはず。突撃すれ

ば、ベヒモスも掃射は躊躇うはずだ。」

ダイン「無理だ、ブラスタードって3人残ってるんだぞ。突っ込んだら防護フィール

ドの効果が………！」

シノン「チエイスの言う通りよ。ブラスターの連射は実弾銃ほどじゃない、半分は避けられる。」

ダイン「無理だ！突っ込んでもミニガンにズタズタにされるだけだ。……残念だが、諦めよう。連中に勝ち誇られるくらいなら、ここでログアウトして……。」

私とチエイスが呆然としながらダインを見ていると、喚いてきた。

ダイン「何だよ、ゲームでマジになんなよ！どっちでも一緒だろうが、どうせ突っ込んで無駄死にするだけ………！」

シノン「なら死ね！せめてゲームの中でくらい、銃口に向かって死んで見せろ！」

チエイス「………。俺が先行する。シノンは援護を頼む。」

シノン「分かった。」

チエイス side

シノンがあれほど口を荒げて言うのは初めて見た。

何かあるのだろうと思ひ、口出しはしなかった。

俺はブレイクガンナーを手に駆け出す。

まずは、残りのブラスターを始末する。

すると、ダインが根性を振り絞ったのか、ブラスターに向かってグレネードを投げて、

刺し違えた。

チエイイス「やるな、アイツ。」

『チューン！チエイサース。パイダー！』

すぐさまフアングスパイディーを展開して、ベヒモスに迫る。

ベヒモスの視線の先には、片足を失ったシノンが跳躍していた。

ベヒモスが驚いている中、俺は接近して、奴のミニガンを斬る。

ベヒモス「お前……！」

チエイイス「お前はもう何も出来ないな！」

シノン「ジ・エンド。」

シノンのヘカートから弾丸が放たれ、ベヒモスの顔と胴体を貫通して、地面にまで当たった。

そして、ベヒモスは消滅した。

チエイイス「よくやった、シノン。」

シノン「貴方もね。」

お互いに拳をぶつけ合う。

第3話 それぞれの想い

詩乃 side

校門から出ると、冷たく乾いた風が頬を叩く。

現在の保護者とも言える祖父母に、かつて、高校には行かずにすぐに働くか、或いは専門学校で就職の為の訓練をしたいと言った。

昔気質の祖父は真つ赤になって怒り、祖母は私には良い学校に行つてちゃんとした家に嫁いでほしいと言われた。

その結果、都内の都立高に入ったが、本質的には何も変わらない。

私は、本屋を覗き、その次に文具店でノートと消しゴムを買つて、スーパーで夕食の材料を買おうとすると。

遠藤「朝田あー。」

私を呼ぶ声がして、右側を向くと、そこには私と同じ学校の女子生徒が3人居た。

あの3人は、一時は友達と信じた。

しかし、それが裏切られて、私はそれから周囲が敵だと感じるようになった。

あの二人を除いて。

遠藤達の用件とは、お金を貸してほしいという事だった。

いつまでも貸してくれない事に苛ついているのか、すこし荒くなる。

遠藤「んだよ。……早く行けよ。」

詩乃「嫌。」

遠藤「……は？」

詩乃「嫌。あなたにお金を貸す気はない。」

すると、遠藤は子供が拳銃を模す時の動きを取る。

私は、それを見て、体の力が抜ける。

遠藤達は、私の財布からお金を取ろうとすると。

???「おい。何をしている。」

その声に遠藤達が後ろを向くと、そこには他校の制服を着た少年が居た。

その人は、知り合いだった。

私が、2人だけ敵だとは思えない内の1人。

詩乃「狩野君……。」

英介 side

先程、侑斗と一緒に帰っていて、侑斗と別れた後、夕食の材料を買いに来たのだが、何か大声がした路地裏に入ると、3人の女子が1人の女子を虐めているであろう現場に着

いた。

そして、その1人の女子は、知り合いだった。

何かと、俺が気にかけている奴だ。

詩乃「狩野君……。」

英介「朝田。ここで何をしている？」

そう聞いたが、状況を見れば一目瞭然だ。

おそらく、3人が虐めていたのだ。

英介「おい。何をしている。」

遠藤「いや、朝田が急に倒れたから……！」

英介「なら、何故朝田の財布をお前が持っているんだ？」

遠藤「ええつと……。」

俺は朝田の財布を取り返す。

英介「これは恐喝罪になるぞ。今すぐ警察を呼ぼうか？」

遠藤「チツ！」

3人の女は舌打ちしながら去っていった。

俺は朝田を立たせて、財布を渡す。

詩乃「ありがとう。狩野君。」

英介「気にするな。…………アレが最初ではなさそうだな。学校や警察に相談した方が
良いと思うが。」

詩乃「本当に、ありがとうね。」

???「あれ？朝田さん、英介。」

すると、野球帽を被った少年が現れた。

彼は新川恭二。

朝田の知り合いで、俺がGGOのソフトを買いに行った際に知り合い、友達だ。

英介「ああ、恭二か。」

恭二「何か騒いでたけど、大丈夫？」

詩乃「うん。大丈夫…………。」

本当に、詩乃を見ていると不安になってくるな。

何というか、守るべきではと思えるような。

その後、恭二が奢ってくれると言うので、静かな喫茶店に向かう。

内容は、一昨日遭遇したベヒモスとの戦闘の話らしい。

恭二「聞いたよ、一昨日の話。大活躍だったんだって？」

詩乃「そんな事無いわよ。作戦的には失敗だったわね。」

英介「何せ、こちらのスコードロンは、六人中四人もやられたしな。待ち伏せであの

結果じゃあ、とても勝ったとは言えん。」

恭二「でも、凄いや。あのミニガン使いの《ベヒモス》は、今まで集団戦では死んだ事が無いって言われてるぐらいだし。」

英介「そうなのか。」

恭二曰く、《バレット・オブ・バレッツ》のランキングにベヒモスが出ないのは、ソロの遭遇戦ではその真価を発揮できないからだ。

恭二が子供のように口を尖らせていると、詩乃が微笑む。

詩乃「……それなら、私のヘカートIIも思い切り反則だって言われてるわよ。使う側からしたら、それなりに苦労はあるわよ。」

恭二「ちえ、贅沢な悩みだなあ。……で、次のBOBは出るの?」

詩乃「出るよ、勿論。前回二十位までに入ったプレイヤーのデータは揃ったからね。今度はヘカートを持っていくつもり。次こそは、全員殺……上位入賞を狙ってみるよ。」

恐らく、殺すと言おうとしたが、訂正したのでだろうな。

BOB……《バレット・オブ・バレッツ》とは、GGOにおける最大の大会だ。

ALOで例えるなら、全種族合同トーナメントみないな規模だ。

俺は、参加した事はない。

だが、次は参加しようと思う。

恭二「それで、英介はどうするの？」

英介「俺も出ようとは思っている。ブレイクガンナーを引っ提げてな。」

恭二「アレでよく戦えるよ。」

英介「アレは使いやすいしな。それに、近接戦闘で無双した奴が第一回に居ただろ。」

恭二「ああ……サトライザーね。まあ、今では自殺行為だけど。」

サトライザーとは、第一回大会にて、優勝した人物だ。

一度戦ってみたとは思っている。

英介「それでも、戦えなくはないしな。」

恭二「なるほどねえ……。」

その後、恭二の受験なども聞いて、この日はお開きにした。

詩乃 side

新川君と別れた後、帰る方角が同じだと言う狩野君と共に、私が住んでいるアパートの前にまで来る。

英介「本当に大丈夫なのか？俺の父さんが警部だから、いざという時は言えよ。」

詩乃「ありがとう。でも、大丈夫。私も、強くないといけないから……。」

そんな話をして、狩野君は帰った。

アパートの部屋の中に入り、スーパードで買った物を冷蔵庫に入れる。そして、鞆を置いて、マフラーも取って、コートと一緒にクローゼットの中へ。

2日前、狩野君／＼チェイスと共にベヒモスを倒したが、ベヒモスは集団戦では最強と言われるだけのプレッシャーがあつた。

もしかしたら、今なら、あの記憶と正面から向かい合つて、ねじ伏せれるかもしれない。

……そんな風に思つて、プラスチック製のモデルガン……BOBの景品の……を手に取るが、発作が起こる。

その際に、幼い少女の恐怖に塗れた叫び声が聞こえる。

あの事件が起こつてから、全てが変わつた。

銃に怯え、そのような生活を送る中、新川君と狩野君とGGOに出会つた。

だけど、心の中で問い返す声が聞こえる。

……本当に？ 本当に、それで、いいの？

GGOでは、ヘカートを操る狙撃手なのに、現実では、モデルガン一つすら持てない。去年から掛けている《防具》としての一面を持つ眼鏡は、それに依存していると言う事だ。

きつく眼を閉じると、再び弱々しい問いが胸の中に生まれる。

誰か……教えて……。私、どうすれば、いいの……？

そんな事を考えていると、狩野君／チエイスの姿が浮かぶ。

彼は、私がGGOを始めた以来、一緒にプレイする事もある。

そんな中、私は彼が強いと知った。

どんな逆境も諦めず、最善の手段を取ろうとする。

そんな彼の強さを目標にしていたが、次第に異性としての感情が芽生える。

しかし、それは叶わないのだ。

人を殺した、私には。

詩乃「ねえ、チエイス……。教えてよ、どうすれば良いのか……。」

私のそんな弱々しい声が、部屋に響く。

冬馬side

俺は、夢を見た。

それは、かつて、SAOのプレイヤーを恐怖に突き落とした集団、《ラフィン・コフィ

ン》の討伐戦の夢が。

その時に、俺は二人を殺めた。

冷静さを欠いてしまった結果だ。

だが、その事にショックを受けて、しばらく心ここに在らずというような状況になっ

た。

その時は、ミトを始めとする仲間達が支えてくれて、何とか乗り越えた。だが、その時の出来事が夢に出てきたという事は。

冬馬「良い加減に、受け入れろって事になるのかなあ……………」
そんな事を呟く。

あの死銃の声を聞いてから、こんな夢を見るようになった。

死銃の声には、悪ふざけではない、本気の声が聞こえるのだ。

それに、ラフコフ討伐戦の記憶が刺激される何かが。

しばらくすると、GGOにコンバートさせるのだ。

冬馬「ミト達には、何て言えば良いんだろうなあ……………」

そんな事を呟く。

第4話 銃の世界

俺はエギルの伝で入手したバイクを走らせていた。

行き先は、キリトと同様に、千代田区にある病院で、ここは以前入院していた。

冬馬「まさか、また来るとはな……。」

そんな感慨を浮かべつつ、エントランスへと向かう。

六日前、俺はこの時、自宅の部屋にミトを入れて、事情を説明していた。

菊岡の依頼で、ALOからGGOにコンバートさせる必要がある事を。

話した理由は、カナにパラドがいる為、コンバートしたら即バレするからだ。

深澄「……………つまり、菊岡さんの依頼で、カルムのアバターを移す必要があると。」

冬馬「はい……………」

だが、現状は、こうなっている。

ミト／深澄が俺の目の前で仁王立ちをして、俺は正座をしている。

まるで、何かヤバイ物が妻に見つかって問い詰められる夫みたいな状態だ。

ミトの顔が少し怖い。

深澄「ハアアア……………。一先ず顔を上げなさいよ。」

冬馬「本当にすいません。」

深澄「分かっているわよ。……………菊岡さんの頼み事ならしようがないけどね。……………あの人、全面的に信用出来ないのよね。……………一応、お世話になった人ではあるけど。」

冬馬「それに関しては同意。」

そういう風に行くと、俺たちは同時に微笑笑をして、ミトがすぐに真剣な表情になる。深澄「……………出来るだけ早く帰ってきて。私たちの家があるんだから。」

冬馬「分かっている。すぐにA.L.Oに戻る。《ガンゲイル・オンライン》の内情を調べるだけなんだからよ。」

自動ドアが開くと同時に、俺はそれを考えるのをやめて、中に入る。

そう、ミトには、死銃に接触するというミッションは黙っている。

それを言ったら、確実に止めにかかるか、一緒に行くと言い出しかねない。

流石に、危険要素がある以上、ミトは巻き込みたくない。

身勝手だが、そうするしかない。

トイレに行つて、指定の病室に入る。

そこには、既にキリトが横たわっていた。

そして、顔見知りの看護師が居た。

安岐「おつす！小野君、お久しぶり！」

彼女は安岐という看護師だ。

リハビリ期間の間にお世話になったのだ。

冬馬「あ……………どうも……………」

すると、安岐さんが俺の肩から二の腕、脇腹辺りをぎゅうつと握る。

冬馬「ウワッ！」

安岐「結構肉ついたねえ。桐ヶ谷君より良い状態ね。」

冬馬「……………と言うか、何で安岐さんがここにいますか？」

安岐「あの眼鏡の役人さんから聞いてるよ。何でも、お役所の為に調査をするんですよ？大変だねえ。それで、リハビリ中の2人を担当した私にモニターを頼むって言われてねえ。今日はシフトから外れたんだよ。」

冬馬「ああ……………」

謀ったな、菊岡!!

まるで俺が美人に弱いみたいな言い方するじゃねえか。

そう罵りつつ、安岐さんの手を握る。

冬馬「……………で、当の眼鏡の役人さんはどうしたんだ？」

安岐「うん、外せない会議があると言ってた。伝言預かってるよ。」

渡された茶封筒を開き、中に入っている手書きの紙片を取り出す。

菊岡『報告書はメールでいつものアドレスに頼む。諸経費は任務終了後、報酬と併せて支払うので請求する事。追記……美人看護婦と個室に居るからって、若い衝動を暴走させないように。』

あのクソ眼鏡……！

これを読んでいると、ニヤニヤした菊岡の顔が浮かんでくる。

本当に苛ついて、握り潰す。

覚えてろ………！

俺の反応に、安岐さんは触れない方が良いと思ったのか、黙っている。

冬馬「じゃあ、早速ログインするので……。」

安岐「………それじゃ、服脱いで。」

冬馬「ヘア!？」

安岐「電極を貼るのよ。ほらほら、桐ヶ谷君が寝ているベッドの奥に行つて。」

流石に、上半身のみにして貰い、俺はベッドに寝っ転がる。

冬馬「多分、四、五時間くらいは潜っていると思うので……。」

安岐「はい。体はちゃんと見てるから、安心して行つてらっしゃい。」

何でこんな事に………。

そんな疑問を抱きつつ、俺は眼を閉じて、深呼吸してそのコマンドを言う。

冬馬「リンク・スタート。」

そうして、俺はGGOへと降り立った。

眼を開けると、そこには、近未来的な建物が立ち並んでいた。

ここが、『SBCグロツケン』というらしい。

どんな見た目をしてるのかと思ひ、鏡を見ると、兵士というよりは、美男子といえる体型になっていた。

髪は紫紺色になっていて、ポニーテールとなっていた。

何か、ミトを男にしたような外見だ。

カルム「まあ、これはこれで良いか。」

さて、死銃が現れる可能性があるBOBに参加する為、総督府に向かう。

総督府に向かってから、数分後。

カルム「どこだ、ここ？」

呆気なく道に迷った。

そう、SBCグロツケンには、広大なフロアが幾つも重なっている。

その結果、地理感がない俺は呆気なく迷子になってしまったわけだ。

このままじゃ、参加できない……！

そういう焦りがあつた影響か、後ろから来る一団に気付かず、ぶつかってしまった。

カルム「あ……！すいません……！」

???「いや、こつちこそすいません……。」

そこに居たのは、男性プレイヤーが1人、女性プレイヤーが2人居た。

ただ、女性陣の内1人は、NPCのタグとなっていた。

すると、ピンクの髪をサイドテールにした女性が話しかける。

???「ねえ、あなたは、ニュービーなの？」

カルム「え、あ。まあ……。」

???「マスター！これは助けないと行けないのでは!？」

???「まあ、そうだね。」

カルム「あの、どちら様で？」

アラン「ああ、俺はアラン。」

クレハ「私はクレハ。よろしくね。」

アフアシス「私はアフアシスと言います！」

カルム「あ。俺はカルム。」

と、3人と挨拶をした。

アラン「ところで、カルムはどこに行こうとしてたんだ？」

カルム「えっと、総督府に……。」

クレハ「総督府？何で？」

カルム「B o Bに参加したいなあって……。」

アラン「え。でも、君ってニュービーでしょ。参加して大丈夫？」

カルム「いや、コンバートした奴なんです。」

アファシス「そうなのですか!？」

めつちや食いついてくるな、このNPC。

クレハ「確か、アランも出場するのよね？」

アラン「ああ。……そうだ。ちよつと着いてきてくれ。」

そう言われて、着いてきたのだが、そこは、フィールドだった。

カルム「えつと……。どうすれば？」

アラン「ああ。ここに出てくるガウンタとグレイリオっていうロボット兵士がいるか

らさ。君の腕前も知りたいからね。」

なるほど、ガウンタとグレイリオを倒してみせろって事か。

っていうか、武器がない。

クレハ「ちよつと、アラン。流石に丸腰はかわいそうよ。」

アファシス「そうですよ、マスター！」

アラン「あ！そうだった。君にこれを渡しておくな。」

そう言つて渡されたのは、ハンドガンだった。

カルム「これは？」

アラン「J3ビームマシンガンって奴だよ。使つてみて。」

トリガーを引くと、ビームが出て、グレイリオに当たる。

カルム「なるほどな。」

そして、倒していく。

途中、グレイリオの一体が持っていたサーベルを奪い取り、それを使いつつ、ガウンタとグレイリオを倒していく。

クレハ「凄いじゃない！」

アフアシス「凄いです！」

アラン「ああ！カルムって、一体何のゲームをしてたんだ？」

カルム「アハハハハ……。」

流石にお茶を濁す。

すると、宝箱を見つけて、開けてみると、ゼットソードという武器が手に入った。

後、プロテクターに肩当て、ゼットソードを運ぶジョイント、タイヤ付きのシューズを手に入れた。

クレハ「え!?!レア装備!?!」

アファシス「私も見た事が無いです！」

アラン「凄いな！運も良いなんて!!」

カルム「そうかなあ……。」

何か、凄そうな武器を手に入れた。

説明を見ると、ゼットソードとゼットシューター、ゼットシールドが付いていて、ソードとシューターを組み合わせて、ランス、ハンマー、ライフルにもなるらしい。

すげえな。

そして、専用スキルとして、アサルトストライクというのが使える。

足の部分のタイヤで高速移動も出来る。

一応、J3ビームマシンガンは返却した。

俺のじゃないしな。

そして、アラン、クレハ、アファシスと共に総督府へと向かう。

第5話 予選開始までの出来事

俺は、アラン、クレハ、アフアシスと共に、総督府に着いた。

カルム「ここが、総督府か。」

クレハ「SBCグロッケンって、かなり複雑なのよね。」

アラン「確かに、最初は俺だって迷ったんだから。」

アフアシス「でも、マスターには私が居ますよ!」

クレハ「でも、レイちゃんって、結構迷う確率が高いわよね。」

アフアシス「ウツ!」

内部は、かなり広い円形ホールだった。

いかにも近未来的なディテールの施された円柱が並んでいる。

周囲の壁には大画面のパネルモニターがぐるりと配置されていて、これからやる《第3回バレット・オブ・バレット》のプロモーションビデオや、実在企業のCMも流れる。

3人曰く、グロッケンが宇宙船だった名残かららしい。

案内の元、縦長の機械が並んでいるエリアに着いた。

見た目は、コンビニに置いてあるATMやコンテンツベンダーを兼ねたマルチ端末に

似ている。

アラン「これで大会のエントリーをするんだ。よくあるタッチパネル式端末だけど、操作のやり方は大丈夫か？」

カルム「大丈夫だ。」

クレハ「まあ、分かんなかったら私たちが教えるわよ。」

俺はB o Bへとエントリーする。

現実世界の名前や住所、職業を入れるフォームがあったが、今回の目的は調査だ。

全て空欄の状態で打ち込む。

エントリーを受け付けられたらしい。

後30分後に、予選トーナメントが始まるそうだ。

すると、アフアシスが声を上げる。

アフアシス「あー！シノンとチエイイスです！」

カルム「え？」

今、チエイイスって言ったか？

まさかと思い、アフアシスの視線の先を追うと、チエイイスが居て、女が2人いた。

アランとクレハも声を上げる。

アラン「よお、チエイイス、シノン。」

クレハ「2人も参加するの？」

シノン「ええ。そんなところ。」

チエイス「ん？もしかして、カルムか？」

カルム「やあ、チエイス。」

アフアシス「2人は知り合いなのですか？」

カルム「まあな。」

積もる話もあるが、男性陣と女性陣に別れて、控え室で装備を着ける。

チエイス「まさか、カルムが来ていたとはな。」

アラン「チエイス。俺が勝つからな。」

カルム「知り合いに会えて良かったぜ。」

チエイス「それにしても、お調子者ばかりだったな。」

カルム「どういう事だ？」

アラン「試合前の30分前からメインアームを見せびらかすのは、対策してくれって言ってるようなもんだからな。」

カルム「なるほどな……。」

アラン「カルムも、ゼットソードに関しては、試合直前に装備した方が良いぞ。」

チエイス曰く、新規のアカウントでログインしているらしい。

そうして、装備を着る。

控室を出ると、顔を真っ赤にしたシノンとクレハがチエイスとアランの後ろに来る。

カルム「どうしたん？2人とも。」

シノン「アイツ、女の子と偽って、男だったのよ！」

クレハ「許せない!!」

チエイス「え？」

アラン「ん？」

すると、あの黒髪の奴が来た。

何だアレ？

頬に手形が付いていた。

チエイス「どういう事か説明しろ。」

アラン「お前、それは無いだろ。」

キリト「いや、ていうか、チエイスにカルム！俺だよ！キリトだよ!!」

カルム「えっ……………」

嘘だろ……………」

あの女の子が、キリト？

チエイス「何……………」

アラン「知り合いなのか？」

カルム「……………こんな人、知らないです。」

キリト「嘘をつくなよ！頼む！あの2人の誤解を解いてくれ！さも無いと、ALOでアスナに制裁される!!」

カルム「ハア…………。一応、知り合いです。」

流石に可哀想になり、シノンとクレハの誤解を解く事にする。

2人曰く、下着を見られたそうだ。

10分くらいかけて、2人の誤解を解く。

チエイス「一つ聞くんが、キリト。お前、ネカマに目覚めてないよな？」

キリト「いや、俺はネカマじゃないから！」

アラン「そんな事を言っても、説得力がないからな。……………まあ、クレハも許してあげたら？本人も悪気があった訳じゃないみたいだし。」

クレハ「……………まあ、アランが言うなら…………。」

チエイス「コイツは俺とカルムの知り合いだ。シノンも許してやってくれ。」

シノン「チエイスが言うなら良いけど…………。」

と、何とか誤解は解けた。

だが、シノンとクレハ曰く、予選か本戦で当たったら、絶対倒すと語っている。

すると、シノンがこちらを向いてくる。

シノン「貴方はカルムって言うのね？ 私はシノン。宜しくね。」

カルム「宜しく、シノン。」

キリト「そっちはクレハだっけ、俺はキリト。よろしくな。」

クレハ「フン！」

どうやら、こつちには普通に接してくれるみたいだな。

そして、キリトの方はクレハに挨拶しようとすると、そっぽを向かれる。

アフアシス「それにしても、本当に女の子みたいですね！」

キリト「やめて、止めてくれ！」

と、アフアシスはキリトの見た目に興味津々みたいだ。

そして、B o Bに初参加する俺とキリトの為に、チェイス、シノン、アラン、クレハが解説してくれることに。

チェイス「フィールドは1キロ四方の正方形、地形タイプや天候、時間はランダムだ。」

クレハ「最低五百メートル離れた場所からスタートして、決着したら勝者はこの待機エリアに、敗者は一階のホールに転送されるわ。負けても装備のランダムドロップは無いわ。」

アラン「勝ったとしても、その時点で、次の対戦者の試合が終わってたらすぐに2回

戦がスタートして、終わってなければ、それまで待機するんだ。」

シノン「各ブロックは5回勝てば決勝進出出来て、本大会への出場が出来る。」

カルム「解説ありがとうございます。」

すると、シノンが語り出す。

シノン「チエイイスとは予選の決勝戦で戦うけれど、貴方達も勝ち上がりなさい。5人と戦う時に教えてあげる。」

カルム「何を？」

シノン「敗北を告げる弾丸の味。今度こそ、強い奴を全員殺してやる。」

あ、分かった。

シノンって、好戦的な奴だ。

このシノンは、GGOでは強いプレイヤーなのだろうな。

チエイイス以外が背筋が震えたような表情になり、チエイイスは何か言いたそうだった。

すると、2人の男がやって来た。

「やあ、シノン、チエイイス。ここに居たんだね。」

「アファシスちゃん！ここで会えるなんて嬉しいぜ！」

誰？

そう思っていると、アランが声をかける。

アラン「あの巨体の方が、バザルト・ジョー。アフアシスの事を気に入っちゃった人だよ。」

ジョー「よお、アラン！頼む！アフアシスちゃんを俺にくれ！」

アラン「何度も言ってますけど、無理ですよ。」

ああ、この人、面倒臭そうなタイプだな。

すると、こちらを見てくる。

ジョー「ん？そのソイツは誰だ？」

アラン「ああ。彼はカルムっていうて、ニュービーだけど、BOBに参加するんだ。」

カルム「どうも、カルムです……。」

ジョー「なるほどなあ！俺はバザルト・ジョーっていうんだぜ！よろしくな！」

カルム「どうも……。」

暑苦しいけど、良い奴だな。

クレハ「アンタも、ちつとも懲りないわね。」

アフアシス「そうですよ！」

ジョー「なあ、頼むぜ！」

なるほど、アフアシスが絡むと、ぶっ壊れるタイプか。

向こうの方は、シユピーゲルと言うらしい。

シュピーゲル「それで、貴方は？」

カルム「ああ。俺はカルム。よろしく。」

シュピーゲル「よろしくね。僕はシュピーゲルだよ。」

GGOって、癖の強い奴が多いな。

そんな風に多少呆れていた。

すると、チエイスが声をかけて来た。

チエイス「カルム。」

カルム「ん？」

チエイス「すぐに本戦が始まるから、後で聞かすが、何故コンバートさせたのかを。」

カルム「……………後で話しますので。」

そう言っておく。

第6話 それぞれの予選と遭遇

カルムside

チエイスにコンバートさせた理由を話すと約束した直後、試合が始まった。相手は、Nexusというプレイヤーだ。

フィールドは廃工場だ。

カルム「さて、相手はどこだ？」

すると、一本のラインが伸びてきて、俺はすぐさま躲す。

Nexusの位置は検討がついた。

そこに向かってゼットシューターを撃つも、当たらない。

カルム「チツ！モンスターとプレイヤーじゃ、やっぱり違うか！」

大変だな、これ。

どうすれば……………！

カルム「あ。」

そういえば、このシューズって、タイヤが付いてるんだったな。

タイヤが動く事を確認する。

カルム「これなら行ける！」

俺はゼットソードとゼットシルドを構えて、タイヤを稼働させて突っ込む！

といつても、まっすぐ突っ込むのではなく、ジグザグに蛇行しながら行く。

これなら、敵もそう簡単には狙いが定められないはずだ。

バレットラインがこちらに伸びてくるが、ゼットソードで叩き斬ったり、ゼットシ

ルドで防いだり叩き落とす。

ゼットソードは、分類的には、フォトンソードと同じ部類になるが、実体剣の周りに

エネルギーを纏わせる代物だ。

Nexus「嘘だろ……！」

ネクサスがそう毒づき、リロードしようとした瞬間に、ゼットソードとゼットシューターを取り出す。

『ゼットアッパー！ゼットランス！』

ゼットソードとゼットシューターの2つを合体させて、一本の巨大な槍にする。

そして、灰色になった刀身がスライドして縮み、真ん中からビーム刃が伸びて構築される。

そして、このゼットランスをネクサスに叩きつけるかのように相手をぶった斬る。

一刀両断されたネクサスはそのまま消滅した。

カルム「ふう………。何とか上手くいって良かったぜ。」
それにしても、これ結構使えるな。

単騎で複数の武器を運用出来るのはかなり強いぜ。

そして、ゼットシールドにゼットソードとゼットシューターをマウントして、背中のジョイントに着ける。

こうやって、持ち運びも便利だからな。

そうして、待機エリアに戻ってこれた。

チエイサイド

俺は、カルムに何故GGOにコンバートさせたのか聞く事を約束して、フィールドへと転送された。

相手は、ガフというプレイヤーだ。

ガフとは、Bobでも常連のプレイヤーで、ベスト10によく入るらしい。

そこは、都市廃坑のステージだった。

ブレイクガンナーを構えながら、警戒しつつ進んでいくと、バレットラインがこちらに向かって来た。

躲すと、そこには黒人で、テンガロンハットを被った男性がいた。

ガフ「ほう、お前が噂のチエイスって奴か。」

チエイズ「そうだが。何だ？」

ガフ「いや、お前、一部のプレイヤーから死神だつて言われてんだぜ。」

チエイズ「ほう。」

そんな風に言われていたとは思わなかったな。

チエイズ「それがどうしたと言うんだ？ 相手がいる以上、倒すだけだ。」

ガフ「良いねえ……！ 俺の相手に相応しいな！」

俺とガフはお互いに並走しながら、お互いの銃を相手に向けて撃つ。

俺のブレイクガンナーと奴のエンペラー7が火を噴き、箱に当たったりする。

すると、強力な攻撃が撃ち込まれる。

チエイズ「何!？」

ガフ「俺のエンペラー7はな、チャージショットも撃てるんだぜ！」

なるほどな。

だが、俺の奴も特殊なんだ。

『チューン！チエイサーバット！』

ブレイクガンナーにバットバイラルコアを装填して、ウイングスナイパーを展開する。

ガフ「ほう！この俺に対して、早撃ち勝負を挑もうと言うのか！」

チエイズ「ああ。」

ガフ「面白い！」

ガフがエンペラー7を構え、俺がウイングスナイパーを構える。

暫く静寂が訪れ、枯れ草が転がる。

そして、お互いにチャージショットを放つ。

ガフが放った弾丸が、俺に向かい、俺が放ったエネルギーニードルがガフに向かう。

すると、俺のエネルギーニードルが、ガフの弾丸を斬り裂き、ガフの土手つ腹に命中する。

斬った弾丸は、片方は道路に命中して、もう片方は俺の左腕の肘から下を吹っ飛ばした。

ガフ「フツ…………。やるじゃねえか。」

チエイズ「お前もな…………。」

ガフ「本戦に出れないのは残念だが、お前の様な奴と本気で戦えて嬉しいぜ。」

チエイズ「…………。」

ガフはそう言い残し、体の上にDEADの文字が浮かぶ。

ホツと息をついて、立ち上がる。

すると、また転送される。

気がつくくと、飛んだ左腕が直っていた。

カルム side

俺は皆より一足先に、試合を終えて、残りの面子の試合はやってないのかなと、中継モニターを見てみると。

??? 「お前、本物、か？」

カルム 「うお！」

右耳のすぐそばで声があったので、驚きながら飛び退る。

そこに居たのは、ボロボロに千切れかかったダークグレーのマントを着ていたプレイヤード。

??? 「怖がるな。」

カルム 「いや、至近距離で声をかけられたら、誰もがびっくりするでしょうが！」

??? 「もう一度、聞く。お前は、本物、か？」

カルム 「本物？ どういう事だ!？」

??? 「あの名前、スピード……。お前は紫紺の剣士、だな。」

カルム 「!？」

そんな事を言ってくるなんて、こいつは間違いなくSAO生還者だ。

だけど、こんな奴と会った事は無い筈……。

カルム「……アンタ、SAO生還者だな。」

???「異種の、二刀流、じゃないのか?」

カルム「別にどうだって良いだろ。……ていうか、アンタ誰?」

???「……この名前に、偽りはないな?」

そう言つて、俺のB o Bでの登録名。

誤魔化すのは、無理だな。

カルム「確かに、俺は紫紺の剣士つて言われてたカルムだけど。……名乗つたから、

そつちも名乗れよ。」

???「名乗るよりも、見せてやろう。」

そう言つて、目の前の男は、腕に巻いていた包帯を緩める。

厨二病の類かなと思つていたが、腕を見た途端に、その考えが吹っ飛ぶ。

そこには、あのマークが。

カルム「……!?!ラフコフ!?!」

そう、腕にはSAOで猛威を振るつた殺人ギルド、《ラフィン・コフィン》のエンブレムが刻まれていた。

という事は、投獄されたメンバーだ。

???「……ふむ。お前は、あの黒の剣士よりは、素直な様だな。」

カルム「キリトと接触したのか。」

???「カルム。黒の剣士や、チエイスと一緒に、お前も殺してやる。」

カルム「過去の栄光に縋るなよ。俺は、絶対に負けないからな。」

???「フン……………」

ソイツは、去っていった。

カルム「まさか、ラフコフまで絡んでくるとはな。」

心配になり、キリトの元へ行くと、キリトは大量に汗を流して、呼吸が荒い。

チエイスが心配そうに見ている。

カルム「チエイス！キリト！」

チエイス「カルム！どうしたんだ、キリトは？俺が戻ってきたら、この有様だが……………」

キリト「カルム……………。チエイス……………」

カルム「分かってる。……………俺も会ったさ。本物かって聞かれた。」

チエイス「どういう事だ？」

カルム「ちょうど良いです。話しましょう。」

俺は約束通り、チエイスに事情を話す。

俺とキリトが、死銃の調査の為に来た事、先程、俺とキリトがラフコフのメンバーと

接触した事を語った。

すると、チエイスが驚愕の表情を浮かべる。

チエイス「ラフコフだ?!? ……それに、死銃の噂は、本当だったのか?」

カルム「そうみたいだな。実際に、ゼクシードに薄塩たらこの2人は、死体となつて発見されている。」

チエイス「……………この一件、俺にも囁ませてほしい。」

カルム「良いのか?」

チエイス「どうせ、俺も狙われているんだろ?それに、過去の因縁には決着をつけておかないとな。」

そう言ったチエイスだが、すぐに深刻な顔になる。

無理もないか。

まさか、巡り巡って、SAOで生まれた悪意が、ここ、GGOで再会するとはな。

第7話 それぞれの覚悟と想い

カルム side

まさか、SAOで生まれた悪意が、GGOでまた生まれるとはな。

SAOで猛威を振るった殺人ギルド、《ラフィン・コフィン》。

その生まれたきっかけは、POHという男だ。

ユーモラスな響きの名前だが、奴は強烈なカリスマ性を持っていた。

まさに、血盟騎士団の団長であるヒースクリフとは真逆の存在。

ゲーム開始から1年が経過した2023年の大晦日の夜に、レッドギルド、《ラフィ

ン・コフィン》結成の告知が、アルゴやジェイクを始めとする情報屋に伝達された。

その後、ラフコフはプレイヤーを殺しまくったのだ。

攻略組としては、そんな事を防ぐべく、色々対策を講じていたが、奴らは更に新しい手口を編み出して行って、イタチごっこの常態だったのだ。

俺はラフコフの事を、悪意と称していた。

ネット世界で生まれた悪意は、人の心を侵していき、更に悪意を広めた。

その後、罪悪感に負けたプレイヤーがラフコフのアジトを教え、討伐隊が組まれた。

しかし、こちらの情報が漏れていて、血みどろの混戦状態に陥った。

その際に、俺はプレイヤーを2人殺してしまったのだ。

冷静さを欠いてしまった事が理由で。

その結果、暫くはホームに引き籠もっていたのだが、仲間が支えてくれた。

だが、その悪意が、また現れるとは……。

シノン「3人とも、なんて顔をしてるのよ。」

アラン「どうした？」

クレハ「苦戦した様には見えなかったけど。」

そんな事を考えていると、シノン、アラン、クレハ、アファシスの4人がやって来た。

キリト「あ……………い、いや、何でも……………」

カルム「ま、まあ……………GGOでの対人戦は、これが初めてだから……………」

チエイズ「そ、そうだな……………」

シノン「……………」

アファシス「何か、3人の様子が変わすね。」

アラン「ああ……………」

クレハ「確かに……………」

俺は、そんな曖昧な返事をするしか出来なかった。

その後、俺はKブロックに配置されていたのだが、相手を倒していった。

2回戦は、ゼットハンマーで相手がいたエリアをぶつ叩き、ゼットシューターで止めを刺した。

3回戦は、シューズについてるタイヤで、超至近距離まで接近して、ゼットソードで斬り捨てた。

準々決勝は、ゼットライフルで相手の近くにあつたドラム缶を撃ち抜き、相手を爆発に巻き込んだ。

準決勝は、相手の弾丸をゼットシールドで防ぎながら近づき、ゼットランスで貫いた。決勝は、ゼットソードを相手に向かってぶん投げて、倒した。

俺は、全ての試合を終えて、待機エリアへと戻っていく。

キリトも全員倒した様で、椅子に座っていた。

カルム「キリト……………」

キリト「分かってる…………。この因縁は、俺たちで片付けないとな。」

カルム「ああ。」

すると、アランとクレハも終わったのか、こちらにやって来る。

アラン「……………カルム、キリト。お前らの戦い方って、結構無鉄砲だよな。」

クレハ「確かに、あんな戦い方は、私たちは見た事ないわよ。」

カルム「そうかな？」

キリト「俺たちは、剣を使ってる方が何かと性に合うしな。」

アフアシス「でも、シノンとチエイスも決勝で戦ってますし、全員が本戦に出場ですよ！」

アラン「なら、2人の戦いも見るか。」

アランの提案に乗り、シノンとチエイスが戦っているであろう、モニターを見る。

そこには、結構驚いた映像が映っていた。

シノン side

初めて見た。

チエイスがあんな表情を浮かべるのは。

まるで、何かに怯えるかのように……。

これまで、チエイスと一緒にGGOをしてきた。

でも、あんな表情は見た事ない。

それなのに、チエイスは相手を倒していったのだ。

これまで見てきたのは、不器用ながらも笑う姿、呆れている時の無表情、好戦的な笑みだ。

でも、モニターに映るチエイスは、そのどれでもない、鬼神の如き姿だ。

一体、どれが本物の《チエイイス》なのか。そんな事を考えながらも、ステインガーという対戦相手を倒す。

シノン「……いつそ車から降りて走れば、予測線を見て回避出来たかもしれないに。」

ステインガーは車に乗って突撃してきた。

そこを、ヘカートで狙撃したのだ。

そして、チエイイスはもう終えていた事から、即座に決勝戦が始まる。

ここは、《大陸間高速道》というステージだ。

チエイイスは出現しているだろうと、準備していた。

それにしても、チエイイスは一体、何に怯えていたのか。

それは、私がチエイイスに想いを寄せているからなのかもしれない。

でも、今まで、何度も裏切られたのだ。

そんな事を考えていると、チエイイスが現れた。

シノン「……………な……………！」

しかし、チエイイスは、逃げも隠れもしなかった。

ただ、こちらに向かって歩いてる。

しかも、顔を俯けていた。

シノン「……………どういう事?……………私は、貴方の敵じゃないって事なの!」

チェイスが顔を俯けているのは、避ける気がないからなのか。

シノン「……………ふ、ぎ……………ふぎけないでよ!!」

その声と共に、引き金を引き、チェイスの右頬から五十センチ以上離れた空間を通過して、遙か背後の乗用車に命中する。

2発目、3発目と撃つても、彼には当たらない。

シノン「何で……………!」

チェイスの顔には、何故外したんだという、疑問の色が浮かんでいた。

私はふらりと立ち上がり、ヘカートを両手で抱いて、チェイスの元へ。

シノン「……………何でよ?」

チェイス「俺には、やるべき事が出来たんだ。お前と戦う前に。」

シノン「何よ、やるべき事って……………!」

チェイス「それは言えない。だが、それが終わるまで俺は、お前と本気では戦えない。」

シノン「なら、自分を撃てば良かったじゃない!弾代が惜しかったの!」

チェイス「……………。」

無言を貫くチェイスに、一歩近づいて。

シノン「たかがVRゲームのたかがワンマッチ、貴方がそう思うのは勝手よ!でもそ

の価値観に、私まで巻き込まないでよ!!」

チエイイス「……………」

チエイイス side

俺は、シノンに言われた事が響いた。

今の俺の対応は、シノンのスナイパーとしての誇りに傷をつけたのだ。

そんな事をしてしまうなんて……………。

ハヤトから度々言われていたが、俺は女心が分かかっていないらしいな。

チエイイス「……………そうだな。済まない。俺が間違っていた。たかがゲーム、たかが一勝負、でもだからこそ全力を尽かさないとイケない。我ながら情けないな。それが分かっていたはずなのに……………」

シノン「チエイイス……………」

チエイイス「シノン、今から、俺と勝負してくれ。」

シノン「今から、って言っても……………」

俺は、サブアームであるFNファイブセブンから弾丸を1発だけ取り出す。

チエイイス「そつちも、まだ弾は残っているのか?」

シノン「……………ええ、1発だけ。」

チエイイス「なら、決闘方式だ。10メートル離れた所から、シノンはヘカートを、俺

はウイングスナイパーを構える。この弾が地面に落ちたら勝負スタートでいいか？」

その発言に、シノンが驚いた様な表情を浮かべて来る。

シノン「いくら貴方でも、10メートルからなら、ヘカートは必中なのよ。」

チェイス「やってみなければ、分からないだろう。」

シノンは何かを考える様な表情を浮かべ、了承する。

そして、シノンが10メートル先に配置して、俺は、左手を真っ直ぐに伸ばして、ブレイクガンナーにバットバイラルコアを装填する。

『チューン！チェイサーバット！』

ウイングスナイパーを構えて、弾丸を空中に放り投げる。

弾丸が落ちた途端、シノンのヘカートから火が噴き出て、弾丸が飛んでくる。

俺は、それをエネルギーニードルで撃ち抜いて、斬り裂く。

2つの弾丸は、俺の右と左に向かう。

そして、すぐさまフアングスパイデーに切り替えて、シノンに向かう。

シノン side

有り得ない……………！

そんな考えが、私の脳裏を過ぎる。

チェイスは、撃つたのだ。

私の弾丸を、あのエネルギーニードルで。

でも、幾らのチエイイスでも、そんな事が……………!

すぐさまMP7を抜こうとするが、それよりも早く、チエイイスがファングスパイ
デューに切り替えて、肉薄してきた。

斬られる……………!

そう思っていたが、喉元にピタリと捉えていて、そこで止まっていた。

チエイイスが左腕で支えてくれたから、倒れずには済んでいる。

シノン「……………どうして、私の照準が予測出来たのよ?」

チエイイス「スコープのレンズ越しから、お前の視線を見て、弾道を予測したんだ。」

まさか、そんな事が出来るなんて……………!

その途端、戦慄とは似て非なる一つの感覚が、背筋から頭の天辺までを貫いた。

強い。

もう、チエイイスの強さは、VRゲームの枠を超えている。

シノン「チエイイス。」

チエイイス「何だ?」

シノン「どうして、貴方はそんなに強いのか?」

チエイイス「……………こんなのは、技術の範疇に過ぎない。」

シノン「嘘。嘘よ。テクニクだけでヘカートの弾を斬れる筈がない。貴方は知っている筈。どうすればその強さを身につけられるの？ 私は……………私はそれを知る為に……………」

チエイス「なら聞くが、もしその銃の弾丸が、現実世界のプレイヤーをも本当に殺すとしたら……………。そして、殺さなければ自分が、或いは誰か大切な人が殺されるとしたら。その様な状況下でも、お前は引き金を引けるのか？」

シノン「……………！」

私は、呼吸を忘れて、両眼を見開く。

シノン（知っているの……………!? 私のあの過去を……………!）

と思ったが、違う。

そうじゃない。

恐らくは……………チエイスも……………。

チエイス「カルムが身を持って体験し、俺がそれを止めたから、そして、俺が誤った力の使い方をしたから分かる。力とは、それを得る為には、それ相應のリスクを抱え込む。それを忘れるな。」

チエイス……………貴方は一体、何者なの？

そして、戦意喪失して、MP7が落ちる。

チエイズ「納得いかないなら、ハンドガンで勝負を仕切り直してもいいが？」
シノン「……………いいや、この勝負は私の負け。でも、明日の本戦では、絶対に勝つか
ら。だから、私と戦うまでは、絶対に生き残りなさい！リザイン!!」
こうして、私の負けで終わった。

第8話 それぞれの葛藤

冬馬 side

まさか、ラフコフの一員と遭遇するとは。

ラフコフ討伐戦は、本当に地獄と言える戦いだつた。

そこで、2人殺めた。

あの依頼から見始めたあの悪夢は、良い加減に過去と向き合えつていうものか？

それが、俺の贖罪になるのか……？

深澄「どうしたの？」

冬馬「あ、いや、何でもない……。」

そう、現在、俺の部屋に深澄が来ていた。

朝、深澄がこの家を訪れた事に驚いた。

それを母さんに目撃されたものだから、それはもう揶揄われた。

母さんは遠慮なく深澄を上げて、お茶菓子を持ってきた後。

洋子「私は、これから出かけてくるから、その間、イチャイチャしてなさい。」

親が不純異性交遊を勧めるなよ。

そう心の中で毒づいていた。

ちなみに、父さんは出かけている。

深澄「君のお母さんって、随分と大胆な人よね。」

冬馬「あれは大胆じゃない。ただ面白がつてるだけだ。」

そう語る。

母さんって、俺のそういう所を見ると、即座にニヤニヤしてくる。

本当に、頭が上がらないな。

そう思っていると、深澄がコチラをジツと見てくる。

冬馬「どうした？」

? 深澄「……………この後、B o B なんですょ? 何で難しい顔してるのよ?」

? 冬馬「いやあ……………」

? 深澄「何かあるんでしようけど、深くは追求しないわ。…………でも、信じてるわ。カルム達が絶対に帰ってくるって。」?

冬馬「ミト……………」??

そうだ、俺には大切な人が居るんだ。?

負けてられないわな。??

深澄「いつも通りになったわね。」?

冬馬「悪い、心配かけた。」

? 深澄「さて、今回の仕事、バイト代が凄いでしょ?」?

冬馬「ああ……。分かった。何か買うよ。」?

深澄「そう来なくっちゃね!……。それと、21層の攻略には絶対来てよ。」? 冬馬「分かっている。あの家があるしな。」??

そう約束して、俺たちは暫くの間、イチヤイチャした。?

そうして、ミトを最寄りの駅にまで送って行き、そのまま病院へと向かう。

病院に向かっている最中、とある事を思い出した。

それは、俺がラフコフ討伐戦で、人を殺め、ホームに引き籠もっていた時、仲間達が押しかけてきたのだ。

カルム「ミト……。」

? ミト「あなたの気持ちは分かる。でも、それを受け入れて、前に進まない。」

? ハヤト「お前は、自分を追い詰めすぎだ。気にするな。前に進まないといけないんだ。」?

クライン「あのさ、俺達にも頼れよ。」

? エギル「そうだな。俺たちも居る。」

と、仲間達が励ましてくれて、俺は立ち直る事が出来た。

そんな仲間の為にも、決着つけるか。

そんな事を考えていると、キリトからメッセージが届いた事に気づいた。キリト曰く、『悪い、スグにバレた!』と届いた。

それを見て、苦笑しながら病院に到着する。

まあ、ラフコフの事がバレたら吊し上げにされそうだがな。すると、同じタイミングでキリトと会った。

冬馬「よお、キリト。」

和人「カルムか。……………何としても、決着をつけたいよな。」
冬馬「ああ。行こうぜ。」

俺たちは、中に入る。

そして、病室に入ると、安岐さんが既に待機していた。

安岐「おつす。いらつしやい!」

冬馬「今日もよろしくお願ひします、安岐さん。」

和人「よろしくお願ひします。」

安岐「どうやら、大丈夫そうですね。」

「「え?」」

安岐さんの言葉に、俺たちは驚いた。

安岐「いや、昨日戻ってきた時には、桐ヶ谷君は物凄く暗かったし、小野君は何か考え込んでいたしね。良かったよ。」

冬馬「心配かけて、すみません。」

和人「すみません……………」

まさか、氣遣われるとはな。

どうやら、考え込んでいたのを見られたみたいだな。

和人とともに氣遣いにお礼を言ってから、昨日と同じ様に電極を張り、準備した。

和人「多分、10時位には戻ってこれます。」

冬馬「それじゃ、行ってきます！」

安岐「はい。それじゃ、行ってらっしゃい！黒の剣士に紫紺の剣士！」

「!?」

菊岡か。

あの野郎、覚えてろ……………!

そんな事を毒づいて、俺たちはコマンドを発する。

「リンク・スタート！」

その言葉と共に、俺たちの意識は、GGOへと飛翔していく。

英介 side

まさか、SAOでの因縁が、ここに来て現れるとはな。

GGOへは、ただ、ALOとは違う刺激を欲しくなり、ソフトを買いに行った。

その際に、シノン／朝田詩乃、シュピーゲル／新川恭二と出会った。

そして、シノンと共にゲームをする中で、俺は徐々にシノンが気になるようになった。

俺がシノンとの対決で言ったあの言葉に、シノンはとても反応していた。

シノンは昔、何かあったのか？

そんな事を考えつつ、スーパーでお惣菜を買い、帰ってる最中に、後ろから声をかけられた。

侑斗「よお、チエイス。」

振り返ると、そこには侑斗が居た。

英介「侑斗か。どうした？」

侑斗「いや、珍しいって思ってた。いつもは自炊してるチエイスが、スーパーのお惣菜で済ませるなんて。」

英介「まあな。この後、大会がある。そこまで時間をかけられないしな。」

侑斗「そっか。……そういうや、あの女の子は一体誰なんだ？」

英介「あの女の子？」

そう首を傾げると、侑斗が聞いてくる。

侑斗「いやさ、お前が助けてたあの女の子だよ。チェイスにも、女の子の知り合いが居るんだなって。」

英介「GGOでの知り合いだ。」

侑斗「なるほどねえ。まあ、俺たちは、ALOで応援してるからな。頑張れよ。」

英介「ああ。」

そう言つて、侑斗は帰つて行つた。

ていうか、見てたのか。

シノンが強敵と戦いたがるのは、何か、理由があるのだろうか？

英介「まあ、いづれ聞くか。」

そう呟いて、俺は自宅に帰つて、食事を取る。

そして、自室へと向かう。

恐らく、死銃もとい、ラフコフの誰かは、確実に本戦にまで来てる。

それは確かだろうな。

だとしたら、決着をつける。

アミクスフィアを被り、コマンドを言う。

英介「リンク・スタート。」

俺は、GGOへと向かう。

詩乃 side

私は、英介の事が好きだ。

そう思うようになったのは、彼と一緒にゲームをして、彼の一面を知るようになってからだ。

でも、私の過去を知って、離れてしまうのが怖い。

だから、この想いは胸の中に閉まっていたのだけど、あの決勝戦でチエイスに言われた言葉が未だに頭の中に残り続けている。

チエイス『なら聞くが、もしその銃の弾丸が、現実世界のプレイヤーをも本当に殺すとしたら……。そして、殺さなければ自分が、或いは誰か大切な人が殺されるとしたら。その様な状況下でも、お前は引き金を引けるのか？』

あの言葉は、私の過去と通じる何かがある。

チエイスも、過去に何かあったのだろうか？

詩乃「……………まさか、私がそんな事を考えるなんてね……………」

自室に来る前に、新川君に言われたのだが、本来なら、私は他人に興味がなかったはず。

でも、チエイスのあの言葉は、何か引っかかるのだ。

チエイスなら……………。

「そんな淡い期待を少し思っ、即座に仕舞う。

詩乃「……………とにかく、彼の強さを知りたい。」

そう呟いて、私はアミュスフィアを被り、GGOへとログインする。

第9話 本戦の幕開け

シノンside

私がGGOにログインして、真っ先に目に入ったのは、色んなプレイヤーに賭けをしている人達だ。

その中には、無論、私の名前も入っていた。

そして、チェイスにカルム、あのキリトもかなりの高倍率だ。

シノン「……………物好きね。」

チェイスは、実力からだろう。

しかし、カルムとキリトに関しては、その容姿からだろう。

特にキリトに顕著だが。

カルムに関しては、容姿だけでなく、凄まじい戦闘っぷりからもだろう。

私も少しだけ見たけど、カルムの戦闘は、ゼットソードとゼットシユーターを、ハンマーにランス、ライフルに変えているのだ。

それは凄いと思う。

そんな風に考えていると。

シュピーゲル「シノン！」

後ろから声をかけられた。

こんな風に声をかけるのは、シュピーゲルぐらいだ。

シュピーゲル「どうしたの？」

シノン「いや、さっきまでリアルで会っていた人と、すぐに顔を合わせるのが何だか
妙なだけよ。」

シュピーゲル「……………そりゃあねえ。」

チエイス「シノン。」

すると、後ろからまた声がかけられる。

その声の主は、チエイスだ。

シノン「チエイス。」

チエイス「昨日はすまなかつたな。」

シノン「良いのよ。」

シュピーゲル「や、やあ、チエイス……………」

チエイス「シュピーゲルか。」

シュピーゲル「あ、あのさ……………2人とも、頑張つてね……………」

シュピーゲルはそう言い残して、去った。

チエイス「……………話している所、すまなかつたな。」

シノン「いや、大丈夫……………」

昨日の一件もあつて、チエイスの顔を上手く見れない。すると、また声がかけられる。

カルム「よ、2人とも。」

キリト「どうも。」

そこには、キリトとカルムの2人がいた。

シノン「こんにちは、カルム。……………アンタも居るのね。」

キリト「あの、シノンさん？どうして俺とカルムで対応が違うんですか？」

シノン「それぐらい分かりなさいよ。」

キリトが落ち込み、カルムが律儀にも慰めていた。

カルムつて、結構苦勞してそうな性格してゐるわよね。

そして、更に現れた。

アラン「やあ、シノン。」

クレハ「こんにちは。」

アフアシス「こんにちはなのです！」

アランにクレハにアフアシスもやって来た。

すると、クレハがキリトを見た途端、ゴミを見るかのような表情を浮かべる。

クレハ「アナタも居るんですか？キリトさん。あと、こんにちは、カルム。」

キリト「クレハもかよ……………」

カルム「自業自得だろ。」

カルムが慰めるのを放棄した。

その後、カルムが本戦の事を知りたいと言つてきて、解説をする為に、酒場エリアへ。

カルム side

何とか、知り合いとは合流出来て、酒場エリアへと向かう。

酒場ゾーンには多くのプレイヤーたちがいて、お祭り状態となっている。？

有名なプレイヤーはインタビューを受け、あるプレイヤーはギルドメンバーと談笑し

ているのが見られる。？

中には、誰が優勝するのかとか、コイツは何位に入るのかと賭け事の話をしているプ

レイヤーも見られる。

？　すると、俺たちも注目されていた。？

まあ、俺とチエイスは、特殊な戦法で戦ったからな。

アランとクレハも結構注目されていた。？

でも、シノンとキリトは凄かった。??

プレイヤー「おい、あれキリトちゃんだろ？」？

プレイヤー「フォトンソードで敵をメッタ斬りだつてな。」？

プレイヤー「クールビューティなバーサーカーかあ。いいねえ。」？

プレイヤー「いやいや、やつぱシノンちゃんでしょ。」？

プレイヤー「オレもシノつちに撃たれたい派。」？

プレイヤー「オレ、斬られたい派。」？

プレイヤー「そんなもんALOにでも行けよ。」??

まあ、GGOでは数少ない女性プレイヤーだしな。

？ でも、内1人は男です。？

それを知ったら、アイツらはどうなるのか??

すると、話していた2人の男性プレイヤーにキリトがぶつかつた。??

キリト「あ、ごめん」

？ 「ひつ！す、すいません！キリトさん！」??

まあ、女の子の見た目で、光剣にぶつた斬られるのはなあ。？

キリトは無言のまま進み、足を止める。??

キリト「君達………。応援してね♪」

？ 「「うおおおおっ！」」？

プレイヤー「キ、キリトちゃん！頑張れよ！」？

プレイヤー「俺、ベスト5入賞に、全財産賭けますんで!!」

あれは、ネカマだ。

俺たちは呆れて、キリトを置いて行く。

キリト「おい！置いてかないでくれ！」

キリトがそんな声を上げながらこっちに来る。

そして、解説タイムだ。

テーブルに座り、各自でドリンクを頼む。？

チエイズ曰く、本大会はバトルロイヤル制で、参加者40人による同一マップでの遭

遇戦。

フィールドマップとなるのは、ISLラグナロクという孤島で直径10キロの円形の広さを持つ。？

フィールドマップは直径10キロの円形で、山あり森あり砂漠ありなどの複合ステージで、装備やステータスタイプでの一方的な有利不利はなしとなっている。

？その中に参加者40人は、最低1キロは離れたところに配置されるため、《サテライト・スキャン端末》と言うものが参加者に自動配布される。

？それには、15分に1回、上空を監視衛星が通過し、マップ内の全プレイヤーの存

在位置が送信される設定がある。

しかも、マップに表示されている輝点に触れれば名前までも確認できる。

？ これを使えば、死銃の名前を見つければ、奴を見つけれられるが、それは同時に、こちらにもバレる可能性がある。？

死銃という名前の奴は居ない。？

まあ、アレは二つ名的な奴だろう。

キリト「チエイイス、お前が知らない奴は、居るのか？」

チエイイス「B o Bも3回目で、殆どのプレイヤーとは知り合いだ。知らないのは、お前らを除くと3人。《銃士X》と《ペイルライダー》、そして、これは《ステイブーン》か？」

その3人の中の誰かが、ラフコフという事になるな。

すると、シノン、アラン、クレハ、アフアシスが声をかけて来た。

シノン「ねえチエイイス。あなた達はさつきから何の話をしているのよ？私だけ話に付いていけないんだけど……。」？チエイイス「すまない。これは俺たち3人の問題なんだ。」？アラン「もしかして、昨日の予選の途中から急にお前達の様子がおかしくなったのと関係があるのか？」

クレハ「そうなの？」

鋭いな。

すると、キリトが会話に入る。

キリト「昨日、俺は地下の待機ドームで昔同じVRMMOをやった男に声をかけられたんだ。」?

カルム「ソイツと俺たちはちよつとした因縁がある。さつき話に出てきた3人の中に、奴がいるはずなんだ。」

?クレハ「もしかして、友達だったの?」?

キリト「友達じゃない。……敵だ。俺たちは奴らと本気で殺し合った。」?

シノン「殺し合った?それって、そのゲームでトラブったの?」?

カルム「そんなんじゃない。本気の、命を掛けた殺し合いだ。奴は……奴がいた集団は絶対に許されない事をした。和解することはできなくて、剣で決着をつけるしかなかった。」??

そう、ラフィン・コフィンとは、そんな奴らの集まりだ。??

キリト「でも、アイツはこのGGOで再び許されない事をしようとしている。今思えば、俺とカルムがこの世界に來たのもそれを阻止するためだったんだと思う。」

チェイス「そしてそれは俺にも関係することだから、俺も2人に協力することにしたんだ。」

アファシス「そうなのですか……………」

すると、シノン、アラン、クレハの3人は、何かを察したような表情を浮かべる。

シノン「ねえ、もしかして……………」

アラン「お前らって……………」

クレハ「あのゲームの中にいたの……………?」

「……………」

シノン「ごめん。」

アラン「すまん。これは聞くべきではなかったよな。」

クレハ「ごめんなさい。」

気まづくなってしまう、俺たちは待機ドームへと移動して、装備を点検する。

シノン「貴方達には貴方達なりの事情があるのは分かったわ。でも、チェイス。私と

の約束はまた別よ。昨日の借りは必ず返すわ。だから、誰にも撃たれないで。」?

チェイス「ああ。」

そうして、俺たちは試合フィールドへと転送されて行く。?

第10話 動き出す悪意

チエイズ side

試合フィールドに転送された。

俺たちは、その候補者の元へと向かう。

まずは、ペイルライダーだ。

すると、何かの攻撃がこちらに向かう。

チエイズ「何だ!？」

???「フハハハハ!!」

そこに居たのは、R L-3ステインガーというランチャーを持ったプレイヤーだ。

あれは、グレイビーストという異名を持つ、グレゴリーというプレイヤーだ。

グレゴリー「チエイズと言ったな! このグレイビーストと勝負してもらおうか!!」

チエイズ「クツ!」

ここで足止めを食らうわけには行かない!

俺はブレイクガンナーを構えて、グレゴリーに向かって走っていく。

30分後、何とか倒せた。

それにしても、強かった。

サテライト・スキヤンの結果、近くにペイルライダーを確認した。それと同時に、シノンとその近くにカルムも居ることを確認した。チエイズ「2人と合流するか。」

俺は、シノンに狙撃される事を覚悟の上で、接近する。

ジグザグに走りながら、接近する。？

接近する間、シノンからは銃撃されず。？

シノンの数メートル後ろの岩陰に隠れながら様子を見ていると。

シノン「チエイズ、出てきたらどうなの？後、カルムも。」

チエイズ「流石だな。」

カルム「気づかれてたか。」

俺たちは降参して、シノンに近づく。

シノン「チエイズはしらないと思うけど、カルムには言っておくわ。不意打ちしよう物なら……！」

カルム「しないうて。」

チエイズ「俺が保証する。カルムはそういう奴じゃない。」

シノン「分かったわ。」

俺たちは、何にも話さずにいる。

すると、戦闘が始まった。

ダインは川にかかる錆びついた鉄橋を渡り終えたところで、地面に身を投げ出して射撃体勢に入る。？

そして森に通じる道の奥から一人のプレイヤーが姿を現す。

青白い迷彩柄のスーツに身を包み、白いフルフェイス型のヘルメットで顔を隠した瘦せた長身のプレイヤーだ。？

右手にはショットガンらしいものを持っている。？

アイツがペイルライダーだろう。？

ダインはアサルトライフルを構え、ペイルライダーを迎え撃とうとする。？

それに対し、ペイルライダーは右手にショットガンを持ち、鉄橋の真ん中をゆっくり歩いてダインに近づく。？

ダインのアサルトライフルが火を噴いた途端、ペイルライダーは軽々とそれをかわす。？

そして、鉄橋の柱につかまり、向かい側にある鉄橋を支えるワイヤーロープへと飛び移った。？

ダインは再び、狙おうとするが当たらない。

カルム「すげえな。アレ、AGI重視か？」

シノン「違うわ。アイツはSTR型で、装備重量を落として、3次元機動力を高めて
いるの。」

カルムがそう感心して、シノンが解説をする。?

ダインは膝立ちになってペイルライダーを狙うが、それすらもかわされる。?

そして、弾倉を交換しようとしたところ、ペイルライダーが右手に持っていたシヨツトガンが火を噴いた。?

その後、更に数発攻撃を受けてダインは倒された。?

ダインのアバターは倒れて、その上に「Dead」の文字が浮かび上がった。?

見たところ、ペイルライダーは、死銃とは無関係だな。?

すると、ペイルライダーが突然倒れ込む。

カルム「え?今ペイルライダーに銃弾が当たったのに、どうして銃声が聞こえなかつたんだ...?」

チエイス「考えられるのは、作動音が小さなレーザーライフルかサイレンサー付きの実弾銃だろう。」

シノン「でも、何か様子がおかしいわ……っ!?あれは電磁スタン弾っ!」?

カルム「それって何なんだ?」?

シノン「命中したあと暫く高電圧を生み出して、対象を麻痺させる効果がある特殊弾よ。」

チエイス「だが、あれは大口径のライフルでないと装填は不可能で、1発の値段がとんでもなく高くて対人戦で使うプレイヤーなんかいない。パーティでもMob狩り専用の弾だ。」

妙だな。

対人戦がメインのBobでそんな物を使用しても何の意味がないのに。

すると、鉄柱の陰から、ポロポロのフード付きマントを被ったプレイヤーが現れる。

??

カルム「アイツどこから!?!」?

シノン「あれは《サイレント・アサシン》っ!?!」

チエイス「サイレント・アサシんだと!?!」?

カルム「さ……サイレント・アサシン?あのライフルの名前か?」?

シノン「ええ。サイレンサー標準装備の高性能狙撃銃。最大射程距離2000メートル以上で、撃たれた奴は狙撃手の姿を見ることが無く、死ぬ際に音も聞くことなく殺される。それから与えられた名前が《サイレント・アサシン》……《沈黙の暗殺者》。」

チエイス「GGOに存在するとは噂では聞いていたが、俺も初めて見た。あんな銃を

扱うなんてアイツ何者なんだ？」

ボロマントのプレイヤーはペイルライダーに近づくと、何故かハンドガンのようなものを取り出した。？

銃口をペイルライダーに向けると、左手を額にあて、胸に動かし、左肩、右肩へ持つていく。？

これは十字を切ることを示している。？

胸騒ぎがした。

すると、カルムが声を出す。

カルム「シノン、撃つてくれ。」

？シノン「ど……どつちに？」？

カルム「あのボロマントの方だ！急いでくれ!!」??

シノンがすぐさま銃撃したが、奴は体を大きく後ろに傾けて、躲した。

??カルム「かわしたっ!」？

シノン「アイツ……！私が隠れていることに最初から気が付いていたんだわ……。」？

カルム「ま、まさか……。でも、アイツは一度もこつちの方を見てないぞ!」？

チエイス「あの避け方は弾道予測線が見えてなくちゃ絶対不可能だ。何処かでシノンを目視してシステムに認識されてたんだろう。」??

俺が驚いていると、その間にも、ペイルライダーはハンドガンで撃たれた。？

まだHPが残っていたため、スタンから回復すると起き上がって奴らにショットガンを向ける。？

だが、ショットガンを落とし、胸を掴んで苦しみ倒れた。？

そして、ペイルライダーは光に包まれて消滅した。？

そこに「DISCONNECTION」と書かれた文字が出てすぐに消えた。？

つまり、回線切断。

俺とカルムは呆然と見ていた。

すると、カルムが声を上げる。

カルム「アイツだ。」

チエイス「何?」

カルム「アイツ、俺やキリトに接触した奴だ。」

つまり、ラフコフ……!?

第11話 妖精達の観戦

ミトside??

私たちは、イクドラル・シテイの、キリトとアスナが借りている部屋で、BOBの観戦をしていた。??

リーファ「お兄ちゃん、映んないなあ。」

?ミト「それを言うなら、カルム達も映ってないわよ。」

?ハヤト「まあ、いずれ映るだろ。」?

シリカ「そうですね。」??

私たちがそう話していると、クラインも加わってきた。??

クライン「アイツら……て言うよりはキリトは意外と計算高いから、参加者が適当に

減るまで、どっかに隠れてるかもよ。」??

それを聞いたアスナが苦笑する。??

アスナ「いくらキリト君でもそこまではしないわよ。ねえ?ユイちゃん。」?

ユイ「そうですよ。パパならきつとカメラに映る暇もないほど一瞬で敵の後ろからフ

イウチしまくりです!」??

ユイちゃんはそう言いながら、シャドーボクシングをしていた。

??リズベット「あつはは、それはありそうだね。しかも、銃ゲーなのに銃じゃなくて剣でね。」

?ヒロミ「キリトさんなら、あり得ますね。」?

ノーチラス「まあ、カルムもどこかにいるんじゃないのか?」

?ユナ「そうだよね!」

?ファイリア「カルム、どこ行つたの?」?

レイン「確かにね。」??

今、この部屋に居るのは、私、カナ、アスナ、ユイちゃん、リズ、ラット、シリカ、ヒロミ、クライン、ハヤト、リーファ、ノーチラス、ユナ、ファイリア、レイン、レイモンド、フィリップ、パラドだ。?

ちなみに、私とアスナは、エギルのダイシーカフェからログインしている。?

大会が終わつたら、速攻で捕まえるためだ。??

リズベット「そういえばハヤト。チェイスが何の武器を使つてるのか知つてる?」?

ハヤト「以前は、サブマシンガンを使つてたけど、今はブレイクガンナーという武器を使つてるな。確か、弓や鞭、剣にもなる仕様のやつだな。」?

リズベット「弓つて、チェイスもALLOと大して変わんないじゃない。」

? レイモンド「そういやよ、カルムは一体何を使ってるんだろな?」

? ミト「私が聞いた限りでは、剣と銃を組み合わせて、複数の武器になるやつを使ってるらしいわ。」

? ラット「アイツも大して変わんないな。」?

ファイリップ「まあ、それが彼だ。」??

そんな話を話している。?

キリト、カルム、チエイスの3人の名前はまだALIVEとなってる為、脱落はしていない。??

リズベット「しっかし、何でキリトだけじゃなくてカルムもコンバートしてまでGGの大会に出たのかしら?」?

シリカ「確かにキリトさんはともかく、カルムさんがALOからコンバートするなんておかしいですよね。」??

それを知っているのは、私、カナ、パラド、アスナ、ユイちゃんだけだ。?

私が話そうとすると、アスナが話す。??

アスナ「それがね……、何だかおかしなバイトを引き受けたらしいの。VRMMOの、つていうより《ザ・シード連結体》の現状をリサーチする、みたいな。GGOにはゲームで稼いだお金を現実に還元できるっていう唯一の《通貨還元システム》があるら

しくて……。」？

ハヤト「《通過還元システム》かあ。チエイスもあれはグレーだって言ってたしな。何か問題が無いか調べに行ったのか。」??

確かに、カルムもその様に話していたけど、何か別な理由がありそうな気がする。？

ただ、胸騒ぎがする。??

シリカ「だけど、リサーチだったらコンバートして大会に出る必要もないと思いますよ。それなら新しいアカウントを作って他のプレイヤーに聞くこともできますし。」

？ヒロミ「もしかすると大会で優勝して早く大金を稼いで、実際に通貨還元してみるとかじゃないかな？前にネットでチラツと見たことあったけど、還元できる最低金額がかなり高いみたいだからね。」??

ヒロミがそう言うのと、ユイちゃんとカナが補足説明を始める。??

ユイ「ネット上の記事によると還元最低額は、GGO内の通貨で10万クレジット、対JPYのレートは100分の1なので、1000円からになります。」？カナ「この大会の優勝賞金は、300万クレジットだから、還元すると、3万円です。」

？アスナ「ありがと、ユイちゃん、カナちゃん。」？

ミト「2人もありがとう。」??

そう話している内に、色んな戦闘シーンが映し出されて、リズとパラドが注目している。

??リズベット「あの人、強いわね。」

?パラド「確かにな。」

?アスナ「あの青い服の人?」??

アスナが拡大すると、そこに映ったのは、アサルトライフルを連射している人と、青い服を着た人が機動性を活かした戦闘スタイル人による戦闘シーン。?

青い服を着た人がショットガンを使って、アサルトライフルの人を倒したところで決着が着いた。

??リズベット「あの人強いわね。なんか、こうしてみるとGGOも面白そうだなあ。銃って剣や槍とかと同様に自分で作れるのかな?」

?ラット「おい、リズまでGGOにコンバートするとか言うなよ。」

?アスナ「そうだよ!新生インクラッドの攻略がまだまだこれからなんだよ!」?
ミト「もうすぐ20層台解放のアップデートが来るのよ。」?

リズベット「ごめんって。」?

パラド「俺もGGOやりてえな!カルムに頼み込むか!」

?ノーチラス「でも、接続料が高いんじゃないのか?」?

パラド「ウツ……！」??

ノーチラスに釘を刺されて、固まるパラド。?

まあ、カルムなら許してくれそうだし。?

すると、青い人が倒れ込む。??

クライン「おいおい、ダメじゃ無いか。」?

リズベット「まだやられてないわよ！」??

クラインさんの言ったことにリズは反論すると、青い服を着た人が映っている映像を拡大する。?

青い服を着た人は《ペイルライダー》というキャラネームらしく、倒れはしたがまだ死んではない。?

攻撃を受けたと思われる右肩のところを中心に細かいスパークが這い回っている。

??リーファ「あれって、風魔法の《サンダーウェブ》みたい。」?

ハヤト「確かに……。」?

ヒロミ「見たところ、一定時間対象を麻痺させている様に見えますが……。」?

フィリップ「PVPの大会で、どうかと思うんだがね。」??

それを見て、シルフ勢がコメントする。?

ペイルライダーというプレイヤーが倒れてから、映像には10秒ほど特に変化はな

い。？

突然、画面の左端に黒いボロボロの布きれみたいなものが一瞬映り、映像はその姿を完全に映し出す。？

映っていたのは、全身を隠すくらい丈の長いボロボロのフード付きマントを身に纏い、マスクを被ったプレイヤーだった。？

ボロマントのプレイヤーは大きな黒いライフル銃を右肩にかけているが、何故か一丁の黒いハンドガンを取り出した。？

銃口をペイルライダーに向けると、左手を額にあて、胸に動かし、左肩、右肩へ持つていく。？

まるで、十字を切ることを示しているかのようだ。？

突然、ボロマントがいきなり体を大きく後ろに仰け反らせ、そこにフレーム外から巨大なオレンジの光弾が飛んでくる。

？ 多分誰かがボロマントを狙い撃ったのだろう。

？ でも、いきなり飛んできた銃弾を避けるなんて相当な技術がないとできないものだ。？

銃弾をかわしたボロマントは、今度こそ本当に倒れているペイルライダーに銃口を向けてトリガーを引いた。

? しかし、HPを完全に奪うことはできなかった。?

スタンから回復したペイルライダーは、起き上がってボロマントにショットガンを向ける。?

だけど、ショットガンを落とし、胸を掴んで苦しみ倒れた。

数秒ほどするとペイルライダーは光に包まれて消滅した。?

そこには回線切断を意味する「DISCONNECTION」と書かれた文字が現れた。?

何かと私たちは見ていると、画面にボロマントの顔が映る。?

ボロマントがライブ中継カメラに向かって、銃口を向ける。

『俺と、この銃の、真の名は、《死銃》……《デス・ガン》。俺は、いつか、貴様らの前にも、現れる。そして、この銃で、本物の死をもたらす。俺には、その、力がある。忘れるな。まだ、終わっていない。何も、終わって、いない。イツツ・シヨウ・タイム。』

その男がそう言うのと、私のとある記憶が刺激される。?

何かと思いき出そうとすると、後ろから何か割れる音がした。?

振り向くと、クラインとハヤトがグラスを手から落としていた。

?? リズベット「ちよっと、アンタ達何やってんのよ……。」

? クライン 「嘘だろ……アイツ……まさか……!」

? ハヤト 「間違いない……!」

? アスナ 「クラインさん、ハヤト君、知ってるの!」?

ミト 「アイツらが誰なのか!」??

すると、ハヤトが恐怖に彩られた目でこちらを見てくる。

?? ハヤト 「ああ……。間違いない……。アイツは《ラフコフ》のメンバーだ。」??

この瞬間、S A O 生還者全員の顔に驚愕の表情が現れ、息を呑む。

? 中層プレイヤーにまで浸透してたから、当然といえば当然か。??

ミト 「2人とも! 誰か分かる!」?

ハヤト 「誰かは分からないけど、あの口癖は、リーダーのP O Hの台詞だ。つまり、かなりの幹部クラスだろうな……!」??

そのハヤトのセリフに、リーファを除いた全員が驚く。

?? リーファ 「あの、ラフコフって何ですか?」

? クライン 「そっか。リーファちゃん知らないのも無理はねえか。ラフコフはS A Oで凶悪な殺人ギルドとして恐れられた集団なんだ。S A OではどんなことがあってもH P全損だけはさせないっていう不文律があったんだ。なんせ0になったら本当に死じまうからよ。だがな、ラフコフの連中は大勢のプレイヤーを殺してきたんだよ……。」

? ハヤト「その討伐戦に、キリト、カルム、そしてチェイスも参加してたんだよ……。」
?

ノーチラス「まさか! 決着をつける為に!」

? フィリッポ「あり得るね。」?

レイモンド「つたく!」?

アスナ「私、一度その依頼者に連絡してみる! ユイちゃんはGGO関連の情報のリサーチお願い!」?

ミト「カナもお願い!」??

そうして、アスナは一旦ログアウトして、私たちは待つ事に。?

それにしても、カルム……。?

まさか、決着をつける為に……。

第12話 動き出す4人の戦士

チエイズ side

まさか、目の前でやられるとは。

カルムも、顔面を青くしていた。

一方のシノンも、呆然としていて、掠れた声を出す。

シノン「あいつ……他のプレイヤーをサーバーから落とせるの……?」

カルム「いや、そんな生温い事じゃない。あのボロマンは、殺したんだ。あのペイ

ルライダーの中身を……!」

チエイズ「……認めたくはないが……。」

シノン「何言ってるのよ……。そんな事、出来るわけ……!」

カルム「間違いない。アイツが……死銃だ。」

死銃。

ソイツに撃たれたゼクシードと薄塩たらこがログインしてないという噂があったが、
どうやら、本当らしいな。

シノン「死銃……。それって、あの、変な噂の……?」

カルム「そうだ。アイツに撃たれたゼクシードと薄塩たらこは、遺体で発見されてい
る……!」

シノン「……………!?!」

チェイス「……………。」

俺は、親父からそんな変な事件を聞いていたのもあって、驚かない。

だが、そんな事があるのか?

それは、本当にSAO事件の再現になってしまう。

そんな事を考えていると、ポロマンとは、ダインを無視して、鉄橋の影へと隠れる。
不審に思ってる中、キリトとも合流して、3回目のサテライト・スキャンが行われる。

シノン「こっちは確認しておくから、皆は、鉄橋の方をお願い。」

チェイス「ああ……………」

俺達が監視している中、シノンが大きな声を出す。

シノン「どういう事……………!?!」

チェイス「どうした?」

シノン「光点が足りない……………どういう事かしら……………?」

キリト「もしかしたら、川に潜ってるかもしれない。」

カルム「何でそう言い切れるんだ?」

キリト「俺がそうしたからだ。」

「「……………え？」」

キリトからどういう事か聞くと、キリトはペイルライダーに接近する為に、一旦装備をストレージに仕舞い、川を泳いだからだそうだ。

川に沈んでいれば、サテライト・スキャンにも引つかからないとはな。

カルム「……………そのアバターのアンダーウェア姿を披露したら、ギャラリーは大歓喜なんじゃないのか？」

キリト「でも、外部中継は戦闘シーン以外は映さないから大丈夫だって。」

カルム「チツ！」

キリト「舌打ち!？」

カルムの皮肉たつぷりの台詞をキリトが受け流し、俺とシノンは呆れ気味にキリトを見ていたが、シノンが何かに気付いたような表情を浮かべる。

シノン「……………チャンスだわ。」

チエイス「何？」

シノン「つまり、アイツは今、装備を全解除してるはず。そこを攻撃すれば……………！」
チエイス「拳銃一丁なら、そこそこのステータスがあれば持ち運べる筈だ。」

シノン「そうだけど……………。たかがハンドガン1つなら、楽々押し切れ……………」

チエイス「ダメだ！」

俺は押し殺した声で叫び、シノンの左腕を強く握る。

チエイス「シノンも見ただろ！アイツの銃で、ペイルライダーを消したのを！1発でも撃たれたら、死ぬかもしれないんだぞ！」

シノン「……………私は、信じたくない。ゲームの中で撃たただけで、本当に死ぬなんて……………いや、それ以前に、もしその話が本当なら、アイツは自分の意思で人を殺しているって事でしょう？有り得ない……………」

シノンは混乱してるな。
無理もない。

SAOで、POHを中心とする悪意が蔓延っていた事を、知らないからな。

すると、シノンが呟く。

シノン「私は……………認めたくない。PKじゃなくて、本物の人殺しをするプレイヤーが居るなんて……………」

カルム「残念だが、あのボロマント……………死銃は、昔、俺達がいたVRMMOの中で、多くの人を殺してきた。」

キリト「相手が本当に死ぬと分かっているって剣を振り下ろした。さつき、ペイルライダーを撃った時と同じようにな。」

チエイス「そして……………俺達も……………」

かつての罪が蘇り、俺たちは目を伏せる。

シノン side

彼らのこれまでの会話から、チエイス達は何者なのか、検討がついた。

多分、3年前に発生した、あの事件の生還者なのだ。

これはもう疑いようがない。

そして、とある事実も。

つまり、死銃も生還者なのだ。

それも、自らの意思で人を殺していた。

それは、私が先程言った、人殺しをするVRMMOプレイヤーそのものだ。

そこまで理解した途端、全身がすうっと冷たくなるのを意識した。

これは、発作の前兆だ。

チエイス「……………シノン！」

不意にチエイスから名前を呼ばれて、はっと両眼を見開くと、私を氣遣うような表情のチエイスが見えた。

小さく息を吐いて、答える。

シノン「……………大丈夫。ちよつと驚いただけ。正直……………チエイス達の話をするには

信じられないけど……………嘘じゃないのは分かる。」

チエイス「それだけで十分だ。」

「……………」

その後、確認したが、人数が足りない。

回線切断で消えたペイルライダーに、現在、川で泳いでいる死銃だろう。

そして、光点が消えた。

シノン「……………とにかく、私たちも移動した方が良いわね。チエイスと私とキリトとカルムが戦闘中だと思ったプレイヤー達が襲撃してくるかも。」

カルム「そうだな……………」

チエイス「シノン。大会が終わるまで安全な所で隠れて……………と言っても無駄か。」

シノン「当たり前でしょ！そんな卑怯な真似はしたくない。それに、安全な所は無いのは、チエイスも分かってるでしょ。」

チエイス「……………そうだな。」

キリト「なら、ここでお別れだな。」

シノン「え……………」

カルム「俺たちは、アイツを追う。」

そう言って、3人が飛び出していく。

チエイスが遠ざかるのを見て、このままチエイスが離れるのを見てられない。私は、チエイスの強さを知りたいんだ。

シノン「待ちなさいよ！」

チエイス「……………？」

シノン「私も行く。」

カルム「……………え!？」

3人が驚いたような表情を浮かべると、突然目配せをして、それぞれの武器を取り出す。

ここでやられるのかと思ったら、3人は、視線を逸らして、それぞれに伸びるバレットラインに向かって、斬っていく。

そこに居たのは、夏侯惇とエリックとジークというプレイヤーだった。

古参プレイヤーではあるが、3人の戦闘スタイルを見て、啞然としていた。

夏侯惇「うっそお！」

エリック「何だアイツら!？」

ジーク「化け物かよ!？」

キリト「まずはアイツからだな。」

カルム「そうだな！」

チェイス「シノン。俺たちが突っ込むから、バックアップ頼む。」
シノン「……………了解。」

心の中で、チェイスとの共闘を嬉しく感じたと同時に、カルムとキリトが邪魔だなと少し思った。

そして、チェイス達は、3人の命中弾だけを斬って、私が狙撃する。

あつという間に全滅した。

3人の強さは、VRゲームの技術として片付けられない。

仮想世界と現実世界の壁を越えた強さ。

それは、私が求めた境地だ。

全身全霊を振り絞って、チェイス達を倒せば、私は強くなれる。

だけど、チェイスに対して、もう一つ、感情が浮かぶ。

それは、以前から抱いていたチェイスへの想いと同じくらいだ。

チェイスがどのように生き抜いたのかを知りたい。

そんな風に思ったのは、彼だけだろう。

どうしても知りたい。

チェイスの強さを。

第13話 闇との遭遇

カルム side

どうやら、夏侯惇、エリック、ジークの3人は倒せたようだな。

シノンが語った。

シノン「今の戦闘音で、もっと集まってくる。どこかに移動しないと。」

チエイス「ああ。」

キリト「死銃は、川沿いに北に向かった筈だ。一旦何処かに身を潜めて、九時のサテライト・スキャンで次のターゲットを決める気だろうな。」

カルム「これ以上、犠牲者を出す訳には行かないな。アイデアを募集する。」

俺がそう言うと、シノンが呟く。

シノン「……いくら妙な力があるといつても、《死銃》は基本的にはスナイパーだわ。遮蔽物の少ないオープン・スペースは苦手の筈。」

チエイス「なら、都市廃墟で待ち構えている可能性が高いな。」

という、GGGを俺達よりやり込んでいる2人が語る。

それに従って、川に沿って、都市廃墟エリアへと向かう。

暫くすると、都市廃墟エリアが見えたが、死銃は見当たらない。

シノン「追いつかなかったね。」

カルム「……………まさか、どこかで追い抜いちやったのか？」

キリト「いや、川をずっとチェックしてたけど、それは無いな。」

チェイス「そうか。」

という事で、俺たちは死銃を奇襲する手筈になったが、一つ問題が発生する。

カルム「問題は、死銃の本当の名前が何なのかだよなあ。」

チェイス「ペイルライダーは違うと分かった。後は、《銃士X》か《ステイブンのどちらかだろうな。」

キリト「片方だけならありがたいんだけどな。」

シノン「もし両方いたら、迷ってる余裕は無いわよ。どっちかを攻撃しないと……………」

あのさ、今ふと思ったんだけど、《シユウシ》をひっくり返して《シジュウ》。《X》は《クロス》、アイツがやってた十字の事……………ってのは、流星に安易すぎ……………よね。」

チェイス「どうだろうな？」

キリト「まあ、VRMMOのキャラネームなんて基本皆安易だと思っただけだな。」

カルム「流星、本名を振ってる奴が言うのと、説得力が違うわ。」

キリト「何だと？」

俺とキリトが少し睨み合いになったが、チェイスとシノンに抑えられて、話を戻す。キリト「いつその事、ステイブンが名前の通りに外人なら話は早いんだけどなあ。」チェイス「だが、今は日本国内からしかアクセス出来ない。サトライザーは凄かったな。」

カルム「サトライザー？」

シノン「第1回のB o Bで優勝した人よ。」

なるほど。

一回、戦ってみたものだがな。

その後の話し合いにより、銃士Xの元へ行く事に決定する。

そして、サトライト・スキャンで銃士Xが居たので、俺、キリト、チェイスの3人で行く事にする。

シノン side

まさかの1人になった。

チェイスからも、援護を頼られている以上、答えなくては。

でも、本当にこれであってるの？

私の目的は、B o Bで優勝して、G G O最強のプレイヤーになる事だ。

その為には、チェイスにカルム、キリト。

あの3人を倒さなければならぬ。

そんな事を考えていたからなのか、ビル壁面の崩壊部を潜る寸前に、背筋に強烈な悪寒を感じて、振り向こうとしたが、倒れる。

シノン「……………な……………!?」

左腕を見ると、弾というよりは、銀色の針みたいな物が刺さっていた。

これは……………!!

シノン「電磁スタン弾……………!!」

だが、死銃は、チェイス達が向かった方向に居たはずだ。

すると、南に2メートル離れた所から、いきなり人が現れた。

メタマテリアル光歪曲迷彩……………!!

だけど、アレは一部の超高レベルネームドエネミーのみが持つてる筈だ。

そこに居たのは、ボロマント。

つまり、死銃だ。

シノン「チェイス……………!!」

チェイスに助けを求めたけど、聞こえてこない。

まだ、銃士Xの方に居るのか。

すると、死銃が喋る。

死銃「……………チエイズ、キリト、カルム。あの時の、猛り狂った姿を、覚えている。この女を、殺す。さあ、お前達の怒りを、殺意を、狂気の剣を、もう一度、見せてみる。」
私を、殺す？

光迷彩に頼つてゐる奴が？

そんな奴にやられる訳にはいかない……………！

？ 右腕はなんとか動けそうだ。？

私は腰にある《MP7》のグリップを握る。

？ 死銃は撃つ前に一度ハンマーをコツキングするはず。

？ その隙を見て撃つんだと自分に言い聞かす。？

だけど、死銃が取り出した黒い自動拳銃を見た瞬間、私は凍り付いてしまう。？

その銃には拳銃のグリップの中央にある円の中に黒い星が刻まれていた。？

あれは《黒星・五十四式》!?

なん……………で。

何で、今、ここに、あの銃が。

黒星を構えた死銃の顔が、あの男に見える。

——いたんだ。ここに、この世界に。？

私に復讐をするために……………？

あの時の強盗と死銃が重なって見えてしまい、恐怖に包まれた私は《MP7》を右手から落としてしまう。

? これは運命だ。

逃れることは出来ない。

GGOをプレイしていなかったとしても、この男は私を追って来る。?

シノンとしても私は強くなっていなかったんだ。

? もう駄目だと諦めて目を瞑ったときだった。?

あの、紫のライダースーツを着ている大人びた雰囲気の子の姿が思い浮かぶ。?

お願い、チエイス……!

? 私を助けて……!

すると、死銃が体を揺らす。

誰かが死銃を撃つたのだ。

攻撃を受けた死銃は、すぐさま《黒星・五十四式》から、《サイレント・アサシン》へ

と切り替えて、狙撃する。

? その直後、グレネードが飛んできた。

? 死銃は避けて、私は死を覚悟した。?

しかし、スモークグレネードで、周囲を煙が包み、誰かがヘカートIIを肩にかけて、

私を両手で抱える。

シノン「チエイイス……………？」

そこに居たのは、私を抱えるチエイイスと、後ろを警戒しているカルムとキリトだった。

第14話 カーチエイス

チエイス side

俺たちは、シノンと別れて、銃士Xの元へと向かっていた。

30秒で戦闘を開始すると約束したので、銃士Xの前に出ると、女だった。

銃士X「あら、アナタ達がチエイスにキリトにカルムね。私は、マスケティアイクス

！相手になって……！」?? 『チューン！チエイサーコブラ！』

と、俺はすぐさまテイルウィツパーを使い、銃士Xを倒す。?

心の中で謝罪して、すぐさまシノンの方を見ると、そこに、死銃が居た。?

キリト「あつちに居たのか！」

カルム「でも、サテライト・スキャンに引つ掛からなかったぞ！」

チエイス「そんな事を考えるのは後にしろ！とにかく、シノンを助けるぞ！」

俺はすぐさま、銃士Xのライフルとスモークグレネードを拝借して、駆け出す。?

カルムもゼットライフルにして、駆け出す。

死銃の元に向かっている最中に、俺とカルムのライフルが火を噴き、死銃に当たる。

死銃もサイレント・アサシンを構えて、狙撃してきて、俺の肩に命中する。

カルム「チエイイス！」

チエイイス「気にするな！キリト！スモークグレネードを投げてください！」

キリト「ああ！」

キリトにスモークグレネードを渡し、それを死銃に投げて、煙幕を出す。

そして、2人に後ろを警戒させて、俺はシノンとヘカートを抱える。

シノン「チエイイス……？」

どうやら、間に合ったようだ。

シノンを抱えた際に、銃士Xのライフルは捨てる。

シノン「チエイイス……。あなただけでも、逃げて……。」。

チエイイス「そんな事を言うな！」

だが、辛いのは確かだ。

何せ、俺はどちらかと言うと、素早さを重視したステータスで振ったので、上手く走れない？

それでも、シノンを置いていくなんて選択肢は、俺には無い。

カルム「チエイイス！何とか牽制出来たから、さっさと行くぞ！」

チエイイス「分かった！」

キリトとカルムが時間を稼いでくれたおかげで、俺たちは駆け出す。

すると、無人営業のレンタル乗り物屋を見つけ、そこに向かう。

そこには、三輪バギーが2台ほど使えそうだったので、それに乗る事にする。

片方には俺とシノンが、もう片方にはキリトとカルムが乗る。

すると、キリトが質問する。

キリト「チェイス！あの馬のロボットは何なんだ!？」

？チェイス「……！あれはロボットホース！扱いはとてつもなく難しいが、突破力が普通の乗り物より格段に高い乗り物だ!」

？カルム「アレに乗って追ってくるのは?」？

チェイス「普通ならたとえ現実で乗馬経験があつたとしても乗りこなすのは難しい筈だが、その可能性は否定できないな。シノン、お前のライフルでロボットホースを破壊できるか?」？

シノン「わ……わかった、やってみる……?」？

シノンが狙撃する事になった。?

しかし、シノンは狙撃できなかった。??

シノン「え、何で……?」？

チェイス「シノン、どうした!」？

シノン「トリガーが引けない、何でよ……?」？

カルム「2人とも行くぞ!!」?

チエイイス「ああ! シノン! 俺にしつかりと掴まれよ!」

?? 俺は、シノンをしつかりと抱き止め、俺とキリトがバイクを加速させる。?

逃げ切れたのかと思ったら。

?? キリト「マズイ! 追掛けてきたぞ!」

後ろを見ると、あのロボットホースに死銃が乗って追ってきた。

カルム「まさか、本当にアレに乗って追ってくるとは……!」?

シノン「何で……。追いつかれる! もつと速く! 逃げて……! 逃げて!!」? チエイイス「シ

ノン……!」

先ほどからシノンの様子がおかしい。

まるで、何かに怯えるかのような……。

すると、死銃が発砲してくる。

何とか、シノンには命中しなかった。

シノン「嫌アアア!!」

? チエイイス「シノン!」?

シノン「助けて……チエイイス……!」

?? 本当に、何があったんだ……!?

? カルムがゼットシューターを発砲するも、躲される。

??カルム「くそッ!」

死銃は、あの銃を仕舞って、徐々にこちらに近づいてくる。

かくなる上は……!

チェイス「シノン!このままだと、追いつかれる!お前がアイツらを撃つてくれ!」?

シノン「む、無理だよ!」

?チェイス「当てるとは言わない!牽制だけで十分だ!」

?シノン「無理!あいつは……あいつだけは……」?

チェイス「だつたらへカートIIを貸せ!俺がアイツらを撃つ!!」?

シノン「分かった……」??

シノンが狙撃体制に入ろうとすると、またもやトリガーを引いていない。??

シノン「撃てない……撃てないの。指が動かない。私……もう、戦えない……」?

チェイス「絶対に撃てる!戦えない人間なんかいない!戦うか戦わないか!その選択

があるだけだ!俺も一緒に撃つから、もう1度戦ってくれ。」??

俺は、右手でシノンの手を包んで、左手でハンドルを握り、一緒に撃つ体制を取る。

シノン side

チェイスに、戦うか戦わないかと言われたが、私は、戦わない方を選ぶ。

もう……こんな想いはしたくないのに……。
すると、凍りついた右手を、灼熱の炎が包む。
だけど……。

シノン「だ、ダメ……。こんなに揺れてたら、照準が……。」
チエイズ「大丈夫だ！5秒後に揺れが止まる。いいか……。二、一、今だ！」
すると、嘘のように揺れが止まる。

バギーがスポーツカーに乗り上げて、ジャンプしたのだ。

……この状況で、何でそんなに冷静で居られるの？

と、そんな風に思ったけど、違う。

……うん、冷静とか、そういう事じゃない。チエイズはただ、全力なんだ。自分に言い訳しないで、全力を尽くして戦う事を選び続けているんだ。

それが、それこそがチエイズの強さ。

私が、チエイズと同じ様に出来るかは分からない。

でも、せめて、今だけは……！

チエイズと一緒に撃つ、今だけは……！

チエイズと共にヘカートを撃つが、ロボットホースには当たらない。

シノン「外した……。」

? チェイス「いや、大丈夫だ……。」?

チェイスの言う通り、弾丸は、大型トラックに命中した。

GGOに配置された人工オブジェクトの中には、ある一定のダメージを受けると、炎上、爆発する可能性がある。

そして、大型トラックが、ロボットホースに乗った死銃を巻き込んで爆発する。

シノン「倒せた……?」

チェイス「いや、爆発の直前に飛び降りた。」

チェイスが横転しかけたバギーを立て直して、再度加速させる。?

第15話 シノンの闇

シノン side

?? 何とか、振り切れた。

? バギーから降りたチエイイスが質問してくる。

?? チエイイス「そう言えば、アイツは急にお前の目の前に現れたな。何故だ?」

? シノン「メタマテリアル光歪曲迷彩を使っていたからよ。」

? チエイイス「そういう事か……。衛星のスクリーンにも映らなかったのは、それが理由か。」

? キリト「そんなのがあるのか。」?

カルム「だとすると、厄介だな。奇襲されたら……。?」?

シノン「それは大丈夫。ただ姿を消すだけだから、足音と足跡は消せない。ここは砂地だから奇襲は出来ない。」?

チエイイス「そうだな。一先ず、あの洞窟の中に入ろう。」

?? 私たちは、洞窟の中に入って、岩壁に背中を預ける。

? 死銃が気になって眩く。

??シノン「ねえ、さっきの爆発でアイツらが死んだって可能性は?」?

カルム「その可能性は限りなく低いな。爆発の直前に、あの馬からアイツが飛び降りるのが見えたから。」??

カルムはそう言って、救急治療キットを使って、体力を回復させる。?

キリトもそうしている。

??キリト「俺は入り口付近で死銃たちが来ないか見張ってくる。」

?カルム「俺も行く。」?

キリト「大丈夫か?」

?カルム「敵はいつ来るか分からん。万が一に備えて、2人いた方が良い。」?

キリト「分かった。チェイスはシノンの事を頼んだぞ。」?

チェイス「分かった。」??

キリトはそう言い残して、カルムと共に外へと向かう。?

洞窟の中には、私とチェイスだけになった。??

シノン「ねえ、チェイス。スタジアムのところにいた時んだけど、あなた達は外周の上に居たのにどうやってあんなに早く私を助けに来れたの?」?

チェイス「銃士Xが、死銃じゃないと一目で分かったからな。」?

シノン「何で?」?

チェイス「女性プレイヤーだったからだ。キリトの様な、なんちやって女性プレイヤーじゃなくてな。」?

シノン「へえ。」

? チェイス「名乗っていたが、銃士Xと書いて、《マスケティアイクス》と読むらしい。ソイツを倒して、シノンが倒れているのを見て、奴のライフルとスモークグレネードを拝借した。悪い事をしてしまったな……。」??

そう言つて、チェイスはブレイクガンナーを取り出して、チェックし始める。??

シノン「チェイスは怖くないの? アイツらと戦う事が……。」

? チェイス「怖くないと言えば嘘になる。だが、このまま放つておけば、また新たな犠牲者が出てしまう。奴らの凶行は、ここで終わらせてみせる。」??

——やっぱりあなたは強いね……。?

下手したら自分が死ぬかもしれないというのに、あの死神に立ち向かう勇気を失つていない。?

私は立ち向かう勇気を失おうとしているのに。

? このままここに隠れていたらずつと自分が抱える闇に怯え続けることになるだろう。

?? シノン「私、逃げない……。」

私も外に出てアイツらと戦う。」?

チエイイス「ダメだ。アイツの持つ拳銃に撃たれたら本当に死ぬかもしれないんだぞ。俺たち3人は近接戦闘タイプだから何とかなるが、お前は違う。さつきみたいに至近距離で不意打ちされたら、危険は俺たちの比じゃない。大人しくここで待っている。」?

シノン「死んでも構わない」

? チエイイス「何……?」

? シノン「私、さつき凄く怖かった。死ぬのが恐ろしかった。5年前の私よりも弱くなって情けなく悲鳴を上げて、リアルでもゲームでもすつかりあなたに甘えちゃって……。そんな弱い私のまま生き続けるくらいなら、死んだほうがいい……。」

?? すると、チエイイスが顔に怒気を顕にして、私を見てくる。??

チエイイス「お前は、本気でそう思っているのか?」

? シノン「もう怯えて生きていくのは……疲れた。別にあなた達に付き合ってくれなんて言わない。1人でも戦えるから。1人で戦って1人で死ぬ。これが私の運命だったから……。」??

そう言い残して立ち上がろうとすると、チエイイスが私の手を掴む。

?? シノン「離して。私……行かないと」

? チエイイス「お前は間違っている。そんな理由で1人で行かせるわけにはいかない。お前が行くついでというなら俺も一緒に行こう。」?

シノン「そんなこと頼んだわけじゃない。私のことなんてもうほつといて!」?

チエイ「お前とは半年もずっとGGOで一緒だったんだ! ほつとけるわけないだろ!!」??

チエイ「と言いつ争っている内に、私の感情が爆発して、チエイスの襟首に掴みかかる。

??

シノン「なら、あなたが私を一生守ってよ!!」

?? 今まで溜め込んだ涙までも溢れ出して、地面に落ちる。??

シノン「私の事、何も知らないくせに! チエイスは私と違って現実世界でも仮想世界でも強いからそんなこと言えるんでしょ! これは私の、私だけの戦いなんだから! 例え負けて、死んでも誰にも私を責める権利なんかない! それとも、あなたが一緒に背負ってくれるの!」 この……この、ひ……人殺しの手を、あなたが握ってくれるの!」??

それを言うと、これまでに罵られた記憶が蘇ってくる。??

シノン「私の手は血で染まっている……。そのせいで、好きな人に想いを寄せることも……このことを知られて彼に嫌われるのが怖い……。」??

もしかしたら、チエイも突き放すのではと思っただけ、予想に反して、私を抱きしめる。??

シノン「チエイス……?」

? チェイス「お前に何があったのかは、俺にはとても分からない。けど、お前がたった1人で戦ってきたのは分かる。俺なんかよりもよっぽど強い、シノンは。例え、お前の手が血で染まっていたとしても、俺が握る。」??

チェイスの言葉に、私の中で何かが外れて彼の胸にうずくまってしばらくの間泣き続けた。

? その間、チェイスは私を離さずずっと抱きしめてくれていた。

??カルム *side*??

俺たちが見張りをしていると、チェイスとシノンの2人が言い争っているのが聞こえてきて、覗いたが、介入できず、見張りに戻った。

??カルム「あの2人、大丈夫か?」?

キリト「信じるしかないだろ。」??

しばらくすると、シノンが話があると叫んで呼んできた。

? 俺たちは何なのだろう?と思いつながら洞窟の中へと進み、洞窟の岩壁に背中を預けて座っているチェイスの近くに腰を下ろす? ?

その後にシノンが腰を下ろし、ゆっくりと口を開いた。

??シノン「私ね……人を、殺したの……。5年前、私が11歳の時に東北の小さな街で起きた郵便局の強盗事件で……。報道では、犯人が局員の一人を拳銃で撃って、犯人

は銃の暴発でなつてただけ、実際はそうじゃないの。その場に居た私が、強盗の拳銃を奪つて、撃ち殺した……。」??

5年前か……。?

そういえば、そんな事件があつたな。?

あまり話題にならなかつたが。?

唐突な内容に言葉を失つていと。??

シノン「私、それからずつと銃を見ると吐いたり倒れたりしちゃうんだ。銃を見ると……目の前に、殺した時のあの男の顔が浮かんできて……怖い。すごく、怖い。でも、この世界では大丈夫だった。だから思つたんだ。この世界で一番強くなれたら、きつと現実の私も強くなれる。あの記憶を忘れることができるって……。なのに、さつき死銃に襲われた時、すつごく怖くて、いつの間にか《シノン》じゃなくて、現実の私に戻っていた……。死ぬのは怖いよ。でも、でもね、それと同じくらい怯えたまま生きるのも辛い。死銃と戦わないで逃げちゃったら、私は前より弱くなっちゃう。だから……。だから……。」??

シノンが話し終えると、俺は呟いた。

??カラム「俺も人を殺めた事がある……。」

?チエイズ「俺もだ……。」

? キリト「俺もだ……。」?

シノン「え……?」

?? シノンは驚いてこちらを見てくる。

? チェイスが口を開く。??

チェイス「言っただろ。俺たちは死銃たちと他のゲームで本気で殺し合ったことがある。そのゲーム名は《ソードアート・オンライン》。お前も聞いたことあるだろ?」
? シノン「ええ。もしかして……とは思っていたけど、やっぱりそうだったのね……。」
?? 《ソードアート・オンライン》というゲーム名は、多くの人を知っていると答えるだろう。

2022年から2024年にかけて、一万人もの人の意識をゲーム内に閉じ込め、最終的に4千人近くの人が亡くなった悪魔のゲームを。

?? カルム「そのSAOで、ラフィン・コフィンという殺人ギルドがあつて、死銃は、そこに所属していたんだ。俺たちは、討伐戦で、恐怖と怒りに任せて、剣を振って、2人殺してしまったんだ……。」

? チェイス「本当なら、無力化する筈だったが、俺たちは殺してしまったんだ。」?

キリト「それも、無理矢理忘れようとして、アイツらに会って、思い出したんだ……。」

??

話終わって、沈黙が支配する。

? すると、シノンが掠れ声で話しかける。??

シノン「ねえ、貴方達はその記憶をどうやって乗り越えたの……?」?

カルム「俺たちは、乗り越えていない。ここ最近は、殺した奴の事を見るからな。」?

キリト「俺は昨夜、俺の剣で死んだ奴らのことを繰り返し夢で見て殆ど眠れなかった。

アバターが消える瞬間の奴らの顔、声、言葉、俺はきつともう2度と忘れられないだろ

うな……。」?

チエイス「だが、それは必要な事だ。自分の手でアイツらを殺したこの意味、その重さを受け止め考え続ける。そうする事が俺たちに出来る最低限の償いだと今は思う。

過去や記憶は消すことは出来ない。だから、このことを受け入れて戦い続けるしかない

……。」

?? そう、殺してしまつた事を受け入れて、戦い続けるしかない。? それが、少しでも贖罪になるのなら……。

第16話 真相の解明

カルム side??

俺たちも、ラフコフのプレイヤーを殺した事をシノンに話して、シノンは黙り込む。

??シノン「死銃は一体どうやって、現実世界のプレイヤーを殺しているのかしら…。」

?? 心を落ち着けたシノンがそう語る。?

そう、まずはそれが先だ。??

チエイス「恐らく、あの骸骨フェイスの奴は、特徴的な喋り方から、ザザだろうな。」

??

ザザの名前は分かったので、菊岡に伝えればOKで、菊岡が連中の本名と住所を突き

止めてくれる。?

しかし、大会中なので、ログアウト出来ない。?

現状、俺たちがGGO内で、死銃達をどうにかするしかない。??

チエイス「キリト、カルム。死銃に撃たれた《ゼクシード》と《薄塩たらこ》の2人の死因は何だ?アミュスフィアはナーヴギアみたい脳を破壊することはできないはずだが。」?

カルム「ああ。脳損傷じゃなくて、全員、急性心不全で亡くなってる。」?

キリト「だけど、殺人の方法はまだ分からないんだよ。仮想世界で撃ったプレイヤーを現実世界でも本当に殺害できる手段なんて……。」??

そう、引つかかるのはここだ。?

死銃達は、どのようにして、現実の体を殺しているのかが分からない。? 「呪いや超能力の類では無いのは確かだが。

??チエイズ「なあ、1つ気になったことだが、本当にゲーム内でプレイヤーを撃つと現実世界でもそのプレイヤーを殺すことができるなら、どうしてわざわざ拳銃で撃つ必要がある? サイレントアサシンがあるなら、そっちを使った方がすぐに済むはずだ。」?

シノン「そういえば、ペイルライダーを殺した時も妙だったわ。あの時は近くに倒れていたダインは無視した。ダインのアバターは残ってたし、まだログアウトもしていなかった。ゲームの枠を超えた力があるなら、HPの有無なんて関係なさそうじゃない?」

?? 確かに。?

という事は、死銃の殺害方法にはトリックがあつて、ターゲットとなった面子には、何かしらの共通点があるという事だ。?

そこを洗えば、何かが分かる筈だ。??

カルム「シノン、チエイイス。殺された面子とシノンで共通点とかって何かないか？使
う武器とかどんなことでもいいから、思い当たることがあつたら教えてくれ。」

？シノン「装備は全員バラバラで、共通点となると強引にくくることになるけど、全員
《AGI特化型ビルドじゃない》ってことになるかな。でも、STRかVITに偏ってい
たからちよつと無理はあるかな……。あ、そう言えば、殺された4人の中にいた《薄塩
たらこ》とは前の大会の商品で何を貰うかで少し話したことがあるわ。」？

チエイイス「大会の順位に応じて貰える賞品を選べるやつか。商品は銃、防具、街で売
られてない髪染め、服といった外見が目立つだけで高性能じゃないゲーム内のアイテ
ム、あとは銃のモデルガンもあつたな。確か現実の商品の場合、国際郵便で送られて来
るんだよな。まあ、そのためにはBOB予選にエントリーした時に現実の住所氏名を打
ち込まないといけないが……。」??

なるほどねえ。？

うん??

現実の住所氏名……??

それに、メタマテリアル光歪曲迷彩……。

？シノンがダイスがゲーム内のアイテム、薄塩たらこシノン、ゼクシードがモデル
ガンを選んだ事に関して聞いているとその2点が引つかかった。？

だが、一つの仮説に行き着き、解けた。??

カルム「そうか……。繋がった。」?

キリト「何がだよ?」?

カルム「俺たちはとんでもない誤解をしていたんだ。」?

チエイス「誤解だと?」?

カルム「俺たちは死銃の仲間、ゲームの中にしかいないと思ってた。でも、そこが盲点だった。現実世界にも居るんだよ、仲間が。死銃がターゲットを撃ち、同時に、ターゲットの部屋に侵入した共犯者が無抵抗で横たわるプレイヤーを殺すっていう方法でな。」

?? これなら辻褃が合う。

? ラフコフは、現実にも居る。

? その推理に、キリトとチエイスが納得していたが、シノンは納得してない。??

シノン「なら、どうやってプレイヤーのリアル情報を手に入れるの? 何処の誰かもわからないのに。」?

チエイス「総督府で、大会にエントリーするとき自分のリアル情報を任意で打ち込むだろ。その時に、双眼鏡やスコープを使えば離れていても見ることはできるはずだ。見つければマナー違反で吊し上げされるが、あのメタマテリアル光歪曲迷彩を使えば、

他のプレイヤーに気づかれることはないだろうな。」？

シノン「仮に現実世界の住所がわかったとしても忍び込むのに鍵はどうするの？家の人とかは？」？

チエイス「前に殺された2人は家が古いアパートだったのなら、ドアの電子錠もセキユリテイの甘い初期型だったはずだ。1人暮らしだから侵入しても気付かれる心配はない。そういった解除装置は裏で高額取引されているって俺の親父から聞いたことがあるからな。」？

シノン「じゃあ、死因は？心不全って言ったけど、警察とかお医者さんとかにもわからない手段で心臓を止めることなんて出来るの？」？

キリト「多分何かの薬品とかだろう。殺された3人は発見が遅れて身体の腐敗が進んでいたんだよ。だから注射の痕とかは発見できなかった。」

？カルム「それに、飲まず食わずでログインするのはよくあるからな。それで心臓発作で死んでいるのも少くはない。部屋も荒らされず、金品も無事なら、自然死として処理される。」？？

そう、これで謎は解けた。？

それと同時に、シノンには、危険が迫っている事も事実になるが。??

シノン「じゃ、じゃあ……。死銃が私を狙ってきたのは……！」

? カルム「……………言いづらいんだが、恐らく、もう共犯者が待機してるんだろうな。」
? シノン「嫌……………いや! いやよ! ……そんなの!」??

まずい、このままじゃ、シノンが緊急ログアウトしてしまう。??

チエイス「シノン落ち着け! 奴らの拳銃で撃たれるまで侵入者はお前に手は出せない! それが奴らが自身で定めた制約だ! だが今自動ログアウトして共犯者の顔を見てしまおうと返って危険だ! だから落ち着け! ゆっくり気を落ち着かせるんだ!」?

シノン「ど、どうして……………どうして……………私、殺されなきゃいけないの……………? アイツに何か恨まれることをしたから……………? 強盗を撃ち殺したから……………?」

?? シノンは子供ののようにチエイスに縋り付き、涙声で訴える。?

チエイスは、シノンを優しく抱きしめた。

?? チエイス「理由は無い。アイツらは自分の快樂のために人の命を簡単に奪う。だから、お前を絶対に殺させない!」

? シノン「チエイス……………」??

シノンも落ち着きを取り戻しているが、気まずい。

? 何せ、今のシノンとチエイスを見ると、俺がミトに、ミトが俺に甘えているのにそっくりだ。?

もしかして、シノンはチエイスの事が……………? ?

でもなあ、相手はあのチエイイスだ。？

チエイイスが想いに気づいているのかは分からない。

？ まあ、部外者は引っ込むか。??

カルム「チエイイス。俺とキリトは見張に戻るから、シノンと一緒に居てやれ。キリト、行くぞ。」？

キリト「ああ……………」

?? 俺達は外に出た。??

チエイイス side??

カルムとキリトが見張りに戻り、今ここには俺とシノンしか居ない。？

シノンは未だに抱き付いたままで、俺はシノンを落ち着かせようと、頭を撫でていた。

??

チエイイス「落ち着いたか？」

？ シノン「うん、ありがとう。だけど、もう少しこのままで良い？」？

チエイイス「構わないが、シノン。お前、好きな奴が居るんじゃないのか？」？

シノン「……………いいのよ、これで……………」

?? 気のせいかシノンの頬が少し赤い感じがした。？

何故なんだと考えると、上空に浮かぶ見覚えのある奇妙な水色の同心円を見つけ

る。

? 実体ではなく、ゲーム的な単色発光オブジェクト。

?? シノン「普段は戦闘中のプレイヤーしか追わないんだけど、残り人数が少なくなってきたからこんなところまで来たのね。」

? チェイス「そうみたいだな……。」

?? 特に慌てる必要もない。

? だが、ライブ中継カメラがここまでやって来たということは、シノンが俺に抱きついたり、俺がシノンの頭を撫でているシーンが映されてしまっただろう。

? GGOの男性プレイヤーたちは、間違いなく俺のことを敵意をむき出しに見ているだろう。

? それに、ハヤト／侑斗がALOで皆と大会のライブ中継を見るって言っていたな。
?

大会の後でハヤトとリズからからかわれて、クラインからは裏切り者とか言われる光景を思い浮かべてしまう? ?

事件を無事に解決できても、この後待ち受けていることを考えていたら頭が痛くなってきたな……? ?

恐らく、今もニヤニヤしながら見ているのかもしれないな? ?

その頃のALO。

?? ハヤト「へつくし!……ん?」?

リーファ「ハヤト君、風邪?」

? ハヤト「誰か噂したのか?」??

GGOでは。

?? シノン「どうしたの?……もしかして、この映像を見られると困る人でもいるの?」?
チエイス「いや、見られたら困るといふより見られたら鬱陶しくてウザいだろうな
という奴なら何人かいる。」

? シノン「ふふ、何よそれ……。」??

どうやら、落ち着いたようだな。

?? シノン「どうするの?」?

チエイス「奴らを倒すしかない。死銃さえ倒せば、奴らはシノンには手出ししない。」

?

シノン「でも、黒星抜きでも、あのボロマントは強いわ。」??

確かに、シノンの銃撃を躲すのを見ても、強いだろう?。

キリトとカルム、俺の3人の内の、1人でもやられたら、シノンの命は無い。??

シノン「それに多分、私もこのままここに隠れているわけにはいられない……。そろそ

ろ、私たちが砂漠の洞窟に隠れていることに、他のプレイヤーも気付いてる。」？

チエイス「……………いつ奇襲を受けても、おかしくないってことか。」

?? 作戦を立てるために、カルムとキリトの2人を呼び戻す。

?? カルム「……………ここまで来たんだ。4人で、アイツを倒す……………」と言いたい所だが、アランとクレハはどうするかな。」

キリト「そういえば居たな。」

? チエイス「……………ああ。だが、シノン。もしお前がああ拳銃に撃たれそうになったら……………」？

シノン「あんなの……………所詮、旧式のシングルアクションだわ……………仮に、撃たれそうになっても、あなた達が楽々叩き切ったり、弾いたりしてくれるでしょ？」？

チエイス「……………そうだな。そこまで信用してもらえてるのなら、やらせるわけにはいかないよな？キリト、カルム？」？

カルム「愚問だろ。」？

キリト「ああ。」

その後、作戦を立てた。

俺が死銃もといザザの相手をして、アランとクレハに関しては、カルムとキリトの2人で対応する事に。

サテライト・スキャンの結果、2人は共闘しながら生存している。
闇風に関しては、俺が足止めをして、シノンが倒す手筈になっている。

第17話 それぞれの元へ

ミト side??

アスナが連絡する為にログアウトして、また戻ってきてから数分しか経っていないが、その時間は長く感じる。??

リズベット「アスナもミトもちよつと落ち着きなさいよ……って言っても、無理だよね。」

「アスナごめん……。でも、嫌な予感がするの。キリト君達が私たちに『ラフィン・コフィン』の事を言わなかったから……。」?

ミト「私も同じ。ただの因縁って訳じゃ無くて、何かとんでもない事が起こってる……そんな気がする……。」??

まさか、ラフコフの面子がGGOに居るなんて。?

そりゃあ、ゲームをやるだけならそれで良いんだけど、嫌な予感がする。?

誰も喋らずライブ中継から出ている音しか聞こえない中、ハヤトが戻ってきた。

リーファが真っ先に彼に話しかけた。?

ハヤトが居なかった理由は、チェイスの父親に連絡する為だ。??

リーファ「ハヤト君、どう？」

？ハヤト「ダメだ。チェイスの親父、今捜査中か何かで、手が離せないらしい。」？

リーファ「そう………。」??

となると、あの人に頼らないといけないみたいね。？

すると、入り口のドアがノックされ、ドアが開いた。

??リズベット「もう遅い！」??

部屋の中に入ってきた人物に言い放ったリズの一言は、この場にいる全員の内心を代弁してくれたものだった。？

クリスハイト「こ、これでもセーブポイントから特急で飛んで来たんだよ、ALLOに速度制限があったら免停確定だよ。」??

とぼけたセリフで入ってきたのは、ひよろりとした長身を簡素なローブで包み、マリンプルーの長髪を片分け、銀縁の丸眼鏡をかけているアスナと同じウンディーネの魔法使いの男性だ。

？ 名前は《クリスハイト》？

これまで何度か共に戦ってきたことがあるため、ある程度面識はあった。？

その正体は、菊岡誠二郎だ。？

カルム曰く、菊を意味する《クリサンセマム》と岡を意味する《ハイト》の造語らし

い。？

クリスハイトが後ろ手にドアを閉めて、私とアスナが詰め寄る。

??アスナ「何が起きているの？」

?ミト「説明しなさい。」?

クリスハイト「えっと、何から何まで説明すると、ちよつと時間が掛かるかもしれないなあ。それにそもそも、どこから始めていいものか……。」?

ミト「誤魔化す気……!?!」?

ユイ「なら、その役は私達が代わります。」

?? そう言つて、ユイちゃんとカナが出てきた。?

ユイちゃんとカナはいつもの普段の愛くるしい表情とは違い、今は厳しい顔を浮かべていた。?

2人は私たちに今GGOで起きていることを話してくれた。

? それは、ゲームの中で死銃と名乗るプレイヤーによつて撃たれた《ゼクシード》、《薄塩たらこ》という2人のプレイヤーが現実でも死亡したという恐るべきものだった。?

先ほどボロマントのプレイヤー……死銃に撃たれた《ペイルライダー》という人も3人と同様に死んでいる可能性が高いらしい。?

ユイとカナは倒れ込み、私たちが支える。

? 2人のネットからこれだけの情報をまとめ、日本語にするAIとしての完成度は凄
い。

? しかし、ネットの悪意といった黒い感情は2人には処理しきれないだろう。?

2人には感謝している。

? リーフア、ハヤト、リズ、ラット、シリカ、ヒロミ、クライン、ノーチラス、ユナ、
フィリア、レイン、レイモンド、フィリップ、パラドが啞然とした表情を浮かべる。??
クリスハイト「これはまったく驚いたなあ。この短時間でそれだけの情報を集め、そ
の結論を引き出したのかあ。どうだい、ラー……いや、《仮想課》でバイトしてみないか
い?」?

フィリップ「ラー……?」

?レイモンド「フィリップ?」

?? とぼけたことを言うクリスさんを私とアスナは睨みつける。

するとクリスハイトは両手をさつと持ち上げ、降参するようなポーズを取る。

? フィリップが何かの単語に引つかかっていた。??

クリスハイト「いや、済まない。この期に及んで誤魔化す気はないんだ。おチビさん
達の言うことは全て…事実だよ。」?

クライン「おい、クリスの旦那よ。あんたがキリトとカルムのバイトの依頼主なんだってな？つてことはテメエ、その殺人事件のこと知つててキリトとカルムをあのゲームにコンバートさせたのか!」??

クラインが詰め寄ろうとするが、クリスハイトが押し止める。??

クリスハイト「ちよつと待った、クライン氏。これは殺人事件ではない。」?

クライン「ん……だと……?」

?ノーチラス「クリスハイトさん。殺人事件じゃないつてどういう意味だ?」

?ユナ「その2人の話だと、既に死銃に撃たれたプレイヤー2人……いや、3人も死んでいるつて……。どう見ても殺人事件でしょ?」

?? ノーチラスとユナも立ち上がり、クリスハイトに問いかける。??

クリスハイト「2人も冷静になって考えてみたまえよ。アミクスフィアは、ナーヴギアのセキュリティ強化版。どんな手段を用いようとも脳に一切傷を付けられない。ましてや、機械と直接リンクしていない心臓を止めるなんて不可能だ。僕は2人と先週リアルでたつぷり議論し、最終的にそう結論付けたんだよ。」??

クラインもノーチラスもユナも渋々納得すると、リーファが立ち上がる。??

リーファ「クリスさん。なら、あなたは どうして、お兄ちゃんとカルムさんをGGOに行く様に頼んだんですか?あなたも感じてた……いえ、今も感じているんですよね?

あの死銃というプレイヤーが何か恐ろしい秘密を隠してると。」

?? リーフアのその発言に、クリスハイトが黙って、私とアスナはある事を言う。??

アスナ「クリスさん。死銃は、私達と同じ、SAO生還者よ。しかも、最悪とも言われたレッドギルド……ラフィン・コフィンの元メンバーだわ。」

?クリスハイト「っ!?それは、本当なのかい!?!」?

ミト「ええ。私にアスナ、クライン、ハヤトもラフコフ討伐戦に参加してたから。しかも、これが初めてじゃないのよ。」?

ハヤト「殺害方法は分からないけど、GGOのサーバーから照会して、アンタと姉ちゃんがちエイスの親父……警察を動かせば良いだろ。」??

クリスハイトが黙り込み、リズが話に入ってくる。??

リズベット「ねえ……アスナ、ミト、ハヤト。クリスハイトって、SAOのこと知ってるの?確か、リアルではリアルでは何かネットワーク関連の仕事してる公務員さんで、VRMMOの研究がてらALOやってるって話だったけど……。」?

クリスハイト「その通りなんだが、昔は別の仕事をしていたんだよ。僕は、総務省の《SAO事件対策チーム》一員だったんだ。……と言っても、対策らしい対策なんて何もできない、名ばかりの組織だったんだが……。」??

そんな自嘲的な事を言っていると、アスナが言ってくる。

??アスナ「それでも、あなたなら今すぐに死銃と名乗るプレイヤーの現実世界の名前や住所を突き止めて、今自宅からGGOサーバーに接続しているか、契約プロバイダに照会することはできるでしょ？」

?クリスハイト「確かに可能だよ。でも、明確な証拠が上がっていないから、今すぐについていうのは難しいんだよ……。」??

そんな風に歯噛みしていると、リーファが呟いた。??

リーファ「お兄ちゃんとカルムさんは、自分たちで何とかするしかないって思って、今の戦場にいるんだと思います。きっと、チェイスさんも……。」??

皆の視線が、リーファに集中する中、私も、カルムの様子が少し変だった事に気づく。??

リーファ「タベ帰ってきた時、お兄ちゃん、凄く怖い顔してました。カルムさんは流石に分かりませんが多分、昨日の予選の時点で気付いたんだと思います。GGOにラフィン・コフィンに入ってた人達がいること、その人たちが本当に人を殺していることを……。」?

ミト「確かに、B o Bの直前のカルムの様子も変だった……。」

?ハヤト「そういえば、チェイスも少し様子が変だったような……。気のせいかと思ってたが、本当にそうだったなんて……。何で、気づいてやれなかったんだ……!」??

ハヤトが俯き、涙を流す。？

リーファが慰めようと、右手に手を置く。

?? クリスハイト「チエイス……。もしかして、チエイス君も……。？」

フィリア「実は、チエイスも今回の事を知ってみたいなんです。？」

レイン「多分、2人から聞いたんだと……。？」

クライン「バツカ野郎があ！水クセエんだよ！一言言ってくりや、どこだろうとオレもコンバートしたのよ！」??

クラインが力任せに左手をカウンターに叩きつける。??

シリカ「でも、キリトさんとカルムさんとチエイスさんなら言わないと思います

……。？」

ヒロミ「そうだよね……。あの3人なら、少しでも危険があるなら、僕たちを決して巻き込もうとしない。？」

ラット「そういう奴らだから……。？」

パレード「つたく。帰ってきたら説教だな。」

？ノーチラス「そうだな。？」

ユナ「うん……。？」

?? 壁の大スクリーンには、いくつもの映像が映し出されている。？

でも、私たちはカルムとキリトのGGOでのアバターの外見を知らない。？ ハヤトの話だと、チェイスは現実世界やALOとあまり変わりないらしい。？

だけど、映し出される映像には彼の姿はない。

？　そしてあのボロマントもだ。？

大スクリーンの左端にあるプレイヤーリストには、カルムたちの名前がある。？

他の出場者たちが【DEAD】ステータスになる中、3人ともまだ【ALIVE】のままだ。？

きつとどこかで死銃と戦っているのだろう。

？　そう信じるしかなかった。？

なら、訊ねることは一つね。??

アスナ「クリスハイト、あなたは知っているはずよね？キリト君とカルム君がどこからダイブしているのか。」？

クリスハイト「あー……それは、まあ……。と言うか、その場所は僕が用意したんだ。セキュリティは鉄板、モニタリングも盤石だよ。すぐそばには何か起こった時に最適な人がいるから、キリト君たちの現実の体に危険がないのは責任もって安全は保証するよ。」？

ミト「それはどこにあるの？」？

クリスハイト「流石にそれは……。」??

また誤魔化そうとするので、即座に鎌を取り出して、クリスハイトに突きつける。??
ミト「また、誤魔化そうものなら、あなたの首は吹っ飛ばないけど、恐怖を刻み付けるわよ。それでも良い?」??

私は黒い笑みを浮かべて、鎌を近づける。?

直後、何処からか『ヤバーイ!』という謎の音声が届いた。?

クリスハイトは顔を一気に青ざめ、声を震わせながら話し出した。??

クリスハイト「えっと……ち、千代田区の……お茶の水の……病院です……。」?

アスナ「千代田区の都立中央病院?そこつてキリト君とカルム君がりハビリで入院してたっていう!」?

クリスハイト「は、はい……。」??

私への恐怖から、アスナに対してまで敬語になるクリスハイト。??

ミト「そこなら、私たちがダイブしている所から、タクシーで行けるわ!アスナ、2人のところに行くわよ!」

?アスナ「うん!」?

ハヤト「チエイイスは家からダイブしているはずだ!俺は、チエイイスのところに行つてくる!」

?リーファ「分かった。3人とも気をつけて。」??

私、アスナ、ハヤトは頷いて、ログアウトする。?

ログアウトすると、ダイシー・カフェの天井が視界に映り、すぐに携帯でタクシーを呼び、荷物を纏めて、部屋から出る。?

すると、エギルに呼び止められる。??

エギル「どうしたんだよ、そんなに慌ててよ。もしかして試合が終わってキリトとカラムのところに行くのか?」?

ミト「そんなところ!」?

アスナ「今日はありますがどうございました!じゃあ、私たちはこれで!」

?? 私たちはダイシー・カフェを後にして、さつき呼んだタクシーに乗り込む。?

待ってて! 私たちも行くから!??

ノーチラス side??

あつという間に、静かになった。??

クリスハイト「……………今後、ミト君の逆鱗に触れないようにしないとね……………」?

レイモンド「それが良いと思うぜ。」?

フィリップ「クリスハイト氏。先程言いかけたラー……………とは一体何だい?」?

クリスハイト「……………君には、関係ないよ。」??

クリスハイトはそう言い残して、部屋から立ち去っていった。

??「ノーチラス」……「……そういえば、ユナ。何か、重村教授が話があるって聞いたけど。」

?「ユナ「ああ……。お父さんがね、ノー君と一緒に新たなAR機器を作らないかだつて。」?

ノーチラス「分かった。返答は僕がやっておくから。」

?「ユナ」……「……そういえば、お父さん、最近どこかに出かけるようになったけど、なんだろ?」??

ユナとそんな事を話していると、??

ヒロミ「ミトさんって、怒らせると本当に怖いんですね……。」

?「シリカ「うん……。」?

リズベツト「私も、あんまり揶揄いすぎないようにしないと……。」

?「ラット「そうだな。俺も死んじゃうから。」

?「フィリア「……。」(怖いけど、カルムは諦めたくない……!)?

レイン「……。」(絶対に諦めない……!)?

パラド「俺もあつちに行くか。」?

クライン「怖ええ……。」?

リーファ「そうですね……。」??

そんな風に賑やかだった。

第18話 カルム&キリトVSアラン&クレハ

カルム side

俺とキリトは、アランとクレハを迎え撃つために、バギーを走らせていた。

カルム「チエイイスとシノン、大丈夫かな？」

キリト「あの2人なら大丈夫だろ。」

カルム「そうだな。」

正直に言うと、俺が死銃との決着をつけるべきだと思っている。

でも、あの2人なら大丈夫だと信じて、バギーを走らせる。

カルム「なあ。」

キリト「うん？」

カルム「シノンのあの表情ってさ……。」

キリト「多分、チエイイスの事が好きなんだろうな。」

カルム「でもなあ、相手はあの堅物だけ。」

キリト「チエイイスも気付くといんだけど。」

そんな事を話しているうちに、アランとクレハが見えた。

俺達はバギーを停めて、降りる。

アラン「カルム、キリト。」

クレハ「アンタ達、一緒だったのね。」

カルム「そつちもな。」

キリト「いいだろ、人の好き勝手で。」

アラン「まあ、こつちも似たような物か。」

クレハ「そういえば、シノンとチエイイスはどうしたのよ？」

キリト「あの2人は一緒に居るよ。」

カルム「なあ、タッグバトルと行かないか？お互いに2対2だ。」

俺のその提案に。

アラン「そうだな。クレハとは、最後の最後での決闘で決めるつもりだったけど、い
いよな？」

クレハ「まあ、アンタが言うなら……。」

カルム「決まりだな。」

キリト「なら、俺がこの弾丸を上投げる。地面に落ちたらスタートだ！」

そう決まり、俺はゼットソードとゼットシールドを、キリトはカゲミツG4とFN
ファイブセブンを、アランはS y i l p h T y p e Aを、クレハはドラケLシロッコ

を構える。

クレハ「カルム達って、剣なのね。」

キリト「こつちの方が性に合うからさ。」

カルム「右に同じく。」

アラン「まあいつか。」

キリトが弾丸を上にはり投げると同時に、俺とキリトは前傾姿勢になり、落ちたと同時に駆け出す。

アランとクレハも即座に銃を撃つ。

俺はアランに、キリトはクレハの方へと向かう。

アランは即座に銃を撃つが、俺はゼットソードで斬り捨てる。

アラン「アリかよ、それ……！」

カルム「アリなんだよ！」

アランが毒づき、俺は突っ込む。

だが、アランはアサルトライフルは持ったままで、コンバットナイフを取り出す。

カルム「嘘だろ!？」

アラン「まさか、コンバットナイフが役に立つ時が来るとはな！」

しかも、アランはかなり速い動きでこちらを斬り付けてくる。

ヒット&アウェイの戦法だ。

キリトも、クレハのロケットランチャーに苦戦していた。

強いな……………！

深澄 side

千代田区のお茶の水の都立中央病院に着いた私と明日奈は料金を払うと、タクシーから飛び降りる。？

時刻は夜の10時近くだったため、入口にある自動ドアは電源が落ちていて、その脇にある夜間面会口の表示があるガラス戸を押し開け、面会受付カウンターに向かう。??

深澄 「7025号室に面会の予約がある兔澤と結城です！」??

そこにいる女性看護師さんに菊岡さんから聞いた部屋番号と自分たちの名前をいい、学生証を出す。？

菊岡さんからすでに連絡が入っていたようで、女性看護師さんはすぐに面会者パスのカードを渡してきた。

？ 私たちはすぐさまカルムとキリトがいる部屋に向かおうと小走りでエレベーターへと向かっていく。？

エレベーターの手前にある駅の自動改札口に似たゲートに面会者パスのカードをかざし、ゲートが開くとすぐに上に行くボタンを押す。？

エレベーターの扉が開くと飛び込んで、カルムとキリトがいる部屋がある階のボタンを押す。

?? 深澄「カルム……!」?

明日奈「深澄。2人は絶対に大丈夫よ。」?

深澄「明日奈……。」??

明日奈も不安だろうに。

? すると、私たちの携帯から、声がする。??

ユイ「ママ、ミトさん、大丈夫ですよ。」?

カナ「2人は強いじゃない。」

? パラド「須郷の陰謀を打ち破った奴らだけ。この程度で諦めるわけないだろ。」??

そう、キリトとカルムの2人に頼み込んで、私たちの携帯にユイちゃん、カナ、パラドが入ってこれるアプリを作成してもらった。

? その間にも目的の階に着き、私たちはエレベーターから降りる。?

3人のナビ通りに無人の廊下を走り、7025号室の部屋の前まで来る。

? そこにあるプレートに面会者パスのカードをかざし、ドアのロックが解除されるとドアを開ける。?

部屋の中には2つのベッドがある。そのベッドには2人の少年が横たわっており、医

療関係の機械と接続されたコードが幾つも枝分かれして彼らの剥き出しの胸に貼り付けられている。

?そして、2人の頭にはアミユスフィアがある。?

近くには髪の毛を三つ編みにし、メガネをかけた1人の女性看護師さんがいた。

看護師「桐ヶ谷君っ!小野君っ!」

?? ベッドに横たわっていたのは、カルムとキリトだったが、2人は息を切らして苦しうに見える。

??深澄「カルム!キリト!」?

明日奈「2人に何があつたんですか!」?

看護師「結城さんと兎澤さんね?お話は伺っています。2人とも身体的に危険ということじゃないから大丈夫だわ。でも、急に心拍が上がって……。」??

VRMMOをプレイしていて心拍が上昇することは異常ではない。

? 恐ろしいげなモンスターと戦えば、緊張し、脈が速くなることがある。? だけど、カルムとキリトはデスゲームとなったSAOで戦ってきたから普通のゲームでここまでなることはないと思う。

? こうなっているということは何か余程のことがあるに違いない。??

ユイ「ママ、ミトさん、壁のパネルPCを見てください。」?

カナ「回線をMMOストリームに繋ぐわ。」

?? ユイちゃんとかナの声がして、モニターの方を見ると、ALOで見ていた中継が映る。

そこには、青い服の男性とピンクの服の女性が2人のプレイヤーと戦っていた。

名前は、《Ailan》と《Kureha》と書いてあった。

ただ、死銃ではないのは確かだ。

という事は、死銃はチエイイスが対応しているという事？

だったら、心拍数が上がるのは何で？

追いつめられているプレイヤーは、1人は肩当てや足にタイヤがついている少年だ。

下の方に、小さく《Cailem》と書いてあった。

深澄「アレが、カルム……。」

ALOとは雰囲気が違うが、カルムである事には間違いない。

? もう1人は黒一色の服装に身を包み、黒髪のロングヘアをした少女で、その右手には青紫色の刃のビームソードらしいものが握られている。? 足元には《Kirito O》と表示されている。

?? 深澄「あれがキリトなの……?」?

明日奈「私たちが知るキリト君とは姿が大分違うけど、あの構えはキリト君よ。」?

看護師「今モニターに映っているのが、小野君と桐ヶ谷君のアバターって事？」

明日奈「そうです。戦闘中で、それが理由で心拍が上がってるんだと思います。」

深澄「相手は、死銃ではないけど、GGOの強いプレイヤーかしら？」

死銃じゃなくても、頑張ってる……！

そう祈っていると、明日奈が手を出す。

深澄「明日奈？」

明日奈「大丈夫だよ、あの2人なら。GGOの強いプレイヤーでも勝っちゃうんだから。」

深澄「……………そうよね。私たちが信じないといけないわよね。」

カナ「なら、手を握ってあげて……………」

ユイ「2人の手を握ってあげて下さい。アミスフィアの体感インタラプトは、ナーヴギアほど完全ではありませんが、ママとミトさんの手の温かさならきつと2人に届きます。私達の手はそちらの世界には触れられませんが、私達の分も……………」？

パラド「頼む……………」？

カナ、ユイ、パラドの声が震えていた。

明日奈「ううん。そんな事ない。ユイちゃんにカナちゃん、パラドの手もきつと届く。

だから私たちと一緒に、キリト君とカルム君の応援をしよう。」??

明日奈とユイちゃんはキリトの、私とカナとパラドはカルムの手を握る。？
ただ、無事を祈って……。？

カルム side

これは、キツイな。

まさか、こんなに強いとは……！

アラン「まさか、近距離戦でここまでやれるなんてな。」

クレハ「でも、私もコンバットナイフを持ってきて良かったけど、どうしよう？」

それこっちのセリフ。

まさか、2人が近距離戦にも慣れてるなんて。

すると、ミト、カナ、パラドの想いが届いたような気がする。

それは、キリトも同じだった。

カルム「キリト、生きてるか？」

キリト「生きてるよ。じゃあ、行こうか！」

カルム「そうだな！チエイイスとシノンも戦ってるんだ！負けてらんねえな！」

キリト「ああ！」

アラン「向こうは、本気になりそうだな。」

クレハ「こっちも行きましょう！」

俺はアランに、キリトはクレハに突っ込む。

アラン「凄い……！」

カルム「まだまだこんなもんじゃないぜ！」

俺はゼットシールドを投擲して、アランのアサルトライフルを落とす。

アラン「しまった！」

カルム「一気に行くぜ！」

俺は、ゼットソードの固有スキル、アサルトストライクを発動する。

カルム「アサルトストライク！」

『ゼットシューター！』

『ゼットライフル！』

『ゼットソード！』

俺はタイヤをフル稼働させて、加速し、ゼットシューターから2発撃って、ゼットライフルにして、1発撃って、ゼットソードにしてぶん投げる。

アラン「クッ！ウワッ！このっ！」

アランに命中する。

アランも負けじと、コンバットナイフをこちらに投げてきて、頬を掠める。

そして、戻ってきたゼットソードをゼットシューターと合わせて。

『ゼットランス！』

ゼットランスを持って加速して、アランを一刀両断する。

アラン「うわああアア!!」

俺は何とか止まれた。

そこには、一刀両断されたアランが。

カルム「フウ……………」

アラン「やるじゃん……………」

そう言い残して、アランの頭上にDEADの文字が浮かぶ。

キリトの方も、クレハをダブル・サーキュラーに似た動きで倒していた。

カルム「何とか勝てたな。」

キリト「ああ……………」

カルム「チェイスとシノンの所に行きたいけど、疲れたな。」

キリト「あの2人なら大丈夫だ。少し休もうぜ。」

カルム「お前って奴は……………。まあ、いいか。」

俺たちは、GGOの夜空を眺めながら休憩する事に。

第19話 全ての決着

侑斗 side??

俺はすぐさま、英介の家へと向かい、家にいた妹に上げてもらった。?

妹さんに家中の戸締りを確認してもらって、怪しい奴が居たら知らせるように頼む。

? そして、英介の部屋に入り、部屋にはベッドに横たわる英介が居た。??

侑斗「英介……。」

?? タブレットを取り出して、大会の中継映像を見る。?

ラフコフとは、因縁がある。?

英介はチェイスとして、奴と決着をつけるつもりなのだ。

??侑斗「チェイス……。絶対に勝て。」??

シノン side??

暗視モードに変更したヘカートIIのスコープを右目で覗き込み、闇風と死銃を迎え撃

とうとする。?

スコープで確認するが、まだ闇風と死銃の姿は見えない。?

だけど、どちらも確実に接近しているのは間違いない。

? チェイスは広大な砂漠の中に立ち、闇風と死銃が来るのを待っている。? 事実上、今回の優勝候補者筆頭だと言われている闇風を一撃で仕留めるということに不安もあつた。?

闇風はAGI型ビルドでも最強のプレイヤーで前大会の準優勝者。

? 私の狙撃をかわす可能性も十分にあり得る。

でも、そんな不安もチェイスの姿を見てなんとか無くすことができた。? カルムやキリト、そしてチェイスがいたおかげで私は今もこうして戦うことができています。

そのためにも今私がやるべきことを果たさなければなりません。??

シノン（全て終わったら、彼に私の想いを伝えよう。拒絶されても、チェイスにこの想いを伝えたい。）??

そう思い、今持っているヘカートIIに話しかけるように呟く。? ?

シノン「お願い、私に力を貸して。ここからもう一度、歩き始める為の力を……。」?

? ついにスコープ越しに闇風の姿を捉えた。?

?

シノン「速い!」??

AGI型ビルドは衰退しているとよく言われているが、そうでもないと思つて思う。

?

決して立ち止まらず、高速で走り続けることで相手に照準を許さないダツシユは、プレイヤー名の通り、まさしく闇色の風のようだ。?

それでも今ここで倒さなければならぬ。?

すると、1発の銃弾がチエイスに向かっていく。?

死銃の物だ。?

チエイスは間一髪に避けて、弾丸は遙か後方の廃ビルに着弾して、ビルが崩れる。

? 闇風も、突然銃弾が飛来してくることに予想出来ていなかったため、岩陰に隠れて次いで岩陰へと方向転換しようとした。

? 闇風を倒せるチャンスは今しかない。?

ヘカートIIのトリガーを引き、弾丸が放たれる。?

スコープ越しに見た闇風は、驚きと悔しき、確かな賞賛の表情が浮かんでいた。?

闇風のアバターは数メートル以上吹き飛ばされ、砂の上を数度転がり、仰向けになつて止まった。?

直後、闇風のアバターには「DEAD」のタグが表示され、辺りにはグレネードが散らばっていた。??

ーチエイス!??

すぐに死銃が狙撃してきた方に銃口を向ける。？

チエイスはフアングスパイディーで弾丸を防ぎながらダツシュしていく。？

スコープの暗視モードを切り、倍率を限界まで上げ、銃弾が飛んできた位置を捉えた。

？

スコープには物陰からサイレント・アサシンでカイトを狙っている死銃の姿があった。？

——いた！

死銃を見ると、恐怖が湧き上がる。

それでも、チエイスに教えてもらった本当の強さで恐怖をねじ伏せる。？ すぐに死

銃に照準を合わせ、トリガーに触れて絞る。

？ だが、死銃は弾道予測線に気付き、私にサイレント・アサシンの銃口を向けてきた。

？

——勝負!!?

ヘカートIIのトリガーを引き、死銃もサイレント・アサシンのトリガーを引く。？

2つのライフルが同時に火を噴いた。同時に放たれた弾丸同士が衝突するという奇跡的なことが起こるかと思つたが、ギリギリのところですれ違う。？

死銃が放つた弾丸がヘカートIIに付いていた大型スコープを破壊し、それと同時にス

コープ越しに私が放った弾丸がサイレント・アサシンが完全に破壊されるのが一瞬見えた。

??シノン「ごめんね……。」

? ? 破壊されてしまった、この世界で稀少かつ高性能な銃であるサイレント・アサシンに、弔いの言葉を呟く。?

スコープが破壊され、今はもう遠距離狙撃は不可能となってしまった。?

?シノン「あとは任せたわよ、チエイズ。」??

チエイズside??

チエイズ（狙撃では死銃を倒せなかったか。だが、良くやった。後は任せろ。）??

これで、死銃のサイレント・アサシンは破壊されて、黒星・五十四式のみになった。

? それで撃つても、俺ならブレイクガンナーでも倒せる。?

そう思い、加速していく。

? ザザはバラバラになったサイレント・アサシンの銃身の下から細い金属棒を抜き出した。?

何だ? あれはクリーニング・ロッドか……? ?

だけど、あれはただのメンテナンストールで、攻撃してもHPは少しも減らない。?

だが、違和感を感じる。

? クリーニング・ロットは先端が針みたいに尖っていない? ?

ザザに躲されると同時に、ザザが攻撃してくるが、俺はファングスパイデーで防御する。

? だが、ファングスパイデーの隙間を突いて攻撃してくる? ?

俺は毒づく。??

チエイス「おい、GGOの中にエストックがあるなんて聞いてないぞ……!」?

ザザ「あの2人より、GGOを長く、プレイしているのに、不勉強だな。《ナイフ作製》スキル、上位派生、《銃剣作製》スキルで、作れる。長さや、重さは、このへんが、限界だが。」

チエイス「殺した奴のエストックをコレクションするだけじゃなく、銃の世界で自らエストックを作り上げるとはな。お前のエストック好きはとんだ悪趣味だな、赤目のザザ。」

?? 俺がSAO時代の名前を言うと、ザザが嬉しそうにしている。

??ザザ「まさか、俺のことを、覚えて、くれて、いたとはな。だが、お前は、あの頃と比べて、随分と腕が、落ちたな。昔のお前が見たら、失望するぞ。」

?チエイス「かもな……。だが、SAOはもう終わったんだ。当然だ。お前はまだ《ラフィン・コフィン》のメンバーのつもりか?」

? ザザ「そうだ。オレは、お前とは、違う。本物の、レッドプレイヤーだ。」?

チェイス「違う。今のお前はレッドプレイヤーじゃない。今のお前はただの殺人者だ。」

? ザザ「なんだと……?」??

俺の発言に、ザザがピクリと反応する。?

ザザに怒りの雰囲気伝わる。

?? チェイス「それに、ゼクシード達を殺したのも、お前が今持っている拳銃の力でも、お前たち自身の能力でもない。メタマテリアル光歪曲迷彩を使い、総督府の端末で大会出場者の住所を調べた。部屋に予め共犯者を侵入させ、銃撃に合わせて薬品を注射し、心不全による変死を演出をしたんだろ?」

?? それを言うと、ザザは沈黙した。??

チェイス「その様子だと、俺たちが導き出した答えは大体正解だったようだな。俺と戦うのが怖いなら、今すぐログアウトして警察に自首す……っ!」

?? ザザが銃撃して、俺は何とか躲す。??

ザザ「俺は、レッドプレイヤーだ……!! お前とは、違う……!! お前を殺して、あの女を絶望させて、あの女を殺す。」?

チェイス「シノンには手を出させない!」??

俺はフアングスパイダーにエネルギーを纏わせて、突っ込む。

? ザザはそれを躲して、《スター・スプラッシュ》を再現した8連撃技を撃ち込む。?

S A OやA L Oと比べて、威力が大きい。?

どういう事だ……???

ザザ「ク、ク、ク。効くだろ。こいつの、素材は、このゲームで手に入る、最高級の金属、だ。宇宙戦艦の、装甲板、なんだそうだ。」

チェイス「宇宙戦艦の装甲板か。それなら納得がいくな……。」

?? 随分と余裕だな。?

何故、こんなに余裕なんだ???

ザザ「それに、お前の動きは、全部見切っている。数ヶ月前に、この世界で、お前を見つけてから、ずっと、お前の、《ブレイクガンナー》の扱いを、見てきた。本当は、狙撃して、何度も殺してやりたかったけどな……。」??

くそ、S A OやA L Oと姿に服装、名前があまり変わってない事が仇になったか??

チェイス「お前の得意なエストックを用意して俺の動きを見切っているからが何だ。

いくぞ!」?

ザザ「イツツ・シヨウ・タイム。」??

シノ n s i d e ??

シノン「チエイス……！」??

思わず声が出る。?

約700メートル先でチエイスとザザが互角に戦っている。?

でも、チエイスの動きが見切られて、躲されたり、防がれている。?

チエイスが苦戦するのは初めて見る。

? そんな光景を見て、私はトリガーに指を掛ける衝動を必死に堪えていた。?

ヘカートIIのスコープは先ほど破壊されてしまい、いつものように狙撃でチエイスを援護することができない。

? スコープがない状態でこの距離から狙撃するのは危険だ。闇雲に撃てば、チエイスに当たってしまう可能性だってある。?

このまま、チエイスが勝つことを祈って、黙って見ていることしかできないことが辛かった。??

チエイス『お前に何があったのかは、俺にはとても分からない。けど、お前がたった1人で戦ってきたのは分かる。俺なんかよりもよっぽど強い、シノンは。例え、お前の手が血で染まっても、俺が握る。』

?? 私が泣いていた時、チエイスにこんな事を言われて、とても嬉しかった。?

でも、私がチエイスを助けるには一体どうすれば……!?

いや、ある。？

それは死銃にどれくらい効くのかは分からない。？

でも、やる価値はある。？

大きく息を吸って、チエイストと死銃が戦っている方を見る。??

チエイス side??

スピード、バランス、そしてタイミング。

全てが完成されている。

？ それだけじゃなく、俺の動きを完全に読まれている。？

GGOで見えていただけじゃなく、SAOで投獄されてからも、俺への復讐心を糧に、何千……何万回も同じ動作を繰り返して技を磨いたんだろう。

？ 奴が1年以上もかけて技を磨いている中、デスゲームから解放された俺は、すっかりゲームで死んでも現実で死なない世界で過ごしていたせいかな、腕がなまってしまったようだ。？

ここで俺が負けても現実の体が傷つくことも死ぬことはない。？

だが、俺が負ければ、ザザは絶対にシノンに《黒星・五十四式》で撃ち、現実世界にいる共犯者がシノン……朝田を手を掛ける。

？ 俺はシノン／朝田に絶対に殺させないと約束した。？

その約束を果たすためにも絶対に負けるわけにはいかない。？
だが、このままではジリ貧だ。

？ どうすればと思っていると、一本の赤いラインがザザを突き刺す。？

照準予測線だ。

ザザは突然の攻撃で、回避しようと後ろに大きく跳んだ。

だが弾丸は飛んでこない。

??ーチエイイス!!? ?

これはシノンの予測線による攻撃。

この半年間の経験と閃き、闘志をあらん限り注ぎ込んで放ったラストアタック。

? 幻影の一弾……ファントム・バレットを無駄にするわけにはいかない!? ザザはメ

タマテリアル光歪曲迷彩を使って姿を消そうとする。

??チエイイス「させるか!」??

すぐさまブレイクガンナーから銃撃して、不可視の何かに当たった。

??ザザ「グッ!」?

チエイイス「ここが銃の世界だということを忘れたのが命取りだったな!」? ザザ「ま

だだっ!」??

再び《スター・スプラッシュ》を放ち、俺はそれを食らう。

だが、俺はまだ負けてない。？

それに、俺には奥の手がある。

？ すぐさま、ブレイクガンナーにバットとコブラのバイラルコアというミニカーを装填する。

？ これは、ブレイクガンナーで使える大技、デッドリベレーションだ。

？ その大技をザザにぶつけて、その際に、腰のホルスターに収まっていた《黒星・五十四式》ごとザザを真つ二つに斬り裂いた。

？ 同時に爆発を引き起こす。

？ その衝撃で地面を転がりつつも、何とか起き上がる。？

分断されたザザのアバターと引き千切られた黒いボロマントが宙を舞い、俺から少し離れた場所にザザの上半身が転がり、その近くに僅かに遅れてエストックが地面に突き刺さった。

？ ザザ「まだ、終わらない。終わらせ……ない……。……あの人が……お前たちを……。」

？ 最後まで言い終える前に、ザザのアバターには「DEAD」と死亡したことを表すタグが浮かび上がる。??

チエイズ「いや、お前たち《ラフィン・コフィン》はもう終わりだ。ここにいるお前

たちや現実世界にいる共犯者もすぐに警察に捕まる。」

?? 俺はザザにそう言い残して、後ろを振り返ってこの場を離れる。?

砂漠の中を歩いていると、前の方からスコープを破壊されたヘカートIIを抱えたシノンがやってくる。

??シノン「お疲れ様……。?」?

チエイス「ああ、シノンも良くやった。最後のバレットラインには助けられた。」??
俺とシノンが拳を突き合わせていると、2台のバイクの音がして、カルムとキリトが来た。?

2人は、大分ボロボロだった。??

カルム「そつちも片付いたみたいだな。」?

キリト「苦戦したけど。」?

チエイス「こつちも苦戦した。」??

それでも、2人が無事でよかった。??

キリト「死銃が倒された今、この大会における危険は去った。シノンを狙っていた共犯者も捕まるのを恐れて逃げ出したと思うぜ。」

?チエイス「だが、俺は念の為、ログアウトしたら、シノンの家に向かう。キリトとカルムは、依頼人と親父に連絡してくれ。お前達の依頼人なら警察も動いてくれるしな。」

?

キリト「分かった。」?

カルム「えっ? 2人つてリアルでも知り合いなのか?」?

シノン「ええ、そうよ。2人ともチエイスの知り合いだから教えておくわ。私の本当の名前は朝田詩乃。住所は東京都文京区湯島四丁目……。」??

シノンがアパート名と部屋番号まで教えた途端、キリトとカルムは驚いた。??

カルム「湯島だったら、今俺たちがダイブしている千代田区の御茶ノ水からかなり近いぞ。」?

シノン「そこつて眼と鼻の先じやない。」?

? これには俺もシノンも驚いた。?

キリトとカルムは住んでいる埼玉県の川越市じゃなくて別のところからダイブしているとは聞いていたが、まさかこんなに近いところからダイブしていたとはな。??

カルム「それなら連絡したらすぐに俺たちも向かうぞ。」?

キリト「警察が来るまでの間に、1人でも多くシノンの傍にいた方がいいからな。」?

シノン「カルムはともかく、アンタも来るのね。」?

キリト「俺はダメなのかつ!」?

シノン「冗談よ。チエイスやカルムの話を聞いて私が思っていたよりマシな人だった

しね。」？

キリト「解せぬ……………」

？カルム「まあまあ……………」

?? 落ち込んでいるキリトをカルムが慰めていた。

？ この間にも中継カメラたちが集まってきて、大会の優勝者が決まるのを待ち望んでいるようにも見えた。？

？チエイズ「だけど、俺達4人で早く大会の優勝者を決めないとログアウトできないぞ。」

？キリト「そうだったな。どうやって決めるか？」？

カルム「俺は遠慮しておく。体力も限界だし、この状況でこの場の全員に勝てる気もしないから。それに、俺の帰りを待っている人にすぐ会いたいし。」？

キリト「俺も帰りを待っている人がいるからパス。やっぱり銃より剣の方が俺に合っているしな。でも、最後までいいは銃で決めるか。カルム、やるぞ。」？

カルム「ああ。」?!

キリトは《FNファイブセブン》、カルムは《ゼットシューター》を取り出す。？

向かい合い、お互いに向かって同時に発砲。

2人は倒れ、残ったアバターには「DEAD」のタグのタグが浮かびあがった。？

その顔は、安らかだった。??

シノン「まさか最後は2人揃って相打ちで死ぬなんてね。」

? チェイス「コイツらは慣れない銃の世界で戦ってきたんだ。今はゆつくりと休ませてやろう。」?

シノン「そうね。じゃあ、2人の邪魔にならないように決着を付けましょう。」?

チェイス「ああ。」

? 俺たちは、2人がいる場所から離れ、シノンと向き合う。??

チェイス「俺たちはどうやって決着を付ける? 昨日みたいに決闘スタイルをして勝負を決めるか?」?

シノン「それよりもいい方法があるわよ。チェイスは、第1回B0Bは優勝するはずの人が油断してお土産グレネードに引っかけかかって2人同時優勝になったことは知っているでしょ?」?

チェイス「ああ。」?

シノン「なら話は早いわ。」??

シノンは俺の手に何かを置いてスイッチを入れた。

? この世界で何度も見たことがあるものため、シノンが俺の手に置いたものはプラスマグレネードだとすぐに分かった。

??チエイス「おい、これってまさか……!」??

その先を言おうとすると、シノンが抱きついてきて、目を閉じて顔を近づけてきた。
?

そして、唇には温かくて柔らかい感触が伝わる。?

頭が真つ白になったが、すぐに今何が起こったのか理解し、「何やっているんだ」とシノンを引き離そうとするが、口は塞がれてガツチリと抱き着かれて実行することはできなかつた。?

数秒後、シノンは唇を離し、目を開ける。

シノンは頬を赤く染めていて、俺と間近で向き合っていた。??

シノン「チエイス、好きよ……。」?

? シノンが笑顔でそう言い残した瞬間、俺たちの間に眼も眩むほど強烈な光が生まれ、爆炎に包まれた。???

試合時間：2時間6分19秒? ?

第3回バレット・オブ・バレッツ本大会バトルロイヤル、終了了?

? リザルト：[Sinon] 及び [Chase] 同時優勝?????

ノーチラスside??

その頃のALO??

アスナ、ミト、ハヤトがログアウトした後、僕、ユナ、シリカ、ヒロミ、リズベット、ラット、クライン、リーファ、レイモンド、フィリップ、フィリア、レインは中継を見ていた。？

僕達が見ている中、チェイスが、死銃を倒し、キリトとカルムも戦っていた相手を見した。

??ヒロミ「どうやら、3人は、死銃を倒したみたいですね。」

?リズベット「全く、あたし達に心配かけたんだから、後であの3人にはちよつと説教しないとイケないみたいね。」？

ラット「全くだな。アイツらには長めの説教と行こうかな……！」

?シリカ「まあまあ、皆さん、あれだけ頑張っていたんですから、大目に見てあげましょうよ。」？

クライン「そうだけ。大会で残っているのもアイツらだけだし、ベスト4入賞を祝つてやろうぜ。」？

ノーチラス「よくやったよ……。」？

ユナ「そうだね！」??

その間にも、キリトとカルムがお互いを同時に拳銃で撃つて相打ちとなつて倒れ、残りはチェイスとシンンだけになった。

??リーファ「そう言えば、あの水色の髪をした女の人って、チェイスさんの彼女かな？」

?フィリア「確かに、チェイスと親しげだし。」

?レイン「そうだね……。」?

フィリップ「あり得るかもね。」?

レイモンド「まさか、アイツがねえ……。」?

クライン「そんなわけ無いだろ? チェイスは女つ気が無いんだぞ。」??

クラインが笑いながら否定すると、? 僕達が見ていた映像に、シノンがチェイスにキスをして、爆炎に包まれた所が映った。?

殆どが顔を赤くしてフリーズして、フィリップとリズベット、レイモンドは驚いたよ
うな表情をしていた。??

リズベット「最後の最後に良いものを見させてもらったわよ、チェイス。念のために
録画していて正解ね。」

?フィリップ「ほう。大胆だねえ。」?

レイモンド「これ、ネット中が大騒ぎする奴じゃねえのか? ……どうしたクライン?」
??

クラインが俯いていた。?

すると、顔を上げて。??

クライン「チエイスの野郎オオオツ！裏切りやがったなアアアア!!」??
クラインの叫び声イグドラシル・シテイ全域に響き渡った。

? これは後で知った事だが、GGOでも、男性プレイヤーが叫び、何人もの女性プレイヤーがシヨックを受けたとな。??

侑斗side??

俺は、英介の部屋でGGOの中継映像を見ていて、チエイスが決着を着けたのを見て、ホツとしていた。

??侑斗「つて事は、あと少しで戻ってくるな。」??

真つ先にお祝いしてやろう。?

そう思っていたが、シノンというプレイヤーがチエイスにキスしているのを見て、驚いた。??

侑斗「おおっ!.....これは、これは。お2人さん、良い画だねえ。」??

これは、挿絵いがあるぜ。?

それにしても、大胆だねえ。

第20話 伝わる想い、繋がる絆

詩乃 side

第3回BOBが終了し、一度待機空間に戻されてログアウトするまでのカウントダウンが表示される。

それが0になった途端、私の意識は現実世界に戻って来た。

エアコンに電源は付いていて部屋の中は暖かった。

しかし、照明は付いていなかったため、部屋の中は真っ暗だ。

アミクスフィアを外してベッドから起き上がり、部屋の照明を付ける。

念のために室内からキツチン、ユニットバスまで人が隠れられそうなところを隅々まで探したが、誰もいなかった。

窓や玄関のドアの鍵をチエックしたところ、鍵はしっかりかかっている、部屋に侵入した形跡は特に見られなかった。

もちろん、玄関のドアにある電子ロックを破って入り込んで来た死銃の共犯者が、部屋の中で携帯端末機を使って大会の中継を見て、死銃とその仲間たちが全員負けたとわかると同時に逃亡したという可能性もある。

その場合、現実世界にいる共犯者はこのアパート付近にいるに違いない。

チエイス……狩野君、そしてキリトとカラムの2人が呼ぶであろう警察が来るまでに、まだ時間がかかる。

1人では心細く警察……特に狩野君には早く来てもらいたかった。

その時、キンコーンと玄関のチャイムが鳴り響いた。

私は反射的にビクツと反応し、ドアを凝視した。

更に2回同じ音が鳴り響いた。

——もしかして死銃の共犯者が……。

恭二「朝田さん、居る？ 僕だよ、朝田さん！」

聞き覚えのある声。

レンズを覗いてみると、ドアの前には新川君だった。

詩乃「新川君？」

恭二「あの……、どうしても、優勝のお祝いが言いたくて……。コンビニでだけドケーキを買って来たんだ。」

新川君はケーキが入っているとされる小さな箱を掲げて見せた。

詩乃「で、でもずいぶん早かったね……。」

恭二「実は近所の公園で中継を見てて、決着が着くとすぐにコンビニに行って買った

んだ。シノン……朝田さんなら必ず優勝するって思っていたからさ。」

待機空間での待ち時間を入れても、大会が終わって5分弱しか経ってないけど、それなら納得がいく。

詩乃「ちよつと待って、今開けるね。」

ドアのチェーンを外し、電子ロックを解除すると、新川君を部屋の中へと入れた。

もちろん、チェーンと電子ロックどちらもかけ直した。

部屋に戻ると新川君のためにクツシヨンを用意する。

新川君をそれに座らせ、私はベッドに腰を降ろした。

恭二「あの……優勝、本当におめでとう。凄いよ、朝田さん……シノン。とうとうG
GO最強ガンナーになっちゃったね。でも、僕にはわかってたよ。朝田さんならいつか
そうなるって。朝田さんには、誰も持っていない、本当の強さがあるんだから。」

詩乃「あ、ありがとう……。でも、優勝って言ってもチェイスと同時優勝だったから
……。」

恭二「そうだったね。後で彼にも優勝のお祝いをしないといけないね。」

詩乃「うん。狩野君……チェイスには色々助けられたから、今回の本当の優勝者は
チェイスかな。」

恭二「その……チェイスのことで、ちよつと気になることがあるんだけど……。中継

で、砂漠の、洞窟の中が映つてて……。」

詩乃「あ、あれは……。」

あの時は、チエイスに抱きついて散々泣いたり喚いたりしていた。

それを新川君に見られたと思うと恥ずかしい。

なんて説明したらいいのか考えていると、新川君が言葉を発した。

恭二「あれは……チエイスとあの2人に脅されたんだよね？ 何か弱みを握られて、

仕方なくあんなことをしたんだよね？」

詩乃「え？」

狩野君／＼チエイスとの関係を聞かれると思つたが、予想もしていなかつたことで啞然

としてしまう。

恭二「脅迫されて、チエイスの戦つてる相手の狙撃までさせられて……。」

後はその2人を相討ちにするように誘い込んで、チエイスにあんなこととして油断させ

て、グレネードに巻き込んで倒したよね？ だけど、それだけじゃ足りないよ。もつと思

い知らせてやらないと……。」

詩乃「あ……ええと……。」

絶句してから、懸命に言葉を探して、新川君の誤解を解く。

詩乃「あ、あれは脅されてたわけじゃないの。チエイスは確かに無愛想で口も悪いけ

ど、根はいい人なのは新川君も知っているでしょ。それに、あの2人はチェイスの知り合いで悪い人じゃないから……。実は大会中に例の発作が起きそうになって、チェイスに助けられたの。なのにチェイスにきつく当たっちゃって……。酷いことをしたのは私の方。後で謝らないと……。」

恭二「そ、それで、朝田さんはチェイスのことは特に何とも思っていないんだよね？」
突然そんなことを聞かれて答えられなかった。

恭二「朝田さん、僕に言ったよね。『待ってて』って。」
確かに大会前、近所の公園で新川君にそう言った。

しかし、それは『何時か自分を縛るものを選び越えてみせる』、それができて『ようやく普通の女の子に戻れる』という意味で言った。

恭二「言ったよね。待ってれば、いつか僕のものになってくれるって。だから、だから僕……。」

ここは正直に自分の本当の気持ち伝えなければならぬ。
私は狩野君／チェイスが好きなんだ。

これで新川君を傷付けてしまうことになってしまいかもしれない。
それでも言おうとしたが……。

恭二「言つてよ。チェイス……英介のことは何でもないって。嫌いだって。」

詩乃「ど、どうしたのよ。急に……。」

新川君の様子がおかしい。

すると、新川君が立ち上がって、こちらに近づいてくる。

恭二「僕がずっと一緒にいてあげる。チェイス、英介に頼らなくても。僕がずっと、一生、君を守ってあげるから……。朝田さん、好きだよ、愛してる。僕の朝田さん、僕のシノン。」

詩乃「や、やめてっ！」

何か悪霊に憑りつかれたような感じの新川君が怖くなって突き放す。

新川君は尻もちをついた。

その拍子に彼が買ってきたケーキが入った小さな箱ガテールから落ちる。

恭二「だめだよ。朝田さんは僕を裏切っちゃだめだよ。僕だけが朝田さんを助けてあげられるのに……。」

新川君は怖くて動けなくなっている私にゆっくり近づいてきて、ジャケットに右手を差し込み、何かを取って私の脇腹に付きつけてきた。

詩乃「し、しん……かわ……くん……?」

恭二「動いちゃだめだよ、朝田さん。これは無針高圧注射器っていう注射器なんだ。これに入っているのは《サクシニルコリン》っていう薬で、これが身体に入ると筋肉が

動かなくなつてすぐに肺と心臓が止まるんだよ。」

注射器、薬。

それは、キリト達が言っていた事だ。

これらを使い、ゼクシードを始めとする4人を殺害したのではと。

それに、新川君の家は大病院。

万が一に備えて、家に入れるようにマスターキーがある。

そして、薬を何らかの方法でそれらを手に入れるのは可能だ。

詩乃「じゃ、じゃあ……、新川君……君が、現実世界にいる死銃の仲間なの……？」

恭二「へえ、凄いね。死銃の秘密を見破ったんだ。そうだよ、僕は死銃の1人だよ。

今までは《ステルベン》を操つて2人のプレイヤーを撃つてたんだよ。だけど、今日だけは僕の現実側の役をやらせてもらったんだ。だって朝田さんを、兄さんや兄さんの友達に触らせる訳にはいかないからね。」

そういうえば、新川君には、病弱な兄がいると言っていた。

詩乃「もしかして、君の……お兄さんは、昔SAOで殺人ギルドに入っていたの？」

恭二「へえ、そんなことまで知ってるんだ。うん、そうだよ。昌一兄さんとチエイスの間に因縁があつたっていうから、今日のターゲットにチエイスも入れて現実でも殺そうと考えたんだよね。でも、アイツの父親が刑事だつていうから、現実で殺すのは諦

めてGGOの中だけで殺すことになったんだ。」

詩乃「ど、どうして、新川君はチェイス……狩野君を殺そうとするの？いくら君のお兄さんと彼の間に因縁があるからって、友達を殺そうとするんておかしいよ。」

恭二「友達？最初はアイツのこと友達だと思っていたよ。でも、アイツはGGOで僕より強くなつて、拳句の果てにシノンを……朝田さんまで奪つていった。そんな奴、もう友達じゃないよ。」

新川君が、狩野君／＼チェイスをそんな風に思っていたなんて……。

2人が出会ったのは、新川君が私に付き添つてアミュスフィアとGGOのソフトを買いに行つた時だ。

そこでGGOのソフトを買いに来た狩野君と知り合い、同性で同年代ということもあつて2人はすぐに意気投合した。

新川君も学校以外で共通の友達ができたことを喜んでいたので……。

きつと、狩野君／＼チェイスに嫉妬して、こんな事をしていただけだ。

それに、まだ注射器のボタンを押しないうってことは説得させることもできるかもしれない。

そつと極力穏やかに言葉を発した。

詩乃「まだ……まだ間に合うよ。やり直せるよ。神崎君と仲直りすることも、お医者

様になることだつて……。」

恭二「もうそんなのどうでもいい！親も学校の奴らもどうしようもない愚か者ばかりだ！だから、僕はGGOで最強になればそれでよかつた。なのに、……ゼクシードのクズが……AGI型最強なんて嘘をつ！GGOは僕の全てだつたのにつ！現実を全て犠牲にしたのにつ！シユピーゲルもチエイスより強くいられたハズなのにつ！畜生つ……!!」

それでゼクシードたちを……5人のプレイヤーを殺したつていうの……？

恭二「これでもう、こんなくだらない現実には用はない。さあ、朝田さん。一緒に《次》に行こう。GGOみたいな……ううん、ALOみたいなファンタジーっぽいやつでもいいや。そういう世界で生まれ変わつてさ、結婚して一緒に暮らそうよ！一緒に冒険してさ、子供も作つてさ、きつと楽しいよ！」

もう、こんな現実には嫌だ。

ごめんね……、チエイス、カルム、キリト。

あなた達に助けられたのに、無駄になつちやう。

とある事を思い出した。

それは、3人がこちらに向かつているという事だ。

今の新川君に鉢合わせたら、3人も危険に晒される。

「ーだからって、どうにもならないよ。

そう塞ぎ込んでいると、肩に手を置かれた。

そこにいたのは、GGOの私、シノンだった。

——あなたは一人で頑張ってきた。せめて最後にもう一度戦ってみようよ。私も一緒にいるから大丈夫だよ。そして彼にもう一度会って今度はちゃんと自分の想いを伝えよう。だから、さあ行こう。

シノンは暗闇の世界にいる私を連れて光に向かって上昇し始めた。

意識が現実世界へと戻る。

新川君は私が着ているトレーナーを上半身から引き抜こうとしていた。

隙を見て身体を左に傾けると注射器の先端が滑り、体から離れる。

すぐに注射器を抑え、顎に掌低を、更に左目にパンチを喰らわせる。

左目に強く攻撃を受けた新川君は怯む。

その隙に新川君を蹴って振り払い、玄関に向かって走る。

急いでドアの鍵を全て開けてドアを開けようとしたのと同時に、右足を冷たい手がぐつと握って私を引っ張ろうとする。

振り向くと魂の抜け落ちた顔をした新川君が両手で私の足を捕えていた。

幸いなことに、注射器は手に持っていない。

必死に抵抗するが今度は振り払うこともできなく、どんどん奥へと引き戻される。そして新川君の身体が押し掛かってきた。

恭二「アサダサン！アサダサン！アサダサン！アサダサン！」

怖くなつて悲鳴をあげそうになつた時だった。

ドアが開かれ、誰かが入つてきて新川君の顔面に膝蹴りを喰らわせた。

何が起つたのか後ろを振り向くと新川君を取り押さええている狩野君の姿があつた。

英介「大丈夫か、朝田！」

詩乃「狩野君……！」

恭二「チエイスウウウツ！」

新川君は怒り狂つた獣のように狩野君に突進して殴りかかろうとし、狩野君は新川君が振るつてきた拳を掴んで必死に抑え込む。

英介「恭二、まさかお前が死銃の1人だつたなんて！一体何の真似だ!?! どうしてこんなことをするつ!?! お前はそんなことをする奴じゃないだろつ!!」

恭二「うるさい！英介は知らないだろつ！朝田さんが本物のハンドガンで、悪人を射殺したことがある女の子だつて！それを聞いてからずつと憧れていたんだ！」

詩乃「じゃあ、新川君はあの事件のことを知つたから私に声をかけてきたの……？」

新川君は狂つたように語り始めた。

恭二「そうだよ。本物のハンドガンで、悪人を射殺したことのある女の子なんて、日本中探しても朝田さんしか居ないよ！本当に凄いや！僕はそんな朝田さんを愛しているんだよ！」

詩乃「そ、そんな……。」

家族以外で狩野君と同じく唯一心を許せる存在だと信じていたのに……。

シヨックを受けていると、狩野君が声をあげる。

英介「何を言っている!?それは、愛しているとは言わない!!」

恭二「何だと!」

怒りの声を上げて、殴り合う。

英介「それは、ただの所有欲だ！本当に愛しているのなら、朝田を追い詰めたりはしないはずだ!!」

恭二「コイツ！昌一兄さんの代わりに僕がお前を殺してやる！死ぬええええつ!!」
逆上した新川君は右手に注射器を持って狩野君に襲い掛かる。

詩乃「狩野君!!」

私が声を上げた瞬間、狩野君は注射器を持っている新川君の右手を取り押さえて。

英介「こつの、バカ野郎が!!」

恭二「ぐはっ!」

新川君の顔面にストレートパンチを叩き込んで、新川君は気絶した。

狩野君は気絶している新川君に近づき、彼が持っていた注射器を取り上げた。

英介「恭二……。まさかお前がそこまで追い詰められて、これほど俺のことを憎んでいたなんて……。何で気付いてやれなかつたんだ……。俺がもつと早く気づいてやれば、こんなことにはならなかつたかもしれないのに……。」

拳を強く握りプルプル震えて俯いている狩野君の背中にそつと手を置き、声をかける。

詩乃「時間はかかるかもしれないけど、また新川君と仲良くなれるよ。」

英介「朝田……。」

すると、ドアの外が騒がしくなる。

???? 「おい、ドアが開いてるぞ！」

???? 「まさか……。英介、シノン！」

玄関のドアが開いて2人の少年が入って来た。

1人はやや長めの黒い髪をした黒のライダージャケットを着た少年、もう1人は、黒の癖つ毛で、紺色のフード付きの上着を着ている少年だ。

???? 「英介！怪我してるが、大丈夫なのか!？」

英介「犯人とやり合った時に、ちよつと口を切っただけだ。気にするな。」

狩野君は紺色のフードを着た少年を落ち着かせて、黒のライダージャケットを着た少年に注射器を渡した。

英介「キリト、お前が言った通り、犯人は何かの薬品が入った注射器を持っていた。これに入っている薬品を警察が調べたらすぐにわかるだろ。」

今、黒のライダージャケットを着た少年のことをキリトって……。

もしかして、あの少女みたいなアバターを着た少年の事をキリトって……。

ということは、癪っ毛の少年がカルムなんだね。

よく見てみると、私が知っているカルムとは髪型が違うだけでほとんど変わらない。

狩野君が2人と話し終えると、私の方に歩み寄る。

英介「すまない。遅れて悪かった、朝田。お前に怖い思いをさせてしまった……。」

英介「別にあなたが謝らなくてもいいわよ。それよりも助けに来てくれて、ありがとう……。」

すると、狩野君達が笑みを浮かべる。

英介「助けに行くって約束したからな。もう忘れたのか？」

私は首を軽く振って答える。

すると、何故か両目から涙が溢れ出す。

詩乃「あ、あれ……。」

涙は止まることなく、狩野君がそつと抱きしめてくれた。

キリトとカルムがやって来てから数分後には、遠くからパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

サイレンの音がしなくなると、車のドアが開いて閉まる音がし、足音が聞こえてくる。あれから、部屋に4人の警官と1人の刑事がやってきた。

やってきた刑事さんは、狩野君のお父さんらしく、すぐに何が起きたのか理解して対応してくれた。

キリトとカルムは事情聴取のために2人の警官と共に最寄りの警察署に行き、新川君は逮捕されて警察病院に運ばれた。

そして、私と神崎君も念のためにと覆面パトカーで別の病院に送られた。

病院に着くと念のために検査され、私も狩野君も軽い切り傷や打撲で特に異常なしと診断結果が出た。

その後、刑事さんによる事情聴取が行われ、午前2時過ぎに医師が精神的ストレスが限界と判断し、事情聴取の続きは明日となった。

病室から出て薄暗い病院の廊下を歩いていると、自動販売機のコーナーの前にあるベンチに誰かが腰掛けている姿があり、近づいてみる。そこにいたのは、狩野君だった。

詩乃「狩野君。」

英介「朝田か。今日の事情聴取は終わったのか？」

詩乃「うん。」

この場には、私と狩野君の2人しか居ない。

私はGGOでシノンとして狩野君……チェイスにキスをして自分の想いを告げた。

そのことを思い出して無性に恥ずかしくなってしまう。

いくらゲームの中だとはいえ、あれは私のファーストキスだった。もしも、あれが狩野君／チェイスにとってもファーストキスだったら……。

なんて説明したらいいのか必死に考えていると、狩野君の口が開く。

英介「朝田、お前が……いや、シノンが用意したグレネードが爆発する直前の事で言いたい事がある。」

詩乃「な、何……?」

英介「俺は、お前を気にかけていた。お前の事が心配だから、昔の俺を見ているような気がしてたからだと思ってた。だが、さっきシノンに告白されてからやつと自分の本当の想いに気が付くことができた。そんな鈍い奴を好きになつていいのか? 自分と言うのはアレだが、俺は周りから無愛想だの、鈍いだのと言われているんだ。それに、恋愛ごとに関する知識もない。後悔しても知らないぞ……。」

何だ、そんなことか。

拍子抜けして、笑う。

詩乃「もちろん、知ってるわよ。あなたって、本当に不器用ね。」

英介「……………これは生まれつきだ。」

そう指摘されて、そつぽを向く。

だけど、すぐに真剣な表情になって、こちらを見てくる。

英介「朝田……………いや、詩乃。詩乃がどんな過去を背負つていようと、俺には関係ない。

俺は、詩乃としても、シノンとしても好きだ。だから、俺と恋人になつて欲しい。」

不器用だが、真つ直ぐな告白。

人殺しと呼ばれた私なんか彼のことを好きになる資格もなく、このことを彼に知られて嫌われるのが怖いと思つていたが、彼の想いを知り、そう言われて凄く嬉しかった。

詩乃「もちろん。チェイスだけじゃなくて、狩野君……………いいえ、英介としてもあなたが好きです。私を……………英介の恋人にして下さい。」

英介「ああ……………」

そう告げて、沈黙が入る。

そんな空気の中。

英介「詩乃、その眼鏡つて確か度が入つてないんだつたよな？」

詩乃「え？ええ……………。どっちかというとお守りでつけてるから……………」

英介「じゃあ……外しても問題ないな。」

そう言うと、英介は片手で私をそっと抱き寄せて、私の眼鏡を外し、目を閉じて唇を重ねてきた。

私は嫌がることもなく、黙って英介からのキスを受け入れた。

英介「これからよろしく頼む、詩乃。」

詩乃「ええ……こちらこそよろしく、英介。」

私と英介はそれからしばらくの間、2人の世界に入り浸っていた。
すると。

??? 「いやあ。お二人さん、良い画だね！」

「!?」

そんな2人の空気をぶち壊す傍若無人な声がしてきた。

そこに居たのは、1人の男性だった。

すると、英介が少し呆れ顔をする。

英介「何してんだ？侑斗。」

侑斗「いやさ、お前の親父さんから、英介の様子を見てくれて頼まれてさ。」

詩乃「……誰？」

英介「幼馴染だ……。」

侑斗「どうも！狩野英介の幼馴染、詩島侑斗です！よろしく！」
よかった、不審者じゃなくて。

でも、何でここに？

と思つていると、侑斗さんはスマホを取り出す。

侑斗「お前らさ、今、MMOトゥデイのトレンドになつてるんだぜ。」

詩乃「え？」

そう言つて、見せてきたのは、『冥界の女神が、ラブラブ生チュー継を起こす!!』と、デカデカと書かれていた。

それを見て、恥ずかしくなつて、縮こまつてしまう。

英介「おい。詩乃を追い詰めるな。」

侑斗「わりわり。……お前らさ、GGOではしばらく2人一緒の方が良いぜ。」

英介「分かった。……用件はそれだけか？」

侑斗「そうだな。……じゃあ、お二人さん、もう少しイチャイチャしてても良いぜ。」

侑斗さんは、そう言つて、去つていった。

詩乃「随分、テンションが高いわね……。」

英介「アイツ……。絶対に楽しんでるな。」

詩乃「……でも、もう少しだけ、2人一緒でいていい？」

英介「ダメというわけ無いだろ。」
という事で、もう少し、2人の世界に入り浸る事に。

第21話 踏み出す、新たな一步

あの事件から2日が経とうとしていた。

この日、私は学校の敷地内にある花壇の縁石に腰掛けて、12月の寒い風が吹く中、あの人物たちが来るのを待っていた。

10分近く待ち続けていると、甲高い笑い声と共に複数の足音が近づいてきた。

校舎の北西端と焼却炉の間から現れたのは、遠藤と取り巻きの2人だった。

遠藤たち唇を歪め嗜虐的な笑みを浮かべた。

私はカバンを置いて遠藤たちに向かって言った。

詩乃「呼び出しておいて待たせないで。」

取り巻き「朝田さあ。最近マジちよつと調子乗ってない？」

取り巻き「本当、ちよつと酷くなーい？」

遠藤「別にいいよ。友達なんだから。なあ、そんなかしさあ、あたしらが困ってたら助けてくれるよな？取り敢えず2万でいいや。貸して？」

遠藤たちはいつものように悪い笑みを浮かべ、お金を要求してきた。

対する私は一旦拳を強く握り、度の入っていないNEXTポリマーレンズのメガネを外

し、睨みつけてこう言い放った。

詩乃「前にも言ったけどあなたにお金を貸す気はない。」

遠藤「今日はマジで兄貴からアレ借りて来てんだからな。」

怒った遠藤は、大量のマスコットが付いた通学用のカバンからモデルガンを取り出した。

右手に持つと私に銃口を向けてきた。

その瞬間、いつものように心臓の鼓動が早くなり、呼吸が苦しくなってしまった。

遠藤「これ、絶対人に向けんなって言われたけどさ。朝田は平気だよな。慣れてるもんな。ほら泣けよ。朝田。土下座して謝れよ。」

やっぱりダメなのかと諦めそうになっていた時だ。

不意に「お前なら大丈夫だ。俺が付いている」と英介／チェイスの声が聞こえた気がした。

——そうだ、今の私には英介／チェイスがいるんだ。

銃の扱いがわからずトリガーを引けずにいる遠藤から、モデルガンを奪い取った。

詩乃「1911ガバメントか。お兄さん、いい趣味ね。私の好みじゃないけど。大抵の銃はセーフティーを解除しないと撃てないの。」

啞然としている遠藤たちに説明しながら、手慣れた手付きで安全装置の解除とハン

マーを起こす。

6メートルほど離れた焼却炉の傍らに、引っくり返されているポリバケツの上にある空き缶があるのを見つける。

それに銃口を向けて構え、トリガーを引いた。

すると、発射された弾は空き缶に命中し、ポリバケツから落ちた。

私が遠藤たちの方を見た途端、彼女たちは怯んだように口元を強ばらせて半歩後退した。

遠藤「や、やめ……！」

詩乃「確かに、人には向けないほうがいいわ。これ。」

そう言いながらモデルガンのセーフティーをかけて遠藤に渡した。

遠藤は、呆然としていた。

遠藤たちが視界からいなくなった途端、両足から力が抜けて、この場に倒れそうになるが、何とか堪えた。

詩乃「やっぱりまだキツイわね……。」

でも、私にとつて大きな一歩になっただろう。

そう言い聞かせ、眼鏡を掛けなおしてこの場から去っていく。

下校しようと校門に向かってしていると、学校の敷地を囲む塀の内側に何人かの女子生徒

が集まって、チラチラと校門を見て何か話している光景が見えた。

その中に同じクラスでそこそこの仲の良い2人の女子生徒がいるのに気が付き、彼女たちには歩み寄った。

すると、2人も私に気が付いて声をかけてきた。

女の子「朝田さん、今帰り？」

詩乃「うん。何かあったの？」

女の子「校門のところ、この辺の学校の制服じゃない男の子がいるの。バイク停めて、ヘルメットを2つ持っているからウチの生徒を待っているんじゃないかって。悪趣味だけど、相手がどんな人なのか興味あるじゃない？」

詩乃「その男の子ってどんな人なの？」

女の子「それがね、黒髪で、大人びた感じの男の人だよ。」

女の子「何か、漫画やドラマで出てきそうなクールなイケメンって感じ！」

何処か興奮するかのよう話す2人。

黒髪でクールなイケメンというと、彼しか思い浮かばない。

すぐに時計を確認してみるとすでに約束の時間は過ぎていた。

こっそり堀から覗くと、校門の近くに1台のバイクを停め、2つのヘルメットを用意して待っている英介の姿があった。

英介は私に気が付くとこっちに歩み寄ってきた。

英介「詩乃。遅かったから心配したぞ。」

詩乃「ご、ゴメン。ちよつと色々立て込んで……。」

英介「まあ、何もなかったからいいが……。」

でも、こうやって迎えに来てくれて凄く嬉しかった。

隼人と話していると、先ほどの2人が声をかけてきた。

女の子「え？そのクールなイケメンさんって、朝田さんの知り合いだったのっ!？」

女の子「もしかして彼氏っ!？」

詩乃「え……えつと……。」

英介「彼氏だが、どうかしたのか？」

恥ずかしくて中々言えずにいると、英介が堂々とそう宣言した。

頬が熱くなって赤く染まっていくのが伝わってくる。

本当のことだけど、凄く恥ずかしい。

周りにいた女子生徒の中には羨ましがっていたり、「彼女持ちだったんだ……」と残念そ

うにしている人もいた。

女の子「そ、そうだったんだ。だったら2人の邪魔しちゃいけないよね。」

女の子「うん。じゃあね、朝田さん。今度詳しい話教えてね。」

後ろから2人にそう言っているのが聞こえる。

英介「まさか、こんなに注目されるものだったとはな……。」

詩乃「校門の前に他校の生徒がバイク停めて、2つヘルメットを持って誰かを待つていたら目立つのは当たり前でしょ。」

英介「そういうものなのか……。」

改めて英介は恋愛事には不器用だなど思ってしまう。

でも、私は隼人のこういうところも好きだ。

英介「ヘルメットだが、妹と一緒に乗る時に使っているので勘弁してくれ。」

そう言つて渡してきたのは1つのフルフェイス型のヘルメットだった。

私は「構わないわ」言いながら、ヘルメットを被る。

英介もヘルメットを被り、バイクに乗った途端、何かに気が付いて振り返つて声を掛けてきた。

英介「ところで、スカートは大丈夫か？」

詩乃「体育用のスパッツはいているから心配ないわ。」

英介「そういう問題なのか？だとしても、他の男に見られるのはあまりいい気になれないが……。」

詩乃「英介もそういうのは気にするんだね。」

英介「当たり前だ。」

少しは取り乱すのかなと思つたけど、意外と冷静だった。

これは、かなり手強い。

英介「危ないからしつかり掴まっけていろよ。」

詩乃「ええ。」

バイクのリアシートに乗り、英介の身体にギユツと手を回す。

そして私たちが乗るバイクは走り出した。

私たちがやって来たのは、銀座にあるいかにも高級そうな喫茶店だった。

こういうところには入ったことがないため、狼狽えてしまう。

英介が「俺も初めてだから大丈夫だ。」とポーカーフェイスを崩さずにそう言つてきて

落ち着くことが出来た。

ウエイター「いらつしやいませ、お二人様でしょうか？」

英介「いや、待ち合わせで……。」

英介は白いシャツに黒蝶ネクタイのウエイターさんにそう言い、高級感あふれる喫茶店内を見渡すと、その中にいた太い黒縁眼鏡をかけてスーツを着た男性がこちらに気が付き、無邪気な笑みを見せながら手を大きく振る。

??? 「おーいチエイイス君、こつちこつち！」

手を振っているメガネをかけた男性の隣には、少し不機嫌そうにしてその男性を見て
いるキリトがいた。

私たちはそこへ行き、向かい側に空いている席へと座った。

ちなみに、英介曰く、キリトの本名は、桐ヶ谷和人というらしい。

和人「遅いぞ、チエイイス。」

英介「悪い。」

和人「まあ、いいけど。」

英介とキリトが話をしている間にウェイターさんが私と隼人にメニューとおしぼり
を持つてくる。

メニューを見てみるとのものもほとんどが4ケタの値段で驚いてしまう。

??? 「さ、2人もお金のことを心配しないで何でも好きに頼んでよ。」

和人「チエイイス、シノン。この人が全額奢ってくれるっていうから、遠慮なんていら
ないぞ。どうせ代金は国民の血税だからな。」

和人の言葉にフツと軽く笑う英介。

英介「そう言うことなら安心して頼めるな。」

??? 「チエイイス君まで……。カルム君は少しは遠慮してくれたのに……。」

英介とキリトの言葉にメガネをかけた男性は苦笑いを浮かべる。

英介「ところで、当のカルムは一体、どこに行っただよ？」

和人「ああ、カルムならミトを迎えに行っているんだよ。散々心配かけたから、迎えに来いってさ。」

英介「なるほどな。」

ミトというのは、カルムから聞いていて、恐らく、カルムの彼女だろう。

そう考えながら、私はメニューを見てオーダーする。私が頼んだものだけでも2200円で、英介とキリトのも合わせると合計金額はかなりのものとなった。

ウェイターさんが注文したものを確認すると、この場から去っていく。

すると、メガネをかけた男性は私に名前を名乗って、1枚の名刺を渡してきた。

私もその人に自分の名前を名乗る。

メガネをかけた男性は、総務省通信基盤局の菊岡誠二郎さんという人らしい。

菊岡さんの話から、現時点で判明している事件の内容を聞かされた。

あの事件の直後、新川君、ステルベンこと新川昌一／ザザが逮捕された。

新川昌一の供述から、SAOでジョニー・ブラックというプレイヤーネームを名乗っていた金本敦という男も共犯者の1人だということが判明した。

金本敦はまだ逮捕されてなく、サクシニルコリンのカートリッジを1本持って逃亡中だという。

しかし、菊岡さんの話によると彼も捕まるのも時間の問題らしい。

死銃が誕生したのは、リアルマネートレードで透明化できる能力を持つマント、メタマテリアル光歪曲迷彩を購入してからだった。

そのマントと双眼鏡を使い、晶一はリアル情報を盗むのに熱中した。

同じ頃、新川君はキャラクター育成の行き詰ったという。

AGI型万能論だという偽情報を流したゼクシードを深く恨み、更に自分より遅く始めた友達……チェイス／英介がどんどん強くなっていくことに焦っていた。

その話を聞いた晶一は、新川君の友達がSAOで因縁があつたチェイスだと知り、ゼクシードの本名と住所を教えてどのように肅清するか話しを持ち掛けた。

連日ゼクシードをどう肅清してやろうか話し合う内に、今回の《死銃事件》の計画が出来上がり、同時に新川君もチェイス／英介に対して憎悪を抱くようになってしまった。

最終的に、彼らのお父さんが経営する病院から緊急時に電子銃を解錠するマスターコードと高圧注射器、劇薬のサクシニルコリンを盗み出す算段をつけた。

英介「なるほどな。大病院なら、サクシニルコリンもあるし、緊急時のマスターコードもあるからな。それを悪用したのか。」

菊岡「そういう事だね。」

彼らは念入りに下調べをし標的をセキュリティの低い場所で一人暮らしをしている人物に絞った。

昌一が現実世界の実行犯とゲーム内のサポート役を交代で行い、新川君が死銃でもあるステイブーン……《ステルベン》で、ゼクシードと薄塩たらこの2人を銃撃した。

だが、GGOのプレイヤーたちは死銃に怯えるどころかデマ扱いをしていたため、今回の大会でも私を含めて3人を殺すこととなった。

今回のターゲットは、標的はゼクシード達と同じ条件を満たす《ペイルライダー》、《ギャレット》、そして私だった。

更に金本敦を仲間に引き入れ、金本に《ペイルライダー》と《ギャレット》の実行役をやらせ、新川君が私の担当を引き受けたという。

昌一の供述に基づく話によると、今回に限って新川君が固執したらしい。

更に、菊岡さんが新川昌一のことを話してくれた。

彼は幼い頃から病気がちで、中学校を卒業するまで入退院を繰り返して、高校入学も一年遅れたらしい。

そのため、総合病院のオーナー院長を務めるお父さんは弟の新川君を後継者にしようとした。

新川君には家庭教師を付けるなどしたが、兄の昌一の方はほとんど顧みなかった。

兄は期待されないことで、弟は期待されることでまた追い詰められたのかもしれないと、聴取に応じた父親が話していたらしい。

それでも、兄弟仲は悪くなかったらしい。

晶一はMMORPGにのめり込み2022年、《ソードアート・オンライン》に捕われた。

ソードアート・オンライン……SAOから生還した後、新川君だけにこう語った。自分はあの世界で多くのプレイヤーを殺し、真の殺戮者として恐れられたことを。

新川君にとって、兄は英雄に見えていたそうだ。

菊岡さんの話が一通り終わると、英介はあることを尋ねた。

英介「なあ菊岡、恭二はこれからどうなる？」

菊岡「彼は未成年だから、医療少年院に収容される可能性が高いと思うよ。実際、人が4人も死んでいるからね。」

英介「それで、面会できるのはいつになる？」

菊岡「送検後もしばらくは拘留されるから、鑑別所に移されてからになるかな。」

英介「恭二は俺がもつと早くにアイツの気持ちに気づいて相談に乗ってれば、こんなことにはならなかったはずだ。アイツがこうなったのには俺にも責任がある。恭二が俺のことを憎んでいようが関係ない、俺はアイツのことは今でも友達だと思ってい

る。」

詩乃「だったら、私も彼に会いに行きます。会って、私が今まで何を考えてきたか、何を考えているか話したい。」

私たちの言葉に、菊岡さんは微笑を浮かべて語った。

菊岡「うん、2人は強い人だ。ええ、是非そうしてください。面会できるようになったらメールでご連絡しますよ。」

菊岡さんは、左腕に付けてる時計を見ながら言った。

菊岡「ああ、申し訳ないがそろそろ行かなくては……。その前にキリト君、チェイス君。ザザこと新川昌一から君たち2人に……。いやカルム君を含めた3人に伝言を預かっている。もちろん、それを聞く義務はない。どうする?」

2人が頷いて答えると菊岡さんはメモを取り出し、それに眼を落した。

菊岡「それでは、ええ……。『これが終わりじゃない。終わらせる力はお前たちにはない。すぐにお前たちもそれに気づかされる。イツツ・シヨウ・タイム。』以上だ。」

喫茶店から出て菊岡さんと別れた後、私は英介とキリトがバイクを停めたところへと向かう。

和人「何か、すつきりしない終わり方だったな。」

英介「ああ。未だに逮捕されていないジヨニー・ブラック。そして、謎が多いP O H。」

だが、気になるのはアイツもだ。本当に総務省の役人なのか？」

和人「実は前にカルムと一緒に菊岡を尾行したんだけど、アイツは霞ヶ関じゃなくて市ヶ谷に向かっていたんだよ。途中で見失ってしまったけどな。」

英介「市ヶ谷にあるのは総務省じゃなくて防衛省だろ？まさか、アイツは防衛省……自衛隊の人間だっていうのか？」

和人「俺だって知りたいよ。」

英介とキリトは菊岡さんが何者なのか話し合っていたが、結局正体はわからなかったため、この話を終えることにした。

すると、英介は私の方を見てこう言った。

英介「詩乃、この後は時間あるか？お前に会って欲しい人がいるんだ。」

詩乃「別にいいけど……。」

英介のバイクに乗り、連れて来られたのは台東区御徒町の裏通りにある黒い木造の小さな店だった。

ドアの上に揚げられた2つのサイコロを組み合わせたデザイン金属製の飾り看板には《Dicey Cafe》とあった。

どうやら喫茶店のようだ。

その入り口には2人のバイクとは別に、1台のバイクが停まっている。

英介「カラムのバイクが置いてあるという事は、もう揃ってるみたいだな。」
和人「とつとと入ろうぜ。」

2人に連れられて、中に入る。

マスター「いらつしやい。」

中に入ると店のカウンターには巨漢でスキンヘッドの頭をした黒人のマスターが迎えてくれた。

客席には他校の制服を着た4人の少年と4人の少女がいた。

その中にはカラムと侑斗さんの姿もあった。

???「おそーい！待っている間にアップルパイ2切れも食べちゃったじゃない。太ったらキリトとチエイスのせいだからね。」

2人に文句を言ってきたのは茶髪のショートヘアーをしたそばかすが特徴の少女だった。

和人「何でそうなるんだ。遅れたのはチエイスのせいだから、文句ならチエイス一人に言ってくれよ。」

英介「何だと？」

???「まあまあ。キリト君、チエイス君、早く紹介してよ。」

栗色の長い髪をした少女が話すと英介が私のことを紹介する。

英介「ああ。彼女は朝田詩乃。第3回バレット・オブ・バレットのチャンピオンとなった【シノン】。そして俺の……彼女だ。」

最後の彼女という単語を聞いた直後、カルムと侑斗を除く先客として来ていた6人は驚いて声をあげる。

私は先ほどと同様に頬を赤く染めて俯いてしまう。

「やっぱりねえ！」

「まさか、チエイズに彼女が出来るなんてな。」

先ほど英介とキリトに文句を言っていた少女と背が高めの黒髪をした少年が、英介の方をニヤニヤと見ながら、私の方に近づいてきた。

里香「あたしはSAOで鍛冶屋をしていたリズベツトこと篠崎里香。よろしく。」

浩介「俺は歌星浩介。SAOではラットっていう名前でした。」

すると、栗色の長い髪をした少女に、茶髪を短めのツインテールにした小柄な少女、少し薄い紫の髪をポニーテールにした少女、中性的な顔立ちをした茶髪の少年が寄つて来た。

明日奈「初めまして。わたしはSAOで《血盟騎士団》というギルドで副団長を務めていたアスナこと結城明日奈です。よろしくね。」

珪子「SAOではシリカというキャラネームで短剣使いのビーストテイマーでした。」

綾野珪子です。よろしく願います。」

深澄「SAOでアスナと同じく《血盟騎士団》というギルドで副団長を務めていたミトこと兎澤深澄です。よろしく。」

壮吾「SAOではヒロミを名乗っていた、鈴木壮吾です。よろしく願います。」

エギル「アンドリユー・ギルバード・ミルズ。SAOではエギルという名で、両手斧使いで商人でもあった。今後ともよろしく。」

更にカウンターにいたマスターまで名乗ってきた。

彼もVRMMOプレイヤーだったことに驚いてしまう。

つまり、ここにいる全員が英介とキリトとカルムの3人と同じく、全員がVRMMOプレイヤーってことになる。

自己紹介が終わり、英介に連れられて歌星君と篠崎さんと結城さんと侑斗がいるテーブルに空いているイスに、英介も近くにあったイスを持ってきて私の隣に座った。

キリトはカルムたちがいるテーブル席に座る。

そして英介とキリトが今回の『死銃事件』についての内容を手短かに説明した。

途中、キリトとカルムの2人は自分たちの彼女に、英介は侑斗さんにちよつと怒られました。

あれだけのことがあったから3人が怒られるのは仕方がないと思う。

里香「まあ……ともあれ、女の子のVRMMOプレイヤーとリアルで知り合えたのは嬉しいな。」

明日奈「本当だね。友達になってくださいね？朝田さん。」

篠崎さんと結城さんが笑みを見せてそう言ってきた。

しかし、私は2人のことを受け入れることができなかった。

あの事件以来、私には友達と言える存在がいなくなった。

私の過去を知ったら、私を避けるに違いないだろう。

彼女らとは友達になりたいと思いつつもそれは望めないことだ。

そんな中、英介が話しかけた。

英介「詩乃、日この店に来てもらったのには理由がある。怒ったりするかもしれないと思ったけど、俺たちは詩乃に伝えたいことがあるんだ。そのことで、まずはお前に謝らなければならぬ。」

英介は深く頭を下げてから、私を凝視した。

英介「実はここにいる全員に詩乃の昔の事件のことを話した。協力してもらうにはどうしても必要だった。」

詩乃「え……？」

里香「実はあたとラットとシリカとヒロミの4人で昨日の学校を休んで、以前あな

たが住んでいた町に行ってきたの。」

篠崎さんの言葉に驚きを隠せなかった。そこはあの事件があったところで、忘れた
い、二度と帰りたくない場所だ。

——皆がそのことを知っている？

怖くなつてこの場を離れそうとしたが、英介が私の腕を掴んだ。

英介「詩乃、待つてくれ。お前はまだ会うべき人に会っていない、聞くべき言葉を聞
いていないと思つたからだ。お前を傷つける、お前に嫌われるかもしれないが、どうし
ても俺はそのままにしておけなかった。」

詩乃「え……？会うべき人、聞くべき言葉……？」

呆然としていると結城さんと兎澤さんが立ち上がつて、店の奥に見えるドアへ歩いて
行つた。

そこにあるドアが開けられると、30歳くらいの1人の女性と小学校に入学する前だ
と思われる1人の女の子が出て来た。

顔がよく似ているから、きっと親子なのだろう。

でも、この親子は誰なんだろう。

女性が深々と一礼すると、微かに震えを帯びた声で名乗る。

大澤「はじめまして。朝田……詩乃さん、ですね？私は大澤祥恵と申します。この子

は瑞恵、今年で4歳です。この子が生まれてくる前は……市の郵便局で働いていました。」

大澤さんが働いていた郵便局に心当たりがある。

そこはあの事件があつた郵便局だ。

もしかして、彼女はあのかつたとき、犯人に銃口を向けられていた女の職員の人……。

大沢「ごめんなさい……。本当にごめんなさいね、詩乃さん。もつと早くあなたにお会いしなければならなかつたのに……。謝罪もお礼すらも言わずに……。あの事件のとき、お腹にこの子が居たんです。だから詩乃さん、あなたは私だけではなく、だけではなくこの子の命も救ってくれたの……。本当に……。本当に、ありがとう。ありがとう……。」

詩乃「命を……。救つた……。？」

私はあのかつたとき、犯人を撃ち殺した。

でも、それと同時に救つた命もある。

隣にいた英介が話しかけてきた。

英介「詩乃、お前はずっと自分を責め続けてきた。自分を罰しようとしてきた。それが間違いだとは言わない。だが、お前には、同時に自分が救つた人たちのことを考える権利がある。そう考えて、自分自身を許す権利がある。俺にも前に似たようなことが

あつた……。それは、俺は仲間がいたから乗り切ることができた。だから今度は俺が……。」

すると、瑞恵ちゃんが椅子から降りて、私の方に来た。

肩にかけてポシエットから一枚の四つ折りにした画用紙を取り出す。それを広げ差し、私に出してきた。

画用紙にはクレヨンで男の人一人と女の人一人、そして小さな女の子が一人描かれていた。これは瑞恵ちゃんたち家族の絵に違いない。

その上には覚えたばかりなのだろう平仮名で、『しのおねえさんへ』と書かれていた。

瑞恵「しのおねえさん、ママとみずえを、たすけてくれて、ありがとう。」

瑞恵ちゃんの言葉を聞き、私は堪えきれずに涙を流し始める。

英介はそんな私を優しく抱きしめ、頭を撫でてくれた。

過去の全てを受け入れるには、まだまだ時間がかかるだろう。

それでも今の世界が好きだ。

何故なら、英介／＼チエイスがいるのだから。彼が一緒なら、生きることが苦しくて

も、歩き続けることが出来る。

今の私には、その確信がある。

キヤリバー

第1話 聖劍への道

冬馬 side e

俺は今、剣道の練習をしていた。

あの死銃事件が終わって、俺はとてもスッキリしていた。

因縁が片付いたのだ。

肩の荷が漸く下ろせるな。

倫太郎「冬馬、また上達したな。」

冬馬「俺だって、やる時はちゃんとやるの。」

倫太郎「そうか。」

そう、父さんと試合形式の練習をしていた。

まあ、父さんとも久しぶりに試合が出来てとても楽しい。

そんな練習をしばらくして、今日は年末と言うこともあり、お開きになった。

冬馬「疲れた。」

倫太郎「そうだな。」

洋子「冬馬。何か、キリト君から電話が来ているわよ。」

冬馬「キリトが？」

そう言つて、母さんと電話が変わると、キリトの声が聞こえてきた。

冬馬「キリト。どうしたんだ？」

和人「カルム！またいくぞ！今度こそエクスキャリバーを取りに行くために！」

冬馬「随分と急だな。」

キリト曰く、エクスキャリバーが発見されたらしい。

と言つても、まだ誰も取つてはいないが。

ソードスキルの導入により、エクスキャリバーがあるダンジョンの難易度は下がって

いるはずだからだそうだ。

無論、俺はというと。

冬馬「いいな！俺も入るぞ！」

和人「そつか！なら、イグドラシル・シテイのリズの店で集合な！」

冬馬「了解！」

そう言つて、俺は通話を切った。

冬馬「……………という訳で、キリト達とALOをして良いですかね？」

洋子「良いわよ。」

倫太郎「後、夕食は、僕と母さんは出かけてくるからどうかしてくれ。」

冬馬「分かった。」

父さんと母さんが出かけて、俺はパラドも誘って、ALOへとログインする。

そして、インプのカルムとして、パラドと共にALOにログインして、リズの店へ。

そこには、キリト、ハヤト、チエイス、クライン、シリカ、ヒロミ、ラット、シノンが集合していた。

ちなみに、フィリア、レイン、ノーチラス、ユナにも声をかけたが、用事があるようで、来れないと分かった。

ユナ曰く、年末は結構忙しいらしい。

クライン「プハーッ！」

ヒロミ「クラインさんは、もうお正月休みに入ったんですか？」

クライン「おう、昨日っからな！働きたくてもこの時期は荷が入ってこねーからよ。社長のヤロー、ウチは超ホワイト企業だとか自慢しやがってさ。」

シリカ「そ、そうなんですな……。」

クライン、社長の悪口を言うなよ。

でも、良い企業なのは間違いないだろうな。

SAOから生還したクラインをクビにしたりしない事から。

クライン「おう、キリの字よ。ウマイこと《エクスカリバー》が取れたら、俺様の為に《霊刀カグツチ》取りに行くの手伝えよ。」

キリト「ええー……。あのダンジョンくそ暑いじゃん……。」

クライン「それを言うなら、今日行くヨツンヘイムはくそ寒いだろうが！」

そう言つて、キリトとクラインが取つ組み合いの喧嘩を始める。

すると、壁に寄りかかっているシノンが口を開く。

シノン「あ、じゃあ私もアレ欲しい。《光弓シエキナー》。」

カルム「キャラ作つて2週間でもう伝説級武器をご所望ですか……。」

シノン「リズの造つてくれた弓も素敵だけどさ、出来ればもう少し射程が……。」

リズベツト「あのねえ。この世界の弓つてのは、せいぜい槍以上魔法以下の距離で使

う武器なの。」

ラット「百メートル離れた所から狙おうとするのは、シノンくらいだな。」

シノン「フフツ。欲を言えば、その倍の射程は欲しいところね。」

チエイス「流石だな。」

パラド「すげえな。」

シノン曰く、ケットシーにしたのは、ケットシーの視力が高いからだ。

本当に、GGO 1のスナイパーだな。

すると、ドアが開き、新たな来客だ。

リーファ「たっだいまー!」

アスナ「お待たせー。」

ミト「待ったかしら?」

ハヤト「お帰りだぜ。」

そう、ミト、アスナ、リーファの3人は、買い出しに出ていた。

すると、アスナとミトのカゴの上に乗っていたユイとカナが、それぞれ、キリトと俺の頭の上に乗る。

ユイ「……買い物ついでにちよつと情報収集してきたんですが、あの空中ダンジョンに到達したプレイヤーまたはパーティーはまだ存在しないそうです。パパ。」

キリト「へえ……。じゃあ何で《エクスキャリバー》のある場所が分かったんだ?」

カナ「それが、私たちが発見したトンキーさんとジョンさんのクエストとは別のクエストがあつて、そのクエストの報酬がエクスキャリバーだったらしいです。」

アスナ「それもあまり平和なクエストじゃなさそうなのよね。」

ミト「お使い系じゃなくてスローター系。今、ヨツンヘイムはPOPの取り合いで殺伐としてるって、アルゴとジェイクが言ってたわ。」

カルム「……確かに穏やかじゃないな。」

すると、クラインがアルコールが入らないとはいえ、酒のおかわりをしている。

クライン「でもよお、変じゃねえ？ 《聖剣エクスカリバー》ってのは、おつそろしい邪神がウジャウジャいる空中ダンジョンのいっちゃん奥に封印されてんだろ？ それをクエの報酬に提示するってどういうことだ？」

シリカ「言われてみればそうですね。」

ヒロミ「確かに、ダンジョンまでの移動手段が報酬なら分かるんだけど。」

シノン「ま、行けば分かるわ。」

チエイス「そうだな。行ってみない限り、答えは分からないだろう。」

まあ、これもクエストの醍醐味といえど醍醐味なのかな？

すると、リズベットとラットが声を出す。

リズベット「よーっし！ 全武器フル回復！」

ラット「ほれ。」

リズベットとラットを労い、俺たちは、調整された武器を手取る。

俺も、メダジャリバーとガシャコンブレイカーを装備する。

クライン「つたく、相変わらず脳筋ばつかだよな。このパーティーは。」

リズベット「なら、アンタが魔法スキルを取りなさいよ。」

クライン「へん！ やなことだ。侍たるもの、魔の一字がついたスキルは取らねえ！

取っちゃなんねえ!!」

ラット「あのなあ。RPGの侍と言えば、黒魔法を使うビルドだろ。」

クライン「へっ!魔法使うくらいなら、刀折って、侍やめてやる。」

そう言うのと、シリカとヒロミが振り返りながら、語った。

シリカ「そう言えば、クラインさん、以前、炎属性のソードスキルを使ってきましたよね。」

ヒロミ「アレって、半分魔法みたいなものですよね。」

クライン「えっ。ええーっ!そ、そうだっけ……?」

ユイ「はい。上級ソードスキルには、火、土、風、水、聖、闇の六つの属性が付与されるんですよ。」

カナ「そういう事よ。」

クライン「ええ……。」

リズベット「魔法使うくらいなら、刀折って、侍止めるでしたっけ?」

ラット「言ってたな。」

クライン「ヒイヒイ!キリの字!カルム!」

大の大人が、情けない声を出しながら近寄るんじゃない。

チエイヌも呆れたようにクラインを見ている。

カルム「まあ、その件はノーカウントで行きましょうよ。」
キリト「そうだな。」

リズベット「まあ、いつか。」

ラット「そうだな。あまり、そういう事は言うんじゃないぞ。」

まあ、魔法をまともに使うのは、アスナぐらいだしな。

ミトも、軽い回復魔法や支援魔法は使うが、どちらかというと、攻撃タイプだ。

まあ、魔法が排除されたSAOで戦ってきた奴が多いんだ。

そうなるのは、仕方ない。

キリト「皆、急な呼び出しに応じてくれてありがとう。このお礼はいつか精神的に！

それじゃあ、いっちょ頑張ろう！」

『おーっ!!!』

その掛け声と共に、俺たちは、ヨツンヘイムへと向かっていく。

アスナを助けに行く際に、ヨツンヘイムから開通した隠し通路を通って行く。

リズベット「うへえ！この隠し通路、一体どれくらいの距離があるのよ!?!」

ミト「距離的には、新生アインクラッドの迷宮区まるまる一つは入ると思う。」

誰かが泣き言を言う。

すると、キリトが語り出す。

キリト「あのなあ。通常ルートでヨツン Heim に行こうと思ったら、最速でも2時間はかかることを、ここを降りれば5分だぞ。文句を言わずに、一段一段感謝の心を込めながら降りたまえ、諸君！」

シノン「アンタが造った訳じゃないでしょ。」

キリト「……………ツツコミありがとう。」

キリトがそう言うのと同時に、シノンの尻尾を掴んで、シノンが飛び上がる。

シノン「ふぎやあ！この！」

キリト「おっと！」

シノン「アンタ！次やったら鼻の穴に火矢ブツコムからね……。いや、今、制裁しましょうかね。」

キリト「え？」

シノン「チェイス。お願い。」

チェイス「分かった。」

キリト「あ。」

チェイス「キリト。そんな事をするって事は、覚悟は出来てるんだろうな？」

キリト「待ってくれ！決して、悪気があった訳じゃないんだ！」

チェイス「問答無用!!」

キリト「ギヤアアア!!」

そりやあねえ、彼女にちよつかい出して、チエイスがキレるのも無理ないわ。全員が呆れ顔で頭を振る。

クライン「恐れを知らねえな。お前。」

パラド「全くだな。」

流石に、リメインライトにはせずに、生殺しの羽目に遭わせた。

しばらくして、無事にヨツンヘイムに到着した。

流石に寒いなど感じていると、アスナの凍結耐性の支援魔法がかかり、寒くなくなつた。

リーファとハヤトが口笛を吹くと、ヨツンヘイムから、トンキーとジョンが現れた。

ユイ「トンキーさん! ジョンさん!」

カナ「こつちだよ!」

ユイとカナが健気に手を振って、呼ぶ。

2体の邪神は、離れた所に接岸する。

キリト、アスナ、リーファ、シリカ、リズベット、クライン、シノンはトンキーに乗つて、俺、ミト、パラド、ハヤト、ラット、ヒロミ、チエイスはジョンに乗る。

ヒロミ「それにしても、グレードボイドって結構深いですよね。」

ラット「落ちたらどうなるだろうな？」

ミト「きつと、キリトかカルムが実験してくれるんじゃない？」

カルム「高い所から落ちるなら、ネコ科動物の方が向いてる気がする。」

チェイス「おい。お前も制裁されたいのか？」

カルム「ごめんさい。」

すると、トンキーが急降下して、ジョンもそれに合わせて急降下する。

『ギャアアア!!』

ミト「キヤアアア!!」

俺たちがそんな叫び声を上げてる中、トンキーの方から、リーファの楽しそうな声が聞こえてくる。

おい、スピード狂もどうかしてほしいな。

流石に、捨てるなんて薄情な事はせず、そのまま飛んでいく。

しばらくすると、人型邪神とプレイヤーが協力して、トンキーとジョンと似たような象水母邪神を攻撃していた。

しかも、人型邪神とプレイヤーが戦闘にならないのを見て、どうなつてんだと思ってるのと、巨大な女の人が見れる。

その女の人は、ウルズといい、エクスキャリバーを抜いて欲しいと依頼する。

ウルズ曰く、このまま動物型邪神が全て狩り尽くされると、あのスリウム Heim がア
ルンにまで上昇して、壊滅するらしい。

ウルズが消えた後、皆で話し合う。

カルム「随分と突拍子もないよな。」

ミト「でも、それって、フィールド改変よね。そんな事って出来るの？」

カナ「この ALO を制御するカーディナルシステムは、S A O の物と同性能です。つ
まり、フィールド改変も容易いです。」

そっか。

この ALO 自体、元々は須郷伸之の野望の為に作られた様なものだ。

カーディナルシステムの最後の使命が、アインクラッドを崩壊させる事なら、そんな
事も容易いか。

だが、このまま行くと、ALO でプレイする人が急激に減ってしまう。

それだけは阻止しないと。

クライン「よーし！今年最後の大クエストだ！エクスカリバーを手に入れて、今週
の M トウモの一面を飾ろうぜ！」

『おーーッ!!』

そうやって、気合を入れて、空中ダンジョンへと突入する。

第2話 空中ダンジョンへの突入

クラインの掛け声の後、トンキーとジョンが空中ダンジョンの入り口へと送ってくれて、俺たちは、中へと突入していく。

ウルズ曰く、妖精たちに協力させる為に、地上に沢山の人型邪神を降ろしたそうで、以前、俺、キリト、ミト、アスナ、リーファ、ハヤトと挑んだ際に比べて、楽だった。

フォーメーションとしては、俺、キリト、ミト、クライン、リーファ、ハヤト、パルドが前衛で、ヒロミ、シリカ、リズベツトが中衛、アスナ、シノン、チェイス、ラットが後衛だ。

第一層のボスであるサイクロプス型の巨人を倒して、第二層を駆け抜けて、第二層のボス部屋まで来たのだが……。

リーファ「ヤバイよお兄ちゃん！金色の方、物理耐性が高すぎる……！」

パルド「理不尽すぎるだろ……！」

ユイ「衝撃波攻撃、二秒前！いち、ゼロ！」

ユイのカウントと共に、金色のミノタウロスが衝撃波攻撃を放つ。

そう、俺たちSAO組は、魔法が排除された世界で戦ってきたのだ。

その為、物理メインで行っていたが、こんな風に、魔法使いがいなくてもどうにもならない状況にもなり得る。

アスナ「キリト君！今のペースだと、あと150秒でMPが切れる！」

チェイス「くそ！黒いミノタウロスが、また回復してるぞ！」

クライン「野郎には物理が通るのに……！」

シリカ「金色が邪魔……！」

ヒロミ「どうすれば……！」

現状、物理耐性が極端に高い金ミノタウロスと、魔法耐性が極端に高い黒ミノタウロスと交戦してるが、黒ミノタウロスのHPを削つても、即座に下がって、金ミノタウロスが黒ミノタウロスをカバーするのだ。

厄介なAIだな。

それでも、魔法攻撃はしてこないのが、不幸中の幸いと言えよう。

リーファ「お兄ちゃん！メダリオンがもう7割以上黒くなってる！死に戻りしてる時間はないさそう……！」

キリト「……分かった。」

ハヤト「時間がねえな……！」

そう、時間がない。

すると、キリトが何かを思いついたのか、叫ぶ。

キリト「皆！こうなったら出来る事は一つだ！一か八か金色をソードスキルの集中攻撃で倒し切る！」

今年の5月、アインクラッドが実装されたと同時に、ソードスキルも導入された。

リズベット武具店でユイとカナが言った通りに、上級ソードスキルには、属性も含まれている。

しかし、連撃数が多いソードスキルであるほど、硬直時間が長い。

もし、ミスをすれば、前衛と中衛は即座に全滅だ。

だが、これに賭ける。

クライン「うっしやア！その一言を待ってたぜキリの字！」

カルム「さて、行こうか！」

ミト「ええ！」

パラド「ああ！心が躍るな!!」

その発言に、全員が頷く。

すぐさま準備に入る。

キリト「シリカ！カウントで《泡》頼む！」

シリカ「OKです！」

キリト「……二、一、今!!」

シリカ「ピナ!バブルブレス!」

通常、ペットに対する命令は、どんなマスターテイマーでも、100%ではない。

だが、俺は、ピナがシリカの命令を無視するなんて事を見たことが無い。

ピナから放たれた泡は、大技を放とうとした金ミノタウロスの鼻先で破裂して、幻惑効果に囚われて、動きを止める。

キリト「ゴー!」

それをチャンスにして、俺たちは突撃していく。

クラインの刀にリーファの剣、ミトの鎌、パラドのガシヤコンパラブレイガン、ハヤトのゼロガツシャー、ヒロミの影松・真、シリカの短剣、リズベットのメイスが色んな色に光りながら金ミノタウロスに振るわれ、後方から、シノンの氷の矢、チェイスのガシヤコンスパロー、ラットのバースバスターが火を吹く。

そして、キリトと俺も片手剣8連撃ソードスキルの《ハウリング・オクターブ》を放つ。

すると、キリトの左手の剣が光り出す。

クライン「に……《二刀流》だああ? いや……ALOにユニークスキルは存在しないはず……。」

そう、ユニークスキルは削除されたい。

つまり、エボリユーションキングも使えるかどうか分からない。

しかし、キリトのアレは、キリトから教えてもらったが、《スキルコネクト》と言うらしい。

アレは、システム外スキルだ。

俺もやろうと思ったが、結構難しく、良くても三連撃しか繋がらない。

だが、キリトは既に三連撃目へと入っている。

この間に、俺たちの硬直も解けて、またソードスキルを叩き込む。

一応、俺も、ハウリング・オクターブとサベージ・フルクラムを繋げるが、そこで終わる。

そして、キリトがヴオーパル・ストライクを放ち、キリトが貫通した。

ヒロミ「やりしたか!？」

ラット「いや、まだだ!」

そう、金ミノタウロスのHPゲージは、2%を残して停止した。

ハヤト「早く離れろ!」

パラド「いや、まだ硬直してて動けねえぞ、キリトの奴!」

アスナ「い……………やあアア!!」

すると、後衛にいた筈のアスナが飛び出してきて、《ニユートロン》という細剣スキルを放つて、金ミノタウロスに止めを刺した。

アスナ「大丈夫？キリト君。」

キリト「よく後衛から間に合ったなあ。お見事。」

アスナ「ありがと。」

そうしている間にも、黒ミノタウロスが完全回復して、勝ち誇ったかのように大斧を振るうが、金ミノタウロスは爆散した。

……………え。

と言う様な表情で目を剥く黒ミノタウロスに俺たちの視線が向く。

クライン「……………おーし、テメエ。そこで、正座！」

俺たちはこれまでの戦闘の鬱憤をぶつけるように、黒ミノタウロスをあつという間に撃破した。

すると、クラインがキリトに近づいて。

クライン「おらキリ公！オメエ何だよさっきのはよ!？」

キリト「……………言わなきゃダメか？」

クライン「つたりめえだ！見たことねえぞあんなの！」

キリト「システム外スキルだよ。《スキルコネクト》。」

クライン「じゃあ、カルムのもか？」

カルム「まあ、俺の場合は、行っても三連撃までだよ。」

アスナ「ウツ……何か、凄いデジャブった気がするんだけど……。」

ミト「奇遇ね、私もよ。」

俺もだな。

何か、グリーンムアイズ戦を思い浮かべる。

まあ、俺は明かす様な物はないが。

ハヤト「さて、のんびり話してる暇は無いと思うぜ。リーファ、残り時間は、あとどれくらいになるんだ？」

リーファ「あ、うん。……今のペースだと1時間はあっても、2時間はなさそう。」

カルム「なるほどなあ。……カナ。このダンジョンって、4層構造だよな？」

カナ「うん。三層の面積は二層の七割程度で、4層は殆どボス部屋だけ。」

カルム「ありがとう。」

俺は、教えてくれたカナに、人差し指で頭を撫でる。

チェイス「キリト。今頃、ヨツンヘイムのフィールドでは、《霜の巨人族》側のクエストを受けたプレイヤーが動物型邪神狩りが勢いを増している筈だ。」

キリト「残り時間は1時間か……。」

パラド「多分、30分で三層と四層を突破しねえとな。」

ヒロミ「もう少し時間があれば、クエストを破棄できたり出来るんですが……。」

ラット「サクヤやアリシャ・ルーに援軍を要請してる暇は無いしな。」

ハヤト「どの道、俺たち14人だけで、このダンジョンをクリアしないと行けないな。」
そういう事になる。

すると、リズベットが近寄ってきて、キリトの背中をぶつ叩く。

リズベット「ほーら！こうなったら、邪神の王様だか何だか知らないけど、どーんと当たって《砕く》だけよ！」

作戦もへったくれもないが、それしかない。

キリト「……よし、全員HPとMP全快したな。そんじゃ、三層はさくさくつと片付けようぜ！」

こっからが凄かった。

何せ、最新型のインテリジェント・カーナビも裸足で逃げ出すナビゲーション・ピクシーが2人も居るしな。

奥の手である地図データにアクセスするというのを今回ばかりは解禁した。

パラドが不満顔だが、時間が無いことをパラドも承知している為、了承した。

次々立ちはだかる、レバーだの歯車だの踏みスイッチ等を駆使したパズル系ギミック

をあつさりクリアしていく。

途中……。

ミト「……………何これ？」

ユイ「女性アバター1名限定の、重量判定型圧力スイッチなのです。」

それを聞くと、俺たちの視線が、リーファに注がれる。

すると、リーファがハツとした様な表情をしたと思つたら、乗つて、その後、キリト、クライン、ハヤト、パラドをぶっ叩いた。

ちなみに、リーファ曰く、「体重が重いんじゃないもんッ！」らしい。

ちなみに、叩かれた面子は、リーファの事をニヤニヤしながら見てた面子だ。

2回の中ボス戦を挟み、三層のフロアボスにまで辿り着き、そこに居たのは、サイクロプスやミノタウロスの2倍近い体躯を誇る、長い下半身の左右にムカデよろしく10本の足が生えた気色悪い巨人だった。

物理耐性は然程のことは無かった。

しかし、その分攻撃力は高く、全滅寸前まで追い詰められた。

それでも、何とか足を一本ずつ切り落とし、最後は動けなくなつた所を、キリトのスキルコネクトと俺のオーズバッシュで止めを刺した。

このままスリウムをニブルヘイムに叩き返さんと向かつていたが、判断に迷う一つの

光景が現れた。

細長い氷柱で壁際に作られた檻の中に、女性が居たのだ。

俺たちに気付いたのか。

???「お願い……。私を……。ここから、出して……。。」

それを聞いて、クラインがフラフラと吸い寄せられるかの様に近づくが、キリトがバ
ンダナの尻尾を掴む。

キリト「罨だ。」

カルム「罨だな。」

パラド「罨だ。」

シノン「罨よ。」

チエイス「罨だ。」

リズベツト「罨だね。」

ラツト「罨だろ。」

そう、7人が言うのと、クラインは微妙な表情で頭を掻く。

クライン「お、おう……。罨、だよな。……。罨、かな？」

往生際が悪いクラインに、俺とキリトはカナとユイに訊ねる。

すると、即答してきた。

ユイ「NPCです。女王ウルズさんと同じく、言語エンジンモジュールに接続して
います。」

カナ「ただ、一点だけ違うのが、この人は、HPゲージがイネーブルです。」

カルム「NPCって、普通無効化されてるよな。死んだらクエストがスタックする
し。」

スタックとは、様々な原因で、ゲームが移行しない事だ。

クラインが何かを思いついたかのような表情を浮かべるが。

アスナ「罨だよ。」

ミト「罨ね。」

シリカ「罨ですね。」

ヒロミ「罨でしょう。」

リーファ「罨だと思う。」

ハヤト「リーファに同じく。」

すると、クラインは眉を八の字に寄せて、眼を見開いて、口を窄めるとい
う表情で俺とキリトに掴み寄ってきた。

キリト「もちろん罨じゃないかもしれないけど、今はトライ&エラーしてる余裕はな
いんだ。」

カルム「1秒でも早く、スリユムの所に辿り着かないと。ね!？」
クライン「お…………おう、うむ、まあ、そうだよな、うん。」

流石のクラインも氷の檻から視線を外して、俺たちは奥の階段へと進む。

???「……………お願い……………誰か……………」

正直言うと、俺も助けたいが、これはALLOの存続がかかっているのだ。

無用のリスクは背負うべきではない。

すると、クラインが足を止めた。

クライン「……………罨だよな。罨だ、分かっている。……………でも、罨でもよ。罨だと分かっ

ていてもよ……………。それでもオリヤあ……………どうしても、ここであの人を置いていけ

ねエんだよ!例え……………例えそれでクエが失敗して……………アルンが崩壊しちまっても……………

それでもここで助けるのが、それが、俺の生き様……………武士道ってヤツなんだよオ!」

そう言つて、檻の方に戻つて行つた。

その際に、俺達全員が思つた事がある。

それは。

……………アホや。

クラインは居合い系ソードスキル《辻風》を発動して、氷柱の檻を壊した。

クラインに助けられた女性が囁く。

??? 「……………ありがとう、妖精の剣士様。」

クライン 「立てるかい？怪我アねえか？」

クラインが右手を差し出すのを見て、俺たちはジト目になっていた。

パラド 「何やってんだ、アイツ？」

カルム 「さあ？」

??? 「ええ……………大丈夫です。」

クライン 「出口まではちよつと遠いけど、1人で帰れるかい、姉さん？」

??? 「……………」

カーディナルの自動応答言語化モジュール・エンジンは、プレイヤーとの応答をかなりの数をラーニングする物だ。

それが幾つかのブレイクスルーやシンギュラリティに達すると、ユイやカナ、パラドみたいな感じになる。

すると、女性が顔を上げる。

??? 「……………私は、このまま城から逃げ出す訳には行かないのです。巨人の王スリウムに盗まれた、一族の宝物を取り戻すために忍び込んだのです。どうか、私もスリウムの元へと連れて行ってもらえませんか？」

クライン 「お……………う……………むう……………」

ミト「何か、キナ臭い展開になったわね。」
カルム「そうだな。」

その後、キリトが連れて行くことに判断し、俺たちは、スリユムの元へと向かう。

第3話 霜の巨人王との激突

カルムside

フレイヤというNPCも加わり、俺たちはスリウムが居るであろう、部屋の目前まで到達した。

扉が、俺たちが五メートル以内に踏み込んだ途端、開き始めた。

奥から、なんとも言い難い重い空気が流れ込んでくる。

アスナ「皆、支援魔法を張り直すよ。」

フレイヤ「では、私も。」

その2人が、支援魔法を掛けたのだが、フレイヤの奴は、HPゲージが大幅ブーストする物だった。

こんな支援魔法は見た事がないから、フレイヤ専用の物だ。

リバフを確認した俺たちは、全員で領いて、中に突入する。

内部は、とてつも無く広い。

その端には、黄金製のオブジェクトが沢山並んでいた。

リズベツト「……………総額、何ユルドだろ……………」

ラット「これさえ有れば、店のフランチャイズ化も夢じゃないな……………」

店を経営しているリズベットとラットが呟く。

ちなみに、リズベットが店主で、ラットは素材集め担当らしい。
すると。

???「……………小虫が飛んでおる。」

と、奥から、地面が震える程の重低音の呟きが聞こえて来る。

???「ぶんぶん煩わしい羽音が聞こえるぞ。どれ、悪さをする前に、ひとつ、潰してくれようか。」

重々しい足音と共に、1人の巨人が現れた。

新生アインクラッドのボスよりも遥かに大きい。

恐らく、件のスリウムだろう。

肌の色は、鉛の様な鈍い青色だ。

何か、とある名作アニメの異星人を見ている様な気分になる。

スリウム「ふっ、ふっ……………アルヴヘイムの羽虫どもが、ウルズにそそのかさされてこんな所まで潜り込んだか。どうだ、いと小さき者どもよ。あの女の居所を教えれば、この部屋の黄金を持てるだけくれてやろうぞ、ンシー?」

クライン「……………へっ、武士は食わねど高笑いつてなア!オレ様がそんな安っぽい誘い

にホイホイ引つ掛かって堪るかよオ！」

パラド「さつき、フレイヤの事は引っかかりまくってたのに。」

カルム「シツ、突っ込むな。」

ミト「そうね。クラインが拗ねると、後々面倒臭いしね。」

クラインが抜刀して、俺たちも遅れて武器を構える。

スリユムは俺たちを見た後、背後のフレイヤを見る。

スリユム「……ほう、ほう。そこにおるのはフレイヤ殿ではないか。檻から出てきた

という事は、儂の花嫁になる決心がついたのかな、ンン？」

クライン「は、ハナヨメだあ!？」

スリユム「そうとも。その娘は、我が嫁としてこの城に輿入れしたのよ。だが、宴の前の晩に、儂の宝物庫をかき回ろうとしたのでな。仕置きに氷の獄へと繋いでおいたのだ、フツ、フツ。」

つまり、フレイヤは一族の宝物を取り戻す為に、スリユムの花嫁になると偽って堂々に入ったものの、門番に見つかって捕まったという事になるな。

だけど、フレイヤの一族が、妖精九種族のうちのどれなのか、奪われた宝とは何か、分からない。

そんな事を考えていると、リーファが思い出しそうになったが、フレイヤ本人が毅然

とした態度で叫ぶ。

フレイヤ「誰がお前の妻になど！かくなる上は、剣士様達と共にお前を倒し、奪われた物を取り戻すまで！」

スリュム「ぬっ、ふっ、ふっ、威勢の良いことよ。流石は、その美貌と武勇を九界の果てまで轟かすフレイヤ殿。しかし、気高き花ほど手折るときは興深いという物……。小虫どもを捻り潰した後、念入りに愛でてくれようぞ、それはもう念入りにな。ぬっふふふふ……。」

スリュムのあまりにもギリギリなその発言に、女性陣が騒ぎ出す。

アスナ「うわぁ……何なの、あのボスキャラ……。」

シノン「キモい……。」

ミト「同感……。」

シリカ「ヒゲ!!」

リズベット「女の敵!!」

リーファ「……って言っちゃって、お兄ちゃんツ！ハヤト君!!」

「おいおいっ。」

「……。」

余りにも全年齢向けゲームでの許容ラインをギリギリに攻めているぞ。

女性陣が騒ぎ、男性陣が呆然としていると、クラインが声を上げる。

クライン「てっ、てっ、テメエ！させつかんな真似！このクライン様が、フレイヤさんには指一本触れさせねえぜ！！」

スリユム「おうおう、ぶんぶんと羽音が聞こえるわい。どうーれ、ヨツンハイム全土が農の物となる前祝いに、まずは貴様らから平らげてくれようぞ……！」

スリユムが立ち上がり、余りにも長大なHPゲージが3段も表示された。

まあ、新生アインクラッドのフロアボスよりはまだマシだ。

何せ、新生アインクラッドのフロアボスは、HPゲージが表示されないのだ。

キリト「……来るぞ！ユイとカナの指示をよく聞いて、序盤はひたすら回避！」

カルム「了解！」

スリユムハイム城最後の戦いは、物凄い大激戦となった。

スリユムの序盤攻撃パターンは、左右の拳のパンチ撃ち下ろし、右足の三連続踏みつけ、直線軌道の氷ブレス、氷のドワーフ生成だ。

ドワーフ生成に関しては、シノン、チェイス、ラットの精密ヘッドショットで瞬く間に片付けてくれた。

攻撃面に関しては、俺たちの攻撃が脛にまでしか届かず、だいぶ苦戦した。

だが、フレイヤの雷撃系魔法により、スリユムのHPが削られる。

キリト「いいぞ！効いてる!!」

クライン「ああ……。流石、オレのフレイヤ様だぜ……。!」

「「はいはい。」」

ラット「ただのNPCだろ。」

クラインの発言に、シリカ、ヒロミ、リズベット、ラットが突っ込む。

そうしている内に、一本目を削り切る。

キリト「パターン変わるぞ！注意！」

ハヤト「分かった！」

リーファ「ねえ、不味いよ、お兄ちゃん、ハヤト君。もうメダリオンの光が3つしか

残ってないよ！多分、あと15分……。!」

パラド「嘘だろ……。!？」

マジか……。

あと15分でコイツを倒すのかよ。

すると。

スリウム「ぬっふっふ。どうした？かかってこぬのか？……。では喰らえいッ！霜の

巨人の王者の息吹をッ!!」

ミト「吸い込まれる……。!」

ヒロミ「不味いですよ……!!」

キリト「皆! 防御姿勢!!」

キリトの声と共に、俺たちは防御姿勢を取ったその瞬間。

スリユムの口から、広範囲プレスが放たれる。

アスナのバフがあるのにも関わらず、前衛組と中衛組が凍結する。

スリユムが徐に右足をあげると。

スリユム「ぬううーん!」

雄叫びと共に、スタンプ攻撃を放ち、前衛組と中衛組のHPゲージがレッドゾーンへと突入する。

すると、アスナがダメージ発生を先読みし、全体回復スキルを発動するが、全て回復するのに時間がかかる。

スリユム「むぬううん! 猪口才なッ! 今度こそこの一撃で、一気に止めを刺し……ッ!」

スリユムが止めを刺そうとすると、スリユムの顔面に、エクスプロードアローが3本も命中する。

放ったのは、後衛にいたシノンとチエイストラットの3人だ。

どうやら、時間稼ぎをするようだ。

キリト「シノン！チエイイス！ラット！」

カルム「30秒時間を稼いでくれ！」

シノン side

30秒時間を稼ぐ事になったわね。

攻撃は予想以上に速い……でも、巨体に纏わり付いて回避に専念すれば、どうにか
なると思う。

すると、ユイちゃんとカナちゃんが来る。

「シノンさん！」

シノン「ユイちゃん!?カナちゃん!？」

チエイイス「どうしてここに？」

ユイ「パパ達は回復中ですから、私たちがサポートします!!」

シノン「……………パパ……………ね。」

カナ「どうしました？」

シノン「何でもない。」

愛娘を持つているキリトとカルムに若干の羨ましさを感じていると、スリウムが巨体
で連打を行ってきた。

ラット「連打かよ……………!？」

カナ「恐らく、自分より小型の相手に登られた場合の対処行動です!」

ユイ「狙いは荒いですが連打ですので、攻撃の予測猶予は1秒以下です!!」

チエイス「1秒か。」

シノン「ま、銃弾程ではないわね。」

GGOで戦ってきた私とチエイスからしたら、避けるのは容易い。

ユイちゃんとカナちゃんの2人の指示を聞きつつ、スリユムの拳の上を動き回る。しばらくすると。

チエイス「シノン。当てるぞ。」

シノン「ええ。この弾道なら、中指と薬指の間をすり抜けてアイツの顔の前に。」

ユイ「で……でも、顔の前は、氷ブレスの可能性が……!!」

シノン「いいのよ。」

チエイス「そろそろ30秒だ。戻るぞ。」

私はエクスプロードアローを、チエイスはガシャコンスパローから強攻撃を、ラットはバースバスターから強攻撃を放つ。

カルムside

チエイス達が時間を稼いでくれたおかげで、こちらは回復する事が出来た。

攻撃態勢に入ろうとすると、フレイヤが声をかけてきた。

フレイヤ「剣士様。このままでは、スリウムを倒す事は叶いません。望みはただ一つ、この部屋のどこかに埋もれているはずの、我が一族の秘宝だけです。あれを取り戻せば、私の真の力もまた蘇り、スリウムを退けられましょう。」

キリト「……………分かった。宝物つて、どんなのだ？」

フレイヤ「この位の大きさの、黄金の金槌です。」

カルム「……………へ？金槌？」

フレイヤ「金槌です。」

俺とキリトが呆然とフレイヤを眺めていると。

スリウム「ぬうん、何処だ……………。王の面に矢を射た無礼者はアア……………！……………そこに
おったか！猫共オオオツ！」

と、スリウムが前衛中衛を無視して、シノンとチェイスとラットに攻撃する。

クライアントにスリウムを任せて、俺とキリトとリーファとハヤトはその金槌を探す事
にしたが……………。

キリト「ユイ、カナ。どうだ？」

ユイ「ダメです。マップデータにキーアイテム位置の記述がありません！」

カナ「部屋に入った時点でランダム配置されてるから、フレイヤさんに渡してみないと分からないと思う!!」

カルム「片っ端から探すか……!!」

リーファ「誰でもいいから、雷系のスキルを使ってみて!」

ハヤト「雷系……!?!」

それを聞いたキリトが、《ライトニング・フォール》を発動する。

すると、一箇所だけ、反応が違う所を見つけて、俺たちは駆け出す。

その一帯の宝をポイポイ捨てていく。

すると、黄金の金槌を見つけた。

キリト「フレイヤさん!」

キリトがその黄金の金槌をぶん投げて、フレイヤはキャッチする。

だが、様子が変だ。

フレイヤ「……………ぎる……………。……………なぎる……………みなぎるぞ……………!」

あれ、何か声が違う。

そう思っていると。

フレイヤ「みな……………ぎるうううおおおお!!」

すると、フレイヤさんが巨大になっていき、何と、おっさんになっていた。

クライン「お……………お……………お……………!」

『オッサンじゃん!!!!』

男性陣の叫び声がこだまする。

フレイヤと記載されていた名前が、トールという名前になった。

つまり、雷神トールだ。

スリウムも気づいたのか、トールの方へと向きを変える。

トール「卑劣な巨人めが、我が宝《ミヨルニル》を盗んだ報い、今こそ贖ってもらおうぞ！」

スリウム「小汚い神め、よくも儂を謀ってくれたな！その髭面切り離して、アースガルドに送り返してくれようぞ!!」

まあ、スリウムも被害者ではあるから、怒っても当然だろう。

クラインは未だに呆然としていた。

シノン「トールがタゲ取ってる間に全員で攻撃しよう!!」

キリト「よし、全力攻撃！ソードスキルも遠慮なく使ってくれ!!」

俺たち14人は、スリウムに肉薄する。

シリカ「てやあああ!!!」

ヒロミ「ハアアア!!」

アスナ「どんな巨人だって！」

ミト「臆を狙えば!!」

リーファ「行こう!!」

ハヤト「おうよ!!」

シリカとヒロミが攻撃して、アスナとミトとリーファとハヤトが臆を容赦なく攻撃する。

リズベット「へっへー! 足で弱点……つて言ったら、ココだよっ! 小指イイッ!」
ラット「ハア!!」

リズベットとラットの2人は、スリユムの小指に容赦なく攻撃を叩き込む。

クライン「ちつきしよおおおっ!!」

クラインが泣きの上段斬りを放ち、スリユムがスタンした。

キリト「ここだ! 全員突撃! ぶちかませ!!」

カルム「行くぞ! パラド!!」

パラド「ああ! 心が躍るな!!」

それぞれのソードスキルを一齐に叩き込み、スリユムが怯んで、ツールが近づく。

ツール「地の底に還るがよい、巨人の王!」

止めと言わんがばかりに、ハンマーをスリユムに叩きつけ、スリユムが倒れる。

第4話 聖劍の獲得

トールが止めを刺し、スリユムは徐々に凍りついていく。
すると。

スリユム「ぬっ、ふっふっふっ……。今は勝ち誇るが良い、小虫どもよ。だがな
……。アース神族に気を許すと痛い目を見るぞ……。彼奴等こそが真の、しん……。」

その先は続かなかった。

なぜなら、トールのストンプが炸裂し、スリユムが消えたからだ。

それを呆然と見ていると。

トール「……。やれやれ、礼を言うぞ、妖精の剣士達よ。これで余も、宝を奪われた
恥辱をそそぐ事が出来た。……。どれ、褒美をやらねばな。」

トールのハンマーから宝石が一つ取れて、それが本体の縮小版のハンマーとなり、ク
ラインの元へ。

トール「《雷槌ミヨルニル》、正しき戦の為に使うが良い。では、さらばだ。」

そう言うと、トールは消え、メンバーからも消えた。

その際に、ピナの毛が膨らんだ。

ピナ「キユ?」

シリカ「静電気?」

ヒロミ「そうじゃない?」

俺たちの目の前に、報酬が入る。

キリトと俺は、息を吐き、クラインの元へ。

キリト「クライン。」

カルム「伝説級武器ゲット、おめでどう。」

クライン「……俺、ハンマー系スキル、びたいち上げてねえし。」

ハヤト「なら、リズかラットのどちらかにでもあげれば?」

チエイス「いや、溶かしてインゴットにしかねないな。」

リズベット「ちよお!いくらアタシでも、そんな勿体ない事しないわよ!」

そう文句を言うリズベット。

ラットも物凄く頷いていた。

すると、2人の元に、アスナとミトが近づくと。

アスナ「でも、リズ、ラット君。」

ミト「伝説級を溶かすと、オリハルコン・インゴットが凄く出来るらしいよ。」

リズベット「え? ホント?」

ラット「そんなのもあるのか。」

クライン「あ……あのなあ！まだやるなんて言ってるぞ！」

それを聞いたクラインがハンマーを抱く。

すると、リズベットとラットが口を同時に合わせて。

「カナツチ置いていけえ〜！」

クライン「やめろーっ！」

すると、シノンが笑い出し、俺たちも釣られて笑い出す。

だが、その笑いも、突然の揺れに中断する。

シノン「う……………動いてる!？」

チエイス「いや、スリウムヘイム全体が浮いてるんだ……………」

リーファ「お……………お兄ちゃん！ハヤト君！クエストまだ続いている!!」

パレード「はあ!?!さっきスリウムを倒したはずだろ!？」

カルム「いや、ウルズさんが言ってただろ！エクスキャリバーを抜かないと終わらな

い!」

ユイ「皆さん！」

カナ「階段が玉座の裏に生成されてる！」

その声と共に、俺たちは向かう。

だが、気になる事がある。

肝心の王のスリユムを失っているのに、スリユムヘイムがアルンに向かう？

そんな風に気になっていると、ユイとカナが答えてくれた。

大公スイアチという人物が黄金の林檎を欲しており、依頼したのも、スイアチらしい。つまり、後釜は最初から居る。

俺たちは、加速していき、遂に、エクスカリバーが刺さっているエリアに着く。

カルム「キリト……………」

キリト「ああ……………」

俺とキリトは、とある出来事を思い出していた。

それは、ALLOを己の野望の道具として利用していた須郷伸之が、生成しようとし、俺たちがエクスカリバーを生成して、投げ渡した。

アイツのウザい顔が浮かび、青筋が立つ。

カルム「キリトに譲るわ。」

キリト「ああ……………」

キリトがエクスカリバーを抜こうとする。

しかし、全然ビクともしない。

まあ、その手の聖剣は、簡単には抜けないのがお約束なのだが。

何故、俺が抜かないのかと言うと、俺は、筋力と敏捷さを丁度良く取っているため、そこはキリトが適任だと思ったからだ。

つまり、キリトでビクとしないなら、手伝うのは無理だ。その代わりに、応援をする。

応援の末、キリトが遂にエクスキャリバーを抜いたのだ。

キリトが派手に吹っ飛ばされ、俺達全員で支える。

キリト「やつ……………た……………よな？」

カルム「ああ！」

クライン「おいキリの字！何か変だぜ！」

ヒロミ「台座から、根が!？」

すると、エクスキャリバーが刺さっていた台座から根が現れ、螺旋階段を破壊し、周囲の壁にヒビが入る。

クライン「おわつ……………！」

ラット「壊れる……………!？」

ユイ「スリウムヘイム全体が崩壊します！」

カナ「皆！急いで脱出を！」

カルム「でも、階段が!!」

そう、この玄室に降りる為に使った螺旋階段は、跡形もなく吹っ飛んでいた。チエイズ「根っこに掴まるのは……………」

シノン「無理そうね。」

こんな状況下でも、至って冷静なGGOコンビが呟く。

リズベツト「ちよつと世界樹う！そりやあんまり薄情つてもんじやないの！」

シリカ「そーですっ！」

ヒロミ「あの、シリカ、リズさん。」

ラット「樹に文句を言つてもな。」

ミト「飛び降りてもその先は地面かグレードボイドだしね。」

シリカ「死にますっ！」

男性陣「死ぬな。」

シリカの絶叫に、男性陣で突っ込んでいると、クラインが何かを思いついたようだ。

クライン「よ……………よおオシッ！クライン様のオリンピック級垂直ハイジャンプを、見

せるつきやねエな！」

キリト「あ！バカ！やめ……………！」

パラド「待て！」

カルム「やめろ……………！」

俺、キリト、パラドが静止する間もなく、華麗な背面跳びを披露。記録、推定2メートル15センチ。

そして、落下して、スリウムヘイムの角っこが、落下する。

シリカ「く……………クラインさんの、バカアアア!!」

ヒロミ「シリカ! 落ち着いて!!」

シリカの割と本気の罵倒が、周囲に響き渡る。

これが、某雑誌の、世の中の危険から身を守る術を教える老人の漫画だったら、友達に電話するか、ドリルで穴を掘るといふ事になるだろう。

しかし、落ちた先はグレードボイド。

そんな展開が通じる訳がない。

ミト「……………あの下って、どうなってるのかしらね?」

カルム「多分、ニブルヘイムに通じてるかもしれないな!」

シノン「寒くないといいなあ……………」

チェイス「いや、寒いだろう。何せ、霜の巨人達の故郷だからな!」

俺とミト、チェイスとシノンが話していると、ハヤトがハツとした様な表情を浮かべる。
る。

ハヤト「そういえば、リーファ! スロータークエストの方はどうなった!？」

リーファ「……………！あ……………！まだ光が2個だけ残ってる！間に合ったよ！ハヤト君！よかったあ……………！」

先ほどまで歓声と思われる声を出していたリーファがハヤトに抱きつく。

すると、キリトが変な顔になる。

カルム「おいキリト。こんな状況下でシスコンぶりを発揮するなよ。」

パラド「キリトはシスコンなのか？」

キリト「いや、シスコンじゃないから。」

アスナ「まあまあ……………」

すると、リーファの耳に何か聞こえたようで、上を向くと、そこには、トンキーとジヨンの2体が居た。

そういえば忘れてたな。

皆が手を振っている。

クライン「へへ……………。オリヤ最初っから信じてたぜ……………！アイツが絶対に助けに来てくれるってよお……………」

リーー嘘つけ！

と、クライン以外全員が思っただろう。

まあ、忘れてたのは事実だ。

いつまでも変わらずに健気な2体の邪神は、こちらに近づいてくる。それぞれ二手に分かれて、乗る事に。

行きと同様にトンキーにはキリト、アスナ、リーファ、シノン、リスベット、シリカ、クラインが、ジョンには俺、ミト、パラド、ヒロミ、ラット、ハヤト、チエイスが乗る。途中、クラインが落ちるといふハプニングはあったが、キリト以外は乗った。

だが、問題はキリトだ。

エクスキャリバーが重いらしく、飛び移れずに居た。すると。

キリト「……………まったく！カーディナルつてのは！」

そう言つて、エクスキャリバーを捨てて、トンキーに飛び移る。

キリトは名残惜しそうに見ていた。

すると、シノンがリトリブ・アローを発動する。

ミト「まさか、エクスキャリバーを回収するつもりなの？」

カルム「出来るのか？」

チエイス「いや、シノンなら出来る。」

ま、シノンを信じるか。

すると、矢を発射して、エクスキャリバーに命中して、シノンが引き上げる。

シノン「うわ、重……………ッ！」
すると、俺たちの声が重なり。

『シノンさんマジかつけえー！！！！』

ハヤト「すげえな！」

チエイス「さすが、シノンだ。」

チエイスがドヤ顔なのは、気にしないでおこう。

すると、シノンがニヤツとする。

シノン「はい。この剣を抜く度に、私に感謝しなさいね。」

キリト「分かったよ……………」

シノンなりの仕返しを見ていた。

多分、GGOでの一件を、未だに根に持ってたんだな。

すると、スリウムヘイムが崩壊していく。

更に、グレードボイドから水が溢れてきて、世界樹の根がそこに向かう。

ミト「根から、芽が……………」

ミトの言う通り、根から、俺たちからしたら巨大だろうが、小さい芽が生えて、冬から春に変わったようなステージになった。

すると、トンキーとジョンが遠吠えを響かせると、2体の仲間が出てくる。

地面を見ると、プレイヤーの一団が呆然としていた。

まあ、無理もないか。

リーファ「……………良かった。良かったね、トンキー、ジョン。ほら、友達がいっぱいいるよ。あそこにも……………あそこにも、あんなに沢山……………！」

リーファの涙混じりの声が聞こえてきて、俺達全員は涙する。

そういえば、カナは最近、俺に泣き顔を見せるのを嫌がるな。

誰からそんな学習をしたのか。

そんな事を思っていると。

ウルズ「見事に、成し遂げてくれましたね。」

と、ウルズが現れる。

レイドリーダーであるキルトに任せるが、俺は考察をしていた。

それは、スリウムが言いかけた事だ。

アース神族が真の……………と言いかけたところで、ツールに止めを刺された。

何を言おうとしていたのか……………。

まさか、侵略者……………？

その思考は、ウルズの妹達が現れ、報酬が入った事で中断する。

しかも、2人目が来た時点で、容量の限界値に近づく。

だが、ウルズからの報酬は、エクスキャリバーをキリトに授ける事だ。すると、三姉妹は、声をそろえて言う。

「「ありがとう、妖精達。また会いましょう。」」

そう言うのと、飛び去ろうとする。

クライン「すつ、すすスクルドさん！連絡先をおお！」

おい！フレイヤはどうした!?

ていうか、NPCが連絡先なんてくれる訳ないだろ！

そんな風に俺たちが思っていると。

何という事でしょう。

スクルドが、クラインに何か渡したのだ。

それを呆れながら見てると、キリトから打ち上げ兼忘年会をする事を提案された。

無論、付き合う。

だが、ユイ、カナ、パレードが現実だと、参加できないのだ。

しかし、アスナが明日から京都に行くらしく、今日じゃないとダメだ。

ユイとカナとパレードが、そこを汲んで、リアルとなった。

という事は、アレの出番だな。

キリトに連絡して、とある物を持ち込む。

電車で行き、和人と直葉、侑斗と合流する。

ダイシー・カフェには、詩乃と英介が先に着いていた。

エギルに挨拶をして、俺とキリトは可動式カメラと、PCを立ち上げる。

詩乃「……………何、それ？」

残りの面子にも手伝ってもらい、カメラを店内の四箇所を設置する。

色々と準備を終え、俺とキリトは、小型のヘッドセットを装着して、話しかける。

和人「どうだ、ユイ？」

冬馬「カナとパラドはどうだ？」

ユイ『はい！ちゃんと聞こえるし、ちゃんと見えます！』

カナ『大丈夫。』

パラド『問題ないぜ。』

和人「じゃあ、3人とも、ゆっくりでいいから動いてくれ。」

『はい！』

パラド『おう！』

すると、一番近くのカメラが動く。

そう、俺とキリトの合同で、これを作った。

リアルには来れない3人のためのやつだ。

詩乃「なるほどね。つまり、あのカメラとマイクは、ユイちゃんとカナちゃんとパ
ドの端末……感覚器って事ね。」

直葉「ええ。お兄ちゃんにカルムさん、学校でメカ……メカトニ……。」
「メカトロニクス。」

侑斗「コイツら、メカトロニクスコースを受講したけどさ、完全に、その3人の為だ
よな。」

英介「そうだな。コイツらは完全なる親バカという事だ。」

ユイ『がががん注文出してます！』

カナ『私も！』

パラド『俺もだ！』

ユイ、カナ、パラド、直葉、侑斗、詩乃、英介の7人が笑い合う。

俺と和人は反論する。

和人「そ、それだけじゃないぞ！」

冬馬「そうだぞ！カメラをもっと小型化し、肩とか頭に装着できれば、どこでも自由
に連れて行けるんだぞ！」

直葉「それも、ユイちゃん達の仕様でしょ！」

ぐうの音も出ない。

でも、これはまだ完成形には至ってはいない。

どっかの企業が、美少女や美青年ロボットを開発してくんないかな……………。

そんな事を考えていると、明日奈、深澄、遼太郎、珪子、壮吾、里香、浩介も到着する。

料理も完成して、エギルもテーブルに着く。

和人「祝、《聖剣エクスカリバー》とついでに《雷槌ミョルニル》ゲット！お疲れ、2025年！……………乾杯！」

『乾杯！』

俺たちは、エギルが出した料理を美味しく食べていく。

1時間後。

詩乃「それにしても、どうして《エクスカリバー》なの？」

和人「へ？どうしてって？」

詩乃「普通は……………っていうか、他のファンタジー小説や漫画だと、《カリバー》でしよ。《エクスカリバー》。」

英介「そういう事か。」

直葉「へえ、シノンさん、その手の小説とか読むんですか？」

詩乃「中学の頃は、図書室のヌシだったから。」

侑斗「確かに、アーサー王伝説の本も何冊かスグに勧められて読んだけど、訳は全部《カリバー》だったな。」

冬馬「まあ、ALOにあのアイテムを設定したデザイナーの趣味か気紛れだろ。」

和人「そうだろ。」

俺たちがそんな事を言うと、深澄と明日奈が苦笑する。

明日奈「まあ、大本の伝説では、もっと色々な名前があるのよね。」

深澄「さっきのクエストでは偽物扱いされてたけど、《カリバーン》もその類じゃないかしら。」

ユイ『主な所では、《カレドヴルフ》、《カリボール》、《コルブランド》、《カリバーン》、《エスカリボール》などがあるそうです。』

カナ『まあ、これらは英語、フランス語、ラテン語、ウエールズ語の発音の違いや写本の表記の揺れで生じた物らしいけど。』

我が娘の博識ぶりに驚きつつ、スペアリブを頬張る。

詩乃が再び口を開く。

詩乃「まあ、別に大した事じゃないけど、《キャリバー》って言うと、私には別の意味に聞こえるから。」

冬馬「別の意味？」

英介「ああ。銃の口径の事を英語で《キャリバー》って言うしな。まあ、エクスキヤリバーとはスペルが違うが。」

詩乃「そう。そこから転じて、《人の器》って意味もあるの。《a man of high caliber》で器の大きい人とかの意味になる。」

直葉「へえーっ。憶えとこ。」

侑斗「いや、試験には出ないだろ。」

すると、里香と浩介の2人がニヤニヤしながら立ち上がる。

これに、嫌な予感がする。

里香「つてー事は。エクスキヤリバーの持ち主は、デツカイ器がないとダメつて事よね？」

珪子「そうなんですか？」

壮吾「そうなのかな？」

浩介「そーいや、どこかの誰かさん達が、短期のアルバイトでドーンと稼いだと聞いたが？」

「え……………」

と、皆の視線が俺たちを集まる。

俺、エクスキャリバーの持ち主じゃないからキリトに押し付けようとするが、深澄がこちらを笑顔で見てる。

だが、アレは「払ってくれるよね？」という笑顔だ。

この際、覚悟を決めるか。

和人「も、もちろん最初から、今日の払いは任せろって言うつもりだったぞ。」

冬馬「お、俺も……。」

その宣言に、皆が拍手し、遼太郎が口笛を吹く。

心の中で、ため息を吐きつつ、笑う。

マザーズ・ロザリオ

第1話 森の家

ミトside

2026年 1月6日

私達は、今日はアスナとキリトの家で勉強会を開いていた。

外は、雪が降っていて、とても出る気が起きなかった。

何せ、アインクラッドは今、アルヴヘイムの最北の、ノーム領上空を飛行しているのだ。

そうなっても仕方ない。

勉強会には、私、アスナ、シリカ、ヒロミ、リズベット、ラット、リーファ、ハヤト、フィリア、レインが参加している。

シノンとチェイスは、既に冬休みの課題を終わらせていて、シノンはチェイスの挨拶も兼ねて、実家に帰省している。

ハヤト曰く、少し気が早いんじゃないのからしい。

さて、さっさと終わらせますか。

そんな風に考えていると、横に誰かの頭が倒れてくる。

それは、フィリアだった。

苦笑しつつ、フィリアを起こす。

ミト「ちよつと、フィリア。今寝たら後で眠れなくなるわよ。」

フィリア「あ……………。そうだった……………。」

ヒロミ「シリカも。」

シリカ「ふわああ……………。」

アスナ「ちよつと、暖かすぎるかしら？温度、少し下げようか？」

アスナがそう言うのと、リーファとハヤトとレインが笑いを含んだ声で言った。

リーファ「いえ、そうじゃなくて。」

ハヤト「多分、アレらのせいだと思うぜ。」

レイン「そうだと思うよ。」

アスナ「アレ……………？」

ミト「……………ああ、なるほど……………。」

指差した先には、暖炉があつて、そこには、椅子に座つてるキリトとカルムとパラドが寝ていた。

しかも、キリトの腹の上には、ピナとユイちゃんが、カルムの腹の上には、カナが気

持ちよく寝ているのだ。

パラドも、時折、変な事を口にしながら寝ていた。

例えば。

パラド「よつしやあ。俺の勝ちだ……………」

そんな口調から、夢の中でもカルムとゲームをして勝ったのだろう。

すると、アスナが口を開く。

アスナ「2人とも、GGOから戻ってきてから、ずっと頑張ってるみたい。」

ミト「そうね。」

リズベット「アレでしょ。こないだ、エギルの店で見せた……………」

ラット「ああ。ユイやカナ、パラドの……………」

リーファ「何とかニクス！」

「「「メカトロニクス。」」」

リーファのボケに、私、アスナ、ヒロミ、リズベット、ラットの声が重なる。

リーファ「でも、2人とも、本当に気持ちよく寝ますよね。」

ハヤト「おかげで、こっちまで眠くなってくるぜ。」

ラット「全くだ。」

レイン「本当にそうですよね。」

そんな事を聞きながら、私は、とある事を思い出していた。

それは、去年の12月20日、ダブルデートと称して、アスナとキリト、私とカルムでダイシーカフェを訪れた時だ。

エギルが人数分のコーヒーを出す。

エギル「しつかしお前らも、こんな煤けた所でデートしなくても、もつとオシヤレな場所があるんじゃないのか？」

和人「アルゲードのエギルの店と比べたら、ここも十分オシヤレだよ。」

冬馬「なんだかんだで、足がこつちに向くんだよな。」

すると、エギルの顔が気難しくなり、青筋が立つ。

明日奈「私は、結構好きだったけどなあ。」

深澄「私も。」

私と明日奈のフォローで、エギルの顔はニヤけた顔になる。

和人「あのぼったくり商店のどこがよかったんだ？」

冬馬「おい！確かに、ぼったくりな所はあるかもしれないけど、良い店だったぞ。」

冬馬、それはフォローになってない。

エギルが冬馬を睨む。

明日奈「キリト君にカルム君だって、居候してたくせに。」

深澄「そうね。」

「それはそれ。」

冬馬と和人の声が重なり、エギルがこちらをニヤニヤしながら見てくる。

冬馬「……………何ニヤニヤしてんすか？」

エギル「いやあ、こうして見てると、とてもあの茅場晶彦を打ち破った英雄には見えねえなつて。」

和人「それはお互い様だ。」

明日奈「エギルさんつて、MMOを長くやってるんですよね？」

深澄「確か、エギルの奥さんともゲームのなかで出会ったんですよね？」

エギル「おう。そんな感じだ。嫁さんはアメリカ在住だったのに、その1年後には、ここで店を開く事になったんだ。人生、何が起こるか分からねえな。」

「へええ……………!!」

和人「その話、クラインが聞いてたら、どんな反応をしたのかな？」

冬馬「多分、血の涙を流すんじゃないのか？」

まあ、クラインもいい人ではあるけど、女好きな所がなあ。

だからモテないのよ。

エギル曰く、ナーヴギアも2人分予約するつもりだったけど、一つしか予約出来ず、対

戦で決めたらしい。

その結果、エギルはS A Oに囚われた。

その二年間の間は、嫁さんが必死に守ってきたそうだ。

和人「確かに、俺も、家族の元に帰りたいって気持ちに、何度も助けられたしな。」

冬馬「俺も。家に帰りたいって気持ちで助けられたし。」

エギル「きつと攻略組の……。いや、アインクラッドに居たプレイヤー全員がそう思っていたんじゃないのかな。アスナやミトにも、そういうモチベーションがあつたんじゃないのか？」

明日奈「私は、あまり自分の家が好きじゃなかったから……。戦う意味を見いだせなかった。」

深澄「私は、どちらかというと、アスナとまた一緒にショッピングをしたいって思ってたから。」

そういうえば、アスナのお母さんって、とても厳しい人だったわね。

まあ、その理由もあるが、途中から、カルムと一緒に生きて帰りたいっていう思いも出てきたからね。

そんな風に思っていると、カルムが手を乗せてきて、笑った。

キリトとアスナもそんな風だろう。

すると、エギルに遮られた。

エギル「お前らつて、隙あらばイチャイチャしだすよな。」

冬馬「別にいいだろ。」

エギル「開き直りやがった。……まあ、その件なんだが。ついさつき、アップデートの内容が判明した。」

それは、新たな武器にソードスキル、アインクラッドの、21層から30層までの解禁だ。

つまり、あの森の家にまた行ける。

そう思っていると、またカルムと手を繋ぐ。

エギル曰く、アップデートがクリスマススイブだそうだ。

2025年 12月24日

私達は、大規模レイドパーティーを組み、迷宮区を高速でクリアしていく。

そして、21層を死守するボスへThe Lost Technology Gemに戦いを挑んでいた。

近接攻撃部隊は、中々近づけなかったけど、メイジ隊のおかげで近づけて、私達はそれぞれソードスキルを叩き込む。

すると、アスナがいつの間にかワンドからレイピアに持ち替えて、特攻していた。

攻撃が当たるけど、硬直で動けないアスナにボスが攻撃しようとする。

すると、後方から、エクスプロード・アローと、ギリギリクリティカルフィニッシュが飛んできて、攻撃をブロックする。

シノン「アスナ！ミト！もう少しよ！」

チエイス「行け！」

キリト「アスナ！行くぞ！」

カルム「ミトも行くぞ！」

ユイ「殴り攻撃、来ます！」

カナ「一、今！」

キリトとカルムがソードスキルを放ち、腕を弾く。

「スイツチ！」

「ハアアアア!!」

キリトとカルムと変わったアスナと私は、それぞれの最上位ソードスキルを放ち、ボスを撃破する。

後にクラインは、SAOの時よりも凄かったと語っている。

そして、キリトとアスナ、カルムと私は、それぞれのログハウスに向かうべく、羽を動かす。

そして、私達のログハウスが見つかった。

ミト「カルム!!」

カルム「ああ!」

カナ「久しぶりに見た……!」

パラド「アレがカルム達が住んでたログハウスかあ!」

そっか。

パラドはALLOで会ったから。

そして、ログハウスの前に着き、購入ボタンをカルムにカナ、パラドも手にかけて、一緒に購入した。

家の中に入った時には、感動のあまり、泣いてしまった。

そんな事を夢に見ていたからか。

リーファ「ああ!アスナさんにミトさんまで寝てますよ!」

ハヤト「ラットにリズも起きろ!」

ラット「寝てしまったか。」

リズベット「しっかし、何であの2人を見ていると、眠くなるのかしら?」

アスナ「じゃあ、一旦休憩しましょうか。」

そう言うアスナは、とあるマグカップを取り出す。

それは、つい最近受けたクエストで手に入れた、《タップするだけで、九十九種類の味のお茶がランダムに湧き出す》魔法のマグカップだ。

リーファとハヤト、シリカとヒロミが外に出ていく。

そこからお茶を飲んでみると、リズベットが話し出す。

リズベット「そういやさ、アスナは知ってる？ 《ゼツケン》の話。」

アスナ「ゼツケン？ 運動会でもするの？」

ミト「違う違う。絶対に剣って書いて絶剣。」

アスナ「新実装の武器？」

ラット「いや、通り名だ。キャラネームは知らんが、余りにも強すぎるからそんな二つ名がついたんだ。」

そんな事を話しているうちに、年末にという単語で、アスナが顔を顰める。

無理もない。

アスナは年末には結城家の本家の方に行っていたのだ。

アスナからその手の愚痴を聞いている私からしたら、とても不安になる。

須郷みたいな奴がお見合い相手になる可能性があるのだ。

そんな思いを抱きつつ、話は、絶剣に挑んだのかと聞いた話になる。

アスナ「ミトは、その絶剣に挑んだの？」

ミト「うん。挑んだけど、負けちゃった。」

アスナ「ミトを倒した……!?!」

リーファ「私やハヤト君、リズさんも挑んだんですが、負けちゃいました。」
ハヤト「アレは強すぎるぜ。」

アスナ「そういえば、その暖炉で寝ているあの3人は? そんな話を聞くと、真っ先に挑みそうだけど。」

それを聞くと、私達は吹き出してしまう。

呆気に取られているアスナに対して、フィリアが口を開く。

フィリア「もうキリトもカルムもパラドも挑んだんですよ。それはもう格好良く負けましたよ。」

アスナ「え………?」

それを聞いて、アスナは呆然とした。

まあ、無理もない。

アスナ視点からキリトが負けたのを見たのは、あのヒースクリフだけだ。

アスナ「キリト君達は、本気だったの?」

ミト「まあ、普通のゲームとしては、本気だったと思う。」

アスナ「え?」

ミト「私、思うんだ。あの2人が本当の意味で本気になるのは、ゲームがゲームじゃなくなった時だけ。だから、これで良いんじゃないかなって。」

リズベット「確かに、巻き込まれ体質だしね、あの2人は。」

ラット「そうだな。これ以上、厄介事を持ち込まないでほしいが。」

その言葉に、アスナも頷いた。

そんなこんなで、時間の都合上、お開きになる。

すると、アスナがとある事を聞いてくる。

アスナ「ねえ、リズ、ミト。」

ミト「ん？」

リズベット「どうしたの？」

アスナ「さっき、絶剣はコンバートプレイヤーだって言ったけどさ、それだけ強いなら、SAOプレイヤーだったって言う線もあるんじゃないの？」

リズベット「それなんだけど。」

ミト「あの2人曰く、その可能性は、まずないだろうってさ。」

アスナ「何で？」

ミト「もし絶剣があの世界に居たら、二刀流やエボリューションキングは、俺たちじゃなく、絶剣に与えられていた筈だってさ。」

第2話 絶剣

深澄 side

勉強会がお開きになって、ログアウトした後、自室で起きた。

深澄「アスナ………。大丈夫かな……。」

アスナのお母さんが厳しいのは、良くアスナから聞いていたので、不安になる。助けてあげたい。

でも、アスナのお母さんに意見は出来ない。

深澄「私、どうしたら良いんだろ……?」

このままじゃ、アスナが遠くに行ってしまう可能性がある。

アスナのお母さんの事だ、帰還者学校ではない別の学校に行かせようとしそう。

帰還者学校の世間での評価としては、優遇しすぎだという評価が多い。

でも、単なるセーフティネットではない事は、通っている私が実感している。

何せ、全校生徒に週一度の個別カウンセリングが義務付けられている。

そこでは、あからさまに反社会的傾向がないかを探るかのような質問が多い。

答え方によっては、病院での再診断や、投薬まで指示される。

一部のプレイヤーは、『ラフィン・コフィン』に所属していた未成年もいた可能性があるるので、そうなくても仕方ないと思ってる。

深澄「でも、それを抜きにしても、私は悪くないと思う。」
そう呟く。

政府や文科省の思惑はどうであれ、現場の教師はほぼ全員が志願で赴任してきた。

だから、真摯に生徒に向き合ってくれる。

そして、心を繋いだ友人たちと一緒に居られる。

アスナ、キリト、リズベット、ラット、シリカ、ヒロミ、レイモンド、フィリップ、ノーチラス、ユナ、他の元攻略組、そしてカルムと。

だからといって、何かが変わるわけではないけれど。

そんな事を思いつつ、夕食を食べて、風呂に入って、寝る。

翌日、アインクラッド24層で、主街区の少し北にある小島の南岸にカルムと一緒に並んで座っている。

その近くには、キリトとアスナもいる。

考え事をしていると。

カルム「どうした、ミト？」

ミト「え。あ、いや、何でもないわ。」

カルム「何でもないなら、そんな暗い顔にはならないだろ。」
本当に、見通してるのかしら？

ミト「実はね、アスナが不安なの。」

カルム「アスナが？」

ミト「アスナのお母さんって、とても厳しいらしくて、もしかしたら、居なくなっちゃうかもって思っ……。」

カルム「なるほどな……。」

ミト「ごめんね、そんな事を考えていて。」

カルム「いや、親友の心配をするのは、悪くないと思うけどな。」

ミト「……思い出したんだ。あの第一層で、アスナを見捨てかけた事を。」

カルム「……。」

ミト「助けてあげたいけど、どうすればいいのか分かんないよ……。」
すると、カルムが私の体を、自分の体に寄せる。

ミト「カルム……？」

カルム「気持ちは分かる。それに、ミトが本当にアスナの事を想ってる事もな。」

ミト「え？」

カルム「アスナの事を大事にしてるから、そんな風に心配するんだろ？」

ミト「うん……………」

カルム「それでいいんじゃないか？」

ミト「え……………」

カルム「アスナが苦しんでる時に、ミトが支えてやれば。それが、本当の親友だと、俺は思ってるぜ。」

ミト「カルム……………」

時々、そんな風に言うから、更に好きになっちゃうじゃない。

カルムの手を、私の手で絡めながら握る。

ミト「ねえ……………」もう少し、このままで良いかな？」

カルム「良いぞ。」

そんな風にイチヤイチャしていると、背後から着地するような音がして。

フィリア「ちよつと目を離すとすぐにこれなんだから！」

そんな声が出て、私はカルムから少し離れる。

そこには、フィリアとレイン、レイモンドとフィリップ、カナ、パラドがいた。

レイン「お取り込み中悪いけど、そろそろアスナさんが移動するよ。」

レイモンド「つたく、見せつけるかのようにイチヤイチャしやがって。もうちよい人目を考えろよ。」

フィリップ「レイモンド。それって、嫉妬かい？彼女が居ないのを気にするなんて、クラインみたいじゃないか。」

レイモンド「アイツと一緒にするな。」

カナ「パパとママはラブラブですね！」

パレード「お熱いぜ。」

そんな風に言ってくるから、私は恥ずかしくなるけど、カルムは少し名残惜しそうな顔をしていた。

アスナとキリトの方は、シリカ、ヒロミ、リズベット、ラット、リーファ、ハヤトが居た。

全員集結してるから、その絶剣がいる小島に向かう。

そこには、絶剣に負けた人が降参していた。

ユウキ「イエイ！」

絶剣を見たアスナが呆然として、私とリズベットに話しかける。

アスナ「ねえ、ミトにリズ。」

ミト「何？」

リズベット「どうしたの？」

アスナ「絶剣って、女の子じゃない！」

ミト「そういえば、言っていなかったわね。」

アスナ「聞いてないよ!……もしかして!」

「ヒッ!」

アスナ「キリト君やカルム君が負けたのって……!」

アスナ、怖い。

すると、キリトとカルムが揃って首を振る。

キリト「ち、違うよ。」

カルム「女の子だからって手加減した訳じゃないぞ!本当にガチでやったぞ!」

アスナ「どーだか。」

アスナの炎の視線を見て、キリトとカルムの2人は縮こまっていた。

まあ、本気でやってたし。

ユウキ「えーっと、次に対戦する人、居ませんか?」

周囲を見ると、なかなか名乗り出る人が出てこなかった。

そこで、私とリズがお節介をする。

ミト「ほら、行きなさいよ。」

アスナ「や……ちよっと、気合入れ直さないと……。」

リズベット「そんなもん、あの子と一合撃ち合えばバリバリ入るわよ。さ、行った行っ

た！」

私とリズの2人でアスナを押し出す。

絶剣もといユウキは、アスナの方を見る。

ユウキ「あ、お姉さん、やる？」

アスナ「え、えーと……じゃあ、やろうかな？」

アスナがやると言うのと、周囲からバーサクヒーラーのお出ましだという声が聞こえてきて、アスナに青筋が立つ。

まあ、アスナの戦闘スタイルが原因と言っても、いくら何でも言い過ぎだと思う。ルールの確認を行って、デュエルが始まった。

先に仕掛けたのはアスナだった。

高速の連続突きを仕掛けるも、ユウキはそれを簡単にいなし、アスナに急接近した。驚き、体勢を崩したアスナにユウキは一撃を放った。

なんとか致命傷は避けるも、アスナは胸に一撃を掠めてしまった。

ミト（それにしても、アスナが実力者なのは分かるけど、ユウキも凄いわね。）

ユウキの実力に、私は再び驚く。

すると、アスナもスイツチが入ったのか、本気で相手をする。

アレは、閃光としての本気だ。

再びアスナが仕掛けた……その一撃は先ほどと違い、ユウキの剣を弾き、衝撃で周りに衝撃波を起こすレベルだった。

そこからは互いに譲らない高速のラッシュだった。

剣戟、ソードスキルのお互いのHPを削りながらの戦いだったが、先に勝負に出たのはアスナだった。

競り合いからユウキに掌底を撃ち込んだのだ。

そこから細剣4連撃ソードスキルへカドラプル・ペインを放つが……。

ミト（アスナのカドラプル・ペインが見えてるの!?)

そう、ユウキは、カドラプル・ペインを全て迎撃して、硬直に入ったアスナに対して、私やカルムの時にも使ったOSS、《マザーズ・ロザリオ》を発動する。

アスナの体に5連撃が入り、アスナも迎撃の為に、OSS《スターリィ・ティア》を発動して、6から10連撃を迎撃する。

しかし、マザーズ・ロザリオは11連撃技。

最後の攻撃が、アスナに……。

すると、爆風が周囲を包み、全員の視界が塞がれた。

視界が晴れると、寸止めの状態になっていた。

ユウキ「うーん、すつごく良いね！ミトやカルムの言う通りだったよ！」

アスナ「え？あの、決着は？」

ユウキ「こんだけ戦えば、ボクは満足だよ！お姉さんは最後までやりたい？」

その言葉に、アスナも首を横に振る。

すると、ユウキはアスナの手を掴んで。

ユウキ「はい！」

アスナ「え!?ちよつと！」

アスナがユウキに連れていかれる。

それを見送っていく。

さて。

ミト「行こつか。」

カルム「そうだな。」

私たちは、アスナが不安になったので、追いかけていく。

第3話 スリーピング・ナイツ

ミト side

私とカルムは、ユウキに引つ張られるアスナを追いかけていく。

2人は、アインクラッド外周から外に出て、九十度ターンして、垂直上昇を行う。

ミト「……………随分飛ぶわね。」

カルム「多分、27層に行くんだろ。俺たちの時にもそうだったし。」

そう、私とカルムは一度、ユウキが率いるギルド、《スリーピング・ナイツ》に、とある理由で誘われたのだ。

その際に断って、アスナを紹介した。

そして、ユウキはまた九十度ターンして、27層の中に。

私たちも追っついていき、ガーゴイルの索敵を避けつつ、主街区である《ロンパール》へと到着する。

アスナ「……………ね、どうしてここに連れてきてくれたの？この街に何かあるの？」

ユウキ「そうだよ……………その前に、まずはボクの仲間を紹介するよ！って言いたいけど、その着いてきてる人達、出てきたら？」

どうやら、バレたらしい。

ユウキの発言に、アスナが警戒するような表情を浮かべる。

私たちは観念して、2人の目の前に出る。

すると、アスナが驚いた表情を浮かべる。

アスナ「ミト！カルム君！どうして？」

ミト「アスナが心配だね。」

ユウキ「2人とも、ありがとうね！アスナを紹介してくれて！」

カルム「ああ。」

アスナ「……………え？」

カルム「それより、ユウキの仲間をアスナに紹介したらどうだ？」

ユウキ「そうだった！着いてきて！」

アスナ「あ、ちよ……………」

アスナが私たちを見る。

その視線は、後で説明をお願いという視線だった。

ユウキに書いて行って、着いた先には一軒の宿屋が。

その中に入ると。

??? 「お帰り、ユウキ！見つかったの!？」

そこには、5人のプレイヤーが陣取っていた。

ユウキは彼らに歩み寄り、アスナの方を振り向いた。

ユウキ「紹介するよ。ボクのギルド、《スリーピング・ナイツ》の仲間たち！で、このお姉さんが……。何だっけ？」

カルム「この人はアスナって言うんだぜ。バーサクヒーラーとして名を轟かせ……イテツ！」

カルムの語尾のイテツは、アスナに思い切り蹴られたからだ。

流石に、揶揄うにはやりすぎ。

アスナ「まあ、私がアスナです。」

すると、小柄なサラマンダーの少年が勢いよく立ち上がる。

彼は確か、ジュンだった筈。

ジュン「僕はジュン！アスナさん、よろしく！」

その次に、ノームの巨漢が話しかける。

彼はテツチだった筈。

テツチ「あー、えーっと、テツチって言います。どうぞ宜しく。」

次はレプラコーンの青年だ。

タルケンだった筈。

タルケン「わ、ワタクシは、そ、その、タルケンって名前です。よ、よ、よろしくお願ひし………イタツ!!」

タルケンの語尾に悲鳴が重なったのは、スプリガンの女性、ノリが蹴ったからだ。

ノリ「いい加減、その上がり症を直しなよタルは! 女の子じやの前に出るとすぐこれなんだからさ! アタシはノリ。会えて嬉しいよ、アスナさん。」

最後の1人は、アスナと同じくウンディーネのシウネーというプレイヤーだ。

シウネー「初めまして。私はシウネーです。ありがとう、来て下さって。」

ユウキ「んで、ボクが、一応ギルドリーダーのユウキです! アスナさん………一緒に頑張ろう!」

アスナ「えつと………何を頑張るのかな?」

ユウキ「………そっか、ボクまだなんにも説明してなかった!」

その発言に、スリーピング・ナイトの面々とカルムがずっこける。

カルムって、こういう時の乗りは凄いのよね。

ユウキが語ったのは、この27層のボスモンスターを、アスナを含めた7人だけで倒したいという事だった。

手短かにアスナがその辺りの事情を説明していく。

アスナ「………っていう訳だから………7人っていうのは、ちよつと無理かなあつて

思うんだけど……………」

ユウキ「うん、全然無理だった。実は、25層と26層のボスにも挑戦したんだ。」
カルム「へえ。」

ユウキ「ボク達的には頑張ったんだけど、どうしてもMPと回復ポーションが持たなくて。あれこれ工夫してるうちに、でっかい集団に倒されちゃった。」

ミト「そう……………」

そういえば、25層と26層のボスは、同じ集団に倒された筈。

きな臭い噂も立っている。

一応、カルムがアルゴとジエイク、レイモンドとフィリップに依頼して、調査中の筈。アスナがなぜそこまで1パーティーで倒したいのかを聞いて、シウネーが説明する。スリーピング・ナイツは、春に解散する。

だから、全員の名前を剣士の碑に残したいからと。

気持ちは分かる。

アスナも、お母さんが強硬手段に出て、私たちと会えなくなってしまうかもしれない。シウネー「……………」どうでしょう？引き受けては貰えませんか？私たちは、コンバートしてまだあまり経っていないので、充分なお礼が出来ないかもしれないですが……………」アスナ「あ、いえ、どうせ経費が山ほどかかりますから、手持ちのお金はそつちに回

した方がいいです。報酬は、ボスから出た物を何か貰えればそれで……………」

シウネー「じゃあ、引き受けて頂けるんですか!？」

スリーピング・ナイツは目を輝かせる。

アスナはどうか迷っていた。

すると、カルムが近づいて。

カルム「良いんじゃないか？」

アスナ「カルム君？」

カルム「折角頼ってきてるんだ。答えてやるのも悪くはないだろう？」

ミト「そうよ。偶には当たってみたら？」

アスナ「……………そうね。やるだけ、やってみましようか。この際、成功率とかは置

いといて。」

すると、ユウキが目を輝かせ、アスナの右手を握る。

ユウキ「ありがとう、アスナさん！最初に剣を撃ち合った時から、そう言ってくれる

と思ってたよ！」

アスナ「私の事は、アスナって呼んで。」

ユウキ「ボクもユウキで良いよ！」

そうして、パーティーが始まり、私とカルムも参加する。

すると、アスナが聞きたい事があるそうだな。

アスナ「そういうえば、ユウキさ……ユウキは、デユエルで強い人を探してたんだよね？」

ユウキ「うん、そうだよ。」

アスナ「それなら、私じゃなくても、カルム君やミト、黒ずくめで片手直剣使いのスプリガンとか。」

ユウキ「実は、カルムやミトにも頼んだんだけどさ……。」

カルム「俺、互角に渡り合ったけど、ユウキの方が実力が上だし、俺は前衛タイプだから、作戦を立てるのなら、アスナが適任だと思ったからな。」

ミト「私もカルムと同じ。」

ユウキ「あの人は、ボクの秘密に気付いちやったから。」

キリトは何に気付いたのかしら？

そんな事を考えつつ、パーティーは進む。

すると、タルケンがアスナに聞く。

タルケン「それで……攻略の、具体的な手段ら、ど……どうなるんでしょう？」

アスナ「あ……えっと……。」

カルム「まずは、ボスの攻撃パターンをきつちりと把握する事が大切だな。回避でき

る攻撃は回避して、防御するべき時には、ちゃんと防御して、攻め時には全力で攻めるのが大事だと思うぜ。」

ミト「問題は、その手の情報は、ボス攻略専門の大ギルドに聞いても無駄だと思う。一度はぶっつけ本番で挑むべきだとは思うわ。」

ユウキ「ボク達は大丈夫だよ！ただ、前の二つの層でも、ぶっつけ本番で全滅した後、すぐに攻略されちゃったんだ。」

ジユン「3時間後に出直したらもう終わってたんだよな。気のせいかもしれないけど、何か、僕らが失敗するのを待ってたみたいなの……。」

やっぱり、怪しいわね、その大ギルド。

大ギルドによる管理が過ぎるといふのが多い内容だ。

カルムと顔を合わせて、頷く。

その後、パーティーはお開きになり、アスナとカルムと共に転移門に向かって行く。

アスナ「それにしても、2人とも知ってたなら、先に言つてよ！」

ミト「ごめん。」

カルム「そういうのを抜きで、ユウキと戦つて欲しかったからな。」

アスナ「でも、ミトだって、副団長としてのスキルもあるでしょ。」

ミト「流石に、アスナには劣るかな。」

そんな事を話していると、大量のメツセージが届く。

怖くて開けられないなと思っていると。

アスナ「っ……………!?!」

カルム「アスナ?」

ミト「アスナ!!」

アスナがいきなり硬直したと思ったら、倒れ込むので、カルムに支えてもらう。

呼びかけるが、反応がない。

私とカルムは、22層のキリトの家へと向かって行く。

カルム「キリト!」

ミト「ユイちゃんかカナは居る!?!」

キリト「カルム、ミト!?!どこに行つてたんだよ……………アスナ!?!」

私とカルムが急に入ってきた事に驚いたが、アスナの状態から、緊急事態なのは分かつたのだろう。

すぐに駆け寄る。

キリト「一体どうしたんだ!?!」

カルム「分からねえ!急に倒れて!」

ミト「ユイちゃんとカナはどうしたの!?!」

キリト「今、リズ達と散歩に出かけてる！すぐに連れてくる！」
そう言つてキリトが飛び出していき、私とカルムで協力してアスナをソファアに寝かせる。

すると。

ユイ「ママ!!」

カナ「アスナさん！」

キリト「連れてきた！」

カルム「速攻だな！頼む!!」

ユイちゃんとカナの2人が、ピクシー形態に戻り、アスナを調べる。

すると、リズ達も戻ってきた。

リズベット「アスナ!?!」

リーファ「どうしたんですか!?!」

カルム「分からん！急に倒れて！」

ハヤト「何が起こつてんだよ!?!」

そこには、リズベット、ラット、リーファ、ハヤト、シリカ、ヒロミ、ファイリア、レイン、パラドが居た。

しばらくすると、解析が終わつたようで、2人がアスナから離れる。

キリト「ユイ、カナ。アスナは……………？」

ユイ「……………大丈夫です。ログアウトして、意識が現実に戻ったから、意識が無くなつたんです。」

『……………ハア……………』

解析結果に、全員、力が抜ける。

ラット「それは良かったのだが、突然のログアウトって、何があつたんだ？」

カナ「アスナさんの場合、回線が切断されてしまったのログアウトです。」

フィリア「回線が、切断？」

すると、思い当たった節がある。

ミト「そういえば、この時間は、アスナの夕食の時間だから、お母さんに切断されたかも！」

カルム「そういう事か。とにかく、大事に至らなくて良かったぜ。」

キリト「悪いな、2人とも。」

ミト「気にしないで。」

カルム「じゃあ、ログアウトすつか。」

私も疲れたからログアウトしようとする、突然、腕を掴まれる。

何事かと思つて振り返ると、私にはリズベット、シリカ、リーファ、レイン、フィリ

アが掴んでいて、カルムにはラット、ヒロミ、ハヤト、パラドが掴む。

しかも全員、悪い笑みを浮かべていた。

リズベット「それで、アンタ達、どこに行つてたのよ？」

シリカ「アスナさんと一緒って事は、あの絶剣と一緒にいたんですよね？」

リーファ「そろそろ、話してくれませんか？」

フィリア「私たちだけ除け者なんて、ひどくないですか？」

レイン「そうだよね。」

ラット「さて、洗いざらい吐いてもらおうか。」

ヒロミ「そうですよ。何をしてたんですか？」

ハヤト「吐いて、楽になれ。」

パラド「白ける事、すんなよ。」

カルム「いや、結構です。用事を思い出して……………。その手を離してくれ。ちよっ

……………。離、離せエエエツ!!」

ミト「ちよつと！離してよ！」

キリトに助けを求めようとすると。

キリト「ユイとカナは見ちゃダメだ。」

ユイ「何でですか？」

カナ「ママとパパはどのようなの？」
目隠しをしていた。

私とカルムは諦めて、全員の尋問に答えた。
その間、ずっと正座の状態です。

第4話 大型ギルドとの衝突

ミト side

翌日、私とカルムは、アスナと合流して、スリーピング・ナイトの元へ。

アスナ「ごめんね、2人とも。急にログアウトしちゃって。」

カルム「気にすんな。」

ミト「アスナ、大丈夫？」

アスナ「大丈夫だよ。さあ、ユウキ達の所に向かおう！」

アスナは、無理してる。

アスナの表情に翳りが見えるのだ。

多分、お母さんと衝突したんだろうな。

どうにかしたい。

カルムももどかしそうな表情になっていた。

そして、昨日、スリーピング・ナイトと出会った宿に着く。

そこで、アスナは全員の武装を確認している。

アスナ「えーとつまり、ユウキとジユン、テッチが近接前衛型、タルケンとノリが中

距離型、そしてシウネーが後方援護型ってことね。」

ユウキは勿論だけど、他のパーティーの装備も、エンシエント・ウエポン級だ。

しかし全体のバランスは取れているけど、支援役と回復役が足りない。

アスナ「つて事は、私も後衛に入った方が良いみたいね。」

ユウキ「ごめんね、アスナ。あれだけ剣が使えるのに、後ろに回って貰っちゃって。」

アスナ「ううん、どうせ私じゃ盾役はできないし。その代わり、ジュンとテツチにはバシバシ叩かれて貰うから、覚悟してねー。」

ジュン「お、おう、任せとけ！」

ジュンの若干ぎこちない台詞に、その場にいる全員が笑う。

そういえば、全員集まるなんて、珍しいわね。

そうして、私とカルムを含めたスリーピング・ナイツは迷宮区にまで向かう。

だが、ボスに挑むのはスリーピング・ナイツとアスナのみだ。

私たちは、ボス部屋の前にまで来たら、帰る手筈になっている。

だが、気になるのは、大型ギルドの動きだ。

もしかしたら、今回もスリーピング・ナイツに先に行かせて、失敗したらボスを倒すのではと懸念している。

そんな事を考えていると、ボス部屋の前に到着する。

だけど、違和感がある。

アスナ「ユウキ、待って。」

ミト「皆、止まって。」

カルム「全員、止まれ。」

私とアスナとカルムがスリーピング・ナイツを止める。

アスナとカルムとアイコンタクトをして、アスナがサーチャーを召喚して、違和感があつた場所に突撃していく。

すると、潜伏していたプレイヤーが出現する。

予想通りの展開に、私は鎌を、カルムはメダジャリバーとガシャコンブレイカーを、アスナはレイピアを構える。

遅れて、スリーピング・ナイツも構える。

だが、展開は違った。

プレイヤー「ストップストップ！俺たちはお前らと戦う気は無い！」

カルム「なら、武器を仕舞え！」

カルムの声と共に、プレイヤーは武器を仕舞う。

プレイヤーの言い分を聞くと、待ち合わせをしており、仲間が来るまでモンスターに見つからないようにしていたそうだ。

しかし、怪しい。

何せ、あの大規模ギルドのメンバーだ。

一応、見逃す事に。

その後、プレイヤーは再び潜伏した。

そして、スリーピング・ナイトとアスナが突入していく。

だが、アスナ達がボス部屋に入る際に、足元に何かが居た。

ミト「カルム。」

カルム「ああ。」

その後、転移結晶を使い、22層のキリトの家にお邪魔する事に。

キリトも待っていたようだ。

キリト「暇だな。」

カルム「暇だ。」

ミト「暇ね。」

だが、アレはカルムが思い出したが、闇魔法の《盗み見》を使ったとの事。すると、新たな来客が来た。

アルゴ「よう、キー坊にカル坊に、ミーちゃん。」

ジェイク「お久しぶりっす！」

そこに来たのは、ご存じの情報屋コンビだ。

カルムが依頼した事の結果を言いに来たらしい。

カルム「で、どうだった？」

アルゴ「カル坊の予想通りだよ。あの大規模ギルドは、色々噂が立ってるんだ。」

ジェイク「何せ、ボスの立て続けの攻略に、ボスに挑もうとするパーティーのプロック、闇討ち、集団リンチをしてるって噂が流れてるもんでね。色々と不満があるプレイヤーが多かったつすよ。」

ミト「そして、スリーピング・ナイトの最初の挑戦の後にボスを攻略して、《盗み見》を使っている。辻褄が合うわ。」

キリト「まさか……………！行くぞ、カルム、ミト！」

カルム「あいよ！」

ジェイク「ちよっ!?お3方!？」

ジェイクとアルゴの静止も聞かずに、私たちは飛び出していく。

目的地は、27層の迷宮区だ。

しばらくすると、索敵スキルに大勢のプレイヤーが反応して、物陰に隠れる。

カルム「増援だな。」

ミト「……………厄介ね。」

キリト「だけど、好都合だ。……連中の中に紛れるぞ。」

私たちは、その増援のプレイヤーに紛れ、一緒に向かう。

すると、スリーピング・ナイトとアスナ達が見えてくる。

私たち3人は、領いて、システム外スキル、《壁走り》で増援のプレイヤーを追い越していき、スリーピング・ナイトとアスナの目の前に着地する。

カルム「悪いけど。」

ミト「ここから先は。」

キリト「通行止めだ。」

私たちは、それぞれの武器を構え、増援のプレイヤーに制止の言葉を投げる。

アスナ「キリト君！カルム君！ミト！」

ユウキ「あの人は……。」

すると、増援部隊のリーダーと思われるサラマンダーが前に出る。

プレイヤー「おおい、ブラッキー先生達よ。たった3人で、俺たちを相手にするの

は無理じゃね？」

キリト「やった事ないから分からないな。」

カルム「フルレイドのパーティーと戦った事なんて、これまで無くてね。」

ミト「それに関しては、2人と同感ね。」

プレイヤー「そりやそうだ。……………メイジ隊、焼いてやんな。」
すると、後方から沢山の魔法の詠唱が聞こえてくる。

全て、《単焦点追尾》型。

移動回避は無理だね。

アスナ「3人とも！」

ミト「大丈夫よ。」

カルム「キリト。アレ、行けるか？」

キリト「そうだな。」

カルムとキリトは、メダジャリバーとユナイティウオクスを構える。

同様のソードスキル、《アッドリー・シンズ》で全て斬る。

ユウキ「うっ……………そお……………」

タルケン「魔法を……………斬った……………？」

テツチ「偶然じゃなくて？」

アレは、キリトとカルムが使えるシステム外スキル、《魔法破壊》だ。

2人はGGOで弾を斬った事があるらしく、私やアスナ、クライン、リーファ、ハヤトも練習してみたが、断念した。

一応、後衛職のチェイスも、《魔法破壊》は出来るらしい。

シノン曰く、「チエイズってね、私のヘカートの弾を視線だけで見切って、斬ったのよ。」と語っており、その際のシノンの顔は、苦笑していた。

プレイヤー「何だソリヤ……?」

キリト「う〜ん。どんな高速魔法も、銃弾の発射速度と比べたら遅いからな。」

カルム「俺たちを甘く見たな。」

プレイヤー「陣形を整えろ!!」

流石に陣形を整えるのが早かった。

私は、アスナに声をかける。

ミト「アスナ! 3分時間を稼ぐわ! その間に、早くボス部屋に入って!」

アスナ「分かったわ!」

キリトとカルムは、更に武器を出す。

キリトはエクスキヤリバー、カルムはガシヤコンブレイカーを取り出す。

エクスキヤリバーの放つ圧に押されたのか、増援部隊が怯む。

プレイヤー「怯むな! たかが3人……!」

クライン「オリアアア! 俺たちも居るぜ! 見えてねえだろうけどな!」

ジェイク「全く! アルゴに頼まれて、増援引き連れてきて正解だったつす!」

パラド「こんな面白い事を、俺抜きでやるなんて、白けた事すんなよ!」

レイモンド「ゲームであっても、最低限のマナーは守りやがれ！この野郎！」
フィリップ「そんな事しても、ちっとも面白くないだろう？」

増援部隊の後方から、クライン、ジェイク、パード、レイモンド、フィリップの声を
する。

ジェイクの言う通り、アルゴに頼まれたんでしようね。

カルム「行くぜ、お二人さん！」

キリト「ああ！」

ミト「ええ！アスナ達の邪魔はさせない！」

私たちも飛び出していき、増援部隊と戦っていく。

私は、鎌を振るって、盾で守っている人を吹っ飛ばしていく。

カルムは、オーズバツシユやクリティカルフィニツシユを駆使して、装甲を抉ってい
く。

キリトは、ユナイティウオークスとエクスキャリバーの二刀流で敵を倒していく。

ジェイクは、短剣と素早さを活かして、相手を暗殺するかの様に倒していく。

レイモンドは、ビッカーチャージブレイクで敵を薙ぎ払う。

フィリップは、遠距離から風の魔法で、私たちに向かう魔法を打ち消していく。

しばらくすると、増援部隊は全滅して、アスナ達は中に入ったそうだ。

ジエイク「ま、こんな目に遭いたくなかったら、こんな事はやめておくつすね。」

ジエイクは、リメイナイトに向かって話しかけていた。

しばらくすると、全て消えていた。

ジエイク「じゃあ、俺とアルゴは、先ほどのネタで、ちよつとギルドに話してくるつす。」

レイモンド「じゃあ、俺とフィリップも帰るわ。」

キリト「そうだな。」

ミト「ごめん、アスナ達が心配だから、私は残るわ。」

カルム「そっか、祝勝会の準備は、俺たちでやってるから、それじゃ、また後で。」

アスナ、私、信じてるから。

ユウキ達と一緒にボスを倒す事を。

第5話 絶剣の失踪

ミト side

増援部隊を全滅させて、カルム達が帰った後、私はたった一人で待ち続ける。

しばらくすると、扉が開く。

扉が開いたということは、ボスを倒したのか、はたまた全滅したのかのどちらかだ。中に入ると、ボスの姿は無く、勝利を喜ぶスリーピング・ナイトとアスナの姿が。

ミト「皆、お疲れ様。」

私がそう言うと、スリーピング・ナイトとアスナはVサインで返す。

私はそれに対して、サムズアップを送る。

私たちは、28層の転移門をアクティベートして、ロンパールへともどる。

アスナ「皆、お疲れ様！遂に終わったねー！」

アスナはそう言うが、暗い。

多分、もう会わなくなるのではと思ってるんだと思う。

すると、シウネーが打ち上げを提案する。

ミト「そうね。打ち上げ、やろう！」

ジョン「なんせ予算はたっぷりあるしな！場所はどうする？どつか大きい街のレストランでも貸し切りにすつか。」

アスナ「あ……………」

アスナが何か思いついたような反応をする。

そして、提案してくる。

アスナ「えっと、そう言う事なら……………。私の家に来ない？小ぢやいとこだけど。」
それを聞いたユウキが顔を輝かせるが、すぐに俯く。

ユウキ「……………」

ミト「ユ、ユウキ……………」

アスナ「どうしたの？」

私たちが戸惑いながら声をかけても、いつだって元気だった少女は顔を上げない。
すると、シウネーが代弁するかの様に口を開く。

シウネー「あの……………ごめんなさい、アスナさん、ミトさん。気を悪くしないでもらいたいんですが……………。私たちは……………」

だけど、その言葉は最後まで続かなかった。

ずつと下を向いていたユウキが、突然鋭く息を吸い込むと、右手でシウネーの手を掴んだ。

ユウキは無言のままシウネーを見つめ、シウネーも何か察したようだ。

シウネー「アスナさん、ありがとう。お気持ちに甘えてる、お邪魔させて頂きますね。」
今的一幕を理解できずに、私とアスナが首を傾げると、ノリが声を上げる。

ノリ「そうと決まったら、まずは酒だな！樽で買おう、樽で！」

タルケン「ここには、ノリの好きな芋焼酎は無いですよ。」

ノリ「何だところら、いつアタシが芋焼酎好きなんて言ったか！アタシが好きなのは、泡盛の古酒なんだぞ！」

ジュン「色気のなさじゃ一緒じゃんかよ。」

ノリとタルケンとジュンの3人の会話に笑いながらユウキを見ると、笑っているものの、その瞳に揺れる切なそうな色は、消えていない。

買い物をして、22層のアスナのログハウスに向かうと、ユウキが雪に向かって突っ込む。

アスナ「……………全く。」

ミト「ユウキらしいわ。」

着地して、ログハウスの中に入る。

荷物をテーブルに置こうとすると。

ユウキ「もうご馳走があるよ。」

「……………え？」

テーブルを見ると、既に料理と飲み物が並んでいた。

アスナ「これって……………」。

ミト「カルム達ね。」

そこには、キリトとユイちゃん、カルムとカナとパラドのメッセージカードが置いてあった。

全く、粋な事をしてくれるじゃない。

そこに買ってきた材料で追加の料理を作って、宴会が始まろうとする。

ユウキが乾杯の音頭を取る。

ユウキ「それでは、ボス攻略を祝して……………かんぱーい！」

それと共に宴会は始まり、秩序なきドンチャン騒ぎになった。

テッチとジユンが肉にがつついていた。

ノリとタルケンはというと。

ノリ「私の酒が飲めないのかよ？」

タルケン「いえ……………。お酒ぐらい、飲めますよ……………」。

そんな会話をしていた。

私とアスナは、ユウキとシウネーから、今までコンバートしてきたVRMMOに関して

ての話を聞いていた。

ユウキ「間違いなく最悪だったのはねえ、アメリカの《インセクサイト》っていう奴だよー。」

シウネー「ああ…………アレはねえ。」

アスナ「どんなゲームなの？」

ユウキ「虫！虫ばっか！モンスターが虫なのともかく、自分も虫なんだよおー。」

アスナ「へ、へえ…………。」

それを聞いていたアスナの顔が青くなった。

まあ、あまり興味が湧いてくるゲームではないのは確かね。

ユウキ「それでも、ボクはまだ二足歩行のアリンコになったんだけど、シウネーなんか…………。」

シウネー「だめ、言わないで！」

ユウキ「…………でっかいイモムシでさ！口から、い、糸をぴゅーって…………！」

それを聞いて、想像させると、結構面白くなり、アスナと共に笑う。

アスナ「いいなあー、皆で色んな世界を旅してきたんだね…………。」

ユウキ「アスナとミトは？VRMMO歴、かなり長そうだけど。」

ミト「私とアスナは、ALOだけかな。カルムにキリトは、GGOとかやってたけど。」

アスナ「そんな感じ……………」

ユウキ「そっかー。でも、ほんと、すつごく居心地いいよ、このお家。何だか……………昔を思い出すって感じ。」

シウネー「そうですね。ここにしていると凄くホツとします。」

そんな風に染み染みと言うユウキとシウネー。

すると、シウネーがハツとする。

ミト「どうしたの？」

シウネー「しまった、忘れてました！私たち、アスナさんにボスからドロップした何かをお渡しするという約束でした！」

ユウキ「うわ、ボクもすっかり忘れてた！」

申し訳なさそうに肩を窄める2人に、アスナは笑って手を振る。

アスナ「いいよ、いいよ。少しだけ、何か貰えれば。あ、ううん……………。やつぱり……………」

ミト「アスナ？」

アスナ「やつぱり、何も要らない。その代わり、お願いがあるんだ。」

ユウキ「え……………？」

アスナ「あのね……………契約はこれで終わりなんだけど……………でも、私、ユウキともつ

と話したい。訊きたい事が、いっぱいあるの。私を、スリーピング・ナイトに入れてくれないかな？」

ミト「え……………?」

アスナ……………。

この短い間に、ユウキ達に、何か思う事でもあったのかしら……………?

ユウキが口を開く。

ユウキ「あのね……………あのね、アスナ。ボク達……………スリーピング・ナイトは、もうすぐ……………多分、春までに解散しちゃうんだ。それからは、皆、中々ゲームには入れないと思うから……………」

アスナ「うん、分かっている。それまででいいの。私、ユウキと……………皆と、友達になりたい。それくらいの時間はあるよね……………?」

そうユウキに尋ねるけど、返ってきたユウキの声はいつになく辛そうだった。

ユウキ「ごめん……………ごめんね、アスナ。本当に……………ごめん。」

アスナ「そっか……………。ううん、私の方こそ、無理なお願ひしてごめんね、ユウキ。」
意図せず、空気が重たくなる。

その空気を変えるために、私は手を叩いて、大きな声を出す。

ミト「折角の打ち上げだし、暗いままじゃ台無しよ。景気付けに、アレ、見に行こう。」

シウネー「アレ……………」

アスナ「肝心な事を忘れてるね！きつともう更新が反映されてるよ！」

ミト「そう、黒鉄宮の《剣士の碑》がね！」

その誘いに、ユウキは少し笑った。

私たちは、久しぶりに始まりの街に訪れ、黒鉄宮へと向かい、剣士の碑を見る。

すると、そこには、ユウキ達の名前が刻まれていた。

ユウキ「あつた……………ボク達の、名前だ……………」

ミト「良かったわね。」

ジュン「おーい、写真撮るぞ！」

ジュンのその言葉に、私は邪魔にならないように離れようとするけど。

シウネー「ミトさんも入りましょう！」

ミト「えっ、でも……………私はボス攻略に参加してないし……………！」

ノリ「ミトさん達が居なかったら、私たち危なかったし！」

ミト「……………じゃあ、お言葉に甘えて。」

私たちが碑の前に並ぶと、ジュンは《スクリーンショット撮影クリスタル》のポップアップウインドウを操作して、タイマーを設定して、こちらに来て、撮影が終わる。

アスナ「やったね、ユウキ。」

ユウキ「うん……………。ボク、遂にやったよ、姉ちゃん。」

アスナ「ふふふ……………。ユウキ、また言ってる。」

ユウキ「え……………?」

アスナ「私の事、ボス部屋でも、姉ちゃんだつて言つてたよ?」

ミト（ユウキにはお姉さんがいるのね…………。でも、何でお姉さんはしてないんだろう?）

そんな事を考えていて、ユウキの方を見ると、ユウキは口を抑えて、涙を溢していた。

ミト「ユウキ……………!」

ユウキ「アスナ……………ぼ、ボク……………」

そのままメニューを操作して、ユウキはログアウトしてしまった。

それから3日後、ユウキとは出会えていない。

私とアスナは、ユウキにメッセージを送っているけど、ログインしていないらしい。

アスナも、シウネーと会ってきたらしいけど、スリーピング・ナイツとも連絡を取っていないらしく、逆に止められたらしい。

アスナをどうにかユウキに会わせたいけど、どうしたら良いのか、分からない……………。

私は、アスナの助けになりたいのに……………。

私と明日奈が、里香と浩介、瑠子と壮吾と話している時、私と明日奈のスマホに、冬馬と和人から『昼休み、屋上に来てくれ。』というメールが来た。

昼休み、屋上に向かうと、冬馬と和人が作業をしていた。

和人「3人も、どうだ？俺たちの顔が見えるか？」

ユイ『ちよつと視界がぼやけてます。』

カナ『私も、ユイと同じ。』

パレード『俺もだ。』

冬馬「ううむ。オートフォーカスの機能が上手く働いていないのか……………？和人。調整するぞ。」

和人「ああ。3人も、ちよつと待っててくれ。」

私たちは、そんな会話をしているそれぞれの最愛の人の元に向かう。

2人も、私達に気付いたようで、作業の手を止めて立ち上がる。

私たちは、2人の肩口に額を当てる。

冬馬は私の、和人はアスナの背中を優しく叩く。

そして、和人は声を出す。

和人「2人は、どうしても、絶剣に会いたいのか？」

明日奈「うん……………」

冬馬「もう会わない方がいい、と言われたんだろう？それでも？」

深澄「それでも、私もユウキと会いたい。会って、きちんと話をしたい。」

私と明日奈は、そう答える。

2人は「そうか……………」と言つて、アイコンタクトをして、和人が小さなメモを明日奈に渡す。

和人「ここに行けば、会えるかもしれない。」

明日奈「え……………」

冬馬「あくまで可能性だけだね。……………でも、俺たちは、そこに絶剣が居ると思う。」

深澄「な、何で……………2人が知ってるの……………」

和人「そこが、日本で唯一、『メデイキュボイド』の臨床試験をしている場所だからだ。」

明日奈「メデイ……………キュボイド？」

聞き慣れない単語を聞き、私と明日奈は、放課後にそこに向かう事に決めた。

第6話 旅路の果て

私と明日奈は、放課後、2人から渡された紙片を手に、目的地に着いた。

明日奈「ここにいるの、ユウキ……………」

深澄「居ると良いんだけど。」

私たちは中に入り、面会受付カウンターへと向かっていく。

窓口横に備えられた用紙に明日奈が記載していくと、途中で止まった。

無理もない。

私たちは、ALOをプレイしている際の、ユウキという名前しか知らない。

冬馬と和人からも、会えるかは分からないと言われたが、諦める訳には行かない。

明日奈と顔を合わせて、受付へ。

看護師「面会ですね？」

明日奈「ええと……………面会したいんですが、相手の名前が分からないんです。」

看護師「はい？」

看護師が訝しげな表情を浮かべる中、私も一緒に説明する。

深澄「多分、15歳前後の女の子で、もしかしたら名前は《ユウキ》かもしれないん

ですが……。」

看護師「ここには沢山の入院患者がいらつしやいますから、それだけでは分かりませんよ。」

明日奈「ええと……ここで試験中の《メデイキュボイド》を使っている方だと思わんですが……。」

看護師「患者さんのプライバシーに関しては……。」

すると、カウンターの奥にいた年配の看護師が顔を上げると、じっと私たちを見て、私たちの相手をしていた看護師に耳打ちする。

すると、瞬きして、私たちに向き直って、微妙に異なる口調で言う。

看護師「失礼ですが、あなた方のお名前は？」

明日奈「あ、ええと、結城、明日奈と言います。」

深澄「兎沢深澄です。」

名前を言って、学生証を提示すると、内線で電話をかけて、こちらに向き直る。

看護師「第二内科の倉橋先生がお会いになります。正面のエレベーターで4階に上がって、右手に進み、お待ち下さい。」

差し出されたトレイから、学生証とを受け取り、4階受付前で待っていると、白衣を着た先生がやって来る。

恐らく、この人が倉橋先生だろう。

倉橋「やあ、ごめんなさい、申し訳ない。すみません、お待たせして。」

明日奈「と、とんでもないです。こちらこそ急にお邪魔してしまって。」

深澄「あの、私たちなら幾らでも待てますけれど。」

倉橋「いえいえ、今日の午後は非番ですから、丁度良かった。ええと、結城明日奈さんに、兎沢深澄さん、ですね？」

明日奈「はい。結城です。」

深澄「私は、兎沢です。」

倉橋先生は、ユウキ……紺野木綿季の主治医だそうだ。

先生曰く、ここ最近、ユウキは私と明日奈の話をよくするそうだ。

倉橋「よくここが分かりましたね。……ユウキ君から、もしかしたら、アスナさん

やミトさんが来るかもしれないと聞いていたのですが。」

明日奈「ユウキが……?」

倉橋「病院の事を伝えたのかと聞いたけど、本人は言っていないと言う。……じゃあ、

この事は分からないと言ったのですが。」

深澄「そうなんです。……。」

倉橋「まさか、本当に訪れるとは思いませんでしたよ。」

そんな事を話している。

先生曰く、ユウキは私たちの話をした後、決まって暗い表情になるらしい。

倉橋「自分の事じゃ、決して弱音を吐かない彼女なんです……あなた達に会いたい……けど、これ以上会ってしまうと、会えなくなるのが怖い、と……。」

「……………」

そんな話をしていると、目的地に着いたようで、『第一特殊計測機器室』という部屋に到着した。

先生に続いて病室に入ると。

倉橋「あれ？すいません、少しお待ち下さい。」

そう言つて、倉橋先生は部屋の奥へと向かう。

私たちは、しばらく待つっていると、入ってきた病室の扉が開いた。

???「倉橋先生、ごめんなさい。遅く……えっ……？」

そこには、ショートカットの髪にカチューシャをかけた少女がこちらを凝視していた。

明日奈「……………ユウキ……………？」

深澄「ユウキなの……………？」

木綿季「……………アスナ……………ミト……………？」

彼女こそ、ユウキこと紺野木綿季だと、私達は直感した。

ユウキも、私達を認識したようで、驚いていた。

木綿季「……………っ！」

明日奈「待って!!」

ユウキは、逃げようとしたけど、明日奈の言葉に動きを止める。

明日奈「……………その、ユウキよね？」

木綿季「……………うん。」

こちらに振り返らず、ユウキは答える。

木綿季「本当に来たんだ、2人とも……………。まさかとは思ったけど……………でも、2人

には知られたくなかったなあ……………。」

明日奈「……………ユウキ？」

深澄「どうして、姿を消したの？」

そんな空気になっていると、倉橋先生が戻ってくる。

そして、話し始める。

倉橋「さて……………どこから話すべきか……………？」

深澄「あの……………。」

倉橋「うん？」

深澄「その、メデイキュボイドって何ですか？」

その単語に、木綿季と倉橋先生は驚いた表情を浮かべる。

倉橋「……………知っていたんですね。分かりました。話しましょう。」

倉橋先生曰く、ナーヴギアを何倍も強化したもので、ターミナル・ケア……………終末期医療に役立つと……………。

それを聞いて、まさかと思った。

明日奈「一つ、良いですか？」

倉橋「何でしょうか？」

明日奈「つまり、ユウキは、何かの病気で入院していて、このメデイキュボイドで治療を受けていたんですか？」

倉橋「……………正確に言えば、メデイキュボイドでの治験をお願いしているのです。」

明日奈「……………それで、その……………」

明日奈の言葉に倉石先生は答えていった。

明日奈は言葉を繋ごうとしたが、どう尋ねればいいのか分からないようで言葉を詰まらせていた。

木綿季「……………ボクの病気の事？」

深澄「……………ま、まあ、そうなるわね……………」

木綿季「……………良いよね、先生？」

倉橋「……………木綿季君が良いのなら、僕は反対しないよ。」

木綿季「……………アスナ、ミト……………僕はね、後天性免疫不全症候群……………エイズに感染していたんだ。」

「え……………!?!」

その言葉に私も明日奈も言葉を失い、驚くしかなかった。

そこからは倉橋先生が説明してくれた。

出生時の帝王切開時に輸血された血液が汚染されておりHIVに感染したこと、ウイルスが薬剤耐性型であったこと、小学校4年の時にエイズが発症したこと……………。

それを私も明日奈も黙って聞いていた。

倉橋「……………木綿季君は、いつも笑顔を絶やさず、必死に闘病生活を続けていました。

その時でした……………。アメリカで薬剤耐性型のエイズにも効果がある特効薬が完成したとのニュースがあつたんです。」

木綿季を優しい目で見つめながら、倉橋先生は言葉を続けた。

倉橋「ただ、その薬はまだマウスでの実験を終えただけで、人での臨床実験は未定の状態だったんです。そんな時、日本に臨床実験の話が回ってきたんです……………。丁度、その時でした……………。メデイキュボイドの試作1号機が完成したのは……………。」

明日奈「それじゃあ……………」

倉橋「ええ。僕も木綿季君にその話はしました……………。その特效薬は副作用がどんなものなのか、効果が未知数であることも伝えました……………。それでも、彼女もご両親もその特效薬に賭けてみることにしたんです。それと同時に、無菌室に設置されているメデイキュボイドに入ることも決めてくれたんです。……………。もし特效薬が効かなかった場合でも、日和見感染を避けることができますからね。」

そういう事なのね……………」

私がそう思っていると、倉橋先生は更に話を続ける。

倉橋「そして、特效薬とメデイキュボイドの運用を開始してから約2年……………。あれはS A Oがクリアされる数日前……………。月1で行われている定期検診の結果が出た時でした……………。木綿季君の体からH I Vウイルスが完全に消滅したんです。」

明日奈「……………それって!？」

倉橋「……………ええ。特效薬が効果を発揮したことを意味していました……………。その前から、少しずつ数値が良くなっていたのですが……………ここまで一気に効果が発揮されるとは僕も思っていませんでした……………。そこで、リハビリを兼ねて、この無菌室からの外出を許可したんです。そして、特效薬が人に対して効果を発揮する事は証明されて、アメリカの研究機関に伝わりました。去年の9月には、木綿季君が3月に退院する事が

決まりました。」

深澄「……………なら、なんで、ユウキは姿を消したの？……………いや、病気が治ったのなら……………」

私は、心の中で生まれた疑問をそのまま口に出していた。

すると、悲しげな表情を浮かべる倉橋先生が答えた。

倉橋「だからこそなんですよ。」

深澄「え……………？」

倉橋「それは……………」

木綿季「先生、そこから先は、僕が話すよ。」

倉橋「……………分かった。」

木綿季「……………どの道、2人には話さないといけなかったから……………でも、ここじゃ話しくいから……………ALOで……………」

その意図を読み取って、私たちは倉橋先生からアミスフィアを借りて、ALOにログインして、あの始めて会ったあの小島へと向かう。

ユウキを探していると。

アスナ「……………ユウキ！」

アスナの声に振り返ると、そこには、朝日によって霧が晴れた所に、ユウキが居た。

私たちは、ユウキに駆け寄った。

ユウキ「……………何でかな、アスナとミトが現実世界のボクを見つけてくれるような予感がしたんだよ。何も教えてなかったから、そんな訳ないのね。」

ユウキは、囁くように語り、微笑んだ。

ユウキ「でも、2人は来てくれた。ボクの予感が当たるの、結構珍しいんだ。嬉しかったよ……………すごく。」

アスナ「……………ユウキ！」

アスナが我慢できなくなったのか、ユウキを抱きしめる。

ユウキが口を開く。

ユウキ「……………姉ちゃんに抱っこして貰った時と同じ匂いがする。お日様の匂いだ……………」

ミト「……………姉ちゃん？」

ユウキ「うん。藍子つて言つてね。姉ちゃんは、スリーピング・ナイトの初代リーダーだったんだよ。ボクなんかより、ずっと、ずっと強かったんだ……………」

そう告げるユウキの言葉を聞いて、私は悟ってしまった。

それは、ユウキのお姉さんの藍子さんは、もうこの世には居ない事を……………。

ユウキ「スリーピング・ナイトのメンバーは、最初は9人居たんだ。でも、もう、姉

ちゃんを入れて3人居なくなっちゃった……。だからね、シウネー達と話し合って、決めたんだ。次の1人の時には、ギルドを解散しよう、って。その前に、皆で最高の思い出を作ろう……。姉ちゃん達に、胸を張ってお土産に出来るような、凄い冒険をしよう、って。」

そこから、ユウキは語った。

スリーピング・ナイツが解散するのは、長くてもあと3ヶ月、って告知されているメンバーが1人いる事を。

それに、ユウキが退院したら、家族が居なくて、施設に引き取られる。

そうなる、V R M M Oは出来ない。

だからこそ、あの大きなモニコメントに名前を残したかった事を。

ユウキ「でも、なかなか上手くいなくて……。1人だけ、手伝ってくれる人を探そう、って相談したんだ。反対意見もあったよ。もしボク達の事を知られたら、その人に迷惑をかけちゃう、嫌な思いをさせちゃうから、って。……。その通りになっちゃったね。ごめんね……。ごめんね、アスナ、ミト。もし出来るなら……。今からでも、ボク達の事は忘れて……。」

ミト「出来ないわよ、そんな事……。！」

私は、短く答えて、アスナごとユウキを抱き締める。

ミト「だって、迷惑なんてこと、これっぽっちもない。嫌な思いなんてしてない。」
アスナ「ミトの言う通りだよ。私、ユウキ達と出会えて、ユウキ達の手伝いができて、
凄く嬉しいよ。今でもまだ……スリーピング・ナイツに入れて欲しいって、そう思っ
てる。」

そうアスナが涙を零しながら語ると、ユウキの華奢な身体が震える。

ユウキ「アスナ……ミト……。すごく嬉しいよ。この世界に来て、2人と出会え
て……。迷惑じゃないならさ、お願いがあるんだけど……。」

アスナ「何？」

ユウキ「短い間だけでも、またボクと一緒に居てくれる？」

その問いに対する私たちの答えは、既に決まっていた。

アスナ「もちろんだよ！」

ミト「ええ！」

ユウキ「ありがとうね……！2人とも……！」

ユウキはそう言つて、泣き出す。

私とアスナは、思い切り抱き締める。

しばらくして、ユウキは落ち着いたのか、少し離れる。

ユウキ「……もう一個だけ、我儘なお願ひしていい？」

アスナ「……………なあに？」

ユウキ「ボクね、学校に行ってみたいな。」

ミト「学校？」

ユウキ「うん。途中までしか通えなかつたし、アスナ達の学校が気になるから……………。ごめんね、無理言つて。……………行ってみたいけど、まだ病院から出る訳には行かないし……………」

ユウキのそのお願いに、とある記憶が結びつく。

すると、アスナも同じ考えに至つたのか、私たちは顔を見合わせる。

ミト「……………行けるかも。」

ユウキ「……………え？」

アスナ「行けるかもしれないよ……………学校。」

そうと決まったら、あの2人に相談ね。

第7話 絶剣の学校入学

深澄 side

ユウキから、学校に行きたいという願いを聞いた私と明日奈は、冬馬と和人に依頼した。

その翌日、昼休みの電算機室に来ていた。

明日奈の肩には、プロローブが乗っていて、和人、冬馬、鋭二の3人が話し合っていた。ちなみに、悠那も来ていた。

だけど、鋭二と悠那は、この春にはこの帰還者学校を卒業して、東都工業大学に行くらしい。

鋭二は、悠那のお父さんの研究室に入る事になっている。

鋭二「だから、これじゃジャイロが敏感すぎるぞ。視線追随性を優先しようと思ったら、こちら辺のパラメータにもう少し遊びがないとダメだろうな。」

和人「でもそれじゃあ、急な挙動があった時にラグるんじゃないか？」

冬馬「そこら辺は、最適化プログラムの学習効果に期待するしかないだろうな。」
だが、3人の会話は、呪文じみっていて、いまいちよく分からない。

隣の悠那も、苦笑していた。

流石に明日奈が辛そうなのと、時間が迫っている事もあり、急かす。

明日奈「……………ねえ、まだ!? 昼休み終わっちゃうよ!」

深澄「3人とも、時間が掛かりそう?」

悠那「流石に急いだら?」

和人「よし、取り敢えず、初期設定はこれでよしとしよう。」

鋭二「じゃあ、木綿季さん、聞こえますか?」

鋭二君がドームに呼びかけると、スピーカーから、ユウキの声がする。

ユウキ『はい、よく聞こえてるよー。』

和人「よし、じゃあ、これからレンズ周りを初期設定するんで、視界がクリアになつた所で、声を出して下さい。」

ユウキ『はい、了解。』

明日奈の肩に乗ってるのは、通称《視聴覚双方向通信プローブ》という物で、和人と冬馬、鋭二の3人で試行錯誤しているテーマだ。

ただ、鋭二はこの春には離脱する。

仕組みは、アミユスフィアとネットワークを通して、現実世界の遠隔地と視覚、聴覚のやり取りをしようという機械だ。

プローブ内部に搭載されているレンズとマイクに収集されたデータは、明日奈の携帯を介してネットに送信され、メイキユボイドを経由して、専用の仮想空間にダイブしているユウキに届く仕組みだ。

昨日、その手の愚痴を聞いていて、そういう事が思い至った私たちは、すぐさま2人に頼み込んで、2人は承認してくれた。

レンズがフォーカスを調整するモーター音が明日奈の肩から響き、ユウキの声がする。

ユウキ『そこ。』

和人「よし、これで終わりだ。明日奈、一応スタビライザーは組み込んであるけど、急激な動きは避けてくれ。」

明日奈「了解！」

冬馬「深澄。悪いけど、明日奈とユウキのサポートを頼む。」

深澄「分かったわ。」

突貫でプローブの調整をやって、疲れ気味な3人に手を振って、私たちは、学校探索へと出る。

職員室まで向かう間も、ユウキは何かを見つけたたびに歓声を上げていたが、職員室に到着すると、急に静かになる。

明日奈「どうしたの？」

ユウキ『えーと……ボク、昔から苦手だったんだよね、職員室……。』

深澄「大丈夫よ。この学校の先生は、先生つぼくない人ばかりだから。」

笑いを交えて、私たちは職員室に入り、5時間目の国語の先生に話しかける。

私と明日奈で事情を説明していると、その教師は、湯呑みを持ちながら聞いていて、話し終わると、頷いて言う。

先生「うん、構わんよ。ええと、君、名前は何と言ったかね？」

ユウキ『あ、はい……。紺野木綿季です。』

先生「コンノさん、良かったら、これからも授業を受けに来たまえ。今日から芥川の『トロツコ』をやるんでね、アレは最後まで行かんとならんから。」

ユウキ『は……はい、ありがとうございます！』

私たちは、その先生に礼をして、職員室から退出する。

3人同時に息を吐いて、笑う。

教室に着くと、明日奈は仲良くしている女子グループの元へと向かった。

流石にあの中に混じる勇氣はないため、私は自分の席からそれを遠巻きに見ていた。

明日奈とユウキはあつという間に注目を集め、クラスメイトから質問攻めにあつてた。

深澄（しばらくは、あのままね。）

私がおんなことを考えていると、丁度よくチャイムが鳴り、先生が入室したことで明日奈たちも解放され、全員が着席した所で日直が号令をかけ、授業が始まった。

先生「えー、それでは、今日から教科書98ページ、芥川龍之介の『トロツコ』をやります。これは、芥川が30歳の時の作品で……。」

先生の概説が続く間、明日奈はタブレット端末をユウキに見せていた。

先生「……では、最初から読んでもらいましょう。紺野木綿季さん、お願い出来るかな？」

「は!？」

ユウキ『は、はいっ!』

私と明日奈は思わず素っ頓狂な声を上げてしまい、クラスが少しざわつく。

先生「無理かね？」

ユウキ『よ、読めます!』

その声と共に、ユウキが音読を始めて、クラス全員が聞いていた。

心に映ったのは、帰還者学校の制服を着たユウキが隣にいる光景だ。

その後、授業が終わり、クラスメイトからの再度の質問攻めをなんとか脱出し、私たちは校庭のベンチへと来ていた。

ユウキ『アスナ、ミト……。今日は本当にありがとう！凄く楽しかったよ、ボク！』
明日奈「先生も、毎日来てもいいって言ってたからね。」

深澄「まだ見せたいものが沢山あるのよ。それより、もつと他に見たい物とかない？」
そう聞くと、ユウキは、とある住所を言う。

電車を何本か乗り継いで、目的地に着く。

そこには、誰も住んでいない家があった。

それを見て、私は察した。

明日奈「ここが……。ユウキの、お家なんだね。」

ユウキ『うん。もう一度、見られるとは思わなかったよ……。』

深澄「家の中に入る？」

ユウキ『ううん、これで充分だよ。』

その後、ユウキが語ったのは、親戚が揉めている事だ。

取り壊してコンビニにしたり、更地にして売ったり、このまま賃貸にしたりすると、揉めているようだ。

それはあんまりだと思っていた。

そんな事を思っていると、話は続いていた。

ユウキ『本当に、ありがとう、アスナ、ミト。この家をもう一度見せてくれて。例えば、

家が無くなっても、思い出はここにある。ママやパパ、姉ちゃんと過ごした、楽しかった頃の記憶は、ずっとここにあるんだから……………」

深澄「ユウキ……………」

ユウキは語っていく。

それは、薬を飲むのが辛くて泣いた時、お母さんがイエス様の話をしてくれたそう。本当に、良いお母さんよね……………」

すると、明日奈が口を開く。

明日奈「私もね……………」、私も……………」、もうずっと母さんの声が聞こえないの。向かい合って話しても、心が聞こえない。私の言葉も伝わらない。ユウキ、前に言ったよね。ぶつからなければ伝わらない事もある、って。どうしたら、ユウキみたいに出来るかな……………」? どうしたら、ユウキみたいに強くなれるの……………」?」

深澄「明日奈……………」

少し配慮が欠けている言葉かもしれない。

でも、これが、明日奈の心からの声だ。

すると、ユウキが少し戸惑ったような声で答えた。

ユウキ『ボク……………」強くなかないよ、全然。』

明日奈「そんな事ない。私みたいに、人の顔色を窺って、怯えたり、尻込みしたり、ユ

ウキは全然しないじゃない。凄く……凄く自然に見えるよ。」

そんな明日奈の言葉に、ユウキは答えていく。

お父さんとお母さんを悲しませないように、元気なふりをしていなきやと思っていたらしい。

演技でも、笑顔でいられる時間が増えるならそれでも良いと思っただけらしい。

ユウキの言葉は続く。

ユウキ『だからね、最初からドカーン！つてぶつかってき、相手に嫌われちゃつてもいいんだって思ったんだ……。その人の心の近くまで行けたことに変わりはないもんね……。』

明日奈「……………そうだね……………ユウキがそう言ってくれたから、私たち……………ここ何日かでこんなに仲良くなれたもんね。」

ユウキ「ううん、それはボクじゃないよ。ボクが逃げても、アスナとミトが一生懸命追いかけてくれたからだよ。だからアスナも、お母さんと、あの時みたいに話してみたらどうかな。気持ちって、伝えようとすればちゃんと伝わる物だって思ってるよ。大丈夫、アスナはボクなんかよりずっと強いもん。ほんとだよ。ぶつからなきや、伝わらない……………アスナとミトがブーンつてぶつかってきしてくれたから、ボクは、この人達には、全てを任せられるって思ったからさ。」

ユウキの言葉に、私も上を向く。

その後、明日奈と共に、世田谷の自宅に帰る事に。

深澄「明日奈……………。頑張つてね。」

明日奈「うん。」

家に入ろうとする明日奈にそう言つて、私も帰路に着く。

一応、予め連絡していた。

家に着くと、お母さんとお父さんが私に話があると言つてきた。

深澄「それで、話つて……………?」

お母さん「実はね、妹が増えるのよ。」

深澄「……………え?」

お父さん「母さん、そんな抽象的だと、深澄が混乱するぞ。」

お母さん「そうだったわね。」

深澄「どういう事……………?」

お母さん曰く、とある病院に入院している家族がいない女の子を、ウチで預かるらしい。

エイズの特効薬を勧めた人が親戚に居たらしく、その人が、お母さん達に引き取れないかと相談してきたそうだ。

特效薬、エイズ、女の子、身寄りがないという単語に、一つ引つかかった。

深澄「その女の子って、名前は……………」

お父さん「ああ。確か、紺野木綿季さんって言ってたな。」

深澄「ええ!？」

お母さん「どうしたの!？」

深澄「さつきまで、その人と会ってたの……………」

「「ええ!？」」

その言葉に、お母さんとお父さんが驚く。

私が帰ってくるのが遅かった理由を説明すると、2人は納得していた。

お父さん「なるほどな……………」

お母さん「冬馬君に感謝しないとね。」

深澄「そうね……………」

まさか、こんな事になるとは思いもよらず、少し呆然とする。

その後、ウチで引き取る事に決定した。

明日、それを言うのが楽しみになる。

翌日、やけに嬉しそうな明日奈と会う。

深澄「おはよう、明日奈。」

明日奈「おはよう。」

深澄「どうだったの？」

明日奈「うん！伝わったよ。ちゃんと。」

深澄「良かったあ……………」

明日奈「深澄も嬉しそうに見えるけど？」

深澄「うん。実はね……………」

昨日、両親から言われた事を明日奈に伝えると、凄く驚いていた。
そんな風に、私たちは学校に向かっていく。

第8話 キミト明日へ

ミト side

アスナがお母さんと和解して、ユウキが私の家に住む事になった。それをキリトとカルムに言ったら。

キリト「マジかよ……………」

カルム「良かったな……………百合の関係？」

ミト「いや、百合じゃないから！」

そんな風に少しカルムに誤解されたけど、気にしない。

3日後、アスナの家の前で、バーベキューパーティーを開催した。

集まったのは、キリト、カルム、リズベット、ラット、シリカ、ヒロミ、リーファ、ハヤト、シノン、チエイス、パラド、フィリア、レイン、ノーチラス、ユナ、レイモンド、フィリップ、アルゴ、ジェイクを始めとするいつもの仲間達。

ユウキ達、スリーピング・ナイツのメンバー、サクヤ、レコン、アリシャ、ユージーなどを始めとする一部領主とその側近達だ。

そんなに沢山いるもんだから、わざわざ食材狩りのパーティーが組まれたくらいだ。

アスナ「ええ。それでは、皆の顔合わせを祝して、乾杯！」
『乾杯!!』

そうして、パーティーが開かれる。

その際、ユージーン将軍や、サクヤを始めとする領主組が、ユウキ達を取り込もうと躍起になっていた。

一方、リーファとハヤトとテッチがにこやかに話していると、レコンが嫉妬の炎を燃やしていた。

ハヤト「……………なあ、レコンの奴、ハンカチを口に啞えながらこつちを凝視してるぞ。」

テッチ「何かやったかな？」

リーファ「気にしなくて大丈夫ですよ。」

キリトとクラインとカルムが、ノリ、ジュン、シウネーと話していた。

シノンとチェイス、ノーチラスとユナは2人で一緒に居た。

ちなみに、シノン曰く、祖父母にチェイスを紹介したら、祖父は感激していて、祖母はチェイスに孫娘をお願いねと言ったらしい。

シノン「ねえ、チェイス、冬休みの時に、来てくれてありがとう。」

チェイス「いずれ、挨拶しに行かないと行けなかつたしな。」

ユナ「ノー君も、大学の研究室で、お父さんと頑張つてね！」
ノーチラス「ああ。」

そんな風に話していた。

パーティーはしばらく続いて、シリカとヒロミがつぶやく。

シリカ「それにしても、凄い面子ですよね。」

ヒロミ「何せ、領主やその側近までもが集結してるからね。」

ジュン「ならさ、この後、ボス倒しに行こうよ！」

クライン「お！いいな、それ！」

ジュン「おっしや！行こう、行こう！」

「……………」

クラインとジュンのサラマンダーコンビがそんな事を言い出した結果、勢いで二次会
が28層迷宮区踏破ツアーとなった。

そして、そのままボスの部屋に雪崩れ込んで、巨大な甲殻類型ボスモンスターを倒し
てしまった。

それを見て、カルムは。

カルム「何かさ……………」
ボスが哀れに思えるのは何でだろうか？」

ミト「何でだろうかね？」

その後、アスナはまた単独で挑む事を約束したらしい。

現実世界では、ユウキは双方向通信プローブを使って毎日授業にも参加した。

川越の桐ヶ谷家や小野家にも一緒に訪ねて、御徒町のエギルの店にも行った。

キリトにカルム、ユウキの3人は、片手剣使いという事もあって、ALOではソードスキルの工夫について、現実世界ではプローブの発展形についてなど、盛んに議論を戦わせて、時折、私とアスナがやきもちした。

2月になって、アスナとスリーピング・ナイツは、29層のボスをワンパーティーで撃破して、アルヴヘイムにその名を轟かせた。

ALOにて開催された、飛行レースでは、リーファがぶっちぎりで優勝して、悔しかった。

そして、中旬には、統一デュエルトーナメントが開催された。

アスナ「ねえ、ミトはキリト君とユウキのどっちが勝つと思う？」

ミト「そうね……。あの2人は両方とも強いからねえ……。」

私やカルムも参加したが、私はユウキに、カルムはキリトに敗北して、どうなるのかを見ていると、キリトとユウキは本気でぶつかっていき、最終的にユウキが優勝した。

カルム本人曰く。

カルム「もうちよいで倒せたんだよ！」

ミト「はいはい。」

そんな事を悔しそうに喚いていた。

3月、私と明日奈、里香、瑠子、直葉、携帯端末の中のユイちゃんとかナ、プローブ内のユウキと共に、京都の3泊4日の旅行に出かけた。

その頃には、プローブの情報を複数のクライアントに並列して送れるようになり、スリーピング・ナイツ全員も来た。

宿は、結城家の本家を使わせてもらい、見目麗しい京料理に舌鼓を打つ。

しかし、スリーピング・ナイツ全員から、不満の声が上がる。

その後、VRクッキングソフトで、ユウキ達に京料理を再現した物を食べさせてあげたりした。

そんな感じに、楽しい時間は過ぎていく。

しばらくして、退院数日前、私とアスナは、ユウキに呼ばれた。

ミト「どうしたの、ユウキ？」

アスナ「何か用事があるの？」

ユウキ「うん。ボクね、アスナに渡したい物があつて。ミトには、それを見届けて欲しいからさ。」

アスナ「渡したい物？」

ユウキ「うん。ちよつと待ってね……………」

ユウキはそう言つて、メニューを操作して、剣を抜刀する。

集中するユウキを、私とアスナは無言で見守る。

その時、風が吹き、一枚の花弁が湖に落ちた時だった。

ユウキ「やああああ!!」

その掛け声と共に、ソードスキルを大木に向かつて放つ。

ユウキ「でやあああああああああああああああああああああああ
!!!!!!」

最後の一撃が、ユウキの咆哮と共に放たれた。

その途端、属性余波の爆発が起き、突風が私とアスナを襲った。手で顔を庇い、煙が

晴れるの待っている……………ユウキの前に、一枚の羊皮紙が出来上がっていた。

その羊皮紙を、アスナに渡す。

ユウキ「アスナに受け取って欲しいんだ。ボクのOSS……………」

アスナ「……………私に、くれるの……………?」

あの羊皮紙は、OSSの伝承書だ。

ユウキの言葉に、アスナが驚く。

ユウキ「アスナに受け取って欲しい。」

アスナ「で、でも……………」

ミト「良いじゃない、アスナ。」

アスナ「ミト……………」

ミト「ユウキの想いも籠ってるから。」

アスナ「……………うん。分かった。」

そうして、マザーズ・ロザリオは、アスナに渡された。

そして、遂に、ユウキが退院する日。

私は、両親とついでに冬馬も連れて来た。

理由は、両親が、冬馬に会いたいと語ったからだ。

その結果、冬馬は異常に緊張した表情で来ていた。

冬馬「ど、どうも……………。小野冬馬と言います。」

お母さん「話は深澄から聞いてるわ。」

お父さん「娘をありがとうね、冬馬君！」

深澄「ちよつと、恥ずかしいからやめて！」

そんな風に話していると、病院に着いて、両親が倉橋先生と話している。

私と冬馬、木綿季は、部屋で話していた。

木綿季「まさか、ミトがお姉ちゃんになるなんて！」

深澄「私も、初めて聞いた時にはとても驚いたわよ！」

冬馬「何か、複雑だな。」

木綿季「まあでも、よろしくね、ミト！」

深澄「うん！それと、リアルでは、深澄だからね。」

木綿季「そうだった！」

そんな風に話していると、両親達が戻って来て、手続きが終わった事を知らせる。

木綿季「倉橋先生、ありがとうございます！」

倉橋「木綿季君も、新しい家族と共に一緒に暮らしてね。」

お母さん「さて、冬馬君！私の事は、お義母さんつて、気軽に呼んでね！」

冬馬「いや、恐れ多い……………」

お父さん「謙虚だね。まあ、良いんじゃない？」

深澄「お父さんもお母さんも、冬馬を弄らないで！」

そんな風に話していると、後ろから声が出た。

明日奈「深澄。」

深澄「明日奈……………」

そこには、和人と明日奈が来ていた。

冬馬「どうしたんだ？」

和人「いや、倉橋先生に用があつてな。」

倉橋「和人君。あのプロローブは本当に凄いや！協力してくれて、ありがとうね。」
和人「いえ、こちらこそ。」

倉橋「これで、メデイキュボイドは実用化に漕ぎ着けそうだよ。」

木綿季「そうなんですわね！……ボクみたいな難病に苦しんでる人に使ってあげてください。」

倉橋「うん。いやあ、木綿季君や、外部提供してくれた人には、感謝したいよ。」

倉橋先生の言葉に、冬馬と明日奈が引つかかったのか、聞いてくる。

冬馬「外部提供してくれた人？」

明日奈「メデイキュボイドは、医療メーカーが作ったのではないんですか？」

倉橋「うん？ああ……。」

倉橋先生が、記憶を探るような表情をして、答える。

倉橋「実はね、確かに作ったのは医療メーカーなんだけど、基礎の部分は、無償で提供されたんだよ。確か、神代凜子っていう人だったかな？」

神代凜子!?

その名前に、私、冬馬、和人が驚く。

木綿季、明日奈、お父さんとお母さんは首を傾げていたが、私たちの様子に気づき、声をかける。

驚いた理由は、茅場晶彦からザ・シードを受け取った際に、現実で接触したからだ。明日奈「どうしたの!？」

和人「俺たちは、その人を知ってる……。」

木綿季「え……?」

冬馬「会った事もあるんだ。その人は、ダイブ中のヒースクリフの世話をしていた人だ。彼と同じ研究室で、一緒にフルダイブの研究をしていた。」

深澄「つまり、メデイキュボイドの、本当の設計者は……!」

明日奈「団長……茅場晶彦……!？」

私と明日奈、冬馬、和人は、戦慄する。

茅場晶彦が残したのは、まだまだあるという事になる。

それと同時に、胸騒ぎがした。

何か、とんでもないことが起こりそうな気配がする……。

3ヶ月後、この時の勤が、現実になるなんて、この時の私は思わなかった。

日常part 2

くしやみ騒動

カルム side

ある日のALO。

俺とミトは、ログハウスで2人でイチヤイチャしていた。

まあ、いつもの事だ。

カルム「ミト……………」

ミト「カルム……………」

イチヤイチャして、そのままキスしようとする、何やら鼻がムズムズする。

カルム「ふっ……………う……………ふ……………ふわ……………」

ミト「?カルム?」

カルム「ぶえつくくしよおい!!」

でかいくしやみをしてしまい、ミトの顔に鼻水や唾がついてしまう。

カルム「ごっ……………ごめんミト!」

ミト「だっ、大丈夫だから!気にしないで!」

だが、その後もくしゃみをしてしまう。

何か、申し訳ないな。

しかし………3日後………リズベツト武具店にて。

リズベツト「え？」

ラット「A.L.O.に居るとくしゃみが止まらないだと？」

アスナ「そうなの………」

ミト「カルムも3日前からずっとそうなの。」

どうやら、俺だけでなくキリトもくしゃみが止まらないようだ。

リズベツト武具店に集まっていたシリカ、ヒロミ、リズベツト、ラット、リーファ、ハ

ヤト、シノン、チェイス、ユウキも心配してこちらを見てくる。

シリカ「大丈夫ですか？」

ヒロミ「何でなんだろう？」

ユウキ「辛そうだね。」

リズベツト「ユイちゃん達も分からないの？」

ユイ「それが、分かりません。」

カナ「私たちが解析できるプログラム深度ではないみたいだし。」

ラット「マジか………」

シノン「リアルではどうなの？」

チエイス「リアルで風邪をひいたからじゃないのか？」

リーファ「至って健康です。」

ハヤト「カルムも健康だぜ。」

そう、俺もキリトも、リアルで風邪をひいた覚えが無いのだ。

何でだ……!?!?

アスナ「運営にも問い合わせしてみたんだけど……。」

ミト「そんなイベントも状態異常もないらしいのよ。」

リズベツト「まあ、何にしろ、今日のクエストは中止ね。」

ラット「そうだな。2人がこの様じゃあ、まともな戦闘が出来ないだろうし。」

キリト「いや、俺たちに構わず行つて……くしゅ!!」

カルム「俺たちは大丈夫だから……へぶし!」

ユイ「。パ。パ!」

アスナ「キリト君!」

カナ「。パ。パ!」

ミト「カルム!」

ラット「まるで花粉症だな。」

リズベット「確かに……。」

そんな感じに、くしゃみは未だに止まらない。

それを見かねたのか。

アスナ「キリト君、カルム君！何か飲み物買ってくるね！」

ミト「私も行くわ！」

リーファ「あ、私も行きます！」

ハヤト「俺も行くぞ！皆、飲み物は同じ奴で良いか？」

アスナ、ミト、リーファ、ハヤトが飲み物を買いに出かけた。

すると、シノンとチエイスが声を出す。

シノン「ねえ、これって、キリトとカルムの2人だけなのかしら？」

チエイス「確かに、感染したりしないよな？」

キリト「酷いな皆……。」

カルム「俺たちを感染源呼ばわりするなよ。」

リズベット「い、一応よ一応！」

ラット「共倒れしたら元も子もないしな！」

そう言って、全員後ずさる。

皆の行動に、シヨックを受けていると。

ユウキ「あれ？キリトとカルム、くしゃみ止まってない？」

キリト「え？」

カルム「あ！」

シリカ「キリトさん、止まってますよ！」

ヒロミ「カルムも！」

シノン「どういう事？」

チエイス「分からん……。何故いきなり治ったんだ？」

ユウキ「でも、良かったじゃん。」

俺とキリトも首を傾げていると、ミト達が帰ってきたようだ。

ミト「ただいまー。」

シリカ「アスナさん！ミトさん！」

ヒロミ「2人とも、治りましたよ！」

アスナ「そうなの？キリト君！」

ミト「カルムもそうなの!？」

だが、急にまたくしゃみが始まる。

その現象に、全員驚く。

ユウキ「あ、あれ？アスナ、ミト。本当だよ！さつきは治ってたんだよ！」

アスナ「うん。」

ミト「ユウキが嘘を吐くはず無いもんね。」

シノン「……………。アスナ、ちよつといい？」

チエイス「……………。ミト、少しいいか？」

アスナ「え？シ、シノのん？」

ミト「チエイスもどうしたのよ？」

4人は外へと出てしまう。

リズベツト「えつと……………」

ラット「何なんだ？」

リーファ「……………何ですかね？」

ハヤト「さあ……………」

ユウキ「キリト、カルム。くしやみは？」

キリト「……………！出ない。」

カルム「俺もだ。」

だが、シノンとチエイスがアスナとミトを連れて入ってくると、またくしやみが出てしまう。

シノン「さつき、リズとラットが花粉症って言ったでしょ？」

チエイズ「まさかとは思ったが、この様子だと正解だな。」

リズベット「え!？」

ラット「それって、まさか……………!」

ユイ「つまりこれは、アレルギー反応です。」

カナ「そして、アレルゲンは……………パパだとママが、キリトさんとアスナさん……………だと思われます……………」

その診断結果に、俺とミト、キリトとアスナはショックを受けてしまう。

それでも、どうにかしようとしたのだが。

しばらくして……………。

シノン「え?この距離でダメなの?」

チエイズ「15メートルくらいあるぞ?」

ユウキ「一昨日は10メートルも離れば大丈夫じゃなかった?」

シリカ「2人のくしやみの回数が増えてますっ!」

ヒロミ「状況が悪化していますね。」

リーファ「大丈夫かな……………」

ハヤト「幾ら何でもおかしいだろ……………」

「……………」

そう、今は、15メートル離れたとしても、くしゃみが頻発してしまう。
リズベツト「でも、実際問題、お手上げだわ。」

ラット「運営にもユイ達にも分からない以上、何をして誰に聞けば……………」
セブン「皆、久しぶりね。……………」というより、何か増えてるわね。」

皆が振り返ると、そこにはセブンが居た。

俺たちがセブンを見ていると。

セブン「何よ？そんなに私に会えないのが寂しかったのかしら？ちよつと研究でトラブルがあつて、中々こつちに来られな……………」
リズベツト「いたーっ!!」

ラット「分かりそうな誰かさんが居たぜ！」

セブン「えっ、ちよつ、何!？」

俺とキリトも、くしゃみをしつつも、セブンの元に向かい、どういう訳か聞く事に。
だが、現実には、厳しかった。

セブン「無いわね。A L O内に病気やアレルギーの類はない。それは断言できるわね。」

アスナ「そう……………なんだ……………」

ミト「そうなの……………」

キリト「だ……………大丈夫だ……………」

カルム「そ……………そうだぜ……………。別に死ぬ……………訳じやな……………いからさ……………」
くしやみを何度も連発してるせいかな、少し苦しくなってきた。

キリトの所にはアスナが、俺の所にはミトが近づく。

アスナ「キリト君……………」

ミト「カルム……………」

キリト「アシュツンナつぶしっ！」

カルム「ミト……………へっくし！」

俺とキリトは我慢出来ずにくしやみをしてしまうが、ミトとアスナはそれを躲す。

何度も躲して、ハンカチで俺とキリトの鼻をかんでくれる。

『おお……………』

ユウキ「アスナとミト、やるう……………」

リズベツト「流石、閃光と紫鎌と呼ばれてただけはあるわね……………」

アスナ「何だか、キリト君のくしやみに愛着が湧いてきちゃって……………」

ミト「私も、カルムのくしやみに愛着が湧いてきて……………」

シノン「ねえ、2人とも、何か、危ないよ？」

チエイヌ「そうだな……………」

アスナ「だって、見えなくても、近くにいろのが分かるんだもん。」
ミト「確かにね……………」

ハヤト「そりゃあ、くしゃみをしてたら、誰かが近くに居るって分かるだろ。」

リーファ「あの2人、何か恍惚とした表情を浮かべてるのは、気のせい？」

ハヤトとリーファがそんな事を言うと、セブンがハツとした表情を浮かべる。

セブン「あ……………」
思い出した……………。ごめんさい。私のせいだと思う。ううん……………。私なの……………」

『えっ……………?』

セブンの発言に、全員が振り向いた。

そして、解説を始める。

セブン「以前にね、ALLO内でのストーカー対策の事案があつたのよ。詳細は省くけど、簡単に言うと、花粉症をシステム化して、対人で発動するようにしたの。接触頻度と時間間隔によりアレルギー反応として発現する仕組み。くしゃみすれば、接近される前に、被害者にも分かるし、周囲にも伝わる。」

リーファ「お兄ちゃんとカルムさん、ストーカーw……………!」

ハヤト「しかも、絵がクラインかよ……………!」

ユウキ「……………何で笑ってるの?」

シノン「ちよっと待って。」

チエイズ「なら、何でアスナとミトの2人は大丈夫だったんだ？同じ条件だろ？」

セブン「男性のみを対象に設定してたから。」

シリカ「そんなシステムが導入されたなんて話、聞いた事ないです！」

ヒロミ「確かに……………」

セブン「正式には導入してないの。まだ実験段階で、データを集める為にこつそり…………。そういう訳だから、絶対に発現しないような限界値の設定数値にしておいたのに……………！今治すわね〜！」

そう言つて、セブンは管理者用のメニューを開き、調整していく。

すると、全員がこちらを呆れた表情で見ってくる。

リーファ「そうね……………」

ハヤト「そんな常軌を逸していちやついてる人が居るとは……………」

ラット「想定出来ないよな……………」

リズベット「ねー。」

ぐうの音も出ない！

くしゃみが治った俺とキリトがそんな風に思っていると。

リズベット「あーもう全く、やってらんない。」

ラット「皆、行こうぜ。」

シノン「何か、甘い物を食べたいわ。」

チエイス「奇遇だな。俺もだ。」

そんな事を言つて、セブンを連れて、どこかに行つてしまう。

カナもだ。

カルム「おい……………」

キリト「皆……………」

アスナ「ちよつとリズ！」

ミト「どこにいくのよ!？」

リズベツト「アンタ達はダメ。」

ラット「少し2人ずつで頭を冷やせ。」

「「「!!」」」

リズベツトとラットの言葉に、俺とミト、キリトとアスナは顔を赤くする。

キリト「じゃ……………じゃあ……………」

アスナ「そ、そうね……………」

カルム「じゃあな……………」

ミト「そうね……………」

俺とミトは、キリトとアスナと別れて、ログハウスへと戻っていく。

カルム「2人きりは嬉しいけど……頭を冷やすのは難しいよな……。」

ミト「もうっ、カルムったら……。大好きだよ。」

そんな風に、イチヤイチャしだす。

しばらく出来なかつた分も含めて。

猫耳騒動

カルムside

ある日のALO。

シリカ「んひやあつ!!ちよ、ちよつとリズさんっ…………。やめて下さいよぉ!!」

リズベツト「ふふつ、良いじゃない、減るものじゃないんだから!」

カルム「どういう状況?」

ラット「実はな…………。」

ラットが話したのは、リズベツトがシリカの猫耳が気になったからだそうだ。

シリカと同じケットシーのアルゴ曰く、人間には存在しない感覚器官故、すつごく変な感じがするらしい。

ちなみに、それを言った直後に、彼氏のジエイクに触られるのは悪くないだそうだ。

つまり、惚気話だ。

見かねたアスナとミトが助け舟を出す。

アスナ「ちよつとリズ。そこら辺にしたら?」

ミト「何か、おじさんがセクハラしてるようにしか見えないよ?」

シリカ「というか、ただのセクハラですよ！良いんですか、こんな事して!!」
すると、その疑問にユイが答える。

ユイ「はい。女性プレイヤー同士では、ハラスメント防止コードに抵触しません。」
シリカ「そんなあ〜……………」

リズベット「アスナもミトも触ってみなさいよ。そうすれば、私の気持ちも分かるから。」

アスナ「ええつ、確かに、気にはなるけど……………」

リズベット「この毛並みを堪能しないなんて、勿体無いわねえ……………」

ミト「……………じゃあ、ちよつとだけ……………」

どうやら、ミトとアスナは誘惑に負けたそうだ。

ミト曰く、猫の耳を触ってるみたいだそうだ。

その後、触発されたのか、リーファやフィリアも触り出す。

男性陣は、蚊帳の外に居た。

特に、ヒロミが面白くなさそうな表情を浮かべていた。

ヒロミ「……………」

リズベット「ねえヒロミ。実はアンタも気になってるんでしょ？」

ヒロミ「じゃ……………若干……………」

ハヤト「気になるんだ……………」

ヒロミ「ていうか、そんな事をしたら、ハラスメント防止コードが発動するでしょ。」
ヒロミのその問いに、今度はカナが答える。

カナ「はい。シリカさんがボタンを押せば、ヒロミさんは牢獄送りです。」

シリカ「あ、あたし、ヒロミ君になら、触っても構いません！」

ヒロミ「え!？」

カルム「シリカ……………」

ラット「随分と大胆だな……………」

ミト「まあ、シリカとヒロミは付き合ってるんだから、それぐらいは良いんじゃない
?」

ヒロミ「いい、良いの……………」

シリカ「はい、どうぞ！」

ヒロミ「じゃ、じゃあ……………」お言葉に甘えて……………」

そんな風に、ヒロミはシリカの耳を触り出す。

ヒロミの顔が、凄く赤い。

すると。

ユウキ「ただいまー！」

ミト「おかえり。」

シノン「……………」

リーファ「あつ、ユウキさん、シノンさん、チエイスさん、ノーチラスさん、ユナさん。お帰りなさい。」

チエイス「これは、どういう状況だ？」

ヒロミ「み、皆さん!? いや、これは、別に、やましい事をしてる訳じゃ……………」

ユナ「ヒロミ君? 少し目が泳いでるよ?」

ノーチラス「僕の目からしたら、年下の少女を弄ぶ変態にしか見えないけど……………」

リズベツト「そう言われると、そうね。」

ヒロミ「リズさん!? 事の発端はあなたでしよう!？」

流石にヒロミが不憫で仕方なかったので、擁護する事に。

シリカの同意の元、ヒロミが触っていた事を。

キリト「……………」という訳で、ヒロミはシリカの同意の元、触ってたんだよ。」

シノン「なるほどね……………」

ノーチラス「ヒロミ、悪かったな。」

ヒロミ「いえ、誤解を招くような事をした僕が悪いと思うので……………」

ユナ「そういう事だったんだ。」

ユウキ「そういえば、シノンもケットシーだよな。チエイイス、シノンの耳も触らせてもらえば？」

チエイイス「いや、流石にそんな事はしないぞ。」

流石はチエイイスだ。

だが、俺は見逃していない。

シノンが少し残念そうな表情を浮かべている事を。

すると、シノンにチエイイスが近づいて。

チエイイス「……………後で良いか？」

シノン「……………良いよ。」

なるほど、イチヤイチャする為の材料にしてくるか。

そんな風に思っていると。

リーファ「でも、猫耳って、凄く可愛いですよね！ケットシーのアバターも作りたく

なった！」

アスナ「うん。そうだね。」

ミト「見てるだけでも癒されるけど、実際に触ってみたら、何だか羨ましくなってきた。」

た。」

エギル「そういう事なら、良いアイテムがあるぞ。」

すると、エギルが入って来る。

カルム「盗み聞きか？悪趣味だねえ。」

エギル「いや、あんなに騒いでたら、嫌でも聞こえてくるぞ。」

ハヤト「それで？良いアイテムって？」

エギル「おう。これだ。」

エギルが取り出したのは、猫耳型のアクセサリーアイテムだ。

キリト「な、何だこれ!？」

ユウキ「猫耳……だよね？」

カルム「猫耳だな……。」

ラット「何だ？エギル。そんな趣味があつたのか？」

パラド「人は見かけによらねえな。」

シノン「いや、流石にそれは違うでしょ。」

ミト「見た感じ、頭部に装備するタイプのアクセサリーって感じ？」

エギル「ああ。最近買い取りした物だな。着けると、敏捷性が飛躍的に跳ね上がるんだよ。」

へえ、性能は凄いな。

ユナも感心するような声を出す。

ユナ「本当に猫になるんだ！」

エギル「猫耳が欲しいってなら、試しに装備してみれば良いじゃないか。」

リーファ「え？良いんですか？」

エギル「ああ。試着ならタダで良いぞ。勿論、そのまま買い取って貰ってもいいけどな。」

チエイス「商魂逞しいな。」

そうして、女性陣が猫耳をつける事になった。

だが、この時の俺たちは、まさか、あんな事になるとは、誰も思わなかった……………。
どうやら、まずはリズベットが着けるようだ。

リズベット「どーよ！」

ユイ「リズさん、とっても可愛いです！」

ラット「へえ……………。意外としっくりくるな。」

リズベット「意外とってどういう事よ!？」

ラット「まあ、似合ってるぞ。」

ミト「じゃあ、次は私が着けてみるわね。」

次はミトか。

次の瞬間、まさにそれは、晴天の霹靂の様だった。

霹靂とは、雷の意味だ。

ミト「ど、どうかな……………?」

カルム（可愛い!!!）

その時、俺の脳内で、《マリアージュ!》という変な音声が聞こえた気がする。奇跡的相性と書いて、マリアージュ。

カルム「凄く……………似合ってるぞ……………!」

ミト「あ、ありがとう……………。カルムが喜んでくれるなら……………ずっと、このままでも良い気がするわね……………」

俺とミトが自分達の世界に入ろうとすると。

フィリア「ちよつと!すぐにイチヤイチャしようとしなないで!」

パラド「凄く仲良いな!」

シノン「あの2人って、すぐにイチヤイチャしだすわよね。」

チエイス「もう慣れた。」

リーファ「じゃあ、次は私が。」

どうやら、次はリーファだな。

リーファが猫耳を装備する。

リーファ「どうかな……………?」

アスナ「似合ってるわよ！ねえ、キリト君、ハヤト君。」

キリト「ああ。我が妹ながら、自慢したくなるな。」

ハヤト「おう！似合ってるぜ！」

リーファ「えへへー、ありがとう！」

シノン「うわ、シスコン……………」

チエイス「確かに……………」

キリト「ええっ!?感想を求められたから答えたただけだぞ……………」

ユウキ「それじゃ、次はボクが着けてみるよ！」

ユウキが猫耳を着ける。

リーファ「うんうん、良いじゃない！」

ユナ「おてんば猫ちゃんって感じだね！」

ユウキ「ミト、似合ってるかニヤー?!」

ミト「可愛い!!自慢したくなるわね!!」

シノン「こつちもシスコン……………」

チエイス「そうだな。」

ミト「失礼ね。自慢の妹を褒めてるのよ。」

カルム「シスコンなミトも……………悪くないな。」

ノーチラス「今度はこつちがおかしくなった……。」

ユナ「そうね……。」

失礼な。

そんな風に思っていると、次はフィリアの番になったそうだ。

フィリア「に、似合う……。？」

リーファ「凄く似合ってますよ！」

ユナ「もう少し、自信を持った方が良いんじゃない！」

カルム「似合ってるぞ。」

フィリア「ありがとう……。うう……。も、もう良いよね！」

どうやら、フィリアは恥ずかしくなって、猫耳を外したようだな。

次は、ユナの番だ。

ユナ「どうかな……。？ノー君……。？」

ノーチラス「凄く……。似合ってるぞ。」

ユナ「ありがとう！」

アスナ「こつちも仲良いわね。」

ユナ「じゃあ、次はユイちゃんとカナちゃんね！」

ユイとカナが、猫耳を着ける。

ユイ「出来ました！」

アスナ「わあ……。ユイちゃん、すつごく可愛い！」

キリト「ああ、ほんとに。ユイはなんでも似合うな！」

カナ「どう？」

ミト「うん！すつごく可愛い!!」

カルム「ああ。我が娘ながら、自慢したくなるなあ！」

リズベット「はは……。ただの親バカね。」

ラット「そうだな。」

ユイ「では、最後はママですね！」

リズベット「トリなんだから、期待してるわよ!!」

アスナ「もう、プレッシャーかけないでよ……。」

そして、トリのアスナが猫耳を着ける。

アスナ「いぎ着けてみると、やっぱり恥ずかしいな……。」

リズベット「ふふっ、いいじゃない。キリト、ほら、感想は？」

キリト「うん、可愛いと思う……。」

アスナ「そ、そうかな……。？キリト君が喜んでくれるんだったら、その……ずっと

このままでも……。」

ラット「そこのお二人さん、2人の世界に入る前に、戻って来い。」

アスナ「ええっ!?別に、そんなんじゃないよ……。」

シノン「自覚がないみたいね……。」

チェイス「やれやれ……。」

こうして、女性陣全員が、猫耳を装備している。

フィリアを除いて。

リズベット「さて、男性陣には、誰の猫耳が一番可愛かったのか、決めてもらおうかしら。」

カルム「え?俺たちが選ぶの?」

シリカ「ちよつと待って下さい!猫耳装備に参戦していない私たちは不公平ですよ!

ねえ、シノンさん!」

シノン「別に私はどうでも良いんだけど……。」

ユナ「そういう事なら、誰が一番猫耳が似合うかを決めて貰おうよ!」

シリカ「はいっ!それなら、元から猫耳が付いているケツトシーも選択肢に入りますよね!」

フィリア「じゃあ、男性陣は誰か1人を選んでよ。」

ノーチラス「そんな事言われても……。」

パラド「ならよ、いつその事、エギルなんてどうなんだ？」
チエイズ「エギルだと？」

パラド「だって、この猫耳を勧めたのはエギルだろ？なら、エギルも付けてみないとい！」

エギル「んまあ、構わんが……………」

おい、待て……………！

そう静止しようとしたが、失敗した。

パラドの奴、絶対面白がつてるだろ……………！

エギル「どうだ？」

ミト「……………」

アスナ「これは……………」

キリト（ぜ、絶望的に似合っていない……………）

カルム「どうすんだよ……………って、あれ？パラドは？」

ヒロミ「なんか、どっか行っただけ……………」

ハヤト「何か、置き手紙が置いてあるな。」

ノーチラス「何何？『これは、男性陣としての意見だ。だから、俺のせいじゃないぜ。』
と書いてある……………」

チエイズ「逃げたぞ……………」

カルム（アイツ、全責任を俺たちに押し付けて逃げやがった！）

この場には、微妙な空気が漂っていた。

エギル「何だお前ら、このアイテムは誰も買わねえのか？」

シノン「パラドがエギルが一番似合うって言ってたから、装備したまま商売すれば？」

リズベット「厳しい顔した店主が猫耳着けてるお店なんて、行きたくないんだけど

……………」

エギル「ひでえ言い草だな…………。せっかく売れると思っただが……………」

フィリア「男性陣が馬鹿なことを言ったおかげで、一気にテンションが下がったわ

ね。」

エギル「ああ。これはもう営業妨害だな。罰として、この猫耳は、男性陣に買い取っ

て貰おうか。」

「「「「え!」「」」」」

シリカ「わあ!それ、絶対可愛いと思います!」

嫌な予感……………」

すると、危ない笑みを浮かべ、手にはもう一つの猫耳を持ったアスナとミトが近づくと、

しかも、ニヤニヤしているリーファとリズベットも近づく。

ユウキは、エギルを見て爆笑していた。

アスナ「良いわね！キリト君！」

ミト「カルムも、絶対似合うわよ！」

リーファ「お兄ちゃんとハヤト君の猫耳かあ……。見てみたいかも！」
リズベツト「ほらほらく、皆期待してるわよ！」

キリト「勘弁してくれ……………！」

カルム「ああ、そうだ俺、用事あるんだった！じゃあ、帰るわ……………！」
俺が帰ろうとすると、ミトが凄まじい力で手を掴んでくる。

ミト「待って。」

カルム「ミトさん……………？」

ミト「せっかくなんだし、着けようよ。」

カルム「いや……………」

ミト「返事は、YESか、はいよ。」

カルム「はい……………」

そうして、男性陣は、猫耳を着けられ、全員から爆笑された。

あのシノンですらだ。

その後、ヘラヘラしながらやってきたパラドを全員で簀巻きにして、パラドにも着け

させた。

ピンヒールの花嫁とフラワーガーデン

シノンside

私は、アスナ、ミト、シリカ、リズベット、ユナに誘われて、ウエディングバトルを見にきた。

その際に、アスナが優勝した。

その帰り……。

リズベット「アスナはウエディングバトルでドレス着れて羨ましかったなあ。」

ミト「流石、閃光のアスナね。」

アスナ「はは………。たまたま調子が良かっただけよ。」

シリカ「絶対次回あつても勝てませんよー！羨ましいですう！」

ユナ「ドレス着てみたかったなあ。」

そんな風に話しているのを聞いて、私は口を開く。

シノン「私はまあ、どうでも良かったけど……。別にウエディングとか花嫁とかそれほど興味ないし。」

シリカ「ええっ!? 女の子なら、普通は憧れるものじゃないんですかあ!？」

リズベット「そうよ。そんなクールぶらなくたって良いのに。」

私がそう言うのと、アスナたちが驚く。

アスナ「シノのんもガールズトークでもして楽しもうよ。」

シノン「ガールズトーク……………。正直私にはよく分からないのよ。」

そう、本当によく分からないのだ。

確かに、チェイスに惚れて、B o Bの決勝であんな事をした。

でも、G G OではそんなA L Oの様な明るいイベントもない。

だから、そんな風に盛り上がれる事がいまいちよく分からない。

シノン「……………ウエディングイベントなんて言われても、現実感がないというか

……………。」

ユナ「シノン。仮想世界で現実感が無いって言われてもよく分からないよ。」

シノン「あつ……………。確かにそうだけ……………。」

ミト「でも、言いたい事は分かるわ。」

アスナ「この世界は、私たちにとって、もう一つの現実……………。そういう事よね。」

シノン「そうかもしれないわね……………。」

私アスナの言葉に頷いていると、シリカが声を上げる。

シリカ「そんなの勿体ないです！チェイスさんの為にも、シノンさんをもつと女の子

らしくして、女子力を高めましょう！」

シノン「えっ……?」

シリカの言葉に戸惑っていると。

リズベット「良いわねえ、チェイスにも、少しはシノンの事を女の子として見させてあげたいしね！」

ミト「確かに！」

アスナ「シノンさんの女子力を高めよう！」

ユナ「そうだね！」

シノン「えっ!?ちよつとつ、皆っ！」

「突然の出来事に私は戸惑う。

確かに、チェイスにも少しは私を見て欲しいのはある。

でも、そんな事して、チェイスが喜ぶか分からないじゃない……。

すると、背後から声がかかる。

アルゴ「それなら、良い情報あるヨ。」

アスナ「アルゴさん!」

アルゴ「女子力を超高めるウエディング隠しクエストの情報、知ってるヨ。」

ミト「何盗み聞きしてるのよっ！」

アルゴ「まあまあ、女子力アップには興味はあるんじゃないのかイ？お買い得情報だヨ？ニシシ……………！」

絶対、面白がってるわね！

そんな風に思っていると、皆がこちらを見る。

リズベツト「シノンの女子力アップしてあげるのも、友達ってモンよね。」

シノン「ちよ……………ちよつと楽しんでない？」

皆が言うから仕方なく、アルゴの情報を買って、その隠しクエを見つける。

しばらくして、いつの間にか呼んだのか、チェイス、キリト、カルム、ノーチラス、クラインが来ていた。

ヒロミとラツトは用事があるそうだ。

クライン「女子力アップの隠しクエとはねえ？シノンがそういうのに興味あったとはねえ。」

シノン「ないわよ!!!皆がやれやれ言うから仕方なくよ!」

ノーチラス「しかしこれ、隠しクエストなんだろう？開始してないし、クエスト攻略は……………」

カルム「その手のクエストって、着なきや始まらないタイプだろ？」

「……………ですよね。」

アスナにミト、シリカ、リズベット、ユナが目を光らせて、私を見る。

シノン「え!? 私は、こんなの着るの嫌だからねっ!」

アスナ「これはみくんなでシノのんの為に考えた事なのよ!」

リズベット「友達の好意を無駄にするなんて……しないわよね? シノン。」

結局、押し切られてしまい、私はドレスを着る。

結構、恥ずかしいわね……。

クライン「ふえー。馬子にも衣装つてのは、本当だなあ。」

シノン「どういう意味?」

クライン「あつ! その視線もイイ!」

変な事を言ったクラインを睨む。

女性陣は騒いでいる。

肝心のチェイスは、カルムに押されていた。

カルム「ほら、シノンが見て欲しいみたいだぞ。」

チェイス「分かった……。本当に綺麗だ。シノン、とっても似合ってるぞ。」

シノン「……。っ。そ、そう……。?」

何か、アスナやミトが、最近あつた猫耳騒動の際に、あんな事を口走ったのかがよく分かるわ。

チエイスが喜んでくれるなら、私、このままでも、良いのかも……………。

クライン「畜生！何で俺には彼女が出来ないんだよ!？」

キリト「美女に対して、下心がありすぎるからじゃないのか？」

ノーチラス「その野武士面が受け入れられないとかじゃないか？」

カルム「性格がだらしなからとか？」

クライン「言いたい放題かよ！」

シノン「あのさ、これ着たからクエスト開始みたいだけど……………攻略法は？」

すると、シリカが何かに気付いたのか、私の横に指差す。

そこには、JRUと書いてあるバーが2本あった。

何の事かと全員が首を傾げると、今度はミトが何かに気付いたのか、声を出す。

ミト「まさかとは思うけど、JOSHI RYOKU UPの頭文字……………じゃない

よね？ウエディングドレス隠しクエストだけに……………」。

JRU||JOSHI RYOKU UP……………女子力アップって事!?

少し雑すぎじゃないかしら？

リズベット「じゃ、シノンが女子力をアップすればクリアね！簡単じゃん！」

シノン「簡単って……………」。「女子力」アップってどうすれば良いのよ？」

アスナ「確かに……………」。

シノン（全く考えてないわね……………）

ユナ「もしかして、相手が必要かもしれないわね。」

ミト「ラブラブ感を高めると、JRUバーが削れるんじゃない?」

確かに、そうかもしれないわね。

そんな風に考えていると。

クライン「ふ、ここは俺が一肌脱いでやるしかあるめえ。」

キリト「クライン?」

カルム「お前、何しようとしてるんだ?」

ノーチラス「まさか……………」

チエイス「……………」

クライン「シノン、俺に毎朝味噌汁を作ってくれ。」

クラインの言葉には、何にも響かなかった。

それどころか、ドレスが締め付けてくる。

ミト「ドレスが締め付けてる!?!」

ノーチラス「まさか、相手が悪かったからじゃないのか?」

キリト「みたいだな……………」

カルム「しかも、ゲージ一本増えてるし……………」

シノン「くらくらいん……。」

チエイス「お前……。」

チエイスが呆れながらクラインを見て、私は、ピンヒールで思いつきクラインを蹴る。

カルム「クライン、大丈夫か？」

クライン「ふっ……。ピンヒールの回し蹴りなんて、ある意味ご褒美さ。げふ……。キリト「HP赤くなってるぞ……。」

ノーチラス「クライン。そういう所があるから、お前はモテないんだよ。」

ノーチラスの言葉が止めとなったのか、クラインが白くなる。

自業自得ね。

カルム「チエイス。シノンのクエストの攻略を頼む。」

チエイス「分かった。だが、どうすれば攻略出来るのか？」

アスナ「そうね……。ウエディングドレスだから、それっぽい雰囲気の中でそれ

ばい事をすれば、行けるんじゃない？」

ミト「そうね。それが一番ね。」

リズベット「それっぽい所って……。」

ユナ「何か心当たりある？」

シリカ「私、良いスポット知ってますよ！」

シリカがそう言うと、案内してくれた。

そこは、フラワーガーデンだった。

アスナ「わあ……………」

ミト「フラワーガーデンね。」

ユナ「素敵だよ！」

シリカ「ここ、恋人達がデートに使う穴場スポットなんですよ。」

リズベツト「なるほどねえ。シリカ、アンタ、ヒロミと一緒にここに来てるの？」

シリカ「そんな所です！」

なるほどねえ……………」

という事で、チエイスと一緒に歩く。

チエイス「一緒に歩いてるだけで、ゲージが減ってるな、シノン。」

シノン「本当に素敵な所だもんね。GGOにはない風景ね。」

チエイス「彼処は殺伐としてるしな。」

歩いているだけでも、ゲージは減っていくが、暫くすると、減らなくなった。

すると、シリカがもう一つ良い所があると言って、連れて行ってくれた。

そこは、アーチ状の花が置いてある所だ。

カルム「絶景だな。」

ミト「……………こんな所で、結婚式、あげたいなあ。」

アスナ「私も……………」

キリト「ハハハ……………」

ノーチラス「まあ、ここでそれっぽい事をすれば、クリア出来そうだな。」

ユナ「それっぽい事って？」

クライン「やつぱそこは、ヴァージンロードの先で、熱い抱擁のぶちゅ……………」

クラインがそこから先を言おうとすると、女性陣全員に殴られる。

男性陣は、クラインを呆れながら見ていた。

カルム「そういう所だよ。」

キリト「全く……………」

アスナ「まあ、見つめ合うだけでも良いんじゃないかな？」

ミト「そうね。」

私とチェイスは、花のアーチの下に行き、お互いを見つめ合う。

その時に、私は思っていた。

新川君とGGOを買いに行った時に、チェイス／英介と出会って、命を救ってもらっ

て、チェイスのお陰で、友達ができた。

今、チエイスの目には、ウエディングドレスを着た私しか映ってないんだよね……。今だけは、私とチエイスだけの世界……。

アスナ「何か、良い雰囲気ね。」

ミト「そうね。」

リズベット「やつぱり、シチュエーションによつての攻略方式は合つてたんだ。」

シリカ「本当に、2人とも、素敵です！」

クライン「何か、減るの止まっちゃまったぞ？」

カルム「あと少しって感じだな。」

キリト「何させれば良いんだ？」

ユナ「やつぱり、ここは女子全員が憧れるアレしか無いでしょ！」

ノーチラス「アレって？」

シリカ「女子全員が憧れる、お姫様抱っこですよ！」

それを聞いて、少し恥ずかしくなる。

シノン「ええっ!? 良いわよっ!? そんなっ、お姫様抱っこなんてっ……私の柄じゃない

し……!?!」

チエイス「ほら。」

そんな事を言つてると、チエイスが有無を言わずに、私を抱き上げる。

何か、こういうのも、悪くないわね。

クエストは無事に終わった。

カルム達は、血の涙を流すクラインを連れて、どこかに行った。

すると、チェイスが私を降ろすと。

チェイス「シノン。」

シノン「な、何……………?」

チェイス「シノンに、渡したい物があるんだ。」

そうやって、渡してきたのは、指輪が入ってるケースだった。

受け取って開けると、そこには、指輪が入っていた。

シノン「これって……………」

チェイス「シノンに、渡したくてな……………。カルムやハヤトに、聞いてみたんだ。」

シノン「あつ……………」

確かに、ここ最近、少しどこかに出かける事が多かったけど、これを見つける為

……………。

シノン「ありがとう……………!」

チェイス「良かった……………。こういうのは、良く分からなくてな……………。シノンが喜

んでくれてよかった。」

シノン「……………ちよつと、着けてみるね。」

私は、手袋を外すと、チエイスに指輪を着けさせてもらう。

チエイスも了承してくれて、指輪を着けてもらう。

私は、感極まって、チエイスに抱きついて、キスをする。

チエイスも、二度目の不意打ちには少し驚いたようだった。

チエイス「シノン……………」

シノン「ありがとう。本当に、嬉しい。」

チエイス「ああ……………。そうだ。」

シノン「ん?……………!?!」

すると、チエイスもキスしてきた。

それも、デープキスだ。

私は驚いて、少し抵抗するけど、すぐにされるがままになる。

しばらくして、お互いに口を離す。

シノン「チエイス……………?」

チエイス「俺からの気持ちだ。」

シノン「……………!うん。」

そうして、チエイスの肩に顔を預け、しばらくそうする事に。

そして、私は、とある事を想像していた。

それは、チェイスと本当に結婚する事を。

アスナ達に、このクエストを受けさせてくれた事を感謝して、私はチェイスと一緒に世界を満喫する。

紫紺の剣士VS炎の剣士

冬馬side

5月中旬

俺と和人は、六本木にあるオフィスビルへと来ていた。

オフィスの一画へと到着した俺たちはそこに置かれている機械に近づいた。

和人「へえ〜……。これが第4世代型フルダイブ実験機か。」

冬馬「それにしても、随分と大きいな。ゲーセンでよく見る箱形の据え置き機くらいか？」

比嘉「いやいや、これでも当初の設計段階に比べればかなりコンパクトに仕上がったんツスよ？」

俺たちがそう言うと、呼び出した張本人、比嘉タケルがそう答える。

彼は、重村ラボの学生の1人で、茅場晶彦、須郷伸之の後輩で、ALOの事件で協力してくれた安田巧と同期だ。

比嘉「しかも、昔のゲーセンに置いてあったのとは、スペックが段違いっス!!例えるなら……ファミコムとドリキヤブくらい！」

和人「……………俺、両方実機見たことない。」

冬馬「俺も。」

比嘉「えっ！じゃあ今度、僕ん家でレゲー合宿とかどうтусか!?ゲーム好きなんでしょ！桐ヶ谷君に小野君！」

和人「え、まあ……………」

冬馬「……………つまり、俺たちはこれでフルダイブして、中で動けば良いってことか？」

比嘉「そーゆーことつス。メールで伝えたように、2人の高いVR適正を見込んでお願いしたいんスよ！」

なるほどな。

だが、メールを送ったのは、比嘉さんだが、これを斡旋してくれたのは、菊岡さんだ。あの人のことだ、何か企んでいそう。

ちなみに、比嘉さん曰く、高性能故、VR酔いが凄まじいらしい。

比嘉「中のグラフィックを見るだけで、立つてもいられないんス。……………思い出すだけで眩暈が……………」

和人「まあ、給料を貰うんですから、何でもやりますけど……………」

冬馬「一応、確認しておきますが……………。大丈夫なんですよね……………」

比嘉「2人が心配なのは分かるっすよ。SAOサバイバーだし。でも、大丈夫！僕の開発したマシンに危険性は、これっぽっちくらいしかないっすよ！」

和人「そうですか。それを聞いて安心……。」

冬馬「……………これっぽっちくらいしか？」

俺がジト目で比嘉さんを見つめると、比嘉さんは慌てて口を開く。

比嘉「大丈夫！大丈夫！！大丈夫ッス！！ただ……………ダイブ中に電源が落ちると、ちよーっつとアレなの……………」

冬馬「アレって何ですか？」

比嘉「いやいやいや!!ちゃんとそのために、補助電源×2と緊急用バッテリーを備えてるッス!!」

安心出来る要素が少ない。

俺が若干不安になると、和人が比嘉さんに言いかけた話を話させる。

比嘉「あ……………。つまり、出るんすよ。これが。」

そう言つて、幽霊のポーズをとる。

まさかと思ひ、聞いてみる。

和人「は……………?え……………?」

冬馬「幽霊？」

比嘉「いやマジなんすよ！僕もハッキリ見たんすから………！この実験機はこの世界において今ここにある2台のみしか存在してないですよ！ですが、一台しか動かしてない時や同時稼働でも別々のVRワールドにダイブしていたとしても………全てのテストダイバーが見たという報告を上げてくるんツスよ。ダイブした先で薄つらとした人影を何度も見た、と。」

何か、胡散臭い話になってきたな。

和人が声を出す。

和人「それって、VR酔いのせいでライトエフェクトを見間違った………とかじゃないんですか？」

冬馬「それか、シェーダーがバグってるとかは………？」

比嘉「ノーノー!!!このジーニアス比嘉が組んだプログラムにそんな！へボー！バグがあるわけがないデス!!」

何か、エセ外人みたいな喋り方になったな。

一応、ログは解析したらしい。

比嘉「こうなったら、考えられるのは本当にお化けの作業なのか………あるいは。」

「………あるいは？」

どうやら比嘉さんには他にも心当たりがあるらしい。

周りに聞かれないように、周囲に誰もいないことを確認してから、比嘉さんは小声で話し始めた。

比嘉「……………コホン。これは口外厳禁でお願いしたいですけどね……………。この実験機の心臓部には量子演算回路が組み込まれているんツス。いわゆる、一つの量子コンピュータツスね。」

冬馬「量子コンピュータって、SFとかでよく聞くあれですか？」

和人「ああ。それも比嘉さんが作ったんですか？」

比嘉「残念ながら……………基礎理論はかの茅場先輩が残した理論ツスよ。まあ、それはともかく……………量子コンピュータっていうのは平行世界に干渉する可能性があるって言われてるツス。昔からSFの世界では……………」

「……………」

比嘉さんは、自信なさげにそう語る。

まあ、量子コンピュータは、そういう可能性があるのは、否定できない。

比嘉さんは、未だに語り続ける。

比嘉「もしも平行世界からの干渉を受けているのだとしたら、このお化け問題にも説明がつくんツスよ。この実験機が、過去や未来、パラレルワールドに接続して、いるはずのダイバーの影を見せている……………とすれば。」

冬馬「……………分かりました。ダイブして確認してきます。」

和人「一応、そのベッドに横たわれれば良いんですか？」

比嘉「流石はSAO生還者！度胸が違いますね！」

ジェル状のベットに寝転がり、俺と和人は実験機に身を預けた。

そのまま比嘉さんがパネルを操作し、ダイブの準備を始める。

比嘉「それじゃ、桐ヶ谷君、小野君。頼んだツスよ！アバターは君たちのセルフイメー
ジから精製されるツスから違和感はないはずツス。では、リンク・スタートの掛け声で
ダイブを開始するツス。」

「……………了解。リンク・スタート！」

いつもの掛け声と共に俺の意識はVRワールドへと旅立った。

VRワールドに旅立って、しばらくすると。

カルム「どこだここ？」

見た感じ、草原だな。

だけど、少し何かがおかしい。

飛行機が飛んでいたり、ドラゴンが飛んでいたり、鯨が飛んでいる。

しかも、何か巨大な剣が刺さっている。

カルム「どうなってるんだ……………？」

俺の服装を見てみると、SAOのそれだ。

どうやら、俺のイメージからそうなったみたいだな。

すると、背後に気配を感じて、抜剣しながら振り返ると、そこには、1人の若い男性が居た。

飛羽真 side

俺は、神山飛羽真。

小説家にして、炎の剣士だ。

今は、この新しく創られたワンダーワールドで、消えた人を現実世界に戻すべく、執筆作業をしていた。

執筆作業を一旦、休憩する為に止めて、俺は気分転換に外に出る。

1人でも多く、現実世界に戻す為に、頑張らないとな。

すると、誰かが居る。

飛羽真「人なのかな……？でも……。」

だけど、あの人物は、始まりの5人やルナ、バハトの誰でもない。

このワンダーワールドには、俺も含めて8人しか居ないはず……。

飛羽真「君。ちょっと良いかな？」

俺は彼に声をかける。

すると、その人は、剣を抜きながらこちらに振り返る。

見た感じ、剣士だろうけど、警戒心がある。

飛羽真（アレは、聖剣なのか？でも、形状が明らかに違う。……しかも、いきなり剣を向けられるなんてね……。）

観察するけど、どう出るべきか……。

一応、いつでも刃王剣十聖刃を呼び出せるようにはしておく。

火炎剣烈火を構える。

カルム side

俺は、少し後悔していた。

カルム（しまった。VRでの習慣からか、思わず抜刀してしまった……。）

俺と男性は、そんな硬直状態に陥ってしまった。

すると、男性が動く。

飛羽真「君！こつちに戦う意志はない！何があったのか、理由を聞かせてくれないか！」

男性が何か言ってるが……。

カルム（聞こえない……）。最後の警告か？いつでも武器を使えるようにしてるし……。一応、こつちも呼びかけるか。「すいません、何を言ってるんですか？俺はフ

ルダイブの実験機でテストダイブしてる者です！あなたは、どこからダイブしてるんですか!？」

だが……………聞こえてるようには見えない。

飛羽真（……………見た感じ、こつちの声も向こうの声も聞こえないみたいだな。……………どうしようかな。タツセルさんにも相談するか。）

男性は、何処かへと向かおうとして、嫌な予感がしたので、思わず攻撃するが、躲される。

カルム（相手が動いたから思わず攻撃したけど、躲されるとは……………！……………多分、ユウキヤキリトとは違う強い人だろうな……………！）

飛羽真（いきなり攻撃されたんだけど!?!……………まさか、あの距離を一瞬で詰め寄るなんて……………!戦うしかなさそうだ……………!）

すると、男性は腰に何かバックルみたいなのを装着して、剣を納刀する。更に、小さい赤い本を取り出して、開く。

その本を、バックルに装填して、剣を抜刀すると、男の人の姿が変わる。

それは、右に赤い竜の装備が着いて、頭から持つてる剣が伸びている。

カルム（何だあれ……………!?!）

こちらから攻撃してしまった以上、戦いは避けられない。

しばらく睨み合い、風が吹いて、止む。

カルム「ハアアア!!」

飛羽真「!?」

俺は先手必勝と言わんがばかりに、駆け出していき、ブレイラウザーをぶつける。

男は、炎みたいな装飾がついた剣で受け止める。

鏢迫り合いになる。

だが、俺は動く。

わざと鏢迫り合いを止め、蹴りを入れる。

すると、足にライトエフェクトが発生する。

恐らく、体術スキル、弦月だ。

飛羽真（ええっ!? 足が光った!? もしかして、ゲームの必殺技みたいなものか!?)

カルム（そうか! S A O時代のデータだから、ソードスキルも使えるのか! なら

.....!)

そこから、片手剣ソードスキルで攻撃していく。

その時、男の人が、本をタップする。

すると、一体の赤い竜が現れて、吹っ飛ばされる。

しかも、痛い。

恐らく、ペイン・アブゾーバーが効いてない。

飛羽真（しまった！少しやりすぎたかな？）

カルム「強い……………！だけど、勝ちたい……………！本気で行くか！」

俺はラウズアブゾーバーから、2枚のカード、クイーンとキングのカードを取り出し、アブゾープカプリコーンを装填する。

『absorb queen！』

そして、エボリューションコーカサスをラウズアブゾーバーにラウズする。

『evolution king！』

俺は、エボリューションキングを発動して、金色の鎧を纏い、キングラウザーを召喚する。

飛羽真（何だ！？カードが13枚現れて、それが彼と融合した！？しかも、鎧もパワーアップしてるし、剣が増えてる！）

カルム「行くぞ！」

久しぶりの感覚を味わいながら、俺は相手に向かっていく。

ブレイラウザーとキングラウザーの異種の二刀流で、相手の剣を弾きつつ、キングラウザーの重い一撃を叩き込む。

飛羽真（一撃一撃が重い……………！）

カルム「これなら、行ける！」

相手も戸惑っているのか、動きが少し鈍くなる。

俺はキングラウザーに5枚のカードを読み込む。

『スピード2、スピード3、スピード4、スピード5、スピード6！』

『ストレートフラッシュ！』

キングラウザーとブレイラウザーにカードの力を宿して、相手を吹っ飛ばす。

カルム（少しやりすぎたか？）

俺は勝利を確信していた。

相手の姿が変わるまでは。

飛羽真 side

まさか、あんなに強いなんて……！

倫太郎に賢人、尾上さん、蓮、大秦寺さん、ユーリ、バハトとは違う強さが、彼にはある。

飛羽真「なら、俺も本気を出さないと！」

俺は待機させていた刃王剣十聖刃を呼び出し、火炎剣烈火のかわりに納刀して抜刀する。

『聖刃抜刀！』

『刃王剣クロスセイバー！創世の十字！』

『煌めく星達の奇跡と共に……………！』

『気高き力よ、勇気の炎！』

『クロスセイバー！クロスセイバー！クロスセイバー！！』

『交わる10本の剣！』

俺は、クロスセイバーへと変身して、刃王剣十聖刃と火炎剣烈火の二刀流で、彼と戦う。

彼も、俺の姿が変わったことに戸惑っているみたいだ。

火炎剣烈火で、彼が最初から持っていた剣を弾き、刃王剣で攻撃する。

カルムside

何だよ、アレ……………!?!

新たな剣が現れて、姿が青くなったと思ったら、二刀流になった……………!

しかも、強い……………!

さつきまでの戦法が通じない。

形勢は、あつという間に相手に傾いた。

相手の炎の装飾がついた剣でブレイラウザーを吹き飛ばされ、俺はキングラウザーで

攻撃するが、相手が煙になった。

カルム「え……!?グッ！」

すると、背後から痛みがして、振り返ると、いつの間にか背後を取られていた。疲労とダメージが重なり、俺は膝をつく。

カルム（……………これは、勝てないな。強すぎだろ。）

俺は負けを確信していたが、諦めたわけではない。

カルム「……………でも、最後に1発、本気の一発をあの人に叩き込む！」ハアアアア!!」
飛羽真「まだ動けるのか!?なら！」

俺は、ラウズカードをキングラウザーに5枚装填する。

相手も、何か操作をしている。

剣に付いてる装飾を動かしていた。

『スピード10!ジャック!クイーン!キング!エース!』

『ロイヤルストレートフラッシュユ!』

『刃王必殺リード!』

『既読十聖剣!』

『刃王クロス星烈斬!』

どうやら、お互いに大技を叩き込もうとしているみたいだ。

エネルギーを溜めて、俺と相手は駆け出していく。

「ハアアアア!!!」

お互いの気迫と共に、大技がぶつかろうとした次の瞬間。

「!?!」

俺が相手をすり抜けて、相手の攻撃は俺をすり抜ける。

どうなっているんだと戸惑っていると、俺が段々薄れていく。

いまいち状況を飲み込めずにいると。

飛羽真「誰かは知らないけど、ありがとうございます。」

カルム「ありがとうございます。」

俺は、意識を失った。

すると、比嘉さんの顔が見えた。

どうやら、ログアウトしたようだ。

その後、謎の剣士と戦った事を、比嘉さんには伝えずに、そのまま報酬を受け取って帰る。

ちなみに、何度ログインしても、あの剣士とは会えなかった。

深澄「冬馬?」

冬馬「あ、悪い。」

深澄「考え事なんて、珍しいわね。」

冬馬「そうかな？」

深澄「どうしたの？」

深澄が顔を覗き込む。

冬馬「実はな、この前、滅茶苦茶強い剣士と戦って、ボロ負けしそうになった。」

深澄「え？冬馬が？」

冬馬「それを思い出してた。」

深澄「それは、ゲーマーとしての血が騒ぐわね。どこの誰？」

冬馬「分からん。多分、会えないしな。」

深澄「え？」

冬馬「まあ、その話は終わり！それで、渡したい物があるんだ。」

深澄「何？」

俺は、バッグから箱を取り出す。

それを深澄に渡す。

深澄「これって？」

冬馬「開けてみてくれ。」

深澄「うん……………」

開けると中には、指輪が入っていた。

深澄「これって……………!？」

冬馬「うん。指輪だよ。色が紫で、深澄っぽかったから、買ったんだ。」

深澄「くれるの……………?」

冬馬「ああ。」

深澄「……………ありがとう!」

最高の笑顔を浮かべ、俺が深澄にその指輪をつける。

予想通り、似合ってる。

深澄「大事にするね!」

冬馬「ああ。」

その後、デートをして、GGOでのチェイスとシノンからの依頼についても話し合っ
た。

冬馬(そういえば、名前が表示されていたな。確か……………《T O U M A K A M I Y
A M A》……………カミヤマトウマ。フルネームをアバター名にするなんて、珍しいな。)

飛羽真 side

俺は、ワンダーワールドから帰還して、あの出来事を思い出していた。

すると、芽依ちゃんが話しかける。

芽依「飛羽真? どうしたの?」

飛羽真「いや、とある事を思い出していたんだよ。」

倫太郎「とある事？」

賢人「何だ？」

倫太郎と賢人も話しかけてくる。

飛羽真「実は、ワンダーワールドに居た時、違う世界の剣士と会ったんだよ。」

芽依「そうなの!？」

飛羽真「ああ。」

倫太郎「その人は、聖剣やワンダーライドブックを使っただんですか？」

飛羽真「いや、ワンダーライドブックは使っていないかったな。」

賢人「なるほどな。」

飛羽真「すっごく強かったんだよ！」

倫太郎「ぜひ、一度手合わせしてみたいですね！」

飛羽真「ただ、その出来事以降、彼は現れてないんだよ。」

賢人「そうなんだな。」

名前は分からなかったけど、強い剣士なのは間違い無いな。

どこか危うい一面がありそうだったけど。

俺は、そんな事を思いつつ、小説を執筆していく。

アリシゼーション

第1話 幼少期の思い出

カルム side

人界歴372年

天職をこなしていると汗を流す時期になってきたなと思いつながら、俺は幼馴染が必死に竜骨の斧でその樹に切り込みを入れるのを見守っていた。

すると、1人の幼馴染が声をかける。

ケント「カルム。」

カルム「ん？ケント。どうした？」

ケント「いや、大分慣れてきたなと思つてな。」

カルム「まあな。」

すると、良い音が鳴った。

そして、クリーンヒットした音と共に、寝転がっていたもう一人の幼馴染がその記録を新たに一つ足していた。

ユージオ「はあ、はあ……これで、50!!」

最後の一撃は、切り込みを外し、樹の外皮に当たってしまった。

ユージオ「プハッ! ……ハア ……ハア ……」

キリト「今のでいい音がしたのは、50回中3回だったな。えっと、全部合わせて41回か。」

息を切らし、地面に倒れてこんでしまった亜麻色の髪と緑色の瞳の幼馴染 …… ユージオに、黒髪の彼 …… キリトが声を掛けた。

キリト「どうやら、シラル水を奢らないといけないのは、そっちの方みたいだぜ …… ユージオ。」

ユージオ「ふん …… そっちだって、まだ43回じゃないか。すぐに追いつくよ …… キリト。」

ケント「いや、どっちもどっちじゃないか?」

カルム「そうだな。」

俺は呆れながら竜骨の斧を拾う。

これが、俺たち4人の天職だ。

目の前に聳え立つ大きな木 …… ギガスシダーを見上げる。

カルム「それにしても …… 毎日4人でこれだけ斧を振るっても、全然倒れないよな。」

キリト「ああ………やっつけられないよな。」

俺の言葉に、キリトが同意する。

それを、ユージオとケントの2人が諫める。

ユージオ「文句を言っても、しょうがないだろ？」

ケント「このギガスシダーを伐り倒す事が、俺たちの天職なんだ。」

キリト「そりゃ、分かっちゃいるけどさ……。本当に達成感がないよな。」

そう言つて、キリトはギガスシダーに近づき、指で『ステイシアの窓』を開いた。

キリト「えっと、この天命……。前はいくつだったかな？」

ユージオ「えっと……。」

カルム「前が23万5590だったな。」

ケント「だから、50くらいか？」

俺とケントがそう答えると、キリトが俯いて、頭を掻き出す。

キリト「たった50……。それっぽっちしか減ってないって、これじゃ一生掛かっ

ても切り倒せねーよ!!」

ユージオ「アハハ……。なんたって、鉄の硬さを誇る大樹だよ。」

ケント「俺たちの前に6代の刻み手が300年をかけて頑張ってたんだ。あと18代

……ざっと900年か？」

カルム「受け継がれるのは良いんだが、途轍もないな。軽く呪いみたいだな。」

ユージオとケントの2人の解説に、俺が苦笑しながら言うと、キリトがユージオに襲い掛かる。

形としては、キリトがユージオに馬乗りしている状態だ。

キリト「お〜ま〜え〜は〜！おりやあ!!」

ユージオ「うわ！イテテ……………」

キリト「何でそう優等生なんだ？もうちよつとこの理不尽な役目をどうかしようとなげなめ！」

ユージオ「な、なにすん……………!?止めろよ！」

ケント「カルム。俺たちは作業をやろう。」

カルム「そうだな。ほつとけ。」

いつもの二人のじゃれ合いに呆れながら、俺は切り込みの続きをやろうと斧を構えた。

そして、作業の続きをしようとした時だった。

アリス「こらー！」

イーディス「アンタ達、またサボってるわね！」

キリト「やべ……………」

ユージオ「や、やあ………。アリス、イーデイス………。」

ケント「やあ、イーデイス。」

そこに居たのは、金髪の髪にリボンをつけている女の子と、灰色の髪をリボンで上にまとめ上げている女の子だ。

彼女達は、アリスとイーデイスと言う。

キリト「よ、よお、アリス、イーデイス。神聖術の練習は終わったのか？」

アリス「全然早くないわ。いつもの時間よ。」

イーデイス「アンタ達、仲良いわねえ。」

そう言つて、アリスとイーデイスは岩から飛び降り、こちらへと歩いてきた。

アリス「喧嘩する元気があるなら、カルムとケントを見習つて、もう少し切り込みをしたらどうなの？」

イーデイス「そんなに元気が有り余つてるなら、ガリツタさんをお願いして、回数を増やして貰おうかしら？」

キリト「ヒイイ！」

ユージオ「それだけは！」

カルム「アリス、イーデイス。冗談はそこまでにしておいてやれ。」

ケント「アイツらも、息抜きだろ。」

アリス「分かってるわ。」

イーデイス「全く、カルムもケントも真面目ねえ。もう少し、キリト達を見習ったら？」

カルム「アハハ……。」

多少は見習おうかな。

そう思っていると、アリスとイーデイスの2人がバスケットの中から、パイを出してくる。

「「「おおおっ!!」」」

黄金のように輝く出来立てのアップルパイにパン、果物にシラル水……見るだけで食欲をそそる料理に思わず声が出てしまった。

すると、イーデイスが天命を確認していた。

イーデイス「うわ。急いで持ってきたのに、天命があと少しで尽きちゃうわね。」

アリス「今日は暑いから、悪くなっちゃう前に急いで食べてね？」

「「「おう!」」」

俺たちはアリスとイーデイスの手料理を急いで食べる。

パイの甘味とさくつとした皮が疲れた体に染み渡る……そう思えるほど、美味だった。

カルム「いやあく。なんとか間に合ったな。」

キリト「ああ。」

アリス「良かったわ。」

イーデイス「そうね。天命が尽きた物を食べると、必ずお腹を壊しちゃう。」

アリス「味はどうだった？」

イーデイス「そうね。どうだった？」

ユージオ「うん。今日のパイは美味しかったよ。」

ケント「大分腕を上げたな。」

アリス「そ、そうかしら……………」

イーデイス「アタシとしては、もう一味かと思っただけ……………」

俺達の感想に顔を赤くして目を反らすアリスとイーデイスに、俺たちは思わず笑ってしまった。

その時、キリトが何かに気付いた。

キリト「それにしても……………せつかくの美味い弁当なんだから、もつとゆつくりと食べたいよな？　なんで、暑いとすぐに悪くなっちゃうだろう？」

ユージオ「なんで……………」

キリト「冬なら、生の塩漬け肉を外に放つといっても、なにしても持つじやないか？」

ケント「そりや……冬は寒いから、天命も減りにくいしな……。」
カルム「何を考えてるのか、聞こうか？」

キリト「そうだよ！なら、寒くすればこの時期だって弁当は長持ちするはずだ！」

そのアイデアを自信満々に述べたキリトに、思わず俺とユージオ、ケントは肩を竦めてしまった。

ユージオ「絶対禁忌の天候操作術で雪でも降らせる気かい？」

ケント「そんなことしたら、公理教会の整合騎士に捕まるぞ？」

キリト「……うーん……。」

カルム「まあ、そんな事をしなくても良いんじゃないか？」

アリス「そうね。」

イーデイス「まあ、お弁当箱をどうにかして冷たくすれば、そんな事をしなくても済むわ。」

その言葉に、俺たちは顔を見合わせる。

キリト「夏でも冷たい物……。」

カルム「シルベの葉っぱは？」

ケント「アレはちよつとヒヤツとするだけだろう。」

ユージオ「なら、深井戸の水を壺に入れるとかはどうかな……？」

そんな風に考えるが、なかなか良い案が出てこない。

すると、とある妙案が思いついた。

キリト「氷だ………！」

「え？」

カルム「確かに、氷が沢山あれば、十分に弁当を冷やせるな。」

アリス「………アンタ達ね………今は夏なのよ？氷なんてあるわけないじゃない。」

イーデイス「それに、央都の市場にだって、ありはしないじゃない。」

カルム「そうだな………。」

2人の指摘に、俺とキリトは考える。

すると、キリトが声を出す。

キリト「なあ………英雄ベルクローリの武勇譚、覚えてるか？」

ユージオ「え？」

アリス「どの話？」

ケント「ん？」

イーデイス「どの話よ？」

カルム「ああ。もしかして、アレか？『ベルクローリと北の白い竜』の話か？」

『ベルクローリと北の白い竜』とは、英雄ベルクローリが、村の東側に流れるルール川で氷

の塊を見つけ、その源……人界の終わりとされている『果ての山脈』にたどり着いた冒険譚。

ベルクーリはその洞窟で財宝の山と巨大な白竜を見つけ、宝の中から美しい剣を手にとった時、その途端、白竜が目を覚まし……ベルクーリは白竜に襲われることを覚悟するも、彼の勇気を免じた白竜がその場を見逃し、ベルクーリは生還した……というおとぎ話だ。

俺が一通り話し終えると、キリトが話し出す。

キリト「あの話だと、洞窟に入つてすぐにつかい氷の氷柱が生えてるだろ？ソイツを折ってくれば……！」

ユージオ「キリト……。」

ケント「お前……。」

アリス「悪くない考えね。」

イーデイス「確かに。」

カルム「名案だな。」

「えっ……。」

キリトの話に、俺とアリスとイーデイスが同意すると、ユージオとケントから驚いたような声上がる。

ユージオ「あのね……………」

ケント「知ってるだろう？村の掟では……………」

アリス「村の掟では、大人の付き添いなく、子供だけで果ての山脈に遊びに行つてはならない、よ？」

イーデイス「でも、氷を探しに行くのは遊びじゃないわ。お弁当の天命が長持ちするようになれば、村の皆が助かるでしょう？」

カルム「だから、仕事の内だと解釈すれば問題ないと思うな。」

イーデイス「カルムって、そういう事を思いつくと、積極的になるわね。」
まあな。

俺とキリト、アリス、イーデイスの4人は、そういう屁理屈を言う。

キリト「うんうん……………そうだな！まったくその通り！」

ユージオ「……………でもさ、果ての山脈に行くのは村の掟だけじゃなくて、あれでも禁じられてるだろう？」

カルム「あれ、って？」

ケント「禁忌目録のことだろう、ユージオ。」

「……………あつ。」

そういえば、それを忘れてたな。

俺たちは、それを思い出す。

『禁忌目録』……公理教会が定めた法で、最も破つてはならないもの。子供のころから、大人たちにそう教えられてきたのが、禁忌目録だ。

内容は教会への忠誠や殺人の禁止といったもので、これを破れば、整合騎士に捕まる……と大人たちから脅されてきた。

ユージオ「まさかとは思うけど……。」

ケント「禁忌目録を破るわけにはいかないだろう？」

「……………」

ユージオとケントの言葉に、俺とキリトは反論に困つてしまう。

すると、アリスとイーデイスが声を出す。

アリス「ユージオ、ケント……………目録に書かれているのはこうよ？禁忌目録第1章3

節11項……………何人たりとも、人界の果てを囲む『北の山脈』を超えてはならない……………」

イーデイス「超えるっていうのは、果ての山脈の向こう側……………ダークテリトリーに入ることよ。」

カルム「……………洞窟に入るなって、禁忌目録には定められていないしな。」

ケント「おい！」

ユージオ「カルム………!?!」

ユージオとケントが狼狽える中、キリトが一気に畳み掛ける。

キリト「よし、決まり! 次の安息日は、白竜! ……じゃない、氷の洞窟探しだ!」

カルム「キリトの本音が聞こえたような気がするが、まあ、決まりだな。」

アリス「うん!」

イーデイス「じゃあ、朝7時に北の門に集合ね!」

キリト「おう! 寝坊すんなよ?」

アリス「そっちこそ!」

「ハア……。」

俺たちがそう盛り上がっている中、ユージオとケントの2人がため息を吐いた。

第2話 悔恨の別れ

カルム side

あの計画から、3日経った、安息日。

俺たちは、洞窟へと目指していた。

「フフン♪フフン☒」

現在、アリスとイーデイスが鼻歌を歌いながら先導していて、俺、キリト、ケント、ユー・ジオが後ろをついていく感じだ。

何というか、2人のお姫様に付き従う従者みたいだな。

キリト「全く……………」荷物は全部俺たちに持たせるのかよ。」

カルム「良いだろ。」

ユー・ジオ「そうだよ。アリスとイーデイスの2人と遊べるのも、今だけかもしれないからね。」

ケント「そうだな。アリスは村長の娘で、イーデイスはその補佐の娘だ。もっと大きくなったら、神聖術や他の勉強に時間を割かれるんだろうな。」

カルム「確かに、2人が天職を免除されているのは、神聖術の勉強の為だからな。」

ユージオ「それに、村の規範となるよう、男の子と遊ぶのも禁じられちゃうかも。」
キリト「……………あの2人なら、それは無視しただけだな。」

鼻歌を歌いながら、先を歩くアリスとイーデイスの話で盛り上がる俺達。

すると、俺たちの会話が気になったのか、アリスとイーデイスがこちらを向いた。

アリス「こら！」

イーデイス「何4人でココソ話してるのよ。」

キリト「い、いや……………」

カルム「何でもないよ……………」

ユージオ「夕方の鐘が鳴る前には帰ろうって話をしてたんだ。」

ケント「そうだ。」

アリス「そうね……………」

イーデイス「なら、ソルスが空の真ん中まで来たら、引き返しましょう。」

俺たちの言い訳に納得したアリスとイーデイスは、ソルスの位置を確認して、気合いを入れる。

アリス「そうと決まれば……………」

イーデイス「急ぐわよ！」

「「アハハハ……………」」

そんなアリスとイーデイスの姿に、俺たちは笑い、その後を追う。

岩場が露出した道へと来た時、キリトがある話をし出した。

キリト「そういや、知ってるか？この村ができた頃のぼつかりは、偶に闇の国から悪鬼……ゴブリンだの、オークだのが山を越えて来て、羊を盗んだり、子供を攫ったりしたんだぞ？」

アリス「何よ……私たちを怖がらせようとして……。」

イーデイス「知ってるわよ。最後には、王都から整合騎士が来て、退治してくれたんでしよう？」

キリト「それからというもの、晴れた日には、果ての山脈のずっと上を飛ぶ白銀の竜騎士が見えるようになったのです！」

カルム「アハハハ……ん？」

演技じみてるキリトの言葉に苦笑した俺が、ふと空を見上げると、驚きの光景が目に入った。

俺に釣られたアリスとユージオとケントとイーデイス、遅れてキリトが空を見上げると、光り輝く何かが、空を高速で飛んでいた。

イーデイス「まさかね……。」

カルム「まさかね……。」

若干の胸騒ぎを覚えつつ、俺たちは洞窟へと向かっていく。

急な山道を登っていき、洞窟に到着する。

アリス「洞窟ね……………」。

イーデイス「……………ここが、果ての山脈の洞窟かしら？」

2人の言葉通り、俺たちは洞窟に到着した。

中を覗くと、小さな川が洞窟の奥から流れており、その先は暗くて、よく見えない状態だった。

アリス「とにかく……………中に入ってみるしかないよね？」

イーデイス「そうね……………」。

そう言つて、アリスはポケットから植物を取り出し、神聖術を唱える。

アリス「システム・コール。ジエネレート・ルミナス・エレメント・アドヒア。」

「「「おおっ!」」」

アリスが神聖術を使って、明かりを灯し、洞窟の中へと進んでいく。

体制としては、ユージオとケントが先導し、真ん中にアリスとイーデイス、1番後ろに俺とキリトだ。

だが……………」。

カルム「おい、キリト。話が違うぞ。」

ケント「お前、洞窟に入ってすぐに、氷柱があると云ったが、ないぞ。」
キリト「……………そんな事言ったつけ？」

ユージオ「言った！確かに言ったよ！」

俺とケント、ユージオの追及を、目線で誤魔化すキリト……………。

氷柱が見つからなくて、キリトをジト目で見ている俺たち。

すると。

アリス「ユージオ、ちょっと明かりを近づけて。」

ユージオ「うん？分かった。」

ユージオが近づけた明かりにアリスが息を吹きかけた。

すると、その息が白くなっているのが見えた。

ユージオ「あつ……………息が白く……………」

キリト「うへえ。道理で寒いわけだ。」

ケント「なるほどな。」

カルム「この洞窟は、夏でも冬のような環境なんだな。」

イーデイス「カルムの言う通り、きつと氷だつてあるはずよ！」

アリス「うん！もう少し進んでみましょう！」

そう言つて、俺たちは更に奥へと進み始めた。

そのうち、話はこちらに住み着く白竜の話になった。

ユージオ「ねえ……………。本当に白竜に出くわしたら、どうするの？」

ケント「逃げるしかないだろうな。」

カルム「それしかないだろ。」

キリト「大丈夫！白竜だって、氷柱を取るくらい許してくれるさ？」

カルム「もしかしたら、逸話みたいに、寝てるかもしれないな。」

キリト「なら、鱗の1枚くらいは許してくれるよな？」

キリトの無茶な考えに、俺とユージオとケントは呆れる。

キリト「おおい。一体何を考えてるんだよ？」

カルム「いや、そんな事したら、俺たちは、キリトを置いて逃げるしかないだろうって思ってた。」

キリト「だってさ、本物の鱗だけ。それを持って帰れば……………」

すると、ユージオとケントの足元から、何かがひび割れる音がした。

先頭の2人が足元を見ると。

ユージオ「あっ……………」

ケント「これは、氷だ……………！」

カルム「本当にあつたとは……………！」

キリト「やったな！」

イーデイス「そうね！という事は、この先には沢山ありそうね！」

アリス「行きましょう！」

アリスの掛け声と共に、俺たちは更に奥へと向かう。

そして、光があふれるところへ走り、ひらけた場所に出た。

「「「「「……………」」」」」

俺たちは言葉を失っていた……………。

目の前には、美しい氷がずらりと並び、一面が氷の空間となっていたからだ。

その壮大さに思わず、感動してしまっていた。

イーデイス「これ、全部氷よね？」

アリス「これだけあれば、村中の食べ物も冷やせるわね。」

ケント「それどころか、しばらく村を冬に出来るな。」

カルム「確かに……………」

キリト「こんだけあれば、新しい商売を始められそうだな！」

ユージオ「アハハ、キリト……………」。それは天職を終えないと出来ないよ……………」

正気に戻った俺たちは氷の空間を模索しながら、そんなことを話していた。

すると、キリトが急に歩みを止め、周りを見ていた俺とユージオとケントはぶつかり

そうになった。

ケント「どうした？」

カルム「何で急に止まるんだ……………!？」

キリト「何だよ……………これ？」

ユージオ「え？」

俺とキリトの様子がおかしいことに気付いたユージオとケント、そして、アリスとイーデイスもそれに気づいた。

アリス「これって……………」

イーデイス「白竜の骨……………」

ケント「何だって……………!？」

ユージオ「そんな……………!？」

カルム「……………!？」

キリト「ん？」

そこには、白竜であろう骨が鎮座していた。

俺たちがショックを受けていると、キリトが何かに気付いたのか、骨を抜き取る。

キリト「これ……………いっばい傷がついてるし、先っぽも綺麗に欠けてる……………」

ケント「何かと戦ったのか……………?」

ユージオ「でも……………竜を殺せる生物なんているの……………?」

アリス「分かんない……………」

カルム「これ、剣の傷だな。」

イーデイス「え?」

キリト「ああ。……………この白竜を殺したのは、人間だ。」

「……………!?」

俺とキリトの言葉にアリスとユージオとイーデイスとケントは息を呑む。

それもそうだ。

そうなると、こんなことをできる人というのはかなり限られてくる。

アリス「だ、だって……………英雄ベルクーリですら、逃げ帰ったのよ!」

イーデイス「そんな事……………あつ。」

キリト「もしかしたら……………」

カルム「整合騎士……………かもな。」

俺とキリト、アリスとイーデイスは、同じ答えに行き着いたようだ。

ケント「まさか……………公理教会の整合騎士が、人界の守護者たる白竜を殺したのか

……………!?」

ユージオ「分からないよ……………」

アリス「もしかしたら、闇の国にも強い騎士が居るかもしれないわね……………」

イーデイス「でも、それなら、もう闇の国の軍勢が攻めてくるはず……………」

カルム「ああ……………」キリト？」

俺は、白竜が殺された原因を考えていると、キリトが金貨の山から、何かを2本引つ張り出していた。

キリト「滅茶苦茶重いな……………」

ユージオ「キ、キリト!？」

ケント「それらつて、もしかして……………」

カルム「ベルクーリが盗もうとした、青薔薇の剣と、雷鳴剣黄雷だろうな。」

青薔薇の剣と、雷鳴剣黄雷。

それは、ベルクーリが白竜から盗もうとした剣だ。

キリトが、両手で持とうとするが。

キリト「ぬぬぬ……………。ダメだ、重すぎるぜ。」

カルム「4人で、どうにか持てないか？」

ユージオ「どうだろう……………」

ケント「いや……………」

イーデイス「確かに、まだお宝は色々あるけど……………」

アリス「……………とても、持って帰る気にはなれないわね……………」

俺たちは、白竜の事を思い、宝は持って行かない事にした。

キリト「氷なら、良いのかな……………」

カルム「自然に出来た物だ。白竜も許してくれるだろうな。」

その言葉で、本来の目的を思い出し、俺たちは氷を集める。

アリス「綺麗ね……………」

イーデイス「持って帰って、溶かしちゃうのが勿体無いわね……………」

キリト「それで、俺たちの弁当が長持ちするのなら、良いじゃないか？」

カルム「村の皆の為だろ。」

ケント「そうだぞ。足りなくなったら、また取りに来れば良いさ。」

ユージオ「そうだね。……………あつ。そろそろ戻らないと、夕方までには戻れなくなっ

ちやうよ。」

アリス「そうね……………」

イーデイス「あれ……………」

ユージオの言葉に頷いた俺たちは、村に戻る事にした。

だが、アリスとイーデイスが首を傾げる。

アリス「そういえば……………」

イーデイス「私たちって、どこから入ったんだっけ？」

その言葉に、俺たちは顔を見合わせ。

「あっち。」

「こっち。」

俺とキリト、ユージオとケントが、それぞれ違う方向を指差す。

一応、近い方に向かっていくが。

アリス「随分と歩いたわね。」

イーデイス「やっぱり、反対側な気がするわね。」

キリト「近い方だからって、こっちの道を選んだのは……………」

カルム「さて、もう少し歩いて、まだ出口に着かなかつたら、もう一つの出口の方に
行ってみようぜ？ユージオ、まだ明かりは大丈夫か？」

ユージオ「大丈夫だけど……………」

ケント「シツ。……………何か聞こえる。」

キリトが余計なことを言う前に話題を変え、俺の前を歩く先頭のユージオに声を掛けると、ケントが真剣な声でそう言った。

その言葉に、俺達も息を殺した。

耳を澄ますと。

カルム「風の音か……………?」

ユージオ「外が近いんだ!」

ケント「こつちで合ってたのか!」

アリス「ちよ、ちよつと……………!」

イーデイス「待ちなさい!」

キリト「ユージオ、ケント! 急ぎすぎだ!」

出口が近いと気付き、走り出したユージオとケントを慌てて、追いかける俺達。

少し走ると、出口の光が見え、外に出ると、そこには見たことのない光景が広がっていた。

イーデイス「これって……………」

アリス「ダーク……………テリトリ……………」

アリスとイーデイスの言葉が、全てを物語る。

そこは、赤黒い空に、木々や大地は荒廃していた。
まさに、地獄だ。

ユージオ「だ、ダメだ……………!」

ケント「これ以上は……………進んじゃ……………!」

カルム「皆、早く……………!」

ユージオとケントの言葉に頷きつつ、俺は全員に下がる様言うが、その声は鈍い金属音によって、遮られた。

「「「「「!?」」」」」

音に釣られて、上空を見ると、竜に乗った騎士たちが、剣をぶつけ合う。

多分、片方はさつき見かけた流星の正体だろうな。

もう一人は黒の鎧と黒龍と共に空を駆けていた……………。

彼がダークテリトリーの住人だということを理解するのは簡単だった。

ケント「あれは……………」

ユージオ「竜騎士……………」

キリト「公理教会の整合騎士なのか？」

イーデイス「じゃあ……………」

アリス「向こうの方は……………」

カルム「ダークテリトリーの騎士だな。」

キリトたちも戦っている人物がどういった人物たちなのか、理解したようだ。

そうこうしている内に、整合騎士が操る白竜がブレスを吐き、黒騎士に直撃し、大爆

発を起こした。

突然起きた出来事に俺達が驚いたまま、その光景を目撃していると……………ブレスを受

け、身動きが取れない黒騎士に整合騎士が弓を構え、止めを刺そうとしていた。

整合騎士が放った矢は高速で空気を裂き、黒騎士に直撃した。

そのまま、黒騎士は地面に落下し、遅れて黒龍も地面に墮ちた。

俺たちが目を開けると。

カルム「まだ……生きてるのか？」

俺はそう呟く。

黒騎士は、こちらに向けて、まるで助けを求めるかのように手を伸ばす。

それを見たアリスとイーデイスが、ふらりとダークテリトリーの方へ……。

キリト「アリス！イーデイス！ダメだ！」

カルム「早く戻れ！」

「「「!?」」」

正気に戻った俺とキリトは、アリスとイーデイスに叫ぶ。

すると、ユージオ、ケント、アリス、イーデイスは正気に戻るが、アリスとイーデイスは体制を崩す。

俺たちは、慌てて2人に手を伸ばすが。

カルム「アリス、イーデイス！……！！？」

「「「……………!!?」」」

「あっ……………!?!」

そう、アリスとイーデイスの指先が、ほんの数センチ……………ダークテリトリーの土地に触れていたのだ。

『禁忌目録第1章3節11項……………何人たりとも、人界の果てを囲む『北の山脈』を超えてはならない』

先日のアリスとイーデイスが話していた、禁忌目録の項目が頭をよぎった。

俺は首を振り、まだ呆けているキリトとユージオとケントに怒鳴った。

カルム「ユージオ!ケント!早くアリスとイーデイスを起こせ!キリト!上空の整合騎士の様子を見てくれ!」

「……………」

カルム「何をしている!」

ユージオ「ハッ……………!」

ケント「イーデイス、アリス!大丈夫か!?!」

俺の怒声に我に返った3人も動き始めた。

ユージオとケントに助け起こされたアリスとイーデイスは震えていた。

アリス「わ、私達……………!?!」

イーデイス「……………!?!」

カルム「大丈夫だ。手を見せてくれ。」

ユージオ「そ、そうだよ！大丈夫だよ！」

ケント「洞窟を出た訳じゃないんだ……！」

ユージオとケントと共に、アリスとイーデイスの事を見ると、不意に謎の視線を感じて、振り返ると、謎の男が。

ケント「何だ、アレは……?!？」

謎の男「シンギュラー・ユニット・ディテクティド。ID・トレーシング……。コー
デイナー・フィクスト。レポート・コンプリート。」

男は、謎の言葉を言って、そのまま消えた。

何事かと呆然としていたが、この場には居てはいけないと思い、ルーリッドの村へと引き返す。

「「「「……ハア……ハア……」」」」

来た道を駆け足で戻り、ようやくルーリッドの村に戻って来た俺達。

だが、その空気はかなり重い物だった。

その空気を察したキリトが口を開いた。

キリト「さあ、早く家に帰ろうぜ。」

その言葉に俺達も頷いた。

さっきのことは黙っておこう……………。

暗黙でその意図を理解したからだ。

アリス「じゃあ、これは家の地下室に入れておくね？」

カルム「……………ああ。頼んだ。」

アリスの問いかけに、代表して、俺が答えた。

ここで、アリスとイーデイスとはお別れだ。

家の道を歩いていくアリスとイーデイスを見送っていると、2人がこちらに振り返った。

何事かと思い、俺たちが心配になっていると。

アリス「明日のお弁当……………」

イーデイス「楽しみにしてね？」

カルム「ああ。」

キリト「明日も頼むぜ！」

ユージオ「……………うん。」

ケント「ああ……………」

そう言ったアリスとイーデイスは笑顔だったのだが、無理してる様に見える。

そう感じたのは俺だけではなく、ユージオとケントの表情も、翳っていた。

翌朝。

まずはキリトが、ギガスシダーに切れ込みを入れるのを見守っている。

今朝、ユージオとケントの様子がおかしかったのだ。

心配になって、尋ねてみる。

カルム「ユージオ、ケント。……………大丈夫か？」

ユージオ「えっ……………？」

カルム「何か、顔色が悪いぞ。」

ケント「お見通しか……………」

カルム「……………!？」

ケント「どうした？」

カルム「アレは……………!キリト!!」

キリト「……………!？」

視線の先には、白竜が居た。

キリト「白竜……………!？」

ケント「まさか、昨日の整合騎士か!？」

ユージオ「そんな……………! たったあれだけの事で!？」

カルム「不味い……………! 急いで村に戻るぞ！」

キリト「ああ！」

ユージオ「お、おい！」

ケント「キリト！カルム！」

俺とキリトは慌てて村に戻り、俺たちを追いかけるユージオとケント。

村に着くと、既に整合騎士も到着していた。

何事かと、輪を作る村人たちの中にアリスとイーデイスの姿を見つけた俺達は。

アリス「皆……………！」

イーデイス「何よ……………!?!」

カルム「今は離れた方が良さそうだ。」

「「え……………?」」

俺がそう言ったのにアリスとイーデイスは戸惑う。

すると、村の人たちの視線が、整合騎士に注がれる。

アリス「……………お父様？」

イーデイス「……………お父さん？」

ガスフト「村長を務める、ツーベルクと申します。」

ルイス「村長補佐を務める、リデルと申します。」

代表して、アリスとイーデイスの親父さんが話しかける。

2人も、動揺していた。

デュソルバート「ノーランガルス北域を統括する公理教会、整合騎士……デュソルバート・シンセシス・セブンである。ガスフト・ツーベルクの子……アリス・ツーベルクとルイス・リデルの子……イーデイス・リデルを禁忌条項抵触の咎により、捕縛・連行し……審問の内、処刑する。」

「!?」

ユージオ「しよ、処刑……?」

ケント「嘘……だろ……?」

「……………えっ?」

整合騎士から放たれた言葉に俺達は言葉を失った。

だが、整合騎士はそんなことお構いなしに、淡々と事実を述べていく。

デュソルバート「罪状は、禁忌目録第1章3節11項……ダークテリトリーへの侵入である。」

そう告げられ、2人の手からバスケットが落ちた。

そこからの対応は、早かった。

アリスとイーデイスを拘束して、2人の父親が、2人を鎖に繋ぐ。

だが、俺とキリトは黙って見ていられなかった。

カルム「待つて下さい！」

キリト「騎士様！話を聞いて下さい！」

デュソルバート「……………」。

人混みを掻き分けて、大声を張り上げた俺とキリトを見てくる。

カルム「アリスとイーデイスは、ダークテリトリーに入ってはいません！片手を、ほんの少しだけ触れさせただけなんです！」

キリト「そもそも！もし、ダークテリトリーに侵入したって言うのなら、一緒に居た俺たちも同罪だろ！」

デュソルバート「……………禁忌目録に抵触したのは、アリス・ツベルクとイーデイス・リデルのみ……………。貴殿達は禁忌には触れておらぬ。それに、それ以上にどのような行為が必要だと言うのだ？」

カルム「なっ……………!?!」

淡々と告げる整合騎士は、俺たちに興味を失くしたように白竜へと歩み寄った。

キリト「ユージオ、ケント、カルム。力を貸してくれ。」

カルム「キリト？」

キリト「俺が斧で打ちかかるから、その隙に3人で、アリスとイーデイスを……………!」
カルム「分かった。」

ユージオ「キ、キリト？カルムまで……………！」

ケント「だが、それは……………！」

キリトから聞いた作戦を理解した俺は、いつでも飛び出せるようにするが、ユージオとケントは戸惑っている。

キリト「禁忌に反するって？……………知るか！禁忌よりも、アリスとイーデイスの命だ！」

カルム「ユージオ、ケント！それは、アリスとイーデイスの命よりも重要なのか!?!」

ユージオ「……………えっ……………!?!」

ケント「だが……………！」

未だに覚悟ができないユージオとケントを置き、俺とキリトは目配せでタイミングを合わせる。

整合騎士が白竜に乗ろうとした瞬間……………キリトが仕掛けた。

キリト「ハアアア!!……………うおっ!?!」

カルム「キリト!……………くそッ！」

デュソルバート「無駄だ。」

何とか2人の拘束を解こうとするが、俺も謎の衝撃波に吹き飛ばされる。

ユージオ「キリト!?!」

ケント「カルム!?!」

デュソルバート「……………その子供達を、広場の外に連れ出せ。」

キリト「くそッ！」

カルム「離してくれ!!」

整合騎士の命令に従った大人たちに、俺たちは拘束される。

キリト「ユージオ、ケント！頼む！行ってくれ！」

ユージオ「えっ……………」

ケント「えっ……………!?!」

カルム「お願いですから、離してくれ！」

大人「大人しくしろ!!」

カルム「人の命と禁忌目録、どっちが大切だって言うんだ!!」

キリト「ユージオ、ケント！せめてコイツらを退かしてくれ！そうすれば……………!」

ユージオ「でも……………!」

ケント「どうすれば……………!」

ユージオとケントは困惑して、動けなくなる。

俺たちは、整合騎士がアリスとイーデイスを連れ去った後、解放された。

キリト「アリス！イーデイス!!」

カルム「クソッ!!」

何も出来なかった……………！

そんな俺とキリトの慟哭が、ルーリッドの広場に響いた。

冬馬「ハッ!?!」

目が覚めると、見知らぬ部屋で、体を起こすと、点滴が目に入って、隣には、和人が体を起こす。

冬馬（そういえば……………。俺たちは……………ん？何で、泣いてるんだ？）

顔を擦ると、涙が流れていた。

何でかは、よく分からない。

第3話 GGOでの戦闘

シノンside

6月27日

私とチエイスは、GGOでとある作戦を実行していた。

シノン「どうかしら？」

チエイス「数は4人だな。」

現在、私とチエイスが囷になって、4人を引き寄せていた。

ある程度走ると、川が見えて来て、そこで、狙撃体勢を取る。

チエイスも、ブレイクガンナーにバットバイラルコアを装填して、ウイングスナイパーを展開する。

そして、ヘカートとウイングスナイパーから、弾丸とエネルギーニードルが発射されるけど、それを躲してしまった。

反動で吹っ飛んでいる私たちに、2本ずつのバレットラインが注がれる。

撃たれる寸前、車の駆動音が聞こえてきて、相手は顔を上げる。

すると、私とチエイスの背後の森から、一台の車が飛び出してくる。

「「……………!?!」」

そして、私とチエイスの前に着地して、弾丸が車に当たる。運転士は、クラインだ。

クラインは運転しながら銃を撃つ。

クライン「全自動種子島だぜ！」

だが、それすらも躲す。

相手も、かなりの手練れだ。

すると、助手席とその後ろの荷台から、リズベットとラットがそれぞれ、ヴァルキリーというショットガンと、アタッシュショットガンを構える。

リズベット「PK野郎ども！」

ラット「これでも喰らえ！」

当たった場所が、凹む。

更に車は旋回して、荷台に置いてあるターレットにシリカ、その横にヒロミがシュトルムKZから発射する。

シリカ「ウリヤリヤリヤ!!」

ヒロミ「これでも、食らえ！」

すると、1人がスモークグレネードを投げ、周囲が煙に包まれる。

そして、敵は撤退を開始する。

クライン「くそッ！」

シノン「出番よ！」

チェイス「援護する！」

すると、荷台に敷いてあった布が飛び、そこから、カゲミツG4を持つキリト、キリトと同系統のフォトンソードを持つアスナ、ゼットソードを持つカルム、ヘルサイスというフォトンサイスを持つミトが飛び出す。

フォトンサイスとは、最近追加された物で、ゼットソードと同じく、マルチギミックサックというシリーズだ。

鎌にもなり、両手銃にもなる優れ物だ。

4人は、逃げていく相手を追撃していく。

ヴァサゴside

俺は、ドローンで追撃していく4人を見ていたが、武器が気になった。

ヴァサゴ「フォトンソードに、フォトンサイスだと？」

サトライザー「チームB、C。グリッド46に移動し、チームAを援護。グレネードの使用を許可する。」

指示しているボスに、出てもいいかと聞いてみるか。

ヴアサゴ「ハイ、ボス。俺も行って良いか？」

サトラライザー「今からではとても間に合わないだろう。大人しく見ておけ。」

「ま、確かに、今から行っても間に合わないか。」

「なら、見させてもらうぜ。」

閃光、紫鎌、紫紺の剣士、黒の剣士……！！

カルムside

俺たちは、逃げていく4人を追撃していく。

4人は、川に出る。

すると、伏兵が居たらしく、2人がグレネードを撃ってくる。

俺とキリト、アスナとミトの2組に別れて回避する。

そのグレネードは、シノンとチェイスの2人が処理してくれた。

俺は目線で、2人に礼を言う。

相手が2人が撃ってきて、俺とキリトはそれぞれの剣を振るい、弾を切る。

アスナ「任せて！」

ミト「行くわよ、アスナ！」

アスナ「うん！」

アスナとミトが飛び出して、フォトンソードとヘルサイスを振るい、弾を切る。

アスナはともかく、ミトも十分凄いな。

ミトに関しては、命中弾だけ切って、それ以外は躲している。相手がリロードする瞬間を狙って、俺とキリトは加速する。

キリト「ハアアアア!!」

カルム「セイツ！」

俺のゼットソードとキリトのカゲミツG4が相手を捉え、一刀両断する。

残りの2人の方を、アスナとミトが向かうが、スモークグレネードを投げて、周囲を煙が包む。

キリトはアスナと、俺はミトと向かい合い、周囲を警戒するが、煙が晴れた時には、誰も居なかった。

キリト「またか……………」

カルム「逃げられたか……………」

ヴァサゴside

俺が暫く待っていると、ボスの腕の時計から、タイマーが鳴る。

サトライザー「タイムアップか。」

ボスはタイマーを止め、残りの部隊に命令を出す。

サトライザー「全チーム後退。……………グリッド19から離脱しろ。」

俺はさつきまで吸っていたタバコを捨てて、踏み潰し、ボスに聞く。

ヴァサゴ「アレが今日最後の獲物だろ？負け戦で良いのか？ボス。」

サトライザー「……………あんなイレギュラーなスコードロン相手では、訓練にならない。本番の作戦に悪影響が出て困るしな……………行くぞ。」

ボスはそう言つて、その場を後にする。

俺も、指示に従い、後にしようとする。

こんな事を思いながら。

ヴァサゴ（光剣にあの剣筋……………。また会おうぜ、黒の剣士……………紫紺の剣士……………！）
カルム side

作戦を終えて、俺たちは、SBCグロツケンにある酒場へと集まっていた。

クライン「いや〜。すっかりハードなゲームだな！GGOってのは！」

ラット「確かに、圏外……………もといフィールドでは、どこでキルされても文句は言えないしな。」

カルム「確かに。」

ミト「それでも、この緊張感は悪くないと思うわね。」

ちなみに、ミトの衣装は、アスナとほぼ同形状で、色が赤から紫に変更されてくるくらいだ。

すると、シノンとチェイスが話し始める。

シノン「だとしても、あの集団は異常だわ。」

チェイス「確かに。普通、アイテムや金が目当てでPKをする奴が多いが……………」

カルム「アイツらは、俺たちを殺そうとしていたな……………」

ヒロミ「それに、グレネードやスモークも結構使っていましたよね。」

クライン「アレじゃ、赤字じゃないのか？」

キリト「それに、アイツらはかなりの手練れだろうしな。」

シノン「キリトの言う通りね。」

チェイス「アイツらは、かなりの手練れだ。あいつらは現れる時はいつもあんな感じだ。フィールドで孤立してるスコードロンを襲って、皆殺しにして……………まるで狩りをしていくかのような戦法をとるんだ。」

チェイスが、これまで被害に遭ったスコードロンの事を話す。

すると、アスナが話しかける。

アスナ「あの人達って、勝率100%って本当なの？」

チェイス「俺たちが知る限りではな。」

シノン「……………で、とことん変則的なスタイルでな勝てるかもって思って、みんなに協力してもらったんだけど……………。ゴメン、私の作戦が甘かったわ。」

ラット「シノンのせいじゃないだろ。」

ヒロミ「あの人達、簡単に撤退しましたしね。」

クライン「それに負けじやねーよな？ いや……あいつらが逃げたんだ。勝ちみてーなもんだろう。」

リズベツト「正体とか目的とかはさっぱり分かんないままだけどねー？」

クライン「いや、それは……。」

リズベツトの突っ込みにたじろぐクライン。

それをフォローしようと、アスナとミトの2人が動く。

アスナ「せめて、リーダーの名前くらいは分かれば良かったんだけど……。」

ミト「あの中の誰がリーダーかなんて、分からなかったしね。」

チェイス「一応、このゲームには、小型ドローンがあるからな。もしかしたら、遠くから見ていただけかもしれない。」

カルム「そうかもな……。」

ヤバイ、ものすごく眠い。

すると、キリトがラットに寄りかかった。

ラット「おい、キリト！ こんな所で寝落ちするな！」

アスナ「木曜からずっと学校休んで、企業見学に行ってたの。」

ミト「そういえば、カルムもキリトと一緒にだったわよね。大丈夫？」

カルム「正直言うと、眠い。」

シノン「アンタ達、また妙なもんに首を突っ込んでいるんじゃないでしょうね？」

シノンがジト目で見てくる。

そうして、会議はお開きになった。

シノン「皆、今日はありがとう。」

シノンの言葉と共に、クライン、シリカ、ヒロミ、リズベット、ラットがログアウトしていく。

カルム「俺もログアウトするかな。」

ミト「そうね。」

アスナ「じゃあね、シノのん、チエイヌ君。」

シノン「あつ……。待つて、アスナ、カルム、ミト。話があるの。」
「「ん？」」

すると、シノンが俺たちを呼び止める。

何の事だろうかと振り返る。

チエイヌ「実はな、手伝って欲しい事があるんだ。」

カルム「PKスコードロン絡みか？」

シノン「それとは別件……。明日、リアルで会えないかな？」

シノンとチェイスの視線の先には、第4回のB0Bの結果と、第5回のお知らせだ。

ちなみに、アラン、クレハも参加したらしいが、クレハは10位、アランは9位らしい。

アスナ「私は、夕方からなら、大丈夫だよ。」

ミト「私も。」

カルム「俺もキリトと同じ時間で問題ない。集合場所は？」

チェイス「エギルのダイシー・カフェに集まろう。」

シノン「相談内容は、この後メールするから、読んでおいてくれる？」

カルム「ああ。」

アスナ「うん。」

ミト「了解。」

そうして、俺たちは、キリトを起こして、ログアウトした。

第4話 STLとレースと襲撃

冬馬 side

翌日、雨が降る中、和人と共に、ダイシー・カフェに来ていた。

そこには、既に詩乃と英介が来ていた。

詩乃「ねえ、アンタ達……………」。

英介「少し痩せたか？」

和人「そうかなあ？」

冬馬「それで、話って？BOB関連だろ？」

詩乃「ええ。第4回大会で優勝したサトライザーがね……………」。

英介「実は、第1回大会でも優勝している。」

冬馬「へえ……………」。

和人「中継で見た感じ、サトライザーは黙々と戦ってたみたいだな。」

冬馬「それどころか、昨日戦ったPKスコードロンに似ていたな。」

詩乃「そうなのよ。」

英介「俺も、接近戦はするとはいえ、基本はブレイクガンナーでの銃撃だからな。パ

ターンが読まれる。」

すると、詩乃が手で銃の形を作り、こちらに向けてくる。

詩乃「そこで、セオリーにない行動をする奴といえは、アンタら2人だと思つてね。こうして呼んだのよ。」

英介「俺も協力する。頼む。」

和人「それは分かつたけど……。」

冬馬「大分、慣れてきたつぽいな。」

詩乃「まあね……。私には、チエイイスがいる。だから、大丈夫よ。」

英介「シノン……。」

これは、惚気ですか？

そんな事を思っていた。

一つ、気になった事があつたので、聞いてみる事に。

冬馬「そういえば、新川恭二はどうした？」

詩乃「うん、落ち着いてきたみたい。」

英介「また、会いに行くつもりだ。」

和人「そつか……。」

冬馬「死銃事件も、逃亡しているジョニー・ブラックさえ捕まれば、終わりだな。」

英介「……………そうだな。」

すると、また新たな来客が来た。

それは、深澄に明日奈だ。

深澄「こんにちは。」

明日奈「やつほー、シノのん！」

和人「あ、アスナ？」

冬馬「やあ、ミト。」

詩乃「こんにちは。」

英介「すまないな、呼び出して。」

深澄と明日奈が座って、ジンジャーエールを頼む。

冬馬「随分と仲良くなってるな。」

詩乃「実はね、アスナの家にも、ミトの家にも泊まったのよ。」

和人「なぬ……………？俺だって、アスナの家には行ったことないのに……………」

明日奈「何よ、心の準備がとか言って逃げてるじゃないの。」

そんな軽口を叩きつつ、本題に入る。

ちなみに、俺の場合は、何度かミトの家に訪れている。

明日奈「第5回のB o Bの件、O Kだよ。」

深澄「私も。」

和人「アスナやミトにも頼んでたのか？」

詩乃「そ。アンタ達だけじゃ不安だから、制御装置的な意味合いでね。」

冬馬「ひでえ。」

英介「確かに、暴走しそうだしな。」

英介の一言で、傷ついていると、アスナはキリトに、ミトは俺に話しかける。

明日奈「ねえ、キリト君。あなた、痩せたんじゃない？」

深澄「カルムも、痩せた？」

冬馬「そうか？」

和人「そうかな？」

詩乃「ほら！アスナとミトだってそう思ってるでしょ？」

英介「まったく、何をやっているんだ？」

明日奈「例のバイトのせいでしょ？」

深澄「また2人して無茶する。」

「……………あつ。」

「うん？」

仕方ないなという表情でスマホを取り出し、画面を見る。

それを見ると、恥ずかしくなる。

明日奈「体に異常はなさそうだけど……。」

深澄「こつちも。」

詩乃「ね、ねえ……。」

英介「2人して、何を見ている？」

疑問譜を浮かべたチエイイスとシノンがアスナとミトに尋ねると、アスナとミトはスマホの画面を見せる。

そこには、心臓のマークらしき画像が写ったアプリが表示されている。

詩乃「ねえ、何これ？」

冬馬「あまりジツと見るな。」

和人「同じく。」

英介「何?じゃあ、これって、キリトとカルムの……!?!」

明日奈「あたくり!」

深澄「正解。」

詩乃「え!?!どういう仕組みなの……!?!」

冬馬「実はな、俺とキリトのここんところに、超小型センサーがインプラントされている。」

和人「そいつがネットを介して、2人の端末にリアルタイムで送られている。」
英介「何？」

シノンとチェイスが驚いてるよ。

それが、普通の反応だ。

詩乃「何だつてそんな……。あつ、まさか浮気防止システムなのか？」

英介「そうなのか？」

「ち、ちがうちがう！」

明日奈「違うよー！」

深澄「違うから！」

和人「今回のバイトを始める際に、向こうから勧められたんだよ。毎回、胸に電極を張るのも面倒だろうって。」

冬馬「……で、その話を2人にしたら、こんな事に使われる事に……。」

明日奈「いやあ、何か和むのよね。これ見ると、キリト君の心臓が動いてるって思うと、ちよつとトリップしちゃう、っていうか……。」

深澄「私も最近、カラムの心臓の音を聞いているだけでも、大分安らぐのよ。」

詩乃「ア、アスナにミト？危ないよ？」

英介「そこまでするのか……!!？」

うわあ、2人とも、ドン引きしてるよ。

それを聞いてると、恥ずかしくなる。

ていうかミトさん、俺の心臓の鼓動音を聞いて、安らがないで下さい。

詩乃「ま、まあ！アスナにミトも来てくれるのなら、鬼に金棒、トーチカに機関銃よ
！」

英介「気が早いけど、宜しく頼む。」

明日奈「うん。」

深澄「分かったわ。」

そうして、4人が握手しているのを見てみると。

詩乃「さてと……。それじゃ、聞かせて貰おうかしら？」

冬馬「ん？」

英介「お前らが受けているバイトだ。新しいVRMMOのαテストか？」

そう言つて、全員の視線が、俺とキリトに向かう。

俺は、キリトと顔を合わせる。

冬馬「俺たちがテストしてるのは、新しいゲームとかアプリじゃないんだ。」

和人「新型フルダイブシステムのブレインマシンインターフェイスそのものなんだ。

開発してるのはラースっていう会社だ。」

詩乃「聞いたこと無いわね……………」

英介「確かに……………」

明日奈「鏡の国のアリスに出てくる空想上の生き物と同じ名前だね。」

深澄「ああ。確か、豚という説があったり、亀だつていう説がある奴ね。」

詩乃「へえ……………」。そこが、次世代のフルダイブ機器を発売するの?」

シノンのその質問に、俺とキリトは顔を見合わせ、キリトが答える。

和人「いや、どうかな。そもそも、現行のフルダイブシステムとは、かなり別物なんだよな。」

英介「別だと……………?中は一体どうなっているんだ?」

「……………」

チエイスの質問に、もう一度顔を見合わせ、今度は俺が答える。

冬馬「分からないんだ。」

詩乃「……………分からない?」

和人「ああ。……………正確には、知らないんだ、俺たち。」

英介「何……………?」

「……………」

冬馬「機密保持のためなんだろうけど、そのマシンが作るVRワールド内部の記憶は

現実世界には持ち込めないんだ。」

和人「テスト中にどんなものを見て、何をしたのか……………今の俺たちは一切合切忘れてる。」

「……………ええっ!?!」

英介「何!?!」

俺たちの発言に、4人が驚いた表情を浮かべる。

詩乃「一切合切忘れてる……………!?!」

明日奈「まさかとは思うけど……………!」

深澄「何か、弄られてないの?」

英介「どうなんだ?」

そんな風に見てくるので、誤解を訂正する事にする。

和人「違う、違う。そんな風じゃなくて、記憶にロックをかけて、思い出せないようにしてるって感じだ」

英介「……………記憶のロック?」

冬馬「ああ。フラクトライトとの経路を遮断してるから、ただ思い出せないだけだ。」

明日奈「フラクト……………」

深澄「ライト……………?」

詩乃「何なの、それ？」

和人「……………大元の所から解説しようか……………そのマシン……………ソウルトランス
レーターのテクノロジーについて。」

フラクトライトなど、不可解なワードが出てきた結果、4人は混乱してしまった。
俺は、俺よりも理解しているのであろうキリトに説明をさせ、補足をする事に。

和人「なあ、人間の心って、どこにあると思う？」

詩乃「心……………？」

英介「感情ということか？」

明日奈「それって、頭……………脳の事でしょう？」

深澄「そうじゃないの？」

冬馬「脳ってというのは、つまりは脳細胞の塊だろう？じゃあ、脳細胞のどこに心は存
在してるんだ？」

「「えっと……………」」

英介「ん？」

和人「脳細胞を含めた細胞には、その構造を支える骨格があるだろう？マイクロ
チューブルっていう名称らしいが……………」

「「……………はあ……………？」」

英介「つまり？」

俺とキリトの解説に、必死に脳を回転させる4人。

キリトは話を続ける。

和人「チューブ……………つまり、中空の管なんだ。その管の中には封じ込められてるものがある。」

詩乃「何が入っているの……………？」

冬馬「光……………光子の揺らぎ……………それこそが人間の心なんだそうだ。レースによればね……………」

深澄「その光の集合体が人間のソウル……………魂だってこと？」

冬馬「……………ああ。」

和人「そして、その人間の魂かもしれないもの……………レースではこう呼んでいるんだ。フラクトライト、ってな。」

「……………」

俺たちの解説を聞いて、ミト達は、何とか理解しようとする。

そして、アスナとミトが声を上げる。

明日奈「フラクトライトを読み取る機械がソウルトランスレーターってことなのね……………」

深澄「でも、それって、逆もできるじゃないの？」

詩乃「逆？」

英介「どういう事だ？」

明日奈「うん。アミュスファイアは視覚や聴覚の情報を脳に送り込んで、私たちに仮想世界を体感させているでしょ？」

深澄「同じようにソウルトランスレーターも魂に情報を送りこむことができるんじゃないかしら……………」

和人「ああ、その通り……………ソウルトランスレーター……………通称STLはフラクトレイトに短期的な記憶を書き込むことで、見せたいものや聞かせたいものの情報を与える。」

冬馬「それをニーモニック・ビジュアルデータって言うらしいぞ。」

2人の疑問に、俺たちが答える。

俺はとある体験を語る事に。

冬馬「俺たち、ごく初期のテストダイブ中の記憶はある。全然違ったよ。」

和人「ああ……………アミュスファイアが作るVRワールドとは全然違ったんだ。」

詩乃「……………どう、違ったの？」

冬馬「……………その世界を見た時……………俺はその世界が現実世界と瓜二つ……………仮想

世界だとは思えないくらいだったんだ。」

「「「……………!?!」」」

俺とキリトの言葉に驚く4人。

無理もない。

俺だつて驚いたんだ。

あまりにもリアルすぎて、現実世界に居るんじゃないかと思つたくらいだ。

明日奈「でも……………それは本当に安全なものなの？私、怖いよ……………」

深澄「アスナ……………。その話を持つてきたのつて、総務省の菊岡さんなんでしょう？」

和人「……………確かに。あの男には気の許せないところがある。」

冬馬「……………何考えてるか分からないし、色々と怪しいところもあるしな。」

アスナとミトの言葉に、頷く。

確かに、あの腹黒メガネは、何を企んでいるのかがよく分からない。

和人「でもな……………俺は知りたいんだ。フルダイブ技術が一体どこに向かっているの

か……………予感がするんだ。STLには何かある……………まあ、フラクトライトとかニーモ

ニック・ビジュアルとか難しく聞こえるけど……………STLが作るのはリアルな夢みたい

なものなんだ。」

明日奈「……………夢？」

英介「それは……………」

詩乃「一体……………」

深澄「……………どういう意味なの？」

4人の疑問に、俺が答える。

冬馬「例えば、寝てる時、長い夢を見ることがあるだろう？目が覚めた時、2、3時間夢を見ていた気分になさ。」

英介「ああ。良く聞く話だな。」

和人「でも、実際に夢を見ているのはほんの数分だったりするんだ……………。よくレム睡眠とかいうワードを聞くだろうけど、そういう短い時間なんだよ。STLはそれと同じ現象を起こさせるんだ。」

詩乃「ええつと……………」

和人「つまり、人が数分間で何時間の夢を見ているように、少しのダイブ時間で長時間の仮想空間を体験させることがSTLだと可能なんだ。」

深澄「そんな事が……………？」

冬馬「可能だ。それが、STLの最大の機能、フラクトライト・アクセラレーション……………通称、FLAだ。」

「……………」

そんな壮大な話に、4人は感嘆の声を上げていた。すると、ミトが何かに気付いたかのように声を出す。

深澄「……………ちよつと待つて。それじゃ、冬馬達がダイブしてた3日間って、もしかしたら、それ以上の時間を過ごしてたって事……………？」

冬馬「それに関しては分からん。」

和人「ああ……………10日間だったのか、一か月だったのか……………全然覚えてないからな。」

深澄の言葉に、俺と和人は肩を竦めて答えた。

そこら辺の記憶はさっぱりだ。

冬馬「でも、どうにか一つだけ一つだけ教えてもらったことがあるんだ」

和人「テストダイブしていた実験仮想世界のコードネームなんだが……………」

英介「へえ……………なんて言うんだ？」

冬馬「……………アンダーワールド……………それがコードネームさ。」

詩乃「アンダー……………ワールド……………」

深澄「地下の国、って意味かしら？」

明日奈「……………もしかしたら、それもアリスなのかもね。」

アスナがそう言うって、俺たち全員の視線がアスナに集まる。

明日奈「不思議の国のアリスって、最初の私家版は地下の国のアリスっていう名前だったのよね。原題は『Alice's Adventures Under Ground』だったのよね」

「……………アリス……………?」

俺とキリトは、その単語に引つかかった。

様子がおかしい事を、4人は察知したようだ。

英介「大丈夫か?」

和人「ああ……………」

冬馬「そのアリスって言葉で、何かを思い出せそうな気がする……………」

深澄「つまり……………」

和人「……………なんだろう……………今すぐに何かをしなないといけなかったような。」

冬馬「……………ああ。何かを……………何をだ?」

そんな風に考えるが、分からない。

今日この日は、お開きになった。

俺とミトは、キリトとアスナと共に帰る事に。

何せ、ミトはアスナと、俺はキリトと同じ地域に住んでいるからだ。

ちなみに、チエイスはシノンの家に用事があるらしく、一緒に帰った。

深澄「そういえばさ。」

冬馬「うん？」

深澄「冬馬はどうするの？これから。」

冬馬「ああ。」

そう聞かれて、俺は答えた。

冬馬「俺は、東都工業大学に行こうと思ってるんだ。」

深澄「キリトみたいに、アメリカには行かないの？」

冬馬「それも悪く無いと思っただけど、俺は日本で、キリトはアメリカで研究する事を話し合ってる。」

深澄「そうなの？」

冬馬「ああ。」

すると、キリト達が会話に入ってきた。

和人「そうなんだよ。俺はアメリカ、カルムは日本でフルダイブの研究をして、一緒に発展させていこうって話してるんだ。」

明日奈「そうなのね。」

冬馬「そういう事だ。」

そんな風に話していると、いつも別れている公園にまで着いた。

ちなみに、キリトはアスナと、俺はミトと途中でキスをした。
すると、後ろから2人の男が近づいてくる。

??? 「すいませえん。」

??? 「あの、駅ってどこですかね？」

明日奈 「ああ。」

深澄 「駅なら……。カルム、キリト？」

俺とキリトは、顔を見合わせて、アスナとミトを守るように前に出る。

和人 「お前ら、ダイシー・カフェに居た時からずっと居たな。」

??? 「……………やっぱり不意打ちは無理か。」

冬馬 「誰だ？」

??? 「おいおい、そりやねえぜキリトさんにカルムさんよお。まあ、会ったこと無いし知らないのも無理ないか。ザザが捕まったから、俺らが動かないといけないしな。ラフコフの一員としてさ。」

ザザにラフコフ……………。

まさか。

冬馬 「お前……………！」

和人 「ジヨニー・ブラック！」

キリトは背中に、俺は左足の方に手を伸ばす。

そこは、SAOでそれぞれの武器を帯刀していた所だ。

しかし、空を切る。

「ハッ………！」

金本「アハハハ！ないよお！剣、ないよお！」

冬馬「片方はジョニー・ブラックだろうけど、もう1人は誰だ？」

仁良「おいおい、俺を忘れてるのか？俺は、ジョニーの相棒、シーフだぜ！」

冬馬「なっ………!?!」

「そういえば、ジョニー・ブラックとザザとパーティーを組んでいる奴がいるって聞いたな。」

コイツか………!!

和人「お前、まだ逃げてたのか………!!」

金本「オフコース！」

冬馬「シーフ………!!なんでお前がここにいるんだ!?!」

仁良「ジョニーに誘われてよ。ザザの敵討ちって奴？」

金本「しっかし、お2人さん。リアルだとひ弱そうなガキですな！」

冬馬「確かに剣はないさ。でも、お前らの得意な毒武器もないだろ？」

金本「あるよ。毒武器あるよお！」

仁良「悪いな、こつちもあるんだ!!」

そう言つて、プラスチックの注射器を取り出す。

アレは……………死銃!?

だが、金本はともかく、仁良もなんで持つてるんだ!?

仁良「実はよ、3Dプリンターで注射器を作つて、サクシニルコリンは、ジョニーから分けて貰つたんだ。」

マジかよ……………!

すると、2人は笑いながらこちらに向かつて突進してくる。

深澄 side

まさか、死銃の首謀者がこつちにまで来るなんて……………!

しかも、協力者がいるなんて……………!

すると、私はカルムに、アスナはキリトに後ろに押される。

和人「アスナ、ミト!」

冬馬「お前らは逃げろ!!」

ジョニー・ブラックはキリトに、シーフはカルムに向かつていき、注射音が聞こえた。

明日奈「……………ッ!」

深澄「……………!?!」

目を開けると、ジョニー・ブラックとシーフの死銃が、キリトとカルムの左肩に当たり、カルム達の傘が、ラフコフ達の足に突き刺さり、お互いに倒れた。

私と明日奈は、血相を変えて2人に近づく。

明日奈「キリト君!!!」

深澄「カルム!!!」

そこからは、現実感がなかった。

何とかスマホを操作して、救急センターに通報して、救急車を呼ぶ。

数分後、救急車が到着して、一台にキリトとアスナが、もう一台にカルムと私が乗る。

救急救命士「呼吸不全を起こしている！アンビューバッグを！」

深澄「あの、サクシニルコリン……………っていう薬品を注射されたんです。左肩です。」

注射された薬品名を言うと、救命士は矢継ぎ早に指示を出す。

救命士「エピネフリン静注……………いや、アトロピンだ！静脈確保！」

私は、その指示はあまり聞こえなかった。

カルムの顔は、青ざめていた。

深澄「嘘だよね……………。嫌だよ……………こんなので、嫌だよ……………！」

救命士「心停止！」

救命士「マツサージを続けて！」

嘘だよね……………。

嘘って言うてよ……………！

そのまま、キリト達と同じ病院に運ばれていった。

第5話 アンダーワールド

カルム side

俺が目を覚ますと、そこは、森だった。

カルム「何だ、ここ……………」

俺は、小野冬馬。

良かった、記憶喪失ではない事は確かだな。

確か、俺はキリトこと桐ヶ谷和人とシノンこと朝田詩乃と、チェイスこと狩野英介とGGOの事を話していた。

そして、アスナこと結城明日奈とミトこと鬼沢深澄と合流して、しばらく話していたはず……………」

カルム「ミト……………」

急に心細くなるが、それでも記憶の確認を行う。

だが、進路の事を話して以降は思い出せない。

服を見ると、青く染められた半袖のシャツに、白の長袖のシャツだ。

ズボンは、黒だ。

どうなってるのやら……………。

そんな風に呆然としていると。

???「コマンド。……………ログアウト。」

カルム「ん？」

聞き覚えのある声がして、そっちに行ってみると、そこには、1人の男性が。間違いはない。

カルム「キリトか……………？」

キリト「カルム……………！」

やっぱり、キリトだ。

俺はキリトに駆け寄り、事情を聞く事に。

キリト「良かった……………。てつきり俺1人だったらどうしようかと思ってたんだ。」

カルム「俺もだ。……………ここが、仮想世界なのは確かだよな？」

キリト「ああ……………」

カルム「もしかしたらだが、アンダーワールドじゃないのか？ここは。」

キリト「!!」

その発言に、キリトが驚いた表情を浮かべる。

だが、引つかかる。

カルム「でも、変だな。アンダーワールドにダイブする時は、記憶がロックされる筈なんだがな……………」

キリト「それもそうだけど、何で俺たち、アンダーワールドにログインしてるんだ？」
カルム「分からね。キリトとアスナとミトと一緒に帰ってる所までは覚えてるんだが……………」

キリト「じゃあ、菊岡か？」

カルム「多分……………」

確信はないが、可能性は高い。

流石に、移動を促す。

カルム「まあ、いつまでもここに居るんじや埒があかない。町か村でも……………」

俺はそう提案するが、途中で、甲高い音が遮る。

それを聞くと、不思議な光景が見えた気がする。

そこには、6人の子供が並んで歩いている光景が映った。

キリトも似たような反応をして、顔を見合わせる。

カルム「行ってみるか……………」

キリト「そうだな……………」

俺たちは、音がした方向へと向かって歩いていく。

歩き始めてからしばらくすると、開けた場所に出て、そこには、巨大な木が。カルム「でかいな……………」

キリト「ああ……………」

あの木から感じる印象は、まるで孤独…………それが巨木の第一印象だった。

その大きさは他者を寄せ付けず、他者から養分を奪って成長した…………そう思わせた。

俺たちが木に近づくと、人影が。

カルム「キリト、人だ。」

キリト「えっ……………」

そこには、2人の人影が、座り込んで巨木にもたれかかっていた。

恐らく、少年だ。

この世界での、ファースト・コンタクト。

情報を得る機会だと思い、キリトとアイコンタクトをして、話しかける。

カルム「すいません、ちょっと良いですか？」

??「ん？」

声をかけた2人の少年が立つ。

片方は、亜麻色の髪と緑色の瞳で、もう片方は、明るい茶髪に茶色の瞳だ。

すると、2人が話しかけてくる。

「……………君たちは誰だい？」

「どこから来たんだ？」

キリト「(俺達と同じテストプレイヤーか?)」

カルム「(テストプレイヤーか、NPCなのは分からないけど、話してみないとな。)」

俺たちが小声で話しているのを見て、2人は近寄る。

「どうしたの？」

「2人でコソコソ話して？」

カルム「ああ、ごめん。自己紹介が遅れたな。俺はカルムだ。で、こっちが……………」

キリト「キリトだ。あっちの森の方から来たんだが、ちよつと道に迷ってしまった

……………」

俺たちは、2人の質問に答えると、少し驚いた表情を浮かべる。

「あっちつて、森の南のこと？」

「もしかしてザツカリアの街から来たのか？」

カルム「いや、違うんだ。俺たちも、どこから来たのかが分からないんだ。」

「何？分からないって……………今まで住んでいた街もか？」

キリト「……………全然覚えてないんだ。気が付いたら、俺達二人とも森の中にいたん

だ。」

カルム「俺とキリトは知り合いでそういうことは覚えてるんだが、街の名前とかはさっぱりでね……………」

そう言うと、2人は口を開く。

???「驚いたな……………」。話には聞いていたが、見るのは初めてだ。」

???「うん。ベクタの迷子。」

カルム「べ、ベクタの……………」

キリト「迷子……………」

2人の少年の口から出た単語に思わず顔を顰める俺たち。

その反応を見た2人が意味を教えてくださいました。

???「あれ？君たちの故郷とかでも聞いたことない？ある日、突然いなくなったり、逆に野原や森に現れる人のことを僕の村じゃそう呼ぶんだよ。」

???「ああ。闇の神『ベクタ』がいたずらで人間を攫って、生まれの記憶を引っこ抜いて、凄く遠い土地に放り出すんだ。どうやら、全部の記憶を奪われた訳じゃなさそうだな。」

それを聞いて、ヒヤツとする。

一歩間違えれば、不審者扱いされそうだったからだ。

良かった……………。

それにしても……………。

カルム(NPC)にしては表現が豊かだな。でも、テストプレイヤーだと仮定しても、現実の記憶はロククされてそうだしな。どうしたもんかな……………。)

そんな風に思い悩んでいると、キリトが2人に話しかける。

キリト「それでちよつと困っててき。だから一度……………ここを出たいんだ。」

???「……………うーん……………そうだったのか。」

キリトの言葉に少し考え込む2人の少年。

そして考えが纏まったようで……………。

???「この森は深いからね。道を知らなきゃ迷って当然だよ。」

???「だが、大丈夫だ。ここからは北に抜ける道があるんだ。」

キリト「い、いや。そうじゃなくって……………」

カルム「ちよつと待ってくれ。」

キリトの言葉を遮り、そのままキリトと共に少年に背を向け、俺は再びコソコソ話を始めた。

キリト「(何すんだ、カルム!)」

カルム「まあ、待て。仮にここがアンダーワールドで、あの2人も俺達と同じテスト

プレイヤーだったとしても、現実の記憶をロックされてるから、ログアウトの方法を知ってる可能性は低いだろ。」

キリト「……………それじゃあ、他のテストプレイヤーも、NPCと変わらない事か？」

カルム「そういう事だ。ともかく、彼らはこの辺りに詳しいみたいだからどこか泊まれる場所がないか、聞いてみよう。」

キリトも納得してくれたみたいで、再び2人と向き合う。

2人は、コソコソ話していた俺たちに不思議な表情を浮かべていた。

カルム「急に悪いな。こちら辺の土地勘はさっぱりだね。もし良かったらだけど、どこかに泊まれる事を知ってないかと聞きたくて……………」

???「そういう事か……………」

???「いきなり知らない土地に放り出されたんだ。コソコソ話で相談するのも無理ない話だな。」

何でだろう、罪悪感があるな。

恐らく、あの2人は純粋だ。

???「僕の村は、このすぐ北だけど、旅人なんて全く来ないから宿屋がないんだよ。」

カルム「……………マジで？」

???「だが、事情を話せばシスター・アザリヤが助けしてくれるかもしれないな。」

キリト「そ、そうなのか？じゃ、俺達は村に行ってみるよ。」

俺たちはその村に向かおうとするが、2人に呼び止められる。

???「ちよつと待つて！村には衛士がいるから、君たちだけで行つても入れてくれないかもしれない。」

キリト「そうか……………」

???「……………うん。そうだ。俺たちが一緒に行つて説明する。」

カルム「良いのか？」

???「ああ。まだ仕事があるから、それが終わつてからで良いか？」

キリト「こつちがお願いしてるから、気にしないでくれ。」

茶髪の方の言葉に、俺とキリトは問題ないと答える。

???「あと4時間くらいかかるけど、本当にいいのかい？」

カルム「大丈夫だ、待つてるよ。」

???「そうか。それじゃ、その辺に座つて待つて……………そうだ。俺たちの名前を言つてなかつたな。」

キリト「ああ……………」

カルム「そういえば、まだ聞いてなかつたな。」

その事実キリトと俺は忘れていたと思ひ、2人の名前を聞くことにした。

2人は手を差し出し、自己紹介を始めた。

ユージオ「僕はユージオ。宜しく。」

ケント「俺はケントだ。」

キリト「ユー、ジオ……………」

カルム「ケ、ント……………」

その名前に、何かを思い出しそうになったのだが、すぐに靄となって消えた。

ケント「どうしたんだ、2人とも？」

ユージオ「大丈夫かい？」

キリト「いや、なんでもない……………」

カルム「よろしくな、ケント、ユージオ。」

2人に心配されたが、俺たちはなんでもないと誤魔化して、握手をする。

何でだろうか、初めて会うのに、2人の名前を言うのが慣れてる。

キリト「そうだ、俺の事は普通にキリトで良いから。」

カルム「俺も、カルムで良いさ。年も同じぐらいだろうし。」

ケント「そうか？」

ユージオ「分かった。」

こうして、自己紹介を終える。

すると。

ユージオ「そういえば2人とも。」

ケント「お腹、空いていないか？」

「え？」

ユージオとケントの言葉に、俺たちは顔を見合わせる。

第6話 悪魔の樹

カルム side

ユージオとケントから、お腹が空いていないかと尋ねられ、お腹が空いていると答えると、2人はパンを出す。

ケント「ほら。」

カルム「ありがとう。」

ユージオ「キリトも。」

キリト「ありがとうな。」

どうやら、ユージオとケントは、パンを2個ずつ持っていたようで、一個貰えた。何か、アインクラッドの黒パンみたいだなと心で思っていた。

すると、キリトが小声で話しかける。

キリト「(カルム、どう思う?)」

カルム「(どう思うって、ユージオとケントの事か?)」

キリト「(それもあるけど、本当にアンダーワールドなのか?)」

カルム「(分からん。)」

そんな風に話していると。

ユージオ「長持ちするしか取り柄がないんだけどね。」

ケント「一応、渡しておく。」

そう言つて、ユージオとケントはパンの上でSの字を指で描き、それをタッチすると何かの画面が現れた。

それを見た俺とキリトは驚いた。

キリト「(今のつて……………)。」

カルム「(多分、ステータス画面の類だろうな。)」

キリト「(これで確定だな。ここは現実世界でも異世界でもない……………仮想世界。しかもこのリアリティ度は……………間違いない。ここはSTLが作り出したVRワールド、アンダーワールドだ。)」

キリトの言葉に頷きつつ、ユージオとケントの動きを真似て、画面を出す。

SAOにALO、GGOの物と仕様が異なるが、ステータス画面なのは間違いない。

ユージオ「ねえ、キリト、カルム。まさかとは思うんだけど……………」。

ケント「『ステイシアの窓』の使い方を分かっているよな?」

キリト「ス、ステイシア……………?ああ。これの事だよな!」

カルム「大丈夫だよ。」

ユージオとケントの2人の間に動揺しつつも、何とか答える。
ステータス画面………もといステイシアの窓をタッチして、消す。

ユージオ「まだ天命はたつぷりあるから、急いで食べなくて大丈夫だよ。」
ケント「夏だと、とてもこんなに残ってはいないんだがな。」

カルム「へえ………。(夏は物が腐りやすいのは、リアルと同じか。)」
そんな感想を抱きつつ、キリトと共にパンを食べようとするのだが。

「んん?! かった!?!」

何だこれ!?

あの黒パンと同等の硬さだぞ!?

ユージオとケントは、千切って食べているので、俺も2人を見習って、千切って食べる。
る。

キリトは、こりもせずに齧り付いていたが。

ユージオ「美味しくないでしょ、これ?」

ケント「出掛けに村のパン屋で買ってくるんだが、朝早いから前日の残りしかないし、昼に村まで戻る時間もないからな。」

カルム「大変そうだな………。」

キリト「………うん? それなら家から弁当を持ってくればいいじゃないか?」

「……………っ!？」

キリトが何気なく放った一言で、ユージオとケントが絶句していた。もしかして、キリトの奴、2人の地雷でも踏んだのか？

不安になって、2人を見ると。

ユージオ「……………前は、昼休みにお弁当を持ってきてくれる人達がいたんだけどね……………」

ケント「今は……………」

カルム「……………その人たちは、どうしたんだ？」

失礼だろうが、2人に尋ねる。

ユージオ「その人達は幼馴染だったんだ。同じ年の女の子で、僕たちが小さい頃はいつも一緒に遊んでた。」

ケント「天職を与えられてからも、毎日お弁当を持って来てくれた……………。でも……………」

視線を落とし、パンを強く握るユージオとケント。

その顔には、後悔が浮かんでいた。

ユージオ「僕たちのせいなんだ。4人で北の洞窟に出かけた時、間違えて彼女達はダークテリトリーに入ってしまったんだ……………」

ケント「決して、入ってはいけない、禁忌目録に書いてある場所だ。」

カルム（禁忌目録……………。）

禁忌目録という単語に俺が引っかかっている中、ユージオとケントは話し続ける。

ユージオ「次の日、整合騎士が村にやってきて……………彼女たちは央都に連れていかれてしまったんだ。」

ケント「だがな、俺は信じてるんだ。きつとイーデイスとアリスは生きてるって……………。央都のどこで必ず……………！」

カルム（イーデイスにアリス……………？俺は、その名前を知ってるのか？）

2人が告げた名前を聞いた途端、脳裏に何かが浮かぶ。

それは、麦わら帽子に金髪の三つ編みの少女に、灰色の髪のポニーテールの少女。顔は思い出せないのに、俺は、その2人を知っている気がする……………。

そんな風に考えていたからか、ユージオとケントが話しかけたことに、驚いた。

ユージオ「ごめんね。」

「っ!?!」

ケント「急に変な話をして……………。何でだか、2人に初めて会った気がしなくてな……………。」

キリト「そっか……………。」

俺は、ケントのその言葉に、違和感を感じていた。

カルム（……………俺も何でだか分からないけど、ユージオとケントと初めて会った気がしない。何でだ？）

そんな風に考えていると、キリトがユージオとケントに話しかけていた。

キリト「なあ、そんなに気になるのなら、捜しに行ってみたらどうなんだ？その、央都とやらにさ。」

ユージオ「……………村から央都に行くには、早馬を使っても1週間はかかるんだ。」

カルム「だったら、長旅の用意をすればいいじゃないのか？1週間分なら準備するの
もそう難しくはないだろう？」

ケント「……………俺だってそうしたいさ。でも、天職を放り出して旅に出るなんて、禁忌目録に違反してしまう。」

キリト「そ、そうなのか……………」

俺の疑問に悔しそうに俯くケントとユージオ。

やっぱり、心の奥底では、央都に行つてイーデイスとアリスに会いたいと思ってるんだらうな。

カルム「その……………。アリスさんとイーデイスさんが連れていかれたのはいつだ？」

ケント「俺とユージオが11の夏だから、6年ぐらい前だ。」

カルム「ありがとう。」

ケントが水筒を投げてきて、それをキャッチし、礼を言う。すると、ケントとユージオが立ち上がり。

ユージオ「じゃあ、悪いけど、しばらく待っててね。」

ケント「午後の仕事も終わらせる。」

キリト「仕事……ユージオとケントの……天職っていうのか。」

カルム「それって何なんだ？」

ユージオ「ああ、言ってなかったっけ？」

ケント「言っていないな。」

俺とキリトの疑問に、ユージオとケントは振り返る。

その視線の先には、斧が置いてあった。

それを持つのを見て。

カルム「ユージオとケントの天職って、樵なのか？」

ユージオ「うーん……。ちよつと違うかな。」

ケント「まあ、見てろ。」

俺の言葉に答えながら、ユージオとケントは俺たちがもたれかかっている樹の反対側に回った。

それを追いかけてようと、俺たちは立ち上がり、その後を追った。

ユージオが斧を振り上げ。

ユージオ「ふん！」

大きく息を吸い、切り込みに斧を切りつけるユージオ。

どうやら、先ほど聞こえてきた音はこの音だったようだ。

それから数度、ユージオが斧を叩きつけるのを見ていた。

ちなみに、途中でケントと交代していた。

ユージオ「ふう……………」

カルム「凄いな……………」

キリト「これが、ユージオとケントの天職なのか？」

ユージオ「そうだよ。僕たちはこのでっかい樹……………ギガスシダーを伐り倒す事

……………」

ケント「それが、俺たちの天職だ。」

カルム「ギガスシダー？」

ギガスシダーと言えば、ラテン語と英語の造語になるな。

巨人の杉という意味になる。

このデカさを見ると、その名前がしっくりとくるな。

ユージオ「まあ、この樹のことを村の皆は悪魔の樹と呼ぶことの方が多いけどね。」
「悪魔の樹?」

ケント「ああ。この樹は周りの土地からテラリアの恵みを奪うからな。」

カルム「そういえば、この樹の周りには何も生えていないと思つてたけど、それが原因か?」

ユージオ「それだけじゃないよ。この樹がある限り、僕たちの村は麦畑を広げることができないんだ。」

そういう事か。

確かに、そういう事情なら、伐採対象になるのも仕方ないな。

ユージオ「そこで、あの斧………竜骨の斧を央都から取り寄せて、僕たち専任の刻み手に叩かせることにしたのさ。」

キリト「じゃあ、ユージオとケントは7年間ずっと毎日この樹を………?」

カルム「な、7年やってこれだけしか刻めてないのか?」

ケント「………まさか。」

全然刻めていない事はない事にホッとするが、その後ケントが話した言葉に、言葉を失う。

ケント「俺たちは、7代目なんだ。」

カルム「え？7代目？」

ユージオ「そう……………。300年……………代々の刻み手が毎日叩いてやつとここまで来たんだ。」

「300年……………!?!」

300年であれ!?

どんだけだよ……………。

そんな風に呆然としていると。

キリト「なあ、ユージオ、ケント。…………ちよつと俺たちにもやらせてみてくれないか？」

ユージオ「ええつ!?!」

ケント「何っ!?!」

カルム「キリト……………。」

まさかのキリトの提案に驚きの声を上げる横で、俺も静かに驚いていた。

キリト「弁当を分けてもらったわけだし、その分仕事を手伝うのが筋な訳だろう？」

ユージオ「そ、そうかもしれないけど……………。」

カルム「キリトの言う通りだな。禁忌目録には、他者の天職を手伝ってはいけないって決められてるのか？」

ケント「確かに、そんな決まりはないが……。だが、案外難しいぞ。」
心配するユージオとケントを横目に、キリトは竜骨の斧を担ぎ上げる。
キリト「やってみないと……。分らないだろう？」

そんな風に自信満々に答える。

しかし、その直後……………。

キリト「……………いつてええええ!!」

「アハハハハ!!」

カルム「キリト、大丈夫か？」

キリトは、見事に斧を打ち外し、両手が受けた反動で悶えていた。

それを見て、ユージオとケントは爆笑して、俺は苦笑する。

キリト「そんなに笑わなくても……………!!」

ユージオ「ごめん、ごめん！キリトは肩にも腰にも力が入り過ぎだよ。もつと全身の力を抜かないと。」

カルム「次は俺がやって良いか？」

ケント「いいが、大丈夫か？」

カルム「とにかくやってみる。」

ユージオのキリトに対するアドバイスを聞いて、俺も挑戦する。

肩と腰の力を抜き、息を整え、大きく振りかぶり、切れ目に向かって打ち込む。すると、甲高い音がして、ケントから驚いた声が出る。

「どうやら、キリトとは違って、切れ込みにちゃんと入ってるな。」

カルム「ふう……………」

ケント「凄いぞカルム！初めてにしては綺麗な打ち込みだ！」

カルム「ありがとう。」

ユージオ「もしかして、斧を使った事があるのかい？」

カルム「多分な……………。それよりも、ユージオのアドバイスが的確だからな。」
すると、後ろから恨めしげな視線が来る。

キリト「つたく、お前は前から何でもそつなくこなすよな。」

カルム「椰揄うな。」

そんな風に茶々を入れるキリトに竜骨の斧を渡す。

カルム「ほら、お前の番だ。」

キリト「分かってるよ。」

そんな風に、俺とキリトも手伝い、コツを掴んできた。

そして、日が暮れてきた。

カルム「これで、50！」

ケント「よし、これで1000回だな。」

俺が打ち込んだ時に、ケントがそう語る。

キリト「え？もう1000回やったのか？」

ユージオ「うん。僕とケントで500回、キリトとカルムで500回、今日1日で2000回。1日に2000回ギガスシダーを叩く事が、僕たちの天職なんだ。」

カルム「へ、へえ……………。(毎日2000回も叩くのか!?)」

そんな風に絶句していた。

途轍もないな……………。

ユージオ「でも、2人とも筋が良いよ！」

ケント「ああ。おかげで今日は随分と楽だった。」

キリト「いや……………俺なんか全然だよ。カルムの方が上手かったし、多分ユージオとケントと3人でやった方がもっと早く終わっただろうな。」

ユージオ「そんな事はないよ。」

ケント「……………そうだ。こっちに来てくれ。」

そう言つて、ケントはギガスシダーのステイシアの窓を開く。

その数字を見た俺たちは、さらに絶句する。

カルム「ええ……………」

キリト「嘘だろ……?!？」

ギガスシダーの天命を見た俺たちはその数字に思わず声が漏れた。

天命の最大数が30万を超えているのはともかく、残りの数値がその7割方……23万2316も残っていたのだ。

ケント「先月から、50くらいしか減っていないな。」

カルム「えっ?!?1ヶ月でたったの50?!？」

ユージオ「そう……これで分かっただろう? たった半日、仕事が少しばかり捗らなくてもそんなの全然大したことじゃないんだよ。」

キリト「そうなのか……。」

ケントの呟きに、シヨックを受けている俺の横で、ユージオがキリトに仕事の速さなど関係ないのだと説明していた。

そういうことならとキリトも納得したらしく、そのまま俺たちはユージオとケントの後片付けを手伝うことにした。

ユージオ「よし、行こうか。」

ケント「ああ。」

キリト「え? 施錠しなくて良いのか?」

近くの山小屋に竜骨の斧を仕舞うが、施錠しない事にキリトが聞くと。

ユージオ「なんで？」

キリト「いや、盗まれたりとか……………」

ケント「まさか。盗みをしてはいけないうって禁忌目録に書いてあるだろう？」

キリト「そ、そうだったな。」

ユージオ「さあ、早く村に帰ろう。」

カルム（本当に、禁忌目録が絶対みたいな感じになつてるな……………」

この世界の住人の、禁忌目録から絶対に背かない事をそんな風に思いつつ、ルーリツドの村へと向かう。

村の入り口に着くと、ユージオとケントが立ち止まる。

俺たちも何事かと思い、2人が見ている方を向くと、1人の男性がいた。

???「おい、ユージオ！ケント！そいつらは誰だ？」

ユージオ「……………ジンク。彼らはキリトとカルムだ。」

ケント「どうやら、ベクタの迷子でな。」

ジンク「お前ら、本当に記憶がないのか？」

キリト「あ、ああ……………」

ジンク「天職も覚えてないのか？」

カルム「残念ながらさっぱり。」

男性……………ジंकは俺とキリトのことをジロジロと見ながら、そう問いかけてきた。すると。

ジंक「……………まあ、大した天職じゃなかったんだらうな。そのユージオとケントと同じで!!」

カルム「……………」

その発言に、苛ついた。

横のユージオとケントを見ると、少し沈んだ表情を浮かべていた。

ジंक「何の意味もない無駄な仕事をしてたんだらうぜ? その点、俺の衛士という天職は……………」

キリト「剣士。」

ジंक「っ!？」

偉そうに語ってくるジंकの言葉を遮り、キリトは自信たっぷりに語る。

まあ、俺もだが。

キリト「俺たちの天職は……………剣士かな?」

ジंक「剣士? そんな細い体でか?」

カルム「人の第一印象でそう決めてかかるなんて、君は案外心が小さい奴だね。」

ジंक「……………へえ。なら、見せてもらおうか?」

カルム「キリト。」

キリト「ああ。」

その提案に、俺とキリトは乗る。

まず、キリトがジंकという奴から剣を借りて、その後に俺が借り、実力を見せる事に。

キリトが水平斬りを放つと。

キリト「ハアアアア!!」

カルム「!? (ライトエフェクト!?)」

そう、キリトは、片手剣のソードスキル、ホリゾンタルを放つたのだ。

まさかの出来事に、疑問を感じながらも、順番が回ってきた俺はキリトから片手剣を受け取り、人形の方へと向かう。

キリトも先ほどの出来事に疑問を感じたようで少し険しい表情をしていた。

カルム(ホリゾンタルが使えたという事は、できるかもな……!)

俺は、片手剣を上段で構えて、技を放つ。

それは、ホリゾンタルと同様、片手剣ソードスキル、バーチカルを放つ。

人形は、斬れた。

すると、ユージオとケントが近づいてくる。

ユージオ「す、凄いよ！キリト、カルム！」

ケント「ああ！あんな技を使えるなんてな！」

興奮が冷めないユージオとケントは俺たちに賞賛の言葉を送る。

街の衛兵だったのではないかと言われたが、流石に2年近くも剣の世界で戦い続けてきたというわけにもいかず、苦笑いしてごまかす俺たち。

ユージオ「ジンク、もう良いだろう？」

ケント「2人を村に入れるぞ。」

ジンク「あ、ああ……………」

ユージオとケントにそう言われたジンクはかなりショックを受けていた。

どうやら俺たちの剣技に圧倒されてしまったらしい。

その後、教会に向かって行ったのだが。

キリト「……………疲れた。」

カルム「……………俺たちが外の人間だって聞いて、全員話しかけてきたしな。」

ユージオ「ハハハ……………」

ケント「さて、着いたぞ。」

会う村人全員に質問攻めにされ、キリトと俺は疲れ切ってしまったていた。

そんな俺たちを見て、ユージオとケントは苦笑いしていた。

キリト「それにしても、村の人たちは俺たちがベクタの迷子だつてことを疑わないんだな。」

ユージオ「えっ？だつてそうなんでしょ？」

カルム「そうなんだが……普通部外者がそんなことをいきなり言い出したら、疑うものじゃないか？」

ケント「そうなのか……二人とも変なことを気にするんだな。ともかく、シスターを呼ぶぞ？」

ユージオとケントは首を傾げつつ、ドアをノックする。

しばらくすると。

アザリヤ「……何か御用？」

そう言つて、件のシスター・アザリヤが出てきた。

その後ろには、2人の女の子がいた。

その2人は、ユージオとケントを見て反応していたが、ユージオとケントは、目を逸らしていた。

アザリヤ「……御用は？」

カルム「あつ、すいません。実は俺たち、ベクタの迷子らしくて……ここに居るユージオとケントの紹介で、教会なら泊めて貰えないかと話を聞きました……お願い出来

「ませんか？」

「アザリヤ「……………」。」

アザリヤは、こちらをジッと見てくる。

少し、俺が苦手な人かもな。

すると。

アザリヤ「……………良いでしょう。私はシスター・アザリヤと申します。彼女達は見習いのセルカとメアリです。セルカ、メアリ。彼らを空いている部屋に案内してあげなさい。」

「かしこまりました、シスター・アザリヤ。」

シスター・アザリヤの指示に少女達……………セルカとメアリが前に出る。

セルカ「セルカ・ツベルクです。宜しく。」

メアリ「メアリ・リデルです。宜しく。」

キリト「キリトだ。宜しく。」

カルム「カルムです。お世話になります。」

自己紹介を終えて、礼を言うべく、ユージオとケントの方を見る。

カルム「ありがとうな。」

ユージオ「ううん……………」。

ケント「悪い、もう行く。」

そう言つて、逃げるようにその場を後にする。

不安になりつつも、部外者が口出しは無用だと思い、見送つた。

セルカとメアりに教会を案内してもらい、同じ部屋にあてがわれた。

セルカ「はい、枕と毛布。」

キリト「ありがとう。」

メアリ「朝のお祈りが6時で、食事は7時よ。一応見に来るけど、なるべく自分で起きてね。お祈りに遅刻すると……シスター・アザリヤは怖いわよ？」

カルム「ああ。」

あの人、怒らせたなら絶対怖い人だ。

そんな風に思っていると。

セルカ「消灯したら外出は禁止だから気を付けて……………」

メアリ「そのあなたたちもよ！」

子供「あつ！見つかつた……………」

子供「逃げろ！」

「……………アハハハ。」

セルカとメアリの注意に、興味で俺たちをのぞき見しに来ていた子供たちが蜘蛛の子

のように逃げ出した。

その姿に思わず笑みが零れた。

セルカ「全く……。他に分からない事はない？」

キリト「大丈夫。色々ありがとう。」

メアリ「そう……。じゃあ、おやすみなさい。ランプの消し方は分かる？」

カルム「大丈夫だ。」

セルカとメアリの問いに、俺たちは答える。

「おやすみ。」

「おやすみなさい。」

少し微笑んでそう返したセルカとメアリは部屋を後にした。

2人が部屋から離れて行くのを足音で確認した俺たちは大きく息を吐いた。

キリト「取り敢えず、教会のお世話になれて良かったよ。」

カルム「そうだな。だが、問題はこれからだ。」

俺たちは、今後をどうするかを話し合う事にした。

キリト「ここは現実世界じゃない。ステイシアの窓のように、あんなことができるのは仮想世界だけ……。そして、このクオリティの高いVRワールドは、STLが作り出す『アンダーワールド』……。で間違いないよな？」

カルム「そうだと思う。」

キリト「それに、この村。この村の人々は全員NPCじゃない……。あんなに表情豊かなNPCが大勢いるとは考えにくい。」

カルム「だが、あんな大勢の人数がこの世界に来れるほどSTLがあるとも考えにくいだろう?」

キリト「……………これは俺の推測だけ……………。ユージオとケントの話からすると、このアンダーワールドじゃ、内部時間にして300年以上が経っていることになる。そして、あの2人は少なくとも6年以上はここで過ごしていることになる……………もしこの話が全て本当なら、そんなことができるのはただ一つ……………STLのFLAシステムによるものじゃないかって思うんだ。」

カルム「それじゃあ、この村の人たちは、全員フラクトライトで作られたのか?」

俺がそんな風に質問すると、答えが返ってきた。

キリト「ユージオたちはこの世界で一から育ったんじゃないかと思うんだ。多分、生まれたばかりの人……………赤ん坊の魂とかをコピーして、この世界の中で成長させたんじゃないのか?……………言うなれば、人の手によって作られたフラクトライト……………そうとしか考えれば色々納得がいくんだ。」

カルム「……………人の手によって作られたフラクトライト……………人工フラクトライト

ね。」

キリト「信じられないことだけども……。それに何の目的でこんなことを……。見当がつかないな。」

あの菊岡は、何を企んでいるんだ？

その後、FLAやもし天命が全損した場合にはどうなるかを話し合い、寝る事にした。そんな中、俺はある事を思っていた。

カルム（現実世界じゃ、ほんの少ししか経ってないんだよな。ミトは、どうしてるんだろ？）

愛する人の事を考えながら、俺は眠った。

???
side

まさかな。

ギガスシダーの刻み手を見守ってきたのだが、今日現れたあの2人は何だ？
聞いた限りでは、ルーリッドの出身ではないが。

??? 「もしかしたら、あの剣を使えるのかもしれないな。」

俺はそう言って、右手に持つ光剛剣最光と、左手に持つ刃王剣十聖刃を見つめる。

刻み手の方は、青薔薇の剣と、雷鳴剣黄雷を手に入れている。

もしかしたら、アイツらがこの現状を打破し得る存在かもしれないな。

第7話 2本の神器

カルム side

鳥の囀りが聞こえてきて、目を開けると、そこは、昨日寝た部屋だった。

カルム（それもそうか。アンダーワールドに来て、ログアウトする手段が見つかっていないんだしな。）

もしかしたら、起きたらログアウトしてるかもと心のどこかで思ったが、杞憂だったな。

ただ、現実世界に凄く近いアンダーワールドで、錯覚してしまったようだな。

布団から起き上がって、のんびりとしていると、ドアがノックされた。

セルカ「2人とも、起きてる？」

カルム「セルカか？起きてるぞ。」

メアリ「カルム………。起きてて良かったわ。おはよう。」

そう言っつて、メアリとセルカの2人が入ってきた。

起こしに来たそうだな。

カルム「ありがたいな。もうお祈りの時間になったのか？」

セルカ「いいえ。お祈りまでは時間はあるわ。まだ二人で寝てたら、起こすのに時間がかかったらと考えると早めに来たの。」

メアリ「カルムは朝早いの大丈夫だったのね？」

カルム「早く起きるのが習慣かもね……。まあ、キリトはまだ寝てるけど。」
苦笑しながら、キリトの方を見る。

セルカ「それじゃあ、キリトを起こしてくれないかしら。」

メアリ「あと15分くらいでお祈りが始まるから、遅れないようにね。」

カルム「分かった。」

そう言つて、2人は退出した。

恐らく、他の子供達を起こしに行つたんだろうな。

さて、この寝坊助を起こすか。

カルム「キリト。起きろ。」

キリト「ううん……。もうちよつと。」

カルム「それ、起きない奴の言い訳だろ？とつとと起きろ。」

キリト「……。ううう。スグ、後5分……。」

カルム「ハア……。起きろ！」

キリト「うわっ！」

リアルで、直葉に対して言ってるであろうセリフを言って、俺は呆れて布団をひっぺがす。

流石にキリトも起きたようだ。

キリト「カルム？」

カルム「やつと起きたか。早くしないと、シスター・アザリヤやメアリ達に怒られるぜ。」

それから俺たちは支度を整え、礼拝堂へと向かった。

お祈りを済ませ、朝食を頂いた俺たちは今日もユージオとケントの天職を手伝うために、彼らと合流し、ギガスシダーに向かった。

キリト「さてと……。昨日話し合った通り、央都に行く為には、ユージオとケントの協力が必要だな。」

カルム「(だけど、問題は天職だ。あの樹を伐り倒すには、骨が折れるぜ。)」

キリトと交互にギガスシダーに500回打ち込んで、休憩しつつ、ユージオとケントが交互に打ち込むのを見ながら、そう話し合う。

何せ、2000回も打ち込んで、やつと50削れるくらいだ。

このままでは、ユージオとケントが天職から解放できずに、一生を終えてしまう。それだけは、避けたい。

すると、打ち終えたケントとユージオが近づいてくる。

ユージオ「どうしたの、2人とも。そんな気難しい顔をして？」

カルム「何でもないよ。」

ケント「なら良いんだがな。午前の分は終わったから、昼食にしよう。」

ケントの提案に同意して、俺たちも2人とも同じくギガスシダーに寄りかかって、あの硬いパンを出す。

ユージオとケントと合流して、今日は4人分を仕入れた。

「いただきます。」

そう言つて、パンを食べ始める。

本当に、牛乳が欲しい。

そんな風に思っている俺たちを、ユージオとケントが見つめる。

ユージオ「2人にもアリスとイーデイスのパイを食べさせてやりたかったな。」

キリト「アリスとイーデイスのパイ？そんなに美味しかったのか？」

ケント「ああ！皮がサクサクして具がいっぱい詰まつてて、搾りたてのミルクと一緒に世の中にこれ以上美味しいものはないって思えたな……。」

カルム「アリスとイーデイスの天職はパン屋だったのか？」

ユージオ「フフツ、違うよ。2人は教会で神聖術の勉強をしていたんだ。」

俺とキリトの質問に答えるユージオとケントは、どこか嬉しそうだった。

ユージオ「2人は、村始まって以来の天才と言われてて、10歳の頃からもう色んな術が使えたんだ。」

キリト「へえ〜……………」

カルム「それじゃ、セルカとメアリも神聖術の勉強のために教会にいるのか？」

ケント「そうだ。セルカはアリスの妹で、メアリはイーデイスの妹でな、2人がいなくなつた後、シスターになるために教会に住み込みで勉強してるんだ。」

カルム「……………なるほどな。」

そういう事か。

ユージオとケントは、2人なりにセルカとメアリの2人に罪悪感を感じていたんだな。

そんな風に考えていると、キリトが教会にいる子供達について尋ねていた。

2人曰く、彼らは孤児らしい。3年前に村に流行り病が蔓延したらしく、両親を喪つた子供たちを教会が引き取つたらしい。

だが、話はそれだけでは終わらなかつた。

ユージオ「でも、変なことはそれだけじゃなかつたんだ。近頃、良くない話を耳にすることがあるんだ」

キリト「良くない話……………?」

ケント「ああ。街道のずっと南にゴブリンの集団が出たらしくて、人を襲ったり誘拐したりするんだって噂が流れてるんだ。」

カルム「ゴブリンって……………」

アンダーワールドには、人工フラクトライトしか居ないと思っていたが、モンスター類も存在するのか。

それに驚きつつ、話を聞く。

ユージオ「でも、僕はあくまでも噂は噂だと思ってる。だってそうだろ……………。そんなことが起きてるのなら、秩序を守る整合騎士がとつくに退治してるはずなんだ……………」

ケント「しなきやならない筈だ。闇の国の土を触れてしまったイーディスとアリスよ、ずっとずっと悪い奴らなんだから……………」

キリト「……………ユージオ、ケント……………」

カルム（……………そう思いたい、まるで自分に言い聞かせてるみたいだな。）

ユージオとケントの言葉に俺とキリトは何も返すことができなかつた。

2人にとって、アリスとイーディスの件は色々と思っていることがあるのだろう。

整合騎士に対しても、自分に対しても。

ユージオ「だけど、ここ2、3年で教会の裏に新しいお墓が増えたのも確かなんだ。」

キリト「神聖術に人を生き返らせるようなものはないのか？」

ケント「さあな。少し違うが、高位の神聖術には天命の減少を止めるようなものがあるって、アリスとイーデイスが言ってたな。」

カルム「天命の減少を止める？ 傷を塞いだり、失った肉体を蘇らせるとかそんな感じのものか？」

ユージオ「どうだろ？ 教会の古い本にはそういう術が存在するだってアリスとイーデイスは驚いていたけど、詳細までは分からなかったみたいだよ。」

ケント「使えるのも公理教会の凄く偉い司祭様だけでも言ってたかな。」

キリト「公理教会……？」

ユージオ「央都にいる禁忌目録を作った偉い人たちだよ。」

なるほど、神聖術にもランクがあるのか。

高度の術になればなるほど、使用者が限られてくるのはVRMMOらしいと思ったのは、余談だ。

そんなことを思っていると、神聖術を使用するためのコストは何なのかと気になった。

昨日、見たステイシアの窓にはMPらしいパラメーターはなかったので、疑問に思っ

た俺はケントに尋ねてみることにした。

カルム「なあ、ケント。神聖術って、一体何を媒体に発動してるんだ？」

ケント「えっ……何を言ってるんだ、カルム。神聖術の源は空中に存在している神聖力だろう？」

カルム「し、神聖力………?」

またしても聞き慣れないワードが出てきたことにキリトと共にハテナマークを浮かべる。

分かっている俺たちに、もしかしてそれも忘れているのかい?と言葉と共にユージオとケントが説明してくれた。

ユージオ「神聖力っていうのは、ソルス神やテラリア神が空気や大地に満たして下さるものだよ。神聖術を使うにはその神聖力を消費するんだ。」

ケント「だから、大きな術ほど消費する神聖力も莫大なものになっていくんだ。まあ、空間の神聖力を全て消費するような術を使える人はザツカリアの街にもいないだろうがな。」

カルム「な、なるほどな………。そういえばそうだったな。忘れてたよ………!」

キリト「なら、この樹を切り倒せるような神聖術は俺たちには使えないわけだ。」

ユージオ「アハハハ!それができたら、もつと楽ができるのにな!」

ケント「まったくだ。」

何とか忘れたフリをして、誤魔化せた。

キリトが話を变えたおかげで、疑われずに済んだ。

カルム（神聖術の勉強、ちゃんとしよう。）

そう心に誓った。

一方、キリトは、ユージオとケントに尋ねていた。

キリト「この竜骨の斧でコツコツやるしか……そうだ。なあ、ユージオ、ケント。こ

の村には、この斧よりも強い斧はないのか？」

それを聞いたユージオとケントは首を横に振っていた。

ユージオ「あるわけないよ。これ以上といたら、それこそ整合騎士が持っているよ

うな……っ！」

カルム「もしかして……何か心当たりがあるのか？」

ケント「……斧の代わりにはならないとは思いますが……二人に見てもらいものが

あるんだ。」

そう言つて、ユージオとケントは、山小屋の方へと走っていき、しばらくすると、か

なり重い足取りで帰ってきた。

どうやら、背負つてる物がかなり重いらしい。

カルム「2人とも、大丈夫か？」

ケント「ああ……。やはり、重いな。」

ユージオ「そうだね……。」

キリト「2人とも、これは？」

息も絶え絶えの様子ユージオとケントに尋ねるもどうやらそれどころではないようだ。

ユージオに中身を見てもいいか確認を取ってから、俺たちはその包みを開け始めた。

あまりの重さに、俺が二つの包みを持っている間にキリトが包装の紐をほどこいていく。中にあつたのは。

キリト「……剣？」

ユージオ「うん。おとぎ話だと、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷って呼ばれてる。」

カルム「おとぎ話？」

中から出てきたのは、片方は、薄い水色を基調とした剣で、柄の部分には薔薇の装飾が施された片手剣だ。

もう片方は、銀色の刀身に、持ち手の部分は銀色と黒の剣で、柄の部分には雷の装飾が施されている片刃の片手剣だ。

なんでも、『果ての山脈』に冒険に出かけたベルクーリという剣士が白竜の巣で見つけ

たのが、この青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷だと言われているらしい。

そして、6年前にアリスとイーデイスと共にその果ての山脈に行つた際にこの剣をユージオとケントは見つけたらしい。

おとぎ話は実話だったということだ。

ユージオ「まあ、白竜は骨になっていたんだけどね．．．そして、その後にアリスはダークテリトリーに入ってしまったて．．．」

そう語るユージオの表情が昨日と同じように曇つた。

ユージオ「アリスとイーデイスが連れていかれる時、僕はただ見ていただけで何もできなかつた．．．．．」

ケント「助けようとしたんだ．．．．．でも、手も足も動かなかつた。」

「……………」

2人の悔恨の言葉に、俺たちは何も言えなくなっていた。

そんな空気を察して、ユージオとケントは、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷の話に戻した。

ユージオ「ゴメン、また変な話をしちゃつて……………」その剣、見つけた時は持ち上げることもできなかつただけ、どうしても気になつて一昨年夏に北の洞窟まで取りに行つたんだ。」

ケント「少しづつ運んだが、重くて3か月もかかつた。」

キリト「3か月!?そりやまた……………」

カルム「……………なあ、ユージオ、ケント。そこまでしてどうしてこの剣を運んできたんだ?」

俺はどうして、そこまでしてこの剣を持ってきたのかを聞いてみる。

ユージオ「いつか、この剣を振るえるようになったら………」

ケント「そんな感じだ。」

やっぱり、ユージオとケントは未だに諦めていないのだ。

アリスとイーデイスは、きつと生きている。

でも、今の自分達では探しに行けない。

だからこそ、継るための希望が欲しくなったのだろう。

なら、俺たちがするべき事は。

カルム「なあ、2人とも。この剣、使ってみても良いか?」

キリトとアイコンタクトして、尋ねる。

了承を得て、キリトは青薔薇の剣を、俺は雷鳴剣黄雷を使う事に。

だが……………」

キリト「お、重い……………」

カルム「確かに……………」

ユージオ「本当に大丈夫かい!？」

ケント「無理するな。」

それにしても、結構重いな。

ちなみに、雷鳴剣黄雷の鞘は、そこら辺に置いた。

鞘は、黒を基調としていて、金色の装飾がついていた。

キリト「なあ、この2本の剣の素材って何だろうな?」

カルム「ううん……。青薔薇の剣は、氷に近くて、雷鳴剣黄雷は、何だろうな?」

ユージオ「でも、こんな硬度、氷が持つてるのかな?」

ケント「ただ、銀とも竜の牙とも違うのは確かだな。」

何だろうな。

すると、ユージオとケントが声を上げる。

ユージオ「もしかしたらだけど、この剣は神器なのかもしれない。」

「……………神器?」

ケント「ああ。神様の力を借りて形にしたか、あるいは神様が自ら作り出したもの

……………。そういうものを神器っていうんだ。」

キリト「……………なるほど。」

カルム（なら、エクスキャリバーみたいな伝説級武器って事か。）

そんな風に考えつつ、キリトが青薔薇の剣で、俺は雷鳴剣黄雷で試し切りをする。

カルム「ケント。今のギガスシダーの天命はどれくらいだ？」

ケント「えっと……………23万2315だが……………」

ユージオ「ふ、2人とも……………。まさかとは思うけど、その剣でギガスシダーを打とう、なんて考えてないよね？」

キリト「フフフ。そのまさかさ、ユージオ、ケント。」

カルム「禁忌目録にギガスシダーを剣で叩いちやダメ……………なんて項目があるのなら止めるけど？」

ユージオ「……………はあ。前にもこんなことがあったような気がするよ。」

ケント「奇遇だな。俺もだ。」

諦め顔のユージオとケントから了承をもらって、俺たちは剣を振った。

だが、重すぎた故、切り口には当たらず、幹の方に当たり、衝撃波で吹き飛ばされる。

カルム「いって……………！」

キリト「ダメか……………」

ユージオ「言わんこっちゃない。」

ケント「大丈夫か……………!?!」

心配して近寄るケントの目が、驚愕の表情を浮かべる。

それに釣られたユージオも見ると。

ユージオ「嘘だろ……………!?!」

ケント「剣が、めり込んでいる……………!?!」

そう、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷は、ギガスシダーの幹に刺さったままだ。

天命を見てみる事に。

ユージオ「23万2314……………!?!」

キリト「ええっ!?! たったの1!?!」

カルム「いや、1も減ってる。」

ケント「カルムの言う通りだ。今のは切り込んだ場所が悪かった。もし、切り目の中に命中していたら、更に削れていたはずだ。」

そんな風にケントが補足してくれた。

という事は……………!

ユージオ「確かに……………この剣を使えば、ずっと早く樹を削れるかもしれない。」

ケント「……………問題はこの剣を使いこなせるかどうか。キリトとカルムで振るのがやつとだからな。」

カルム「ならさ、ユージオとケントはどうだ? 斧の経験とか活かそうにないか?」

ユージオ「言っただろう? 僕もうまく振れないって……………」

キリト「俺たちが剣を振るコツを教えてやるから試してみろよ。」

ケント「……………うくん……………そこまで言うのなら、やってみるよ。」

そう言つて、ユージオは青薔薇の剣を、ケントは雷鳴剣黄雷を持つ。

やっぱり、2人もきついそうで、両手でやっと持っている感じだ。

ユージオ「お、重い……………！」

キリト「斧を使う時よりももつと体の重さを使って、腕の力だけじゃなく、全身で釣り合いを取るんだ。」

カルム「重心は少し低く、呼吸を整えて……………あとは斧と一緒だ。切り込む先を最後まで見つけて切り込め！」

ケント「……………ああ！」

キリトと俺のアドバイスを受けたユージオとケントが、剣を振るう。

「ハアアアア!!」

だが、幹に当たり、ユージオとケントは反動で吹っ飛ぶ。

2本の剣も、地面に突き刺さる。

キリト「大丈夫か!？」

ユージオ「何とか……………！」

ケント「やはり、無理だ。」

カルム「いい案だと思っただけだな。」

その後、ユージオとケントが、斧を振るっている中、俺とキリトは、どうにかして持てないかと調べた所、オブジェクトコントロール権限が、2本の剣よりも低い事が分かり、どうにかしようと頭を悩ます。

第8話 果ての山脈

あの後、ユージオとケントの手伝いを終え、教会に戻ってきた。

俺が先に風呂に入って、上がり、シスター・アザリヤから許可を貰って、この世界の歴史や神聖術に関する本を読み漁っていた。

カルム「こんなもんか……。」

どうやら、ステイシアという神がこの世界を創り、ソルスが太陽を創り、テラリアが大地を創って、追い出されたのが、ベクタという事だ。

何ともまあ、大方予想通りだった。

ケントが太陽に向かってソルスと言っていた事や、ステイシアの窓が、ステータス画面だったりと、色々と納得する事があった。

神聖術自体は、ALLOと同じく、呪文を述べ、発動する。

ソードスキルに関しては、秘奥義という名称がついている。

これに関しては、これ以上は分からない。

カルム（神聖術に関しては、ケントかユージオの2人に聞いてみよう。）

使えるのなら、使えても損はないしな。

問題は、禁忌目録に関してだ。

カルム（禁忌目録を作ったのは、公理教会の、最高司祭か……。）

人工フラクトライトが作ったのか。

もしかしたら、ログアウトする為には、公理教会に行かないと行けないかもしれないな。

まず、どうやって行くのかは分からないが、最悪の手段として、罪人として連行される事だ。

そうすれば、すぐに公理教会に行けるが、リスクが大きすぎる。

その手段は、なるべく使いたくない。

カルム（でも、ケントやユージオの反応を見る限り、禁忌目録が絶対みたいな感じだけど、イーディスやアリスが破っている。人工フラクトライトは、何かきっかけがあると、破れるようになるのか？）

それにしても、謎が多い世界だな、アンダーワールドは。

すると、部屋のドアが開いた。

キリトが戻って来たのかと思って、振り向くと、キリトだけではなかった。

カルム「あれ？セルカにメアリ？」

セルカ「お邪魔するわね、カルム。」

メアリ「お邪魔します。」

カルム「キリト、まさか……………」

キリト「違うって！俺はただ、セルカとメアリに聞きたい事があつたからだ！」

カルム「本当か？」

メアリ「本当よ！」

セルカ「変な事はないから！」

カルム「……………分かった。2人が言うなら、本当なんだろうな。」

キリト「なんで、セルカにメアリの言葉は信じるんだよ!？」

どうやら、セルカとメアリは嘘を言っていない。

信じるでしょう。

それにしても、キリト、アスナという最愛の人が居るのにも関わらず、女の子をナンパしようというのか？

俺は、ミト一筋だ。

一応、片方のベッドにセルカとメア리를座らせて、もう片方に俺とキリトが座る。

セルカ「それで、聞きたい事って何？」

キリト「セルカとメアリの姉さんに関してなんだけど……………」

メアリ「えっ……………お姉ちゃんの事？」

カルム「ケントとユージオから聞いたただけだな。」

セルカ「えっ?! ユージオとケントが話したの!? お姉様の事を?!」

結構食いつくな。

俺とキリトは驚きつつ、話をする。

キリト「アリスとイーデイスもこの教会で神聖術の勉強をしていて、6年前に整合騎士に連れていかれたって聞いた……………」

カルム「ユージオとケントはその時、自分は何もできなかつたってかなり後悔してるみたいだったけど……………」

メアリ「……………そうなんだ。」

セルカ「ユージオとケント、まだアリス姉さまとイーデイスさんのことを……………」

セルカとメアリは、ユージオとケントが後悔してる事は知らなかつたみたいだな。

2人の表情が少し沈んでいた。

セルカ「……………ユージオとケントが笑わなくなつたのは、やっぱり、アリス姉様とイーデイスさんのせいなのね。」

「ユージオとケントが笑わない?」

メアリ「うん。いつも暗い顔で、あまり話をしようとしないでしょ?」

キリト「あ、ああ……………」

カルム（そう言ってる割には、俺たちの前だと結構笑ってるけどな……………。）

確かに、ジंकと話している時にも、沈んだ表情を浮かべていたな。

という事は、村の人の前では笑わないという事か？

無理してるのかな？

セルカ「だけど、姉さまとイーディスさんが村にいた時はいつでもニコニコしてたの。笑顔でない時を探すのが難しいくらいだったわ。」

メアリ「でも、今の2人は安息日も家に閉じこもるか、森に出掛けるかでいつも一人ぼっち……………」

カルム（……………あのユージオとケントにそんな一面があつたなんて……………。）

よつぽど、過去の出来事が重くのしかかっているんだろうな。

赤の他人である俺は、感じ取れなかった。

キリト「セルカはユージオが、メアリはケントが好きなんだな。」

セルカ「なあ!?!そんなんじゃないわよ!」

メアリ「何言ってるの!?!」

カルム「お前は、もう少しデリカシーを考えろ!!」

セルカとメアリがデリカシーという言葉に首を傾げていたが、気にするなと返した。やべえ、現実でのノリでやつちまった。

そういえば、ここはアンダーワールドだったな。

セルカ「フフフ……でもね。皆、口には出さないけど、私達を見ると、ため息を吐いていたわ。」

キリト「……………え？」

メアリ「私達を見ると、お姉ちゃん達の事を思い出すみたいでね……………。何だか堪らないの。」

カルム「気にしすぎじゃね？」

セルカ「そうかもね。でも、ユージオとケントは私たちのことを避けているわ。」

メアリ「偶に会ってもいつも辛そうな顔をするの……………。お姉ちゃん達がいなくなつたのは私達のせいじゃないのに……………」

2人は涙を流す。

俺は近くにあつた布を手渡した。

それを受け取り、涙を拭うセルカとメアリ。

セルカ「ごめんなさい、取り乱して……………」

キリト「いや……………。それには泣きたい時には泣いた方が良いと思うよ。」

カルム「キリトの言う通りだ。泣き言くらいなら聞くからさ。」

メアリ「うん、ありがとう。少しだけ気持ちが悪くなったわ……………。人の前で泣いた

のは随分久しぶりだったわ。」

セルカとメアリは少しスッキリした表情を浮かべていた。
良かったな……………」。

キリト「それは良かった。それにしても、セルカは強いな。俺なんかこの年でも泣きまくりだぜ。」

セルカ「……………キリト。もしかして記憶が戻ったの？」

キリト「えっ?! い、いや! なんとなくそうだったかなと……………!」

カルム「そ、そんな感じだったってことだよな! うん!」

メアリ「……………そうなの?」

記憶を失っているという設定を忘れていた俺たちは慌てて否定した。

ヤベエ、時折、その設定を忘れるな。

訝しむセルカとメアリに誤魔化すために俺は話を強引に変えた。

カルム「とにかく! 君達は君たちだ。誰も他人にはなれないさ。」

キリト「セルカもメアリも、自分出来る事をすれば良いんじゃないか?」

セルカ「そうね……………」。

メアリ「2人とも、ありがとう。」

俺たちの言葉にどこか納得したセルカとメアリ。

その時、就寝を告げる鐘の音が聞こえてきた。

セルカ「そろそろ戻らないと……………」

メアリ「そうね……………」

そう言つて部屋を後にしようとしたセルカとメアリが立ち止まった。

どうしたのかと思つてしていると、セルカとメアリが尋ねてきた。

セルカ「ねえ、2人とも。」

メアリ「二人は整合騎士がどうしてお姉ちゃん達を連れていったのかも聞いたの？」

カルム「えっ？ああ、聞いたけど……………」

セルカ「私達は知らないのよ。みんな教えてくれなくて……………」

どうするべきか。

キリトの方を見ると、キリトは答えるべきだと思つたらしい。

キリト「確か……………」果ての山脈を抜けて、闇の国に入ってしまったから、つてユージ

オとケントは言つてたぞ。」

セルカ「……………」そう。果ての山脈を……………」

メアリ「そうなのね……………」

カルム「……………」セルカ？メアリ？」

そう呟く彼女達に、どこか引つ掛かりを覚えるも、すぐに表情を変えたセルカとメア

リの言葉に俺は気のせいかと思った。

セルカ「明日は安息日だけど、ちゃんと起きるのよ！」

メアリ「カルムがいるから、私達が起こしに来る必要はないんだらうけど。」

カルム「俺は大丈夫だが……そのソイツは分かんないな。」

キリト「……ど、努力するよ。」

俺がジト目でキリトを見つめ、そんな様子に微笑みながら、セルカとメアリは部屋を後にする。

この時、気づいていなかった。

俺たちは、とんでもない大ボカをやらかした事に。

翌朝。

教会の裏側にある井戸で俺たちは顔を洗っていた。

キリト「ふう……早起きもいいもんだな。」

カルム「だろう？ 休みだからって、寝ているだけなんてもつたないからな。」

俺は、剣道の朝練で早く起きる事が多いので、問題はない。

すると。

アザリヤ「おはようございます。」

カルム「ん？ シスター・アザリヤ、おはようございます。」

キリト「えつと……おはようございます。」

シスター・アザリヤがやってきて、慌てて挨拶する俺たち。

俺たちに用かと思ひ、シスターの言葉を待った。

アザリヤ「キリトさん、カルムさん。セルカとメアリを見ませんでしたか？」

キリト「いえ。今朝は見てませんが。」

カルム「セルカとメアリの2人がどうしたんですか？」

アザリヤ「朝から姿が見えないものでして……礼拝にも来ず、部屋にもいなくて。こんなこと一度もなかったものでして……。」

カルム「そうなんですか？」

キリト「それは……変ですね。」

シスター・アザリヤの言葉に思わず首を傾げる俺たち。

決まりを遵守する傾向があるこの世界の住人からすれば確かに考えにくいことだ。

アザリヤ「もし見かけたら、教えてくれますか？」

カルム「分かりました。」

そう言つて、シスター・アザリヤは再びセルカを探しに行ったようだ。

俺たちも心配になり、捜しに行くことにした。

すると、着替えを終えて教会を出たところでユージオとケントにばったり出会った。

ユージオ「あつ、キリト、カルム。」

キリト「ユージオ、ケント。セルカとメアリを見なかったか？」

カルム「何か、朝から姿が見えなくて、探しに行こうとした所だ。」

ケント「何？そういえば、見てないな。どうしたんだ？」

どうやらユージオとケントも見えていないらしい。

ともかくセルカとメアリが行きそうな場所を探すしかないようだ。

キリト「ユージオ、ケント。セルカとメアリが行きそうな場所を知らないか？」

ユージオ「……………最近、話してないから。」

ケント「俺もだ。」

カルム「そういえば、そんな事を……………ん？待てよ……………まさか!？」

昨日の会話を思い出すと、違和感があったのだ。

まさか……………!

カルム「ケント、ユージオ! 果ての山脈はどこにあるんだ!？」

ケント「果ての山脈……………?」

キリト「そういえば、そんな話をしたな……………! 言われてみれば、様子が変だった……………!

!

ユージオ「まさか、果ての山脈に!？」

カルム「もしかしたらただけど……!!」

ケント「なら、早く連れ戻さないと!」

昨日の会話を思い出したキリトに答える俺の姿に、ユージオとケントも事情を理解したように走り出した。俺たちも2人の後を追った。

ユージオとケントの先導の下、川を辿りながら果ての山脈を目指す俺たち。

その時、何かに気付いたユージオとケントが立ち止まり、俺たちも足を止めた。

ユージオ「この草、踏まれた跡がある……」

ケント「天命も少し減ってるから、しばらく前に誰かが通ったのは事実みたいだな。」
カルム「やっぱリセルカとメアリは果ての山脈に……!!」

キリト「急ぐぞ!」

そう言つて、俺たちは再び走り出した。

岩場を超え、川が流れ出る洞窟へと到着した。

ユージオ「ここだよ。……ここが、果ての山脈だ。」

ケント「昔、イーディスとアリスと一緒に来た洞窟だ。」

キリト「……これが果ての山脈なのか。」

カルム「随分と切り立ってるな。」

胸騒ぎがするな。

ユージオ「僕たちも初めてここに来た時には、驚いたよ。」

キリト「この先が闇の国なのか？」

ケント「ああ。急ぐぞ、2人が危ない！」

そう言つて、ユージオとケントは懐から草を取り出すと。

「システムコール……………ジェネレート・ルミナス・エレメント・アドヒア。」

ユージオとケントが呪文を唱えると、持っていた草に光が灯った。

キリト「ユ、ユージオ、ケント……………それって!？」

カルム「神聖術か？」

ユージオ「そうだよ。」

ケント「と言つても、かなり簡単な方だがな。」

ていうか、気になる単語が聞こえたぞ！

キリト「お、お前ら……………システムとか、意味は知ってるのか？」

ユージオ「意味?……………意味なんてないよ。」

ケント「式句だからな。神様に呼びかけて、奇跡を授けて下さるように呼び掛ける言

葉なんだ。」

カルム「……………一種の呪文の扱いってことか。」

そんな風に納得して、俺たちは洞窟の中へと入って行く。

中は寒かった。

キリト「ううう、寒いな……本当にセルカとメアリはここを通って行ったのかな？」
ユージオ「それは……見て！この氷……」

ケント「誰かが踏んだ跡か……」

カルム「セルカとメアリがここを通ったのは間違いないみたいだな。」

セルカとメアリがこの先に進んだことは間違いないようだ。

確信した俺たちは慎重に進み始めた。

キリト「なあ、ユージオ、ケント。もしセルカとメアリが闇の国に入ったら、その場で整合騎士が捕まえにくるのか？」

ユージオ「……いや。多分、整合騎士は翌日の朝にやってくると思う。」

ケント「6年前もそうだったからな……」

キリト「なら、最悪の場合でもセルカとメア리를助けるチャンスはまだあるんだな。」

カルム「そうだな……。そうなる前に2人を連れ戻せるのがベストだが、最悪の可能性も考慮しておくべきだろうな。」

まさか、昨日考えていた事を実行しそうになりそうだな。

すると、ユージオとケントが足を止める。

ユージオ「……二人とも、何を考えてるの？」

カルム「単純な話さ。もしセルカとメアリが禁忌目録を破ったとしても、一日は猶予があるわけだろう？」

キリト「整合騎士が来る前に、2人を連れて村からさっさと逃げるんだよ。そうすれば、整合騎士から逃げ切れるかもしれないしな。」

ケント「……………そんなこと……………できるわけがない。天職だつてあるし……………」

キリト「元々は俺が口を滑らしたのが原因だ。その責任は取るさ。」

カルム「そういうこと。逃げるのなら俺たちだけで逃げる。ユージオとケントには迷惑を掛けない……………2人がそれでいいっていうのなら、だけどな。」

「……………」

俺の問いかけに押し黙るユージオとケント。

2人もそれが本心ではないのだろうが、禁忌目録に逆らうべきではないという考えが捨てきれしていないのだ。

その時だった。

「きやあああああ!!!」

カルム「今の声……………!？」

ユージオ「セルカ?!」

ケント「メアリ?!」

悲鳴に反応したユージオとケントが駆け出し、慌てて追う俺たち。すると、開けた場所へと出た。

周りのいたるところに氷があることから、ここが昔、ケントたちが来たという白竜の巣だと理解した。

キリト「3人とも、隠れろ！」

キリトに促され、俺たちも隠れる。

そこには、ゴブリンが居た。

キリト「ゴ布林だな。」

カルム「しかも、多いな……………」

キリトの言葉に頷きながら、俺はゴブリンの様子を窺っていた。

どうやらどこかを襲ってきた後らしく、略奪した品を整理していたり、持っている鉈から血が滴り落ちていた。

すると、奥の荷車に誰かが載せられているのが見えた。

カルム（あのシスター服……………。もしかして、セルカとメアリか？）

俺が、セルカとメアリを見つけた事を、伝えようとするが、ユージオとケントが飛び出してしまった。

ユージオ「セルカ!!」

ケント「メアリ!!」

カルム「待て！」

キリト「おい！」

「「「!?」」」

しまった、ゴブリンズに見つかつた。

どうしようかと頭を巡らせていると。

ゴ布林「おい、見ろよ!また白イウムのガキが4匹も転がり込んできたぜ！」

ゴ布林「どうする?こいつらも捕まえるか!ゲヒヒ、イーヒヒヒ！」

カルム(流暢に喋る!?ただのモンスターじゃないのか!?)

すると、ヤバい気配を感じる。

親玉「ああ!?男のイウムなんぞ、連れて帰つても売れはしねーよ!!面倒だ………ここ

で殺して、肉にしろ!!!」

カルム(アレがボスか………!)

他のゴ布林たちよりも二回り背丈が違う、大剣を背負つたゴ布林が洞窟の奥から姿を現した。

俺たちを見て、ゴ布林たちに指示を下し、指示を受けたゴ布林たちは戦闘態勢を取り始めた。

カルム「キリト、行けるか？」

キリト「ああ。ユージオとケントはどうだ？……ユージオ、ケント？」

ケントとユージオを見ると、2人は、恐怖で動けなくなっていた。

キリト「ユージオ！」

カルム「ケント!!」

事態はどんどんと悪化していった……………。

第9話 ゴブリンとの激突

カルム side

ヤバいな、これは。

そう思った俺は、キリトと共に、恐怖で動けなくなっているユージオとケントを落ち着かせる為に、氷柱へと引つ張り込む。

引つ張り込んだが、2人は恐怖で呼吸がとても乱れている。

「はあ………！はあ………！」

キリト「落ち着け、ユージオ！」

カルム「ケントも落ち着け！」

「はあ………！はあ………！はあ………！」

ダメだ、恐怖が勝ってるな。

だが、それでも………。

キリト「聞くんだ、ユージオ、ケント！」

ユージオ「キ、キリト………。」

なんとか2人は正気に戻り、早口で作戦を2人に伝える。

キリト「いいか。俺とカルムで何とかゴ布林達を倒していく。」

カルム「だから、これから俺たちは3つ数えから、前衛の4匹を体当たりで突破する。その隙に、篝火を倒してくれ。」

ユージオ「あ、ああ……………」

キリト「この洞窟は薄暗い。だから、その草を失くすなよ？篝火が消えたら、床から剣を拾うんだ！」

カルム「そして、ゴ布林たちに隙ができたら、セルカとメアリを連れて急いで村まで逃げるんだ！いいな？」

ケント「だ、だが……………あんなに大きいゴ布林を相手にしたら死ぬぞ!」

カルム「……………なら、セルカとメアリを見捨てるのか!」

「……………っ!」

その言葉に、2人は息を呑む。

カルム「お前らは、アリスとイーデイスを助けたくて、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷を必死に持ってきたんだろ!ここで、セルカとメアリを失いたくない筈だ!」

ケント「だが、俺もユージオも、剣なんて振ったことが無いんだぞ!」

カルム「大丈夫。斧と同じ様なもんさ。それに、俺たちは剣士だ。守ってみせる。」

その言葉に、腹を括ったのか、ユージオとケントの表情から、迷いと恐怖が消える。

キリト「行くぜ……………！1、2の、3！」

キリトの合図と共に、俺たちは氷柱から飛び出した。

俺たちは、ゴブリンに体当たりを敢行して、突破する。

篝火を倒して、周囲を暗くする。

キリト「カルム、ユージオ、ケント！」

キリトから剣を投げ渡され、抜刀する。

名を知らないが、力を貸してくれ。

剣を構えて、手下のゴブリンと相對する。

カルム「キリト！手下は俺たちがどうにかする！だから、親玉を倒せ！」

キリト「おう！」

カルム「ユージオ、ケント！振り回すだけでいい！早くセルカとメアリを！」

ユージオ「そんな事言っちゃって……………！」

ケント「来るぞ……………！」

俺の指示に困惑するユージオとケント。

その2人に、ゴブリンが近づいてくるが、途端に怯える。

ケント「もしかして、その草の光に弱いかもしれない！」

ユージオ「そうかも……………！」

カルム「牽制頼む！」

ウガチ「ちいい！このイウムのガキ共が！この蜥蜴殺しのウガチ様と本気で戦うつもりか！」

キリト「……………違う。戦うじゃない……………勝つんだ!!」

キリトがウガチというゴブリンと相対している。

俺は、手下のゴブリンを無力化していく。

集団戦は慣れているからな。

武器を剣で弾き、背後からの攻撃を躲し、蹴りでゴブリンを飛ばす。

ゴブリン「こ、この白イウムが!?!」

カルム「……………!遅い!!」

ゴブリンの一体の攻撃を躲し、右手を飛ばす。

だが、俺の視界に、血が入った。

ゴブリン「ぎやあああ?!お、俺の……………俺の腕がああ!?!」

カルム（血!?!という事は、このゴブリンも人工フラクトライトなのか!?!）

まさか!?!

ただのモンスターって訳じゃなさそうだな！

どうする、手が出せないぞ。

すると。

ユージオ「キリト！」

ケント「大丈夫か!？」

ユージオとケントの叫び声が出て、キリトの方を見ると、キリトが左腕を抑えて動けなくなっていた。

「どうやら、出血してるな。」

ウガチが激昂して、キリトに追撃しようとしていた。

カルム「お前の相手は、俺だ！」

俺はすぐさまキリトとウガチの間に入り、ウガチの大剣を受け流し、ソードスキルを放つ。

よし、ノックバックする筈……………!!

ウガチ「邪魔だ！」

カルム「何!?!ウワツ!!」

ソードスキルを放つてもノックバックせず、そのまま反撃を受ける。

何とか、剣を戻して、直撃は避けられたものの、氷柱にぶつかる。

その時、肺の空気が抜けるかのような激痛が俺に走った。

カルム「グツ……………!!（嘘だろ……………!!）?仮想世界なのに、現実世界……………いや、それ

以上の痛みだ………!」

余りの痛みに、俺は動けなくなる。

それでも、キリトは動ける様になったが、俺と同じく氷柱に叩きつけられる。

カルム「キリト!逃げろ!!」

キリト「グッ………!?!」

不味い、キリトの奴、痛みに悶えてるのか!?

俺は剣道をやっている、お父さんが力加減を誤って、壁に叩きつけられるのはたまにあるのだ。

だけど、キリトは剣道を、小さい頃にしかやってない!

このままじゃ………!!

ケント side

ケント(不味い………!!このままじゃ、カルムとキリトが………!!だが、怖い………!!)

大きいゴブリンの攻撃で吹き飛ばされた二人を見て、俺の体は震えてしまっていた。

隣のユージオも似た様な状況だ。

あの二人でさえ勝てないのに、俺とユージオがどうこうできる相手じゃない。

そう思った時、俺の頭に………6年前のあの光景が蘇った。

イーディスとアリスが連れていかれ、何もできなかった自分の姿が……………。
そして。

カルム『お前らは、アリスとイーディスを助けたくて、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷を必死に持ってきたんだろ!? ここで、セルカとメアリを失いたくない筈だ!』

カルムの言葉が蘇る。

ケント(そうだ……………。行かないと……………!このままじゃ、6年前と何も変わらない!何もできずに、2人を失うなんて……………!)

そう思った途端、俺の体は無意識のうちに駆け出していた。

それは、ユージオも同じだった。

ケント「これ以上、何も失いたくない!」

ユージオ「もう絶対に……………嫌なんだ!!!」

俺とユージオは見様見真似でゴ布林へと斬りかかった。

ユージオ「キリト……!!!」

ケント「カルム……!!!」

キリト「ユージオ!?!」

カルム「ケント!?!来るな!」

ウガチ「ぬう!?!この……………ガキがあ!?!」

俺たちの剣は奴に受け止められてしまったが、諦めずに何度も撃ち込んでいく。ユージオ「今度こそ、僕が、守るんだ!!」

ケント「俺は、俺の想いを貫く!!」

絶対に、あの2人を守る!

その想いを貫いてみせる!

だが、剣が折れてしまい……………!

カルム「逃げろ、ケント!!」

キリト「逃げろ、ユージオ!!」

ウガチ「死ねえ!!」

「があ……………!?!」

カルムとキリトの叫び声が聞こえたが、俺たちはゴブリンの大剣を躲すことができず、その一撃を受けてしまった。

切られた痛みが体に走り、俺たちは氷柱へと叩きつけられた。

カルム side

ウガチの大剣に薙ぎ払われたユージオとケントは、氷柱に叩きつけられる。

キリト「ユージオ!!」

カルム「ケント!!」

嘘だろ、おい!

俺は咄嗟に氷と剣をウガチに向かって投げて、牽制する。

キリトと共に、ケントとユージオの側へと駆け寄る。

キリト「ユージオ、ケント! しっかりしろ!」

カルム「おい! しっかりしろ!」

傍に駆け寄ったキリトと俺は、ユージオとケントの腹部から流れる夥しい血の量に言葉を失った。

口からも吐血する2人だが、俺たちに向けて必死に手を伸ばそうとしていた。

ユージオの手をキリトが、ケントの手を俺が握る。

キリト「ユージオ、ケント! 気を持って!」

カルム「何であんな無茶を……!?!」

ユージオ「こ、子供の頃……約束した、ろ? 僕たち4人とアリスとイーディスと……」

ケント「生まれた日は違えども、死ぬ日は一緒だって……! グフッ! ……今度

こそ、まも、る、んだ……!」

ユージオとケントは、そう言っただけで気を失う。

すると、脳裏にとある光景が浮かぶ。

それは、幼いケントとユージオとアリスとイーデイスと一緒に過ごした事を。

カルム（そうだ！俺もケント達と一緒に過ごしてんだ！アリスとイーデイスが連れて行かれた時に、助けられなかった……！何が守るだ、剣士じゃないケントとユージオに守られるなんて……！俺は、浅はかだったのか……！）

俺はそれを思い出して、立ちすくむ。
すると。

ウガチ「さあ……お前達も、死ねええええ!!！」

「っ!？」

ウガチが迫り、意識を切り替えて、覚悟を決める。

キリト「でヤアアア!!」

カルム「ハアアア!!」

近くに落ちてる剣を拾って、キリトと共にウガチへと斬りかかる。

さつきまでと違う俺たちの動きにウガチは咄嗟に反応できずにギリギリで攻撃を受け止めた。

ウガチ「ちい!?!白イウムのガキ共が！調子に乗るなアア!？」

カルム「煩い！」

俺たちは、一旦距離を取る。

キリト「俺たちは、イウムじゃない！」

カルム「俺たちは、劍士だ!!」

呼吸を整えて、劍を構える。

カルム（確かに、コイツも人工フラクトライトかもしれない！でも、ケントにユージオ、メアりにセルカを、絶対に守る!!）

俺は、そう決意する。

すると。

ウガチ「だから、何だ!!」

その声と共に、ウガチが突っ込んできて、2人がかりで大劍を受け止め、受け流す。

ウガチが体勢を崩したと同時に、俺とキリトは、同時にソードスキルを放つ。

キリト「ソードスキル……ソニックリープ！」

カルム「ソードスキル……ホリゾンタル・アーク！」

キリトの一閃は、ウガチの首を飛ばし、俺の2連撃は、右手を斬り飛ばし、腹を斬る。ウガチの遺体は、そのまま倒れる。

接近してくる手下に対して。

キリト「お前らの親玉の俺たちが討ち取った！まだ挑んでくる奴がいるのならかかってこい！」

カルム「死にたくないのなら、さっさと闇の国へと帰れ！襲ってくるっていうのなら、こつちも手加減はしない!!」

ゴブリン「……………に、逃げろ!」

指揮官を失い、烏合の衆と化したゴブリン達が、俺たちが入ってきた方とは逆の方向へと去っていく。

ソイツらを見殺して、ユージオとケントの元へと向かう。
血は依然として流れている。

キリト「くそっ!どうすれば……………!」

カルム「ちよつと待つてろ!!」

俺はすぐさまメアリとセルカの2人の元へと向かい、縄を解く。

カルム「メアリ、セルカ!目を覚ませ!」

メアリ「うん……………?」

セルカ「カルム……………?」

カルム「起きたばかりで悪いけど、失礼!!」

メアリ「きゃあ!」

セルカ「何!?!」

驚く2人を無視して、キリト達の元へ。

セルカ「な、何……………!?!」

メアリ「どうしたの……………!?!」

キリト「ユージオとケントが大怪我をしたんだ!」

カルム「急ぐぞ!」

キリトが、どうにか止血をしようとしていた。

状況を把握した2人が見るが。

メアリ「……………無理よ……………」

セルカ「こんな傷、私たちの神聖術じゃ……………!」

キリト「諦めるな!」

カルム「頼む!!」

メアリ「……………でも、私は、お姉ちゃん達じゃない。」

セルカ「姉さま達みたいになれない。私にできることなんて……………」

そう呟くメアリとセルカに、俺たちは諦めずに声をかける。

キリト「セルカ、メアリ! ユージオとケントは君たちを助けに来たんだ! アリスと

イーデイスじゃない、君たちをだ!」

セルカ「えっ……………!?!」

カルム「頼む! 今ここにいるのは、アリスとイーデイスじゃなくて、君たちだ! 力を

貸してくれ!!」

セルカ「……………!!メアリ。」

メアリ「うん。これじゃ、普通の神聖術じゃ間に合わない。」

俺たちの叱責に覚悟を決めたセルカとメアリはその方法を教えてくれた。

カルム「どうすればいいんだ!?!」

セルカ「危険な高位神聖術を試してみるしかないわ。二人の力を貸して!」

カルム「ああ!」

キリト「どうするんだ!?!」

メアリ「カルムは私と、キリトはセルカと手を繋いで!!」

2人の指示に従い、俺はメアリと、キリトはセルカと手を繋ぐ。

セルカ「もし失敗したら、全員命を落とすかもしれない。」

メアリ「覚悟はいい?」

キリト「もちろんだ!」

カルム「やれ!」

「……………システムコール。……………トランスファ・ヒューマンユニット・デュアリビティ、

ライト・トウ・レフト!!」

「……………!?!」

すると、俺とメアリの手からケントに、キリトとセルカの手からユージオに、光が流れていく。

俺たちは、虚脱感に襲われる。

カルム（なるほどな………！これは、確かに危険な高位神聖術だな………！）
セルカとメアリの言葉に納得しつつ、2人の傷跡を見る。
すると、塞がっていく。

セルカ「2人とも………大丈夫？」

カルム「問題ない。もつと2人に天命を送ってやれ。」

キリト「俺も大丈夫だ。」

メアリ「分かったわ。」

そう言ったけど、ヤバイ。

これ以上は限界な気がする………！！

すると。

???『カルム、ケント、待ってるわ………。』

カルム「………!!？」

声が聞こえてきた。

しかも、キリトの方もだ。

この声は、イーデイスなのか……………？

イーデイス『私とアリスは、いつまでも待っているわ。……………セントラル・カセドラの最上階で、……………皆を待つてる……………。』

声が聞こえなくなった途端、俺は意識を保てなくなり、倒れる。

メアリ「カルム!？」

セルカ「キリト!？」

2人の声を最後に、意識が途絶えた。

???

とんでもない物を見たな。

まさか、ルーリッドの村の近くにまで闇の軍勢が来ていたとは。

しかも、それを、負傷しながらも、首領を倒したあの2人。

そして、あの2人に呼びかけるかの様に、セントラル・カセドラルの最上階に埋まっているあの2人の欠片が、力を貸すとはな。

???

「最高だな。」

どうやら、俺の見立てに狂いはなかった。

アイツらが、あの忌まわしき最高司祭を打ち破り、人界を守る存在に。ゴブリンを倒した事で、アイツらの権限値は上昇しただろう。

これで、刃王剣が使えるのかを確かめられるな。
俺は、あの2人の少女が村に向かって駆け出すのを見ながら、俺も後にする。

第10話 旅立ち

カルム side

あの戦闘から、2日経った。

俺たちは、セルカとメアリが呼んできてくれた村の人により、教会へと運び込まれた。目が覚めた後、村長とシスター・アザリヤにこつ酷く叱られた。

まあ、セルカとメアリが、果ての山脈に行ったのは俺たちのせいだとなったからな。事実だし。

ユージオとケントも無事、目を覚まして、ウガチの一件を聞かれた。

俺たちが倒したと言うと、半信半疑の人が多かった。

ちなみに、ジンは、俺たちの技を見ていた影響もあり、信じられない表情をしつつも、信じないとは言っていないかった。

昨日は、天職を免除され、泥の様に眠りについた。

そして、今に至る。

カルム「それにしても、キリト。」

キリト「ん？」

カルム「何か、俺たちの権限值が上昇していないか？」

キリト「確かに。」

そう、あのゴブリンとの戦闘の後、俺たちの権限值は上昇していたのだ。

しかも、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷の数値を上回っていた。

そんな事を話していると、ユージオとケントが打ち終えたらしい。

キリト「傷は大丈夫なのか？」

ユージオ「うん。丸一日休んだから、良くなったよ。」

カルム「よかった。ほら。」

ケント「助かる。」

元気そうなユージオとケントの返事にもう大丈夫だと思った俺は水筒を投げ渡した。

それをなんとか受け止めたユージオとケントにキリトが気になっていたことを尋ねていた。

キリト「なあ、ユージオ、ケント。お前ら、覚えてるか？」

ユージオ「えっ……何を？」

カルム「2人とも、言っただろう？俺とキリト、ユージオ、アリス、ケント、イーデイスがずっと昔から友達だったって。」

ケント「ああ。覚えている。だが、変だな。カルムとキリトとは会ったばかりだから、

そんな筈が無いのにな。」

そう言うケントの表情は、何かを懐かしむような顔だった。

それは、ユージオも同じだった。

ユージオ「僕たち6人は、この村で生まれて、一緒に育つて、アリスとイーデイスが連れ去られた時も一緒に居たはず……………」

ケント「ああ……………」

キリト「そうか……………」

カルム（生死の境を彷徨ったから、幾つかの記憶が混濁したのか？）

そんな事を考えていると、とある事を思い出したので、聞いてみる事に。

カルム「そういえば、ケント、ユージオ。メアリとセルカが2人に神聖術を使っている時、女の人の声がしなかったか？」

ケント「いいや、その頃、俺たちは意識を失っていたからな。」

ユージオ「2人は何を聞いたの？」

カルム「……………いや、気のせいだ。悪いな。」

キリト「さて、仕事をしようぜ！」

ケント「斧だ……………。2人とも、何を持っているんだ？」

俺たちは、そう言って、俺は雷鳴剣黄雷を、キリトは青薔薇の剣を構える。

権限値が上昇して、使えるようになった。

キリト「俺たちは……………」

カルム「これで行く！」

「ええええっ!？」

驚きの声を上げるユージオとケントを放置し、俺とキリトは互いに獲物を振ることで感触を確かめていた。

ユージオ「2人とも……………!」

ケント「使えるのか!？」

キリト「ああ。」

カルム「まあ、見てろって。」

まず、キリトが先に行く。

キリトはホリゾンタルを放ち、ギガスシダーの切り込みに当たる。すると、切り込みが大きくなる。

キリト「な？」

「……………」

カルム「凄まじいな。」

次は俺だ。

俺も、雷鳴劍黄雷を構え、ホリゾンタルを発動する。

もう一回、切り込みが大きくなる。

「嘘………。」

キリト「すげえな………。」

この雷鳴劍黄雷も、青薔薇の劍に負けず劣らずの劍だな。

ユージオとケントが、ギガスシダーの天命を確認すると、20万台にまで下がっていた。

呆然とする2人に、キリトはユージオに青薔薇の劍を、俺はケントに雷鳴劍黄雷を渡す。

キリト「ほら、ユージオとケントもきつと振れるさ。」

カルム「やってみ。」

ユージオ「うん………。」

ケント「やってみる………。」

劍を受け取ったユージオとケントも、前のように劍に振り回されることなく、片手で劍を扱っていた。

自分が自在に劍を操れることに驚き、青薔薇の劍と雷鳴劍黄雷を見つめるユージオとケント。

その瞳は何かを決意した色を映していた。

ユージオ「キリト、カルム……………2人に頼みがあるんだ。」

キリト「頼み？」

ケント「俺とユージオに、剣技を教えて欲しい！」

カルム「ケント……………」

2人の言葉に、俺とキリトは、驚く。

すると、2人の口から、言葉が紡がれる。

ユージオ「僕はアリスを連れ戻したい！僕のせいで……………アリスとアリスの家族は不幸になった。この6年間、あの時のことを忘れられないでいた……………ずっと後悔してたんだ!!なんで僕はアリスを助けられなかったんだらうって!?!」

ケント「俺も、イーデイスとイーデイスの家族を不幸にしてしまった。あの時の事を、ずっと忘れられなかった……………後悔していた!俺は、イーデイスを助けられなかった……………!」

ユージオ「……………僕は、強くなりたい!もう二度と、同じ過ちをしない為に!」

ケント「……………俺も、自分に嘘を、後悔なんて残さない為に、強くなりたいんだ!無くしてしまった、大切なものを取り戻す為に!」

「だから、2人のような剣士になりたいんだ!!」

「……………」

ユージオとケントは、己の心に秘めた想いを全て吐いて、語る。

俺とキリトの答えは、決まっていた。

俺とキリトは目配せをする。

キリト「分かった。教えるよ。」

カルム「俺たちの技術、剣技を叩き込む。きついぞ。」

ケント「上等だ！」

ユージオ「ああ！」

俺たちは、2人に手を差し伸べて、2人は笑いながらそう答える。

すると、ケントが話す。

ケント「そういえば、2人の流派は一体なんなんだ？」

カルム「流派……………」

流派って言っても、SAOからの産物だしな。

この世界の流派は、いまいち分からない。

すると。

キリト「アインクラッド……………」

ユージオ「え？」

キリト「俺たちの剣は、アインクラッド流つて言う剣術だ！」

カルム「俺もそうだ。」

ケント「アインクラッドか……。2人が住んでいた街なのか、人の名前なのか、よく分からない名前だな。」

ケントが苦笑しながら、そう答える。

それからの日々は、2人に剣技を教える日々が始まった。

剣の握り方や構え、体重移動の仕方。

キリトが杖を振るうのを真似して、動きを覚えていくユージオとケント。

俺は、剣道やこれまでの対人戦でのスキルを叩き込んでいった。

素振りだけでは、いざ対人戦になった時に、癖を読まれるからな。

手加減しつつも、2人に攻撃と防御のイロハを教え込む。

キリトも指摘してくれた。

そこで驚いたのは、2人の才能だ。

最初こそ、俺たちが勝っていたが、徐々に勝てるか怪しくなってきた。

まさに、砂が水を吸収するかの如く。

そんな日々が続いたある日、ギガスシダーの天命を確認すると、6738にまで下がっていた。

キリト「良いぞ！」

カルム「行け、ケント、ユージオ！」

ケント「ああ！」

ユージオ「うん！」

俺たちは、2人に声をかけ、2人は青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷を構える。

同一のソードスキル、ホリゾンタルが発動する。

「でヤアアアア!!」

気合いと共に放たれた秘奥義は、ギガスシダーの残りの天命を吹き飛ばし、その後少しして、ゆっくりとギガスシダーが傾き始めた。

安全地帯に移動しながら倒れていく巨体を眺める。

そして、完全に樹が倒れきった衝撃と土埃から顔を腕でガードし、視界が晴れる。すると。

ユージオ「夢みたいだ……………」

ケント「ああ……………」

カルム「現実だろ？」

呆然とする2人にそう返す俺の目の前には、ギガスシダーの巨体が横たわる。

すると、2人は声を出す。

ユージオ「ううん、そうじゃなくって……。こんな日が来るなんて、夢にも思っ
てみなかったんだ。」

ケント「だから、俺は運命なんて言葉を信じてなかったんだ。」

カルム「ケント……………」

キリト「ユージオ……………」

ユージオ「キリト、カルム…………」。多分、僕達はずっと待っていたんだ。」

ケント「6年間、2人がこの森にやって来るのを…………」。

「……………」

その言葉を聞いて、俺たちは笑みを溢す。

カルム「そうかもな…………。きっと俺たちも。」

キリト「ユージオとケントに会うためにこの森で目覚めたのかもな。」

「「フフフ…………。アハハハハハハ！」」

そう言っつて、俺たちは笑い合った。

実に、気分が良い。

その後、ギガスシダーが倒された事は、村の人達に知れ渡る。

まあ、あんな巨体がいきなり倒れたら、誰もが気付くだろうな。

その夜、総出で宴が始まった。

村の中央では櫓が生まれ、村の人たちは踊ったり、演奏を披露したり、並べられた料理を食べたりして盛り上がっていた。

その光景を少し離れたところで眺めながら、俺は料理の一つである豚串と蒸かし芋を食べていた。

さつきまで村人に質問攻めされまくっていたので、一休みしていると。

メアリ「あれ？一人？」

カルム「うん？……ああ、メアリ。ケントはユージオと一緒に村長に呼ばれて、行っちゃってさ。キリトはあっちに居るぜ。質問攻めにされて、疲れたよ。」

メアリ「それはそうよ。」

そう言つて、隣に座る。

キリトの方を見ると、キリトの方にはセルカが居た。

メアリは、少し残念そうな顔をしている。

カルム「ケントに話があるのか？」

メアリ「……ううん。それにしても、あの悪魔の樹を倒すなんて！」

カルム「ケントとユージオの努力の賜物だ。俺たちはちよつと手伝っただけ。」

メアリ「そっか……。私も、もつと勉強して、シスターとして、神聖術の腕を磨かないとね……。」

すると、メアリはポツポツと話し出す。

メアリ「私が果ての山脈に行ったのは、少しでもお姉ちゃんの近くに行きたくて……自分が行けるところまで行きたかった。」

カルム「……………」

メアリ「これ以上進めないってところまで行ってみて分かったの。私はお姉ちゃんの代わりになれないって。」

カルム「……………」

メアリ「ええ。確かめたかったの……………」。私とお姉ちゃんは本当に違うのかって……………」

それが、メアリの本心か。

俺は、空を見上げながら、メアリに言葉をかける。

カルム「……………」でも、メアリは凄いや。」

メアリ「え?」

カルム「あんな暗い洞窟を一人で行くなんて、なかなかできないことだと思うぞ。俺の知ってる中でも、女性であんな深くまで行けるのは全然ないぞ。」

メアリ「……………」そう、かな?」

カルム「ああ……………」。それにケントを救ったのだって、メアリだろ?」

メアリ「…………でも、あれはカルムがいたから。」

カルム「いいや。俺やキリトじゃあの神聖術は使えなかった。あの場に君がいたから、ケントは救えたんだ。メアリは、メアリができることをしたんだ。そのことにもつと自信を持つてもいいじゃないか？」

メアリ「私にしかできないこと……………？」

戸惑うメアリに、俺は続ける。

カルム「メアリには、メアリなりの才能がきつとある。人間、同じ才能を持つ奴なんて、居ないんだ。だから、メアリなりの才能を少しずつでも伸ばしていくのが良いんじゃないか？」

メアリ「うん。」

少し、柄にも無い事を言つて、恥ずかしくなるな。

すると、村長と補佐、ユージオとケントがステージに現れた。

村長はガスフトさん、補佐はルイスさんというらしい。

ガスフト「みんな！ちよつと聞いてくれ！」

ガスフトさんの一言で、全員が注目する。

ルイスさんが全員に聞こえるように言葉を張り上げながら、説明を始めた。

ルイス「ルーリッド村を拓いた始祖の大願は遂に果たされた！悪魔の樹が倒されたの

だ！」

「「「おー!!!」」」

ガスフト「それを成し遂げたのは、オリツクの息子であるユージオと、ジェイスの息子のケントだ!!」

「「「おおおおおおおー!!!!!!!!」」」

村長の言葉に村人から賞賛の声と拍手が送られ、俺たちも一緒に拍手していた。

ガスフト「掟に従い、見事天職を果たしたユージオとケントには、自ら次の天職を選ぶ権利が与えられる。」

ルイス「さあ、なんなりと次なる道を選ぶがいい。」

「「……………」」

ガスフトさんとルイスさんから次なる天職を宣言するように言われたユージオとケントは黙ったままだった。

村人たちは何も言わず、2人の言葉を待ち続けていた。

そして、腰に据えていた青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷を確かめるように握ったユージオとケントは決心したようだ。

口を開き、宣言した。

ユージオ「僕たちは……………剣士になります！」

「「「「「?!」」」」」」

ケント「腕を磨いて、一人前の剣士になって……………必ず央都に登ります!」

ガスフト「っ?! ユージオ、ケント……………お前達、まさか……………?!」

「……………。」

ルイス「ガスフト。」

ガスフト「そうだな、理由は問うまい。次の天職を選ぶのはお前達の権利だからな……………。ルーリッドの長として、ユージオとケントの新たなる天職を剣士として認める

!」

「「「「「お……………!!!!」」」」」

村長の宣言に村全体で歓声が沸き上がった。

ユージオとケントに拍手を送りながら、メアリを横目で見ると、ホツと胸を下ろしていた。

ユージオとケントの宣言に盛り上がったルーリッド村では、その日夜通しで宴が行われた。

ケント side

俺達がそう宣言して、その次の早朝。

俺とユージオは、メアリとセルカの元へと向かう。

ユージオ「セルカ。」

ケント「メアリ。」

セルカ「うん……………？ユージオ。」

メアリ「ケント。どうしたの？」

俺たちは、2人に用件を話す。

ユージオ「僕たちは、央都に行つて、アリスとイーデイスを取り戻す。」

セルカ「……………！姉さまを……………？」

メアリ「お姉ちゃんを？」

ケント「ああ。この六年間、ずっと考えてきたんだ。だが、どうすればいいのか俺たちは分からなくて……………。だが、キリトやカルムと出会つて、やっと2人を取り戻す希望が見えたんだ！」

ユージオ「あの二人と一緒になら、何でもできると思うんだ……………君達と君達の家族を苦しめて、本当にゴメン。」

セルカ「ユージオ……………」

メアリ「ケント……………」

それを聞いて、セルカとメアリは泣き出しそうになっていた。だが、言葉を紡ぐ。

セルカ「それが、ユージオ達にしか出来ないことなのね？」

ユージオ「ああ。」

メアリ「……………なら、待つてるから。」

ケント「メアリ……………」。

セルカ「私たち、待つてるから！」

メアリ「だから、6人で絶対に帰ってきてね！」

ケント「ああ！約束だ！」

ユージオ「うん！」

俺たちは、約束する。

絶対に、イーデイス達を連れ帰ってみせる！

カルム side

ユージオとケント、セルカ、メアリの約束を見ていた俺たちは、拳を突き合わせる。

その昼、倒れたギガスシダーを眺めていると、謎の男が現れた。

カルム「誰？」

???「俺の事はどうだって良い。それより、お前に、この世界を救えるのかな？」

そう言っつて、逃げ出した。

気になった俺は、ソイツの後を追う。

必死に追い続けているが、中々に追いつけない。

森を少し入ったところで、ソイツは止まった。

俺は、話しかける。

カルム「どういう意味だ？アンタは、一体何を知っているんだ!？」

???'「さあて、どうだろうな？」

そう言うと、消えた。

俺は駆け寄って、周囲を見渡すが、誰もいない。

何だったんだ……………。

そう思うと、強烈な気配がする。

振り返ると、そこには、一本の剣が。

青い剣で、柄の部分には太陽の装飾が施された剣だ。

鞘は、雷鳴剣黄雷とほぼ同じだった。

カルム「これを、抜けて事か……………?！」

俺はその剣に近づき、持ち手の部分に手をかける。

すると、抵抗をするかのように、動かなくなるが、俺は力を込める。

カルム「なるほどな……………!」

ケント達を助ける為にも、諦めてたまるか!

そんな事をして、しばらくすると、剣が抜けた。

抜刀してみると、3つの丸が刻まれていて、片刃の剣だった。すると。

???「その剣は、刃王剣十聖刃だ。それをどう使うのかは、お前次第だ。」

先ほど会った人物の声がして、周囲を見てみるが、誰も居ない。

地面に刺さったままの鞘も回収して、納刀する。

カルム「刃王剣十聖刃か………」

どういふ剣なのか、よく分からないな。

だが、抜けたという事は、使えるという事になる。

これで、キリト達を守ってみせる。

そう決意して、ルーリッドの村へと戻る。

ルーリッドの村に戻った時に、キリト、ユージオ、ケントの3人に質問攻めにあつた。その数日後、準備を終えた俺たちは、ルーリッドの村の入り口で待っていて、そこに、ユージオとケントが合流する。

ユージオ「お待たせ、キリト、カルム！」

ケント「待たせたな。」

カルム「大丈夫だ。」

キリト「おう！」

ユージオ「それじゃ、行こうか？」

ケント「出発だ。」

キリト「ああ。」

カルム「行こうか。」

ユージオとケントの言葉と共に、俺たちは村を離れて、ザツカリアの街へと向かう。カルム（ようやく前進か。2人曰く、ザツカリアはかなり大きい街らしいな。）すると、少し湿った風が吹いてくる。

ユージオ「ちよつと風が湿ってるね。」

ケント「もしかしたら、雨が降るかもしれない。進める所まで進んでみるか。」

カルム「そうだな。……………どうした、キリト？」

ユージオとケントの提案に頷きつつ、キリトを見ると、呆然としていた。

キリト「……………いや、幸先が悪いなって感じてさ。」

カルム「雨雲か？」

キリト「悪い、気のせいだ。」

ユージオ「何してるの、2人とも？」

ケント「置いてくぞ！」

「……………ああ！」

ユージオとケントに答えながら、俺とキリトも2人に合流する。
少し胸騒ぎがするが、どうにかなるだろう。

そうして、俺たちは、真相の解明のために、前進する。

第11話 オーシャン・タートル

深澄 side

冬馬と和人が、ラフコフの残党に襲われて、病院に運ばれ、緊急手術が行われている。私と明日奈は、ただ、2人が無事に帰ってくる事を祈るしかなかった。

直葉「明日奈さん！」

侑斗「深澄！」

洋子「深澄ちゃん！」

明日奈「直葉ちゃん……………叔母様……………」

深澄「叔母さん……………侑斗……………」

そこには、直葉に侑斗、和人のお母さんの翠さんに、冬馬のお母さんの洋子さんがいた。

何で、直葉と一緒に侑斗まで？

そう思うと。

侑斗「丁度、直葉と稽古をしていたら、急に連絡が来て、俺も飛んできたんだ。」

直葉「うん。」

そういう事ね。

私たちは、手術室前の椅子に座って、手術が終わるのを待っていた。

気がつくくと、翌朝になっていて、漸く、手術が終わったそうだ。

医師が説明してくれる。

医師「2人とも、危険な状態からは脱したと言えるでしょう。」

翠「そうですか……………」

洋子「良かったわ……………」

医師「しかし、心停止が5分強にまで及んだので、脳に何かしらのダメージを負った可能性があります。」

直葉「えっ!？」

侑斗「マジかよ……………!？」

医師「思考能力、運動能力、あるいはその両方に障害が残る可能性があります。最悪の場合、このまま目を覚さない可能性も……………」

その言葉に、私と明日奈は、絶句した。

冬馬が目覚まさないなんて……………。

医師「詳しい事は、MRI検査を行なってみないとなんとも……………。早急に、設備が整った大病院に移動させるべきかと。手続きはこちらで。」

翠「分かりました。」

洋子「皆、ちよつと待ってて。」

翠さんと叔母さんは、手続をするため、その医師に着いていく。

私、明日奈、直葉、侑斗は、椅子に座っていた。

侑斗「まさか、こんな事になるとはな……。」

直葉「そうだね……………」。

侑斗と直葉がそんな風に話していると、誰かが近づいてくる。

菊岡「明日奈君、深澄君、直葉君、侑斗君。」

直葉「菊岡……………さん？」

深澄「何でアンタがここに？」

菊岡「その件なんだが、キリト君とカルム君の親御さんはどちらに？」

侑斗「……………？」

菊岡さんの言葉に、私たちは顔を見合わせる。

菊岡さんから提案されたのは、2人の治療に関してだ。

菊岡「和人君と冬馬君の治療について……………実は世界で唯一の先端設備の施設があるんです。そこで、2人の治療を行いませんか？」

翠「ほ、本当ですか……………？」

洋子「大丈夫なんですか？息子が、あなたの事を少し胡散臭いと言っています。」
菊岡「そんな風に思わせてしまったのは申し訳ない。しかし、2人は私たちにとつても大事な人間です。ここで彼らを失うことは大きな損失に繋がります。」

「……………」

菊岡「桐ヶ谷さん、小野さん。どうか、息子さん達を、私にお任せ頂けませんか？」
菊岡さんの説明を受けて、翠さんは困惑、洋子さんは少し疑っている表情を浮かべる。
すると、2人が、こちらを向いてくる。

翠「あの……………結城さん、兎沢さん……………あなた達の意見を聞かせてくれる？」

「……………えっ？」

洋子「……………どうすれば良いのかは、あなた達の意見を聞いてから決めたいの。」
そう言われて、私と明日奈は顔を見合わせる。

明日奈「……………私は、特に反対する理由はありません。」

深澄「……………治る可能性があるのなら、それに懸けてみたいのです。」
その答えを聞いて、翠さんと洋子さんは顔を見合わせて。

翠「……………どうか、息子をお願いします。」

洋子「……………私からも、お願いします。」

菊岡「……………分かりました。」

そうして、2人は、所沢の防衛医大病院へと運ばれた。

それからの、6月29日、所沢の防衛医大病院へと、明日奈と共に来ていた。すると、直葉と侑斗の2人も来る。

直葉「お待たせしました！」

侑斗「悪い、待たせたか？」

明日奈「ううん。」

深澄「それで、翠さんは？」

侑斗「車を停めてくるから、先に面会の手続をしておいてくれだそうだ。」

深澄「そう……。」

明日奈「キリト君とカルム君は、この病院に入院してるのね？」

直葉「はい。昼のうちに、この病院に搬送されたそうです。」

そんな風に話して、中に入り、受付用紙に名前を記入して、直葉と侑斗が受付の人に渡す。

直葉「面会をしたいのですが……。」

侑斗「これで良いですか？」

受付「はい。桐ヶ谷和人さんと小野冬馬さんですね。少々お待ちください。」

すると、受付の人の表情が変わり、上の人に確認をしてくると言つて、その場を去り、

言われたのは、面会謝絶だと言われた。

翌日、スイルベーンのリーファとハヤトのプレイヤーホームに、私、アスナ、リーファ、ハヤト、シノン、チェイス、ユウキ、シリカ、ヒロミ、リズベット、ラット、ノーチラス、ユナ、フィリア、レイン、パラド、レイモンド、フィリップが集まっていた。

リズベット「会えなかった？」

ラット「どういう事だ？」

アスナ「特殊な機器で治療しているから、回復するまでは、面会謝絶だって……………」

ミト「そう言われたわ……………」

シリカ「でも、そんな事ってあるんですか？」

ヒロミ「家族なのに、面会どころか、顔も見せてくれないなんて……………」

シノン「何だか引つかかるわね。」

チェイス「確かに。」

パラド「どうなってんだ……………」

シリカ、ヒロミ、シノン、チェイス、パラドがそう言っつて、私たちも話を再開する。

アスナ「そうなの。」

ミト「私たちもおかしいと思っつて、調べてみたんだけど……………」

リーファ「データ上は確かに入院をしているんですが……………」

ハヤト「キリトとカルムの2人を乗せた救急車は、その病院には到着してないんだ。」
ノーチラス「何？」

ユナ「つまり、キリトとカルムの2人は、その病院には実際には居ないって事？」

ユウキ「菊岡さんからの連絡は？」

アスナ「電話はずっと圏外だし……メールも返ってこないの。」

ミト「総務省に問い合わせたら、昨日から出張中だつて。」

フィリア「それって、絶対おかしいよ！」

レイン「あの人、絶対に何かしてるわよ！」

レイモンド「菊岡誠二郎か……。」

フィリップ「随分と、胡散臭い人だからね。また、2人に何かをさせようとしてるのかな？」

あの人、一体何を企んでいるの？

すると、シリカとヒロミが声を上げる。

シリカ「そんな！」

ヒロミ「2人は、意識不明の重体なんですよ！」

シノン「意識不明……って、外から見た状態よね？」

チェイス「魂その物にアクセスするマシン使えば、行けるかもな……。」

アスナ「それって……………！」

ミト「ソウル・トランスレーター……………！」

私とアスナの言葉に、シノンとチエイスが頷く。

そういうえば、ダイシー・カフェで、シノンとチエイスも話を聞いていたわね。

シリカ「ソウル……………」

ヒロミ「トランスレーター……………？」

リズベツト「何よそれ？」

ラツト「聞いた事ないぞ。」

アスナ「人の魂を読み取る事が出来るフルダイブマシンなの。」

ミト「それを作ったのは、ラースという企業んだけど……………」

リーファ「ラースって……………」

ハヤト「2人がバイトしてた企業だな。」

その発言に、私とアスナは驚く。

アスナ「2人とも、知ってるの？」

ミト「そうなの？」

リーファ「いや、詳しい事は知らないです。」

ハヤト「ただ、会社自体が六本木に存在してるのは確かだな。」

ユウキ「それじゃ、六本木の何処かに、2人が居るってこと?」

フィリア「可能性としては十分あるわね。」

レイン「そうね……………」

そこに、とあるデータを出す事にする。

アスナ「実は、キリト君とカルム君に繋がっている細い糸が、一本だけあるの。」

パラド「……………何だよ、それ?」

ミト「シノンとチエイスにはこの間説明したよね。2人の、これ。」

シノン「ああ……………」

チエイス「例の心拍モニターか。」

レイモンド「何だよそれ?」

フィリップ「……………重くないかい?」

レイモンドとフィリップの言葉は無視して、私とアスナは話す。

ミト「ずっと圏外になっているんだけどね……………」

アスナ「遡って解析をお願いしてるの。」

シノン「誰に?」

ミト「カナ、ユイちゃん、どう?」

ユイ「はい!」

カナ「解析結果を報告します！」

チエイス「そうか、2人がいたな。」

そう、ユイちゃんとカナに解析をお願いしていて、ちょうど終わったようだ。すると、東京の地図を出す。

ユイ「特定出来た発信位置は、3箇所だけでした。」

カナ「まずは、パパ達が最初に運び込まれた、世田谷総合病院。」

ユイ「次に私たちが見つけれられたのは、目黒区青葉台3丁目です。」

カナ「予測経路を出すと、次に見つけたのは、港区白金台一丁目です。」

ユイ「そして、最後に確認できたのは港区海岸2丁目の地点になります。」

カナ「ここを最後にパパ達からの信号はずっと途絶えたままです。」

ミト「カナ、ユイちゃん。その港区の住所には、何があるの？」

カナ「どうやら、港区の倉庫のようです。」

ノーチラス「倉庫……?!？」

ユナ「何で2人がそこに……?!？」

アスナ「港区……。」

ミト「倉庫……。」

私とアスナは、その単語だけを言う。

その後、皆ログアウトして、クラインにも連絡して、港区には、クラインの車で、私、明日奈、直葉、侑斗が搭乗している。

遼太郎「夜だし、道も空いてるからもうちよつとで着くと思うぜ？」

明日奈「すみません、クラインさん。」

深澄「急に車を出してほしいなんてお願いしちゃって。」

遼太郎「気にすんなってさつきから言ってるだろう、アスナ、ミト。」

遼太郎は、快く引き受けてくれた。

遼太郎「それにしても、ついこの間までGGOで一緒だったのに……………キリトもカルムも無事だといんだけどな。」

直葉「本当にお兄ちゃんって巻き込まれてばかりで……………」

侑斗「カルムも、巻き込まれすぎだろ。」

深澄「カルム……………」

遼太郎「……………そういうえば、ラースって会社は六本木にあるんだろう？そつちも探した方がいいじゃないのか？」

空気が重くなったのを感じた遼太郎が話を切り替えた。

その質問には直葉が答えた。

直葉「はい。そつちの方には、シノンさん達が向かっています。」

明日奈「でも、ラースって分からない事だらけなんです。」

深澄「カナとユイちゃんが色々調べてくれたんだけど、会社の場所以外全然分からなかったんだって。」

侑斗「ソウル・トランスレーターについても、申請済みの特許を含めて一切の資料を見つけられなかった……。」

遼太郎「人の魂を読み書きするなんて……大発明なのに特許申請もしてないのかよ。秘密主義の徹底しすぎじゃないのか？おっと……もうすぐ着くぜ。」

遼太郎が運転する車は、カルムとキリトが最後に確認されたエリア、品川埠頭へと到着する。

周辺は倉庫しかなく、建物も倉庫を管理するものばかりだった。

何かないかと周囲を探索していると、明日奈のスマホが振動した。

スマホを確認すると、里香からの着信だった。

明日奈「リズ、どうだった？」

里香『ラースはは見つかったんだけど、セキユリテイが厳しくて相手にしてもらえなくてさ。』

浩介『一応、ユナのお父さんがラースに来てたらしくてな、ユナとノーチラスの2人が入れないか掛け合っている最中だ。』

そういえば、ユナのお父さんって、その手の教授だったわね。
すると。

詩乃『だめ、幾ら重村教授の娘だからって言って、通訳には行かないって。』

英介『セキユリテイが厳しいな。』

木綿季『それに、ユイちゃんとカナちゃんにも周囲のカメラを確認してもらったんだ
けど……………。』

悠那『キリトとカルムがここに運び込まれた形跡は無かったわ。』

深澄『そう……………。』

鋭二『皆、オーグマーの通信グループを作るから、入ってきてくれ。』

鋭二に言われて、オーグマーを取り出す。

オーグマーとは、カムラ社に移った重村教授とノーチラスの共同開発したウェアラブル・マルチデバイスだ。

左耳に装着する。

このオーグマーを使えば、現実世界でも、カナとユイちゃんと会話が出来る。

明日奈「ユイちゃん、カナちゃん。こっちのカメラはどうだった？」

ユイ「はい、ママ。こちらの防犯カメラも確認しました。昨日の21時20分。あちらの開けた場所からヘリコプターが発進しています。」

「ヘリコプター!？」

侑斗「マジかよ……………」

直葉「じゃあ、お兄ちゃんたちは更に遠くに運ばれたってことですか？」

深澄「でもどこに？東京から離れたとしても、GPSなら後を追えるでしょ？」

明日奈「……………待つて。ここを最後に、もしキリト君達がヘリコプターで運ばれたのだとしたら……………2人の治療のためにどこかの施設に行くはず。そうだとしたら、深澄の言う通り圏外になることなく追えるはず……………。でも、GPSで追えないってことは……………」

ユイ「はい。ママの推測通り、GPSで追えないエリア……………海外に運ばれた可能性があります。」

侑斗「か、海外!?そんなバカな……………!」

カナ「でも、状況としては一番可能性が高いと思います。」

遼太郎「だったら、もう追っかけようがねえんじやねえのか……………?」

遼太郎のその言葉に、皆が諦めそうになる。

だけど、私は諦めない。

深澄「まだだよ、明日奈。」

明日奈「深澄……………?」

深澄「明日奈も、ユウキを見つげ出す為に、諦めなかったじゃない。その見つけ出す対象が、ユウキからカルムとキリトに変わっただけよ。だから、絶対に諦めないで！」
カナ「そうですよ！」

ユイ「ミトさんの言う通りです！」

明日奈「ユイちゃん……カナちゃん……。」

ユイ「アルヴ Heim でママを探していたパパ達はただの一度も諦めたりしませんでした！きつと2人に繋がる手がかりはどこかに残っているはずですよ！」

カナ「ママとパパ、キリトさんとアスナさんの絆はどんなに離れていたって、きつと繋がってます！」

明日奈「ごめん、深澄、ユイちゃん、カナちゃん……。そして、ありがとう！私もキリト君を見つげ出す為に、絶対に諦めないわ！」

深澄「うん！もし、国が絡んでいるのなら、総理大臣を締め上げましょう。」

英介「それは、普通に捕まるぞ。」

詩乃『ミトって、カルムが絡むと恐れ知らずになるわよね……。』

そんな突っ込みがされたような気がしたけど、聞こえないな。

何か、見落としているかを探す。

遼太郎「それにしても、ユナよ、お父さんがラースに来てた時、どんな仕事をしてる

のかを聞いてなかったのか？」

悠那『ごめん、聞いてなかった。』

鋭二『僕は聞いたが、はぐらかされたな。』

直葉「あつ、でも、そういうえば、お兄ちゃんが言ってたんです。」

深澄「何を？」

侑斗「そういうや、カルムも、STLのベースになったのは、メデイキュボイドだって言ってたな。」

木綿季『メデイキュボイド!?!』

深澄「……………それよ!」

侑斗「何が？」

明日奈「……………あつ!」

そう、木綿季を引き取りに来た際に、倉橋先生から聞いていたのだ。メデイキュボイドは、神代凜子から、無償提供されたのだと。

つまり……………!

深澄「私、神代博士に、メールを送ってみるわ!」

明日奈「お願い!」

神代博士に関する説明は、明日奈に任せて、私は神代博士にメールを送る。

凜子 side

米国 カリフォルニア州

私は自身のパソコンに来ていた新着メールを見て、うんざりしていた。

凜子（しっこいわね、この人も……………。）

届いたメールの送り主は、『菊岡 誠二郎』とあった。

メールの題名は『プロジェクト』に関連したものでメールボックスの大半を占めていたが、その全てを私は未読のままにしていた。

凜子（空飛ぶ鋼鉄の城……………。それを夢見た彼の設計を基礎にしたSTL……………だけど、私には……………。）

私の脳裏に蘇ったのは茅場君との思い出だった。

鋼鉄の城のことを語る茅場君は……………決まってどこか悲しそうな表情をしていたのだった。

凜子「……………嘘吐き……………」

胸のペンダントを握りしめ感慨に耽っていると、新たなメールが届いた。

凜子「また……………?」

しっこいと思ひ、メール画面を見ると、届いたメールに凜子は疑問譜を浮かべてしまった。

凜子「兎沢深澄……………?」

この子つて確か、桐ヶ谷君と小野君と一緒に来てた女の子よね。

確かに、連絡先は渡したけど……………。

そのメールを読み進めると。

深澄『突然のメール、失礼します。お久しぶりです、神代博士。実は、折り入って相談があるんです。あなたが医療メーカーに無償提供されたメデイキュボイド。それを元に作られたソウル・トランスレーターが、ラーズという謎の機関によって開発されているんです。そして、カルムとキリトが、ラーズという謎の機関によって開発されているんです。そして、カルムとキリトが、ラーズに拉致された可能性が高いんです。お願いします。先生だけが、私とアスナをラーズへ、カルムとキリトの所へ導いてくれる唯一の可能性なんです。どうか、力を貸して下さい。』

そう書かれていた。

まさか……………菊岡誠二郎からのメールは、それが理由だったと言うの……………?

私は、一晩悩み続け、承諾のメールを送った。

それから、しばらくして、私は、2人の助手と共に、ヘリコプターに乗り込む。

深澄 side

パイロット「見えてきましたよ、皆さん。あれがオーシャン・タートルです。」

ヘリコプターのパイロットに指さされた方向を私が見た。

そこには、海上に健在しているオーシャン・タートルが見えてきた。

凜子「いよいよよ、二人とも。覚悟はいいかしら？」

「(コクツ)」

博士の小声による問いかけに同乗している私たちは静かに頷いた。

ヘリコプターが着陸態勢に入ったところで、博士はオーシャン・タートルに対してあることに気付いた。

凜子「亀で豚……：そういえば、不思議の国のアリスにそんなのがいたっけ。」

深澄（……………ここがオーシャン・タートル……：ラーズの本場の居場所……：ここに……………！）

私はサングラス越しに施設を覗んでいた。

隣の金髪の女性も険しい表情をしていた。

そして、ヘリコプターを降りた3人を出迎えたのは丸刈りでスーツ姿の男性だった。

男性「神代博士、お待ちしていました。そちらのお二人は？」

凜子「私の助手達、マユミ・レイノズルと、ソフィア・イーソンよ。」

「Nice to meet you.」

私たちは、挨拶をして、男性は自己紹介を始めた。

中西「私は皆様のご案内を命じられました、中西一等海尉です。さあ、どうぞこちら

に。」

中西さんの案内の元、私たちはオーシャン・タートルの中へと進んだ。

施設の中を進むと、警備員による厳重な審査が待ち構えていた。

顔認証による画像審査まで行われ、博士はあまりの厳重さにうんざりしてしまつていた。

私たちの顔認証まで行うほどのだから、博士がそう思うのは当然だった。

サングラスを取つて、画像認証を終えた私たちと共に先を進むと………ようやく目的地へと辿り着いた。

菊岡「ようこそ、ラーズへ」

凜子「………つ！菊岡………二等陸佐とも呼ばいいのかしら？それに、なんなんですか？その恰好は？」

菊岡「こんな海のと真ん中にずっと居続けてるだ。制服ばかり着ていたら、息が詰まってしまうからね。」

呆れた博士の質問にあつさり答える菊岡。

それが本気の回答なのかどうかは怪しいものだった。

菊岡「いやはや。我らラーズに足をお運び頂いて本当に嬉しいよ。ずっと声を掛け続けてきた甲斐があつたよ。」

凜子「お役に立てるかどうかは分からないけど……………」

「……………」

私たちの視線が気になったのか、こちらを向いてくるが、意識を博士に戻した菊岡は話を続けた。

菊岡「貴女は、僕がこのプロジェクトに必要なだと思った5人のうちの最後の一人なのだからね。これで全員揃ったわけだ。」

凜子「ふーん、なるほどね……………。そのうちの2人はやっぱり君だったのね、比嘉君、安田君。」

比嘉「アハハ。どうもツス、凜子先輩。」

安田「重村ラボの一員として、先輩たちの志しは継がないと、と思ひまして。」

凜子「相変わらずだね、君達は……………。それで残りの2人はどこにいるのかしら？」

その、比嘉さんと安田さんがいる事を予想していた博士はあまり驚かず、菊岡さんに残りの2名について尋ねた。

聞かれた菊岡さんは肩を竦めながら答えた。

菊岡「残念ながら、今は紹介できないんだ。折を見て数日中に紹介を。」

明日奈「じゃあ、私達が名前を言ってあげるわ。」

私と明日奈は、変装を解く。

サングラスと金髪のカツラを取ったのは、明日奈で、サングラスと黒髪のカツラを取ったのは、私だ。

菊岡「明日奈君に、深澄君!?! どうして君達がここに………神代博士と一緒に?」

驚く菊岡さんを放置して、詰め寄る。

すると、博士が説明してくれる。

凜子「彼女達からメールを貰ったのよ。貴方が桐ヶ谷君と小野君という少年を連れ去り、行方が分からなくなっているってね。………これで、私がここに来た理由は分かってもらえたかしら?」

「「……………」」

博士の説明した理由に、驚いている3人。

だが、菊岡さんが、冷静になった。

菊岡「研究助手の身元確認は大学学籍データベースで多重チェックしたはずだが?」

明日奈「ええ。何回も嫌ってほど、ジロジロと顔を見られたわ。」

深澄「でも、その学籍データが本当に合っているのかまで確認したのかしら?」

菊岡「……………!まさか……………」

明日奈「ええ。うちには防壁破りが得意な娘がいますから。」

深澄「既に、私たちのものに差し替え済みなので。」

凜子「ちなみに、今頃本物のマユミとソフィアは、どこかのビーチで肌を焼いてるわ。」
私と明日奈は、更に詰め寄る。

明日奈「キリト君はどこ？」

深澄「カルムを出しなさい。」

第12話 アリシゼーション計画

深澄 side

明日奈「キリト君はどこ？」

深澄「カルムを出しなさい。」

私たちがそう言うと、菊岡さんは呆然として、そして、コンソールの前に座っている比嘉さんと安田さんが声をかける。

比嘉「だから言ったじゃないっすか。」

安田「あの2人は、この計画における最大のセキュリティホールだって。」

菊岡「ああ。その通りだった。」

菊岡さんがそう言うのに対して、私と明日奈の怒りが爆発する。

明日奈「キリト君とカルム君は無事なんですか！」

深澄「2人を治療出来るというのは嘘なんですか!？」

「答えて下さい、菊岡さん!!」

私たちがそう言うと、菊岡さんは一度顔を俯けて、答える。

菊岡「……………キリト君とカルム君は、死銃事件の逃亡犯と協力者の襲撃によって、2

人の脳は、現代医学では治療不可能なダメージを負ってしまった。」

深澄「……………ッ！」

菊岡「だが、世界でも唯一、このラースに2人を治療出来る技術が存在する。君たちも聞いた事あるだろう？ STL……………ソウル・トランスレーターだ。」

菊岡さん曰く、STLでフラクトライトを直接目覚めさせれば、新たなニューラルネットワークの発生を促せるらしく、それを使えば、カルム達は目を覚ますらしい。

菊岡「2人は、今ここにしか無いフルスペックSTLを使っているよ。治療体制は、この大病院にも劣るものではなく、専任の看護師も居るよ。」

明日奈「……………分かりました。今は貴方を信じます。」

深澄「ただし、もし、2人の目が覚めなかつたら、その時は、分かっていますよね？」

菊岡「ああ。」

比嘉「怖いっすね。」

安田「冷や汗が止まらん。」

すると、博士が前に出てくる。

凜子「さて、ここまで来たのなら、何もかも白状してくれても良いんじゃないかしら……………菊岡さん？ 自衛官のあなたが、どうして総務省の窓際課長なんて装っていたのか、ここで何を企んでいたのか、そして、なぜ桐ヶ谷君と小野君が必要だったのか。」

菊岡「聞くからには、全部手伝って貰いますからね。」

凜子「聞いてから判断するわ。」

その言葉に、一度眼鏡を元に戻してから、私たちを見てくる。

菊岡「……………さて、御三方は、S.T.Lの概要は、もうご存知と思って良いのかな？」

明日奈「人の魂……………フラクトライトを解読して……………」

深澄「現実と全く同じクオリティの仮想世界にダイブさせる機械。」

菊岡「その通り。だが、プロジェクトの目的までは知らないだろう？」

明日奈「目的……………？」

深澄「何よそれ？」

菊岡「ボトムアップ型汎用人工知能の開発さ。」

菊岡の目的が判明する。

だけど、聞いた事がない。

明日奈「ボトムアップ型……………」

深澄「汎用人工知能……………？」

菊岡「人工知能の開発には、二つのアプローチがある。一つがトップダウン型。これは、知識と経験を積みませ、学習によって、最終的に本物の知性に近づけさせるものだ。」

安田「ちなみに、小野君に託したパラドも、トップダウン型のAIだよ。」

比嘉「そして、先日訪れてもらった重村教授が作り出したAIの殆どが、このトップダウン型です。」

そういえば、この人が、カルムにパラドを託したんだったわね。

菊岡さんの説明は続く。

菊岡「だが、トップダウン型は、学習していない事に関しては、適切な対応が出来ない。つまり、真に知性と呼べるところまでは達していないんだ。」

確かに、カナも、ユイちゃんも、パラドも、学習していない事に関しては、対応力が低下してしまう事があるわね。

菊岡さんは、喋り出す。

菊岡「そして次に、ボトムアップ型人工知能。これは、人間の脳………脳細胞が一十億個、連結された生体機関そのものを人工的に再現して、そこに知性を発生させる物だ。」

明日奈「そんな事、出来るんですか？」

菊岡「これまでは、不可能だと言われていた。だが、ソウル・トランスレーターは、遂に、人間の魂………我々がフラクトライトという量子場を捉えることに成功した。」

比嘉「そして、人間の脳と同様量のデータを保存するメディアとして、高量子ゲート結晶体………」

安田「通称、ライトキューブも開発した。」

凜子「それがあれば、フラクトライトをコピーする事が出来る……。。」

菊岡「その通り。現に我々は、人の魂の複製に成功している。」

何か、背筋に嫌な物が走る感覚がする。

そんな事、倫理的にどうなのかしら。

その言葉に、私だけではなく、明日奈と神代博士も驚く。

凜子「……。ならば、なぜ今更私を呼ぶ必要があったの？」

菊岡「我々は、愚かにも気づいていなかったのさ。人の魂のコピーと真の人工知能の間には、途方もなく深く広い谷がある事を。」

すると、菊岡さんは、比嘉さんに何かを指示して、比嘉さんが展開する。

その時の記憶は、余りない。

何せ、比嘉さんのコピーが比嘉さんと話して、崩壊する様を見てしまったのだから。

比嘉「崩壊したつす。」

安田「1分8秒。」

その光景に、私と明日奈は、右手で口を抑える。

神代博士が、抗議する。

凜子「悪趣味にも程があるわね！」

菊岡「申し訳ない。だが、これは、直接見てもらう以外に説明は不可能だという事も、分かって貰えただろう？私を含め、10人以上の人間のフラクトライトを複製したのだが、例外なく、己がコピーである事を認識出来なかった。丸ごとコピーがダメなら、どうすればいいと思います？」

凜子「どうすればって………最初から成長させる。」

明日奈「もしかして………。」

深澄「まさか………。」

菊岡「その通り。生まれて間もない新生児の魂をコピーして育てる。」

「……………ッ!」

その、人間としての常軌を逸している発言に息を呑む。

神代博士が、声を上げる。

凜子「でも、それを成長させる環境はどうするの？現実社会と全く同じ物を作るなんて……。」

菊岡「不可能だ。だが、気づいたんだ。うってつけの所がネットワークに山ほどあるってね。」

明日奈「……………VRMMOワールド……………。」

深澄「ザ・シードのシステムを使ったのね。」

比嘉「その通りっす。」

安田「我々は、周囲の地形や村を作って、それをSTL用に変換した。」

菊岡「一番最初に作った村では、ラーズのスタッフ4人が、16の精神原型………つまり、AIの赤ん坊を、18歳くらいまで育てた。」

そこから、菊岡さんが語っていった。

人工フラクトライトは、良い出来映えだったと語っている。

そこから、現実との時間をずらし、300年が経った頃には、人口が8万人に増えたりらしい。

凜子「それはもう、1つの文明シミュレーションじゃないの?」

菊岡「そうだね。あの中では既に、480年が経過している。」

そんな風に話していて、少し頭の整理が追いつかない。

すると、話は変わった。

菊岡「我々は、一つの重要な問題に気付いたんだ。」

凜子「問題?」

菊岡「公理教会と呼ばれる行政機関が、禁忌目録なる法律を作り上げた。」

深澄「禁忌………」

明日奈「目録………」

菊岡「そこには、たとえば現実世界と同様に、殺人を禁じる項目があった。だが、人間がその法律を守らないかは、毎日のニュースで分かるはずだ。だが、人工フラクトライトは法律を守る。守りすぎるくらいには。」

菊岡さんが言いたいのは、美しく整いすぎていて、ゴミもなく、泥棒もないという事だ。

すると、とある1つの結論に至った。

凜子「そのどこが問題なの？」

明日奈「もしかして、貴方達を作ろうとしているのは……………」

深澄「人を殺せるAI。」

菊岡「……………何でその結論に至ったのかを、教えてくれないか？」

明日奈「私たちは、キリト君やカルム君から聞いたんです。」

深澄「VRMMOは、警察や自衛隊の訓練に転用できると推測していたのよ。事実、GOの新たな大会、スクワッド・ジャムでは、自衛隊のチームが参加していると、カルムが言ってたの。」

そう、スクワッド・ジャムの中継を見ていたカルム曰く、「あの動きから察するに、自衛隊のチームが、訓練ついでに参加しているのだろう。」と語っていた。

だが、それで収まれば良かったのだけだ。

明日奈「でも、大掛かりすぎる。この計画を貴方がやる理由……………」

深澄「それは、戦争で人を殺せるAIを作ること。違う？」

凜子「そうなの？菊岡さん。」

すると、菊岡さんは、微笑み、語り出す。

菊岡「……………5年前、ナーヴギアが発売された時に、これは、戦争を根底から変える事に気づいてね。SAO事件の際に、僕は自ら総務省に出向し、対策チームに加わった。それも、このプロジェクトを立ち上げるためさ。5年かかって、漸くここまで来たよ。」

凜子「……………比嘉君と安田君がこの計画に参加した理由は？」

比嘉「いやあ、ボク達の動機は、個人的な物つすよ。」

安田「僕たちは、韓国の大学に友達がいたけど、彼は、自爆テロで死んでしまった。だから、せめて人が死なないようにする為にだ。」

私と明日奈は、口を開く。

明日奈「でも、貴方達は、その話をキリト君とカルム君にはしていない。」

菊岡「何故そう思うんだい？」

深澄「もしそれを話していたら、2人は協力を拒む。何故なら、貴方達の話には、一つ視点が欠けている。」

菊岡「それは？」

明日奈「人工知能達の権利。」

深澄「貴方達が開発した人工フラクトライトには、人間と同等の思考回路があるのでしょ？」

菊岡「彼らには生身の肉体はないんだよ？」

明日奈「でも、生きている人間と変わらないわ。」

深澄「戦争の道具として使われるのは、あの2人が絶対に許さない。」

菊岡「言いたい事は分からなくもないよ。だが、僕にとって、10万の人工知能の命は、1人の自衛官の命より軽い。」

やっぱり、この人は信じられない。

まるで、あの時のアスナみたいな事を言っているのだから。

カナにユイちゃん、パラドといった人工知能と邂逅している内に、3人も生きていると思わせてくれる。

私と明日奈、菊岡さんが睨み合っていると、神代博士が、間に入る。

凜子「そもそも、どうして桐ヶ谷君と小野君の2人が必要だったの？最大級の秘密が漏れるリスクを抱えながら。」

菊岡「そうだったね。それを話す為に、こんな事を話していたんだった。」

菊岡さん曰く、どうして人工フラクトライトは、法を破らないのか。

それを確かめるべく、仮想世界に慣れているキリトとカルムを現実世界の記憶をロツクして、送り込んだらしい。

その結末を聞いた後、私と明日奈は、アミユスフィアを被り、ALLOへとダイブする。リーファとハヤトのプレイヤーホームに、私、アスナ、リーファ、ハヤト、シノン、チエイス、シリカ、ヒロミ、リズベット、ラット、ユウキ、ノーチラス、ユナに事の顛末を報告する。

リーファ「お兄ちゃんとカルムさん、そんな事に巻き込まれてたなんて……………」

ハヤト「全く……………」

シリカ「菊岡さんの事を信用して大丈夫なんでしょうか……………」

ヒロミ「グレーだね。」

リズベット「流石に隠してる事はもうないと思いたいけどね。」

ラット「まだありそうだが……………」

シノン「今はただ、STLでの治療の効果を待つだけか……………」

チエイス「そうだな……………」

すると、ユウキ、ユナ、ノーチラスが気になる事があるのか、聞いてくる。

ユウキ「それで、キリトとカルムとその……………禁忌目録は、どういう関係なの？」

アスナ「いつも2人と遊んでいた2人の男の子と2人の女の子が居ただけ……。」

ミト「女の子2人が、禁忌目録に違反したのよ。」

ノーチラス「つまり、2人の影響を受けたという事か？」

ミト「うん。その2人が破ったのは、禁止アドレスへの侵入って禁忌だったの。」

アスナ「比嘉さん曰く、目の前に死にゆく命があつて、その2人は、それを助けようとしたからだって言ってたわ。」

ユナ「そうなんだ……。」

アスナ「でも、その2人はすごいわ。自分に打ち勝てたんだから。」

リーファ「その2人には、名前があるんですか？」

ハヤト「確かに。」

ミト「ええ。名前は、アリスとイーデイス。」

そこから語ったのは、片方の名前が、偶然にも、プロジェクトの根幹の名前と同じだという事。

回収しようとしたけど、時間加速の影響で、回収できず、2人のエラーが修正されていた事。

その後、話し終えて、私と明日奈は、冬馬と和人の元へ向かう。

明日奈「あれが、ソウル・トランスレーター……………」

深澄「確かに、メデイキュボイドに似ているわね……………」

私たちはそう呟く。

稼働しているSTLの4号機と5号機に接続されている冬馬と和人を見る。

凜子「まさか、STLがこんなに作られていたなんて……………」

???'「ここだけではありませんよ。」

面会に同席した神代博士が4号機から7号機を見て感嘆としていると、割って入るように説明の声が聞こえてきた。

私たちが声のした方向を向くと、1人の看護師がいた。

その人は、死銃事件の際にお世話になった看護師だ。

確か、安岐さんだったはず。

安岐「試作1号機と最近テストが終了した8号機、9号機、10号機が六本木の分室、2号機、3号機はこのロアシャフトに設置されています。」

深澄「なるほど。で、どうして安岐さんがここにいるんですか?」

明日奈「まさか、あなたも偽装して!」

安岐「まさか。あのおじさまと違って、私は本物のナースよ。ただ、卒業したのが、『自衛隊東京病院高等看護学校』ってとこなんだけどね。」

深澄「なるほど、納得しました。」

安岐「安岐ナツキ二頭陸曹であります！桐ヶ谷君と小野君の身体生命は、本官が責任を持つて守ります！……なんてね。」

明日奈「ハアアアア……。よろしくお願いします。」

安岐「うん。任せて。」

私と明日奈は、ガラス越しに、2人を見つめる。

明日奈「キリト君、帰ってきますよね？」

深澄「カルムも、戻ってきますよね？」

安岐「……もちろんよ。2人のフラクトライトは治療用プログラムの中で今も元気に活動しているわ。それに、SAOをクリアへと導いた英雄なのよ……きつと大丈夫よ。」

「……………」

その言葉を聞いてもなお、一抹の不安が私と明日奈の胸中を掠めていた。

明日奈が和人から送られた指輪をした左手をガラス板に当てるのに対し、私は冬馬からも指輪がついた左手を、右手で包む。

その様子を察し、神代博士は私と明日奈へと声を掛けた。

凜子「明日奈さん。それに深澄さんも……。少しいかしら？」

「……………」

話がしたいと言われた私たちは、神代博士の部屋へと移動した。

神代博士は今から話すことを躊躇っているようだったが、罪を告白するように口を開き始めた。

凜子「私は、貴女達に話しておかないといけない事があるの。ううん、貴女達だけじゃない。……………旧S A Oプレイヤーの全員に、告白しなきゃいけない事が……………」

「……………」

凜子「私がS A O事件の時、茅場明彦と共に長野の山奥に潜伏していたの……………2人はそのことをもう知っているわね？」

明日奈「……………はい。」

凜子「……………その時、私の胸にはマイクロ爆弾が埋め込まれていたの。」

「……………!?!」

まさかの神代博士の告白に私と明日奈は息を呑んだ……………。

彼女が見せた胸元には、確かに何かを埋め込んだ後のような切開痕が残っていた。

凜子「このせいで、私は2年の間、彼の恐ろしい計画に協力を強いられていた……………と世間では言われているけど、本当の事実は違うの……………。私はその爆弾が爆発しないことをよく分かっていたの。あれは……………。私が事件後に罪に問われない様にとあの人が埋め込んでくれたまやかしの凶器……………。あの人が私にくれた、たった一つのプレゼント

トだったの。」

神代博士は茅場との思い出を語り始めた。

ノーチラスとユナが通っている東都工業大学の重村教授の研究室で、2人が一緒だった事。

大学生の身でありながらアーガス……SAOを開発・運営していた会社の開発部長を兼任していた茅場を引きこもりの研究馬鹿だと誤解した神代がよく外に連れ出していたこと。

その流れで二人が恋人関係になり、不器用ながらも幸せな時間を過ごしていたこと。

そして……茅場がSAO事件を引き起こし、自分が茅場の考えを何も理解できていなかったと思い知らされたことを……。

凜子「……それから私は彼が潜伏しているのではと思って、彼の山荘に行ったの……彼の共犯者になりたいからじゃない……。私……茅場君を殺すつもりだった。」

「……………」

凜子「でも……私には殺せなかった。茅場君は……私がナイフを持っているのを知ってて、いつもみたいに言ったの……。『困った人だな』って……。またアインクラウドに戻っていったの。私が彼を止めないといけなかったのに……だから、明日奈

さん達を2年も閉じ込めて……………!!」

明日奈「私もキリト君も、凜子さんの事を恨んでなんかいませんよ。」

深澄「それは、私もカルムも同じです。」

凜子「……………!!?」

私と明日奈の発言に、驚く神代博士。

私と明日奈の話は続く。

深澄「それどころか、私達は団長……………茅場明彦のことを本当に恨んでいるのかさえも分からないんです。」

明日奈「確かにあの事件で多くの人が亡くなったことは事実です。団長の犯罪は決して許されることはありません。でも、物凄く我儘な言い草ですけど……………。多分、私はあの世界で、キリト君と暮らした短い日々を……………これからも人生の最良の一時として思い出すでしょう。」

凜子「あつ……………。」

明日奈「団長に罪があるように、私にもキリト君にも、ミトにもカルム君にも……………。そして、凜子さん……………貴女にも罪はある。」

深澄「でも、それは誰かに罰してもらえれば、償えるものじゃない……………。永遠に許しを請える日は来ないのかもしれませんが……………。だとしても、私たちは自分の罪と向き

合い続けないといけないんです。」

私たちは、そう答えた。

神代博士は、俯いていた。

凜子 side

彼女達に、話したその夜、久しぶりに、何も知らなかった学生の頃の夢を見ていた。

眠りの浅かったあの人は、いつも私より先にベッドから抜け出していて、コーヒークップを手に、朝刊を読んでいた。

そして、私が目を覚ますと……………。

茅場「本当に、困った人だな。こんな所まで来るなんて。」

凜子「どうしたの……………まだ朝早いよ……………」

すると、ハツとして、ドアの外に出ると、誰も居なかった。

私はペンダントを握りしめ、呟く。

凜子「今のは……………夢？」

第13話 剣術大会に向けて

カルム side

ルーリッド村を離れて、ザツカリアへと着いた俺たち。

ここから央都へ向かうには、整合騎士への進むための入り口ともいわれる『帝立修剣学校』へ入学するのが一番の近道であることを、街の人たちから情報収集したことで知った。

そこで、まずは受験に必要な推薦状を得るため、今度開かれるザツカリア剣術大会へと出場することにした。

この大会では、東西南北の四つのブロックがあり、それぞれのブロックでの優勝者が、ザツカリア衛兵隊への入隊許可が得られる。

先日、ルーリッド村の村長の証書を持って、大会の受付で入隊条件を聞いた俺たちは胸を撫で下ろしていた。

もしかすれば、4人とも同時に入隊できる可能性もあるかもしれないからだ。

まあ、出場の申込書に「アインクラッド流剣術」の流派名を書いた時には、受付の男性が困った顔をしているのを見て、俺とキリトが苦笑したのは余談だ。

そして今は……………。

カルム「フツ！ハツ！」

俺は、朝早く起きて、型の練習をしていた。

剣道をやっていたので、早く起きるのには慣れていて、型も上手くやれている。まあ、最終確認だ。

すると。

ケント「こんなに朝早くから練習か？」

カルム「ケント。」

ケントが出てきた。

どうやら、起きたばっかりのようで、目を擦っていた。

カルム「まあな。やつぱり、万全を期す為にも、最終確認はしておきたくて。」

ケント「お前らしいよ。」

俺は最終確認を終え、ケントの隣に来る。

ちなみに、今の俺たちはザツカリア近郊にあるウォルデ牧場に住み込みを兼ねて働かせてもらっていた。

ここの牧場の主ウォルデ夫妻を手伝いながら、娘さんたちのテリンとテルルの双子と時々遊んだりする中、剣技や大会の予選で披露する型の練習をしていた。

流石に牧場や馬の手伝いをするのは初めてだったが、最近ではその手伝いもかなり手際良くなり楽しくなっていた。

すると、ケントの表情が固いのが気になったので、聞いてみる。

カルム「ケント。もしかして、緊張しているのか？」

ケント「バレたか。」

すると、ケントは苦笑して、話し出す。

ケント「不安なんだ。これまで、斧しか振ってこなかった俺が、ザツカリアの剣術大会で勝ち上がるのか。」

カルム「なるほどな……………」

まあ、気持ちは分かるな。

カルム「ケントは大丈夫だよ。」

ケント「だが、お前やキリトには一度も勝ったことが無いのに……………」

カルム「そりゃ、師匠として、弟子にそう簡単に負ける訳にはいかないしな。でも、ケントの剣筋は、俺から見ても大分良いしな。」

ケント「カルム……………」

すると、ケントは持ち前の明るさを取り戻していた。

ケント「ありがとうな。」

カルム「良いって、良いって。」

ケント「それで、少し、打ち合いをしていいか？」

カルム「良いぞ。」

俺とケントは、キリトとユージオ、ウォルデ一家を起こさないように、打ち合いの練習をしていく。

流石に、動きすぎると、明日の大会に影響が出るので、程々にする。

翌日、俺たちは大会の受付に出場票を提出した。

今朝、気になる事があったのだが。

それは後回しにする。

何と、俺たちは、東西南北のブロックに1人ずつ配置されたので、全員が優勝すれば、衛兵隊に入れる。

正午、予選が始まった。

俺が一番最初に型を披露する事になった。

まあ、余裕だった。

何せ、剣道をやっているのだ。

完璧に模倣し切ってみせた俺は、会場中から拍手喝采を受けることとなってしまうのは余談だ。

その後、ユージオ、ケント、キリトの順番で型をやったのだが、全員が突破出来た。カルム「何とか全員が突破出来たな。」

キリト「ああ！」

ユージオ「キリトは、アレをしでかして、よく言えるよ。」

ケント「何で剣の型で、あんな突風が起こるんだ。」

キリト「ふふん。」

カルム「威張るな。」

キリトを小突く。

それにしても、リアルの時よりも随分と生き生きしてるな、キリト。

まあ、同年代の友達は、俺、侑斗、少し年上なのが、英介、鋭二、浩介、年下なのが、壮吾など、色々いるが、本当の意味で、ユージオと親友になっているんだろうな、キリトは。

少し、悔しいかな。

まあ、俺もケントと親友だけど。

カルム「後は、俺たち全員が、それぞれのブロックで優勝するだけだな。」

キリト「そうだな。」

ユージオ「何でそんなに気楽なの？」

ケント「ユージオ、この2人が気楽なのは、今に始まった事じゃないだろ？」

ユージオ「そうだけどさ……………」

気楽で行った方が良いからな。

しばらくすると、本戦が始まる。

そういえば、俺はそれぞれのブロックの優勝者同士で戦うのかと思っていたのだ。

ウォルデ農場の主、バノーが語ったのは、数十年前まではあったという。

しかし、ある年の決勝戦があまりにも白熱した結果、血が流れて、取りやめになった

そうだ。

アンダーワールドの人って、血が流れるのを極端に嫌うよな。

そんな事を考えていると、キリト達全員が、無事に決勝戦に進出できたみたいだ。

カルム「良かった。」

俺も決勝戦に進出する事が決まっっていて、相手は、イゴーム・ザツカライトという男だ。

実は、今朝、こいつに殺気を向けられたのだ。

ソイツは、ザツカリア領主の親族らしい。

カルム（つまり、貴族か。大方、俺たちみたいな田舎者がいるのが気に食わないという事になるのかな……………）

そういえば、イゴームの奴、どこに行っていたんだ？

まあ、気にしなくて良いか。

俺は、そのまま決勝戦になるまで、待っていた。

しばらくして、俺とイゴームが呼ばれた。

それぞれ、会場の入口へと向かう。

道中、3人が無事に優勝した事を知り、俺は安堵する。

後は、俺だけだ。

そして、入り口で衛士から剣を受け取った時だった。

俺はその剣に違和感を感じた。

カルム（アレ？何かおかしいな……………。）

そういうえば、イゴームはさつき、姿を消していたな。

なら、ステイシアの窓で天命を確認しますか。

すると、俺は驚いた。

カルム（なるほどね……………。さつき姿を消していたのが納得がいく。それなら

……………。）

覚悟を決めるか。

この剣でも勝ってやるよ。

そして……………。

審判「これより、北ブロックの決勝戦、イゴーム・ザツカライト対カルムの戦いを始め！両者、構え！」

「……………。」

審判の掛け声と共に、対峙していた俺と奴は互いに剣を抜いた。

審判「始め！」

その合図と共に、俺とイゴームは剣を切り結んだ。

鈍い音が響き、鏝競り合いで剣を押し合う。

そのままいったん距離を取り、再度剣をぶつけ合う。

だが、言いたい事があるので、イゴームの顔に近づける。

カルム「アンタ、ネジレヅタの匂いがするぞ。」

イゴーム「……………それが、どうした。」

カルム「ネジレヅタには用途は一つしかない。乾かしてから燃やして、その煙で毒虫を麻痺させる。例えば……………オオヌマアブみたいな。」

イゴーム「……………！」

凶星みただな。

今朝、ザツカリアの西門でいきなり馬が一頭暴れ出したのだ。

そこに居合わせた俺たちはその暴れ馬に襲われそうになったが、キリトが馬に飛び乗って抑えている間に、ユージオとケントから原因を聞いた俺がオオヌマアブを取り除いたことで事なきを得たのだ。

偶然かと思っていたが、俺にそのことを指摘され、悪意を隠そうともしない笑みを浮かべるイゴームの態度で確信した。

奴は全く悪びれてないなかつた。

カルム「……………今朝、ザツカリアの西門で馬を暴れさせたオオヌマアブ。……………アレを放ったのは、お前だな。」

イゴーム「お前如き宿無しに答える必要はないな。でも、仮にそうだとしても……………オレがしたのはただ、人には無害な小虫を一匹、殺さずに放してやった事だけだ。帝国基本法にも、ましてや禁忌目録にも違反しちやいないぜ。」

なるほどな。

ジंकみたいな奴か。

このアンダーワールドで過ごして思った事は、貴族の一部が、法の穴を掻い潜って、悪事をしている事だ。

少しため息を吐きつつ、聞いたです。

カルム「何でそんな事をするんだ。関係ない人たちが巻き込まれるのは分かっている

はずだ。」

イゴーム「その時はその時さ。それに、気に入らないんだよ。お前らみたいな宿無しの天職なしが、このイゴーム・ザツカライト様と競うだと？衛兵隊に入るだと？許す訳ねえだろ。大会要項を取りに来やがったときから、絶対潰すって決めてたぜ。」

カルム「……………なるほどね。まあ、勝たせて貰いますよ。」

すると、俺の剣からピキッと鋭い音が生まれて、やっぱりと思った。

カルム「なるほどな。衛兵を抱き込んだな？」

イゴーム「知らないね。剣の中に一本業物が紛れ込んで、それを俺が偶然借りちまっても、何の違反にもならないしな。」

カルム「クソが……………！」

本当に、悪質だな！

勝ち誇った顔で、イゴームは剣を押し込んでくるが、俺はわざと試合場に倒れ込みつつ、イゴームの股下を潜る。

イゴームの剣は、大理石に当たり、強張ってる最中に、俺は距離を取る。

カルム「言っとくけど、相手の股を潜るなって、規則にはないからな。」

イゴーム「潰す……………！」

今度は俺が勝ち誇った顔で言い放ち、イゴームの顔が怒りに染まる。

すると、イゴームは、右手で剣をゆっくり振り上げて、刀身が光る。アレは、スラントの構えだ。

イゴーム「……………ザツカライト流秘奥義、《蒼風斬》。」
なるほど、秘奥義と来たか。

なら……………！

俺は剣を構え直して、アインクラッド流の秘奥義を放つ事にする。

剣を左手から外し、左脇に抱え込むように構える。

刀身に、紫色の光が宿る。

イゴーム「キエアアア!!」

そんな、どこか鳥を思わせるような掛け声と共に、俺とイゴームは駆け出す。

カルム「フツ！」

イゴームの斬撃に、紫の曲線を刻む。

左から右へ、右から左へと。

すると、澄んだ金属音が、ザツカリア市街の隅々にまで届かんと響き渡る。

すると、イゴームの剣先が、大理石に突き立つ。

イゴームは、呆然としていて、俺は秘奥義の名前を言う。

カルム「アインクラッド流二連撃技、《スネーク・バイト》。」

俺はそう言つて、イゴームの首元に、剣を突きつける。

審判「そこまで！勝者、カルム！」

俺が剣を突き付けたところで審判が勝利宣言をし、会場が一気に盛り上がった。

声援を送ってくれる観客に俺が手を振る一方で、イゴームは地面に座り込んでしまつていた。

俺は奴の傍に近寄つた。

イゴーム「そんな……。俺が、負ける？あんな田舎者に……。!?」

カルム「負けた理由を教えてやろうか？」

呆然としている中、俺ににそう言われ、我に返つたのか、奴は怒りと憎悪の目を向けてきた。

イゴーム「貴様、一体何をした!?まさか、卑怯な手を……。!!」

カルム「お前と一緒にすんな。まあ、二連撃技を使っただけさ。」

イゴーム「貴様……。!!」

カルム「それに、俺は、そんな卑怯な手を使ってでも勝とうとする奴が気に食わなくてね。勝ちたいなら、ちゃんと鍛えろ。」

悔しげな表情を浮かべるイゴームを置いて、俺は去つていく。

すると、キリト達が近づいてくる。

キリト「良くやったぜ！」

カルム「ああ。」

ユージオ「これで、4人揃って、衛兵隊に入れるね。」

ケント「ああ。俺たちの目標が、一歩近づいたな。」

こうして、全てのブロックで、北の村からやってきた無天職の俺たちが優勝した。

俺たちはザツカリアの衛兵隊の許可証を貰えた。

???
side

まさか、全員が優勝するとはな。

それに、あの刃王剣を手に入れたあの男は、二連撃技を使った。

この世界の秘奥義は、技の見栄えを重視した物が多い。

それでは、いずれ来るであろう闇の軍勢の侵略に立ち向かえない。

しかし、一部の流派は、実戦的な秘奥義を持つ物もあるが、それでも少数だ。

アインクラッド流と言ったな。

???「やはり、俺の見立てに間違いは無かったな。」

まあ、相手が卑怯な事をしたので、俺が介入しようと思っただが、杞憂だったな。

俺は、コイツらの行く末を見届けたいな。

ただ、セントラル・カセドラルに着いたら、覚悟が必要だ。

何せ、ユージオとケントが追い求めている少女達は、既に、最高司祭の手により、変えられているのだから。

まあ、どうにかして、こちら側に招き入れたいが。

第14話 剣の学び舎

カルム side

あの剣術大会から、1年半が経った。

剣術大会を無事に勝ち抜き、ザツカリア衛兵隊で一年間の兵役を勤めた俺たちは推薦状をもらい、央都にある北セントリア修剣学院へと入学することができた。

修剣士の一員となった俺たちは日々剣技と神聖術を学び続け、入学してから一年が経とうとしていた。

北セントリア修剣学院の一室。

安息日である今日、俺とユージオとケントは未だに眠り続けるキリトを起こしに来ていた。

ユージオ「キリト、そろそろ起きなよ？」

キリト「うーん……。あと5分……。」

ケント「そう言っつて、お前が5分で起きた試しはあるのか？」

カルム「まあ、この手を使おう。……………良い加減に、起きろ!!」

優しく起こすユージオとケントを横目に、俺は大声を上げながら、布団を引っ剥がす。

キリト「うう…………… ああ、おはよう……………カルム、ユージオ、ケント……………」

カルム「やっと目が覚めたか。折角の良い天気だ。いつまでも寝てるなよ。」
ユージオ「カルムの言う通りだよ。」

ケント「折角だ、街にでも買物に行かないか？」

キリト「……………いいな、それ。すぐに準備するから。」

俺たちの提案に賛同したキリトは漸くベッドから抜け出して、着替え始める。

それが終わるまで、俺たちは待っていた。

すると、ケントが話しかけてきた。

ケント「なあ。」

カルム「うん？」

ケント「あの刃王剣十聖刃だったか。あの十聖刃って、どういう意味なんだ？」

カルム「クロスセイバーの由来は、その類の本を見つけてな。意味は、10本の聖剣の力が合わさったという意味の神聖語らしよ。」

ケント「そうなのか。」

そういうえば、あの剣は、以前に俺が会った、神山飛羽真って人が使ってた剣に似ているよな。

それに、その10本の聖剣って、一体どんなのだろうな。

そんな事を話していると、着替え終わったキリトがやって来る。俺たちは、街へと繰り出す。

俺たちは（寝すぎたせいで）朝飯を食べ損なつたキリトの要望で、北セントリアの一面にある『跳ね鹿亭』の蜂蜜パイを買つてから市場を見回つていた。

ちなみに俺も匂いに釣られて買ったパイを一緒に食べていた。

キリト「うーん！美味しいな！」

カルム「いや………いつ食つても最高だな、これ。ここまでの味が出せる店はなかなかないよな！」

ユージオ「もう………二人とも行儀が悪いよ？」

ケント「そんな姿を、指導生に見られたら一体どうするつもりだ？」

キリト「焼きたてが最高に美味いんだぜ？すぐに食べないとな。」

カルム「そうそう。味が一番良い時に食べるのが礼儀つてやつだと思うよ。」

ユージオ「カルムまで………。言いたい事は分かるけどさ。」

ケント「まあ、言つてもしょうがないか。」

諦め顔のユージオとケントに苦笑しながらも、パイを食べる手は止められない。そうこうしながら、街を見回つてみると、キリトが懐かしそうに語り出した。

キリト「それにしても早いもんだよな。ルーリッド村を出てからもう2年か。」

カルム「あつという間だったな……………。2年なんてすぐに経つちもうなんだな」

ユージオ「まあ、色々あつたもんね。」

ケント「ああ。剣術大会で優勝してから衛兵隊に入隊して、念願の央都に來たと思えば、こうして修劍学院に通つてゐるしな。」

この2年のことを思い出しながら、そんなことを語り合う俺たち。

ユージオとケントは少し遠くを見ながら、言葉を続けた。

ユージオ「これが現実じゃなくて、まだ夢の中じやないかって思うよ。」

ケント「ああ。随分と変わったもんだ。」

キリト「おいおい……………もう学院の寮に入つて一年が経つんだぜ？」

カルム「そろそろ慣れた方が良いぞ。」

ケント「そうだな。いい加減、慣れないとダメだな。」

ユージオ「アハハハ……………」

俺たちがそんな風なやり取りをしていると、声をかけられた。

「キリト？」

「カルムか？」

キリト「……………！リーナ先輩！」

カルム「……………！タカトラ先輩！」

声をかけられた方を向くと、そこには、男性と女性が。

男性の方は、タカトラ・ウエインライトで、女性の方は、ソルティリーナ・セルルトだ。

タカトラ先輩が、俺の指導生で、ソルティリーナ先輩が、キリトの指導生だ。

タカトラ先輩は、上級修剣士の中で序列3位で、ソルティリーナ先輩は、序列2位だ。

「「「おはようございます！」「」」

リーナ「おはよう。」

タカトラ「やあ。そっちの2人が、ユージオ君とケント君だったな。」

ユージオ「は、はい！」

ケント「そうです！」

リーナ「フフ、そんなに緊張するな。」

背筋をピンと伸ばすユージオとケントに気楽にするように言うリーナ先輩。

俺は気になった事があったので、先輩に聞いてみる事に。

カルム「タカトラ先輩は何の用事で？」

タカトラ「ああ。実家に帰っていたが、買い出しを頼まれてな。その時に、たまたまセルルトと会ったのだ。」

キリト「リーナ先輩は？」

リーナ「タカトラと同じだ。」
なるほど。

タカトラ先輩もリーナ先輩も、ラフな姿だ。

カルム「あの！タカトラ先輩！何かお手伝いしましょうか！」

タカトラ「ああ、大丈夫だ。その心遣いだけでも受け取っておこう。」

ユージオ「お、お手伝いしましょうか！」

ケント「自分も！」

リーナ「君達がか？ユージオ君、ケント君、君たちは、ゴルゴロツソ・バルトー殿と、ユア・バルキリア殿の傍付きだろう？」

ユージオ「で、出過ぎた真似を……………！」

ケント「失礼しました！」

カルム「ていうか、キリト。こういう時は、お前が真っ先に出るところだろう！」

キリト「えっ……………？」

リーナ「カルム君の言う通りだぞ、キリト。君は私の傍付きではなかったのか？」

キリト「い、いや……………アハハハ。」

キリトの言葉にしようがないという感じのため息を吐く。

リーナ「……………君の所の傍付きは、そういう所もすっかりしているな。」

タカトラ「まあな。」

リーナ「君達の気持ちは有難く受け取っておくよ。だが、今日は大したものを買わな
いから大丈夫だ。せつかくの安息日くらい仕事を忘れていいんだぞ？」

タカトラ「……………と言つても、その仕事ももうすぐ終わるのか。俺たちはもうすぐ卒
業だからな。」

そう、先輩の言う通りだ。

今の上級修剣士たちは今月の末に卒業することになっている。

卒業の日には上級修剣士たちによる卒業トーナメントが開催される。

それに向け、修練を積む先輩方もいれば、傍付きに最後の教えをしている先輩もいた
りするのが、今の学院の状況だ。

キリト「リーナ先輩にはもつと色々教わりたかったですよ。」

リーナ「そう言ってもらえると、先輩冥利に尽きるよ。」

カルム「自分も、タカトラ先輩にもつと色々教わりたかったです。」

タカトラ「ありがとうな。」

そんな会話をしていると、2人もも色々と思う所があつたのか、少し寂しい表情をし
ていた。

すると、キリトが声を上げる。

キリト「明日からも、ご指導の程、よろしくお願いします!!」

「「よろしくお願ひします!!」」

リーナ「……………! ああ!」

タカトラ「それでは、また明日な。」

勢いよく頭を下げるキリトに釣られ、条件反射で真似をする俺とユージオとケント。

その姿にリーナ先輩とタカトラ先輩は驚きつつも答え、挨拶をしてその場を去つてい
た。

その姿が見えなくなったところで、ユージオとケントから緊張が切れた声が聞こえ
た。

ユージオ「ふう……………。緊張したな…………。」

ケント「ああ……………」

キリト「ユージオとケントは緊張しすぎだろう? あそこまでガチガチになることない
だろう?」

ユージオ「だって、ソルティーナ先輩って凄く綺麗だし、タカトラ先輩も威厳がある
じゃないか。」

ケント「それにああやって面して話していると迫力を感じるだろ?」

カルム「まあ、言いたい事は分かるよ。タカトラ先輩との試合の時は、かなり緊張感

があるからね。」

ユージオ「ゴルゴロツソ先輩もそうだよ。」

ケント「まあ、ユア先輩もそうだな。」

そんな風に話していると、いつの間にか、話は、ウオロ主席の話になっていく。

ユージオ「ねえ、僕たち、先輩達に追いつけるのかな？」

キリト「どうだろうな。俺、リーナ先輩から一本取れたことないからな。リーナ先輩の強さたるや、あれで次席だからな。」

カルム「俺も、タカトラ先輩から、一本も取れた事がないんだよな……………。それで、3位だからな。」

ケント「そうになると、主席のウオロ先輩の強さってどのくらいになるだろうな？」

ユージオ「……………今の僕たちのほとんどが先輩たちには勝てないわけだから、その強さは想像できないものだよな。」

カルム（……………想像……………イメージ、か。）

そんな事を考えながら、買い物をした。

その夜、俺たちは初等錬士寮へと戻った。

ケント「お休み。」

カルム「ああ。」

ユージオも、キリトに声をかけて、眠りについた。

俺も、読んでいた本………刃王剣十聖刃を構成する聖剣に関する本を閉じて、明かりを消して、布団に入る。

その頭の中で、これまで過ごしてきたアンダーワールドの構造についての考えをまとめる。

カルム（この世界のメカニズムは、これまでの世界とは少し違う。）

ステータス画面に相当するステイシアの窓で確認できるのは、天命とオブジェクト操作権限、システムコントロール権限の3つだ。

天命はHP、オブジェクト操作権限は武器や道具を使う際に求められるクラスに対応したステータス、システムコントロール権限は神聖術を唱える際に必要となるレベルというところだろう。

オブジェクト操作権限が武器より低いと、まともに使えず、逆に上回っていると、普通に使える。

システムコントロール権限に関しては、低いとそこまで高位の魔法は使えないが、これも上がれば高位の魔法が使える。

ここら辺は、ゲームと同じだ。

だけど………。

カルム（この世界では、人のイメージ……想像力が、ステータスに影響を及ぼすつて所だよな。）

そう、この世界では、それが重要になってくるのだ。

それは、以前戦ったイゴームにも、似たような気配を感じた。

タカトラ先輩のあの強さも、これまでの英才教育で自信となっているのだろう。

カルム（もし、この力を使えば、システムを超越した力を発揮出来るかもしれないという事になるな。）

そんな事を考えつつ、眠りにつく。

第15話 最後の指導と嫌味貴族

カルム side

前日の安息日の6日後、俺とタカトラ先輩は、お互いに剣を持って向き合っていた。

タカトラ「今日は最後の試合形式の練習だ。思いつきり来い。」

カルム「はい！」

そう、これが最後の試合だ。

タカトラ先輩は、安息日のラフな格好ではなく、白をベースに、一部が緑で、黒のラインが入った制服姿だ。

カルム「タカトラ先輩、最後なんですし、盾を使って良いですよ。」

タカトラ「そうか。」

タカトラ先輩はそう言って、そそくさと盾を装備する。

タカトラ先輩は、攻防主体の戦法を取る。

そのスタイルは、奇しくも、あのヒースクリフ……茅場晶彦と同じなのだ。

俺に合わせて、盾を使わない事が多かったのだが、俺も、盾の対処方法を学ぶ為に、盾持ちのタカトラ先輩に挑んだ事もある。

お互いに修練用の木剣を構え、ソードスキルを放ちながら駆け出していく。
カルム「ハアアアア!!」

タカトラ「ハアッ!」

俺はバーチカルを、タカトラ先輩は、オリジナルの流派、ウェインライト流秘奥義、垂水………実際には、両手剣のソードスキル、カスケードを放つ。

お互いの秘奥義………ソードスキルがぶつかって、消える。

そのまま鏝迫り合いをしていると、先輩は両足に力を入れて、俺を跳ね飛ばす。

俺は体勢を整えて、すぐさま先輩に向かって駆け出していく。

すると、先輩は盾を持って、そのまま俺に向かって投げてきた。

カルム「あぶね!」

そう、この先輩は、盾を防具としてだけでなく、投擲武器としても使ってくるのだ。

そして、その投げた盾が、こちらに向かって戻って来る。

その手には引つかからない為にも、その盾を躲す。

俺は剣を大きく振るうが、先輩はすぐさま両手持ちに移行して、剣を大きくぶつけてくる。

タカトラ「ハアッ!」

カルム「ウワッ!」

俺は吹っ飛ばされつつも、体勢を整えるが、剣は吹っ飛ばされていた。

これは、俺の負けだな。

カルム「流石です。タカトラ先輩。」

タカトラ「お前も腕を上げたな。あの盾の投擲を上手く躲すとは。」

カルム「いえ、まだまだですよ。」

タカトラ「謙遜するな。それに、お前は、まだ何か隠しているだろう?」

カルム「え!」

まさか、感づかれていたのか!?

俺が驚愕の表情を浮かべる中、タカトラ先輩は、俺の木剣を回収する。

タカトラ「お前には話しておこう。お前を傍付きに指名したのは、ノルキア流や、ハイ・ノルキア流とは異なる、見せる為の剣ではなく、勝つ為の剣に興味を持ったからだ。」

カルム「そうなんですか……………」

タカトラ「私も、ウエインライト流といでにノルキア流を使っているが、ウエインライト流は、お前達のアインクラッド流には及ばないな。」

カルム「先輩……………」

それはそうだ。

アインクラッド流とは、あのSAOで身につけたスキルだ。

戦闘が命がけの世界では、どうしても実戦に偏る。

アンダーワールドは、実戦という概念が存在せず、技の見栄えが重視される。

そんな風に考えている中、先輩の話は続く。

タカトラ「俺は、貴族としての矜持を貫く。力無き民を守る。それが、俺の使命だ。」
カルム「……………」。

タカトラ「それに、いずれ来るであろう闇の軍勢の侵攻にも、備えないといけない。」
カルム「……………」それは、整合騎士で大丈夫なんじゃないですか？」

タカトラ「確かに、整合騎士も強い。だが、整合騎士に任せっきりにするのではなく、己の腕で守る。そうしなければいけないと思う。」

この人は、俺がこれまで見てきたアンダーワールド人とは随分と異なる。

本気で人界を守ろうとしている。

まさに、本来あるべき貴族の鑑だ。

俺たちに嫌味を言ってくる何処かの4人組とは随分と違う。

タカトラ「まあ、明日は安息日だ。見てみたいとは思いますが、無理は言わせない。」

カルム「……………」。

確かに、この先輩に見せたいとは思う。

けど、この木剣では、全ては見せられないだろう。

どうしたら良いのかと思っていると。

カルム「……………!?!」

タカトラ「どうした?」

カルム「いや……………え……………!?!」

何と、タカトラ先輩の後ろに、剣が浮いているのだ。

そして、その剣は、どこかへと去っていく。

カルム「えええ……………!?!」

タカトラ「何かいたのか?」

カルム「いや、何でもありません……………。」

タカトラ「そうか……………。そういえば、もう時間が迫っているな。アズリカ先生は怖いから、今日はここまでにしよう。」

カルム「あ、分かりました。ありがとうございます!」

タカトラ「お疲れ様。」

俺は首を傾げながら、修練場から退出する。

すると、先輩の声が聞こえてくる。

タカトラ「……………カルム……………、疲れているようだな……………。」

なんか、気を遣わせてしまった!

ていうか、アレ何!?

俺、マジで疲れてんのかな……………?

そんな事を思いつつ、俺は初等錬士寮へと向かっていく。

どうやら、ギリギリ間に合ったみたいで、部屋に入ると、ユージオとケントと合流する。

ケント「間に合ったみたいだな。」

カルム「悪い、遅れた。」

ユージオ「大丈夫だよ。僕とケントも、ついさつき着いたばかりだし。」

カルム「そっか……………」

俺たちは、一足先に食堂へと向かう。

しばらくすると、キリトもやってくる。

カルム「遅いぞ、キリト」

キリト「おつ、3人とももう来てたのか。悪い、悪い。リーナ先輩の今日の指導が特別版だったからさ。」

俺の言葉に笑いながら答えるキリト。

ようやく全員揃ったことで夕食をもらいに配膳口へと向かった。

今日のメニューはパン二つ（ルーリッド村で食べたあの黒パンもどきではなく、焼き

立ての黄金色のパンだ)、芋のフライソテー、帆立(つばい貝)入りのピシソワーズにサラダの献立だ。

キリト「旨そう〜!」

カルム「確かにな!」

キリトの感想に同意しながら、俺はスープをスプーンで掬って飲んだ。

優しい味付けだが、メインのパンと一緒に食べることでその旨さが更に引き立てられる。

STLだからこそ再現できる美味しさにそんなことを考えていると、それを邪魔する声が聞こえてきた。

???「聞きましたか、今の?羨ましい話ですな、ライオス殿。」

カルム(またか……………。懲りない奴らだな…………。)

内心で呆れつつ、食事を進めていくが、後ろの喧しい声は続く。

???「我らが汗水垂らして掃除した食堂に後から悠々とやってきて、ただ食べるだけとは……………」

???「いやはや本当に羨ましい話ですな。」

???「まあ、そう言うな、ウンベール、ナツジ。」

???「傍付き錬士の方々にも、きつと我らにも伺い知れない苦労があるのさ。」

ウンベール「フフフツ！それもそうですね。」

ナツジ「傍付きは指導生に言われるがままになんでもしなないといけないそうですからな？」

「わざわざ貴族出身者以外から傍付きを指名するくらいですからな。」

「さぞ珍妙な指示が出るのだろうか？」

キリト「……………！」

ユージオ「相手にする事ないよ、キリト。」

ケント「放っておけ。」

連中は、ライオス・アンティノス、ウンベール・ジーゼック、ナツジ・キャンサー、ベル・アバドン。

貴族出身で、俺たちと同じ初等修剣士だ。

だが、性格は至って最悪だ。

あのように、俺たちにしつこく嫌味を言ってくるのだ。

それも、嫌味の皆勤賞を狙えるのではと思うくらいには。

タカトラ先輩やリーナ先輩、ウオ口先輩が、良い貴族だとしたら、連中は、悪い貴族だと言えるだろう。

どうやら、連中は、平民である俺たちがここにいるのが気に食わないらしい。

カルム「ユージオとケントの言う通りだぞ。人を判断するのは、噂じゃなくて、話してみないと分からないからな。それに、あんな事をしているのは、子供だからね。」

「「……………チツ！」」

4人が舌打ちしながら俺を見てくる。

俺は、本当の貴族としてのあり方をこの目で一年見てきたのだ。

あんな奴らを気にする事はない。

ユージオ「ねえ、キリト。何でカルムってあんなに怖いもの知らずなの？」

ケント「よくあんな嫌味を言えるな。」

キリト「俺も一緒にいてヒヤヒヤするよ。本当に、大物だよな。」

カルム「そこ、コソコソ話さない。」

寧ろ、友人3人のコソコソ話の方が精神的にくるものがあるな。

すると、ユージオが思い出した事があったのか、キリトに質問をする。

ユージオ「そうだ。キリト、畑の調子はどんな感じだい？」

キリト「ああ、かなりいい感じになってきてるぜ？卒業式までにはバツチリ間に合うはずだぜ。」

ユージオ「へえ、楽しみだな。」

ケント「カルムも協力してるんだよな？」

カルム「といつてもちよつとだけだぞ。ほとんどはキリトが世話してるようなものだ。」

キリト「……………丁度いいや。もし良かったら、夕飯の後でも様子を見に行つてみるか？」

カルム「そうだな。」

ユージオ「うん！」

ケント「ああ。」

キリトの提案に俺たちは了承の意を示し、夕飯を片付けてしまうことにした。

ライオス「……………ちい。」

ベル「……………」

ライオスとベルの表情が歪み、キリトを睨んでいたのを俺は見逃してはいなかった。

俺たちは、学園の裏側にある庭園に来て、その花の様子を見に行く。

そこには、もう間もなく咲くであろう蕾の状態の花があった。

ユージオ「この花、随分育つたね？もう蕾が膨らんできてるじゃないか。」

キリト「ここまで3回も失敗してるからな。今度こそ咲いてくれるといいけど……………」

ケント「リーナ先輩の卒業祝いに、自分で育てた花を贈ろうなんて……………意外だな。」

カルム「まあ、良いんじゃないのか？………というか、これが最後の種だろう？」
キリト「ああ。これが最後の機会さ。香辛料商人のおっちゃんも、次の入荷はまた今年
の秋になるって言ってたからなあ。」

そう、キリトが育てているゼフィリアの花の種は、香辛料として売られていたのだ。
それをキリトが買って、こうして育てているのだ。
すると、ユージオとケントが話し出す。

ユージオ「でも、2年も一緒にいるのに、キリトにこういう趣味があったとはね。」
ケント「カルムは知ってたのか？」

カルム「いや、俺も全然。」

キリト「そうだよな………。俺も自分がここまでハマるとは思ってもみなかったよ。」

キリトも、新たな一面を見つけられて良かったよ。

ゲームしかやっていなかったあのキリトが、こんな風に新たな趣味を見つけられるとはな。

お兄さん、感動して泣いちやうよ。

キリト「………おい、今、俺に対して物凄く失礼な事を考えなかったか？」

カルム「何の事だ？」

キリト「惚けやがった……………！」

ユージオ「もしかしたら、記憶が戻る前兆かもしれないね。」

ケント「ああ。ルーリッドに来る前に、花を育てていたのか、そういう天職に就いていたのか？」

キリト「……………あ、あ……………。そう、かもしれないな。いや、違うかな、アハハ……………」

カルム「アハハ……………。それよりも、さっさと水をやろうぜ。」

キリト「そうだな！」

そういえば、そんな設定だったな。

何せ、ルーリッド出身という感じに登録されているので、それを知っているのは、ユージオとケントの2人だけだ。

慌てて思い出した俺たちは話を逸らすために話題を切り替えたのだが、ユージオとケントは真剣な表情で俺たちを呼び止めた。

ユージオ「ねえ、キリト、カルム。」

キリト「ん？」

ケント「お前らは、もしも、記憶が戻ったらどうするんだ？」

カルム「どうするって？」

俺は首を傾げつつ、キリトと顔を見合わせ、どういう意味か尋ねる。

ユージオ「2人が整合騎士を目指しているのは、僕達の目的に付き合ってくれているからだろうか？」

ケント「公理教会に連行されたイーディスとアリスを探す目的の為に。……だが、記憶が戻ったら、故郷に戻りたいよな？」

「……………」

2人の言いたい事が分かった俺たちは、息を呑んだ。

確かに、帰りたいという気持ちはある。

だが、帰る為には、システムコンソールの類に触れなければならない。

ユージオとケントは、日本という存在を知らないのだ。

すると、キリトがユージオとケントの背中を叩きながら答える。

キリト「例え記憶が戻っても、俺たちは帰らないよ。」

ユージオ「……………えっ？」

カルム「俺たちは剣士だった……………。その記憶だけは俺もキリトも確かなことだって確信してる。剣士なら整合騎士を目指すのは当たり前のことだろうか？」

ケント「……………そうだが……………。凄いな、二人は。」

2人は俯いてしまった。

どういう意味か聞くと、答えてくれた。

ユージオ「僕は……いや、僕たちは弱い人間なんだ。もし二人に出会わなかったら、未だに毎日毎日2人で斧を振っていたと思う。」

ケント「天職を逃げ道の理由にして、本気で村を出ようともせず……。この学院に入れたのも二人が俺たちを引っ張ってくれたお陰なんだ。それなのに……。」

カルム「ケント……ユージオ……。」

そう言つて、拳を握りしめながら2人は言葉をついでいく。

ユージオ「僕は今、記憶が戻つても、故郷に帰らないつて言つてくれて、凄くホツとしてるんだ。」

ケント「カルムも、同じ目的を目指していると言つてくれて、凄く嬉しい。」

カルム「何言つてんだ。それは、俺たちのセリフだぞ。」

キリト「そうそう。俺たち、記憶も無いし、道も分からない上、銅貨の1枚もなかったんだぜ。2人に会わなかったら、今頃俺たちは路頭に迷つてたしな。」

カルム「俺たちがこうしてこの学院に居るのは、この4人だからな。誰一人として欠けちゃいけないんだ。」

キリト「1人で何でも頑張ろうとするなら、整合騎士になつてからでも遅くないだろ？」

俺たちはユージオとケントに手を差し伸べる。

2人の不安は、少しは晴れたみたいで、笑みを浮かべて、立ち上がる。

ユージオ「そうだね。」

ケント「なら、上位12人以内には入るように努力しないな。」

キリト「俺、神聖術の試験が少し怪しいだよな……。部屋に戻ったらちよつと教えてくれないか？」

ユージオ「良いよ。復習にもなるし。」

ケント「カルムは大丈夫か？」

カルム「俺も少し見てもらえると助かるな。」

その後、翌日に、キリトの剣が出来上がる事を思い出して、楽しみに話しながら、俺たちは寮へと戻る。

そんな俺たちを、歪んでいる笑みを浮かべているライオス、ウンベール、ナツジ、ベルの4人が見ている事には気づかず。

???
side

しまったな、つい、熱中して、剣の姿でアイツの前に現れてしまった。

それにしても、アイツもだんだんと腕を上げているみたいだな。

すると。

ライオス「ん!? 何だアレは!？」

ウンベール「剣が、浮いている……………!？」

ナツジ「ええ……………!？」

ベル「どうなっているんだ!？」

???「しまった!」

俺はすぐさま逃走する。

後でアイツらの記憶を消しておかないとな。

まあ、カルムは消さなくても大丈夫か。

その後、あの四人組の記憶を消して、俺はホツとする。

そして、あの人にこつてりと怒られた。

第16話 漆黒の剣

カルム side

翌日、俺たちは、キリトの剣を受け取る為に、サードレ金細工店にやってきたのだが。サードレ「見ろい！この有様を!!」

店主であるサードレの怒声と共に、サードレの机の前に、何かの残骸が叩きつけられる。

砥石の様だが、全て厚さ2センチ以下にまで擦り減ってしまい、使えそうになかった。サードレ「この黒煉岩の砥石は3年使えるはずが、たった1年で6つも全損してしまつたわい！」

キリト「は、はあ……。本当、すみません……。」

カルム「うわあ……。」

大分ご立腹の様子だった。

彼は、サードレ師。

この店を営んでいる細工師だ。

サードレ「あの枝ときたら……。！どんなに力を込めようと僅かしか削れん。儂がこ

の一振りにどれだけの時間を費やしたと思つとるんじや！」

カルム（うわあ、ご立腹だ……。それに、あの悪魔の木だからなあ……。）
その声に、俺たちは背筋を伸ばす。

実は、ルーリッドから旅立つ直前に、ガリツタ老人と会っていたのだ。

ユージオ「ガリツタ爺、呼んできたよ。」

ガリツタ「おお、すまんなユージオ、ケント。出立の直前だと言うのに。」

カルム「ケント、この人は？」

ケント「紹介するよ。彼はガリツタさん。俺たちの前の刻み手だ。」
なるほどな。

すると、キリトが驚いた声を出す。

キリト「それじゃあ、ユージオとケントの前にギガスシダーに切れ込みを入れてたのか？ あんな苦行を良くやれましたね。」

カルム「おい！……俺の連れが失礼な発言をして、すいません。」

ガリツタ「ホッホッホッ。よいよい、気にしておらんわ。」

良かった……。

キリトの失礼な発言に怒ってなくて。

ガリツタさんは怒るどころか、笑ってすませてくれた。

ホツとしたところで、ユージオとケントが本題をガリツタさんに尋ねた。

ユージオ「それで、2人に用事って何なの？」

ガリツタ「うむ。特に、その黒髪の少年に用があつてな。」

ケント「キリトに？」

ガリツタ「うむ。」

キリト「え？」

俺とキリト、ユージオ、ケントは顔を見合わせる。

すると、ガリツタさんが話し出す。

ガリツタ「そうじゃ。お主だけ、剣を持っていないとユージオとケントから聞いてな。

ユージオ、ケント、青薔薇の剣か雷鳴剣黄雷を持ってきてくれたか？」

ユージオ「えっ、うん。」

ケント「持ってきていますが……………」

ガリツタ「着いてきなさい。」

ガリツタさんについていくと、ギガスシダーのてっぺん……………樹頭と呼ばれる部分の近くに來ていた。

ガリツタ「この枝を切りなさい。」

キリト「ギガスシダーのこの枝をですか……………分かりました。ユージオ、青薔薇の剣

を借りるぞ。」

頷くガリツタさんの指示に従い、青薔薇の剣を受け取ったキリトは振りかぶり、かなりの厚みがある枝を切り落とした。

鈍く重みを感じさせる落下音が響き、ギガスシダーの枝が落ちた。それをキリトが拾おうとする。

しかし。

キリト「お、重ッ!？」

カルム「大丈夫か?………重ッ!？」

宙に浮かすのがやつとの状態にキリトを手伝おうと切り枝の片端を持ったのだが、予想以上の重さに俺も思わず叫んだ。

ガリツタ「その枝は、ギガスシダーで最もソルスの恵みを吸い込んだ部分じゃ。」

キリト「それって、ギガスシダーの中で最もレア………ゴホン、優先度が高いものってことですか?」

カルム「確かに、天辺だしな。」

ガリツタ「そうじゃ。それを央都へと持って行くがよい。央都に到着したら、サードレという細工師が営んでいる店へと預けるがよい。素晴らしい剣に仕立ててくれるはずだ。」

その言葉通り、王都に着いてすぐに、サードレ金細工店に向かった。

どうやら、ガリツタさんとサードレ師は、昔知り合ったらしく、枝を一本持つて帰ろうとしたが断念したらしく、ガリツタさんに、ギガスシダーが倒れた際に、連絡を入れて欲しいと頼んだのだ。

ガリツタさんは、それを違う形で果たした。

キリトが差し出した、ギガスシダー最上部の枝を見たサードレ師は、たつぷり3分間絶句して、5分間検分して、語ったのだ。

サードレ「1年くれ。1年をかければ、この枝はとんでもない剣になる。整合騎士の帯びる神器すら超えるほどの、な。」

そうして、現在に至る。

今も尚、サードレ師は、文句を言い続けていた。

サードレ「そもそも、儂の天職は金細工師であつてだな……………！」

キリト「そ、それで！ 剣は出来たんですか？」

それを聞いたサードレ師は、身を屈めて、細長い包みを取り出す。

カウンターに重い音を立てて置かれた。

キリトが触ろうとすると、サードレ師が声をかける。

サードレ「若い。まだ、砥ぎ代の話をしとらんかったな。」

キリト「うっ……………！」

ユージオ「大丈夫だよ、キリト。」

ケント「念の為に俺たちもお金を持ってきたからさ。」

カルム「4人分合わせれば、何とかなるかもしれないからな。」

キリト「悪い……………」

サードレ「タダにしてやらんでもない。」

「「えええっ!?!」」

サードレさんのまさかの提案に財布を取り出そうとしていた俺たちは絶叫した。

だが、そんなうまい話が簡単にあるわけがないのに……………!

日本でも、美味しい話には大抵裏があるって言われてるからな。

サードレ「ただし、お前さんがこの化け物を振れるのならな。」

カルム「化け物?」

サードレ「此奴、剣として完成したら、一際重くなったのじゃ。」

カルム「マジでか……………！」

サードレさんが化け物という剣とは、どんなのだろうな。

キリトが包みを開けると、現れたのは、黒をベースにした片手剣だった。

キリト「……………！」

カルム「すげえ……………！」

黒をベースにしているが、キリトがSAOで使っていたエリユシデータとは違い、全てを包んで吸い込みそうな漆黒だった。

ユージオ「キリト、どうしたんだい？」

ケント「カルムもボーっとして、どうしたんだ？」

キリト「いや……………」

カルム「悪い、少し見惚れてた。」

ユージオとケントの声に我に返った俺。

どうやら、キリトも剣を見て何か感じたことがあったらしい。

気を取り直したキリトは剣を抜いた。

カルム（両刃の片手剣か……………）

俺は、これまで使ってきた武器である、ブレイラウザー、メダジャリバー、ガシヤコンブレイカー、ゼットソードは、全て片刃の剣で、両刃なのは、キングラウザーのみだ。だが、この剣は、下手したら、あの刃王剣十聖刃に勝るとも劣るとも言えない圧を放っていた。

キリト「……………ふん！」

キリトは剣を気合いと共に振り下ろし、その剣圧に、窓が揺れた。

凄まじいな。

サードレ師が化け物と言うのも納得がいく。

ユージオとケントが拍手をする。

ユージオ「凄いよ、キリト。」

ケント「まさか、それを振れるなんて。」

カルム「剣も凄いが、キリトも凄いな。」

サードレ「フン。学院のひよっこ錬士が、そいつを振りおつたか。」

キリト「これ………良い剣です！」

サードレ「当たり前じゃない！………まあ、約束は約束じゃ。そいつはお前さんのもんじゃ。」

キリト「ありがとうございます！」

そうして、俺たちはサードレ金細工店を後にした。

俺は、素振りをすると言うキリトと別れ、刃王剣十聖刃を手に、タカトラ先輩を呼び出した。

タカトラ「どうしたんだ？カルム。」

カルム「いえ、実は、俺の全力を、タカトラ先輩に見せたくて。」

タカトラ「ほう。その隠している事か。」

カルム「だから、見て下さい。」

俺は刃王剣十聖刃を抜刀して、ソードスキルを放っていく。

まずは、俺が良く使用していた、ホリゾントル系列からだ。

まずは、ホリゾントル、ホリゾントル・アーク、ホリゾントル・スクエアの順番に放つ。

タカトラ「今は………?」

カルム「まずは、ホリゾントル、二連撃技のホリゾントル・アーク、四連撃技のホリゾントル・スクエアです。」

タカトラ「なるほどな。」

次に、バーチカル系列のソードスキルだ。

バーチカル、バーチカル・アーク、バーチカル・スクエアの順番に放つ。

そこから、シャープネイル、サベージ・フルクリムを発動する。

タカトラ「なるほどな。連撃技が多いのか、アインクラッド流は?」

カルム「そうですね。」

タカトラ「だが、見た所、魔物討伐に向いてそんな剣技だな。」

カルム「アハハハ………。」

そりゃ、SAOで対人戦も、あのラフコフ討伐戦位しか思いつかない。

基本的にはモンスターが相手なので、そう見えてもおかしくはない。

カルム「でも、この技は、すぐには使えませんよ。ケントやユージオも、バーチカル・アークを習得するのに1ヶ月半も掛かったんですから。」

タカトラ「そうか。いや、習得する訳ではないさ。」

カルム「そうですか……………」

タカトラ「それに、まだ使っていない技があるんだろう？」

カルム「え……………」

まさか、ここまで見通していたのか!?

俺が驚愕していると。

タカトラ「すまない。使えと言う訳ではないんだがな。」

カルム「い、いえ……………」

俺は、先輩に、一応、最大で10連撃の技がある事を説明したが、使えない事を話した。

タカトラ「なるほどな。」

カルム「すいません。」

タカトラ「いや、責めている訳ではない。」

カルム「そうですか……………」

だが、そう言う先輩の顔は、難しい顔をしていたのだ。
何でだろうかと考えていると。

タカトラ「…………お前なら、この人界を守るかもしれないな。」

カルム「先輩？」

タカトラ「お前の剣筋を見て分かった。大切な人が居るのだろうか？」

カルム「え!!」

タカトラ「お前の剣筋から、大切な人を守りたいという気持ちが伝わってきた。その為の剣技なんだろうか？」

カルム「先輩…………。」

タカトラ「なら、それを守る為にも、更に研鑽を積み。」

カルム「はい!!」

俺は、先輩から言われた言葉に、大きく頷いた。

この世界に来て、大切な人がたくさん出来た。

それを、守れるようになりたい。

絶対に…………!!

タカトラ「さて、それでは、戻ろうか。」

カルム「分かりました。」

俺たちは、修剣学院に戻ろうとすると、何やら、騒がしかった。

タカトラ「何やら、騒がしいな。」

カルム「おかしいな、安息日だから、学院に居る人もそこまで多くないはずなのに……。」

俺は、耳を澄ますと。

修剣士「おい、聞いたか!？」

修剣士「ああ。この後、大修錬場でやるだろう?早く行こうぜ!」

修剣士「あのリーバンテイン主席が懲罰試合を行うらしいぞ!」

タカトラ「ウオロが?」

カルム(嫌な予感……………。)

何か、物騒なワードが聞こえてきたな。

すると、俺とタカトラ先輩を見て、4人の人物がやってきた。

そこにいたのは、ユージオ、ケント、リーナ先輩、ユア先輩だ。

リーナ「カルムも、漸く見つけたぞ!」

カルム「リーナ先輩、どうしたんですか?」

ユア「タカトラの事だ、どこかに引つ張り出しているのではと思ってな。」

タカトラ「どうしたんだ?何やら、ウオロが懲罰試合を行うようだが。」

リーナ先輩、ユア先輩の様子から、まさかと思っていると。

リーナ「実は、キリトがウオロに何かをやらかしたみたいだな。」

ユア「これから大修練場で懲罰試合を行うらしいのだ。」

タカトラ「何？」

カルム「やっぱりか……………」

俺がそう呟くと、ユージオとケントもため息を吐く。

俺たちは、すぐさま大修練場へと向かう。

大修練場には、噂を聞きつけたのか、かなりの人が居て、その中には、ライオス一派が居たのだ。

恐らく、暇つぶしに来たんだろうな。

「「キリト!!」」

キリト「おつ、ユージオにケントにカルム。それに、リーナ先輩にタカトラ先輩に、ユア先輩まで……………」

こつちに気付いた余裕そうなキリトを見て、一先ず安心した俺たちはため息を吐いた。

ユージオ「懲罰試合だなんて、一体何をやらかしたんだよ!？」

キリト「いやあ……………。アハハ……………」

カルム「笑い事じゃないだろ!？」

ケント「はあ……………。キリトがこの一年間で何もやらかさないと思っていたが、詰めが甘かったか……………」

カルム「逆に、これまでやらかさなかつたのが奇跡じゃないのか？」

キリト「流石だな、3人とも！」

カルム「誰も褒めてねーよ……………」

余裕をかましているキリトに、イラつきながら答える。

くそ、何をやらかしたんだ！

ウオロ主席の制服を見ると、泥が着いていた。

まさか、あの黒い剣の試し振りをしている最中に、泥を跳ねたのか!？」

頭が痛い……………」

すると、リーナ先輩が、ウオロ主席に迫る。

リーナ「リーバンテイン殿！これはどういうことだ！」

ウオロ「なに。そなたの傍付きにちよつとした逸例行為があつてね。大仰な懲罰を科すのもどうかと思つたので、実剣での立ち合い一本で済ませるつもりだ」

タカトラ「なんだと……………」

ユア「どうしてそうなるんだ？」

どうやらウオロ主席はキリトと実戦形式での試合をお望みらしい。

懲罰という名の試合という事か。

キリト「心配をお掛けしてすみません、リーナ先輩。それにカルムとユージオとケント、タカトラ先輩、ユア先輩。俺なら大丈夫ですから。むしろ、主席殿と手合わせできるのは幸運なことだと思っっていますから。」

ユア「キリト初等錬士。立ち合いの決めはどくなっている？」

キリト「えっ、実剣を使用するので寸止めなのはと……………」

ウオロ「ああ、言い忘れていたな。」

ユア先輩にそう聞かれたキリトは、曖昧に答えるが、ウオロ主席が遮る。

ウオロ主席が語ったのは、とんでもない事だった。

ウオロ「私は寸止めの試合はしないのだよ。個人的な試合は全て一本先取を決めに行っている」

ユージオ「それって……………!？」

ケント「まさか!？」

カルム「天命を削る……………。本当の実戦形式での試合ってことか。」

ウオロ主席の回答に驚くユージオとケントの横で、俺はウオロ主席が本気であることを悟った。

もちろん、そんなルールにリーナ先輩が黙っている訳がなく。

リーナ「ちよつと待て！キリトは実剣での立ち合いなどしたことがないのだぞ！」

ウオロ「ああ。もつとも、天命を削るような戦いは、禁忌目録により双方の合意がなくては行えない。お前が拒むのであれば寸止めも止む無しだな……。選択は任せよう、キリト錬士。」

リーナ「やめておけ、キリト。ウオロは強い……。危険すぎる……。！」

カルム「リーナ先輩。」

リーナ「カルム君？」

カルム「無駄ですよ。アイツ、ああいう事言われると、本気になりますから。」

リーナ先輩には悪いけど、俺は、キリトの顔を見て、全てを悟った。

キリト「流石だな、カルム。方法はお任せします、リーバンテイン殿。俺は懲罰を受ける身ですから。」

カルム「ああなつたキリトは、誰も決して止められないんです……。！」

俺の言葉に、リーナ先輩は何も言えなくなつてしまい、タカトラ先輩とユア先輩は、呆然として、ユージオとケントはため息を吐く。

アイツ、またやらかしやがつて……。！」

心の中でそう毒づいた。

タカトラ「カルム。」

カルム「はい？」

タカトラ「お前の親友は、いつもあんな感じなのか？」

カルム「はい……………」

ユア「ケント、そうなのか？」

ケント「はい……………」

タカトラ先輩とユア先輩が俺とケントに質問して、俺とケントはため息を吐きつつ答える。

何でこうなった……………。

第17話 キリトVSウオロ

カルムside

もうすぐ懲罰試合が行われようとする中、ウオロ主席が自身の剣の具合を確かめるように素振りしているのに対し、キリトは深呼吸をしながら意識を集中させていた。

すると、リーナ先輩が声を掛けた。

リーナ「キリト。私はお前の強さを信じているが……だからこそウオロの剣には十分注意しろ。」

キリト「注意……?」

タカトラ「ウオロの家系……リーバンテイン家には秘めたる家訓がある。『剣を強者の血に塗らせ。されば強さは我が物と為らん』と。」

カルム「物騒な言い伝えですね。それってまさか……。」

リーナ「そうだ。カルム君の想像通り、ウオロは入学以前にも実剣による一本先取勝負を幾度もなく行っている筈だ。」

本当に物騒だな。

だが、それがあの先輩の強さに繋がっているんだろうな。

タカトラ「その経験が、奴の恐るべき剛剣を生み出しているのだ。」

カルム「なるほど……………」。(つまり、強い相手を倒せば倒すほど、ウォロの強さはどんどん上がるという事か。)

リーナ「ウォロはお前の剣力をも血に変えて吸い取り、糧とするつもりだ……………」かし。」

そう言つて、リーナ先輩は強い眼差しをキリトに向け、言葉が続けた。

リーナ「私はお前を信じている。あやつに容易く喰われてしまう剣士ではないとな。昨日、私と約束したことを忘れてはいないだろう？」

キリト「約束……………ええ。俺の全てを先輩に見せると約束しました！」

リーナ「ならば……………ここで見せてくれ、キリト！」

キリト「はい！約束……………果たしてきます！」

ウォロ「そろそろいいかな、キリト錬士。」

リーナ先輩の言葉にはつきりと答えたキリトに、タイミング良くウォロ主席が声を掛けた。

「どうやら待っていてくれたらしい。それに応えたキリトが立ち位置に向かう前に俺はキリトに声を掛けた。」

カルム「何か策はあるのか？」

キリト「……………単純な剣技じゃまず勝ち目はない。この剣なら4連撃まで繰り出せるから、それに賭ける。」

カルム「……………分かった。無理するな。」

キリト「ああ。」

確かに、アンダーワールドには、連撃技という概念が無い。

そこをつければ、相手が主席でも、勝てる可能性はある。

しかし、それがウオロ主席に通用するのはまた別の話だが。

カルム（キリト、勝てよ。）

間もなく試合が始まるとする中、俺はキリトの背中を見ながらそんな思いが胸をよぎっていた。

俺、ユージオ、ケント、タカトラ先輩、ユア先輩は、すぐ近くで見ること。

すると、リーナ先輩が声を大きく張り上げる。

リーナ「これより、リーバンテイン上級修剣士とキリト初等錬士による一本先取の手合わせを始める！なお、双方の合意により両者ともに実剣を使用する。」

その声に、周囲はどよめく。

まあ、実剣による勝負が、アンダーワールド全体で珍しいからな。

ただ、ライオス、ウンベール、ナツジ、ベルの4人はニヤニヤしていた。

カルム（あの笑みは、キリトが負傷するのを楽しみにしているんだな。）

まあ、アイツらの様な貴族擬きに糾弾する気は起きない。

座席には、ユージオの指導生のゴルゴロッソ先輩が居た。

リーナ「両者、構え！」

リーナ先輩の号令にキリトとウォロ主席がそれぞれの剣を抜いた。

ウォロ主席が抜刀すると、会場のどよめきが一段と大きくなった。

見ただけでははつきりとは断定できないが、そこら辺の安物ではないことだけは確か
で、かなりの業物のようだ。

一方、キリトが抜刀した黒剣を見た会場の反応は……何とも言えないものだった。

驚き半分、困惑半分といったところだろう。

カルム（まあ、サードレ師曰く、整合騎士が帯びる神器を超える代物らしいが。）

この世界の武器は、キリトの黒い剣のように真っ黒というのはあまり無い。

俺たちのように青薔薇の剣に雷鳴剣黄雷、刃王剣十聖刃の様な神器を見た事がある訳
では無いのだから、無理はない。

すると。

ウンベール「おやおや！ 辺境では墨を塗る風習でもあるんですかな、ライオス殿？ ベ
ル殿？」

ナツジ「あれは、実に滑稽ですなぁ！」

ライオス「そう言ってるな、ウンベール、ナツジ。傍付き殿は忙しくて剣を磨く暇もないのだろうさ。」

ベル「フツ。これだから平民は。」

ライオス一派を中心に、嘲笑の声上がる。

それは、他の貴族の生徒にまで伝わり、嘲笑の気配がする。

まあ、無知を晒すのは構わないけど、怒りの視線を向けようとするユージオとケントを止める。

カルム「落ち着け。」

ケント「これが落ち着いていられるか！」

ユージオ「あんなにキリトの事を馬鹿にして！」

タカトラ「放っておけ。あんな奴ら、勝手に言わせれば良い。」

ユア「そうだな。結果を見ていないのにも関わらず、口だけ達者な奴を相手にするより、この試合の行く末を見届けた方が有意義だ。」

ケント「……………分かりました。」

ユージオ「……………はい。」

タカトラ先輩とユア先輩、結構辛辣ですね。

まあ、無理もない。

2人は、刃王剣十聖刃と雷鳴剣黄雷を見ているのだ。

キリトの剣も、同じ類の物と認識しているのだろう。

嘲笑が起こる中、ゴルゴロツソ先輩は、ただ見守っていた。

そんな嘲笑も、ウォロ主席が剣を大きく振り上げて、ハイ・ノルキア流秘奥義、《天山烈波》……両手剣突進ソードスキル、《アバランシュ》の体勢を取った時に、静かになつた。

カルム（凄いな……！圧がここまで届いてくるぞ……！）

剣を上段へと構えたウォロ主席の闘気に、会場が呑み込まれたのだ。

こうして見学しているだけの俺までもその闘気に思わず汗が出てしまうほどの圧を感じているほどのレベルだ。

恐らく、一撃で決めてくるのだろう。

だとすると、キリトが取る手段は、クラデイルの時と同じく、ソニック・リープでの武器破壊か？

いや、アレでは、武器破壊は出来ないだろうな。

つまり、キリトが取るべき戦法は、手数が多い。

キリトは、片手剣4連撃技、バーチカル・スクエアを使う様だ。

「……………」

キリトとウオロ主席は、お互いに睨み合ったまま、動かなかつた。

しばらくすると、遂に動き出す。

ウオロ「はあああああああああああああああああ！」

キリト「うおおおおおおおおおおおおおおお！」

秘奥義を放つウオロ主席の劍撃に、キリトの一撃目と二激目が当たるが、ウオロ主席の劍は止まらない。

キリト「うおおお!!」

キリトの気合いと共に、三撃目を放ち、ウオロ主席の劍を受け止めた。

「止めた!」

カルム「まだだ!」

タカトラ「ここからだ。」

ユア「ああ。」

ユージオとケントとリーナ先輩の声が重なるが、俺は否定した。

肝心の四連撃目が、ウオロ主席の劍を止めるのに精一杯で、放てずにいるのだ。

なんとか四連撃目を繰り出そうと踏ん張るキリト。

それに対し、劍ごとキリトを切ろうとするウオロ主席。

秘奥義のぶつかり合いで大きな火花が散り合っていた。

ウォロ「……………ウォオオオオオオ!!」

カルム（ん!?何だアレは!?）

ウォロ主席の気迫と共に、放たれる闘気が一段と増した。

その時、俺にはウォロ主席の背後から何人もの剣士がキリトを倒そうとしているビジョンが見えたような気がした。

同時にウォロ主席が剣圧が一段と強まる。

カルム（まさか、歴代のリーバンテイン家の当主の幻影なのか!?)

それが、ウォロ主席に力を与えているのか。

その剣圧に徐々に押されるキリト。

このままでは、キリトのバーチカル・スクエアは強制終了し、斬られる。

俺は思わず声を上げる。

カルム「キリト!!」

キリト「つ!? そうだ……………俺にだって守りたいものが……………!ここで負ける訳には
いかなんだあ!!」

その言葉と共に不思議なことが起こった。

キリトの剣に光が集まったかと思うと、黒剣の刀身が伸びたのだ。

キリトは、剣を両手持ちにする。

本来なら、イレギュラーな装備状態になって、ソードスキルが強制終了するはずが、光が更に強まる。

そして、俺はキリトの背後にそびえたつそれを見た。

カルム（アレって、ギガスシダーか!?）

間違いない……………あれはギガスシダーそのものだ。

まるでキリトに力を……………いやギガスシダーがテラリアやソルスの恵みを独占して吸収するように、黒剣がそれを体現しているかのようだった。

ウオロ「……………なあ!」

キリト「っ!?!はああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!」

ウオロ主席がキリトの気迫に吞まれ、少し怯んだ隙に、キリトがウオロ主席の剣を弾き飛ばす。

お互いに吹き飛び、ウオロ主席の剣から光が消えるが、キリトの剣の光は未だに消えていない。

四連撃目を残していたキリトが最後の一撃を放つため、一気にウオロ主席の懐へと飛び込んだ。

ソードスキルの突進力を活かした高速の一撃にウオロ主席は反応できずにいた。

だが、距離があつたせいでも、キリトの最後の一撃はウォロ主席の服を掠つただけで、本には届いていなかった。

キリト「おおお！」

ウォロ「ちい………はあああ！」

硬直が解け、反撃に出たウォロ主席が眼前のキリトへと剣を振り下ろす。

負けじとキリトも水平切りを放つ。

このままでは相打ちになる！

焦つた俺がリーナ先輩に試合の中止を求めようとした時だった。

アズリカ「そこまで!!」

「!?」

声のした方を向くと、そこに居たのは、アズリカ先生だった。

何でアズリカ先生の一声だけで、ウォロ主席は剣を止めたんだ？

すると、タカトラ先輩が答えてくれた。

タカトラ「なるほどな。あの人の裁定なら、従わざるを得ないだろうな。」

カルム「何ですか？」

タカトラ「あの人は、7年前の四帝国統一大会におけるノーランガラス北帝国の第一代表剣士だからだ。」

カルム「えええ……………!!」

キリト「ええっ!」

キリトもウオロ主席から同様の事を聞いたのか、驚いた声を上げる。

マジかよ……………!!?

修剣学校で教師を務めている辺り、何かしらの実績を持っているかと思っただけが、俺の予想を超える凄い人だったらいい。

ウオロ「これにて、キリト錬士の懲罰は終了とする! 今後は誰かに泥を跳ね飛ばさないうように気を付けることだ。」

ウオロ主席は剣を仕舞いながら、そう告げ、この場を去っていく。

その瞬間、我に返った観客が一気に歓声を上げた。

「「「うおおおおおおおおお!!」「!!」「!!」

錬士「凄かったぞー!!」

錬士「リーバンテイン主席と引き分けるなんてな……………」

錬士「闘気だけで、鳥肌が立つくらいだったもんな……………」

錬士「カツコよかったぞ! キリト錬士!!」

賞賛と拍手の嵐に驚きながらも手を振るキリト。

黒剣は元の長さへと戻っていた。

どうやらさっきの出来事は一時的なものだったらしい。

そんな歓声を見無視し、俺は速足でキリトへと近づいた。

ちなみに、ライオスたちは呆然となっていた。

どうやら、予想が外れた……というよりも、見ている光景が信じられないといった感じのようだな。

まあ、同情する余地は全くないが。

キリトは剣を見ながら首を傾げていて、俺は文句の一つを言おうとしたが、リーナ先輩が速く着いていた。

リーナ先輩の顔は、凄く歪んでいた。

リーナ「……………斬られた、と思っただぞ。」

キリト「ええ……………俺もそう思いました。」

リーナ「……………なのに降参しないと……………この、大馬鹿者め！」

キリトを責めている筈なのに、リーナ先輩の声は嬉しそうだった。

リーナ先輩はキリトに微笑む。

リーナ「見事な……………素晴らしい戦い振りだったぞ、キリト。礼を言わせて貰うよ。

独り占め出来なかったのは残念だが……………お前は、約束通り、私に全力の戦いを見せてくれた。……………ありがとう。」

キリト「で、でも、引き分けですし……………」

リーナ「あのリーバンテイン相手に引き分けておいて不満か？」

キリト「い、いけ、そういうわけじゃ。」

キリトはかぶりを振り、リーナ先輩は笑って、肩に手を置く。

リーナ「もはや勝ち負けは問題ではないよ。お前の戦い振りに、私は大切な…………とて
も大切な物を学んだ。…………カルム君、キリトに言いたい事があるんじゃないか？」

カルム「いえ、大丈夫です。」

後で個人的にきつきりと言わせて貰いますから。

俺は苦笑を浮かべながら答える。

リーナ「そうか。なら、今日は祝杯をあげようか。カルム君。ユージオ君とケント君、
ゴルゴロツソ殿とタカトラ殿とユア殿も誘ってくれるかい？」

カルム「分かりました。」

俺は、すぐにケント達に誘いをかけて、リーナ先輩の部屋に集まる事に。

ただ、気になる事が二つある。

一つは、アズリカ先生がキリトの事を見つめている事だ。

もう一つは、あのライオス達の姿が見えない事だ。

思い通りに行かなかったから、悔しがっているのか？

そうして、宴が始まった。

??? side

まさか、キリトとカルムが伝えたであろうアインクラッド流には、四連撃技があるのか。

俺はただ、驚いていた。

ベルクリー・シンセシス・ワンやりヨウガ・シンセシス・スリーとは、何度も戦っているが、あの2人とは違う強さを、アイツらは持っている。

??? 「ますます興味深いな。」

しかも、あのキリトとやらの剣は、あのギガスシダーと同じ記憶を感じる。

もしかしたら、カルムも、刃王剣十聖刃の力を上手く使えるのではないかと思っっている。

すると、一体の蜘蛛がやってくる。

??? 「どうした、シャーロット。」

シャーロット「いえ、貴方があんなに目を輝かせるのは初めて見たと思いますね、ユーリ。」

ユーリ「ああ。アイツらは最高だ！この人界を救える可能性を秘めているのだから。」
シャーロット「この事は、マスターに伝えていきますので、大丈夫ですよ。」

ユーリ「そうだな。しかし、奴らがカセドラルに着いたとしても、こちら側に上手く引き込めれば良いのだがな。」

シャーロット「そうですね。」

もう、何度も同じ過ちは繰り返すわけには行かない。

俺たちはそう決意する。

第18話 世の理を書き換える想い

カルム side

あの後、リーナ先輩の部屋に、俺、キリト、ユージオ、ケント、タカトラ先輩、ゴルゴロッソ先輩、ユア先輩がお邪魔して、宴会となった。

そこから、ゴルゴロッソ先輩の、無限ループ剣技史ウンチクが始まった。

そんな話を聞いているうちに、酔いが回ったのか、ゴルゴロッソ先輩とユージオは酔い潰れて寝てしまった。

現在、ユア先輩とケントの2人で介抱していて、俺はタカトラ先輩と、キリトはリーナ先輩と話していた。

内容は、セルルト流が生まれた理由だ。

リーナ「それにしても、キリト達のアインクラッド流は、まだまだ奥が深いな。我がセルルト流は、実用剣術のつもりでいたが、まだまだ硬いな。」

タカトラ「俺のウエインライト流も、まだまだだと思いきった。カルムとキリトのアインクラッド流の技を見てな。」

キリト「いやあ……。ていうか、タカトラ先輩、カルムの剣技を見てたんですか？」

カルム「うん。四連撃技までは見せたぞ。」

すると、リーナ先輩は少し表情を暗くして、語り始めた。

リーナ「セルルト流剣術が生まれたのは、セルルト家が皇帝の不興を買ったためにハイ・ノルキア流剣術の伝承が禁止されてしまったことが起源なのだ。」

タカトラ「補足すると、セルルト家が不興を買った理由は領民のことを思つての行動だったのだが、当時の皇帝が余りにも愚脳でな。」

カルム「タカトラ先輩、そんな黒い笑みで言わないで下さいよ。怖いです。」

そんな風に言うから、誰も何も言えなくなつてしまった。

すると、リーナ先輩が空気を変えるかのように話題を変える。

リーナ「そういえば、タカトラのウエインライト流は、どういう経緯で生まれたんだ？」

カルム「確かに気になりますね。」

キリト「聞かせて下さいよ！」

タカトラ「大した理由じゃないぞ。………闇の国の侵攻に備えて、俺が独学で生み出した物だ。俺一人で十分だと思つていたが、カルムという継承者ができて良かった。」

リーナ「なるほどな。………私も、セルルト流の後継者がお前で良かったよ、キリト。」

そんな風に言われて、俺たちは照れ臭くなつてしまう。

なるほど、タカトラ先輩は、本当に人界を守ろうとしているんだな。

すると、タカトラ先輩が気になる事を口にした。

タカトラ「もしかしたら、ウオ口も、お前達が気になって勝負を挑んだのかもしれないな。」

キリト「ええつと、何ですか？」

リーナ「それは確かに。」

タカトラ「あくまでもしかしてだがな。ウオ口は、カルム、キリト、ユージオ、ケントの4人に興味を持っていたみたいだからな。」

カルム「そうなんですか？」

タカトラ「ああ。貴族出身でないこともそうだが、お前たちが使うアインクラッド流剣術や戦い方があまりにも他と違いすぎたことから注目していたらしいぞ。」

キリト「ええっ!？」

リーナ「そうなのか!？」

タカトラ「尤も、家柄の都合上、お前達を選ぶ訳には行かなかつたから、選ばなかつたが、機会があれば戦いたいと俺に言ってきたな。」

それを聞いて、俺は冷や汗を流す。

もしかしたら、対象が俺になっていた可能性があつたわけだ。

リーナ先輩も、違う意味で冷や汗を流していた。

そうして、宴会はお開きになり、俺はケントとユア先輩と協力して、ユージオを部屋に連れ帰る。

カルム「悪いな、手伝って貰って。」

ケント「大丈夫だ。気にするな。」

ユア「もうすぐ消灯時間だ。ちゃんと寝ろよ。」

カルム「はい。ちよつと、酔いを覚ましてくるから、ケントは先に寝ててくれ。」

ケント「ああ。」

俺は、酔い覚ましの為に外に出る。

カルム（酒を飲むのは初めてだったな。ちよつと飲みすぎた……………。）

俺は少しふらつきながらも、何とか外に出る事が出来た。

月を眺めていると、とある事を思う。

カルム（そういうえば、ミトは元気かな？少し会いたくなるな……………。）

そんなホームシックに襲われていると、校舎の外から声ができて、何事かと思ひ、見てみると、キリト、ライオス、ウンベール、ベル、ナツジが居た。

カルム（何でアイツらが？花なんて、興味を示す様な奴らじゃないのに。）

何か胸騒ぎがして、キリトの元へと向かう。

その際に、ライオス達とすれ違ったのだが。

ウンベール「おやおや！こんな時間にどこに行くのですかな！」

ナツジ「まさかとは思いますが、貴殿もあの様な花の世話に？」

ライオス「そんな無駄な事をするとは。」

ベル「傍付き殿も忙しそうですね！」

カルム「……………だったら、アンタらがここに居る理由もないだろう？」

ライオス「それもそうですな！」

何だ、いつにも増して、嫌味が多いな。

しかも、いつもなら、俺が無視したり、嫌味を返すと、こちらにきつい視線を向けてくるのに、今日はそれがない。

キリトの方を見ると、項垂れていた。

まさか……………。

アイツらを見無視して、キリトの方に行くと、ゼフィリアの花が無惨に散らされていた。

どうやら、懸念が当たったな。

なるほど……………アイツらが妙に嬉しそうなのはそれが理由か……………！

だが、あんなクズ共の相手をする暇はない。

キリトに近寄る。

カルム「キリト。」

キリト「カルム……………」

カルム「アイツら……………！これはどう見ても禁忌目録違反だろ！」

キリト「いや、この土は、央都の外から運んできた物だ。だから、《所有権の存在しない原野の土に生えているなら、その植物は誰の物でもない》と判断したんだろうな……………」

カルム「アイツら……………！！」

妙な所で悪知恵が働くな、アイツら！

もう笑いながら去ったであろうライオス達に殺意をぶつける。

まあ、あんなクズ共に相手をするほど暇じゃない。

俺は怒りの感情を抑えて、ゼフィリアの花の状態を見る。

状態を見てみると、根までは散らされていないが、この状態から花を咲かせるのは不可能に近い。

キリトの落胆する気持ちは痛いほど分かる。

キリト曰く、このゼフィリアの花は俺たちみたいだなと。

言われてみればそうだ。

日本からこんな異世界に来たのだ。

無理もない。

キリト「ごめんよ……………」。

カルム「キリト……………」。

俺は、泣いているキリトに対して、掛ける言葉が見つからなかった。それにしても、アンダーワールドの悪意は、何で俺たちに牙を剥く。

俺たちが平民だから？

俺たちがこの世界の住人じゃないから？

何で親しい人や愛する人たちと離され、いつ再会出来るかも分からない孤独や不安を味わっている俺たちに、そんなに攻撃をする。

そんなアンダーワールドに対する苛立ちが、俺の思考回路を埋め尽くしていた。すると、謎の声がした。

??? 「信じなさい。」

「!?」

誰もいないはずの花壇に女性らしき声が響いた。

慌てて周りを見渡すが、やはり花壇には人影は見つからない。

だが、次は違う声が響く。

それも、刃王剣十聖刃を手に入れた時に居た男性に似た声だ。

??? 「信じろ。異国の地でここまで育った花達の力を。」

カルム 「誰だ……………!？」

??? 「そして、その花をここまで育てたあなた自身の力を。」

声の主はキリトへ向けて言葉を送っているようだった。

女性と男性が1人ずついるのか？

キリトは、悲しさを滲ませた声で答える。

キリト 「……………でも、もう……………皆、死んでしまった。」

??? 「大丈夫。土に張った根は、まだ生きようとしているわ。」

??? 「それに、感じるだろう？この花壇に咲く聖花達が、小さな仲間を助けたいと思っ

ている。命を分け与えたいと願っている。」

??? 「あなた達なら、その願いをゼフィリアの根に伝えられる。」

キリト 「無理だ……………。俺たちにそんな高等神聖術は使えない……………」

カルム 「……………」

??? 「あらゆる術式は、心意……………お前達が言うイメージを整える道具に過ぎない。」

??? 「さあ、感じて。花達の祈りを……………。世界の、理を。」

キリト 「心から意する意志……………『心意』。」

カルム 「プログラムやシステムを超越する力……………想像する力……………なのか？」

キリトや俺の言葉に応えたかのように花壇の花たち全てが一斉に光を放ち始めた。

その光はまるで自分のたちの命を分け与えてもいい、そんな生命力に満ち溢れた光だった。

俺の勝手な考えかもしれないが、それでも俺はさっきの2人の言葉を……この光を信じてみたいと思った。

キリト「カルム、手伝ってくれ。」

カルム「ああ。」

キリト「……頼む。力を……命を、ほんの少しだけ分けてくれ。」

キリトの言葉で俺も想像する。

もし、ゼフィリアの花が生きているのなら、俺たちの体を媒介にして、花の生命力を、ゼフィリアの花に分ける。

そのイメージ共に花たちが放つ光が一段と輝きを増す。

そして、光が集結したかと思えば、ゼフィリアの花へと一気に降り注いだ。

その結果……ゼフィリアの花は息を吹き返したかのように蕾を揃え、元の姿へと復活していた。

キリト「これが心意なのかな……？」

カルム「多分な。さっきの声は……もうしないか。」

キリト「ありがとう。」

この世界は、不思議だな。

万物は、仮想世界のオブジェクトに過ぎないはずなのに、現実世界を持つ遙かに上回る美しさを………生命力を………意志を備えている。

そうだったな。

この世界には、悪意だけじゃない、善意もまた存在するのだ。

ライオス達が悪意の貴族だとしたら、タカトラ先輩達は、善意の貴族だ。

そして、この世界でできた親友の、ユージオにケント。

危うく、この世界を嫌いになってしまおう所だったな。

俺もまだまだだな。

そんな自虐心を抱きつつ、俺はキリトと共に寮に戻る。

今度は、キリトの物だと証明するべく、キリトの校章を置いて。

そういうえば、想いがシステムを越えるのを見たのは初めてじゃないな。

ヒースクリフとの決戦の時、システムの麻痺に襲われていたミトとアスナの2人が、麻痺を解除して、助太刀してくれた。

あの時から、心意を感じていたのかもな。

そして、遂に卒業式の日が来た。

卒業トーナメントを見学するため、大修剣場に来た俺たちの目下では激戦が繰り広げられていた。

ちなみに、タカトラ先輩も参加したが、リーナ先輩に敗れた。

リーナ先輩とウオロ主席のツートップの剣士。

その一進一退の攻防は観客全ての目を釘付けにしていた。

剣がぶつかり合うたびに剣圧が発生し、戦いの激しさを物語っていた。

だが、遂に勝負を決する時がきた。

ウオロ主席が剣を上段へと構えた。

キリトとの試合の時にも放ったハイ・ノルキア流剣術秘奥義〈天山烈波〉の構えだ。

それに対するリーナ先輩が構えるのは、セルルト流剣術秘奥義〈輪渦〉(両手剣ソード

スキルのサイクロンだ。)で迎え撃つようだ。

お互いの剣気がぶつかる中、両者が動く。

ウオロ「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

リーナ「はあああああああああああああああ!!!」

気合いと共に放たれた両者の秘奥義がぶつかる。

そのぶつかり合いに、会場全体が振動しているかのような錯覚を覚えた。

そして、技の打ち合いを制したのは……………。

リーナ「いやあああああああああああああああああああああ!!!」

その氣迫と共に、ウオロ主席の模造剣を叩き折ったリーナ先輩だった!!

流石のウオロ主席も剣を折られるとは思っていなかったのか、驚愕の表情を浮かべていた。

そのまま、リーナ先輩はウオロ主席の首へと剣を突き付けた。

アズリカ「そこまで！」

アズリカ先生の掛け声と共に会場に歓声が爆発する。

二人の試合に拍手喝采の嵐が起こっていた。

その歓声に手を振って応えるリーナ先輩、そして、やられたといったよう表情でその様子を見つめながら苦笑するウオロ主席の姿があった。

俺たちも、拍手を送る。

そして、遂にお別れの時だ。

俺は、ユージオとケントと共に、ワインをそれぞれの先輩に渡す。

俺は、自作で何かを作れる程、器用ではないからな。

その横で、キリトが見事に花をつけたゼフィリアの花をリーナ先輩に送っていた。

すると、タカトラ先輩が眩く。

タカトラ「カルム。あれは、キリトが育てたのか？」

カルム「はい。一生懸命、キリトが努力を重ねた結晶です。」

タカトラ「なるほどな………。」

カルム「先輩？」

何かを考え込むような表情をする先輩に問いかけるが、何でもないと返された。

タカトラ「まあ、傍向きを指名する際には、ちゃんと見極めるよ。」

カルム「いや、まだ上級修剣士になったわけじゃないんですが。」

タカトラ「そうか？お前なら、なれるさ。それより、大丈夫か、キリトは？セルルトがあんな表情を向ける男性を始めてみたのだが。」

カルム「言わないでください。」

アイツ、リーナ先輩を惚れさせやがった！

これをアスナが知ったら、一体どんな反応をするんだか。

ミトも、問い詰めてこないといひだけだ。

そうして、リーナ先輩が1位、タカトラ先輩は3位、ゴルゴロツソ先輩は4位、ユア先輩は5位の成績で卒業した。

ケント side

先輩達が卒業して、試験を受けて、俺たちは上級修剣士となった。

カルムが6位、俺が5位、キリトが8位、ユージオが7位となった。意外にも、ライオスが主席、ウンベールが次席、ベルが3位、ナツジが4位である事だ。

それをキリトとカルムは、こう呟いていた。

キリト「多分、手を抜いていたんだろうな。」

カルム「自尊心の塊であるアイツらが、傍付きになるなんてあり得ないからな。」
手を抜くのは剣士としてどうなんだと返したのだが。

カルム「それがアイツらだ。全く、正々堂々と出来ないのかね？」

そんな風に毒づいていた。

そんな事を考えていたからか、突然の声に驚いてしまった。

ルナ「ケント上級修剣士殿、ご報告します！本日の掃除、完了致しました！」

ケント「ああ。ご苦労様、ルナ。今日はもうこれで寮に戻って良いぞ。……………その……………」

彼女はルナ・カウマン。

俺の傍付き初等錬士だ。

彼女は、六等貴族だ。

そして、ルナの隣で直立不動の状態で立っている彼女にも、声をかける。

ケント「……悪いな、シオリ。アイツには何度も、部屋の掃除が終わるまでには戻って来いと言ったんだが……」

シオリ「い、いえ、報告を完了するまでが任務ですから！」

彼女はシオリ・ヒューレット。

彼女も六等貴族で、カルムの傍付きだ。

すると、扉の方から慌てた足音がしてきて、カルムが入ってくる。

カルム「悪い！遅れた!!」

シオリ「カルム上級修剣士殿！本日の掃除、完了致しました！」

カルム「お疲れ様。」

カルムは、腕に何かの紙袋を抱えていた。

そこから、甘い匂いがするので、跳ね鹿亭の蜂蜜パイだろう。

ケント「カルム。もう少し早く帰って来い。」

カルム「悪い。キリトの奴がのんびりしててさ。」

ケント「お前も大変だな。」

カルム「全くだ。……はい、キリトも、ロニエとティーゼを介して蜂蜜パイを渡してるだろうから、君たちも、残りは寮の皆で食べてくれ。」

そう言って、カルムは蜂蜜パイを二つだけ取り出して、残りをルナとシオリに渡す。

2人は年相応の少女らしい歓声を上げた後、慌てたように姿勢を正す。シオリ「あ、ありがとうございます上級修剣士殿！」

ルナ「頂いた物資の天命が減少しないよう、全速で寮に戻ります！」
高速で略式礼をして、出ていく。

廊下から、歓声が聞こえて、たちまち遠ざかっていく。

俺は蜂蜜パイを一口食べて、カルムを見る。

ケント「それで、何で俺たちがここにいるのかを忘れていないだろうな？」

カルム「忘れてないよ。あと少しで、カセドラルに向かえる。そうすれば……………」
ケント「イーデイスに会える……………」

そんな思いを抱きつつ、俺は壁に立てかけてある2本の剣を見る。

俺たちは、決して諦めない。

第19話 剣士としての決意

カルム side

人界暦380年 5月17日

俺、ケント、ユージオの3人で、上級修剣士の修練場へと来ていた。

キリトがない理由は、ユージオ曰く、上級神聖術の試験に対する一夜漬けを敢行するらしい。

アイツ、試験勉強はちゃんとすべきだろう。

やれやれ……………。

修練場でやる事は、丸太への打ち込みと、模擬試合での特訓だ。

今は、ユージオが丸太への打ち込みをしていて、俺とケントで模擬試合をしていた。

カルム「懐かしいな。ルーリッドやザツカリアでも、こうして、剣をぶつけ合ったな。」

ケント「あの時はこんな風に戦えるようになるなんて思ってもみてなかったがな。」

カルム「そうだな。あの時なんて、稽古中にしゃべる余裕なんてなかったしね。」

ケント「それでも！今でも、お前やキリトに剣が届くイメージが全くないがな！」

そう言っているが、ケントは笑いながら木剣を振るう。

俺も木剣でそれを受け止める。

ケントとユージオの2人は本当に成長速度が速い。

俺も、今はまだ勝っているが、本気で戦うことになったら、勝てるのかどうか分からない。

若干戦慄するな。

ケント「バーチカル！」

カルム「甘い！」

ケントのソードスキルに対して、俺は、カスケードを放ち、迎撃する。

その際に込めた想いは、『大切な人の笑顔を守る。』事。

これだけは、これからも変わらない。

カルム「俺の勝ちだ。師匠として、まだまだ弟子に負ける訳にはいかないんでね。」

ケント「……………降参だ。」

ケントのスラントを模造剣ごと弾き飛ばし、俺はケントの眉間に模造剣を突き付けた。

両手を上げ、降参の意を示したケントに俺は笑みを浮かべながらそう告げるのだった。

その後、ユージオとも戦い、俺が勝利した。

模擬試合を終え、シラル水を飲んでみると、ケントとユージオが尋ねてくる。

ユージオ「ねえ、カラム。」

カラム「うん？」

ケント「カラムは、剣にどういった想いを乗せているんだ？」

どういう事だ？

俺が首を傾げると、2人は目を伏せながら答える。

ユージオ「前にキリトが言ってたよね？」

ケント「この世界じゃ、剣に自身の想いを乗せることが大事、剣の重さが戦いの全てを左右するって。」

カラム「ああ。ウオロ主席との懲罰試合の後に言ってたことか。」

そういうえば、そんな事を言ってたな。

キリトが言っていたのは、心意………剣を振るう時に乗せる覚悟や決意のことを指していた。

例えば、ウオロ主席であれば『騎士団指南役の家に生まれたという誇りと重責』、ゴルゴロツツ先輩は『鍛え上げられた自身の肉体への自信』、リーナ先輩は『積み重ね、研ぎ澄まされてきた剣術の冴え』、タカトラ先輩は『迫り来る闇の国の侵攻に、力無き民を守る決意』、ユア先輩は『己の剣術を研ぎ澄まし、人を守る意志』というものだ。

キリト曰く、ウオロ主席と戦っている時、アスナや俺、ミトを始めとする仲間達をイメージして、引き分けに持ち込めたらしい。

ユージオ「キリトは、僕ら自身が見つけないといけないって言ってたけど……………」
ケント「貴族でも剣士でもない俺たちに見つけられるかと思つてな……………」

カルム「なるほどね……………」

ケントもユージオも、悩んでいるんだな。

俺はどう返すべきか考えて、答えた。

カルム「俺は、絶対に守りたい人の泣いてる姿を見たくない想いを乗せているな。」

ユージオ「えっ？」

ケント「どういう事だ？」

カルム「その人はな、強いけど、自分の弱さを内に秘めてる。だから、その人を泣かせたくないという気持ちだな。」

ユージオ「凄いね、カルムは。」

ケント「そこまではつきりと言い切れるなんてな。」

カルム「俺から言わせると、2人も凄いなと思うぜ。」

「「えっ？」」

俺の言葉に驚くユージオとケントだが、俺は構わずに言葉を紡ぐ。

カルム「多分、2人には、自信が足りないからだと思うんだ。」

ユージオ「自信……………?」

カルム「いやさ、剣士でもない2人が、こうして修剣学院に通っている。ギガスシダーに斧しか振わなかった2人が。さっきの試合も、手加減出来なかったし。」

ケント「だが……………」

カルム「もう分かっているはずだ。2人が誰の為にその剣を振るうのか。」

「!!」

多分、2人の行動源は、紛れもなく、イーデイスとアリスの為だ。

だからこそ、ここまで来れたんだ。

俺は2人に手を差し伸べる。

カルム「その想いを剣に込めろ。俺やキリトだって、1人だったら、ここまで強くはない。2人が居たからこそだ。2人の守りたい者の為に、その剣を振れば十分だと思うよ。」

ユージオ「僕たちの……………」

ケント「守りたい人……………」

まあ、これぐらいのヒントは必要かもな。

後は、2人が見つけてくれれば。

すると、ケントが尋ねてくる。

ユージオ「あれ？笑顔を守りたい人？」

ケント「まさか！記憶が戻ったのか!？」

カルム「え!?!……あく。なんとなく、そんな気がするんだ！それを思い出してさ！アハハハ……!」

ユージオ「そっか！」

ケント「なら、記憶を取り戻すのも時間の問題かもしれないな！」

カルム「そ、そうだね……!（ウツ!）」

そういえば、記憶喪失だった設定があつたな。

ヤバい、このままじゃ、純粋な2人に根負けして、本当の事を暴露しそうだ。

罪悪感が……!!

そんな風に考えていると、変な匂いがしてきた。

なんか、ベとつくような嫌な匂いが……。

そんな匂いを撒き散らすのは、とある四人組以外には知らない。

すると。

ライオス「おや？和やかな声がしたと思つたら。」

ベル「ユージオ……修剣士、ケント……修剣士、カルム……修剣士ではないか。」

振り返ると、そこには、やっぱりと言うべきか、ライオス、ウンベール、ベル、ナツジの悪意の貴族組が居た。

ベルが、わざと名前と修剣士の間に入れてしたのは、性を持たない事への嫌味だろう。飽きないな、お前ら……………。

ただ、4人は、俺に対する視線が強い。

理由は、ゼフィリアの花閨連だろう。

自分達が無惨にも散らしたのにも関わらず、何事も無かったかのようにゼフィリアの花を渡すのを見て、驚愕していたからな。

恐らく、俺を化け物か何かと思っているのかな？

カルム「ライオス殿にウンベール殿、ベル殿、ナツジ殿も修練に来たのですか？」

ベル「ええ。まあ、そちらは、談笑するくらいには暇を持て余しているようですが？」

カルム「丁度、修練が終わり、休憩していた所なので。どうぞ、ご自由に。」

「……………チツ。」

おい、ウンベールにナツジ、舌打ちぐらいは隠せよ。

そんなに俺が挑発に乗らないのがつまらないのかよ。

カルム「2人とも。」

ユージオ「うん。」

ケント「ああ。」

コイツらといると碌な事にならなそうだ。

2人とアイコンタクトを取り、木剣の手入れをして、撤収準備を始める。

ただ、そんな俺たちを、アイツらが無視する筈もなく。

ライオス「おや、もう鍛錬は宜しいのですか？」

ベル「辺境の田舎に住んでいたあなた方は疲れたのか？」

ウンベール「まあまあ、ライオス殿にベル殿。」

ナツジ「聞けば、ユージオ殿とケント殿は元は木こり。丸太程度の技しかご存知ないのでは？」

ライオス「ほう！それはそれは！」

ベル「これは、同じ寮に住む者として、型の一つでもご教授すべきかな？」

ウンベール「おー！ライオス殿とベル殿の寛大さたるや、まさしく爵士の鏡ですな！」

ナツジ「そうは思わんか？ユージオ殿、ケント殿、カルム殿。」

カルム「（お前らが言うな。）……………はあ。」

「……………」

そんな風に呼び止められたので、心の中で毒づきながら、覇気のない声で答える。

爵士の鏡？

知らないな、ただのガキの鏡の間違いでは？

そんな皮肉も思う。

ウンベール「ライオス殿とベル殿のお言葉に甘えて、指導を受けてみてはいがかかな
？」

ナツジ「このような機会、二度とないかもしれないかもしれませんよ。」

カルム（要するに、ユージオとケントを故意的に怪我させようとするんだろな。）
思わず盛大なため息が出そうになるが、ぐつと飲み込んで俺はユージオとケントの2
人に判断を委ねた。

ちなみに俺は断る一択だったが、ユージオとケントはどうかと思ったのだ。

ケント「それでは、お言葉に甘えて。」

ユージオ「一手ご教授願えますか？」

カルム「……………！」

ウンベール「……………ほほう。」

ナツジ「へえ……………」

ケントとユージオの目は、覚悟が決まっている顔だった。

俺は少し驚いて、ウンベールとナツジの2人は、嘲笑うかの様な表情を見せる。

ウンベール「ユージオ修剣士、ケント修剣士。」

ナツジ「それは本気かい？」

ユージオ「はい。次席であるウンベール・ジーゼック殿と4位であるナツジ・キャンサー殿の高貴なる剣を、この身に直接ご指導頂ければと……お願いできますか？」

ウンベール「な、なんだと!？」

ナツジ「何!？」

ユージオの言葉が本気である事が分かり、2人の表情が怒りに染まる。

恐らく、逃げると思ってたんだな。

ただ、ライオスとベルの2人は妙に冷静だ。

ライオス「それはつまり。」

ベル「2人はウンベールとナツジの剣に打たれたという事か？」

ケント「もちろん寸止めでお願ひしたいですが……。しかし、こちらは指導を乞う立場。この上注文するのは無礼というものでしょう」

ケントとユージオは、落ち着いていた。

そんな2人の姿が気に入らなかつたのか、はたまた事故に見せかけて怪我を負わせられることを喜んでいるのか、ウンベールとナツジは木剣を抜きながら2人へと言葉を掛けた。

ウンベール「良いだろう！貴殿らのその向上心に免じ、真の剣術となるものを教えて

やろう！」

ナツジ「カルム殿も、宜しいかな？」

ナツジが確認を取ってきたので、俺はユージオとケントに確認を取る。

カルム「2人とも、本当に良いのか？」

ユージオ「うん。良い機会だと思うんだ。あの4人の自尊心が生み出す力がどうい
ものかを知ってみたいくて。」

カルム（確かに、その点に関しては、俺たちよりも優れているだろうけど……………。）

ケント「それに、信じてみようと思うんだ。」

カルム「え？」

ケント「カルムが言う強さが、思いが彼らにどこまで通用するのか。……………今度こそ、
俺たちの剣が、2人を守るのかを試したい。」

カルム「……………分かった。油断するな。」

どうやら、迷いはないみたいだな。

俺は、壁際にまで下がって、事の成り行きを見守る事に。

ウンベール「そろそろいいかな？では、参るぞ！」

ナツジ「ハイ・ノルキア流の真髄……………！その身をもって学ぶがよい!!」

カルム「ノルキア流剣術〈雷閃斬〉か。」

雷閃斬……：バーチカルの構えを取ったウンベールとナツジに対して、ユージオとケントは半身を引いて、右手で剣を掴む。

ウンベール「参る！」

ナツジ「行きますよ！」

「!!」

掛け声と共にウンベールとナツジは雷閃斬を放ち、ユージオとケントはスラントで迎え撃った。

修錬場に秘奥義の衝突音と衝撃による突風が吹くも、目を反らすことなく俺はどうなったのかを見続けていた。

ウンベール「なっ!？」

ナツジ「何ッ!？」

ウンベールとナツジは、自分の秘奥義が相殺された事に驚愕していた。対するユージオとケントは冷静だった。

すかさず剣をずらし、ユージオとケントの体勢を崩したところで追撃をかけたウンベールとナツジだったが、それすらも2人は即座に反応し防ぎ切った。

カルム「流石だ。」

ライオス「ほう。」

ベル「少しはやるではないか。」

やはり剣の腕だけでいえばユージオとケントの方に軍配が上がるといつてもいいよ
うだ。

秘奥義越しの鏝競り合いから、じりじりとウンベールとナツジの剣を押し返していく
ユージオとケント。

しかし……………。

ウンベール「つ……………平民が！」

ナツジ「調子に乗るなああ！」

ユージオ「っ!？」

ケント「なんだ!？」

カルム(……………!?!奴らの心意か!?)

ウンベールの剣に禍々しいオーラが宿ったかと思えば、一気に剣圧が強まった。

アレが、心意なのだろう。

カルム(アレが、あの2人の自尊心が生み出す心意か……………!?!)

ウンベール「その無様な姿に、流派の卑しさがにじみ出ているぞ?」

ユージオ「くっ……………うう!？」

剣圧に押しされ膝を突くユージオとケント。

そんな2人に止めを刺さんとばかりにウンベールとナツジが剣に力を込める。

ナツジ「君達の右肩を砕いて、剣を振るえなくさせてやろう！」

カルム「不味い……………」

このままじゃ、ユージオとケントが負傷して、連中の思惑通りになってしまう！

加勢しようとする、まさかの光景が目に入ってきた。

ユージオ「ハアア!!」

ケント「そこだ！」

ウンベール「なあッ!」

ナツジ「何ッ!」

剣を僅かにずらし、ウンベールとナツジの秘奥義をユージオとケントは紙一重で回避したのだ。

流石のアイツらも力を込めていたことが仇となり、重心が前へと取られてしまう。そして、背後を取ったユージオとケントが放ったのは、バーチカルだった。

「ハアアアア!!!」

ウンベール「うわああ!!」

ナツジ「クッ!」

カルム（アレは、スキルコネクト!?)

だが、スキルコネクトは、俺とキリトがスリウムヘイムで行ってはいるが、アレは2本剣があるからできる事で、剣一本で出来るとは知らなかった。

ウンベールとナツジが大きく吹き飛ばされ、ユージオとケントが追撃しようとするが。

ライオス「そこまで。」

ベル「この立ち合いは、引き分けだ。」

確かに。

ウンベールとナツジは、吹っ飛ばされつつも、倒れていないのだ。

それは正しい。

俺がユージオとケントの元に向かうと、ウンベールとナツジが不満そうな顔で抗議する。

ウンベール「ライオス殿！ベル殿！」

ナツジ「この私が、あのような田舎剣士と引き分けるなど!?!」

ライオス「ウンベール、ナツジ。」

ベル「俺たちの言う事が聞けないのか？」

その言葉で、抗議することを諦めたウンベールとナツジは口を閉ざした。

互いに剣を収め、礼をしているところに、ライオスとベルがユージオとケントへと声

を掛けていた。

ライオス「貴殿の珍なる技、大いに楽しめたぞ、ユージオ修劍士、ケント修劍士。」

ベル「貴殿も主席殿も卒業後には、帝立曲芸団辺りにでも天職を求めては如何かな？」

ユージオ「……………お気遣い痛み入ります。ライオス・アンティノス修劍士、ベル・アバドン修劍士。」

ベル「次は、私たちが貴族の力とやらをお見せしましょうか？」

ケント「……………俺は今でも構いませんが。」

ライオス「剣を振り回すばかりが戦いではないぞ、平民！」

怒りが込められた視線を俺たちにぶつけて、奴らは退散した。

ユージオ「ハア……………」

カルム「お疲れ。」

ケント「心配かけて悪かったな。」

カルム「大丈夫だ。それに、秘奥義連携も見れた事だしな。」

ユージオ「秘奥義連携って、さっきの？」

ケント「俺も、出来るとは思わなかった。」

そんな風に話している中、2つの懸念が脳裏を過ぎる。

一つ目は、先ほどのライオスの言葉だ。

もしかしたら、更に挑発をしてくるかもしれない。

二つ目は、ユージオとケントの成長速度の速さだ。

カルム（これは、すぐにでも追い抜かれそうな気がするな。）

そんな危機感を抱いていた。

しかし、何事もなく、3日が過ぎた。

その日、俺たちは、キリトとユージオの部屋に集まっていた。

ユージオ「アレから3日経つけど……。」

ケント「嫌がらせの予告をしておいて、何もしてこないとはな。」

それを聞いたキリトが、コヒル茶を飲みながら、答えた。

キリト「禁忌目録も、学院規則もあるんだし、厳しんだろう。」

カルム「まあ、それは裏を返せば、禁忌にならなければ、何をしてきてもおかしくな

いって事だな。」

それを聞いたユージオとケントは、少し吹き出して、聞いてくる。

ユージオ「禁忌に触れない？」

ケント「どういう意味だ？」

カルム「うゝん。俺たちにそう思わせて、気疲れさせる作戦かもしれないな。」

キリト「平常心を忘れないように、ステイ・クールで行こうぜ。」

ユージオ「何だつて？」

ケント「す……………すて……………？」

カルム「……………。」

変なこと言いやがつて。

ユージオとケントが混乱してるだろ。

キリト「あつ、ええつとだな……………！アインクラッド流剣術極意その1だよ！『落ちて行こうぜ』みたいな意味かな。なつ、カルム！』

カルム「そうだな。（極意なんて、初耳なんだがな。）」

キリト「それと別れの挨拶でも『じゃあ、またな』みたいな感じで使うこともあるな。」

ユージオ「へえ……………。分かった、覚えておくよ。」

ケント「ああ。ステイクル？」

アンダーワールドの人は、英語……………もとい神聖語には慣れてないんだから、あんまりそんな事を言うなよ。

そんな想いをジト目に込めて、キリトを睨んでみると、苦笑しながら立つ。

カルム「さて、俺とケントはお暇するよ。」

キリト「そうだな。さて、俺たちもそろそろ寝るか。……………んで、明日だが、ユージオ君、ケント君、カルム君。俺はちよつと用事が出来て……………」

ユージオ「ダメだよ、キリト！」

ケント「明日の安息日は、ルナとシオリとティーゼとロニエと、親睦会も兼ねて、森に行く予定だろ？」

カルム「逃げるなよ、キリト君。後、さっきのキリトの喋り方、なんかムカつく。」

キリト「分かったよ。じゃあ、8時に起こしてくれ。おやすみ。」

ユージオ「8時じゃ遅いよ！7時半に起こすからね！」

そうして、俺とケントは、キリトとユージオの部屋から退室し、自分達の部屋に戻る。ケント side

キリトとユージオの部屋から退室して、自分達の部屋に戻ってきた俺たちは、もう寝る事にする。

カルム「じゃあ、7時半には起きるから。」

ケント「分かった。ステイ・クール。」

カルム「いや、その言葉は、そう頻繁に使うものじゃないんだ。なんて言うか……長いお別れになる時に使う言葉だと思ってもらえばいいのかな。」

ケント「……そうなんだな。少し、ややこしいな。」

カルム「そうだな。それじゃ、おやすみ。」

改めて、ステイ・クールという言葉の使い方を理解して、俺は自分の布団に入る。

だが、俺はカルムのとある言葉が、脳裏から離れない。

カルム『まあ、それは裏を返せば、禁忌にならなければ、何をしてきてもおかしくな
いって事だな。』

カルムの言う通りなら、ライオスにウンベール、ベル、ナツジは、公理教会が定めた
法に、嫌々従っているのか？

禁忌目録は絶対だ。

しかし、その考えが許されるのなら、イーデイスが攫われたあの時に、動けなかった
俺は、一体何を、何の為に守ってきたんだ？

禁忌目録について考えると、右目が痛む。

なんでだかは分からない。

しかし……………。

ケント「イーデイス……………」

俺は、イーデイスの名前を口にして、そのまま寝る事にした。

第20話 貴族の責務

ケント side

高い鉄柵に囲まれた修剣学院の敷地は、その3割近くが、うっそうとした森で占められている。

金色がかった苔を宿した古木が連なり、緑の下生えに木漏れ日が揺れる様は、ルーリッドの森を思い起こさせる。

ただ、見た事のない動物がたくさんいて、中々に飽きないのだ。

俺とユージオが、森を見ていると。

ルナ「ケント先輩、聞いているんですか？」

ティーゼ「ユージオ先輩、聞いているんですか？」

すると、隣から声が出て、慌てて視線をルナに戻す。

ユージオ「ごめんごめん、聞いているよ。」

ケント「ええと、何だっけな？」

ルナ「聞いてなかったんですね……。」

ティーゼ「聞いてないじゃないですか！」

ケント「悪い。森があまりにも綺麗だな。」

ユージオ「それに、珍しい動物もいるから……………」

ルナ「珍しい？」

ティーゼ「何がですか？」

ルナとティーゼは、俺達の視線を追ってから、肩を竦める。

ルナ「アレはただのキントビギツネですよ。」

ティーゼ「あんなの、街区に生えてる樹にだって一杯棲んでますよ。」

ケント「そうなのか……………」

ユージオ「そういえば、ティーゼとルナは央都出身だったな。家は近いのか？」

ルナ「実家は八区だから、学院がある五区からはちよつと遠いわね。」

ティーゼ「そうです。」

ケント「そうなのか……………」

ユージオ「あれ？」

俺とユージオは、一つ気になった事があるので、ルナに聞いてみる事に。

ケント「ルナとティーゼは、貴族出身だろう？」

ユージオ「貴族の屋敷は、三区と四区に集まってるって聞いたんだけど……………」

そう尋ねると、ルナとティーゼは照れたように首を縮めて、小さく頷く。

ルナ「お屋敷街に住めるのは、四等爵士までで、私たちの父は六等爵士で、裁決権を持つてなくて……………」

ケント「裁決権つて、貴族なら誰もが持つてそうだが……………」

ティーゼ「とんでもないです！裁決権を持つているのは、それこそ四等爵士までで、五等以下の爵士は逆に、上級貴族の裁決の対象になっているんですよ。」

ユージオ「そ、そうなんだ……………」

ティーゼ「で、ですから……………私たちがみたいな六等爵士の跡取り娘なんです。」

ルナ「だから、貴族なんて名ばかりで、暮らしては平民となんら変わらないの。」

ユージオ「ふ、ふうん……………」

ケント「そうなんだ……………」

俺たちは曖昧な声を出して、国の仕組みについて考える。

帝国基本法は、ノーランガルス北帝国の社会制度を定めているが、実際には、あらゆる罪とそれに対する罰は、禁忌目録に網羅されているため、帝国基本法は、貴族の権利と平民の権利についての規則が大部分だ。

初等錬士時代に、いずれ来る闇の軍勢が攻めてきた際に、貴族は指揮官として、剣技を磨き、術式を学び、心身を鍛えていると説明があった。

これは、某黒髪の生徒が質問したからだ。

だが、俺たちは、それを聞いて、感心しつつも、割り切れなかった。以前、俺たちは、闇の軍勢であろうゴブリンと戦った。

しかし、当の貴族達は、いざやってくる闇の軍勢に備える為に日々の労働を免除され、広大な屋敷に住み、下級貴族に裁決権を行使している。

そんな風に思うと、相棒とユージオの相棒の声が聞こえてくる。

キリト「……………だから、ハイ・ノルキア流の上段の構えから放たれる斬撃で、事前に備えるべきは2つしかないと考えて良いんだ。」

カルム「真上からか、斜め右上から……………その他の軌道は、必ず足を踏み替えるから、それを見てからでも受けは間に合う。……………」

どんな会話をしているんだ、カルムとキリトの2人は。

まあ、シオリもロニエも熱心に聞いているしな。

ただ、一つだけ、気になる事がある。

それは、カルムとキリトが、何の目的で剣を学ぶのかだ。

2人が剣を学んでいるのは、それによって何かを得るのではなく、剣の道を極めるのが目的なのではないかと思う。

そんな風に思いながら、食事をする。

食事は、ロニエとティーゼ、シオリ、ルナが作ってくれた。

キリト「はあく。食った、食った。」

カルム「美味しかったな。」

ルナ「あの、すいません、先輩方。」

ティーゼ「実は、お願いがあるんです。」

カルム「お願い？」

ティーゼのアイコンタクトを機に、彼女たちは真面目な雰囲気と共にそう話を切り出して来たのだ。

その表情にはどこか申し訳なような感情も込められており、どうやらかなり深刻の話のようだ。察した俺たちは腰を落ち着けてから話を聞く体制に入った。

ケント「それで、お願いって？」

ティーゼ「実は、寮で同室のフレニーカとアマネという子何ですが……………」

ロニエ「実は、その2人を傍付きとして指名なされた上級修剣士殿が、かなり厳しい方で……………」

カルム「厳しい？ 指導が？」

カルムがそう聞くが、そうではない事が分かる。

事実、ティーゼとルナは言いにくそうに口を抑えていた。

そんな2人に代わって、ロニエとシオリが説明してくれた。

ロニエ「特にここ数日、少々不適切なことを言いつけになられたようで。」

ユージオ「いくら上級修剣士でも、学院規定外の範囲の仕事は言いつけたりはできないはずだけど……………」

シオリ「ですが、違反にはならずとも、その……………女子生徒としては少々……………」

カルム「分かった。もうそれ以上は言わなくていい。」

カルムも、シオリが辛そうな表情をしているのを見て、それ以上は言わせなかった。

ユージオ「状況は分かったよ。だけど、フレニーカとアマネの指導生を変更させるには指導生本人の同意も必要なんだ。」

ケント「問題の修剣士は誰なんだ？」

ティーゼ「……………ウンベール・ジーゼツク次席上級修剣士殿と、ナツジ・キャンサー上級修剣士殿です。」

「またあいつらか。」

ティーゼから告げられた名前に、キリトとカルムが嫌そうな顔をして呟く。

カルムに至っては、頭を抑えていた。

その言葉に、ルナ達は驚いていた。

ユージオ「実は、何日か前に僕とケントは、ウンベール修剣士とナツジ修剣士と修練場で立ち合ったんだ。」

ケント「結果は引き分けだがな。」

カルム「ライオスとベルの介入がなかったら、確実にユージオとケントが勝ってたほどに優勢だったんだ。もしかしたら、それに納得できずフレニーカとアマネって子に苛立ちをぶつけるためにそうしているのかもしれない。」

ロニエ「それってつまり、腹いせってことですか？」

カルムが憶測して、ロニエがそう答える。

カルムの手は、きつく握られていた。

恐らく、かなり怒っている。

ティーゼ「私には分かりません」

ユージオ「……………ティーゼ？」

ティーゼ「私とルナのお父様は言っていました。私たちが一般民よりも大きな家に住み、いくつかの特権を与えられているのは当たり前だと思っではいけない……………。貴族は、貴族ではない人たちが楽しく、平和に暮らせるように尽くさなければならぬ。そして、いつか戦が起きた時は真っ先に剣を取らなければならぬと！」

ルナ「なのに、ウンベール上級修劍士殿とナツジ上級修劍士殿のご命令の為にフレニーカとアマネはずっとベットの所で泣いておりました！なんでそんなことが許される……………？」

悔しさの余り、泣き出すティーゼとルナ。

ロニエとシオリも、ハンカチを2人に渡し、悔しさを滲ませていた。すると。

カルム「ノブレス・オブリージュ。」

「「「「え?」」」」

カルムが発した神聖語に、ルナ達に、俺とユージオが驚く。

カルム「ティーゼ、ルナ。君たちのお父さんが教えたのは、ノブレス・オブリージュ。……神聖語で、ノーブル・オブリーションだつて言えば分かるか。貴族、つまりは力や地位を持つ者はそれを自身ではなく、力のない他者の為に使うべきだという一つの信念みたいなものだ。」

ユージオ「信念……。」

キリト「ああ。誇りやプライド、負うべき責任や義務とも言う意味でもある。」

ケント「負うべき責任や義務……。」

カルムが言った言葉に、ユージオが呟き、キリトが捕捉して、俺も呟く。

カルムの話は続く。

カルム「俺が傍付きをしていた先輩が良く言つてたんだよ。『貴族とは、闇の軍勢の侵攻が起こった際に、真っ先に剣を取り、力無き民を守る為にある。』ってな。」

ケント「タカトラ先輩か……。」

カルム「うん。俺が言いたいのは、そういつた誇りや信念というのは時には規則よりも大切なものなんだ。」

キリト「例え、法律が禁じていないことであっても、してはいけないことは存在している。もちろん、その逆も然りだ。法律が禁じていたとしても、時にはそれを破つてでもしなきゃいけないことも存在するかもしれない。」

カルム「それが誰かの自由や尊厳を守るためであるのなら、罰されるのを覚悟してでもやり抜くことが大事なんじゃないかと俺は思う。」

カルムは一旦、言葉を切つて、俺たちを見てくる。

その瞳は、力強い信念を携えていた。

カルム「ずっと昔、聖アウグステイヌスという偉い人が言った。正しくない法は法ではない、つてな。どんな立派な法や権威でも、盲信してはいけないと思う。何が正しいのか、正しくないのかは、自ら考え、判断して、行動する。それが、貴族のあるべき姿なんじゃないのかと、俺は思うよ。」

ケント「カルム……。」

カルムは、タカトラ先輩と接してきて、そんな風に学んだのか。

あの人は、本当に良い先輩だったんだな。

すると、ロニエとシオリが口を開く。

シオリ「何が正しいのか、正しくないのかは、自ら考えて、判断する……………」

ロニエ「私、なんとなくですが、カルム先輩の仰りたいことが分かった気がします。それって、自分の中の正義ってことですよ？法を遵守するのではなく、それが本当に正しいのかを自分の正義と照らし合わせる、そういうことですよ？」

カルム「そういう事だ。自らで考え、判断するのが、最も重要だ。凡ゆる物には、絶対という文字は存在しない。」

キリト「その通りだ。ロニエ、考えることは人間の一番強い力なんだ。どんな名剣、どんな秘奥義よりも強い。禁忌や学則に反していなくともウンベルとナツジの行為は絶対に間違ってる。だから、誰かが止めさせないといけない。その役目は。」

キリトはそう言つて、俺たちを見てくる。

キリトとカルムの、力強い信念の視線に、俺たちは覚悟を決めた。

ユージオ「ああ……………」

ケント「俺たちの役目だな。……………」ところでカルム、さっき言っていた、アウグス

……………何とかって人は何者なんだ？教会の整合騎士か何かなのか？」

カルム「司祭だよ。もう亡くなっているけどな。」

俺の疑問に、カルムはそう答える。

タカトラ先輩がそう言っていた事に関して、俺は、ユア先輩の事を思い出す。

ユア先輩は、ユージオが傍付きを務めたゴルゴロッソ先輩と同じく、平民の衛兵隊上
がらだ。

それが理由で、同じ身の上の俺を指名したのだと語った。

それから1年間、ユア先輩は、決して理不尽に扱いたりはず、真摯に向き合ってく
れた。

厳しくはあったが、優しい先輩だった。

卒業する際に、俺は、先輩に尋ねたのだ。

ケント「何で、同じ衛兵隊推薦枠で入学したキリトやカルム、ユージオではなく、俺
を指名したんですか？」

その問いに、ユア先輩は、頭を少し掻きながら、答えた。

ユア「確かに、ケントよりも、キリトやカルムの方が僅かに剣力は上だと、入学試験
の演武を見た時に分かった。だが、だからこそお前を指名したんだ。上を睨んで必死に
足掻く奴だと思ったからな、私のように。まあ、リーナにタカトラ、ゴルゴロッソが、私
より早くキリトとカルムとユージオを指名したのだからな。」

ユア先輩は、そう答えた。

そして、自らの傍付き錬士を大切にしろとも語った。

俺は、ユア先輩の背中を見送った。

その背中とは、力強かった。

これから言う事は、連中には理解されないのかもしれない。でも、それでも俺たちが言うべきだと思ったのだ。

第21話 傍付きからの告白

カルム side

あの懇親会が終わり、俺たちは、ライオス達の元へと向かう。

しかし、二手に別れる事にした。

ライオスとウンベールにはキリトとユージオが、ベルとナツジには俺とケントが行く事に。

ケント「大丈夫だろうか……………」

カルム「まあ、行こう。(無駄だとは思っただけどね……………。)」

そんな事を思いながら、ベル達の部屋のドアをノックする。

すると、ナツジの声がある。

ナツジ「何だ？」

ケント「ケント修剣士とカルム修剣士です。キャンサー修剣士に少々お話が。」

すると、中から荒々しい足音が響き、扉が乱暴に開かれる。

ナツジは颯め顔で、俺たちを睨み、叫んだ。

ナツジ「事前に伺いも立てず押しかけるとは無礼な！まずは書状にて面会の許しを求

めるのが筋ではないのか！」

カラム（声でさえよ。隣もだけど。）

ナツジの突然の罵声に、俺は心の中でそう毒づく。

隣のウンベルも、同じような事を叫ぶ。

すると、中から。

ベル「気にするな。同じ学舎で琢磨する者同士だ。通せナツジ、こう突然では残念ながら茶の用意は出来ないが。」

ナツジ「……………ベル殿のご厚情に感謝しろ。」

カラム（何の寸劇だ？）

そう思いつつ、中に入ると、何ともまあ、悪趣味な部屋だった。

室内調度の類は、全て最高級品に交換されていて、ベルは紺色、ナツジは赤い薄手の長衣を身に纏っていた。

どうやら、ベルは俺たちが来る事が分かっていたのか、驚いていないが、ナツジは不快感を隠していない。

ベル「それで？我が友ケント修剣士殿はどのようなご用事かな？こんな休息日ももう終わりを迎えようとしている夕刻に。」

ケント「キャンサー修剣士に関して、少々好ましからざる噂を耳にしましたので。学

友がその芳名を汚す前にと、忠言に参りました。」

ナツジ「何っ!？」

ナツジが血相を変えて何かを叫ぼうとするが、ベルが制する。

一応、ケントからは、様子を見て欲しいと頼まれたのだ。

ベル「ほーほう。これは意外であり、望外のこともあるな。ケント殿に我が朋友のことを案じてもらえるとは。しかし、惜しむらくはそんな噂に思い当たることはないな。」

なるほど、惚けてきたか。

同室である以上、見ている可能性は高いのだが、誤魔化すか。

すると、ベルは寝つ転がつていた体を起こして、逆に質問してくる。

ベル「ケント殿は一体どこからそのような噂を聞きつけたのかな？」

ケント「キャンサー殿の傍付きと同室の初等錬士たちから直接話を聞いたんです。

キャンサー殿がアマネという傍付き錬士に逸脱した行為を命じていると。」

ベル「ふむ、逸脱? 何とも奇妙な言葉だな、ケント殿。もつと分かりやすく学院則違反だと言えばいいのではないのかね?」

ケント「っ!？」

カルム（不味いな。）

現在、恐らく、ベルの思惑通りに進んでいる気がする。
冷静なベルに対して、ケントは少し感情的になりそうだ。

ケント「ですが！例え学院則に禁じられていなくとも、初等錬士を導く筈の上級修錬士としてすべきことではないこともあるでしょう!？」

ベル「ほほう！それでは、ケント殿はこのナツジがアマネに一体何をしたと申されるのかな？」

ケント「そ、それは………!？」

不味いな、相手方がかなり余裕の態度を示してるな。

ベルがナツジに尋ねる。

ベル「どうなんだ、ナツジ？ケント殿の仰ることは身に覚えがあるかね？」

ナツジ「うくん？とんでもない！何を言われているのかさっぱり思い当たりませんな。まあ、いくつか他愛もない世話を命じたりはしたかもしれませんがね？」

カルム（リアクションが大袈裟だな。）

恐らく、挑発の類だろう。

肌が見えるのをお構いなしにオーバーなりアクションをしていく。

さつきまで怒ってたのに、そっちが優勢になった途端、嬉々として語るな。

ナツジ「ケント殿との立ち合いで情けなく引き分けて以来、私も心を入れ替えて鍛錬

を撃ち込んでおりましてな！だが、これまで醜い筋肉がつくような稽古を控えていたせいもありましてな。全身が痛くてしようがなく、アマネには湯浴びの際に全身をほぐしてもらったただけのことですよ！」

ケント「なっ!？」

カルム「っ!？」

ナツジ「その上で制服が濡れてはアマネも困るだろうと思い、下着姿になるようにと、その行為を許す程の寛大さですよ？これのどこが卑しい逸脱行為なのか、理解に苦しみますなあ！」

「……………」

怒りが込み上げるが、ここでキレたら、奴らの思う壺だ。

だが、奴の行動は、上級修剣士としては、あるまじき行動だ。

タカトラ先輩が聞いたら、とても呆れるだろうな。

ケントは、今は腰に無い剣に手を掛けようとする素振りをして、なんとか怒りを抑えたようだった。

まあ、俺もかなりキレてるのだが。

ケント「アマネ初等錬士は日々耐え難い思いをしております。改善が見られないようなら教官にも調査を依頼することも考えなければなりません。その御つもりで。」

ナツジ「なに!？」

ベル「ご自由にされるがよかろう。まあ、そんなことをしても徒労に終わると思うがね、ケント修剣士殿？」

うわあ、勝ち誇ったドヤ顔だよ。

怒りを通り越して、呆れてくるな。

ベル、お前は、いちいちこちらのマウントを取らないと気が済まないのか？

カルム「ケント。これ以上は無駄だ。」

ケント「……………ああ。」

俺たちは退出して、キリトとユージオと合流して、キリト達の部屋へと向かう。

どうやら、向こうも似たような感じだったようだな。

ユージオ「くそっ!」

ケント「くっ!」

ユージオとケントが、悔しそうに壁に拳をぶつける。

キリト「落ち着けよ、ユージオ。」

カルム「気持ちは分かるが、ひとまずケントも落ち着け。」

ユージオ「先にキリトの方が感情を爆発させると思っていたんだけどな。」

ケント「カルムはやけに冷静だったな。」

カルム「いや、刃王剣が有ったら、流石に危なかつたな。」

キリト「そつちも、似たような状況だったんだな。」

俺は、キリトのその言葉に頷く。

予想通りだった意味合いで。

キリト「けど、何か裏があるかと思つてたがそれが何なのか分からなかつたな。」

ユージオ「……………裏？」

カルム「ああ。これはユージオとケントの二人を狙つた何かの罠じゃないかつて俺たちは考えていたんだ。」

ケント「えっ？」

キリトと俺が告げた推測にユージオとケントは酷く驚いていたが、驚くのも無理もない話である。

キリト「例えば、抗議に来たユージオとケントがウンベルとナツジの挑発に乗つて言ひすぎたりでもすれば、それを逸例行為に認定して最大限の懲罰を科すつもり、だつたのかな。」

ユージオ「そんな……………」

ケント「危うく……………引つかかる所だったのか……………？」

カルム「気にすんなつて。」

キリト「そうだけ。もしウンベールとナツジがこれからもフレニーカとアマネを辱めるようなことがあれば、すぐに教官に調査を要請できるように準備だけはしておこうぜ？」

カルム「キリトの言う通りだ。教官に、アイツらを突き出してやろうぜ。」

ユージオ「うん。」

ケント「そうだな。」

良かった、落ち着いたみたいだな。

この状態だと、また挑発された際に感情的になりやすくなってしまう。

しかし、アイツらが、俺たちに言われて簡単に止めるとは思えない。

警戒はしておかないとな。

キリト「ユージオ。もし俺たちがいないところで何かを言われたとしても、さつきみ

たいに熱くならないように気を付けろよ？」

カルム「怒ることがあいつらのもつとも狙っていることだからな。何言われても、全

部受け流すようにするんだぞ？」

ユージオ「わ、分かってるよ！」

ケント「ステイ・クール、だろ？」

キリト「そうだ、ステイ・クールだ。」

その後、今後の方針について話し合い、今日の事を、ティーゼとルナに報告すべく、ユージオはティーゼに、ケントはルナに言う事になった。

俺は、キリトとユージオの部屋から退出し、自室に戻る。

ケント side

翌日、散々笑って満足したのか、ライオス達は、俺たちに目もくれなかった。

俺としては、あまりライオス達に絡まれるのは嫌なのだが、問題は、ウンベールとナツジがフレニーカとアマネに対する扱いを改めたのかということだ。

一応、昨夜のうちに、学院管理部宛の調査依頼の書状は、俺たち4人の連名で書き上げてある。

連中も、流石に懲りるだろう。

程なくして、四時の鐘が鳴り、ルナとシオリの2人がやって来る。

ちなみに、カルムは自室で、聖剣に関する本を読み漁っているだろう。

以前、ルナに対して、何度か掃除を手伝おうと申し出たが、きっぱり断られる。

部屋を散らかさないように気をつけているのだが、ルナは、いつも掃除のし甲斐がないと文句を言っている。

どうすれば良いんだ………？

どうやら、掃除が終わったようだ。

ルナ「ケント上級修剣士殿、ご報告します！本日の清掃、完了しました！」
ケント「ご苦労様。いつもありがとうございます。」

ルナ「いえ、これが傍付きの仕事ですから！」

ケント「悪いんだが、ちよつと話をしても良いか？立ったままじゃなんだし、座つてくれ。」

そう言ったのは良いのだが、この部屋には椅子が一脚だけしかなかった。

椅子に座らせようとするのだが、断りそうだったので、ベッドに座らせる事に。

ルナは、一瞬目を丸くするが、今度は微かに頬を赤く染めながら頷く。

ルナ「はっ………それでは、失礼します。」

ルナはベッドの端に座る。

俺も、ルナとかなり距離を離して、腰を下ろす。

ケント「アマネとフレニーカの一件だがな、昨日、抗議しておいたからな。流石にアイツらもこれ以上大事にするのは避けるから、もう逸脱した命令は出さない筈だ。」

ルナ「本当ですか!?!ありがとうございます、上級修剣士殿。アマネもフレニーカも喜ぶと思います。」

ケント「もう仕事は終わったから、ケントでいいぞ。それに、俺も謝らないといけな
いしな。」

ルナ「え？」

ケント「今回の一件は、やっぱり、俺がナツジと立ち合ったのが原因だった。抗議した際に、あわよくば逸礼行為で懲罰を科す計画だったらしい……。つまり、アマネは、俺とナツジ達の確執の巻き添えになった。一度、彼女に謝りたいんだ。」

ルナ「そう……。ですか……。」

ルナは俯いて、何かを考えている様子だったのだが、やがて俺を見るとゆつくりとかぶりを振る。

ルナ「いえ……。ケント先輩の責任ではありません。アマネには、先輩のお言葉だけ伝えておきます。あの……。す、少し、お傍に行っても良いですか？」

ケント「あ、ああ……。」

俺が良いと言うと、ルナは一層頬を染めて、体をずらし、かなり近くまで来る。

ルナは、話し始める。

ルナ「私は、修剣学院を卒業したら、そう遠くないうちに、カウマン家を継いで、同格か一等上の爵家から夫を迎えるんです。……。私、怖いです。」

ケント「え？」

ルナ「もし、私の夫となった人が、キャンサー殿みたいな人だったら……。？誇りを持たずに、周りの人に平気で酷い事をするような人だったらどうしようって思うと

……怖くて……。」

ケント「ルナ……。」

彼女の気持ちは分かる。

しかし、俺たちの間に、存在する身分差を意識せざるを得ない。

俺は平民で、ルナは貴族だ。

今でこそ、央都セントリアで沢山の貴族達に混じって暮らしているが、学院代表剣士になれなければ、その後はどうなるかは分からない。

帝国騎士団や大きな街の衛兵隊に職を得られれば良いが、最悪は、兄の下で働く事すら有り得るのだ。

すると、ルナが俺の右腕に縫り付く。

ケント「ルナ……!!？」

ルナ「先輩！先輩に、お願いがあるんです。きっと、学院代表になって、剣武大会にも勝って、四帝国統一大会に出て下さいね。」

ケント「そ、それは、もちろんそのつもりなんだが……。」

ルナ「えっと……その……。」

ルナは、一瞬言葉に詰まってから、顔を赤く染めて続ける。

ルナ「と、統一大会で上位に入れば、初等錬士寮のアズリカ先生みたいに一代爵士と

して叙任されると聞きました。そうなれたら……私、私………！」

ケント「……………」

俺が統一大会を目指しているのは、整合騎士になつて、イーディスともう一度会う、ただその為なんだ……………」

だが、それをルナに伝えられなかった。

例え嘘になつてしまつても、恐らく生まれて初めて不確定な将来に怯えている十六歳の少女の……………自分の傍付き錬士の懇願を無為に出来ないと感じた。

ケント「ああ……………。大会が終わつたら、きつと君に会いに行く。」

ルナ「……………私も、私も強くなります。ケント先輩のように、正しい事、言わなきやいけない事をきちんとと言えるくらい、強く。」

カルム side

ケント、それは、遠回しなプロポーズを受け入れたようなもんだぞ。

俺は、ケントの部屋に向かうとするが、ルナとケントのやり取りを覗いていた。

シオリ「カルム先輩、覗きはダメなんじゃないですか？」

カルム「悪い。ただ……………」

シオリ「ただ？」

カルム「ケントが不安だね。」

シオリ「そうですね……………」

ケントは、ルナを傷つけまいと答えたのだろう。

ただ、ケントにはイーデイスが居る。

結局、どうなるかは分からないな。

カルム「ケントって、意外と鈍感だからなあ。」

シオリ「……………それって、カルム先輩も一緒ですよね。」

カルム「何か言ったか？」

シオリ「いえ！何でも！」

カルム「そっか。」

シオリは、俺に惚れているのかは分からない。

ただ、もし惚れられていると分かったら、恐怖するだろうな。

すると、ミトが脳裏に映る。

ミト『へえ……………。カルム。君って人は、違う世界で女の子を惚れさせたんだ

……………』

ヤバい、怖い。

刺されそうで、怖い!!

だからといって、シオリとはちゃんと向き合いたい。

でもなあ……………。

シオリ「先輩？大丈夫ですか？」

カルム「大丈夫……………」。

シオリ（先輩の鈍感。私の想いに気づいてよ。）

寒気がするな。

俺はミト一筋だ！

そう自分に言い聞かせる。

ただ、この日のすぐに、あんな出来事が起こるなんて、この時の俺は気づいていなかった。

第22話 禁忌目録

ケントside

人界曆380年 5月22日

この日は大荒れだった。

俺たちは、自室で、それぞれの剣の手入れをしていた。

ちなみに、カルム曰く、雷鳴剣黄雷も、刃王剣十聖刃を構成する聖剣の一本らしい。

カルム「そういえば、キリトの奴、あの剣の名前を良い加減に決めたのかな？」

ケント「どうだろうな？」

カルム「まあ、今まで《黒いの》と読んでるんだ。流星に剣が可哀想だぜ。」

ケント「キリトって、名付けの才能がないのか？」

カルム「ああ。アイツが良い名前を付けた覚えがないな。」

そんな他愛もない話をしていると、鐘の音が鳴る。

カルム「そういえば、この鐘って、4時半の鐘だよな？」

ケント「そういえば、ルナとシオリ、来ないな。これまで、4時には来てたのに。」

カルム「……………胸騒ぎがするな。俺、ちよつと初等錬士寮にまで行って来るわ。行

き違いになる可能性があるから、ケントはここで2人を待つててくれ。」

カルムは、刃王剣十聖刃をテーブルに置いて、窓を開ける。中に雨水が入って来る。

ケント「おい！どこから行くんだ！」

止めようとするが、カルムは颯爽と木に掴まって、地面に降りていた。

どうやら、キリトと合流したらしく、キリトと何か話して、初等錬士寮の方に向かう。

ケント「せつかちだな。」

俺はそう呟いて、窓を閉める。

カルムって、こういう時の行動力は凄いな。

俺は椅子に座って、テーブルから雷鳴剣黄雷を持ち上げ、鞘に納刀する。

俺はそのまま待っていると、ドアが小さくノックされる。

全く、窓から出るから、行き違いになるんだぞ。

そう思いつつ、扉を開ける。

ケント「良かった、心配し……………」

そこに居たのは、ルナとシオリではなく、1人の少女だ。

誰だろうと思っていると。

??? 「あの……………ケント上級修剣士殿でしょうか……………」

ケント「ああ……………。君は？」

アマネ「私は、アマネ・クロツス初等錬士です。ご、ご面会の約束もなしにお訪ねして、申し訳ありません。……………でも、どうしたらいいのかわからなくて……………」

ケント「君がアマネか……………」

なるほど、この子がアマネか。

かなり濡れている事から、雨の中を走ってきたのだろう。

アマネは、狼狽の滲む声を出す。

アマネ「あの……………。この度は、私とナツジ・キャンサー殿の事で、ご尽力を賜りまして、心より感謝しております。」

ケント「いや、当然の事をしたまでだ。」

アマネ「それで、実は、キャンサー殿は本日の夜間に、私に、その……………この場では少々説明の難しいご奉仕を命じおられまして……………」

ケント「……………!？」

ちつとも懲りていないじゃないか！

それを聞いて、ナツジに対して、怒りが湧いてくる。

だが、その次に続いた言葉で、更に驚愕する。

アマネ「わ、私、この様なご命令が続くくらいなら、いつそ、学院を辞めようと思っ

て、フレニーカと一緒に、ルナとシオリとティーゼとロニエに打ち明けたのですが、それを聞いた4人は、直接キャンサー殿とジーゼック殿に嘆願すると言つて、寮を出て行つて……………」

ケント「何だつて!？」

俺は、雷鳴剣黄雷を握る左手に力を入れる。

窓の方を見るが、カルムが戻ってくる気配がしない。

フレニーカと一緒に伝えたという事は、ユージオもフレニーカから聞いてる筈。

ケント「君はここで待つてくれ。」

俺はアマネにそう伝え、部屋を出る。

すると、ユージオとも合流する。

ユージオ「ケント!」

ケント「ユージオ! やつぱり……………!」

ユージオ「ああ! 急ごう!!」

気がつくと、俺は雷鳴剣黄雷を、ユージオは青薔薇の剣を持ちつぱなしたつた。

だが、戻っている暇もない。

ケント（クソ……………ッ! 最初から俺たちじゃなくて、ルナ達が狙いだつたのか!!）

俺はそう思つて、齒軋りする。

ルナは恐らく、昨日言った、正しいと思う事を実行したのだ。

だが、それが、ナツジ達の罠に引つかかってしまう事に気づかず。

俺はナツジ達の部屋に、ユージオはライオス達の部屋へと向かう。

右手を乱暴にドアに叩きつけると。

ナツジ「どうぞ、入ってくれたまえ。」

ケント（言われなくてもそのつもりだ！）

俺はそう思い、ドアを開けて、中に入る。

まるで、俺が来るのが分かっているような言い回しだな。

中に入ると、きつい匂いがするので、鼻を抑える。

ベルとナツジは、葡萄酒を飲んでいた。

ナツジ「ちようど西帝国産の50年物を開けたところでね。どうだ？中々平民の口

は入らぬ代物だぞ。」

ケント「いえ、結構です。」

そう言いつつ、周囲を見渡すが、ルナとシオリの姿は確認できない。

ケント「それより、キャンサー殿。本日ここに、俺の傍付きのルナ・カウマン初等錬士と、カルムの傍付きのシオリ・ヒューレット初等錬士が訪ねて参りませんでしたか？」

ベル「あの2人は、貴殿らの傍付きであったか。私達に突然面会を求めるとは、流石

はお二人の傍付きだ。ただ、気をつけなければならぬ。威勢の良さは、時として非礼ともなり、不敬ともなる。そうは思わないか？ケント修劍士殿？」

ケント「……………ご高説はまたの機会に拝聴します。ルナとシオリはどこにいるのですか!？」

ベルの長衣の襟首を掴み上げたい衝動を堪えて、俺は張り詰めた声で問いたです。すると、ベルとナツジは立ち上がり、隣の寝室へと向かう。

着いてこいと言わんがばかりなので、俺は訝しむが、寝室に入ると、そこには、縄で縛られたルナとシオリが。

ケント「一体どういう事です、ベル殿！」

ベル「これはやむを得ない処置なのだよ、ケント殿。」

ケント「何……………?」

ベル「カウマン初等錬士と、ヒューレット初等錬士は、我らに甚だしい非礼を働いたのだ。」

ケント「非礼……………とは……………?」

壁際から進み出たナツジが、ニヤニヤ笑いながら答える。

ナツジ「あの下級貴族の娘どもは、事もあろうに、四等爵士のこの私が自分の傍付きを理由なく虐げ、欲望を満たしているなどと言ってくれたのよ。アマネを正しく導こう

としているこの私をですぞ?」

ベル「それだけではないのだよ、ケント殿。あの2人は、ナツジと同室の私にも責任があるなどと道理の通らぬ事を言ってくれてね。よもや六等爵家の娘如きに、三等爵家の長子たるこの私が、『貴族の誇りはないのですか!』などと言われようとは!」

ケント「……………グツ!」

やはり、彼らは最初からこの状況を狙っていたのだ。

ベル達の悪辣さには、怒りが湧いてきた。

ケント「……………ですが、仮にその様な事があつたとしても……………縄で縛り上げ、寝室に閉じ込めるなど、修剣士懲罰権を甚だしく逸脱した行いだらう!」

ベル「修剣士懲罰権?」

そう呟いたベルが、俺に顔を近づける。

ベル「学院則にはこう付記してあるのをお忘れかな?……………なお、全ての懲罰において、上級法の規定を優先す、と!」

ケント「なっ!?!」

ベル「上級法とは、禁忌目録、そして帝国基本法の事だ!つまり、三等爵家の長子たる私は、六等爵家出身のあの娘達に、修剣士懲罰権ではなく、貴族裁決権を行使できるという事なのだよ!!」

そう言つて、ベルは長衣を脱ぎ捨て、飛び上がりながら、ルナに迫る。

ルナ「ヒツ……………!!」

ベル「動かない方がよいぞ？」

一方のナツジも、長衣を脱ぎ捨て、シオリに迫っていた。

俺は、我慢の限界だった。

ケント「やめろっ!!」

ベル「動くな、平民!!これは、帝国基本法及び禁忌目録に則つた、正当、減縮なる貴族の裁決である!そして、裁決権の妨害もまた重大な違反行為だ!そこから一步でも動いたら、お前は法を破つた罪人となるのだ!」

ケント「そんな事……………!!」

俺はベルに飛びかかろうとするが、体が動かない。

罪人になつてでも、ルナとシオリを助けないと!

だが、どこからか、自分の物ではない声が聞こえてくる。

公理教会は絶対である。

禁忌目録は絶対である。

逆らう事は許されない。

何人たりとも許される事ではない。

ケント「グッ………!!」

そうしている間にも、ルナとシオリの叫び声が響く。

ルナ「先輩！先輩!!」

ケント「………ッ！」

俺が体を必死に動かそうとすると、安息日でのキリトとカルムの声が響く。

キリト『例え、法律が禁じていないことであっても、してはいけないことは存在している。もちろん、その逆も然りだ。法律が禁じていたとしても、時にはそれを破つてでもしなきゃいけないことも存在するかもしれない。』

カルム『それが誰かの自由や尊厳を守るためであるのなら、罰されるのを覚悟してでもやり抜くことが大事なんじゃないかと俺は思う。』

そんな事を考えると、右眼が痛みだす。

すると。

シオリ「い、いや………いや………いや………!!」

ルナ「助けて………たすけて、ケント先輩！ケントせんぱいーっ！」

友達であるアマネの為に、勇気を振り絞って行動を起こしたルナとシオりに、これほどの残酷な罰を与える法。

計略を巡らせ、少女達を罠にかけ、今まさにその純潔を散らそうとしているベルとナ

ツジを止められない法。

そんな法を守るのが、善だというのなら。

ケント「俺は……………」

なぜ、あの時、イーデイスとアリスが法を破ったのかを理解出来た。

自分の中にある、大切な物を守る為に、法を破ったのだ。

今度は俺の番だ。

雷鳴剣黄雷の柄を握りしめ、抜刀しようとすると、右目から凄まじい激痛が走る。

薄い赤に染め上げられた右眼の視界の中央に、神聖文字が浮かぶ。

「SYSTEM ALERT : CODE 871」と読めるのだが、意味は全く分か

らない。

だが、これは、イーデイスとアリスが連れ去られた時に現れた物だ。

今度こそ、俺の大事な物を守る為に……………!

ケント「俺は！俺の、想いを貫く!!」

そう叫ぶと、右眼が爆発して、眼球が吹き飛ぶ。

すると、さつきまでが嘘の様に体が動き、雷鳴剣黄雷を抜刀して、ホリゾントルを放

つ。

ベルは気づいたのか、すぐに躲すが、ナツジは気づくのに遅れて、ナツジの左腕の肘

のあたりが、真つ二つに斬られる。

ナツジ「うわアアア!!!腕が、俺の腕がアア!!」

ベル「そんな物、紐で縛っておけばよい。それより、見たか、ナツジ。お前の腕を斬り飛ばしたのは、田舎者の剣だ。素晴らしい!これで、禁忌を犯した大罪人の首を取れる!」

それを、ぼんやりとしか聞いてなかった。

ナツジの腕を斬り飛ばした衝撃が強すぎたのだ。

ベル「では、大罪人ケント!!三等爵士嫡男たるこのベル・アバドンが処刑する!!」

そんな風な叫びが聞こえ、俺の首が斬られそうになる。

だが、いつまでも、斬られる感覚はなかった。

理由は、ベルの剣が、もう一本の剣によって受け止められているのだ。

後ろから真つ直ぐ伸びる腕を包む袖は、紫紺色だった。

つまり、俺の相棒にして、親友の……。

ケント「カルム……。」

カルム「悪い、遅くなった。」

カルム side

どうやら、ギリギリ間に合ったみたいだな。

初等錬士寮にキリトと一緒に向かったが、アズリカ先生から、シオリ達が、上級修錬士寮へと向かったと聞いて、まさかと思い、一旦部屋に戻って、刃王剣十聖刃を取りに行くのと、アマネから、ケントがベル達の部屋に向かつてから帰ってこないと聞き、すぐさま向かい、振り下ろされる剣を受け止めた。

状況は、ケントの右眼から血が流れていて、シオリとルナは、陵辱される寸前、ナツジは、左腕が斬られている。

それだけでも、察する。

ケントに優しい声をかけて、すぐさま、ベルにキツイ声をかける。

カルム「剣を引け、ベル。お前にケントは傷つけさせない。」

ベル「漸くのお出ましか、カルム修錬士。しかし、もう遅い！その田舎者は、禁忌目録に背いた大罪人だ！ならば、この私が、大罪人の首を落とす権利があるのだ！」

カルム「禁忌だの、貴族の権利だの、知らねえよ、そんなもん。」

俺自身も、こんな冷酷な声を出せるとは思わなかった。

タカトラ先輩、すいません、俺の信念に基づいて、コイツを倒す！

カルム「ケントは俺の親友だ。お前の様な、闇の国のゴブリンにも劣る屑野郎に、傷つけさせはしない、絶対に!!」

すると、ベルは、色んな感情が渦巻いて、最終的に歓喜になった。

ベル「辺境の田舎者同士、仲良く大逆の罪を犯してくれるとはなあ！」
カルム「一々うるせえんだよ!!」

俺は、刃王剣十聖刃で、ベルの剣を飛ばし、ベルは後ずさる。
すると、ベルは、天山烈波の体勢を取る。

片手剣ソードスキルじゃ、アイツの剣を受け止められるか分からないし、ケントに被害が及ぶ!

ケント「カルム……!!」

カルム「心配すんな。」

なら、これで行く。

タカトラ先輩、力を貸して下さい!!

俺は、ウエインライト流秘奥義、溪谷……両手剣ソードスキル、カタラクトの体勢を取る。

ベル「くふふ……!! 苦し紛れに真似事の技か! そんな物は、我が秘奥義で打ち砕いてくれるわああ!!」

カルム「来い、ベル! 積もり積もった借り、今ここで返させてもらうぜ!!」
そんな応酬をしつつ、剣気を高める。

僅かな静寂の末、同時に動く。

ベル「キエアアアアアアッ！」

カルム「ハアッ！」

俺と奴のソードスキルがぶつかり、衝撃波が周囲に響く。

やはり、極端に高められた《貴族の自尊心》が、奴のソードスキルの威力を高めている。

刃王剣十聖刃が押し込まれ、左膝が、床に着く。

ベル「どうだッ……どうだアアッ!! 貴様如き無性の輩にッ!! このベル・アバドン様が後れを取る訳がないのだッ!!」

このままでは、俺のソードスキルが強制終了して、斬られる。

だが、俺は、リーナ先輩とウォロ主席の試合を見て気づいたのだ。

斬撃の軌道を、正確に戻した場合は、かなり持続するのだ。

カルム「ハアアア!!」

叫び声を上げ、カタラクトの二連撃技で剣を叩き斬って、ベルの両腕を斬り飛ばす。

ベルは尻餅について、叫ぶ。

ベル「うわああ!!」

カルム「……………」

俺は醜く騒ぐベルを見つめる。

ベル「私の、私の血がアアア!! ナツジ! お前の縄で、私の腕を縛れ!!」
 ナツジ「嫌だ! これを解いたら、俺の天命が減る!」

ベル「何だとツ! ナツジ!! 貴様は、俺の命令を……………」

見かねた俺は、刃王剣十聖刃で、シオリとルナを縛る縄を切つて、布団を被せる。

カルム「ほら、紐だ……………」

だが、ベルの様子がおかしい。

ベル「てんめい、きんぎ、でんめい、きんぎ、でん、で、で、ででで。」

カルム「ベル……………」

ベル「でででつ、でつ、でつ、ドイツ、デイル、デイルデイルデイル、デイルデイル

デイルデイルデイル……………」

そのまま、事切れる。

まさか、天命と禁忌目録を天秤に乗せ、フラクトライトが崩壊したのか?

俺が驚愕で凍りついていると。

ナツジ「ベル殿が……………し、し、死んで……………! こつ、ころつ、殺した……………殺した、

殺したつ!! 人殺し……………ばっ、化け……………化け物!!」

ナツジは、そのまま逃げていく。

カルム（人殺しか……………。大切な物を守れたとはいえ、後味悪いな。）

そんな自虐心に苛まれていると、シオリが後ろから抱きついてくる。

ケントの方を見ると、ルナが抱きついていた。

カルム「シオリ……………？」

シオリ「ごめんなさい！私達……………！」

カルム「気にすんな。無事なら、それで十分だよ。それと、ごめんな。怖い思いをさせて。」

すると、妙な視線を感じて、上を向くと、白い顔が現れる。

ケントも、見ていた。

カルム「シオリとルナに聞かせるな！」

ケント「ああ！」

白い男「シンギュラー・ユニット・ディテクテイド。アイディー・トレーシング……………」

コーディネート・フィクスト。レポート・コンプリート。」

そんな事を口ずさみ、消える。

恐らく、公理教会に、俺たちが禁忌を破った事が伝わった。

さて、どうするかと考えていると、ケントが青ざめていたので、慰める為に、肩に手を置く。

カルム「ケント。」

ケント「カルム………?」

カルム「お前は人間だ、ケント。俺と同じ……幾つも間違いを犯しては、その意味を探して足掻き続ける………人間だ。」

そんな風になっていると、学院側の教師がやって来て、俺たちは拘束される。

キリトとユージオも、拘束されていた。

ユージオの顔を見ると、右眼から血が流れている。

つまり、ケントもユージオも、禁忌目録の鎖を破ったのだ。

ユースサイド

まさか、こんな事になるとはな。

ユーリ「急いで保護をしないとな。」

だが、あまり表立って動けないので、カセドラルに連行されてから保護しよう。

そして、キリトにカルムは、破るだろうと思っていたが、ユージオとケントは、右眼の封印を破った。

これは、カーディナルも、保護をしろと言ってきたきそうだな。

俺は、光剛剣最光と一体化して、セントラル・カセドラルへと一足先に向かう。

第23話 まさかの再会

カルム side

俺が、ベルを殺してしまった。

そんな事を考えながら、懲罰房にて夜を過ごしている。

カルム（これは、しばらくは引き摺りそうだな。）

ケント達を守るためとはいえ、人界に生きる人を1人殺してしまったのだ。

無論、後悔はしていない。

アイツらが、ケントを嵌めて殺そうとしたのだ。

ただ、そう思っていないと、心が狂いそうになる。

キリト「カルム？」

カルム「キリトか。」

そう、現在、俺たちは、一つの懲罰房へとぶち込まれていた。

まあ、当然の措置か。

キリト「大丈夫か？」

カルム「大丈夫……とは言えないな。」

キリト「そうか……………」

カルム「俺さ、ベルを殺してしまった。」

キリト「……………」

カルム「勿論、ケントを守る為さ。だけど、今になって、事の重大さに気づいてね……………」

キリト「俺も、ライオスを殺した。」

カルム「そうか……………。一つ、気になることがあるんだ。」

キリト「俺も、気になる事がある。」

カルム「なら、聞こう。」

俺たちは、ライオスとベルの死に関して話し合う。

カルム「実はな、ベルの奴、フラクトライトが崩壊した様な気がするんだ。」

キリト「ライオスもだ。」

カルム「という事は……………」

キリト「ああ。」

「天命と禁忌目録を天秤に乗せた結果、フラクトライトが崩壊した。」

そういう結論に至った。

キリト「あり得るよな。」

カルム「ああ。2人は極端な自尊心を抱えている。天命は大切だけど、禁忌目録もまた、守らなければならない法。」

キリト「だから、崩壊したんだな。」

カルム「ああ。」

だが、どうしてそうなったのか。

そして、話は、ユージオとケントの右眼に関する話になった。

先ほどまで、2人の眼を治そうとしたが、神聖力が足りず、断念した。

キリト「2人の右眼は、吹き飛んだって言ってたよな。」

カルム「ああ。だが、それは、菊岡達の計画とは、少し違う気がするんだ。」

キリト「それは？」

カルム「菊岡達は、真正汎用性人工知能を作ろうとしている。だけど、その………仮にも右眼の封印としよう。痛覚を与えるのは、計画には必要ないんじゃないか？」

キリト「確かに………。まさか!？」

カルム「うん。多分、ラースの中に、何かを企んでいる人がいる。」

キリト「それを伝えようがないからな………。だから、カセドラルに行こうって事か。」

カルム「うん。最終手段だけど、これしかもう手はない。」

キリト「分かった。」

そうして、俺たちは眠りについた。

すると、9時の鐘の音が鳴り、俺たちは起きる。

ああ、この学院生活も、これで終わりか。

タカトラ先輩に、申し訳ないなあ。

すると、扉が開いて、アズリカ先生が入ってくる。

カルム「アズリカ先生。」

アズリカ「4人とも、出なさい。」

その声に従い、俺たちは外へと出る。

アズリカ「……………残念です。とても。今年度の学院代表剣士は、あなた方4人だと
確信していたのですが。」

キリト「俺もそのつもりだったんですけどね。」

カルム「右に同じく。」

アズリカ先生の言葉に、俺たちはそう返す。

すると、アズリカ先生がユージオとケントに声をかける。

アズリカ「ユージオ修剣士、ケント修剣士、こちらへ。」

ユージオ「えっ……………」

ケント「はい……………」

アズリカ先生に呼ばれ、一歩前と出たユージオとケント。

そんな2人に、アズリカ先生は神聖力が込められた結晶（神聖結晶という貴重な物だと記憶している）から高濃度の神聖力を抽出し、まずはユージオの右目に手を当てた。

アズリカ「システムコール：ジェネレート・ルミナス・エレメント：リコンストラクト・オーガ。」

すると、ユージオの右眼に、術が発動する。

アズリカ「目を開けてみなさい」

ユージオ「……………あ、ありがとうございます、アズリカ先生！」

アズリカ「次は、ケント修剣士です。」

ケントにも、先ほどの術を発動して、ケントの右眼も回復させる。

ケント「ありがとうございます、アズリカ先生。」

アズリカ「いえ……………。それよりも貴方方4人をこれから迎える者に引き渡せねばなりません。その前にこれだけは伝えておこうと思い、私はここに来ました。」

「……………」

そう告げたアズリカ先生の言葉に覚悟していた俺たちはさほど驚いてはいなかった。

そして、アズリカ先生は言葉を続けた。

アズリカ「ユージオ修劍士、ケント修劍士……。貴方達は私に破れなかった封印を破った。ならば、私が行けなかったところに貴方達はきつと行くことが出来る筈です。その劍と、そして友を信じなさい。」

ユージオ「はい！」

ケント「分かりました。」

すると、次はこちらを見てくる。

アズリカ「……………キリト修劍士、カルム修劍士。貴方方が何者なのかは、遂には私にも分かりませんでした。ですが、貴方方があのカセドラルに行った時には何かが起きる……。だからこそ、その先に光があることを私はここから祈っています……………ずつと……………」

キリト「これまで大変お世話になりました、アズリカ先生。」

カルム「……………そして、すみませんでした。期待を裏切るような結果になってしまつて。」

アズリカ「……………結果はどうあれ、貴方方が自分の信じる道を歩んだのでしょう？ならば、その気持ちをお忘れることなく前を見据えることです……………」

そんなアドバイスを受けて、俺たちは、その整合騎士の元へと向かう。

どうやら、2人いるらしく、1人は金の鎧に青のマント、長い金髪のロングヘアで、も

うー人は、灰色の鎧とマント、そして、灰色の髪を、ポニーテールにしている。

両方とも女性だろう。

俺たちがある程度近づくと、その2人は言葉を発しながら振り返る。

アリス「セントリア地域統括公理教会整合騎士……アリス・シンセシス・サーティです。」

イーデイス「同じく整合騎士、イーデイス・シンセシス・テンよ。」

ユージオ「……ア、アリス……？」

ケント「……イ、イーデイス……？」

キリト「えっ……？」

カルム「何……!？」

まさか、ユージオとケントが探していた2人って、あの整合騎士が!?

どうなってんだ……!?

アリス「その様な口調は謹んでください。罪人に舐められてもしたらどうするのですか？」

イーデイス「その時はアリスが罪人をぶっ飛ばすんでしょ？」

そんな風に話しているのを見て、俺は呆然としていた。

どういう事だ？

処刑されたと言っていたな。

そんな風に考えていると、ユージオとケントが、アリスとイーデイスに剣で殴られていた。

キリト「ユージオ！」

カルム「ケント！大丈夫か!？」

ユージオ「う、うん……………」

ケント「ああ……………」

アリス「言動には気を付けなさい。私にはお前たちの天命を7割まで奪う権限があります。次に許可なく触れようとすれば、その手を切り落とします。」

イーデイス「へえ…………天命を三割は減らしたつもりだったのに、身のこなしで咄嗟にその半分に抑えるなんてね。流石は上級修剣士…………いや、あるいは殺人の大罪を犯すだけの事はあるって事かしら？」

アリスとイーデイスの発言を聞いて、冷や汗が流れる。

冷酷だ。

ユージオとケントから聞いた2人の印象とは全く異なる。

キリト「あの2人の騎士が、お前達が探してたアリスとイーデイスか？」

ユージオ「う、うん。」

カルム「なら、ここは従っておこう。カセドラルに行けば、何か分かるかもしれない。」
ケント「分かった……………」

俺とキリトの言葉に、戸惑いつつも、従う2人。

本当に、どうなってんだ？

アリス「さて：：上級修劍士ユージオ並びにキリト並びにケント、そしてカルム。そなた等を禁忌条項抵触の咎により捕縛・連行し、審問の後に処刑します。」

イーデイス「大人しくしなさいよ。」

そう告げてからの2人の行動はとも速かった。

俺たちの手に手錠を詰め、外へと連れ出した。

校舎の外には2人が乗ってきた飛竜が待機しており、飛竜の体に繋がれた拘束具で更に体を拘束されてしまった。

後は連行されるのを待つだけかと思っただけかと思っただけの時だった。

校舎から誰かが駆けてくるのが見え、視線を向けると。

カルム「シオリ!？」

ケント「えっ……………ルナ!？」

ユージオ「ティーゼ!？」

キリト「ロニエまで!？」

その人物は、シオリ達だった。

それぞれ、シオリは刃王剣十聖刃、ルナは雷鳴剣黄雷、ティーゼは青薔薇の剣、ロニエはあの黒い剣を持ってきていた。

そんな彼女達に、アリスとイーデイスが対応する。

シオリ「整合騎士様！」

ルナ「お願いがあります！」

ティーゼ「私たちに……ユージオ先輩の剣を……！」

ロニエ「先輩たちに剣をお返しする時間を頂けませんか!？」

アリス「……いいでしょう。但し、罪人たちに剣を帯びさせるわけにもいきません。

これは私達が預かりますがよろしいですね。」

アリスはそう言って、片方の飛竜にキリトとユージオの剣を、イーデイスは自分の飛竜に、俺とケントの剣を入れる。

イーデイス「……会話をするなら、一分間に限っては許可するわ。行きなさい。」
「「「……………！」」」

恐らく、イーデイスなりの温情だろう。

すると、それぞれの傍付きは、俺たちの元へと向かう。

俺の目の前に、シオリが来る。

シオリ「先輩……………！私の、私のせいで、こんな事に……………！」

カルム「泣くなつて。それに、シオリのせいじゃないつて。」

シオリ「……………私、強くなる。整合騎士になって、先輩を助けに行きます！」

カルム「そっか……………」

シオリ「あの、これ、お弁当です。」

そう言つて、俺の縛られた手に、お弁当が渡される。

アリス「時間です。」

イーデイス「危ないから離れて。」

アリスとイーデイスは、いつの間にか飛竜に跨つていて、飛竜が脚を動かす。

そして、飛んで、俺たちはセントラル・カセドラルへと向かつていく。

カルム（まあ、罪人としてだけど。）

なるべくは、堂々と、セントラル・カセドラルに向かいたかったがな。

ユーリ side

俺は、セントラル・カセドラルの中にある大図書館に着いて、カーディナルと話をする。

カーディナル「そうか。もうすぐ、その者達がカセドラルに着くというわけか。」

ユーリ「ああ。どうやら、ついさつき、アリスとイーデイスという整合騎士が、その

4人を連れてきているようだ。」

カーディナル「うむ。」

カーディナルが向けた先には、火炎剣烈火、水勢剣流水、土豪剣激土、風双剣翠風、音銃剣錫音、闇黒剣月闇、無銘剣虚無があった。

カーディナル「まさか、雷鳴剣黄雷と、刃王剣十聖刃の担い手が、こちらに来るとはな。」

ユーリ「これまでの過ちは繰り返さない。絶対にこちら側に入れるぞ。」

カーディナル「ああ。……………恐らく、あの女は気付いている可能性があるな。」

ユーリ「ケントとカルムが、雷鳴剣黄雷と刃王剣十聖刃を持つている事に関してか？」

カーディナル「うむ。兎に角、わしらがどうか保護をしないと。」

ユーリ「まあ、大人しくしている可能性は低そうだがな。」

カーディナル「それは、こちらにとっても都合じゃ。」

そんな風に話す。

兎に角、あの女に、あの4人を渡すわけにはいかない。

第24話 イチエモン

深澄 side

2026年 7月6日 早朝

私は、明日奈を起こさない様に外に出て、カルムとキリトの2人がいるSTLルームへと来ていた。

無論、カルムを見る為だ。

しばらくすると、明日奈もやって来た。

明日奈「深澄……。来てたんだね。」

深澄「うん。……来てもしようがないとは思うんだけどね。」

明日奈「ううん……。私も同じ考えだから分かるよ、その気持ち。」

そう言つて、私の隣に立ち、キリトを見つめる。

まったく、人を心配させて。

深澄「今、カルムとキリトはどうしてるんだろう……。。」

明日奈「きつと大丈夫よ。キリト君は少し心配だけど、カルム君がしっかりしてるし。」

深澄「そうだね……………」

明日奈、無理してる。

でも、私の目の前で弱気な姿は見せられないから、気丈に振る舞ってる。

私も、あまり心配はかけない様にしないと。

すると、明日奈が呟く。

明日奈「私もアンダーワールドにダイブして、キリト君を助けたいのに……………」

深澄「私も、カルムと会いたい。」

この部屋には、STLが残り2基ある。

それを使えば、私と明日奈もアンダーワールドにダイブして、2人の元に行ける。

だけど、それは許可が降りないはず。

そんな風に考えていると、私と明日奈から、ため息が出る。

明日奈「ちよつと、上行こうか。」

深澄「そうね。」

私と明日奈は、コンソールがある上のエリアへと行こうとして、階段を登る。

すると、誰かが降りてくる心配がする。

明日奈「あつ……………。すいません。」

深澄「ごめんなさい。」

私と明日奈はそう言って、道を譲り、上へと登るけど、とある事に気づいて人を見ると、人間じゃなかった。

明日奈「ねえ、深澄。アレって……………」

深澄「うん。ロボットだよね……………」

なんでこんな所にいるの？

そんな風に呆気にと取られていると、突然足を止めて、こちらに向かってくる。

明日奈「えっ!? 深澄! どうにかして!!」

深澄「私に言われても!!」

そのロボットは、搭載されたレンズで私と明日奈を見てくる。

気味が悪くなり、壁に沿いながら移動するが、ロボットは追隨してくる。

本当になんなのよ!?

そんな風に怯えていると。

安田「コラッ!」

比嘉「止めるツス、イチエモン!」

声がして上を見ると、安田さんと比嘉さんが居た。

その2人の声に反応して、イチエモンは動作を止める。

その2人に、これが何なのかを聞く。

深澄「比嘉さん、安田さん。これ、何なんですか？」

比嘉「ええつと……………。イチエモンツス。」

安田「正式名称は、エレクトロアクティブ・マツスルド・オペレータータイプ・マシーン……………。略すると、E M O M。」

比嘉「それに、1号機の1を合わせて、イチエモンツス!!」

明日奈「は、はあ……………」

なんか、ダサいわね。

それを自信満々に答える比嘉さんだから、命名者は比嘉さんという事になるわね。

安田「比嘉。流石にそのネーミングはどうかと思うんだがな。」

比嘉「だって、とても分かりやすいツスよね!?!」

安田「分かりやすくて、ダサいぞ!」

比嘉「安田だって、そこまで良い名前が思いついていないじゃないツスカ!」

そんな風に言い争いをする安田さんと比嘉さんを止めるべく、明日奈が咳払いをしつつ質問をする。

明日奈「コホン……………。それで、このイチエモンと何をしているんですか？」

比嘉「いや……………」

安田「実は……………」

凜子「比嘉君と安田君が私をプログラムのチューニングにつき合わせているのよ。もうゼミの先輩後輩でもないのに。」

「凜子さん……………」

凜子「おはよう、明日奈さん、深澄さん。昨夜はよく眠れたかしら？」

比嘉と安田の言葉を遮り、下に降りてきた神代の姿にようやく安堵の声を上げる私と明日奈。

そのまま話はイチエモンの話へと移ったのだけど……………。

凜子「やっぱりボトルネックはバランスの処理速度ね……………。予算はあるんでしよう？もっと早い処理チップは使えないの？」

比嘉「廃熱系とバッテリー消費を考えると、頭はここらが限界なんツスよ。」

安田「後はもうEAPアクチュエータのチューニングで追い込んでいくしか……………」

凜子「大体、そのポリマー筋肉が前時代的なのよ！CNT使いなさいよ。そうすれば、もっと軽くなるでしょう？」

深澄「(明日奈……………。今の話、分かった?)」

明日奈「(ううん……………全然。キリト君かカルム君がいたら、説明できるかもしれないけど……………)」

イチエモンに関する技術論争に熱くなる科学者3人の会話に置いてけぼりにされてしまう私と明日奈。

かれこれもう10分程になる熱論はまだ終わりが見えず、降参とばかりに苦笑が漏れた。

そんな私たちの様子に、神代も自分が熱くなりすぎていたことに気付き、振り返る。

凜子「……………あつ。ゴメンなさいね、二人とも。聞いててつまらなかったでしょう？」

明日奈「いえ……………。周りが賑やかな方が、キリト君とカルム君も嬉しいでしょうし。」

比嘉「これは、あのおっさんから作るよう言われたんツスよ。」

深澄「え？菊岡さんが？」

凜子「私にも、どこまでが本気なのか分からないんだけどね……………」

安田「あのおっさん曰く、アンダーワールド育ちのフラクトライトをこっちに招待するのなら、彼らにも動かせる体が必要だろう……………。つて事になってね。」

明日奈「じゃあ、このロボットは、AIを載せる為のものなんですか？」

明日奈が比嘉さんと安田さんにそう聞くと、2人から否定の声が上がる。

比嘉「いえいえ、流石にこいつには載せないツスよ、明日奈さん。」

安田「コイツの他に、AI搭載用の2号機があつてな。そいつはもつとスマートだ。」

深澄「2号機……………」

明日奈「ちなみに、その子のお名前は……………」

比嘉「ニエモンツス！」

深澄「……………」

明日奈「そうですか。」

安田「ハアアア……………」

まあ、確かに、イチエモンの外見を見ると、カナにパラド、ユイちゃんは、入る事を断固拒否しそうね。

それを聞いた安田さんは、盛大なため息を吐く。

明日奈「さつき、AI搭載型はスマートになるって言っていましたけど、どうしてそっちの方がスマートになるんですか？」

明日奈の質問に対して、神代博士は立ちながら説明をする。

凜子「ああ……………」それは機械だけで人間の動きを再現しようとするだとバランス……………沢山の機械やパーツが必要となってくるの。」

安田「人間の場合だったら、脳が勝手にバランスを取ってくれるけど、機械の場合はそれを代替して再現しようとした結果、必然的にボディが大型化してしまうんだ。」

深澄「……………」なるほど。つまり、頭が人工フラクトライトになれば、オートバランスー

は人間と同じ性能があるから……………」

明日奈「その分の機械をつける必要がない……………つてことですか？」

私と明日奈の言葉に、開発者2人が答える。

比嘉「イエス！その通りッス！そうなれば、ほぼ完全な人型ボディを実現できる……………といいなという妄想的な観測なんッスけどね……………」

安田「でも、開発部にある……………ニエモンはシルエットだけで見れば、かなり人っぽいでぞ。」

凜子「そんなに自慢するのなら早く見せて……………。ねえ、比嘉君、安田君。そのニエモンは自立歩行はできないのよね？」

比嘉「へっ……………？それはもちろんッス……………」

安田「一応CPUは載せてますけど、肝心の制御プログラムが空っぽですから。」

凜子「そう……………そうよね……………」

何か気になる事があったのか、神代博士の言葉が詰まる。

けど、それも一瞬で、私と明日奈に声をかける。

凜子「明日奈さん、深澄さん。朝ご飯はもう食べたのかしら？」

明日奈「いえ、深澄を探しに真っ直ぐにここまで来ましたから。」

深澄「そういえば、朝ご飯まだだったわね。」

凜子「フフツ……。じゃ、一緒に食堂に行きましょうか？比嘉君と安田君はイチエモンとここで一緒に食べるらしいから。」

比嘉「エヘッ……。！」

安田「では、ごゆっくり。」

私と明日奈は、神代博士と一緒に、食堂へと向かう。

その時に、2人の男性とすれ違ったけど、その際に明日奈が何かを考え込んでいた。深澄「明日奈？どうしたの？」

明日奈「いや、さっきの人、どこかで会った事があるような気がして……。！」

深澄「そうなの？」

明日奈「ううん。やっぱり気のせいだと思うから。」

明日奈の反応が気になるけど、私たちは食堂へと向かっていく。

安田 side

俺は、比嘉と一緒にエナジーバーを食べていた。

だが、俺には気になる事がある。

安田「比嘉。ちょっとトイレ行ってくる。」

比嘉「行ってらっしゃいッス。」

そう言って、俺はメイン・コンントロールルームから出て行き、とある人物の後を追う。

その人物は、柳井という人物だ。

俺は以前、暇潰しで、感情フィールドを見てみると、一つ気になる事があった。

それは、右視覚領域に擬似痛覚を注入という外部命令があったのだ。

これでは、せつかく人工フラクトライトが制限を突破しかけても、そのプロセスが痛みで消されてしまう。

しかも、コードにクセがあった。

それは、コード871。

871とは何だろうと首を傾げたが、すぐに答えが導かれた。

871……つまり、柳井。

まさか、柳井が裏切り者なのか？

そう思い、柳井の白衣を一度預かって、ネームタグを見ると、871と書いてあったのだ。

これで確信を得た。

そう思い、柳井のこれまでの履歴を確認してみると、何と、あの須郷伸之の部下なのだ。

しかも、須郷は、あの忌まわしき研究を、アメリカに売ろうとした。

つまり、アメリカとのコネを握っている可能性が高い。

それを疑い、現在尾行中だ。

すると、とある部屋に入る。

一応仕掛けておいた盗聴器で内部の声を聞いてみると。

柳井「計画は順調です。あとは、オーシャン・タートルの近くを並走している護衛艦が離れるので、襲撃部隊は、オーシャン・タートルに襲撃して、私を拾って下さい。グロージェン・デイフェンス。」

これで合点がいった。

俺はすぐさま部屋から離れる。

グロージェン・デイフェンスとは、アメリカの民間軍事企業だ。

つまり、このプロジェクト・アリシゼーションのデータをアメリカに売るつもりだ。

安田「録音しておいて正解だったな。」

これで、柳井を追放できる。

だが、本当に来るのかも確認しておきたい。

しばらく泳がせるか。

第25話 決意の脱獄

カルム side

アリスとイーデイスによつて、セントラル・カセドラルに連れてこられた俺たち。すぐに審問されて、処刑されるのかと思つていたが、1日半が経過した。

その間、見回りの衛士が食事を届けてくる事以外、何もなかった。

無論、部屋に繋がれた鎖を手に嵌められているので、決して自由ではないが。

カルム「この牢屋にぶち込まれて、1日半が経過するなあ。ケント、少しは落ち着いたか？」

ケント「……………なんだか……………まだ夢を見ているような感覚だ。俺がナツジの左腕を切つたことも、それにベルがあんな風になつたことも……………」

カルム「あんまり思い詰めるな。今は、これからの事を考えよう。」

ケント「そうだな。」

ちなみに、キリトとユージオ、俺とケントの2組に別れており、少し離された所にぶち込まれている。

どうしたもんか……………。

ケント「これからの事か……。カルムの言う通りだ。何とかこの牢屋から脱獄して、イーデイスに何が起きたのかを確かめないと……。！」

カルム「その意気だ！」

だが、ケントの発言には、俺は驚く。

ケントが何の躊躇いもなく、『牢屋から脱獄して』と言った。

つまり、ケントにとって、優先順位は、公理教会よりもイーデイスの方が高いのだろう。

ケント、変わったな。

相棒の成長に、俺は嬉しかった。

後は、どう脱出するかだよな。

この鎖を切らないといけないが、雷鳴剣黄雷と刃王剣十聖刃は、イーデイスに持っていかれてしまった。

一応、ケントに聞いてみる。

カルム「ケント。あれは本当に、お前が探してたイーデイスなのか？」

ケント「間違いない。あの声、あの髪色に赤い目。……。忘れる筈がない。彼女は間違いないイーデイスだ。……。雰囲気はかなり違うけどな。」

カルム「幼馴染のお前を覚えていない上に、容赦なく叩いたしな。つまり、何らかの

手段で、記憶とか思考を制御されている、って事になるのかな？」

ケント「だが、そんな神聖術、教本には載っていないかったぞ？」

カルム「教会の偉い司祭ってのは、天命さえも操れるんだろ？記憶をどうこうするのは簡単だと思うけど。」

STLは、記憶をどうこうする事が出来るマシンだからな。

それが出来るなら、人工フラクトライトに対しては、簡単に出来る筈。

だが、菊岡が、人工フラクトライトにそんな権利を持たせるとは到底思えない。

何を企んでるんだ？

カルム「だけど、気になるな。あの声は一体なんだ？」

ケント「ああ。お前とキリトが聞いたって言ってた声か？」

詳細は、ケントとユージオには話していないが、ゴブリンとの戦いで重傷を負ったケントとユージオを助けるべく、メアリとセルカの力を借りて、自分の天命をケントに分け与えた。

だが、俺も死にそうになった時。

イーデイス『私とアリスは、いつまでも待っているわ。……………セントラル・カセドラルの最上階で、……………皆を待ってる……………』

そう聞こえたのだ。

だが、俺たちの目の前に現れたイーデイスは、村長の補佐の娘のイーデイス・リデルではなく、イーデイス・シンセシス・テンと名乗った。

どうなったのかは、全ては最上階に行けば分かる筈だ。

カルム「さて、どうにかして、この鎖を切らないとな。」

ケント「それはそうだが、何度も試しただろうか？同クラスの武器とかがないと、この鎖は切れないぞ。」

カルム「それなんだけど、あるだろ。この鎖と同クラスの物が。」

ケント「え？」

俺はそう言って、鎖を持ち上げる。

ここでもステイシアの窓を開ける事が分かり、鎖の優先度を見てみると、38だった。確かに、この鎖以外には何も無いが、逆に、この鎖が2本あるのだ。

ケント「つまり、この鎖を引っ張って、切ろうという事か？」

カルム「ああ。原理上、鎖の優先度はまったく同じだから、これで互いの天命を削り合うと思う。」

俺はそう言って、鎖を交差させる。

念のため、ステイシアの窓は開きっぱなしにしておいて、どこまで削れたのかを確認する。

カルム「行くぞ……………」

ケント「ああ……………」

「せえの!!」

掛け声と共に、鎖を引っ張り合う。

天命を確認すると、たった一回で半分は削れていた。

カルム「流石だな……………」。たった一撃で、半分は削れたぜ。」

ケント「あと一回だな。」

カルム「ああ。行くぞ！」

「せえの!!」

その掛け声と共に引っ張ると、鎖が切れて、俺たちは壁に頭をぶつける。

ケントが呻き声を上げる。

ケント「いててて……………」。今ので天命が100ぐらい減った気がするな……………」。

カルム「それぐらいなら、まだマシだろ？」

鎖は、長さ1メートル20センチほどを残して切断されていた。

もう一度ステイシアの窓を見ると、鎖の天命は、18000にまで回復していた。どうやら、新しい鎖型オブジェクトとして再設定されたみたいだな。

カルム「さて、と。」

俺は周囲を見渡してみると、テーブルが一つだけあった。

これを使えば、脱出出来るな。

だが、一つケントに聞いておこう。

俺は真剣な眼差しで、ケントを見つめる。

カルム「一応聞いておくけど………良いんだよな、ケント。ここから脱出して、イーデイスに関する真実を探る事………。すなわち、公理教会に真つ向から反逆する事になる。何か行動を起こすたびに、一々葛藤している余裕はない。覚悟が決まらないなら、ここで待っててくれ。」

俺としても、こんな厳しい事をケントには言いたくないが、避けては通れない。

ケントのフラクトライトは、激しい構造変化を経験した直後だ。

あまりケントの思考回路に負荷は与えたくない。

しかし、この牢屋から脱出して、カセドラルへと侵入するという行動をするなら、一々葛藤されては困る。

そして、最上階にあるであろうシステム・コンソールに無事に辿り着いてもらい、菊岡と話をさせる。

そうすれば、流石の菊岡も、とんでもない物を創ったと認識するだろう。

俺の言葉にケントは、一瞬大きく目を見開いて、ゆっくりと俯く。

ケント「……………ああ……………。分かつてる。」

ケントの発せられた声は、静かな囁きではあるが、揺らぎはない。

ケント「俺はもう迷わない。イーデイスと一緒にルーリッドの村に帰る為なら、公理教会に背いて、何度でも戦う。……………あの整合騎士が本物のイーデイスなら、記憶を失っている理由を突き止めて、元に戻す。」

ケントのその言葉に、迷いはなかった。

ケントの信念が伝わる。

ケント「以前、森遊びの時に、お前とキリトが言つてた、『法で禁じられていたとしても、しなきゃいけない事だつてある。』つて言葉。漸く意味が分かつたよ。」

カルム「そつか……………。ケントの覚悟、伝わつたよ。」

ケント「ああ。」

カルム「さて、ここから出て、キリト達と合流しよう！」

ケント「そうだな！」

俺は、部屋に置いてあつたテーブルを持って、タカトラ先輩から教わつた投擲術を使う。

すると、鉄格子は上下の枠から外れて吹き飛んで、床に倒れる。

あまりにも大きい音がなつたので、獄吏が来る事を警戒したが、何にも来ない。

カルム「待ち伏せしている可能性がある。注意して、キリト達と合流しよう。」
ケント「了解。」

俺たちは足音を殺しつつ、駆け出す。

しばらく走っていると、キリトとユージオと合流する。

カルム「キリト、ユージオ！」

キリト「カルム、ケント！無事に出れたんだな！」

ケント「ああ。」

ユージオ「これで4人が揃ったね。」

再会を喜びつつ、俺たちは外へと向かっていく。

途中、看守室を通り過ぎようとして、中を覗いてみたが、看守は寝ていた。

ユージオ「……………ねえ、キリト、ケント、カルム……………」

ケント「アレは……………寝ているな。」

キリト「随分とぐっすりだな。」

カルム「……………お勤めご苦労様です。」

ユージオとケントの言葉に苦笑しながら答える俺たち。

その視線の先には、看守室のベットでぐっすりお休み中の看守その人の姿があったからだ。

とりあえずラッキー半分同情半分の感想を抱きながら、俺たちは牢獄を脱出して地上へ、セントラル・カテドラルの庭園へと出た。

牢獄から距離を取ったところで追手がきていないことを確認して、ようやく一息を吐くことができた。

カルム「追手は……………来てないな。」

キリト「そうだな。脱獄が気づかれてなくて良かったぜ。」

カルム「問題は、どうやってセントラル・カセドラルの中に入るかだけ……………」

ユージオ「……………うん？ ねえ、ケント。」

ケント「どうした？……………アレは……………」

脱獄が成功した事にホツとしつつ、これからの事をキリトと話し合っていると、ユージオとケントが何かを見つけたようだ。

ユージオ「……………間違いない……………」

ケント「咲いているのは初めて見たが、これは薔薇だ！」

キリト「へえ、薔薇か……………って、薔薇!? 本当か!？」

カルム「もしかして……………この馬鹿広い庭園に咲いてる花が全部薔薇!？」

驚くユージオとケントの言葉に、キリトと俺もびつくしりして慌てて周りの花を見渡していた。

そもそも薔薇の花というアンダーワールドではかなり貴重な花なのである。央都や学院でさえ見ることはなかったのだから驚くのは無理ない話だった。

それに、飛竜で連行されてきた際に空から庭園の光景は目にしていたが、只でさえ迷路のように広がる庭園に薔薇が咲き誇っているのだとすれば、ここが以下に外部と比べて違う場所なのだということを認識させられたような気がした。

どうやら、ユージオとケントも同じような気持ちらしい。

ユージオ「信じられないよ……………」

ケント「ああ。俺たち、セントラル・カセドラルに来たんだな。」

カルム「予定よりも早く……………しかも、罪人としてだけどね。」

キリト「だけど逆に助かったのかもしれない……………。もし整合騎士になってからここに来たら、俺たちも記憶を制御されていたかもしれない。」

確かに、そうだな。

すると、俺の心に、とある疑問が浮かぶ。

カルム「でもさ……………。もし記憶を操られているとすれば、整合騎士たちは自分を何だと思っているんだ？ 全ての記憶が封じられているわけじゃないだろう？」

キリト「自分がどう生まれてとか、家族や故郷のことに関する知識は残っていないと変だよな。だって、それが自分の根っこの部分……………本来の起源に当たるわけだから

さ。」

ユージオ「そんな大本の記憶まで操作するなんていくら何でも難しそうだよね……………」。整合騎士は飛竜でどの地域にもすぐに向かうことができるわけだし……………」。

ケント「本物の記憶を封じてから偽物の記憶を植え付けたとしても、自分の生まれ故郷を訪れでもすれば嘘だって気づくわけ……………」。あつ。」

途中まで言いかけたケントの言葉が止まる。

ユージオとケントの反応が同じ事から、同じ事を考えているのだろう。

キリト「ユージオ……………」。ケント……………」。2人とも、このカセドラルで、もしかしたら俺たちの記憶を取り戻す手段が見つかるかもしれないって思ったんだろう?」

カルム「……………」。そういうことね。」

「……………」。

キリトの指摘に黙るケントとユージオ。

そんな2人に、俺とキリトは近寄る。

キリト「コイツらめ!この、この……………」!」

カルム「心配しすぎだろ。」

ユージオ「や、やめてよ2人とも!」

ケント「頬を引っ張るな!」

キリトがユージオとケントの髪をくしゃくしゃする横で、2人の頬をつねる。

2人は照れていた。

キリト「言っただろう？記憶が戻ろうと戻らまいと、俺もカルムもお前らに最後まで付き合うって。」

カルム「そこまで心配されると、逆にこつちが不安になるぞ？」

ユージオ「……もちろん二人の言っていることを疑ってるわけじゃないんだ……。何度も二人はそう言ってくれたわけだし。」

ケント「だが……俺たちの旅そのものが終わりに近づいているだと思ったら、なんだか……。」

なるほどな。

つまり、旅の終着点に着いたら、俺たちが居なくなってしまうと考えたんだな。

だから、俺たちは答える。

キリト「だったら、旅の終わりは幸せな結果にしようぜ。」

カルム「そうだな……。悲しい結末よりも、いつでも笑って思い出せる記憶にさ。アリスとイーデイスの記憶を戻して、ルーリッドの村に戻るっていうお前らの夢を叶えてさ。」

キリト「あつ、そうすると、ユージオとケントはまた転職を選び直さないといけない

な。今からよく考えておいた方がいいぞ？きつと次のは一生ものになるだろうからな。」

「……………」

俺とキリトの言葉に呆気にとられるケントとユージオだったが、いつもの調子に戻って、苦笑しながら答える。

ユージオ「それは気が早すぎないかい？」

ケント「まあ、何がどうあれ、木樵だけはごめんだがな。」

キリト「そりやそうだ。」

カルム「あんな途方もない事を経験すればな。じゃあ、行こうか。」

俺たちは、カセドラルに向けて歩き出す。

しばらくして、噴水がある少し開けた場所に出る。

すると。

???「流石は我が師アリス様……………。その慧眼はやはり素晴らしい。」

「……………」

突然、男性の声が出て、視線を向けると、アリスやイーデイスの物とは違うデザイン
の鎧を着ている男性がいた。

十中八九、整合騎士だろうな。

??? 「まさか、囚人の脱走という万が一の脱走を予期されていたのだからな。君たちの脱走に備えてここで一晩過ごせと命じられていたが、アリス様の予想に間違いはなかったな。」

キリト「アリスが……………?」

カルム「我が師……………?」

??? 「正直私は半信半疑だったが、まさか本当に現れるとはな。」

カルム「……整合騎士か。脱走が予想されていたのは予想外だったな。」

まさか、脱走が予期されていたのか!?

これに関しては想定外だ。

くそ、刃王剣十聖刃が欲しい……………!

戦力に関しては、こちらが不利だ。

??? 「もちろん、すぐに地下牢に戻ってもらうが……………その前に少々厳しい仕置きが必要だよ。君たちも覚悟の上だろうがね。」

くそ、相手の余裕がムカつく!

キザな台詞を吐きやがって……………!

キリト「なら、アンタも分かっているだろうな?」

カルム「罪人である俺たちが無抵抗で罰を受け入れるとも思ってたら、逆に痛い目

を見ることになるぞ？」

エルドリエ「……………アハハハハ！威勢がいいね！その空元気に敬意を表して名乗っておこう……………。私は整合騎士、エルドリエ・シンセシス・サーテイワン。」

ユージオ「……………えっ!？」

ケント「エルドリエ……………!？」

なんか、ユージオとケントが酷く驚いているな。

まあ、あまり気にはいられないが。

エルドリエ「ほんの一月前に召喚されたばかりで、未だ統括地も持たない若輩者だが……………そこはお許し願おうかな？」

カルム「良いですよ。その余裕の笑みと態度を出せなくしてやりますよ……………!？」

コイツ、絶対に態度を崩させてやる!

どうやら、俺はキザな奴が嫌いのようだ。

こうして、整合騎士との戦いが幕を開ける。

第26話 霜鱗の整合騎士

カルム side

俺たちは、エルドリエ・シンセシス・サーティワンと交戦する事に。

だが、こっちは、武器が碌なのが無いのに対して、向こうは剣と鞭を持っていた。すると、キリトが声を出す。

キリト「ユージオ、ケント。俺たちが前に出るから、合図を待っていてくれ。カルム、フオローを頼む。」

カルム「了解。」

エルドリエ「……………その鎖を武器に戦うつもりなのかな？ならば、私も剣ではなく……………こちらで相手をしよう。」

キリトが鎖を鞭の要領で伸ばし、俺は鎖を指に絡ませて、ナックルみたいにする。

まあ、ナックルを使った事なんてないんだけどね。

すると、エルドリエは懐から鞭を取り出す。

だが、鞭のデザインが普通の物と違う。

何か……………蛇の鱗みたいな……………。

エルドリエは、式句を言う。

エルドリエ「システムコール……………エンハンス・アーマメント!!」

「「っ!?!」」

エンハンスは強化で、アーマメントは武装を意味する英語だろう。

つまり、何かしらの強化が入っている可能性が高い。

カルム「キリト、気をつけろ!」

キリト「大丈夫だ。鞭との戦いならリーナ先輩に鍛えられたからな……………。間合いに入らなければ、何も……………」

エルドリエ「はあああああああ!!!」

カルム「危ねえ!」

俺は咄嗟にキリトを突き飛ばし、自身の鎖で防御する。

だが、かなり吹き飛ばされ、鎖を見てみると、一部がごっそり削れ、リングが一つ千切れそうになっていた。

エルドリエ「ほう……………。我が神器、霜鱗鞭の一撃を凌ぐか。」

カルム「どうも。」

不味い、かなり強い!

しかも、鞭使いとはあまり戦った事がないんだよなあ……………。

キリト達が俺の元に来る。

キリト「大丈夫か!？」

カルム「大丈夫だ。」

キリト「悪い、俺が油断したばかりに……。」

カルム「謝罪は後だ。」

ユージオ「クラス38の鎖が……!」

ケント「アレが、武装完全支配術か……!」

キリト「ユージオ、ケント。俺たちがどうにかしてあの鞭を止めるから、2人は一撃を叩き込んでくれ。」

カルム「頼む。」

ユージオ「ああ。」

ケント「分かった。」

エルドリエ「相談は終わったかな、囚人君達。さあ、少しは私を愉しませてくれよ。」
くそ、余裕だな。

だが、こんな所で諦める訳にはいかない。

腹を括るか。

ケントとユージオが下がったのを見て、俺たちはすぐさま神聖術を発動する。

「システム・コール！ジェネレート・サーマル・エレメント！」

エルドリエ「システム・コール。ジェネレート・クライオゼニック・エレメント。」

俺とキリトは、合計六つの熱素を生成して、エルドリエは凍素を5個生成する。

そのまま、術式を繋げていく。

「フォーム・エレメント、アロー・シエイプ！」

エルドリエ「フォーム・エレメント、バード・シエイプ。カウンター・サーマル・オブジェクト。」

「「デイスチャージ！」」

俺とキリトの神聖術が、エルドリエに向かっていき、エルドリエの神聖術が迎撃する。

派手な煙が上がり、俺とキリトはエルドリエに向かって駆け出していく。

エルドリエは鞭を振るってきて、俺とキリトはそれを躲す。

だが、驚く現象が起こった。

それは、鞭が2本に分裂したのだ。

カルム「なっ!?!」

俺とキリトは、鞭で腹を思いつきり叩かれ、キリトはダメージで動けなくなり、俺はギリギリ受身をとる。

あんなのアリかよ……………!?

エルドリエ「ふむ。やはりこれは買いかぶりだったかな？」

カラム「あまり舐めてると、痛い目を見ますよ。整合騎士さん？」

エルドリエ「威勢が良いね。なら、せめてもの情けだ。意識を刈り取ってあげよう。」

エルドリエは、俺とキリトに止めを刺そうとする。

すると、背後からユージオとケントが奇襲を仕掛ける。

「ハアアア!!」

だが、エルドリエはすぐさま対応して、鞭で2人を噴水に飛ばす。

だが、エルドリエがユージオとケントに意識を持っていった隙を逃さず、俺とキリトは駆け出していく。

俺は、エルドリエに向かって、鎖の一部を投げ飛ばす。

そう、これは、鎖を切った時にできた鎖のかけらだ。

この世界は、オブジェクトが破壊されたとしても、すぐに消える訳ではなく、破片としてしばらくは残る。

これを利用して、エルドリエの目に向かって投げつける。

流石に気付いたのか、左頬に傷をつけたが、目への直撃は免れた。

その隙に、俺とキリトは接近して、鎖を振りかぶる。

エルドリエは、左手で受け止めたが、手の部分には鎧がなく、布で覆われているだけ

なので、ダメージは与えられただろう。

そして、2人がかりで霜鱗鞭を掴み、エルドリエの動きを止める。

エルドリエ「買いかぶりと言ったのは、撤回しよう。よもや私に、これほどまでの手傷を負わせるとは。」

カルム「言っただろ。舐めてると痛い目を見るってな。」

キリト「……………そりやどうも。」

エルドリエ「それにしても、その技……………その戦い方、不思議と見覚えがある気がするな。」

キリト「へえ……………。前に俺と同じセルルト流の剣士と戦った事があるんじゃないのか?」

エルドリエ「ふ、そんな事はないのだよ囚人君達。言っただろう、私は1ヶ月前に整合騎士として、人界に召喚されたばかりだよ。」

カルム「……………その召喚っていうのは……………」

すると、俺は噴水の音がくぐもって聞こえたのに気がついた。

恐らく、2人のサインだろう。

カルム「……………なんだか、誰かにこの人界に呼び出されたみたいだ、聞こえるな!」

俺とキリトは、同時に鎖を引っ張る。

エルドリエも、咄嗟に反応して、鎖を引き戻そうとするが、鎖が千切れる。

エルドリエ「なっ………!!」

流石のエルドリエも、対応しきれずに体勢を崩した。

その隙に、ユージオとケントが、噴水から飛び出してくる。

「ハアアア!!」

2人の気合いの入った声と共に、鎖がエルドリエの後頭部に向かって振り下ろされる。

だが、エルドリエから、短い術式が発せられる。

エルドリエ「リリース・リコレクション。」

カルム「!?」

リリース・リコレクション。

つまり、記憶を解放するという意味になる。

どういう事だと首を傾げたが、意味はすぐに分かった。

なんと、エルドリエの鞭が、蛇に変化して、ユージオとケントの鎖を啜えて、2人を地面に叩きつける。

ユージオ「うわああアア!!」

ケント「くっ!!」

2人は叩きつけられても、すぐさま動こうとするが、2人の眼前に、剣が向けられる。蛇は、いつの間にか消えていた。

エルドリエ「……………アリス様が警戒する訳だな。型も何もない攻めだが……………それ故に私の予測を上回り、《記憶解放》の奥義を使う事になるとはね。」

カルム「なるほど……………。その鞭、元々は蛇だったんだな。」

エルドリエ「そういう事だ。」

だとすると、かなり厄介だな。

アレがもう一度使われたら、勝ち目があまり見えない。

現状、俺とキリトの2人がかりで鞭を抑え、エルドリエは鞭を動かせず、ケントとユ-

ジオは、剣を突きつけられ、動けない。

膠着状態だな。

どうしたものかと悩んでいると。

ユージオ「貴方こそ……………やっぱり流石だ、整合騎士殿。」

キリト「おい！」

カルム「何、感心してんだ。」

ケント「俺は、最初からどこかで聞いた名前だと思っていたが、漸く思い出した。この人は、今年の、ノーランガルス北帝国第一代表剣士。そして、四帝国統一大会の優勝

者、エルドリエ・ウールスブルグだ！」

カラム「な……………!?!」

まさか、四帝国統一大会の優勝者!?

通りで強い訳だ。

そういえば、四帝国統一大会の優勝者は、整合騎士になるって言ってたな。

だが、それだと先ほどのエルドリエの言葉に齟齬が発生する。

エルドリエは、『1ヶ月前、整合騎士として人界に召喚された。』と言っていた。

任命された、ならまだ分かるが、その言い方では、まるで……………。

エルドリエ「……………私が、北帝国代表剣士、エルドリエ・ウールスブルグ……………?」

すると、エルドリエから掠れた声がする。

当の本人も驚いてるな。

ケント「そうです。あなたは流麗極まる剣術で全ての試合を一本勝ちで勝利したつ

て、新聞の記事に書いてありました。」

エルドリエ「な、何を……………何を言っている!?!私は、この地に召喚された整合騎士、エ

ルドリエ・シンセシス・サーティワンだ!?!ウールスブルグなどという名など知らん!?!」

ユージオ「でも……………!」

エルドリエ「知らん!知らんと言っている!」

エルドリエは、動揺しながら頭を振りつつ、下がっていく。その際に、鞭を落としていた。

エルドリエ「わ、私は……最高司祭アドミニストレータ様によつて31番目に召喚された騎士!!天界よりこの地に使わされた……整合騎士……のはず……うおおおおおおお!!」

「「「っ?」」」

すると、エルドリエは絶叫し、額の所に、紫色の逆三角形の模様が浮かんだ。そして、額から三角柱と思われる何かが出てきた。

ユージオ「何だ……あれ……?」

ケント「分からない……」

エルドリエ「ああああ……ぬわああああああ!!」

カルム「エルドリエ!!」

エルドリエは再び絶叫し、謎の物体から光が消えたと思つたら、意識を失う。その物体は、エルドリエから半分くらい出た所で止まっている。

ユージオ「な、何が……!!」

ケント「起こっているんだ……!!」

カルム「キリト。もしかして、アリスとイーデイスが別人格になったのは……!!」

キリト「ああ。アレが原因だろうな。」

なら、調べる必要がある。

エルドリエに近づこうとするが、謎の物体がエルドリエの頭に返ろうとする。

不味い……………!

すると。

キリト「エルドリエ!エルドリエ・ウールスブルーグ!!」

エルドリエ「……………」

カルム「止まった……………」

そうか、本来の記憶を刺激すれば、アレが取れる可能性があるな!

カルム「ユージオ、ケント!この人の知ってる事をもつと言ってくれ!」

ユージオ「うん!」

ケント「分かった!」

俺の言葉に領いたユージオとケントは、エルドリエの記憶を刺激するべく、次々と言葉を紡いでいく。

ユージオ「エルドリエ!貴方は帝国騎士団将軍エシユトル・ウールスブルーグの息子だ!母親の名前は……………確か……………アルメラ……………そう!アルメラだ!」

エルドリエ「ア……………ルメ……………ラ?」

ケント「そうだ！貴方はお母さんのために整合騎士になろうと必死に努力してきたの
だろう！帝國統一大会の優勝記事でもそう答えていた！そのことを思い出すんだ!!」

エルドリエ「……かあ、さん………!!」

よし、後少しだ………!!

俺はエルドリエに向かって、更に声をかけようとする、上空から嫌な気配を察して、
少し離れる。

すると、俺がいた場所に、矢が突き刺さっていた。

カルム「あつぶね………!!」

キリト「上だ!!」

キリトの声に上を向くと、飛竜がいて、赤い整合騎士が乗っていた。

しかも、矢を2本つがえていた。

カルム「やつべ!!」

キリト「離れろ!!」

俺たちは矢を避けるべく、後ろへと飛ぶ。

どうやら、エルドリエから俺たちを引き剥がす為の射撃のようだ。

???「罪人共よ！騎士サーティワンから離れろ!!」

カルム「しまった………!!」

離された事により、エルドリエに刺さっていた三角柱は、引っ込んでしまった。だが、それよりも、上空の整合騎士だ。

着弾した石畳が、かなり傷ついているのを見て、優先度がかなり高いと容易に想像がつく。

???「光輝ある整合騎士に墮落の誘いを試みた罪、最早許せぬ！四肢を射抜いてから牢に叩き返してくれるわ!!」

キリト「不味い！」

カルム「走れ!!」

俺たちは、全力でダッシュする。

背後から次々と矢が放たれては床を砕いていく様は、まるで当たったら痛いでは済まないことを証明しているようだった。

ケント「アレに当たったら、ひとたまりもないぞ!!」

カルム「それは分かるから、今はとにかく走れ!!」

だが、状況はよろしくない。

何せ、相手は上空からこちらを見ていて、丸わかりなのだ。

このままでは、いつ命中してもおかしくない。

庭園を駆け抜けるが、T字路に差し掛かった。

カルム（どっちだよ……………!?!）

キリト「皆、右だ！」

ユージオ「う、うん！」

ケント「分かった！」

キリトの指示の元、俺たちは右に曲がる。

その間にも、後ろには矢が石畳に突き刺さっていく。

カルム「おい！アレで何本撃った!?!」

ケント「30本は軽く超えてるな！」

カルム「くそつたれ!!」

ユージオ「キリト！行き止まりだよ！」

キリト「不味い……………!!」

俺がケントに撃った矢の数を聞いて毒づいていると、ユージオの言葉が響く。

先を見ると、行き止まりなのだ。

すると。

???「おい、こつちじゃ！」

「「「!?!」」」

???「何をしている！早く来い!!」

少女と男性の声がすると思ったら、ドアが現れて、誰かが手招きをしていた。更に、ローブ姿の男性が現れる。

その手には、一本の剣が握られていた。

カルム「と、とにかく！飛び込めえ!!」

俺たちは、そのドアへと飛び込む。

その間に、男性が光を出して、上空の整合騎士の目を眩ませ、ドアに飛び込む。

第27話 図書館の賢者と光の剣士

カルム side

あの整合騎士に追われて、咄嗟にドアに飛び込んだが、少しの浮遊感を感じた。目を開けると、床が迫っていた。

何とか、着地できた。

が、俺の背後で物凄い落下音が響いた。

何事か後ろを向くと。

キリト「痛ててて………。」

カルム「大丈夫か？」

ものの見事に顔面からダイブを決めていたキリトと無事に着地を決めたユージオとケントの姿があった。どうやら俺たち全員、無事にあの状況から脱することができたようだ。

だが、ここがどこだか分からないため、油断はまだできない状況が続いていることは変わりなかった。

警戒を緩めることなく、周囲を見渡している時だった。

「やはり探知されてしもうたか。このバックドアはもう使えん。」

「そうか。」

扉の方から声が聞こえて、そちらを向くと、1人の少女と1人の男性がいた。

少女は杖を持っていて、博士帽の様な帽子を着けていた。

男性は、ローブを着用していて、一本の剣を持っていた。

少女が杖を叩くと、扉は消滅した。

一応、礼は言っておくべきだよな。

カルム「助かりました。あの、男性の方は、一度会ったことがあるような気がするんですが……………」

ユーリ「ああ。俺はユーリ。お前に刃王剣十聖刃を託した者だ。」

カルム「やっぱり……………」

という事は、あの男性は、刃王剣十聖刃の元に案内したという事か。

キリト「その……………」

ユージオ「初めまして。僕はユージオ。こっちは、キリトにカルムにケントです。」

キリト「おい、ユージオ……………」

ケント「あの……………。あなた達は、この部屋に住んでいるんですか？」

「???」 「そんな訳がなからうが。……………着いてこい。」

少女は呆れ顔になりつつ、鼻眼鏡をくいっと持ち上げながら答えて、正面の壁にある大きな壁に向かって歩き始める。

俺たちは少女とユーリに着いていく。

キリトが気になる事があるのか、少女に聞く。

キリト「……………ここは、もうセントラル・カセドラルの内部なのか？」

???「そうであるとも言えるし、違うとも言えるな。」

カルム「どういう事です？」

???「わしが本来の扉を消去したゆえ、この大図書館は、カセドラル内部に存在するが、何者も入ってはこれない。」

カルム「つまり、ここは、カセドラルから独立しているという事ですか？」

ユーリ「そうだ。」

???「お主らのように、わしが自ら招かない限りはな。」

俺の言葉に、頷いたユーリと少女。

扉が開くと、大図書館という名前が相応しい広大なフロアが現れた。

ケント「これは……………」

ユージオ「大図書館……………」

???「うむ。ここにはこの世界が創造された時よりのあらゆる歴史の記録と天地万物の

構造式、そして、お主たちが神聖術と呼ぶシステムコマンドの全てが収められておる。」

カルム「全て……………!?!」

その言葉に、俺は驚いた。

修剣学院には、アンダーワールドの歴史に関連する本があまりないから、見てみたい
な。

俺の好奇心が疼いている中、キリトは少女に質問をしていた。

キリト「アンタ……………何者なんだ……………?」

カーディナル「わしの名はカーディナル。……………かつては世界の調整者であり、今はこ
の大図書館のただ一人の司書じゃ。」

カルム「え?」

俺は、その名前に驚いた。

それは、カーディナルという名前に、聞き覚えがあるからだ。

SAOと、新生ALOで。

ただ、カーディナル・システムには人格という存在がないはずだ。

そんな風に考えていると。

ユージオ「あらゆる歴史……………?」

ケント「四帝国の建国以来の年代記が、全部ここにあるんですか?」

カーディナル「うむ。世界がステイシア神とベクタ神によって、人界と暗黒界に分かれた頃の創世記すらも所蔵されておる。読みたければ読んでもよいぞ？」

ケント「それは是非！」

ユージオとケントのテンションが高くなってるな。

まあ、俺もそういうのは見てみたい。

カーディナル「それよりも……。お主ら、右腕を出すのじや。」

「「……………?」」

カーディナル「良いから、ほら。早く出すのじや。」

カーディナルにそう言われ、首を傾げながら右手を差し出した。

そして、それを見て確認したカーディナルは持っていた杖を俺たちの右腕に向けたかと思えば。

カーディナル「ほい。」

キリト「……………! おおっ！」

カルム「鎖が取れた……………!」

やっと鎖が取れた。

右腕が軽く感じるな。

すると、ケントとユージオがくしゃみをする。

そういえば、2人は噴水に落ちてたしな。

カーディナル「先程の戦闘でかなり疲労も溜まっておるのではないか？ここには狭いが風呂場もある。ゆっくりと体を温めてきてはどうじゃ？」

カルム「……………ケント、ユージオ。行ってきていいぞ。2人は噴水に落ちてたしな。」
キリト「俺たちは後で良いから。」

ユージオ「……………ありがとう、2人とも。すみません、お言葉に甘えます。」

ケント「……………それと、創世記に関する本はどこに置いてますか？」

ユーリ「風呂から上がったら、俺が案内しよう。着いてこい。」

ユージオ「分かりました。」

ユージオとケントは、ユーリに連れられて、風呂場へと向かう。

俺も、創世記の本を読んでみようかな……………。

そう思っていると。

カーディナル「……………尤もここにある創世記は残念ながら公理教会最高司祭の創作物ではあるがな。」

カルム「えっ!？」

キリト「っ!？」

その言葉に、俺とキリトは顔を見合わせる。

俺が聞いてみる。

カルム「それって、ステイシアやベクタといった神は実在しないということなのか？」
カーディナル「そんな者はおらぬ。アンダーワールドの民が信じておる神話は、教会が支配権を確立するために作り広めた創作物にすぎん。ステイシアを始めとした神たちの名は緊急措置用のスーパードアカウントとして登録されてはおるが、外の人間がそれを使ってログインしたことは一度もない。」

それを聞いたキリトは、語気を少し強めにして、カーディナルに言う。

キリト「やつぱりそうか……！あんたはアンダーワールドの住人じゃないんだな？
この世界の外側……システム管理者たちに近い存在だ！」

カーディナル「うむ、お主たちが考えている通りじゃ。そして、それはお主たちにも
言えることじゃないな。無登録民キリト、そして、カルムよ。」

カルム「そうだ。俺たちもまた、外からこの世界にやってきた。」

カーディナルの方も、隠す事は何もいいのか、腹を割って話してくれるそうだ。
こちらも、外の住民だという事を隠す必要がないな。

カルム「この世界を作ったのは、ラーズ。それで合ってるよね？」

カーディナル「いかにも。」

キリト「そして、あんたはカーディナル・システム……。仮想世界を制御するため

の自立型プログラムだ。」

カーディナル「そうじゃ。まさか、カーディナル・システムのことまで知っておるとはのう……。もしかして、あちら側でわしの同類と接したことがあるのか？」

カルム「まあね……………」

ユイちゃんとかナとの一件の時に、キリトと共にカーディナル・システムに挑んだものだ。

そして、カーディナル・システムが持つクエスト自動精製機能のせいで、ALOが崩壊するかと思つたし。

キリト「でも、俺たちの知る限り、カーディナルシステムにはそんな擬人化インターフェイスは組み込まれていなかった。なのに、あなたはこうして俺たちの目の前にいる……………。あなたは一体どういう存在なんだ？」

カルム「それに、セントラル・カセドラルから独立してるこの大図書館で、アンタは一体何をしようとしてるんだ？」

カーディナル「フツ……………そうじゃの。少し長くなるが、できるだけ手短かに話すでしょうかのう。」

立ち話もなんだという事で、カーディナルに連れられて、椅子に座る。

すると、カーディナルは、杖を机に叩くと、肉まんサンドイッチが現れる。

キリト「おお！」

カーディナル「まじないをかけてある故、傷もたちまち癒えるぞ。」

カルム「ありがとう。」

キリト「へえ、流石は管理者だな。」

カーディナル「わしは管理者ではない。操れるのもこの図書室のオブジェクトだけじゃよ。」

なるほど。

まあ、食えれば良いか。

俺はそう思い、肉まんを頬張る。

美味しいな。

キリト「それなら、外との連絡手段は？カーディナル・システムの貴女なら……。」。カーディナル「ばかもん……。それができればこんな埃っぽい場所に何百年も閉じこもっておらんわ！残念ながら、その手段を持つているのは最高司祭だけじゃ。」

カルム「まあ、連絡手段があるだけ、まだマシでしょ。」

まあ、最高司祭に会いに行かなきゃいけないんだらうけど。

ただなあ……。今の俺たちの立場は、反逆者だしなあ……。

難しいかなあ……。

そんな事を考えていると、カーディナルが話し始める。

カーディナル「わしは先程この世界に神はおらんと言った。じゃが、創世の時代……今より遡ること450年前、似たような者たちは存在したのじゃ……。まだ央都セントリアが小さな村でしかなかった頃に4人の神がな。」

カルム「……450年前。」

4人の神「……………」。

もしかして。

キリト「それが起源の4人……。この世界に最初にダイブしたラーズのスタッフのことだろうか？」

カーディナル「その通りじゃ。4人の外世界人がこの土地に降り立ち、2軒の農家で8人ずつの子供を育てたのじゃ。読み書きや作物の育て方、家畜の飼い方、そして、後の禁忌目録の礎となった善悪の価値観に至るまでな。」

カルム「そんな時から善悪の基準まで教えていたのか……………」。

ラーズ「……………」というより菊岡は一体何を企んでるんだ？

カーディナルの話は続く。

カーディナル「原初の4人は課せられた困難な使命を見事に達成したことから人間としては最高級の知性を持っていたことが分かる。しかし、知性に秀でていても……善

ならざる者が一人だけ存在したのじや。」

カルム「善ならざる者……………」

キリト「まさか……………」

カーディナル「お主等の想像通りじや。そやつは子に所有欲や支配欲といった利己的な欲望をも伝えてしまった……………。その子供が祖先となったのだ。今の人界を支配する貴族や公理教会の上級司祭達のな……………」

「……………」

つまり、アンダーワールドの悪意の貴族が生まれたのは、ラーズのスタッフの一人が、やらかしたせいか。

なんて事してくれたんだ。

カーディナル「そして、彼らの頂点に立つのが公理教会最高司祭にして、今ではシステム管理者でもある一人の女じや……………。アドミニストレータという不遜極まりない名前を名乗っておる。」

キリト「アドミニストレータって……………」

カルム「ああ。エルドリエが言ってたな。確か、『最高司祭アドミニストレータ様の招きを受けて』って。」

カーディナル「わしが話しているのはまさしくそやつのことよ。そして、おぞましい

ことだが……。アドミニストレータは、言うなればわしの双子の姉でもあるのじゃ。」
「!?!」

どういう事!?

俺たちは顔を見合わせる。

カーディナル「順を追って話そう。原初の4人のログアウトから数十年後、とある二つの領主家の間で人界初の戦略結婚が行われ、一人の女の赤子が生まれたのじゃ……。名をクイネラと言ったのう。」

そこから、カーディナルは、アドミニストレータ……。もとい、クイネラの過去を話す。

クイネラは天職として『神聖術師見習い』が与えられた普通の人工フラクトライトだったらしい。

彼女は人一倍神聖術に関して研究していた、いわゆる研究者気質みたいなタイプで、神聖術の式句には意味があると見出していた、ある種の天才と呼べる才能を持っていたのだと……。

そして、その好奇心と知性が一つの過ちを生んでしまった。

彼女は気付いてしまったのだ……。

神聖術を扱うレベル……。システムコントロール権限やオブジェクト操作権限と

いった数値は人間や小動物……動的オブジェクトを殺せば上昇するというシステムの理に……。

禁忌目録がまだないその時代に彼女を縛るものなど存在しなかった。

そこから、クイネラは暴走しだした。

誰も直すことが出来ない怪我や病気を神聖術で治し、誰にでも親しみと慈悲の笑みを向ける彼女をいつしか人々は『神の子』、『ステイシア神の遣い』だと崇め始めたのだという。

そして、底なしの支配欲を満たす時が来たことを彼女は悟ったのだと。

神に祈りを捧げる場所として建てられた、セントラル・カセドラルの原型にて、自ら以上のシステム権限を持つ者が現れないようにするため、殺しを主に禁止とした法律の成文化……ステイシア神の信託と偽って公布した禁忌目録の初期版、今の世界の歪みをクイネラは作り出してしまったのだと……。

だが、そんな彼女にもどうにも回避できないものがあつたのだという。それは自身の寿命……フラクトライトの限界……それはアンダーワールドに生きる彼女にはどうしようもない結末のはずだった。

だが、彼女は再び過ちを……いや、奇跡ともいえる神聖術を発見してしまったのだという。

それが神の悪戯だったのか、悪魔からの贈り物だったのかは分からない。彼女は見つめてしまったのだ……禁断の扉を……。

そこまで言うと、カーディナルは、自らの腕で体を抱える。

カーディナル「……ふう……ふう……。」

カルム「……大丈夫か、カーディナル？」

カーディナル「……大丈夫じゃ。話を続けよう。」

流石に、これ以上は話させてはいけなれないと思ったのだが、カーディナルは話す。

カーディナル「ありえない偶然によつてか……あるいは外の間人が何か手を貸したのかもしれん。見せてやろう……。システム・コール！ インスペクト・エンタニア・コマンドリスト！」

キリト「っ!？」

カルム「これは!？」

確かに、これは悪魔からの贈り物だと言われても、納得がいく。

そこには、すべての神聖術のコマンドが記されていたのだ。

カーディナル「そうじゃ。この窓にはシステムコマンドの一覧が記してあるのじゃ。

それを知ったクイネラがまず行ったのは天命値の全回復と自然減少の停止、そして容姿の回復……。彼女は10代後半の美貌……。全盛期の美しさを取り戻したのじゃ。」

カルム「嘘だろ……………」

俺はカーディナルのその言葉に、クイネラの歓喜……………いや、狂喜っぷりがよく分かる気がする。

言っちゃなんだけど、クイネラの若くいたいという欲望は、女性なら誰しにも存在すると思うからな。

ミトはあるのか分らないが。

カーディナルが言葉を紡ぐ。

カーディナル「そこで満足して終わりにしておけばよかったのじゃ。しかし、クイネラは自分と同じ権限を持つ者すら……………カーディナル・システムすらその存在を許すことができなくなってしまうたのじゃ。」

カルム「まさか……………」

キリト「それって……………」

カーディナル「そうじゃ。あやつはカーディナル・システムの権限レベルを奪おうと考え、強大な神聖術を組み上げ唱えた……………。その結果、カーディナルシステムに与えられていた基本命令を己のフラクトライトに書き換え不可能の行動原理として焼き付けてしまった。」

それはつまり、アドミニストレータは、この世界のカーディナル・システムを支配し

ようとしたが、逆にシステム自体と融合したのか。

カーディナル「秩序の維持……………。それがカーディナルシステムの基本命令であり、存在目的じゃ。お主たちも同じシステムの制御される世界にいた頃があるのなら分かるじゃろ？お主たちプレイヤーの行動を常に監視し、バランスを乱すような事象を検出するや否や……………容赦なく対処する。」

「っ!？」

確かに、心当たりがある。

ユイちゃんとカナを消そうとしたのは、紛れもなくカーディナル・システムだったからな。

それ以外にも、効率の良い狩場も、しばらくすると、効率が悪くなるしな。

カーディナル「昏倒していたクイネラは一昼夜眠り続けてから覚醒した。その時には既にフラクトライト……………いや、あらゆる意味で人間ではなくなっておった。老いもせず、水も飲まず、パンも食わず……………。欲するのは己が支配する人界を今のままに永遠に保つことのみ……………」

それが、狂った支配者であるアドミニストレータの誕生理由という事か。

だが、それはもう、AIの開発という範疇を超えてしまっている。

俺は以前、胸騒ぎを感じていた。

それは、ルーリツドの村から旅立つ時だ。
まるで、あの雷鳴が、時を超えて、今鳴り響く様な気がする。

第28話 明かされる、聖剣の秘密

カルム side

俺は、カーディナルから、アドミニストレータの誕生経緯を聞いて驚いた。

まさか、そんな事が……………。

というより、アンダーワールド人が、よくあの悪魔のリストを見つけてられたな。

まさか、ラーズの内部に、アドミニストレータに魂を売った奴が居るのか？

俺がそんな風に絶句している中、カーディナルの話は続く。

カーディナル「この世界は絶対者アドミニストレータの統治下で平和かつ無為な時代が長く続くことになったが……………。クイネラがアドミニストレータとなつて70年後のことじやつた。アドミニストレータにある異変が起きたのじや。」

カルム「異変？」

何の事かと首を傾げていると、カーディナルの口から放たれたのは、意外な事だった。

カーディナル「記憶を保持するための魂の容量……………フラクトライトがいつの間にか限界に達していたのじや。」

カルム「フラクトライトの限界……………？」

キリト「なるほどな……………」

カーディナル「しかし、あやつはまたしても悪魔的な解決法を考え出した……………。他人のフラクトライトを強奪するために、魂と記憶の統合を意味するシンセサイズの秘儀……………悪魔の儀式をな。」

カルム「シンセサイズの秘儀……………」

そういえば、エルドリエも、シンセシスという名前がついているが、それと関係があるのか？

そんな風に考える中、カーディナルは語り続ける。

カーディナル「じゃが、そこでアドミニストレータ……………クイネラは失敗を犯した。」

「失敗……………」

カーディナル「そう……………。何故なら、女子に乗り移りそれまでの自分を処分する一瞬だけ、同等の力を持つ神が二人存在してしまうことになるからじゃ。ところで、お主たちのどちらか。わしのオリジナルバージョンを知っておるのなら、カーディナルシステムの特徴を言ってみよ。」

その言葉に、俺とキリトは顔を見合わせ、答える。

キリト「確か……………人間によるメンテナンスや修正を必要とせず長期間稼働できる、だったか？」

カーディナル「そうじゃ。そのためにカーディナルシステムはメインとサブの二つのコアプログラムを持つておる。メインプロセスがバランス制御を行っている間は……。」

カルム「サブがメインのエラーチェック、サポートを行うってことになる。」

カーディナル「その通りじゃ。」

俺とキリトの言葉にカーディナルは頷き、その先へと話を進める。

まあ、神代博士から聞いたんだけど。

カーディナル「クイネラが己のフラクトライトに刻み込んでしまったのは、秩序の維持だけでなかった。サブプロセスであるわしは奴の心の奥底でこう考えていた。こんな女の過ちを正さねば……とな。」

カルム「過ちね……。」

カーディナル「わしは待った……待ったのじゃ。その時が訪れるのをひたすら待つておったのじゃ……70年の長きに渡ってな。」

そこから、カーディナルは、アドミニストレータの失敗を語った。

一人の修道女……その子は常人よりもシステムアクセス権限が高かったらしい……その人格を『悪魔の儀式』で乗っ取るうとした瞬間のことだった。

選んだ少女のフラクトライトが崩壊したことで、サブプロセス……カーディナルがそ

の肉体を持つことが可能になり、神聖術による奇襲でアドミニストレータの抹殺を図ったらしい。

だが、アドミニストレータは空間支配による神聖術使用不可の領域を展開し、不利を悟ったカーディナルはこの大図書館へと逃げ込んだのだという。

カーディナル「……………それ以来200年……………。外と完全に隔離されたこの場所で、ひたすらに観察と思索のみを積み重ね、逆襲の一撃を見舞うべく方策を練った。」

「……………」

200年も、この大図書館に籠って、アドミニストレータを倒そうと考えていたのか……………。

途方もない年月だろうに……………。

カーディナル「しかし、あやつはわしの奇襲に備え、忠実にして強力な手駒と武器を揃えようと考えたのじゃ。」

キリト「……………まさか。それが整合騎士なのか？」

カーディナル「そうじゃ。最初の整合騎士となったのは、不誠実の剣士と呼ばれながらも教会の支配を嫌って仲間たちと共に辺境に流れ、自ら村を開拓した豪傑じゃった……………。ベルクローリ・シンセシス・ワン……………。それがその騎士の名じゃ。」

カルム「ベルクローリ……………」

その人物の名前は、ユージオとケントからよく聞いていた。

まさか、ルーリッドの村を拓いた豪傑が、最初の整合騎士にされるとはな。だが、一つ気になることがある。

カルム「なあ、手駒は分かっただけど、武器って一体なんだ？」

カーディナル「そうじゃったな。特にカルム。お主に関係する。」

カルム「俺に？」

カーディナル「うむ。刃王剣十聖刃の担い手たるお主にはな。」

カルム「……ッ!？」

どういう事だ？

そんな風に首を傾げていると、カーディナルは話し始める。

カーディナル「ベルクローリが最初の整合騎士になる前の話じゃ。アドミニストレータは、各地に散らばっている聖剣を、貴族などを介して集めておった。」

カルム「カーディナルに対抗するため？」

カーディナル「うむ。あやつは、システム・コマンドリストの中に、とある物を見つけた。」

カルム「それは？」

カーディナル「それこそが、刃王剣十聖刃が精製されるものじゃ。」

本当にどういう事？

その疑問は、カーディナルが教えてくれた。

曰く、11本の聖剣を集めて、その神聖術を発動すると、刃王剣十聖刃が誕生するらしい。

アドミニストレータは、早速聖剣を集め、その神聖術を発動した。

刃王剣十聖刃が誕生したと同時に、カーディナルが大図書館から現れ、刃王剣十聖刃、火炎剣烈火、水勢剣流水、雷鳴剣黄雷、土豪剣激土、風双剣翠風、音銃剣錫音、闇黒剣月闇、光剛剣最光、無銘剣虚無を回収して、大図書館に撤退したらしい。

カーディナル「わしとしては、かなりの大博打であったがな。」

カルム「そうだったのか……。じゃあ、ユーリが持っているのは？」

ユーリ「それは、光剛剣最光だ。」

その声がして、背後を振り返ると、ユーリが居た。

ケントとユージオを案内し終えたのか？

カルム「あの……。ユーリは一体どういう存在なんですか？」

ユーリ「俺は、元々は、光剛剣最光を守る一族の出身だった。だが、アドミニストレータが光剛剣最光を差し出せと命令してきてな。俺は、他の聖剣も奪われている事を察知して、とある術を使ったのだ。」

カルム「術？」

ユーリ「うむ。それは、俺が光剛剣最光と一体化する事だ。」

カルム「出来るんですか？」

ユーリ「なんとか出来た。そして、アドミニストレータが刃王剣を精製したと同時に、奴から煙叡剣狼煙と時国剣界時以外の聖剣をカーディナルと共に奪還したのだ。」

人と剣が融合するなんて……………。

そんな事をするとは……………。

カルム「ユーリは、聖剣と一体化して、300年は過ごしたんですか？」

ユーリ「そうだな。」

カルム「……………後悔してないんですか？」

ユーリ「後悔はしていない。これも聖剣を守る為だ。」

カルム「そうなんですか……………」

ユーリ「それはそうと、ユーリはなんでカルムに刃王剣十聖刃を、ケントに雷鳴剣黄雷を託したんだ？」

ユーリ「それは、お前たちに、アドミニストレータを倒し、公理教会をあるべき姿に

戻せる可能性を見出した。」

カルム「俺たちが？」

ユーリ「雷鳴剣黄雷に関しては、元の場所に戻したただけだったが、ケントが持つていった時から、見守っていた。そこにカルムが現れ、闇の軍勢にも怯まずに立ち向かった。だからこそ、刃王剣十聖刃をカルムに託したのだ。」

カルム「そうだったんだ……………」

ユーリ「コイツなら、この狂ってしまった世界を正しい方向へと導いてくれる。そして、この人界の民を守る事が出来るような気がしたんだ。」

ユーリ……………」

ユーリに託された刃王剣十聖刃を、奪還しないと。

ユーリは言いたい事は全部言ったのか、去っていった。

一方、カーディナルは、キリトにシャーロットという蜘蛛が張り付いていた事を話して、話し終えたようだ。

キリト「200年……………。そんなに長い間あんたは協力者を探していたんだな。」

カーディナル「うむ……………。しかし、そうして長い間、世界を眺めている間に流石のわしも思ったよ……………。何故、この世界を作った外界の神たちは偽りの神アドミニストレータの専横を放置しているのかとな。」

カルム「……………。ぐうの音も出ないな。」

カーディナルは、外界の神……ラーズのスタッフに関しては、失望しているようだな。

菊岡は、何をやってるんだ？

カーディナル「そのことを考えながら、カーディナルシステムに内蔵されたデータベースを参照していく中で一つの答えに思い至った……。真の神たるラーズはこの世界の人間たちの幸せの営みなど望んでなどおらぬのだと。」

カルム「……………どういう事だ？」

カーディナル「ラーズはこの世界に住む民たちをゆつくりと万力で締め上げ、その負荷にどのように贖うのかを観察しているのだと。現在にも負荷は日に日に増し、そして、最大の試練として負荷実験の最終フェーズが訪れる。」

「……………最終フェーズ？」

何のフェーズだ？

そう考えていたが、カーディナルの放った一言に、全てに察しがついた。

カーディナル「人界の外には何が広がっているのかはお主たちも把握しておるな？」

キリト「……………ダークテリトリーだよな？」

カーディナル「そのダークテリトリー……………闇の世界に住む住人こそが民たちに究極の苦痛を与えるべく造られた装置……………。人間と同じフラクトライトに殺戮と強奪の

行動原理を付与された怪物たちが人界陣への領土へと攻め入り、暴虐の限りを尽くす日を今か今かと待っておる……。それは、遠い未来の話ではない。」

カルム「なんだって……………」。

それじゃあ、菊岡の狙いは、戦争を起こさせる事……………!?

アイツ……………!

人工フラクトライトの命を軽く見てやがる。

菊岡『僕からすれば、10万の人工知能の命は、1人の人間の命よりも軽い。』

クソツ、アイツならそう言うのが妙に予想がつかない!

アンダーワールドから無事ログアウトしたら、1発ぶん殴ってやる……………!!

今はいないクソメガネの事を考えながら、カーディナルに聞く。

キリト「……………それって、アドミニストレータは知ってるんですか?」

カーディナル「もちろん知っておるわ。じゃが、あやつは己と整合騎士のみで闇の軍勢を問題なく撃退できると高を括っておる。貴重な戦力となってくれるはずじゃった。東西南北の守護竜すらも、己の操作が効かぬというだけの理由で屠ってしまったほどじゃ。」

カルム「……………己が支配する人界を変化もなしに保つか。これからの事を考えないで楽観的に過ごさんて、クソ女だな。」

カーディナル「……………おい。カルム、お主、意外と辛辣な事も言えるのじゃな……………まあ、合つてはおるが……………」

キリト「ああ……………。多分、ラーズの人物に怒つてるんだろうな。アイツ、怒るとかなり怖いからな。」

合つてるよ。

本当に、ラーズの人は、比嘉さんや安田博士ぐらいしかまともな人が居ないな！

まあ、それぐらいしか接触してないけど。

カーディナル「話を戻すぞ。もちろんアドミニストレータと整合騎士だけで闇の軍勢に勝つというのは無理な話じゃ。質がどんなにあつても、絶対数が違いすぎる。」

キリト「それに、闇の軍勢にも強い奴はいるんだろう？もし質さえも同等……………いや、整合騎士以上だったりしたら……………」

カルム「それじゃあ、例えアドミニストレータを倒そうと倒さまいと、結局この世界が辿る運命は変わらないってことなのか？」

カーディナル「その通りじゃ。ここに至つてはわしにすら、もう既にダークテリトリーからの侵略を防ぐ術はない。」

「……………」

つまり、アドミニストレータを倒しても、人界が闇の軍勢に蹂躪され、倒せなくても、

結局は蹂躪される。

詰みじゃないか。

キリトが、カーディナルに質問する。

キリト「つまり、貴女はこの世界をどうするつもりなんだ？そんな終わり方しか待っていないこの世界はもうどうなってしまうてもいいと考えているのか？」

カーディナル「……………そうかもしれない。」

カーディナルは、そう答えた。

だが、更に言葉が紡がれる。

カーディナルなりの、ラーズへの怒りを込めた言葉が。

カーディナル「しかし、わしは世界の終末を仕組んだラーズを……………世界の神を断じて認めん。故に、わしは唯一の結論に至ったのじや…

……………。アンダーワールドを……………人界もダークテリトリーも全て纏めて無に帰す。」

カルム「無に……………帰す？」

カーディナル「言葉通りじやよ。ライトキューブクラスターに保存されている全てのフラクトライトを削除するのじや……………。人界の民の物も闇の民の物も一つ残らずな。」

「っ!？」

それが、カーディナルの、ラーズに対する復讐か。

まあ、気持ちは分からなくはないが……………。

カーディナル「キリト、カルム。お主たちの助勢によりアドミニストレータを排除し、わしが全権限を取り戻せたら、この世界を消滅させる前に、限定的ではあるがお主たちの望みを叶えよう。助けたいと思う者を指定すれば、その者たちのフラクトライトは消去せず、凍結させたまま残す。」

「……………!?!」

カーディナル「10個程度であれば、外部世界に脱出した後、彼らのライトキューブを確保することもできよう。」

それは、助けたい人を選べという意味になる。

この世界で会った人たちが脳裏をよぎる。

ルーリッド村でお世話になった、セルカとメアリ。

ザツカリアでお世話になったウォルデ一家の人たち。

修剣学院で、俺に持つべき信念を教えてくれたタカトラ先輩。

同じく修剣学院で、傍付きとして俺を慕ってくれたシオリ。

そして、ここまで一緒に来てくれたケントとユージオ。

だが、その人達だけを救うというのは、それこそ、ラーズと何にも変わらないのでは

?

家庭用ゲーム機のセーブデータを整理するのは訳が違う。

俺に、そんな事が出来るのか……………？

キリト「俺に……………俺には……………」

カルム「カーディナル。貴女は自分の魂はアドミニストレータの魂と同じ……………コピードって言ったよな？なら、どうして支配という欲望や利益を差し置いてまでアドミニストレータの打倒を目論むんだ？そんな状況なら全てを放り出して逃げることであったらできた筈だ……………。それなのに、200年以上もこんな場所でその機会を待ち続けたんだ？」

カーディナル「簡単な話じゃ……………カーディナル・サブプロセスであるわしにとって、あらゆる利益、あらゆる望みはただ一つ……………アドミニストレータの排除と世界の正常化だからじゃ。尤も、わしにとっては世界の正常化を図るには完全なる虚無に帰すこととでしか実現できぬのだから……………」

「……………」

カーディナルは、そんな風に宣った。

カーディナル・システムとして導いた結論が、世界を虚無に帰す事しかないのか……………

?

そんな風に思っていると、カーディナルは悲しげな表情を浮かべる。カーディナル「いや、そうではないか……。わしにも欲望はある。たった一つ、この200年知りたかったことがある。」

なんだ、それ？

俺たちが目を見合わせて、首を傾げていると、カーディナルが立った。

カーディナル「お主らのどちらか、ちよつとこつちに来てくれぬか？」

カルム「……良いけど。」

カーディナルに頼まれ、キリトと相談した結果、俺が行く事に。

カーディナル「ぐぬぬぬ……。よいしょつと。これで良い。」

カルム「……?」

カーディナルは椅子の上に立っていた。

ますます意味が分からない……。

カーディナル「おい、カルム。もつと近くに寄ってこい。」

カルム「う、うん。」

カーディナル「うむ。では、両手を広げよ。」

カルム「ああ。」

カーディナルの指示通りに目の前に立って、俺は両手を広げた。

次の指示が飛んできた。

カーディナル「前に回し輪っかを作れ。」

カルム「……………」

俺は、カーディナルの言う通りに、カーディナルの体を迂回させて背中から随分と離れた場所で手を繋ぐ。

しばらくの沈黙。

すると、カーディナルは舌打ちをする。

カーディナル「ええい、遠回りな奴じゃ。」

カルム「ええ……………」

そう言ったカーディナルは、俺の胸に飛び込んでくる。

こういう事かと首を傾げていると。

カーディナル「そうか……………これが……………これが人間であるという事か。」

その言葉で、全てを悟った。

200年に渡る孤独の中、人との触れ合いを知りたいと思っただらうな。

俺は、優しくカーディナルを抱きしめる。

すると、カーディナルから、涙が流れる。

カーディナル「やっと報われた……………。私の200年は間違いじゃなかった。この温か

さを知っただけで私は満足……………報われた……………。」

カルム「カーディナル……………」

キリト「……………」

恐らく、これが、サブプロセスとしてもなく、図書館の司書でもなく、カーディナルという少女の素顔なのだろう。

すると、体にあつた重みが消えて、抱き着いた際に落ちた帽子を拾うカーディナルの姿が目に入り、彼女が俺から離れたのだと理解した。

カーディナル「いつまでブーツと突っ立っているのだ？」

カルム「切り替え早いな。」

カーディナル「……………それで、結論は出たのか？わしの提案に乗るのか、それとも蹴るのか。」

「……………」

カーディナルの問いに、俺とキリトは顔を見合わせる。

どうやら、答えは同じのようだ。

キリト「分かった。あんたの作戦に乗るよ。」

カルム「でも。」

カーディナル「でも……………」

カルム「俺たちは模索するよ。何か他に手段があるのかを見つけてみせる。」
キリト「ああ。アドミニストレータを倒して、この世界が平穩に続けられるような方

法を……………」

俺とキリトの言葉に、カーディナルは呆れたようなため息を吐く。

カーディナル「やれやれ、お主らはとんでもない楽天主じゃのう。」

カルム「それに、俺たちは、アンタにも消えてほしくないんだ。10人選べと言われたなら、その中にアンタを入れる。」

その言葉に、カーディナルは顔に苦笑の色を浮かべて、かぶりを振る。

カーディナル「……………その上、愚かな奴らじゃ。わしが脱出してしまったら、誰がこの世界を消去するというのだ。」

キリト「だから……………カルムも俺も、状況は理解したけど、悪足掻きは放棄しない、つて言ってるだけだよ。カルムは、諦めが悪いからな。」

さりげなくデイスられた気がするが、俺はそれに頷く。

カーディナルは、何を思ったのか、言葉を言う。

カーディナル「お主たちにもいざれ分かる時がくる……………。諦めるという苦さを味を知る時がな。力尽くして及ばぬ時ではなく、及ばぬであろうという推測を受け入れなくてはならぬ時がな。」

その言葉は、忠告とも、これからの出来事を予期したかのような感じに聞こえた。

第29話 決意の出立

カルム side

カーディナルの提案に乗り、ユーリの想いを聞いた俺たちは、作戦会議をするべく、ユージオとケントとユーリと合流する。

どうやら、未だに歴史書を見ていたようだ。

それを読み終えたそうだな。

キリト「お待たせ。」

カルム「すまん、時間かかった。」

ユージオ「あ……………ああ、キリト、カルム。」

ケント「すまない。どれくらい時間が経ったんだ……………？」

ケントの質問に対して、答えようとしたが、カーディナルがかわりに答えてくれた。

カーディナル「およそ2時間じゃな、もう太陽はすっかりと上ったぞ。」

ユーリ「どうだ？人界の長い歴史は？」

ユーリに聞かれたケントとユージオは、煮え切らない口調で答える。

ユージオ「……………この本に書いてあるのは、全部本当にあった出来事なんでしょう

か？まるで……よく出来たおとぎ話の連続を読んでもみたいで……。」

ケント「殆どの挿話が、どこそこでこういう問題が起きました、整合騎士が赴いて解決しました、そして以来かくかくしかじかの条項が禁忌目録に加えられたのです………つていう話ばかりだったしな。」

ユーリ「仕方あるまい、それが史実だしな。」

カーディナル「網に注がれる水が溢れぬよう、網目を一つ一つ塞ぎ続けてきたのが、公理教会という組織じゃ。」

ため息を吐きながら語るユーリと、公理教会に対してストレートに批判するカーディナルに、2人は驚いたようだな。

ユージオ「あ……あの、あなたは……？」

キリト「あー、この人の名前はカーディナル。えーと……今の最高司祭アドミニストレータに追放された、かつてのもう1人の最高司祭だ。」

ケント「もう1人の……？」

カルム「ああ。俺たちが、整合騎士相手に戦うのに協力してくれるそうさ。この人も、アドミニストレータを倒し、最高司祭に復帰する目的があるから、共闘だ。」

まあ、カーディナルが最高司祭に復帰したその後には、世界の終焉だかな。これに関しては、いずれ2人とも話し合う必要があるな。

ユージオ「そうですか……助かります、本当に。」

ケント「あの……。イーデイスとアリス……整合騎士のイーデイス・シンセシス・テンとアリス・シンセシス・サーティが、ルーリッドのイーデイス・リデルとアリス・ツベルクと同一人物なんですか？……もしそうだとしたら、元に戻す方法は……？」

ケントの問いに関して、カーディナルとユーリは少しだけ睫毛を伏せて答える。

カーディナル「すまんが……わしがこの場所で手に入れられる情報は、ごく限られておるのじゃ。基本的には、そう多くもない使い魔達とユーリが見聞きした事柄以上の事はわしも知らぬ。」

ユーリ「俺も、カセドラル内部に侵入したりはしているが、イーデイスとアリスの2人の出自に関しては、分からなかった。」

カーディナルとユーリの答えに、ケントとユージオは肩を落とす。

だが、カーディナルの言葉に、2人は鋭く息を吸い込む。

カーディナル「……しかし、整合騎士を誕生、いや造り出す為の神聖術、《シンセサイズの秘儀》を解除する方法ならば教えられる。」

ケント「本当ですか!？」

カーディナル「うむ。彼らの魂に挿入された《敬神モジュール》を除去すれば良い。」

ユーリ「見た目は三角柱の物だ……そうだ、お前達は既に目にしているはずだ。」

ユージオ「あっ……………。エルドリエの額から出てきたアレか……………！」

ユージオの言葉に、俺たちは思い出す。

エルドリエからアレが抜けていたら、エルドリエを元に戻せたはずだったのにな……………。

カーディナル「敬神モジュールは記憶の繋がりを阻害する形で挿入されておる。それで整合騎士となる者の過去を封じ、同時に公理教会と最高司祭への絶対の忠誠を強いておるのじゃ。」

カルム「という事は……………」

ケント「術を解くには、整合騎士の過去……………記憶を刺激すれば良いんですか？」

カーディナル「それだけでは不十分じゃ。もう一つ絶対に必要な物がある」

ユージオ「それは何なんですか？」

必要な物をユージオが尋ねると、カーディナルは答えた。

カーディナル「モジュールが挿入されておる場所に本来存在した物……………つまり、整合騎士にとって一番大切な記憶の欠片じゃよ。」

ケント「欠片……………でも、それは一体どこに？」

カーディナル「アドミニストレータは慎重な女じゃ。騎士から抜き取った記憶はまず間違いなく自らの居室、セントラル・カセドラルの最上階にあるはずじゃ。」

カルム「つていうことは、整合騎士を元に戻すためには記憶の欠片が必要……………」
キリト「それを手に入れるためには、整合騎士たちの守りを突破して、アドミニストレータをも倒さないとまず難しいってわけか……………はあ、言うのは簡単だが、かなり難関だな。」

カーディナル「整合騎士は殺さずに倒そうなんていう考えが通用する相手ではないのは、直接戦ったお主たちが一番分かっているはずじゃ。」

ユーリ「しかも、煙叡剣狼煙と時国剣界時を使う整合騎士もいるからな。」
まあね。

エルドリエも、ある意味ではこちらが負けたようなものだし。

しかも、2本の聖剣が、アドミニストレータ側にあるしなあ……………。

カーディナル「わしがお主たちにしてやれることは整合騎士と対等な装備を与えてやるくらいじゃ。」

カルム「つまり、アドミニストレータの元に行けるのかは、俺たちの実力次第か。」
キリト「まあ、その方がはつきりしてて逆に良いのかもしれないな。」

ユージオ「でも……………アリスとイーデイスが出てきたら……………」

装備が対等で実力次第。

俺とキリトは、そういう修羅場は何度も潜り抜けてきた。

すると、ユージオとケントから、言葉が漏れる。

ケント「もしイーディスとアリスが出てきたら、俺たちは戦えません。俺たちは、2人を取り戻すためにここまで来たんです……! だから……!」

カーディナル「ふむ、そうじゃったな。ユージオ、ケントよ。そなたらの目的はわたしも理解しておるよ。よかろう、もし整合騎士アリスと整合騎士イーディスがそなたらの前に立ちはだかったのなら、これを使うがよい。」

カーディナルはそう言つて、赤銅色の短剣を俺たちに渡してくる。

何だこれ？

カルム「これは？」

カーディナル「その短剣は刺したものとわしとの間に切断不可能な経路を生成することができるとのじゃ。つまり、わしの用いるあらゆる神聖術が必中となるわけじゃ。ユージオ、ケントよ。整合騎士アリスとイーディスの体のどこでも構わん。それを刺すのじゃ。その瞬間、わしの術で2人を深い眠りへと誘おう……。2人の記憶を取り戻し、シンセサイズの秘儀を解除する準備が整うまでな。」

ユージオ「分かりました。」

ケント「2人が説得に応じなかったら、これを使います。」

カーディナル「なに……。元々はアドミニストレータ用に作っておいた予備の分

じゃ。残りの2本で成功させられるのなら何も問題はない。」

キリト「責任重大だな……………」

カルム「ああ……………」

変なプレッシャーはやめて！

絶対へま出来ないじゃん！

キリト「……………そうだ。それなら、さつき言つてた整合騎士と対等の装備つていうのは一体何なんだ？」

カーディナル「お主たち4人には強力な愛剣があるじやろう？それを取り戻せるように協力してやるということじゃ。」

ユージオ「僕の青薔薇の剣と、キリトの黒い剣、ケントの雷鳴剣黄雷、カルムの刃王剣十聖刃の事ですか？」

ユーリ「ああ。お前らの武器は、カセドラル3階にある武器保管庫に置いてあるはずだ。」

キリトとユージオの質問に対して、答えていくカーディナルとユーリ。
なるほどな。

俺は、気になる事があるので、聞いてみる事にする。

カルム「ちなみに、アドミニストレータの居室つて何階なんだ？」

カーディナル「セントラル・カセドラルは年々上昇を続けておるからな。現在では100階に迫っておろう。」

「……………100階。」

奇しくも、かつて俺たちが住んでいた浮遊城アインクラッドと同じフロア数だ。

流石に、アドミニストレータも、アインクラッドの事は知らないだろうから、偶然の一致だろうな。

そんな事を思っていると、カーディナルとユーリから追撃が来る。

カーディナル「残念じゃが、お主らにはもう一つやらねばならないことがあるぞ？」

キリト「ま、まだ何かあるのか？」

ユーリ「お前らの剣は確かに強力だが、それだけでは整合騎士たちには勝てない。なぜなら、連中には武器の性能を数倍に増幅する恐るべき術がある。」

ケント「もしかして、エルドリエが使っていた武装完全支配術とか記憶開放術っていう技のことか？」

そういえば、エルドリエの霜鱗鞭は、蛇が元になっていると聞いたな。

アレが、武器の記憶という事だろう。

カーディナル「うむ。神器級の武器には記憶……………代償となったオブジェクトの性質を濃く受け継いでおる。完全支配術や記憶開放術は言うなれば、武器の記憶を全開放す

ることで本来あり得ない超攻撃力を実現するものじゃ。」

ユーリ「雷鳴剣黄雷の場合は、3本の首を持つ番犬と針を纏うネズミ、ランプの魔神の力が合わさって精製されて、刃王剣十聖刃は、10本の聖剣の記憶が元になっている。」

カルム「なるほど……………」

刃王剣十聖刃は、聖剣の力が合わさっている物だ。

全ての聖剣の記憶を保持していてもおかしくはないな。

カーディナル「4人も、目を瞑るのじゃ。」

ユーリ「そして、お前らの剣の事を強く思い浮かべろ。」

「「「……………」」」

俺たちは、言われたように目を瞑る。

頭に浮かんだ刃王剣十聖刃は、太陽系のようだった。

雷鳴剣黄雷、水勢剣流水、風双剣翠風、時国剣界時、闇黒剣月闇、火炎剣烈火、音銃剣錫音、土豪剣激土、煙叡剣狼煙、光剛剣最光の順番に光り、最後に無銘剣虚無がそれらのエネルギーを一つにまとめ、刃王剣十聖刃が生まれる。

これが……………刃王剣十聖刃の記憶……………」

カーディナル「よし、良いぞ。」

カーディナルの声と共に、俺の意識は、大図書館に戻る。

どうやら、残りの3人も同じようだ。

カーディナルが手を叩くと、それぞれの目の前に4枚の羊皮紙が現れる。

これが、それぞれの武装完全支配術を発動させる為の術式なのだろう。

カーディナル「ほれ。」

キリト「うへえ……………」

ユーリ「しつかり覚えとけ。」

カルム「分かった。」

ユーリ「そうだ、カルム。お前に話がある。」

カルム「分かりました。」

俺はユーリに連れられて、カーディナル達から離れた所に向かう。

カルム「どうした、ユーリ。」

ユーリ「お前の刃王剣十聖刃は、武装完全支配術を発動させずとも、聖剣の力を引き

出す事が出来る。」

カルム「そうなんですか？」

ユーリ「ああ。その際には、使う聖剣の力を想像すれば、刃王剣十聖刃がその聖剣の力を引き出してくれる。ただし、せいぜい2本ぐらいにまでにしておけ。3本の聖剣の

力を引き出すには、武装完全支配術でなければダメだ。」

カルム「分かりました。」

ユーリから、そんなアドバイス兼忠告を受けて、俺はキリト達の元に戻る。

そして、カーディナルからもアドバイスを受ける。

カーディナル「カルムも戻ってきた事だ、わしも話をしよう。武装完全支配術は強力じゃが、無闇に乱発してはならぬ。あれは一度使うだけで武器の天命をかなり損耗するのでな。無論、使い惜しみをして敗れるのはもつといかん。ここぞという時に使い、その後はきちんと鞆に収めるのじゃ。」

カルム「分かった。」

キリト「そういえば、エルドリエが武装完全支配術の続きみたいな術式を言ってたな。確か……………」

ユージオ「リリース・リコレクション……………だったかな。」

ケント「彼がそう唱えたら、本物の蛇に変わって驚いたな。」

キリト「俺たちの奴には、それはないのか?」

キリトの質問に、カーディナルは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

カーディナル「良いか、武装完全支配術には2つの段階がある。《強化》と《解放》じゃ。」

ユーリ「強化とは、武器の記憶を部分的に呼び覚まし、新たな攻撃力を発現させる事。解放とは……言葉通りに武器の記憶を全て目覚めさせ、荒ぶる力を解放つ。」

カルム「荒ぶる力か……………」

キリト「なるほどな。エルドリエの霜鱗鞭は、蛇が元だから、あんな事が出来るんだな。」

カーディナル「そういう事じゃ。しかし、お主達ではまだまだ解放術は使えぬぞ。」

ケント「な、なんですか……………」

ユージオ「どういう事ですか……………」

ユーリ「荒ぶる力、と言っただろう。記憶解放は、術式を覚えたばかりの剣士に制御できる代物ではない。下手をしたら、自分をも巻き込み、命を落としかねない。」

そういう注意を受けて、俺たちは、武器庫に送ってもらおう事に。

ちなみに、ユーリは、あの整合騎士に対して目眩しを行った影響で、しばらく休むそうだ。

カーディナル「さてと、ユージオ、ケント、キリト、そしてカルムよ。わしはお主たちに告げるべきことは全て告げた。世界の命運はそなたらに委ねられておる……………地獄の業火に包まれるのか、虚無に沈むか……………もしくは……………」

カーディナルはそこまで言うと、俺とキリトに視線を向け、微笑む。

カーディナル「第三の道を見出すのか……お主たちが信じる道を行けば、その答えを見つけることができるじやろう……。」

ユーリ「さあ、行つてこい！お前達の信じる信念の元に！」

俺たちは、カーディナルとユーリに激励を貰つて、俺たちは、その扉を通る。

俺は、一つの決意を固めた。

カルム（絶対に、皆を死なせはしない。カーディナルが言った第三の道を見出して、この世界の結末を変えてみせる……！）

その決意の元、俺たちは、武器庫へとその歩みを進める。

第30話 紅蓮の騎士

カルム side

俺たちは、カーディナルとユーリに見送られて、大図書館を後にする。

ドアを潜った先には、大理石と思われる素材で出来た廊下だった。

後ろをチラリと見ると、ドアは既に消えていた。

カルム「ここが、セントラル・カセドラルの中って事か……………」

ユージオ「確か、この3階の武具保管庫に、僕たちの剣があるって言ってたよね。」

ケント「ああ。」

キリト「じゃあ、早く行こう。」

俺たちは、周囲の人の気配に気をつけながら武具保管庫へと向かう。

もし、これが現代日本なら、監視カメラの一つや二つ、セキリユティの類も警戒すべきなのだろうが、ここはアンダーワールド。

そんな便利な物があるわけではないので、俺たちは先へと進んでいく。

しばらく進んでいくと、2体の彫像が置かれている部屋の前にまで来たので、俺とキリトが先行して、扉を開いて中を覗いて、無人である事を確認して、ケントとユージオ

に合図を送って、中に入る。

暗いので、光素を使おう。

カルム「システム・コール。ジェネレート・ルミナス・エレメント。デイスチャージ。」
その声と共に、俺の掌に光素が幾つか精製されて、そのまま上へと上がる。

すると、周囲が照らされ、風景がわかる。

ユージオ「うわあ……。」

ケント「これ、全部が武具なのか？」

キリト「急ごう。」

カルム「ああ。まずは、俺たちの剣を見つけよう。」

その中には、多数の武器防具があった。

だが、そんな物は興味がなく、俺たちは自分たちの剣を探す。

ユージオ「あつたよ、皆！」

ユージオの声と共に俺たちは、駆け寄る。

そこには、俺の刃王剣十聖刃、キリトの黒い剣、ケントの雷鳴剣黄雷、ユージオの青薔薇の剣があった。

どうやら、ここに放り込まれて以降は誰もいじっていないようだな。

俺は刃王剣十聖刃に迷わず手を伸ばし、腰に帯刀する。

その重さは、いつまで待たせてるんだと抗議するような感じだな。

一方、ユージオとケントは、感慨に耽っていたのか、それぞれの剣を手に、呆然としていた。

キリト「いつまでそうしてるんだ？」

ユージオ「ごめん……………」

ケント「それにしても、ここには本当に大量の武器が保管されてるよな。」

カルム「ああ。タカトラ先輩がこれを見たら、呆然とするかもな。」

キリト「リーナ先輩が見たら、感極まって卒倒しそうだよな。」

ユージオ「こんなに武器があるなんて、教会は自前の軍隊でも作ろうとしているのかな？」

ケント「確かに、整合騎士で十分な気がするんだが。」

カルム「多分、逆。軍隊を作らせないようにしようとしてるんだ。」

俺の言葉に、ユージオとケントは首を傾げる。

キリトが、俺の言葉を引き継いでくれた。

キリト「最高司祭アドミニストレータは、公理教会以外の集団が強い武器を持つ事を警戒したんだ……………」

ユージオ「どういう事……………」

カルム「つまり、教会の権威を一番信じていないのは、意外にも最高司祭ご本人かも
しれないって事だ。」

ケント「そういう事か……………」

ユージオとケントは、一応納得したようだな。

すると、ユージオが口を開く。

ユージオ「ねえ、ここの防具を借りていくつていうのは駄目かな？」

ケント「ううくん……………」

カルム「俺たちって、鎧を着た事なんて、一回もないしな。」

キリト「ああ。慣れない事はしない方が良い。そこら辺の服を拝借しようぜ。」

そう、これまでの戦闘で、修剣学院の服装は大分ボロボロになったからな。

俺たちは着替える事にした。

キリトとユージオは修剣学院の服装と似たような物をセレクトして、俺は紫紺色の物
を、ケントは紺色の物をセレクトした。

やっぱり、紫紺色が一番落ち着くな。

それにしても、随分と着心地が良いな。

準備を終えた俺たちは、上へと向かうべく、扉を少し開いて、様子を伺っていると、キ
リトの切迫した声上がる。

キリト「全員避けろ！」

「!?!?!」

その声に、只事ではない事を察して、俺たちは奥へと戻る。

すると、扉が勢いよく開け放たれた。

扉に、矢が4本刺さっていた。

その矢は、見覚えがあった。

階段の方を見ると、踊り場のところに、赤い鎧を着た整合騎士がいた。

カルム「あの整合騎士か！」

???「……………」

整合騎士は無言で矢をつがえる。

まずい！

そうだ！

カルム「バースト・エレメント！」

俺は上空に待機させていた光素をバーストさせて、奴の目を眩ませる。

奴は矢を撃つたが、目が眩んだ影響で、俺達とは関係ない場所に着弾した。

???「ぬうつ!?!」

キリト「前だ！」

俺たちは、キリトの言葉と共に、保管庫から飛び出して、整合騎士に迫る。整合騎士は、目を眩ませていたが、どうやら回復したようだな。

???「下らぬ真似を……！」

キリト「ハアッ！」

奴は、迎撃の為に矢を一本放つが、先陣を行くキリトが黒い剣を使って弾き飛ばす。

俺たちもキリトに続いて接近しようとするが、奴は、驚くべき行動を取る。

それは、矢筒に入っている残りの矢を全て弓につがえていた。

カルム「まさか………！」

キリト「避ける！」

俺たちは、接近を一旦諦め、俺とキリト、ケントとユージオの2組に別れて回避行動を取る。

矢は放たれて、まるで雨の如く降り注ぐ。

何本か掠めそうになったが、何とか傷は負わずに回避できた。

もし捕まったら、そのまま整合騎士にされる可能性があるからな。

ユージオ「キリト！カルム！」

ケント「無事か!？」

キリト「ああ………。何とか。」

カルム「俺は大丈夫だ。」

ユージオ「……………行こう。」

ケント「ああ。」

???「システム・コール。……………」

奴は、矢が尽きた上に弦が切れた。

何にもできないとして、俺たちは接近を再開しようとするが、神聖術を発動させる起語が聞こえた。

しかも……………!

キリト「まずい、これは……………!」

カルム「これは、属性攻撃じゃない。武装完全支配術だ!」

???「エンハンス・アーマメント。」

その式句とともに、奴の持っている弓から炎が噴き出し始めた。

その炎は弓から奴の体へと伝えわり、その身に炎を纏った姿へとなっていた。

階段上にいる奴から階段下にいる俺たちまでかなりの距離があるはずなのに、その炎の熱が十二分に伝わってきて、その炎がただの炎でないことを物語っていた。

キリト「凄いな、あの炎。あの弓は何が元になってるんだらうな。」

ユージオ「感心してる場合じゃないよ!」

カルム「まづいな……………」

ケント「くそつ。こつちも武装完全支配術を使えるようにしておけばよかつたな。」
確かに。

まあ、カーディナルも、使いどきを考えろと言っていたから、この状況は、武装完全支配術を使えなくても、倒すしかない。

???「こうして熾焰弓の炎を浴びるのは実に2年ぶりだ。なるほど、騎士エルドリエ・サーティワンと渡り合うだけの技はあるようだな、咎人どもよ。しかし、なれば尚の事許せん。正しき騎士の戦いではなく、穢れた闇の術によってサーティワンを惑わした事がない。」

キリト「や……………」

カルム「闇の術？」

ユージオ「ち……………違う、僕らは闇の術なんか使ってない！」

ケント「俺たちはただ、エルドリエが整合騎士になる前の話をしただけだ！」

???「騎士になる前だと？我らに過去など存在しない。我らは、天界より召喚されたその時から常に光輝ある整合騎士である！」

奴はそう言うど、腕を振るつた。

まあ、話し合いが無理なのは、分かりきってはいたが。

「生かして捕らえろと命じられているゆえ、貴様らを消し炭にまではせぬが、こうして熾焰弓の炎を解放した以上は、腕の一本なりとも焼け落ちると覚悟せよ。」
そう言つて、本来弦があるべき場所に右手が据えられると、炎が一本の矢へと姿を変
える。

キリト「弦切れも弾切れも関係なしか。」

ユージオ「何か策はある？」

カルム「俺が刃王剣十聖刃の、水勢剣流水の力を使つて受け止める。キリトは俺の支
援。ユージオとケントは懷に飛び込んで、奴を倒せ。」

ケント「分かった。」

作戦が決まつて、俺とキリトが前に出て、ユージオとケントはその後ろにいる。

水勢剣流水、俺に力を貸してくれ……………!

そうイメージすると、刃王剣十聖刃に水流が纏う。

これで、水勢剣流水の力が引き出せたはず。

「ほう。この熾焰弓の炎を迎え撃とうというのか……………。その意気込みやよし!だが、射抜かせてもらどうぞ!」

カルム「そうは行かない……………!」

キリト「システム・コール! ジェネレート・クライオゼニック・エレメント! フォー

ムエレメント・シールドシエイプ！デイスチャージ！」

キリトが凍素で氷の盾を精製して、俺が刃王剣十聖刃を構えたと同時に、炎の矢が放たれ、氷の盾を壊していく。

俺は水流を纏った刃王剣を上段に構え、迎撃の体勢を取る。

炎の矢は、最後の氷の盾で止まっていたが、次第に、炎の矢は、一体の不死鳥と化す。

そして、最後の盾は、儚く散って、俺に向かっていく。

カルム「ハアアアア!!!」

俺は気合いと共に水流を纏った刃王剣十聖刃で不死鳥に斬りかかる。

水流の勢いを強めて、炎を消し去っていく。

キリトは俺の後ろに立ち、俺の体を支えてくれる。

不死鳥は咆哮を上げたと思ったら、爆発した。

その爆発に巻き込まれて、俺とキリトは壁に激突する。

ケント side

まさか、あの炎の矢を凌ぎ切るなんて！

だが、至近距離で爆発を食らったカルムとキリトは、壁に激突し、窪みを作る。

ユージオ「キリト！」

ケント「カルム！」

2人に向かって叫ぶが、2人は激突しながらも、叫ぶ。

キリト「止まるな！」

カルム「ケント！ユージオ！」

俺とユージオは、刹那の逡巡を捨て、整合騎士に向かって駆け出す。

2人が作ってくれた千載一遇の好機を、無駄にするわけにはいかない！

水流と炎がぶつかった結果、辺り一体に煙が立ち込めていた。

俺とユージオは、その煙から飛び出すようにして、騎士に向かっていく。

整合騎士の顔にも、少なからずの驚愕の気配が感じられた。

「ハアアアア!!」

??? 「舐めるな小僧ども！」

そう言つて、拳に炎を纏わせていた。

……………どうする!?

すると、以前カルムとキリトに言われた言葉が脳裏をよぎる。

キリト『この世界では、剣に何を込めるのが重要なんだ。』

カルム『その想いを剣に込めろ。俺やキリトだって、1人だったら、ここまで強くは

ない。2人が居たからこそだ。2人の守りたい者の為に、その剣を振れば十分だと思

よ。』

そうだ……。

今の俺には、確固たる目標がある。

記憶を奪われ、整合騎士に変えられてしまったイーデイスを取り戻す。

俺に大切なのは、それだけだ。

今度こそイーデイスを助ける！

だから、頼む、雷鳴剣黄雷、力を貸してくれ。

俺が、前に進む為に！

「ハアアアア!!!」

俺たちは気合いと共に、バーチカルを放ち、騎士は、二本の剣を弓の持ち手部分で受け止める。

しばらくは拮抗していたが、熾焰弓の炎が、俺たちの剣に回り始める。

ユージオ「ぐっ……!!グウウウウ!!」

ケント「グウウウウ!!」

このままでは、秘奥義が強制終了し、殴られてしまう。

大図書室で見た雷鳴剣黄雷の記憶によれば、三つの首の番犬と、針を纏うネズミ、ランプの魔神が合わさったもので、三つの首の番犬は、どんな攻撃にも怯まなかったという。

ユージオ「こんな炎なんか……!!」

ケント「負けるなアア!!」

すると、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷は、その叫びに応えたのか、氷と雷を出して、弓ごと奴の腕を凍らせ、痺れさせる。

???「何っ!?!」

「ハアアアア!!」

熾焰弓を弾き、奴も体を痺れさせたまま、後ろへと吹き飛ばす。

俺たちは、《秘奥義連携》で秘奥義……バーチカル・アークを発動させる。

一撃目は、奴の体を浅く当たった。

だが………。

ユージオ「逃さない!」

ケント「ハアアアア!!」

???「ぬおおおおおおお!!」

二撃目が奴に命中して、体に二つの傷が残る。

そして、奴は膝をついた。

カルムside

2人の攻撃を喰らった騎士は、もうまともに動けないようだな。

キリト「カルム……………。アイツら。」

カルム「ああ。すごいな。」

刃王剣十聖刃を見ると、水流は収まっていて、ただ、そこに置かれていた。俺は刃王剣十聖刃を鞘に納刀して、キリトと共にケントとユージオの元へ。

ユージオ「キリト！カルム！」

ケント「大丈夫なのか？」

キリト「大丈夫だ。」

カルム「俺は、ちよつと火傷したくらい。」

騎士と向き合っていたケントとユージオが心配そうな声をかけてくるが、大丈夫だと答える。

すると、騎士は、掠れているが、威厳は失われていない声を出す。

???「……………氷の小僧に雷の小僧。最初に使った秘奥義の名は、何だ……………？」

ユージオ「アインクラッド流剣術、二連撃技、《バーチカル・アーク》。」

???「二……………連撃技。」

ケント「そうです。」

???「その……………紫紺色の貴様が使った武器は、何だ？」

カルム「俺が使ったのは、刃王剣十聖刃に宿っている水勢剣流水つて聖剣の力を引き

出しましたんです。」

???「そうか………………。人界の端から端まで……………その果てを越えた先までも見てきたつもりでいたが……………世にはまだ私の知らぬ剣、知らぬ技があったのだな……………。……………貴様らの技には、真摯な修練を積み重ねた重みがこもっていた。貴様らが穢れた術によって騎士エルドリエを惑わせたと言ったのは……………私の誤りであった……………。名を……………教えてくれ。」

騎士は、己が間違っていた事を認め、俺たちの名前を聞いてきた。

俺たちは、順番に答える。

ユージオ「……………剣士ユージオ。姓は無い。」

ケント「剣士ケント。俺も姓は無い。」

キリト「俺は剣士キリトだ。」

カルム「俺は、剣士カルムだ。」

整合騎士は、俺たちの名前を囁み締めるように頷いて、意外な一言を放つ。

???「カセドラル50階。そこは霊光の回廊と呼ばれる開けた場所になっているのだが、そこに複数の整合騎士が貴殿たちを待ち受けている。生け捕りではなく、天命を消し去れとの命を受けてな。我のように真正面から突撃すれば、刹那の内に息の根を止められるだろう。」

キリト「おい、オッサン！」

カルム「大丈夫なのか!? そんな機密情報を教えて!?」

???「アドミニストレータ様のご下命を完遂できなかった以上、我は騎士の証たる鎧と神器を没収され、無期限の凍結刑となろう。」

カルム「たった一回で……………!?!」

情け容赦ないな。

凍結刑というのは、よく分からないが、ただではすまないのは確かだ。

そして、整合騎士の放った言葉に、俺たちは呆然とする。

???「そんな辱めを受けるくらいなら……………貴殿らの手で我の天命を断ってくれ。」

「「「っ!?!」」」

デュソルバート「迷うことはない……………。貴殿らは堂々たる剣の技によって我を倒したのだからな。この整合騎士……………デュソルバート・シンセシス・セブンをな。」

ユージオ「デュソルバート……………?」

ケント「シンセシス・セブンを……………?」

ユージオとケントが、そう言っつて、呆然としている。

すると、2人から、怒りの気配を感じる。

カルム「ケント……………?」

キリト「ユージオ……………」

ユージオ「天命を絶つてくれ……………」

ケント「堂々たる勝負だったって……………」

ユージオとケントは、そう言つて、デュソルバートの顔を覗く。

すると、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷から、氷気と雷が放出される。

ユージオ「たつた！ たつた！ 11歳の2人の女の子を鎖で縛り上げて！」

ケント「飛竜でぶら下げて連れ去つた奴が！ 今更そんな口を開くなアア!!」

デュソルバートの言葉に激昂したユージオとケントは、それぞれの剣を振り上げ、怒りの咆哮と共に振り下ろそうとしていた。

だが、デュソルバートが何の抵抗もしようとしなかつた事に、2人は動揺して、俺たちはそれぞれの肩に手を置く。

ユージオ「何で止めるの……………」

キリト「このオツサンは、もう戦う気はないよ。そんな相手に、剣を振るつちやダメだ。」

ケント「コイツは……………！ 幼いイーディスとアリスを連れ去つたんだぞ！」

カルム「……………騎士デュソルバートは、多分その事を覚えていないよ。」

ユージオ「えっ……………」

キリト「もちろん忘れたわけじゃない……………。覚えていられると不都合だから、その記憶を消されたんだ。」

デュソルバート「その二人の言う通りだ。」

カーディナルから聞いた話と整合騎士を生み出す方法から、デュソルバートの記憶が消えた理由を察した俺たちは、そう話す。

困惑するユージオとケントだが、デュソルバートは肯定して、兜を脱ぐ。

デュソルバート「我が……………幼き少女を捕縛し、飛竜で連行しただと……………？そのようなことをした覚えはない。」

ユージオ「覚えていないのか……………!?!」

ケント「たった8年前の事なんだぞ……………!?!」

カルム「騎士デュソルバート。アンタはノーランガルスの北の境界を守る整合騎士だった。それは間違い無いな？」

デュソルバート「然り……………。ノーランガルス北方第7辺境区が我が統括区であった。そう、8年前までは……………そして、我は功績大なりとして、この鎧と共にセントラル・カセドラル警護の任務を与えられた。」

キリト「その功が何か、覚えてるか？」

デュソルバート「……………。」

俺とキリトの質問に、デュソルバートは沈黙する。

これで裏付けは出来たな。

カルム「貴方が答えられないのなら、俺たちが答えます。貴方の功績は、整合騎士、イーデイス・シンセシス・テンとアリス・シンセシス・サーティを見出した事だ。」

キリト「アドミニストレータは、アリスとイーデイスをこの塔に連行した事をアンタの手柄としながらも、その件に関する記憶を消さなければならなかった。」

カルム「整合騎士には過去が存在しない。何故なら、アドミニストレータにより天界から召喚されたとされているから。大方、そんな風に吹き込まれたんでしょう。」

キリト「整合騎士以前の記憶がないのはそのせいだつて納得させるために吹き込んだのはいいが、その話を押し通すためにはアリスとイーデイスのことを覚えていたままでは都合が悪かった。」

カルム「他の整合騎士誕生の経緯を覚えられていたら、致命的な矛盾……………自分が連れて来たはずの罪人達が、いきなり仲間になったら、大混乱するのは目に見えるしな。」

デュソルバート「……………覚えていない……………何もかも……………。」

デュソルバートは、困惑していた。

やはり、記憶を消されていたんだな。

キリトは、話を続ける。

キリト「あんたはアドミニストレータに大事な記憶を奪われ、代わりに教会への忠誠心を埋め込まれて整合騎士へと仕立て上げられたんだ。あんたは俺たちと同じ人間なんだよ」

デュソルバート「我が、そなた等と同じ人界の民……………？記憶の操作……………？……………信じられん。最高司祭陛下が我にそんな術を……………」

カルム「残念ですが、それが真実なんです。よく思い出してください。貴方にも、何かがあるはずです。どんな術を使っても、忘れられない大切な何か……………」

俺がそう言うのと、デュソルバートは目を瞑った。

しばらくすると、心当たりがあったのか、ポツポツと語り始める。

デュソルバート「人界に降り立った頃から何度も同じ夢を見たことがある……………。何を揺り起こす小さな手と、その薬指に填められた銀の指輪……………。だが、その者の顔を何故か認識することができず、目が覚めるとそこには誰も……………くっ……………！」

カルム「それが、貴方にとって、忘れられない思い出という事です。」

キリト「これからどうするかはあんたが決めることだ。アドミニストレータの所に戻って処罰を受けるか、傷を治療して俺たちを追ってくるか……………。それとも……………」

俺とキリトはそう言つて、階段へと向かっていく。

デュソルバートは、ただ沈黙していた。

まあ、すぐに答えが出る訳ではないからな。

ユージオ「……………っ!？」

ケント「……………。」

ユージオとケントも、それぞれの剣を鞘に納刀して、俺たちの元へ。

やはり、整合騎士は、被害者なのだ。

アドミニストレータの掲げる停滞を実現する為の。

だから、そんな被害者を増やさない為にも、俺たちが、アドミニストレータを倒すの

だ。

第31話 幼き暗殺者にして整合騎士

ケントside

整合騎士、デュソルバート・シンセシス・セブンを打ち破った俺たちは、そのまま階段を登っていく。

俺とユージオは、激昂の末、デュソルバートを斬ろうとした。

だが、カルムとキリトがそれを止めた。

そこで、デュソルバートが、イーデイスとアリスに関する記憶がないと知った。

それが真実なら、受け入れるしかない。

全ては、最高司祭が行った事で、本来憎むべきは、アドミニストレータだけだとは思
う。

そんな風に思いながら、俺たちは上へと昇る。

すると、キリトが口を開く。

キリト「さて、どれくらい行っただのかな。」

ユージオ「次が29階だよ。」

カルム「随分と上った気がしたんだが、まだまだだなあ……………」

ケント「そりゃあ、最上階は100階だぞ。あと30分も上れば、問題の50階だ。」
ユージオ「正面から乗り込むのかい？」

ユージオがそう聞くと、キリトとカルムは階段の段の部分に座る。

キリト「そうだなあ……………」

カルム「一先ず、それは後にして、腹ごしらえといこうぜ。」

カルムとキリトは、そう言つて、懐から饅頭を取り出す。

恐らく、大図書館から幾つかくすねた物だろうな。

ユージオ「いつの間に……………」

ケント「まあ、いただが。」

俺とユージオは、2人から饅頭を受け取り、口に頬張る。

本当に、美味しいな。

キリト「さっきの2人とおっさんの戦闘を見た限り、やっぱりアイツらは連続技に慣れてない、と言うより殆ど未経験なんだろうな。」

カルム「一対一の接近戦に持ち込めれば勝機はあると思うけど、敵が複数な上に準備万端に待ち構えてるんじゃない、それも難しいな。」

ユージオ「じゃあ、正面から行くのはやめて、他の道を探す？」

キリト「それもどうかなあ。この大階段が唯一の通路だって、カーディナルとユーリ

が断言してたしな。」

カルム「それに、仮に抜け道が見つかったとしても、挟み撃ちになる危険が残る。50階に居る騎士は、奥の手を使っても倒しておきたい。」

ケント「そうか………武装完全支配術……！」

俺の得心がいった言葉に、キリトとカルムの2人は頷く。

キリト「ぶっつけ本番で使うのは不安だけど、こんな所で試し撃ちする余裕もないしな。」

カルム「50階に突入すると同時に、先制で武装完全支配術を叩き込んで、無力化しよう。」

ユージオ「あー、その事なんだけど、キリト、カルム。」

ケント「俺たちの武装完全支配術は、大威力の直接攻撃じゃない。」

キリト「え………そうなの？」

カルム「そうなのか？」

キリトとカルムは、俺たちを驚いた表情で見てる。

ユージオ「だって、術式を書いてくれたのはカーディナルさんだし………。」

ケント「そりゃ、どんな技にするか思い描いたのは俺だけど………。」

キリト「まあ、2人の武装完全支配術がどんなのか見せてくれよ。」

カルム「俺にも見せてくれ。」

俺とユージオは、武装完全支配術の術式が書かれた羊皮紙を2人に渡す。

俺の武装完全支配術は、3種類あり、1つは、3つの首の番犬が放つ鎖で敵を拘束する物で、2つ目は、針を飛ばして攻撃する物で、3つ目は、魔法の絨毯を召喚して、雷鳴剣黄雷から雷を放つ物だ。

これは、雷鳴剣黄雷に宿っている3つの記憶を、少しずつ解放するからだ。

羊皮紙を見た2人は、頷いていた。

キリト「……………なるほどな。確かに攻撃的な技じゃないが、でも使い方次第じゃ十分役に立ちそうだぞ。」

カルム「うん。俺たちの武装完全支配術と相性が良さそうだ。」

ユージオ「そういうえば、カルムはともかく、キリトの武装完全支配術はどうなんだい？」

ケント「そうだな。カルムの場合は、複数の聖剣の力を引き出す感じだろうしな。」

カルム「ま、まあな……………」

キリト「それは見てのお楽しみだ。」

そんな風に話しながら、俺たちは上へと昇るのを再開しようとするが、視線を感じて上を向くと、誰かいた。

すると、カルムが尋ねる。

カルム「君達……………誰？」

カルムが尋ねると、二つの顔はそれぞれ見合わせて、同時に頷いてから、おずおずとその全身を露わにした。

ユージオ「こ、子供……………？」

ケント「みたいだな……………」

そう、そこに居たのは、修道服と思われる服を着た、2人の少女だ。

すると、片方が声を出す。

フィゼル「あの……………！あたし、じゃない……………私は公理教会修道女見習いのフィゼルです。」

金色のショートカットの薄い青色の瞳の少女……………フィゼルと名乗った修道女はそう自己紹介をした。

そして、隣に立っているもう一人の少女についても紹介を始めた。

フィゼル「こつちが同じく修道女見習いの……………」

リネル「リ、リネルです……………」

気弱そうな自己紹介をしたリネルという修道女は薄いクリーム色の二つに分かれたおさげ髪に灰色の瞳が特徴的な少女だった。

そんな自己紹介をされ、なんと答えればいいのか俺たちが困っていると、フィゼルがこちらへと近寄ろうとしていた。

フィゼル「あの……。ダークテリトリーからの侵入者っていうのは、皆さんの事ですか？」

ユージオ「は……。？」

ケント「えつと……。」

思わずユージオ、カルム、キリトの3人と顔を見合わせる。

どうしたものかと考えていると、カルムとキリトは、俺たちの後ろに引っ込む。

キリト「子供、苦手なんだよ。」

カルム「2人に任せる。」

ユージオ「ずるいぞ！」

ケント「何でだ！」

俺とユージオは2人に向かってそう囁き返すのだが、2人はそそくさと後ろに引っ込む。

しようがないと思い、対応する事に。

ユージオ「え……。えつと、その……。僕らとしては人界人のつもりだけど……。」

ケント「……………侵入者というのは、あながち間違いいはないな……………」
そう言うと、リネルとフィゼルは、額を寄せ合って、ひそひそと話します。

フィゼル「何よ、見た目は全然普通の人間じゃないのよ、ネル。角も尻尾もないわよ。」
リネル「わ、私は本でそう書いてあるって言っただけですよう。早とちりしたのはゼ
ルの方です。」

そう話す2人に、埒が明かないと思い、声をかける事に。

ユージオ「あの……………君たち。」

ケント「俺たちと話していると、怒られるんじゃないのか？」

そう言うと、フィゼルの方が、少々得意げに答える。

フィゼル「今日は朝から、全修道士、修道女と見習いは私室の扉に鍵を掛けて、外に出ないように命令が出てるのよ。ってことは、侵入者を見物に行っても、誰にもそれが
バレる心配はない道理じゃないの。……………人間よ。」

リネル「人間ですね。」

そんな事を聞くと、キリトの言い訳みたいに聞こえるな。

すると、リネルの方が、どうしてそう思ったのかを話す。

リネル「投獄されていた筈なのに、鋼鉄の鎖を引き千切って脱出して、しかも二人の
整合騎士を倒したんですよね？ てつきり闇の化物か、もしかしたら本物の暗黒騎士が攻

めてきたのかと思って待ってたんですけどね……………」。

ケント「暗黒騎士ではないのは、確かだな。」

そんな風に言って、俺は困惑する。

すると、リネルが更に近づくと、

リネル「最期にお名前を教えてもらっていいですか？」

ユージオ「僕はユージオ。後ろの黒髪が、キリトだよ。」

ケント「俺はケント。後ろの青髪の奴が、カルムだ。」

リネル「ふーん……………性はないんですか？」

ケント「ああ。開拓民の子供だからな……………」。

ユージオ「もしかして、君たちも？」

リネル「いえ、私たちにはありませんよ。」

そう言うとりネルは、にっこりと笑って、こっちに近づくと、

すると、俺の腹部に、ひんやりとした冷気を感じて、視線を下げると、小剣が、腹部

に刺さっていた。

ユージオの方を見ると、既に刺されていたようだ。

リネル「私の名前は、リネル・シンセシス・トウエニエイトです。」

ケント「整合騎士……………!?!」

キリト「ユー……………」

カルム「ケン……………」

カルムとキリトが、叫ぼうとするが、ファイゼルが既に、キリトを刺し、カルムに短剣を刺していた。

ファイゼル「……………」で、あたしがファイゼル・シンセシス・トウエニナイン。」

すると、体が痺れる。

ケント（毒か……………」

俺たちの体から、力が抜けてしまい、地面に倒れ伏す。

リネル「そんなに怖がらなくて良いですよ。ユージオさん、ケントさん。」

俺たちは、リネルとファイゼルの2人に引き摺られながら、上へと上っていた。

リネル「ただの麻痺毒です。尤も、ここで死ぬか、50階で死ぬかの違いですが。」

その言う通りで、麻痺毒が全身に回った結果、あらゆる感覚が消えていた。

くそ……………」

リネル「不思議に思ってますよね？どうしてこんな子供が整合騎士になれたのか、つて。」

そう言つて、リネルが語り出したのは、途轍もなく恐ろしい事だった。

リネル曰く、2人はカセドラルで育ったらしく、アドミニストレータが、塔内の修道

士と修道女に命じて作らせたらしい。

その目的は、完全に失われた天命を回復させる、蘇生神聖術の実験の為に。

途中から、フィゼルも発言ししたが、その声は朗らかだった。

何で、そんな恐ろしい事を、そんな風に言えるんだ。

実験は中々上手く行かなかつたらしく、最終的に諦めたらしい。

リネル「……………でも、完全な蘇生は不可能だったみたいで、私たちが8歳の頃に、蘇生術の実験は中止にしたんです。その頃には、もう30人いた仲間たちも、私とゼルだけにになりました。」

つまり、そんな悍ましい実験を続けた結果、リネルとフィゼルだけしか生き残らなかったという事か……………!!

嘘だろ……………!!?

その後、アドミニストレータから、新たな天職を選べと言われた際に、整合騎士と答えて、その時の新米の整合騎士の、カルドとジャレドという整合騎士を殺し、その座に特別で入ったそうだ。

リネル「……………でも、他の騎士みたいに防衛任務に就くには勉強が足りないからつて、修道女見習いとしてもう2年も法律とか神聖術とか教わってるんですけど……………正直、うんざりなんです。」

「ファイゼル」どうすれば早いとこ飛竜と神器が貰えるかってあれこれ相談してたら、カセドラルにダークテリトリの手先が侵入したって警報が流れてさ。他の騎士より早く侵入者を捕まえて処刑すれば、アドミニストレータ様もあたし達を正式な騎士にしてくれるって思ってた、階段で待ってたのよ。」

リネル「ごめんなさい、毒なんか使ってた。でも、なるべくユージオさん達を生かしたまま50階まで持っていきたかったものですから……。あ、安心して下さい。私たち、殺すの凄いでしょから、痛くないですよ。」

それは、安心できる要素がない。

何とか脱出法を考えたいが、俺は、2人の言葉に呆然とする事しかできなかった。

しばらくすると、目的地に着いたようで、扉が開かれて、放り投げられる。

すると、恐ろしく広い空間が目に入る。

回廊の中心部には、6人の整合騎士が待ち構えていた。

等間隔に並んで4人いて、2人が前にいる。

後ろの4人は、全く同じ形の鎧を着けていて、大剣を持っていた。

前にいる2人は、1人は薄紫色の鎧で、もう1人は、臙脂色の鎧だった。

両方とも、兜を被り、少し華奢な感じだった。

すると、リネルが声を出す。

リネル「……………そこにいらつしやるのは、四旋劍の皆様にも、副騎士長のフアナティオ・シンセシス・ツー殿に、その補佐のレイカ・シンセシス・フォー殿ですね。」

フィゼル「《天穿劍》のフアナティオ殿と《煙叡劍狼煙》のレイカ殿がわざわざお出ましとは、元老もよっぽど慌てているようですね。」

リネルとフィゼルの言葉を聞いた、フアナティオとレイカという整合騎士は、人間味を感じさせないくぐもつた響きだが、ある種の苛立たしさを感じさせる言葉を出す。

フアナティオ「……………見習いの子供が、なぜ名誉ある騎士の戦場にいるのだ。」

レイカ「下がれ。貴様らはここに居てはいけないのだ。」

フィゼル「あは、くーっだらなあい！戦いに名誉とか格式とか持ち込むから、一騎当千の整合騎士様が二度も負けるんだよーだ。でも安心していいわよ、騎士様がこれ以上醜態を晒さなくて済むように、あたし達が侵入者を捕まえてきてあげたから！」

リネル「これから、私たちが侵入者さんの首を落としますから、よく見てちゃんと最高司祭様に報告してくださいね。まさか、名誉ある整合騎士様が、手柄を横取りするよな真似はしなないと思いますけどね。」

そう言つて、2人は憎しみと蔑みを視線に乗せて整合騎士達を睨み、6人の騎士達は、苛立ちを込めて子供を見返す。

だが、なぜそこまで憎むんだ。

俺たちを前にしてさえ、2人は単なる好奇心しか見せなかったというのに。

すると、黒衣と紫紺色の人影が、短剣を抜き取り、キリトはリネルを、カルムはフィゼルを短剣で斬りつける。

リネル「なんで……………！」

フィゼル「動け……………！」

2人はそう言っつて、倒れる。

カルム side

全く、立ててた作戦が全部台無しになっちゃったよ。

俺たちは、あの2人を怪しいと見て、毒素分解術を唱えていたのだ。

俺たちは、2人の修道衣を探り、解毒剤を見つけ出す。

やっぱり、解毒剤は持ってたか。

俺とキリトは、ケントとユージオに、その解毒剤を飲ませる。

そして、2人に新たに立てた作戦を伝える。

キリト「麻痺は数分で解ける。口が動くようになったら、騎士達に気付かれないように、武装完全支配術の詠唱を始めるんだ。」

カルム「2人は、準備ができたなら、そのまま保持して、俺たちの合図を待ってくれ。」
さて、次はこの子供どもだ。

一応、あの整合騎士達を相手に、猶予を求めるとするか。

カルム「劍士カルム、ならびに劍士キリト、ならびに劍士ユージオ、ならびに劍士ケント、横臥して見えた非礼を深く詫びる！非礼ついでに今しばし、我らの不名誉を雪ぐ猶予を与えられし！その後、存分に劍を交えさせていただくが如何に！」

俺がそう叫ぶと、フアナテイオとレイカという整合騎士は、堂々たる声音で返答する。

フアナテイオ「整合騎士第2位、フアナテイオ・シンセシス・ツーである！」

レイカ「同じく、整合騎士、レイカ・シンセシス・フォー。」

フアナテイオ「咎人よ、我らが神器には一抹の憐憫すらもあり得ぬ故、言うべきことがあるのなら、この劍が鞘にあるうちに言うが良い！」

どうやら、猶予はくれるみたいだな。

そして、片方が、煙叢劍狼煙を使っている整合騎士という事か。

すると、キリトが近づいてきて。

キリト「お前、律儀だな。」

カルム「そういうもんだろ。」

キリトの突っ込みに、俺はそう返して、リネルとフィゼルに向き合う。

キリト「……………不思議に思ってるだろう。どうして俺たちが動けたか。」

カルム「君たち、口を滑らせたね。全修道士と修道女は部屋から出ないよう命令され

てるって。カセドラルの中に、命令を破る奴がいるはずがない。」

キリト「なら、命令に従わないお前達は、本物の修道女見習いじゃないって事だ。」
俺たちは、激怒していた。

あんなに笑顔で人を殺すなんて、絶対に許されない。

それでは、ラフコフの面子となんら変わらないからな。

俺たちは、それが許せない。

だが、コイツらも、整合騎士と同じく、被害者ともいえるのだ。

だから、一概にも、コイツらが悪いとは言いつれない。

キリト「それに、お前達の腰にある鞘。それは南方の《紅玉櫛》製だな。《ルベリルの毒鋼》で作られた剣に触れても唯一腐らない素材だ。」

カルム「ただの修道女見習いが、そんな物騒な物を持つてるはずがない。だから、俺たちは毒素分解術を予め唱えていたんだ。分解が完了するのに、少し時間がかかったけどね。」

キリト「剣の速さだけが強さじゃないぞ。つまるところ、お前たちが愚かだった事だ。」

カルム「うん。ここで死ぬのが、仕方ないくらいにね。」

俺たちはそう冷たく言い放ち、それぞれの短剣を、2人の眼前の床に向かって刺す。

2人は、唾然としていた。

キリト「でも、お前達は殺さない。」

カルム「その代わり、よく見てろ。君たちが馬鹿にした整合騎士が、どれだけ強いのか。」

俺たちは、リネルとフィゼルをその場に放置して、前に出る。

キリトは黒い剣を、俺は刃王剣十聖刃を抜刀する。

すると、相手も、剣を抜刀する。

キリト「待たせたな、騎士フアナテイオに騎士レイカ！」

カルム「剣士カルムに剣士キリト。」

「参る!!」

俺たちは、そう言いながら、飛び出していく。

そうして、副騎士長とその補佐との戦いが幕を開ける。

第32話 烈日の騎士と煙叡の騎士

カルムside

俺とキリトは、フアナテイオ・シンセシス・ツーツーとレイカ・シンセシス・フォー、四旋剣に戦いを挑む。

俺とキリトが駆け出したのを見て、その四旋剣がこちらに向かってくるが、俺とキリトは、必要最低限の動きで躲して、柱に足をつけ、キリトはフアナテイオ、俺はレイカの元へと剣を振るう。

その2人も即座に反応して、それぞれの剣で迎撃してくる。

四旋剣「フアナテイオ様とレイカ様に一対一で挑むとは！不遜な咎人どもめ！貴様らの相手は我らが四旋剣だ！」

フアナテイオ「貴様らは下がれ。」

レイカ「コイツらの相手は、私たちがする。」

四旋剣「はっ！」

そう言つて、四旋剣は下がる。

俺は、レイカという整合騎士と戦っていたのだが、一旦離れる。

すると、武装完全支配術の術式が聞こえる。

レイカ「システム・コール。エンハンス・アーマメント!!」

煙叡剣狼煙の武装完全支配術を使うみたいだな。

俺は、ソニック・リープを発動させて、即座に攻撃するが、驚くべき事が起こる。それは、レイカが煙状になったのだ。

カルム「何っ!?!グッ……!?!」

すると、背後から斬られる。

即座に離れるが、背中への痛みはまだ消えない。

どうなってるんだ……!?!

俺はすぐさま反転して、再びレイカの元へ向かうが、再び煙になり、背中を斬られる。キリトの方をチラリと見るが、フアナティオに押されていた。

アレは、光だ。

つまり、フアナティオの武装完全支配術は、光を操るのか。

レイカ「余所見をするとは、余裕だな。」

カルム「っ!?!」

その声の方向にすぐさま攻撃するが、再び煙になり、攻撃を食らう。

ダメージが大きく、少し動けなくなると、レイカが俺の目の前に剣を突き立てる。

レイカ「不思議に思っているな、どうして煙になるのかと。カルム「……………」」

レイカ「あなたは、刃王剣十聖刃を使っているのなら、この剣の事を知ってると思うのですがね。」

カルム「さあ……………？あまり、煙叡剣狼煙に関する情報が無くてね。」

レイカ「なら、教えよう。この剣は、担い手を煙にして、動く事が出来るのです。つまり、煙で奇襲できるといふ事か。」

厄介な能力だな……………！

すると、レイカがキリトとファナティオの方を向く。

向こうも押されていたようだ。

レイカ「どうやら、向こうの方も片付いたようですし、あなたも粛清します。」

カルム「悪いけど、それはごめんだな！」

俺は咄嗟に、風双剣翠風をイメージして、風を巻き起こす。

レイカが怯んでいる隙に、俺は一矢報いようと、刃王剣十聖刃を振りかざす。

レイカは、防御しようとするが、風が強く、上手く防御出来ない。

レイカは躲そうとするが、俺の刃王剣十聖刃が兜に当たり、兜を吹っ飛ばす。

キリトの方も、止めを刺されそうだったが、咄嗟に鏡を生成して、光を跳ね返し、ファ

ナテイオの兜が吹っ飛んだ。

すると、レイカとフアナテイオの素顔が明らかになる。

2人は女性だったのだ。

レイカとフアナテイオが男口調だったので、まさかとは思ったのだがな。

フアナテイオ「見たな……………」

レイカ「見たようだな……………」

レイカとフアナテイオの言葉に、少し怯んでしまった。

だが、2人の声には、どこか私怨が混ざっているような気がする。

フアナテイオ「貴様も……………そんな顔をするのか!?あの男のように!!」

レイカ「貴様は……………肅清する……………! 貴様は私が女だと知った瞬間、本気では戦えないというのか!」

フアナテイオとレイカは、そう言っつて、キリトと俺に襲い掛かる。

痛みを堪えつつ、刃王剣十聖刃で迎撃する。

レイカ「私は、整合騎士だ!」

カルム「なるほど。それでその剣技にその武装完全支配術か。撃ち合っつて、己が女だとバレない為か?レイカお嬢様?」

レイカ「貴様アアア!!」

カルム「アンタの過去に何があつたのかは知らないけど、俺が驚いたのは、ファナティオも含めて、兜が取れた途端、剣気が嘘のように弱まったからだ！顔を隠して、剣筋を隠して、自分が女だつて意識してるのは、アンタだろ!？」

レイカ「うるさい！殺す！貴様だけは！」

カルム「生憎、こつちは手を抜く気なんてさらさらない！これまで女剣士に何度も負けてるからな！」

俺はそう言つて、レイカを剣ごと吹き飛ばす。

するとレイカは、再び煙状になり、背後に回ろうとする。

カルム「そこだ!!」

レイカ「!?」

俺は、刃王剣十聖刃を振るい、レイカの煙叡剣狼煙を迎撃する。

俺は、煙叡剣狼煙の特性を見抜いた。

レイカ「何故!？」

カルム「分かつたんだよ、煙叡剣狼煙の対処方法！」

レイカ「!？」

カルム「確かに、煙となると、こつちは手出しをできない。だが、それは、アンタも同じだろう?」

レイカ「……………ッ!？」

カラム「だからアンタは、一旦煙になって、俺の背後に行き、そこで実体化する。そこをつけば、対処は楽だ。……………だからさ、そんな小賢しい手を使わないで、本気で剣をぶつけようぜ！」

レイカ「……………ッ！良いでしょう。そこまで言うのなら、相手になりましょう！」
そう言つて、俺たちは、高速の剣技をぶつけていく。

レイカの顔は、獰猛な笑みを浮かべていた。
恐らく、俺も。

アンダーワールドで、連続剣技を使える奴と戦うのは初めてだ。

何せ、この人界の貴族は、一部を除いて、見栄えを重視するような物が多いのだ。

カラム「ハアアア!!」

レイカ「セアアア!!」

そんな高速剣技を繰り返しながら、俺たちはそれぞれの剣を交差させて、互いに反対の方向に立つ。

すると、レイカは怒りが消え、こちらに問いかける。

レイカ「なるほど……………。咎人よ、貴様はこれまで私が戦ってきた者どもとは違うな。この顔を見ても、こうも本気で斬ろうとする奴は誰も居なかった。」

カルム「さつきも言ったけど、女剣士に本気の戦いの末、何度も負けてますし。それに、顔を見られるのを嫌がっている割には、化粧を入れてるんですね。」

レイカ「……………惚れた男が、いつか剣と首以外を私に求めてくると待ち続けて早や百有余年。素顔を出しても手を抜かない後輩の女騎士がいるものでね。せめて化粧の一つもしたくなるものだ。」

恐らく、アリスとイーデイスの事だろう。

すると、レイカが問う。

レイカ「あなたこそ、何故その刃王剣十聖刃を使って、戦うのだ？」

カルム「俺は、この教会の在り方が間違っていると思っているからだ。アンタみたいな人が普通に恋して、普通に暮らせるようにする為に戦ってるんだ！」

レイカ「……………なるほど。あなたは強い。そして、元老長が言っていたような闇の手先ではないようだ。だが、危険極まりない。騎士の誇りを踏み躪つても、あなたを倒す。こんな技で勝利するのは、心外だが……………。リリース・リコレクション！」

記憶解放術!?

嫌な予感がして、煙を突っ切りながらも、何とか突破する。

だが、足に痛みを感じて見てみると、足から血が出ていた。

しかも、よく目を凝らすと、煙状の虫が大量にいた。

恐らく、あの虫が攻撃したのだろう。

だが、そんな虫達の中心にいるレイカも無事では済まなかった。

レイカの体を見ると、いろんな箇所から血が出ていた。

まさか、俺を道連れに死ぬ気か!?

キリトの方を見ると、同じような状況になっていて、ファナティオの記憶解放術が、己の体に当たっていた。

カルム「この……………っ！」

キリト「バカ野郎がアアッ！」

俺たちは、自分の体にダメージを受ける事を厭わずに、2人の記憶解放術を止める。

すると、後ろから声がする。

「エンハンス・アーマメント!!」

ケントside

俺たちは、武装完全支配術の術式を詠唱しながら、カルム達の戦いを見ていた。

一言で表すと、凄まじいという物だった。

最初こそ、それぞれの剣の武装完全支配術に翻弄されていたが、途中で兜が取れて、本気になったのか、凄まじい剣戟を繰り広げる。

凄まじすぎて。

ユージオ「……………すご。」

ケント「ああ……………」

俺とユージオは、そうこぼすしかなかった。

アレこそ、究極の戦いだ。

見映えばかりを求め続けた型としての美しさでは無く、ただひたすら敵を斬り倒す事を追求した結果としてのみ存在し得る、凄絶な美。

それを見た俺たちは、鳥肌が立ち、眼には涙が浮かぶ。

だが、その涙も、ファナティオとレイカが記憶解放術を発動した際に、引つ込む。

そう、あの2人は、カルム達を道連れに死ぬ気なのだ。

それに気づいたカルム達の絶叫が聞こえる。

カルム「この……………っ！」

キリト「バカ野郎がアアッ！」

2人は、傷が増える事をお構いなしに、2人に突つ込み、剣を抑える。

今だ……………今しかない！

俺は、そう直感した。

何せ、配下の四騎士も、光と煙に潜む虫を防ぐのに必死だった。

俺は、ユージオと目配せをして、同時に、剣を抜刀して、大理石の床へと突き刺す。

「エンハンス・アーマメント!!」

俺は、三つ首の番犬の記憶を使い、周囲に鎖を解き放つ。

ユージオも、氷を解き放つ。

四騎士も、俺たちの異変に気づいたようだが、もう遅い。

騎士「ぬおっ……………!!?」

騎士「こ、これはっ!?!」

ユージオ「咲け、青薔薇ッ!!」

ケント「鎖よ、敵を捕らえろ!」

四騎士の半分は、ユージオの氷で氷漬けにされて、もう半分は、俺の鎖に縛られて、痺れていた。

これで、四騎士は制圧した。

しかも、未だに漂っていた煙も、氷によって凍りつく。

どうやら、あの煙は、凍らせる事が可能のようだな。

だが、フアナテイオとレイカは、すぐさま上空に飛ぶ。

フアナテイオ「おのれ……………!!」

レイカ「煙が凍った……………!!?」

2人が驚いている中、キリトとカルムは更に上空を飛んでいて、事もあるうに、2人

の女性騎士の肩鎧を踏み台にして、更に空中に逃げる。

フアナティオとレイカはそのまま落下して、氷と鎖に囚われる。

煙叢剣狼煙の記憶解放術も、煙が凍ってしまい、強制終了した。

キリトとカルムは、後方宙返りを繰り返して、氷の蔓と鎖から抜け出すが、俺たちの隣に落下する。

キリト「うおっ!？」

カルム「ぐふっ……………!？」

ユージオ「キリト、カルム……………!？」

ケント「待つてろ!すぐに治癒術を!」

俺たちは、2人に治癒術をかけようとするが、止められる。

キリト「ダメだ!技を止めるな!」

カルム「アイツらは、これぐらいじゃ倒れない!」

2人は口元の血を拭くと、すぐさま立ち上がり、詠唱をする。

「システム・コール!」

2人は、高速詠唱をする中、嫌な予感がし、整合騎士の方を見ると、何と、フアナティオとレイカの2人は、動こうとしていた。

しかも、レイカに至っては、己の体を煙と化して、鎖を脱出していたのだ。

俺たちは、すぐさま再び拘束しようとするが、効かない。

アレが、2人の覚悟なのか……………!?

だが、整合騎士達がこんな風に身を削っても守ろうとする貴族は、腐っている。そんな事が認められず。

ユージオ「お前に……………お前らなんか……………!」

ケント「正義なんかない!」

そんな風に叫ぶが、ファナティオとレイカの動きは止まらない。

勝てない。

今の俺じゃ、勝てないのか……………!?

憎しみが、足りないのか……………!

すると。

キリト「憎しみじゃ、アイツらには勝てないよ、ユージオ、ケント。」

ユージオ「え……………?」

カルム「2人は、整合騎士が憎いからこそまで来たんじゃない。イーディスとアリスを取り戻したいから、2人を愛しているから、ここにいるんだろ?」

ケント「カルム……………」

キリト「その気持ちは、アイツらの正義に決して劣るもんじゃない。俺だってそう

さ。」

カルム「俺たちも、この世界に生きる人たちを、お前らを、イーディスとアリスを、アイツらだつて守りたい。だから、今はアイツらに負けるわけにはいかないんだ。そうだろう?」

キリトとカルムはそう言つて、前に出る。

カルム side

俺とキリトは、2人にそう言つて、前が出る。

すると、天穿剣と煙叡剣狼煙から、極太の光と、大量の虫がいる煙がこちらに向かつてくる。

俺とキリトは、すぐさま、武装完全支配術の発動に必要な結句を言う。

「エンハンス・アーマメント!!」

キリトの黒剣から、小さいが、ギガスシダーが、俺の刃王剣十聖刃から、火炎剣烈火、水勢剣流水、雷鳴剣黄雷の幻影が出現する。

キリト「ハアアア!!」

カルム「行つけエエエ!!」

キリトの漆黒の槍は、極太の光に、俺の三属性を纏った斬撃波は、煙に向かっていく。そして、お互いにぶつかり合い、凌ぎ合う。

光と煙の中にいた虫が流れ弾の如く、柱にぶつかっていく。

キリト「うあああああああああ！」

カルム「ハアアアアア!!!」

フアナテイオ「……………ふっ……………。」

レイカ「見事だ……………。」

ぶつかり合いの末、キリトの闇がフアナテイオを、俺の三属性の斬撃波がレイカを天井に跳ね飛ばす。

だが、2人の顔は、清々しかった。

俺とキリトは、もう限界だった。

キリト「ううっ……………。」

カルム「ふう……………。」

ユージオ「キリト!」

ケント「カルム!」

俺とキリトは、その声を聞きながら、気絶する。

第33話 昇降係

ケントside

カルムとキルトが、武装完全支配術を使って、ファナティオとレイカの2人を撃破した直後、倒れてしまった。

ユージオ「キルト！」

ケント「カルム！」

俺たちはすぐさま2人に近寄り、2人の傷に、手をかざす。

「システム・コール！ジェネレート・ルミナス・エレメント！！」

俺とユージオは、すぐに光素を生成して、2人の傷を塞ぐ。

だが、2人は未だに目を覚まさない。

ユージオの青薔薇が、神聖力を大量に放出しているのもあり、神聖力に関しては、特に問題はない。

しかし、失われた天命の回復は、俺たちに使える程度の神聖術では無理だ。

そこで、とある神聖術を使う。

「システム・コール！トランスファー・ヒューマンユニット・デュラビリティ、セルフ・

トウ・レフト!!」

以前、セルカとメアリが使った神聖術を使う。

思い返せば、デユソルバートと戦った時も、今回も、俺たちは特に負傷しておらず、カ
ルムとキリトばかりが負傷している。

借りを返すなら、今だろう。

体感的に、半分くらい天命を渡した所で、2人が目を覚ました。

カルム side

気絶してすぐ、何かが流し込まれるような感覚がして、目を覚ますと、俺にはケン
トが、キリトにはユージオが天命を流し込んでいた。

流石に、やめさせる。

キリト「……………ありがとう、ユージオ、ケント。」

カルム「俺たちはもう大丈夫だ。」

ユージオ「無理するなよ!」

ケント「ああ!それだけやられれば、外からは見えない傷が残ってるはずだ!」

キリト「ゴブリン連中にやられた時よりマシだよ。」

カルム「それより、ファナティオとレイカの2人が心配だ。」

俺たちが、ファナティオとレイカの2人を心配するような視線を向けると、ケントと

ユージオは、眉を顰めていた。

ユージオ「……………キリト……………カルム……………。アイツらは……………2人を、殺そうとしたんだよ……………」

ケント「憎しみじゃ勝てない。……………カルムとキリトは、そう言ったよな。確かに、あの2人は、個人的な恨みとか憎しみとか、そんな次元で戦っていないのは分かる……………」

ユージオ「でも……………でも僕は、やっぱり教会と整合騎士を許せないよ。」

ケント「物凄い強さだけじゃなくて、あんな志を……………人界に暮らす人たちを守る心を持つてるのなら、どうしてその力を、もつと……………」

2人の言いたい事は痛いほど伝わってくる。

そんな思いを吐露する2人に、俺たちは口を開く。

キリト「あいっらだつて……………多分、あいっらなりの迷いの中にいるんだ。騎士長つて奴に会えば、もう少しその辺の事情つて奴も分かるだろう。」

カルム「それに、憎しみは、また違う憎しみを生んでしまい、それは連鎖してしまう。その連鎖は、難しくても、断ち切るに限る。」

それは、ラフィン・コフィンがいい例だ。

S A Oで生まれた悪意は、G G Oにまで連鎖してしまった。

それによって、3人の命が奪われている。

だから、そんな悪意の連鎖は、防がないといけない。

キリト「ユージオ、ケント。お前達の完全支配術は凄かった。あの騎士達に勝つたのは、お前たち2人だ。」

カルム「だからもう、人間としてのフアナテイオやレイカ、四旋剣の騎士たちまでを憎む必要はないよ。」

ユージオ「人間……………。うん……………そうだね。戦ってる時に、それだけは分かった。」

ケント「あの人たちは人間だった。だからあんなに強かったんだ。」

俺とキリトは、その言葉を聞きつつ、それぞれの剣を納刀する。

キリト「アイツらは、自分たちのことを絶対の善と言い、お前にとっては絶対の悪だったんだろうけどさ、俺たちもアイツらも生身の人間なんだ。」

カルム「そうだな。そんな、絶対の善悪なんてもの、人間には決められないんだと、俺は思うよ。」

俺とキリトは、フアナテイオとレイカの2人の元に行く前に、ユージオとケントに解毒薬を渡して、リネルとフィゼルの毒を抜くように頼む。

だが、その時に、ケントの呟きが聞こえたような気がした。

ケント「……………キリト、カルム。お前たちは、最高司祭アドミニストレータに対しても、そんな風に思えるのか？」

俺たちは早く、ファナテイオとレイカの元に向かうが、傷が酷かった。武装完全支配術の攻撃を直にくらったのだ。

早く治さないと……………！

「システム・コール！ ジエネレート・ルミナス・エレメント！！」

即座に光素を生成して、傷口に当てるが、血が止まらない。すると、ユージオとケントもやってくる。

ユージオ「キリト！」

ケント「カルム！」

キリト「手伝ってくれ！ 血が止まらないんだ！」

カルム「ケントは、俺の方を手伝ってくれ！」

ユージオ「あ……………ああ。」

ケント「分かった……………」

ユージオとケントも、手伝ってくれたのだが、止血出来ない。

このままでは、神聖力が尽きてしまい、この2人の命も尽きてしまう。

ユージオ「無理だよ、2人とも。」

ケント「出血が多すぎる。」

キリト「分かっている！でも……………この人達は、死んだら消えてしまうんだ！」

カルム「ああ！100年以上も生きて……………迷って、恋して、苦しんで！そんな魂を消してはいけないんだ!!」

ユージオとケントは、戸惑ったが、俺たちは無視して、絶叫する。

キリト「聞こえるか！騎士長！アンタの副官とその補佐達が死んじまうぞ！元老長とやらでもいい！聞こえてたら、降りてきて助けるよ!!」

カルム「誰でもいい……………！まだいるんだろう、整合騎士！仲間を助けに来いよ！司祭でも、修道士でも……………誰か来てくれよ!!頼むよ……………誰か……………来てくれよ!!」

そんな風に絶叫するが、誰も答えない。

このままじゃ、この整合騎士達が、死んでしまう。

すると、とあるアイデアが浮かんで、胸元からカーディナルから受け取った短剣を取り出す。

キリトも、取り出していた。

すると、ユージオとケントが止める。

ユージオ「ダメだよ、キリト、カルム！」

ケント「その短剣は、アドミニストレータに刺すものだろう!？」

キリト「分かつてる！」

カルム「でも、助けられる手段があるのに、それを使わないなんて、俺はごめんだ!!」その言葉に、ユージオとケントは何も言えなくなっていた。

俺とキリトは、短剣をレイカとファナティオの右手に刺す。

すると、短剣が分解されて、2人の体が紫色の光に包まれた。

更に、カーディナルの声がする。

カーディナル『やれやれ……………。仕方のない奴らじやのう。』

キリト「カーディナル……………アンタか!?!」

カルム「カーディナル……………すまない……………」

カーディナル『今更謝るな。状況は理解しておる。ファナティオ・シンセシス・ツィとレイカ・シンセシス・フォーの治療は引き受けよう。しかし完全修復には時間が掛かる故、身柄をこちらに引き取るぞ。』

その言葉と共に、レイカとファナティオが宙に浮かび、そのまま消える。

2人の整合騎士が消えたと同時に、四つの瓶が実体化して、床に落ちる。

カーディナルの声が聞こえてくるが、その音量は徐々に小さくなっていく。

カーディナル『もう蟲共に気づかれておる故、手短に伝えるぞ。状況から把握して、アドミニストレータは現在、非覚醒状態にある。あやつが目を覚ます前に最上階に辿り着

ければ、短剣を使わずとも排除が可能だ。急げ……。残る整合騎士は僅かだ……。』
そう言つて、カーディナルの声は聞こえなくなつた。

俺とキリトは2本ずつ取つて、片方をケントとユージオに渡す。

キリト「取り乱して悪かつた。」

ユージオ「いや……。謝る事じゃないよ。」

ケント「それにしても、お前達を取り乱すなんて、少し驚いたな。」

カルム「そうか。」

俺たちは、カーディナルが送つてきた瓶の中身を飲むと、傷が塞がっていき、天命が回復していくのを感じた。

ユージオ「凄いな……。』

ケント「どうせなら、1人一本ずつじゃなくて、もつとたくさん送つてくれればよかつたのにな。」

キリト「これだけ高優先度の代物をデー……。術式化して転送するには時間がかかるんだろうさ。」

カルム「むしろ、よくあんな短時間で……。うわっ!？」

俺は、ユージオとケントの靴の所に、虫が乗つかつているのを見て、素つ頓狂な声を上げてしまう。

それにキリトも気づいたようだ。

ユージオ「な、何だよ急に？」

キリト「ユ、ユージオ……………動かぬ。」

カルム「ケントも、下を見ない方が良いで。」

ケント「はあ？」

そう言つて、2人が足元を見ると、虫を見た様で、激しく足踏みをする。

その時に、虫は落ちたが、2人の足元をうろちよるする。

2人は垂直跳びを何度かしていると、虫を踏んづけたみたいで、俺とキリトは、2人から少し離れる。

すると、2人は絶叫する。

ユージオ「おい！……………おおい！」

ケント「どっか行くな！」

キリト「ごめん、俺、そういうのちよつと苦手なんだよ。」

ユージオ「僕だつて苦手だよすつごく！」

カルム「ほら、そういう虫つて、大抵、1匹死ぬと大量に集まってくるお約束じゃん。」

ケント「嫌なことを言うな！」

すると、ユージオとケントが踏みつけた虫は、神聖力となつて、消えていった。

俺とキリトは、2人の元に戻る。

キリト「……………なるほどな。今のが、アドミニストレータがカーディナル捜索用に放った使い魔って事か。」

カルム「大方、さっきの図書室との通路を嗅ぎつけたって事だな。」

「……………。」

俺とキリトが真面目に推察していると、2人から、恨みがこもった視線が向けられる。すまん、俺はああいうのは苦手だ。

ユージオ「じゃあ……………この塔には、さつきみたいな奴が沢山彷徨いてるって事？でも、今まであんなの見た事無かったよ。」

キリト「ほら、バラ園から図書館に逃げ込んだ時、扉の向こうでカサカサ言ってたろ？普段は隠れるのが上手いんだろうさ、だからって、探して回るのはごめんだけどな。それに……………カーディナルが妙な事言ってたな……………。アドミニストレータが非覚醒、とか何とか……………」

ケント「ああ、そう言えば……………。それはつまり、寝てるという事か？こんな昼間に……………」

カルム「……………カーディナル曰く、アドミニストレータや整合騎士は、数百年も生きてる代償として色々無理をしているってさ。特にアドミニストレータは、1日の殆どを

寝て過ごしてるらしいけど……まあ、上に登れば自ずと分かってくるか。」

その後、ユージオとケントに、変な虫が居ないかを確認してもらい、俺たちは入ってきた方向とは逆の扉へと進んでいく。

まあ、四旋剣とリネルとフィゼルは放置でも大丈夫か。

扉を開けて、中に入っていくと、階段が見当たらなかった。

ユージオ「か……階段がないよ。」

ケント「ないな……。」

キリト「……な……。」

カルム「何だこりや……？」

そこにあつたのは、大きな円錐形の筒だ。

どういう事かと首を傾げていると、何か来る気配がする。

キリト「おい、何か来るぞ。」

ユージオ「え？」

カルム「まさか、整合騎士か!？」

ケント「気をつけるぞ！」

俺たちは、いつでも抜刀出来る様に、剣の柄に手を乗せる。

すると、円盤が降りてきて、そこには、1人の少女がいた。

少女「お待たせ致しました。」

「「「……………はい……………?」」」

少女「何階へのご利用でしょうか？」

ユージオ「何階をつて……………」。

ケント「もしかして、君が俺たちを上階へと連れててくれるのか？」

少女「……………」。

「……………ふう。」

ユージオとケントが少女に質問している間に、少女の体を見ると、特にこれといった武器はないので、警戒を解く。

キリト「俺たち……………カセドラルに侵入した、いわゆるお尋ね者なんだけど……………。そのエレベー……………じゃない、円盤に乗っけても問題はないの?」

少女「わたくしの仕事はこの昇降盤を動かすことだけでございます。それ以外に如何なる命令も受けておりません。」

カルム「いわゆるエ……………ゴホン……………。案内嬢つてことか。それなら、お言葉に甘えて乗せさせてもらおうか。」

ユージオ「ちょ、ちよつと……………!」

ケント「大丈夫なのか!？」

女性に敵意が無いことを確認した俺たちは、昇降板へと乗るが、ユージオとケントは、未だに警戒していた。

まあ、リネルとファイゼルの暗殺コンビに騙されたから、気持ちは分からんでもないが。カルム「階段とか見当たらないから、これを使うしか無いだろ。」

ユージオ「それはそうだけど……………」。

ケント「乗るしかないか……………」。

キリト「それじゃあ、行ける一番上の階まで行ってくれ。」

少女「畏まりました。…………システム・コール。ジェネレート・エアリアル・エレメント。…………バースト・エレメント。」

少女が風素を生成して、解放し、この円盤が上昇する。

本当に、エレベーターみたいだな。

まさか、アンダーワールドでエレベーターに乗るとは思わなかった。

すると、キリトが少女に質問をしていた。

キリト「君は、いつからこの仕事をしてるの?」

少女「この天職を頂いてから、今年で107年になります。」

ユージオ「ひゃ……………!?!」

ケント「という事は、107年の間ずっと、この円盤を動かしていたのか!?!」

少女「ずっと……ではありません。お昼に食事休憩を頂きますし、勿論、夜は休ませて頂きますから。」

カルム「マジかよ……!?!」

という事は、この少女は、整合騎士と同様に、天命を凍結されたという事か。キリトが再び少女に質問をする。

キリト「君……名前は？」

少女「……名前は……忘れてしまいました。皆様は、私を《昇降係》と呼びになります。昇降係……それが私の名前です。」

カルム「そっか……。 (会話が長続きしないな……!!)」

沈黙が続いている中、ユージオとケントが口を開く。

ユージオ「……あの……あのさ、僕たち、公理教会の偉い人を倒しに行くんだ。君にこの天職を命じた人を。」

少女「そうですか。」

ケント「もし……教会が無くなって、この天職から解放されたら、君はどうするんだ？」

少女「……解放……?」

ケントの一言に、少女は首を傾げる。

すると、意外な望みが少女の口から出る。

少女「私はこの昇降廊以外の世界を知りません。故に新たな天職と言われても決めかねますが……でも、してみたいことという意味では、あの青い空をこの昇降盤で自由に飛んでみたい。」

「……………」

少女の望みに、俺たちは呆然とする。

しばらくすると、行ける最上階に着く。

少女「お待たせしました。80階…………『雲上庭園』でございます。」

そう告げ、俺たちが降りたことを確認すると、彼女は再び昇降機で下へと降りていった。

彼女にお礼も兼ねて手を振って見送っていると、ユージオとケントの2人がぼそりと言葉を漏らした。

ユージオ「……………僕たちの前の天職も、終わりが見えない事にかけては世界で一番だと思っただけ……………」

ケント「歳を取って、斧が振れなくなったら引退出来るだけ、恵まれてたよな、あの子の天職に比べれば……………」

ユージオとケントの漏らした言葉に、俺とキリトは頷く。

キリト「天命の自然減少を術式で凍結しても、魂の老化は防げないってカーディナルは言ってたよ。記憶が少しずつ侵されていって、最後には崩壊してしまう、って。」

カルム「公理教会のしてる事は間違ってる。だから俺たちはアドミニストレータを倒す為にここまで来た。でも、それで終わりじゃ無い。本当の難題は、その先にある……………」

ユージオ「え……………？アドミニストレータを倒せば、あとはカーディナルさんに任せれば良いんじゃないの？」

ケント「どういう事だ？」

キリト「それは……………この先の話は、アリスとイーデイスを取り戻してから話すよ。」

カルム「今は、これからの戦いに集中しないと。」

そうして、俺たちは、セントラル・カセドラルの80階、雲上庭園の扉を開く。

そう、例えばアドミニストレータを倒しても、その先に待つのは、闇の国の侵攻、そして、カーディナルの、アンダーワールドを虚無に帰す計画。

俺は、これからの戦いに集中しようとする。

第34話 金木犀の騎士と深淵の騎士

カルム side

俺たちが扉を開くと、そこは、雲上庭園の名に恥じぬ、広大な庭園だった。

カルム「ここ、本当にカセドラルの中か？」

キリト「ああ……………」

ユージオ「広い……………」

ケント「まるで、外の光景と、何ら変わらないな……………」

そう、本当に、外の光景と何ら変わらないのだ。

奥に向かって、緩やかな斜面で構成された丘があり、その先には、金木犀の木が生えていた。

こうして立ち止まっても埒があかないので、俺たちは先へと進む。

金木犀の木が大きく見える所まで来ると、ユージオとケントが気がついた。

ユージオ「あつ……………ああ……………！」

「……………」

ケント「イーデイス……………アリス……………！」

そう、2人の視線の先には、イーデイスとアリスが居た。

俺は周囲を見渡して、あの2人以外の整合騎士が潜んでいないか、確認する。

見たところ、あの2人以外に整合騎士は潜んでいないようだな。

俺とキリトは、ユージオとケントの2人に声をかける。

キリト「お前らは戦うな、ユージオ、ケント。カーディナルの短剣を、確実に2人に刺す事だけを考えて。」

カルム「あの2人の攻撃は、俺たちが体を張って止めてみせるよ。」

ユージオ「ごめん……………」

ケント「すまない……………」

キリト「謝らなくていいぞ。」

カルム「すぐに倍にして返してもらおうよ。」

俺たちがそう話している。

すると、アリスが声を出す。

アリス「もう少しだけ待ってください……………。せつかくの良い天気だから、この子にたっぷり日を浴びさせてあげたいのです。」

カルム（この子……………あの金木犀の事か？）

イーデイス「まさか、ここまで来るとはねえ。まあ、退屈してたからいいけど。」

イーデイスは、アリスに対する態度で喋るのだが、こちらに対して、闘気を隠していない。

まあ、当然か。

イーデイス「まさか、あの副騎士長とその補佐まで倒すなんてね。」

アリス「お待たせしました。」

どうやら、向こうは通す気ゼロだな。

それもそうだな。

アリス「まさかとは思っていましたが、ここまで登ってくるとは思ってもみませんでした。万が一、地下牢から逃げ出したとしても、エルドリエ一人で対処できると私は判断していました。しかし、まともな武器もない筈なのに貴方たちはエルドリエを倒し、幾多の整合騎士たちをも切り伏せて、この雲上庭園の土を踏んだ。」

イーデイス「常人ならとてもじゃないけどありえない話だよ。どうして、そこまでしてカセドラルの最上階……最高司祭様の元へと向かおうとするのかな？」

カルム「言ったら通すのか？」

イーデイス「その答えは否だよ。」

ですよね。

俺たちは、少しずつイーデイスとアリスの2人に近づいていく。

アリス「いったいなぜ、人界の平穩を揺るがす拳に及ぶのです？お前達が整合騎士を一人傷つける度に、闇の勢力に対する備えが大きく損なわれてることが、どうして理解出来ないのですか？」

イーデイス「まあ、それは、剣をぶつけてみれば分かるでしょ。」

アリス「それもそうですね。これ以上、口で何を言っても無駄のようですし……………」
ここで貴方たちの天命を断ち、その蛮行を終わりにしてあげましょう。」

アリスはそう言つて、金木犀へと手を当てる。

俺は、嫌な予感がして、キリト達に突撃をやめさせる。

カルム「皆、突進するなよ。」

キリト「何でだよ？アリスの方は、剣を持ってないんだぜ。」

カルム「多分だけど、剣はある。」

その言葉を証明するかのように、金木犀の木が金色の光を放ち、剣として顕現する。
キリト「……………カルムの言う通りだな。」

カルム「迂闊に突進してたら、多分、やられてたと思う。」

やっぱり、あの子が指すものは、あの金木犀だったのか。

突進してなくて正解だったな。

教えてくれるかは分からないが、聞いてみる事にしよう。

カルム「僭越ながら、お聞きしたい。先ほどの金木屋の木が、騎士アリスの神器の元になった物ですか？」

アリス「……………いいでしょう。冥土への手土産として、教えましょう。この神器の元となった木……………セントラル・カセドラルが立つこの場所は、遙かなる古の時代、創生神ステイシアによって人間に与えられた始まりの地でした。」

なるほど、カーディナルが言つてた、始まりの4人が居た村の事か。

そう納得する中、アリスの説明は続く。

アリス「小さな村の中央には美しい水が湧き、岸辺には一本の金木屋の木が生えていたそうです。その木こそが我が神器……………『金木屋の剣』の原型。神の創りたもうた木の転生した姿……………人界の神羅万象の中で最も古き存在なのです。そして、その属性は永劫不朽……………。舞い散る花卉の一枚ですら、触れた石壁を割り、地を穿つのです。」

キリト「……………なるほどな。創生神様が最初に作つた破壊不能オブジェクトってわけか。」

カルム「それで……………隣のあんたはどんな神器を使うんだ？」

イーディス「お？聞くねえ。まあ良いわ、教えてあげる。私の闇斬剣は、ソルスの光が一寸届かない湖底の岩から生まれたのよ。その剣の属性は闇の剣。誰にも触れる事は出来ない。」

なるほどな。

まあ、闇の剣といえ、こつちにも、闇黒剣月闇があるのだが。なら、光剛剣最光の力を引き出すべきか？

そんな事を考えながら、キリトはアリスの目の前に、俺はイーデイスの目の前に立つ。

イーデイス「へえ……。私の相手は、君なんだね。」

カルム「悪いけど、手加減する義理はない。勝たせて貰うよ。」

イーデイス「言ってくれるじゃない……………」

俺とイーデイスは、その言葉と共に、お互いに駆け出していく。

そして、刃王剣十聖刃と闇斬剣をぶつける。

イーデイス「へええ……………！少しはやるじゃないの……………」

カルム「そつちもな……………」

イーデイス「じゃあ、こつちも早速本気を出そうかな！」

カルム「!?」

イーデイス「エンハンス・アーマメント！」

まさか、武装完全支配術か!?

どんな大技が来るかと警戒していたが、突然、闇斬剣が刃王剣十聖刃をすり抜け、こちらに向かってくる。

俺は咄嗟に、躲して、少し離れる。

イーデイス「へええ……。まさか、あの一瞬で性質を見抜いて、躲すなんてね。」

カルム「何だよ、それ……!!?」

イーデイス「言ったでしょ？ 私の剣は闇の剣よ。その影を映した刀身は、何者も防げないのよ。」

カルム「マジかよ……!!?」

つまり、サラマンダーの将軍、ユージーンが使う魔剣グラムに宿る《エセリアルシフト》とほぼ同じ能力か!?

嫌な思い出が蘇るな……。

すると、イーデイスが何かを呟く。

イーデイス「現れなさい。影ノ傀儡。」

カルム「まさか!？」

俺の影から、もう1人のイーデイスが現れて、その刀を俺に向かって振ってくる。

咄嗟に躲すが、俺は動揺していた。

イーデイス「へえ……。影ノ傀儡の攻撃まで躲すなんてね……!」

カルム「影を使うとか反則だろ!？」

イーデイス「それが私の剣よ。刃王剣十聖刃を使ってる割には、大した事なさそう

ね。」

その発言に、俺はイラツときた。

ケントの方をチラツと見ると、武装完全支配術の準備自体は出来てるようだな。

キリトの方は、壁際に追い込まれていく。

イーデイス「あの黒髪の方は、アリスに押されてるわね。」

カルム「それが？」

イーデイス「まあ、すぐに楽にしてあげるわ。」

カルム「悪いな、俺もアイツも、諦めが悪いんでね！」

俺は、刃王剣十聖刃に光剛剣最光の力を宿す。

ユーリ、力借りるぜ……………！！

イーデイス「光を纏った所で、どうなのかしらね！」

カルム「それはどうかな……………光あれ！」

イーデイスが再び影ノ傀儡を出す、俺の光剛剣最光の力を宿した光によって、傀儡

は消滅する。

イーデイス「!?」

カルム「これで、傀儡は使えないぜ！」

イーデイス「やるじゃない……………！なら、私も本気で行かせて貰うわ！」

カルム「行くぜ！」

そこから、苛烈な剣裁が巻き起こる。

俺も本気を出して、光を纏った刃王剣十聖刃で、闇斬剣とぶつかっていく。

しかも、闇斬剣の透過能力がうまく発動しない。

恐らく、俺の刃王剣十聖刃の光の力で、打ち消されていると思う。

イーデイス「まさか……闇斬剣の力が、効かない!？」

カルム「光剛剣最光の力だ！」

イーデイス「光剛剣最光……!?あのユーリって奴の聖剣ね……!」

どうやら、ユーリは何度か整合騎士と激突したようだな。

だが、相手が刀なのに対して、こっちは少し大きい剣だ。

取り回しの都合で、こちらが押される。

そして、遂に壁にまで追い詰められる。

イーデイス「まさか、この私をここまで追い詰めるなんてね。それは誉めてあげる

わ。」

カルム「……どうも。」

イーデイス「でも……これで終わりよ。」

カルム「……。」

後ろをチラッと見ると、ケントが駆け出していた。

イーデイス「じゃあ、覚悟しなさい。」

カルム「……………!」

俺は閻斬劍の斬撃を、刃王劍十聖刃で逸らせる様な形で躲して、イーデイスの腕を掴む。

イーデイス「何を……………!?!」

カルム「今だ、ケント!俺ごとやれ!」

ケント「……………すまない……………!エンハンス・アーマメント!」

ケントの叫びと共に、鎖がこちらにやって来て、俺ごとイーデイスを縛ろうとする。

だが、イーデイスはすぐさま俺を剥がして、鎖を切断する。

キリトの方を見ると、ユージオの武装完全支配術がアリスに当たるも、アリスの武装完全支配術によって、削られていた。

イーデイス「……………作戦としては悪くないんだけどね、私に、それは効かないわよ。

アンタは、後で私が相手するから、そこで大人しくしてなさい。」

イーデイスは、ケントに気が向いてる。

なら、こつちも反撃するか!

カルム「エンハンス・アーマメント!」

イーデイス「!?」

俺は、火炎剣烈火、水勢剣流水、雷鳴剣黄雷、土豪剣激土、風双剣翠風、音銃剣錫音の幻影を出現させて、6つの属性を纏った攻撃を、イーデイスの闇斬剣にぶつける。

すると、二つの武装完全支配術がぶつかり合い、周囲にヒビが入る。

イーデイス「えっ………?!? (コイツ、剣を狙って………?!?)」

カルム「ケント!!」

俺のその叫び声に、ケントは短剣を持ちながら駆け出していく。

ケント side

カルムの絶叫に、俺は短剣を持ちながら駆け出していく。

そうだ、これが、まさしく、最後の機会。

これを無駄にするわけにはいかない!

イーデイスにまで、あと六メルの所で、予想だにできなかった出来事が起きる。

2本の神器の武装完全支配術が融合する事で、途轍もない破壊力が生まれてしまい、カセドラルの外壁に穴が空いてしまったのだ。

突然の突風に、俺は地面に倒れ込む。

猛烈な空気の流れは、紫紺色の剣士と、灰色の騎士を巻き込み、絡み合って外へと飛ばされていく。

ケント「うわぁアア!!」

俺は絶叫して、すぐに壁に空いた穴の元へと向かう。

だが、無情にも、大理石の壁石が、まるで時間を巻き戻すかの如く、2人が吸い込まれた穴を塞いでいく。

ケント「あああああっ!!」

悲鳴を漏らし、懸命に駆け寄ったが、壁は何事もなかったかの様にピタリと塞がる。そこに、無我夢中に拳を叩きつける。

ケント「カルムーーーー!!イーデイスーーーーッ!!」

ユージオ「キリトーーーー!!アリスーーーーッ!!」

雲上庭園に、俺とユージオの絶叫がこだまする。

俺は、すぐさまユージオと合流する。

ケント「ユージオ!」

ユージオ「ケント……………!キリトとアリスが……………!」

ケント「そっちもか……………!」

ユージオ「って事は、カルムとイーデイスの2人も……………!?」

俺たちは、すぐに4人の元に向かおうとする。

だが、それぞれの剣をぶつけても、使える神聖術の中で最大の威力を持つ熱素の神聖

術をぶつけても、効果がなかった。

俺たちは、キリトとカルムの2人を信じて、先へと進む事にする。

深澄 side e

私と明日奈は、神代博士と共に、朝食を食べていた。

ビュツフエ形式の朝食だったけど、なかなか立派ね。

すると、神代博士が呟く。

凜子「このお魚、オーシャン・タートルで釣れたのかしらね？」

明日奈「ど、どうでしょう……………」

深澄「分かりません……………」

そうやって、白身魚のフリットを食べてみると、ほろほろとして柔らかく、それでいてしっかりとした歯応えがある。

相当に新鮮ね。

そういうえば、このオーシャン・タートルは、どこを航行しているのかしら？

携帯端末は、船内Wi-Fiに接続するのは、保安上の理由から、却下された。

それにしても、あのアリシゼーション計画は、話したのが全てなのかしら。

いまいち、菊岡さんが信頼できない。

だけど、菊岡さん曰く、明日には、カルムは目を覚ます。

その際には、しっかりと抱き締めて、言いたい事を全部言うんだから。すると、明日奈が何かに気づく。

明日奈「あつ……………向こうに何か見える。」

深澄「えつ……………？あつ、本当だ。」

凜子「漁船……………ではないわね。やけにアンテナが伸びてる。」

明日奈「じゃあ……………軍艦？」

深澄「そうなのかしら……………？」

??「あれは日本の船ではありませんが、軍艦ではありませんよ」

そう話していると、横から、解説する声が入ってくる。

確か、中西って人だった気がするわね。

中西「朝食中に失礼致しました。おはようございます、お三方。」

明日奈「おはようございます。」

深澄「おはようございます、中西さん。」

凜子「おはよう、中西さん。……………それで、軍艦じゃないのなら、自衛艦ですか？」

中西「惜しいですね。海自所属の艦船は、護衛艦と呼びます。あの船は、5千トン型

汎用護衛艦DDI19『あさひ』です。」

深澄「へえ……………」

中西「2台あさひ型護衛艦のネームシップで2番艦は不知火と言うんですが………」

この人は、この手の話になると、ウンチクが止まらないのかしら？

それを見て、私、明日奈、神代博士は、笑う。

すると、あの船が、遠ざかっていくのに気がついた。

深澄「あれ……あの船、離れて行きますね………」

明日奈「本当だ。」

中西「あさひ型はこの2隻だけで………。何ですって………？………失礼。」

すると、中西さんは、ウンチクを語るのをやめて、穏やかな雰囲気から、少し表情が険しくなった。

中西さんは、私たちから少し離れて、電話で菊岡さんと話す。

中西「菊岡二佐、中西です……。たった今、あさひが西の方向へと方向転換を致しまして……。確か明朝1200までは随走予定のはずでは……。はい、すぐに参ります……。お話の途中で申し訳ありませんが、ここで失礼致します。」

中西さんは、一礼をした後、その場を去っていく。

凜子「……。どうしたのかしらね？」

明日奈「さあ………？」

深澄「……………胸騒ぎがする。」

一体、どうしたんだろう。

まあ、朝食を食べるとしましょう。

それにしても、カルムは、アンダーワールドで、女の子を引つ掛けてなければいいんだけど。

カルムって、優しいから、フィリアとレインが好意を寄せているのが分かる。そんな事を考えながら、朝食を食べていく。

第35話 休戦協定

カルム side

あの2つの武装完全支配術が暴走して、カセドラルに穴が開いてしまった。

その穴に、俺とイーデイスは吸い込まれる。

その際に、イーデイスの片手を掴み、刃王剣十聖刃を、外壁に突き刺す。

なんとか助かった……………。

すると、下の整合騎士が暴れ出す。

イーデイス「ちよつと！離しなさいよ！アリスがいないんなら、私も死ぬ！」

カルム「ちよつ……………!?!」

そう言つて暴れ出すものだから、イーデイスが落ちかける。

自暴自棄になつてるな。

すると、俺の口から、大声で罵倒する声が出る。

カルム「動くなバカ！アンタ、整合騎士なんだろう！ここで自暴自棄になつても何も

解決しないぞ、バカ!!」

イーデイス「アンタ……………！何よ、その言い方！撤回しなさい！」

カルム「うるさい！バカにバカって言うて何が悪いんだ、バカ！バカ！バカ！」
すると、みるみる内に、イーデイスの顔が赤く染まっっていく。

俺は、イーデイスを説得する。

カルム「良いか！俺と一緒にここで死んだら、カセドラルに残ったユージオとケントは、すぐに最高司祭の下に行く！アンタは、それを防ぐのが仕事だろ！？なら、ここで自暴自棄になるな！その程度の理屈も飲み込めないなんて、バカだな、バカ！」

イーデイス「それは、宣戦布告と見做して良いのかしら？」

そう言うて、闇斬剣を振ろうとするが、理性が勝って、やめる。

イーデイス「まあ、アンタの言う事にも一理はあるよ。でも、アリスが……………！」

カルム「アリスなら、きっと無事だ！」

イーデイス「何で、そう言い切れるのよ。」

カルム「アリスが落ちた時に、キリトも一緒に落ちてた！アイツがアリスを見捨てな
いって、分かるんだよ!!」

俺の絶叫に、イーデイスは目を閉じる。

すると、冷静になったみたいだ。

イーデイス「……………分かった。今は、アンタを信じる。」

カルム「そう言うて貰えると助かる！それはそうと、そろそろ腕がキツいで、壁に

剣を突き立ててくれないか……………!?!」

イーデイス「わ、分かったわ……………!」

俺はなんとかイーデイスを持ち上げて、イーデイスの闇斬剣を突き刺してもらおう。

まだ、刃王剣十聖刃は、抜け落ちる気配が見られない。

すると、イーデイスが尋ねてくる。

イーデイス「アンタは……………」

カルム「ん?」

イーデイス「随分と、そのキリトって奴を信じてるんだね。」

カルム「まあ、長い付き合いだしな。アイツが見捨てる可能性は、ゼロだ。」

イーデイス「言い切るわね……………。まあ、アンタとは、剣の決着がついてないしね。」

カルム「さいですか……………。それはそうと、俺たちは、どうにかして、カセドラル

の内部に戻らないといけない。」

イーデイス「そうね……………」

カルム「だから、ここは、一時休戦という事にしないか?」

俺の提案に、イーデイスは少し葛藤をする様な反応をするが、すぐに頷く。

イーデイス「まあ、良いわ。ただし、アリスが生きてないのなら、アンタを容赦なく

斬るわ。それは覚えなさい。」

カルム「分かった。」

キリト、アリスを殺すなよ。

俺は心の中でそう呟き、イーデイスと向き合う。

カルム「それはそうとき、どうやって戻るんだ？」

イーデイス「そうね……。雲上庭園に開いた穴は、外壁にかけられてる自己修復性によって、もう塞がれてるわね。」

カルム「でも、もう一度、さっきのアレをやれば、出来なくはないだろう？」

イーデイス「ううん。可能性はゼロとは言わないけど、武器の天命が持つかしら。」

カルム「そうだな……………」

こっちも、武装完全支配術を二度も使ったのだ。

天命が持つつかどうか怪しいな。

すると、イーデイスが思い出したかの様に喋り出す。

イーデイス「そういうえば、この先の95階には、暁星の望楼っていう所があるんだけど、そこに行けば、カセドラルに戻れるわよ。」

カルム「なら、そこまで登るか……………」

イーデイス「ん？」

カルム「縄を持ってないか？」

イーデイス「縄？なんでよ？」

カルム「縄があれば、万が一方が落ちた際に、もう一方が助ける事が出来るしな。」
イーデイス「それはそうだけど、アンタ、縄を持つてるの？」

カルム「ええと……………」

そういえば、縄を持ってきてないな。

ここがALOなら、縄を大量に出せるのだが、ここはアンダーワールド。

そんな便利機能はない。

カルム「悪い。縄、ないわ。」

イーデイス「はあ!?!……………アンタ達、武器保管庫に寄ったんでしょ？縄を持って来なかったの!？」

カルム「武器を取り戻す事しか考えてなかった上に、こうなるとは思わなかった。」

イーデイス「ハア……。じゃあ、私が用意するから、待つてなさい。」

そう言つて、イーデイスは、右側の籠手を外す。

神聖術を発動すると、籠手が鎖へと変化する。

イーデイス「ほら、これで良い？」

カルム「ああ。助かる。」

俺は、物質変換術かと思つたが、形状が変わつただけだと思ひ、イーデイスから鎖の

片方を受け取って、剣帯の片方につける。

足元を見ると、庭園が小さく見える。

これは、落ちたらただでは済まなそうだな。

そう思っていると、イーデイスが話しかけてくる。

イーデイス「ねえ。」

カルム「何だ？」

イーデイス「上に登るのは良いんだけどさ、どうやって上に行くの？」

カルム「それは、こうする。」

剣を左手に持ち替えて、術式を唱える。

カルム「システム・コール！ジエネレート・メタリック・エレメント・ウエッジシエ
イプ！」

俺は、ハーケンをイメージして、楔を生成する。

それを、刃王剣十聖刃が突き刺さっている継ぎ目に差し込み、刃王剣を納刀する。

体を揺らして、反動をつけて、鉄串の上に立つ。

すると、イーデイスが不安げな声を出す。

イーデイス「それ……大丈夫？」

カルム「大丈夫だ……多分。よし。システム・コール！ジエネレート・メタリック・

エレメント・ウエッジシエイプ！」

鉄串をもう一本生成して、もう一つ上の継ぎ目に突き刺して、その上に乗る。

カルム「……………大丈夫だな。よし！今やった要領で、1本目の鉄串に登ってくれ！」

イーデイス「えええ……………」

カルム「どうした？」

イーデイス「いや、こういうのは初めてで、ぶら下がるだけでも限界なのよ……………」

そういえば、アンダーワールドの人は、想定外の出来事に弱い傾向があるな。

だから、ベル・アバドンとライオス・アンティノスのフラクトライトが崩壊したのだ。

まあ、こんな事を想定は出来ないよな。

カルム「分かった！なら、俺が鎖を引つ張って、アンタを足場まで持ち上げるから！」

イーデイス「お願いね……………」

カルム「じゃあ、ゆっくり持ち上げるから。」

一声かけて、鎖を慎重に引つ張る。

神聖術で作られた物は、普通の物と比べて、天命が全損するのが早いが、なんとか耐

えている。

揺らさない様に気をつけながら、イーデイスを1メートルほど持ち上げる。

カルム「よし、剣を抜いても大丈夫だ。」

イーデイスが闇斬剣を抜くと、重くなる。

まあ、神器と鎧が付いてるんだ。

仕方ない。

闇斬剣を納刀するのを見て、引き上げを再開する。

イーデイスのブーツが一本目の鉄串に乗ったのを見て、即座に声をかける。

カルム「両手で壁に掴まって………よし、鎖を離すぞ。」

イーデイスは、なんとか鉄串に乗る事が出来たみたいだな。

さて、問題は、これを何回繰り返せばいいんだろうな。

カルム「じゃ、俺はもう一度上に登るから。」

イーデイス「気をつけなさいよ。」

カルム「分かった。」

俺は、もう一本の鉄串を生成すべく、システムコマンドを詠唱した。

それを繰り返して、しばらくが経った。

太陽が沈み始めたのだ。

壁登りの状況は、あまりよろしくない。

イーデイスも、慣れてきたのか、上の鉄串に移動させるのは大分早くなった。

だが、神聖力が足りない。

太陽が沈んでいる事から、空間神聖力が不足し始めているのだ。

カルム「システム・コール！ ジェネレート・メタリック・エレメント・ウエツジシエ
イブ！」

俺がそう唱えるも、銀色の光は、頼りなく漂った末に、消えてしまった。

ダメか……………。

すると、下のイーデイスも声を出す。

イーデイス「……………器物の生成は、空間神聖力を大きく消費するからね……………。

ソルスが沈んだ以上、1時間に一つ作れば良いほうね。今、どれくらい登ったの？」

カルム「そうだな……………。そろそろ85階は越したと思うんだけど……………。」

イーデイス「目的の95階まで、まだまだ先は長いわね。」

カルム「ああ……………。どっちにしろ、完全に暗くなったら、危険すぎる。鉄串は当
分作れない上に、この状況じゃ、休むどころじゃない。」

最悪、支点には、お互いに剣を使うしかないのだが、天命も、朝まで持つか怪しい。
休める所は無いかと、周囲を見回す。

すると、僅か8メートルほどの上の壁面から、複雑な形の影が等間隔に配置されてい
る。

カルム「なあ、あそこ。何か見えない？」

イーデイス「ん？……………確かに、石像ね。でも、こんな高い場所になんて……………？誰も見ないのに……………」

カルム「なんだって良い。座って休めるのならな。あそこまでは、およそ8メルって言ったところかな。鉄串が3本必要だな。」

イーデイス「3本……………しようがないわね。少し待ってなさい。」

そう言つて、左側の籠手を外し、再び形状変化を使い、鉄串に変換する。

イーデイス「これを使いなさい。」

カルム「助かる。」

イーデイスが籠手から変換した鉄串を俺が受け取る。

これで、なんとかかなりそうだな。

鉄串3本のうち、2本をベルトに差し込み、残り一本を、隙間に差し込む。

その上に乗る、イーデイスを引き上げる。

カルム「よし！あと少しだ！……………ん？」

残り4メートルの所まで来たのだが、石像が良く見える。

カセドラルの外壁を取り囲む様に配置されている。

だが、見た目は、カセドラル内部で見た、女神や天使の神々しい姿ではなく、悪魔といえれば納得する様なデザインだった。

カルム「うわあ……………。気味悪いな。」

イーデイス「あ、あれは……………。ダークテリトリーの……………?!」

イーデイスが驚声を出すと、石像が動き出した。

アレ、動くのかよ!?

まさか、アドミニストレータが配置したガーディアンのか?

カーディナル曰く、アドミニストレータは、偏執的なまでに用心深い性格だ。

あり得るな。

ガーゴイルに似たガーディアンは、合計3体動き出していた。

鉄串の上に乗って戦うなんて、これまでの仮想世界の戦闘で、一度もない。

だが、やらなければ、その先に待つのは、死だけだ。

カルム「イーデイス!そっちに行つたぞ!」

俺は、刃王剣十聖刃を抜刀しながらイーデイスに叫ぶが、イーデイスは呆然としていた。

下から、あり得ないと呟く声も聞こえる。

さつき、ダークテリトリーが何だとか言つてたが、それに関係するのか?

一体が迫ってきて攻撃してくるので、刃王剣十聖刃で迎撃しつつ、鉄串の一本を、ガーゴイルに向けて投げる。

優先度が高いので、怯ませる事はできたが、撤退には至らない。

しかも、残り2体も合流して、こちらの隙を窺うように、円を描いて飛翔する。

カルム「イーデイス！ 剣を抜け！ 化け物がそっちにも来るぞ！」

俺は叫びながら真下を見るが、イーデイスは未だに動揺している。

ガーゴイルに一本串をぶん投げた影響で、残り一本しかない。

なら、もう手段はこれしかない！

俺は刃王剣十聖刃を納刀しつつ、イーデイスに向かって叫ぶ。

カルム「イーデイス！ 鎖にしっかりと掴まれ！」

俺の叫び声に、漸く反応したのか、上を向いて、鎖に掴まる。

それを見て、俺は両手で握り締め、少し上に引っ張る。

すると、イーデイスは、掠れた声を漏らす。

イーデイス「ちよつとアンタ……………まさかとは思うけど……………！」

カルム「2人とも揃って生き残れたら、後で幾らでも謝るから！」

俺は大きく息を吸って、全身の力を振り絞って、イーデイスを真上へと放り投げる。

イーデイス「きゃああああ!!……………むぎゅっ！」

女の子っぽい声を出したと思ったら、最後は高貴な騎士には相応しくない声だった事に
関しては、気にしないでおく。

だが、そんな投擲の反動で、俺は足場から落ちる。

イーデイスが支えてくれなかったら、2人仲良く落下だろうな。

イーデイス「こ……………のおおおおっ!!」

あれ、もしかして、怒ってる？

そんな怒りの籠った声と共に、俺も投擲される。

カルム「うわああああ!!……………ひでぶ!!」

大理石の壁に背中から激突した際には、変な声が出てしまったが、何とかテラスに這いつくばれたな。

すると、イーデイスの怒りの声がする。

イーデイス「アンタ、一体何考えてんのよ!このバカ!」

カルム「悪い……………!これしか思いつかなかったもんで……………!話は後だ、来るぞ!」

俺はそう言って、再び刃王剣十聖刃を抜刀する。

周囲を見渡すと、まだ石の状態のガーゴイルが、角までずらつと並んでいた。

すると、イーデイスが呟く。

イーデイス「……………間違いないわ……………。でも、何で……………!?!」

カルム「さつきから何を気にしてるんだ?あの化け物の事、知ってるのか?」

そう聞くと、肯定の声が返ってくる。

イーデイス「ええ。アレらは、ダークテリトリーの暗黒術師達が作り出して、使役する魔物よ。彼らに倣って、私たちは《ミニオン》と呼んでるの。」

カルム「ミニオン……。ダークテリトリー産なのは見た目で納得だけど、どうしてそんなもんが、人界で神聖な場所に並んでるんだよ？」

イーデイス「それは、私も知りたいわよ！」

俺がそう呟くと、イーデイスは絞り出すような声で叫ぶ。

イーデイス「アンタに言われるまでもなく、決してあつてならないわよ。ミニオンが、整合騎士の監視を掻い潜って果ての山脈を越えて、セントラル・カセドラルのこんな場所にまで侵入してきたなんて、有り得ないわよ。ましてや……。！」

カルム「ましてや、教会内部で高い権力を持つ何者かが、意図的に配置したなんて事は、絶対に有り得ない……。？」

俺の無意識の補足に、イーデイスは睨むが、否定はしていない。

すると、ガゴイル……。もといミニオンが動き出す。

カルム「来るぞ！2体そっちに行つた！」

イーデイス「アンタ……。整合騎士を舐めないでよね。」

酷い、純粹にイーデイスの事を氣遣つて言ったのに。

鉄串が刺さっている個体が、こちらに来て、残りの2体は、イーデイスの方へ。

だが、イーデイスは闇斬剣を一閃して、あっという間に倒していた。未だにミニオンと交戦中の俺を見て、嫌味が籠った声を出す。

イーデイス「手伝おうか？ 苦戦してるみたいだしね。」

カルム「結構！」

俺はミニオンに対して、水平4連撃技の《ホリゾントル・スクエア》を発動する。

両腕と尻尾を切断して、ついでに鉄串も回収する。

すると、イーデイスが呟く。

イーデイス「……………へえ。」

カルム「えつと……………何？」

イーデイス「いや、奇妙な技を使うなって思ってたさ。夏至祭で芝居小屋でもやれば、客を呼べるんじゃない？」

カルム「そりゃ、どうも。」

皮肉かよ。

気になる事があるので、聞いてみる。

カルム「ていうか、イーデイスはセントリアの夏至祭を見たことあるのか？ アレはどうちかと言うと、庶民の祭りで、上級貴族は見に行かない奴が多いが。」

無論、例外がある。

俺が傍付きをしていたタカトラ先輩は、毎年楽しみにしているらしい。

すると、イーデイスが反論する。

イーデイス「あのね、私を気取った上級貴族と一緒にしないでくれる？もちろん見た事がある……。」

カルム「ん？」

イーデイス「いや、そういう祭りがあると、ほかの修道士から聞いたのよ。」

カルム「……………」

それはそうだ。

アドミニストレータによつて、天界から召喚されたと思ひ込まされてるのだ。

だが、アリスが30番なのに対して、イーデイスは10番だ。

何でだろうか？

聞いてみるとするか。

カルム「なあ。」

イーデイス「何よ？」

カルム「何でイーデイスは10番目なんだ？アリスは30番なのに。」

イーデイス「ああ。それは、先代の10番目の騎士から、受け継いだのよ。」

カルム「なるほど。」

イーデイス「……………アンタ、ミニオンの血が付いてるわよ。」
カルム「え？本当だ。」

俺は、服の袖で拭おうとするが、イーデイスから叱責が飛ぶ。

イーデイス「ちよつと待ちなさい！アンタ、手巾の1枚くらいは持ってないの？」
カルム「持ってない。」

イーデイス「即答する？はあ……………これを使いなさい。」

そう言つて、ハンカチを渡してくる。

ありがたく使わせてもらおうかな。

カルム「ありがとう。」

イーデイス「ちゃんと洗つて返しなさいよ。」

その言葉に苦笑しながら、俺はハンカチで血を拭う。

さて、どうしたものかな……………。

しばらく休憩するか。

第36話 伝説の英雄と時国の騎士

ケント side

孤独というのを、すっかり忘れてたな。

八年前のあの夏、イーデイスとアリスが連れ去られてから、俺は、ある意味では孤独だった。

無論、ユージオも居たのだが、その時には、気まづくて、碌に話せなかった。

その時に俺は、その過去を、記憶を遠ざけ続けた。

己の弱さを認められず、諦めていた。

だが、2年前の春に、ふらりと現れた2人の少年が、俺たちを底なし沼から力づくで引つ張り出した。

その2人が居たからこそ、ゴブリンの集団を撃退し、ギガスシダーを打ち倒し、ルーリッドの村を飛び出して、央都まで来れたのだ。

俺の傍らには、常にカルムが居て、ユージオの傍らには、常にキリトが居た。

計画とは随分違う成り行きだが、セントラル・カセドラルに侵入して、障害を乗り越え、こんな高い場所に来れたのは、間違いなく、カルムとキリトが俺たちを導き、励ま

し続けてくれたからだ。

だが、カルムはイーデイスと、キリトはアリスと共にカセドラルから落ちてしまった。先ほど、色々試してみたが、無駄だと分かり、断念した。

あの2人は、突発的な状況に対する能力がある。

どうにかして、カセドラルを外側から登り始めているに違いない。

そう思つて、俺たちは慎重に進んでいく。

だが、階を登っているのにも関わらず、人の気配を感じられなかった。

奇襲を防ぐために、限界まで感覚を張り詰めていたが、とある思考が入り込んでくる。

カルムと騎士イーデイスは、今頃どうしているのだろうか。

もしかしたら、剣を引かせたのか……………？

そう考えると、馴染みのない感情が胸に込み上げてくる。

それがきっかけで、デュソルバートに剣を向けた時の葛藤が蘇る。

ケント（あの時、カルム、お前は俺を止めた。お前なら、ただ見ているのではなく、自分の事を顧みずに整合騎士に立ち向かい、イーデイスとアリスを助けようとしただろう。）

それは、カルムに対する強い劣等感となる。

あいつは、強くて優しい。

もしかしたら、整合騎士イーデイスの心にすら届くかもしれない。

ケント「……………そんな事を考えても無駄か。」

俺は、強引に思考の流れを断ち切る。

これ以上は考えても無駄だ。

カセドラル最上階に保管されている《記憶の欠片》を取り戻し、整合騎士イーデイスの魂に戻せば、本物のイーデイスが戻ってくる。

今は、雑念を捨て、ひたすら前に進もう。

そんな風に決意して、ユージオと共に足を動かしていく。

しばらくすると、大きな扉が見える。

ユージオ「ここが、カセドラルの90階……………」

ケント「恐らく、この先に、騎士長がいるはずだ。」

ユージオ「……………行くぞ。」

ケント「ああ。」

俺とユージオは頷き合い、扉を押し開く。

すると、白煙が押し寄せてくる。

目に入ったのは、巨大なお風呂場だ。

ユージオ「ここは、お風呂なのか？」

ケント「そう………だろうな。」

すると、人の気配を感じて、劍の柄に触れる。

2人だ。

片方は、相当に大柄で、もう片方は、平均的な大きさだろう。

両方とも男なのは、分かる。

先制攻撃を仕掛けるべきか………！

その時。

???「悪いけど、もう少し待ってくれねえかな。なんせさつき央都に着いたばかりだよ、飛竜に乗りっぱなしで全身が強張っちゃまった。」

???「すぐに出る。」

片方は、低く錆びているが、よく通る声で、もう片方は、いかにも騎士というような声だ。

判断に困っていると、2人は風呂から上がり、体を解し、服を着る。

と言つても、片方は東帝国産の着物で、もう片方は騎士服を着ていた。

???「おう、待たせたな。」

???「すぐに劍を持つ。」

片方は本当に剛毅な風貌で、もう片方は厳しい風貌だ。

すると、2人が籠に手を向けると、大剣が剛毅な方に、細い剣が厳しい方に行く。片方は、カラムに見せられて知っている。

アレは、時国剣界時という聖剣だ。

すると、2人の整合騎士が尋ねてくる。

??? 「さて、お前さんらと戦う前に、一つ聞きたい事があるんだ。」

ユージオ 「何ですか……………?」

??? 「レイカとフアナティオは無事か?」

ケント 「……………生きてます。今、治療を受けている最中の筈です。」

??? 「そうか……………」

??? 「なら俺らも、お前さんらの命までは取らねえでおこう。」

ユージオ 「な……………」

すごい自負だ。

恐らく、相当の激闘を勝ち抜いてきたのだろう。

だが、その発言は少し気に入らない。

ユージオ 「気に入らないですね。」

??? 「ほほう?」

??? 「何がだ?」

ケント「あなた方の部下は、フアナテイオさんとレイカさんだけじゃないでしょう！ エルドリエさんやデュソルバート、四旋剣の人たち、そして、イーデイスとアリスの生 死はどうでもいいんですか!？」

俺の言葉を聞いた剛毅な男は、苦笑する。

すると、もう片方が声をかける。

「おい。やっぱり変な誤解を招いただろう。」

「そうだな……………。何つうかな……………。エルドリエはアリスの嬢ちゃんの弟子だ

し、四旋剣のダキラ、ジェイス、ホープレン、ジークはフアナテイオとレイカの弟子だ。

それで、フアナテイオは俺の、レイカはコイツの弟子だ。」

「俺達はあまり恨み辛みで戦うのは好んでいないが、でもせめて、弟子が殺されたのなら、その仇くらいは取らないといけない。」

なるほどな。

つまり、戦闘にはそういったのは持ち込まないのか。

「ただ、レイカを打ち破ったお前達の実力を確かめたい。」

「……………まあ、アリスの嬢ちゃんは、俺のことを師匠くらいにやあ思ってるかも しれねえが……………正味の話、本気で戦ったら、どっちが強いかはもう分からん。嬢ちゃん が騎士見習いになった6年前ならまだしも、な。」

それには、一つ引つかかった。

それは、アリスが30なのに、イーデイスが10なのだ。

どういう事だ……………? ?

剛毅な方の話は続いていた。

??? 「ま、俺たちはお前さんらに負けるつもりもねえし、だからオレと同じくらい強い

アリスとイーデイスの嬢ちゃんがお前さんらに斬られたとも思わん。」

??? 「元老長に聞いたところでは、お前達には相棒がいるのだろうか? その2人がここに居ないという事は、大方、イーデイスとアリスの2人と戦ってるのか?」

ユージオ「……………だいたいそんな所です。」

ケント「ちなみに、あなた達を斬ったら、次は誰が仇討ちに来るんですか?」

??? 「安心しな。俺たちには師匠はいねえよ。」

??? 「剣を構えろ。」

そう言つて、騎士服を着ている方は、柄の部分と剣先を握り、離れた。

俺とユージオが驚いている中、剣先が三つになっている方を上にして、東の部分と合
わせる。

すると、剣から槍に変わる。

もしかしたら、既に完全支配状態か。

なら、ソニックリープで決める！

すると、2人は反応する。

??? 「見慣れない構えだな。」

??? 「……………もしやお前さんら、連続剣の使い手かい？」

ユージオ「……………！」

ケント「……………俺たちが連続剣を使えたら、何だつて言うんだ？」

ユージオが驚く中、俺は低い声で問い返す。

すると、剛毅な方が鼻を鳴らす。

??? 「いやな、ダークテリトリの暗黒騎士連中にも連続剣を使う奴がいて、何度か戦っ

ただけどよ。あんまりいい思い出はねえんだよな……………」

??? 「何せ、こちらは、あまり器用な技は使わないからな。」

ユージオ「……………つまり、僕らも正統流派の技で戦えと？」

??? 「いやいや、連続剣だろうと何だろうと、好きなだけ使ってくれて構わんさ。」

??? 「その代わり、俺たちも、奥の手を出させて貰おう。」

やはり、両方とも、完全支配状態か。

なら、ソニックリープで決める！

すると、騎士達は、名乗りを上げる。

ベルクーリ「整合騎士長……………ベルクーリ・シンセシス・ワン。」
リヨウガ「騎士長補佐……………リヨウガ・シンセシス・スリー。」

「参る!!」

ベルクーリ!?

まさか、あのベルクーリか!?

すると、ベルクーリは、剣を大きく振りかぶる。

リヨウガの方は、槍を両手で持っているだけだ。

舐められたものだな。

俺たちは、ソニックリープで2人の下に向かう。

だが、ユージオの前方に、何か陽炎が漂っていた。

ユージオがその陽炎に当たると、ユージオは吹き飛ばされる。

しかも、斬られていた。

すると、リヨウガが目の前から消えて、背後から斬られる。

ユージオ「ぐ……………はっ……………!」

ケント「ぐっ……………!」

俺とユージオは、浴槽へと落下する。

ユージオは前の部分を、俺は背中を斬られ、出血していた。

咄嗟に光素を出して、傷口を塞ぐ。

騎士長は、剣を鞘に収めて、右腕を懐に差し込み、補佐の方は、槍の下の部分を地面に立てていた。

ベルクーリ「今のはちつと危なかったな、まさかあんな勢いで突っ込んでくるとは思わなかったからよ。悪いな、殺しちまうとこだった。」

リヨウガ「向こうはそれを承知で突っ込んで……………は居ないようだな。」
そう呟いていた。

だが、何故リヨウガという方は、いきなり消えたんだ!?

ユージオ「い……………今の技は……………!」

ケント「一体……………!?!」

ベルクーリ「だから言ったろう、奥の手を使うってな。俺はただ素振りで空気を斬った訳じゃねえぜ。言わば……………ちよいと先の、未来を斬ったのよ。」

リヨウガ「俺は、この聖剣の力で時間を削り、抹消したのだ。」

言っている意味が分からない……………!

つまり、時に干渉出来るのか……………!?!

だとすると、かなり厄介な能力だ。

リヨウガに接近しても、すぐに背後に回り込まれてしまう。

ベルクーリ「俺らが初めて暗黒騎士の連続剣を見たのは、整合騎士の任に就いて間もない頃でなあ。最初は、そりやあぐうの音も出ねえ程にやられたもんさ。」

リヨウガ「俺たちの技は、一撃の威力を追求した物なのに対して、連続剣は、如何にして敵の打ち込みを捌き、自分の攻撃を当てるかを突き詰めた物だ。」

ベルクーリ「………んで俺たちが導いた答えがコイツだよ。この剣は元々、セントラル・カセドラルの壁に据え付けられてた、《時計》つつう神器の一部だったのさ。最高司祭殿は、《システム・クロック》………とか妙な呼び方してたなあ。アリスの嬢ちゃん《金木犀の剣》が、空間つつう横方向の広がりをもつた斬るのに対して、こいうは時間つつう縦方向を貫くのを。銘は《時穿剣》………時を穿つ剣だ。」

リヨウガ「俺のは、時国剣界時。時を司る聖剣だ。お前の雷鳴剣黄雷が、雷を司る聖剣なのと同じようにな。」

つまり、空間の広さで勝負をすろしかないという事か。

俺の雷鳴剣黄雷の、二つの記憶を使う。

その為に、武装完全支配術の術式の詠唱をしていると、ベルクーリが笑う。

ベルクーリ「となりやあ、遠距離から攻める手だ、と考えるんだな。俺たちの技を見た奴は、皆。」

リヨウガ「ファナティオやアリスの様に、俺たちの後に召喚された整合騎士が、遠距

離型の完全支配術を使うのは、それが理由だな。……まあ、イーデイスは例外だが。」
ベルクーリ「さて、俺は楽しみなんだ。連中を片っ端から退けてきたお前さんらの技が、どんな代物なのかよ。」

ユージオ「……………余裕、ですね。」

つまり、これまでの長い会話は、俺たちに武装完全支配術の詠唱をさせる為だったのか。

悔しいが、どうにかするしかない。

俺とユージオは、通路に出る。

ベルクーリ「ふっふ、来るかよ、少年達。」

リョウガ「言っておくが、次は手加減しない。」

俺たちは、叫ぶ。

「エンハンス・アーマメント！」

ユージオは、青薔薇の剣を地面に突き立てて、氷を発生させ、ベルクーリに向かわせる。
る。

俺は、針鼠とランプの魔神の記憶を使い、針と雷をリョウガに向かわせる。

俺は魔法の絨毯に乗り、リョウガに向かつていく。

ユージオも駆け出していた。

2人の整合騎士は、一切動いていなかった。

ベルクーリが剣を振るうと、氷はあっという間に砕け散り、リヨウガは消えて、針と雷が床に当たる。

となると、リヨウガは後ろに現れるはずだから、俺を中心に、雷を落とす。すると、現れたリヨウガに雷が当たり、少し痺れる。

リヨウガ「何……………!?!」

ケント「ハアアア!!」

俺はすぐさま絨毯から降りて、痺れたリヨウガに向かって、アインクラッド流《体術》、メテオブレイクという秘奥義を放つ。

体勢が崩れていたのがあって、リヨウガは俺と共に浴槽に突っ込む。

ユージオの方も、ベルクーリを俺がリヨウガを落とす浴槽に落とす事に成功したようだな。

リヨウガは、俺を振り解いて立ちあがろうとしていたが、俺はそれよりほんの一瞬先に、雷鳴剣黄雷を浴槽の底へと突き立てる。

頼む、雷鳴剣黄雷、力を貸してくれ!

すると、俺とユージオの口から、とある言葉が放たれる。

「リリリース・リコレクション!!」

すると、雷鳴劍黄雷と青薔薇の劍から、強烈な光が放たれ、あつという間に、俺たちは氷に囲まれ、体には氷の蔓と鎖が巻き付いていて、痺れる。

この時に、カーディナルとユーリから言われた事を思い出す。

カーディナル『良いか、武装完全支配術には2つの段階がある。《強化》と《解放》じゃ。』

ユーリ『強化とは、武器の記憶を部分的に呼び覚まし、新たな攻撃力を発現させる事。解放とは……言葉通りに武器の記憶を全て目覚めさせ、荒ぶる力を解き放つ。』

カルム『荒ぶる力か……』

キリト『なるほどな。エルドリエの霜鱗鞭は、蛇が元だから、あんな事が出来るんだな。』

カーディナル『そういう事じゃ。しかし、お主達ではまだまだ解放術は使えぬぞ。』

ケント『な、なんでですか……?』

ユージオ『どういう事ですか……?』

ユーリ『荒ぶる力、と言っただろう。記憶解放は、術式を覚えたばかりの劍士に制御できる代物ではない。下手をしたら、自分をも巻き込み、命を落としかねない。』

そんな忠告をされていた。

だが、この2人を倒すには、これしかない!

すると、2人は、驚いた様な声を出す。

リヨウガ「驚いたな。まさか、俺の時国剣界時の武装完全支配術を、あんな形で防ぎ、こんな風に拘束するとはな。」

ベルクーリ「お前さんらが思いついたのか？」

ケント「いや、相棒が教えてくれたんです。」

ユージオ「戦場に存在するあらゆる物が、武器とも罠ともなり得る事を。」

リヨウガ「地の利か……………」

ベルクーリ「これは一本取られた事は認めてやるが、負ける訳にはいかねえな！」

そう言つて、ベルクーリとリヨウガの2人は、体に力を入れて、氷にヒビを入れる。

このままでは、2人が脱出してしまう。

俺は、ユージオに向かって叫ぶ。

ケント「頼む、ユージオ！」

ユージオ「咲け……………青薔薇!!」

すると、俺たちの周辺に、氷の薔薇が咲き誇る。

だが、これはある意味恐ろしい光景だ。

何故なら、この薔薇達は、今ここにいる俺たちの天命を吸って咲き誇っているのだ。

四肢から力が抜け、視界が薄暗くなる。

流石の整合騎士達も、力が抜けたようで、驚愕の声を出す。

ベルクーリ「小僧共……………」

リヨウガ「貴様ら、最初から、相討ちが狙いだっただのか……………?!?」

ケント「勘違いしないで下さい……………」

ユージオ「僕たちが、あなた方2人に勝っているかもしれない、唯一の要素……………。それは、天命の総量です。」

ケント「外見から察するに、貴方達が整合騎士になったのは、ベルクーリさんは四十歳、リヨウガさんは三十歳を越えてから。当然、天命の最大値も減っている。」

ユージオ「対して、僕たちの天命値は今が最大に近い……………。例え一太刀受けていても、総量ならまだ僕たちの方が多し筈。それに賭けたんです。」

俺たちの解説を聞くと、ベルクーリとリヨウガの目が見開き、驚愕の表情を浮かべる。

ベルクーリ「テメエら……………。今、なんて言ったんだ。」

リヨウガ「整合騎士になった……………。だと……………?まるで、俺たちの前世を知っている様な口を叩くな。」

俺たちは、その問いに答える。

ユージオ「僕は……………。貴方達のそういうところが許せないんだ。」

ケント「自分が何者かを忘れ、剣を捧げた公理教会の、真の姿を知らずに……………。自分

達だけが正義の、法の守護者だという顔をする。貴方達は、最高司祭が天界から召喚した神の騎士なんかじゃない！」

ユージオ「そうだ！母親から生まれて、ベルクーリとリヨウガっていう名前を与えられた、僕らと同じ人間なんだ！」

すると、俺たちは、ベルクーリが誰かなのかを思い出した。

そう、ルーリッド村を拓いた初代衛士長となった男だ。

果ての山脈で、白竜から青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷を盗もうとした豪傑。

ユージオ「……………ベルクーリ。貴方は、僕達の剣に、見覚えがある筈です。」

ベルクーリ「……………確かに……………どこかで……………あれか。あの時……………」

リヨウガ「確か、ベルクーリが北辺の守護竜を殺した時に、それと似た様な剣があったと報告していたな。」

ケント「なんだって……………!?!」

つまり、英雄自らが、あの白竜を殺したのか……………!?!

俺とユージオは、驚愕する。

ユージオ「あの、竜の骨……………。あれは、貴方がした事何ですか……………? 貴方は

……………自分の物語に出てくる竜を……………殺してしまったんですか……………?」

ケント「本当に、忘れてしまったんですか……………何もかも……………。ベルクーリ、貴方は、

央都から北辺まで長く辛い旅をして、荒れ地に村を拓いた、俺たちのご先祖様だ。それは、ルーリッド村では、誰もが知っている。」

ユージオ「最高司祭は、そんな貴方達を拉致して、整合騎士に仕立てた。貴方達だけじゃない。」

ケント「フアナテイオさんにレイカさん、エルドリエさんに、デュソルバートさん、そして、イーデイスとアリスも……………！皆、整合騎士にされてしまう前は、俺達と同じ人間だ。」

その言葉に、ベルクーリとリョウガは、動揺していた。すると、掠れた声がする。

リョウガ「……………お前達の話も、簡単に、信じてやる訳にはいかない。」

ベルクーリ「だが……………俺もリョウガも、自分が天界から召喚された、神サンの騎士だつつかう話には、長い事、呑み込めねえもんを感じて……………居たんだ……………」

ここまでか……………。

最高司祭の力は凄まじい。

英雄すらも、忠実な騎士に作り替えてしまうのだから。

俺たちの天命は、あと僅かだろう。

すると。

??? 「ホツホオオオオ、これは絶景、絶景。」

耳障りな声が大浴場に響く。

そこに居たのは、1人の道化師だ。

何者だ……………?

??? 「オホオ……………。いけません、いけませんねえ、騎士長殿に補佐殿。まさか、そのままくたばる気じやないでしょうねエ。そいつは明白な反逆ですよウ、麗しき最高司祭猊下への。お目覚めになりましたら、きつとお怒りになりますよウ?」

ベルクーリ「元老長チュデルキン……………」

リヨウガ「貴様の様な俗物が……………剣士の戦いに、手出しをするな……………!」

チュデルキンと言われた人物は、勢いよく両手を叩きながら、飛び跳ねる。

チュデルキン「汚らわしい反逆者どもを相手に、手加減をしておいてよく言いますよウ!お二方、時穿剣の《裏》を使わず、時国の鎧までも使いませんでしたねエ?その気になればそのガキどもを、一言も喋らせずにぶつ殺せたでしょうにイ!それがそもそも最高司祭様への反逆だって言ってるんですよ!!」

チュデルキンがそう言うと、ベルクーリさんとリヨウガさんは、怒りの籠った声を出す。

ベルクーリ「うるせえ……………!俺たちは全力で戦ったんだ……………!」

リヨウガ「それに、貴様こそ、俺たちを謀ったな……………！この2人は、ダークテリトリの暗殺者じゃない……………！貴様のような醜い肉の塊よりも遥かにマシな……………！」

チュデルキン「うっさアアアアア！その首引っこ抜くぞオオオオオツ！！」

その言葉に、キレたチュデルキンは、ベルクーリさんとリヨウガさんの頭を踏む。

チュデルキン「だいたいお前ら糞騎士どもが糞ほどにも役立ちやしねエからこんな面倒な事になってんですよ。たかだかガキ4人にいいようにやられまくるんですよ。もうね、狽下がお目覚めになったら、騎士どもは片っ端から……………少なくともアナタ方と副騎士長とその補佐は、再処理決定ですよ！」

ベルクーリ「なんだ……………テメエ……………！」

リヨウガ「一体何を……………!?」

チュデルキン「システム・コオオオオオル！ディープ・フリーイイーズ！インテグレート・ユニット、ID・001&003!!」

まったく聞き覚えがない神聖術だ。

術式は、かなり短く、大した事ないと思っていると。

ベルクーリ「ぐっ……………！」

リヨウガ「貴様……………！」

2人が呻くと、まるで石のようになる。

俺たちが呆気にとられていると、元老長チュデルキンが、2人の頭から飛び降りる。チュデルキン「ホッ、ホヒッ、ホヒッ………実際、もうお前らのようなジジイどもは要らねえンですよ、一号、三号。なかなか使えそうなコマが2人も見つかった事ですし………ねエ？」

そう呟いた道化は、俺たちをじろりと睨め付け、冷たい怖気が背中を駆け上がる。

だが、俺たちは、限界だった。

氷の薔薇と鎖を踏み潰しながら近づいてくる道化師の姿を凝視するが、視界が暗く塗りつぶされていく。

ケント（カルム………！イーデイス………！）

俺は、2人の名前を呼んだ所で、意識は途切れる。

第37話 右目の封印

カルム side

カルム「ケント……………?」

イーデイス「どうしたのよ?」

カルム「いや……………なんでもない。」

イーデイスに尋ねられ、そう答える。

そういえば、ケントとユージオはどうしているんだろう。

考えてみると、2人と会おうと思っても会えないのは、これが初めてだ。

大丈夫かな……………?

あの2人の事だから、今も上に向かって登っているのだろうが、捕まってないとい
が。

それにしても、ケントとユージオは、剣技の才能が凄い。

キリトと話してはいるが、あの2人なら、いずれ俺たちを追い越す。

強い剣士になるだろう。

ゲームのテクニクに過ぎなかった《剣技》は、このアンダーワールドで、初めて本

物になれた気がする。

アンダーワールドを取り巻く問題をどうにか解決して、2人を皆に紹介したい。それが、待ち遠しい。

すると、イーデイスの訝しげな声が聞こえてきた。

イーデイス「ちよつと？ 気持ち悪いよ。」

カルム「ひでえ……………」

イーデイス「いや、この状況であんな緩んだ笑みをする？」

カルム「ごもつとも……………」

イーデイスの言う事も一理ある。

だけど、そんなに緩んでたかな？

それはともかく、まずは、このテラスからどうにか脱出をする事にしよう。

だが……………」

カルム「壁登り自体は、月が昇れば再開できるよ。楔さえ作ればどうにかなるし。

この上にはミニオンは確認出来ないしね。ただ、少しお腹が空いてなあ……………」

イーデイス「何よ？ 一度や二度食事が取れなかったからって、死なないでしょ。」

カルム「こつちは、まだ育ち盛りの範疇なんでね。整合騎士様と違って、食べなきや天命が減つちゃうんだよ。」

イーデイス「あのね……………。整合騎士だって、お腹は空くし、食べないと天命は減るわ！」

俺の皮肉めいた言葉に、強く言い返すイーデイス。

すると、イーデイスの腹部周辺から、お腹が空いたような音が出る。

俺は思わず笑ってしまい、イーデイスが顔を赤くしながら、闇斬剣の柄を握る。

それを見て。

カルム「ごめん！悪かった！そりやそうだな、整合騎士といっても、生きてるしね。生きてりや腹も減るよな。」

やべえ、照れ隠しで殺されるかと思った。

そういえば、カーデイナルの大図書館からくすねた饅頭が残ってたはず……………。

カルム「おお、天の恵みだ。ほら、いいものがあるぞ！」

イーデイス「……………アンタ、なんでポケットから饅頭が出てくるのよ？」

カルム「ポケットから饅頭は、出てきても問題よ。」

イーデイスが何か呟いているのを他所に、熱素で温めようとする。

カルム「システム・コール。ジェネレート・サーマル・エレメント。バー……………」

イーデイス「ちよつと待ちなさい！」

カルム「むぐっ!？」

饅頭二つに熱素を近づけて、バーストさせようとすると、イーデイスが口を抑える。イーデイス「アンタ、そんな事したら、一瞬で黒焦げよ！ちよつと貸しなさい！」カルム「ああつ！」

俺がそんな情けない声を出す中、イーデイスは、術式を口ずさむ。

イーデイス「ジエネレート・サーマル・エレメント………アクウイアス・エレメント………エアリアル・エレメント。」

熱素、水素、風素の三つを生成して、風素で風のドームを作り、熱素と水素で出来た水蒸気が閉じ込められ、蒸されていく。

すると、ホカホカの饅頭ができた。

カルム「おお………早くくれ！………つて、あ、ああああ!？」

俺がそう言うのと、イーデイスは2つの饅頭をいっぺんに食べようとするので、情けない悲鳴を上げると、イーデイスは、椰揄うような顔で「冗談よ。」と呟き、俺に片方を渡す。

本当に美味しいな、この饅頭は。

俺はイーデイスを見て、何気なく呟く。

カルム「いやあ………。道具も無しに、素因だけで饅頭を蒸せるとは。流星は、あのメアリのお姉さん、つてところ………」

すると、イーデイスの手が、俺の襟首を強く掴む。

その顔は、驚愕の色が浮かんでいた。

イーデイス「アンタ、今、何て言った!?!」

その言葉を聞いて、俺はやらかしてしまった事に気付く。

目の前の整合騎士が、ケントの幼馴染で、メアリの姉のイーデイス・リデルだと言う事は、ほぼ間違いない。

だが、最高司祭に記憶を奪われ、天界から召喚された事を信じている以上、どうにも出来ないのだ。

だからこそ、カーディナルから貰った短剣を使う事にしたので。

だが、イーデイスの表情を見る限り、言い間違いでは押し通せない。

なら、イーデイスと戦い、気絶させるか、全てを話すか。

俺は、覚悟を決めた。

カルム「君には妹がいる、そう言った。」

イーデイス「……………!?!」

カルム「話すよ。イーデイスが受け入れられるかは分からないけど、俺が事実だつて信じる事の全てを。」

イーデイス「……………!?!……………話しなさい。もし、その言葉が私を謀る物だったら、

即座に斬るわよ。」

カルム「構わない。俺を斬る判断が、真にイーデイスの判断ならな。」
さて、どこから話そうか。

アドミニストレータの嘘から話すか。

カルム「なぜそんな事を言うのか。その理由は、君の中には、君以外の人間に与えられた、しかしそうとは意識できない命令が存在するからだ。」

イーデイス「……………整合騎士の責務の事を言ってるの？」

カルム「そうだ。」

イーデイスの目に、敵意が宿る。

だが、微かな感情の揺らぎが見える。

そこに向けて語るように、俺は言葉を紡ぐ。

カルム「整合騎士は、神の代行者たる公理教会最高司祭アドミニストレータによって、天界から召喚された存在だと、君達は認識しているはずだ。イーデイス。君は、自分が天界とやらで誰から生まれ、どこで育ったかのかを覚えていないはずだ。」

イーデイス「それは……………整合騎士は、地上に遣わされた時点で、ステイシア神によつて、天界の記憶を封じられるからって、最高司祭様は言つてたけど……………」

カルム「確かに、君は記憶を封じられている。だがそれをしたのは、ステイシア神で

はなく、アドミニストレータ当人だ。そして、封じられているのは、君がこの世界で人間として生まれ育った事だ。」

俺は、そう言つて、一旦言葉を切り、再び紡ぎ出す。

カルム「君の本当の名前は、イーデイス・リデルだ。北部辺境、ルーリッドという小さな村で、アリス、ユージオ、ケントの3人と生まれ育つた。8年前、君はアリスとユージオとケントの3人で、果ての山脈を貫く洞窟に探検をしに行き、そこで、ダークテリトリーとの境界線から、ほんの少しだけ外に出てしまった。つまり、君とアリスが犯した禁忌は、《ダークテリトリーへの侵入》。」

そう語り終わると、イーデイスは、頭を抑えながら、呟く。

イーデイス「イーデイス・リデル……。それが、私の、名前……。？ルーリッド……。果ての山脈……。思い出せない……。しかも、アリスと一緒に禁忌を犯した……。？」

カルム「無理に思い出そうとするな、エルドリエみたいになるぞ！」

イーデイス「待つて！私は……。知りたい、全てを。」

俺が心配する中、そう言ったイーデイスは、声を震わせながらも、毅然と言う。

その言葉に俺は頷き、イーデイスに関する事を話していく。

カルム「分かった。君のお父さんはルーリッド村長の補佐で、名前はルイス・リデル。」

お母さんの名前は知らないけど、さつき言った通り、妹が1人いる。名前はメアリ・リデル。今もルーリッドの教会で、修道女見習いとして、頑張っているはずだ。」

俺がそう語り終えると、イーデイスが呟く。

イーデイス「アンタ、こんな反逆を企てたのは、どういう理由？」

カルム「最高司祭アドミニストレータの過ちを正して、この世界を守る為だ。」

イーデイス「そう……。だけどね、最高司祭様より私たち整合騎士に与えられた第一の使命は、ダークテリトリからの侵略に対する防衛なのは、事実なのよ。仮に全ての整合騎士をアンタ達が倒し、最高司祭様をも刃にかけたら、その時は、誰が人界を守るの？」

カルム「逆に聞くけど、君は、整合騎士団が万全の態勢で迎え撃てば、ダークテリトリを退けられると、本当に思っているのか？」

イーデイス「……………」

俺の質問に対して、イーデイスは、黙り込んでしまう。

まるで、何かを思い出すかのよう。

イーデイス「……………確かに、騎士長と騎士長補佐も、胸の内には同様の懸念を秘めてたのよ。だけどね、人界には、私たち以外に戦力と呼べる物が存在しない。」

カルム「だが、それはアドミニストレータが望んで作り出した状況だ。最高司祭は、自

分の完全なる支配が及ばない力が人界に生まれるのを恐れた。いざ戦となれば、真つ先に剣を取るべき上級貴族に怠惰で放恣な生活を許した結果、彼らの魂は澱んだ。」

その言葉に、ライオス・アンティノス、ウンベール・ジーゼック、ベル・アバドン、ナツジ・キャンサーが浮かぶ。

それを言うと、連中もある意味では被害者なのだ。

カルム「だが、全てが手遅れじゃない。ダークトリトリの軍勢の侵攻が押し寄せてくるまでに、人界にも、大規模な軍隊を整えれば……。」

イーデイス「出来るわけじゃない！アンタは今言ったばかりでしょ!?この世界の貴族達が、いかに墮落したのかを！」

カルム「確かに、それはそうだ。だが、一部の高等爵家には、そうじゃない人もいるし、下級貴族や一般民にも、この世界を守ろうという意志を持つ人がいる。」

イーデイス「一般民……?」

カルム「そうだ。彼らにこの塔に蓄積されている膨大な武器を全て分け与えて、整合騎士団が磨き上げてきた本物の剣技と神聖術を学ばせれば、一年で立派な軍隊も出来る。だけど、それは実現不可能だ。忠誠心を強制できない軍隊なんて、アドミニストレータにとっては、闇の軍勢と同等に恐ろしいだろう。つまり、結論は、一つ。最高司祭アドミニストレータの絶対支配を打ち破って、残された僅かな時間を最大限に活かし

て、来るべき闇の軍勢の侵攻に対抗できる防衛力を作るしかない。」

この言葉に、俺は大いなる皮肉を感じる。

菊岡は、恐らく自衛隊で、日本の防衛の為に、この世界を創った。

俺は、ケント達が兵器に利用させないと感じているが、兵士として鍛えるように提案しているのも、俺だ。

そう感じていると、イーデイスがミニオンを見ながら語る。

イーデイス「闇の国のミニオンがここにある事。それだけでも、最高司祭様が、私たちを欺いているのは事実ね。」

そこから、しばらくの間、静寂になる。

すると、イーデイスがポツリと呟く。

イーデイス「……………会えるの？」

カルム「え？」

イーデイス「もし、アンタに協力して、封印された私の記憶を取り戻せたら、私はもう一度メアりに、妹に会えるの？」

カルム「……………会えるよ。飛竜を使えば、すぐに行ける。だけど、よく聞いて欲しい。

メアリと再会するのは、君であって、君じゃない。記憶を取り戻した瞬間、君……………整合騎士イーデイス・シンセシス・テンは、消滅する。」

そう、記憶を取り戻した瞬間、整合騎士としてのイーデイスは消えてしまうのだ。すると、イーデイスが呟く。

イーデイス「メアリ。メアリ……………。思い出せない。顔も、声も。でも……………この名前を呼ぶのは初めてじゃない。私の心が覚えてる……………。何度も呼んだ……………。本当なのね……………！私に家族が……………。父と、母と……………そして、血を分けた妹が……………この夜空のどこかに……………！」

そう言つて、泣き出してしまふ。

これを見ると、整合騎士としてのイーデイスがあまりにも不憫に思う。

家族への渴望が、彼女を泣かせているのだ。

それなのに、整合騎士としてのイーデイスを消していいのか……………？

イーデイスは、泣くのをやめ、こつちに向かつて言ってくる。

イーデイス「……………整合騎士は、最高司祭様によって造られたと聞いた時から、そういう事もあるのかなって思ってた。私は、この体を、イーデイス・リデルか、奪つて、6年も不当に占拠しちゃった。盗んだ物は、ちゃんと返さないとね。アンタ達のためにも。」

カルム「……………。」

それは、整合騎士としてのイーデイスの、本当に思つた事なのか？

どうしたら良いんだ……………？

俺が悩む中、イーデイスは語り続ける。

イーデイス「ただ、一つだけお願いがあるの。」

カルム「なんだ？」

イーデイス「この体に、本来のイーデイスの人格を復元する前に、私をルーリッドの村に連れて行って、一目だけでも、メアリの姿を見せて欲しい。それが出来れば、十分だよ。」

カルム「……………分かった。約束だ。記憶を復元する前に、君をルーリッドに連れていく。」

イーデイス「絶対よ？」

イーデイスはそう呟いて、凜とした表情を浮かべる。

イーデイス「それじゃあ、人界と、そこに暮らす人々を守る為、私、イーデイス・シンセシス・テンは、整合騎士の使命を捨て……………あつ……………!!」

毅然たる宣言が、鋭い悲鳴に変わる。

イーデイスは、体を仰け反らせ、右手で右目を抑える。

カルム「イーデイス!？」

イーデイス「カルム……………!目が……………!」

カルム「見せてくれ！」

イーデイスの右眼を抑えるのを見て、とある事を思い出した。

それは、ケントとユージオが、禁忌目録を破った際に、右眼が吹き飛んだ事だ。

つまり、同様の現象……………！

イーデイスの右眼には、【SYSTEM ALERT : CODE871】という言葉

葉が浮かんでいた。

やはり、ラースの中に、裏切り者がいるのだ！

すると、イーデイスが言葉を放つ。

イーデイス「右目が……………焼ける……………！それに、文字が見える……………!？」

カルム「何も考えるな！頭を空っぽにしろ！君に起きている現象は……………多分この世界の思惑から外れた、もしくは逸脱した行動を起こさせないための心理障壁みたいなものだ！そのままその思考を続ければ、目玉が吹っ飛ぶぞ！」

俺の言葉に、イーデイスは眉を寄せ、か細い声を出す。

イーデイス「酷い……………こんな……………。記憶、だけじゃなく、意識すらも、誰かに操

られるなんて……………これを……………この赤い神聖文字を、私の眼に焼き付けたのは

……………最高司祭……………様なの……………!？」

カルム「いや、違う。この世界を創り、外側から観察している存在……………創世記には

登場しない神達の1人がした事だ。」

イーデイス「神……………？私たち整合騎士が、神の創った世界を守る為、無限の日々を戦い続けても……………神は信じてくれないの？私から家族の、妹の記憶を奪って……………その上この様な封印を施して、服従を強要するなんて……………私は、人形じゃない！」

イーデイスは、黒雲の隙間に浮かぶ青白い月を凝視しながら叫ぶ。

イーデイス「確かに私は、造られた存在かもしれない！でも、私にも意志はあるの！私はこの世界を……………世界に暮らす人々を守りたい！それが私が果たすべき、唯一の使命よ！」

カルム「イーデイス……………！」

イーデイス「カルム……………私をしつかり抑えてね……………！」

カルム「……………ああ！」

俺は、イーデイスの頼みを受け入れて、イーデイスを優しく抱きしめる。

呼吸を整えたイーデイスは、叫ぶ。

イーデイス「最高司祭アドミニストレータ……………そして名を持たない神！私は、私の成すべき事を成すために、アンタと、戦う!!」

凜と響いた、独立宣言。

その余韻が消えないうちに、イーデイスの右眼が吹っ飛んだ。

第38話 記憶の迷路

ケントside

ケント。

ケント……………。

どうしたの？

怖い夢でも見たの……………？

そんな声が聞こえたと思ったら、柔らかい音を立てて、ランプに光が灯された。

俺は廊下に立っついていて、突然聞こえてくる声が気になり、少しだけ開いた扉から、部屋の中を覗く。

その中には簡素なベッドが二つあり、右側には誰も居なかったが、左側のベッドには、ほっそりとした人影が見えた。

すると、その人影がまた語る。

??? 「そこは寒いでしょう。さあ、こっちにいらっしやい、ケント。」

そう言っつて、ふわりと持ち上げられた上掛けの奥は、温かそうだった。

俺は、定まらない足取りで、ふらふらとベッドに向かう。

近づくほどに、どういう訳か、ランプの光が弱まって、ベッドに寝そべる女性の顔は忍び寄る暗がり隠れる。

だが、そんな事は気にせずに、ベッドへと向かう。

女性の元に着くと、女性に抱き寄せられる。

ケント「母さん………なのか………?」

???「そうですよ。お前のお母さんですよ、ケント。」

ケント「母さん………。」

俺がそんな風に眩く中、とある疑問がふと現れる。

それは、母さんは、こんなにほっそりして、柔らかかったのか?

毎日麦畑で働いているはずの両手に、傷ひとつないのか?

それに、父さんに2人の兄さんはどこに行っただ?

ケント「本当に………あなたは、俺の母さんなのか?」

???「そうですね、ケント。あなた1人だけのお母さんですよ。」

ケント「だが、父さんはどこだ? 兄さん達はどこに行っただ?

???「うふふ。おかしな子ね。皆、お前が殺してしまったじゃないの。」

突然、指が滑り、目の前に持ち上げた手先を見る。

すると、10本の指から、真っ赤な血が滴っていた。

ケント「……………ああああああ!!」

俺は、絶叫しながら起き上がる。

べたつく両手を、上着に擦り付けるが、血ではなく、汗だった。

悪夢を見たのか。

ルナリア神も、随分な悪夢を見せてくれたものだな。

隣を見ると、ユージオが大声を上げながら起き上がっていた。

ケント「ユージオ!」

ユージオ「あ……………ケント……………」

ケント「ここは、どこだ?」

ユージオ「分からない……………。多分、あの元老長つて奴に連れ去られて……………」

ケント「という事は、ここは最上階なのか。剣がないな……………」

どうやら、俺たちは気絶して、あの元老長チユデルキンという奴に攫われたという事か。

剣がない事に、これほど心細くなるなんてな。

周囲を見渡すと、外周の柱には、武器が飾られていて、天井を見ると、創世記の絵物語が描かれていた。

だが、創世神ステイシアの姿が、純白に塗り潰されていて、何とも言えない虚無感が、

絵全体を支配している。

後ろを向くと、これまた巨大なベッドが鎮座していた。

ケント「……………!?!」

ユージオ「巨大な……………ベッド……………?」

中を覗くと、人がいた。

恐らく、敵だろう。

このまま脱出するべきかと思ったが、人影の正体を知りたいという欲求が勝り、ベッドへと向かっていく。

それにしても、随分と大きいな。

最高級の羽毛なら、一体何羽分の家鴨の羽を使ったのだろうか。

そう思いつつも、女性の顔を見ると、俺は驚愕した。

人とは思えないくらい、美しいのだ。

俺はいつの間にか、考える事を放棄した。

今はただ、この人に触れてみたい。

あと少しで届く時に。

『いけい、ユージオ、ケント!』

『逃げて!』

ずっと遠くで、誰かが叫んだ気がした。

どこかで聞いた様な声だな……………。

そう考えていると、思考力が蘇る。

そうだ、俺は何をしていたんだ。

今、目の前に眠る人は、公理教会最高司祭、アドミニストレータだ。

どうやら、ユージオも正気になった様だ。

その最高司祭が、今、寝ている。

ユージオ「ケント……………」

ケント「ああ。今なら、きつと勝てる。……………この短剣を使えば……………！」

ユージオ「でも、その短剣は、アリスとイーデイスに使う筈だろう？」

ケント「……………ッ！」

そうだ。

確かに、この短剣を使えば、アドミニストレータを倒せる。

だが、本来、イーデイスとアリスに使う物だ。

どうすれば……………！

た。答えの出せない迷いに囚われて、悩んでいると、また不思議な声が聞こえた、気がした。

『ユージオ……………ケント……………!』

『逃げて……………』

だが、あまりにも遠いその声が、俺たちの意識に届くよりも早く、アドミニストレータが動き出す。

瞼が徐々に持ち上がっていく。

つまり、目を覚ましてしまったのだ。

だが、そんな事を考えるのを最後に、思考力が再び散り散りになる。

アドミニストレータは、欠伸をした後、俺とユージオを見つめる。

すると、声が放たれる。

アドミニストレータ「可哀想な子達。」

ユージオ「え……………?」

ケント「可哀想だと……………?」

アドミニストレータ「そうよ。とっても可哀想。あなた達はまるで、萎れた鉢植えの花。土にどれだけ根を張ろうと、風にどれだけ葉を伸ばそうと、一雫の水にさえ触れない。」

ユージオ「……………鉢植えの……………花……………?」

ケント「どういう意味だ……………?」

俺とユージオは、眉を寄せ、不思議な言葉の意味を理解しようとする。

少女の言葉には、心に突き刺さる様な痛みを呼び起こす物があつた。

アドミニストレータ「貴方達には分かつている。自分達が、どれほど渴き、飢えているか。」

ユージオ「何に……………?」

アドミニストレータ「愛に。」

ケント「愛だと……………?まるで、俺たちが、愛を知らないみたい……………」

アドミニストレータ「その通りよ。あなた達は、愛されるという事を知らない、可哀想な子達。」

ユージオ「そんな事ない。母さんは……………僕を愛してくれた。」

ケント「怖い夢を見て、眠れない時は、俺を抱いて、子守唄を歌ってくれたんだ！」

アドミニストレータ「その愛は、本当に、あなた達一人の物だったの?違うでしょう?本当は、あなた達の兄弟に分け与えた余り物だったんでしよう……………」

俺たちが反論しても、少女は、分かっていると言わんがばかりに言ってくる。

ユージオ「嘘だ……………。母さんは、僕を、僕だけを愛してくれたんだ……………」

ケント「そうだ。俺だけを……………!」

アドミニストレータ「自分だけを愛して欲しかった。でもそうしてくれなかった。だ

から、あなた達は憎んだの。母の愛を奪う父を。兄達を。」

ケント「俺は……………俺は、父さんや兄さん達を憎んでなんかいない。」

アドミニストレータ「そうかしら……………? だって、あなた達は斬ったじゃない。」

ユージオ「誰を……………?」

アドミニストレータ「初めて自分一人一人を愛してくれるかもしれない、あの2人の女の子。その2人の女の子を力づくで奪い、汚そうとした男を、あなた達は斬った。憎いから。自分だけのものを奪われたから。」

ケント「違う……………。俺はそんな理由で、ナツジとベルに剣を向けた訳じゃない。」

ユージオ「僕だって、そんな理由でウンベルとライオスに剣を向けた訳じゃない。」

アドミニストレータ「でも、あなた達の渴きは癒されない。誰も、あなたを愛してくれない。皆、あなたを忘れてしまった。もう要らないって、捨ててしまったの。」

ケント「違う……………! 俺は、俺は、捨てられてなんかいない……………!」

ユージオ「そうだ……………違う。僕には、アリスがいる。」

ユージオの言葉に、俺も、イーデイスを思い出す。

そうだ、俺にはイーデイスがいる。

これ以上は聞いてられない!

今すぐにも逃げない!

だが、行動に移る前に、蠱惑的な声が頭に入り込んでくる。

アドミニストレータ「本当にそうかしら……？本当にあの子達は、あなた達だけを愛しているのかしら……？あなた達は忘れているの。思い出させてあげるわ。あなた達が心の深い所に埋めてしまった、本当の記憶を。」

そう言つて、俺は深い穴に落ちていく。

すると、ルーリッドの村の光景が映る。

その日、俺とユージオは、アリスとイーデイス、キリトとカルムを探していた。

どこに行つたんだろうな。

すると、いつも集まっている広場に、4人はいた。

どうして……どうしてだよ。

そんな言葉だけが、頭の中で繰り返し返されていく。

すると、4人の声が聞こえてくる。

キリト「なあ……そろそろ戻ろうぜ。バレちゃうよ。」

カルム「確かに。もう午後になるしな。」

アリス「まだ大丈夫よ。」

イーデイス「もう少し……もうちよつとだけよ。」

いやだ、もう、ここには居たくない。

だが、俺の脚は、まるで木の根に絡み付かれたかの様に動かない。

心でどんなに否定しても、この光景が、俺の記憶の奥底から呼び出されたのは、事実という確信が湧き上がり、苦い水となって胸に満ちていく。

アドミニストレータ「ほら………ね？」

その声と共に、セントラル・カセドラルの最上階へと戻ってきた。

だが、あの光景は、中々消えなかつた。

森であの2人と出会ったのは、2年前で、イーデイスとアリスが連れ去られたずっと後のはずだ、という理性の声も、胸に溜まった黒い感情を消せなかつた。

アドミニストレータ「もう分かつたでしょう？あの子達の愛すら、あなた達の物じゃないのよ。ううん………そもそも、最初からあなた達の分はあつたのかしらね？」

その声は、俺の思考を激しく掻き乱す。

すると、俺とユージオの背中にアドミニストレータは体をつける。

アドミニストレータ「でも、私は違うわ、ユージオ、ケント。私があなた達を愛してあげる。決して分ける事もなく、平等に私の愛を全部あげるわ。」

そう言つて、アドミニストレータは、服を脱ぎ出し、俺たちに手を差し伸べる。

アドミニストレータ「あなた達は初めて、愛される喜びを存分に味わうことが出来るのよ。頭の天辺から爪先までが痺れる様な、本物の満足を。あなた達が私を愛してくれ

たら、それと全く等価の愛を返してあげる。深く愛してくれればくれるほど、あなた達がこれまで想像もしなかったような、究極の快樂に誘つてあげるわ。」

俺の思考力は、既に消えかけていた。

心の深奥に残された一欠片の理性が、細やかに抵抗する。

ケント（愛つていうのは……：……：そういうものなのか……：……：？お金と同じ様に……：……：価値で贖う、それだけのものなのか……：……：？）

すると。

ルナ『違いますよ、ケント先輩！』

そんな声がして、視線を向けると、灰色の制服に身を包んだルナが暗闇の向こうから懸命に手を伸ばしていた。

俺がルナに向かつて手を伸ばす寸前に、分厚い漆黒の緞帳が幾重にも降りてきて、ルナは悲しげな瞳の色だけを残して消えた。

すると、次は違う方向から別の誰かの声が聞こえてくる。

イーデイス『違うわ、ケント！愛は決して、何かの見返りに得られる物じゃない！』

振り向くと、そこには、幼いイーデイスが。

イーデイスの方に向かおうとするも、先ほどと同じ緞帳が、イーデイスを消してしま

また、別の誰かの声が。

カルム『ケント!!』

カルムが俺の名前を叫んでいた。

だが、カルムの姿も、緞帳が消してしまう。

もう、耐えられない。

こんな惨めな思いと悔しきは、もう味わいたくないんだ……………!

俺とユージオは、最高司祭の下に向かい、アドミニストレータは、手を取ってくれた。

アドミニストレータ「欲しいのね、ユージオ、ケント? 悲しい事を何もかも忘れて、私を貪り尽くしたいんでしょう? でも、まだダメよ。言っただしよう、まずはあなた達が愛をくれなきゃね。さあ、私の言う通りに唱えなさい。私だけを信じ、全てを捧げると念じながらね。それじゃあ……………まず、神聖術の起句を。」

「システム……………コール……………」

アドミニストレータ「そうよ……………続けて……………《リムーブ・コア・プロテクション》。」

「リムーブ……………」

与えられる命令に身を委ねていると、俺の存在がどんどん軽く、薄くなっていく。

長い間、俺を苛み続けてきた餓えも、渴きも、甘い蜜に溶けて消えていく。

だが、今まで心の中で抱えてきた大切な気持ちもまた、消えていく。

ケント（本当に、これでよかったのか……？）

「コア……………」

虚になりゆく胸の奥で、そんな自問が小さな火花の様に瞬いたが、その答えが見つかる前に、次の式句がこぼれ落ちていた。

だが……………もう、悲しいのは、辛いのもう嫌なんだ。

もし、イーデイスが元に戻っても、拒絶されるのは耐えられない。

そんな事になるなら、立ち止まってしまった方が良い。

3つ目の式句を唱えた時、これまでの旅路が完全に途切れるのは、臆げに理解できた。だが、そうなる事で、辛く悲しい過去を忘れられるなら、それで良い気がする。

アドミニストレータ「そうよ……………さあ、いらっしやいユージオ、ケント。私の中へ。永遠なる停滞の中へ……………」

「プロテクション……………」

最後の一言を、涙と共に囁いた。

そこで、意識が途絶えた。

第39話 2人の騎士の決意

カルム side

俺は、右目の封印を突破したイーデイスを背負い、カセドラルの外壁を登っていた。

イーデイスはあの後、気絶してしまったので、俺の出来る限りの神聖術で止血して、俺のシャツの裾を千切って、即席の包帯をイーデイスに巻いた。

そんな事をしている内に月が昇ってきたので、登る作業を再開する。

正直言つて、闇斬剣と鎧は置いていきたかったが、イーデイスの決意を無駄にはしない為に、腹を括った。

2時間が経つて、漸く95階の暁星の望楼へと辿り着いた。

カルム「おりやああああ！」

その掛け声と共に大理石の角に右足を引っ掛けてよじ登ると、水平な床面へと突っ伏す。

マジで疲れた……………。

俺は、誰が文句を言おうと、絶対に寝っ転がると決意して、のんびりしていると、背中の上の整合騎士が、呻き声を出す。

イーデイス「う……………ううん……………。ここは……………暁星の望楼……………？私……………どう……………。」

イーデイスはそう呟いて、起きあがろうとするが、すぐに鎖が張り詰めて、イーデイスは起き上がるのをやめる。

イーデイス「カルム……………アンタ、まさか、私を背負って……………ここまで……………？」
カルム「そうだよ。……………つたく、大変だったんだぞ。少しは感謝して……………何してんの？」

俺は、そう独りごちるが、イーデイスは俺に向けて手を向けていた。
すると、イーデイスが何かに気づいた様に叫ぶ。

イーデイス「いやだ、アンタ、汗びつしよりじやない……………ハッ！私の服に染みが……………！早く離れなさいよ！」

カルム「んだと……………!?うわっ！」
「イツテ!!」

人が運んだのに文句を言うイーデイスに対してキレかけた時に、後頭部をどつかれ、俺は額を床の大理石に頭をぶつける。

すると、もう一人叫んだ人がいるようで、チラリと見ると、キリトがアリスを連れていた。

俺とキリトは、急かされつつ鎖を解いて、背中に乗っていた整合騎士を下ろす。

キリト「ひでえよ……………。あんまりだ…………。」

カルム「同感…………。」

アリス「イーデイス殿も、最高司祭殿に反逆するのですね。」

イーデイス「うん。ルーリッドの村に居る、本当の妹に会いたいしね。」

俺とキリトが、額を摩りながら、嘆いている中、アリスとイーデイスが話していた。

まさか、キリトの奴も、アリスの右目の封印を突破する事を助けるとはな。

すると、アリスとイーデイスがこちらを見てくる。

アリス「お前の仲間は。」

キリト「えっ？ユージオとケントの事か？」

イーデイス「そのユージオとケントは、どこに居るのかしら。あの後、雲上庭園から

大階段を登ったとすれば、この暁星の望楼まで到達する以前に、最強の相手と遭遇した

はずよ。」

カルム「最強の相手？」

アリス「小父様……………騎士長ベルクラーリ閣下と騎士長補佐、リヨウガ殿です。」

そうだ。

その2人が残っていたな。

確かに、あの2人は、ひよっとしたら、俺たちよりも強いかもしれない。

だが、上位整合騎士には、技術だけでなく、周囲の状況を利用してでも戦わなければ、勝てない。

なら、急いだ方が良さそうだな。

すると、キリトは、術式を唱える。

キリト「システム・コール！ ジェネレート・アンブラ・エレメント。アドヒア・ポゼツシヨン。オブジェクトID、W L S S 7 0 3。デイスチャージ。」

アリス「何をしているのですか？」

カルム「なるほど。闇素を使って、青薔薇の剣の位置を探るんだな。」

イーデイス「なるほどね。」

しばらくすると、闇素は、ふわふわと浮遊して、床に触れて消える。

キリト「……………下だな。」

アリス「そのようですね。」

カルム「急ごう。」

イーデイス「待ちなさい。」

俺たちは、下へ向かおうとすると、イーデイスが声をかける。

アリスも、聞きたい事があるそうだ。

カルム「ん？」

アリス「私の右目はキリトが、イーデイス殿の右目はカルムが？」

キリト「ああ……。何とか止血は出来たけど、俺の神聖術じゃ、それが限界だった。」

カルム「右目、治せそうか？」

イーデイス「そうね……。失われた右目を復元するには、空間神聖力が足りないわね。」

アリス「痛みはまだ残っていますし、右側の視界も制限されますが、どちらも戦えないほどの問題ではありません。暫くは、このままでも構いません。」

カルム「だが……。」

イーデイス「大丈夫よ。それに、もう少しだけ感じたいの。公理教会と戦う事を決意した証である、この痛みを。」

キリト「……。分かった。なら、戦闘の時には俺たちが支えるよ。」

そう決まり、イーデイスとアリスを先頭に、下へと向かっていく。

下へと向かっている中、俺はキリトと話をしていた。

カルム「キリト。」

キリト「ん？」

カルム「アリスも、真実を受け入れたのか？」

キリト「ああ……………」

カルム「そうか。……………でも、整合騎士としての2人が、あまりに不憫に思えてさ。」
キリト「そうだよな……………」

カルム「うん……………」

そう、記憶を取り戻したら、整合騎士としての2人は消滅してしまうのだ。

そんな事を考えていると、大きな扉の前に到着して、アリスとイーデイスの2人が扉を開くと、大浴場であるのは分かるが、お湯が全て凍っていたのだ。

俺たちが唾然となっていると、何かを踏んづけた。

それは、氷の薔薇と、黄金の鎖だった。

その二つは、見覚えがある。

これは……………」

キリト「ユージオにケント……………」

アリス「これを引き起こしたのは、ユージオとケントなのですか？」

カルム「ああ。氷の方は、ユージオの青薔薇の剣、鎖は、ケントの雷鳴剣黄雷の武装完全支配術だろうな。」

イーデイス「それにしても、凄まじいわね。あつ……………」

すると、イーデイスとアリスが何かに気づいたのか、駆け出していく。

俺とキリトは、ケントとユージオでない事を確認した。

つまり、アレは、ベルクーリとリヨウガなのだろう。

だが、その2人は、石となっていた。

アリス「小父様……………」

イーデイス「騎士長に、リヨウガまで……………!？」

キリト「これは……………」

カルム「ケントとユージオの技じゃない。」

呆然と呟く俺たちに、イーデイスとアリスは頷いた。

イーデイス「私もそう思うわ。以前、騎士長とリヨウガに聞いたのよ。元老長は、あらゆる人間を石に変えてしまう権限があるって。その中には、整合騎士も含まれて、術式の名前は、ディーブ・フリーズって言ったはずよ。」

カルム「ディーブ・フリーズ……………」

キリト「じゃあ、この2人にその術を掛けたのは、仲間の筈の元老長か?でもどうしてそんな事を……………?」

アリス「……………小父様とリヨウガ殿は、元老院から下りてくる指示に、密かな疑念をお持ちのようでした……………。しかし、公理教会による統治なくして人界の平和は有り得ないと信じ、これまで永劫の日々を戦ってこられたのです。元老長に如何なる権限があ

ろうとも、このような……このような仕打ちを受ける謂れはありません、断じて!!
そう言つて、アリスはベルクーリに縋り付く。

元老長つて奴は、碌でもなさそうだな。

俺とキリトとイーデイスは、泣くアリスを呆然と見ていた。

すると、石にヒビが入る音がした。

俺は驚いて、2人を見ると、ベルクーリとリヨウガにヒビが入っていた。

ディーブ・フリーズという名称から察するに、そのコマンドは、アンダーワールド人の活動を肉体のみならず、精神まで完全停止するものだと思う。

だが、この2人は、意志の力で打ち破ろうとしていた。

イーデイス「騎士長……リヨウガ……」

アリス「やめて、もうやめて!体が壊れてしまうわ!小父様!!リヨウガ殿!!」

アリスが涙混じりの声で叫ぶ。

だが、2人は神への反逆をやめず、遂に2人は目を開く。

ベルクーリ「……よう、アリスにイーデイスの嬢ちゃん。そんなに泣くんじゃねえ

……美人が台無しだぜ。」

アリス「小父様……!!」

イーデイス「大丈夫なの……!?」

リヨウガ「俺たちが、こんな術式一つで、くたばってたまるか。それより……………」
ベルクーリとリヨウガは、言葉を止め、アリスとイーデイスの顔を見て、慈愛に満ちた笑みを浮かべる。

リヨウガ「そうか……………。アリスにイーデイス、遂に……………壁を、越えたのだな。この俺たちが……………300年かけて、破れなかった、右眼の封印を……………」

イーデイス「リヨウガ……………」

ベルクーリ「イーデイスの嬢ちゃんに、アリスの嬢ちゃんも、そんな顔……………すんじやねえ。俺は……………嬉しいんだ、ぜ……………。これで、もう……………俺が2人に、教えることは……………何もねえ……………」

アリス「そんな事……………そんな事ありません!!小父様とリヨウガ殿には、教わりた
い事が……………!」

リヨウガ「2人なら、出来る。公理教会の過ちを正し、この歪んでしまった世界を、あ
るべき形へ……………導く事が……………」

2人の声が、力を失いつつあった。

つまり、意志力が限界に達しようとしていたのだ。

すると、ベルクーリとリヨウガの目が、俺たちをまっすぐ見つめる。

ベルクーリ「おい、小僧ども……………。アリスとイーデイスの嬢ちゃんを……………頼んだ

ぞ……………」

キリト「分かった。」

リョウガ「……………」お前達の相棒は……………元老長、チュデルキンが……………連れて行つた。恐らく……………最高司祭殿の、居室だ……………。急げ、あの2人の坊やが、記憶の迷路に……………惑わされる前に……………」

その言葉を最後に、2人の整合騎士は、物言わぬ石像へと戻つた。

アリスは、ベルクーリを抱きしめ、イーデイスはリョウガの前に膝をついていた。

その間に、俺たちは考えていた。

つまり、2人は相打ち覚悟で戦つたが、チュデルキンなる人物に攫われたようだ。

2人が居たであろう所が、鋸で切断したかのように綺麗に穴が開いていた。

更に近くには、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷が埋められていた。

俺とキリトは、黒い剣と刃王剣十聖刃に力を込めて、氷にヒビを入れる。

キリトは青薔薇の剣を、俺は雷鳴剣黄雷を回収する。

すると、アリスとイーデイスがこちらを見る。

アリス「……………」剣を2本持つ酔狂者は、格好をつけたいだけの上級貴族と相場が決

まっています……………」

イーデイス「なんか、アンタ達、妙に様になつてるじゃない。」

キリト「ん？そうかな……………」

カルム「そうだね……………」

俺としては、異種の二刀流で、SAOに旧ALOを戦い抜いた訳だが、少し落ち着かない。

鞆も回収して、右側に装備する。

この剣は、ルナが手を血だらけにしても運んできたんだ。

今度は、俺がケントに届ける番だ。

アリス「どうやら、ユージオとケントは既に、最高司祭様に囚われてしまったようですね……………」

イーデイス「急いだ方が良さそうだね。あの人の行いは、人の考えが及ばないからね。」

カルム「話した事があるのか？」

アリス「一度だけ。」

イーデイス「もう6年前になるわね。整合騎士見習いとして過去の記憶を全て失った状態で目覚めた私とアリスは、最高司祭様と対面したのよ。」

アリス「ですが、あの目……………あらゆる光を跳ね返す、鏡の様な銀色の瞳……………。そう、今なら分かります。あの時、私たちは最高司祭様を深く恐れた。決して逆らっては

ならないと思わせたのは、圧倒的なまでの恐怖……だったのでしょうか、きつと。」

キリト「アリス……イーデイス……。」

イーデイス「大丈夫よ。私達、決めたの。ルーリッドので暮らす妹の為に……まだ見ぬ家族、そして多くの民の為に、正しいと信じる事を行うって。」

アリス「さあ、急ぎましょう。事によると、最高司祭様と相對する前に、元老長と一戦交える必要があるかもしれませんから。」

カルム「おい、騎士長さんとリョウガは、あのままにしていいのか？」

2人はそう決意した表情で上へと向かおうとするが、俺はそう尋ねる。

すると、イーデイスが代表で答える。

イーデイス「元老長を吊上げて術を解除させるか……或いは斬り捨てればそれで終わるでしょ？」

その言葉を聞いて、俺は改めて、イーデイスを敵に回したくないと思った。

今度は、暁星の望楼へと戻っていく。

俺とキリトが、神器2本分を持っているせいで息を荒げているのに対して、アリスとイーデイスは平然としている。

2人は、次層へと続く階段を見ていた。

俺たちは、気になる事があるので、聞いてみることにした。

キリト「なあ………。さつきから、元老長チユデルキンって名前が出てるけど、そもそも元老って連中はどういう奴らなんだ？」

アリス「実の所……。私たち整合騎士にすら、元老達の全容については知らされてないのです。」

イーデイス「九十六階から上には、元老院という区画があるんだけど、騎士はそう簡単には立ち入れないのよ。」

カルム「そもそも、元老の仕事は何なんだ？」

アリス「禁忌目録です。人界に暮らす全ての民が、禁忌目録を遵守している事の確認と監視。それが元老の仕事です。」

イーデイス「そして、禁忌に触れる者が現れた場合には、整合騎士を派遣して、事態の收拾に当たらせるのよ。」

つまり、元老は、アドミニストレータの仕事を代行している様なものか。

だが、用心深いアドミニストレータが、よくそんな権限を与えたな。

そして、戦術を立てる事にした。

アリス「元老達は、武器を使った近接戦闘力こそ、一般民と大差ないはずですが、神聖術の行使権限は、我々整合騎士を上回ります。」

イーデイス「例え、空間神聖力が薄くても、薔薇園で収穫される触媒結晶を使って、ほぼ無限に遠隔攻撃をしてくるからね。」

キリト「そういう、相手には……不意打ちからの接近戦と、相場が決まってるな。」
カルム「確かに。だが、何人居るのかも重要になってくるな。」

その後、不意打ちに失敗した場合には、俺とアリスの武装完全支配術を使って、元老達の神聖術を防ぎ、キリトとイーデイスが突入する算段となった。

何せ、俺の武装完全支配術は、やろうと思えば、聖剣を召喚して、様々な場面に対応できるからな。

アリス「あと、存分に暴れて構いませんが、元老長チユデルキンだけは生かしておいて下さい。」

イーデイス「確か、色鮮やかな青と赤の道化服を着た男よ。」

カルム「威厳がないな。」

アリス「だからと言って、侮ってはなりませんよ。教会内でも、最高司祭様に次いで神聖術に秀でていますから。」

キリト「ああ、分かってるよ。そういう一見小者っぽい奴が、実は一番厄介だったりするのがクエストのお約束だからな。」

イーデイス「クエ………何?」

俺は、変な事を口走ったキリトを、強めに突いて、黙らせて、階段へと向かっていく。遂に、最高司祭アドミニストレータとの最終決戦が近づいているのだ。負けてられない。

ケントとユージオを助ける為にも。

第40話 シンセサイズ

カルム side

俺たちは、元老院の手前のドアにやって来た。

だが、やけに通路が薄暗い。

通路の幅は、約1メートル半といった所か。

キリト「……………ここが、さっき2人が言っていた元老院なのかな？」

アリス「そのはずですが……………」

イーデイス「ま、入ってみれば分かるわよ。」

カルム「そうだな。」

一応、トラップの類が無いが警戒しながら進んでいったが、特になかった。

それもそのはずだ。

まさか、こんな所に侵入する奴なんて、俺たちが初だろう。

するとドアが目の前に現れて、俺たち4人は顔を見合わせて、キリトがドアを開ける。途端に、奥の薄闇から冷たい空気が流れ込んでくる。

その空気には、アインクラッド迷宮区のボス部屋のドアを開けた様な重苦しさを感じ

た。

キリトはドアを開け、俺たちが続いて中に入っていく。

その先の通路は、仄かな紫色の光源がちらちらと瞬いていた。

すると、何か呪詛じみた声が耳に届く。

しかも、数十人もの。

アリス「神聖術だわ。」

カルム「まさか、不意打ち!?!」

イーデイス「待って。神聖術にしては、ジェネレート句が無いわ。」

キリト「確かに……………」

アリス「踏み込みましょう。こちらと関係ない大型術式を詠唱しているのなら、逆に好都合です。」

イーデイス「確かに、これだけ暗ければ、この声に紛れて剣の間合いに近づけるわね。」

キリト「そうだな。予定通り、俺とイーデイスが先行するから、2人は援護してくれ。」

カルム「了解。」

そう言つて、俺たちは各々の剣を抜刀する。

正直に言うとな、刃王剣十聖刃の武装完全支配術も、あと一回が限界だろうな。

どうにかしたいな。

俺たちが広間に近づいていくと、何か変な匂いがしてくる。

その匂いは、まるで食べ物が饅えたような匂いだ。

俺たちは、元老院であろう空間へと入っていく。

広いと思つたが、高いな……………。

構造的には、カーディナルとユーリの拠点である、あの大図書館に似ている。

ランプの類は存在せず、光源は、壁のあちこちから瞬く紫色の光だけだ。

何か、丸い物が等間隔に並んでいるが、よく分からない。

すると、新たな光が生まれた。

淡い紫色に光るのは、ステイシアの窓だ。

そして、その奥に存在する球体は、人間の頭だった。

という事は、丸い物全てが……………。

キリト「……………な、生首……………?」

アリス「いえ、体は付いているようですが……………」

イーディス「何だが、壁から生えているみたいね。」

カルム「薄気味悪いな……………」

確かに、よく見ると、ちゃんと首と肩があつたが、見えたのはそこまでだ。

どうやら、あの箱に体がすっぽりと収納されているみたいだな。

あまり快適じゃなさそうだな。

そう思っていると、声がしてくる。

元老「システム・コール……………デイスペレイ・リベリング・インデックス……………」

その声を聞くと、とある事を思い出した。

そう、俺たちは、コイツに会った事がある。

キリト「こ……………こいつらは……………あの時の……………!？」

アリス「知っているのですか!？」

カルム「ああ。ベル達と戦った直後に、部屋の隅に窓みたいなのが現れて、その奥から、コイツが覗いてた……………」

イーデイス「彼らの唱えている術式……………全く聞き覚えがないけど、どうやら、人界を細かく区分けして、何かの数値を測ってるみたいね。その数値が何かは分からないけど。」

イーデイスのその言葉が終わると同時に、何かのブザーが鳴った。

俺たちは反射的に剣を握り直したが、バレた訳では無いようだ。

コマンドの詠唱をやめた元老達が、真上に顔を向けたからだ。

よく見ると、頭上の壁には、何か蛇口のような物が突き出していた。

元老達が口を開けると、茶色の液体が流れ出す。

元老達は、それを機械的に飲み下していく。

しばらくすると、流動食の供給が止まり、元老達は前を向いて、詠唱を再開する。

これは、人間に対する扱いじゃない。

いや、例え牛や羊にだって、こんな仕打ちは許されるはずがない。

これは、彼らの人間としての尊厳を奪っているのだ。

すると、アリスとイーデイスが掠れた声を出す。

アリス「彼らが……人界を治める公理教会の、元老だというのですか……!?」

イーデイス「この光景を作り出したのは、最高司祭様なの……!?」

キリト「ああ……そうだろう。」

カルム「恐らく、人界のあちこちから拉致してきた人間の内、神聖術に秀でた者の感情や思考を封じて、元老という名の監視装置に作り替えたんだ……!」

そう、これは、単なる監視装置としか言えないのだ。

人界全土が、公理教会の統治の下、完璧な平和……もとい停滞を維持している事を監視する為の。

元老達の悲惨さは、大切な者の記憶を奪われる整合騎士よりも悲惨だ。

アドミニストレータの治世は、そんな犠牲の上で成り立っているのだ。

すると、アリスとイーデイスが俯き、声を出す。

アリス「……………許せない。」

イーデイス「ええ。」

すると。

???「ああっ……………あぁーっ！」

カルム「!？」

誰かの金切り声が出て、そっちの方向に向く。

どうやら、誰かが叫んでいるようだ。

俺たちは、その金切り声のする方向へと進んでいく。

通路を進んでいき、その先の部屋を覗く。

中は、奇怪という言葉が相応しい部屋だった。

何せ、あらゆる調度が、下品な金色に光っているのだから。

そして、セントリア五区にある玩具屋をそのまま持ってきたかのような大量の玩具で溢れかえっていた。

その中に、何かが動いている。

???「ホオオオオオッ!!ホオオオオオッ!!」

カルム「誰だあれ？」

キリト「もしかしてあいつが……………?」

アリス「ええ。」

イーデイス「あいつが、元老長チュデルキンよ。」

アイツがチュデルキンか。

どうやら、両手に抱えた何かに意識を完全に奪われているようだな。

チュデルキン「いけません！これは！いけませんよお!!」

うるさいな。

そう思っていると、アリスとイーデイスがチュデルキンの背後に立つ。

その顔は、まるでゴミを見るかのような表情だった。

チュデルキン「ホオオツ!!」

アリスがチュデルキンを吊り上げ、イーデイスが闇斬剣をチュデルキンに向ける。

その間に、俺が周囲を見渡すが、ケントとユージオは居ない。

硝子玉には、全裸の少女が映り込んでいて、チュデルキンが奇声を発した理由を納得

する中、誰か他の人が映ったような気がしたが、消えてしまった。

イーデイスは、闇斬剣をチュデルキンに突きつけて放つ。

イーデイス「術式起句を唱えようとしたら、その舌を根本から斬り飛ばすからね。」

チュデルキン「ホヒツ!!お前ら………三十号に十号………!なんでこんな所にいるン

ですよ!!? 2人の反逆者と一緒におつ死んだはずですよ!!」

アリス「私たちを番号で呼ぶな！私の名はアリス、彼女はイーデイス。そしてもうサーティでもテンでもありません。」

イーデイスとアリスに、チュデルキンは脂汗塗れの顔を引き曇らせ、そこで俺たちの存在に気がつく。

チュデルキン「おまつ、お前らつ、なんでどうして!?…………騎士アリスに騎士イーデイス、なぜこの小僧どもを斬らないんですよウ!?コイツらは教会への反逆者…………ダークテリトリーの手先だと言ったじゃないですか！」

アリス「確かに、彼らは反逆者です。」

イーデイス「でも、闇の国の尖兵なんかじゃない。今の私たちと同じように。」

アリスとイーデイスの言葉を聞いたチュデルキンは、激怒した。

チュデルキン「なっ……………なっ……………裏切る気かあああつ！この糞騎士風情共があああつ!!てめえら整合騎士は単なる木偶です！アタシの命ずるまんま動く操り人形だアア!!」

アリス「我らを人形にしたのは、公理教会でしょう。」

チュデルキン「なっ……………!?!」

イーデイス《シンセサイズの秘儀》によって記憶を封印して、天界から召喚された騎士なんていう嘘を信じさせたからね。」

その言葉を聞いたチュデルキンは、顔色が赤と白を行き来して、最終的に卑しい笑みを浮かべる。

チュデルキン「ええ……その通りですよ。アタシは今でもくつきりと思い出せませんよウ？ 幼く、無垢で、可愛らしいお前らが、涙を流しながら懇願するさまを……。『お願い、忘れさせないで……私たちの大切な人たちを忘れさせないで……』とね、ホホホ！」

醜悪な裏声で少女の口真似をするチュデルキンに、アリスとイーデイスの眼が、高温の炎を思わせる光を帯びた。

それを見ても、チュデルキンは挑発をやめなかった。

チュデルキン「アタシヤ今でもあの光景を肴に一晩たつぷり楽しめますよ！どこぞの糞田舎から連れて来られたお前らは、まず二年間、修道女見習いとして育てられた。生活規則の抜け穴を見つけて、セントリアの夏至祭を見に行くようなお転婆でねえ。それでも一生懸命に勉強すれば、いつかは故郷に帰れると信じてる頑張ったんですよねエ。……でもね、そんなわきやねえんだ。神聖術行使権限がたつぷり上がった所で、来ました、強制シンセサイズ！二度とお家に帰れないと知った時の、お前らの泣き顔つたらもう……そのまま石に変えて、アタシの部屋に永遠に飾っておきたかつたくらいですよオオツ！」

悪辣極まるチュデルキンの発言には、俺も怒りが湧いてくる。

こんな奴に、アリスとイーデイスは揶揄われているのだ。

これが、人界の神聖術のトップとは信じたくなかった。

アリスとイーデイスは、何とか堪えて、チュデルキンに問いたです。

アリス「お前、今妙な事を言いましたね。強制シンセサイズ、と。」

イーデイス「まるで強制じゃないシンセサイズの儀式があるような口振りじゃない？」

チュデルキン「案外と耳ざといですねエ。その通りですよ？六年前のお前らは、通常のシンセサイズに必要な、内緒の術式を唱える事を拒みましてね。」

確かに、子供のイーデイスとアリスなら言いそうだなと、俺は当時の2人を知らないのに、納得していた。

チュデルキンは、当時の2人を思い出したのか、忌々しげに吐き捨てる。

チュデルキン「全く糞生意気なガキどもでしたよウ。そこで仕方なく、自動化元老どもの任務を一時停止して、お前らのだあーいじな物を守る壁を術式でこじ開けさせたんですよ。ま、そのおかげで、滅多にない見せ物をたっぷり楽しめましたけどねエ！」

チュデルキンの発言には、更に怒りが湧いてきたが、幾つか違和感を感じた。

何故、アイツは教会の中枢に関わるであろう秘密をベラベラと喋る？

命が惜しいなら、2人を挑発する必要性はない。

すると、チュデルキンの目が、小刻みに揺れている事に気づく。

キリトも気づいたようだ。

カルム「キリト。」

キリト「ああ。アイツは、何かを待っている。何かの時間稼ぎか?」

俺たちはそう話して、イーデイスとアリスに伝えようとするが、2人が早く動く。

アリス「元老長チュデルキン。お前は己の境遇を存分に楽しんでください。ならば、もはや思い残す事はないでしょう。」

イーデイス「私達も、アンタの話はもう聞き飽きたのよ。」

アリスとイーデイスは、躊躇なくそれぞれの剣をチュデルキンに突き刺す。

すると、チュデルキンがニヤリと笑い、服が膨らんで破裂する。

そして、真っ赤に着色された煙がこの部屋一帯を包む。

キリト「何っ……!?!」

カルム「煙幕か……!?!」

アリス「えっ……!?!」

イーデイス「嘘……!?!」

チュデルキン「ホヒイツ!!ホヒーツ!ヒツヒツヒツヒツ!!」

煙を吸い込むと、喉を針で突かれるような痛みにも襲われる。

すると、チュデルキンの罵倒の声が聞こえる。

チュデルキン「術式ばかりが芸じゃねえんですよバーカ！バーカ！！」

カルム「ガキか！！」

イーデイス「追うわよ！」

アリス「チュデルキン……………！」

キリト「お、おい！」

俺たちは、箆笥の奥に隠されていた通路に入っていく、チュデルキンを追う。すると、チュデルキンの声が聞こえる。

チュデルキン「システム・コール！ジェネレート・ルミナス・エレメント！」

カルム「あと少しで階段が終わる！」

アリス「神聖術の不意打ちに気をつけて！」

キリト「了解！」

イーデイス「飛び出すわよ！！」

俺たちは、階段から飛び出すのが、誰もいない。

俺たちは顔を見合わせる。

アリス「詠唱が聞こえたはずですが……………」

イーデイス「チュデルキンは、百階に逃げたみたいね。」
キリト「でも、階段が無いぞ。」

カルム「なあ、天井に穴が開いてるぞ。」

俺が指し示した先には、穴が開いている天井が。

俺たちが穴を見ると、誰かが降りてくる。

しかも、2人だ。

キリト「まだ整合騎士が残ってたのか？」

カルム「みたいだな。」

イーデイス「でも、あんな鎧の整合騎士って、居たかしら？」

アリス「確かに……………」

片方は青みがかった銀色で、もう片方はアリスとは違う色合いの金色だった。

その整合騎士の髪の色は、亜麻色と茶色だった。

その刹那、俺とキリトに、戦慄が走った。

あの髪の色は、間違えるはずがない。

混乱する中、2人の整合騎士は顔を上げる。

あの2人の青年は……………」

キリト「……………ユージオ……………!!」

カルム「……………ケント……………!」

そう、ユージオとケントだった。

俺とキリトがルーリッド村で出会ってからずっと行動を共にしていた相棒にして親友。

だが、その顔は、氷の無機質さを思わせるような顔だった。

イーデイス「まさか……………」

アリス「早すぎる……………!」

キリト「早いつて何が!？」

アリス「儀式の完了が、です。」

カルム「まさか……………!」

イーデイス「ええ。ケントとユージオは、既にシンセサイズされてるわ。」

キリト「嘘だ……………」

カルム「何で……………!？」

アリス「それにしても、早すぎる。」

イーデイス「2人が騎士長とリョウガと戦ってから、そこまで時間が経ってないのに。」

キリト「そうだよ……………。あり得ない。ユージオとケントがそんな……………!」

カルム「これは、幻想だ。俺たちを騙そうとしている……………!!」

俺とキリトが、そんな風に喋りながら前に歩きだそうとするが、アリスとイーデイスが俺たちの手を掴んだ。

アリス「しつかりしなさい!ここでお前達が動揺すれば、助けられる物も助けられなくなる!」

キリト「助ける……………?」

イーデイス「そうよ!アンタ達は言つたじやない!整合騎士に本来の記憶を取り戻させる方法があるって!なら、あの2人も元に戻せるはずよ!」

カルム「……………ッ!」

そうだ、2人の言う通りだ。

アドミニストレータによって、本来の人格が前に出れなくなっているだけだ。

なら、今の2人を支配している人格を説得できれば、イーデイスとアリスと同様に、協力してくれるかもしれない。

キリト「……………ここは、俺達に任せてくれ。」

アリス「……………分かりました。」

イーデイス「でも、油断しないで。あの騎士達は、もう、アンタ達の知ってるケントとユージオじゃないわ。」

カルム「分かっている。」

俺たちは、決意をして、前に出る。

キリト「ユージオ、ケント。俺たちの事が分かるか？俺はキリトで、こっちはカルムだ。」

カルム「俺たち、ルーリッド村を出てから二年間、ずっと一緒だったろ？」

ユージオ「ごめんよ、君たちのことは知らない。でも、ありがとう。」

キリト「何がだ……？」

ケント「俺たちの剣を持ってきてくれて。」

カルム「え……？」

すると、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷が、突然宙に舞い、2人の手元へ。

神聖術!?

そう思っていると、アリスとイーデイスが驚愕の声を上げる。

アリス「心意の腕……！」

キリト「何だよそれ!？」

イーデイス「古から整合騎士に伝わる秘術よ。神聖術でも完全支配術でもなく、ただ意志の力で物を動かす……。使える騎士は、騎士長とリヨウガの他に、ほんの数人はず。」

カルム「騎士にされたばかりの2人が使える代物ではないな。」

2人は、それぞれの剣を帯刀する。

キリト「その剣で……どうするんだ？」

ユージオ「君達と戦うんだよ。それが、あの人の望みだから。」

カルム「ケント、ユージオ！誰かに命令されるまま、自分が何者なのかも知らず、戦う意味さえも分からないのに戦うのか!？」

ケント「意味なんてどうでもいい。あの人は、俺たちの欲しい物をくれる。俺たちは、それだけで充分なんだ。」

キリト「お前達の欲しい物……?」

カルム「それは、イーディスとアリスよりも大切なのか!？」

その2人の名前を聞いた途端、2人の感情が揺らいだが、すぐに消える。

ユージオ「知らない。知りたくない。君たちの事も……誰かの事も。」

ケント「もう、嫌なんだ。……のは……!」

キリト「ユージオ……。」

カルム「ケント……。」

2人は乗っていた板から降りて、それぞれの剣を向けてくる。

ユージオ「これ以上、君達と話すことはないよ。」

第41話 青薔薇の騎士と雷鳴の騎士

カルムside

俺とキリトは、整合騎士となってしまったケントとユージオと戦う。

お互いにソニックリープを放ち、鏢迫り合いとなる。

ケントとユージオの成長に驚きつつ、問いかける。

「キリト………何でだ。何で、そんなお前らが、『シンセサイズの秘儀』何かに負けちまったんだよ。」

カルム「2人が剣の修行をしたのは………ルーリッド村を旅立つて央都セントリアを目指したのは、大事な幼馴染を、イーディスとアリスを取り戻す為じゃなかったのか!？」

「……………」

一歩も引かずに俺たちの剣を受け止めるケントとユージオは、引き結んだ唇を動かさずとしない。

その後、ソードスキルが終了し、俺たちは斬り結んでいく。

ケントとユージオは、鎧を着ているのに、動きが遅くなっていない。

これが、心意なのか……………!?

だが、今の2人の心の中には、何が存在しているのか。

2人が整合騎士を目指す原動力になっていたのは、イーデイスとアリスの為だ。

魂に無理矢理刻まれたであろう、公理教会と最高司祭への忠誠心、それが全てではないと信じたい。

俺とキリトは、2人に呼びかける。

キリト「……………ユージオ、ケント。」

カルム「今の2人は、俺たちの事を覚えていないだろうけど、俺たちと2人は、これまで本気で戦った事は、一度もないよな。」

「……………」

かつては、明るい緑色と茶色に煌めいていた2人の瞳は、光を失って、濃紺と黒色に見える。

その2人の瞳を懸命に見詰めつつ、言葉を紡いでいく。

キリト「ルーリッドからセントリアへの旅の間も、央都で修剣学院に入ってからも、俺たちは何度も考えたよ。本気で剣を交えたら、一体俺たちとお前達のどちらが勝つか、つてな。……正直に言うと、いつかはお前達に追い抜かれるだろうって、そう思ってた。」

「……………」

カルム「……………でも、今はまだ、その時じゃない。俺とキリト、イーデイス、アリス、ティーゼ、ロニエ、ルナ、シオリ、カーディナル、ユーリの事を忘れてしまった人じゃ、俺たちには勝てない。それを証明してやる！」

そう言つて、俺たちはわざと力を抜いて、後ろに倒れ込む。

そう、この技は、2人には教えていない。

体術スキル、《弦月》。

だが、どういう訳か、躲されてしまった。

まさか、この存在に感づいたのか!?

俺たちはすぐに離れ、体勢を立て直す。

そこから、再び剣をぶつけ合う。

そこからの戦いは、苛烈という言葉が相応しい状態になっていた。

斬り結んでいるのだが、ケントとユージオの2人は、俺たちの剣技に悉く対応しているのだ。

もう、どれくらい戦つたのだろうか。

かなりの時間が経つたのだが、少し疲れが入ってきた。

一度、鏢迫り合いになったが、ユージオとケントの2人が蹴りを入れてきて、バク転で後ろに下がる。

キリト「ユージオ、ケント……。やっぱりお前達は強いよ。」

カルム「やっぱり、いつか追い越されると思ったけどな。」

ユージオ「無駄口を叩いた所で、容赦はしない。」

ケント「終わりにするぞ。」

そう言つて、ユージオとケントは、それぞれの剣を両手持ちにして、こちらに向かつて走ってくる。

青薔薇の剣は冷気を、雷鳴剣黄雷は雷を纏っていた。

言葉通り、終わりにするつもりなのだろう。

俺たちは、迎撃しようと身構えるが、そこに、アリスとイーデイスの2人が剣を抜刀して、2人を迎撃する。

キリト「アリス!？」

カルム「イーデイス!？」

ユージオ「何故、邪魔をする!？」

ケント「そこをどけ!？」

アリス「はあっ!？」

イーデイス「せいっ!？」

アリスとイーデイスが、それぞれの剣を振るい、ユージオとケントは大きく下がる。

俺とキリトは、大声で叫んでいた。

キリト「馬鹿野郎！手を出すな！」

カルム「君達とユージオとケントは、ルーリッド村で育った幼馴染だ！そんな4人を、戦わせるわけには……………」

アリス「ユージオは《アリス》の、ケントは《イーデイス》の記憶を奪われたと考えるべきでしょうか？」

キリト「ああ。そう思う。最高司祭は、シンセサイズの秘儀で、2人の最も大切にしている人の記憶を奪ったはずだ。」

イーデイス「でも、2人は私たちを見ても、動揺していないわよ。」

カルム「でも、だとしたら、2人は一体、誰に関する記憶を奪われたんだ……………」
そんな風に長考していると、アリスとイーデイスの声が聞こえてくる。

アリス「それを、私たち4人で確かめましょう。」

イーデイス「ただ目にするんじゃないわ。剣をぶつけ合えば、2人の奪われた記憶を、刺激できるかもしれないわ。」

キリト「……………ああ、分かった。」

カルム「俺たち4人で、2人の目を覚まさせるぞ！」

そうだ、大事な事を思い出した。

俺たちは、これまで色んな人達と剣を通して語り合った。

ミト、アスナ、リーファ、ハヤト、シノン、チェイス、ユウキ、ユージン、アラン、クレハ、神山飛羽真。

この世界に来てからも、タカトラ先輩、ユア先輩、リーナ先輩、ゴルゴロッソ先輩、エルドリエ、デュソルバート、ファナティオ、レイカ、四旋剣を初めとする整合騎士達。そして、俺たちの隣に立つイーデイスとアリス。

仮想世界の剣は、ポリゴンで出来たオブジェクト以上の意味を持つ。

己の命を預けるが故に、刃に込められた物は、相手の魂にまで届く。

憎しみから解き放たれた剣は、時として、言葉を超える交感を生み出す。

俺はそう信じる！

キリト「ユー……………ジオ……………」

カルム「ケント……………」

その叫びと共に、俺はケントに、キリトはユージオに向かっていき、イーデイスは俺の、アリスはキリトの援護に回った。

速く、もつと速く……………」

俺とキリトが剣捌きを更に上げると、ケントとユージオは着いてきていた。

だが、流石のケントとユージオも、一度に2人を相手にするのは、辛いらしく、若干

反応速度が落ちてきていた。

俺が刃王剣十聖刃でケントの雷鳴剣黄雷を跳ね上げて、そこにイーデイスが闇斬剣を構えながら突っ込んでいく。

ケントは、すぐに躲す。

キリトとアリスの方も、ユージオを押し始めていた。

すると、ケントとユージオを覆っていた不可視の殻が、ひび割れていくのを感じる。

あと少しだ……………！

流石のケントとユージオも、ふらついていた。

それは、俺とキリトもだが。

ユージオ「僕は……………負ける訳には……………行かないんだ……………！」

ケント「あの人の為に……………！」

キリト「俺たちも、お前達に負ける訳にはいかないよ、ユージオ、ケント。」

カルム「約束しただろう？最後まで……………2人と一緒に、この塔を登るって！」

俺とキリトはそう叫び、ケントとユージオに向かっていく。

2人も、俺たちを迎え撃つべく、駆け出していた。

キリト「セアアアツツ!!」

カルム「ハアアアア!!」

ユージオ「ウオオオオ!!」

ケント「ハアアア!!」

俺たちは駆け出して、それぞれの剣をぶつけ合う。

すると、視界が白く染まり、とある風景が目に入る。

それは、幼いユージオ、ケント、アリス、イーデイス、キリトと共に駆けている俺だ。

どうやら、キリトも同様のようだ。

キリト「今のは……………ルーリッド村を見た……………」

カルム「まさか……………俺とキリト、ユージオ、ケント、アリス、イーデイスは……………」

！

ユージオ「知らない……………！知りたくない……………」

ケント「もう、これ以上は……………」

ユージオとケントも、少し様子が変だった。

俺とキリトは叫ぶ。

キリト「ユージオツツ!!」

ケント「ケントツツ!!」

ユージオ「おおおツツ!!」

ケント「ハアアア!!」

俺とキリトが叫ぶと、ユージオとケントも叫びながら駆け出してくる。

再び剣を撃ち合うと、また、新たな光景が目に見え始める。

それは、ある日の春が近づいた頃の話だ。

アリス「ほら、手がお留守よ、キリト、カルム。」

イーデイス「ほら、私たちの方はもうすぐ出来るわよ。そっちはどうなの？」

キリト「俺の方が速いさ。もうあとこんだだけだ。」

カルム「俺も、あと少しだ。」

アリス「じゃあ、あと少し頑張って仕上げちゃいましょう。」

イーデイス「そうね。」

カルム「ああ。」

キリト「うーん。」

俺とキリトとアリスとイーデイスは、ユージオとケントの2人に内緒でとある作業をしていた。

キリト「なあ……………そろそろ戻ろうぜ。バレちゃうよ。」

カルム「確かに。もう午後になるしな。」

アリス「まだ大丈夫よ。」

イーデイス「もう少し……………もうちょっとだけよ。」

キリト「しょうがないなあ。」

カルム「じゃあ、ほんとにあと少しだぞ。」

俺たちは頷き合い、互いの作業に没頭する事数分くらい。

「でーきた！」

キリト「出来たぞ！」

カルム「こつちも出来たぞ！」

俺たちが発した声に、背後でがさがさと草を踏み分ける音が重なった。

慌てて手の中の物を背後に隠しながら振り向くと、ユージオとケントが居た。

ユージオ「なんだ、4人とも朝から見かけないと思つたら、こんなとこに居たのか。」

ケント「一体、何をしてたんだ？」

俺たちは、首を縮めつつ、顔を見合わせる。

アリス「ばれちゃったわねえ。」

イーデイス「少し早いけど……ユージオ、ケント、誕生日、おめでとう!!」

アリスとイーデイスは、満面の笑みを浮かべて、白竜の刺繍入りの鞆に収められた白金櫂製の小剣を2人に渡す。

2人は、それを見て、とても驚いていた。

ユージオ「え………これ、僕たちに………？」

ケント「こんな、凄い物を……!?!」

キリト「ユージオ、ケント、前に、父ちゃんに買ってもらった木剣を折っちゃったって言ってる？」

カルム「そりゃ、2人のお兄さんが持つてるみたいなお本物には負けるけど、でもこいつは、雑貨屋に売ってるどんな木剣よりも凄いんだ！」

おずおずと伸ばした両手で小剣を受け取ったユージオとケントは、その重みに驚いたように体を反らせ、次いで、アリスとイーデイスに負けなくらいに微笑んだ。

ユージオ「ほんとだ……これ、兄ちゃんの剣よりも重いよ！凄いや……僕………僕、大事にするよ。」

ケント「俺も、大事にする。ありがとうな、4人とも。嬉しいな……。こんなにも嬉しい誕生日の贈り物、初めてだ……。」

そう言つて、2人は泣いてしまう。

キリト「お、おい！泣くなよ！」

カルム「喜んでもらつて、良かった！」

そこで、視界はセントラル・カセドラルへと戻っていた。

そうだ、全部思い出した……。

キリト「……思い出したよ……ユージオ、ケント……。俺たちが初めて

会ったのは、2年前……………あのギガスシダーの前じゃない。」

カルム「……………もつと昔……………。幼い頃に、俺たちはルーリッド村で、大切な幼馴染と、同じ時を過ごした……………。ユージオ、ケント。そして、アリスとイーデイスと。」

キリト「何故……………こんな大切な記憶を……………俺たちは忘れていたんだ……………。北の洞窟への冒険も……………アリスとイーデイスが禁忌を犯した瞬間も……………」

カルム「……………そしてあの時、2人が整合騎士デユソルバートに連れ去られたその場所に、俺たちは居たんだ……………」

キリト「お前たちだけのせいじゃない。お前たちだけの責任じゃない。」

カルム『『イーデイスとアリスを取り戻す。』それは、ユージオとキリト、そして、ケントと俺の目的だったんだ。……………やっぱり、俺たちは、2人と会う為にここへ来たんだ。ケント、ユージオ。』

ユージオ「キリト……………ト……………ア……………リス……………?」

ケント「カルム……………?イーデイス……………?」

2人はそう呟く。

つまり……………!

キリト「ユージオ、ケント!」

カルム「2人とも！思い出したのか!？」

ユージオ「ああ。……………僕も……………思い出したよ。」

ケント「俺もだ。」

キリト「ユージオ!」

カルム「ケント!」

2人は思い出したのだ!

嬉しさのあまり、俺たちは2人に駆け出していく。

すると、アリスとイーデイスが、警告の声を上げる。

アリス「キリト!」

イーデイス「カルム!」

「リリース・リコレクション。」

その術式は、記憶解放術……………!？」

そう思っている中、俺とイーデイスは鎖に、キリトとアリスは氷に閉じ込められる。

キリト「ユージオ……………なんで……………!？」

カルム「ケント……………!？」

ユージオ「ごめんよ、キリト……………アリス……………カルム……………イーデイス。」

ケント「俺たちを、追わないでくれ。」

キリト「……………！ユージオ！！」

カルム「ケント！！」

俺たちの悲痛な叫び声が響く中、ユージオとケントは、最上階へと向かっていく。

第42話 決意の逆襲

ケントside

リムーブ・コア・プロテクション。

その術式は、聞いた事がなかった。

だが、俺がそれを唱えた時に、悟った。

この術式は、決して開けてはいけない扉の鍵を外す物だと。

その術式を唱えて、アドミニストレータが何かを心の深い所に突き刺して、俺は意識を失った。

しばらくして、誰かの呼びかけに、俺の意識が引つ張り出されるようにして、目を開けると、俺は、カルムとイーデイスに剣を向けていたのだ。

だが、そうと気付いても、頭の芯に突き刺さる冷たい棘は消えなかった。

その棘からは、最高司祭様の為に目の前の敵を斬り倒せ、という命令が絶えず発せられてきて、思考を縛ろうとする。

俺はやむなく、雷鳴剣黄雷の記憶解放術を使い、カルムとイーデイスを鎖で縛った。

棘の命令に抗いながら戦いを終わらせるには、これしかなかった。

俺とユージオは、セントラル・カセドラル最上階へと戻り、鎧を脱ぐ。

ケント（こうして、俺の本来の意識が保つていられるのは、そう長くはない。自分が消えてしまう前に、罪を償わなければならない。）

俺はそう決意して、胸元に手を触れて、目的の物がそこにある事を確認する。
すると。

チュデルキン「ホヒ、ホヒヒ……………。叛逆者どもはちゃんと始末したんでしょねえ？三十二号に三十三号。」

そこに居たのは、つぎはぎだらけの道化服を着た1人の男だ。

名はチュデルキン。

ベルクーリさんとリヨウガさんを石に変えて、俺たちをここまで攫った人物だ。

俺たちは、本来の人格に戻っている事を悟られないようにする為、無感情で答える。

ユージオ「叛逆者達は、氷と鎖で閉じ込めておきました、元老長閣下。」

チュデルキン「それは結構ですけどねエ、きっちり止めは刺したんでしょねエ、三十二号に三十三号？」

ケント「いえ、トドメは刺していません、元老長。叛逆者を足止めせよとの、最高司祭様のご命令でしたから。」

俺が実際にそんな風に命令されたのかは、分からない。

だが、最初にこの部屋で目を覚ました時、チュデルキンは居なかった。その為、チュデルキンも命令の有無を確認できない上に、逆らえない。

無論、アドミニストレータがこの会話を聞いていたら、終わりだが、囁き声程度なら、聞こえない可能性が高い。

チュデルキン「いけません、いけませんねエ、三十二号に三十三号。アタシを呼ぶ時は、元老長閣下と言いなさい。閣下ですよ閣下、次につけ忘れたら、罰としてお馬さんになつてもらいますよウ？アタシを背中に乗つけて、四つん這いでハイドウハイドウですよウ、ホヒヒヒッ！それでは、アタシも、猊下の御命令を遂行してきますかねエ？」

チュデルキンはそう言つて、九十九階にいるカルム達の下へと向かう。恐らく、騎士長ベルクーリとリョウガに対してしていたように、カルムとイーデイスとキリトとアリスを石にする前に辱めるつもりなのだろう。

だが、それに関しては心配ない。

ユージオから聞いた話では、氷はアリスの武装完全支配術の前では効かなかつたらしい。

だとすれば、もう脱出しているはずだ。

なら、俺とユージオは、為すべき事を為すんだ。

俺とユージオは頷き合い、ベッドへと近づいていく。

「……………最高司祭様。」

アドミニストレータに呼びかける。

数秒後、反応があつた。

アドミニストレータ「……………お帰りなさい、ユージオ、ケント。ちゃんとお使いを済ませてくれたのね。」

「……………はい。」

俺たちは、カルムとキリトと出会う前、何年も感情を殺した時を思い出して答える。

アドミニストレータ「偉いわね。じゃあ、2人にご褒美をあげなくちゃ。ベッドに入っけていらつしやい。」

そう言われて、俺たちはベッドの中へと入っていく。

どうにか、慌てたり声を上げたりせずにアドミニストレータの下へ行けた。

アドミニストレータ「さあ、こつちにいらつしやい、ユージオ、ケント。約束通り、あなた達の欲しい物をあげましょう。あなた達だけの愛を。」

「……………はい。」

ごく微かな声で答えて、俺たちはアドミニストレータに近寄る。

あとは、胸に隠してる短剣をアドミニストレータに刺せば、それで良い。

改めて最高司祭に対する、反逆を決意すると、眉間から頭にかけて、鋭い痛みが走る。

しかし、気づかれては全て終わる。
出来る限り力を抜いて……………。

アドミニストレータ「……………でも、その前に、もう一度、ちゃんと顔を見せてちょうだい、ユージオ、ケント。」

アドミニストレータは、そう言う。

害意が悟られたか？

だが、今から行動をしても間に合わないだろう。

ここは素直に従うしかない。

アドミニストレータは、俺たちをじっと見ると、呟いた。

アドミニストレータ「……………お誂え向きに記憶の穴があったから、そこにモジュールを挿入してみたけれど、横着は良くなかったかしらね……………。シンセサイズし直すつもりでしょう。ご褒美はその後でね、ユージオ、ケント。」

記憶の穴……………？

どういう意味かと心の中で首を傾げていると、指先を向けられた途端、俺の体が痺れ、動けなくなつたのだ。

恐らく、ユージオも。

次の瞬間、眉間から後頭部にかけてを、異質な感覚が貫いた。

氷の棘が、少しずつ抜けていく。

すると、朧気な光景が映る。

それは、木々の下を、俺たちが駆け抜けている思い出。

そこには、黒髪と紺色の髪の毛の2人の幼馴染が居た。

だが、それは白色の光によって見えなくなり、俺とユージオは項垂れる。

アドミニストレータは、俺とユージオから取り出した紫の三角柱を持っていた。

アドミニストレータ「このモジュールは、完成したばかりの改良型なの。これでシンセサイズすれば、効率の悪い訓練なんかしなくても、その瞬間から心意の力を使えるようになるわ。今の所は、初歩的な技に限られるけど……。」

アドミニストレータの言葉は、半分以上理解できなかった。

だが、一つだけ理解できたのは、あの三角柱こと、敬神モジュールが、俺とユージオを整合騎士に仕立て上げ、カルム達に剣を向けさせたのだ。

今なら、偽りの忠誠心に邪魔されずに、俺たちの目的を果たせる。

だが、全身の痺れは、モジュールが抜け落ちた後も、一向に薄れない。

俺とユージオの頭を己の足に横向きに乗せたアドミニストレータが囁く。

アドミニストレータ「また、あなた達の記憶を見せてちょうだい。今度こそ、一番大切にしている場所にコレを埋めてあげるから。そうすれば、もう二度と頭が痛くなつた

りしないわ。それだけじゃない……下らない悩みや苦しみ、飢えや渇きからも永遠に解き放たれるのよ。口だけ動かせるようにしたわ。さあ、さつき教えた術式をもう一度唱えて。」

「……………」

アドミニストレータ「術式を忘れてしまったの？しよがない子達ね。リムーブ・コア・プロテクションよ。」

アドミニストレータが、俺たちの口だけを動かせるようにしたのだ。

この術式の意味は、まるで分からないのだが、一つだけ確信がある。

それは、この術式が、心を守る扉を開け放つような物だという事だ。

もう一度唱えてしまったら、本当の意味で身も心も整合騎士となり、イーデイスの記憶を取り戻すという最後の望みは果たされない。

だが、だからといって、唱えずにいると、アドミニストレータは俺たちの叛意に気付く。

今この瞬間に、どうにか右手を動かして、短剣を突き刺すのだ。

どうにかして、動かさなければ……………！

ケント（頼む、動いてくれ、俺の右手。俺が今までの人生での過ち。整合騎士に連れ去られるイーデイスを助けられず、何年も助けに行こうとせず、旅の終着点に着いたの

にも関わらず、その道を見失った、俺の弱さを償う為に。

そんな風に思っていると、俺とユージオの口から、低く声が溢れる。

ユージオ「……………う……………う……………ご……………」

ケント「うご……………」

アドミニストレータ「……………?」

アドミニストレータの微笑みが薄れる。

もう後戻りは出来ない。

心の隅々からかき集めた力を、右手に集中させる。

痺れはなかなか取れない。

頼む、動いてくれ!

「……………う、ご、け……………!」

アドミニストレータ「……………お前たち……………」

振り絞るように俺たちが叫ぶと、淡い光が右手を包み、麻痺が消えた。

動けるようになった瞬間に、俺とユージオは短剣を取り出し、アドミニストレータに

向かって突き刺す。

だが、雷鳴に似た衝撃音が鳴り、短剣の切っ先は、アドミニストレータに届いていな

い。

ユージオ「ぐ……………うっ!!」

ケント「届け……………!!」

アドミニストレータ「……………!?!」

届いていない理由は、アドミニストレータの眼前に、神聖術と思われる障壁があったのだ。

この短剣は、カーディナルさんが与えた物だ。

本来は、俺とユージオの短剣は、イーデイスとアリスを眠らせる為に、カルムとキルトの短剣は、アドミニストレータを倒す為に与えられた物だ。

だが、カルムとキルトは、その短剣を、フアナテイオさんとレイカさんの2人を救う為に使ってしまった。

本来は、使う事を躊躇ったが、俺たちは決めたのだ。

刺し違えてでも、アドミニストレータを倒すと!

そんな決意と共に短剣を振り下ろすが、障壁に阻まれていた。流石のアドミニストレータも、上体を仰け反らせていた。

ユージオ「う……………お、おお!」

ケント「届けえええッ!!」

だが、障壁が突然爆発して、俺とユージオとアドミニストレータは後ろに吹き飛ばさ

れる。

何とか、受け身を取る事に成功して、アドミニストレータの方を見る。

服とベッドの周囲の布は吹き飛んだが、アドミニストレータ自体は健在だった。

アドミニストレータ「……………正気に戻ってたなんて、まんまと騙されたわ。そんな小道具をどこに隠し持ってたのかと思つたら……………図書室のちびっ子の仕業ね。でも、残念でした。今の私の肌には、あらゆる金属オブジェクトは傷をつけられないの。」

ユージオ「な……………!?!」

ケント「嘘だろ……………!?!」

つまり、剣による攻撃は効かないという事になる。

あの術式を解除するのは、無理だろう。

アドミニストレータは、乱れた己の髪を整えて、囁きかける。

アドミニストレータ「可哀想な子たち。折角約束してあげたのに。私に全てを差し出せば、その分私もあなた達を愛してあげるって。あなた達がずっと求め続けていた永遠の愛、永遠の支配を、もう少しで手に入れる事が出来たのに。」

ユージオ「……………永遠の、愛……………」

ケント「……………永遠の……………支配……………」

俺たちは、無意識のうちに、掠れ声で繰り返していた。

アドミニストレータは、俺たちから抜き取ったばかりの敬神モジュールを持ちながら頷いた。

アドミニストレータ「そうよ、ユージオ、ケント。私に全てを委ねれば、あなた達を苦しめてきた渴きはたちまち癒される。あなた達が抱え続けてきた不安や恐れは消えて無くなる。……これが最後の機会よ、ユージオ、ケント。それぞれの剣で、2つのおもちやを叩き壊しなさい。そうすれば、私は大いなる愛をもって、あなた達の罪を赦しましょう。」

「……………」

俺とユージオは、それぞれの剣とカーディナルさんから託された短剣を順に見やつて、アドミニストレータを見る。

ユージオ「愛は、支配し、支配される事……。可哀想なのは、そんな風にしか言えない貴女の方だ。」

アドミニストレータ「……………」

ケント「……………きつと、貴女も、俺たちと同じだったんだな。愛に飢え、探し求め……………しかし与えられる事は無かった。」

確かに、俺は愛されなかったのかも知れない。

だが、例えそうであっても、俺はたくさんの人たちを愛した。

そう考えた時、俺がこれまで会ってきた人たちが浮かんでくる。

ガリツタ爺、シスター・アザリヤ、メアリ、セルカ、祖父、姉さん、ウォルデ農場の一家達、ユア先輩、アズリカ先生、ルナ、シオリ、ロニエ、ティーゼ、キリト、カルム、ユージオ、そしてイーディスとアリス。

ユージオ「愛は、支配する事じゃない。みかえりをもとめたり、取引で手に入る物でもない。」

ケント「花に水を注ぐように、ただひたすら与え続ける事……。それが愛だ。」

それを聞いたアドミニストレータは、うつすらとした笑みを浮かべる。

だが、強烈な気配が放たれる。

アドミニストレータ「……………残念ね。公理教会に反逆した大罪人の坊や達を赦し、魂を救ってあげようとしただけなのに、そんな風に言われるなんて。」

どうやら、俺とユージオを殺すつもりだろうな。

俺とユージオは領き合い、それぞれの剣の柄に手を乗せる。

すると、アドミニストレータはつぶやく。

アドミニストレータ「やっぱり、殺して宝石にしちやうのはつまらないかしらね？時間にかかるけれど、あの子達みたいに強制シンセサイズするべきかしら……………？」

ユージオ「あの子……………？」

アドミニストレータ「そうよ。あなた達がご執心のサーティちゃんにテンちゃん。あの子達も術式の詠唱を嫌がったから、自動化元老機関が何日もかけてプロテクトを強制解除させたの。」

ケント「イーデイスとアリスか……………」

アドミニストレータ「私は眠っていたから見ていないけれど、とつても辛かったでしょうね。どう？あなた達も、せめて同じ経験を試してみるっていうのは？」

「……………」

言っていることは相変わらずよく分からない。

だが、これだけは分かった。

あの2人は、整合騎士となる過程で、惨い仕打ちを受けたのだ。

俺たちが屈して唱えてしまった術式を、拒み通したのだ。

なら、逃げるわけには行かない！

俺とユージオは、それぞれの剣を抜刀して、アドミニストレータに向かっていく。

ソニックリープを発動させながら。

耳の奥に、キリトとカルムの声が蘇る。

キリト『いいか、ユージオ、ケント、秘奥義は俺たちの体を動かしてくれる。でも、動

かさされるままになってたんじゃダメだ。』

カルム『秘奥義と一体化して、足の蹴りと腕の振りて技を加速させるんだ。それが出来れば、2人の剣は、風よりも速く敵に届くよ。』

そう教わってから、何度練習しただろうか。

そして何度失敗して、草むらに顔から突っ込んだのだろうか。

そして何度、愉快そうに笑うキリトとキリトを諫めるカルムの声を聞いただろう。

俺とユージオの剣は、若草の色に煌めきながら、風切り音さえ置き去りにして宙を翔ける。

最高司祭が凍素を二つ生成するが、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷に触れて、弾ける。

そのまま最高司祭の体に剣が当たるかと思ったら、障壁が阻む。

このまま押し込めば、先ほどと同じ爆発が起きるはずだ。

その圧力に何とか耐えて、その隙に短剣を突き刺す。

ユージオ「砕……………け……………ろ……………ッ!!」

ケント「砕けるオオオッ!!」

アドミニストレータ「……………!!」

最高司祭の顔に、驚愕の色が浮かぶ。

何故なら、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷が、障壁を少しずつつり抜けていたのだ。

「ウオオオオ!!」

俺とユージオが更に気合を入れると、障壁が砕け散った。

だが、最高司祭は後ろに避難していて、風素をバーストさせていた。

俺とユージオは吹っ飛び、柱にぶつかる。

その際に、少し血が出ていた。

苦痛に苦しむ中、俺たちは剣を支えに立ち上がった。

だが、最高司祭は、どういう訳か追撃してこず、眩いた。

アドミニストレータ「……………その2振りの剣……………。ふうん。そういう事……………」

その言葉の意味を探っていると、甲高い声がする。

チュデルキン「ひっ！ヒイイイ!!お助け下さい……………!ハッ!お助け下さい、最高

司祭猊下アアア!!」

その声の主は、元老長チュデルキンだった。

穴から這い上がると、剣を抜刀している俺たちを見て、声を上げる。

チュデルキン「ハッ!貴様ら!此奴らは裏切り者ですぞ、猊下!三十号と十号達を閉

じ込めたと言っておきながら手加減を……………!」

だが、その言葉は続かなかった。

何故なら、チュデルキンの左足に、二本の手が掴みかかっていたからだ。

チュデルキン「ホヒイエエエーッ!!は、離せ!アアッ!」

チュデルキンは、何とかその2本の手を引き剥がしたが、転がって、最高司祭のベッドと床の間の暗がりには逃げ込む。

あの手は、覚えがある。

何度も、引つ張つて貰い、道を違えても、俺たちの目を覚まさせた手だ。

キリト「よいしょっと！」

カルム「うるさい奴だな。」

そんな声と共に現れたのは、カルムとキリトだった。

その後ろには、イーデイスとアリスも居た。

第43話 炎の巨人

カルムside

どうやら、間に合ったみたいだな。

あの後、チュデルキンがホヒホヒ笑いながら現れたのだが、アリスが容赦なく金木犀の剣の武装完全支配術に巻き込み、逃げたので、俺たちは追って、最上階に着いた。

着いたのは良いのだが、そこからは、濃厚な《死の気配》が漂っていた。

つまり、死ぬ可能性があるという事だ。

腹を括らないとな。

すると、ユージオとケントの目から涙が溢れてきて、謝ってきた。

ユージオ「ごめん……………」

ケント「お前達を裏切って……………！」

カルム「気にするな。」

キリト「それに、俺がお前達の言いつけを守った事があるか？」

ユージオ「……………フツ。君はいつだってそうだ。」

ケント「全くだな……………」

ユージオとケントは、アリスとイーデイスを見て、2人も頷いた。

俺とキリトは、アリスとイーデイスの2人に尋ねる。

キリト「あれが……最高司祭、アドミニストレータ……。」

カルム「そうなんだな？」

アリス「そうです。」

イーデイス「6年前から、何一つ変わっていないわね……。」

俺たちの会話が聞こえたのか、アドミニストレータは何かを呟く。

アドミニストレータ「ベルクーリとフアナティオ、リョウガ、レイカはそろそろリセットする頃合いだったけれど……。アリスちゃんとイーデイスちゃんは、まだ6年くらいしか使っていないわよね？論理回路にエラーが起きている様子もないし……。やっぱり、その2人のイレギュラーユニットの影響なのかしら？ねえ、アリスちゃんにイーデイスちゃん。貴方達、私に何か言いたい事があるのよね？怒らないから、今言つてご覧なさいな。」

そう言つて、ベッドの上を一步歩いた。

その途端、アリスとイーデイスも一步下がってしまう。

やつぱり、敬神モジュールの影響がまだ出ているみたいだな。

あと、俺とキリトの事を、イレギュラーユニットつて言つたか？

という事は、もう勘付かれてるのか？

そう考えていると、アリスとイーデイスは、俺とキリトが巻いた包帯に左手を当てて、毅然と言い放つ。

アリス「最高司祭様。栄えある我らが整合騎士団は、本日をもつて壊滅いたしました。私たちの隣に立つ、僅か4名の反逆者によって。……そして、最高司祭アドミニストレータ、貴方がこの塔と共に築き上げた果てなき執着と欺瞞ゆえに!!」

イーデイス「私たちの究極の使命は、剣なき民を守る事にある！しかるに最高司祭様、アンタの行いは、人界に暮らす人々の安寧を損なう物だわ！」

言うねえ。

だが、アドミニストレータは、怒る訳でもなく、興がるように唇の両端をわずかに吊り上げる。

その代わりに、チュデルキンが騒ぐ。

チュデルキン「だっ、だまつ、黙らっしやあああイツ！」

そう言つて、チュデルキンが出てくる。

毒ガスが再充填されていたが、巻き込まれた際に全て抜けてしまった。

チュデルキンは、虎ならぬアドミニストレータの威を借りる狐と化していた。

チュデルキン「この半壊れの騎士人形風情がアアア!!使命イ!?守護オ!?笑わせてくれ

ますねえ!!お前ら騎士どもは!所詮、アタシの命令通りに動くしかない木偶人形なんですよッ!!」

こいつ、小物臭がするな。

まあ、実際に小物なんだろうけどな。

チユデルキン「大体ですなえ!騎士団が壊滅したとか、ちゃんちゃらおかしいいいーンですよ!使えなくなつたのは、ポンコツの一号から四号を含めて十人足らずじゃないですかッ!つまり、アタシにはまだまだ二十も駒が残ってるんですよ!お前らがガタガタ言つた所で、教会の支配はびくりとも揺らぎやアしねエんですよ!小娘ども!!」

皮肉にも、道化師の安っぽい悪罵には、アリスとイーデイスの緊張を取り払つただけだった。

まあ、小物だな。

アリス「馬鹿はお前です、カカシ男。その丸い頭には、脳味噌ではなく麦わらやらボ口布が詰まっているのですか?」

イーデイス「アリス、アレは、多分何も入っていないわよ。」

チユデルキン「なっ………なあああ!!」

結構辛辣ですね、アンタら。

まあ、アレぐらいが丁度いいのかもしれないけどな。

アリス「残る騎士のうち、半数は最高司祭様の言った《リセット》……つまり術式による記憶の調整で動かせず、残る半数は、今も飛竜に跨って、果ての山脈で戦っています。彼らを呼び戻す事は出来ない。そんな事したら、公理教会の支配は崩れ去る。」

イーデイス「いや、既に崩れかけてるわね。十名の騎士達と飛竜も、永遠に戦える訳ではないからね。しかも、カセドラルには、交代要員は残ってない。それともチュデルキン、アンタがダークテリトリーに赴いて、暗黒騎士達と一戦交えるの？」

耳が痛い。

俺とキリトは、頭を俯かせた。

交代要員の騎士を倒したのは、俺たちだ。

つまり、この状況にしたのは、俺たちのせいでもあるのだが。

まあ、開き直るか。

チュデルキンが何かを喚こうとするが、アドミニストレータが口を動かすのを見て、黙る。

アドミニストレータ「やっぱり、論理回路のエラーじゃなさそうね。それに、敬神モジュールもまだ機能している……。となると、あの者が施した《コード871》を自発的意思で解除したのかしら……？」

あの者……………？

裏切り者のラースタツフの誰かか？

やはり、何者かがアドミニストレータに介入していたのだ。

誰だ……………？

コード871というのも、随分と記憶に残りやすいな。

アドミニストレータ「ま、これ以上は解析してみないと分からないわね。……………さて、

チュデルキン。」

チュデルキン「ヒッ！」

アドミニストレータ「私は寛大だから、下がりにきつたお前の評価を回復する機会をあげるわよ。あの6人を、お前の術で無力化しなさい。」

アドミニストレータはそう言うのと、右手を振るって、ベッドを仕舞う。

なるほど、この階には、こういうような仕組みが幾つか仕掛けられてるのか？

そう考えていると、チュデルキンがアドミニストレータに近づく。

チュデルキン「さ、ささ、最高司祭猊下ッ！」

アドミニストレータ「なあに？チュデルキン。」

チュデルキンはそう言って、突如土下座をします。

それには、俺たち全員が戸惑う。

チュデルキン「元老長チュデルキン、猊下にお仕えた永の年月におきましてはじめての不遜なお願いを申し上げて奉りまするうっ！小生これより、身を賭して反逆者どもを殲滅致しますゆえっ！それを成し遂げた暁には、猊下のっ！げっ、猊下のおおっ、貴き御身をこの手で触れっ、口付けしっ、い、い、一夜の夢を共にするお許しを、何卒、何卒、何卒頂戴したくううううっ！！」

「「「「うわあ……………。」」」」

随分とストレートなお願いだな。

その発言には、俺たち全員がドン引きしてしまう。

カルム「なあ、イーデイス……………」

イーデイス「カルム……………」。お願いだから、何も言わないで。」

ケント「……………」俺たちは、こんな奴と戦うのか……………」

キリト、ユージオ、アリスは口を開けながら呆然としていて、俺はこれからこんな奴と戦うのかとイーデイスに聞こうとしたが、イーデイスは現実から目を背けた。

ケントも呆然としている中、アドミニストレータは、侮蔑と嘲笑を含んだ視線をチュデルキンに向けて、表情とは裏腹に、慈愛に満ちた声を出す。

アドミニストレータ「……………」良いわよ、チュデルキン。創世神ステイシアに誓うわ。

役目を果たしたその時には、私の体の隅々までも、一夜お前に与えましょう。」

あの言葉は、嘘だな。

嘘や偽りに塗れた現実世界人である俺とキリトには分かる。

だが、チュデルキンは、そんな主の偽りには、一切気づかなかった。

チュデルキン「おおお……………おおおおおおおおお!!!小生は今!無常の歓喜に包まれております!!もはや……………もはや小生は闘志万倍!生氣横溢!はつきり言いますれば、無敵ですよおおお!!!」

カルム「汚ねえな……………」

涙と鼻水まみれのチュデルキンの顔を見て、そう呟いたが、次のチュデルキンの行動に、油断なく構える。

チュデルキン「システム・コオオール!!ジエネレート・サーマル・エエレエエメン トオオオオオ!!又ハハハハハハ!!」

カルム「目が……………!!」

まさか、両手両足に留まらず、目までもを媒体にしたのか……………!!?

だが、熱素を目の前で生成したら、ただじゃ済まないはず……………!

事実、チュデルキンの両目は焦げていた。

チュデルキン「ゲヘヘ……………!お見せしましょう、我が最大最強の神聖術をお!!

出でよ……………魔神!!反逆者共を焼き尽くせええええ!!!」

その声と共に、チュデルキンは両手両足を振り回す。

すると、一箇所に集まり、炎の巨人……………いや、炎の魔神を生成する。

カルム「あんなことも出来るのかよ……………!?!」

イーデイス「嘘でしょ……………!?!」

アリス「どうやら、チュデルキンを侮っていたようです。私の花達では、あの魔神を倒すのは難しい。」

キリト「つまり、その間に、俺たちがチュデルキン本人を攻撃しないといけないって事になるのか……………」

アリス「そうです。10秒、どうにかして防ぎます。キリト、ユージオ、カルム、ケント、その間に、チュデルキンを討って下さい。」

カルム「……………分かった。俺はアリスの援護に回る。」

キリト「頼む。」

ユージオ「……………うん。」

そんな風話している中、炎の魔神がこちらに向かって歩いてくる。

そんな中、アリスは金木犀の剣の武装完全支配術を、俺は刃王剣十聖刃の水勢剣流水の力を使い、迎撃する。

アリス「巡れ!花達!!」

カルム「行くぜ！水勢剣流水!!」

アリスが金木犀の花を竜巻状にして、俺はその竜巻に水を纏わせる。イーデイスは、俺とアリスを後ろから支える。

すると、魔神は大きくジャンプして、俺たちを踏み潰そうとする。

アリス「ぐっ……………!グウウウウ!!」

カルム「グウウウウ!!」

イーデイス「2人とも、頑張つて！」

これは、辛いな……………!

アリスから聞いた話によると、金木犀の剣は、炎に弱いらしい。

まあ、元が金木犀だからな。

一応、俺が水を纏わせた事により、多少は炎の魔神も削られているが、このままでは、俺たちが押し潰されてしまう。

すると、ジェットエンジン染みた金属質の轟音がしてきて、何事かと思い、キリト達の方を見てみると、キリトは、ヴォーパル・ストライクの体勢を取っていた。

確かに、ヴォーパル・ストライクは、威力が凄まじく、射程距離も長い。

だが、いくらヴォーパル・ストライクでも、チュデルキンには届かない。

という事は、心意で拡張する気か!

第4話 剣の巨人

ケント side

何の音だ!?

すぐそばで炸裂した異質な轟音に、俺とユージオは目を見開く。

その音源は、キリトだ。

秘奥義なのだろうが、こんな型は見た事がない。

すると、キリトの服装が、変化し始める。

それも、高い襟と長い裾を持つ黒革の外套がどこからともなく現れたのだ。

しかも、キリトの目は、かつて見た事がない光を放つ。

キリト「う……………おおおおーッ!!」

キリトの雄叫びと共に、突き技が放たれて、チュデルキンを貫く。

俺とユージオは、チュデルキンの意識を逸らせる為に、アドミニストレータに対して、

凍素術を放った。

結果は、アドミニストレータに傷ひとつつかなかつたが、チュデルキンの意識はアド

ミニストレータの方に向いた。

死んだのだ。

その骸は、手厚く葬るべきだろう。

アドミニストレータは、チュデルキンの骸には目もくれず、キリトとカルムを見つめる。

アドミニストレータ「イレギュラーの坊や達。詳細プロパティを参照出来ないのは、非正規婚姻から発生した未登録ユニットだからかな、って思ってたんだけれど……………違うわね。あなた達、あつちから来たのね？《向こう側》の人間……………そうなんでしょ？」

アドミニストレータの言葉には、殆ど理解ができなかった。

あつち……………？

向こう側……………？

カルムとキリトは、2年半前に記憶を無くした《ベクタの迷子》として、ルーリッドに現れた。

2人は、故郷で何か辛い出来事があり、ルーリッドの森に辿り着いたのだと、俺とユーゾオは思っていた。

だが、人界を見通す最高司祭は、2人の生まれた場所を、不思議な言葉で表した。ダークテリトリーではないのは確かだが、それでは一体、2人はどこから……………？

そんな風に思っていると、キリトとカルムの2人は答えた。

「そうだ。」

2人の言葉は、肯定の意だった。

つまり、2人は記憶を取り戻していたのだ。

いや、もしかしたら、最初から………？

2人は、俺とユージオをチラリと見てくる。

その視線には、自分達を信じてくれという懇願の光が浮かんでいた。

キリト「………とは言え、俺たちに与えられた権限レベルはこの世界の人たちと全く同等だ。」

カルム「だから、あなたのそれには遠く及ばない、アドミニストレータ。………いや、クイネラさんと言うべきか。」

最高司祭の別の名前と思われる名前を呟くと、アドミニストレータは少し微笑みが薄れたが、すぐに戻る。

アドミニストレータ「図書室のちびっ子が、つまらない話をあれこれ吹き込んだよね。……それで？坊や達は、一体何をしに私の世界へ転げ落ちてきたのかしら？管理者権限一つ持たずに？」

キリト「権限はなくても、知っている事は少しばかりある。」

アドミニストレータ「へえ。例えば？下らない昔話には興味ないわよ。」

カルム「なら、少し先の未来の話をしよう。」

そう言つて、キリトは黒い剣に両手を乗せて、カルムは刃王剣十聖刃を肩に乗せる。

キリト「クイネラさん。あなたは、そう遠くない未来にあなたの世界を滅ぼす。」

アドミニストレータ「……………私が？私の可愛い人形達を散々痛めつけてくれた坊や達じゃなくて、この私が滅ぼすの？」

カルム「そうだ。何故なら、あなたの過ちは、ダークトリトリの総侵攻に対抗する為に、整合騎士団を作つた……………いや、作つてしまつた事、それ自体だからだ。」

アドミニストレータ「ふふふ。いかにも、あのちびっ子が言いそうな事ね。不憫だわ。

そこまでして私を追い落としたいあの子も、うかうかとそれに乗せられた坊や達も。」

細い喉を鳴らして、最高司祭は笑い続ける。

キリトとカルムは、何かを言おうとするが、アリスとイーデイスが口を開く。

アリス「御言葉ですが、最高司祭様。来るべき闇の軍勢の総侵攻に、現在の整合騎士団では抗しきれないとお考えだったのは、騎士長ベルクーリ閣下に騎士長補佐リヨウガ殿、副長フアナテイオ殿、副長補佐レイカ殿も同様でした。そして、私たちも。」

イーデイス「もちろん、私たちは、最後の一騎までも戦い抜いて、散り果てる覚悟だつたけど、最高司祭には、私たちが居なくなつた後、人界に住む人たちを守る手立てはあ

るの!？」

アリス「聞きたいのはそれだけではありません。あなたは我らを親から……妻や夫、兄弟姉妹達から無理矢理に引き離し、記憶を封じておきながら、ありもしない神界より召喚したなどという偽りの記憶を植え付けた……。」

イーデイス「どうして、私たちの忠誠と敬愛すら信じてくれないの!?!何で私たちの魂に、アンタへの服従を強要する汚れた術式を施したのよ!!」

その発言に、俺とユージオは驚いていた。

まるで、かつての2人がそのまま整合騎士として成長したかのように思える。

そして、俺とユージオは気づいた。

2人の左目から、涙が流れていたのだ。

だが、アドミニストレータは、2人の言葉に何も思わなかったのか、冷笑を浮かべる。

アドミニストレータ「心外だわ。とつても信頼してたのよ。あなた達にプレゼントした敬神モジュールこそ、私の愛の証だわ。あなた達がいつまでも綺麗なお人形でいられるように。下らない悩みや苦しみに煩わされずに済むように。」

そう言って、アドミニストレータは、俺とユージオから抜き取った改良型の敬神モジュールをくるくると回転させる。

そんな中、アリスとイーデイスは再び言葉を紡ぎ出す。

アリス「……………小父様が……………騎士長ベルクーリ閣下が、整合騎士として生きた三百年という永き日々の中に、わずかに悩んだり、苦しんだりしなかつたと、最高司祭様はそうお考えですか。」

イーデイス「誰よりも深い忠誠をあなたに捧げた人が、その心中に抱き続けてきた痛みを知らない、そう言うの!？」

そんな2人の言葉に、冷ややかな声で、アドミニストレータは答える。

アドミニストレータ「知ってたわよ。ベルクーリが、その手の下らない話にうじうじ悩むのは、初めてじゃないのよ。実はね、百年くらい前にも、あの子は同じような事を言い出したの。だからね、私が直してあげたの。」

「……………ツ!」「……………」

俺たちが驚愕する中、アドミニストレータの言葉は続く。

アドミニストレータ「あの子だけじゃない……………百年以上経ってる騎士は、皆そう。辛い事は、何もかも忘れさせてあげたのよ。安心して、アリスちゃん、イーデイスちゃん。今、貴女達にそんな悲しい顔をさせている記憶も消してあげるわ……………。何も考える必要のないお人形にちゃんと直してあげるわ。」

ケント「狂ってる……………!」

ユージオ「ああ……………。」

俺はそう呟いた。

人の記憶を自在に消し、或いは書き換える力。

その恐ろしさは、俺たちが身をもって体感している。

すると、アリスとイーデイスが呟く。

アリス「……………確かに、私は今、胸を引き裂かれる程の苦しみと悲しみを感じています。こうして立っていられるのが不思議なほどに。」

イーデイス「私もそうよ。……………でも、私たちはこの痛みを……………初めて感じるこの気持ちを消し去りたいなんて思わない。何故なら、この痛みが、私たちが人形の騎士じゃなくて、一人の人間である事を教えてくれる。だから、私たちはアンタの愛を望まない。アンタに直してもらう必要はないわ!」

アリスとイーデイスの決別の言葉を聞いたアドミニストレータは、語った。

アドミニストレータ「残念だけど、貴女達がどう思うかなんて関係ないの。私が再シenseサイズすれば、今の貴女達の感情なんて何もかも消えちゃうだから。」

アドミニストレータが、優しい笑顔で残酷な事を言う中、キリトが呟く。

キリト「あなたが、自分に対して行ったように……………かな、クイネラさん。」

アドミニストレータ「ねえ、坊や。昔の話はやめてって言わなかったかしら?」

カルム「昔の話をやめただけで、事実が消えるのか? いや、消えはしない。過去から

積み重なって、今のアンタがいる。だから、アンタも一人の人間なんだよ。」

アドミニストレータ「だったら、どうだって言うの？向こう側から来た坊やたち。」

カルム「人間である以上、過ちは犯す物だ。そして、アンタの過ちは、もう修正可能な領域にまで達してしまった。整合騎士団が半壊以上、もし今すぐにでもダークテリトリの総侵攻が始まったら人界は滅ぶぞ？」

アドミニストレータ「騎士たちを壊してきたのは坊やたちでしょう？」

キリト「自分だけ生き延びられたら、その後最初からやり直せばいいとも思ってるのかもしれないけどな。そうはいかない。」

「どういう意味だ？」

そんな風に首を傾げる中、キリトとカルムの話は続く。

キリト「向こう側には、この世界に対して、真に絶対の権限を持つ者たちがいるからだ。」

カルム「彼らはこう思うだろうな。今回は失敗だった、また最初からやり直そう、と。そしてボタン一つが押されて、この世界の凡ゆる物が消えてしまうんだ。それは、人間として、例外じゃない。」

その言葉に、俺、ユージオ、アリス、イーデイスは理解できなかつた。

だが、アドミニストレータだけは、2人が言いたい事を理解したようだ。

アドミニストレータ「……………それなら、貴方たち向こう側の人間はどうなのかしら？自分たちの世界が、より上位の存在に創造された可能性を意識し、世界がリセットされないように上位者の気に入る方向にのみ進むように努力しているの？」

キリト「……………ッ！」

カルム「……………。」

アドミニストレータの問いに対して、2人は答えられなかった。

アドミニストレータ「……………そんなはず無いわよね。戯れに世界と命を創造して、要らなくなれば消し去ろうなんて連中だものね。そんな世界からやってきた坊や達に、私の選択をどうこう言う権利があつて？私はごめんだわ。創造神を気取る連中に阿つて、存在し続ける許しを乞う、なんて惨めな真似は。私の存在証明はただ支配することのみにある！その欲求だけが私を動かし、私を生かす！この足は踏みしだくためにあるのであつて、決して膝を屈するためではない!!」

俺は、その圧力に押され、思わず右足を引いてしまった。

だが、キリトとカルムも、上体を揺らしこそするが、大きく叫ぶ。

キリト「ならば……………ならば、あなたはそのまま人界が蹂躪されるに任せ、民なき国の支配者として、名ばかりの玉座で1人滅びの時を待つつもりなのか!!」

アドミニストレータ「アハハハ！私はこのアンダーワールドをリセットさせるつもり

はもちろん、最終負荷実験すら受け入れるつもりはないのよ。そのための術式は完成しているのよ。喜ばなさい……。誰よりも最初に貴方たちに味わせてあげるから……。

カルム「術式……？ 一体何をするつもりだ……！」

カルムの問いに対して、アドミニストレータは独白を続ける。

アドミニストレータ「正直に言うかね、整合騎士団はただの繋ぎだったのよ。これが完成したからには、もう人形の記憶や性格を操作する必要はない……。私が真に求める武力には記憶や感情はおろか、考える力すらもいらぬ。ただひたすらに目の前の敵も屠り続ける存在であればいい。つまり、人間である必要はないの……。さあ、目覚めなさい！ 私の忠実なるしもべ！ 魂なき殺戮者よ！！リリース・リコレクション！！」

あれは、記憶解放術の術式!?

すると、周囲に飾られていた武器が、アドミニストレータの下へと集まっていく。俺たちが動けない中、キリトとカルムは動いていた。

キリト「デイスチャージ！」

カルム「頼む！ 火炎剣烈火!!」

キリトが熱素の神聖術を放ち、カルムが炎を纏った刃王剣十聖刃をふるう。

行く先は、アドミニストレータが持つ敬神モジュールだ。

だが、あの武器の一部が、2つの攻撃を無力化してしまう。そして、宝石が巨体に格納され、地面へと落ちる。

カルム「なんだよ、アレ……………!?!」

アリス「あ、ありません……………!」

イーデイス「同時に複数の……………30の神器を使った大掛かりな記憶開放術を使うなど、術の理に反しているわ……………!」

「!?!」

アドミニストレータ「これこそ私の求めた力、永遠に戦い続ける純粹なる攻撃力……………!名前は……………そうね、ソードゴーレムともしておきましょうか?」

キリト「剣の……………」

カルム「自動人形……………!?!」

アドミニストレータ「剣の一本一本が、神器級の優先度を持っている…貴方たちはこのソード・ゴーレムに勝てるかしら?私が貴重な記憶領域をギリギリまで費やして完成させた最強の兵器に……………!」

「!?!」

アドミニストレータ「さあ……………闘いなさい、ゴーレム……………お前の敵を滅ぼすために!」

そう言つて、ソードゴーレムは動き出してきた。

俺たちが反応に遅れる中、アリスとイーデイスが剣を持って俺たちの下へ。

アリス「ハアアア!!」

イーデイス「させないわよ!」

ゴーレムの剣を、アリスとイーデイスが受け止めて、キリトとカルムが隙について攻撃しようとするが、アリスとイーデイスの剣が弾かれる。

アリス「しまつ……………!」

イーデイス「うわつ……………!」

2人は体勢を整えようとするが、無慈悲にも剣が2人の体を貫き、その場に倒れる。

キリト「ぐう……………ああああああああ!!」

カルム「キリト、落ち着け!!」

キリトが秘奥義を発動しながら突つ込むが、あっさり弾かれて、壁に叩きつける。

カルムも、雷と風を纏つた刃王剣十聖刃で攻撃するが、無力化されて、壁に叩きつけ

られる。

そんな……………!

あの4人は、強い剣士のはず……………!

それなのに、こんなにあっさり倒されるなんて……………!

俺とユージオが硬直してる中、ソード・ゴーレムは少しずつ近づいてくる。
すると。

??? 『短剣を使うのよ、ユージオ、ケント!』

「!?」

その声に、我に返る。

その声は、続く。

??? 『床の昇降盤に刺しなさい! 時間は私が稼ぐから!! 急いで!』

すると、キリトの近くから巨大な蜘蛛が現れて、ソード・ゴーレムに向かっていく。
何故、蜘蛛が居るんだと思ったが、そんな事を気にしている場合じゃない!

俺とユージオは、昇降板にまで行き、指示通りに、短剣を刺す。

すると、紫色の光が周囲を包みこむ。

蜘蛛は、ソード・ゴーレムに倒されていた。

??? 『良かった……間に合った。……最後に、一緒に闘えて、うれし……っ。』

そう言って、事きれた。

ソードゴーレムが、俺とユージオに向かってくる中。

??? 『バースト・エレメント!!』

「光あれ!!」

昇降板から現れた扉から、雷と2本の剣を持った剣士が飛び出してきた。雷と剣士の剣は、ソードゴレムに当たり、大きく吹っ飛ぶ。

そこに居たのは、幼き賢者と、ローブを纏った1人の青年だった。

ユージオ「カーディナルさん……！」

ケント「ユーリ……！」

そう、幼き賢者はカーディナル、青年はユーリだったのだ。

第45話 刃王剣の覚醒

カルム side

まさか、あんなに強いなんて……………。

俺たちはソードゴーレムと戦ったのだが、あつという間に倒されてしまった。

甘く見ていた訳ではない。

だが、想定していた強さを遥かに上回ったのだ。

すると、キリトの頭から、1匹の蜘蛛が現れて、ソードゴーレムに挑む。

その蜘蛛が、ユージオとケントに指示を出していたが、2人は蜘蛛の時間稼ぎを無駄にはせず、昇降板に短剣を刺していた。

あの蜘蛛は、シャーロットという、俺たちに張り付いていた蜘蛛だ。

その蜘蛛は、命懸けの突撃を行い、倒れた。

こんな絶望的にも関わらず、シャーロットは死んでしまったのだ。

俺が歯噛みをしていると、紫色の光が周囲を包み込み、ドアが現れる。

そのドアから、一筋の雷と、2本の剣を持った剣士が飛び出してくる。

その2つの攻撃を喰らい、ソードゴーレムは動きを止めた。

その攻撃を放った主は、カーディナルとユーリだった。

カーディナルは、アリスとイーデイスの2人に近づいて、治療を施していた。

俺とキリトの下には、ユーリが来て、光剛剣最光を翳すと、俺とキリトの怪我が治っていく。

俺とキリトがお腹を摩っている中、カーディナルと共にアリスとイーデイス、少し離れていたユージオとケントもやってくる。

アリス「キリト……カルム……。この方は、一体……?」

キリト「この人の名前はカーディナル。二百年前にアドミニストレータと戦い、追放された、もう一人の最高司祭だ。」

カルム「大丈夫、味方だ。俺とキリト、ユージオ、ケントを助けて、ここまで導いてくれた人だ。この世界の事を心から愛して、また憂いているんだ。」

イーデイス「分かったわ。私とアリスの傷を治してくれたこの人を信じるわ。……それに、ユーリも居てくれるなんて、ありがたいわね。」

ユーリ「ああ。俺も本気で行こう。」

そんな風に話している中、カーディナルは、シャーロットの骸に近づき、持ち上げる。そんなカーディナルに、俺たちも近寄る。

カーディナル「……この頑固者……!」

カルム「済まない……………。俺たちを助けるためにシャーロットは……………」

カーディナル「お主が謝ることではない……………。せっかく任を解き、労い……………お前の好きな本棚の片隅で望むように生きよと言ったじやろうに……………」

キリト「最期に……………俺たちと闘えて良かったって……………その、シャーロットもフラクトライトを持つていたのか？」

カーディナル「いや……………お主たちの世界の言葉を借りるのなら、シャーロットはNPCと同じ存在じゃ。」

キリト「……………そんな……………でも、あの言葉は……………あの話し方はまるで……………!？」

俺とキリトが、シャーロットの事に関して驚く中、カーディナルの言葉は続く。

カーディナル「この子はもう200年も生きておった。その間、ずっとわしとユーリと語らい、多くの人間たちを見守ってきたのじゃ。お主に張り付いてからも早2年……………。それ程の時間が経てば、例えばフラクトライトを持たなくても……………。例えその本質が入力と出力データの蓄積だとしても、そこに真実の心が宿ることもあるのじゃ……………。そう……………時として、愛すらも持つこともな……………！貴様には永遠に理解できないことであろうがな!!アドミニストレータ……………虚ろなる者よ!」

カーディナルは、そう言って、アドミニストレータを睨む。

だが、アドミニストレータは、やけに余裕の態度だった。

カーディナルとユーリが加勢してきたのにも関わらずにだ。

アドミニストレータ「来ると思ったわ。その坊や達を苛めていけば、いつかはカビ臭い穴倉から出てくると思ってた。それがお前の限界ね、おチビさん。私に対抗するための手駒を仕立てておきながら、それを駒として使い捨てる事も出来ないなんて。まったく度し難いわね、人間というものは。」

やはり、俺たちを追い詰めて、カーディナル達を引き出すのが目的だったのか。

カーディナル「ふん。暫く見ぬうちに、貴様こそ随分と人間の真似が上手くなったものじゃな。」

ユーリ「二百年の間、ずっと鏡を相手に笑う練習でもしていたのか？」

カーディナルとユーリの、皮肉が込められた辛辣な言葉を、アドミニストレータは微笑で受け流す。

アドミニストレータ「あら……：……：……：そういうオチビさんこそ、その可笑しな喋り方は何のつもりなのかしら？200年前、わたしの前に連れて来られた時には、心細そうに震えていたのに……：……：ねえ、リセリスちゃん？」

カーディナル「わしをその名で呼ぶな、クイネラ！わしの名はカーディナル……：……：貴様を消し去るためだけに存在するプログラムじゃ！」

アドミニストレータ「フッフ、そうだったわね。そして、私はアドミニストレータ………全てのプログラムを管理する者。」

口論の内容が、姉妹喧嘩染みてるな。

だが、現状、そう突っ込めない。

アドミニストレータ「挨拶が遅れて悪かったわね、オチビちゃん……。貴女を歓迎するための術式を用意するのにちよつと手間取っちゃったものだからね！」

「……………?!……………」

アドミニストレータが指を弾くと、カセドラル最上階の窓が全て割れた。

周囲には、闇のような景色が広がっていた。

カーディナル「貴様……。！アドレスを切り離れたな!？」

アドミニストレータ「200年前、あと一息で殺せるというところで、お前を取り逃したのは、確かに私の失点だったわ、オチビさん？」

カルム「昇降板まで……。!？」

カーディナルの言葉から察するに、大図書館の様に、アドレスを切り離れたのだろう。つまり、退路は断られた。

アドミニストレータ「だからね……。私はその失敗から学ぶことにしたの。いつかお前を誘い出せたら、今度はこつち側に閉じ込めてあげようって……。鼠を狩る猫のいる

檻の中にね。」

カーディナル「猫と鼠のう……。この戦力差では、どちらが鼠で、どちらが猫かが分からぬと思うが？」

ユーリ「何せ、俺たちは八人、そして、お前はたった一人だからな。」

アドミニストレータ「八人对一人……。？いいえ、その計算はちよつとだけ間違ってるわね。」

すると、大きな音がする。

その音源は、カーディナルとユーリの攻撃を食らったソードゴーレムが、何事も無かったように立っていたのだ。

しかも、黒焦げになっていたのが、剥がれて金色に戻っていた。

アドミニストレータ「正しくは、八人对300人なのよ？私を加えなくてもね。」

キリト「300人……。？」

カルム「それはどういう……。っ!？」

カーディナル「貴様、なんと……。なんとという非道な真似を……。!？」

ユーリ「その300人は、お前が守るべき民じゃないのか!？」

ユージオ「……。民……。？」

ケント「民って、人間……。!？」

アリス「人、だということですか……………!!」

イーデイス「あの怪物が……………!!」

俺たちは絶句した。

まさか、人を神器に転換するなんて……………!

アドミニストレータ「守るべき民とか、私がそんな低次元なことを気にするわけないじゃない。私は支配者よ? 私の意志のままに支配される者が下界に存在するだけではないのよ! 人だろうと、剣だろうと大した問題じゃないわ……………」

カルム「お前、人の命を何だと思ってるんだ!」

アドミニストレータ「フツ……………何をそんなに怒っているの? 数多の民から、たかが300個程度のヒューマンユニットデータを物質変換したくらいでしょ? むしろ、私の忠実なるゴーレムの糧となれたことに感謝してほしいくらいだわ。」

ユーリ「貴様……………!!」

アドミニストレータの、命を軽く見ている発言には、俺とユーリは怒る。

アイツ……………!!

カーディナル「たかがじゃと…!?」

アドミニストレータ「そうよ。これはプロトタイプ…いやつたらしい負荷実験に対抗するための完成形を量産するためには……………ざつと半分くらいは必要かなって感じだ

わ。」

ユーリ「半分だと……?!?」

アドミニストレータ「人界に存在する約8万のヒューマンユニットの半分……。それだけあれば、足りるんじゃないかしら? ダークテリトリーの侵攻を退けて、向こう側に攻め込むのにな。」

「「「「「「?!?」」」」」」

それは、まさに悪魔の所業だった。

4万の人が、あの化け物に変わるのだ。

そんな事は、絶対に許されない。

アドミニストレータ「どう? これで満足したかしら、アリスちゃんにイーディスちゃん? 貴女達の大事な人界はちゃんと守られるわよ?」

アリス「……………最高司祭様……………もはや貴女に人の言葉は届かない……………。故に神聖術師として尋ねます。その人形を作っている30本の剣……………。その所有者はどこにいるのですか?」

イーディス「例えば、最高司祭様が完全支配できる剣は1本のみという原則を破れたとしても、その次の原則は破れない筈……………。記憶開放を行うには剣と主の間に強固な絆が必要となるわ。最高司祭様、その人形を形作る剣の源となったのが、罪なき民たちだ

というのなら、アンタが剣たちに愛されるわけがない！」

アドミニストレータ「そうね……。普通ならそうよね……。でも、答えならアリスちゃんとイーディスちゃんの目の前にあるわよ？……。尤も、ユージオとケントには分かっている筈よ？」

ユージオとケントが？

アドミニストレータの言葉に首を傾げ、ユージオとケントを見ると、2人は天井を見ていた。

その顔は、驚愕していた。

ユージオ「そうか……。！そういう事だったんだ……。！」

キリト「どういう事だよ!？」

ケント「……。天井のあの水晶……。あれはただの飾りじゃない。きっと、あれが整合騎士達が奪われた記憶の欠片だ……。！」

カルム「何……。!？」

ユーリ「まさか……。!!」

「っ!？」

ユージオとケントの言葉に、俺たちは再び絶句して、カーディナルが叫ぶ。

カーディナル「おのれ、クィネラ！貴様は……。貴様はどこまで人を弄ぶつもりなの

じゃー！シンセサイズの秘儀で抜き取った記憶ピースを精神原型に装填すれば、それを疑似的な人間ユニットとして扱うことは可能じゃ……。しかし、その知性は極めて限定され、とても武装完全支配術という高度なコマンドを行使することはできぬ。じゃが、記憶ピースとリンクする武器の情報が重複する場合は別じゃ。すなわち、整合騎士たちから奪った記憶に刻まれた……。愛する人間たちをリソースとして作った……。そういうことじゃな、アドミニストレータよ?」

そう、あの剣は、整合騎士達が愛する人たちを転換して、生成されたのだ。

本当に、悪魔に魂を売りやがった………!

アドミニストレータ「騎士たちの模擬人格が望むのはたった一つ……。記憶している誰かに触れたい、抱きしめたい、自分のものになりたい……。そういう醜い欲望がこの剣人形を動かしているの。彼らは今、すぐ傍にその誰かがいることを感じているわ……。でも触れない、一つになれない……。狂おしほどの飢えと渇きの中で見えるのは……。邪魔をする敵の姿だけ。この敵を斬り殺せば、欲しい誰かが自分のものになる……。だから戦う。どんなに傷を負っても、何度倒れても起き上がって永遠に戦い続けるの! どう? 素敵な仕組みでしょ? 本当に素晴らしいわ、欲望の力というものわ!!」

カーディナル「違う!!」

アドミニストレータの狂った発言に、カーディナルが叫ぶ。

カーディナル「違う！その感情を、欲望などという言葉で汚すな！それは……………それは純粹なる愛じゃ!!」

アドミニストレータ「同じことよ……………。愚かなオチビさん？愛は支配、愛は欲望……………その実態はフラクトライトから出力される信号に過ぎない。そして、何より重要なのは……………その事実を知ってしまった今、お前には決して人形を破壊できないという事実よ……………なぜなら！人形の剣たちは形を変えただけの生きた人間共なのだから!!」

カーディナル「っ……………!!?!」

そう、あのソードゴレムを構成する剣は、人が転換された物だ。

殺人が出来ないカーディナルにとって、破壊できない。

カーディナル「そうじゃ……………その通りじゃな。わしには人を殺せぬ……………人ならぬ貴様だけを殺すために、200年の時を費やして術を練り上げてきたが、どうやら無駄だったようじゃ。」

カルム「……………カーディナル……………?!」

アドミニストレータ「フフツ……………！アハハハハハハハ!!なんて……………なんて愚かなのかしら！なんて滑稽なのかしら!!この世界に存在する命なるものは全て書き換え可能なデータに過ぎないのに!!」

カーディナル「いいや……人だとも、クイネラよ。アンダーワールドに生きる人々は、我々が失ってしまった真の感情を持っている。笑い、悲しみ、喜び、愛する心……！それ以上に何が必要であろうか?!」

ユーリ「まさか……!!」

カーディナルはそう言つて、前に出る。

まさか……!!

カーディナル「わしの命はくれてやる！代わりに、この若者たちとユーリの命は奪わんでくれ!!」

カルム「待て！カーディナル!!」

俺はそう叫んだが、ソードゴレムによつて黙らされる。

アドミニストレータ「そんな交換条件を受け入れて、私にどんなメリツトがあるのかしら?」

カーディナル「戦闘を望むのなら、その哀れな人形が動きを封じながらも、貴様の天命の半分くらいは削つてみせるぞ?それ程の負荷が掛かれば、貴様の心もとない記憶領域が更に危うくなるのではないか?」

アドミニストレータ「ふーん……考えたわね……。まあ、いいわ。そんな雑魚どもを見逃すくらい、お前を殺せるのなら、私にとっては全く問題ないことだしね。」

カーディナルの条件を呑んだアドミニストレータは、ソードゴレムを下がらせる。アドミニストレータ「私も面白い遊びを後に取っておけるしね。じゃあ、ステイシア神に誓いましょう。オチビさんを……………」

カーディナル「いや、ステイシア神ではなく、貴様が唯一絶対の価値を置く、自らのフラクトライトに誓え。」

そう話していたが。

キリト「ダメだ……………」

カルム「これじゃあ、八年前と変わらない。目の前で大切な人を失わせない。」

カーディナル「じゃが、わしにはソードゴレムは倒せん……………」

カルム「だから、俺たちが……………いや、俺がやる。」

ユーリ「カルム……………」

カルム「刃王剣十聖刃は、世界の理を書き換える力を持つ聖剣だ。」

アドミニストレータ「あら……………？折角命拾いさせてあげようとしたのに、そこまで死にたいのかしら？」

カルム「死ぬんじゃない。生きて、ここから脱出するんだ。」

俺はそう言つて、ソードゴレムに向かって駆け出していく。

ソードゴレムは、俺に向かって剣を振るってくるのだが、俺はそれを躲す。

そうだ、これは、俺が背負うべきなんだ。

刃王剣十聖刃に選ばれた、この俺が。

ソードゴーレムの攻撃を躲して、狙うは、敬神モジュールだ。

敬神モジュールに向かって、刃王剣十聖刃を突き出していく。

だが、ソードゴーレムは、させないと言わんがばかりに、肋骨の部分に当たる剣を閉じてくる。

それでも、何とか隙間に刺す事が出来た。

すると、ユーリの声が聞こえてくる。

ユーリ「今だ!!」

カルム「リリース・リコレクション!!」

俺は、刃王剣十聖刃の記憶解放術を発動する。

すると、周囲が強烈な光に包まれる。

目を開けると、そこには300人も人の姿が見える。

そして、整合騎士達も。

恐らく、敬神モジュールを介して、ソードゴーレムの意識の中に居るのだろう。

俺は、どうにかして、整合騎士の大切な人たちを戻せないかと見てみるが、術式が強力すぎて、元には戻せないと判明する。

カルム「ダメか……!!なら、せめて、救ってみせる……!!」

すると、2つの記憶の欠片が、こちらにやって来て、人の形に変わる。

それは、幼いアリスとイーデイスだった。

カルム「アリス……イーデイス……」。

アリス「まさか、ここまで来てくれるなんてね。」

イーデイス「ありがとうね、カルム。」

カルム「済まない、あの時に助けられなくて……!!」

アリス「良いの。」

イーデイス「大丈夫だから。」

カルム「そういえば、2人はどうなるんだ?大切な人は居るのか?」

俺が2人にそう聞くと、2人は顔を見合わせて、答える。

アリス「私とイーデイスは、使い勝手が違うのか、対応する武器が作れなかったのよ。」

イーデイス「だから、私たちは……整合騎士としての私たちと融合するの。」

カルム「……!?!」

そんな事ができるのか!?

俺がそう驚いていると。

アリス「……うん。整合騎士としての私たちとも話して、決まったわ。」

イーデイス「だから、この300人達を、救ってあげて……………」
カルム「ああ……………」

いつ話したのかは分からないが、整合騎士としてのアリスとイーデイスが良いと言うのなら、俺はやる。

俺は刃王剣十聖刃を大きく振るい、虹色の斬撃波を放つ。

すると、整合騎士達の記憶の欠片と大切な人たちが繋がって、その二つが、安らかな表情を浮かべて、消えていく。

せめて、魂を救えて良かった……………。

そして、幼いアリスとイーデイスは、整合騎士としての2人と融合する。

すると、とある感覚が伝わってきた。

それは、ユージオとケントの2人が、それぞれの剣と融合した事が。

まさか、整合騎士にされる際の術式を使って、カーディナルがしたのか!?

カルム「ケント、ユージオ……………!今からそっちに戻る!!」

俺は、誰も居なくなったソードゴレムの意識空間から脱出する。

第46話 支配者の終焉

キリトside

俺は、「ダメだ」と言っておきながら、動けなかった。

アイツは、壮絶な覚悟を決めたような表情だった。

その覚悟と共にソードゴレムに突っ込んでいき、記憶解放術を発動した。
すると。

アドミニストレータ「貴様………！一体何をしている!!」

ユーリ「させるか!!」

アドミニストレータが、ソードゴレムに掴まされたまま動いていないカルムに攻撃しようとするが、ユーリが妨害に入る。

アリスとイーディスも、ユーリの加勢に入る。

皆が動いているのに、俺は、動けないのか………!?

すると、ユージオとケントが、覚悟を決めた様な表情を浮かべる。

ユージオ「カーディナルさん。」

ケント「俺たちを、俺たちの体を、剣にして下さい。あの人形と同じように。」

キリト「ユージオ……………ケント……………?」

カーディナル「そなたら……………」

ユージオ「僕らがここから逃げたら……………アドミニストレータは世界中の人間たちの半分を、あの恐ろしい怪物に変えてしまう。そんなの、絶対にさせちゃダメです。」

ケント「その悲劇を防ぐ為の、最後の可能性が残されているとすれば、それは、この術式の中にある。」

そう言つて、ユージオとケントは、とある術式を唱える。

「システム・コール。……………リムーブ・コア・プロテクション。」

リムーブ・コア・プロテクション。

恐らく、ユージオとケントは今、己のフラクトライトに対する無制限の操作権限をカーディナルに与えたのだろう。

2人がなぜ、そんな術式を知っているのかは分からないが、その言葉は、2人の決意と覚悟に満たされていた。

カーディナル「よいのか、ユージオ、ケント。元の姿に戻れるかどうか分からぬぞ。

ユージオ「良いんです。これが、僕たちの役目……………。僕たちがこの場所にいる理由なんです。」

ケント「そうだ、最後に、これだけは伝えておかないとな。カーディナルさん、キリ

ト。最高司祭に、金属の武器は届かない。だから、短剣を刺せなかったんだ。」

キリト「そう……………なのか……………」

それを聞いて、カーディナルは無言で頷いた。

ユージオとケントは、言葉を続ける。

ユージオ「それじゃ……………お願いします。アドミニストレータが、ユーリ達に気を取られている隙に。」

キリト「……………だめだ、やめろ！ユージオ、ケント!!もし、元に戻れなかったら……………2人の望みは……………!」

ケント「良いんだ。これが、俺たちの、為すべき事なんだ。」

その決意に満ちた言葉に、俺は何も言う事が出来なかった。

カーディナルは、頷いた。

カーディナル「よかろう、ユージオ、ケント。我が術式を……………そなたらの決意に捧げよう。」

ユージオ「キリト、頼む。」

キリト「……………分かった。」

俺は、ユーリ達に加勢する。

未だに、カルムはソードゴーレムを掴んだまま、動いていないが、大丈夫だよな。

すると、アドミニストレータも、カーディナルが何をしようとしているのかに気づいたのか、カーディナルの方を向く。

アドミニストレータ「リセリスが……!!何をしている!!」

ユーリ「カーディナル達の邪魔はさせない!」

アドミニストレータが、カーディナルの妨害をしようとするが、俺たちが阻止する。

その中、ユージオとケントの真上に、それぞれの剣が滞空していた。

ユーリ「光と闇……!!これが、始まりに生まれし聖剣の力だ!!」

ユーリはそう言って、オーラを纏った光剛剣最光と闇黒剣月闇を振るう。

光と闇が生成されて、アドミニストレータの後ろで、ブラックホールみたいなのを生み出すも、アドミニストレータに無力化される。

だが、時間稼ぎはできたようで、カーディナルが術式を唱える。

カーディナル「リリース・リコレクション!」

その声と共に、ユージオとケントは、それぞれの剣と一体化する。

カーディナルは、倒れる。

キリト「カーディナル!」

カーディナル「心配ない。それより、見てみよ。美しい……。人の愛……。そして意志が放つ、光……。なんて……。美しい……。」

カルム「そうだな……………」

すると、カルムがいつの間にか俺とカーディナルの隣に来ていた。

カルム side

何とか、ソードゴーレムの意識の中から脱出出来たな。

すると、ユージオとケントが、それぞれの剣と融合していた。

しかも、アリスとイーデイスの記憶の欠片とも融合していた。

だが、記憶の欠片の中の幼い2人の意識は、整合騎士としての2人と融合したはず

……………。

もしかして、あの記憶の欠片の中に居た2人の残留思念が、ユージオとケントに力を貸しているのか？

アドミニストレータ「おのれりセリス……………！余計な真似を……………！術式を模倣しよう、そんな貧相な二振りの剣で、私の殺戮兵器に敵うはずがないじゃない！」

アドミニストレータはそう叫ぶ。

だが、ソードゴーレムは、沈黙したままだ。

それもそのはず。

剣に転換された人々を救う事が出来ないと判断した俺は、せめて、その魂だけでも救うべく、整合騎士の記憶の欠片とその人の魂が、合わさって消滅したのだ。

それゆえ、ソードゴーレムはもう動く事が出来ない。

いつまでも動かないソードゴーレムに、アドミニストレータが動揺している中、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷は、ソードゴーレムに突っ込んでいき、ソードゴーレムは崩れた。

アドミニストレータ「何故……?!?動かないのだ……?!?!」

カルム「俺が、武器にされた人たちの魂を救ったんだ。だから、それはもう、ただの抜け殻だ。」

アドミニストレータ「小賢しい真似を……?!?つまらない悪足掻きをしてくれたものね、ちびっ子は……?!?折角の楽しい記憶に傷がついちやうじゃない……?!?!」

カーディナル「……クイネラ。お主の負けじや。ソードゴーレムはもう居ない。」

アドミニストレータ「……でも、せいぜいプロトタイプを壊すのが精一杯だって事ね。あんなの、これから何百何千と作れるんだから。」

ちつとも懲りてないな。

すると、2人の意識が入った剣が、アドミニストレータに向けられる。

アドミニストレータ「あら……?!?やる気なの坊や達?隙間を突いて私の人形を崩したくらいで、随分と強気じゃない。」

アドミニストレータは、派手な装飾が入った細剣を手にする。

青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷は、氷と雷を纏わせて、光の翼が現れる。

俺とキリトは、即座に動いて、それぞれの剣を掴む。
剣を掴むと、翼は消える。

キリト「2人だけに……………行かせるもんか……………!!」

カルム「ケント、ユージオ。2人は、これまで2人で罪を背負ってきたんだ……………!!
俺たちの分まで……………!!」

キリト「だから、一緒に戦おう。」

カルム「この狂ってしまった世界を、救うために……………!!」

すると、キリトは旧SAOでの服装に変わり、俺も、旧SAOでの服装に変わるが、刃王剣十聖刃が光り、上書きされていく。

その姿は、右肩に竜の装飾がついて、右腰にマントがつく。

この姿は、以前戦った神山飛羽真がなった姿とほぼ同じだ。

この事から、俺は心のどこかで、神山飛羽真に憧れていたのかもしれない。

俺も、神山飛羽真の様な、強い剣士になりたい。

だから、この姿に変わった。

すると、アドミニストレータが細剣を向けてくる。

アドミニストレータ「……………許さぬ。ここは私の世界だ。招かれざる侵入者達に、そのような振る舞いは断じて許さぬ。膝をつけ。首を差し出せ! 恭順せよ!!」

アドミニストレータは、そう絶叫する。

だが、俺たちの答えは決まっていた。

キリト「違う……。あなたはただの篡奪者だ。」

カルム「世界を……。ここに生きる人々を愛さない者に、支配者たる資格はない!!」

アドミニストレータ「愛は支配なり。私は全てを愛する。全てを支配する!!」

そう言つて、俺たちの戦いは幕を開ける。

アドミニストレータは、天山烈波を放つてくるが、キリトは、クロス・ブロックで凌ぐ。

その間に、俺が刃王剣十聖刃と雷鳴剣黄雷で攻撃する。

アドミニストレータは、その攻撃を捌いていくが、対応が遅い。

その理由は、ただ一つ。

アリスとイーディスが言っていたのが、剣を2本持つのは、格好をつけただけの上級貴族と相場が決まっている、と。

その為、二刀流や、異種の二刀流には対応しきれないのだろう。

アドミニストレータ「小癩な……。!でもね。」

カルム「うん?」

すると、アドミニストレータの周囲に、アドミニストレータが持つ剣と似たような色

合いの様々な武器が現れる。

キリト「アレは!？」

アドミニストレータ「私だつてね、刃王剣十聖刃の事に関しては、ある程度は調べていたのよ!」

カルム「なるほどな……!リリース・リコレクション!!」

俺も対抗して、刃王剣十聖刃の記憶解放術を発動して、周囲に火炎剣烈火、水勢剣流水、雷鳴剣黄雷、土豪剣激土、風双剣翠風、音銃剣錫音、闇黒剣月闇、光剛剣最光、煙叡剣狼煙、時国剣界時を召喚する。

アドミニストレータが生成したそれぞれの武器に対抗するように、それぞれの聖剣をぶつけていく。

すると、アドミニストレータが生成した武器は呆気なく壊されていく。

アドミニストレータが動揺する中、キリトが攻撃して、右腕が斬り落とされる。すると、アドミニストレータは絶叫した。

アドミニストレータ「おのれええ!!」

2人はヴォーパル・ストライクを発動する構えを取った。

ある程度エネルギーを貯めると、2人は同時に駆け出していた。

キリト「うおおお!!」

アドミニストレータ「はあああ!!!」

2人のヴォーパル・ストライクは、お互いにぶつかり合い、アドミニストレータの剣が砕け散った。

キリトの黒剣は、アドミニストレータの左腕も斬り落としていた。

すると、アドミニストレータは更に激昂する。

アドミニストレータ「おのれえええ!!」

叫んだアドミニストレータは、何と、己の髪を使つて、キリトを縛ろうとしてくる。

キリトは、黒い剣と青薔薇の剣で迎撃していくが、遂には縛られる。

アドミニストレータ「このまま締め殺してあげるわ!!」

キリト「まだだ………! まだだアア!! 行け、カルム!!」

カルム「ああ!」

俺はキリトの背中を踏み台にして、高く空へと飛び上がる。

アドミニストレータは、対応が遅れていた。

その間に、俺は刃王剣十聖刃を飛ばして、キリトの拘束を解き、俺とキリトは、ヴォーパル・ストライクを、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷で放つ。

2本の剣は、アドミニストレータの胸に突き刺さる。

キリト「ううううおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

カルム「ハアアアア!!!」

アドミニストレータ「あああ……………!!!」

すると、青薔薇の剣と雷鳴剣黄雷に蓄積されたエネルギーが爆発して、俺とキリト、アドミニストレータは吹き飛ぶ。

俺とキリトは、転がっていき、何とか起き上がる事が出来た。

カーディナル達の方を見ると、カーディナルとユーリが結界を張っていた事で、アリスとイーデイスは無事だった。

すると、煙が晴れてくると、胸に二箇所穴が空いたアドミニストレータがそこに居た。

俺たちは、一人の人間の生命を破壊してしまったのだ。

だが、ここで躊躇う事は、カーディナルとユーリの為にも許されなかった。

それは、アドミニストレータの為にも。

すると、アドミニストレータはつぶやく。

アドミニストレータ「……………よもや……………剣が、4本ともに……………金属でないとはね

……………。ふふ、ふ……………。意外……………まったく、意外な結果だわ……………。ここに残るリソースを掻き集めても追いつかない、傷を、負うなんて……………ね。」

どうやら、瀕死らしいな。

アドミニストレータは、崩壊寸前の体の向きを変えて、ぎこちなく歩き始める。

俺たちも、痛む体を必死に動かして、アドミニストレータを追う。

すると、アドミニストレータは立ち止まる。

アドミニストレータ「ふ、ふ……………。こうなれば、仕方……………ないわ。予定より、随分と早い……………けれど、一足先に、行かせて、もらうわね。」

キリト「な、何を……………!?!」

カルム「言ってるんだ……………!?!」

アドミニストレータは、右足を踏むと、一台のノート型コンピュータが現れる。

キリト「あ、アレは……………!」

カルム「システム・コンソール……………!!」

間違いない。

俺とキリトが追い求めていた物だ。

アドミニストレータは、銀髪先端で素早くキーボードを叩く。

すると、アドミニストレータの足元から、紫色の光の柱が出現して、上に向かっていく。

アドミニストレータ「ふ、ふ……………じゃあね、坊や達。また……………会いましょう。今度は、お前達の、世界で。」

キリト「アイツ、まさか……!!?」

カルム「現実世界に脱出する気か!？」

不味い、アイツを放置してはいけない!

だが、俺たちの体のダメージは凄まじく、追えない。

アドミニストレータが、無音の別れを刻んでいく。

すると、コンソールの根元に、誰かが居た。

「
!」
チュデルキン「猊下ああああ………!アタシも、連れて行って、下さいiiiiiiii………」

カルム「チュデルキン!？」

アイツ、死んだんじゃ!？」

俺とキリトが驚いていると、チュデルキンは炎を纏い、アドミニストレータの下に向かっていく。

流石のアドミニストレータも、驚愕の表情が浮かんでいた。

チュデルキンは、アドミニストレータにしつかりと巻き付く。

すると、チュデルキンのみならず、アドミニストレータも炎に包まれる。

アドミニストレータ「放せつ………!放しなさい、無礼者!!」

アドミニストレータのその言葉は、チュデルキンにとって、愛の告白に聞こえたらしく

い。

チュデルキン「あああああ……！遂に……！遂に狛下と一つになれるのですねえええ……！」

アドミニストレータ「貴様如き……醜い道化に……この私が……！」

アドミニストレータの悲鳴混じりの言葉に、チュデルキンの体は形を失い、炎の塊になりつつも、至福の表情が浮かんでいた。

チュデルキン「ああ……狛下……！アタシの……アドミニストレータ……さま……ま……。」

チュデルキンはそのまま消え、アドミニストレータも消えようとしていた。

すると、アドミニストレータの最後の言葉が、聞こえてきた。

アドミニストレータ「……私は……私の世界を……。」

その声と共に、白銀の閃光が周囲を満たす。

しばらくすると、アドミニストレータも、チュデルキンも姿が見えなくなっていた。

キリト「……終わったのか……？」

カルム「……これで、良いのか、カーディナル？」

カーディナル「うむ。終わったのじゃ。」

ユーリ「アイツは、捨てた筈の元老長の愛によって、消えたのだな。」

俺たちが眩く中、カーディナルとユーリが答える。
ユーリは、皮肉混じりだったが。

第47話 戦いの終結と新たな始まり

カルム side

最高司祭アドミニストレータは、チュデルキンの纏う炎に焼かれて、消えた。

キリト「アリス……イーデイス……カーディナル……ユーリ……」

アリス「はい。」

イーデイス「うん。」

カルム「俺たち、勝ったんだよな？最高司祭アドミニストレータに。」

カーディナル「うむ。」

ユーリ「ああ。」

そう言ったカーディナルは、術式を唱えていく。

すると、俺とキリトが持っていた雷鳴剣黄雷と青薔薇の剣が光りだし、ケントとユーリが分離する。

キリト「ユージオ、ケント！大丈夫なのか？」

ユージオ「キリト、カルム。僕は大丈夫だよ。」

ケント「ありがとうございます、カーディナルさん。」

カルム「ケント……………！」

アリス「良かったわ……………！」

イーデイス「ええ……………！」

ユージオ「アリス……………!?!」

ケント「イーデイスも、口調が少し変わったか……………!?!」

アリスとイーデイスの口調が少し変わった事に驚く、ユージオとケント。

俺は、2人に事情を説明する。

それは、ソードゴレムへと変えられた人を救う際に、記憶の欠片の幼い2人が、整合騎士としての2人と融合する事を提案して、整合騎士の方のアリスとイーデイスも了承して、融合した事を。

カルム「つまり、今の2人は、ルーリッド村での記憶が残りつつ、整合騎士としての記憶もある状態って事だ。」

ユージオ「そうなのか……………！」

ケント「ありがとう、カルム……………！」

アリス「8年ぶりね、ユージオ、ケント。」

イーデイス「ただいま！」

そう言って、アリスはユージオに、イーデイスはケントに抱きついて、ユージオとケ

ントは泣いていた。

キリト「そうだ、カーディナル……………！俺たちは、ここに来た理由が……………！」

カーディナル「落ち着けい、キリト。ほら、見てみるのじゃ。」

ユーリ「お前達が守った世界だ。」

そう言つて、窓のほうを指差す。

どうやら、アドミニストレータの術は解除された様で、外には、夜の人界が映つていた。

「俺たちが……………」

「守った……………」

「世界……………」

俺とキリト、アリスとイーデイス、ユージオとケントの順番で言うと、俺とキリトの目からは、涙が溢れてくる。

ユージオ「キリト、カルム……………？」

ケント「もしかして、泣いてるのか？」

キリト「泣いてなんかないよ！大体、誰のせいだと思ってるんだ……………！」

カルム「もし、2人が死んだり、剣になったまま戻れなかつたらって思うと……………！」

キリト「だから、勝手に行くこうとするなよ！」

ユージオ「大丈夫だよ、キリト、カルム。」

ケント「ああ。俺たちは、ここに居る。それに、2人が俺たちと一緒に戦ってくれた。だから、アドミニストレータを倒せたんだ。」

カルム「当たり前だろ。いつだって、俺とケント、キリトとユージオは一緒に冒険してたんだから………！」

俺は、そう言つて泣いてしまう。

その後の言葉は、キリトが引き取ってくれた。

キリト「これまでも、これからも、変わらないんだ。」

ユージオ「そうだね。」

ケント「こうして見ると、毎晩見ていた夜空の星を思い出すな。ここから見る星空も、変わらないんだな。」

アリス「うん。」

イーデイス「綺麗よね………」

ケントの言葉に、アリスとイーデイスが頷く。

ユージオ「世界は僕が思っている以上に小さくて……。例え離れていても、この夜空で繋がっているんだ。」

キリト「ああ………」

ケント「どんな時も、見上げれば夜空はそこにあつて、俺たちを優しく見守つて、包んでくれたんだ。」

ユージオ「何だか、キリトの剣の輝きにも似てるなあ……。そうだ！キリトの黒い剣、《夜空の剣》って名前がいいな……。どうだい？」

ケント「確かに、キリトとその剣なら、出来るのかもしれないな。この小さな世界を、夜空の様に優しく包み込む事が。」

カルム「《夜空の剣》か……。良い名前だな。」

キリト「ああ……。ありがとう、ユージオ、ケント。」

アリス「どうやら、ユージオには命名の才能があるみたいね。」

イーデイス「確かに、キリトと違って。」

キリト「おい。何で最初から俺に命名の才能が無いって、決めつけて掛かってくるんだよ。」

カルム「だって、キリトに命名の才能が無いのは、分かつてる事だろ。当初は、黒いのとしか呼んでなかったんだから。」

キリト「解せぬ……。」

俺の追い討ちに、キリトは少し拗ねてしまう。

それを見て、穏やかな雰囲気になる。

ユージオ「それにしても、君達はずっと、この夜空みたいに僕達のそばにいてくれたんだね。」

ケント「確かに。俺たちの魂には、カルムとイーデイス、キリト、アリスの思い出が刻まれていた。だから、俺たちは孤独じゃなかったんだな。」

キリト「……………ああ。思い出が消え去る事はないんだ。」

カルム「ああ。思い出は、ずっと魂の中にあるからな。」

アリス「そうね。私とイーデイスも、ずっとあなた達を見守ってたんだから。」

イーデイス「そうね。」

その後、俺たちは、一番光る星を探している中、俺はとある事を思っていた。

俺たちは、確かにアドミニストレータを倒した。

だからといって、最終負荷実験が止まる事は無い。

これから先に何が待ち受けているのかは分からない。

それでも、この世界は、確実に変わっていくのだろう。

人々の魂が悩み、迷いながらも、輝く事が出来る世界へと。

すると、カーディナルに声をかけられた。

カーディナル「キリト、カルム。いつまで呆けてるつもりじゃ。お主らにはまだ、やるべき事があるじゃろ？」

キリト「やるべき事……………」

カルム「そうだな……………」

俺とキリトは、アドミニストレータが出したシステム・コンソールの前へと来る。

アリス「これは一体……………」

イーデイス「なんなの……………」

キリト「これは……………外の世界と繋がる為の道具だ。」

ユージオ「外の世界……………」

ケント「アドミニストレータは、お前達の事を、向こう側の人間と言っていた。教えてくれ。お前達は何者なんだ？」

ケントの質問に、俺とキリトは顔を見合わせて、俺が代表で答える。

カルム「俺たちは……………アドミニストレータの言う通り、この世界の人間じゃ無い。この世界の外側にある別の世界……………リアルワールドという場所からやって来たんだ。」

ケント「つまり、記憶がないっていうのは……………」

カルム「ごめん、嘘だ。」

キリト「……………でも、どうして俺たちがこの世界に連れて来られたのか、それについては、俺たちも分からないんだ。だから、リアルワールドと繋がるこの道具……………シ

ステム・コンソールを目指して、ここまでやって来た。」

カルム「ケント、ユージオ……………今まで黙ってきて、済まなかった!!」

俺とキリトは、2人に頭を下げる。

すると、ユージオの声が聞こえる。

ユージオ「……………いいよ、許す。」

キリト「ユージオ……………」

ケント「2人がどこから来たかなんて、俺たちには関係ない。2人がいなかったら、俺たちはルーリッドの村を出ずに、イーデイスとアリスを助けられなかった。ありがとう
な、カルム、キリト。」

カルム「……………こちらこそ、ありがとうな。2人が居なかったら、俺たちもここまで
来られなかったよ。」

ユーリ「話は済んだのか？」

カーディナル「問題はまだまだあるぞ。」

そうだ、問題はまだある。

最終負荷実験の事に関してもだ。

俺とキリトは、システム・コンソールの前に立ち、キリトがコンソールを起動して、

ラーズのスタッフを呼び出す。

キリト「菊岡さん……………!!」

カラム「早く出ろ!!」

だが、変な音が流れて来た。

それは、カタタタ、カタタタタ、という、歯切れの良い破裂音。

この音は、GGGで聞いた、サブマシンガンかアサルトライフルの音だ。

誰かが、戦争系の映画でも見ているのか？

そう思ったが、聞こえて来た声で、違うと思った。

??? 『……………ダメです、A6通路、侵入者に占領されました！後退します!!』

??? 『A7で何とか応戦しろ！システムをロックする時間を稼げ!!』

何が起こっている、ラースで？

俺が首を傾げる中、知らない声が、知っている名前を出す。

??? 『菊岡二佐、もう限界です！メインコンは破棄して、耐圧隔壁を閉鎖します!!』

菊岡『すまん、あと2分耐えてくれ！今、ここを奪われるわけにはいかん!!』

本当に、何が起こってるんだ？

俺とキリトが顔を見合わせて動揺する中、再び菊岡の声がする。

菊岡『比嘉くん、安田くん、ロックはまだ終わらないのか!?!』

比嘉『あと八……………いや、七十秒ッス……………。』

安田『これは……………！菊岡さん！中から呼び出した！違う！アンダーワールドからだ！これは……………！桐ヶ谷君と小野君だ!!』

菊岡『な……………何いつ!?!』

そう言つて、菊岡がマイクを掴んで、叫ぶ。

菊岡『キリト君、カルム君、いるのか!?!そこに居るのか!?!』

キリト「そうだ！いいか菊岡……………！あんたは……………あんたのした事は……………!!」

菊岡『誇りは後で幾らでも受ける！今は僕の言葉を聞いてくれ!!』

カルム「俺も、言いたい事は山ほどありますけど、ひとまず、そっちはどう言う状況なんですか!?!」

俺がそう叫ぶ。

本当にどういふ状況だ……………!?!

菊岡『濟まないが、時間がない！キリト君にカルム君、アリスとイーディスという名の少女と、ユージオにケントという少年を探して保護してくれ！そして……………!』

キリト「探すも何も、今ここに居る！」

カルム「ああ！俺たちと一緒に居る！」

菊岡『何だつて……………!?!』

比嘉『奇跡ツス!!』

安田『嘘だろ……………!!』

俺たちから、アリスにイーデイス、ユージオ、ケントと一緒に居るといふ事を菊岡に伝えると、更なる指示が飛んでくる。

菊岡『よし……………この通信が切れ次第、FLAを1000倍に戻すから、4人を連れてワールドエンドオルターを直指してくれ!』

キリト「目指してくれって……………!」

カルム「いきなりそんなことを言われても……………!!?」

菊岡『時間がないんだ!いいか!オルターは東の大門から出て、ずっと南へ……………!』

???『不味い!!』

菊岡の指示を遮った男の人の声は、逼迫していた。

男の人『奴ら、電気室へ侵入しようとしています!?!』

菊岡『何イ!?!』

比嘉『ヤバいツスよ、菊さん!?!もし奴らが主電源ラインを切断したら、サージが起きる!ライトキューブクラスターは保護されていますが、サブコンの桐ヶ谷君と小野君のSSLに過電流が流れ込んで……………このままじゃフラクトライトが焼かれちゃいます!?!』

カルム「おい、何か不穏な単語が聞こえたぞ!」

菊岡『つ……………！このロック作業は僕がやる！2人は、神代博士と明日奈君、深澄君を連れて、アツパーシヤフトに退避して、2人を保護してくれ！！』

キリト「アスナ……………？」

カルム「ミト……………!?!」

まさか、ラースに来てたのか!?!

どういふ事かと首を傾げると。

男の人『ダメだ……………電源、切れます!!スクリューが止まります!!』

すると、カセドラルの天蓋を突き抜けて、無数の光が落ちてくる。

何か嫌な予感がする。

それが当たると、何か、魂に攻撃をくらった様な感じがする。

すると、刃王剣十聖刃が光り、魂への攻撃が柔らぐ。

何が起こってんだ……………!?!

そういうえば、さつき比嘉さんが、俺たちのフラクトライトが焼かれるとか言ってたな

……………!?!

横を見ると、キリトが倒れていた。

だが、俺も意識を失って倒れる。

第48話 騎士長と補佐の決意

ケントside

キリトとカルムが、そのシステム・コンソールに声をかけていると、緊迫した声が聞こえて来て、しばらくすると、カルムとキリトが、突然倒れる。

俺たちは呆気にと取られていたが、すぐに2人の元に行く。

ユージオ「キリト！」

ケント「カルム！」

アリス「どうしたのよ……!!？」

イーデイス「分かんない……!!！」

ユーリ「カーディナル、分かるか？」

カーディナル「今調べてる最中じゃ！」

俺たちは、カルムとキリトに呼びかける。

だが、キリトは何も反応をしない。

カルムは、少し唸っていた事から、気絶しているだけらしい。

ユーリ「どうだ……!!？」

カーディナル「分からん……………!! どうやら、何らかの神聖術が行使されたようじゃが……………。まずは、2人を安全な所に運ぶぞ。」

ユージオ「分かりました。」

ケント「ただ、カルムの場合は、少し反応があるのに、キリトは何にも反応しないのは、どういう事だ?」

ユーリ「2人を安全な場所に運び次第、この公理教会を立て直すぞ。」

アリス「はい……………」

イーデイス「ええ……………!」

すると、誰かが這い上がるような気配を感じる。

???「おいおい……………!」

???「これは、一体どういう事が起こったら、こうなるんだ?」

ユージオ「あなたは……………」

ケント「まさか……………」

アリス「小父様……………!」

イーデイス「リョウガまで……………!」

そこに居たのは、整合騎士長ベルクローリと、騎士長補佐のリョウガだった。

どうやら、2人はデイーブ・フリーズが解けた様だな。

2人は、どこか安堵するかの様な表情を浮かべる。

ベルクーリ「おう、アリスの嬢ちゃんにイーデイス。無事で良かったぜ。」

リヨウガ「お前達も、無事なようだな。」

ユージオ「……………はい。」

ケント「……………そうですね。」

ベルクーリ「おい、そう警戒するなよ。」

リヨウガ「今は、お前達と剣を交える気はない。」

アリス「小父様とリヨウガ殿は、体は大丈夫なのですか……………!?!」

イーデイス「大丈夫?」

ベルクーリ「おう。嬢ちゃん達が立ち去ってから、しばらくすると術が解けてな。」

リヨウガ「元老長を討ち取ったのではと思い、最上階まで来たのだが、入れなくて、し

ばらく立ち往生していたが、入れるようになり、入ってきたら、この有様という事か。」

どうやら、カルム達は、石にされたリヨウガさんとベルクーリさんと会っていたみた

いだな。

すると、ベルクーリさんとリヨウガさんは、ユーリを見る。

ベルクーリ「お、ユーリじゃねえか。」

リヨウガ「やはり、貴様も協力していたのだな。」

ユーリ「ああ。俺は、この歪んでしまった世界を正すべく戦ったのだ。」
そういうえば、この3人は、一体どういう関係なのだろうか？

そんな風に首を傾げていると、ベルクローリさんとリヨウガさんが尋ねてくる。

リヨウガ「……………さて、それじゃ聞かせてもらおう。一体ここで何があつた？ 最高司
祭陛下とチユデルキンはどうなつた？」

ベルクローリ「そして……………あの坊主たちの近くににいる者が何者なのか、な……………？」
ユージオ「……………分かりました。」

ケント「話します。」

俺とユージオ、アリス、イーデイスは、何があつたのかを2人に説明していく。

カルムとキリトの側にいる人はカーディナルといい、もう1人の最高司祭である事。

カーディナルが、アドミニストレータの独裁を憂い、俺たちに力を貸してくれた事。

アドミニストレータが、整合騎士から奪った記憶の欠片と人界に住む人を犠牲にして
作り上げたソードゴーレムなる物の事。

追い詰められるが、カルムとキリトの尽力により、アドミニストレータを撃破したこ
とを、2人に話す。

ベルクローリ「そうか……………」

リヨウガ「なるほどな……………」

2人は、死者を弔うかの様な表情を浮かべる。

不快感を抱いていたとはいえ、長くアドミニストレータに仕えて来たのだ。

何かしら、思う事があるのだろう。

アリス「小父様……………？リヨウガ殿……………？」

イーデイス「大丈夫？」

ベルクーリ「いや、気にするな。」

リヨウガ「まさか、最高司祭陛下が討ち取られて、あの方が、もう1人の最高司祭とはな。」

そう言つて、ベルクーリさんとリヨウガさんはカーディナルさんを見つめる。

カーディナルさんは、視線を気にせず、俺たちに指示を送る。

カーディナル「兎に角、2人を休ませねばな。どこか、休めそうな場所はあるか？」

アリス「それなら、下の階に、休息室があります。」

イーデイス「そこなら、2人を休ませるのには丁度いいでしょ？」

カーディナル「うむ。では、今からその部屋に繋ごう。」

カーディナルさんが、杖を床に叩くと、ドアが出現して、扉が開かれる。

中を見てみると、ベッドが並ぶ休息室らしき部屋へと繋がっていた。

カーディナル「ユージオ、ケント。2人をこの部屋に連れて行つてくれ。アリスと

イーデイスも、2人を手伝ってくれ。」

アリス「分かりました。」

イーデイス「でも、騎士長とリヨウガはどうするの?」

ベルクーリ「俺たちは心配すんな。」

リヨウガ「それより、お前達も疲れただろう?俺たちは、もう1人の最高司祭とユリから話を聞いておく。お前達は休んでおけ。」

アリス「分かりました。」

イーデイス「…………ケント、ユージオ、私たちを手伝って。」

ユージオ「う、うん…………。」

ケント「分かった。」

俺とイーデイスでカルムを、ユージオとアリスでキリトを肩で背負って、その扉の先へと進む。

俺たちが通ると、扉は消えてしまった。

それぞれで協力しながら、2人をベッドで休ませる。

全く、無茶しやがって。

イーデイス「…………ケント?」

ケント「…………ん?どうした?」

イーデイス「カルムとキリト、目を覚ますよね？」

ケント「分らない。でも、俺は2人が目を覚ますと信じる。」

イーデイス「そうね……。」

そう言つて、イーデイスは俺の肩に頭を乗つける。

俺が首を傾げていると。

イーデイス「ね、久しぶりに、こんな風にしてて良い？」

ケント「ああ、良いぞ。」

イーデイス「ありがとう……。」

そう言つた後、イーデイスから寝息が聞こえてくる。

どうやら、先ほどまでの戦いの疲労がきたようだな。

ユージオとアリスの方を見ると、俺とイーデイスと同じような状況になっていた。

すると、俺も眠たくなって、意識を手放す。

ユースサイド

さて、どう話したものか。

ユージオ達が立ち去ってから、俺とカーディナル、ベルクーリ、リョウガの話が始まる。

ベルクーリ「さて、どういう事か、話してもらおうか？」

カーディナル「そうじゃのう……。それと、アドミニストレータとの戦いで、体力を消耗してしまつたのだな。座りながら構わんか？」

リヨウガ「構わな……。構わないですよ、もう一人の最高司祭様。」

カーディナル「敬語は使わなくてよい。」

そうして、俺たちは、座れそうな瓦礫を見つけて、そこで話を始める。

ユーリ「2人は、カーディナルの事を信じてくれたのだが、どうやら、お前達は半信半疑といった所だろうな。」

ベルクーリ「ああ。あの2人の坊主から話を聞いて、俺たちは戸惑つたさ。」

リヨウガ「だが、イーデイスはともかく、あの堅物のアリスが信じているのだ。それに、あの様な神聖術を目の当たりにすれば、納得せざるを得ないしな。」

ベルクーリ「それにしても、アリスの嬢ちゃんといーデイス、少し雰囲気が変わつたか？」

ユーリ「そうだな。俺からも、整合騎士の秘密を語るとしよう。」

そうして、俺は整合騎士の秘密を語っていく。

だが、2人は余り驚いていなかった。

どうやら、ユージオとケントが話していたみたいだな。

ベルクーリ「まさか、あの2人の坊主……。いや、ユージオとケントから聞いた事と

全く同じとはな。」

リヨウガ「つまり、真実という事か。」

カーディナル「うむ。わしに対抗するべく、駒として、整合騎士を生み出した。………
じやが、クイネラは、それだけで満足しなかつた。」

ベルクーリ「ユージオとケント達が言つてた、剣の人形つて奴か？」

リヨウガ「確か、ソードゴレムと言つていたな。」

ユーリ「ああ。クイネラは、ソードゴレムがあれば、ダークテリトリイすらも蹂躪
できると高を括つていた。その結果、整合騎士達の大切な人達三百人が、犠牲になつ
た。」

ベルクーリ「………俄には信じられねえ話だな………。」

リヨウガ「そうだな………。」

それはそうだな。

長年仕えてきた人が、そんな事をしてしていると知つたら、信じられないよな。

だが、意識を変えたようだな。

ベルクーリ「つまり、最高司祭陛下は……。」

カーディナル「………カルムとキリトの連携で重傷を負い、逃げようとしたが、チュ
デルキンに止めを刺された。」

リヨウガ「なるほどな……。さて、レイカ達にはどのように説明するかな……。」「
ユーリ「だが、隠すことは不可能だ。アドミニストレータとチュデルキンが倒れたと
は言え、ダークテリトリーの侵攻がなくなった訳じゃない。」

そう、究極の課題がまだ残っているのだ。

ダークテリトリーからの侵略。

ベルクーリ「それは、俺たちも懸念しているんだが……。闇の軍勢が攻めてくるの
は、後、どれくらいなんだ？」

ユーリ「恐らく、半年後……。または一年後に、闇の軍勢が攻めてくるだろうな。」
リヨウガ「時間がないか……。」

カーディナル「ああ。」

そう、余りにも時間がないのだ。

すると、ベルクーリとリヨウガは、決意が満ちた表情を浮かべる。

ベルクーリ「それで、俺たちはどうすれば良いんだ？」

ユーリ「どういう意味だ？」

リヨウガ「最高司祭とチュデルキンが倒れ、元老院も機能を停止。セントラル・カセ
ドラルは現在、風前の灯だ。だからこそ、あなたに判断を仰ぎたい。」

カーディナル「……よいのか？ わしらは、お主達の主人を殺した一派なのだぞ？」

その言葉に、ベルクーリとリヨウガは、それぞれの剣を握るが、決して抜刀はしなかった。

リヨウガ「……………そんな事をしている暇があるのなら、闇の軍勢の侵攻に備えるべきだと、俺は思う。」

ベルクーリ「そうだな。それに、幾ら偽りの存在であつても、俺たちの使命は、何ら変わらねえからな。」

ユーリ「そうか。」

カーディナル「なら、お主らの判断に委ねるとしよう。」

ベルクーリ「分かった。」

リヨウガ「そうさせてもらう。」

ユーリ「それはそうと、ファナテイオとレイカを大図書館から出さないとな。」

カーディナル「そうだな。」

ベルクーリ「何……………?」

リヨウガ「……………?」

その後、ベルクーリとリヨウガは、大図書館からファナテイオとレイカを連れて、現在、カセドラルに残っている整合騎士達に説明をしていた。

俺たちは、元老院へと来ていた。

ユーリ「酷い事をするものだな。」

カーディナル「そうじゃのう……。一先ず、わしが彼らを解放しよう。」

ユーリ「良いのか？」

カーディナル「問題ない。」

そんな風に話している中、ベルクーリとリヨウガが、エルドリエを連れてやって来た。

エルドリエは、元老院の実態と氷漬けにされた騎士達を見て、驚いていた。

エルドリエ「こ、これは……。!？」

ユーリ「これが、真実だ。」

エルドリエ「何者だ？」

ユーリ「俺はユーリ。光の剣士だ。」

ベルクーリ「エルドリエ。これを見て、まだ納得しないのか？」

エルドリエ「……。納得せざるを得ませんね……。」

リヨウガ「いつ見ても、酷い光景だ。」

その後、エルドリエは、無理矢理納得したような表情を浮かべ、ベルクーリとリヨウ

ガと共に立ち去って行った。

その際に、カーディナルの事を聞いたが、それも無理矢理納得していた。

カーディナルが元老院の人物を解き放つと、安らかな表情を浮かべながら消えていつ

た。

俺は、一度大図書館に戻り、聖剣を確かめっていると、火炎剣烈火が光っていたのだ。
ユーリ「まさかな……………」

俺は、火炎剣烈火を手に、ケント達の下へと向かっていく。
何故、火炎剣烈火が光っているのかを確かめる為に。

第49話 それぞれの現状

ケントside

俺が意識を手放してから、しばらくが経った。

目が覚めると、イーデイスがいなかった。

俺は、ベッドに横たわっていて、少し寂しく感じてくる。

それにしても、イーデイスが、整合騎士としての記憶を維持したまま、元に戻る事が出来るなんてな。

カルムのおかげだな。

だけど、当のカルムは、目を覚ましていない。

どうすれば良いんだ……………。

すると。

カルム「うう……………。イテテ……………」

そんな呻き声がして、後ろを振り向くと、カルムが起き上がっていた。

ケント「カルム！大丈夫か!」

カルム「あ、ああ……………。ケント、何で俺、ここにいるんだ？ていうか、アドミニス

トレータを撃破した直後の記憶が曖昧なただけだ。」

ケント「そ、そうなのか……………」

どうやら、記憶が一部消えてしまったのだろう。

だが、消えたのは、あくまでアドミニストレータを撃破した直後なのか。

ケント「無事でよかったよ。」

カルム「あ、ああ……………。そうだ、キリトはどうしたんだ!?!」

ケント「……………キリトは、お前と同じ時に気絶して、未だに目を覚まさない。」

カルム「何だって……………!?!」

カルムは、驚愕の表情を浮かべて、キリトに近寄る。

すると、顔を悔しそうに歪める。

カルム「すまん……………!」

ケント「お前の責任じゃない。」

カルム「ケント……………悪いな。」

ケント「気にするな。俺も、イーデイスを救ってくれた恩があるからな。」

そんな風に話していると、ユーリ、アリス、イーデイスがやって来た。

カルムが目を覚ました事に気がつくのと、皆驚いていた。

アリス「カルム!目が覚めたのね!」

カルム「ああ。心配かけたな。」

イーデイス「大丈夫よ。」

ユーリ「それより、カーディナルから、お前らの今後の扱いについて、知らせる事がある。」

ケント「今後の扱い？」

そう言つて、ユーリは、椅子に座る。

その直後、ユージオも目が覚めたようで、ユージオも話を聞く体勢を取る。

ユーリが語つたのは、現状、俺たちは軟禁状態になるらしい。

カルム「軟禁か……。まあ、妥当だろうな。」

ケント「そうなのか……。？」

アリス「とにかく、しばらくはここで大人しくしていてね？」

イーデイス「そうそう、整合騎士の中でも、エルドリエとか、一部の整合騎士は、ケント達を処刑すべしとか言ってるから、あまり彷徨かない方がいいわよ。」

ユージオ「分かった。」

ユーリ「それと、カルム。お前に渡しておきたい物がある。」

カルム「俺に？」

ユーリは、そう言つて、布包みを取り出す。

布を取ると、一本の剣が現れる。

それは、刀身自体は、俺の雷鳴剣黄雷とほぼ同じだが、俺の黄色い部分が、赤になっ
ていて、柄の部分も、炎を思わせるような装飾がついていた。

カルム「これって……………」

ユーリ「ああ。火炎剣烈火だ。」

ケント「火炎剣烈火……………」

ユージオ「でも、なんでカルムに火炎剣烈火を持たせるんですか？」

ユージオの、尤もな質問に対して、ユーリは答えた。

ユーリ「ああ。実は先ほど、大図書館に行つて、聖剣を見ていたのだが、火炎剣烈火
だけが光つていてな。まさかと思い、カルムに渡しに来たのだ。」

カルム「……………俺に？」

ユーリ「ああ。どうやら、長さが違う剣を2本持った時が、お前の本気だと分かつた
からな。これから先は、戦争が起きる。本気でかからないと、死ぬぞ。」

カルム「分かつた。」

ユーリの言葉に、頷いたカルムは、火炎剣烈火を手にする。

しばらく振っていると。

カルム「うん。ものすごく手に馴染む。」

ユーリ「そうか。」

ケント「良かったな。」

アリス「じゃあ、私たちはちよつと出かけてくるわね。」

イーデイス「整合騎士の間で、少し会議があるからさ。」

ユージオ「分かったよ。」

そう言つて、アリス、イーデイス、ユーリは立ち去つていった。

立ち去る前に、カルムを連れていった。

しばらくして、カルムが戻つて来る。

すると、カルムが話しかける。

カルム「良いのか？」

ユージオ「え？」

ケント「何がだ？」

俺とユージオが首を傾げていると、カルムが少し呆れたように言ってくる。

カルム「ユージオはアリスと、ケントはイーデイスと一緒に居たいんじゃないのか？」

ユージオ「……………そりゃ、出来る事なら、一緒に居たいよ。」

ケント「だが、イーデイスとアリスは、整合騎士としての仕事がある。あまり、負担

は掛けたくないんだ。」

それを聞いたカルムは、呆れながらも、笑いながら言葉を放つ。

カルム「別に、良いんじゃないのか？」

ユージオ「え？」

ケント「どういう事だ？」

カルム「多分、イーデイスとアリスも、ケントとユージオと一緒に居たいと思ってる
と、俺は思うよ。」

その言葉に、俺とユージオが首を傾げていると。

カルム「どうやら、お互いに思ってる事は同じってわけか。」

ケント「何か言ったか？」

カルム「いや、なんでもない。」

そんな風にはぐらかすので、止むなく追及を止める。

カルム side

はあ、考えてる事は一緒か。

実は、イーデイスとアリスが、会議場に向かう直前、俺を連れ出したのだ。

ユーリは、一足先に向かったが。

カルム「どうしたんだよ？」

アリス「実は、相談があるの。」

カルム「相談？」

イーデイス「うん。……………どうにかさ、私はケントと、アリスはユージオと一緒に居たいのよ。」

カルム「ふむふむ。」

アリス「どうにか出来ないかしら……………？」

カルム「……………。」

そう言われたのだ。

どう答えたものかと悩んだ。

というか、どうしろと？

俺、軟禁されてる罪人だよ？

どうにも出来ないだろ。

アリス「……………あ、別に、あなたにどうにかして欲しいって意味じゃないから。」

カルム「……………なら、俺に聞く必要、くない？」

イーデイス「一応よ。」

カルム「さいですか。」

本当にどうしろと？

一応、案が無くは無いのだが、これは、あまりにも現実的ではない。

だが、一応、言ってみるか。

カルム「……………ならさ、いつその事、ユージオとケントの2人を、整合騎士にするのはどうだ？」

アリス「え？」

イーデイス「……………それ、本気？」

カルム「……………一応、思いついたから言ってみただけだ。」

ダメだよな。

いくらなんでも、罪人が整合騎士になるとか、絶対反発が凄い。

だが、アリスとイーデイスは、俺を放って話していて、口を開く。

アリス「悪くない考えね。」

イーデイス「そうね！ユージオとケントは、騎士長とリヨウガを倒してるんだし！」

カルム「あれ……………？」

あれ？

何か、話が変わる方向に行ってる気がするぞ。

俺、適当に言っただけだから！

すると、先に行った筈のユーリが戻って来ていた。

ユーリ「何の話をしている？」

アリス「あ、ユーリ殿。」

イーデイス「実はね、カルムが、ケントとユージオを整合騎士にした方が良いんじゃないかって言ったのよ。」

カルム「やめて、適当に言っただけだから。」

ユーリ「最高だな！」

カルム「えっ。」

待つて、ユーリまで賛同しないで！

これ、後で絶対怒られる奴だ。

やっちまった……………。

すると、ユーリが話しかけてくる。

ユーリ「カルム。暫くは、刃王剣十聖刃ではなく、火炎剣烈火を主体に戦え。」

カルム「それは良いけど、なんで？」

ユーリ「今回の記憶解放術で、刃王剣十聖刃の天命が大きく損耗した。暫く休ませろ。」

カルム「分かった。」

俺は、ユーリから忠告を受けた。

その後、アリスとイーデイスがウキウキしながら、ユーリと共に、会議場へと向かう。

カルム「……………ユージオとケントには、決まったら言つて、蹴られたら黙つておこ
う。」

俺はそう呟いて、部屋へと戻る。

そうして、今に至る。

イーデイス side

私達は、カルムが提案した事を、騎士長、リヨウガ、ファナティオ、レイカ、カーディナルに伝える。

すると、皆が驚くような表情を浮かべる。

ベルクーリ「なるほどな……………」

リヨウガ「そう来るか……………」

ファナティオ「しかし、良いのですか？」

レイカ「この様な事態は、初になるので、対応が難しいですね。」

カーディナル「じゃが、ベルクーリとリヨウガを打ち破つたのは事実。実力は確かだ。」

そんな風に話し合っていた。

すると、1人の修道士が駆け込んできた。

修道士「せ、整合騎士様！」

「フアナテイオ「何事ですか？今は、騎士だけが参加を許される重要な会議の最中なので。」」

修道士「も、申し訳ありません！ですが、非常事態でして……………」
ベルクーリ「構わねえよ。言ってみろ。」

その修道士が言った言葉に、私は首を傾げてしまう。

修道士「そ、それが……………ええと……………空から人が……………」

レイカ「空から人が？あまり我らを愚弄しない方が……………」

修道士「ほ、本当なのです！上空から、セントラル・カセドラルの一階へ、突如、謎の2人の人物が舞い降りて来たのです!!」

リヨウガ「その2人は、何と言っている？」

修道士「そ、それが、キリトとカルムという人物を、探しに来たと言っています

……………」

その言葉に、私とアリスは顔を見合わせる。

アリス「キリトとカルム……………」

イーデイス「騎士長、リヨウガ！」

ベルクーリ「ああ。」

リヨウガ「何にせよ、油断するな。」

私とアリスは、その空から舞い降りた人物達の所に向かう。

第50話 真相の解明と決意のダイブ

深澄 side

あの護衛艦が離れた時の胸騒ぎは、現実となった。

なんと、謎の一団が、このオーシャン・タートルを襲ってきたのだ。

私たちは、何とかサブコントロールルームへと避難できた。

その際に、メインコントロールルームは謎の一団に奪われてしまった。

比嘉「よし、これでOKッス。」

安田「サブコントロールルームが使えるようになったぞ。」

そんな中、私と明日奈は、菊岡さんに詰め寄って、胸ぐらを掴む。

明日奈「このままキリト君とカルム君の意識が戻らなかつたら、私たちは、あなたを絶対に許さない。」

深澄「そこら辺は、分かっているんでしょね？菊岡さん。」

私と明日奈の言葉に、菊岡さんは両手を顔の横に上げる。

菊岡「分かっているよ。僕の責任に於いて、キリト君とカルム君は必ず回復させる。」

その言葉に、私と明日奈は、胸ぐらを離して、よろける。

すると、神代博士が支えてくれた。

凜子「大丈夫よ。絶対に大丈夫。彼らは必ず帰ってくるわ、あなた達の所に。」

明日奈「……………はい、そうですね。」

深澄「すみません、取り乱して。」

菊岡「さてと……………。現状を整理しようか。」

謎の部隊からの襲撃を受け、戦場と化したオーシャン・タートル……………サブコントロール・ルームのシステムを起動させることに成功し、ひとまずは安堵の息を吐いた菊岡さんが場を取り纏め始めた。

菊岡「中西一尉、防護壁の閉鎖は完了したか？」

中西「はい。第一・第二耐圧隔壁の完全封鎖、及び非戦闘員の船首ブロックへの退避完了を確認致しました。」

菊岡「そうか……………。隔壁はどれくらい持ちそうだ？」

中西「爆発物を使われれば、破られる可能性はありますが……………。おそらくそれはないでしょう。」

菊岡「そうだな……………。第一隔壁の近くにあるのはライトキューブクラスター……………奴らの狙いが『A・L・I・C・E』の奪取だとすれば、ターゲットを破壊するような工作は避けるだろうから……………。人的被害はどうなっている？」

中西「民間プロジェクトチームのメンバーに負傷者3名、我々自衛隊の戦闘員は重症2名、軽傷2名……。いずれも生命の危険はないとのことです。」

菊岡「船体の被害状況はどうだ？」

中西「船底ドック及びドックからメインコントロール・ルーム間の隔壁は遠隔操作ができません。更に深刻なのは、正電源ラインを切断された影響で……。電力自体は副ラインから各所へ安定供給されていますが、制御系を再起動しないとスクリューを回せません。」

菊岡「なるほどな……。これでは、オーシャン・タートルはヒレを失くしたウミガメと言っても同然の状態になってしまったわけか……。おまけに腹に鮫が喰いついたままとは……。」

中西「ロシアシャフトの一番から一二番までの区画も……。完全に占拠されてしまいました。」

安田「……………」

中西の報告を聞きながら状況を分析する菊岡さんの他所で、安田博士は、何かを考えていた。

菊岡「ふう……。メインコントロールと第一STL室、そして、原子炉までが軒並み制圧されたわけか……。不幸中の幸いが破壊ではないといったところか……。」

そうでなければ、もうここも爆弾か何かを使つて突破し、占拠もしくは破壊工作をもつと仕掛けてこないと不自然だからな。だが、そうになると、連中の正体が何者なのかという話になるわけだが……。比嘉君、何か意見はあるかな？」

そう聞かれた比嘉さんは、コンソールを操作し、大画面のモニターに襲撃時の録画像を一時停止の状態で映し出した。

比嘉「この映像を見て下さい……。奴らの装備の色、形……。これはどつかの正規軍の物ではないツスね。」

安田「体格の平均値から推測して、おそらくですがアジア人ではないでしょう。」

菊岡「つまり……。連中は少なくとも我が国の特殊部隊ではないわけだ……。そいつは喜ばしいね。そして、もう一つ確かなことがある。」

比嘉さんと安田博士の考察に、菊岡さんは苦笑したが、すぐに表情を引き締める。

菊岡「この連中はプロジェクト・アリシゼーションの存在を知っている、ということだ。」

比嘉「まあ、そうなるツスね……。さっきの襲撃の手際の良さと、この映像を見る限り、迷わずメインコントロールまで駆け上がってきましたからね……。」

安田「奴らの目的は菊岡さんが推測した通り、『A. L. I. C. E.』の奪取でしょう。」

すると、安田博士が何かを決意するかのような表情を浮かべる。

安田「菊岡さん。少し話があります。」

菊岡「何だ？」

安田博士は、菊岡さん連れて、部屋の角の方に行く。

すると、菊岡さんが何かに驚いた様なりアクションをして、戻ってきた。

しばらくすると、技術スタッフが全員、集まった様な気がする。

安田「さて、技術スタッフは、これで全員ですかね？」

菊岡「一応、そうだが……。」

安田「これから、皆さんに、とある話をしたと思います。」

深澄「話……?」

安田「ええ。この中に、あの襲撃者達を導いた裏切り者が居ます。」

その言葉に、全員に動揺が走る。

それもそうだ。

まさか、この中に裏切り者が居ると言われたら、動揺するでしょうね。

安田「この際、単刀直入に言います。裏切り者は、あなたですね、柳井さん。」

安田博士は、1人の男性に対して、指を指した。

その人は、動揺していた。

柳井「い、嫌だなあ……。僕が裏切り者？どうしてそうなるんだい？」

安田「実は、ある日、暇になって、感情フィールドを見ると、一つ気になる事があつたんですよ。」

比嘉「感情フィールド……。？」

安田「ええ。それは、右視覚領域に擬似痛覚を注入という外部命令があつたんです。これでは、せつかく人工フラクトライトが制限を突破しかけても、そのプロセスが痛みで消されてしまう。」

柳井「それを、僕がやったという証拠は、あるんですか!？」

安田「ええ。そのコードは、コード871。あなたの白衣にも、同じ871が書いてありましたよ。」

柳井「な……。!？」

安田博士の言葉に、動揺している柳井という人。
だが、それでも、食い下がる。

柳井「そ、そんなの、僕に罪を着させようとする誰かの仕業だ!」

安田「それに、あなたは、あの須郷伸之の部下ですね。」

柳井「……。ッ!？」

明日奈「須郷……。!？」

深澄「伸之……………!!」

菊岡「なっ……………!!」

比嘉「ええっ!!」

その名前には、覚えがある。

それは、明日奈を始めとする一部のSAOプレイヤーを閉じ込めて、魂を書き換えようとした、忌まわしき人物の名前だ。

安田「須郷は、己の研究をアメリカに売ろうとした。だから、アメリカとのコネがある。大方、その襲撃者に助けてもらう算段だったのでしよう？」

柳井「ち、違う!!」

安田「それに、決定的な証拠もあるんです。」

柳井「な、何……………!!」

安田博士は、スマホを取り出して、何かのアプリを起動して、皆に見せる。すると。

柳井『計画は順調です。あとは、オーシャン・タートルの近くを並走している護衛艦が離れるので、襲撃部隊は、オーシャン・タートルに襲撃して、私を拾って下さい。グロージェン・デイフェンス。』

グロージェン・デイフェンスという名前に聞き覚えは無いけど、その声が柳井という

人の物だという事が分かった。

しかも、護衛艦は、襲撃直前にオーシャン・タートルから離れている。

それを聞いて、柳井は、呆然とする。

菊岡「彼を拘束しろ。」

中西「ハッ！」

柳井「や、やめろ！離せ!!」

あつという間に、柳井は拘束された。

拘束されてる柳井の近くに、安田博士が近づいてくる。

菊岡「どうしたんだい、安田博士？」

安田「もう一つ、柳井に聞きたい事がありましたね。」

柳井「何だよ……………?」

安田「アンタ、人界側のシステム・コンソールに何か細工をしたり、人工フラクトラムと接触したな？」

柳井「……………ッ!？」

菊岡「どういう事だい？」

安田「実は、あの襲撃の最中に、システム・コンソールに仕掛けられた何かのプログラムが作動したことを確認したんです。」

深澄「え……………?」

私と明日奈が驚いていると、柳井は、狂った笑い声を出しながら語る。

柳井「そうだよ!あのコンソールに、罌を仕掛けたのは、この僕さ!……………と言つても、僕は彼女にそう提案しただけなんだけど。」

安田「何でこんなことをする?」

柳井「いやねえ、僕の大事なアドミーちゃんを、アイツらは殺した!」

深澄「アドミーちゃん……………?」

柳井「公理教会最高司祭、アドミニストレータ貌下だよ!まさか、あつちから通信してきたのは、驚いたけどね。」

安田「クソ……………!リスト呼び出しコマンドを消し忘れてたのか……………!」

比嘉「ギクッ……………!」

どうやら、比嘉さんのミスで、こんな事になったみたいね。

柳井「まさか、ある意味で僕の仕掛けた罌で、あのキリトつて奴が心神喪失状態になるとはねえ!ザマアみるだよ!僕の大事なアドミーちゃんを殺した報いだ!」

明日奈「……………ッ!」

明日奈が激昂して、柳井を殴ろうとするけど、一足先に私が柳井を殴る。

明日奈「深澄……………」

深澄「……………これ以上、私の親友の大切な人を愚弄するなら、更に殴るけど？」

柳井「……………ッ！そういうえば、アンタもだつたな、深澄さん。なら、ここで死んでもらおうかな……………！」

柳井は、私に襲い掛かろうとするが、即座に取り押さえられ、気絶させられる。サブコントロールルームに、なんとも言えない空気が漂っていた。

すると、菊岡さんと安田博士が謝ってきた。

菊岡「すまない。彼の人選をしたのは、この僕だ。」

安田「こつちも、ミスのせいでこんな事態を招いてしまつて、すまない。」

深澄「……………私は良いですけど、カルムとキリトに殴られる事を覚悟した方が良くんじゃないですか？」

明日奈「そうですね。」

私と明日奈の冷ややかな声に、菊岡さんと安田博士は震える。すると、比嘉さんが口を開く。

比嘉「……………さつき、柳井さんが言つた事ツスけど、事実みたいツス。」

明日奈「……………ッ!？」

比嘉「キリト君のフラクトライトは現在、あまりよろしくないとツスね。」

深澄「どういう事……………?」

比嘉「あの襲撃者達が、電源ラインを切断した結果、サージ電流がSTLに流れ込み、柳井さんが仕掛けた罠と合わさった事によって、キリト君のフラクトライトはダメージを負い、セルフ・イメージを喪失してしまったっす。」

明日奈「つまり……………」

比嘉「現在のキリト君は、自分が誰なのかも、何をすべきなのかも分からず、自分からは何を言う事も、する事もない……………。そんな状態ではないかと……………」

その言葉に、明日奈は呆然とする。

私は、気になる事があり、比嘉さんに質問をする。

深澄「なら、カルムは一体どういう状況なんですか？」

比嘉「……………それが、どうにも分からないっすよ。」

深澄「分からない……………」

比嘉「本来、キリト君と同様にダメージを負うはずが、カルム君だけ、何故か軽減されているんすよ。」

安田「どういう事だ？」

比嘉「どうやら、カルム君が持つ剣のオブジェクトデータが、彼を守ったみたいで……………」

全くもって分からない。

だけど、比嘉さんが叫んだ。

比嘉「ええ、と……………ですね。僅からながらに希望もあります!」

凜子「……………と言うと?」

比嘉「キリト君とカルム君は、まだアンダーワールドへのログインを継続しています。つまり、セルフイメージが損傷したとはいえ、キリト君のフラクトライトそのものはまだ活動し、様々な刺激を受け取っているわけです。ならば、現実世界では無理でも、アンダーワールドでキリト君の魂を癒す事が出来るかもしれないス。」

安田「なるほどな。どうにかして接触して、キリトに赦しを与える必要があると言うことか。」

その言葉に、私と明日奈は頷いて、宣言する。

深澄「私、行きます。カルムの元へ。」

明日奈「私、行きます……………キリト君のところへ……………!」

深澄「多分、カルムは自分を責めてるんだと思う。自分だけが助かって、キリトを助けられなかった事に。」

明日奈「キリト君が……………彼が誰かの赦しを求めているというのなら、私、言っただげたいんです……………。頑張ったねって……………悲しいこと、辛いこともいっぱいあっただろうけど……………君はできる限りのことをしたんだよって……………」

その言葉に、菊岡さんはアンダーワールドの現状について解説し始める。

菊岡「アンダーワールドは今……平穏とは言い難い状況だ。予定されていた最終負荷実験のラストステージに、内部時間で半年後に迫っているからだ。」

凜子「何が起こるのよ？」

安田「人界とダークテリトリーを隔ててきた東の大門の耐久値がゼロになって、怪物の軍勢が人界に雪崩れ込む。人間たちが十分な防衛策を整えていれば、侵略を押し返せる筈だ。」

比嘉「ただ、今回の実験では、キリト君とカルム君の手によって、統治組織である公理教会が壊滅寸前にまで追い込まれてしまいましたから……。どうなるかはなんとも……。」

安田博士と比嘉さんの説明が続く中、菊岡さんは語る。

菊岡「だとしてもだ……。我々の誰かが向こうにダイブしなくてはならない状況かもしれない。侵攻が始まれば、その混乱に乗じて、人界のどこかにいるであろう四人の『A. L. I. C. E.』が殺されてしまうこともありうる。高位のアカウントでアンダーワールドにダイブし、『A. L. I. C. E.』たちを保護しつつ、果ての祭壇……ワールドエンドオールターまで移動して、そこから4人のライトキューブをイジェクトできれば……。」

凜子「そういえば、あなた、桐ヶ谷君と小野君にそう頼んでたわね。」

菊岡「ああ。カルム君が無事なら、すぐにイジエクトしてくれると思っただが。」

深澄「彼の性格上、キリトを置いていくなんて事はしらないと思います。」

安田「俺は、明日奈さんと深澄さんがダイブするのは賛成です。2人は、VRでの戦闘に慣れているはず。」

菊岡「なら、アカウントも可能な限りハイレベルな物を使ってもらった方がよいな……」。比嘉君、スーパーアカウントは使用できるか？」

比嘉「ええっ!? スーパーアカウントは、反動が凄いですよ!」

安田「だが、レベル1の状態のアカウントで送る訳には行かない。」

安田博士がそう語った直後、比嘉さんは反論するのをやめて、スーパーアカウントを使う手続きを始める。

比嘉「分かりました! けど、今使えるのは、ステイシアのアカウントと、ルナリアのアカウントの2つつすよ!」

安田「ちょうど良い。それを使おう。」

菊岡「そういう事だから、2人には、ステイシアとルナリアのアカウントを使ってもらう。安岐君の元へ行きませえ。」

その言葉に、私と明日奈は頷いて、すぐに移動を開始する。

STLルームに到着して、私と明日奈は、カルム達と同じ患者衣に着替えて、安岐さんに点滴を刺してもらっていた。

安岐「準備は良いかしら？ 2人とも。」

明日奈「はい！」

深澄「ええ！」

すると、比嘉さんと安田博士から通信が入る。

比嘉『明日奈さん、深澄さん、聞こえますか？ 二人に使ってもらおうスーパーアカウントについて説明をするので、よく聞いて下さい。』

安田『まず、明日奈さんに使用してもらおうアカウントは、スーパーアカウント01『創世神ステイシア』の方だ。このアカウントは管理者権限として、無制限地形操作のコマンドが使えるんだが、地形操作中はSTLとメインビジュアルライザーの間で、大量のデータが行き来する影響で、フラクトライトに膨大な負荷が掛かる。

だから、無闇に地形を操作するのは控えて下さい。コマンド中に頭痛を覚えたりしたら、すぐにコマンドを中止して下さい……いいですね？』

比嘉『深澄さんが使うスーパーアカウント05『月光神ルナリア』ですけど、一時的に凡ゆる状態異常が無力化できる能力があるんですけど、フラクトライトに少なからずのダメージがあるっす。気を付けてください。』

その忠告を聞いて、私と明日奈は、アンダーワールドへのダイブを敢行する。

比嘉『一応、2人がいる座標の近くに送りますが、誤差がある可能性があるので、注意して下さいっす!』

安田『それじゃあ、頼むぞ!』

深澄「明日奈。」

明日奈「ええ。」

「リンク・スタート!」

その言葉を言うと同時に、私たちはアンダーワールドへとダイブしていく。しばらくの浮遊感がして、目を開けると、そこは、薔薇園だった。

私とアスナが周囲を見渡していると、誰かがやって来たので、要件を伝える。

???「な、何者だ!」

アスナ「私たちはただ、キリト君とカルム君に会いに来たの。」

ミト「私たちに、会わせて。」

すると、その人は、白亜の塔へと向かっていった。

私たちがしばらく待っていると。

???「……あなた達、キリトとカルムを探していると聞きました。」

そこには、金髪に青い瞳の女騎士と、灰色の髪に赤い瞳の女騎士が居た。

第51話 運命の再会

ミト side

私たちがアンダーワールドに降り立って、周囲を見渡していると。

??? 「……………あなた達、キリトとカルムを探していると聞きました。」

そこには、金髪に青い瞳の女騎士と、灰色の髪に赤い瞳の女騎士が居た。

誰かは分からないけど、聞いてみるとしましょう。

アスナ 「ええ。そうよ。」

??? 「あなた達、誰？ここはセントラル・カセドラルの敷地内よ？許可なく入るのは許されないわ。」

アスナの答えに、灰色の騎士の方が言葉を言ってくる。

まあ、確かに、不法侵入ではあるけどね。

ミト 「私の名前はミト。こっちはアスナ。あなた達の敵ではないわ。」

??? 「それは、私たちが判断します。」

??? 「あなた達、空から舞い降りてきたって聞いたんだけど。一体、どこからやって来たのよ？」

アスナ「ああ……………驚かせてごめんなさい。本当は、キリト君達の所に直接行ききたかったんだけど……………」

ミト「あなた達がカルム達の事を知ってるのなら、お願い、2人に会わせて。」
私とアスナの言葉に、騎士達は警戒心を顕にしてくる。

???「キリトは今、他人に会えるような状態ではありません。」

アスナ「それは知ってるわ。あと、私はキリト君にとつて、『他人』じゃありません。少なくとも、あなた達とは親しい仲よ。」

???「それを信じてって？」

ミト「お願い、信じて。」

アスナ「それでもダメなら……………！」

???「力づく、ですか。」

ちよつとアスナ！

いくらなんでも、それは悪い対応でしょ！

騎士達も更に警戒してるよ。

しようがない。

私も、クレセント・ムーンという三日月型の鎌を構える。

???「キリト達に会うには、複数の整合騎士を倒して、セントラル・カセドラルの塔内

「入る必要があります。」

「アンタ達2人で、それは無理だと思っただけだね。」

アスナ「私は、キリト君を救う為なら、何でもするわ。」

ミト「私も、カルムに会う為に、この世界に来たんだから。」

「この世界へ……?」

「もしかしてアンタ達、カルム達と同じ、リアルワールドから来た人なの!」

その言葉に、私とアスナは驚く。

「なんで、アンダーワールド人であるこの2人が、そんな事を知ってるの!」

ミト「何で、あなた達は、その事を知ってるの?」

「倒れる直前に、キリトとカルムから聞いたのよ。」

アスナ「それなら話が早いわ。私たちを今すぐ、2人の所に連れてって!キリトが

陥っている事についても分かったのよ。」

「分かりました。キリトとカルムの所に連れて行きます。」

アスナ「ありがとう。」

ミト「ところで、2人の名前は?」

アリス「私はアリス。」

イーデイス「私は、イーデイスよ。」

アリスとイーデイス……………？

確か、菊岡さん達が見つけた禁忌目録に違反した2人の名前よね。

そんな事を考えつつも、私とアスナは、アリスとイーデイスに連れられて、セントラル・カセドラルの中へと入る。

しばらくすると、とある部屋へと入れてくれた。

そこには、2人の男性と、幼き賢者、そして、キリトとカルムがいた。

私は感極まって、カルムの元へと走っていく。

ミト「カルム!!」

カルム「うわっ！ミト……………久しぶり。」

ミト「本当に、心配かけて！」

カルム「それに関しては、本当に済まない。」

アスナの方も、キリトの元へと駆け寄ったが、キリトの状態は、悲惨だった。

何せ、キリトは目を覚ましてはいるが、目が虚ろになっているのだ。

アスナ「キリト君……………！」

キリト「……………。」

アリス「やっぱり、変わらないのね……………。」

???「うん。」

イーデイス「そっか……………」

???「どうか、光素術を使って、天命は回復したが、それ以上は無理だった。」

???「ひとまず、お主らの自己紹介をして貰おうか。無論、わしらも紹介するが。」

そう言われて、私とアスナは、自己紹介をする事にした。

アスナ「初めまして、アスナと言います。」

ミト「私はミト。よろしく。」

カーディナル「わしはカーディナルじゃ。」

ユージオ「えっと、ユージオです。」

ケント「俺はケントだ。」

カルム「アスナ、ミト。キリトの状態に関して、詳しく教えて欲しい。」

カルムにそう言われて、私とアスナは話し始める。

アスナ「キリト君が倒れた理由は、フラクトライト……………魂へ、攻撃をされたからです。」

ミト「それによって、キリトの魂の中心にあるセルフ・イメージと呼ばれるものが喪失してしまったの。」

ユージオ「せるふ……………?」

ケント「いめーじ……………?」

アリス「せるふ・いめーじとは、一体何ですか？」

カルム「なるほど。」

イーデイス「分かるの？」

カルム「セルフ・イメージっていうのは、意思決定を行う場所で、主体や自我とも言える場所だよな？」

ミト「そうよ。」

やっぱり、カルムは、安田博士から、フラクトライト関連の話聞いていたのね。

アリス「主体や自我……？」

イーデイス「どういう事？」

カルム「簡単に言えば、己がどんな人間であるかという自己認識の事だ。」

アスナ「キリト君は、そこを喪失してしまった事で、自閉状態に陥ってしまったんです。」

カーディナル「つまり、わしらからの接触や呼びかけに対して自らの意思で反応する事が出来ない……という事かろう？」

カルム「……………」

それを聞いて、カルムは少し落ち込んでいた。

私はカルムに近づいて、手を握る。

カルム「ミト……………」

ミト「大丈夫よ。カルムのせいじゃない。」

カルム「悪いな……………」

ケント「それはともかく、どうすればキリトを回復させられるんだ？」

アスナ「それは、キリト君の喪ったセルフ・イメージを補完する必要があります。」

イーデイス「どうするの？」

カルム「つまり、キリトと接触して、どうにか、補完する必要があるのか……………」

カーディナル「じやが、そんな事をしている余裕はないと思うぞ。」

そういえば、闇の軍勢の侵攻……………最終負荷実験が近づいているって状況だったわね。

カーディナル「それはそうと、ユージオ、ケント。お主らに話があるのじや。アスナとミトも一緒に来てもらおう。」

ミト「どこにですか……………」

カーディナル「カセドラル50階、霊光の大回廊にじや。」

カルム side

こうして、アスナとミトの2人がやってきて、その際に事情を聞いた。

どうやら、アメリカのグローゼン・デイフェンスという民間軍事企業に所属してい

る特殊部隊が、オーシャン・タートルを襲撃して、メインコントロールルームが乗っ取られたそうだ。

そして、俺の予想通り、ラースに裏切り者がいて、その名は柳井。なんと、あの須郷伸之の部下との事だ。

どうやら、須郷との因縁は、未だに解決していないみたいだな。

そいつが右目の封印を仕掛けたとの事だ。

嫌な予感がするな。

俺も着いて行って、霊光の大回廊に着いた。

そこには、ベルクーリ、ファナテイオ、リヨウガ、レイカの主要整合騎士が居た。

ベルクーリ「なるほどな……………。その2人の嬢ちゃん、空から舞い降りてきた者たちという事か。」

ファナテイオ「まさか、本当に舞い降りてきたなんて……………」

リヨウガ「それは置いておこぞ。」

レイカ「それより、ユージオとケントの2人に話があるのでしよう?」

ユージオ「あ、あの……………」

ケント「俺たちに用事というのは……………」

まさか、あの話か……………!?

やめてくれ、俺を殺さないでくれ!

ベルクーリ「そうだな。ユージオ、ケント。」

リヨウガ「お前たち2人には、整合騎士になつて貰う。」

ユージオ「え?」

ケント「えええええ!!」

やつぱり、驚いてるよ。

まあ、当然の反応だよな。

ユージオ「で、でも、何で……………!!」

ケント「俺たちが……………!!」

ベルクーリ「いやな、お前さんらは、俺とリヨウガを相手に引き分けただろう?」

リヨウガ「それに、カルムから聞いたぞ。最高司祭殿は、お前たちに整合騎士の称号

を与えたのだろうか?なら、問題ない。」

ユージオ「カルム……………!!」

ケント「どういう事だ……………!!」

やつぱりかあ……………。

俺は事情を説明する。

カルム「2人は、アドミニストレータに整合騎士にされた。なら、己の意思で整合騎

士になっても問題ないんじゃないかと思つてな。」

ユージオ「それはそうかもだけど……………」

カルム「それに、これは2人を守る為でもあるんだ。」

ケント「俺たちを……………」

カルム「今、俺たちは反逆者という立場ではあるけど、ユージオとケントは、ベルクーリとリヨウガを打ち破った戦績がある。それなら、文句は無いんじゃないかと思つてな。」

そんな風に言うと、ユージオとケントは黙つてしまう。

まあ、どうするかは、本人達に決めてもらおう。

ベルクーリ「どうする？」

リヨウガ「お前達の意思で決めろ。」

ユージオ「僕たちは……………」

ケント「……………」

ユージオとケントは、葛藤していた。

だが、それもほんの少いで、ユージオとケントは決意に満ちた表情をしていた。

ユージオ「分かりました。」

ケント「俺たちは、整合騎士になります。」

ベルクーリ「おう。」

リヨウガ「よろしく頼むぞ。」

カーディナル「どうやら、上手く纏まった様じやな。」

フアナテイオ「それは良いけど、その2人は誰なの？」

アスナ「私はアスナで、こっちがミト。」

ミト「私たちは、この世界の外側にある世界、リアルワールドからやって来ました。」

レイカ「リアルワールド？」

そこからの解説は、アスナとミトに任せた。

ラースからの使者で、キリトとカルムを助ける為に来た。

そう説明していた。

ベルクーリ「まあ、それに関しては、了解したぜ。」

リヨウガ「だが、人界は今、来るべき闇の軍勢の侵攻に備えなければいけない。」

フアナテイオ「ひとまず、貴方達の実力を確かめさせて欲しいわ。」

レイカ「足手纏いになっては困りますので。」

アスナ「……ええ、良いわ。」

ミト「構わないわよ。」

やばい、2人が怒ってるよ。

レイカさん、一言余計です！

そうして、アスナとミトの実力を測る為に、稽古場に移動した。

そこには、他の整合騎士が居た。

エルドリエ、デュソルバート、フィネル、リゼル、四旋剣などだ。

フアナテイオはアスナと、レイカはミトと対決をする事になった。

フアナテイオ「それじゃ、遠慮なく来なさいね。」

アスナ「ええ、遠慮なく。」

レイカ「あなたの相手は、私です。」

ミト「良いわよ。」

その光景を見ると、俺にケントとイーデイスが近づいていた。

イーデイス「ねえ、あの2人って強いのか？」

カルム「どっちも強いさ。まあ、見てろ。」

ケント「そうか……………」

フアナテイオとアスナは、高速で剣をぶつけ合っていく。

その光景は、まるで、2人から星が放たれ、ぶつかり合っている様に見える。

レイカとミトも、それぞれの武器をぶつけ合っていく。

レイカの高速の剣技も、ミトは大した苦勞もせずに捌いていく。

しばらくすると、ファナティオとレイカは、2人に負けていた。

2人は、ファナティオとレイカの攻撃を、まるでどこに攻撃するか知っているかのようには、2人の攻撃に、ファナティオとレイカがどの様にして逃げるのかを知っているかの如く、正確にそこに繰り返される。

ファナティオ「ま、参りました……………」

レイカ「強い……………」

ベルクーリ「まさか、2人の攻撃を悉く予知するなんてな。」

リヨウガ「未来が見えているのか？」

まあ、アスナとミトは、定期的に戦っているのだ。

アスナは自分自身の、ミトはアスナの動きを熟知している。

そんな事をするのも、造作ではない。

そうして、アスナとミトの実力が認められ、実戦形式での訓練を人界軍にする様にベルクーリ達から頼まれた。

ちなみに、ユージオとケントの整合騎士の叙任は、この後に行われた。

無論、エルドリエからは反発が来たものの、ベルクーリとリヨウガを倒したという言葉に、エルドリエは何も言えなかった。

ちなみに、ユージオとケントを整合騎士に叙任した理由は、他の整合騎士に対しては、

ベルクーリトリヨウガと戦い、実力が認められたからと言う事になっている。

要するに、こんな事態だから、罪を減刑するかわりに、整合騎士として働いてもらうという意向だと説明された。

第52話 集いし剣士たち（前編）

リヨウガ side

俺たちの今後の動きが決まり、俺たちは、ノーランガルス北帝国の皇帝の下へ。

一応、カルムも罪を減刑するという名目で、兵士達の実戦訓練を担当して貰っている。当の本人は、複雑そうな表情を浮かべていたのだが。

そんな事を考えていたうちに、クルーガ・ノーランガルスの下へと着いた。

ベルクーリ「クルーガ・ノーランガルス皇帝。人界軍に協力して欲しい。」

リヨウガ「闇の軍勢に備える為にも、頼む。」

クルーガ「ふうむ。」

俺たちは、クルーガ・ノーランガルスに協力を頼んだ。

だが。

クルーガ「それは、無理な相談だな。」

ベルクーリ「何故だ……?!」

クルーガ「ノーランガルスを守る事こそが、我が軍の使命であり、いざという時には、

最後の砦となる所存だ。」

リヨウガ「……………」

クルーガ「という事で、お引き取り願おう。」

ダメか……………」。

俺とベルクーリは、仕方なく諦めた。

ベルクーリ「まあ、予想通りだったな。」

リヨウガ「仕方あるまい。次は、ノーランガルス帝立修剣学院に向かうぞ。」

俺とベルクーリは、ノーランガルス帝立修剣学院へと赴いた。

俺たちが客室に通され、少し待っていると、教官がやって来た。

アズリカと名乗った教官が、話しかけてくる。

アズリカ「お待たせ致しました。整合騎士ベルクーリ殿とリヨウガ殿がどの様なご用件でしょうか？」

ベルクーリ「いや、何。大した事じゃねえよ。」

リヨウガ「少しばかり、協力して欲しい。……人界軍の結成にな。」

男性教官「じ、人界軍!？」

女性教官「一体どういう事ですか？戦が始まるとでも……………!？」

アズリカのすぐ近くにいる2人の教官が驚く様な声を上げる。

当然の反応だと思い、気にしないでおく。

ベルクーリ「まあ、そういう事だ。人界を守る為には、アンタらの力を借りなきゃならねえ。」

女性教官「そ、それでしたら……皇帝陛下にお頼み申し上げればいいのでは……？」

男性教官「そうですよ！我々は、ただの修剣学院の教師です！」

リヨウガ「無論、頼んでみた。だが、断られてしまったな。」

ベルクーリ「ノーランガルズを守る事こそが我が軍の使命であり、いざという時には最後の砦となる所存、だそうだ。」

リヨウガ「筋は通っているがな。」

そんな風に肩をすくめていると、教官達が言葉を紡いでいく。

男性教官「そ、そもそも人界の平和は……。」

女性教官「ええ、そうです。その為に公理教会が……。」

リヨウガ「……ああ。それは本来、俺たち整合騎士の仕事だ。」

女性教官「いえ、その……整合騎士の皆さんを責めている訳ではないのです！」

ベルクーリ「良いって事よ。それは俺たちも分かってる。」

リヨウガ「ただ、現実問題として、闇の軍勢は、俺たちの力では対抗しきれない。」

ベルクーリ「どうしても、軍隊……人界軍を結成する必要があるんだ。」

そう語ると、これまでずっと黙っていたアズリカが口を開く。

アズリカ「それで、この修剣学院にいらした。そういう訳ですね。」

ベルクーリ「ああ、その通りだ。情けねえ話だがな。」

リヨウガ「ここは、青薔薇の剣を持つユージオに、雷鳴剣黄雷を持つケント、刃王剣十聖刃を持つカルム、そして、黒い剣士キリトが剣の腕を磨いていた場所なのだろう？」

アズリカ「なるほど、やはりあの4人に会われたんですね。当学院自慢の修剣士です。」

ベルクーリ「ああ、そうだろうとも。………本来なら、一緒に来たかったぜ。」

アズリカ「そうですか………。」

アズリカは、何かを想う様な表情を浮かべていた。

本当に、心の底から4人を想っていたんだらうな。

ベルクーリ「それでだ、この卒業生には腕利きが多いと聞いてな。」

リヨウガ「だから、協力を頼みたい。その為にここに来たのだ。」

アズリカ「分かりました。そういう事でしたら、私から声をかけましょう。」

男性教官「アズリカ寮監!何を言っているのですか!？」

女性教官「そうですよ!幾らあなたが爵士でも、我々の同意なしに………!」

アズリカ「人界の危機なのでしょう?責任は私がかかります。」

男性教官「責任を取ると言っても………!」

アズリカ「……………ベルクーリ様、リヨウガ様、ちよつと……………」
ベルクーリ「ん？何だ？」

アズリカ寮監に連れられて、少し部屋の隅の所に向かう。
すると、とんでもない事を言つたのだ。

アズリカ「……………最高司祭様は、身罷られたのですか？」

ベルクーリ「……………!？」

リヨウガ「な……………!？」

アズリカ「……………」

ベルクーリ「……………よし、今後の事は、こちらのアズリカ寮監と話す。他の者は退室してくれ。」

男性教官「そ、そんな勝手な……………!」

リヨウガ「退出してくれ。」

女性教官「わ、分かりました！アズリカ寮監、責任はあなたにありますからね！」
そう言つて、2人の教官は退室した。

俺とベルクーリは、アズリカ寮監に訳を聞く事にする。

ベルクーリ「で……………何故分かつた？」

アズリカ「最高司祭様が生きておられるのであれば、あなた達がこちらにいらつしや

る事はないでしょう。そもそも、人界軍の結成などという話にはならないはずですよ。最高司祭様は既に亡く、あなた達が統率しているのだろうと考えました。」

リヨウガ「確かに、今の公理教会を仕切っているのは、もう一人の最高司祭様だが、それは出来る限り漏れない様になっている。」

ベルクーリ「……お前さん、何を知っている?」

アズリカ「私が知っている事は、ほんの僅かの事実です。整合騎士の皆さんや、公理教会の方に及ぶべくもない。ですが、それを話すと存外に長くなってしまう。それに、もう一人の最高司祭様がいる事は知りませんでした。」

どうやら、カーディナルの事は知らない様だな。

だが、何故それを知っているのかは気になるな。

リヨウガ「なるほどな。それは相当に気になるのだが……。」

ベルクーリ「今はゆっくりと語り合ってる暇はねえ。」

アズリカ「無論、この事を私から話す事は、三神に誓って絶対にありません。」

ベルクーリ「ああ、信用するぜ。」

リヨウガ「だが、時が来たら教えてほしい。」

アズリカ「はい。」

ひとまず、この話は終わりにして、本題に入る事にする。

ベルクーリ「さて、じゃあ、本題に入るとするか。」

アズリカ「承知しました。」

リヨウガ「先ほど話した人界軍の結成についてだが……………」

アズリカ「ノーランガルス内で、協力してくれそうな貴族は既に選定しております。後ほど、一覧にしてお渡し致します。」

ベルクーリ「そいつは手回しが良いな。助かるぜ。」

アズリカ「また、既に協力を申し出てくれた者達も居ます。」

リヨウガ「それは、手回しが良すぎるぞ。……………本当に漏れてないのだろうか？」

その言葉に、アズリカ寮監は頷き、声を出す。

アズリカ「セルルト衛士長、ウエインライト衛士長、バルトー衛士、バルキリア衛士、

こちらへ！」

ソルティリーナ「はっ！ソルティリーナ・セルルト、入室致します！」

タカトラ「タカトラ・ウエインライト、入室致します！」

ゴルゴロツソ「ゴルゴロツソ・バルトー、失礼します！」

ユア「ユア・バルキリア、失礼します！」

そう言つて、2人の男性に2人の女性が入室して来た。

ベルクーリ「この4人が？」

アズリカ「この方達は、当学院の卒業生です。剣の腕は、私が保証致します。4人は既に従軍しておりましたが、今回話をした所、喜んで人界軍に参加してくれるとの事でした。」

リヨウガ「そうか。俺はリヨウガ・シンセシス・スリーで、コイツはベルクーリ・シンセシス・ワンだ。よろしく頼む。」

ソルテイリーナ「ソルテイリーナ・セルルト衛士長であります！お目にかかれて光榮です、整合騎士様！」

タカトラ「同じく、タカトラ・ウエインライト衛士長であります！整合騎士様！」

ゴルゴロツソ「ゴルゴロツソ・バルトーです！よろしくお願ひします、整合騎士様！」

ユア「ユア・バルキリアです！よろしくお願ひします！」

そう言ってくるので、俺とベルクーリは苦笑しながら、答える。

ベルクーリ「その、整合騎士様ってのは、やめてくれ。」

リヨウガ「俺たちには、リヨウガとベルクーリという名前がある。」

ソルテイリーナ「はっ！では、ベルクーリ様、リヨウガ様！」

タカトラ「我らの軍は、武装を整え、いつでも出撃できる状態です！」

リヨウガ「それはまた、手際が良すぎるくらいだな。」

俺がそう呟きながらアズリカ寮監を見ると、アズリカ寮監が答えた。

アズリカ「整合騎士の方々が、皇帝陛下の元へ行かれた、という話は聞いておりました。その後、修劍学院にいらつしやるとなれば……推察するのは容易です。」

ベルクーリ「ありがとうよ、そっちの4人もな。」

ソルテイリーナ「いえ、人界の危機となれば、そちらに従軍するのは、貴族の務めであります！」

タカトラ「セルルト衛士長と同じです！」

ゴルゴロツソ「俺たちは貴族じゃねえ……いや、無いですが。」

ユア「ソルテイリーナとタカトラと同じです、ベルクーリ様！」

アズリカ「セルルト三等爵士はキリトの、タカトラ三等爵士はカルムの、ゴルゴロツソ衛士はユージオの、ユア衛士はケントの上級修劍士でした。彼らの劍技と精神は、この方達が鍛え上げたのです。」

なるほどな。

それなら、大丈夫だろうな。

ベルクーリ「ほう、あの4人の……。そいつは期待出来そうだな。」

リヨウガ「厳しい戦いになると思うが、頼むぞ。」

「はっ！」

ゴルゴロツソ「喜んで！」

ユア「この人界を守ってみせます！」

ソルティリーナ「では、これから出撃を伝えて参ります。」

タカトラ「失礼します、ベルクーリ様、リヨウガ様！」

そう言つて、4人は退室していく。

すると、アズリカ寮監が話しかける。

アズリカ「それと……………可能であれば、後4人従軍させたい者がいるのですが。」

ベルクーリ「ほう……………」。

リヨウガ「その者達も、卒業生なのか？」

アズリカ「いえ、そうでは無いですが……………。入りなさい、4人とも。」

ティーゼ「失礼します！ティーゼ・シュトリーネン修劍士、入ります！」

ロニエ「同じくロニエ・アラベル修劍士、入ります！」

ルナ「同じくルナ・カウマン修劍士、入ります！」

シオリ「同じくシオリ・ヒューレット修劍士、入ります！」

ベルクーリ「おおい、修劍士つてまさか……………」

すると、4人の少女が入ってくる。

アズリカ「はい、当学院の初等鍊士です。」

ベルクーリ「……………幾ら人員が不足してるといっても、初等鍊士を動員するほど人

でなしじゃねえ。」

リヨウガ「ダークテリトリーとの戦争は、訓練とは訳が違うぞ！」

アズリカ「その4人は成長著しく、既に上級修剣士に迫るほどの剣を使えます。」

ベルクーリ「そうは言ってもなあ……………」

ロニエ「お……………お願いします、整合騎士様！」

シオリ「どうか、どうか連れて行って下さい！」

ティーゼ「私たち、先輩達を助けに行くなって誓ったんです！その戦場には、きつと、ユージオ先輩達も居るんですよ!？」

ルナ「アズリカ先生が仰っていました。きつと、この戦争でも先輩達は戦うはずだつて。」

ベルクーリ「ユージオ先輩……………。そうか、お前さんもあの少年達の……………」

リヨウガ「なるほどな……………」

確かに、あの4人の後輩なら、大丈夫な様な気もするが……………。

ベルクーリ「よし、分かった。」

ティーゼ「えっ!？」

ルナ「それじゃあ……………!」

リヨウガ「早とちりするな。まずはお前達の剣の腕を見てからだ。自分の身を守れな

い者を、戦場に連れていくわけにはいかないからな。」

ロニエ「腕を見る……。ええと、誰かと立ち会うのでしょうか？」

シオリ「私たち4人で……。？」

ベルクーリ「いや、俺たちと立ち会ってもらおう。まあ木剣で、だけどな。」

ティーゼ「ええっ!？」

そう決まり、俺、ベルクーリ、アズリカ寮監、ロニエ、ティーゼ、シオリ、ルナは、修練場へと向かう。

ロニエ「せ、整合騎士様と……。手合わせなんて……。」

ルナ「まさか……。」

ベルクーリ「遠慮する事はねえ。刃向かったら禁忌目録違反、なんて事は言わねえよ。」

シオリ「で、ですが……。」

ティーゼ「私たちではとても……!」

リヨウガ「俺たちがこれから向かうのは、戦場だ。敵は、こちらを殺しにかかってくる。俺たちには怖気付くのなら、連れて行く話は無しだ。」

「……………」

ティーゼ「……………やろう、ロニエ、シオリ、ルナ。」

ロニエ「うん。皆で、先輩達の所に行こう。」

シオリ「お願いします！」

ルナ「お願いします！」

「どうやら、覚悟は決まったみたいだな。」

「なら、俺たちも行くでしょう。」

ベルクーリ「よし、良い目だ。」

リヨウガ「アズリカ寮監。少し木剣を借ります。」

アズリカ「どうぞ、お使い下さい。」

俺とベルクーリは、木剣を握る。

ベルクーリ「こういう剣を持つのは、久しぶりだな……………」

リヨウガ「それじゃあ、遠慮なくかかって来い！」

「はい！」

ロニエとティーゼは、ベルクーリの方に、シオリとルナは俺の方に向かってくる。

俺とベルクーリは、4人の攻撃を捌いて行く。

確かに、あの4人が教えていたという事もあって、実力はあるな。

俺たちと初等錬士4人組は、距離をとる。

ベルクーリ「どうした？そんなもんじゃ無いだろう？」

リョウガ「もっと全力で来い。」

俺とベルクーリの言葉に4人は頷き、ほぼ同時に駆け出して行く。

俺とベルクーリは、4人の同時攻撃を、回転斬りで防ぐ。

ベルクーリ「同時つてのは、悪く無いが……………」

リョウガ「身の程知らずの力押しは躊躇いを生み、無駄死にするぞ……………何っ!？」

俺とベルクーリは、ルナとティーゼと鏢迫り合いをしていたが、2人は秘奥義を放ち、俺たちは後ろへと下がる。

すると。

「システム・コール。ジエネレート・サーマル・エレメント。フライ・ストレート! デイ

スチャージ!」

ベルクーリ「何っ!？」

リョウガ「しまっ……………!」

背後から、神聖術の詠唱が聞こえてきて、周囲が煙に包まれる。

俺とベルクーリはすぐに煙に紛れて、4人の狙いを悟る。

片方が引きつけている間に、もう片方が目眩しを行い、そこから一気に止めを刺すという事か。

だが、詰めが甘い。

俺とベルクーリが居ないことに呆然としているシオリとロニエの背後に回り、木剣を頭に当てる。

リヨウガ「まだまだ荒削りだな。」

ベルクーリ「だが、これなら連れて行っても問題ないだろう。」

俺とベルクーリの近くに、ロニエ、ティーゼ、シオリ、ルナが近づく。

ティーゼ「ど、どうして……………」

ロニエ「捉えた、と思ったのに……………」

ベルクーリ「ああ、今のは危なかったぜ。良い剣筋だった。まさか、俺とリヨウガの剣を真つ向から弾くとは思わなかったぜ。」

ルナ「あ、ありがとうございます！」

リヨウガ「だが、そっちの2人の熱素術、あれはダメだったな。」

シオリ「す、すいません！」

ベルクーリ「作戦としては悪くねえ。いきなり炎が来れば、誰でも驚くからな。」
リヨウガ「だが、最初から目眩しのつもりで、威力を抑えて撃つたのだろうか？」

ロニエ「は、はい……………」

シオリ「そうです……………」

ベルクーリ「相棒達が斬り込むところまで想定しての事だろうか……………」

リヨウガ「訓練で上手くいっても、実際には上手くは行かない。次からは威力を込めて撃て！それなら、勝負は違ったのかもしれないからな。」

「は、はいっ！」

ベルクーリ「それじゃ、準備してきな。」

「はい！」

ロニエ「やったね、ティーゼ、ルナ、シオリ！」

4人が喜び合っているのを眺めていると、アズリカ教官がやって来た。

俺とベルクーリは、尋ねた。

ベルクーリ「……………あの4人は、ユージオとケントとキリトとカルムの後輩って事かい？」

アズリカ「そうです。愛弟子、と言った所でしようか。一緒にいたのは短い間でしたが、随分と懐いていたようです。」

リヨウガ「そうか……………あいつらは、上にも下にも恵まれていたのだな。」

アズリカ「ええ。本当に素晴らしい修剣士でした、彼らは。」

本当に、良き剣士だったのだな、あの4人は。

第53話 集いし剣士たち（後編）

シオリside

ベルクーリ様とリョウガ様から、着いてくる許可を貰った私たちは、初等錬士寮で待っているフレニーカとアマネの元へ。

フレニーカ「皆！」

アマネ「どうだった……………？」

私とルナとロニエとティーゼは、顔を見合わせて、同時に答える。

「「認めて貰えた！」」

フレニーカ「おめでどう、みんな！」

アマネ「良かった……………！」

ロニエ「うん！」

ティーゼ「……………うん。」

フレニーカとアマネは、抱きついてきて、泣いていた。

フレニーカ「本当に良かったね、皆！」

アマネ「……………それに比べて私たちは…………。」

ルナ「そんな事ないわよ！」

シオリ「そうだよ！これは、私たちが無理を言ったからで……………！」

フレニーカ「でも、私たちも、何か力になりたい……………」

アマネ「そうだ、神聖術なら……………」

ロニエ「神聖術……………」

シオリ「どういう事……………」

フレニーカ「ほら、戦争になったら、癒やし手も必要でしょう？」

ロニエ「うん。」

アマネ「だから、私たちも、神聖術師の方たちも一緒に行けないかなって。」

ティーゼ「そっか！」

ルナ「2人は、神聖術が得意だから！」

そう言うティーゼとルナ。

だけど、私とロニエは、不安そうな口調で2人に尋ねる。

ロニエ「でも、大丈夫なの……………」

シオリ「戦争に行つて……………」

フレニーカ「私たちも、キリト先輩にカルム先輩達の力になりたい。だから、皆と一緒に行きたいの！」

シオリ「私たち、アズリカ先生に頼んでくる！」

その言葉に、私たちは顔を見合わせて、ロニエとティーゼはフレニーカの、私とルナはアマネの手を握る。

ロニエ「そうだよね。」

ティーゼ「なら、皆で行こう！」

シオリ「うん！」

ルナ「私たち6人で！」

フレニーカ「ありがとう……………！」

アマネ「ロニエ、ティーゼ、シオリ、ルナ……………！」

私たちは、アズリカ先生の元に行き、何とか許可を貰って、皆で行く事になった。

タカトラ side

ベルクーリ様とリョウガ様が修剣学院に来てからしばらくして、俺たちは、集まった兵士を見ていた。

ゴルゴロツソ「おお、壮観だ。短期間の間に、よくこれだけの兵士が集まったな。」

ユア「それに、気合いが部隊に満ちているな。」

ソルティリーナ「ああ、これも、アズリカ寮監の人望だ。」

タカトラ「あの人の、帝国剣武大会での勇姿を覚えている者が多いのだろうな。」

そう、かなり集まったのだ。

無論、簡単な事ではなかったが。

ゴルゴロツソ「そうだな……随分と奔走されたと聞いた。洩る者にも、根気強く説得に当てられたらしい。」

ユア「それに、こちらの二等爵士殿のご尽力もあるがな。」

そう言うと、ウオロが来る。

来ると思っていたがな。

ウオロ「いや、私は何もしていない。連れて来られた兵も、貴公らよりも少ないしな。」
ソルテイリーナ「そんな事はないぞ、リーバンテイン殿。」

タカトラ「二等爵家たるリーバンテイン家の御令息が参戦すると聞いて、従軍を決めた者も多いだろうしな。」

ゴルゴロツソ「そうだ、そんな事を言ったら、平民の俺とユアは、兵なんか1人も連れてきていないのだぞ。」

ソルテイリーナ「まあ、その分、ゴルゴロツソは私の、ユアはタカトラの副官として努めてもらうがな。」

ソルテイリーナがそう言うと、ウオロが笑う。

ウオロ「ふっ、物好きが5人も揃った、という事か。」

タカトラ「それにしても、お父上がよくお許しになったな。貴公の家は、我がウエインライト家ともかく、セルルト家とは立場が違うだろう。」

ソルティリーナ「随分……揉めたのではないか？」

ウオロ「何、大した事はしていない。いざとなったら、単身で従軍する、と言ったら、慌てて認めてくれたよ。」

ちなみに、俺の方は、殆ど俺に任せる放任主義で、直ぐに認めてくれた。

その際に、家宝ともいえる剣と盾を受け取った。

甜瓜の剣に甜瓜の盾だ。

これは、神器級の武器で、元々は、甜瓜という果物が異常成長して、武器に転換されたものだ。

ソルティリーナ「ふつ、やはり、随分な無茶をしているではないか。」

タカトラ「変わったな、リーバンテイン殿。」

ウオロ「ふつ……。もしかしたら、私もキリト修剣士に影響を受けたかな？ いや、もう修剣士ではないが……いずれにしても、彼にはでかい借りがあるし、カルムとも戦えていない。」

ソルティリーナ「リーバンテイン殿……。」

タカトラ「貴公も存外にしつこいな……。」

俺とソルティリーナが呆れながらそう言うと、ウオロは真面目な顔で答える。

ウオロ「闇の軍勢の侵攻を食い止めなければ、あの者に借りを返す事が出来ないからな。前線で食い止められなければ、持ち堪えられぬ。それくらいは、私でも分かる。」

ソルティリーナ「ならば、敵を撃退して、その二つの勝負を見届けるとしよう。」

タカトラ「その時には、立会人を務めさせてほしい。」

ウオロ「ああ、頼んだぞ、セルルト殿にウエインライト殿。その後には、お主達とも立ち合いたいからな。」

ソルティリーナ「望む所だ。」

タカトラ「その為には、生きて戻らなければな。」

シオリ side

私とルナ、ロニエ、ティーゼは、人界軍の集合場所に来ていた。

そこには、沢山の人たちがいた。

ティーゼ「なんだか凄いな、ロニエ、シオリ、ルナ。」

ロニエ「うん……。こんな人が集まるなんて。それに、皆強そう。」

ルナ「私たちだって強いよ！だって、ベルクーリ様とリョウガ様に認めて貰ったんだから！」

シオリ「そうだよね！うん！こんな所で怖気付いていられない！きつと、先輩達も、戦

場にいる筈なんだから！」

そう、ここから先は戦場になり、そこにはきつと、カルム先輩達がいる。

会いに行くためにも、こんな所で怖気付いていられない！」

ロニエ「……………ありがとう、ティーゼ、シオリ、ルナ。私、3人が居てくれて良かった。」

ティーゼ「え!？」

ルナ「どうしたの、急に?」

ロニエ「だって、本当の事だもん。私1人だったら、きつとこんな所まで来れなかった。」

シオリ「それは、私たちも同じだよ。1人じゃ、こんな軍隊の中に入る事なんてできなかった。きつと、先輩達も同じだったんだと思うよ。1人じゃなくて、4人だから……………」

そう、カルム先輩は言っていたのだ。

カルム『俺1人じゃ、修剣学院には来れなかったさ。キリト、ユージオ、ケント。その3人と一緒だったから、ここまで来れたんだ。』

まさに、今の状況と同じだ。

私たち4人が居たから、ここまで来る事が出来たんだ。

ロニエ「そうだよね、きつと。」

ルナ「私たち4人が居たから、戦えたんだよ。」

ティーゼ「だから、きつと先輩達に会おう！」

シオリ「それまで4人で戦い抜こうね！」

私たちは、そう誓い合う。

タカトラ side

俺たちは、集まった兵士の前に立ち、演説を始める。

ソルティリーナ「ここに集まった兵士諸君。よく集まってくれた。これより我々は、
ダークテリトリーから侵攻してくる軍勢を打ち倒すべく、東に向かう。」

タカトラ「闇の軍勢は強い。これまでに経験した事の無いような厳しい戦いになるだ
ろう。」

その言葉に、周囲はざわめきだす。

だが、その騒めきも、ソルティリーナの一言で鎮まる。

ソルティリーナ「だが、我々こそ、人界を守る最後の盾であり、刃である。我々が臆
して、どうして戦いに勝利できるだろうか！」

タカトラ「我々が全力を尽くせば、必ず勝利できる。人間の底力を、ダークテリトリー
の輩に見せつけろ!!」

人界軍「うおおおお!!」

俺とソルティリーナは、それぞれの剣を抜刀して、天へと掲げる。すると、周囲が大きく叫ぶ。

ゴルゴロツソ「死に急ぐなよ!」

ユア「生きてこそ、勝利が近づいてくる!」

人界軍「おう!」

「人界軍に勝利を!」

人界軍「勝利を!!」

その掛け声と共に、整合騎士達と合流するべく、移動を開始する。

カルム、お前も、この戦場に来るのだろうか?

なら、人界を守る為に、俺と共に戦ってくれ。

俺の意志を受け継いだ、お前と共に戦おう。

第54話 カルムの決意

カルム side

俺は、カーディナルとユーリの元に向かっていた。

ある事を相談する為だ。

カーディナル「どうした、カルム。」

ユーリ「どうしたんだ？」

カルム「カーディナル、ユーリ。俺、強くなりたいんだ。」

カーディナル「どうした、藪から棒に。」

ユーリ「……………キリトの事を気にしてるのか？」

カルム「ああ……………」。

そう、俺だけが助かった事を悔いている。

なんで、俺だけが助かったんだ。

キリトは、俺と同じぐらいに戦って、倒れたというのに。

俺の表情を見たカーディナルとユーリは、不安げな表情を浮かべる。

カルム「悪いな、心配かけて。」

ユーリ「問題ない。……………カーディナル。」

カーディナル「うむ。カルム。お主には、行ってもらいたい場所があるのじゃ。」

カルム「行ってもらいたい場所？」

ユーリ「ああ。そこに居るとある神獣と会ってこい。」

カルム「とある神獣？」

カーディナル「ああ。漆黒に染まりし、究極の神獣がな。」

カルム「それは良いけど、どうしてだ？アドミニストレータによって、神獣の類は狩られたんじゃないのか？」

一瞬、厨二病みたいな名前だなど思ったが、話が脱線するとめんどくさい。

カーディナル「この神獣はな、火炎剣烈火に反応する場所におつてな。」

カルム「ああ、火炎剣烈火がないアドミニストレータからしたら、手が出せないもんな。」

ユーリ「そうだ。だからこそ、その神獣に挑み、答えを見つけ出せ。」
カルム「分かった。」

俺は、カーディナルとユーリからそう言われて、その場所に行く事に。

ちなみに、持って行くのは、火炎剣烈火のみだ。

刃王剣十聖刃は、あの戦い以来、どういう訳か、抜刀出来なくなつた。

それをカーディナル達に見せると、俺に迷いがあると言われたのだ。そんな事を考えながらしばらく準備をして、旅立とうとした瞬間、ミトに声をかけられる。

ミト「カルム。」

カルム「ミト……………」

なんでミトがここに居るんだ？

そう考えていると、ミトは理由を話す。

ミト「カーディナルとユーリから頼まれたのよ。カルムの助けになって欲しいって。」

カルム「なるほど……………」

やっぱりかあ……………」

カーディナルとユーリの事だから、ミトには伝えそうな気がしたからなあ。

ミト「それに、君には話があるのよ。」

カルム「……………分かった。」

そうして、俺とミトは、ユーリが教えてくれた洞窟へと向かう。

アンダーワールドは、モンスターの類は出てこないの、何事もなく進んでいく。

流星に、少し休憩する事になって、俺とミトは座る。

カルム「やっぱり、アンダーワールドには、モンスターの類は出てこないな。」

ミト「そうね。……………ねえ、カルム。」

カルム「うん？」

ミト「無理してるでしょ。」

カルム「……………何が？」

ミト「キリトの事に関して。」

カルム「……………。」

やっぱり、お見通しか。

ミトに隠し事は一切出来ないのかもしれないな。

カルム「……………キリトだけあんな状態になったのに、アスナは、俺の事を責めなかった。『何でキリト君を守ってくれなかったの。』って、罵られる事を覚悟してたんだがな。」

ミト「……………。」

カルム「俺は、アイツの隣で戦っていいのかな。……………なんてな。」

ミト「……………そんな事を言わないでよ。」

カルム「え……………？」

いきなりそんな事を言われて、俺が横を向くと、目に大粒の涙を浮かべたミトの顔が目に入る。

カルム「ミト……………」

ミト「アスナがカルムを責めなかったのは、カルムのせいじゃないって分かってたからよ。そもそも、柳井のせいなんだし。」

カルム「そうだな……………」

ミト「だからさ、1人で背負おうとしないでよ！何で1人で背負おうとするの！」

カルム「……………」

ミト「いつもの前向きさは、どこに行ったのよ!?あなたは、そんな前向きの所がいい所だったでしょ！」

カルム「ミト……………。悪い、心配かけた。」

ミト「……………本当にそうよ。心配かけさせたんだから、埋め合わせしてもらわないと困るわ。」

カルム「分かった、分かった。」

本当に、ミトには頭が上がらないな。

そうだな、いつまでもクヨクヨ悩んでるんじゃ、キリトへの侮辱になるよな。

俺とミトは、洞窟の最深部へと向かって歩いて行く。

最深部に着くと、火炎剣烈火が光り、壁と思われた所が開く。

俺とミトが慎重に進むと、最奥に突然炎が灯されて、奥に漆黒の龍がいた。

ミト「アレなのかな？その、漆黑に染まりし、究極の神獣ってのは？」
カルム「多分な……………」

???「何者だ……………」

すると、龍が喋った。

恐らく、シャーロットと同様に、AIを積んでいるのだろう。

神獣「なるほどな。光の剣士が言っていた、火炎剣烈火に選ばれた男とは、貴様の事の様だな。」

カルム「そうだ。」

神獣「そうか。ここに来たという事は、何かの目的があるのだろうか？」

カルム「……………闇の国の侵攻がすぐに迫ってるんだ。頼む！力を貸して欲しい！」

神獣「……………ならん。」

カルム「何故ですか……………!？」

神獣「貴様は、心の内にまだ迷いを抱いている。その様な者に、力を貸すわけにはいかん！」

カルム「……………」

まだ、迷いは晴れていないみたいだな。

だからと言って、ここで引き下がる訳には行かない。

カルム「俺だつて、迷いに迷つてるさ。でも、この世界を守りたい気持ちに、迷いはない！だから、アンタが認めないのなら、俺が認めさせてやる!!」

ミト「カルム……………」

神獣「なるほどな……………。その心意気や良し！受けて立とう！」

ミト「なら、私にも手伝わせて！」

カルム「分かった。」

そうして、俺とミトVS神獣の戦いが始まる。

神獣は、炎を吐いてきて、俺は火炎剣烈火でその炎を斬り裂く。

神獣「ほう、我が炎を打ち消すとは、やるではないか。」

カルム「俺だつて、キリトの為にも、ここで立ち止まつてられないんだ……………」

神獣「少しはやるな。だが、我も負けてはられないな！」

ミト「私を忘れないでよね！」

ミトのクレセント・ムーンを使った斬撃が、神獣に当たる。

だが、少し怯んだくらいで、大したダメージになつていない。

神獣「まさか、ここまで追い詰められるとはな。なら、我も本気で行こうか！」

カルム「……………ッ！」

パターンが変わるな、これ！

すると、更に強い炎を吐き出してきて、触れると、火傷状態になる。

カルム「熱っ……!!」

神獣「どうした？先ほどまでの威勢はどこに行ったのだ？」

カルム「うるせえ！」

俺は、思わず声を荒げて返したが、この火傷は、通常の火傷とは訳が違う。

何せ、未だに燃えているのだ。

このままでは、火が全身に回る。

すると、ミトが前線に出て、その炎を一身に受けたのだ。

ミト side

このままじゃ、カルムが死んじゃう！

それだけは、絶対に避けないと！

私は、ルナリアのアカウントに付与されている状態異常を一時的に効かない力を使う。

その力を使い、神獣が放つ炎をその一身に受ける。

カルム「ミト!？」

ミト「大丈夫！私のこの体は、状態異常が一時的に効かないから！」

神獣「貴様!？」

ミト「ううう……………！」

カルム「やめろ……………！俺が受けるから……………！やめてくれ……………！」

ミト「カルム！」

カルム「!?」

ミト「何をウジウジ悩んでんのよ！私が抑えてる間に、神獣を!!」

私は、カルムに発破をかける。

状態異常が一時的に効かなくても、火傷する様な感覚は感じる。

これがルナリアのアカウントの欠点なのだろう。

例え効かなくても、感覚は感じてしまうのだ。

これは、普通だったら、精神が狂いそうな痛みだ。

だけど、カルムを守る為なら、精神が狂っても構わない！

そんな決意をしている中、突然、背後に押されて、カルムが前線に出て、私の代わりに炎を受け止める。

カルムside

もうこれ以上、大切な人にそんな事をさせたくなかった。

俺は火炎剣烈火で炎を受け止め、色んな箇所には火傷が出来る。

ミト「やめて……………！やめてよ！このままじゃ、カルムが死んじゃう！」

神獸「そこで死ぬのなら、そこまでなだけだ。」

カルム「うるさい……………！勝手に人を殺すんじゃない……………！俺は、俺は……………！もう、これ以上誰かの涙は見たくないんだ！」

ミト「カルム……………」

カルム「だから、俺は、アンタを倒して、認めてもらって、この世界を守ってみせる！リリース・リコレクション!!」

神獸「何っ!？」

俺は、火炎剣烈火の記憶解放術を使い、勇気を司る竜、竜巻を起こす大鷲、とある冒険をする猿、竜騎士、原始の竜、四属性を司る竜、勇気、愛、誇りという3つの感情を司る竜の力を引き出し、神獸を思い切り斬り裂く。

神獸は大きく怯み、その場に崩折れる。

俺が息を乱している、神獸が呻き声を出す。

神獸「なるほどな……………。ユーリの奴、とんでもない男に火炎剣烈火を託したものだ……………」

カルム「認めて貰えますかね……………?」

神獸「……………ならば、一度問おう。貴様は、何の為にわしの力を求める。」

カルム「……………親友と俺が愛している、この美しい世界を守る為に。」

神獣「なるほどな……………よかろう。わしの天命はもうすぐ尽きる。カーディナルにわしの体の一部を託し、どうにかしてもらえ。」

カルム「分かりました。」

神獣「うむ。では、頼んだぞ。若き、炎の聖剣と刃王剣を操りし、剣士よ……………」

その言葉と共に、神獣は目を瞑り、そのまま消えていった。

そこには、その神獣の鱗が残されていて、俺はそれを拾う。

ホッと一息ついていると、ミトが俺に向かって駆け寄り、抱きつく。

カルム「ミト……………」

ミト「バカツ!! あんな無茶して!!」

カルム「すまない、これしか思いつかなかったから……………」

ミト「……………本当に何度も何度も心配かけて! でも、良かったあ……………。生きてて……………」

カルム「本当に、すまない。」

ミト「心配かけたんだから、しばらくこのままでいさせて。」

カルム「ああ……………」

ミトは啜り泣きながら、俺に抱きついている。

心配かけたのは、悪かったな……………。

今度、ちゃんと埋め合わせをしよう。
そう決意する。

しばらくして、ミトは満足したのか離れ、俺たちはカセドラルへと帰還した。
そして、カーディナルとユーリの元へと向かう。

カルム「カーディナル、これを。」

カーディナル「これは、あの神兽の鱗か………!？」

ユーリ「なるほどな。認めた様だな。」

カルム「はい。」

ユーリ「それにしても、酷い火傷だな。ミトと一緒に治してやろう。」

そう言つて、俺とミトは、ユーリに火傷を治して貰った。

鱗を検分していたカーディナルが、口を開く。

カーディナル「この鱗だけでも、相当の力を感じるの。ただ、神器は作れなくて、鎧になつてしまふが、良いか？」

カルム「ああ。俺には、火炎剣烈火と刃王剣十聖刃がある。」

カーディナル「分かった。では、行くぞ。システム・コール！」

カーディナルの術式と共に、鎧が生成されていき、俺はそれを装着する。

右肩、胸、左肩に、3つの竜の顔の装飾がついた漆黒の鎧とマントになった。

カーディナル「ほれ、出来たぞ。」

カルム「ありがとうございます！」

ミト「たまには、カルムも黒で悪くないのかもね。」

ユーリ「ああ、これは最高だな！」

カルム「でも、何で3つの顔が出たんだ？」

カーディナル「その神獣は、3体の竜が一つになった神獣じゃ。」

カルム「なるほどな……。」

これがあれば、この世界を守れるかもしれない。

闇の軍勢が相手でも、負ける訳にはいかないんだ。

絶対に、守ってみせる。

俺は、そう決意する。

第55話 2人の騎士の想い

ケントside

俺とユージオは、整合騎士になったわけだが、イーデイスと共に行動する事が多い。どうやら、ベルクーリさんとリヨウガさんの采配の結果らしい。

実力があるとはいえ、半人前の騎士。

そこで、イーデイスが指導するという形で、行動を共にする事になった。

一度、ベルクーリさんとリヨウガさんに呼び出される。

イーデイス「ケントと一緒に、果ての山脈の警護を？」

ベルクーリ「そうだ。依然として、果ての山脈の警護の必要があるからな。ケントとの連携を深める為にも、一緒に行ってくれ。」

リヨウガ「もしかししたら、ゴブリンが潜んでいる可能性がある。心してかかれ。」

ケント「分かりました。」

ベルクーリ「それと、カーディナル殿が、お前たち2人を呼んでいたぞ。」

イーデイス「私も？」

ケント「カーディナルさんは、どこにいらっしやいますか？」

リヨウガ「この時間だと、恐らく、大図書館に居るだろうな。」

俺とイーデイスは、リヨウガさんの言う通りに大図書館に行くと、カーディナルさんとユーリさんが何かを話していた。

すると、俺たちに気付いたのか、こちらを向いてくる。

カーディナル「おお、よく来たな。」

ケント「それで、カーディナルさん。俺たちに用事とは？」

カーディナル「うむ。まずはイーデイス。前に出よ。」

イーデイス「え？ええ……。」

イーデイスが前に出て、カーディナルさんはイーデイスに杖を向ける。

すると、神聖術が発動して、イーデイスに温かい光が包まれる。

イーデイスが眼帯を取ると、失われていた右目が回復していた。

イーデイス「ありがとうございます。」

カーディナル「よい。修復するのが遅れてすまなかつたな。」

ケント「それで、俺に用事というのは？」

カーディナル「そうじゃったな。ケント。お主に渡したい物があるのじゃ。」

ケント「渡したい物？」

ユーリ「これだ。」

そう言つてユーリが渡してきたのは、鎧だった。

ケント「これは？」

ユーリ「これは、『雷鳴の鎧』だ。」

ケント「雷鳴の鎧？」

イーデイス「もしかして、リヨウガが使つてる時国の鎧と同系統なの？」

カーディナル「そうじゃ。これを使えば、雷鳴劍黄雷の力を、更に引き出せるかもしれない。」

ケント「……かもしれない？」

ユーリ「引き出せるかどうかは、担い手にもよるからな。」

なるほどな。

どうにかして、雷鳴劍黄雷の力を引き出せる様にならないとな。

そうして、用事が終わったので、俺とイーデイスは出かける。

実は、整合騎士に叙任された際に、飛竜も授けられたのだ。

俺はその飛竜の名前を、御雷という名前にした。

イーデイスの飛竜である霧舞と共に、果ての山脈へと向かう。

イーデイス「それにしても、まさか、ケントを選ぶなんてねえ……。」

ケント「どういう事だ？」

イーデイス「その子はね、最高司祭様が持て余してた飛竜なのよ。その子、誰にも仕えたりはしなくて。」

ケント「そういう事だったのか……。」

イーデイス「だからさ、その子を大事にしてあげてね。」

ケント「ああ。」

果ての山脈へと到着して、俺たちは2体の飛竜に待機命令を出して、洞窟へと調査に入る。

洞窟の中は暗く、慎重に進んでいくと、何かの話し声が聞こえてくる。

俺とイーデイスは、頷き合って、耳を澄ませる。

すると。

??? 「もう少しで、白イウムどもの村を攻められるぞ！」

??? 「ああ！白イウムどもを、食らってやる！」

イーデイス「ケント。」

ケント「分かってる。」

俺とイーデイスは頷き合って、その声の主の前に現れる。

そこに居たのは、ゴブリンの一団だった。

イーデイス「整合騎士よ！」

ケント「諦めろ！」

ゴブリン「なっ!? 整合騎士……!?」

ゴブリン「なんで白イウムがもう居るんだ！」

俺たちが急に現れた事に動揺していた。

周囲を見渡すと、何かを掘っている様な形跡が見られた。

恐らく、ダークテリトリーから、ここまで掘ってきたのだろう。

すると、ひと回り大きいゴブリンが洞窟の奥から現れる。

カザリ「おらあ！ 貴様ら！ たかが白イウム2人だけに何を怯えている！ 無様な姿を晒

すなアアア!!」

イーデイス「あれが大將みたいね。」

ケント「そうだな。」

何か、2年前に襲ってきたウガチと雰囲気似ている。

2年前に斬られた腹の傷が、少し痛む。

だが、今の俺は、2年前の俺とは違う！

イーデイス「ケント、いける？」

ケント「大丈夫だ。俺に迷いはない！」

イーデイス「上等よ！」

カザリ「このカザリ様が、貴様らを食らってやるぞ！」

ケント「やれる物なら……………」

イーデイス「やってみなさい！」

そうして、俺とイーデイスはゴブリンの集団との戦闘が始まる。

俺とイーデイスは、周囲にいるゴブリンを斬り捨てていく。

すると、カザリが曲刀を振るってくる。

カザリ「てめえら！とにかくコイツらを分断しろ！例え強くても、数で押すぞ！」

ケント「なっ……………!?!」

イーデイス「まさか……………!?!」

そんな手に出てくるとは！

俺とイーデイスは分断されてしまい、カザリは、俺に向かって攻撃を仕掛けてくる。

何とか捌いてはいるが、このままでは限界になってしまう。

イーデイス side

このままじゃ、ケントが……………!

まさか、分断されてしまうなんて……………!

私は、何とかケントの方へ行こうとするけど、手下に阻まれて、中々行けない。

もう、使うしかないの……………!?!

すると、脳裏に、以前、最高司祭様に言われた事が蘇る。

アドミニストレータ『イーデイス。あなたの記憶解放術は強力すぎる。だから、周囲に味方がいる状況下での記憶解放術の使用は禁止します。』

そう、闇斬剣の記憶解放術を使えば、ケントを助けられるのかもしれない。

だけど、あの技は、ケントの視界を奪いかねない代物だ。

でも、ケントなら、どうにかしてくれるよね？

私の、大好きな人なら。

イーデイス「リリース・リコレクション！」

その式句と共に、周囲が闇に包まれる。

私は、混乱しているゴブリン達を斬り伏せていく。

だけど、ケントは大丈夫かしら………？

すると、ケントが居るであろう方向に、一筋の雷が現れる。

そして、目を凝らすと、黄金の鎧を見に纏うケントの姿が入る。

ケント side e

何だ、この闇は!?

そういえば、イーデイスから、記憶解放術の術式が聞こえた気がするぞ………!!

俺は以前、ベルクーリさんとリョウガさんから、とある事を言われていた。

ベルクーリ「ケント。イーデイスの嬢ちゃんが、記憶解放術を使わないようにしろよ。」

ケント「どういう事ですか？」

リヨウガ「闇斬劍の記憶解放術は、周囲が闇に包まれる。それにより、敵味方関係なく、視界が奪われる。」

ケント「……………ッ!？」

ベルクーリ「だから、出来る事なら、使わずにやりたいが、ケント。お前さんなら、イーデイスの生み出す闇にも対抗出来る気がするんだよ。」

ケント「……………分かりました。」

そう約束したのに、イーデイスに記憶解放術を使わせてしまった。

だが、俺は、とある事を思い出した。

それは、雷鳴劍黄雷は、『生命に活力を与え、闇に潜む悪を射抜く』劍だという事だ。この闇を使えば、例えば視界が奪われたとしても、カザリの位置が分かるはずだ……………

!

だから、頼む、雷鳴劍黄雷。

力を貸してくれ。

イーデイスを守って、この世界を守る為に……………!

ケント「リリース・リコレクション！」

その術式と共に、俺は雷を放つ。

すると、その雷が雷鳴の鎧に当たり、鎧に意匠が追加されていく。

右腕には、三つの首の番犬の意匠が、胸の部分には、針鼠の意匠が、左肩には、ランブの意匠が追加されていく。

これが、雷鳴の鎧の力か………!?

足の部分を見ると、棘が着いた膝当てが出現する。

すると、俺はカザリの気配を感じとる。

どうやらカザリは、どういう状況か全く分からないらしい。

カザリ「イウムの男め!どこだ!？」

ケント「行くぞ！」

俺はそう叫んで、上空に向かって飛び上がる。

そして、雷の如くカザリを斬りつけ、そのままカザリの後ろへ。

カザリ「なっ………!?!？」

ケント「これで話は終わりだ。」

俺がそう言うと、カザリの右腕と腰が斬れて、カザリは絶命する。

すると、闇が晴れて、イーデイスの姿が目に入る。

ゴブリン達も、いつの間にか大将がやられた事に気づいた様だ。

ゴブリン「なっ……………!？」

ゴブリン「カザリ様が……………!？」

ケント「ここは、お前達の場所じゃない！これ以上来るといふのなら、俺は容赦なくお前達を討ち倒す！その覚悟がある奴は、前に出て来い！」

その声と共にゴブリン達は悲鳴を上げながら撤退していく。

どうやら、俺たちの勝ちだな。

鎧を見ると、追加された意匠はそのままだった。

雷鳴剣黄雷を納刀すると、途端にイーデイスが抱き寄ってくる。

ケント「うわっ……………イーデイス？」

イーデイス「……………心配かけないでよ、バカ。」

ケント「悪い……………」

イーデイス「……………とにかく、この洞窟を崩落させましょう。」

ケント「ああ。」

俺たちは外へと出て、飛竜達にお願いして、洞窟を崩落させる。

一応、中は凍素と水素を使って、凍結させておいた。

これで、そう簡単には入ってこれないだろう。

イーデイス「ケント。」

ケント「うん？」

イーデイス「少し話があるの。カセドラルに戻って、この事を騎士長達に報告したら、私の部屋に来て欲しい。」

ケント「……………分かった。」

俺たちは飛竜に乗り、セントラル・カセドラルへと戻ってくる。

ベルクーリさんとリヨウガさん達に報告すると、驚いた様な表情を浮かべる。

まさか、穴を掘って人界まで入ってくるとは思わないだろう。

俺たちの対処を褒めてくれた。

そして、イーデイスの部屋へと入る。

イーデイスは、俺の事を見つめる。

イーデイス「ケント。」

ケント「な、何だ……………？」

イーデイス「ありがとう。あの時、私のせいで闇に包まれても、大将を倒してくれて。」

ケント「いや、逆に、イーデイスの闇のおかげで、アイツの位置が分かったんだ。礼を言うのはこっちの方だ。」

イーデイス「どういう事？」

ケント「雷鳴劍黃雷は、『生命に活力を与え、闇に潜む悪を射抜く』劍だ。だから、闇に包まれたからこそ、アイツの位置が分かって、雷鳴の鎧の力を引き出せたんだ。」

イーデイス「そっか……………」

イーデイスは、そう呟いて、俺に視線を向けてくる。

俺は、胸に秘めていたとある想いを、イーデイスに打ち明ける。

ケント「イーデイス、伝えたい事があるんだ。」

イーデイス「……………何？」

ケント「俺は、ルーリッドの村で一緒に過ごしていた時から、ずっと、イーデイスの事が好きだったんだ。だから、イーデイスと一緒に居たいんだ。」

イーデイス「……………」

その言葉を言った俺は、凄く顔が赤くなっている筈だろう。

イーデイスも、顔を赤く染めるが、凄く嬉しそうな表情を浮かべる。

イーデイス「……………私も、ルーリッドの村で一緒に居た時から、ケントの事が気になってた。だから、私も、ケントと一緒に居たいわ。」

ケント「……………ああ。」

イーデイス「……………はつきり言って、私の事、どう思ってる？」

ケント「……………好きだ。誰よりも、どんな人よりも、イーデイスの事が好きだ。」

イーデイス「なら、それを証明して。」

イーデイスはそう言つて、目を閉じる。

俺は、自分の唇をイーデイスの唇へと当てる。

その時間は、10秒くらいだったのだろうが、今の俺たちからしたら、長く感じた。

イーデイス「……………ケント、これからよろしくね。」

ケント「ああ。」

俺とイーデイスは、お互いの想いが通じ合った喜びを噛み締めつつ、抱きしめ合い、再び唇を重ねる。

そして、新たな決意を胸に宿す。

それは、イーデイスを絶対に守る事だ。

8年前、俺は何も出来なかった。

だからこそ、イーデイスを今度こそ守ってみせる。

第56話 青薔薇の騎士の覚悟

ユージオ side

僕は、ケントと一緒に、整合騎士へと叙任された。

ケントにイーデイスが付いたのと同じく、僕にはアリスが付いた。

実力はあっても、騎士としては半人前だからみたいだ。

ある日、カーディナルさん達に呼び出された。

ユージオ「あの、カーディナルさん。どうしましたか？」

カーディナル「ユージオ、お主には、アリスと共に、ルーリッド村に向かって欲しいのじゃ。」

アリス「ルーリッド村に？」

ユーリ「あそこは、ダークテリトリーに続いている洞窟がある。一応、エルドリエが崩落させたが、ケント達の所みたい穴を掘って来る可能性が大いにある。」

ユージオ「分かりました。」

カーディナル「それに、キリトの療養にもなる筈じゃ。」

アリス「……………という事は、アスナも来るという事ですか？」

カーディナル「一応、アスナも行く事になっておる。」

アリス「分かりました。行こう、ユージオ。」

ユージオ「うん。」

僕はアリスに連れられて、アスナさんと合流する。

事情を話したアスナさんは、了承してくれた。

アスナ「分かったわ。でも、どうやってそのルーリッド村に行くの？」

アリス「アスナは、私の飛竜の雨縁に乗って、キリトは、ユージオの凍華に乗せましよう。」

ユージオ「分かったよ。」

アスナ「そういえば、ケントさんとイーデイスさん、ここ最近、更に仲が良くなったんだけど、何かあったのかな？」

アリス「実は、イーデイスとケントは、付き合い始めたそうよ。」

ユージオ「そうなんだ！」

ケントとイーデイスは、付き合えたんだ。

なら、僕も……………。

そう思いながら、僕は、ケントと同時に与えられた飛竜に跨り、キリトも乗せて、ルーリッドの村へと向かう。

しばらくして、ルーリッドの村に到着する。

まずは、村長の元へと向かう。

キリトをどうにかして休ませたい。

ジंक「おい！何を勝手に……………ユージオ、アリス……………!?!」

アリス「村長に話があります。」

騎士としての口調になり、村長を呼び出す。

ジंकは、キリトの変わり様とアスナの事に首を傾げていた。

ガスフトさんが出てきて、アリスを見ると、驚いた様な表情を浮かべる。

ガスフト「アリス……………!?!」

アリス「はい、お父様。」

ガスフト「お前、どうして……………!?!」

アリス「私は、整合騎士となる事で、罪滅ぼしをする事になったのです。」

ガスフト「そうなのか……………」

ユージオ「ガスフトさん、お願いがあるんです。」

ガスフト「なんだ?」

ユージオ「キリトをどこかで休ませたいんです。」

アスナ「お願いします!」

ガスフト「……………」。

一応、アリスが整合騎士としての鎧を身に纏っている状態なので、疑われてはいないとは思うけど、大丈夫かな……………」？

すると、とある人物の声が出てくる。

???「な、何を言っておるのだ！」

アスナ「あの人は？」

ユージオ「確か、ナイグル・バルボツサさんで、村一番の大農場の主だよ。」

バルボツサ「突然、余所者を連れてきおって！そんな事が認められるか！」

アスナ「余所者……………」!?」

ユージオ「な、何を……………」!?」

僕とアスナが絶句していると、ガスフトさんがバルボツサさんを黙らせる。

ガスフト「落ち着け。」

バルボツサ「ですが……………」!

ガスフト「気持ちは分かる。だが、整合騎士の頼みを断るのか？」

バルボツサ「そ、それは……………」。

ガスフト「整合騎士殿。申し訳ない。村の離れに、家を建てられる広場があります。

そこを使って下さい。」

アリス「分かりました……………」

ガスフトさんは、辛そうな表情だった。

それもそうだ。

8年ぶりに実の娘と再会できたのに、立場上、こうするしかなかった。僕たちは、その広場へと向かう。

アスナ「何よ、あの言い方！」

ユージオ「ごめん、バルボツサさんって、ああいう人だから……………」

アリス「本当に失礼よね。」

怒るアスナを何とか宥めていると、後ろから、声がかけられる。

セルカ「姉……………様……………なの？」

アリス「セルカ……………」

セルカ「やっぱり、姉様だった……………！」

アスナ「この子は……………？」

ユージオ「彼女はセルカ。アリスの妹だよ。」

アスナ「へえ……………」

ユージオ「そういえば、メアリはどうしたんだい？」

セルカ「メアリなら、教会に居るわよ。」

ユージオ「そっか……………」

セルカ「話は、お父様から聞いてるわ。ちょうど、ガリツタさんと呼ばうと思つて。」
ユージオ「ありがとう。」

そうして、セルカの紹介で、ガリツタ爺と再会して、僕、アリス、アスナさんの3人で家を建ててゐる事にした。

アリスが記憶を取り戻している事もあり、着々と進んでいった。

途中、アスナさんが、木に頬擦りをしていたなあ。

アスナさん曰く、「これ、本当にいい木よね。」らしい。

そんなこんなで、何とか家を建ててゐる事が出来た。

キリトの療養を、僕たち3人で協力する事になった。

途中、カルム、ミトさん、ケント、イーディスの4人も来て、協力してくれた。

半年が経つても、キリトは目覚める気配を見せなかった。

ある夜、僕はカルムとケントの3人と一緒に、ルーリッドの夜空を見上げていた。

ユージオ「久しぶりに、ルーリッドの夜空を見たなあ……………」

ケント「そうだな……………」

カルム「本当に、綺麗だよな……………」

僕たちは、空を見上げてながらそう言う。

本当なら、キリトも居てくれれば良かったんだけどな……………。
すると、カルムがケントに声をかける。

カルム「ケント、風の噂で聞いたが、イーデイスと付き合えたんだな。」

ケント「ああ。想いが通じたよ。」

カルム「良かった。……………次は、ユージオの番かな。」

ユージオ「僕のか？」

カルム「ユージオは、アリスに想いを伝えたのか？」

ユージオ「カルム!？」

カルムの突然の発言に、僕は狼狽える。

カルムの顔は、最初は揶揄う様な顔だったが、すぐに真面目な顔になる。

カルム「もうすぐ戦争が始まるかもしれない。この際、アリスに想いを伝えたらどうだ？」

ユージオ「ア、アリスに……………?」

ケント「ああ。俺だって、イーデイスに想いを伝えられたんだ。ユージオも出来る。」

ユージオ「う、うん。分かった。」

僕は、動揺しつつ答える。

僕の想い……………。

この想いを、アリスに伝えたい。

いつもは臆病な僕だけど、この際、ちゃんと伝えないと……………。

すると、カルムが何かを呟く。

カルム「もしかしたら、ケント達がこの世界から離れるかもしれないからな。」

ユージオ「何か言った？」

カルム「何でもない。」

ケント「そうか……………。」

何だろう？

すると、変な匂いがしてくる。

ルーリッド村の方を見ると、炎が上がっていた。

まさか……………！

アリス side

ルーリッドの村の中でキリトを休ませる事は出来なかったけど、何とか家を建てて、休ませる事が出来たわね。

今、家の中には、私、イーデイス、アスナ、ミト、そして、車椅子に座っているキリトが居た。

現在、軽い女子会を開催してる。

アスナ「アリスさん、イーデイスさん、私とミトが来るまで、キリト君とカルム君を守ってくれてありがとうね。」

ミト「ありがとう。」

イーデイス「良いのよ。2人には借りがあるしね。」

アリス「それに、大切な幼馴染の1人だから。」

アスナ「そっか……………」

ミト「そう……………」

そんな風に話していて、話は、イーデイスがケントと付き合い始めた事になる。

アスナ「それにしても、イーデイスさん、ケント君と付き合うんだって？おめでどう

！

ミト「おめでどう、イーデイス。」

イーデイス「ありがとうね。」

アリス「良かったわ。」

イーデイス「さて、次はアリスの番じゃない？」

アリス「私の？」

イーデイス「ユージオには告ったの？」

アリス「……………ッ!？」

イーデイスの言葉に、私は動揺して立ち上がる。

アリス「な……………何をいきなり……………!？」

アスナ「確かに。」

ミト「アリスは、ユージオには告らないの？」

アリス「……………!」

ミトの言葉に、私は顔を赤く染めて、下を向く。

すると、真面目な雰囲気のみとが口を開く。

ミト「アリス。」

アリス「な、何……………?」

ミト「ユージオに伝えたいなら、ちゃんと伝えた方がいいと思うよ。」

アリス「ミト……………」

アスナ「ミトの言う通りだよ。もしかしたら、ユージオ君も想ってたりね。」

アリス「……………分かりました。少し、ユージオと話してきます。」

アスナ「その意気だよ!」

私がそう決意する中、少し焦げ臭い匂いがしてくる。

何事かと思っていると、ユージオ達が家の中に駆け込んでくる。

アスナ「どうしたの？」

ミト「そんなに慌てて。」

ユージオ「大変だ！」

ケント「闇の軍勢が攻めてきた！」

「「「!?」」」

ユージオ side

何か、アリスに想いを伝える所じやなくなっちゃったな…………。

僕としては、すぐにルーリッド村に行きたい。

でも、キリトをここには置いていけない。

どうすれば……………!

すると。

カルム「キリトの事は、俺とミトとアスナに任せろ! 4人は、ルーリッド村の人たち

を助けに行つてやれ!」

ユージオ「でも……………!」

ミト「大丈夫よ! 私たちはそう簡単に負けないから!」

アスナ「だから、あなた達の故郷を救いに行つて!」

ケント「分かった!」

アリス「ええ!」

イーデイス「分かったわ！」
だけど、僕は領けなかった。

助けに行きたいが、バルボツサさんは、アスナの事を余所者と言った。

そんな人を助ける意味はあるのか……………？

そんな事を考えていると、誰かに引つ叩かれた様な感覚がする。

叩いたのは、アリスだった。

僕が戸惑ってる中、アリスは語った。

アリス「あなたは何がしたいのですか？何を為すべきなのですか？整合騎士なら、それを己で見定めなさい。」

ユージオ「……………！」

そのアリスの騎士としての言葉に、僕の目は覚めた。

そうだ、僕は整合騎士だった。

なのに、こんな事で戸惑うなんて、僕もまだまだだな……………。

ユージオ「そうだ……………。僕の剣は、守る為に。自分の大切な物を守る為にある！」

アリス「それでこそ、ユージオよ。」

ケント「さあ、行こう！」

イーデイス「ええ！」

僕たちは飛び出して、自分たちの飛竜に、ルーリッド村の上空で待機する様に命じる。ルーリッド村に着いて、ガスフトさん達の元へ。

ユージオ「ガスフトさん！」

ガスフト「ユージオ………？ケントも………！」

アリス「状況はどうなっていますか!？」

ルイス「現在、ジンク達がどうにか堪えています。いつここまで来るか………。」

イーデイス「ここは、私たちがどうにかするわ！南の通りから、皆を避難させて！」

ガスフト「分かりました、整合騎士様！」

ルイス「皆、避難するぞ！バルボツサさんも、逃げますよ！」

バルボツサ「わしの屋敷が………！」

ルイスさんがバルボツサさんを引き摺ってまで避難させる。

僕たちは上空に向かって叫ぶ。

アリス「雨緑！」

イーデイス「霧舞！」

ユージオ「凍華！」

ケント「御雷！」

僕たちの飛竜の名前を叫ぶと、4匹の飛竜は、光線を放ちながらルーリッドの上空を

飛ぶ。

すると、光線に当たったゴ布林達が消し飛んでいく。

狼狽えているゴ布林達に向けて、僕たちは叫ぶ。

アリス「我ら、人界の騎士アリス、イーデイス、ユージオ、ケント！」

イーデイス「私たちがここにいる限り、アンタ達が求める血と殺戮は得られないわ！」

ユージオ「斬られる覚悟がある奴から前に出てこい！」

ケント「ここから先には一歩も通さない！」

「「エンハンス・アーマメント！」」

僕たちの叫び声に、ゴ布林達は怯むが、大将格と思われる2体のオークが叫ぶ。

モリツカ「グラアアーツ！たかが白イウムの四匹程度！」

デリル「このデリル様とモリツカが直ぐに這わせてやろう！」

だが、そう叫んでいたが、僕の氷の蔓とケントの雷の鎖に囚われ、アリスとイーデイスの金木犀の花と闇の斬撃波に飲まれ、すぐに倒される。

その際に、何体かゴ布林も倒している。

ゴ布林達が狼狽していると。

アリス「これは、人界と闇の国を隔てる壁。」

イーデイス「例えアンタ達が洞窟を掘り返そうと、私たちがいる限り、この地を汚さ

せはしない！」

ケント「選べ！前に進んで地の海に倒れるか……………」

ユージオ「後ろに下がって、闇の国に帰るか！」

僕たちの叫び声に、ゴブリンとオークは、叫びながら撤退していく。

何とか、終わって良かった……………」

その後、ルーリッドの村の人たちに、色々と質問攻めにあった。

僕とケントも整合騎士になって、休暇とダークテリトリーの監視を兼ねてここに来た

と説明した。

その後、洞窟を確認しに行って、完全に崩落させた。

そして、僕はアリスを自分の部屋に呼んだ。

アリス「お邪魔します……………」

ユージオ「どうぞ……………」

アリスも緊張している様な表情を浮かべ、僕の隣に座る。

覚悟を決めるんだ、ユージオ！

僕は自分にそう言い聞かせて、アリスに顔を向ける。

ユージオ「アリス、話があるんだ。」

アリス「何……………」

ユージオ「僕は、ルーリッドの村で過ごしていた時から、ずっと君の事が好きだったんだ。だから、君がどこに行こうと、この手を離したくない。一緒に居たい。」

アリス「……………」。

僕の告白の言葉を聞いたアリスは、顔を赤く染める。

少し俯いていたが、顔を上げると、満面の笑みを浮かべる。

アリス「私も、ユージオの事が好きよ。」

ユージオ「うん！」

想いが伝わって良かった……………！

アリス「じゃあ、私の事を好きだって事を証明して？」

ユージオ「うん。」

そう言っつて、僕とアリスは目を閉じて、顔を近づけていく。

すると。

カルム「おい！押すな！」

「!?」

「「「うわあ!!」」」

すると、部屋の扉が開いて、カルム達が転がってきた。

ユージオ「皆……………!?!」

アリス「もしかして、盗み聞き!？」

カラム「わ、悪い、つい、気になってな。」

イーデイス「おめでどう、アリス! ユージオ!」

ケント「良かった!」

アスナ「おめでどう!」

ミト「おめでどう!」

そう言ってくるが、あの告白の言葉を聞かれていた事がすぐに察しがついて、僕とアリスは顔を赤くしながら俯いてしまう。

翌日、ベルクーリさん達と合流するべく、飛竜に乗る準備をしていると、セルカとメアリの2人がやってくる。

2人曰く、シスターアザリヤには許可を貰ったらしい。

メアリ「まさか、お姉ちゃんも整合騎士だったなんて……………」

イーデイス「ごめんね、心配かけて。」

メアリ「大丈夫よ!」

セルカ「姉様達も、皆戻ってきてね!」

アリス「ええ。必ず、この6人で戻ってくるわ。」

ユージオ「ちゃんと約束は守るよ。」

ケント「ああ、セルカ、メアリ。約束だ。」

そう約束して、僕たちは、東の大門近くにいるであろう人界守備軍と合流するべく、飛竜を飛ばしていく。

第57話 傍付きとの再会

カルム side

ルーリッド村を発つてから、少しが経過した。

俺たちは、天幕が大量に並んでいる場所へと到着した。

ここが、人界守備軍の野営地だ。

いよいよ、闇の軍勢との戦いが始まるんだ。

気を引き締めないとな。

着地すると、誰かが近くに寄ってくる。

エルドリエ「アリス様！………貴様ら………！」

カルム「どうも。」

エルドリエは、アリスが居ることに歓喜の声を上げるが、俺とキリトとユージオとケントを見た途端、視線がきつくなる。

どんだけ嫌われてるんだ。

だが、それもすぐに終わった。

何故なら、アスナとミトの2人もエルドリエにきつい視線を向け、エルドリエはすぐ

にアリスの方を向いたからだ。

エルドリエ「アリス様！これは、どういう事ですか。何故、彼らがここに……………！」

アリス「これは、彼らの意思です。」

イーデイス「彼らがそう言ってるんだから、私たちには止める資格はないわよ。」

エルドリエ「だからと言って、彼らの力を借りるなど……………！」

カルム「だから来たんだよ。」

ユージオ「カルム……………」

ケント「お前……………」

俺の言葉に、その場にいる全員が俺を向く。

カルム「俺たちは、公理教会を崩壊させたからな。その責任は取る。戻れと言われても、俺たちは戻らないさ。剣士なら、世界を救う為に剣を振るうべきだと思ってるな。」

エルドリエ「貴様！いくら整合騎士を倒せたからと言って、一般民が戦争に加わろうとなどと……………！」

ベルクーリ「そこまでだ！」

「……………?!……………」

俺たちが声のした方を向くと、そこには、ベルクーリ、リョウガ、ユーリの3人がいた。

ベルクーリ「そうカツカするなよ、エルドリエ。そして、久しぶりだな、アリスの嬢ちゃんにユージオ、イーデイス、ケント、カルム。アスナとミトの嬢ちゃん達も来ると思ってたぜ。」

リヨウガ「どうやら、ユージオとケントは、一皮剥けた様だな。」

ユーリ「剣士として、成長したのだな。」

ユージオ「はい。」

ケント「鍛錬が日課となってますから。」

どうやら、永き時を生きた剣士達からしたら、ユージオとケントは成長してる様に見えるんだな。

まあ、実際に成長したと、俺も思う。

エルドリエ「騎士長！リヨウガ殿！何故、彼らを整合騎士にしたのですか！」

ベルクーリ「まだ納得してなかったのか。」

リヨウガ「アイツらの今の實力は、俺たちに勝るとも劣らない。」

ユーリ「それに、それ以上は言わない方が良いと思うぞ。」

エルドリエ「何？………ッ!？」

そう、俺の背後から、ミトとアスナの2人が殺気をぶつけているのだ。

怖いからやめて。

ミト「エルドリエさん……………だっけ？カルムは強いわよ。」

アスナ「そうね。キリト君だつて、強いんだから。」

エルドリエ「……………ツ!？」

そんな、殺気の視線を向けられたエルドリエは、何も言えなくなっていた。

ミト、アスナ、それ以上はエルドリエが可哀想だからやめてあげて。

すると、そんなエルドリエを他所に、ベルクーリとリョウガはキリトを見詰めていた。

カルム「ベルクーリさん？リョウガさん？」

ユージオ「何をする気なんだろ……………？」

ケント「さあ……………？」

アリス「まさか……………」

イーデイス「ちよつと……………！」

ユーリ「大丈夫だ。」

すると、ベルクーリさんとリョウガさんは、両眼をぎろりと光らせる。

すると、アスナが抱えてるキリトの体が震えて、2人とキリトの間で銀色の閃光が弾

ける。

俺たちは、抜刀する体勢をとる。

まあ、アスナに至つては、抜刀して、キリトを抱えながらも剣を2人に向けていた。

「アスナ「何をするんですか！」

ベルクーリ「いや、アスナの嬢ちゃん。これは、確認したい事があってだな……。」「
リヨウガ「どうやら、キリトは心こそここには無いが、生きてる。だから、絶対に目
覚めさせろ。」

アスナ「言われなくてもそのつもりです。」

カルム「アスナ、2人だつて悪気があつた訳じゃないから、許してあげよう？な？」
アスナ「カルム君が言うなら……。」「

そんなトラブルがあつたものの、何とか、各自に充てがられた天幕へと向かう。

だが、荷物を置いてすぐに、キリトの天幕の方へと向かう。

カルム「そういえば、ベルクーリさんとリヨウガさんは、キリトが心意を使えるつて、
分かつてた様な口ぶりだつたよな。」

ユージオ「確かに……。」「

ケント「もしかしてだが、今、ここに居る人全員の心意をぶつけければ、キリトは目覚
めるかもしれない……。」「

アリス「そうだよね。」

イーデイス「何もしないよりは良いかもね。」

ミト「だからアスナ、やろう。キリトを目覚めさせる為に。」

アスナ「皆、ありがとう……………！」

俺たちは、キリトの周りを囲んで、願った。

キリトが目覚める事を。

皆がキリトの事を待っている事を。

すると、入り口の鈴がなる。

来客が来たのだ。

カルム「ちよつと、俺、対応するわ。」

ユージオ「僕も行くよ。」

ケント「俺も行くこう。」

そう言つて、俺たちは天幕の外へと向かう。

カーディナルかユーリ辺りが来たのかなと思つていたが、違った。

ティーゼ「ユージオ……………先輩……………！」

ルナ「ケント……………先輩……………！」

シオリ「カルム……………先輩……………！」

ユージオ「ティーゼ……………？」

ケント「ルナ……………？」

カルム「シオリ……………？」

そこには、俺たちの傍付きが居た。

気づいた途端、俺たちに抱きついてくる。

シオリ「良かった！きつと、闇の国との戦争に来るって思ったから！」

カルム「お、おう。」

ティーゼ「先輩達が処刑されてなくてよかった……！」

ユージオ「う、うん……。」

ルナ「会いたかったです……！」

ケント「元氣そうで何よりだな。」

久しぶりに会えたな。

すると、ロニエだけが気まずそうにしていた。

カルム「えつと……ロニエも、久しぶりだな。」

ロニエ「い、いえ！皆さんがご無事でよかったです！代理の最高司祭様から、ここに居るんじゃないかと言われまして……。」

カルム「カーディナルが？」

なるほど、カーディナルが教えたのか。

すると、後ろから女性陣が来る気配がする。

待つて、シオリが抱きついたままなだけ！

アリス「3人とも、どうしたの……………」

イーデイス「えっ。」

ミト「……………」

あ、終わった。

恐れていた事がアアアア!!

ミトの俺を見る目が、絶対零度の如く冷えていた。

だが、整合騎士を見たシオリ達は、すぐに離れて、騎士礼を取る。

シオリ「せ、整合騎士様！」

ロニエ「皆、挨拶しないと！」

ルナ「そ、そうだった！」

ティーゼ「人界支部軍補給部隊所属、ティーゼ・シユトリーネン初等錬士です。」

ロニエ「同じく、ロニエ・アラベル初等錬士です。」

シオリ「同じく、シオリ・ヒューレット初等錬士です。」

ルナ「同じく、ルナ・カウマン初等錬士です。」

アリス「え、えつと……………確か、ユージオ達を連行した際に居た子達よね？私はアリス・シンセシス・サーティよ。」

ス・シンセシス・サーティよ。」

イーデイス「私は、イーデイス・シンセシス・テンよ。気楽に話して貰えると、私た

「ちも助かるから。」

そう話すと、傍付き4人組は、戸惑っているのか、黙ってしまおう。

すると、代表して、ティーゼが話す。

ティーゼ「いい、いえ……………以前、修剣学院でお見掛けした時と、騎士様の雰囲気と
いいですか、ご印象がかなり違っていましたので……………」

ユージオ「ああ……………」

カルム「そうだな。」

後、ミトさん、その視線はいい加減にやめて。

冷や汗が止まらないから。

ミト「じゃあ、ユージオ達は、ごゆつくり。私とカルムとシオリは、ちよつと、お
話があるからね。」

シオリ「えつ、何ですか……………?」

カルム「……………」

俺が思った事。

それは、終わった、俺の人生。

別にやましい事は考えてない!

ただの傍付きだし!

そんな事を考えながら、ミトが案内された天幕へと移動する。そして、俺はそこで正座させられた。

カルム「……………」。

シオリ「カルム先輩……………?」

ミト「カルム、説明。」

カルム「彼女は、俺が通つてた修剣学院の傍付き錬士だな。」

シオリ「そうです! 私は、先輩の身のお世話をしたんです!」

ミト「へええ……………」。

やばい、ミトの背後に、般若が見える。

しかも、鎌を持った死神を伴っている。

だが、それはすぐに消えた。

ミト「シオリちゃんだっけ?」

シオリ「は、はい……………」。

ミト「ありがとうね、カルムのお世話をしてくれて。」

シオリ「い、いえ! これは、傍付きの仕事ですから!」

ミト「カルムって、時々無茶をする事あるわよねえ。」

シオリ「い、いえ! 私たちに跳ね鹿亭の蜂蜜パイを買ってきてくれたり、熱心に剣技

を教えてくださいまし！」

ミト「へええ。良き指導生だったのね。」

ミト、声は笑ってるけど、顔は一切笑ってない！

やばい、あらぬ誤解を受けたくない……………！

跳ね鹿亭の蜂蜜パイに関しては、女の子は甘い物が好きかなって思ったんだよ！

シオリ「あ、あの……………。ミトさんって、カルムとはどういう関係なんですか……………？」

ミト「私？私はねえ、カルムとはお付き合いしてるのよ。」

シオリ「ええっ!?そ、そうなんですか……………!?」

カルム「ええっと、そうです。」

シオリがシヨックを受けてるよ。

ただ、すぐに立ち直った。

シオリ「そうですか……………。分かりました。」

ミト「ただね、さつきも言った通り、カルムを世話してくれてありがとうね。」

シオリ「い、いえ！」

カルム「ただ、良い傍付きだったよ。シオリは。」

シオリ「ありがとうございます！」

ミト「まあ、この件に関しては、後できっちりと聞く事にしましょう。」
カルム「……………はい。」

ミトも、状況が状況なのを理解しているからか、それ以上は後で聞くことにしたらしい。

俺たちは、キリトがいる天幕の方へと戻っていく。

まあ、殺されないだけまだマシか。

その後、ケント達と合流して、どういう立場なのかを話す。

ユージオとケントは、ベルクーリさんとリョウガさんを打ち倒した事が認められ、特例として、整合騎士になった事。

キリトは、とある事情で、心身喪失状態になっている事。

そんな事を話す。

一応、信じてくれた。

その際に、ティーゼとルナが告白するも、ユージオとケントは2人を振った。

まあ、アリスとイーデイスと付き合ってるからな。

アリスとイーデイスは、ホツとした様な表情を浮かべる。

ごめん、ユージオとケントには、昔から想い続けてた人が居たんだ。

第58話 開戦前夜

カルムside

そんなトラブルがあつたものの、戦争中は、キリトの事は、ロニエ達に任せることにした。

翌日、俺たちは、軍議に参加するべく、指定された天幕へと向かう。

アスナ「キリト君の事、守ってくれて良かったわ。」

ミト「そうね。」

アリス「ええ。」

イーディス「さて、私たちも、早く集合場所に向かいますよ。」

ユージオ「うん。」

ケント「そうだな。」

カルム「ああ。」

俺たちは、そう話しながら向かって行っているが、途中、ベルクーリさんとリョウガさんの2人と会う。

ベルクーリ「よう。」

アリス「小父様、リヨウガ殿。」

リヨウガ「それで、あの黒髪の若者はの預け先だが……何なら、俺たちから後衛部隊に……。」

ユージオ「それに関しては、大丈夫です。」

ケント「俺たちの傍付きをしていた人たちが居るので、開戦後は、彼女達に預ける事にしたんです。」

ベルクーリ「ほう、そりや良かった。」

リヨウガ「それで、お前達やその傍付き達と接触して、キリトは何か反応があったか？」

アスナ「いいえ……。」

ミト「依然として、状況は変わらないわね。」

ベルクーリ「そうか……。」

ベルクーリさんとリヨウガさんは、何かを考え込む様な顔をする。

俺たちが顔を見合わせて首を傾げていると、2人は顔を上げる。

ベルクーリ「これはここだけの話だな。正直、俺たちには、来たる戦の趨勢を決めるのは、キリトとカルムの2人なんじゃないかと思っただけだな。」

カルム「俺も……？」

リョウガ「ああ。カーディナルやアリス達の援護があつたとはいえ、あの最高司祭を斬った。それは凄い。下手したら、心意の強度だけを比べたら、この俺たちも及ばないかもな。」

その言葉に、アンダーワールド組は驚いていたが、ミトとアスナは驚いていなかった。むしろ、さも当然という様に頷いていた。

ベルクーリ「それに、アスナとミトの嬢ちゃんにも言える事だが、お前達4人は、実戦経験を積んでいる、と感じたんだ。」

ユージオ「実戦……………」

ケント「どういう意味ですか……………」

リョウガ「文字通りだ。命のやり取りを、こいつらはしている。」

アリス「え……………」

イーディス「嘘……………」

そんな風に、ケント達は、俺、ミト、アスナを見てくる。

まあ、命のやり取り……………ではないが、デュエルを何度かしているのは間違いない。

その後、ファナティオとレイカが現れ、軍議場へと向かう。

その際に、ファナティオとレイカから、礼を言われたのだ。

女性だと知っても、全く手加減せずに倒してくれた事を。

まあ、手加減したなんて言われたら、ミトとアスナにキツク言われそうだからな。そうして、軍議が始まる。

一応、リヨウガから、整合騎士の一覧を聞いていて、凍結から解除された整合騎士として、レンリ、シエータという整合騎士が追加されていた。

そこに、カーディナルとユーリも合流する。

ちなみに、タカトラ先輩、リーナ先輩、ゴルゴロツソ先輩、ユア先輩、ウオロ主席も参加していた。

まあ、来るだろうとは思っていたが。

そうして、軍議が始まった。

フアナテイオ「この4か月というもの、あらゆる作戦を私と閣下、リヨウガ、レイカ、カーディナル殿、ユーリ殿と検討し合ってきましたが、現状の戦力で敵勢力を押し留めることは困難です。」

そう、これが現実だ。

ユーリから聞いた話によると、元老長チユデルキンは、記憶に問題が生じた騎士や、整合騎士として不適合だった場合は、再調整を施していたそうだ。

結果として、この場にいる14名が、現状、闇の軍勢と戦える整合騎士という事だ。

レイカ「果ての山脈のこちら側は10キロル四方に渡って草原と岩場しか存在しな

い、真つ平らな土地が広がっているだけで、ここまで敵に押しこまれれば、後は5万の数を誇る敵に包囲……………こちらは殲滅されるのを待つだけになるでしょう。」

カーディナル「そこで、こちら側が取れる戦法は唯一つ……………東の大門へと続く幅狭し峡谷で防衛線を敷き、敵の迎撃を図るしかないわけじゃ。縦深陣の陣形を取り、敵の突撃を受け止めながら削っていく……………これがこちらの基本方針じゃ。」

ユーリ「ここまで何か意見はあるか？」

ファナテリオ、レイカ、カーディナル、ユーリの順番で行った説明に関して、エルドリエが手を上げる。

エルドリエ「迎撃に関してですが、敵軍には大弓を装備するオーガの軍が、そして、一層危険な暗黒術師団も存在します。それらの遠距離攻撃にはいかなる対応をするつもりですか？」

ファナテリオ「これは危険な賭けですが、峡谷の底は昼でも陽光が届かず、地面には草一本生えていない……………つまり空間神聖力が薄いのです。」

レイカ「そこで、開戦前に我らが根こそぎそれを消費してしまえば、敵軍は強力な術式を撃てなくなるでしょう。」

ユーリ「無論、それは俺たちも同じ道理。しかし、こちらにはそもそも神聖術師は100名程しか居ない。術式の撃ち合いとなれば、神聖力の消費量は敵の方が遙かに多

い筈だ。」

エルドリエの質問に対して、ファナティオ、レイカ、ユーリの順番で答える。

エルドリエは座り、次はデュソルバートが手を上げる。

デュソルバート「……………成程。副長殿達の言は正しかろう。しかし、神聖力が枯渇してしまえば、傷付いた者の天命の回復すらできなくなるのではないか?」

カーディナル「デュソルバート……………お主の申すように確かにその危険性はある。じゃが、少しでも有利に戦局を運ぶにはこれぐらいの賭けに出ねばならぬのじゃ。幸いにも、人界のあらゆるところから高級触媒と治療薬を掻き集め、ここに運び込むことができた。攻撃用神聖術を戦術から捨てるのなら、使用する術式も治療術に集中することができるじゃろう……………。薬を補助的に用いれば触媒だけで5日は戦局を保たせることができる筈じゃ。」

そんな風に、戦術の相談が行われていた。

確かに、それをやれば、何とか持つかもしれない。

すると、アリスが手を上げる。

アリス「ですが、問題はもう一つあります。カーディナル様、ファナティオ殿、レイカ殿、ユーリ殿。いかにソルスとテラリアの恵みが薄いと言つても、あの谷には長い年月の間に膨大な神聖力が蓄積されていると話だった筈です。それを一体どのようなに

て一気にかつ開戦前の短時間で根こそぎ使い尽くすというのですか？」

カーディナル「……………それはできるのは唯一人……………。お主じゃ、アリス。」

「……………えっ……………!?!」

カーディナルの言葉に、驚いた様な反応をする、ユージオとアリス。

俺たちも、アリスの事を、驚愕の視線で見ている。

イーデイス「アリスが……………!?!」

ケント「何……………!?!」

アリス「わ、私に、そんな事が……………!?!」

カーディナル「無論、術式自体は、わしが組み立てた。それに、お主自身は気付いておらぬじやろうが、お主の力も整合騎士の範疇には収まらないものになっておる……………。下手をすれば、今のわしと同格かそれ以上かもしれぬ。だからこそできる筈なのじゃ、神の如く天を割り、地を裂く強大な術を使うことが……………。」

アリス「……………。」

アリスは、カーディナルの言葉を受け入れた。

そうして、会議は無事に終了した。

だが、気になる事があるので、俺、ユージオ、ケント、ミト、アスナは、カーディナル、ユーリ、ベルクローリ、リョウガの元へ。

ちなみに、イーデイスは、アリスのサポートに回る事になっている。

ユージオ「あ、あの……………」

ケント「俺たちの立ち位置は、どこに行けばいいんですか……………」

カルム「俺たち、ここに行けとか言われてないからな。」

ベルクーリ「ああ、そうだったな。今から説明しようと思ってたからな。」

リヨウガ「お前たち5人には、遊撃を頼みたいんだ。」

アスナ「遊撃？」

ミト「どういう事？」

カーディナル「うむ。お主らの立ち位置が余りに特殊だな。何せ、全員が整合騎士と同等かそれ以上の実力を持つておるからな。」

なるほどな。

俺はレイカを、ユージオとケントはデュソルバートとベルクーリとリヨウガを、アスナはフアナティオを、ミトはレイカを倒していたからな。

それを聞いても、ユージオとケントは不安気味だった。

ユージオ「で、でも、僕たちは、整合騎士になったばかりですし……………」

ケント「俺たちにそんな力が……………」

ユーリ「おい、もう少し自信を持って。」

ベルクーリ「そうだけ。」

カーディナル「それに、整合騎士の範疇を超えているのは、お主とケントも同様じゃからな。」

ケント「俺たちが……………?」

リヨウガ「ああ。それに、アリスとイーデイスを支えてやれ。今の2人には、お前達が必要だからな。」

ユージオ「……………分かりました!」

ケント「はい!」

そうして、俺たちは準備を始める。

といつても、俺はユーリと共に来ていた。

そこには、刃王剣十聖刃が。

ユーリ「今のお前なら、再び刃王剣十聖刃を抜刀出来るだろう。」

カルム「ああ……………!」

俺は、刃王剣十聖刃に近寄り、グリップ部分を握る。

そして、思いつきり抜刀する。

相変わらずの感覚だ。

それに、刃王剣十聖刃も使える。

カルム「ユーリ。」

ユーリ「何だ？」

カルム「一応、火炎剣烈火を右手に、刃王剣十聖刃を左手に持つよ。」

ユーリ「分かった。それがお前の本気なら、それで行け。」

カルム「ああ。」

俺は、この世界を守りたいんだ。

だから、本気で行く。

そして、ミトとアスナから聞いているが、ユージオ、アリス、ケント、イーデイスの4人をワールド・エンド・オルターへと導かなければならないからな。

俺は決意の元、戦場へと向かう。

第59話 開戦と、騎士の奮闘

カルム side

俺が決意をして、外に出ると、1人の整合騎士が居た。

カルム「エルドリエさん……………」。

エルドリエ「……………」。

そこに居たのは、エルドリエさんだった。

カルム「どうしたんですか？」

エルドリエ「話がある。」

そう言つて、俺を連れ出す。

開戦直前だというのに、どうしたんだ？

そんな風に首を傾げていると、エルドリエは立ち止まる。

カルム「……………」それで、話つて？」

エルドリエ「……………」実は、貴様には謝っておきたいと思つてな。」

カルム「謝る？」

エルドリエ「ああ。実は、私は貴様らが羨ましかつたんだ。」

カルム「……………」

エルドリエ「あの我が師の笑顔を、私は見た事が無かったのだ。それを容易く行う貴様らに、嫉妬してしまったのだ。」

カルム「そうか……………」

なるほど、嫉妬からか……………」

そんな事で嫉妬されても……………」

エルドリエ「そういえば、アリス様は、あのユージオと仲が良いみたいだが、あの2人はどういう関係なんだ？」

カルム「ああ、あの2人は、付き合ってるんだよ。」

エルドリエ「そうか……………」

カルム「大して驚かないんだな。」

エルドリエ「あの様な仲を見てしまったら、な。」

すると、エルドリエは徐に立ち上がって、こちらを向いてくる。

エルドリエ「貴様……………」いや、カルム。この戦争、絶対に勝つぞ。」

カルム「ああ。」

俺とエルドリエは、握手をする。

剣士と騎士の誓いだ。

俺は、あの究極の神獣がカーディナルによって変化した鎧を身に纏い、動き出す。

俺は、ユージオ、ケントの3人と合流して、第一部隊と第二部隊の間に配置する。

中央は俺、左翼はユージオ、右翼はケントが配置する。

もし、万が一突破された場合は、俺たちが対応する事になっている。

アスナとミトは、第二部隊と補給部隊の間に配置されている。

アスナのステイシアのアカウントに付与されている無制限地形操作は、味方を巻き込んでしまう可能性があるのです、第二部隊と補給部隊は少し距離を離している。

なら、アスナの負担を減らすべく、俺たちが頑張るしかない。

すると、カーディナルが声を出す。

カーディナル『人界軍よ！もう間も無く、東の大門が崩れる！我らが敗れることそれ即ち、人界が炎に包まれ、滅ぶ……！だからこそ、我らが剣となり敵を迎撃し、盾となり人界を守る！それぞれの守りたい物の為に、わしら公理教会に力を貸してくれ！』

「「「おおお!!」」」

カーディナルの声に、周囲から声が上ががる。

すると、東の大門に亀裂が入る。

カルム「来るか………！」

大門に、赤い英語が浮かぶ。

それは、『FINAL LOAD TEST』……………最終負荷実験を意味する英語だった。

それと共に、東の大門が崩壊する。

最終負荷実験という単語を聞いて、現実世界に帰ったら菊岡を1発ぶん殴ろうと思つたのは、余談だ。

カーディナル『第一部隊抜剣！修道士隊、治癒術式の詠唱を開始！第二部隊も厳戒態勢に移行……………戦闘用意!!』

カルム「来る……………！」

カーディナルの声と共に、俺たちは、戦闘体勢に入る。

すると、ダークテリトリーの先陣部隊が押し寄せてきた。

ゴブリンとジャイアントの混成部隊だった。

すると、その部隊に向かって、光と煙の虫と炎が襲いかかる。

俺は、やばくなったら動くでしょう。

ケントside

遂に、始まったんだな……………。

人界とダークテリトリーとの戦争が。

もしかしたら、和平の可能性もあつたのだから……………。

ベルクーリさん曰く、暗黒騎士の将軍であるシヤスターという将軍は、人界との和平を考えていたらしい。

だが、戦争になった。

これから、俺はゴブリンの命を大量に奪う事になるのだろう。

だが、その程度で迷っているのは、剣士として情けない。

もう、俺は迷わないと決めたんだ。

前方の戦況を見ると、デュソルバートさんの熾焰弓の武装完全支配術が、ゴ布林達を薙ぎ払っていた。

だが、デュソルバートさんの攻撃を警戒して、二手に別れての接近戦に持ち込もうと
していた。

俺はすぐに前に出る。

すると、ゴルゴロツソ先輩にユア先輩と合流する。

ゴルゴロツソ「騎士様達をお守りしろ！」

ユア「絶対に近づけるな！」

デュソルバート「すまない、頼む。」

ゴルゴロツソ「お任せあれ！」

ケント「行きましょう、ユア先輩！」

ユア「ああ！」

俺、ユア先輩、ゴルゴロツソ先輩を先頭にゴブリンと戦っていく。

やはり、時間が足りなかったからか、ゴブリンに倒される人がちらほらと見える。

ユア「まさか、整合騎士となったお前と、こうして肩を並べられるとはな！」

ケント「俺もです！絶対に生き残りましょう！」

ユア「ああ！」

ユア先輩からそう声をかけられ、俺は答える。

そう、先輩は、俺が整合騎士になったとしても、態度を変えなかった。

ユア先輩曰く、『例え整合騎士になったとしても、お前はお前だ。態度を変える必要は

ないだろう？』らしい。

俺たちは、ゴブリンを倒していく。

だが、デュソルバートに突っ込んでいく敵は、何か変な行動をしていた。

それは、死んだ仲間の骸を盾に、矢を空振りさせていたのだ。

ケント「まさか………！ユア先輩、ここは頼みます！」

ユア「どうした!？」

ケント「デュソルバートさんが危ない！」

ユア「………ッ！分かった！ここは何とか持ち堪える！」

ケント「ありがとうございます！」

俺はすぐさま駆け出して行く。

恐らく、デュソルバートさんは、冷静さを欠いたんだ……………！

俺はデュソルバートさんと合流する。

ケント「デュソルバートさん！」

デュソルバート「ケント！助かる！」

ケント「矢が……………！」

デュソルバート「心配するな。我も騎士だ。剣を使う。」

すると、俺たちの前に、一体の大柄なゴブリンが現れる。

恐らく、大将……………！

デュソルバート「貴様は、暗黒界十侯の1人、ゴブリン族の長か。」

シボリ「おうよ、平地ゴブリン族長、シボリ様だ。」

デュソルバート「我は整合騎士、デュソルバート・シンセシス……………」。

シボリ「おおっと、イウムの名前なんざ興味はねえ！お前らは肉だ、俺様が取る首級にくつついた邪魔な肉だ！てめえら、かかれ！」

まさか、そのまま来るとは。

だが、俺だつて強くなつたんだ。

デュソルバート「笑止！行くぞ、ケント！」
ケント「はい！」

俺とデュソルバートさんは、剣を振るい、敵を倒して行く。

ゴブリンの精鋭達は、俺たちに臆せず襲い掛かってくる。

しかも、仲間を盾にして、仲間ごと剣で貫く奴も居るのだ。

俺は何とか対応しきれているが、デュソルバートさんは対応しきれていなかった。

すると、デュソルバートさんは2体のゴブリンによつて転倒させられ、シボリが止めを刺そうとする。

俺はすぐさま、俺の近くにいるゴブリンを倒して、デュソルバートさんを助ける。

デュソルバート「ケント……………！」

ケント「ハアアアア！」

シボリ「くそっ！うろちよろしやがって！」

俺は、シボリの攻撃を躲しつつ、攻撃して行く。

すると、とんでもない気配を感じて、デュソルバートさんの方をチラリと見ると、何と、熾焰弓に剣をつがえていたのだ。

俺が驚いていると、シボリも気付いたのか、驚愕の表情を浮かべる。

デュソルバート「炎よッ!!灼き尽くせッ!!」

その声と共に、炎を纏った剣が放たれる。

俺はすぐに回避行動を取る。

シボリは、手に持っていた斧で、受け止めようとするが、俺たちがカセドラルで戦っていた時よりも激しい炎は、斧をあつまり溶かし、シボリは蒸発した。

炎は、後ろにいたゴブリンの部隊をも焼き尽くして行く。

その姿は、まるで、巨大な不死鳥の様だった。

俺は、デュソルバートさんの元へ。

ケント「大丈夫ですか!？」

デュソルバート「ああ……。平地ゴブリンの長は討ち取った。ケント、すまなかった。若いお前に無理をさせて。」

ケント「いえ、デュソルバートさんが無事ならそれで良いです。」

デュソルバート「そうか……。よし、我らも立ち直すぞ。ケント、支援を頼む。」

ケント「はい！」

俺とデュソルバートさんは、未だに來る平地ゴ布林族を迎え撃つべく、動く。

カルムside

どうやら、ケントの方は上手くやっつたみたいだな。

ホツとしていると、正面から殺気の気配を感じる。

カルム（殺気……!? 誰が……!?）

異様な殺気に、正面を向くと、フアナテイオさんとレイカさんが、殺気に飲まれて動けなくなっていたのだ。

しかも、目の前に、ジャイアントの長と思われる奴が迫っていた。

カルム「不味い……!!」

俺はすぐに駆け出して行く。

だが、第一部隊中央の最後尾にいる俺が、一番前に行くには、時間がかかる。

間に合わない……!!

すると、1人の整合騎士が、ジャイアントの槌を、剣で受け止めたのだ。

だが、すぐに剣が砕け、腕で受け止めるが、血が噴き出す。

カルム「ハアアア!!」

その整合騎士の身に攻撃が当たりそうになった瞬間に、俺は火炎剣烈火と刃王剣十聖刃で槌を吹き飛ばす。

その整合騎士は、俺を見ると、安心したかの様に倒れる。

フアナテイオ「ダキラ!」

レイカ「カルム……!! すまない……!!」

カルム「ここは俺が引き受けます! 早く、ダキラさんの手当てを開始して下さい!」

レイカ「お願いします！」

フアナテイオとレイカの2人が、四旋剣の残りの3人にダキラを治癒術師の元へと運ぶ様に指示を出す。

すると、再び異様な殺気が出る。

ジャイアント「コロ……………コロ、ス……………!?コロ、コロコロ……………!?コロスウウウウ!?」

カルム「まさか……………!?」

あのジャイアント、フラクトライトが崩壊したのか!?

ベル・アバドンやライオス・アンティノスの様に。

ユーリから聞いた話によると、ジャイアント族は、己が最強という思いがあるらしい。それを、フアナテイオさんとレイカさんによってその思いがぶち壊された結果、フラクトライトの崩壊を招いたのか……………!

そんな事を考えていると、そのジャイアントは、俺を無視して、フアナテイオさんとレイカさんに攻撃をしようとする。

カルム「させるか！」

俺は、火炎剣烈火と刃王剣十聖刃でジャイアントに攻撃をする。

すると、俺に殺気が向いた。

ジャイアント「オマエモ……………コロス……………! コノオレニキズヲ……………コロスウウウウ
!？」

カルム「ヤッベ……………!」

殺意が凄まじい。

だが、この程度の殺意は、死銃と同じ様な物だった。

カルム「やれるもんならやってみろ! 俺は負けない!」

ジャイアント「ウガアア!!」

俺は、2本の剣を使い、敵の攻撃を受け流しつつ、攻撃をして行く。

レイカ side

カルム、お前は、私とフアナテイオが呑み込まれてしまった殺気にも怯まず、戦える

というのか……………!?

レイカ（不甲斐ない……………!）

そんな思いを感じていると、あの人の言葉が蘇る。

リョウガ『レイカ、お前がフアナテイオと共に四旋剣を鍛えてくれた。俺の次に整合

騎士となったお前の事が気になっていた。』

レイカ「!?リョウガ様……………!？」

すると、リョウガ様と話した時の光景が脳裏に過ぎる。

リヨウガ『お前に、これほどまでに慕われていたとはな……。俺は嬉しい。レイカ、俺も、お前が好きだ。』

そうだ、私は、結ばれ、リヨウガ様に難色を示されても、前線に出た。

だからこそ、この様な場所で、立ち止まる訳には行かない……………!

私に、リヨウガ様への想いを伝えるきつかけとなつたあの男を助けるのだ!

カルム side

俺は、ジャイアントに対応していると、凄まじい気配を感じた。

それは、フアナテイオさんとレイカさんが、殺気を振り払つた姿だった。

レイカ「カルム!」

カルム「ああ!」

俺は、2人の意図を察して、ジャイアントの気を、2人に移させた。

ジャイアント「コロシテエヤルウウウウ……………!?!」

そう言つて、ジャイアントは、大きく跳躍するが、二人は慌てていなかった。

フアナテイオ「地の底に帰れ。」

レイカ「終わりです。」

レイカの煙叢剣狼煙から出た煙が、ジャイアントを拘束して、光が、ジャイアントを

一刀両断する。

その光景は凄まじく、敵味方関係なく動きを止める。

カルム「2人とも……………！」

フアナテイオ「不甲斐ない姿を見せたわね。」

レイカ「私たちは大丈夫です。他の部隊の救援へと向かって下さい。」

カルム「分かりました！」

俺は、すぐに、ユージオ達の左翼の方へと向かって行く。

待ってろ、ユージオ……………！」

すぐに行く……………！」

第60話 比翼の騎士

ユージオside

僕は、左翼の部隊の一番後ろに居たが、突然、煙幕に包まれる。

ユージオ「煙幕……………!?!」

僕が突然の事に戸惑っていると、ゴブリンが現れる。

エルドリエさんが突破されたのか……………!?!

いや、煙幕で判断力を奪われたんだ。

少しずつではあるが、突破してくるゴブリンの量が増えてきた。

僕は、すぐに突破してきたゴブリンを斬り捨てていくが、いかんせん数が多い。

第二陣の方にも流れ込んでいき、徐々に突破されて行く。

この先には、キリトやティーゼ達が……………!

ユージオ「クツ……………!」

僕は歯噛みをして、第二部隊の間を駆け抜け抜けながら、即座にゴブリンを斬り捨てていく。

すると、三つの人影が僕の周囲に居たゴブリンを斬り捨てる。

ユージオ「フィゼルさん!?リネルさん!?カルム!」

フィゼル「ユージオ!?しかもカルムまで!」

リネル「やっぱり、突破されてしまいましたか!」

カルム「大丈夫か!」

そこには、あの幼き暗殺者のリネルさんとフィゼルさん、そしてカルムが居た。

カルム「嫌な予感がしたから、来てみて正解だったな!第二部隊を指揮してる整合騎士はどこに行ったんだ!」

リネル「そういう事……レンリっちの腰抜け……!」

フィゼル「頼りないですね……!」

ユージオ「どういう事……!」

カルム「時間がない!ユージオは補給部隊の方へ行ってくれ!ここは、俺と暗殺コンビでどうにかする!」

ユージオ「分かった、お願い!」

カルム「おうよ!」

フィゼル「助かるわ!」

リネル「正直、ゼルと私だけじゃ持ち堪えられないから、助かります!」

僕はそう言って、補給部隊の方へと向かって行く。

道中、ゴブリンを倒して行く。

急がないと、キリト達が……………！

レンリ side

僕は、天幕の中で震えていた。

レンリ「……………立つんだ、レンリ……………。持ち場に戻って指揮を執って……………戦わないと……………。いや、僕なんかがいたって、邪魔になるだけだ。」

僕は、失敗作と言われてしまった。

なぜなら、僕が持つ神器、《雙翼刃》の武装完全支配術を使えなかった。

レンリ「……………そうだ……………。僕が居なくても、彼らが居る。あの5人が……………」

あの3人とは、ユージオ、ケント、カルム、アスナ、そしてミトの事だ。

最高司祭様は、アスナとミトを除いたあの4人を迎え撃つべく、僕を目覚めさせようとしたけど、間に合わなかった。

それに、強い力を持つあの3人なら、僕が居なくてもどうにかなる。

すると、周囲が騒がしく聞こえる。

多分、僕が居なくなったら後、ゴブリンの集団が突破してるのだろう。

戦わないと……………！

でも……………！

ロニエ「この天幕ならどう……………?」

ティーゼ「うん。ここなら身を隠すのも大丈夫そう。」

シオリ「なら、キリト先輩を奥に隠して、私たちは天幕の入り口を守りましょう。」
ルナ「そうね。」

レンリ（誰が……………?）

僕は、入り口から聞こえてくる女の子の声に、思わず身構える。

少し動いてしまい、気付かれてしまう。

ティーゼ「っ……………!?そこに誰がいるの!?!」

レンリ「……………敵じゃないよ。驚かせるつもりはなかったんだ、済まない。」

ルナ「き、騎士様……………!?失礼致しました!」

レンリ「いや、驚かせてしまった僕の方が悪い……………本当に済まなかった。」

確か、彼女達は、補給部隊に居たはず……………。

彼女達の、胸元の紋章を見る視線に耐えかねて、目を逸らしてしまう。

レンリ「それに……………僕はもう整合騎士じゃない。戦場から逃げてきたんだよ

……………。今頃、僕が指揮する筈だった前線の部隊は大騒ぎだろう……………。死者だつ

て出ている筈だ……………なのに、ここから動けないでいる僕が騎士なんかであるもんか

……………。」

「……………」

僕の自嘲めいた言葉を聞いても、彼女達は表情を崩さなかった。

ティーゼ「申し遅れました……………私達は補給部隊所属のロニエ・アラベル初等錬士と、ティーゼ・シユトリーネン初等錬士、シオリ・ヒューレット初等錬士、ルナ・カウマン初等錬士で、そして、こちらが……………キリト上級修剣士殿です。」

レンリ「キリトって……………あの最高司祭様を倒した、あのユージオとケントとカルムの仲間なのか……………？」

ルナ「はい。騎士様、勝手なことを申すようですが、どうか私たちに手を貸してもらえませんか？なんとしても、私たちはキリト先輩をお守りしなければなりません。」

レンリ「それは……………」

ロニエ「私たち四人が力を合わせてもゴブリンたった一匹にも適うかどうか分からないんです……………。でも、それが今の私たちの任務なんです……………」

シオリ「私たちに先輩を託してくれたユージオ先輩とケント先輩、カルム先輩に応えるためにも……………この方を絶対に守り抜かないといけないんです。」

レンリ「……………僕は、今戦っているユージオとケントより強くないよ。そんな強さは、僕には無いんだ……………」

ティーゼ「ユージオ先輩とケント先輩は、そんな人じゃないです！」

僕の自嘲の言葉に、ティーゼは強く否定した。

ロニエ達も驚いていた。

ティーゼ「ユージオ先輩とケント先輩は、これまで接してきた中で、自分を強いとは決して言いませんでした！」

ルナ「あの二人には、守りたい大切な物があるんです！だから、それを守る為に、戦っているんです！」

レンリ「……………ッ!？」

守りたい、大切な物……………?？」

その為に、あの二人は戦っているのか……………?」

そんな事を考えていると、四人の叫び声が耳に入る。

ティーゼ「もうここにまで煙が……ちよつと待って……変な煙の中から沢山の人影が……………つ!皆、剣を抜いて！」

「「「つ……………!?!」」」

すると、そこにゴブリンが入ってくる。

ゴブリン「ほほう！白ウムの娘っ子が四人！俺の獲物として、殺してやるよお！」

「「「つ……………!?!」」」

レンリ（不味い、助けないと……………!）」

だけど、僕の足は動かない。

すると、あの青年が、震えていた。

必死に、あの四人を守ろうとしていた。

君は、動けないのに……。

更に、ゴブリンの胸に、剣が生える。

位置から察するに、心臓を貫いている。

ゴブリンの顔に驚愕の色が出て、そのまま倒れる。

ゴブリンの背後には、鎧を着た金髪の青年が居た。

ユージオ「ティーゼ、ロニエ、シオリ、ルナ。無事かい？」

ティーゼ「はい、無事です！」

ユージオ「良かった……！今、ユーリさんが迎えに来てるから、キリトを連れて避

難して。」

ルナ「はい！」

そう言ったユージオさんの鎧は血で汚れていた。

鎧だけではない。

その綺麗な金髪にも泥汚れに混じって血が見え、頬には乾いた返り血がこびりついていた。

明らかに、何人もの敵を倒した後だ。

やっぱり、強い……………。

僕なんかよりずつと……………。

ティーゼ達がどこかに行く中、ユージオさんは僕を見つめる。

ユージオ「ええつと、レンリさん……………ですよね？」

レンリ「……………うん。」

ユージオ「このままじゃ、人界の方に向かってしまうゴブリンが出てしまいます。どうか、剣を執つて貰えませんか？」

レンリ「……………無理だよ！僕には、彼らを殺すことができないんだ！彼らだって物じゃない、ただの悪魔じゃない！それぞれにそれぞれの家族がいて、人生がある！それを僕が摘んでしまうことなんて……………ッ！」

ユージオ「レンリさん……………。」

レンリ「君は、どうしてそんなに平然としていられるんだ！他者の命を奪つて、なんで平気なんだ！」

気がつくつと、僕はそう叫んでいた。

僕の叫び声を聞いて、ユージオさんは驚いていたが、苦笑する。

ユージオ「僕だって、誰かから何かを奪う戦いをするなんて、出来ないよ。」

レンリ「……………ッ!？」

ユージオ「でも、僕には、守りたい物がある。それを守る為に、僕は剣を執るんだ。例え、その行動が、何かを奪う事になっても。」

ユージオさんの言葉は、僕の心に響いた。

ユージオ「レンリさんは、守りたい物があるんじゃないんですか？」

レンリ「……………ッ!!」

そう言われた時に、脳裏に、幼馴染の声が聞こえてくる。

幼馴染『レンリ……………。お前は、立派な騎士になれ……………。俺の分まで……………。』

……………。

そうだ、僕は、彼の分まで背負って、戦うべき義務があるんだ。

そんな事を忘れていたなんて……………。

ユージオ「行こう。」

レンリ「ああ!」

僕は、ユージオさんと共に、天幕から出て、駆け出して行く。

すると、ゴブリン達が、僕たちに気づいて、迫ってくる。

ユージオ「僕は、ユージオ・シンセシス・サーティナー!」

レンリ「僕は、レンリ・シンセシス・トウエニセブン!この首が欲しければ、命を投

げ出す覚悟でかかってこい！」

その言葉と共に、僕は雙翼刃を投げ、ゴ布林達を倒して行く。

ユージオさんも、剣を振るって、敵を倒していった。

ユージオ side

何だ、あの神器は………?!?

見た目は、紙よりも薄いのに、ゴ布林を次々と倒して行く。

僕も、あの人のああ言ったからには、負けてられない！

大切な人達を守る為に！

僕も、青薔薇の剣で、ゴ布林達を倒して行く。

すると、ひと回り大きいゴ布林が現れる。

レンリさんは、そのゴ布林に問う。

レンリ「………お前が、大将か？」

コソギ「おう。山ゴブリンの族長、コソギだ。しっかし、こんな後ろに整合騎士が二

人も居るなんてなあ。」

ユージオ「悪いけど、倒させて貰うよ。」

コソギ「やれるもんなら、やって見ろよ！」

僕は、そのコソギと名乗ったゴ布林に向かって駆け出していき、戦う。

レンリさんは、雙翼刃を投げて、攻撃するが、見抜かれて、弾かれる。

コソギ「それにしても、片方は一騎当千と言われると分かるが、緑の坊や。お前さんは違うみたいだな。弱いから、そんな後ろに居たんדר？」

レンリ「……………ああ、そうさ。だけどね、勘違いするなよ。出来損ないなのは僕であつて、こいつじゃない。」

ユージオ「レンリさん……………」

レンリ「ユージオさん、時間を稼いで欲しい。」

ユージオ「……………分かりました。」

レンリさんには、どうにかする方法があるという事か。

なら、僕は、それに賭ける！

僕は、コソギに攻撃しては、離れる行動をする。

すると、レンリさんの声が聞こえてくる。

レンリ「……………飛べ、雙翼！」

その声と共に、雙翼刃は、コソギに襲い掛かるが、弾かれてしまう。

コソギ「何度やろうが……………無駄だツ!!」

レンリ「リリース……………リコレクション!!」

ユージオ「リリース・リコレクション!!」

その式句は、記憶解放術の術式……！！
僕も、合わせて記憶解放術を発動する。

僕の青薔薇の剣から放たれた氷の蔓が、コソギの動きを止める。

すると、一つになった雙翼刃は、コソギへと向かって行き、そのまま一刀両断した。
倒れた事を確認して、記憶解放術を止め、レンリさんの方へと向かう。
すると。

フィゼル「……………少しは騎士っぽくなったじゃない。」

リネル「まさか、倒されてしまうとは。」

カルム「お疲れさん、ユージオ、レンリさん。」

僕たちの元に、フィゼルさん、リネルさん、そしてカルムが来た。

どうやら、3人で片付けたらしい。

「騎士様、ご命令をお願いします。」

レンリ「……………彼女達は無事？」

フィゼル「うん、さつき、ユーリと合流させてきた。」

ユージオ「侵入して来た敵兵は？」

リネル「私とゼル、カルムの3人で片付けたです。」

カルム「これで、後方は大丈夫だな。」

レンリ「じゃあ、僕は、部隊に戻るから、君たちもそうした方がよいよ。」

フィゼル「はい。」

リネル「了解です。」

そう言つて、あつという間に立ち去つた。

カルム「じゃあ、ユージオ、俺たちも持ち場に戻るぞ。」

ユージオ「うん。」

レンリ「あ、あの！」

ユージオ「うん？」

レンリさんが声をかけてきたので、振り返る。

レンリ「……………ありがとう。」

ユージオ「どういたしました。」

そう言い残して、僕とカルムは、第一部隊と第二部隊の間へと戻る。

第61話 焼夷の花

ベクタ side

さて、アリスはどこに居るのか……。

私はそう考えていた。

ラーズのスタッフがロックし忘れたであろうスーパーアカウント、暗黒神ベクタを使って、ダークテリトリーを戦争の駒として使っているのだが、未だ発見には至らないか。

私としては、アリス、ついでにイーデイスというフラクトライトを回収したのち、ここから離れ、アリスとイーデイス、STLのテクノロジーを回収して、私の世界を創るつもりだ。

無論、最初の頃は、3人だけだが、欲を言うと、あの茅場晶彦が作りし本当の異世界、《ソードアート・オンライン》の攻略組と呼ばれるプレイヤーの魂を回収したい物だ。

特に、かの茅場晶彦を撃破した、紫紺の剣士、黒の剣士、紫鎌、閃光という異名を持つプレイヤーの魂、そして、BOBにて遭遇した、シノンとチェイスという魂が欲しい。彼らの魂は、とても甘いだろう。

そんな事を考えていた。

ヴァサゴ「ん？」

ガブリエル「どうした？」

ヴァサゴ「いや、何か、見覚えのある奴が居たような気がしたが………気のせいか。」
ガブリエル「そうか………」

そんな事をいきなり言うヴァサゴに、私は少し首を傾げつつも、興味を失せた。
早く、アリスの魂を我が手に………！

Dei-sside

私は、第二陣の最後尾から、戦況を見ていた。

すると、私の脇に控える伝令術師が、私を見上げて、低い声で告げる。

伝令術師「シグロシグ殿、シボリ殿、コソギ殿、共に討ち死にとの事。」

Dei「ええい、使えぬ………。所詮は頭の足りない亜人どもか。」

私はそう吐き捨て、首飾りを見る。

これは、色合いの変化で時刻を教える事が出来る秘蔵の神器だ。

6時の石は、橙色に光り、7時の石は未だ闇色。

つまり、20分くらいしか経過していない。

たったその時間で討ち取られるとは、所詮は亜人か。

デュー「整合騎士どもの位置は掴めたか。」

伝令術師「最前線に視認できた五名は照準済みです。後方に、四名を発見していますが、位置固定には今しばらく。」

デュー「まだたつた九人か。あるいは、そもそも数が少ないのか……。しかし、どうあれその八人は確実に屠らねば……。よし、ミニオンを出せ。コマンドは……《七百メル飛行》、《地上に降下》、《無制限殲滅》だ。」

伝令術師「その距離ですと、最前線の亜人部隊を巻き込みますが。」

デュー「構わん。」

所詮は、亜人だ。

頭の足りない奴を巻き込もうが、それは私には関係のない事だ。

伝令術師「数は如何なさいます。現状で孵化済みの八百体、全て運んできておりますが。」

デュー「ふむ、そうだな……。八百、全部を出せ。」

出し惜しみしたいのは山々だが、どうせ、人界を制圧したら、ミニオンは幾らでも量産できる。

これで、私の大願成後は、もうすぐだ……！

私は、ミニオンが飛び立つのを見て、そう思った。

リヨウガ side

俺とベルクーリとユーリは、とある準備をして待っていたが、その時が来たようだ。ベルクーリ「来たか……………」

リヨウガ「その様だな。」

ユーリ「俺たちも行くぞ。」

ダークテリトリ側から、ミニオンが飛来する気配を感じる。

既に、レンリが覚醒した事を、俺たちは察知していた。

そして、ダークテリトリ側から、凍てつく虚無にも似た気配の持ち主がいる。

恐らく、シャスターはもう居ない。

なればこそ、俺たちが、そいつを倒すべきだろう。

すると、ミニオンどもが、俺たちが配置した地帯に残さず入る。

ベルクーリ「行くぞ……………時穿剣、空斬！」

リヨウガ「時国剣界時、三刻突き！」

ユーリ「光と闇の力！」

ベルクーリの時穿剣、俺の時国剣界時、ユーリの光剛剣最光と闇黒剣月闇の武装完全

支配術を発動する。

格子状に配置された時穿剣の斬撃と、俺の時国剣界時から放たれる槍の突き、光剛剣

最光と闇黒剣月闇から放たれる光と闇の斬撃波は、ミニオンを残らず殲滅した。

Dei's side

これまで全くの無感情を貫いていた伝令術師の声に、微かな怯えの響きを聞き取った私は、嫌な予感がした。

そして、その予感は、すぐに現実となった。

伝令術師「恐れながら閣下……………ミニオン八百体、降下直前に全滅した模様にごさいます。」

デイー「な……………何故だ！敵に大規模な神聖術師が居るとは聞いてないぞー！それ以前に、ミニオン八百体を、術式だけで屠るのは不可能のはずだ。

ミニオン自体は、斬撃に弱いのが、空中にいるミニオンに、斬撃などが届くはずがない。私は、どうにか怒りを抑えながら問う。

デイー「……………敵の飛竜はまだ出ていないのだな？」

伝令術師「は。戦場上空には、現時点まで一匹の飛竜も確認しておりません。」

デイー「となると……………アレか。整合騎士どもの切り札……………《武装完全支配術》。しかし……………よもや、これほどの……………」

まさか、武装完全支配術がこれほどとは。

だが、武器をその様に使えば、天命を大量に消費してしまう筈だ。

そうそう連発は出来ないはず。

すると、伝令術師は、更なる報告をする。

伝令術師「総長閣下、後方の整合騎士四名の位置把握、完了致しました。合わせて、九の目標を照準中。」

デイー「……………よし。」

まさか、ミニオンが無力化されるとは……。

最大の不安要素たる敵の武装完全支配術を更に消費させるべく、第二軍主力の暗黒騎士団と拳闘士団を投入するべきか？

いや、ここで切り札たる暗黒術士団をここで動かすべきだろう。

私は冷静だ。

今こそ、最初の栄光を掴み取る時。

デイー「オーガ弩弓兵団、及び暗黒術士団、総員前進！峡谷に侵入後、《広域焼却弾》術の詠唱を開始せよ！」

イーデイス side

それにしても、カーディナルは、とんでもない神聖術を思いついたものね。

まさか、光素を鏡の玉の中で無限に反射させて、大量に保持させるなんて。

だけど、アリスの顔が辛そう。

イーデイス「……………アリス、大丈夫？」

アリス「大丈夫よ……………」

全然大丈夫そうに見えない。

私も、幼い頃は、神聖術をよく使っていたけど、今は、闇斬剣を主体とする戦法を取っているから、アリスを支えられない。

それでも……………」

イーデイス「アリス。」

アリス「イーデイス……………」

イーデイス「大丈夫よ、私にケント、そして、ユージオが居るわ。だから、あなたは1人じゃないのよ。」

アリス「そうですね……………」。私は1人じゃない。例えば、多くの命を奪う事になっても。」

イーデイス「ええ。……………」。どうやら、敵が動き始めたみたいね。」

すると、遠くから、オーガと思われる一団と、暗黒術士団が動いていた。

雨緑『グルル……………？』

アリス「大丈夫よ、雨緑……………ふう……………」。

雨緑は、アリスを心配そうに見ていて、アリスは、優しく答えながら、金木犀の剣を

抜刀する。

アリス「咲け、花たち！エンハンス・アーマメント!!」

アリスは金木犀の剣の武装完全支配術を発動し、後方に花卉を待機させる。

それらを支所にし、金木犀の剣を鏡玉へと向けて、アリスはその一言を放った。

アリス「……………バースト・エレメント……………!」

その一言と共に、鏡の玉の内部にあつた光素がバーストして、それは、亜人部隊へと突き刺さる。

しかも、暗黒術士団の一部をも巻き込んで、倒した。

アリス「……………」

イーデイス「アリス……………」

アリス「大丈夫です。戻りましょう、雨緑。」

イーデイス「霧舞も、戻りましょう。」

私とアリスは、それぞれの飛竜に指示をして、地上へと向かっていく。

カルムside

すげえな。

地面が燃えてるよ。

だが、こんな神聖術を放ったアリスがとても不安になるな。

俺は、ユージオとケントと一緒にこの光景を見ていた。

すると、雨緑と霧舞が降りてきた。

俺たちは、その着地場所へと向かう。

フアナテイオ「お疲れさま、アリス。」

レイカ「よくやってくれましたね。」

アリス「……………っ……………!?!」

ユージオ「アリス!?!」

雨緑から降りようとしたアリスは、力が抜けたのか、落ちそうになる。

それを、ユージオが抱える。

イーデイスとケントも、不安そうな表情でアリスを見つめる。

アリス「ううう……………ゴメン、なさい、ユージオ……………ちよつと力が抜けて。」

ユージオ「気にしないで……………。今はゆっくり休もう。」

フアナテイオ「ユージオの言う通りよ……………。敵はほとんど撤退したわ。これは貴女

が導いた勝利よ。」

アリス「あり、がとう……………ごございます、フアナテイオ殿……………ですが、戦いはまだ終わったわけではありません。今の術式で屠られた敵から、新たな神聖力が発生した筈です。それを敵に再利用されないように……………!」

レイカ「ええ、分かっているわ。拳闘士部隊はともかく、まだ敵の暗黒術士部隊も残っているしね……。すぐさま修道士隊に命じるわ。」

フアナテイオとレイカは、修道士隊に、治療を命じた。

ユージオは、アリスを支えていた。

フアナテイオ「私はこのまま本陣で指揮を取られている騎士長閣下とリヨウガ殿に報告してくる。兵たちに敵陣の見張りはさせるが、ここの指揮を任せてもいいかしら、アリス？」

アリス「私は……。少し休めば大丈夫ですから。」

レイカ「そう……。ユージオ、イーデイス、ケント、カルム。アリスが無茶をしないように、傍についてもらえるかしら？」

ユージオ「分かりました。」

イーデイス「ええ。」

ケント「はい。」

カルム「分かった。」

そう言つて、フアナテイオとレイカは、この場を離れる。

アリスとイーデイスの飛竜も、夜空へと飛び立っていった。

これで、敵が諦めてくれるといいんだけどな。

俺はそんな風に思っていた。

ユージオ「アリス、大丈夫……………?」

アリス「大丈夫よ、ユージオ。」

イーデイス「無理しないで。」

ケント「そうだな。」

カルム「ああ……………ん?」

誰か来る気配がしたので、俺はその気配がした方向を向くと、エルドリエが居た。

だが、エルドリエは、血まみれだった。

エルドリエ「……………師よ……………ご無事でしたか……………」

アリス「えつ……………つ!エルドリエ!?その姿は……………!」

ユージオ「エルドリエさん……………!」

ケント「大丈夫ですか……………!」

カルム「血まみれじゃねえか……………!」

エルドリエ「ユージオ達も、無事な様だな……………。心配ない。そこまで大きな傷は受けていないし、半分は返り血だ……………。私は……………大丈夫だ……………をだが……………この姿を晒すぐらいなら、一層戦いで命を落とすべきだったよ……………」

アリス「な、何を言っているのですか!?そなたには騎士として、この戦いが終わるま

で衛士を率いて戦い抜くという使命があるではありませんか！」

エルドリエ「……………私は……………騎士として、その使命を果たすことができずして……………」

アリス「エルドリエ……………？」

イーデイス「どういう事……………？」

エルドリエの瞳には、後悔の色が浮かんでいた。

エルドリエが事情を話す。

エルドリエ「騎士長から左翼の第一陣を任せられたというのに、ゴブリン共の策に嵌った上に陣をあも簡単に突破され、カルム達に敵兵が倒され、レンリ殿とユージオの2人に族長が討たれ、私一人が翻弄された挙句何もできず……………無様な姿を晒しました！アリス様の期待を……………ユージオ達の信頼を裏切った！」

ケント「エルドリエさん……………」

エルドリエ「私には騎士を……………アリス様の弟子を語る資格などないのです！」

アリス「そなたは……………そなたは、良くやりました！……………私たちにも、守備軍にも、そして人界の民達にもそなたは必要な者です。なぜその様に自分を責めるのですか。」

エルドリエ「必要……………。それは、戦力として、ですか。それとも……………」

カルム「エルドリエさん……。待った、誰か来る。」

エルドリエを案じていると、何かがやって来る気配がする。

しかも、獣の唸り声も聞こえてくる。

俺たちが身構えると、そこには、半分焦げた亜人がいた。

アリス「そなた……。その姿からして、もう天命はほとんど残っていない筈……。

なぜ丸腰でこちらへと向かってきたのですか？」

フルグル「俺は……。オーガの長、フルグル……！」

イーデイス「オーガ族の長……。？暗黒界十侯の一人ね……。」

つまり、向こうのトップの1人という事か。

そんな奴が、どうしてここまで来たんだ？

すると。

フルグル「俺、見た……。あの光の術……。放ったの、お前……。あの力、その姿……

お前、光の巫女……。！お前、連れて行けば……。戦争終わる……。オーガ、草原、帰

れる……。！」

アリス「何を……。言っている……。？光の巫女……。？戦争が……。終わる？」

光の巫女？

アリスを求めてる奴がいるのか？

どういう事かと首を傾げていると、エルドリエが前に出る。

エルドリエ「おのれ……………獣風情が！何を言うかあ!!」

アリス「待ちなさい、エルドリエ！」

エルドリエ「っ……………!?師よ、なぜ止められるのですか!？」

エルドリエがフルグルに斬りかかろうとするが、アリスが止める。

すると、アリスはフルグルに近づくと、

アリス「そなたの言う様に、如何にも私こそが光の巫女だ。さあ、私をどこに連れて

行くのですか？」

カルム「なるほど……………」

情報収集か。

確かに、気になる事が多すぎる。

一応、いつでも抜刀出来るようには構えるが。

アリス「光の巫女である私を連れて行けば、戦争が終わると言いましたね？一体、誰

が私を求めているというのですか？」

フルグル「皇帝……………ベクタ……………」

カルム（皇帝ベクタ!?……………確か、暗黒神ベクタって神が居るはずだよ……………。い

や、待てよ。まさか……………!）

俺の考えている事は、最悪な形で察しがついた。

恐らく、襲撃者側もログインしているのだ。

ミトから、スーパリアカウントは概ねロックされたって聞いたけど、ダークテリトリ側のアカウントはロックされてなかったのか！

つまり、皇帝ベクタにアリスを渡す訳には行かない。

フルグル「皇帝、欲しいの、光の巫女だけ……！巫女を捕まえ、届けた者の願い、何でも聞く……！オーガ、草原帰る……！馬狩って、鳥獲って、暮らす……！」

アリス「私を……恨まないのですか？あの術でダークテリトリの大勢を……そなたの民を皆殺しにしたのはこの私です。」

フルグル「……強いや、強さと同じだけのものを背負う……。俺も……。長
の役目を背負っている……。だから、お前捕まえて、連れて……。行くウウウ!!
ウウウオオオオオオオオオオオ!!?!」

ユージオ「……っ！」

フルグルは、アリスを捕まえようとして駆け出していく、俺たちは構えるが、アリスが一足先に抜刀していた。

それにより、フルグルは倒されていた。

アリスはフルグルに近づいていた。

ユージオ「アリス……………」

アリス「せめて……………その魂を草原に飛ばしなさい。」

アリスは、倒れたフルグルから発生した神聖力を、風素に変えて、そのまま解き放つた。

カルム「強さと同じものを背負うか……………。それは……………力を持つ者にとっては逃
れられないことなのかもしれないな。」

ケント「カルム……………」

まあ、アリスを差し出した所で、待っているのは、この世界の終わりだが。

一応、ミトとアスナにもこの事は知らせておこう。

どうやら、本気でワールド・エンド・オールターに行かないといけなくなったっぽい
からな。

第62話 カミングアウト

カルムside

フルグルから、暗黒神ベクタの事を聞いた俺たちは、ベルクーリ達の元へ。

エルドリエは、前線の指揮は自分に任せて欲しいと言って、残った。

その間、俺は考えていた。

まさか、襲撃者側も、こちらと同じ手を使ってくるとはな。

という事は、事態はかなりヤバくなってきたんじゃないか……………？

早い所、ユージオ達を説得して、ワールド・エンド・オールターに行かないと。

俺はそんな事を考えながら、アリス達がベクタの存在を伝えるのを見ていた。

ベルクーリ「光の巫女オ？」

リヨウガ「その光の巫女を求めているのが、暗黒神ベクタという事か……………」

アリス「はい。そのような名称、どんな歴史書でも見かけたことはありませんが、敵

の司令官がそれを強く求めているのは確かなように思われます。」

フアナティオ「まさか、神の復活だなんて……………」

レイカ「信じられないわね……………」

ユーリ「それはそうだが、気になるのは、仮にアリスがその光の巫女だとして、それが戦況にどの様な影響を及ぼすかだな。」

カルム「……………」。

ユージオ「カルム？」

ケント「どうしたんだ？ずっと黙ってて。」

俺は、考えていたが、ユージオとケントの心配そうな顔が目に入る。

カルム「い、いや、何でもないよ。」

イーデイス「……………カルム、一体何を隠しているの？」

カルム「イーデイス？」

イーデイス「もしかして、光の巫女が何なのかを知ってるんじゃないの？だからアンタはずっと黙ってる。違う？」

カルム「……………」。

カーディナル「凶星の様じゃな。」

その言葉に、全員の視線が俺に集中する。

どうやら、もう誤魔化せないな。

カルム「分かった、話すよ。その前に、ミトとアスナも呼んできてくれないか？」

カーディナル「構わんが……………」。

カーディナルは、天幕から出て行つてからしばらくして、ミトとアスナを連れてきた。
ミト「どうしたのよ、カルム。」

アスナ「いきなり呼び出すなんて。」

カルム「悪いな。でも、そういう言つてられる状況じゃなくなつたんだ。」

ミト「……………どういう事？」

訝しげな表情を浮かべる2人に、俺はとある事を伝えた。

それは、襲撃者側がダークテリトリ側のスーパリアカウントを使って、アンダーワールドに来ている事をだ。

すると、2人は驚愕の表情を浮かべる。

アスナ「それ本当!？」

カルム「ああ。アスナがステイシア、ミトがルナリアのアカウントを使った様に、襲撃者側もベクタのアカウントを使ったんだな。」

ミト「確かに、そういう言つてられる状況じゃないわね……………」

カルム「じゃあ、説明するという事で。」

ミト「分かつたわ。」

俺たちは、アリス達に説明をする事に。

カルム「暗黒神ベクタは、俺、キリト、ミト、アスナと同じく、リアルワールドの人

「間なのは間違い無いです。」

ミト「現在、リアルワールドのごく限られた場所で、2つの勢力が、この世界……………」

「アンダーワールドの支配権をかけて争っているんです。」

アスナ「私とミトは、その一方、ラースからの使者で、キリト君を助けるのと同時に、アンダーワールドを守る為に来たんです。」

「カーディナル」なるほど、ラースか……………」

リョウガ「それで、そのもう一方の勢力の目的とは、何だ？」

ミト「アンダーワールドから4人の人間を回収して、然る後に世界全てを破壊して、無に帰すことです。」

その言葉に、ファナティオ、レイカは動揺していたが、残りの面子は冷静だった。

ベルクーリ「まあ、俺たちだって、この間まで人界の外にあるダークテリトリーが、何万もの大軍勢が侵攻の時を手ぐすね引いて待っていた、なんて事実を真剣に考えてきた者なんかほとんどいかなかったくらいだ。今更一つ世界が増えたくらい、どうって事はないな。」

リョウガ「それで、敵対する勢力とやらが欲しがっている4人の人間とは、誰だ？」

カルム「それは……………」アリス、ユージオ、イーデイス、ケントです。」

アリス「えっ……………」

ユージオ「僕も……………!?!」

イーデイス「嘘……………!?!」

ケント「何……………!?!」

俺の言葉に、4人は立ち上がる。

カーディナルは、合点がいった反応をしていて、ベルクーリは怪訝そうな表情を浮かべる。

ベルクーリ「なるほどな……………。だが、アリスの嬢ちゃんやイーデイスの嬢ちゃんは兎も角、何でユージオとケントもなんだ?」

カルム「多分、襲撃者側は、アリスしか把握しきれていないんだと思います。」

リョウガ「しかし、その4人の共通点は何なんだ?」

カーディナル「恐らく、右目の封印を破ったから、じやろうな。」

ミト「そうです。」

ユーリ「つまり、その4人が離れば、その襲撃者達も手を引くと?」

アスナ「はい。」

アリス「何をツ、戦いを捨てて逃げ去れと言うのですか!?!」

アリスが激昂しながら机に手をつけて立ち上がる。

だが、ベルクーリさんはアリスを諫める。

ベルクローリ「落ち着け、アリスの嬢ちゃん。」

イーデイス「でも、私としても、逃げるなんて納得できないわ。」

ユージオ「うん。」

ケント「ダークテリトリーの侵攻がまだあるのにも関わらず、逃げるなんて、俺たちには出来ない。」

リヨウガ「まあ、カルムとしては、この戦争が終わったら、連れ出すつもりだったみたいだがな。」

カーディナル「どうやら、そのつもりだった様じゃな。」

カルム「俺としても、その方が良かったんだけど、敵がそう簡単に諦めるとは思えないので。」

ベルクローリ「つまり、ベクタは嬢ちゃんを確保するまでは止まらねえってことか？」

カルム「最悪の場合、アリスが死んでしまったら、他の人たちに被害が及ぶ。」

リヨウガ「それは、確かにな。」

ユーリ「それで、アリス、イーデイス、ユージオ、ケントはどうなんだ？」

ユーリは、4人に尋ねる。

4人は、少しむくれていた。

アリス「私は、無様に死にはしません。ただ、私がベクタを引きつける事が出来るの

なら、その手を利用すべきです。」

フアナテイオ「確かに、族長を討つたとはいえ、ゴブリン族とジャイアント族の兵はまだ多い。暗黒騎士、拳闘士と合わせれば人界軍が圧倒的に劣勢な事実は変わりません。」

レイカ「リヨウガ様、騎士長。ここで一手を打つべきだと思います。可能なら、挟撃もしておきたい。」

アリスの策に、フアナテイオとレイカが同意する。

ベルクローリはニヤリと笑いながらこちらを見てくる。

ベルクローリ「そういうこつた。お前さんらは、この作戦には異論はないんだな？」

アスナ「はい。しかし、条件があります。」

リヨウガ「それは？」

ミト「その囷作戦に、私、カルム、キリト、アスナも同行させる事と、最終的には4人をリアルワールドへと連れ出す事を了承する事です。」

ユーリ「分かった。なら、俺も同行するでしょう。戦力は多いに越した事はないからな。」

カーディナル「ならば、わしも同行しよう。少しは力になれるじやろう。」

そうして、アリスが立案した、囷作戦が決行される事に。

その後、ユーリ、アスナ、ミトと共にキリトの事を見に来た。

アスナ「キリト君……………」

ミト「アスナ……………」

ユーリ「カルム、話がある。」

カルム「何だ？」

俺はユーリに連れ出される。

何なんだろう？

カルム「話って？」

ユーリ「実は、キリトに対して、聖剣が反応しているんだ。」

カルム「そうなのか。何の聖剣だ？」

ユーリ「ああ、闇黒剣月闇だ。」

カルム「闇黒剣月闇が？」

まあ、キリトって闇属性みたいな奴だから、闇黒剣月闇が反応してもおかしくないな。

カルム「でも、闇黒剣月闇って、ユーリが使ってる聖剣だよな？」

ユーリ「ああ。だが、俺としては、キリトに譲渡しても良いと思ってる。」

カルム「分かった。」

ユーリ「それと、ユージオ達がお前に話があるそうだ。」

カルム「ああ……………」

俺は、内心怯えながら向かう。

やっぱり、さっきの事を黙ってた事を咎められるのかな……………。

ちゃんと謝ろう。

俺は、アリスが居る天幕へと向かう。

そこには、アリスだけでなく、ユージオ、イーデイス、ケントが勢揃いしていた。

カルム「……………話って？」

アリス「そうですね。」

イーデイス「アンタ、さっきの事を黙ってたのね。」

カルム「すまない。」

ユージオ「だ、大丈夫だよ。」

ケント「俺たちは責める気はない。」

カルム「え……………？」

俺が呆気にとられる中、ケントが代表して話をしたいと言う。

ケント「お前やキリト、ミト、アスナが本来住むリアルワールドがどんな場所なのかを知りたいんだ。」

ユージオ「うん。」

イーデイス「まあ、一応、聞いてみるだけよ。」

アリス「とにかく、教えて？」

カルム「ああ。」

俺は、4人に時間の許す限り、リアルワールドについて語った。

そこは、決して神や天使が居るのではなく、ケント達と同じ人間がいる事。

リアルワールドとは少し違う世界で、俺は紫紺の剣士と呼ばれていた事。

キリト達と共に、色んな世界を巡った事。

そんな風に話していると、あつという間に出発時間が近づく。

カルム「そろそろだな。」

アリス「あの……………」

カルム「ん？」

イーデイス「話してくれてありがとうね。」

ユージオ「少しは決心がついたと思うよ。」

ケント「ああ。」

カルム「そうか……………」

俺は、複雑な気持ちで準備をする。

まあ、ある意味で了承してくれて良かった。

なら、絶対に4人を守らないとな。

第63話 血と命

カルム side

ベルクーリ「各員、準備はいいな？」

ベルクーリさんがそう言うてくる。

俺たちは頷く。

この場に居るのは、俺、ユージオ、アリス、ケント、イーディス、レンリ、シエータ、ベルクーリ、リヨウガ、ユーリだ。

ちなみに、フアナテイオ、デユソルバート、レイカは大反対した。

だが、フアナテイオはベルクーリに、レイカはリヨウガに何かを囁かれ引き下がり、デユソルバートは矢切れの事を指摘されて、引き下がるを得なかった。

キリトは、高速馬車に乗り、その中には、ロニエ達とアスナとミトも搭乗している。カーディナルは、違う馬車に乗っている。

俺はケントの飛竜、ユーリはリヨウガの飛竜に乗せて貰っている。

作戦としては、俺たち遊撃部隊の目的は敵の分断と各個撃破………東の大門を抜け、敵に奇襲を仕掛けることで、本命である敵指揮官、もしくは暗黒十侯の何人かを誘

き寄せることが狙いだ。

そして、俺たちが陽動を掛けている間に、フォナテイオとレイカが指揮を執る残りの部隊も南方向へと進軍し、有利な地形を見つけたところで陣を再度展開、体勢を整え、奇襲と進軍を一度に行うのが、この作戦の真の目的だった。

これで、どうにかなるのは、あまりそうは思えないが……………。

レンリも来てくれるそうだ。

ただ、一つ気になる事が。

それは、シエータという整合騎士だ。

『無音』という通り名で通っていて、特技は斬る事らしい。

イーデイス曰く、「あの子、何考えてるのか分からないのよねえ。セントラル・カセドラルを斬りたいとか言ってたし。」らしい。

カセドラルを斬りたいなんて、物騒すぎにも程があるだろ。

まあ、右目が痛くなったので断念したらしいが。

という事は、シエータも右目の封印に関しては気付いてる可能性がある。

ベルクーリ「よし、出発するぞ！」

リヨウガ「遅れるな！」

2人の掛け声と共に、飛竜が動き出す。

8体の飛竜が動き出し、高速馬車も動き出す。

敵が何もしてこなければ良いんだけどな。

そんな事を考えたのがフラグになったのか、嫌な気配がする。

ユージオも感じていたようだ。

ユージオ「……………何か変だ……………！」

アリス「何が……………？」

ケント「……………声が聞こえる。これは、術式の多重詠唱か……………？」

イーディス「何で!?ここら辺一帯は、もう神聖術が使えないくらいに神聖力が不足してるのよ!」

ベルクーリ「……………奴ら、何てことを……………！」

リヨウガ「まさか、この様な手に出るとはな……………！」

カルム「どういう事だ!」

ユーリ「恐らく、敵は足りない神聖力を補うために、自分たちの兵を生贄にしたんだ!」

「……………つ!?」

それは、まさに悪魔の所業だ。

到底人間がしていい行いじゃない。

どうやら、襲撃者側は、人の命を軽く見ているな。

許せない……………!

そんな怒りの感情が込み上げてくる中、大規模神聖術が飛んでくる。

よく目を凝らすと、どうやら、闇素の集合体らしい。

ベルクーリ「くつ……………! 接近してこちらに引き付ける! 何が何でもついてこい!!」

ベルクーリの声が響く。

俺は、振り落とされぬ様に、ケントの腰に掴まる。

リヨウガ「よし……………! 上昇だ!!」

リヨウガの掛け声と共に、飛竜達は上昇姿勢へと入る。

俺は、御雷に指示を出しているケントの代わりに、敵の神聖術を見る。

すると、半分はこちらに來ているが、もう半分は地上へと向かっていた。

不味い、地上にはキリト達が居る……………!

すると、ケント達もそれに気付いた様で、飛竜に降下の指示を出す。

ベルクーリ「……………っ! いかん!」

リヨウガ「待て、ケント、ユージオ、アリス、イーデイス! お前達の武器では、あの

術は打ち消せん!」

ユーリ「俺も行く!」

ユーリは、自らの体を光剛劍最光と一体化させて、こちらに向かう。だが、俺たちが闇素術に追いつく前に、地上部隊を薙ぎ払うだろう。このままじゃ、ミトが……………!」

すると、地上部隊の上を、一体の飛竜が飛んでいた。

カルム「飛竜……………!?!」

ユージオ「あれって……………!?!」

アリス「エルドリエ!」

イーデイス「何で!?!」

ケント「まさか……………!」

エルドリエの姿が見えて、俺たちは驚いた。

フアナテイオ達と一緒に待機してたはずなのに……………。

アリス「ダメ、エルドリエ!!」

エルドリエ「蛇よ!古の神蛇よ!お前も蛇の王ならば、あれら如き長虫の群れなど、喰

らい尽くしてみせろツ!!」

カルム「まさか……………ツ!」

エルドリエは、地上部隊を守る為に、囷になるつもりなのだ。

エルドリエは、上昇する際に、こちらを見て、眩いた。

エルドリエ「後は、頼みます。」

カルム「アイツ……………」

そして、エルドリエの術式が聞こえた。

エルドリエ「リリース・リコレクション！」

霜鱗鞭の記憶解放術は、元となった蛇を顕現させる物だ。

そして、闇素術は、ベルクーリ達を追っていたのも、地上部隊を狙っていた物も、エルドリエへと集中していく。

どうやら、高い天命を持つ者を優先して襲うタイプらしい。

俺は、エルドリエを援護するべく、光剛剣最光の力を宿した刃王剣十聖刃で、闇素術を斬っていく。

だが、数が多すぎて、捌ききれない……………」

すると、ユーリがエルドリエの飛竜の鞍の部分に乗っていた。

エルドリエ「ユーリ!?何をする!?!」

ユーリ「今、お前がここで死ねば、アリスは悲しむんだぞ！それをなぜ分からない!!」

エルドリエ「だが、どうすれば……………」

ユーリ「俺がどうかしよう。お前の霜鱗鞭でも対処が出来るくらいには減らす。」

エルドリエ「分かった。」

ユーリ「光あれ！エンハンス・アーマメント!!」

ユーリは、光剛劍最光の武装完全支配術を発動して、闇素術を打ち消していく。かなりの量が減った様で、残りは霜鱗鞭で消されていく。

やっぱり、ユーリすげえな……。

武装完全支配術だけで、あの闇素術を打ち消した。

アリスのホツとした様な表情が目に入る。

だが、その表情は、すぐに引き締められる。

さて、どうやら、皆考えている事は同じみたいだな。

カルム「アリス、ユージオ、ケント、イーデイス。」

アリス「分かっています。」

ユージオ「あの暗黒術師達を倒す！」

ケント「これ以上の犠牲を出さない為にも！」

イーデイス「行くわよ！」

アリス達は、飛竜を暗黒術師達が居るであろう場所へと飛ばしていく。

こんな暗黒術は、放置しておいたら、更なる犠牲が生まれてしまう。

それだけは絶対に阻止する！

俺とケント、ユージオが先行して行き、ケントとユージオが飛竜に光線を放つ様に指

示を出して、俺たちは飛び降りる。

飛び降りると同時に、アバランシユを放ち、暗黒術師達を吹っ飛ばす。

暗黒術師「て、敵襲！」

暗黒術師「きゃあああああああ!!」

暗黒術師「た、回避！」

ユージオ「逃がさない！」

ケント「ハアアアア!!」

カルム「フツ！」

俺たちは、それぞれの得物を持って、暗黒術師達を斬り伏せていく。

暗黒術師達は、接近戦には慣れていないのか、逃げ惑っていた。

俺としては、暗黒術師達にはあまり罪は無いと思う。

ただ、それを指示した襲撃者側と、暗黒術師達の長は許せないが。

すると。

???「おのれ……！何を狼狽えている！敵はたかが3人だ！遠方から狙い撃て！」

カルム「正気かよ……!!」

正気の沙汰とは思えない指示だな。

つまり、味方を巻き込もうとしている。

それには、流石の部下達も、動揺しているのか、動かなかつた。

それを見て、更に苛立った様子の長が叫ぶ。

??? 「この王になるこの私が、こんな所で終わつてたまるかアア!! バースト・エレメント!」

カルム 「危な!」

敵は、暗素術を放つてきて、俺たちは躲す。

だが、暗黒術師に当たった途端、その術師は溶けた。

本当に容赦ねえな……………!

??? 「そうだ! この私が、世界の王となるこの私が、失敗続きでたまるかアア!!」

カルム 「何……………?」

ケント 「アイツ……………!」

ユージオ 「許さない……………!」

アイツ、部下の事を気にせず、自分の事しか考えていない。

俺たちは、剣を握る手に力を込める。

すると、敵が神聖術を放ってくる。

だが、そんな状況の中、俺たちはやけに冷静だった。

「「リリース・リコレクション!」」

俺たちは、それぞれの武器の記憶解放術を発動する。すると、ユージオの鎧が変化していく。

これまでは、整合騎士にされた時と同じデザインだったが、形状が一部変わって、一部に金色の差し色が入る。

青薔薇の剣も、金色の差し色が入る。

ユージオが変化した青薔薇の剣を地面に突き立てて、瞬時に凍結する。ケントも、雷鳴剣黄雷を突き立てて、鎖を出現させて、拘束していく。

火炎剣烈火の力を使い、火災旋風を起こし、暗黒術師達を吹き飛ばす。

暗黒術師長は、部下を盾にした様で、無事だった。

暗黒術師長「なっ……なっ……なっ……!!?」

アリス「放て、飛竜達!」

イーデイス「霧舞もお願い!」

『『『『ゴオオオオオオオ!!』』』』

暗黒術師長「しまっ……きゃああああ!!?」

暗黒術師長が動転している中、アリスとイーデイスが飛竜達にプレスを吐くように指示を出す。

凍りついていたり、鎖で動けない暗黒術師達はなす術もなく倒れていく。

「エンハンス・アーマメント。」

アリスとイーデイスの武装完全支配術が発動して、金色の花が敵を屠り、イーデイスの影ノ傀儡が、暗黒術師達の影から現れて、倒していく。

暗黒術師長「ちくしよおお!!何だ、コイツらは……………!ツ!?」
カルム「ハアアア!!」

俺は何かを喚いている暗黒術師長に迫り、火炎剣烈火と刃王剣十聖刃を振るう。

暗黒術師長はギリギリで気付いた様で、躲そうとするが、俺に左腕を切断される。

暗黒術師長「ちくしよがああああ!?!クソ!!こんな場所で死んでなるものかあ!?!世界の王になるであろうこの私があ……………こんなところで死んでいいものかああ!?!」

カルム「お前はこの世界の王なんかじゃない。この世界の膿だ。」

俺はそう言つて止めを刺そうとするが、暗黒術師長は咄嗟に神聖術を発動して、俺の目を眩ます。

アリスとイーデイスも追撃しようとするが、逃げられたらしい。

俺たちはアイツの追撃を断念して、暗黒術師団を全滅させる事にした。

ガブリエル side

暗黒術師団が壊滅したか。

まあ、使える駒が一つ減ってしまったただけだ。

さて、どうするべきか……………。

アリス「我が名はアリス！」

ガブリエル「っ……………!!？」

次の一手をどうするべきかと考えていたが、通信機越しに、声が聞こえてくる。

アリス「我は整合騎士アリス・シンセシス・サーティ!!人界を守護する三神の代行者……………光の巫女である!我が前に立つ者は、悉く聖なる威光に打ち砕かれ、永久の凍土、深淵の闇、聖なる雷、聖なる炎に全てを奪われることとなることを覚悟するがいい!!」

ガブリエル「……………おおお……………アリ、ス……………うフツ……………アリシア……………!」
その声が出てきて、私は目を凝らすと、遙か彼方の夜空に、ドラゴンの背に立ち、黄金に光り輝く鎧を見に纏った若い女騎士の姿が見えた。

あの姿は、あのアリシアが美しく成長した姿と重なった。

あの時、アリシアの魂を捕獲し損ねたが、アリシアの魂が、この仮想世界に再び現れたのだ。

今度こそ、今度こそこの手に捕らえねば。

あの娘のフラクトライトが保存されたライトキューブを手に入れ、心ゆくまで味わい尽くさなければ。

私は、遠ざかる彼女の姿を見ながら、伝令骸骨に低く、熱く囁く。

ガブリエル「全軍、移動準備。拳闘士団を先頭に、暗黒騎士団、亜人隊、補給隊の順に隊列を組み、南へ向かえ。あの騎士を、光の巫女を無傷で捕らえるのだ。捕らえた部隊の指揮官には、人界全土の支配権を与える。」

第64話 接敵

カルム side

暗黒術師団を壊滅させた後、俺たちは南へと向かって行つた。

驚いたのは、ベクタが、アリスを追う為に、全軍を動かした事だ。

ちなみに、エルドリエはフアナテイオ達の元へと戻り、ユーリは俺たちと合流した。

現在、ベルクーリが遠視の神聖術を使って、ダークトリトリの軍勢の動きを見ていた。

ベルクーリ「しっかし、随分とアリスの嬢ちゃんにご執心だな。全軍を動かして追いかけてくるとはな……………」

アリス「無視されるより遙かにマシです。」

カルム「よっぽど、アリスを手に入れたい、という事だろうな。」

ユージオ「味方を犠牲にする様な奴に、アリスを渡すわけには行かない……………」

ユーリ「その意気だ。」

ケント「……………」

イーデイス「どうしたの、ケント？」

そんな風に話している中、ケントは何かを考え込んでいた。ケントは口を開く。

ケント「ユージオの鎧や剣に現れた変化、アレは一体なんだ……………?」

アリス「確かに……………」

ユーリ「恐らく、ユージオの心意に、青薔薇の剣が応えた結果だな。」

カーディナル「うむ。」

ユーリの言葉に、いつの間にか来たのか、カーディナルが現れた。

ベルクローリ「どういう事だ?」

リヨウガ「詳しく教えてくれ。」

カーディナル「うむ。ユージオの心意に応えた青薔薇の剣は、《星霧氷の剣》となり、その心意が、鎧にまで影響を及ぼしたのじやろう。」

ユージオ「星霧氷の剣……………」

ユーリ「そうだ。」

なるほどな、ユージオの想いが、青薔薇の剣を変化させるほど強いとはな。

俺がそう思っていると、一体の飛竜が降りてくる。

レンリが降り立ってくる。

そう、レンリは、待ち伏せ地点の偵察を行なっていたのだ。

レンリ「遅くなりました！」

ベルクーリ「おう、どうだ？」

レンリ「騎士長閣下、リヨウガ殿、偵察の結果を報告致します！南の待ち伏せ予定地点ですが、今のところ問題なく利用できます。」

リヨウガ「分かった。部隊にその地点へ移動する準備をさせてくれ。」

ベルクーリ「それと、お前さんの飛竜もそろそろ疲れている筈だ……。たつぷり餌と水をやっておけよ？これからは長期戦になるだろうからな。」

レンリ「はっ！」

レンリは、ベルクーリとリヨウガに偵察結果を報告して、持ち場に戻っていく。

ベルクーリ「ふむ……。」

ユージオ「ベルクーリさん……？」

ケント「どうしたんですか？」

ベルクーリ「……。いやな……。記憶を奪い、天命の自然減少を停止させることで整合騎士を作る……。シンセサイズの秘儀なんてものとはとても許されるものじゃないが、しかし……。もうああいう若者が騎士団に入つてこないのは残念というか、惜しいことだなと思つてな。」

リヨウガ「確かに、現状、ユージオとケントが最後に入った整合騎士だしな。」

カーディナル「大丈夫じゃ。シンセサイズの秘儀をしなくても、整合騎士にはなれる。」

ユーリ「それに、想いは受け継がれていく。人界を守る想いはな。」

カルム「確かにな。」

そんな話をしていると、闇の軍勢の方向から、物凄い砂煙が上がっていた。

カルム「何だあれ!？」

ベルクーリ「アレは、拳闘士団だな。」

リヨウガ「厄介な連中が先陣を切っているな。」

ケント「厄介……………?」

ユージオ「どういう事ですか?」

ベルクーリ「ああ、そうか。ユージオとケントは、拳闘士団の事を知らなかったな。」

リヨウガ「奴らは、徒手空拳を主体とする戦法を取るのだが、拳での攻撃は受けるが、剣で斬られる事は拒否するのだ。」

カルム「どういう事だ……………?」

ベルクーリ「拳闘士たちは鍛錬を重ねることで、刃物なんぞ襲るるに足りんと思ひ込むんだ……………」

リヨウガ「それが心意となって、言葉通り刃を弾く程に肉体を固くするのだ。」

イーデイス「それじゃあ、私たちとは相性が悪いじゃない。」

ユーリ「なるべく、拳闘士団との戦闘は避けたいな。」

カーディナル「うむ。じゃが、このまま放っておいたら、脅威になるぞ。」
厄介だな。

そんな風に思っていたからか、背後からの声に驚いてしまった。

シエータ「……………私が行きましょう……………」。

ユージオ「えっ……………!?!」

ベルクーリ「うお……………!」

アリス「きやあ……………!?!」

カルム「!?!」

ケント「えっ……………!?!」

イーデイス「うん……………!?!」

リヨウガ「驚かせるな……………!」

ユーリ「おわ……………!?!」

カーディナル「なっ……………!?!」

そこにいたのは、いつの間にかどこかに行っていたシエータ・シンセシス・トウエル
ブだった。

ユージオ、ケントは俺と同じくいきなり声をかけられて驚いたみたいだが、アリスやイーデイス達は、シエータが喋った事に驚いていた。

まあ、出発する直前も喋ってなかったしな。

イーデイス「驚かせないでよ……………」

シエータ「それで、騎士長閣下、リヨウガ殿、いかがでしょうか？」

リヨウガ「……………」よし。ならば、奴らの撃退はお前に一任する。」

ベルクーリ「シエータ。思う存分に暴れてこい！」

シエータ「……………」はっ。」

シエータは、必要最低限の受け答えをして、拳闘士団の前へと向かっていく。

カルム「あの人、淡泊というのか……………」なんていうんだろうな……………」

ユージオ「確かにね。」

ケント「最低限の受け答えしかしないのか？」

イーデイス「でも、あれで可愛い所はあるのよ。年齢の事を聞かれると、内心落ち込んでるし。」

アリス「そうですね。」

ベルクーリ「まあな……………」。剣だけの実力で言うのなら、整合騎士の中では飛び抜けているだろうな。」

リヨウガ「アイツは、それ程に強い。」

カルム「だけど、何でそんな人が凍結処分をされてたんだ？」

「……………」

俺の呟きに、イーディス達は悲しげな表情を浮かべる。

カーディナルとユーリが説明に入る。

カーディナル「シエータは、自ら望んで凍結処分をされたのじゃ。」

ユーリ「シエータ自身は、頭ではそうしなくて望んでも、剣を持つとな……………」

シエータがあまり喋ろうとしないのも、他の整合騎士に関心を持たれない様にする為らしい。」

カーディナルとユーリの説明を聞いて、俺はシエータの方を見る。

しばらくして、拳闘士団の長と思われる人物が、女性の拳闘士にシエータを攻撃する様に指示を出す。シエータは、剣と呼ぶにはあまりにも細い剣を抜刀して、拳闘士団を倒していく。

皆が動揺する中、俺はカーディナルに話しかけていた。

カルム「カーディナル。」

カーディナル「どうした？」

カルム「後方の部隊の方に行った方が良いかもしれない。」

カーディナル「どういう事じゃ？」

カルム「襲撃者側は、軍人が多い。もしかしたら、この陽動作戦に気付かれてる可能性が高い。」

カーディナル「確かに、気付かれてる可能性はあるやもしれん。……よし、カルム。お主、後方部隊の方へと向かってくれ。」

カルム「分かった。」

俺は、後方部隊へと向かう。

後方部隊の方へ向かっていると、ロニエとシオリの声が聞こえてくる。

「敵襲！敵襲!!」

カルム「やっぱりか！」

やっぱり、気付かれてたか！

俺はすぐに向かっていく。

すると、ロニエとシオリが、呼んだ事により、周囲には衛士達が。

すると、ロニエとシオリが対峙していた暗黒騎士が、大声を張り上げる。

暗黒騎士「お前ら、仕事だ！」

カルム「暗黒騎士の軽装部隊か。」

あの指示を出した暗黒騎士は、襲撃者側の可能性が高いな。

そいつがロニエとシオリを追い詰めていた。

暗黒騎士「これだよ……………！これだからプレイヤーキルは止められなねえ!!」

ロニエ「はっ……………ううううう……………!」

カルム「させるか!」

俺は、ロニエに跨っている暗黒騎士に対して攻撃を仕掛ける。

俺の奇襲攻撃に、暗黒騎士は、咄嗟に剣を盾にして防ぐ。

シオリ「カルム先輩!」

カルム「大丈夫か!」

暗黒騎士「カルム……………?」

シオリの放った言葉に、暗黒騎士は驚いた様な表情を浮かべる。

俺が怪訝な表情を浮かべると、暗黒騎士は狂喜じみた声を出す。

暗黒騎士「お前、紫紺の剣士か!という事は、黒の剣士も居るな!」

カルム「!」

まさか、襲撃者側にSAO生還者がいるのか!?

だとしたら、戦闘を続行するのはかなり危険だろうな。

こちらの手の内がバレてる可能性があるな。

すると、上空にオーロラが現れ、天使の歌声を思わせるような声が聞こえてくる。

暗黒騎士「!?」

カラム「……………うん。」

キリトがいる馬車の方に居たのは、アスナで、リーダーの暗黒騎士の背後にいる部下達を、無制限地形操作で奈落の底へと落としていく。

そして、違う方向を向いたと思ったら、また地面が割れる音がする。

アスナは、残っているリーダーも落とそうとすべく、リーダーの足元を消したが、躲す。

暗黒騎士「くそっ！」

ミト「ハアアア!!」

暗黒騎士は、俺の方へと向かおうとするが、ミトが飛び出していき、両手鎌の上位スキル、《アポカリプス》を放つ。

それによつて、暗黒騎士は吹き飛ばされる。

暗黒騎士「マジかよ!?!おい、マジかよ!あの顔、あの髪、あの気配……………!?!KOBの《閃光》と《紫鎌》じゃねえか……………!」

そう言いながら、暗黒騎士は落ちていく。

やっぱり、あの暗黒騎士は、SAO生還者なのだ。

つまり、キリトが狙われる可能性がある。

何でそう思ったのかはよく分からないが、そういう悪寒がする。

第65話 事情の説明

カルム side

SAO生還者と思われる暗黒騎士を撃退したミトとアスナ。

俺は気になった事があるので、アスナに聞いてみる。

カルム「なあ。」

アスナ「うん？」

ミト「どうしたのよ？」

カルム「アスナ、2回ほど地形操作を行ったみたいだけど、2回目は何したんだ？」

アスナ「ああ、2回目は、敵の拳闘士団が迫ってきてきたみたいだから、敵の拳闘士団

の眼前に渓谷を作って、来れなくしたのよ。」

カルム「なるほど……………」。

ミト「アスナ、大丈夫……………」？」

アスナ「うん。今は大丈夫だよ。少し頭が痛いけど……………」。

やっぱり、地形操作の反動が来たのか。

俺は、ミトとアスナにある事を伝える。

カルム「2人とも、伝えたい事がある。」

ミト「どうしたの？」

アスナ「ん？」

カルム「あのリーダーの暗黒騎士、多分SAO生還者だ。」

ミト「え!？」

アスナ「どういう事!？」

カルム「アイツは、確かに言ったんだ。紫紺の剣士に黒の剣士、KOB、紫鎌、閃光つて。」

「!？」

その言葉に、2人は驚愕する。

なぜなら、アンダーワールド人がそんな単語を知っている筈がない。

俺たちの通り名はともかく、KOBなんて単語を知る筈がないのだから。

アスナ「じゃあ、一体誰なの……?？」

カルム「分からない。名乗ってなかったからな。」

ミト「まあ、それに関しては、要警戒という事にしましょう。」

カルム「ああ。」

俺はそう言ったが、胸騒ぎがする。

何か、とんでもない事が起こりそうな気配がするから。

そんな事を考えていると、ユージオ、アリス、ケント、イーデイス、ベルクーリ、リヨウガ、ユーリ、カーディナルが来る。

ユージオ「皆、大丈夫かい!？」

アリス「いきなり拳闘士団の目の前の地面が割れて、崖になったのはどういう事!？」

ケント「どうやら、大丈夫みたいだな。」

イーデイス「皆、無事で良かったわ。」

ベルクーリ「もしかして、アスナの嬢ちゃんの仕業かい?」

リヨウガ「まさか、あれほどの力があるとはな。」

ユーリ「何はともあれ、無事で良かった。」

カーディナル「そうじゃな。」

まあ、アンダーワールド人からしたら、とんでもない力だしな。

傍付き達は、呆然としていた。

カーディナル「まあ、とにかく、一度説明した方が良いじやろう。」

カルム「説明?ベルクーリ達には説明しただろ?」

ユーリ「そうじゃない。流石に、一般兵にも説明しておいた方がいい。」

あ、そつちか。

まあ、確かに、いつまでも隠せるとは思っていなかったしな。

そうして、軍議と称して、説明をする事にした。

一つの焚き火を取り囲んで、衛士長達も同席していた。

ミトとアスナは話を切り出していた。

アスナ「私はアスナで、こっちはミトです。」

ミト「リアルワールドでアンダーワールドの支配権をかけて争っている一勢力である
ラーズの使者です。」

その言葉に、タカトラ先輩やリーナ先輩を始めとする衛士長達が動揺している。

ベルクーリ達は、予め聞いていた事もあり、そこまで動揺していなかった。

その後、衛士長達から神界の事かという質問が来たが、2人はそれを否定した。

まあ、神様のアカウントを使ってはいるが、神様じゃないのは確かだしな。

すると、ベルクーリとリヨウガが俺に話を向けてきた。

ベルクーリ「まあ、俺たちは予め聞いてはいたが、どうなんだ？」

リヨウガ「お前は、暗黒騎士と接触していた様だが、せいっもお前の世界の人間か？」

カルム「……………はい。」

ユーリ「そうか。」

そんな風に話す。

話は、光の巫女に関する事になり、そして、アリス達が脱出するかどうかの話になった。

その際に、右目の封印の事を話していた。

カルム「敵は、光の巫女……というよりは、右目の封印を破った者は、リアルワールドで、貴重な存在になる。」

ベルクーリ「そいつが、分らん。」

リヨウガ「何故、敵とラーズはアリス達を固執する？それに、外に連れ出して、何をさせるつもりなんだ？」

カルム「……………」

ベルクーリとリヨウガの発言に、俺は黙ってしまった。

そう、菊岡の事だから、兵器にしようと企んでいるに違いない。

黙ってしまった俺に代わって、アスナとミトが答えてくれた。

アスナ「……私は、アリスさんやユージオさん、ケントさんにイーディスさんには自分の目でこちらの世界を判断してほしいと思っています。この世界に比べたら私達の世界の方がずっと醜く、汚れています。」

ミト「でも、そんな部分ばかりじゃない。4人には先入観無しで、見て欲しいから。アリス「なるほど……………」」

イーデイス「それで、ユージオとケントは、外の世界に関して、何か思うことはあるの？」

ユージオ「そう、だね……。外の世界は、キリトやカルムの世界です。2人を見る限り、アスナさんとミトさんが善人だつて分かります。」

ケント「だから、外の世界は、良い人も居れば、悪い人も居る。そんな気がする。」

アリス「そういう訳で、見てから決める。」

イーデイス「そうね。もしかしたら、可愛い女の子も居るかもしれないし！」
良かった、納得してくれて。

なんか、若干1名、本音がダダ漏れだった気がするが。

カーディナル「まあ、それはそれとするぞ。」

ユーリ「暗黒神ベクタが、カルム達の世界の人間なのなら、アスナとミトが相手をするの？」

アスナ「はい。」

その言葉に、歓声上がる。

それもそうだ。

あんな、大地を引き裂く事を間近で見てしまえば、ステイシア神だと信じてしまうの
だろう。

ベルクーリ「アスナの嬢ちゃんは、あの地面をばかつと割る奴を、無制限に使えるのかい？」

アスナ「いいえ、それは無理です。あの力は、私の意識に巨大な負荷をかけるので、乱発は出来ません。」

カーディナル「まあ、そうじゃろうな。」

ユーリ「ミトは、その様な力はあるのか？」

ミト「あるにはありますが、アスナの様な能力ではありません。」

その後、アリス達が人界軍を鼓舞した事により、士気はかなり高まった。

俺は、軍議が終わった後、己の天幕に向かつて、鎧を取る。

そして、軽い服装になって、同じく軽装のミトと合流する。

カルム「これで、良かったのかな……………」

ミト「何が？」

カルム「菊岡からしたら、アリス、ユージオ、ケント、イーデイスのフラクトライトを回収出来れば、後はそれを解析すればいいだけだから、維持する必要がなくなる。」

ミト「カルム。弱気になっちゃダメ。そんな事は絶対に阻止しないと。」

カルム「そうだな。キリトの回復もしないといけないからな。」

そんな事を話しながら、アスナとも合流した。

そして、キリトが居る天幕には、アリス、ユージオ、イーデイス、ロニエ、ティーゼ、シオリ、ルナ、リーナ先輩、タカトラ先輩が居た。

カルム「タカトラ先輩まで……………」

タカトラ「お前達の世界で、お前達がどの様な剣士として生きてきたのか、気になったのでな。」

リーナ「私も、タカトラと一緒にだよ。」

アスナ「じゃあ、話しましょうか。」

そう言つて、天幕の中へと入っていく。

話だそうとした時に、ケントもやって来て、参加する事に。

ケント side

俺は、イーデイスと一緒にキリトが居る天幕へと向かおうとするが、ユーリに呼び止められる。

ユーリ「ケント。」

ケント「どうしたんですか？」

ユーリ「お前に話がある。」

イーデイス「じゃあ、先に行ってるわね。」

ケント「分かった。」

イーデイスはそう声をかけて、キリトが居る天幕へと向かう。

俺は、イーデイスを見送ってから、ユーリの方へと向く。

ケント「それで、話って何ですか？」

ユーリ「ああ、お前の雷鳴剣黄雷について、分かった事があってな。」

ケント「雷鳴剣黄雷について？」

ユーリ「ああ。お前の雷鳴剣黄雷は、更なる進化をする可能性がある。」

ケント「!？」

俺が驚くと、ユーリは語り始める。

ユーリ「青薔薇の剣が、星霧氷の剣に変化した様に、雷鳴剣黄雷も、お前の心意が高

まれば、変化する可能性がある。」

ケント「俺の、心意……………」

ユーリ「要するに、お前次第という事だ。」

ケント「……………」

ユーリ「それを言いたかっただけだ。明日に備えろよ。」

ユーリはそう言い残して、去っていく。

俺の、心意……………」

心意自体は、整合騎士にされた時に、アドミニストレータによって、使える様になっ

ていたから、どの様な物かは、大まかには分かる。

この戦争で、絶対にイーデイスを守ってみせる。

俺はそう誓い、キリトの天幕へと向かう。

Paradise

俺とユイとカナは今、ネット上を見ていたけど、何か動きがある。

それは、オーシャン・タートルにある、アンダーワールドに、アメリカから大量の口グインが来ていたのだ。

パラド「おいおい、一体、襲撃者達は何を企んでるんだよ………！」

ユイ「そのURLを見てみると、こんなサイトに繋がりました！」

それを見てみると、『新規VRMMOタイトルの時限ベータテストを開催。倫理コード無し。』などと書いてある物だった。

それを見て、襲撃者達の企みが分かった。

カナ「まさか、アメリカの人たちを、アンダーワールドにログインさせるつもりじゃ………！」

パラド「マジかよ!?!これを見る限り、アメリカの人が釣られそうなタイトルだな！」

ユイ「早く知らせないと！」

パラド「俺、安田博士に伝えるわ！」

ユイ「お願いします！」

俺はすぐさま、安田博士の端末にコールをかける。

しばらくすると、安田博士が応答する。

安田『お前が電話をしてくるなんて、珍しいな、パラド。』

パラド「そんな事を言ってる場合じゃない！アメリカのプレイヤーが、アンダーワールドにログインしようとしてるんだぞ！」

安田『どういう事だ!?!』

パラド「FLA倍率を調べろ！」

安田『わ、分かった!』

その声と共に、何かを操作する様な音がしてきて、比嘉さんの叫び声が聞こえる。

比嘉『げっ………等倍!?!いつからだ!?!』

安田『だが、どうやってアンダーワールドにログインしようって言うんだ? STLは日本にしか無いんだが?』

パラド「多分、アミユスフィアを使って、ログインするつもりだ!それと、このサイトを見てくれ!」

俺は、問題のサイトのURLを安田博士に転送する。

それを見た安田博士は、机を強く叩いた。

安田『やられた！まさか、暗黒騎士のアカウントを使って、アメリカ人にログインさせるとは……………！』

菊岡『どうにか、止められないかい!?』

安田『サブコントロールルームじゃ無理だ!』

比嘉『どうすれば……………!』

パラド「博士。」

安田『ど、どうしたんだ?』

パラド「博士なら、アカウントを今すぐに作れるか?」

安田『ま、まさかとは思うけど……………。』

パラド「すぐに作ってくれ!それを使って、日本人のプレイヤーを、アンダーワールドにログインさせる!」

菊岡『ま、待ってくれ!そんな事したら、プロジェクト・アリシゼーションが公になつてしまう!』

パラド「このまま、アリス達を襲撃者達に奪われて良いのか!?!」

俺のその怒号に、電話の向こうは黙る。

すると、その沈黙を、博士が破った。

安田『……………分かった。すぐに突貫で作業を始める!比嘉、凜子さん!手伝って下さ

い！』

比嘉 『分かったつス！』

凜子 『ええ！』

菊岡 『……………分かった。指定のURLに関しては、僕が作っておこう。』

パラド 「助かる！」

これで、なんとか手は打てたな。

第66話 現実での動き

カナ side

パラドが安田博士に事情を説明している中、私はシノンさんとチエイイスさんに連絡をしていた。

そういえば、今日はチエイイスさんの家にシノンさんが泊まるとか言つてたような気がする。

電話をかけると、チエイイスさんが対応をする。

チエイイス『カルム!?!カルムか!?!』

カナ「チエイイスさん！」

シノン『カナちゃん……………!?!』

チエイイス『何でカルムの電話からカナが出てくるんだ……………!?!』

カナ「説明は後からします！お二人は、今から外出の準備をして、お家を出てタクシーに乗って下さい。行き先の住所と最速到着経路はチエイイスさんの端末に送ります。運賃は、お二人の電子マネー・アカウントに入金しておきます。」

そう言つて、私はお二人のアカウントに、お金を送信する。

すると、戸惑うようなシノンさんとチエイスさんの声が聞こえてくる。

シノン『た………タクシー………?』

チエイス『どこに行くんだ?』

カナ「急いで下さい! パパとママとキリトさんとアスナさんが危険なんです!」

チエイス『!? わ、分かった! シノン、急ぐぞ!』

シノン『え、ええ!』

カナ「事情は、タクシーに乗った後で説明します!」

私は、チエイスさんの端末の連絡を切る。

リーファさんとハヤトさんに対しては、ユイが、安田博士達にはパラドが連絡している。

すると、連絡が入ってくる。

カナ「はい!」

ジェイク『カナちゃん、俺とアルゴに用事があるって、どういう事っすか?』

アルゴ『そのカナちゃんの慌て様から、只事じやなさそうなのは確かだな。』

そう、お二人にも連絡しておいたのだ。

アメリカの人たちを、アンダーワールドに向かわせない為に。

カナ「実は………」

私は、アンダーワールドの現状を説明する。

アンダーワールドには、『A. L. I. C. E.』へと進化したフラクトライトが4人いて、それがアメリカ側に奪われそうになっている事を。

そして、2人に頼む事がある。

カナ「お二人には、出来る限り、アメリカのプレイヤー達を、アンダーワールドに口グインさせない様にして下さい。」

ジェイク『なるほど、つまり、俺たちがこれまで築き上げてきたコネを使う時つすね！』

アルゴ『だナ！それに、そのサイトの文を見る限り、ペイン・アブソバーが無いという所をつけば、何とかかなりそうダナ。』

カナ「急いで下さい！」

ジェイク『あいよ！さあて、JK様の本気を見せてやりますか！』

アルゴ『という事で、全ては無理だろうけど、何とか減らしてみせるヨ！』
その声と共に、通話が切れる。

私はすぐにALOのキリトさんの家へと向かう。

そこには、シリカさん、ヒロミさん、リズベットさん、ラットさん、クラインさん、エギルさん、ユウキさん、レイモンドさん、フィリップさん、フィリアさん、レインさん、

ノーチラスさん、ユナさんが集まっていた。

「どうやら、ユイが説明をし終えた頃みたい。」

クライン「しっかし、ラースを探していた筈が、とんでも無い事になってきたなあ。」

レイモンド「確かにな。」

フィリップ「そうだね。まさか、本物の人工知能であるアリス、ユージオ、ケント、イーデイスか。興味深いね。」

ユナ「しかも、その人工知能は、ゲームとかのNPCじゃなくて、私たち人間と同じ存在って事になるの？」

ユイ「ええ、その通りです。私やカナ、パラドの様な既存のAIとは構造原理から完全に異なる、本物の魂なのです。」

シリカ「それを、戦闘機に乗せて戦争をさせようだなんて……………」

ヒロミ「それを、あの2人は知っていたんでしょうか……………」

リズベット「知らなかったと思うわね。」

ラット「ああ。そんな事を知っていたら、最初から協力なんてしなと思うしな。」

シリカさんとヒロミさんが呟く中、リズベットさんとラットさんが吐き捨てる。

カナ「ラースとしては、その技術を当面国内外向けのデモンストレーションとして用いる意図のつもりですが……………現在オーシャン・タートルを占拠している襲撃者たちは

……もつと具体的な用途を想定していると、私達は推測します。」
フィリア「具体的な用途……?」

レイン「それは、一体……?」

ユウキ「それに、襲撃者って、一体誰なんだろう……?」

ノーチラス「まさか……。」

ユイ「……高い確率で、米軍か米諜報機関が関与しています……。」

ヒロミ「米軍!」

レイモンド「アメリカかよ……!?!」

カナ「はい……。もしアリスが米軍の手に落ちることがあれば、遠くない未来に無人機搭載用AIとして、実戦配備されるでしょう……。」

『……………』

その言葉に、全員が沈黙する。

まさか、米軍が関わっているとは、誰もが思わなかっただろう。

ユイ「……でも、パパ達は、それだけは阻止したいと思っっている筈です。何故ならアリスは、SAOから始まった全てのVRMMOワールドと、そこに生きた多くの人々の存在の証であり、費やされた膨大な時間的、物質的、精神的リソースの結実だからです!」

『……………?!』

カナ「私たちは確信します。ザ・シード・パッケージが生み出されたそもそもの目的が、アリスの誕生に他ならないと。連結された無数の世界で、沢山の人たちが笑い、泣き、哀しみ、愛した……………それら魂の輝きがフィードバックされたからこそ、アンダーワールドに新たな人類が生まれたのです！」

ユイ「パパやママ、カルムさん、ミトさん、リーファさん、ハヤトさん、シノンさん、チエイスさん、シリカさん、ヒロミさん、リズベットさん、ラットさん、レイモンドさん、フィリップさん、フィリアさん、レインさん、ユウキさん、ノーチラスさん、ユナさん……………その他多くの人々の心が編み上げた大きな揺籠から、アリスは生まれてきたのです！」

私とユイが、泣いてる。

でも、一体何で……………。

そんな事を思いながら、私たちは大きく声を上げる。

すると、リズベットさんとラットさんが泣きながら呟く。

リズベット「そうね……………。そうだよね、ユイちゃん、カナちゃん……………。」

ラット「ああ……………。繋がってるんだ。SAOだけじゃなく、ALOや、アンダーワールドも。俺たちの想いや時間が、大河の様に。」

シリカ「大丈夫だよ、2人とも。」

ユイ「皆さん……………」

ヒロミ「うん。カルムにキリトさん、アスナさん、ミトさんは、僕たちが助ける。」
私たちが驚いている中、クラインさん達が口を開く。

クライン「そうだぞ、ユイツペ、カナツペ？俺たちがキリトたちを見捨てるわけがないだろうが。」

エギル「あいつ等にはでっかい借りがあるからな……………。大人の俺たちがいつまでも借りっぱなしというのは性に合わねえからな……………。ここらで少しは返しておかないとな。」

ノーチラス「そうだな。僕も、カルムに大きい借りがある。それを返したい。」

レイモンド「俺たちも協力するぜ。」

フライツプ「だから、顔を上げてくれ。」

ユイ「あ、ありがとうございます！」

そうして、作戦会議をする事にする。

クライン「おう……………。それにしても、アメリカからダイブしてくるVRMMOPレイヤーが三万……………。多く見積もったら十萬か……………。そいつ等全部が人界軍の敵に回るってことかよ。」

フィリア「多いね……………」

リズベット「ねえ、アメリカのVRMMOサイトに実験のこととか襲撃のこととか暴露して、偽装βテストに参加しないで、頼むはどうだろう……………?」

ラット「現実的じゃないだろうな。」

ユイ「事の真相は日米の軍事機密争奪戦なんです……………。下手にそれを匂わせると、むしろ逆効果になりかねません……………」

ユウキ「そっかあ……………」

エギル「最悪国際問題に発展しちゃうな…………。そうなったら、現実世界での戦争を誘発しかねないな。」

シリカ「だからって、相手は本物の人間だから殺さないで、って書くのも藪蛇ですね……………」

ヒロミ「それも逆効果になりかねないしね……………」

そう、国際問題に発展しかねない為、その手は使えない。

すると、クラインさんが何かを思いついたのか、大きな声を出す。

クライン「なら、同じ手を使えばいい話じゃねあか……………。こつちもβテストの告知サイトを作って、ラースの連中に対等のアカを用意してもらえば、三万人や四万人ぐらいすぐに集めてみせるぜ?」

エギル「確かに良い案だが、クライン……………それには厄介な問題が一つあるぞ。」
クライン「何だよ、問題って……………?」

フィリップ「時差だよ。」

クライン「あつ……………」

クラインさんは、時差を忘れていたみたいで、声が漏れる。

ノーチラス「日本は今、午前3時40分……………。つまり、一番接続数が減る時間帯だ。」

エギル「対して、アメリカはロスが昼の12時半、ニューヨークが午後3時半……………」

あっちの方がアクティブプレイヤーの数は多いぞ。」

ユウキ「そんな……………」

フィリップ「打つ手なし、だね。」

パラド「打つ手は、あるぜ!」

すると、パラドが飛び込んでくる。

パラドがいきなり現れた事に、皆は驚く。

フィリア「パラド……………!?!」

レイン「どうしたの、そんなに勢いよく飛び込んできて……………」

パラド「丁度、安田博士に頼んでいた、アカウントの作成が完了したんだ!」

ヒロミ「アカウント……………?」

ラット「どういう事だ？」

パラド「それはな、お前らが今使っているアカウントのデータを上書きコピーして、アンダーワールドに送り込むんだ！」

そうして、そのアカウントを使つての、アンダーワールドへのダイブへの説得を試みる事に。

クレイ side

俺がパラドに連絡して、ALOへとログインする。

しばらくして、世界樹のドームの部分に、アンダーワールドへのログインを募る集会を開く。

それには、俺も説明役として参加する。

そこには、サクヤ、アリシヤ、ユージーンを始めとする領主組も集まっていた。

ちなみに、領主組とは、知り合いだ。

キリトとカルムの仲間であるリズベットとラットが叫ぶ。

リズベット「みんな、急な呼び掛けに関わらず集まってくれてありがとう……！これからする話は、決して嘘でも冗談でもないわ！」

ラット「日本のとある研究機関が国の支援を受けて作ったザ・シード規格の仮想世界……アンダーワールドに、もうすぐ何万人つて数のプレイヤーがそれと知らずにダイ

ブして、その世界の住人を皆殺しにしようとしている……!!」

リズベット「アンダーワールドに暮らしているのはただのNPCじゃないわ……私たちと同じ感情……同じ魂を持っているの!お願いです……彼らを守るために、皆の力を貸して!アカウントのデータを貸して欲しい!」

その言葉に、プレイヤー達は戸惑う。

無理もないか。

すると、サクヤが声を上げる。

サクヤ「……リズベット……君や君の友人たちが、早朝から単なる悪ふざけでこんなことをするとは思えないし、何よりあのキリトとカルムが10日以上口グインしていないのは、確かにただ事ではないのだろう。」

サクヤはそう語る。

まあ、悪ふざけじゃないのは確かだな。

サクヤ「しかし、正直俄かに信じ難い。人間と同じ魂を持つAI……それを奪おうとするアメリカ軍……。いくら君たちの言葉だろうと、どちらも現実味が無さすぎる。それに、アカウントのデータとは、どういう事だ?」

クレイ「それに関しては、俺が説明しよう。」

サクヤ「君は?」

クレイ「俺はクレイ。リズベットとラットが言った、日本のとある研究機関に所属する研究者だ。」

俺は、説明をした。

俺が開発したアカウントは、突貫で作った為に、各々が使用しているアカウントのデータをコピーしてもらった必要がある事。

アンダーワールドは、ペイン・アブソーバーが機能していない為、痛みがリアルである事。

サクヤ「つまり、アカウントのデータをコピーする必要があるのか。」

クレイ「ああ。流石に、アメリカ側が使うアカウントじゃあ、数で押し切られる。だからこそ、あなた達を使うアカウントをコピーしてもらった必要がある。そうすれば、アカウントを喪失するリスクはない。」

アリシャ「確かに、そうだね。」

プレイヤー「ふ、ふざけるなよ！」

すると、誰かが俺に向かって叫ぶ。

そこに居たのは、風妖精族のプレイヤーだった。

プレイヤー「アンダーワールド？人間と同じ魂を持つAI？そんな嘘を信じると思ってたのか!!」

プレイヤー「そうだ、そうだ！」

プレイヤー「それに、そこに居るのは、SAO生還者じゃないか！なら、そいつらだけでやれよ！そんな事に俺たちを巻き込むな！」

プレイヤー「そうだ、そうだ！現実と仮想世界をごっちゃ混ぜにする様な奴らに、俺たちを巻き込むな!!」

プレイヤー「自分たちが偉いと思ってる、英雄様達に頼れば良いじゃねえか!!」

そんな俺……いや、SAO生還者に対する罵倒が、段々と増えていく。

そう、カルム達は目立っていた。

良い意味でも、悪い意味でも。

その結果、ヘイトが一気に集まる。

やはり、ALOプレイヤーに頼るのは、無理なのか……。

そう諦めかけると、リズベットとラットが大声を出す。

リズベット「ええ、そうよ！皆が言ってるように、これはリアルの話よ！」

ラット「アンタらが言うように、SAO生還者は、リアルと仮想世界をごっちゃ混ぜにするのかもしれない！だが！俺たちは、決して英雄だなんて思ってない！」

クレイ「2人とも……。」

俺が呆然と眩く中、2人は語り続ける。

リズベット「私とラット、後ろにいる一部のプレイヤーは、帰還者学校に通っているわ。そこに通っている生徒たちは、月に1回必ずカウンセリングを受けないといけないの。」

プレイヤー達「!？」

ラット「嫌な質問もされるし、飲みたくない薬を飲まされてる奴も何人もいる……。俺たちは皆……。政府にとつて、監視対象の犯罪者予備軍なんだよ！そんな風に思われているのは、帰還者学校の生徒だけじゃない。VRMMOプレイヤーなら、多かれ少なかれそう思われてるさ！社会に寄与しないお荷物だとか、税金も年金も払わない現実逃避者だとか……。徴兵制を復活させて、強制的に奉仕させるべきなんて議論もある。」

リズベット「だけど！……。私は知ってる！私達は信じてる！……。現実……。ここに……。ここにあるって!!この世界と、ここに繋がってる沢山の仮想世界は……。絶対に虚構の逃げ場所なんかじゃない！私にとっては、本当の生活と本当の友達と……。本当の出会いと別れや、笑顔や涙がある現実なの!？皆もそうでしょ!？」

プレイヤー達「……………」

ラット「この世界が、もう一つの現実だつて信じてるからこそ、頑張れるんだろ!？なのに、ただのゲーム……。所詮は偽物だつて切り捨てたら、俺たちの本当は、一体どこにあるって言うんだ!？」

その言葉に、暴言を放っていたプレイヤー達は押し黙る。

2人の言葉に、耳を傾けていたのだ。

そう、彼らは、あくまでSAO生還者の一面しか見れていなかった。

リズベット「……………皆で育てた沢山の世界が、このアルンを支える世界樹みたいに寄り集まって、芽吹いて……………ようやく咲かせたアンダーワールドって花を……………友達を守ろうとしているものを、私も守りたい……………！」

ラット「だから、頼む。力を貸して欲しい。」

そう言つて、リズベット、ラット、シリカ、ヒロミ、パラド、クライン、エギル、フィリア、レイン、レイモンド、フィリップ、ノーチラス、ユナ、そして俺は頭を下げる。

その光景に、皆が困惑していた。

あのユナも頭を下げているのを見て、本気だと知ったのかもしれない。

その後、ユージーンが勝負を挑んでくるが、クラインが対応して、勝利を収めた。

それにより、ALOプレイヤーもダイブを決意してくれた。

俺はログアウトして、画面を見てみると、GGO、アスカ・エンパイアなどを始めとする他のゲームのプレイヤーも参加してくれる様だ。

カナside

良かったです。

皆、協力してくれて。

すると、連絡が入ってくる。

カナ「はい。」

洋子『カナちゃん。』

カナ「叔母さん……!!?」

なんと、連絡をしてきたのは、パパのお母さんの、小野洋子さんだった。

カナ「どうしたんですか!?!」

洋子『何、ちよつとカナちゃんに聞きたい事があるのよ。』

カナ「何ですか?」

洋子『オーシャン・タートルを襲撃している集団は、何者なの?』

カナ「!? どうして……!!?」

洋子『私を甘く見ないで。官僚や自衛隊のコネを持つてるのよ?』

本当に、この人は何者なんでしょうか。

だけど、伝えるべきだと思い、伝える。

現在、グロージエン・ディフェンスという企業に所属している部隊が襲撃している事、自衛隊の上層部に、チャンネルがある事を。

洋子『なるほどね……。』

カナ「叔母さん……?」

洋子『ありがとう、カナちゃん。じゃあ、カルムをお願いね。』

カナ「はい!」

そう言つて、通話は切れた。

何をするつもりなんでしょうか……?」

侑斗 side

直葉に、一緒に泊まつて欲しいって言われ、桐ヶ谷家に泊まつていたら、ユイちゃんに突然呼び出され、俺と直葉は、六本木にあるラースへと向かう。

どうやら、既に話は通つていたみたいで、俺たちは、途中で合流したシノンとチエイと共に、STLルームへと向かう。

直葉「侑斗君、シノンさん、チエイスさん。」

侑斗「うん?」

詩乃「どうしたの?」

英介「?」

直葉「絶対に、お兄ちゃん達を助けましょう。」

英介「そうだな。」

侑斗「おう!」

詩乃「ええ。」

俺たちは、その決意の元、STLのベッド部分に腰掛ける。

すると、通信が入る。

比嘉『それでは、皆さん、アンダーワールドにログインしてもらおうツスよ。』

「はい！」

比嘉『リーファさんにはテラリアの、シノンさんにはソルスのスーパーアカウントを、ハヤトさんとチェイスさんには、その二つのスーパーアカウントと関係があるハイレベルアカウントでログインしてもらおうツス。ただ、スーパーアカウントには欠点があつて、テラリアは、無制限天命回復と無限に近い天命値がありますが、その苦痛はそのままなので、あまり無理はしないで下さい。ソルスの方も、広範囲殲滅攻撃がありますが、あまり連射出来ないツス。だから、使い時を見極めて使つて欲しいツス。ただ、無制限で飛べるので、それは有効活用して欲しいツス。』

「はい！」

比嘉『ハヤトさんとチェイスさんのアカウントは、設定上、テラリアとソルスの従者という設定ツス。ハヤトさんは特に能力はありませんが、チェイスさんには、シノンさんと同じく、無制限で飛べるので、使つて欲しいツス。』

「分かりました！」

そんな事を言われて、俺たちはアンダーワールドにログインする。
待ってろよ、皆………！

第67話 非情の選択

リヨウガ side

死を予感した事はある？

不意に、そんな声が出てきて、俺は目を覚ます。

隣のベルクーリも、同様の様だな。

リヨウガ「ベルクーリ……。」

ベルクーリ「分かつてる。後10分したら、伝令兵に全軍起床の角笛を吹かせないと
な。」

リヨウガ「ああ。」

俺は、起き上がり、先ほどの言葉を思い出す。

あの言葉は、今は亡き最高司祭アドミニストレータの言葉だ。

いつ頃の記憶かは、全く思い出せない。

だが、その時の記憶は、鮮明に思い出せる。

当時、俺とベルクーリは、アドミニストレータの居室に呼ばれた事がある。

その時に、そう問われたのだ。

当時の俺たちは、アドミニストレータの機嫌を取る事を考えずに、思いついた事を答えた。

ベルクーリ『……………死の予感、ですか。まだ俺とリヨウガがひよつ子だった頃、先代だか先々代の暗黒將軍に軽く捻られた時は、流石に危ないと思いましたがね。』

アドミニストレータ『でも、そいつの首は随分前に取ってきたじゃない？ 確か、その辺に転がつてる宝石のどれかに転換した様な気もするわ。それ以降はないの？』

リヨウガ「それは、思い出せないな。しかし、なぜそんな事を聞くのです？ 猊下には無縁の感覚でしょうに。』

俺がそう問い返すと、アドミニストレータは、長い脚を組み替えながら答える。

アドミニストレータ『ふふふ……………。分かってないわね、ベルクーリ、リヨウガ。毎日よ。私は毎日、死を感じてる。朝、目を覚ます度に……………うん、夢の中ですらも。何故なら、私はまだ全てを支配していないから。まだ生きている敵がいるから。そして、未来のいずれかの時点で於いて、新たな敵が発生する可能性が常にあるから。』

ベルクーリ『それはそれは。』

リヨウガ『最高司祭というのも、中々に大変な様だな。』

その会話を思い出して、漸く、アドミニストレータが言いたかった事が分かった。恐らく、死の可能性を追い求めていたのだろうな、あの方も。

そう思い至った俺とベルクーリは、騎士服と着物を着て、伝令兵の元へ。

カルム side

俺、アスナ、ミトは、リアルワールドに関して、ユージオ、アリス、ケント、イーディス、ロニエ、ティーゼ、シオリ、ルナ、リーナ先輩、タカトラ先輩に話した。

話の内容としては、キリトが如何にして、戦ってきたのかを話している。

その際に、アスナは、時折ドス黒いオーラを放っていた。

恐らく、こんな世界で、女の子を引つ掛けた事に関してだろうな。

やっぱり、予想通りだな。

ただ、タカトラ先輩からは、俺の戦闘の事に関しては、予想通りみたいな反応をして
いた。

タカトラ先輩曰く、『カルムの強さには、まだまだ先があると感じていた。』らしい。

イーディスからは、『リアルワールドって、魔境か何かなの?』と突っ込まれた。

それを聞いた俺、ミト、アスナは苦笑せざるを得なかった。

魔境といえ、そうかもしれないのだが、当てはまるのは、一部だし。

そのまま、俺たちは寝落ちした。

そして、角笛の音で目が覚めて、俺たちは、寝ぼけ眼で、朝食を食べていた。

ロニエ「キリト先輩、今日は顔色が良いですね。」

カルム「良かった。」

アスナ「キリト君……………」

アリス「そうですね。」

ユージオ「とにかく、早く食べよう？」

イーデイス「そうね。まだ戦いは終わってないんだから。」

ケント「そうだな。」

そんな事を話しながら朝食を食べていると、敵襲を知らせる角笛が聞こえてくる。

俺たちはすぐに鎧を装着して、傍付き達に、キリトの護衛を頼む。

そして、ベルクーリ達の所に向かう。

そこには、ベルクーリ、リヨウガ、カーディナル、ユーリが何かを見ていた。

ユージオ「お待たせしました！」

ベルクーリ「おう、よく来たな。」

リヨウガ「敵側のリアルワールド人は、相当な事をして来たな。」

ユーリ「皇帝ベクタが、大胆な手をとった。」

アリス「どういう事ですか……………」

カーディナル「お主らも、遠見の神聖術を使ってみよ。……………無論、カルムとミトと

アスナ、ユージオ、ケントには教えるがな。」

カーディナルから教えてもらったコマンドを言つて、遠見の神聖術で、見ると、とてもない光景が目映る。

それは、岸から岸へと渡した10本の荒縄を橋代わりにして、峡谷の横断を強行していた。

やつぱり、襲撃者側は、アンダーワールド人の命を軽く見ている。

唇を噛んでいると、ベルクーリが呟く。

ベルクーリ「こいつは戦争だ。」

ユージオ「ベルクーリさん……?」

リヨウガ「異界人であるアスナさん、ミトさん、カルムの坊主はともかく、俺たちが暗黒界軍に情けをかけてる場合じゃない。この機、活かさなければな。」

ケント「機……ですか?」

ユーリ「ああ。」

カーディナル「そうじゃな。騎士レンリよ。」

レンリ「は……はいっ!」

カーディナルは、レンリの名前を呼び、レンリは背筋を伸ばす。

カーディナル「お主の神器、《雙翼刃》の最大射程はどれくらいじゃ?」

レンリ「はい、通常時で三十メル、武装完全支配術を使えば七十……いや、百メル

は。」

ベルクーリ「決まりだな。」

リヨウガ「ああ。これより、俺、ベルクーリ、アリス、ユージオ、イーデイス、ケン
ト、シエータ、ユーリはレンリの護衛をし、レンリは、神器で敵軍の張った縄を片っ端
から切れ。」

血も涙もないな。

レンリは、幼い顔に決意を滾らせていた。

レンリ「了解しました！」

シエータ「大丈夫。私が、守る。」

カルム「俺とミトとアスナも行く。護衛は多い方が良いだろう。」

ミト「私も。」

ユーリ「急ぐぞ。」

俺たちは、すぐに馬に乗って、その場所へと向かっていく。

すると、拳闘士団の長……ベルクーリ達から聞いたが、イスカーンという名前らしい。
………が叫ぶ。

イスカーン「敵襲だ!!守れ!!綱を死守しろおーおーッ!!」

その言葉に、渡り終えた拳闘士が、綱を守る様に円陣を組む。

俺たちは、すぐに馬から飛び降りて、綱の一つへと走っていく。

拳闘士「ウラアアア!!」

拳闘士は、拳を、足を俺たちに向かって向かって向けてくる。

心の中で、謝罪をしつつ、拳闘士団を倒していく。

そして、レンリの雙翼刃が放たれ、右端の縄へと向かっていく。

イスカーン「やめろおおおおおーッ!!」

イスカーンの叫び声が聞こえる中、荒縄は中央で切断され、そこにいた拳闘士団は、谷底へと落ちていく。

その光景に、俺は、心が苦しくなった。

あの拳闘士団達は、ある意味で被害者なのだ。

リアルワールドの争いに、巻き込まれてしまった被害者。

本当なら、あの拳闘士達を助きたい。

だが、それは、人界が蹂躪されるかもしれないという状況下では、とても出来ない。

今の俺に出来る事は、命を奪うのではなく、戦闘続行が困難な状態に追い込む事しか出来ない。

カルム「くっ……………!!」

ミト「カルム……………」

俺が菌痒い思いをしている中、ミトは俺を不安げに見てくる。

ガブリエル side

敷設させたロープの内、3本が切られた。

私は、それを頬杖をつきながら眺める。

ガブリエル「はあ………所詮はAIか。それにしても、いくらこちらが亜人ばかりだとはいえ、人界側のユニットの方が性能は優秀というのはどうなのか………。いや、状況対応力だけを見れば、その差は歴然という評価をすべきか。」

この結果により、自軍ユニットの七割を損耗していたが、どうという事はない。

全ては、アリスを確保できればそれでいい。

ガブリエル（やはり暗黒軍は捨て駒だな………。それに、これはこちらにとつてもチャンスだ。上手くやれよ………。クリッター。）

私はそんな事を思いながら、新たな策を考えていた。

カルム side

俺は、心を痛めながら剣を振るっていく。

すると、ミトが声をかける。

ミト「カルム。」

カルム「うん？」

ミト「あんまり、無理しないで。」

カルム「分かっている……でも……!!」

ミト「うん。……あれは？」

カルム「ミト?……あれは？」

ミトが何かに気付いたのか、空を見る。

すると、一際赤く輝く線。

それは、数千にも及ぶ。

無数の線はそれぞれ、微細なドットの連なりからなっている。

その線は、戦場から東に1、2キロ離れた場所に降り注いで行く。

それを見て、俺は悪寒がした。

何か、とんでも無いことが起ころうとしている気がする。

いつしか、その場にいる全員が、その光景を見入っていた。

すると、赤い線は、すぐに人の姿になる。

それは、暗い赤色の鎧に身を固め、長剣や戦斧、長槍で武装されていた。

暗黒界軍の増援か!?

そう思ったが、すぐに違うと思った。

何故なら、聞き覚えがある叫び声が聞こえてきたのだ。

暗黒騎士「Charge ahead！」

暗黒騎士「Give me hell！」

アスナ「まさか……………!？」

ミト「嘘……………!？」

カルム「英語……………!？」

しかも、アメリカ人だ。

その時、その悪寒の正体が分かった。

それは、このアンダーワールドは、秘匿されているとはいえ、ザ・シードをベースにしている。

つまり、アミユスファイアがあれば、アンダーワールドへとダイブ出来る。

という事は、襲撃者側は、それを利用して、アメリカ人をアンダーワールドへと呼び込んできたのだ。

その時、俺の中の何かがキレた。

アンダーワールド人は、現実世界の人たちと同じ命を持っている。

なのに、命を奪う事を楽しんでる奴は、許せなかった。

俺は、火炎剣烈火と刃王剣十聖刃を振るい、アメリカ人を倒していく。

ただ、数が余りにも多すぎる。

すると、隣にミトがやって来る。

ミト「カルム！落ち着いて!!」

カルム「……………ツ！悪い。だけど、アンダーワールド人にこれ以上の犠牲は出させない。絶対に……………!!」

ミト「ええ!!」

俺とミトは、引き続きアメリカ人の暗黒騎士を倒していく。

すると、アスナの声が聞こえてくる。

アスナ「システム・コール！クリエイト・フィールド・オブジェクト!!」

アスナの無制限地形操作を使い、アメリカ人の暗黒騎士達を倒していく。

だが、反動でアスナが蹲る中、俺、ミト、ケント達が合流する。

ミト「アスナ!!大丈夫!?!」

アスナ「う、うん……………!もう一回……………!」

アリス「無理をしないで、アスナ、ミト、カルム。」

イーデイス「そうよ。後は私たち整合騎士に任せてよ。」

カルム「だが、あの赤い兵士は、リアルワールドの……俺たちの世界の敵で……！」

ユージオ「そんな関係ないよ。」

カルム「ユージオ………？」

ユージオの顔が、壮絶な覚悟に満ちていた。

それは、ケント達も同じだった。

ケント「……連中がどこの世界だが知らないが、自分の快樂の為だけに、人を殺す

事をする奴を許さない………！」

イーデイス「そうね。ただ闇雲に血を求め、剣を振り回す連中なんて……それこそ私たちの敵よ。」

アリス「ええ。それに、そんな目的でしか剣を振るえない連中など、いくら何万いようと恐れるに足りません。」

ベルクーリ「そういう事だな。それに、いつまでもお前さんらに活躍させないいな。」

リヨウガ「無理をするな。俺たちを頼れ。」

ユーリ「あんな奴ら、蹴散らして見せよう。」

アスナ「……………皆さん、ありがとう。」

確かに、感情的になつてゐる場合じゃないな。

そう思い、何とか冷静さを保つ。

ベルクーリ「よし……………！全軍、密集陣形を取れ！一点突破するぞ！！」

ユーリ「俺たちも行くぞ！」

そうして、乱戦が始まる。

俺たちは、密集陣形を取り、突破していく。

だが、アメリカ人プレイヤーは、どんどんとこちらに来る。

衛士「うわっ……………だめだ……………うわああ！！」

カルム「!?」

その悲鳴が聞こえてきて、振り返ると、衛士達の戦列の一部が破られ、アメリカ人プ

レイヤーが雪崩れ込んでくるのが見えた。

段々と、被害が増えていく。

カルム「やめろ……………やめろ……………！！」

少数の犠牲者を無視して、南下するべきだ。

理性ではそう分かつていたが、体が勝手に動いて、馬から飛び降りる。

カルム「やめろオオオオオツ！！」

ミト「カルム!!」

ケント「カルム!!」

2人の叫び声が聞こえてくるが、俺は構わずにアメリカ人プレイヤーを倒していく。

アメリカ人プレイヤーは、襲撃者に利用されているだけ。

そんな認識も、怒りの感情によって、吹き飛ばされる。

アスナも、アメリカ人プレイヤーを倒していた。

ただ、血が溜まっていた事に気付かず、転倒しかける。

そこに、アメリカ人プレイヤーが攻撃しようとしてくる。

だが、ケントが倒した。

アスナの方は、ミトが助けていた。

ケント「カルム!!」

カルム「ケント……………」

ケント「熱くなりすぎだ!感情的になっても、どうにもならないぞ!」

カルム「すまん……………」

ミト「アスナも、落ち着いて!!気持ちには分かるけど!!」

アスナ「ミト……………ごめん。」

そうこう話しているうちに、アメリカ人プレイヤーが集まってくる。

何とか迎撃しようと、剣を構えると。

??? 「おらああああ!!」

「!!?!」

赤銅色の影が、アメリカ人プレイヤーをあつという間に倒していた。

見てみると、あのシェータと戦っていた拳闘士団のリーダー、イスカーンだった。

カルム 「どうい……!!?」

イスカーン 「……!!? うおおおらああああああ!!」

イスカーンが地面に拳を叩きつけると、アメリカ人プレイヤーは、衝撃波に倒され、遠方に控えていた多数の敵までを吹き飛ばした。

まさかの行動に、俺たちは驚き、その威力に言葉を失っていた。

これが、ベルクリーすらも恐れる拳闘士の実力か……。

イスカーン 「柔い連中だ……。あの女騎士なんかとは比べるまでもねえぜ。」

ケント 「……ダークテトリリーの拳闘士のリーダーが、何の用だ?」

ケントがそう問うと、イスカーンはアスナを真っ直ぐに見詰める。

気がついたが、イスカーンの右目が、傷ついている。

イスカーン 「……取引だ。」

アスナ 「取引……?」

ミト「どういう事……………?」

イスカーン「あの岩山や、でけえ地割れを作ったのは、お前だな?……………いいか、後ろの地割れに、狭くても良いから、しっかりした橋を架けろ。そうすりや、四千の拳闘士が、この赤い兵士どもを一人残らずブツ潰すまでお前らと共闘してやる。」

カルム「共闘……………!?!」

俺たちは、唾然となる。

イスカーンの右目が傷ついている事から、右目の封印を破ったのか?

だが、彼の場合、自ら抉り出した様に見えるが……………。

すると、シエータが近寄る。

シエータ「大丈夫……………。…………その人、多分嘘は吐かない…………。」

アスナ「でも……………」

ケント「俺も、その拳闘士が嘘を言っている様には見えない。」

イスカーン「へえ。話が分かる奴が居て助かるぜ。」

カルム「……………分かった。」

ミト「良いの!?!」

カルム「俺も、イスカーンが嘘を言ってる様には見えないから。」

イスカーン「おう。」

その言葉に、アスナも信じてくれたみたいだ。

アスナ「……………分かりました。峡谷に橋を架けます」

アスナが剣を空へと掲げると、昨日出現した七色の光が空へと浮かび、地面が大きく揺れた。

そして、峡谷の壁からいくつもの横柱が出現し、峡谷に即席の橋が出来上がった。

橋が出現したことで、向かい側にいた拳闘士たちが雄たけびを上げ、こちらへと向かって来てくれていた。

ケントside

まさか、期せずして、ダークテリトリーと共闘する事になるなんてな。

イスカーンという人物も、ベルクーリさんが話していたシヤスターという人物に似ていたのかもしれないな。

そんな事を思いつつ、暗黒騎士達を倒していくと、ベルクーリさんとリョウガさんの叫び声が聞こえてくる。

ベルクーリ「嬢ちゃん！」

リョウガ「アリス！先走りすぎだ!!」

2人の焦った声が聞こえてきて、アリスを探すと、単身で暗黒騎士達を蹴散らし、丘に向かっていった。

その後ろを、ユージオが追いかけていた。

すると、隣にイーデイスも来ていた。

カルム「行け！ケント、イーデイス！」

ケント「カルム………!?!」

ミト「ここは、私たちが食い止める！」

アスナ「だから、2人はユージオとアリスの元へ行つて!!」

イーデイス「ありがとう！ケント、行くわよ！」

ケント「ああ！」

カルム達に、気を遣わせたか。

だが、ユージオとアリスだけで放つてはおけない。

俺とイーデイスは、2人の元へと向かう。

だが、暗黒騎士が大量にいるせいで、中々2人の元に行けない。

イーデイス「邪魔すんな！」

ケント「そこを退け！」

少し口調が荒くなるが、それでも敵は中々減らない。

すると、俺たちの上空に飛竜が現れる。

その飛竜は、アリスの元へと向かっていった。

ユージオ「アリス、危ない！」

アリス「っ!？」

ケント「まさか!？」

イーデイス「アリス！」

アリスは、黒い大型の飛竜に捕まり、南に連れていかれる。

アリスは、抵抗しようとしたが、乗っている男が手を翳すと、アリスは気絶した。

まさか、あれが皇帝ベクタか!？」

すると、ユージオの絶叫する声が聞こえる。

ユージオ「うわああああああ!!」

ユージオは、その絶叫と共に、周囲にいた敵を、ホリゾンタル・スクエアで薙ぎ払っていた。

すると、ユージオの飛竜が現れ、ユージオはベクタが乗っているであろう飛竜を追う。

ケント「ユージオ、待て!!」

イーデイス「アリス!!」

俺とイーデイスが絶叫する中、ユージオは追撃してしまった。

イーデイス「ケント!!」

ケント「ああ！分かってる!!」

俺たちもアリスを助ける！

ベクタにアリスを渡してたまるか！

俺とイーデイスは、ベルクーリさんとリヨウガさんと合流する。

イーデイス「退けえ！雑兵ども!!」

ケント「道を開けろ!!」

ベルクーリ「イーデイス！ケント！」

イーデイス「騎士長、リヨウガ！アリスが！」

リヨウガ「今、ユージオが追撃してる！だが、この状況では……………」

レンリ「リリース・リコレクション!!」

ユーリ「光あれ!!」

暗黒騎士達が俺たちに襲い掛かろうとするが、レンリさんの雙翼刃とユーリの光剛劍最光により、暗黒騎士が吹っ飛ぶ。

レンリ「行ってください、団長！リヨウガさん！」

ユーリ「ここは、俺たちが持ち堪える！」

ベルクーリ「助かる！」

リヨウガ「俺たちも追うぞ！」

俺たちは、それぞれの飛竜を呼ぶ。

すると、アリスの飛竜である雨緑もやって来ていた。

ベルクーリ「行くぞ！」

リヨウガ「全速力で飛ばすぞ！」

ケント「はい！」

イーデイス「ていうか、雨緑!? アンタも来たの!?!」

ベルクーリ「お前さんも、主人が心配なんだな。」

リヨウガ「行くぞ！」

俺たちは、それぞれの飛竜に乗り、バクタを追うユージオを追いかける。

第69話 太陽神とその従者の救援

カルム side

カルム「凄いな……………」

俺は、そう呟いていた。

何せ、10人1組で組んだ拳闘士団が、巨大な破城槌の如く、アメリカ人プレイヤーを薙ぎ払っていたのだ。

しかも、拳闘士団はローテーションを行なっており、SAO攻略組の《スイッチ》よりも洗練されている。

イスカーン「感心してるだけじゃ困るぜ。このまま南に抜けたとして、その後はどうするんだ？ あんだけの数の敵、いくら俺たちでもこの場で殲滅するのはちと難しいぜ。」

確かに。

拳闘士団の勢いは、現実世界の工事用重機の如くだが、側面から攻撃されて、崩される集団も現れている。

それに、アメリカ人プレイヤーは、未だに2万は居るのだ。

アスナ「……………敵陣を破って南へ抜けたら、そのまま一気に前進して敵から距離を

取ってください。私がもう一度、地割れを作って敵を隔離します。」

ミト「アスナ……………無理しないで……………」

アスナ「分かっている。」

あの地形操作は、アスナのフラクトライトに多大な負荷をかける。

そんな事は出来る事ならさせたくない。

キリトに顔向け出来ないしな。

だが、そうするしかないのだろう。

そう考えていると、伝令兵がこちらにやって来る。

伝令兵「伝令！整合騎士レンリ様とユーリ様より伝令であります！整合騎士アリス様が、敵総大将の駆る飛竜に拉致されました！飛竜はそのまま南に飛び去った模様……………！！」

ミト「え……………!?」

カルム「やられた！まさか、アリスが一人で突っ込んだ所を狙うとは……………！それで、誰か追撃してるのか!?!」

伝令兵「はい！ユージオ様、ケント様、イーデイス様、ベルクーリ様、リョウガ様が追撃しています！」

イスカーン「皇帝……………が、飛び去った、だと。」

イスカーンは、ひび割れた声で応じる。

拳闘士団の長は、左目に異様な光を浮かべて、口を開く。

イスカーン「それで、さつき飛竜に……。ただの見物じやなかったのか……。！おい、お前！」

カルム「ん？」

イスカーン「アリスつてのは、《光の巫女》だよな!? 皇帝は何でそいつをこうも欲しがるんだ!? 光の巫女が皇帝の手に落ちたら、一体何が起きるつてんだよ!？」

カルム「……………」

俺は、ミトとアスナにアイコンタクトをして、イスカーンに真実を伝えるべきだと判断する。

二人も同意してくれた。

カルム「この世界が滅ぶ。」

イスカーン「なっ……………!？」

ミト「暗黒神ベクタが、光の巫女アリスを手に入れて、《果ての祭壇》に至った時……………この世界のありとあらゆる物が無に還るわ。」

本当に、RPGのセリフ染みてるな。

だが、これは事実だ。

《A. L. I. C. E》へと覚醒したアリス、追撃してるユージオ、ケント、イーディ
スが襲撃者達の元に渡れば、ライトキュープ・クラストを破壊するのは確かだ。

もう、用済みという事で。

すると、近くにいたシエータが口を開く。

シエータ「飛竜も、永遠には飛べない。連続飛行は、半日が限界。」

イスカーン「なら、アンタらが気合いで追っかけるつきやねえな!!」

アスナ「追っかける、って……………」

ミト「そもそも、あなたはダークテリトリー軍の人でしょ？何でそこまで……………」

アスナとミトが呆然としながら聞くと、イスカーンは吐き捨てる様に言った。

イスカーン「皇帝ベクタは、俺たち暗黒界十侯の前で、確かに言ったんだ。自分の望みは光の巫女だけだ、そいつさえ手に入れば後はどうでも知ったこっちゃねえ、つてな。巫女を搔っ攫った時点で、皇帝の目的は達せられた……………つまり、俺らの任務も一切切終わった訳だ。後は、俺らが何をどうしよう……………例えば、皇帝から巫女を奪還しようとする人界軍に協力しようがこっちの自由、そうだろうが!!」

カルム「凄いな……………」

牽強付会だな。

だが、イスカーンの顔は、悲壮な決意の色に染まっていた。

補給隊と合流して、カーディナルと今後の動きを相談する事に。

カーディナル「まさか、ベクタがその様な手を使うとはな……………」

カルム「大丈夫かよ。」

カーディナル「暗黒神ベクタは、人の記憶を消したりする事が出来る。恐らく、アリスはベクタの能力で気絶しておるのじやろう。」

カルム「なら、追いつけなくても、ベクタを追撃するべきだろう。」

カーディナル「そうじゃな。現状、わしが指揮官として機能しておる。わしが動かさう。」

カルム「頼みます。」

カーディナルの指揮のもと、人界軍が動き出す準備を始める。

その前に、俺、ミト、アスナは、キリトの馬車の元へ。

すると、キリトは転倒していた。

ロニエ「あ！カルム先輩、アスナ様、ミト様！」

カルム「キリトはどうしたんだ!?!」

ティーゼ「わ、分かりません……………！さつきから、外に出ようとして……………！」

ミト「まさか、アリスを助けようと……………?!」

シオリ「えっ?!アリス様が!?!」

ルナ「そういえば、ケント先輩はどうしたんですか!？」

ユーリ「ケント達は、ベルクーリ達と共に、ベクタの追撃をしている。」
アスナ「とにかく、私たちは大丈夫だから、キリト君の事、お願いね。」

「「はい!!」」

そうして、馬車から出ると、タカトラ先輩とリーナ先輩が居た。

どちらも、重症ではない。

カルム「タカトラ先輩!リーナ先輩!」

タカトラ「無事な様だな。」

リーナ「小耳に挟んだが、アリス様がベクタに攫われたと。」

カルム「だから、俺たちはすぐに追う。」

タカトラ「ああ。」

俺たちは、部隊に合流して、出発する事に。

カーディナルが、出発の号令をかけるようだ。

カーディナル「アリスは、大門の戦いで、お主らを守った!今度は、お主らがアリスの為に戦う番じゃ!必ずアリスを取り戻し、人界へと戻るぞ!!」

その号令と共に、人界軍は動き出す。

追いついたら、差し違えてでもベクタを倒してみせる。

現実世界である俺が。

そんな決意の元、数分経つと、巨大な窪地が現れる。

時間が無いので、窪地を突っ切る。

だが、虫の羽音の様な振動音が聞こえて来て、確かめると、赤いラインが伸びていた。

ミト「あれって……………!!」

カルム「嘘だろ……………!!」

アスナ「増援……………!!」

そう、アメリカ人プレイヤーの増援が来てしまったのだ。

先ほどと比べると、少し人数が減ってはいるが、それでも多い。

カーディナル「全軍、止まるな！」

カーディナルの指示で、人界軍は移動速度を上げる。

だが、アメリカ人プレイヤーは、進行先に最も多く配置されていた。

刃王剣十聖刃と火炎剣烈火の武装完全支配術を使うべきか……………!!

そう考えていると、飛竜の雄叫びが聞こえる。

すると、レンリが駆る風縫が、一気に突進していく。

リーナ「いけない……………!!」

タカトラ「レンリ様は、捨て身で突破口を開こうとしている……………!!」

カルム「レンリさん！戻って下さい!!」

すると、レンリは、『後は頼みます。』と言ったのだ。

だが、驚くべき現象が起こる。

それは、ダークテリトリーの紅い空が、蒼穹に包まれて、二つの星が降ってくる。

星が、人である事に気付いたのは、すぐだった。

片方は、濃紺の鎧と、雲の様に白いスカート、髪は水色で、もう片方は、同じ濃紺の鎧に雲の様に白いズボンを履いていた。

そして、両方とも、弓を握っていた。

すると、弓を引き絞り、光の矢が生成されていく。

そして、発射される。

その矢は、分裂して凡ゆる方向に広がり、アメリカ人プレイヤーを蹴散らしていく。

一体、誰だ……!!?

そう思っていると、声が聞こえてくる。

??? 「連射出来ないのね。」

??? 「まあ、シノンからしたら、単発の方がしっくり来るだろ?」

シノン「そうね。」

それを聞いた途端、気付いた。

それは、俺が知る限り最強の弓使いコンビだった。

シノン「お待たせ、アスナ、ミト、カルム。」

チエイヌ「どうした？そんな顔をして？」

アスナ「シノのん……………！チエイヌ君……………！」

ミト「二人とも、来てくれたの……………!？」

そう、シノンとチエイヌだった。

俺の顔は、久しぶりの友との再会に、涙で濡れていた。

第70話 大地の神とその従者

カルム side

まさか、シノンとチエイスが、救援に来てくれるなんてな。

シノン「3人とも、よく頑張ったわね。」

チエイス「後は、俺とシノンに任せろ。」

シノンとチエイスは、そう言った直後、弓を前方に向けて、弦を引く。

そして、光の矢が放たれ、俺たちの先を防ぐアメリカ人プレイヤーに炸裂し、吹き飛ばされて消滅する。

アメリカ人プレイヤーがたじろいでいる隙にレンリの飛竜が突入して、アメリカ人プレイヤーが吹っ飛ぶ。

流石に、残りの兵士達が動揺から立ち直った様で、獲物が逃げる事に気づき、罵り声をあげながら、俺たちに向かって駆け降りてくる。

すると、シノンとチエイスがこちらを見てくる。

シノン「アスナ、ミト、カルム。ここから5キロくらい南に行つたところに、遺跡みたいな廃墟が見えたわ。道はその真ん中を貫いてて、左右にはでっかい石像が幾つも並

んでる。」

チエイズ「あそこなら、包围されずに敵を迎撃出来るはずだ。何とか、そこでアメリカ人プレイヤーを撃退するぞ。」

その言葉を聞いて、俺たちは表情が引き締まる。

アスナ「分かったわ、シノン。」

ミト「幾らアメリカのVRMMO人口が多くても、これ以上の敵はすぐに用意できないはず。」

カルム「あの一万何千を撃退すれば、どうにかなると思うが……。」

チエイズ「ああ。今、アルゴとジエイクの二人が、何とかアメリカ人プレイヤーの口グイン数を減らそうとしている。」

シノン「分かったわ。」

チエイズ「カルム。キリトは何処にいる？」

カルム「キリトなら、あの馬車の中だ。」

そう言うのと、シノンとチエイズはキリトが居る馬車へと入っていく。

俺は、久しぶりの友との再会に濡れた顔を拭って、覚悟を決める。

俺もミト、アスナと共に、馬車へと入っていく。

シオリ達は、突然現れたソルスに、驚いていた。

シオリ「ええっと、ソルス様……………」

シノン「違うわ。私はシノンで、こっちが……………」

チエイス「チエイスだ。俺とシノンは、キリトの親友だ。」

ロニエ「良かった……………。女の人ばかりじゃなかった……………」

まあ、女性の知り合いは結構多いが、全員彼氏持ちだしな。

そう思った俺、ミト、アスナ、チエイス、シノンは苦笑した。

チエイスは、キリトを見た途端、キリトの肩に手を置いた。

チエイス「キリト……………。お前は、心がポロポロになるまで戦ったのだな……………」

シノン「だから、これからは、私たちが戦うわ。」

カルム「シノン、チエイス……………」

チエイス「よし、俺とシノンが飛んで、一足先に遺跡の地形を確認してくる。」

チエイスからその言葉を聞いた途端、俺はチエイスの、ミトとアスナはシノンの肩を

掴む。

シノン「アスナ……………ミト……………」

チエイス「カルム……………? どうした……………」

カルム「チエイス……………今、飛ぶって言ったか!？」

チエイス「あ、ああ……………」

アスナ「なら、お願い！皇帝に攫われたアリスさんを追いかけて!!」

シノン「えっ?!まさか、アリスがベクタに攫われたの!？」

ミト「今、ユージオ、イーデイス、ケント、ベルクーリさん、リョウガさんで追いかけるんだけど、スーパーアカウント相手じゃ、厳しいわ!」

カルム「だから、頼む！ケント達を追ってくれ!!」

チェイス「分かった!」

俺たちは、ケント達の外見的特徴をチェイス達に叩き込み、二人は空を飛ぶ。

その際、チェイスが疑問を放った。

チェイス「そういえば、同時にログインした筈のリーファとハヤトはどうしたんだ?」

リーファとハヤトも来てくれたのか。

だけど、何処に行ったのやら。

ハヤト side

俺は、赤く染まった大地に転がった。

ハヤト「痛って!何だ、初期不良か!？」

まさか、初期不良品を引き当ててしまうなんてな……………!

情けないぜ。

ていうか、リーファにシノンにチェイスは何処行つたんだよ!？」

そういえば、比嘉さんに、ある事を言われた様な気がするな。

比嘉『ハヤト君！君には、少し伝えたい事があるんす！』

侑斗『何ですか、伝えたい事って？』

比嘉『実は、ハヤトさんの使うアカウント、特殊能力が無いって言ったつすけど、実は、一つ能力があるんす！』

侑斗『何ですか、それ？』

比嘉『実は、テラリアのアカウントを使うリーファさんの位置を把握する事が出来るんすよ！』

侑斗『マジでか!?なんでそれを今伝えるんだよ?』

比嘉『……………シンブルに伝え忘れたツス。』

侑斗『分かった。とにかく、リーファと逸れた場合は、その能力を使って、合流すれば良いんだろ?』

比嘉『……………お願いするつす。』

それを思い出した。

全く、あの人も伝え忘れんなよ。

危機感が無いんじゃないのか?

ハヤト「まあ、愚痴つっても始まんねえか。」

俺は、目を閉じて、感覚を研ぎ澄ます。

すると、リーファの反応を見つけた。

「どうやら、人界側に少し近い所に居るみたいだな。」

ハヤト「そんなじゃま、一丁行きますか。」

俺はそう呟いて、駆け出す。

何とかリーファと合流出来るみたいで良かったぜ。

だが、リーファの気配が少し変だ。

何かに、リーファのHPが吸い取られている様な……………。

そんな事を考えていると、リーファの姿が見えて来た。

だが、リーファと合流出来た事よりも、現状に困惑している。

何せ、リーファが女性に吊り上げられて、リーファの体に無数の触手が侵入して、

目の前には、確か、オークとかいう人工フラクトライトが居た。

ハヤト「アイツら……………何してんだ……………!？」

オークとあの女性がグルかと思つたが、すぐに違うと分かつた。

何故なら、リーファの声が聞こえてきたのだ。

リーファ「私は……………だいじょうぶ、だから。やめて、そんな、こと。」

すると、女性がリーファの頬に軽く歯を立てたのだ。

女性「それ以上つまらない事言ったら、可愛い顔を食い破るわよ。折角面白い見せ物なのに。ほら、どうしたの豚。さっさと脱ぎなさいよ。それとも、人族の裸に興奮しちゃったのかしら？」

女性は、オークに向かって、そう笑う。

俺は、怒りが湧いてきた。

だが、理性が優って、動けない。

ハヤト（本音を言えば、あの女をぶった斬りたいけど、人工フラクトライトを殺す訳には……………！）

そう、ダイブする前に、直葉と約束したんだ。

人工フラクトライトは決して傷付けないと。

だが、これ以上は、我慢できない……………！

すると、オークは、ズボンにかけていた手を剣へと伸ばす。

オーク「お……………おでは……………おでは……………！おでは、人間だツ!!」

オークはそう叫び、右目が潰れながらも、女へと襲い掛かる。

それを見て、俺は覚悟を決めた。

あの女は、絶対の悪だ。

あんな奴をアンダーワールドに放っておいてはいけない。

アイツが男を見せたんだ。

なら、俺も男を見せないと、リーファの彼氏失格だな。

女は、リーファを放り捨て、オークに釘付けになっている。

俺は、リーファと合流する。

リーファ「ハヤト君……………！」

ハヤト「遅くなって悪い。俺たちで、アイツを倒すぞ。」

リーファ「うん！」

俺とリーファはそう話して、あの女の両腕を二人で斬り落とす。

女は、俺たちを見て、あり得ないものを見たかのように呟く。

女「人族が……………豚を助けて、人を斬る……………？」

リーファ「違うわ。」

ハヤト「人を助ける為に、悪を斬るんだよ！」

俺たちは、宣言と共に、斬撃を放つ。

すると、女は斬れる。

リーファが倒れそうになって、俺とオークが支える。

リーファ「はあ……………！はあ……………！ぐうう……………！？」

ハヤト「リーファ！」

オーク「リーファ……………!？」

ハヤト「大丈夫か……………?」

リーファ「全く……………ハヤト君、遅いよ……………」

ハヤト「悪い。迷った。」

オーク「だ、大丈夫か……………おでのせいで……………!」

リーファ「あなたのせいじゃないよ……………。私が迷ってたせいでもあるんだから……………。あなたに辛いことをさせちやつた。」

リーファ……………。

俺は、オークの話を聞く。

ハヤト「なあ、お前、名前は?」

リルピリン「オーク族族長、リルピリン。」

ハヤト「リルピリンか。良い名前だな。俺の名前はハヤトだ。まあ、リーファの従者つて所だな。それと、リーファを助けようとしてくれて、ありがとうな。俺も、本当はすぐに行きたかったが、迷っちゃった。格好いいぜ。」

リルピリン「……………ハヤトか。リーファ。……………おでは……………お前のおかげで目が覚めた気がする。」

リーファ「えつ……………?」

リルピリン「おで達オークは、人族への憎しみを持っていた。でも、リーファとハヤトは違った。おでを見て、決して蔑まず、人間として見てくれた。だから、お前達なら信用できる。」

リーファ「……リルピリン……ありがとう。」

リーファは、笑顔でリルピリンに答える。

……俺も、リルピリンを見習わないとな。

リーファ「ところで、これからどうするの？」

リルピリン「おで達オーク族は、リーファ及びハヤトに着いていこうと思う！」

ハヤト「本当か!?だが……。」

リルピリン「おで達オーク族を人間と見てくれたリーファをおでは信じた。同胞達も

きつと信じてくれる筈だ。」

リーファ「ありがとう。ところで、ここは何処なの？」

そうして、オーク軍は、俺たちに協力してくれる事になった。

ちなみに、リルピリンが俺も信じてくれた理由としては。

リルピリン「お前は、リーファの従者だから信じる。」

とのこと。

まあ、良いけど。

第71話 仲間達の救援

ケント side

俺たちは、単身でベクタを追いかけるユージオを追いかけろ。

ユージオの飛竜が疲れたのか、少し速度が下がった。
すると。

ベルクーリ「ユージオオ！」

ユージオ「……………ッ！」

ベルクーリさんの怒号が聞こえたのか、ユージオは振り返る。

リヨウガ「一人で飛び出すな！」

ケント「ユージオ、落ち着け！」

イーディス「まあ、気持ちは分かるけど。」

ユージオ「すみません！気付いた時には体が……………！」

ベルクーリ「言い訳は良い！今はアリスの嬢ちゃんを取り戻すぞ!!」

リヨウガ「だが、俺たちの飛竜では、奴に追いつけないぞ。」

ベルクーリ「仕方ない……………。アレを使うぞ。」

リヨウガ「アレ……………か。」

ベルクーリさんとリヨウガさんが言うアレって一体何だ？

俺とユージオが首を傾げる中、ベルクーリさんは時穿剣を抜刀する。

ユージオ「ベルクーリさん……………!?!」

ケント「空斬を使ったら、アリスにまで被害が……………!」

リヨウガ「心配ない。」

ベルクーリ「おう。」

イーデイス「まあ、見てなさい。」

イーデイスは、アレが何かを知ってるのか？

俺たちは、見守る事にする。

ベルクーリ「……………よし……………奴の飛竜が岩谷の群山に差し掛かった……………。これな

ら……………!」

リヨウガ「やれ、ベルクーリ!」

確かに、ベクタの飛竜は、いくつもの岩柱が並び立つところへと至ったところが見え

た。

ベルクーリさんが時穿剣を掲げると、武装完全支配術の術図が浮かぶ。

ベルクーリ「名も知らぬ飛竜よ、許せ……………時穿剣!裏斬!!」

裏斬……………?」

俺が首を傾げていると、ベクタの飛竜の翼が斬られる。

ケント「今のは……………?」

リヨウガ「アレは、時穿剣の記憶解放術、裏斬だ。」

ユージオ「裏……………斬……………?」

ベルクーリ「そうだ……………。空斬が未来を斬る剣に対し、裏斬は過去を斬る剣……………。これが時穿剣の記憶開放術だ。いくら天命を操れる皇帝だろうが、流石に時間までは巻き戻せんだろう。」

リヨウガ「よし、奴の飛竜は不時着したな。このまま奴を仕留めるぞ！着いてこい!!」
そのまま、ベルクーリさん、リヨウガさん、イーデイスは飛竜から飛び降りる。

見た感じ、風素を足の指で発動して滞空している感じだ。

恐らく、あの元老長チユデルキンが足の指の先に熱素を生成したのと同じ原理だろう。

俺とユージオは、そんな事を出来ないのです、飛竜に送ってもらう。

その間にも、3人はベクタに斬り掛かっていた。

イーデイス「でやアアア!!」

ベルクーリ「ハアアアア!!」

リヨウガ「ハアアア!!」

だが、3人の攻撃は当たらなかった。

ベクタは、3人の攻撃をあつという間に躲してしまったのだ。

ベルクーリ「アレを躲すかよ……………!!」

リヨウガ「イーデイス!」

イーデイス「分かったわ!」

リヨウガさんとイーデイスの二人は駆け出して、攻撃していく。

すると、ベルクーリさんは空斬を発動する。

ベルクーリ「取った!時穿剣、空斬!」

だが、驚くべき事が起こる。

それは、ベルクーリさんの斬撃が、受け止められて、消えてしまったのだ。

リヨウガ「あいつは、人の心意を喰らうのか!」

ケント「何だつて……………!!」

ユージオ「そんな……………!!」

ベクタ「心意……………?……………なるほど……………。「Mind」と「Will」のことか。

何匹か小物が追ってきているとは思ったが……………まあ、いい。少しは楽しめそうだ。」

ケント「ハアアア!!」

ユージオ「でやアアア!!」

イーデイス「ケント!? ユージオ!?!」

俺とユージオは、ベクタに斬り掛かる。

ベクタは、持っていた剣で、俺の雷鳴剣黄雷とユージオの星霧氷の剣を受け止める。

ベクタ「ほう。………かなり重い剣だな。」

ケント「お前には、アリスを渡さない! ユージオの為に!!」

ユージオ「お前に、アリスを渡さない!!」

ベクタ「………軽やかな風味しか感じないな。まあ、これは悪くない。」

ケント「何の話だ………!?!」

ベクタ「お前達の魂を、味わうとしよう。」

すると、星霧氷の剣に纏っていた凍気と雷鳴剣黄雷に纏っていた雷が消え、俺たちの

意識が失われる様な感覚がする。

ケント（俺は………何を………。）

ベクタ『………やってみるものだな………。これがスーパァアカウントの能力という

奴か。意外に使えるものだな。それでは………。』

男の声が聞こえてくるが、何にも考えられない。

すると。

イーデイス「ケント、ユージオ!!」

ベルクーリ「させるか!!」

リヨウガ「チツ!」

「っ!?!」

ベクタ「邪魔を……………」

女性の声が聞こえてきたと思つたら、俺と誰かが引つ張られる。

我に返ると、イーデイスが俺とユージオを引つ張つて、ベルクーリさんとリヨウガさんがベクタの剣を受け止めていた。

ベルクーリさんとリヨウガさんは、ベクタから一旦距離を取る。

ベルクーリ「お前ら、無事か!?!」

ユージオ「は、はい……………!何とか……………!」

ケント「今のは……………!?!」

リヨウガ「恐らく、奴はお前達の剣を介して、心意を吸い取り、意識をも奪つたんだ。」
イーデイス「何よそれ、反則じゃない!人の十八番を奪うなんて……………!」

確かに、かなり厄介な能力だ。

まともに剣を交える事が出来ない。

心意を吸い取られ、意識をも奪われる。

流石のリョウガさんも冷や汗を流す。

ベクタ「ふむ。こんな感じか。なら、こういう使い方も試してみるとしよう。」
ベクタは、俺たちに剣を向けてきた。

その剣先から、青黒い粘液染みた光がこちらに向かってくる。

ベルクーリ「っ……………まさか!?! 遠間からでも、心意を……………!」

リョウガ「お前ら! 避け……………!?!」

イーデイス「騎士長! リョウガ!!……………っ!?!」

ケント「また……………!?!」

ユージオ「グッ……………!?!」

俺は、再び意識を失う。

目を開けると、そこは虚無の世界だった。

ケント「ここは……………俺は一体……………?」

何も分からない。

何故、俺がここに居るのかも。

そして、俺が一体何なのかを……………。

すると。

??? 『ケント。』

ケント「!？」

誰かの声が聞こえてくる。

それは、誰かは分からないが、懐かしいと感じる声だった。

??? 『もう分かっているはずだ。2人が誰の為にその剣を振るうのか。』

その声は、俺が誰の為に剣を振るうのかを教えてくれた友の声。

??? 『憎しみじゃ、アイツらには勝てないよ、ユージオ、ケント。』

??? 『2人は、整合騎士が憎いからこそまで来たんじゃない。イーデイスとアリスを取

り戻したいから、2人を愛しているから、ここにいるんだろ?』

その声は、俺とユージオに、憎しみだけでは勝てない事を諭した二人の友の声。

そして。

??? 『……………ケント、これからよろしくね。』

その愛する人の声が聞こえた時、俺の意識は完全に目覚めた。

そうだ。

俺が何の為に剣を振るうのか。

それは、イーデイスの為だ!

俺は、イーデイスの為に剣を振るう!

だから、こんな場所にいる場合じゃない!

ケント「俺は！俺の、想いを貫く!!」

その声と共に、雷鳴剣黄雷を振るい、虚無の世界を斬る。

世界は斬り裂かれ、光が見えてくる。

その光に向かって駆け出す。

再び目を開けると、荒野に戻ってきていて、ユージオもまた目を覚ましていた。

ベクタは、ベルクーリさんに止めを刺そうとしていた。

俺とユージオはすぐに駆け出し、ベクタの剣を受け止める。

ベクタ「何……………!?!」

ケント「これ以上、お前の好きにはさせない！」

ユージオ「アリス達は、僕たちが守る!!」

俺とユージオが動ける事に動揺したベクタ。

俺たちはすぐに記憶解放術を使い、ベクタを拘束する。

だが。

ベクタ「驚いたな。」

ユージオ「!?!」

ケント「やはりか……………」

ベクタは、上半身を覆う氷と鎖を破壊する。

下半身は、未だに囚われている。

ケント（やはり、そう上手くは行かないか。）

ベクタ「これは………！お前達の魂が、味わったことの無い新感覚！良いぞ！もつと
楽しませろ!!」

ベクタは、そう言つて、俺たちの意識を再び奪おうとする。

だが、俺たちの意識は、消えていない。

ベクタ「何故、作り物であるお前達が……。」

ユージオ「違う！僕たちは！この世界で………今、こうして生きている!!」

ケント「例え、この世界や俺たちが作られた存在であつても、俺たちは生きてる!!この心と魂は、誰のものでもない!!」

ユージオ「お前に、アリスは渡さない!」

ケント「俺は、俺の想いを貫いて、この世界を守ってみせる!!」

俺とユージオは、そう宣言する。

すると、俺の雷鳴の鎧が変化しだす。

先ほどもでは、三首の番犬、針を纏う鼠、ランプの魔神の意匠が入っていたが、その鎧の形状が変わっていく。

その三つの意匠が消え、肩に鎧、右腰にマントが付いたシンプルなものになる。

胸には、何かの手を思わせるような形状の物がつき、その鎧には、星が意匠されている。

更に、雷鳴剣黄雷の柄の部分の形状も変わる。

黄色の部分が紺色になり、月と雷を思わせるような意匠になる。

ケント「ハアッ！」

ユージオ「ケント……………!？」

ベクタ「これは……………!？」

ケント「お前は、俺とユージオ、そして、この月光雷鳴剣黄雷で倒してみせる!!」

月光雷鳴剣黄雷。

それが、変化した雷鳴剣黄雷の名前だった。

カルム side

シノンとチェイスが、ケント達を追いかける中、俺達は、遺跡に入り、防衛戦を行う事に。

すると、アメリカ人プレイヤーの雄叫びが聞こえてくる。

カルム「来たか……………」

アメリカ人プレイヤーは、こちらに押し寄せつつあった。

アスナとミトは、シオリ達と話していた。

すると、隣にユーリがやって来る。

ユーリ「カルム。」

カルム「ユーリ？」

ユーリ「……………絶対に守るぞ。」

カルム「……………ああ。」

いざとなつたら、単身で斬り伏せてみせる。

すると、ミトとアスナと共に、カーディナルもやって来る。

カルム「カーディナル、指揮を頼む。」

カーディナル「ああ。お主らには、辛い役割をさせてしまうからの。」

カルム「分かっている。」

アスナ「私たちに任せて。」

ミト「絶対に、誰一人として通さないから。」

カーディナルは、俺たちの決意の言葉を聞いて、後ろに下がる。

俺は、火炎剣烈火と刃王剣十聖刃を抜刀する。

もしかしたら、これが最大最期の大規模戦闘になるかもしれない。

気を引き締めないと。

だが、心の隅で、若干の胸騒ぎがしているのも事実だった。

カルム（ミトとアスナに奈落の底に落とされたあの暗黒騎士。俺たちの事を知っていた。一体、誰なんだ………？）

俺はそう考えていたが、すぐに現実問題へと思考を変える。

それを考えるのは、こいつら全員を倒してからで良い。

レンリが合図をして、俺たちは駆け出していく。

俺は、火炎剣烈火と刃王剣十聖刃の異種二刀流で敵を倒していく。

ミトとアスナも、アメリカ人プレイヤーを倒していく。

無論、俺たちに攻撃が集中していくわけだが。

何とか躲していく。

P o H s i d e

俺は、再びアンダーワールドに降り立ち、アイツらを高みの見物で見ている。

P o H 「くくつ、相変わらず、キレると容赦ねえな、あいつら。殺す殺す。」

まさか、G G Oで見た時には、もう会えないかと思つたが、会えるとはな。

お前らが居るって事は、あの黒の剣士もいる筈だろう？

P o H 「さあ、I t ☒ s s h o w t i m e .」

カルム s i d e

俺は、戦意喪失していたであろうプレイヤーを斬り伏せる。

だが、俺も、ミトも、アスナも、ユーリも限界だった。

何せ、相手は幾らでも湧いてくるのに対して、こっちは徐々にではあるが、損耗していく。

カルム「ミト、アスナ……………大丈夫か？」

ミト「何とか……………」

アスナ「うん……………」

ユーリ「第二波来るぞ。」

そう、ユーリの言う通りだ。

まだ、敵はたくさん居るのだ。

だが、挫けてはいけない。

アスナ「まだ、よ……………。この身体が倒れるのは、心が折れた時だけ……………」

ミト「私には、キリトたちが守ろうとしたこの世界を……………みんなが守ろうとしているこの世界を守りたいという気持ちがある……………」

カルム「だから……………俺たちの心が折れない限り、俺たちは負けない!!」

俺たちは改めて決意する。

すると、ユーリは。

ユーリ「……………ふっ。」

カルム「ユーリ?」

ユーリ「いや、お前らしいな、と。」

カルム「そうか?」

そんな軽口を叩いている間も、アメリカ人プレイヤーの第二陣は迫っていた。
すると。

カルム「青い……………光……………?」

ミト「まさか……………!?!」

アスナ「敵の増援……………!?!」

嘘だろ、勘弁してくれ。

ただでさえ瀬戸際だってのに。

心は絶望感が強まった。

だが、現実は違った。

一本のラインが、人の姿へと変わる。

すると、その人影は、高速回転する。

その竜巻は、アメリカ人プレイヤーを薙ぎ払う。

アレは、カタナ広範囲重攻撃ソードスキル、《旋車》。

その人物は、ゆっくりと体を起こし、右肩に刀を担ぐ。

その人物は、悪趣味なバンドナを着けていた。

クライン「おう、待たせたな、アスナ、ミト、カルム。」

アスナ「クラインさん……………？」

ミト「何で……………!?!」

カルム「嘘だろ……………!?!」

クラインがそう言う中、鮮やかなブルーに輝くようにコードラインが幾千も降りてくる。

それは、まるで天使の音がするかの様な音だった。

第72話 希望の光明と激闘の果て

カルム side

クラインが来た事を皮切りに、大量の青い光が降り注いでいく。

アメリカ人プレイヤーの1人が、俺たちに迫ってくるが、エギルが斬り捨てる。

アスナ「エギルさん!!」

エギル「よお。待たせたな、お前ら。」

さらに、近くにリズベット、ラット、シリカ、ヒロミが降り立つ。

ミト「リズ！シリカ！」

カルム「ラット！ヒロミ！」

アスナ「来て……………くれたのね……………」

リズベット「来るわよ、勿論！」

シリカ「当ったり前じゃないですか！」

ラット「……………つたく。こんな傷だらけになるまで無理をして……………。頑張りすぎ

だ、テメーら。」

ヒロミ「後は任せて下さい。皆、来てくれましたよ！」

カルム「皆………?」

周囲を見渡すと、そこには、幾つかの見知った顔が見えた。

レイモンド「フィリップは、アンダーワールド人から、詠唱の確認をしてくれ!」
フィリップ「分かった。すぐに戻る。」

それは、かつてアインクラッドで、探偵事務所を開いていた、あのコンビ。

ノーチラス「行こう、ユナ!」

ユナ「うん!ノー君も!!」

それは、色んな世界で名を馳せる歌姫とその相棒。

レイン「フィリア、行こう!」

フィリア「レインも気をつけてよ!」

それは、俺が出会った二人組。

アリシャ「あの赤いのが敵だ!」

ユージーン「前衛、突撃!押し返せ!!」

サクヤ「後衛はアンダーワールド人部隊と合流して、呪文を確認!」

それは、ALLOにて、ケットシー、サラマンダー、シルフの代表格のプレイヤー達。

ディアベル「俺たちも負けてられない!SAO生還者の実力を見せるぞ!!」

ケイタ「月夜の黒猫団!行くぞ!!」

サチ「うん！」

『おうー！』

それは、アインクラッドで色んな縁が出来たプレイヤー達。

アラン「クレハ！俺たちも行くぞ！」

クレハ「ええ！やってやるわよ！！」

ジョー「バザルト・ジョー様の实力を見せてやるぜ！！」

闇風「この世界を守ってみせよう。」

ダイイン「やってやるぜ！！」

銃士X「行きましょう。」

それは、シノンのホームグラウンドのGGOのプレイヤー達。

ユウキ「皆！アスナやミト、カルムが頑張ってたんだ！僕達も負けてられないよ！！」

『おう！！』

それは、最強ギルド、スリーピング・ナイツの面々達。

何と、俺たちが紡いできた縁が、アンダーワールドを助けに来てくれたのだ。

クライイン「てめえらには個人的な恨みはねえが、ダチを散々痛めつけてくれた借りは

返すぜ。倍返し、いや、三倍返しに……いいや、千倍返しにしてお返してやるからよお

！！この野郎どもオオ！！」

クラインは、そんな台詞を言いながらクラインは突撃していく。

だが、この姿は、まさにALLOや、それぞれのゲームのアカウントそのもの。

まさか……………!

カルム「お前ら、コンバートしたのか!？」

ラット「それは、半分正解で半分外れだな。」

ヒロミ「厳密には、安田博士が作ったアカウントに、僕たちのアカウントデータをコピーして送り出したんです!」

カルム「博士……………」

あの人、本当に何でもありだな。

だが、気になる事がある。

それを聞こうとすると、ミトとアスナが声をかける。

アスナ「……………ねえリズ、シリカちゃん、ラット君、ヒロミ君。」

ミト「皆をアンダーワールドに連れてきてくれたのは、誰なの……………」

リズベット「ちよつとアスナ、ミト!」

ラット「そんなの決まってるだろ?」

シリカ「ユイちゃんとカナちゃんですよ!」

ヒロミ「2人がアンダーワールドの事と、ここで生きてる人たちのことを、一生懸命

説明してくれました！」

カナとユイちゃんか!?

2人が動いてくれたのか。

という事は、安田博士にそのアカウントを作るのを頼んだのは、パラドつて事か。アスナ「……………ありがとう、ユイちゃん、カナちゃん。」

ミト「本当に、ありがとう。」

すると、ユーリが来て話しかける。

ユーリ「お前ら、あの戦士達は一体…………!?!」

ヒロミ「誰ですか…………?」

ユーリ「俺はユーリだ。…………なるほどな。リアルワールドの戦士達か。」

ラット「そんな所だな。」

ユーリ「……………最高だな!!」

ヒロミ「よろしくお願いします、ユーリさん!」

ユーリ「ああ、頼りにしてるぞ。」

二つの世界の人たちが出会い、言葉を交わし、関係を築き始めた。

これが、俺が追い求めていた光景だ。

ミトとアスナは、リズベットとラットに尋ねていた。

アスナ「リズ、コンバートしてくれた人たちの数は？」

リズベツト「あ………うん。三千を少し超えるくらい。」

ラツト「すまん。全員が承諾してくれなかった。」

ミト「大丈夫よ。」

カルム「ああ。敵が再コンバートしたり、激痛を受けさせない為にも、消耗戦は避けたいな。」

アスナ「なら、あまり前線を広げないで、ヒールを厚くしよう。リズとシリカちゃん
は、二百人くらい後方に下げて支援部隊を作つて。」

ミト「皆さんも、不本意でしょうけど、修道士隊と合流して、治療術を使つて。リア
ルワールドの戦士達は、神聖術に不慣れだから、術式を教えてやつて！」

ユーリ「分かつた！」

レンリ「聞いている通りだ！援軍の戦士達を支援するぞ！」

レンリが叫ぶと、衛士達も力強い声を返す。

ラツト「それで、お前らはどうすんだ？」

アスナ「もちろん。」

カルム「前線に出て斬り込む！」

ミト「そうね！」

ヒロミ「分かりました。」

今の俺たちは、負ける気がしないな！

俺たちは、斬り返していく。

安田 side

安田「間に合った……かな……?」

流石に疲れたな。

突貫作業でアカウントを作り、彼らが導いてくれたアカウントデータをそれにコピー

して、アンダーワールドにコンバートしたからな。

凜子「間に合ったわ。必ず。」

比嘉「間に合ったツスよ。」

安田「だと良いな……。」

後は任せたぜ、プレイヤー達。

さてと、これで、どうにかアメリカ人プレイヤーを抑えられるかな。

俺は、ふと、思った事を口にする。

安田「アリスはもう、ただのUAVコントロールAIなんかじゃない。本物の異世界に生まれた新たな人類だ。お前らは、既に分かっていたんだな、カルム、キリト。」

そう呟く。

俺に出来ることは、もうここまでだ。

すると、比嘉が何か気になる事があったようだ。

比嘉「ん……………」

安田「どうした？」

比嘉「安田、凜子先輩、これ、見て下さいッス。」

凜子「この変動は何なの……………」

比嘉「桐ヶ谷君の喪失した筈の意識が一瞬だけ活性を示した……………って事になるッス。」

安田「どういう事だ……………っていうか、この時間って、どっちもSTLでダイブした頃じゃないか。最初のピークは明日奈さんと深澄さん、次のピークはシノン、チェイス、リーファ、ハヤトがSTLでダイブした頃だ。」

俺がそう指摘すると、比嘉は何かを呟きながら周囲を歩き回る。

凜子さんは、比嘉の名前を呼ぶ。

凜子「ねえ。……………ねえ、比嘉君。」

比嘉「なんツスか？」

凜子「主体と客体って、そんな簡単に切り分けられる物なの？」

比嘉「……………は？」

安田「どういう意味ですか？」

凜子「主体と客体は、あくまで物事の関係を表す哲学的な概念であって、フラクトライトとして可視化された私たち一人ひとりの意識の構造に、そのまま当てはめる事は出来ないと思うの。」

安田「確かに。人間は社会的動物で、唯一の個人として存在してる訳じゃない。自分の中の他人、他人の中の自分。それらは、ある程度、ネットワーク的に接続してる筈……………」

俺は、そこまで言うのと、凜子さんが言おうとした真意を悟る。

比嘉「安田……………」

安田「そうか……………」そうだよ！セルフイメージのバックアップだ！」

比嘉「そういう事ツスカ！」

安田「こちら側のSTLに接続しているのは、合計七人。カルム、明日奈さん、深澄さん、リーファ、ハヤト、シノン、チエイス。あの七人なら、桐ヶ谷君の喪失したセルフイメージを修復出来る！」

比嘉「……………」あの、菊さん。六本木からダイブしたあの4人は、桐ヶ谷君の関係者……………なんスよね？」

菊岡「……………」ああ。シノン君は、半年前の死銃事件をキリト君、カルム君、チエイス

君と一緒に解決した仲で、リーファ君はキリト君の妹で、ハヤト君とチェイス君は、S
AOからの仲だよ。」

そう、これならいける筈。

だが、とある現実が重くのしかかる。

安田「だがなあ、問題が一つある。」

凜子「問題って……………?」

比嘉「その操作が出来るのは、メインコントロールルームだけツス……………」

凜子「あ……………」

それがきつかけで、凜子さんも沈黙する。

すると、菊岡さんがため息を漏らし、比嘉の肩に手を置く。

菊岡「そうしよげるな、2人とも。キリト君の治療に光明が見えただけでも良しとしよう。実際のオペレーションは、状況が終了し、オーシャン・タートルから連中を追い出した後でも……………」

安田「残念ながら、それでは遅いです。」

菊岡「何……………?」

比嘉「安田の言う通りツスよ。《あさひ》からコマンド部隊が突入してきて、メインシャフト内で大規模戦闘になれば、サブ電源も落ちるでしょう。そうなれば、彼はアン

ダーワールドから意識不明のままログアウトする。今の状態では、初期ステージを通過出来ず、二度とSTLに接続出来ません。治療は何としても、彼らがアンダーワールドにダイブしてる間に行わないといけないíns。」

そう、このまま行くと、キリトは意識不明のままログアウトしてしまう。

何としてもそれは避けられないといけない。

すると、比嘉が決意のこもった表情を浮かべる。

比嘉「……………僕、行くツスよ、菊さん。」

菊岡「行くとは……………どこにだ？」

安田「行くのは、点検コネクタに、だろ？」

比嘉「お見通しツスカ。」

安田「どれくらい付き合いだと思ってる？」

それを聞いた菊岡さんは、一瞬驚くが、すぐに反駁する。

菊岡「確かに、点検コネクタなら、キリト君のSTLを操作出来るだろう。だが、それは隔壁の向こう側だ。隔壁を開いたら、襲撃者達に気づかれるぞ。」

比嘉「そこは、囮作戦で行きましょう。」

菊岡「囮……………？」

安田「人間の階段に、イチエモンを突入させるんです。」

菊岡「なるほどな……………」

すると、今度は凜子さんが反駁する。

凜子「ちよつと待つて！あれはまだ階段をゆつくり上り下りする事しか出来ないわよ！敵の注意を引いて、すぐに駆け戻ってくるなんて真似は不可能よ！」

比嘉「……………イチエモンには悪いですけど、頑張つて貰うしかないツス。」

安田「それに、あんな見た目だ。敵もいきなり撃つてはこないだろ。」

凜子「そうね……………」

まあ、実際に言うと、残念で仕方ないんだけど、キリトの回復の為だ。

後でしっかりと供養してやるからな。

比嘉「少なくとも、無視は出来ない筈ツス。敵がイチエモンに対応している間に、僕がケールブルダクト下部に侵入、点検コネクタから桐ヶ谷君のSTLを操作します。」

菊岡「……………いつその事こと、ニエモンも投入出来ないか？」

安田「あれは、バランサーを搭載していない上に、人工フラクトライトを搭載する事を前提とした物だ。とてもじゃないが、無理だ。」

菊岡「そうか。」

菊岡さんは黙つたが、凜子さんが尋ねてきた。

凜子「でも、比嘉君。隔壁のロック解除はそれで誤魔化せたとしても、君が発見され

る危険が完全に消滅する訳じゃないわ。やっぱり、ケーブルダクトには護衛してくれる人を連れて行った方が良いんじゃないの？」

比嘉「……………いえ、今となつては、自衛官スタッフは貴重すぎる戦力ツス。それに、あんな狭いダクトを素早く移動出来るのは、ガリチビの僕くらいツスよ。さつと行って、さつと帰つてきますから。」

安田「……………なら、俺も行こう。」

その言葉に、全員が驚いた視線を向けてくる。

菊岡「……………大丈夫なのかい？」

安田「俺も、比嘉程ではないけど痩せてるし、防弾チョッキを着ていけば大丈夫だと思ふ。」

比嘉「……………良いんすか？」

安田「俺たちラーズは、キリトとカルムの2人に、大きすぎる借りがある。それを少しでも返したい。」

そう、大きすぎる借りがあるんだ。

記憶をブロックして、アンダーワールドにログインさせて、《A. L. I. C. E.》が4人も覚醒したのは、間違いないく、あの2人が介在している。

それなのに、キリトのフラクトライトを傷つけてしまった。

どんなリスクを冒しても、キリトを回復させてみせる。
そうでないと、パラドに顔向けできない。

そう決意する。

結果、俺と比嘉が行く事になり、準備を始める。

ケント side

ケント「お前は、俺とユージオ、そして、この月光雷鳴剣黄雷で倒してみせる!!」

俺は、月光雷鳴剣黄雷をベクタに向けて、そう宣言する。

ベクタは、少し後ずさっていた。

すると、突然笑い出す。

ベクタ「フハハハハ!! そうか! そういう事か! お前達もまた、《A. L. I. C.

E.》なのだな! 何という僥倖だ!」

「……………」

突然、そんな事を言い出す。

だが、そんな事は気にならない。

すると。

イーデイス「ごちゃごちゃうるさい! アリスを返せ!!」

ベクタ「!?」

イーデイスがベクタに突っ込んでいき、攻撃する。

ベクタも、急に現れたイーデイスには反応し切れず、マントが斬られる。

ベクタは、イーデイスの意識を奪おうとするが、イーデイスの意識は奪われていない。

ベクタ「なるほど、貴様も《A. L. I. C. E.》か。良いぞ………！一度に三人も………！！」

イーデイス「アンタなんかアリスは渡さないわよ！！」

ベルクーリ「ハアッ！」

リヨウガ「でやあ！」

すると、ベルクーリさんとリヨウガさんも、ベクタに攻撃を仕掛ける。

ベクタ「チッ。時間をかけ過ぎたか。」

ユージオ「ベルクーリさん！リヨウガさん！」

ケント「良かった………！！」

どうやら、意識を奪うのは、時間制限があるみたいだな。

俺たちは、すぐにベルクーリさんとリヨウガさんの元に向かう。

ユージオ「どうします？」

ケント「奴は、そう簡単には倒せない。」

イーデイス「それでも、アリスを絶対に助けるわ。」

リヨウガ「ベルクーリ。アレを使おう。アレなら、奴でも倒せる筈だ。」
ベルクーリ「そうだな。」

ケント「アレ……………？裏斬の事ですか？」

ベルクーリ「そうだ。」

やっぱり、裏斬を使うのか。

確かに、過去を斬る剣なら、ベクタでも倒せる筈だ。

ベルクーリ「……………よし、ユージオ、ケント、イーデイス、リヨウガ。俺に命を預けてくれるか？」

ユージオ「はい！」

ケント「はい！」

イーデイス「この場にいる全員が、同じ考えよ、騎士長。」

リヨウガ「問題ない。」

ベルクーリ「……………よし！お前らの命、確かに預かった……………！全員、耳を貸せ……………。時間が惜しいから、一回しか話さんぞ。」

俺たちは、ベルクーリさんから、起死回生の一手を撃つための作戦を聞いた。

そんな中、ベクタは動いていない。

ベルクーリ「……………という訳だ。リヨウガは、アイツの能力に警戒しろ。意識がなく

なったら、終わりだと思え。」

リヨウガ「分かった。」

ベルクーリ「ユージオ、ケント、イーデイスの三人は、ベクタの能力が効かない。10分。10分で良いから、時間を稼いでくれ。出来るか？」

イーデイス「上等よ。」

ケント「大丈夫です。」

ユージオ「やってみせます！」

ベルクーリ「上出来だ！」

作戦会議を終え、ベクタと向き合う。

ベクタ「もういいのか？時間はくれてやったが、私を楽しませてくれる策は出来たのかな？」

リヨウガ「貴様を楽しませる気はない。剣士たるもの、剣で語るのみだ。」

ベルクーリ「そういうこった。」

ベクタ「…………ふっ。剣など、単なる武器でしかあるまい。」

俺は、月光雷鳴剣黄雷を構える。

頼む、力を貸してくれ。

アリスを助ける為！！

すると、月光雷鳴劍黄雷から、放電が起こる。

ベクタ「さあ、君たち三人の魂を味合わせてくれ！」

ケント「劍士ケント。」

ユージオ「劍士ユージオ。」

イーデイス「騎士イーデイス。」

「「参る!!」」

俺たちはそう叫び、ベクタへと向かっていく。

ケント「ハアアアア!!」

ユージオ「でヤアアア!!」

イーデイス「ハアアアア!!」

ベクタ「そんな物か。」

俺たちの攻撃を、ベクタはあっさり弾いてしまう。

やはり、一筋縄ではないかないか。

ベクタ「さあ………!もつと味合わせてくれ!!」

ベクタはそう言つて、俺たちに向かって斬りかかる。

俺たちはすぐに躲すが、ベクタの劍が当たった地面が割れた。

驚きつつも、すぐにベクタに攻撃する。

俺は、身軽に動き、ベクタを翻弄しつつ攻撃していく。

俺たち三人の連携で、ベクタと互角に渡り合う。

俺達が鏝迫り合いになると、ベクタは笑い出す。

ベクタ「ああ……………！良いぞ!!」

ケント「何がだ……………!?!」

ベクタ「お前達の苦痛が、魂の悲鳴が悲鳴をあげる事で、生きている証明になる！そして、それを壊して、その魂を味わう!!それこそが、私の望みだ……………!!!」

ユージオ「狂ってる……………!」

イーデイス「ええ……………!!」

ベクタ「狂ってる？それはお前達の価値観だ。これが私の生き甲斐……………人の命を……………いや、魂そのものを破壊し、触れるために私は生きているのだ!」

ベクタがそう言うと、ベクタの剣の圧力が強まる。

だがな……………!!

ケント「何が生き甲斐だ……………!?!」

ベクタ「うん?」

ユージオ「誰かを犠牲にしてまで、自分の欲望を満たそうとするなんて……………!そんなの、絶対に認めない!!」

イーデイス「アンタみたいな最低な奴に、アリスを……この世界に生きる人たちを、傷つけさせない!!」

俺たちはそう叫び、高速で剣裁を繰り広げていく。

リヨウガさんは、動けなかった。

リヨウガ「こんな戦闘をしていたら、アイツらの体が保たないぞ………!」

リヨウガさんは、そう呟いているような気がするが、そんな事を気にしてる余裕はない。

ケント（クツ………! 腕が………! 体が悲鳴を上げてるみたい………! このままじゃ、危ないかもな………!）

そう、あんなに高速で剣裁をしているのだ。

体にかかる負担はかなり大きく、時間が長く感じる。

ケント「ハアアアアアア!!」

ユージオ「ウオオオオオオオ!!」

イーデイス「ハアアアアアア!!」

ベクタ「チツ………!」

流石のベクタも、俺たちの鬼気迫る剣裁には、対応が遅れつつある。

すると。

ベクタ「終わりにしよう。」

「！！！！！！」

ベクタは、そう呟き、俺たちは身構える。

すると、ベクタは剣を地面に思い切り叩きつけて、衝撃波を放つ。

俺たちは躲すが、その衝撃波の先には、倒れているアリスが。

ユージオ「アリス!?!」

ベクタ「さて、どう動く?」

まさか、最初からアリスを巻き込む気で居たのか!?

俺たちはアリスの方へ行こうとするが。

リョウガ「心配ない!アリスは無事だ!!」

ケント「リョウガさん!!」

そう、アリスは、いつの間にか、リョウガさんが抱えて、衝撃波から外れていた。

そうか、時国剣界時の力か!

確かに、時国剣界時なら、移動することも可能だ。

目論見が外れたベクタは、舌打ちする。

すると。

ベルクーリ「ユージオ!ケント!イーデイス!」

「「っー」」

ベクタ「何かを狙ってたのか……!?」

ベクタは、すぐにベルクーリさんの元へと向かおうとする。

だが。

リヨウガ「させるか!! デイスチャージ!!」

ベクタ「っ!?」

リヨウガさんは、予め熱素と水素を生成していて、それを両方ともバーストさせる事で、水煙が発生して、視界を奪う。

ユージオ「ケント!」

ケント「ああ!」

「リリース・リコレクション!!」

俺とユージオの記憶解放術が発動して、ベクタの動きを少しでも止める。

ベルクーリ「助かったぜ。お前達が作ったこの一瞬、決して無駄にはしねえ!!」

ベクタ「させるか……!」

ベルクーリさんは、既に記憶解放術の準備を終えていた。

ベクタは、ベルクーリさんに向かおうとする。

だが。

ケント「ハアアアアアア!!」

ユージオ「ウオオオオオオオ!!」

イーデイス「ハアアアアアア!!」

リヨウガ「でヤアアアアア!!」

俺たちは、ベクタへと向かっていき、それぞれの武器をベクタに突き刺す。

そして。

ベルクーリ「ウオオオオオオ!!」

ベルクーリさんが虚空を斬る。

ベクタは、何が起こったのか分からない表情を浮かべていたが、ベクタの体に異変が

起こる。

ベクタ「なっ……………!?!」

ベルクーリ「……………時穿剣・裏斬は、過去を斬る剣。斬ってやったぜ、アンタの過

去を……………!」

ベクタ「ぬうおおおおおお!!」

ベクタは、叫びながら消えていった。

ベルクーリ「……………これが、この世界に生きる人間の力だ……………!」

リヨウガ「勝ったな……………」

ケント「はい……………」。
俺は、意識が無くなった。

第73話 悪意の襲撃

ケント side

俺は、ベクタを倒したが、意識を失ってしまふ。

すると、誰かの声が聞こえてくる。

??? 「……………ント！ケント!!」

ケント「はっ！」

声の主は、イーディスだった。

イーディス「ケント！大丈夫!？」

ケント「あ、ああ……………」

リョウガ「目が覚めたか。」

ケント「ユージオとアリスは……………?」

ベルクーリ「あの2人なら、あつちにいるぜ。」

ベルクーリの指差した先には、倒れているユージオに呼びかけるアリスの姿が。

剣を見ると、月光雷鳴剣黄雷の状態を保っていて、鎧も、月光雷鳴剣黄雷が変化した

時が変わった物になっている。

すると。

ユージオ「うっ……うっ……。」

アリス「ユージオ！目が覚めたのね！」

そんな声が聞こえてきて、俺たちはアリスとユージオの元へと向かう。

アリスは、ユージオを思いっきり抱きしめていたが、ユージオは苦しそうだった。

ユージオ「……アリ……ス……！く、苦しいよ……！」

ケント「おい！アリス落ち着け!!」

イーディス「アリス！ユージオが死んじゃうから!!」

アリス「ご、ごめんなさい……！」

俺とイーディスが慌てて言うと、アリスはユージオを離した。

まあ、アリスは整合騎士になった影響で、腕力も増したからな。

すると、解放されたユージオが、慌てて口を開く。

ユージオ「……そうだ、ベクタは!?!」

ベルクーリ「おいおい、忘れたのか？」

リヨウガ「俺たちでベクタを倒した。」

ケント「そうだぞ。」

ユージオ「そう……だった……。」

ユージオが体を起こす中、俺たちは苦笑しながら答える。

そう、ベクタは、俺たちが必死に抑える中、ベルクーリさんの裏斬をくらい、この世界から消えた。

ユージオ「ベクタを倒した……。なら、ここに長居するべきじゃないですよ？本隊の方も気がかりです。すぐに戻……。っ!？」

アリス「ユージオ?!」

ケント「俺たちもすぐに……。クッ!？」

イーデイス「ケント!？」

俺たちは、本隊に戻ろうとするが、体に力が上手く入らない。

全身に倦怠感が襲う。

それを見たベルクーリさんとリヨウガさんは。

ベルクーリ「無理をするな。お前達は、先ほどまであの様な激しい戦闘をしていたんだ。そうなるのも無理はない。」

ケント「ですが……!？」

ユージオ「本隊には、キリトが……!？」

リヨウガ「言う事を聞け。今のお前達では、まともな戦闘をする事は出来ない。それに、お前達も狙われているんだ。今は休め。」

イーデイス「騎士長とリョウガの言う通りよ。それに、必死に頑張ったんだから、休んだっていいわよ。」

アリス「そうですね、イーデイスの言う通りです。」

ケント「分かった。」

ユージオ「うん。」

俺とユージオは、休む事にする。

俺はイーデイスの、ユージオはアリスの体に自分の身を預ける。

まあ、確かに皆の言う通りだ。

無理をして、倒れるわけにはいかないからな。

ベルクーリ「すぐに移動したいが、ユージオとケントがこの様子ではな……………」

リョウガ「ひとまず、小休止を取って、本隊と合流しよう。もしかしたら、カーディ

ナル達がこつちに来て……………」

イーデイス「ん？何か、飛んでくるよ？」

リョウガ「何？」

イーデイスが何かに気付いたのか、そう言って、リョウガさんが反応する。

ベルクーリさんがそれを見ると。

ベルクーリ「あれは……………人、なのか？」

リョウガ「しかも、2人居ないか……………」

そう、よく見ると、人が2人居るのだ。

それも、飛竜よりも早く飛んでいる。

イーデイス「ねえ、ケント、今、私が思った事を口にして良い？」

ケント「いや、言わなくても分かるぞ。何か、アスナやミトみたいな格好や装備をしてる事だろ？」

その2人は、俺たちの上空で静止したと思っただけ、ゆつくりと降りてくる。

??「えつと…………。貴方達がユージオ、アリス、ケント、イーデイス、ベルクーリ、リョウガって人で良いのかしら？」

アリス「貴方達は、アスナやミトと同じく、リアルワールド人……………何ですか？」

チェイス「ああ。俺はチェイスで、こっちはシノン。シノンは今、太陽神ソルスの体を使って、つて言えば、伝わるか？」

ベルクーリ「おいおいおい……………。暗黒神、創造神、月光神ときて、今度は太陽神だと……………」

リョウガ「これは、地母神テラリアまで来てもおかしくないな……………」

シノンとチェイスは、カルム達の味方という事か？

シノンとチェイスがそう言うのと、ベルクーリさんとリョウガさんはげんなりとした表

情を浮かべる。

気持ちは痛い程分かるが、それを気にしている場合じゃない。

シノン「アスナ達から話を聞いて、貴方達に加勢しようとか向かったんだけど……。」

チエイス「すまない。加勢に間に合わなかった。」

ユージオ「……いや、来てくれて本当に良かったよ。」

ケント「下手をしたら、俺たちがやられてたからな。」

シノンとチエイスは、加勢が間に合わなかった事を謝ってくる。

俺とユージオは、そんな事はないと告げる。

ベクタとの戦いは、死闘と呼ぶに相応しい物だった。

俺が言った通り、下手をしたら、俺たちがやられてたかもしれないからな。

すると、アリスは2人に尋ねる。

アリス「それで……今、戦況はどうなっているんですか？アスナたちは……！」

シノン「アスナと人界軍がリアルワールドから来た赤い鎧の軍勢をなんとか防いでる。」

チエイス「だが、戦況はあまり良いとは言えないな。」

イーデイス「そう……。ありがとうね。私たちも北に戻ろう。」

アリス「小父様とリョウガ殿は、先に行って下さい。私とイーデイスは、ユージオと

ケントの回復を待つて……………」

チェイス「いや、それはダメだ、イーデイス、アリス。」

ユージオ「えっ……………」

ケント「何……………」

アリス「なあ……………」

イーデイス「えっ……………」

どうやら、加勢した方が良いな。

少し、無茶しないといけなさそうだな。

俺がそう思い、イーデイスとアリスがそう提案すると、チェイスの一言に俺たちは呆

然となる。

俺たちが呆然としてしていると、シノンが口を開く。

シノン「アリスさん、ユージオさん、ケントさん、イーデイスさん。貴方達は、この

まま南にある筈の、果ての祭壇に向かって。」

チェイス「祭壇にあるコンソール……………」いや、水晶板に触れれば、リアルワールドか

ら呼び掛けてくれる筈だ。それで……………」

イーデイス「どういう事よ？」

アリス「皇帝ベクタは倒れたのです！後は、赤鎧達を倒して、ダークテリトリーを抑

えれば……………!」

シノン「……………それが……………そうではないの。」

言い難い様に言うシノン。

どういう事だ?

皇帝ベクタは倒れたはずだろ?

俺たちが訝しんでいる中、チエイスが決心した顔で俺たちに言ってくる。

チエイス「……………リアルワールド人は、アンダーワールドで死んでも、本当の命を失うわけではない。」

「「「えっ!?!」」」

「……………。」

シノン「皇帝ベクタに宿っていた敵が、新たな姿に宿って……………この世界にまたやってくるかもしれないのよ……………」

ケント「ちよつと待ってくれ……………。カーディナルさんは、この世界でカルムとキリトが死んだら、ただでは済まないって……………」

チエイス「あの2人は、魂をそのまま、このアンダーワールドに来ているんだ。だが、ベクタは違う。」

ユージオ「そんな……………!?!」

あくまで倒したのはベクタとしての器のみ。

本体の魂は無事という話を聞いたアリスは、シノンに掴みかかる。

アリス「ここにいる皆が……命懸けで倒した敵が、死んでいないと!?ただ一時姿を消し、何事も無かったかの様に蘇ると……2人はそう言うのですか!?

「……………」

アリス「そんな……そんな、ふざけた話が許されるの……!?なら、ユージオ達は何の為に……何の為にその命を掛けたのですか!!一方の命しか懸かっていない立ち合いなど、まるで……まるでただの茶番ではないですか……………!!」

イーデイス「アリス……………」

アリスの悲痛な叫びには、俺たちも思うことがあり、目を伏せてしまう。

ベルクーリーさんとリョウガさんは、どう声をかけたら良いのか分からないようだ。

すると、チェイスが声をかける。

チェイス「……………なら、キリトやカルムが受けた傷は、苦しみは、偽物だと言うのか?」

アリス「えっ……………?」

シノン「あの2人も、リアルワールド人よ。この世界で死んでも、本物の命までは失わない。でも、2人が受けた傷は、本物なのよ。」

「「「「……………」」」」」

チエイヌ「俺たち全員が、あの2人を心配してるんだ。そして、言葉には出来ないが、2人がそこまでして魂を賭けたのかって、思ってるはずだ。」

シノン「でも、2人が戦ったのは、貴方達4人……………いや、この世界に生きる人たちが全員を想って、彼らは剣を振るつたんだと、私は思ってる。」

チエイヌ「だからこそ、だからこそだ。4人は果ての祭壇に行かないといけない。敵が再びやってくる前に、この僅かな時間を使って、向こう側に行かなければ……………」

「「「……………」」」」

2人の言葉に、言葉を失う。

確かに、カルムとキリトは、この世界に来たのは、別の目的があつた筈だ。

なのに、俺たちの……………この世界の為に戦つたのだ。

アドミニストレータと戦っている時のあの2人の姿は、シノンとチエイヌの言う通りだ。

それは、ミト、アスナ、そして、眼前にいるシノンとチエイヌも同じなのだろう。すると、ベルクーリさんが口を開く。

ベルクーリ「……………どうやら、来る時が来ちまったそうだな。」

アリス「小父様……………」

リヨウガ「そうだな。アイツらの話を聞いた時から、薄々予感してたがな。出来る事なら、そうなるのは欲しくなかったが……。そういう事だ。お前達は、果ての祭壇に向かえ。」

アリス「なっ……!!?小父様とリヨウガ殿まで……どうして……!!?」

ベルクーリ「聞け!アリス!!」

アリスの反論に対して、いつもの愛称である嬢ちゃんではなく、名前を呼んだベルクーリに、俺たちは息を呑む。

ベルクーリ「よく聞け。敵の狙いはお前達だ。お前達を捕らえるまで、この世界に何度も現れるだろう。お前達を見つけるまで、人界もダークテリトリーも見境なく殺してな。カルムも言ってただろう。」

アリス「それは……!!」

リヨウガ「それに、俺たちは、お前達がこの世界に居てはいけないと、思っていない。寧ろ、お前達の為だ。」

イーデイス「どういう事……?」

リヨウガ「カルムとキリトが、なぜ世界を敵に回してまで最高司祭を倒した?自分達とは違う世界なのに、ミトやアスナ達が来た?それは、お前達の為だ。」

ケント「リヨウガさん……。」

ベルクーリ「……………それに、一生の別れになる訳ではないだろう？ シノンの嬢ちゃんにチェイスの坊主。」

ベルクーリさんは、シノンとチェイスの2人にそう問いかける。

2人は、答える。

シノン「ええ。」

チェイス「この世界が、無事なのなら……………きつと。」

ベルクーリ「そういうこつた。」

アリス「小父様……………！」

イーデイス「分かったわ。」

ユージオ「はい。」

ケント「うん。」

リョウガ「この世界は、俺たちが絶対に守ってみせる。だから……………行つてこい。」

「……………はい！」

俺たちは、そう返して、飛竜へと乗る。

シノンとチェイスが、俺たちに話しかける。

シノン「果ての祭壇に辿り着ければ、後はリアルワールドの方から何をすべきか伝え

てくれると思う。」

チエイズ「どのぐらい時間が掛かるかは分からないが、そう遠くはない筈だ。」

ユージオ「ありがとう、シノン、チエイズ。」

ケント「それじゃあ、行こう、イーデイス、アリス。」

イーデイス「ええ。」

アリス「それでは、行つてきます。」

俺たちは、飛竜を飛ばす。

俺は、不安になつてイーデイスに話しかける。

ケント「イーデイス……大丈夫か？」

イーデイス「……大丈夫よ。今は、騎士長達やあの2人を信じましょう？」

ケント「ああ。」

イーデイスは、涙を浮かべつつも、そう答える。

イーデイスも、別れが寂しいのだろう。

俺たちは、果ての祭壇へと向かう。

チエイズ side

ベルクーリ「さてと……行つたか。」

リヨウガ「どうする、ベルクーリ？」

ケント達を見送っていた2人は、相談を始める。
すると、ベルクーリがシノンに尋ねる。

ベルクーリ「……………シノンの嬢ちゃんにチエイスの坊主。お前さんらの言う通り、ベクタが……………いや、ベクタの体を使っていた奴が、この世界にもう一度やつてくるとしたら……………俺たちに倒されたこの場所に降り立つ可能性が高いよな？」

シノン「その可能性が高いわ。」

チエイス「俺たちも、カラム達の所に降りたてる様に調整してもらったからな。……………尤も、テラリアの体とテラリアの従者の体を使ってる2人は、近くには居なかったが、可能性は高い。」

リヨウガ「サラツととんでもない事を言ったな？……………だが、アイツらの為にも、時間を稼ぐとするか。」

チエイス「その役割、俺とシノンに任せて欲しい。」

リヨウガ「何……………？」

俺の言葉に、2人は訝しげになる。

シノンが、理由を説明する。

シノン「2人は、さっきまでの戦いで限界が近い筈。それに、私たちはついさつき来たばっかりだし、飛べるわ。いざとなったら、飛行戦で対応できる。」

リョウガ「……………確かに、時国剣界時と時穿剣の天命も限界だ。天命回復用の砥石は、本隊にあるしな。」

チエイス「それに、出来れば、カルム達の援軍に向かってほしい。」
ベルクーリ「……………分かった。この場は任せるぜ、お二人さん。」

チエイス「ああ。」

そう、これは、俺たちがやるべきだ。

ソルスとその従者というアカウントを使っている俺たちが。

2人は、飛竜に乗って去って行く。

俺は、シノンに話しかける。

チエイス「シノン？」

シノン「何？」

チエイス「頼むぞ。」

シノン「ええ。」

俺たちは、そう話して、周囲を警戒する。

カルムside

クライン「どうやら、大勢は決した……………ってヤツかな、こりや。」

アスナ「そうね。」

カルム「油断すんな。アメリカ人プレイヤーの数は、日本からのプレイヤーと同程度にまで下がっただけだ。」

レイモンド「まあ、奴らは愚直な突撃をしてるだけだ。大丈夫だろ？」

ミト「まあ、そうね。」

そう話す。

俺は、クラインとレイモンドに礼を言う。

カルム「2人とも、助けに来てくれてありがとうだな。」

クライン「おいおい、よせやい。お前とキリトには、返しきれない恩があるからな。」

レイモンド「……………それに、キリトはここに居るんだろ？」

アスナ「ええ。」

ミト「戦闘が終わったら、会ってあげたら？もしかしたら、クラインの下らないギャグや、レイモンドのハーフボイルドぶりを見たら、突っ込みたくて目を覚ますかもね。」

クライン「あーあ、ひでえな。」

レイモンド「だからあ！ハーフじゃねえよ！ハードボイルドだああ!!」

クラインとレイモンドはそう言うが、2人の目には、深い気遣いが浮かんでいた。

だが、もしかしたら、行けるのかもしれない。

元S A O攻略組にA L O組、そして、アンダーワールドで出来た仲間に関まれば、キ

リトも目を覚ます筈だ。

だが、この戦いは前哨戦だ。

スーパリアアカウントのベクタであっても、こちらの選抜チームなら、負ける筈がない。

カーディナルは、ユーリやレンリに支持を飛ばしている。

すると、アスナが呟く。

アスナ「……………大丈夫。何もかもうまく行くわ。きっと。」

ミト「そうね。」

クライン「おうさ。」

レイモンド「さて、俺たちももうひと頑張りしようぜ！」

カルム「ああ！……………っ!？」

何だ、この嫌な気配は……………!？」

俺は、周囲を見渡すと、遺跡の参道に並ぶ像の上に、誰かが居るのが見える。

すると、悪寒が的中した。

カルム「アレは……………!？」

ミト「どうしたの？」

アスナ「ねえ、クラインさん。あそこに立ってる人、何だか見覚えがある気がしない

……………?」

クライン「へ……………？ありや、あんなところで見物してやがる。」

レイモンド「誰だ？あんな所でサボっ……………てる……………っ!？」

どうやら、クラインとレイモンドも、誰かが分かったようだ。

すると、とあるセリフが記憶に蘇る。

暗黒騎士『お前、紫紺の剣士か！という事は、黒の剣士も居るな!』

そう、あの暗黒騎士だ。

という事は、まさか……………!？」

クライン「そんなこと……………ありえねえよ……………。そんな……………!？俺は……………亡霊を見ているのか……………?」

レイモンド「いや、亡霊なんかじゃねえ。アイツは、S A O最悪のプレイヤーキラーにして、ラフコフの創始者……………!!」

アスナ「まさか……………!？」

ミト「P o H……………!？」

P o H「久しぶりだな、閃光、紫鎌。」

あの暗黒騎士は、P o Hだったのか!？」

P o Hは、友切包丁を肩に担ぐ。

すると、大きな声が聞こえてくる。

アスナ「何!？」

ミト「まさか、アメリカからのコンバートプレイヤー達が……………!？」

レイモンド「いや、違う。アイツらが話してるのは、英語じゃない……………!」

コンバートを示す赤い光が、どんどんと降り注いでいく。

その数は二万だが、絶望するには、十分な数だった。

アスナ「やめて……………もう……………!？」

カルム「これ以上増えたら……………!」

俺たちは、そう眩く事しかできなかつた。

どんどん増えていく。

クライン「やべえ……………やべえぞ、これは……………!?!あの大群の出どころは、日本でも、

アメリカでもねえ……………!中国と、韓国だ!？」

P o H 「さあ! I t s s h o w t i m e ! !」

P o H は、S A O からの決め台詞を叫ぶ。

俺たちが呆然とする中、中国と韓国のプレイヤー達が襲い掛かる。

第74話 2人の女神と従者の戦いと敗北

チエイズ side

アリス達がワールド・エンド・オールターに向かい、ベルクーリ達がカルム達の元に向かっていき、俺たちが敵が再ダイブしてくるのに備える。

すると、シノンが聞いてくる。

シノン「チエイズ。」

チエイズ「ん？」

シノン「勝てると思う？」

チエイズ「分からん。敵が誰なのかも分からないからな。だが、一つだけ分かる事がある。」

シノン「それは？」

チエイズ「俺とシノンなら、負ける筈がないからな。」

シノン「そうね。」

俺がそう言うと、シノンは笑う。

チエイズ「それより、作戦はどうする？」

シノン「目的はあくまで、あの4人が果ての祭壇に行くまでの時間稼ぎ。命を惜しむ反応があれば、全力で攻撃して排除する。」

チエイス「なるほどな。量産型のアカウントなら、限界まで戦闘を長引かせるという事か。」

シノン「そういう事。」

俺たちが作戦を確認していると、漆黒の破線が空から伸びてくる。

敵が再ダイブしてきたのだ。

俺とシノンが、それぞれの弓を持ちながらホバリングして、凝視していると、手が伸びてくる。

しばらくすると、上半身が現れる。

すると、あれ、と思った。

チエイス（アイツ…………どこかで…………それもごく最近…………。）

そんな事を思っていると、男が出てきた。

服装は、現実世界の兵士が身にまとう戦闘服のようだ。

もしかしたら、シノンのホームグラウンドのGGOのアカウントの可能性がある。すると、とある名前を思い出し、シノンに話しかける。

チエイス「シノン……………！アイツは……………！」

シノン「サトライザー……………！」

どうやら、俺と同じ結論に至ったようだ。

そう、アイツは、第4回のB o Bにて俺とシノンを倒した、サトライザーだ。

サトライザー「……………彼らは逃げたか。まあ良い、すぐに追いつく。……………それにしても、君たちとは、ガンゲイル・オンラインの大会で戦ったね。名前は、シノンとチエイスだったかな？まさか、こんな所で出会えるとは。」

どういう訳か、冷や汗が止まらない。

シノンの方をチラリと見ると、シノンは両手の震えを抑えようとしていた。

チエイス「サトライザー……………」

シノン「何でお前がここに……………!?!」

サトライザー「必然だからに決まっているじゃないか。これは運命さ。私と君達を引きつけ合う魂の力なのだ。」

そういうサトライザーの口調は少しずつ変容していく。

奴が発する声の温度までもが低下していく。

サトライザー「そう……………私は君たちを欲した。だから、こうして巡り合った。これで色々な事が分かるだろう。STLを介せば、人工フラクトライトからだけでなく、現実世界の人間からでも魂を吸い取れるのかどうか。そして、GGOの大会で味わえな

かった君達の魂が、どれほど甘いのかも。」

まさか、コイツ、俺たちを狙ってたのか!?

すると、サトライザーの青い瞳が冷たく光を放つ。

すると、シノンが奴に引き寄せられる。

シノン「な……………!?!」

チエイス「シノン!!」

サトライザー「まずは君からだ。シノン。」

そう言つて、シノンがサトライザーの腕の中に吸い込まれる。

くそ、どうすれば……………!

このままだと、シノンが……………!

この時、カルムならどうする……………?!

アイツなら……………。

チエイス「……………例え、どんな強敵が相手でも助けに行く。そうだよな、カルム。」

俺は、すぐにシノンとサトライザーの元へと向かう。

サトライザーは、シノンに意識が向いているのか、俺に気づいていない。

そうだ、アイツは、GGOでもそうだった。

アイツはシノンを仕留めてから俺を仕留めている。

まるで、俺がついでの様に。

なら、シノンを手ける事も可能だ。

俺は、誓ったんだ。

シノンを守ると！

チエイス「シノン!!」

すると、シノンとサトラライザーの間から、銀色の火花が散る。

シノンは、サトラライザーから離れた。

チエイス「シノン！大丈夫か!？」

シノン「……………ええ。思い出した。私には、チエイスが居るって!」

チエイス「それでこそシノンだ!」

サトラライザーは、無言で自分の右手を眺めていた。

俺たちの視線に気付いたのか、ほんの微かに不快そうな色を浮かべていた。

そんなサトラライザーに、俺たちは宣言する。

シノン「お前は、神でも悪魔でもないわ。」

チエイス「ただの人間だ。」

サトラライザー「……………。」

チエイス「シノン、行けるか?」

シノン「ええ。イメージ力と集中力なら、お前には負けない。」

そう言うと、シノンの弓、アニヒレート・レイが、ヘカートへと姿を変える。

そんな事が出来るのか。

なら、俺も出来る筈だ。

GGOではなく、あの旧SAOのあの装備を再現する事も……！！

俺が強くイメージすると、俺が持っていた弓は、カリスアローへと姿を変える。

俺は、すぐにカリスアローと同じく出現したエボリューションパラドキサを出して、

カリスアローにラウズする。

『evolution!』

その音声と共に、ラウズカードが俺に合わさって、ワイルドカリスになる。

久しぶりだ、この感覚は。

シノンがヘカートを、俺がカリスアローを構えると、サトラライザーの顔に、怒りの色

が浮かぶ。

俺とシノンは、それぞれの得物で、サトラライザーを狙う。

俺とシノンのそれぞれの武器から、光の矢と弾丸が放たれる。

すると、サトラライザーは左腕を持ち上げる。

すると、闇が弾丸と矢を受け止める。

まさか、吸い込むつもりか。
すると、隣のシノンから。

シノン「負けるな……………」。

チエイス「行け……………」。

シノン「負けるな、ヘカート!!」

チエイス「行けエエエ!!」

俺とシノンはそう叫ぶと、弾丸と矢がサトラライザーの左手を貫く。

シノンは、ボルトハンドルを引いて、空薬莖を出す。

サトラライザーは、右手を動かし、クロスボウを取り出す。

すると、シノンと同じ要領で、クロスボウをライフルに変化させる。

あのライフルは……………」。

チエイス「バレットXM500……………」。

シノン「……………」上等じゃない。」

俺とシノンはそう呟く。

何としてでも、時間を稼いでみせる。

ハヤトside

しっかし、すげえ光景だよな。

俺とリーファを先頭に、オークの軍勢が力を貸してくれるのだから。

ハヤト「リーファ、人界守備軍に間に合うと思うか？」

リーファ「……………間に合わないかもしれない。」

ハヤト「多分、あの女と交戦してる間にも、かなり南進してると思うしな。」

リーファ「ハヤト君、あれ！」

ハヤト「アレは……………」

現実世界からダイブしてきたであろう軍勢に囲まれている男女が居た。

気になった俺は、リルピリンに尋ねる。

ハヤト「なあ、あの赤鎧の連中の中央にいる面子は誰なんだ？」

リルピリン「アレは、おでたちオークと同じ暗黒界軍に所属してる拳闘士団だ。」

ハヤト「なるほどな。なら、やるべき事は一つだな。リーファ！」

リーファ「うん！彼らを助けよう！」

俺とリーファはそう叫び、敵陣へと乗り込んでいき、赤鎧どもを倒していく。

その間に出来た隙で、リルピリン達オークが突っ込んでいく。

そうして、拳闘士団と合流できた。

その拳闘士団には、騎士が1人居たが、一緒に戦ってたのだろう。

リルピリン「お前たち、大丈夫か!？」

拳闘士長「あんたはオーク族の………！なんでだ………。皇帝の命令で後方で待機してた筈じゃ………!?!」

リーファ「そんな関係ないでしょ!!」

拳闘士団のリーダーの眩きをリーファが遮る。

同感だな。

リーファ「皇帝の命令だとか関係ない！貴方たちも、リルピリンの仲間なんでしょ！」
ハヤト「同じ人間同士、誰かが危なくなってるのなら、助けるだけだぜ。」

リーファ「敵陣には、私とハヤト君で斬り込むから、リルピリン達は拳闘士団と合流して、そっちに行こうとする敵だけを倒して！」

それを聞いたリルピリンは、驚愕の表情を浮かべ、すぐに激しく抗議する。

リルピリン「おでたちも一緒に戦う！」

リーファ「ダメよ、あなた達にこれ以上の犠牲者は出したくないの。」

ハヤト「なあに、心配すんな。あんな烏合の衆は、何万人居たって負けねえよ、俺たちは。」

リーファ「行こう！」

ハヤト「おう！」

テラリアであるリーファ、そして、その従者である俺は、無限に近い天命を持つ。

なら、オークたちを無駄に死なせるわけには行かない。

俺とリーファは、超ロングレンジからソードスキルを放つ。

ソードスキルで、数十人の敵を斬り、俺たちは再び敵陣に乗り込む。

どういう訳か、SAOやALOと比べて間合いが数倍にも拡張されたソードスキルを立て続けに放っていく。

だが、ソードスキルとソードスキルの間に生まれる硬直時間は消せなかった。

その為、隙を狙って俺とリーファは敵の攻撃を一部くらい、灼けるような激痛が走る。

リーファ「ええーいッ!!」

リーファは、裂帛の気合いと共に、右足で強く地面を踏む。

すると、俺とリーファの足元から緑の輝きが溢れ、傷が治る。

痛みの余韻に耐えながら、俺たちは剣を振るう。

カルムとキリトの2人が愛し、守ろうとしたこの世界に生きる人々を守る為に。

ハヤト「リーファ!まだ行けん!?!」

リーファ「うん!こんな奴らに、私たちは負けない!」

俺たちはそう言って、再び突っ込んでいく。

カルムside

戦況は、最悪と言って良いだろう。

中国と韓国から投入されたプレイヤー達は、日本人プレイヤーを蹂躪していく。

その際に、中国と韓国のプレイヤーから、憎悪の気配を感じた。

恐らく、過去の戦争での憎悪が現れているのだろう。

カルム「このままじゃ突破される!!」

レイモンド「まずいな……………」

何とか、音銃剣錫音の力で敵を迎撃してはいるものの、押し切られる。

ALOやGGOのトッププレイヤー達も、押されていた。

サクヤ「……………止めろお!? ルーに手を出すな!?!」

アリシャ「っ……………駄目!? サクヤちゃん、危ない!!」

アラン「このままじゃ……………」

クレハ「やられる……………」

ダメだ……………!

これ以上、現実世界の親友達を危険に晒すわけには……………!

シウネー side

断片的だけど、彼らがどの様な情報に扇動されたのかが推測出来た。

すると、ユウキが声をかける。

ユウキ「シウネー、どうしたの?」

シウネー「多分、彼らは、あの遺跡の屋上から見てる何者かによって言葉巧みに扇動されたの！日本人プレイヤーの中で、韓国語を話せるのは私だけ！話を聞いて貰えるかもしれない！」

ユウキ「シウネー……………」。

シウネー「それに、ぶつからなきゃ、伝わらない……………よね。」

ユウキ「そうだね……………皆、お願い！一回だけで良いから、ブレイクポイントを作つて！」

ジュン「……………分かった！テッチ、タルケン、ノリ！シンクロソードスキルで大技をぶちかますぞ!!」

「了解!!」

ジュン「カウント!……………2、1……………ゴー！」

完璧に同期して繰り出されたジュン達のソードスキルは、数十人のプレイヤー達をノックバツクさせた。

ユウキ「シウネー！」

シウネー「分かってる！」

私は、怯んで動けなくなっている赤鎧たちへと近づく。

なんとか持ち堪えていた赤鎧がそれに気づき、私に剣を振り下ろすけど、私はそれを

右手で受け止める。

シウネー「……………っ……………！……………聞いて……………！」

赤鎧「……………お前……………同じ韓国人か……………!?!」

シウネー「……………ハーフですけどね……………。それよりも、私の話を聞いて下さい……………！」

赤鎧「話を聞けだと……………卑怯な日本人に味方をする奴の話など聞いてどうしろと……………！」

シウネー「あなたたちが騙されているとしても、そう言えるんですか……………！」

赤鎧「……………何だと……………。」

私がそう言うと、剣を振り下ろしてきたプレイヤーが動揺する。

剣を受け止めている右手が痛むけど、誤解を解く為なら……………！」

シウネー「あの黒フードの男が言っていたことは全部嘘なんです。このサーバーは日本企業のもので、私たちはクラッカーではなくて、正規の接続者です！」

赤鎧「嘘をつくな?!見たぞ……………お前たちはさつき、俺たちと同じ色の鎧を着ていたプレイヤーたちを皆殺しにしていただろう!?!」

シウネー「あれは……………あなたたちと同じように、偽の情報でダイブしたアメリカ人プレイヤーたちです！日本企業の妨害をさせられているのは、あなたたちなのよ!?!もう

一度よく考えて……………！その怒りは、憎しみは……………本当にあなたたちのものなのか……………あの男の言葉に扇動されたものでないと本当に言えるのかどうかを……………!？」

「……………」

私の必死の言葉に、プレイヤー達は顔を見合っていた。

お願い、伝わって……………！

すると、1人のプレイヤーがやってくる。

???「それは……………その話は、本当なのか……………?」

シウネー「……………ええ。」

ムーンフェイズ「……………俺の名はムーンフェイズ。そっちは?」

シウネー「私は……………シウネーと言います。」

私の言葉を信じてくれたのか、ムーンフェイズさんが声をかける。

私は、自分のプレイヤーネームを言う。

ムーンフェイズ「そうか。シウネーさん……………俺も、この話は妙だと思っていたんだ」

緋道「なあ……………お前、何を言って……………!？」

ムーンフェイズ「っ!!」

「……………!？」

ムーンフェイズさんが放った一言に、他のプレイヤー達が問い詰めようとするけど、

ムーンフェイズさんが静かにさせる。

すると、プレイヤーがもう一人来る。

??? 「ちよつと通してちようだい……………! ムーンフェイズ、やつと見つけた……………。
やつぱりおかしいよ、このゲーム……………」

ムーンフェイズ 「メイシャン……………お前もそう思うか?」

メイシャン 「……………ええ。」

そのメイシャンという人は、ムーンフェイズさんと話していた。

ムーンフェイズ 「日本のハッカーたちが攻撃を仕掛けているって話だったけど、俺にはむしろ彼らは何かを守ろうとしているように見える……………」

シウネー 「つ……………信じてくれるんですか……………!?!」

メイシャン 「でも、その話が本当なんだとしたら、それを証明できるものがないと……………。他の皆に信じてもらうのはちよつと難しいかも……………」

二人は、私の言葉を信じてくれた……………!

だけど、それを証明しないと、この誤解は解けない。

そうだ、アンダーワールドの人を会わせれば、分かってくれるかも……………!
すると、包丁が私たちの足元に飛んでくる。

??? 「そこで日本人と何をしている!」

その男は、黒いポンチョを着た男だった。

すると、足元に刺さっていた包丁が、その男の元に戻る。

??? 「裏切り者はこの戦場にはいらなない！お前たち！汚い日本人に騙されるなよ！ここが日本のサーバーで、お前たちが正規の接続者だって言うのなら、なんでお前らだけがそんな高級装備だけを持っているんだ？チートで好き勝手に作り出したに決まってるぜ！」

赤鎧 「そ、そうだ……そうに決まってる!!」

赤鎧 「やつぱり……俺たちを騙そうとしていたのか!？」

すると、その男の人の言葉を信じたのか、そんな声が聞こえてくる。

私は、反論する。

シウネー 「ち、違います!?! 装備が異なるのは、私たちのメインキャラクターをコピー

して、この世界に送り出したんです!」

??? 「ハッ! そんな話があるか! 嘘だ! その女が言っていることは全部嘘だぞ!!」

『おおお!!』

シウネー 「本当よ!?! 信じて……!」

私は、そう言うけど、他の人たちは話を聞いてくれなかった。
すると。

赤鎧「黙れ!?この……卑怯者の仲間が!」

シウネー「うっ……!!」

ユウキ「シウネー!!」

「っ!」

プレイヤールの一人がナイフを投げてきて、私は右肩を負傷してしまう。

シウネー「うう……!!」

ユウキ「シウネー!!」

ムーンフェイズ「シウネーさん!!」

メイシャン「皆!落ち着いて!!」

そのまま、私たちは取り囲まれてしまう。

カルムside

更に、被害は拡大していた。

あのスリーピング・ナイツですらも、囲まれてしまった。

カルム「やめろよ……!!」

何で、こんな風になるんだ。

確かに、日本人と中国、韓国が仲が悪いのは、分かっていた。

でも、もしかしたら、分かり合えたのかもしれないに……!!

俺は、そう思いながらも、敵の剣を捌いていく。

ミトも、何とか敵の攻撃を捌いているが、キレが無い。

アスナに敵が迫ろうとした瞬間。

???「ストローーツプ!!」

カルム「っ!?!」

突然、誰かが攻撃をやめさせる。

あの男がリーダーの様で、全員が攻撃を止める。

見えた光景は、悲惨そのものだった。

クラインは、左肩を押さえていた。

シリカ「エギルさん!!」

ヒロミ「しっっかりして下さい!エギルさん!!」

シリカとヒロミは、武器が突き刺さった状態で倒れているエギルに必死に声をかけていた。

セブン、レイン、フィリアも、色んな場所に武器が突き刺さっていた。

ALOやGGOのトッププレイヤー達は、満身創痍だった。

ミトも、満身創痍の状態だった。

ミト「カルム……………」

カルム「ミト……………済まない。」

ミト「ううん。……………でも、状況は最悪よね。」

カルム「だな……………」

そう、完全に包囲されていた。

俺とミトは、アスナとリズベツト、ラツトの元に。

ラツト「済まない……………俺たちが皆を……………！」

リズベツト「ごめん……………!!」

そう語る二人には、後悔、悲痛、苦しみ、罪悪感……………それらの感情が、涙となって溢れていた。

アスナ「違う……………違うよ……………リズ……………!?!」

すると、あの黒ポンチョ男がやって来る。

???「武器を捨てて投降しろ。そうすれば、お前らも、後ろの連中も殺しはしない。」

リーナ「ふざけるな!!」

タカトラ「この期に及んで、俺たちが命を惜しむとでも……………!」

アスナ「その人の言う事を聞いてーッ!!」

カーディナル「何を……………!?!」

ミト「お願い!今は従うしか……………!」

カルム「頼む！どんな屈辱を受けても、生き延びてくれ!!それが俺たちの……………」
タカトラ「カルム……………」

タカトラ先輩達アンダーワールド人は、ぐつと口を引き結び、肩を落とす。

先輩達は、武器を捨てる。

それを見た中国、韓国のプレイヤー達から、勝鬨が上がる。

すると、黒ボンチョ男が、フードを取り払う。

POH「よう、久しぶりだな、閃光、紫紺の剣士、紫鎌。」

カルム「やっぱりテメエか……………POH!!」

そう、ラフコフ党首のPOHが、目の前に居たのだ。

第75話 それぞれの決着と悪魔の笑い

チエイズ side

俺とシノン、サトラライザーと交戦していた。

シノンとサトラライザーがお互いのライフルを撃ち合ってる中、俺はシノンの援護をしていた。

カリスアローから放たれた光の矢がサトラライザーに向かっていくが、サトラライザーはライフルを撃った後、躲す。

チエイズ「くそっ！ 躲されるか。」

シノン「援護お願い！」

チエイズ「ああ！」

シノンは、サトラライザーよりも速く撃とうとしている。

その為に、俺がやるべき事は、サトラライザーの狙撃の妨害だ。

カリスアローから何度も光の矢を放ち、シノンを援護する。

流石のサトラライザーも、鬱陶しくなったのか、俺にも攻撃してくる。

俺は、自前の浮遊能力で躲す。

そして、シノンに向かって叫ぶ。

チエイス「今だ！」

シノン「ええ！……………っ!？」

シノンが、ヘカートを撃とうとするが、その顔に驚愕の表情が浮かぶ。

何でだ……………!？

ああ、そうだ。

奴のライフルは、1発撃つ度にボルトハンドルを引く必要があるシノンのヘカートと違って、セミオートマチックライフルだった。

シノンの左足が、千切れ飛ぶ。

チエイス「シノン!!」

シノン「クッ……………!」

シノンは、後ろに下がりながらヘカートを撃っていく。

だが、サトラライザーは、シノンのヘカートの弾丸を自分のライフルの弾丸で迎撃する。

俺は、奴の隙を作る為に、とある手段を思いつく。

だが、それは一歩間違えれば、俺はやられてしまうだろう。

それでも、アイツなら……………!」

あの茅場晶彦を倒した4人の英雄の内の1人のアイツなら……………!」

それに、シノンを守る為なら………!!

チエイヌ「ハアアア!!」

サトライザー「………?」

俺は叫びながらワイルドスラツシャーを構えて、サトライザーに突っ込んでいく。

俺は、ワイルドスラツシャーをサトライザーの持つライフルに当てて、奴のライフルを破壊する。

破壊されたライフルは、ボウガンの状態に戻って、そのまま落ちていく。

サトライザー「ほう。少しはやるではないか。お前の魂も味合わせてくれ。」

チエイヌ「断る!」

俺は、ワイルドスラツシャーを持って、サトライザーに攻撃する。

だが、サトライザーは、格闘技で俺の攻撃を逸らす。

謎の生物の上で、俺とサトライザーは、格闘戦を繰り広げていく。

だが、謎の生物の上という事もあり、俺は上手く戦えない中、サトライザーが俺の腹にパンチをして、すぐに俺の腕を捻る。

チエイヌ「グワアアア!!」

サトライザー「甘いな。」

サトライザーに拘束されながらも、何とかワイルドスラツシャーは落とさずに済ん

だ。

だが、このままでは、シノンの攻撃の妨げになってしまう。

サトラライザーも、それが分かっていたのか、俺を嘲笑う。

サトラライザー「……………貴様は、シノンの足を引つ張ったのだ。」

チエイス「……………そうかもな。だが、俺は諦めが悪くてな。」

サトラライザー「寝言は寝て言うんだな。この様な状況で貴様に何が出来ると?」

チエイス「そう来るなら、こうするまでだアアア!!」

俺は、サトラライザーから脱出する為に、わざと左腕を折った。

物凄い激痛が俺を襲うが、そんな事になりふり構ってられない。

サトラライザー「何……………ツ!?!」

チエイス「ハアツ!」

まさかのサトラライザーも、俺が自ら腕を折ってくるのは想定外だったのか、驚愕の表情を浮かべてくる。

俺は、腕を解放されて自由になり、サトラライザーを蹴って上空に飛ぶ。

ワイルドスラッシュャーは既に、カリスアローと合体させてある。

左腕が千切られたと同時に、ワイルドスラッシュャーを上空に放り投げ、カリスアローと連結させたのだ。

「サトラライザー」それで終わりか………何？」
サトラライザーは気づいた。

それは、弾切れの筈のシノンのヘカートから、光が溢れている事を。

シノンスide

チエイス………！

チエイスは、私を守ろうとして、サトラライザーに単身突っ込んでしまう。

このままでは、チエイスが………！

すると、とある光景が蘇る。

そう、この状況は、死銃………赤目のザザとチエイスが戦った時と同じだ。

シノン（そうだ………！諦めちゃダメだ。何か、奴を倒せる手段が………！）

そう考えると、一つの案が浮かんだ。

それは、ヘカートにある。

敵密には、ヘカートに変化する前の弓、アニヒレート・レイに。

アニヒレート・レイには、周囲の空間からリソースを自動吸収して撃ち出す力が。

なら、行ける。

すると、チエイスが左腕を千切ってまで脱出した。

これが、最初で最後のチャンス。

私は、ヘカートにエネルギーをチャージする。

チェイス side

どうやら、チャンスが来たな！

俺は、すぐにワイルドというラウズカードを取り出す。

俺は、左腕が千切られたが、歯にカードを啜えて、ラウズする。

『ワイルド！』

すると、ワイルドスラッシュャーに光の帯が現れる。

シノンのヘカートと俺のワイルドスラッシュャーから、二筋の光の光線が放たれる。

「いっ………けええええーっ！！」

俺とシノンは、そう叫ぶ。

サトライザーは右ヘスライド回避しかけるが、二筋の光がぶつかり合い、爆発して、サ

トライザーを呑み込む。

凄まじい轟音と爆発に、俺とシノンは吹き飛ばされ、地面に落下する。

チェイス「シノン………大丈夫か？」

シノン「何とか………」

俺たちの傷としては、シノンが左足が無くなり、俺は左腕が千切られた。

激痛により、これ以上の戦闘は不可能だ。

それでも、奴がどうなったのかを見ると。

サトラライザー「……………」。

サトラライザーは、その場に残っていた。

ただ、無傷というわけではなく、二つの光線の爆発に巻き込まれ、右腕は完全に消し飛んだ様で、顔の右側も焼け焦げていた。

シノン「良いわよ……………」。

チエイス「何度だって相手してやる……………」。

俺とシノンは、それぞれの武器を手に持ちながらそう言う。

だが、サトラライザーは、俺たちに目もくれずに、そのまま南へと向かっていった。

シノン「チエイス……………大丈夫……………」。

チエイス「何とかな……………」。

俺たちの武器は、いつの間にかアンダーワールドでの物に戻っていた。

少しは、時間を稼げたか……………？

ハヤト side

斬つても斬つても湧いてきやがる……………！

俺とリーファは、アメリカ人プレイヤーを薙ぎ払っていく。

いつの間にか、敵の武器が体に突き刺さっていき、激痛が襲ってくる。

リーファ「ハア……………。ハア……………。ハア……………。」

ハヤト「クツ……………！大丈夫か……………？」

リーファ「何とか……………！」

俺とリーファの背中中には、敵の武器が突き刺さり、幾つかは致命傷だった。

中には、心臓に直撃している武器もあった。

だが、止まるわけにはいかない……………！

リーファ「う……………。おおあああッ！ヴァーデユラス・アニマ！！」

ハヤト「ハアアアア！！」

いろんな箇所から鮮血が流れている中、俺たちは叫び、それぞれの武器で、ソードスキルを発動させ、敵を倒していく。

技後硬直時間を狙って、何人かが俺とリーファに迫ってくる。

俺とリーファは、敵の攻撃を連携で凌いでいくが、敵のハルバードの一撃で、俺とリーファの左腕が斬られる。

だが。

リーファ「ぜやあああッ！！」

ハヤト「オラアアア！！」

横薙ぎの一閃で敵を倒す。

俺とリーファは、斬られた腕を拾って、傷口に押し当てる。

リーファは、すぐに右足を強く踏み込む。

すると、回復効果が発動して、腕がくつつく。

ハヤト「なあ、リーファ……………」

リーファ「何……………」

ハヤト「無制限回復能力、もう神の恩寵じゃなくて、呪いの類だよな。」

リーファ「全くよ。」

俺とリーファはそう話す。

そう、例え傷が治ろうと、その痛みは残り続けるのだ。

つまり、倒れる事は許されない。

リーファ「でも……………。倒れる訳にはいかないよね。」

ハヤト「……………だな。カルムとキリトなら、この程度の傷で倒れないよな!!」

リーファ「なら、私たちも倒れないよね!」

ハヤト「ああ!こんな三千人程度、俺たちが倒してやらああ!!」

俺とリーファは、すぐにヴォーパル・ストライクを放ち、敵兵を倒していく。

だが、ヴォーパル・ストライクなんて大技を放ったら、体に相当の負荷が掛かるわけ

で。

リーファ「ぐう……ごほッ……がはあ……!!」

ハヤト「グウツ……!!」

俺とリーファは、込み上げてきた血を口から吐き出し、その場に崩れ落ちる。

俺たちはそれでも立ちあがろうとするが、俺とリーファの左目に、槍が飛んでくる。

リーファ「ああああ!!あああああつ……ぐぎううううう……!!」

ハヤト「ぐわっ!!グウウウ……!!ハアアア!!」

すぐに槍を引き抜いて、リーファは足踏みをする。

すると、槍が貫通した左目が復活して、視界が蘇る。

見ると、敵は百人ぐらいしか残っていなかった。

リーファ「……ハハッ。まだよ……!!」

ハヤト「フフツ……!!おら、どうした雑兵ども……!!俺たちはまだやれるぞ

……!!」

俺たちはそう呟きながら、敵に向かって突撃していく。

それから3分後、敵は全滅した。

俺とリーファは、その場に崩折れる。

リルピリンが叫びながら、こっちに向かってくる。

リーファ「私たち……頑張ったよね……ハヤト君……」

ハヤト「ああ……………。見てたか、キリト、カルム……………」。

俺たちはそう小さく呟く。

カルム side

俺たちの目の前に、ラフコフ党首、P o H が現れる。

カルム「P o H……………！何が目的だ……………！」

アスナ「これは……………復讐なの……………？」

ミト「ラフィン・コフィンを壊滅させた、私たち攻略組への……………！」

P o H「フツ……………フフフフツ、フハハハハハハツ!!」

カルム「何がおかしい!？」

P o H は突然爆笑し始めて、俺がそう問いかけると、返答をする。

P o H「……………バツツカアじゃねーの!？」

ミト「え……………!？」

P o H「優等生面のテメエらに教えてやるよ!ラフィン・コフィンの隠れアジトを、てめえら攻略組様に密告したのは……………この俺様なんだぜ?」

『なっ……………!?!』

そんな事を言ってきた、俺たち旧 S A O 組は驚く。

まさか、P o H 密告者は、P o H 本人だったのか!?

カルム「どういう事だ……………!?!」

POH「……………決まってるだろう?俺はな……………お前ら、攻略組とかいう自分たちが正しい事をしていると思ひ込んでる連中を、人殺しにしてやりたかったんだよ。お偉い勇者面して、最前線でふんぞり返っている攻略組様たちをよお!!」

ミト「それが狙いだっただの……………!カルムやキリトに、PK行為を背負わせる為に……………!」

POH「イエース……………と言いたいが、黒の剣士の心が壊れるのを期待したんだがなあ。」

すると、俺の方を向く。

その表情には、怒りに染まっていた。

POH「紫紺の剣士。テメエだけは殺したかったんだぜ。」

カルム「どういう事だ。」

POH「どういう事か?簡単だ。テメエが黒の剣士の横にずっと居るからだ!!」

カルム「……………何?」

POH「黒の剣士の横にいるべきは、この俺様なんだよオオツ!なのに、テメエは黒の剣士の隣に居続けた!!」

ミト「何ですって……………!?!」

アスナ「貴方は……………どこまで……………!? キリト君とカルム君が悩んで苦しんだのか分かるの!？」

PoH「ほう、そりや良かった。でも、そいつは怪しいもんだな。本当に後悔してるならよお、VRゲームなんて、嫌になるんじゃないやねーの? 殺した奴に申し訳なくてさ……………」

カルム「うるさい。」

俺は、そう呟いていた。

PoHは、訝しげな表情を浮かべる。

カルム「うるせえよ! 俺とキリトがVRをやり続けたのは、VRの可能性を信じたからだ! 人と人の繋がりを……………」

PoH「うるせえよ。テメエの意見なんざ聞いてねえんだ。テメエらが居るってことは、居るんだろ。出てこいよ! 愛しい、愛しい黒の剣士様よオオツ!!」

そうして、ロニエが車椅子に乗ったキリトを連れてくる。

アスナ「やめて!! それだけは!!」

カルム「クツ……………」

PoH「さあ! It's show time!!」

悪魔は、嬉々としてそう叫ぶ。